岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 249

神明遺跡
刑部遺跡

一般国道180号（総社・一宮バイパス）
改築工事に伴う発掘調査３

（第１分冊）

２０１９

岡山県教育委員会

遺跡遠景（上が北）

提供：国土交通省中国地方整備局岡山国道事務所

巻頭図版 2

遺跡西半全景（東から）

巻頭図版 3

高解像度画像撮影

1　銅鐸埋納坑土層断面（北から）

2　銅鐸出土状況（南から）

巻頭図版 4

銅鐸 A 面

巻頭図版 5

銅鐸 B 面

巻頭図版 6

1　竪穴住居32（南から）

2　土坑142粘土出土状況（南から）

1　古墳時代　竪穴住居検出状況（東から）

2　古代　掘立柱建物検出状況（南東から）

巻頭図版 8

1　竪穴住居32出土遺物

2　たわみ６出土遺物

巻頭図版 9

遺跡全景（西から）

巻頭図版 10

1　竪穴住居８（北西から）

2　竪穴住居37（北西から）

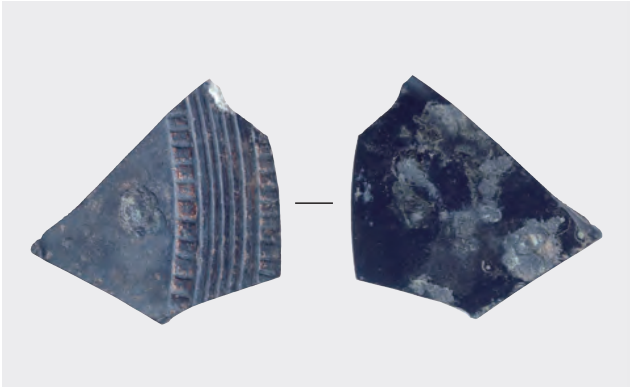
巻頭図版 11

1　竪穴住居58（東から）

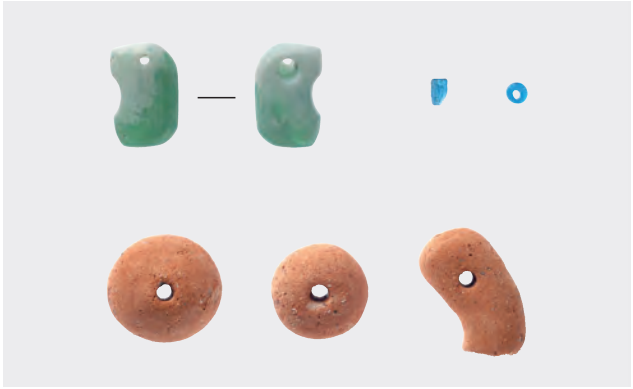
2　古墳時代　竪穴住居検出状況（北東から）

巻頭図版 12

1　河道１出土　土器

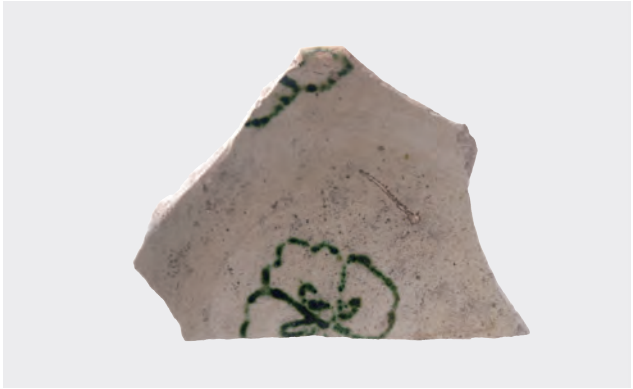


2　竪穴住居37出土　破鏡



3　竪穴住居８出土　玉類

4　竪穴住居39出土　曲刃鎌



5　たわみ４出土　緑釉緑彩陶器

序

一般国道180号総社・一宮バイパスは、岡山市北区楢津から総社市井尻野に至る区間の交通混雑の緩和及び交通安全の確保などを目的として計画されており、すでにその一部が供用されています。

本書は、新たに計画された総社市総社から小寺までの1.9㎞間で、平成25～28年にかけて行った神明遺跡・刑部遺跡の発掘調査の記録を収載した、総社・一宮バイパス改築工事に伴う発掘調査報告書の第３冊目となります。

岡山県教育委員会では、この工事路線内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて、関係機関と協議を重ねてまいりましたが、現状のまま保存することが困難な部分についてやむを得ず記録保存の措置を講じることとし、発掘調査を実施いたしました。

調査の結果、神明遺跡・刑部遺跡ともに、弥生時代から古墳時代にかけての大規模な集落であることが明らかとなり、とりわけ神明遺跡においては、銅鐸の埋納状態が確認されるという全国的にも貴重な発見がありました。神明銅鐸の調査は、吉備地域における銅鐸の埋納方法や埋められた年代を検討する上で重要な手がかりとなり、特筆される成果であると言えます。

本書が地域の歴史研究に寄与するとともに、埋蔵文化財の保護・保存のために活用され、また学術研究のための資料として、広く役立つならば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書作成にあたりましては、国土交通省中国地方整備局岡山国道事務所をはじめとする関係機関や地元住民の皆様から御理解と御協力を賜りました。ここに厚くお礼申し上げます。

平成31年３月

岡山県古代吉備文化財センター
所　長　向　井　重　明

例　　言

1　本書は、岡山県教育委員会が一般国道180号（総社・一宮バイパス）改築工事に伴い、国土交通省中国地方整備局岡山国道事務所と岡山県の委託契約に基づき実施した、神明遺跡・刑部遺跡の発掘調査報告書である。契約事項は文化財課が行い、発掘調査及び報告書作成は岡山県古代吉備文化財センターが担当した。

2　神明遺跡は総社市福井287－３ほかに、刑部遺跡は総社市刑部97－３ほかに所在する。

3　試掘・確認調査は、平成23年２月１日～24日に石田爲成が、平成23年11月24日～12月22日に上栫武が、平成25年１月25日～２月12日に物部茂樹・上栫が、平成25年11月５日～８日に物部が担当して実施した。

発掘調査は、平成25年度に弘田和司・渡邉恵里子・金田善敬・小林利晴・圍奈歩・上栫・井田智、平成26年度に弘田・柴田英樹・渡邉・杉山一雄・小林・圍・河合忍・井田、平成27年度に髙田恭一郎・弘田・柴田・渡邉・氏平昭則・小林・圍・河合・松尾佳子・石田・藤井翔平・森本直人、平成28年度に渡邉・松尾が担当して実施した。調査面積は33,950㎡である。

4　発掘調査にあたっては、埋蔵文化財専門委員の稲田孝司氏から御指導と御助言をいただいた。記して深く感謝の意を表す次第である。

5　発掘調査及び報告書作成にあたっては、「一般国道180号（総社・一宮バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財保護調査指導会（平成28年度までの名称は、埋蔵文化財保護対策委員会）」を設け、下記の方々に委員を委嘱した。委員各位からは、有益な御指導と御助言をいただいた。記して深く感謝の意を表す次第である。

亀田　修一（岡山理科大学）　　中田　啓司（元高等学校教諭）
松本　直子（岡山大学）　　光本　　順（岡山大学）
山本　悦世（岡山大学）

6　本書の作成は、平成27～30年度にかけて、岡山県古代吉備文化財センターにおいて実施し、下記の職員が従事した。

平成27年度　弘田・渡邉・圍　　平成28年度　弘田・渡邉・圍・松尾
平成29年度　渡邉・圍・石田　　平成30年度　渡邉・圍

7　本文の執筆は、調査担当者が分担し、文責はそれぞれの文末に記した。本書の編集は渡邉・圍が行った。

8　銅鐸の発掘調査及び保存・分析にあたっては、次の方々及び機関に依頼し、有益な教示を得た。記して深く感謝の意を表す次第である。

銅鐸調査指導　　難波　洋三（奈良文化財研究所）
　　吉田　　広（愛媛大学）
銅鐸埋納坑三次元計測　　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
銅鐸保存・分析　　奈良文化財研究所
銅鐸三次元計測　　奈良県立橿原考古学研究所

9　遺跡の環境や遺物の鑑定・同定については、次の方々に依頼し、有益な教示を得た。記して深く感謝の意を表す次第である。

緑釉・灰釉陶器鑑定	高橋　照彦（大阪大学）
石材鑑定・土壌分析	鈴木　茂之（岡山大学）
人骨鑑定	大塚　愛二（岡山大学）
獣骨鑑定・人骨鑑定	富岡　直人（岡山理科大学）
土器等の胎土分析	白石　　純（岡山理科大学）
土壌分析	武智　泰史（倉敷市立自然史博物館）

10　銅鐸の計測・撮影・剥ぎ取り及び自然遺物に関する同定・分析は、下記の機関に委託した。

銅鐸埋納坑三次元計測	西部技術コンサルタント株式会社
銅鐸埋納坑高解像度画像撮影	コンテンツ株式会社
銅鐸埋納坑立体剥ぎ取り	株式会社 吉田生物研究所
花粉分析・樹種同定	株式会社 古環境研究所
土壌・ガラス玉の分析	株式会社 パレオラボ
有機物分析・年代測定	パリノ・サーヴェイ株式会社
玉類の産地同定	有限会社 遺物材料研究所
鉛同位体比分析	公益財団法人 元興寺文化財研究所
鍛冶関連遺物の分析	日鉄住金テクノロジー株式会社

11　遺物写真の撮影にあたっては江尻泰幸の協力と援助を仰いだ。

12　本書に収載した出土遺物及び遺構・遺物の図面・写真等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市北区西花尻1325－３）に保管している。

凡　　例

1　本書に用いた高度値は、標高である。

2　調査区配置図・遺構図・報告書抄録に記載したグリッド値・経緯度は世界測地系による。また、Ｘ＝-145,680をＡ、Ｙ＝-53,400を00とした20ｍ間隔のグリッドを設け、Ｘ軸ではＡから南へ20ｍごとにＢ・Ｃの順に、Ｙ軸では東へ01、02の順に表した（第７図)。遺構の位置を記述する際にはこのグリッドの北西隅を基準とし、Ｆ45などと呼称する。

3　図に示した方位は、平面直角座標第Ⅴ系（世界測地系）の座標北である。

4　本報告書に掲載した遺構・遺物の縮尺は、次のとおりであるが、例外については個々に明記した。

遺構　竪穴住居・掘立柱建物・柱穴列：1/60　土器棺：1/20　井戸・土坑・土坑墓：1/30

遺物　土器・瓦：1/4　石器・石製品：1/2・1/3　土製品・金属製品：1/3　銭貨：1/2

玉類：1/1・1/2

5　全体図では遺構名に次のような略称を用いている。

竪穴住居：住　　掘立柱建物：建　　柱穴列：列　　土坑墓：墓　　井戸：井　　素掘溝：素

河道：河　　柱穴：Ｐ　　遺構番号のみのものは、土坑を示す。

6　遺構の番号については、遺跡ごと、遺構の種別ごとに通し番号を付けた。

7　掲載遺物番号については、遺跡ごと、遺物の種別ごとに通し番号を付け、土器・陶磁器以外については次の略号を番号の前に付している。

土製品：Ｃ　石製品：Ｓ　金属製品：Ｍ　木製品：Ｗ　玉類：Ｊ　瓦：Ｒ

8　土器実測図のうち、中軸線の両側に白抜きのあるものは、小片のため径が不確実なものである。

9　掲載した遺構・遺物図に示すトーンの凡例は、次のとおりである。

炭

被熱
羽口被熱強

被熱(強)
羽口被熱還元

柱痕

その他：遺構については、図中に凡例表記
石製品については、明瞭な使用痕
羽口被熱弱

10　土層の色調は、『新版標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修)に準拠している。

11　本書に掲載した第８図周辺遺跡分布図は、国土地理院発行の1/25,000地形図「高梁」・「玉島」・「総社東部」・「総社西部」を複製・加筆したものである。

目　　次

（第１分冊）
巻頭カラー図版
序
例言
凡例
目次
第１章　発掘調査及び報告書作成の経緯と経過…… 1
第１節　調査に至る経緯…… 1
第２節　発掘調査の経過…… 8
第３節　報告書作成の経過…… 11
第４節　日誌抄…… 12
第５節　調査及び整理の体制…… 15
第６節　時期区分…… 19
第２章　歴史的地理的環境…… 21
第３章　神明遺跡…… 25
第１節　遺跡の概要…… 25
第２節　弥生時代以前の遺構・遺物…… 27
1　概要…… 27
2　竪穴住居…… 33
3　掘立柱建物…… 136
4　柱穴列…… 137
5　銅鐸埋納坑…… 138
6　土器棺…… 144
7　井戸…… 146
8　土坑…… 148
9　溝…… 297
10　河道…… 319
11　たわみ…… 336
12　その他の遺構・遺物…… 339
第３節　古墳時代の遺構・遺物…… 359
1　概要…… 359
2　竪穴住居…… 365
3　掘立柱建物…… 410
4　柱穴列…… 411

5　土坑…… 413
6　溝…… 419
7　河道…… 432
8　たわみ…… 433
9　その他の遺構・遺物…… 434
第４節　古代の遺構・遺物…… 439
1　概要…… 439
2　掘立柱建物…… 445
3　柱穴列…… 456
4　墓…… 459
5　土坑…… 461
6　溝…… 462
7　たわみ…… 467
8　その他の遺構・遺物…… 471
第５節　中世の遺構・遺物…… 477
1　概要…… 477
2　掘立柱建物…… 483
3　柱穴列…… 486
4　墓…… 491
5　井戸…… 492
6　土坑…… 495
7　溝…… 497
8　素掘溝群…… 503
9　たわみ…… 504
10　その他の遺構・遺物…… 506
第６節　小結…… 509

（第２分冊）

第４章　刑部遺跡…… 513
第１節　遺跡の概要…… 513
第２節　弥生時代以前の遺構・遺物…… 515
1　概要…… 515
2　竪穴住居…… 523
3　掘立柱建物…… 601
4　井戸…… 609
5　炉…… 610
6　土坑…… 611

7　溝…… 667
8　河道…… 685
9　たわみ…… 694
10　その他の遺構・遺物…… 695
第３節　古墳時代の遺構・遺物…… 701
1　概要…… 701
2　竪穴住居…… 707
3　掘立柱建物…… 753
4　井戸…… 763
5　土坑…… 767
6　溝…… 771
7　河道…… 797
8　たわみ…… 799
9　その他の遺構・遺物…… 799
第４節　古代の遺構・遺物…… 801
1　概要…… 801
2　溝…… 801
3　たわみ…… 804
4　その他の遺構・遺物…… 806
第５節　中世以降の遺構・遺物…… 808
1　概要…… 808
2　掘立柱建物…… 811
3　柱穴列…… 814
4　墓…… 815
5　土坑…… 816
6　溝…… 821
7　素掘溝…… 825
8　河道…… 826
9　たわみ…… 828
10　その他の遺構・遺物…… 828
第６節　小結…… 832
第５章　自然科学分野における鑑定・分析…… 835
第１節　刑部遺跡における自然科学分析…… 835
第２節　土層試料の薄片顕微鏡観察による人為的影響の検討…… 844
第３節　神明遺跡銅鐸埋納坑の基盤層土の蛍光Ｘ線分析…… 852
第４節　神明遺跡・刑部遺跡における樹種同定…… 854
第５節　神明遺跡・刑部遺跡の自然科学的分析…… 863
第６節　神明遺跡・刑部遺跡における放射性炭素年代測定…… 867

第７節　神明遺跡・刑部遺跡出土玉類の産地同定分析…… 874
第８節　刑部遺跡出土ガラス玉の蛍光Ｘ線分析…… 899
第９節　刑部遺跡出土青銅製品の自然科学的分析…… 903
第10節　神明遺跡出土鍛冶関連遺物の分析調査…… 909
第11節　神明遺跡・刑部遺跡出土遺物の胎土分析…… 926
第12節　神明銅鐸の三次元形状計測について…… 931
第６章　総括…… 939
第１節　調査の概要…… 939
第２節　神明銅鐸の観察と位置づけ…… 954
第３節　弥生時代後半期の土器について…… 965
第４節　備中南部における古墳時代前期から中期の土器編年…… 975
第５節　神明遺跡・刑部遺跡出土の石器・石製品…… 989
第６節　分銅形土製品について…… 993
第７節　上屋を持つ土坑…… 997
第８節　曲刃鎌について……1001
第９節　神明遺跡における古墳時代後期の鉄器生産……1003
第10節　カマドについて……1005
第11節　神明遺跡から出土した牛・馬の骨について……1010
第12節　古代の瓦について……1013
第13節　神明遺跡の地割と地理的性格……1017

（第３分冊）
遺構一覧表・遺物観察表
新旧遺構対照表
写真図版
報告書抄録

図　目　次

（第１分冊）

＜第１章＞

第１図　遺跡位置図（1/2,000,000）……1
第２図　予定路線と調査対象遺跡（1/25,000）……2
第３図　神明遺跡確認調査トレンチ配置図（1/5,000）
・土層柱状図（高さ1/50・幅任意）……3
第４図　刑部遺跡・総社条里・総社遺跡試掘・確認調査
トレンチ配置図（1/5,000）・土層柱状図
（高さ1/50・幅任意）……4
第５図　試掘・確認調査出土遺物①（1/4）……5
第６図　試掘・確認調査出土遺物②（1/2・1/3・1/4）…6
第７図　神明遺跡・刑部遺跡調査区配置及び
グリッド設定図（1/6,000）……7

＜第２章＞

第８図　周辺遺跡分布図（1/50,000）…… 22

＜第３章　神明遺跡＞

第９図　神明遺跡全体図（1/2,500）・基本土層柱状模式図
（高さ1/50・幅任意）…… 26
第10図　弥生時代遺構全体図①（1/2,500）…… 27
第11図　弥生時代遺構全体図②（1/400）…… 28
第12図　弥生時代遺構全体図③（1/300）…… 29･30
第13図　弥生時代遺構全体図④（1/300）…… 31･32
第14図　竪穴住居１（1/60）・出土遺物①（1/3）…… 33
第15図　竪穴住居１出土遺物②（1/4）…… 34
第16図　竪穴住居１出土遺物③（1/4）…… 35
第17図　竪穴住居２（1/60）・出土遺物①（1/4）…… 36
第18図　竪穴住居２出土遺物②（1/3・1/4・1/6）…… 37
第19図　竪穴住居３（1/60）・出土遺物①（1/4）…… 38
第20図　竪穴住居３出土遺物②（1/4）…… 39
第21図　竪穴住居３出土遺物③（1/3・1/2）…… 40
第22図　竪穴住居３出土遺物④（1/4）…… 41
第23図　竪穴住居４（1/60）・出土遺物（1/4）…… 42
第24図　竪穴住居５（1/60）…… 43
第25図　竪穴住居５出土遺物①（1/4）…… 44
第26図　竪穴住居５出土遺物②（1/2・1/1）…… 45
第27図　竪穴住居６（1/60）…… 46
第28図　竪穴住居６出土遺物①（1/4）…… 47
第29図　竪穴住居６出土遺物②（1/4）…… 48
第30図　竪穴住居６出土遺物③（1/4・1/3）…… 49
第31図　竪穴住居６出土遺物④（1/2・1/3・1/4）…… 50
第32図　竪穴住居７～10（1/80）…… 51
第33図　竪穴住居７断面（1/60）・出土遺物①（1/4）… 52
第34図　竪穴住居７出土遺物②（1/4・1/3・1/2）…… 53
第35図　竪穴住居８断面（1/60）
・出土遺物①（1/2・1/3）…… 54
第36図　竪穴住居８出土遺物②（1/4）…… 55
第37図　竪穴住居９（1/60）…… 56
第38図　竪穴住居９出土遺物①（1/4）…… 57
第39図　竪穴住居９出土遺物②（1/4・1/2）…… 58
第40図　竪穴住居９出土遺物③（1/3）…… 59
第41図　竪穴住居10（1/60）・出土遺物（1/4）…… 60
第42図　竪穴住居11（1/60）…… 61
第43図　竪穴住居11柱穴断面図（1/60）・出土遺物①
（1/2・1/3）…… 62
第44図　竪穴住居11出土遺物②（1/4）…… 63
第45図　竪穴住居12（1/60）…… 64
第46図　竪穴住居12出土遺物（1/4・1/2）…… 65
第47図　竪穴住居13（1/60）・出土遺物①（1/3）…… 66
第48図　竪穴住居13出土遺物②（1/4）…… 67
第49図　竪穴住居14（1/60）…… 68
第50図　竪穴住居14出土遺物（1/4・1/2・1/3）…… 69
第51図　竪穴住居15（1/60）・出土遺物（1/4）…… 70
第52図　竪穴住居16（1/60）…… 71
第53図　竪穴住居16出土遺物（1/4・1/2）…… 72
第54図　竪穴住居17（1/60）・出土遺物（1/4）…… 73
第55図　竪穴住居18（1/60）・出土遺物（1/4）…… 74
第56図　竪穴住居19（1/60）…… 75
第57図　竪穴住居19出土遺物（1/4・1/2）…… 76
第58図　竪穴住居20（1/60）…… 77
第59図　竪穴住居20出土遺物（1/4・1/2・1/3）…… 78
第60図　竪穴住居21（1/60）・出土遺物（1/4）…… 79
第61図　竪穴住居22（1/60）・出土遺物①（1/3）…… 80
第62図　竪穴住居22出土遺物②（1/4）…… 81
第63図　竪穴住居23（1/60）…… 82
第64図　竪穴住居23出土遺物（1/4・1/3・1/2）…… 83
第65図　竪穴住居24新（1/60）…… 84
第66図　竪穴住居24新断面図（1/60）…… 85
第67図　竪穴住居24変遷図（1/120）…… 85
第68図　竪穴住居24古（1/60）・出土遺物①（1/2）…… 86
第69図　竪穴住居24出土遺物②（1/4）…… 87
第70図　竪穴住居24出土遺物③（1/4・1/3・1/2）…… 88
第71図　竪穴住居25（1/60）…… 89
第72図　竪穴住居25出土遺物①（1/4・1/3・1/2）…… 90
第73図　竪穴住居26（1/60）・出土遺物①（1/3・1/2）91
第74図　竪穴住居26出土遺物②（1/4）…… 92
第75図　竪穴住居27（1/60）・出土遺物①（1/4）…… 93
第76図　竪穴住居27出土遺物②（1/4・1/3）…… 94
第77図　竪穴住居28（1/60）…… 95
第78図　竪穴住居28出土遺物①（1/4）…… 96
第79図　竪穴住居28出土遺物②（1/4）…… 97
第80図　竪穴住居28出土遺物③（1/4・1/3）…… 98
第81図　竪穴住居29（1/60）…… 99

第82図　竪穴住居29出土遺物①（1/4）…… 100
第83図　竪穴住居29出土遺物②（1/4）…… 101
第84図　竪穴住居29出土遺物③（1/4）…… 102
第85図　竪穴住居29出土遺物④（1/4・1/2）…… 103
第86図　竪穴住居29出土遺物⑤（1/3）…… 104
第87図　竪穴住居30（1/60）…… 104
第88図　竪穴住居30出土遺物（1/4・1/3）…… 105
第89図　竪穴住居31（1/60）…… 105
第90図　竪穴住居31出土遺物（1/4・1/2・1/6）…… 106
第91図　竪穴住居32（1/60）…… 108
第92図　竪穴住居32出土遺物①（1/4）…… 109
第93図　竪穴住居32出土遺物②（1/4）…… 110
第94図　竪穴住居32出土遺物③（1/4・1/3・1/2）…… 111
第95図　竪穴住居33（1/60）・出土遺物①（1/4）…… 112
第96図　竪穴住居33出土遺物（1/4・1/3・1/1）…… 113
第97図　竪穴住居34（1/60）・出土遺物①（1/3）…… 114
第98図　竪穴住居34出土遺物②（1/4・1/6）…… 115
第99図　竪穴住居35（1/60）・出土遺物（1/4・1/3）… 116
第100図　竪穴住居36（1/60）・出土遺物（1/4・1/3）… 117
第101図　竪穴住居37（1/60）・出土遺物（1/4）…… 118
第102図　竪穴住居38（1/60）・出土遺物（1/4）…… 119
第103図　竪穴住居39（1/60）・出土遺物（1/4）…… 120
第104図　竪穴住居40（1/60）・出土遺物（1/4）…… 121
第105図　竪穴住居41（1/60）・出土遺物（1/4）…… 122
第106図　竪穴住居42（1/60）・出土遺物（1/4・1/3）… 123
第107図　竪穴住居43（1/60）・出土遺物（1/4・1/3）… 124
第108図　竪穴住居43出土遺物（1/4）…… 125
第109図　竪穴住居44（1/60）・出土遺物（1/4・1/3）… 126
第110図　竪穴住居45～48（1/150）…… 127
第111図　竪穴住居45（1/60）
・出土遺物①（1/4・1/3）…… 128
第112図　竪穴住居45出土遺物②（1/4）…… 129
第113図　竪穴住居46（1/60）・出土遺物（1/4・1/3）… 129
第114図　竪穴住居47（1/60）・出土遺物（1/3）…… 130
第115図　竪穴住居48（1/60）・出土遺物（1/4・1/3）… 131
第116図　竪穴住居49（1/60）…… 132
第117図　竪穴住居49出土遺物（1/4・1/3）…… 133
第118図　竪穴住居50（1/60）・出土遺物（1/4）…… 134
第119図　竪穴住居51（1/60）…… 134
第120図　竪穴住居51出土遺物（1/4・1/2・1/3）…… 135
第121図　掘立柱建物１（1/60）・出土遺物（1/4）…… 136
第122図　掘立柱建物２（1/60）
・出土遺物（1/4・1/2）…… 137
第123図　柱穴列１（1/60）・出土遺物（1/4）…… 137
第124図　銅鐸埋納坑（1/20）・出土遺物（1/4）…… 138
第125図　銅鐸埋納坑周辺の地形（1/700）…… 139
第126図　銅鐸埋納坑周辺堆積状況①（1/60）…… 140
第127図　銅鐸埋納坑周辺堆積状況②（1/60）…… 141
第128図　銅鐸（1/4）…… 142
第129図　銅鐸模式図 …… 143
第130図　土器棺１（1/20）…… 144
第131図　土器棺の状況（1/8）…… 144
第132図　土器棺１出土遺物（1/4）
・壺866外面籠目（1/8）…… 145
第133図　井戸１（1/30）…… 146
第134図　井戸１出土土器（1/4）…… 147
第135図　土坑１（1/30）・出土遺物（1/4）…… 148
第136図　土坑２（1/30）・出土遺物（1/4）…… 148
第137図　土坑３（1/30）…… 149
第138図　土坑４（1/30）・出土遺物（1/4）…… 149
第139図　土坑５（1/30）・出土遺物（1/4）…… 150
第140図　土坑６（1/30）…… 150
第141図　土坑７（1/30）…… 150
第142図　土坑８（1/30）・出土遺物（1/4）…… 151
第143図　土坑９（1/30）…… 152
第144図　土坑10（1/30）…… 152
第145図　土坑11（1/30）…… 152
第146図　土坑11出土遺物（1/4）…… 153
第147図　土坑12出土遺物（1/4）…… 153
第148図　土坑13・14（1/30）
・土坑13出土遺物（1/4）…… 154
第149図　土坑14出土遺物（1/4）…… 154
第150図　土坑15（1/30）・出土遺物（1/4）…… 155
第151図　土坑16（1/30）・出土遺物（1/4）…… 155
第152図　土坑17（1/30）・出土遺物（1/4）…… 156
第153図　土坑18（1/30）…… 156
第154図　土坑19（1/30）・出土遺物（1/4）…… 157
第155図　土坑20（1/30）・出土遺物（1/4）…… 157
第156図　土坑21・22（1/30）…… 158
第157図　土坑21出土遺物（1/4）…… 159
第158図　土坑22出土遺物（1/4）…… 159
第159図　土坑23・24（1/30）…… 159
第160図　土坑23出土遺物（1/4）…… 160
第161図　土坑25（1/30）・出土遺物（1/4）…… 160
第162図　土坑26（1/30）・出土遺物（1/4）…… 161
第163図　土坑27（1/30）…… 162
第164図　土坑27出土遺物①（1/4）…… 163
第165図　土坑27出土遺物②（1/4）…… 164
第166図　土坑27出土遺物③（1/4）…… 165
第167図　土坑27出土遺物④（1/4）…… 166
第168図　土坑27出土遺物⑤（1/4）…… 167
第169図　土坑27出土遺物⑥（1/4・1/2）…… 168
第170図　土坑27出土遺物⑦（1/2・1/3・1/4）…… 169
第171図　土坑28（1/30）…… 170
第172図　土坑29・30（1/30）
・土坑29出土遺物（1/3）…… 170
第173図　土坑30出土遺物（1/4・1/3）…… 171
第174図　土坑31（1/30）・出土遺物（1/4）…… 171
第175図　土坑32（1/30）・出土遺物（1/4）…… 172
第176図　土坑33（1/30）・出土遺物①（1/4）…… 172
第177図　土坑33出土遺物②（1/4）…… 173
第178図　土坑34（1/30）・出土遺物（1/4）…… 173
第179図　土坑35（1/30）・出土遺物（1/4）…… 174
第180図　土坑36（1/30）・出土遺物（1/4）…… 174

第181図　土坑37（1/60）・出土遺物（1/4）…… 175
第182図　土坑38（1/30）…… 175
第183図　土坑39（1/30）…… 175
第184図　土坑40（1/30）…… 176
第185図　土坑41（1/30）・出土遺物（1/4）…… 176
第186図　土坑42（1/30）…… 177
第187図　土坑43（1/30）・出土遺物（1/4）…… 177
第188図　土坑44（1/30）・出土遺物（1/4）…… 178
第189図　土坑45（1/30）・出土遺物（1/4）…… 178
第190図　土坑46（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）…… 179
第191図　土坑47（1/30）・出土遺物（1/4・1/2）…… 180
第192図　土坑48・49（1/30）…… 180
第193図　土坑48出土遺物①（1/4）…… 181
第194図　土坑48出土遺物②（1/4）…… 182
第195図　土坑48出土遺物③（1/4・1/2）…… 183
第196図　土坑49出土遺物（1/4）…… 184
第197図　土坑50（1/30）・出土遺物①（1/3・1/2）…… 184
第198図　土坑50出土遺物②（1/4）…… 185
第199図　土坑51・52（1/30）…… 185
第200図　土坑51出土遺物（1/4・1/3）…… 186
第201図　土坑52出土遺物（1/4）…… 186
第202図　土坑53（1/30）・出土遺物（1/4）…… 187
第203図　土坑54（1/30）・出土遺物（1/4）…… 187
第204図　土坑55（1/30）・出土遺物（1/4）…… 188
第205図　土坑56（1/30）・出土遺物（1/4）…… 188
第206図　土坑57（1/30）・出土遺物（1/4）…… 189
第207図　土坑58（1/30）・出土遺物（1/4）…… 189
第208図　土坑59（1/30）・出土遺物（1/4）…… 190
第209図　土坑60（1/30）…… 190
第210図　土坑61（1/30）・出土遺物（1/4）…… 191
第211図　土坑62（1/30）…… 191
第212図　土坑63（1/30）・出土遺物（1/4）…… 191
第213図　土坑64（1/30）・出土遺物（1/4）…… 192
第214図　土坑65（1/30）・出土遺物（1/4）…… 193
第215図　土坑66（1/30）・出土遺物（1/4）…… 193
第216図　土坑67（1/30）・出土遺物（1/4）…… 194
第217図　土坑68（1/30）・出土遺物（1/4）…… 194
第218図　土坑69（1/30）・出土遺物①（1/4）…… 195
第219図　土坑69出土遺物②（1/4）…… 196
第220図　土坑70（1/30）・出土遺物①（1/4）…… 196
第221図　土坑70出土遺物②（1/4）…… 197
第222図　土坑71（1/30）・出土遺物（1/4・1/2）…… 197
第223図　土坑72（1/30）・出土遺物（1/4）…… 198
第224図　土坑73（1/30）・出土遺物（1/4）…… 198
第225図　土坑74（1/30）・出土遺物（1/4）…… 199
第226図　土坑75（1/30）・出土遺物（1/4）…… 199
第227図　土坑76（1/30）・出土遺物（1/4）…… 200
第228図　土坑77（1/30）・出土遺物（1/4）…… 200
第229図　土坑78（1/30）・出土遺物（1/4）…… 201
第230図　土坑79（1/30）・出土遺物（1/4）…… 201
第231図　土坑80（1/30）・出土遺物（1/4）…… 202
第232図　土坑81（1/30）・出土遺物（1/4）…… 203
第233図　土坑82（1/30）・出土遺物（1/4）…… 203
第234図　土坑83（1/30）
　・出土遺物（1/4・1/3・1/1）…… 204
第235図　土坑84（1/30）・出土遺物（1/4）…… 205
第236図　土坑85（1/30）・出土遺物（1/4）…… 205
第237図　土坑86（1/30）・出土遺物（1/4）…… 206
第238図　土坑87（1/30）・出土遺物①（1/4）…… 206
第239図　土坑87出土遺物②（1/4）…… 207
第240図　土坑88（1/30）・出土遺物（1/4）…… 207
第241図　土坑89（1/30）・出土遺物（1/4）…… 207
第242図　土坑90（1/30）・出土遺物（1/4）…… 208
第243図　土坑91（1/30）…… 208
第244図　土坑91出土遺物（1/4）…… 209
第245図　土坑92（1/30）・出土遺物（1/4）…… 209
第246図　土坑93（1/30）・出土遺物（1/4）…… 210
第247図　土坑94（1/30）…… 210
第248図　土坑94出土遺物（1/4）…… 211
第249図　土坑95（1/30）・出土遺物（1/4）…… 211
第250図　土坑96（1/30）・出土遺物（1/4）…… 212
第251図　土坑97（1/30）・出土遺物①（1/3）…… 212
第252図　土坑97出土遺物②（1/4）…… 213
第253図　土坑98（1/30）・出土遺物（1/4）…… 214
第254図　土坑99（1/30）・出土遺物（1/4）…… 214
第255図　土坑100（1/30）・出土遺物（1/4）…… 215
第256図　土坑101（1/30）…… 215
第257図　土坑102（1/30）・出土遺物（1/4）…… 215
第258図　土坑103・104（1/30）
　・出土遺物（1/4・1/2）…… 216
第259図　土坑105（1/30）・出土遺物（1/4・1/2）…… 217
第260図　土坑106（1/30）…… 217
第261図　土坑107（1/30）…… 217
第262図　土坑107出土遺物（1/4）…… 218
第263図　土坑108（1/30）・出土遺物（1/4）…… 219
第264図　土坑109（1/30）・出土遺物（1/4）…… 219
第265図　土坑110（1/30）…… 219
第266図　土坑110出土遺物（1/4・1/2）…… 220
第267図　土坑111（1/30）・出土遺物（1/4）…… 220
第268図　土坑112（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）…… 220
第269図　土坑113（1/30）…… 221
第270図　土坑114（1/30）・出土遺物（1/4）…… 221
第271図　土坑115（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）…… 222
第272図　土坑116（1/30）・出土遺物（1/4）…… 222
第273図　土坑117（1/30）・出土遺物（1/4）…… 223
第274図　土坑118（1/30）・出土遺物（1/4）…… 223
第275図　土坑119（1/30）・出土遺物（1/4）…… 223
第276図　土坑120（1/30）・出土遺物（1/4）…… 224
第277図　土坑121（1/30）・出土遺物（1/4）…… 224
第278図　土坑122（1/30）・出土遺物（1/4）…… 225
第279図　土坑123（1/30）…… 225
第280図　土坑124（1/30）・出土遺物（1/4）…… 226
第281図　土坑125（1/30）・出土遺物（1/4）…… 226
第282図　土坑126（1/30）・出土遺物（1/4）…… 227

第283図　土坑127（1/30）・出土遺物（1/4）…… 227
第284図　土坑128（1/30）・出土遺物（1/4）…… 228
第285図　土坑129（1/30）・出土遺物（1/4）…… 229
第286図　土坑130（1/30）・出土遺物（1/4）…… 230
第287図　土坑131（1/30）・出土遺物（1/4）…… 230
第288図　土坑132（1/30）・出土遺物（1/4）…… 230
第289図　土坑133（1/30）・出土遺物（1/4）…… 231
第290図　土坑134（1/30）…… 231
第291図　土坑135（1/30）・出土遺物（1/4）…… 231
第292図　土坑136（1/30）・出土遺物（1/4）…… 232
第293図　土坑137（1/30）・出土遺物（1/4）…… 232
第294図　土坑138（1/30）・出土遺物①（1/2）…… 233
第295図　土坑138出土遺物②（1/4）…… 234
第296図　土坑138出土遺物③（1/4）…… 235
第297図　土坑138出土遺物④（1/4）…… 236
第298図　土坑139（1/30）・出土遺物（1/4）…… 237
第299図　土坑140（1/30）・出土遺物（1/4）…… 237
第300図　土坑141（1/30）・出土遺物（1/4）…… 238
第301図　土坑142遺物及び粘土出土状況（1/30）…… 239
第302図　土坑142（1/30）・出土遺物①（1/3）…… 240
第303図　土坑142出土遺物②（1/4）…… 241
第304図　土坑142出土遺物③（1/4）…… 242
第305図　土坑142出土遺物④（1/4）…… 243
第306図　土坑142出土遺物⑤（1/4）…… 244
第307図　土坑142出土遺物⑥（1/4）…… 245
第308図　土坑143（1/30）・出土遺物（1/4）…… 245
第309図　土坑144（1/30）・出土遺物（1/4）…… 246
第310図　土坑145（1/30）…… 246
第311図　土坑146（1/30）…… 246
第312図　土坑146出土遺物（1/4）…… 247
第313図　土坑147（1/30）・出土遺物（1/4）…… 247
第314図　土坑148（1/30）・出土遺物（1/4）…… 247
第315図　土坑149（1/30）・出土遺物（1/4）…… 248
第316図　土坑150（1/30）…… 248
第317図　土坑150出土遺物（1/4）…… 249
第318図　土坑151（1/30）・出土遺物（1/4）…… 250
第319図　土坑152（1/30）…… 250
第320図　土坑152出土遺物①（1/4）…… 251
第321図　土坑152出土遺物②（1/4）…… 252
第322図　土坑153（1/30）…… 252
第323図　土坑153出土遺物（1/4）…… 253
第324図　土坑154（1/30）・出土遺物（1/4）…… 253
第325図　土坑155（1/30）・出土遺物（1/4）…… 254
第326図　土坑156（1/30）・出土遺物（1/4）…… 254
第327図　土坑157（1/30）・出土遺物①（1/4）…… 255
第328図　土坑157出土遺物②（1/4）…… 256
第329図　土坑158（1/30）・出土遺物（1/4）…… 257
第330図　土坑159（1/30）・出土遺物（1/4）…… 257
第331図　土坑160（1/30）・出土遺物（1/4）…… 258
第332図　土坑161（1/30）・出土遺物（1/4）…… 258
第333図　土坑162（1/30）・出土遺物（1/4）…… 259
第334図　土坑163（1/30）…… 259
第335図　土坑163出土遺物（1/4）…… 260
第336図　土坑164（1/30）・出土遺物（1/4）…… 260
第337図　土坑165（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）…… 261
第338図　土坑166（1/30）・出土遺物（1/4）…… 261
第339図　土坑167（1/30）…… 262
第340図　土坑168（1/30）…… 262
第341図　土坑169（1/30）・出土遺物（1/4・1/2）…… 262
第342図　土坑170（1/30）・出土遺物（1/4）…… 263
第343図　土坑171（1/30）・出土遺物（1/4）…… 263
第344図　土坑172（1/60）・出土遺物（1/4）…… 264
第345図　土坑173（1/30）・出土遺物（1/4）…… 265
第346図　土坑174（1/30）…… 266
第347図　土坑175（1/30）・出土遺物（1/4）…… 266
第348図　土坑176（1/30）・出土遺物（1/4）…… 267
第349図　土坑177（1/30）・出土遺物（1/4）…… 267
第350図　土坑178（1/30）・出土遺物（1/4）…… 268
第351図　土坑179（1/30）・出土遺物（1/4）…… 269
第352図　土坑180（1/30）・出土遺物（1/4）…… 270
第353図　土坑181（1/60）…… 270
第354図　土坑181出土遺物（1/4）…… 271
第355図　土坑182（1/30）・出土遺物（1/4）…… 272
第356図　土坑183（1/30）・出土遺物（1/4）…… 273
第357図　土坑184（1/30）・出土遺物（1/4）…… 273
第358図　土坑185（1/60）…… 273
第359図　土坑185出土遺物（1/4・1/3）…… 274
第360図　土坑186（1/30）…… 274
第361図　土坑186出土遺物（1/4）…… 275
第362図　土坑187（1/30）・出土遺物（1/4）…… 276
第363図　土坑188（1/60）…… 276
第364図　土坑188出土遺物（1/4）…… 277
第365図　土坑189（1/30）・出土遺物（1/4）…… 277
第366図　土坑190（1/30）・出土遺物（1/4）…… 278
第367図　土坑191（1/30）・出土遺物（1/4）…… 278
第368図　土坑192（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）…… 279
第369図　土坑193（1/30）・出土遺物（1/4）…… 279
第370図　土坑194（1/30）・出土遺物（1/4）…… 280
第371図　土坑195（1/30）…… 280
第372図　土坑195出土遺物（1/4・1/2）…… 281
第373図　土坑196（1/30）・出土遺物（1/4・1/2）…… 281
第374図　土坑197（1/30）・出土遺物（1/4）…… 282
第375図　土坑198（1/30）・出土遺物①（1/4）…… 282
第376図　土坑198出土遺物②（1/4）…… 283
第377図　土坑199（1/30）・出土遺物（1/4）…… 283
第378図　土坑200（1/30）
・出土遺物（1/4・1/3・1/2）…… 284
第379図　土坑201（1/30）・出土遺物（1/4）…… 284
第380図　土坑202（1/30）・出土遺物（1/4）…… 285
第381図　土坑203（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）…… 285
第382図　土坑204（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）…… 286
第383図　土坑205（1/30）・出土遺物（1/4）…… 287
第384図　土坑206（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）…… 288
第385図　土坑207（1/30）・出土遺物（1/4）…… 289

第386図　土坑208（1/30）・出土遺物（1/4）…… 289
第387図　土坑209（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）…… 289
第388図　土坑210（1/30）・出土遺物（1/4）…… 290
第389図　土坑211（1/30）・出土遺物（1/4）…… 290
第390図　土坑212（1/30）・出土遺物（1/4）…… 291
第391図　土坑213（1/30）・出土遺物①（1/2）…… 291
第392図　土坑213出土遺物②（1/4）…… 292
第393図　土坑213出土遺物③（1/4）…… 293
第394図　土坑213出土遺物④（1/4）…… 294
第395図　土坑214（1/30）・出土遺物（1/4）…… 294
第396図　土坑215（1/30）・出土遺物（1/4）…… 295
第397図　土坑216（1/30）・出土遺物（1/4）…… 296
第398図　溝１（1/30）・出土遺物（1/4・1/2）…… 297
第399図　溝２（1/30）・出土遺物（1/4）…… 298
第400図　溝３（1/30）・出土遺物（1/4）…… 298
第401図　溝４（1/30）・出土遺物（1/4）…… 299
第402図　溝５（1/30）・出土遺物（1/4・1/2）…… 299
第403図　溝６（1/30）・出土遺物（1/4）…… 300
第404図　溝７（1/30）…… 300
第405図　溝７出土遺物（1/4）…… 301
第406図　溝８（1/60）…… 301
第407図　溝８出土遺物（1/4・1/3）…… 302
第408図　溝９（1/30）…… 303
第409図　溝９遺物出土状況（1/80）
・出土遺物①（1/3）…… 304
第410図　溝９出土遺物②（1/4）…… 305
第411図　溝９出土遺物③（1/4）…… 306
第412図　溝９出土遺物④（1/4）…… 307
第413図　溝９出土遺物⑤（1/4）…… 308
第414図　溝９出土遺物⑥（1/4）…… 309
第415図　溝９出土遺物⑦（1/2・1/3）…… 310
第416図　溝10（1/30）・出土遺物（1/4）…… 311
第417図　溝11（1/30）・出土遺物①（1/4）…… 312
第418図　溝11出土遺物②（1/4）…… 313
第419図　溝11出土遺物③（1/4・1/3）…… 314
第420図　溝12（1/30）・出土遺物①（1/4）…… 315
第421図　溝12出土遺物②（1/4）…… 316
第422図　溝12出土遺物③（1/4・1/2・1/3）…… 317
第423図　溝13（1/30）・出土遺物（1/4・1/2）…… 318
第424図　河道１東肩口遺物出土状況（1/30）…… 319
第425図　河道１（1/60）…… 319
第426図　河道１出土遺物①（1/4）…… 320
第427図　河道１出土遺物②（1/4）…… 321
第428図　河道１出土遺物③（1/4）…… 322
第429図　河道１出土遺物④（1/4）…… 323
第430図　河道１出土遺物⑤（1/3・1/2）…… 324
第431図　河道１出土遺物⑥（1/4）…… 325
第432図　河道２（1/60）…… 325
第433図　河道２出土遺物①（1/4・1/6）…… 326
第434図　河道２出土遺物②（1/3・1/2）…… 327
第435図　河道３（1/60）…… 327
第436図　河道３出土遺物①（1/4）…… 328
第437図　河道３出土遺物②（1/4）…… 329
第438図　河道３出土遺物③（1/4）…… 330
第439図　河道３出土遺物④（1/4・1/3）…… 331
第440図　河道４（1/60）・出土遺物①（1/4）…… 332
第441図　河道４出土遺物②（1/4）…… 333
第442図　河道４出土遺物③（1/4）…… 334
第443図　河道４出土遺物④（1/4・1/3・1/2）…… 335
第444図　たわみ１（1/60）・出土遺物（1/4・1/3）…… 336
第445図　たわみ２（1/60）・出土遺物（1/4）…… 337
第446図　たわみ３（1/60）・出土遺物（1/4）…… 338
第447図　たわみ４（1/60）・出土遺物（1/4）…… 338
第448図　土器溜まり１出土遺物①（1/4）…… 339
第449図　土器溜まり１出土遺物②（1/4）…… 340
第450図　土器溜まり１出土遺物③（1/4）…… 341
第451図　柱穴出土遺物①（1/4）…… 342
第452図　柱穴出土遺物②（1/4・1/3・1/2）…… 343
第453図　その他の出土遺物＜弥生時代①＞（1/4）…… 344
第454図　その他の出土遺物＜弥生時代②＞（1/4）…… 345
第455図　その他の出土遺物＜弥生時代③＞（1/4）…… 346
第456図　その他の出土遺物＜弥生時代④＞（1/4）…… 347
第457図　その他の出土遺物＜弥生時代⑤＞（1/4）…… 348
第458図　その他の出土遺物＜弥生時代⑥＞（1/4）…… 349
第459図　その他の出土遺物＜弥生時代⑦＞
（1/4・1/2・1/1）…… 350
第460図　その他の出土遺物＜弥生時代⑧＞（1/2）…… 351
第461図　その他の出土遺物＜弥生時代⑨＞（1/2）…… 352
第462図　その他の出土遺物＜弥生時代⑩＞（1/2）…… 353
第463図　その他の出土遺物＜弥生時代⑪＞（1/2）…… 354
第464図　その他の出土遺物＜弥生時代⑫＞
（1/2・1/3）…… 355
第465図　その他の出土遺物＜弥生時代⑬＞（1/3）…… 356
第466図　その他の出土遺物＜弥生時代⑭＞
（1/3・1/4）…… 357
第467図　その他の出土遺物＜弥生時代⑮＞（1/3）…… 358
第468図　古墳時代遺構全体図①（1/2,500）
・西端土層断面図（1/60）…… 359
第469図　古墳時代遺構全体図②（1/400）…… 360
第470図　古墳時代遺構全体図③（1/400）…… 361･362
第471図　古墳時代遺構全体図④（1/400）…… 363･364
第472図　竪穴住居52（1/60）
・出土遺物①（1/4・1/3）…… 365
第473図　竪穴住居52カマド（1/30）
・出土遺物②（1/4）…… 366
第474図　竪穴住居53（1/60）
・出土遺物①（1/4・1/3）…… 367
第475図　竪穴住居53カマド（1/30）
・出土遺物②（1/4）…… 368
第476図　竪穴住居54（1/60・1/30）
・出土遺物（1/4）…… 369
第477図　竪穴住居54カマド（1/30）…… 370
第478図　竪穴住居55（1/60）・カマド（1/30）
・出土遺物（1/4）…… 371

第479図　竪穴住居56（1/60）・出土遺物（1/4・1/6）… 372
第480図　竪穴住居57炭化材出土状況（1/60）
・出土遺物（1/4）…… 373
第481図　竪穴住居57（1/60）・出土遺物①（1/4）…… 374
第482図　竪穴住居57カマド（1/30）
・出土遺物②（1/4）…… 375
第483図　竪穴住居57出土遺物③
（1/4・1/3・1/6・1/1）…… 376
第484図　竪穴住居58（1/60）・出土遺物（1/4）…… 377
第485図　竪穴住居59（1/60）・カマド（1/30）
・出土遺物（1/4）…… 378
第486図　竪穴住居60（1/60）・Ｐ５（1/30）…… 379
第487図　竪穴住居60カマド（1/30）…… 380
第488図　竪穴住居60出土遺物①（1/4）…… 381
第489図　竪穴住居60出土遺物②（1/4・1/3・1/6）…… 382
第490図　竪穴住居61（1/60）…… 383
第491図　竪穴住居61カマド（1/30）
・出土遺物（1/4・1/1）…… 384
第492図　竪穴住居62（1/60）・カマド（1/30）
・出土遺物（1/4）…… 385
第493図　竪穴住居63（1/60）・カマド（1/30）…… 386
第494図　竪穴住居63出土遺物（1/4）…… 387
第495図　竪穴住居64（1/60）…… 387
第496図　竪穴住居64カマド（1/30）・出土遺物（1/4）　388
第497図　竪穴住居65（1/60）…… 389
第498図　竪穴住居65遺物出土状況（1/60）
・カマド（1/30）…… 390
第499図　竪穴住居65出土遺物①（1/4）…… 391
第500図　竪穴住居65出土遺物②（1/3）…… 392
第501図　竪穴住居65出土遺物③（1/3・1/6）…… 393
第502図　竪穴住居66（1/60）・カマド（1/30）
・出土遺物（1/4）…… 394
第503図　竪穴住居67（1/60）…… 395
第504図　竪穴住居67カマド（1/30）
・出土遺物（1/4・1/3）…… 396
第505図　竪穴住居68（1/60）・カマド（1/30）
・出土遺物（1/4）…… 397
第506図　竪穴住居69（1/60）…… 398
第507図　竪穴住居69カマド（1/30）・Ｐ７（1/30）
・出土遺物①（1/4）…… 399
第508図　竪穴住居69出土遺物②（1/4）…… 400
第509図　竪穴住居69出土遺物③（1/4）…… 401
第510図　竪穴住居69出土遺物④（1/4・1/3）…… 402
第511図　竪穴住居70（1/60）…… 403
第512図　竪穴住居70カマド（1/30）・出土遺物（1/4）　404
第513図　竪穴住居71（1/60）・出土遺物（1/4）…… 405
第514図　竪穴住居72・73（1/60）…… 406
第515図　竪穴住居72出土遺物（1/4・1/3）…… 407
第516図　竪穴住居73出土遺物（1/4・1/3）…… 407
第517図　竪穴住居74（1/60）・Ｐ６（1/30）…… 408
第518図　竪穴住居74出土遺物（1/4）…… 409
第519図　掘立柱建物３（1/60）・出土遺物（1/4）…… 410
第520図　掘立柱建物４（1/60）・出土遺物（1/4）…… 411
第521図　柱穴列２（1/60）・出土遺物（1/4・1/3）…… 412
第522図　柱穴列３（1/60）…… 412
第523図　柱穴列４（1/60）…… 412
第524図　柱穴列５（1/60）…… 413
第525図　土坑217（1/30）・出土遺物（1/4）…… 413
第526図　土坑218（1/30）・出土遺物（1/4）…… 414
第527図　土坑219（1/30）…… 415
第528図　土坑220（1/30）…… 415
第529図　土坑221（1/30）…… 415
第530図　土坑222（1/30）・出土遺物（1/4）…… 416
第531図　土坑223（1/30）…… 416
第532図　土坑224（1/30）・出土遺物（1/4）…… 416
第533図　土坑225（1/30）・出土遺物（1/4）…… 417
第534図　土坑226（1/30）…… 417
第535図　土坑227（1/30）
・出土遺物（1/4・1/3・1/2）…… 418
第536図　溝14（1/30）・出土遺物（1/4）…… 419
第537図　溝15（1/30）・出土遺物（1/4）…… 419
第538図　溝16（1/30）・出土遺物（1/4）…… 420
第539図　溝17（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）…… 420
第540図　溝18（1/30）・出土遺物①（1/4）…… 421
第541図　溝18出土遺物②（1/4・1/3・1/1）…… 422
第542図　溝19（1/80）・出土遺物①（1/3・1/6）…… 423
第543図　溝19出土遺物②（1/4）…… 424
第544図　溝19出土遺物③（1/4）…… 425
第545図　溝19出土遺物④（1/4）…… 426
第546図　溝19出土遺物⑤（1/4）…… 427
第547図　溝20（1/30）・出土遺物（1/4）…… 428
第548図　溝21（1/30）・出土遺物（1/4）…… 428
第549図　溝22断面・遺物出土状況（1/30）…… 429
第550図　溝22出土遺物（1/4）…… 430
第551図　溝23（1/30）・出土遺物（1/4）…… 431
第552図　河道５（1/60）・出土遺物①（1/3）…… 432
第553図　河道５出土遺物②（1/4）…… 433
第554図　たわみ５（1/60）・出土遺物（1/4）…… 433
第555図　土器溜まり２（1/60）
・出土遺物①（1/4・1/3）…… 434
第556図　土器溜まり２出土遺物②（1/4）…… 435
第557図　柱穴33・34出土遺物（1/4）…… 435
第558図　その他の出土遺物＜古墳時代①＞（1/4）…… 436
第559図　その他の出土遺物＜古墳時代②＞
（1/4・1/3）…… 437
第560図　その他の出土遺物＜古墳時代③＞
（1/1・1/3）…… 438
第561図　古代遺構全体図①（1/2,500）…… 439
第562図　古代遺構全体図②（1/400）…… 440
第563図　古代遺構全体図③（1/500）…… 441･442
第564図　古代遺構全体図④（1/500）…… 443･444
第565図　掘立柱建物５（1/80）・出土遺物（1/4）…… 445
第566図　掘立柱建物６（1/60）・出土遺物（1/4）…… 446
第567図　掘立柱建物７（1/60）…… 447

第568図　掘立柱建物７出土遺物（1/4・1/1）…… 448
第569図　掘立柱建物８（1/60）…… 448
第570図　掘立柱建物８出土遺物（1/4）…… 449
第571図　掘立柱建物９（1/80）
・出土遺物（1/4・1/1）…… 450
第572図　掘立柱建物10（1/60）…… 451
第573図　掘立柱建物10と柱穴列９の位置関係（1/200）
・掘立柱建物10出土遺物（1/4・1/6）…… 452
第574図　掘立柱建物11（1/60）・出土遺物（1/4）…… 453
第575図　掘立柱建物12（1/60）・出土遺物（1/3）…… 454
第576図　掘立柱建物13（1/60）
・出土遺物（1/4・1/3）…… 454
第577図　掘立柱建物14（1/60）
・出土遺物（1/4・1/3）…… 455
第578図　柱穴列６（1/60）…… 456
第579図　柱穴列７（1/60）…… 456
第580図　柱穴列８（1/60）…… 456
第581図　柱穴列９（1/60）・出土遺物（1/3）…… 457
第582図　柱穴列10（1/60）・出土遺物（1/4・1/3）…… 457
第583図　柱穴列11（1/60）・出土遺物（1/4）…… 458
第584図　墓１（1/30）・出土遺物（1/4・1/3・1/2）… 459
第585図　墓２（1/30）…… 459
第586図　墓２出土遺物（1/4）…… 460
第587図　墓３（1/30）…… 460
第588図　土坑228（1/30）…… 461
第589図　土坑229（1/30）・出土遺物（1/4）…… 461
第590図　土坑230（1/30）・出土遺物（1/4）…… 461
第591図　溝24（1/30）・出土遺物（1/4）…… 462
第592図　溝25（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）…… 462
第593図　溝26・27（1/30）・溝26出土遺物（1/4）…… 462
第594図　溝28（1/30）・出土遺物（1/4）…… 463
第595図　溝29・30（1/30）・溝29出土遺物（1/4）…… 463
第596図　溝30出土遺物（1/4・1/3）…… 464
第597図　溝31（1/60）…… 464
第598図　溝31出土遺物①（1/4）…… 465
第599図　溝31出土遺物②（1/4・1/3）…… 466
第600図　たわみ６（1/60）・出土遺物①（1/4）…… 467
第601図　たわみ６出土遺物②（1/4）…… 468
第602図　たわみ６出土遺物③（1/4）…… 469
第603図　たわみ６出土遺物④（1/3）…… 470
第604図　たわみ６検出中出土遺物（1/4・1/3）…… 470
第605図　柱穴36（1/30）・柱穴出土遺物①（1/4）…… 471
第606図　柱穴出土遺物②（1/3）…… 472
第607図　その他の出土遺物＜古代①＞（1/4）…… 472
第608図　その他の出土遺物＜古代②＞（1/4）…… 473
第609図　その他の出土遺物＜古代③＞（1/4）…… 474
第610図　その他の出土遺物＜古代④＞（1/4）…… 475
第611図　その他の出土遺物＜古代⑤＞（1/4）…… 476
第612図　中世遺構全体図①（1/2,500）
・東端土層断面図（1/80）…… 477
第613図　中世遺構全体図②（1/500）…… 478
第614図　中世遺構全体図③（1/500）…… 479･480
第615図　中世遺構全体図④（1/400）…… 481･482
第616図　掘立柱建物15（1/60）…… 483
第617図　掘立柱建物16（1/60）…… 484
第618図　掘立柱建物17（1/60）・出土遺物（1/4）…… 485
第619図　掘立柱建物18（1/60）・出土遺物（1/4）…… 485
第620図　柱穴列12（1/60）・出土遺物（1/4）…… 486
第621図　柱穴列13（1/60）・出土遺物（1/4）…… 486
第622図　柱穴列14（1/60）…… 487
第623図　柱穴列15（1/60）・出土遺物（1/4）…… 487
第624図　柱穴列16（1/60）…… 487
第625図　柱穴列17（1/60）…… 487
第626図　柱穴列18（1/60）・出土遺物（1/4）…… 488
第627図　柱穴列19・20（1/60）…… 488
第628図　柱穴列19出土遺物（1/4）…… 489
第629図　柱穴列20出土遺物（1/4）…… 489
第630図　柱穴列21・22（1/60）・出土遺物（1/4）…… 490
第631図　墓４（1/30）・出土遺物（1/4）…… 491
第632図　井戸２（1/60）・出土遺物（1/4）…… 492
第633図　井戸３（1/30）…… 493
第634図　井戸３上面獣骨出土状況（1/30）
・出土遺物（1/4）…… 494
第635図　土坑231（1/30）・出土遺物（1/4）…… 495
第636図　土坑232（1/30）…… 496
第637図　土坑233（1/30）…… 496
第638図　土坑234（1/30）…… 496
第639図　土坑235（1/30）・出土遺物（1/4）…… 496
第640図　溝32（1/30）・出土遺物（1/4）…… 497
第641図　溝33（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）…… 497
第642図　溝33～35（1/60）…… 498
第643図　溝35（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）…… 498
第644図　溝36（1/30）…… 499
第645図　溝37（1/30）・出土遺物（1/4）…… 499
第646図　溝38（1/30）・出土遺物（1/3）…… 499
第647図　溝39（1/30）・出土遺物（1/3）…… 500
第648図　溝40（1/30）…… 500
第649図　溝41（1/30）…… 500
第650図　溝42・43（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）… 500
第651図　溝44（1/30）…… 501
第652図　溝45（1/30）…… 501
第653図　溝45出土遺物（1/4・1/3）…… 502
第654図　溝46（1/30）…… 502
第655図　溝47（1/30）…… 502
第656図　溝48（1/30）…… 502
第657図　素掘溝群1～３（1/80）
・素掘溝群１出土遺物（1/4・1/3）…… 503
第658図　素掘溝群３（1/30）…… 503
第659図　たわみ７（1/60）・出土遺物（1/4）…… 504
第660図　たわみ８（1/60）…… 504
第661図　たわみ８出土遺物（1/4・1/3）…… 505
第662図　たわみ９（1/60）・出土遺物（1/3）…… 505
第663図　柱穴52～60出土遺物（1/4・1/3）…… 506
第664図　その他の出土遺物＜中世以降①＞（1/4）…… 507

第665図　その他の出土遺物＜中世以降②＞
（1/4・1/3）…… 508
第666図　神明遺跡変遷図（1/3,000）…… 510

（第２分冊）
＜第４章　刑部遺跡＞
第667図　刑部遺跡全体図（1/2,500）・基本土層柱状模式図
（高さ1/50・幅任意）…… 514
第668図　弥生時代遺構全体図①（1/2,500）…… 515
第669図　弥生時代遺構全体図②（1/300）…… 516
第670図　弥生時代遺構全体図③（1/300）…… 517･518
第671図　弥生時代遺構全体図④（1/300）…… 519･520
第672図　弥生時代遺構全体図⑤（1/500）…… 521
第673図　弥生時代遺構全体図⑥（1/500）…… 522
第674図　竪穴住居１（1/60）・出土遺物（1/4）…… 523
第675図　竪穴住居２～４（1/60）…… 524
第676図　竪穴住居２断面図①（1/60）…… 525
第677図　竪穴住居２断面図②（1/60）…… 526
第678図　竪穴住居２新（1/60）…… 527
第679図　竪穴住居２変遷図（1/120）
・柱穴断面図（1/60）…… 528
第680図　竪穴住居２出土遺物①（1/4）…… 529
第681図　竪穴住居２出土遺物②（1/4）…… 530
第682図　竪穴住居２出土遺物③（1/2・1/3・1/1）…… 531
第683図　竪穴住居２出土遺物④（1/3）…… 532
第684図　竪穴住居３（1/60）…… 533
第685図　竪穴住居３出土遺物①（1/4・1/3）…… 534
第686図　竪穴住居３出土遺物②（1/2・1/1）…… 535
第687図　竪穴住居４（1/60）…… 535
第688図　竪穴住居４出土遺物（1/4・1/3・1/2）…… 536
第689図　竪穴住居５（1/60）
・出土遺物（1/4・1/3・1/2）…… 537
第690図　竪穴住居６新（1/60）…… 538
第691図　竪穴住居６新断面図（1/60）…… 539
第692図　竪穴住居６古（1/60）…… 539
第693図　竪穴住居６出土遺物（1/4・1/2）…… 540
第694図　竪穴住居７（1/60）・出土遺物（1/4）…… 541
第695図　竪穴住居８～11（1/80）…… 542
第696図　竪穴住居８（1/60）…… 543
第697図　竪穴住居８出土遺物
（1/4・1/1・1/2・1/3・1/6）…… 544
第698図　竪穴住居８付属土坑（1/30）
・出土遺物①（1/4）…… 545
第699図　竪穴住居８付属土坑出土遺物②（1/4・1/3）　546
第700図　竪穴住居９（1/60）・出土遺物（1/4）…… 548
第701図　竪穴住居10①（1/80）…… 549
第702図　竪穴住居10②（1/80）…… 550
第703図　竪穴住居10断面図（1/80）…… 551
第704図　竪穴住居10変遷図（1/120）…… 552
第705図　竪穴住居10出土遺物（1/4・1/2・1/3）…… 553
第706図　竪穴住居11（1/60）・出土遺物（1/4）…… 554
第707図　竪穴住居12（1/60）…… 555
第708図　竪穴住居12断面図（1/60）
・出土遺物（1/4・1/3・1/2）…… 556
第709図　竪穴住居13（1/60）…… 557
第710図　竪穴住居13出土遺物（1/4）…… 558
第711図　竪穴住居14炭化材出土状況（1/60）…… 558
第712図　竪穴住居14（1/60）・出土遺物（1/4）…… 559
第713図　竪穴住居14変遷図（1/120）…… 560
第714図　竪穴住居15新（1/60）…… 561
第715図　竪穴住居15古（1/60）…… 562
第716図　竪穴住居15出土遺物
（1/4・1/6・1/2・1/1）…… 563
第717図　竪穴住居16（1/60）・出土遺物（1/4・1/2）… 564
第718図　竪穴住居17（1/60）…… 565
第719図　竪穴住居17変遷図（1/120）
・出土遺物（1/4・1/3）…… 566
第720図　竪穴住居18（1/60）…… 567
第721図　竪穴住居18出土遺物（1/4）…… 568
第722図　竪穴住居19（1/60）…… 569
第723図　竪穴住居19断面図（1/60）
・出土遺物（1/4・1/1）…… 570
第724図　竪穴住居20（1/60）…… 571
第725図　竪穴住居20断面図①（1/60）…… 572
第726図　竪穴住居20断面図②（1/60）…… 573
第727図　竪穴住居20変遷図（1/160）…… 573
第728図　竪穴住居20出土遺物（1/4・1/3・1/1）…… 574
第729図　竪穴住居21（1/60）・出土遺物（1/4・1/3）… 575
第730図　竪穴住居22（1/60）・出土遺物（1/4・1/2）… 576
第731図　竪穴住居23（1/60）・出土遺物（1/4）…… 577
第732図　竪穴住居24（1/80）…… 579
第733図　竪穴住居24断面図（1/80）
・出土遺物（1/4・1/3）…… 580
第734図　竪穴住居25（1/60）…… 581
第735図　竪穴住居25出土遺物（1/4・1/3・1/2）…… 582
第736図　竪穴住居26（1/60）・出土遺物（1/4）…… 583
第737図　竪穴住居27（1/60）
・出土遺物（1/4・1/3・1/2・1/1）…… 584
第738図　竪穴住居28（1/60）・出土遺物（1/4）…… 585
第739図　竪穴住居29（1/60）・出土遺物（1/4）…… 586
第740図　竪穴住居30（1/60）・出土遺物（1/4・1/3）… 587
第741図　竪穴住居31（1/60）…… 588
第742図　竪穴住居31断面図（1/60）…… 589
第743図　竪穴住居31変遷図（1/120）…… 589
第744図　竪穴住居31出土遺物
（1/4・1/3・1/2・1/6）…… 590
第745図　竪穴住居32（1/60）・出土遺物（1/4・1/2）… 591
第746図　竪穴住居33（1/60）・出土遺物（1/4・1/3）… 592
第747図　竪穴住居34（1/60）・出土遺物①（1/4）…… 593
第748図　竪穴住居34出土遺物②（1/4）…… 594
第749図　竪穴住居35（1/60）…… 594
第750図　竪穴住居36（1/60）…… 595
第751図　竪穴住居36 Ｐ７断面図（1/30）
・出土遺物（1/4・1/3・1/2）…… 596

第752図　竪穴住居36変遷図（1/120）…… 597
第753図　竪穴住居37（1/60）…… 598
第754図　竪穴住居37断面図（1/60）…… 599
第755図　竪穴住居37出土遺物①（1/4）…… 599
第756図　竪穴住居37出土遺物②（1/4・1/3・1/1）…… 600
第757図　掘立柱建物１（1/60）…… 601
第758図　掘立柱建物２（1/60）・出土遺物（1/4）…… 602
第759図　掘立柱建物３（1/60）・出土遺物（1/4）…… 602
第760図　掘立柱建物４（1/60）…… 603
第761図　掘立柱建物５（1/60）…… 604
第762図　掘立柱建物６（1/60）…… 604
第763図　掘立柱建物６出土遺物（1/4）…… 605
第764図　掘立柱建物７（1/60）…… 605
第765図　掘立柱建物８（1/60）…… 606
第766図　掘立柱建物９（1/60）・出土遺物（1/4）…… 606
第767図　掘立柱建物10（1/60）…… 607
第768図　掘立柱建物11（1/60）…… 607
第769図　掘立柱建物12（1/60）…… 608
第770図　井戸１（1/30）・出土遺物①（1/3・1/2）…… 609
第771図　井戸１出土遺物②（1/4）…… 610
第772図　炉１（1/20）・出土遺物（1/4）…… 610
第773図　土坑１（1/30）・出土遺物（1/4）…… 611
第774図　土坑２（1/30）・出土遺物（1/4）…… 612
第775図　土坑３（1/30）・出土遺物（1/4）…… 612
第776図　土坑４（1/30）…… 612
第777図　土坑４出土遺物①（1/4）…… 613
第778図　土坑４出土遺物②（1/4）…… 614
第779図　土坑４出土遺物③（1/4）…… 615
第780図　土坑４出土遺物④（1/4）…… 616
第781図　土坑５（1/30）・出土遺物（1/4）…… 617
第782図　土坑６（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）…… 618
第783図　土坑７（1/30）・出土遺物（1/4）…… 618
第784図　土坑８（1/30）・出土遺物（1/4）…… 618
第785図　土坑９（1/30）…… 619
第786図　土坑10（1/30）・出土遺物（1/4）…… 619
第787図　土坑11（1/30）・出土遺物（1/4）…… 620
第788図　土坑12（1/30）…… 620
第789図　土坑13（1/30）…… 620
第790図　土坑14（1/30）・出土遺物（1/4・1/2）…… 621
第791図　土坑15（1/30）・出土遺物（1/4）…… 622
第792図　土坑16（1/30）・出土遺物（1/4）…… 622
第793図　土坑17（1/30）…… 623
第794図　土坑18（1/30）・出土遺物（1/4）…… 623
第795図　土坑19（1/30）…… 623
第796図　土坑20（1/30）・出土遺物（1/4）…… 624
第797図　土坑21（1/30）・出土遺物（1/4）…… 625
第798図　土坑22（1/30）・出土遺物（1/4）…… 626
第799図　土坑23（1/30）・出土遺物（1/4）…… 626
第800図　土坑24（1/30）・出土遺物（1/4）…… 626
第801図　土坑25（1/30）・出土遺物（1/4）…… 627
第802図　土坑26（1/30）・出土遺物（1/4）…… 628
第803図　土坑27（1/30）・出土遺物（1/4）…… 629
第804図　土坑28（1/30）・出土遺物（1/4）…… 629
第805図　土坑29（1/30）…… 629
第806図　土坑30（1/30）・出土遺物（1/4）…… 630
第807図　土坑31（1/30）・出土遺物（1/4・1/2）…… 630
第808図　土坑32（1/30）…… 631
第809図　土坑33（1/30）・出土遺物（1/4）…… 631
第810図　土坑34（1/30）・出土遺物（1/4・1/1）…… 631
第811図　土坑35（1/30）・出土遺物（1/4・1/2）…… 632
第812図　土坑36（1/30）・出土遺物（1/4）…… 633
第813図　土坑37（1/30）・出土遺物（1/4）…… 633
第814図　土坑38（1/30）・出土遺物（1/4）…… 634
第815図　土坑39（1/30）…… 635
第816図　土坑40（1/30）・出土遺物（1/4）…… 635
第817図　土坑41（1/30）・出土遺物（1/4）…… 635
第818図　土坑42（1/30）・出土遺物（1/4）…… 636
第819図　土坑43（1/30）・出土遺物①（1/4）…… 636
第820図　土坑43出土遺物②（1/4）…… 637
第821図　土坑44（1/30）・出土遺物（1/4）…… 637
第822図　土坑45（1/30）・出土遺物（1/4）…… 637
第823図　土坑46（1/30）・出土遺物（1/4）…… 638
第824図　土坑47（1/30）・出土遺物（1/4）…… 638
第825図　土坑48（1/30）・出土遺物（1/4）…… 639
第826図　土坑49（1/30）・出土遺物（1/4）…… 639
第827図　土坑50（1/30）・出土遺物（1/4）…… 639
第828図　土坑51（1/30）・出土遺物（1/4）…… 640
第829図　土坑52（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）…… 640
第830図　土坑53（1/30）・出土遺物（1/4）…… 641
第831図　土坑54（1/30）
・出土遺物（1/4・1/3・1/1）…… 642
第832図　土坑55（1/30）・出土遺物（1/4）…… 642
第833図　土坑56（1/30）・出土遺物（1/4）…… 643
第834図　土坑57（1/30）・出土遺物（1/4・1/2）…… 643
第835図　土坑58（1/30）・出土遺物（1/4）…… 644
第836図　土坑59（1/30）・出土遺物（1/4）…… 644
第837図　土坑60（1/30）…… 644
第838図　土坑61（1/30）…… 645
第839図　土坑62（1/30）・出土遺物（1/4）…… 645
第840図　土坑63（1/30）・出土遺物（1/4）…… 646
第841図　土坑64（1/30）・出土遺物（1/4）…… 647
第842図　土坑65・66（1/30）
・土坑66出土遺物（1/4）…… 647
第843図　土坑67（1/30）・出土遺物（1/4）…… 647
第844図　土坑68（1/30）・出土遺物（1/4）…… 648
第845図　土坑69（1/30）・出土遺物①（1/4）…… 649
第846図　土坑69出土遺物②（1/4・1/3）…… 650
第847図　土坑70（1/30）・出土遺物（1/4）…… 651
第848図　土坑71（1/30）・出土遺物（1/4）…… 651
第849図　土坑72（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）…… 651
第850図　土坑73（1/30）…… 652
第851図　土坑74（1/30）・出土遺物（1/4）…… 652
第852図　土坑75（1/30）・出土遺物（1/4）…… 652
第853図　土坑76（1/30）・出土遺物（1/4）…… 653

第854図　土坑77（1/30）・出土遺物（1/4）…… 653
第855図　土坑78（1/30）…… 654
第856図　土坑79（1/30）…… 654
第857図　土坑80（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）…… 654
第858図　土坑81（1/30）・出土遺物（1/4）…… 655
第859図　土坑82（1/30）…… 655
第860図　土坑83（1/30）…… 655
第861図　土坑84（1/30）…… 655
第862図　土坑85（1/30）・出土遺物（1/4）…… 656
第863図　土坑86（1/30）・出土遺物（1/4・1/2）…… 656
第864図　土坑87（1/30）・出土遺物（1/4）…… 657
第865図　土坑88（1/30）・出土遺物①（1/3）…… 657
第866図　土坑88出土遺物②（1/4）…… 658
第867図　土坑89（1/30）…… 658
第868図　土坑90（1/30）…… 658
第869図　土坑90出土遺物（1/4）…… 659
第870図　土坑91（1/30）・出土遺物（1/4）…… 659
第871図　土坑92（1/30）…… 659
第872図　土坑93（1/30）…… 660
第873図　土坑94（1/30）…… 660
第874図　土坑95（1/30）・出土遺物（1/4・1/6）…… 661
第875図　土坑96（1/30）…… 662
第876図　土坑97（1/30）・出土遺物（1/4）…… 662
第877図　土坑98（1/30）…… 663
第878図　土坑99（1/30）・出土遺物（1/4）…… 663
第879図　土坑100（1/30）…… 664
第880図　土坑101（1/30）…… 664
第881図　土坑102（1/30）・出土遺物（1/4）…… 664
第882図　土坑103（1/30）・出土遺物（1/4）…… 664
第883図　土坑104（1/30）…… 665
第884図　土坑105（1/30）…… 665
第885図　土坑106（1/30）・出土遺物（1/4）…… 665
第886図　土坑107（1/30）…… 666
第887図　土坑108（1/30）…… 666
第888図　土坑109（1/30）…… 666
第889図　溝１（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）…… 667
第890図　溝２（1/30）…… 667
第891図　溝３（1/30）・出土遺物（1/4）…… 668
第892図　溝４（1/30）・出土遺物（1/4）…… 668
第893図　溝５（1/30）・出土遺物①（1/2）…… 668
第894図　溝５出土遺物②（1/4）…… 669
第895図　溝６（1/30）・出土遺物（1/4）…… 670
第896図　溝７（1/30）・出土遺物（1/4）…… 670
第897図　溝８（1/30）・出土遺物①（1/4）…… 671
第898図　溝８出土遺物②（1/4）…… 672
第899図　溝８出土遺物③（1/4・1/2）…… 673
第900図　溝８出土遺物④（1/3）…… 674
第901図　溝９（1/30）・出土遺物（1/4・1/2）…… 674
第902図　溝10（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）…… 675
第903図　溝11（1/30・1/60）・出土遺物①（1/3）…… 676
第904図　溝11出土遺物②（1/4）…… 677
第905図　溝11出土遺物③（1/4・1/2）…… 678
第906図　溝12（1/30）・出土遺物（1/4）…… 678
第907図　溝12出土遺物（1/2）…… 679
第908図　溝13（1/30）・出土遺物（1/4）…… 679
第909図　溝14出土遺物（1/4）…… 680
第910図　溝15出土遺物（1/4）…… 680
第911図　溝16出土遺物（1/4）…… 680
第912図　低位部溝群断面図①（1/60）…… 681
第913図　低位部溝群断面図②（1/80）…… 682
第914図　低位部溝群断面図③（1/80）…… 682
第915図　溝21（1/30）・出土遺物（1/4）…… 683
第916図　溝22出土遺物（1/4）…… 683
第917図　低位部溝群断面図④（1/60）…… 684
第918図　溝23（1/30）・出土遺物（1/4）…… 684
第919図　溝25出土遺物（1/4）…… 684
第920図　河道１断面図①（1/80）…… 685
第921図　河道１断面図②（1/60）
・出土遺物①（1/4）…… 686
第922図　河道１出土遺物②（1/2・1/3）…… 687
第923図　河道１断面図③（1/60）…… 688
第924図　河道１出土遺物③（1/4）…… 689
第925図　河道１出土遺物④（1/4）…… 690
第926図　河道１出土遺物⑤（1/4）…… 691
第927図　河道１出土遺物⑥（1/4）…… 692
第928図　河道１出土遺物⑦（1/4・1/2）…… 693
第929図　たわみ１（1/30）・出土遺物（1/4）…… 694
第930図　たわみ２（1/30）・出土遺物（1/3）…… 694
第931図　柱穴１～５出土遺物（1/4）…… 695
第932図　柱穴６～12出土遺物（1/4・1/3）…… 696
第933図　低位部トレンチ断面図（1/60）…… 697
第934図　低位部トレンチ出土縄文土器（1/4）…… 697
第935図　その他の出土遺物＜弥生時代①＞（1/4）…… 697
第936図　その他の出土遺物＜弥生時代②＞（1/4）…… 698
第937図　その他の出土遺物＜弥生時代③＞
（1/4・1/3・1/1・1/2）…… 699
第938図　その他の出土遺物＜弥生時代④＞
（1/2・1/3）…… 700
第939図　古墳時代遺構全体図①（1/2,500）…… 701
第940図　古墳時代遺構全体図②（1/500）…… 702
第941図　古墳時代遺構全体図③（1/300）…… 703･704
第942図　古墳時代遺構全体図④（1/500）…… 705
第943図　古墳時代遺構全体図⑤（1/500）…… 706
第944図　竪穴住居38（1/60）…… 707
第945図　竪穴住居39（1/60）・Ｐ３（1/30）…… 708
第946図　竪穴住居39出土遺物（1/4・1/3）…… 709
第947図　竪穴住居40（1/60）・出土遺物（1/3）…… 710
第948図　竪穴住居41（1/60）・出土遺物（1/4）…… 711
第949図　竪穴住居42（1/60）・Ｐ８（1/30）
・出土遺物①（1/3）…… 712
第950図　竪穴住居42出土遺物②（1/4）…… 713
第951図　竪穴住居43（1/60）…… 714
第952図　竪穴住居44（1/60）…… 714
第953図　竪穴住居44出土遺物（1/4・1/3・1/6）…… 715

第954図　竪穴住居45～47（1/60）…… 716
第955図　竪穴住居45断面図（1/60）
・出土遺物①（1/3・1/1）…… 717
第956図　竪穴住居45出土遺物②（1/4）…… 718
第957図　竪穴住居45古（1/60）…… 719
第958図　竪穴住居47（1/60）・出土遺物①（1/4）…… 720
第959図　竪穴住居47出土遺物②（1/3）…… 721
第960図　竪穴住居48（1/60）・出土遺物（1/4）…… 721
第961図　竪穴住居49（1/60）・出土遺物（1/4）…… 722
第962図　竪穴住居50・51（1/60）…… 723
第963図　竪穴住居50出土遺物（1/4・1/3）…… 724
第964図　竪穴住居51断面図（1/60）…… 724
第965図　竪穴住居52（1/60）・出土遺物（1/4・1/3）… 725
第966図　竪穴住居53新（1/60・1/30）…… 726
第967図　竪穴住居53古（1/60）…… 727
第968図　竪穴住居53出土遺物（1/4・1/3）…… 728
第969図　竪穴住居54炭化材出土状況（1/60）…… 728
第970図　竪穴住居54・55（1/60・1/30）…… 729
第971図　竪穴住居54出土遺物①（1/4）…… 730
第972図　竪穴住居54出土遺物②（1/3）…… 731
第973図　竪穴住居55（1/60）…… 732
第974図　竪穴住居55柱穴断面図（1/30）・P11（1/30）
・出土遺物（1/4・1/3）…… 733
第975図　竪穴住居56上面遺物出土状況（1/60）…… 734
第976図　竪穴住居56完掘状況（1/60）…… 735
第977図　竪穴住居56出土遺物①（1/4）…… 736
第978図　竪穴住居56出土遺物②（1/4）…… 737
第979図　竪穴住居56出土遺物③（1/4・1/3・1/6）…… 738
第980図　竪穴住居57（1/60）・P３（1/30）…… 739
第981図　竪穴住居57出土遺物（1/4・1/3・1/6）…… 740
第982図　竪穴住居58（1/60・1/30）…… 741
第983図　竪穴住居58カマド（1/20）…… 742
第984図　竪穴住居58出土遺物（1/4・1/3）…… 743
第985図　竪穴住居59（1/60・1/30）
・出土遺物（1/4）…… 744
第986図　竪穴住居60（1/60）・P４（1/30）
・出土遺物（1/4）…… 745
第987図　竪穴住居61（1/60）…… 746
第988図　竪穴住居62（1/60）
・出土遺物（1/4・1/3・1/1）…… 747
第989図　竪穴住居63新（1/60）…… 748
第990図　竪穴住居63古（1/60）
・出土遺物（1/4・1/3・1/6）…… 749
第991図　竪穴住居64（1/60）・出土遺物①（1/3）…… 750
第992図　竪穴住居64出土遺物②（1/4）…… 751
第993図　竪穴住居64出土遺物③（1/4）…… 752
第994図　竪穴住居65（1/60）・出土遺物（1/4）…… 752
第995図　掘立柱建物13（1/60）…… 753
第996図　掘立柱建物14（1/60）…… 753
第997図　掘立柱建物15（1/60）…… 754
第998図　掘立柱建物15 P３～５（1/30）
・出土遺物（1/4・1/3）…… 755
第999図　掘立柱建物16・17（1/60）…… 756
第1000図　掘立柱建物18（1/60）…… 757
第1001図　掘立柱建物19（1/60）…… 758
第1002図　掘立柱建物20（1/60）…… 759
第1003図　掘立柱建物21（1/60）…… 759
第1004図　掘立柱建物22（1/60）…… 760
第1005図　掘立柱建物23（1/60）…… 760
第1006図　掘立柱建物24（1/60）…… 761
第1007図　掘立柱建物25（1/60）…… 761
第1008図　掘立柱建物26（1/60）…… 762
第1009図　掘立柱建物27（1/60）・出土遺物（1/4）…… 762
第1010図　井戸２（1/30）・出土遺物①（1/3）…… 763
第1011図　井戸２出土遺物②（1/4）…… 764
第1012図　井戸２出土遺物③（1/4）…… 765
第1013図　井戸３（1/30）・出土遺物（1/4）…… 766
第1014図　井戸４（1/30）・出土遺物（1/4）…… 766
第1015図　土坑110（1/30）・出土遺物（1/4）…… 767
第1016図　土坑111（1/30）・出土遺物（1/4）…… 767
第1017図　土坑112（1/30）・出土遺物（1/4）…… 768
第1018図　土坑113（1/30）・出土遺物①（1/4）…… 769
第1019図　土坑113出土遺物②（1/4）…… 770
第1020図　土坑114（1/30）…… 770
第1021図　溝27（1/30）・出土遺物（1/4）…… 771
第1022図　溝28（1/30）…… 771
第1023図　溝28出土遺物①（1/4）…… 772
第1024図　溝28出土遺物②（1/4・1/3）…… 773
第1025図　溝29（1/60）…… 774
第1026図　溝29出土遺物①（1/4）…… 775
第1027図　溝29出土遺物②（1/4）…… 776
第1028図　溝29出土遺物③（1/4）…… 776
第1029図　溝29出土遺物④（1/4）…… 777
第1030図　溝29出土遺物⑤（1/4・1/3・1/6）…… 778
第1031図　溝30（1/60）…… 779
第1032図　溝30出土遺物①（1/4）…… 780
第1033図　溝30出土遺物②（1/4・1/3）…… 781
第1034図　溝30出土遺物③（1/4）…… 782
第1035図　溝30出土遺物④（1/4）…… 783
第1036図　溝30出土遺物⑤（1/4）…… 784
第1037図　溝31（1/30）・出土遺物（1/4）…… 785
第1038図　溝32（1/30）…… 786
第1039図　溝33（1/30）…… 786
第1040図　溝34（1/30）・出土遺物（1/4）…… 786
第1041図　溝35断面図①（1/30）…… 787
第1042図　溝35出土遺物①（1/4）…… 788
第1043図　溝35出土遺物②（1/4）…… 789
第1044図　溝35出土遺物③（1/4）…… 790
第1045図　溝35出土遺物④（1/4）…… 791
第1046図　溝35出土遺物⑤（1/3）…… 792
第1047図　溝35断面図②（1/30）・出土遺物⑥（1/4）… 793
第1048図　溝35出土遺物⑦（1/4・1/3）…… 794
第1049図　溝36（1/30）…… 794
第1050図　溝37（1/30）・出土遺物（1/4）…… 795

第1051図　溝38（1/30）…… 795
第1052図　溝39出土遺物（1/4）…… 795
第1053図　溝40（1/30）・出土遺物（1/4）…… 795
第1054図　溝41出土遺物（1/4）…… 795
第1055図　溝42（1/200・1/30）・出土遺物（1/4）…… 796
第1056図　河道２出土遺物①（1/4）…… 797
第1057図　河道２出土遺物②（1/4）…… 798
第1058図　河道２出土遺物③（1/4）…… 798
第1059図　たわみ３（1/60）…… 799
第1060図　柱穴14（1/30）・出土遺物（1/4）…… 799
第1061図　柱穴15～18出土遺物（1/4）…… 800
第1062図　その他の出土遺物＜古墳時代＞
（1/4・1/1）…… 800
第1063図　古代遺構全体図（1/2,500）…… 801
第1064図　溝43～46（1/300・1/60）…… 802
第1065図　溝43（1/30）・出土遺物（1/3）…… 802
第1066図　溝44（1/30）…… 802
第1067図　溝45（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）…… 803
第1068図　溝46（1/30）…… 803
第1069図　たわみ４（1/60）・出土遺物①（1/4）…… 804
第1070図　たわみ４出土遺物②（1/4・1/3）…… 805
第1071図　柱穴19出土遺物（1/4）…… 806
第1072図　その他の出土遺物＜古代①＞（1/4）…… 806
第1073図　その他の出土遺物＜古代②＞（1/4）…… 807
第1074図　中世遺構全体図①（1/2,500）…… 808
第1075図　中世遺構全体図②（1/300）…… 809･810
第1076図　掘立柱建物28（1/60）・出土遺物（1/4）…… 811
第1077図　掘立柱建物29（1/60）・出土遺物（1/4）…… 812
第1078図　掘立柱建物30（1/60）
・出土遺物（1/4・1/3）…… 813
第1079図　柱穴列１（1/60）・出土遺物（1/4）…… 814
第1080図　柱穴列２（1/60）…… 814
第1081図　墓１（1/30）…… 815
第1082図　墓２（1/30）…… 815
第1083図　墓３（1/30）…… 815
第1084図　墓４（1/30）…… 816
第1085図　土坑115（1/30）…… 816
第1086図　土坑116（1/30）…… 816
第1087図　土坑117（1/30）…… 817
第1088図　土坑118・119（1/30）・土坑119出土遺物
（1/3・1/2）…… 817
第1089図　土坑120（1/30）・出土遺物（1/4）…… 818
第1090図　土坑121（1/30）…… 818
第1091図　土坑122（1/30）・出土遺物（1/4）…… 818
第1092図　土坑123（1/30）…… 819
第1093図　土坑124（1/30）・出土遺物（1/3）…… 819
第1094図　土坑125（1/30）…… 820
第1095図　土坑126（1/60）…… 820
第1096図　土坑127（1/30）…… 820
第1097図　土坑128（1/30）…… 820
第1098図　溝47・48（1/60）・出土遺物（1/4・1/3）… 821
第1099図　溝49・50（1/60）・出土遺物（1/4・1/2）… 821
第1100図　溝51（1/40）・出土遺物（1/4・1/3）…… 822
第1101図　溝52（1/100・1/30）…… 823
第1102図　溝52出土遺物（1/3）…… 824
第1103図　溝53（1/30）・出土遺物（1/4）…… 824
第1104図　溝54（1/30）・出土遺物（1/4）…… 824
第1105図　素掘溝群１（1/60）・出土遺物（1/4・1/3）825
第1106図　素掘溝群２（1/60）・出土遺物（1/4）…… 826
第1107図　河道３出土遺物（1/4・1/3）…… 826
第1108図　河道３（1/60）…… 827
第1109図　たわみ５出土遺物（1/4・1/3）…… 828
第1110図　柱穴20～23出土遺物（1/4）…… 828
第1111図　柱穴24（1/30）・出土遺物（1/4）…… 829
第1112図　柱穴25～36出土遺物（1/4・1/3）…… 829
第1113図　その他の出土遺物＜中世以降①＞
（1/4・1/3・1/2）…… 830
第1114図　その他の出土遺物＜中世以降②＞（1/3）… 831
第1115図　刑部遺跡変遷図（1/3,000）…… 833
＜第５章＞
第1116図　刑部遺跡の花粉化石群集 …… 837
第1117図　刑部遺跡の植物珪酸体分析結果 …… 840
第1118図　ＦＴ－ＩＲスペクトル …… 865
第1119図　暦年較正結果 …… 870
第1120図　暦年較正結果 …… 873
第1121図　花仙山産碧玉原石のＸ線励起蛍光Ｘ線分析
スペクトル …… 875
第1122図　弥生（続縄文）時代の碧玉製、緑色凝灰岩
玉類の原材使用分布圏及び碧玉、碧玉様岩
の原産地 …… 876
第1123図－１　刑部遺跡出土碧玉製管玉№１番（126731）
の蛍光Ｘ線スペクトル …… 883
第1123図－２　刑部遺跡出土碧玉製管玉№２番（126732）
の蛍光Ｘ線スペクトル …… 883
第1123図－３　刑部遺跡出土碧玉製管玉№３番（126733）
の蛍光Ｘ線スペクトル …… 884
第1123図－４　刑部遺跡出土碧玉製管玉№４番（126734）
の蛍光Ｘ線スペクトル …… 884
第1123図－５　刑部遺跡出土碧玉製管玉№５番（126735）
の蛍光Ｘ線スペクトル …… 884
第1123図－６　刑部遺跡出土碧玉製管玉№６番（126736）
の蛍光Ｘ線スペクトル …… 884
第1123図－７　百間川原尾島遺跡出土管玉Ｊ６番（127011）
の蛍光Ｘ線スペクトル …… 885
第1123図－８　百間川原尾島遺跡出土管玉（127012）の
蛍光Ｘ線スペクトル …… 885
第1123図－９　高塚遺跡出土管玉Ｓ31番（127013）の
蛍光Ｘ線スペクトル …… 885
第1123図－10　高塚遺跡出土管玉Ｓ32番（127014）の
蛍光Ｘ線スペクトル …… 885
第1123図－11　高塚遺跡出土管玉Ｓ120番（127015）の
蛍光Ｘ線スペクトル …… 886
第1123図－12　高塚遺跡出土管玉Ｓ129番（127016）の
蛍光Ｘ線スペクトル …… 886

第1123図－13　足守川矢部南向遺跡出土管玉Ｓ49番（127017）の蛍光Ｘ線スペクトル …… 886
第1124図　碧玉原石のESRスペクトル（花仙山、玉谷、猿八、土岐）…… 887
第1125図－１　碧玉原石の信号（Ⅲ）のESRスペクトル（１）…… 887
第1125図－２　碧玉原石の信号（Ⅲ）のESRスペクトル（２）…… 887
第1125図－３　碧玉原石の信号（Ⅲ）のESRスペクトル（３）…… 887
第1125図－４　碧玉原石の信号（Ⅲ）のESRスペクトル（４）…… 888
第1126図－１　刑部、神明、百間川原尾島、高塚遺跡出土管玉のESR信号（Ⅲ）のスペクトル … 888
第1126図－２　高塚、足守川矢部南向遺跡出土管玉のESR信号（Ⅲ）のスペクトル …… 888
第1127図－１　花仙山産碧玉の各温度１時間昇温後のESR信号（Ⅲ）のスペクトル（１）（スペクトルの数字は加熱温度）…… 889
第1127図－２　花仙山産碧玉の各温度１時間昇温後のESR信号（Ⅲ）のスペクトル（２）（スペクトルの数字は加熱温度）…… 889
第1128図　ヒスイ製玉類使用遺跡分布圏及びヒスイ産地・結晶片岩様緑色（クロム雲母）岩玉類使用遺跡分布圏 …… 892
第1129図　ヒスイ原石の元素比値Zr/Sr対Sr/Feの分布及び分布範囲 …… 894
第1130図　ヒスイ原石の元素比値Ca/Si対Sr/Feの分布及び分布範囲 …… 894
第1131図　ヒスイ原石の元素比値Na/Si対Mg/Siの分布及び分布範囲 …… 895
第1132図　刑部遺跡出土小勾玉の元素比値Zr/Sr対Sr/Feの分布 …… 895
第1133図　刑部遺跡出土小勾玉の元素比値Ca/Si対Sr/Feの分布 …… 896
第1134図　刑部遺跡出土小勾玉の元素比値Na/Si対Mg/Siの分布 …… 896
第1135図　刑部遺跡出土硬玉製小勾玉：126737-1表側分析の蛍光Ｘ線スペクトル …… 896
第1136図　刑部遺跡出土硬玉製小勾玉：126737-2裏側分析の蛍光Ｘ線スペクトル …… 896
第1137図　ヒスイ原石のESRスペクトル（１）…… 898
第1138図　ヒスイ原石のESRスペクトル（２）…… 898
第1139図　ヒスイ原石のESRスペクトル（３）…… 898
第1140図　刑部遺跡出土硬玉製小勾玉のESRスペクトル …… 898
第1141図　銅鏃 …… 903
第1142図　銅鏡 …… 903
第1143図　蛍光Ｘ線スペクトル（左：銅鏃、右：銅鏡）…… 904
第1144図　銅鏡の試料採取前後での変化 …… 904
第1145図　鉛同位体比を用いた産地推定の概念図（Ａ式図）…… 905
第1146図　鉛同位体比を用いた産地推定の概念図（Ｂ式図）…… 905
第1147図　刑部遺跡から出土した銅鏃と銅鏡の鉛同位体比分布（Ａ式図）…… 906
第1148図　刑部遺跡から出土した銅鏃と銅鏡の鉛同位体比分布（Ｂ式図）…… 906
第1149図　弥生時代後期銅鏃が示す鉛同位体比分布（Ａ式図）…… 907
第1150図　弥生時代後期銅鏃が示す鉛同位体比分布（Ｂ式図）…… 907
第1151図　第1149図の拡大図（Ａ式図）…… 907
第1152図　第1150図の拡大図（Ｂ式図）…… 907
第1153図　弥生時代後期銅鏡が示す鉛同位体比分布（Ａ式図）…… 908
第1154図　弥生時代後期銅鏡が示す鉛同位体比分布（Ｂ式図）…… 908
第1155図　古墳時代の銅鏡が示す鉛同位体比分布（Ａ式図）…… 908
第1156図　古墳時代の銅鏡が示す鉛同位体比分布（Ｂ式図）…… 908
第1157図　鍛冶剥片３層分離型模式図 …… 917
第1158図　Ｆｅ－Ｏ系平衡状態図 …… 917
第1159図　神明遺跡と備中国分寺出土瓦の比較 …… 930
第1160図　刑部遺跡出土須恵器の産地推定 …… 930
第1161図　刑部遺跡出土褐色土器の胎土比較 …… 930
第1162図　遺跡出土粘土塊と土器の比較 …… 930
第1163図　神明遺跡出土須恵器の産地推定 …… 930
第1164図　神明遺跡出土須恵器の産地推定 …… 930
第1165図　ATOS CompactScan5M system…… 932
第1166図　測定原理模式図 …… 932
第1167図－１　三次元形状計測図（1/2）…… 934
第1167図－２　三次元形状計測図（1/2）…… 935
第1167図－３　三次元形状計測図（1/2）…… 936
第1167図－４　三次元形状計測図（1/2）…… 937
第1168図　三次元形状計測と実物観察で確認できた鋳造欠陥（1/4）…… 937
第1169図　疑似光源の水平軸の位置を変えたＡ面鈕部の文様観察 …… 938

＜第６章＞

第1170図　総社平野旧河道想定図（約1/20,000）…… 939
第1171図　神明遺跡・刑部遺跡主要遺構変遷図（1/5,000）…… 941
第1172図　神明遺跡・高塚遺跡・妹（蓮池尻遺跡）銅鐸出土地周辺遺跡分布図 …… 948
第1173図　銅鐸埋納坑調査例（1/30）…… 948
第1174図　埋納の方向性（鐸身をＸ軸として）…… 948
第1175図　銅鐸形土製品類例（1/4）…… 949
第1176図　高塚遺跡弥生Ⅰ・Ⅱ期主要遺構変遷図 …… 950
第1177図　神明銅鐸の鉛同位体比（Ａ式図）…… 959
第1178図　神明銅鐸のＸ線透過写真① …… 961
第1179図　神明銅鐸のＸ線透過写真② …… 962

第1180図　神明銅鐸のＸ線透過写真③ …… 963
第1181図　神明銅鐸のＸ線ＣＴ撮像 …… 964
第1182図　土器様相１（1/10）…… 965
第1183図　土器様相２（1/10）…… 966
第1184図　土器様相３（1/10）…… 967
第1185図　外来系土器（1/8） …… 970
第1186図　神明遺跡出土の粘土帯系土器（1/8） …… 971
第1187図　岡山県内出土の粘土帯土器及び粘土帯系土器（1/8） …… 972
第1188図　古墳時代前・中期の土器編年１（備中南部）（Ｓ＝1/16）…… 978
第1189図　古墳時代前・中期の土器編年２（備中南部）（Ｓ＝1/16）…… 979
第1190図　甑の底部穿孔の変化 …… 981
第1191図　外来系土器（刑部・神明遺跡：古墳時代前期（１～５期））（1/8） …… 986
第1192図　神明遺跡出土石鏃の計測値 …… 989
第1193図　刑部遺跡出土石鏃の計測値 …… 990
第1194図　総社－足守川流域における打製石庖丁の石材比率（後期）…… 991
第1195図　総社－足守川流域周辺における泥質岩（ペルム期）の分布 …… 991
第1196図　分銅形土製品の分類（1/4） …… 993
第1197図　刑部・神明遺跡の分銅形土製品（1/4） …… 994
第1198図　各地域の分銅形土製品 …… 995
第1199図　各地域のⅠ類分銅形土製品 …… 995
第1200図　上屋のある土坑分類図（1/200） …… 997
第1201図　弥生時代後期の上屋を持つ土坑の規模 …… 998
第1202図　岡山県内出土の弥生時代～古墳時代の鉄鎌 1001
第1203図　カマド模式図 …… 1005
第1204図　８期の竪穴住居規模 …… 1006
第1205図　９期の竪穴住居規模 …… 1006
第1206図　10・11期の竪穴住居規模 …… 1006
第1207図　カマドを持つ竪穴住居の面積別の数 …… 1007
第1208図　８期のカマドを持つ竪穴住居（1/150） … 1008
第1209図　９期のカマドを持つ竪穴住居（1/150） … 1008
第1210図　10・11期のカマドを持つ竪穴住居（1/150） …… 1008
第1211図　馬の頭蓋骨部分名称模式図 …… 1010
第1212図　馬の頭蓋と下顎骨出土状況（縮尺任意）… 1011
第1213図　主要遺跡と平城系軒瓦の分布（1/60,000）…… 1014
第1214図　Ｒ180号ＢＰ関連遺跡とその周辺（1/30,000）…… 1015
第1215図　神明遺跡の古代遺構と条里の方位 …… 1017
第1216図　総社条里と神明遺跡の仮想条里（1/10,000）…… 1019

写 真 目 次

（第１分冊）

＜第１章＞

写真１　試掘・確認調査実施状況（Ｈ22－Ｔ９）……２
写真２　銅鐸埋納坑調査に関する現地指導（難波氏・吉田氏）……８
写真３　銅鐸埋納坑の高解像度写真撮影……８
写真４　銅鐸埋納坑の三次元計測……８
写真５　銅鐸埋納坑の立体剥ぎ取り……８
写真６　平成28年度埋蔵文化財保護調査指導会 …… 11
写真７　鈴木氏による石材鑑定…… 11
写真８　神明遺跡現地説明会（Ｈ26. ９.20）…… 13

＜第３章　神明遺跡＞

写真９　竪穴住居１土器出土状況（南西から）…… 34
写真10　竪穴住居２土器出土状況（北東から）…… 37
写真11　Ｃ５出土状況（北から）…… 49
写真12　竪穴住居13（北西から）…… 67
写真13　竪穴住居13（東から）…… 67
写真14　微高地東斜面周辺調査風景（北から）…… 72
写真15　竪穴住居18－Ｐ１（南東から）…… 75
写真16　竪穴住居20調査風景（南から）…… 78
写真17　竪穴住居35（南から）…… 115
写真18　竪穴住居37調査風景（南東から）…… 117
写真19　微高地東西ａ断面（北西から）…… 140
写真20　銅鐸埋納坑調査風景（北から）…… 141
写真21　井戸１（南から）…… 146
写真22　長頸壺955・高杯1000出土状況（北西から）… 162
写真23　長頸壺956出土状況（北から） …… 162
写真24　壺1204出土状況（南から）…… 195
写真25　土坑141土器出土状況（東から） …… 238
写真26　土坑142土器・粘土塊出土状況（西から） …… 240
写真27　土坑142粘土塊調査風景（北西から） …… 240
写真28　土坑178土器出土状況（北西から） …… 268
写真29　土坑213調査風景（北から） …… 292
写真30　溝９調査風景（南西から）…… 307
写真31　溝12土器出土状況（南西から）…… 318
写真32　溝12土器出土状況（東から）…… 318
写真33　たわみ２（北西から）…… 337
写真34　調査風景＜旧４区＞（東から）…… 359
写真35　竪穴住居54中央被熱面検出状況（南から）…… 370
写真36　竪穴住居69（南東から）…… 402
写真37　竪穴住居69調査風景（南から）…… 402
写真38　掘立柱建物４調査風景（西から）…… 411

写真39　甕2745出土状況（北西から）…… 414
写真40　馬上顎歯出土状況（南から）…… 429
写真41　古代の遺構検出状況＜旧１区＞（北東から）… 439
写真42　柱穴列11－Ｐ６（東から）…… 458
写真43　墓２調査風景（南から）…… 460
写真44　柱穴列20－Ｐ３（東から）…… 489
写真45　柱穴列20－Ｐ４（東から）…… 489
写真46　溝45Ｃ断面（西から）…… 501
写真47　溝45Ｄ断面（西から）…… 501
写真48　たわみ８（西から）…… 505
写真49　たわみ９堆積状況（南東から）…… 505

（第２分冊）
＜第４章　刑部遺跡＞
写真50　弥生時代の遺構検出状況＜旧３区＞
（南から）…… 515
写真51　竪穴住居２調査風景（南から）…… 525
写真52　竪穴住居３－Ｐ３（南東から）…… 534
写真53　竪穴住居７－Ｐ２（北から）…… 540
写真54　竪穴住居10－Ｐ３礎板痕跡（北西から）…… 551
写真55　竪穴住居10－Ｐ19礎板痕跡（北西から）…… 551
写真56　竪穴住居21・22検出状況（北から）…… 575
写真57　竪穴住居21中央炭散布状況（東から）…… 575
写真58　竪穴住居26調査風景（北から）…… 582
写真59　掘立柱建物５調査風景（西から）…… 603
写真60　土坑21遺物出土状況（西から）…… 624
写真61　壺672出土状況（南から）…… 658
写真62　古墳時代の遺構検出状況＜旧４区＞
（南東から）…… 701
写真63　竪穴住居44遺物出土状況（北東から）…… 715
写真64　竪穴住居55－Ｐ11遺物出土状況（北から）…… 733
写真65　竪穴住居56高床部（北東から）…… 734
写真66　竪穴住居56－Ｐ２柱材検出状況（南東から）… 735
写真67　竪穴住居57遺物出土状況（北東から）…… 740
写真68　甕1123出土状況（南から）…… 747
写真69　掘立柱建物15調査風景（西から）…… 755
写真70　井戸２（南東から）…… 763
写真71　土坑112粘土出土状況（東から）…… 768
写真72　土坑113遺物出土状況（南西から）…… 769
写真73　鹿肩胛骨 …… 781
写真74　溝42調査風景（東から）…… 796
写真75　刑部遺跡西端調査風景＜旧１区＞（東から）… 808
写真76　柱穴列１－Ｐ４（東から）…… 814
写真77　墓４調査風景（北から）…… 816
写真78　溝51遺物出土状況（南西から）…… 822
写真79　河道３中央トレンチ東端部北壁（南東から）… 827
写真80　柱穴26遺物出土状況（東から）…… 829
＜第５章＞
写真81　刑部遺跡の花粉化石 …… 842
写真82　刑部遺跡の植物珪酸体
（プラント・オパール）…… 843
写真83　円礫と淘汰が良い砂からなる自然堆積層 …… 844
写真84　銅鐸埋納坑の土　ベージュ色の角礫状の土を含む：
横約20㎝ …… 845
写真85　試料⑧採取個所 …… 846
写真86　試料①②採取個所 …… 846
写真87　試料③採取個所 …… 846
写真88　試料④採取個所 …… 846
写真89　試料⑤採取個所 …… 846
写真90　試料⑥採取個所 …… 847
写真91　試料⑦採取個所 …… 847
写真92　試料⑧薄片のスキャン像：横24㎜ …… 849
写真93　試料①薄片のスキャン像：横24㎜ …… 849
写真94　試料②薄片のスキャン像：横24㎜ …… 849
写真95　試料③薄片のスキャン像：横24㎜ …… 849
写真96　試料④薄片のスキャン像：横24㎜ …… 850
写真97　試料⑤薄片のスキャン像：横24㎜ …… 850
写真98　試料⑥薄片のスキャン像：横24㎜ …… 850
写真99　試料⑦薄片のスキャン像：横24㎜ …… 850
写真100　試料⑥薄片顕微鏡写真：横３㎜ …… 851
写真101　試料①薄片顕微鏡写真：横３㎜ …… 851
写真102　試料②薄片顕微鏡写真：横３㎜ …… 851
写真103　試料⑧薄片顕微鏡写真：横３㎜ …… 851
写真104　試料③薄片顕微鏡写真：横３㎜ …… 851
写真105　試料④薄片顕微鏡写真：横３㎜ …… 851
写真106　試料⑤薄片顕微鏡写真：横３㎜ …… 851
写真107　試料⑦薄片顕微鏡写真：横３㎜ …… 851
写真108　銅鐸埋納坑の基盤層（左：試料№１（褐色土層）、
右：試料№２（白色土層））…… 852
写真109　神明遺跡の木材・炭化材　Ⅰ …… 859
写真110　神明遺跡の木材・炭化材　Ⅱ …… 860
写真111　神明遺跡の木材・炭化材　Ⅲ …… 861
写真112　刑部遺跡の木材・炭化材 …… 862
写真113　試料 …… 866
写真114　分析試料 …… 868
写真115　分析試料 …… 871
写真116　分析対象遺物写真（数字は試料No.１・２は透過光
（エタノール浸漬）、３～５は落射光）…… 902
写真117　椀形鍛冶滓の顕微鏡組織 …… 919
写真118　含鉄鉄滓の顕微鏡組織・ＥＰＭＡ調査結果 … 920
写真119　鍛造剥片様遺物（鍛冶滓）の顕微鏡組織 …… 921
写真120　粒状滓（含鉄）・錆化鉄粒の顕微鏡組織 …… 922
写真121　木炭・椀形鍛冶滓の顕微鏡組織 …… 923
写真122　鉄塊系遺物の顕微鏡組織・
ＥＰＭＡ調査結果 …… 924
写真123　椀形鍛冶滓・含鉄鉄滓の顕微鏡組織 …… 925
写真124　計測作業風景 …… 937
＜第６章＞
写真125　竪穴住居69出土遺物 …… 1003

表目次

（第１分冊）

＜第１章＞

表１　調査一覧…… 10
表２　調査経過…… 10
表３　現地説明会（現地公開）一覧…… 13
表４　文化財保護法に基づく提出書類…… 14
表５　編年対比表…… 20

＜第３章　神明遺跡＞

表６　土坑142出土粘土一覧 …… 239
表７　神明遺跡弥生時代・古墳時代遺構消長表…… 509

（第２分冊）

＜第４章　刑部遺跡＞

表８　刑部遺跡弥生時代・古墳時代遺構消長表…… 832

＜第５章＞

表９　刑部遺跡の花粉分析結果…… 836
表10　刑部遺跡の植物珪酸体分析結果 …… 840
表11　分析対象一覧 …… 846
表12　分析対象 …… 853
表13　蛍光Ｘ線分析結果（mass%） …… 853
表14　試料一覧 …… 854
表15　神明遺跡における樹種同定結果 …… 856
表16　試料一覧 …… 857
表17　刑部遺跡における樹種同定結果 …… 857
表18　測定条件 …… 864
表19　放射性炭素年代測定及び暦年較正結果 …… 869
表20　放射性炭素年代測定及び暦年較正結果 …… 872
表21－１　各碧玉の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値 …… 878
表21－２　各原石産地不明碧玉玉類、玉材の遺物群の元素比の平均値と標準偏差値（１）…… 879
表21－３　各原石産地不明碧玉玉類、玉材の遺物群の元素比の平均値と標準偏差値（２）…… 880
表21－４　各原石産地不明碧玉玉類、玉材の遺物群の元素比の平均値と標準偏差値（３）…… 881
表22－１　刑部、神明遺跡出土管玉の元素比結果 …… 883
表22－２　百間川原尾島、高塚、足守川矢部南向遺跡出土管玉の元素比結果 …… 883
表23－１　刑部、神明遺跡出土碧玉製管玉の産地分析結果 …… 890
表23－２　百間川原尾島遺跡、高塚遺跡、足守川矢部南向遺跡出土管玉の産地分析結果 …… 890
表24　岡山県出土玉類の産地分析結果 …… 890
表25　ヒスイ製遺物の原石産地の判定基準（１）…… 893
表26　ヒスイ製遺物の原石産地の判定基準（２）…… 893
表27　刑部遺跡出土小勾玉の元素比の値の結果 …… 895
表28　刑部遺跡出土小勾玉の原材産地分析結果 …… 897
表29　分析対象一覧 …… 899
表30　半定量分析結果（mass%） …… 900
表31　銅鏃と銅鏡の鉛同位体比 …… 906
表32　出土遺物の調査結果のまとめ …… 917
表33　供試材の履歴と調査項目 …… 918
表34　供試材の化学組成 …… 918
表35　刑部遺跡・神明遺跡出土遺物の胎土分析結果（%） …… 927
表36　刑部遺跡・神明遺跡出土赤色顔料分析結果（%） …… 928

＜第６章＞

表37　県下の主な銅鐸 …… 947
表38　神明銅鐸の鉛同位体比 …… 960
表39　神明銅鐸の化学組成 …… 960
表40　編年対照表 …… 968
表41　神明遺跡出土の粘土帯系土器 …… 971
表42　岡山県内出土の粘土帯土器及び粘土帯系土器 … 973
表43　器種（形式）・型式分類一覧 …… 976
表44　古墳時代前・中期基準資料比較 …… 984
表45　古墳時代前・中期土器様式の変遷（備中南部）… 987
表46　神明遺跡出土石器一覧 …… 989
表47　刑部遺跡出土石器一覧 …… 990
表48　弥生時代後期の上屋を持つ土坑一覧 …… 999

（第３分冊）

表49　試掘・確認調査土器観察表 …… 1024
表50　試掘・確認調査石器・石製品観察表 …… 1024
表51　試掘・確認調査金属製品観察表 …… 1025
表52　試掘・確認調査土製品観察表 …… 1025
表53　試掘・確認調査瓦観察表 …… 1025
表54　神明遺跡竪穴住居一覧 …… 1026・1027
表55　神明遺跡掘立柱建物一覧 …… 1028
表56　神明遺跡柱穴列一覧 …… 1028
表57　神明遺跡土器棺一覧 …… 1028
表58　神明遺跡墓一覧 …… 1028
表59　神明遺跡銅鐸埋納坑一覧 …… 1028
表60　神明遺跡井戸一覧 …… 1029
表61　神明遺跡土坑一覧 …… 1029～1032
表62　神明遺跡溝一覧 …… 1032・1033
表63　神明遺跡たわみ一覧 …… 1033
表64　神明遺跡土器観察表 …… 1034～1079
表65　神明遺跡石器・石製品観察表 …… 1079～1082
表66　神明遺跡金属器・金属製品観察表 …… 1082～1084
表67　神明遺跡土製品観察表 …… 1084～1086
表68　神明遺跡木製品観察表 …… 1086

表69　神明遺跡玉類観察表 …… 1086・1087
表70　神明遺跡瓦観察表 …… 1087
表71　刑部遺跡竪穴住居一覧 …… 1088・1089
表72　刑部遺跡掘立柱建物一覧 …… 1090
表73　刑部遺跡柱穴列一覧 …… 1090
表74　刑部遺跡墓一覧 …… 1090
表75　刑部遺跡井戸一覧 …… 1090
表76　刑部遺跡土坑一覧 …… 1090～1092
表77　刑部遺跡溝一覧 …… 1092・1093
表78　刑部遺跡たわみ一覧 …… 1093
表79　刑部遺跡火処一覧 …… 1093
表80　刑部遺跡土器観察表 …… 1094～1117
表81　刑部遺跡石器・石製品観察表 …… 1117～1119
表82　刑部遺跡金属器・金属製品観察表 …… 1119・1120
表83　刑部遺跡土製品観察表 …… 1120・1121
表84　刑部遺跡木製品観察表 …… 1121
表85　刑部遺跡玉類観察表 …… 1121・1122
表86　刑部遺跡瓦観察表 …… 1122
表87　神明遺跡新旧遺構対照表 …… 1123～1125
表88　刑部遺跡新旧遺構対照表 …… 1125・1126

図版目次

（第１分冊）

巻頭図版１　遺跡遠景（上が北）

＜神明遺跡＞

巻頭図版２　遺跡西半全景（東から）
巻頭図版３　１　銅鐸埋納坑土層断面（北から）
　２　銅鐸出土状況（南から）
巻頭図版４　銅鐸Ａ面
巻頭図版５　銅鐸Ｂ面
巻頭図版６　１　竪穴住居32（南から）
　２　土坑142粘土出土状況（南から）
巻頭図版７　１　古墳時代　竪穴住居検出状況（東から）
　２　古代　掘立柱建物検出状況（南東から）
巻頭図版８　１　竪穴住居32出土遺物
　２　たわみ６出土遺物

＜刑部遺跡＞

巻頭図版９　遺跡全景（西から）
巻頭図版10　１　竪穴住居８（北西から）
　２　竪穴住居37（北西から）
巻頭図版11　１　竪穴住居58（東から）
　２　古墳時代　竪穴住居検出状況（北東から）
巻頭図版12　１　河道１出土　土器
　２　竪穴住居37出土　破鏡
　３　竪穴住居８出土　玉類
　４　竪穴住居39出土　曲刃鎌
　５　たわみ４出土　緑釉緑彩陶器

（第３分冊）

＜神明遺跡＞

図版１　１　竪穴住居１（北東から）
　２　竪穴住居２（北から）
　３　竪穴住居３（南東から）
図版２　１　竪穴住居５（北から）
　２　竪穴住居６（西から）
　３　竪穴住居７（北から）
図版３　１　竪穴住居７～９（北から）
　２　竪穴住居10（北から）
　３　竪穴住居11（南から）
図版４　１　竪穴住居12（南西から）
　２　竪穴住居13（北西から）
　３　竪穴住居14（北から）
図版５　１　竪穴住居15（南西から）
　２　竪穴住居16（北から）
　３　竪穴住居17（北から）
図版６　１　竪穴住居18（北から）
　２　竪穴住居19（南から）
　３　竪穴住居20・21（南から）
図版７　１　竪穴住居22（北から）
　２　竪穴住居23（北から）
　３　竪穴住居24新（西から）
図版８　１　竪穴住居24古（西から）
　２　竪穴住居19～24（北西から）
　３　竪穴住居25（北東から）
図版９　１　竪穴住居26（西から）
　２　竪穴住居27（南東から）
　３　竪穴住居28（南から）
図版10　１　竪穴住居29・63（東から）
　２　竪穴住居30（南から）
　３　竪穴住居31（南から）
図版11　１　竪穴住居32古（南から）
　２　竪穴住居33（西から）
　３　竪穴住居34（南から）
図版12　１　竪穴住居35（南から）
　２　竪穴住居36（西から）
　３　竪穴住居37（南東から）
図版13　１　竪穴住居38（南から）
　２　竪穴住居39（南から）
　３　竪穴住居40（西から）
図版14　１　竪穴住居41（東から）
　２　竪穴住居42（東から）
　３　竪穴住居43（東から）
図版15　１　竪穴住居44（西から）
　２　竪穴住居45（西から）

3　竪穴住居46～48（南から）
図版16　1　竪穴住居49（南西から）
2　竪穴住居50（南西から）
3　竪穴住居51（南東から）
図版17　1　竪穴住居52（南から）
2　竪穴住居53（南西から）
3　竪穴住居53カマド（南西から）
図版18　1　竪穴住居54（南東から）
2　竪穴住居52～54（南西から）
3　竪穴住居55（東から）
図版19　1　竪穴住居56（北西から）
2　竪穴住居57炭化材検出状況（南東から）
3　竪穴住居57（南東から）
図版20　1　竪穴住居57カマド（北東から）
2　竪穴住居58（南東から）
3　竪穴住居59（西から）
図版21　1　竪穴住居59カマド（西から）
2　竪穴住居60（南から）
3　竪穴住居60屋内土坑（南から）
図版22　1　竪穴住居60カマド（南から）
2　竪穴住居61（南から）
3　竪穴住居61カマド（南から）
図版23　1　竪穴住居62（南から）
2　竪穴住居64（南から）
3　竪穴住居64カマド（南から）
図版24　1　竪穴住居65（北東から）
2　竪穴住居65鍛冶関連遺物出土状況（南東から）
3　竪穴住居65カマド（南東から）
図版25　1　竪穴住居66（西から）
2　竪穴住居67（南東から）
3　竪穴住居67カマド（南東から）
図版26　1　竪穴住居68（南西から）
2　竪穴住居68カマド（南西から）
3　竪穴住居69（南から）
図版27　1　竪穴住居69カマド（南から）
2　竪穴住居69屋内貯蔵穴（南から）
3　竪穴住居70（南東から）
図版28　1　竪穴住居71（南東から）
2　竪穴住居72・73（南から）
3　竪穴住居74（北東から）
図版29　1　掘立柱建物１（北から）
2　掘立柱建物２（西から）
3　掘立柱建物３（北東から）
図版30　1　掘立柱建物４（西から）
2　掘立柱建物５（南から）
3　掘立柱建物６（南から）
図版31　1　掘立柱建物７（南から）
2　掘立柱建物８（南から）
3　掘立柱建物５～７（南西から）
図版32　1　掘立柱建物９（東から）
2　掘立柱建物10・柱穴列９（南西から）
3　掘立柱建物11（南から）
図版33　1　掘立柱建物12（南東から）
2　掘立柱建物13（南西から）
3　掘立柱建物14（北西から）
図版34　1　掘立柱建物16（北から）
2　掘立柱建物17（北から）
3　掘立柱建物18（南東から）
図版35　1　柱穴列１・２（西から）
2　柱穴列５（南から）
3　柱穴列11（北から）
図版36　1　柱穴列13（東から）
2　柱穴列19・20（北から）
3　柱穴列18（南西から）
4　柱穴列21・22（西から）
図版37　1　銅鐸出土地点（北西から）
2　銅鐸埋納坑土層断面①（北から）
3　銅鐸埋納坑土層断面②（東から）
4　銅鐸埋納坑完掘状況（北から）
5　銅鐸出土状況（南西から）
図版38　1　土器棺１（東から）
2　墓１（南東から）
3　墓２（南から）
図版39　1　墓３（南から）
2　墓４（北東から）
3　墓４土器出土状況（北西から）
図版40　1　井戸１（南から）
2　井戸２（南から）
3　井戸３（東から）
図版41　1　井戸３（東から）
2　土器溜まり１（南西から）
3　土器溜まり２（南から）
図版42　1　土坑１（南から）
2　土坑４（南から）
3　土坑５（南から）
図版43　1　土坑９（南東から）
2　土坑13・14（西から）
3　土坑16（北から）
図版44　1　土坑18（東から）
2　土坑19（北から）
3　土坑20（南から）
図版45　1　土坑27（北東から）
2　土坑27土器出土状況（東から）
3　土坑29・30（北西から）
図版46　1　土坑33土器出土状況（北東から）
2　土坑48（東から）
3　土坑50（東から）
図版47　1　土坑51（北西から）
2　土坑53（西から）
3　土坑55（西から）
図版48　1　土坑56（東から）
2　土坑66（北から）
3　土坑69（南から）
図版49　1　土坑72（南西から）

2　土坑80（南から）
3　土坑83（北から）
図版50　1　土坑85（東から）
2　土坑86（西から）
3　土坑87（北西から）
図版51　1　土坑93（南から）
2　土坑97（北西から）
3　土坑107（南東から）
図版52　1　土坑114（南から）
2　土坑115（南東から）
3　土坑117（南から）
図版53　1　土坑118（東から）
2　土坑127（北から）
3　土坑129（南西から）
図版54　1　土坑130（南西から）
2　土坑138（東から）
3　土坑139（南東から）
図版55　1　土坑142上層土器出土状況（東から）
2　土坑142粘土出土状況（東から）
3　土坑142（東から）
図版56　1　土坑152（南から）
2　土坑163（南西から）
3　土坑173（南西から）
図版57　1　土坑176（南東から）
2　土坑178（北西から）
3　土坑179（北東から）
図版58　1　土坑181（南から）
2　土坑186（北東から）
3　土坑188（北東から）
図版59　1　土坑190（北西から）
2　土坑191（南東から）
3　土坑198（南から）
図版60　1　土坑205（北西から）
2　土坑212（南東から）
3　土坑213（東から）
図版61　1　土坑214（南から）
2　土坑215（北西から）
3　土坑216（北から）
図版62　1　土坑217（南から）
2　土坑217（南から）
3　土坑219（東から）
図版63　1　土坑223（東から）
2　土坑224炭検出状況（南から）
3　土坑224（南から）
図版64　1　土坑225（北東から）
2　土坑226（南から）
3　土坑234（南西から）
図版65　1　溝１（南東から）
2　溝６（北西から）
3　溝８（南西から）
図版66　1　溝９（南西から）
2　溝９上層土器出土状況（南西から）
3　溝10（南東から）
図版67　1　溝11・12（北から）
2　溝13（東から）
3　溝15（北から）
図版68　1　溝17（南東から）
2　溝18（北から）
3　溝19（東から）
図版69　1　溝21（南から）
2　溝22馬の上顎歯出土状況（北から）
3　溝22土器出土状況（南東から）
図版70　1　溝23（西から）
2　溝24・32（南西から）
3　溝29・30（北から）
図版71　1　溝33（東から）
2　溝35（南西から）
3　溝35・37（南から）
図版72　1　溝39（西から）
2　溝45（北から）
3　溝47（南西から）
図版73　1　河道１・５（北西から）
2　河道１西肩土器出土状況（北から）
3　河道１断面（西から）
図版74　1　河道２（北西から）
2　河道２（北東から）
3　河道３北壁断面（南から）
図版75　1　たわみ１（北東から）
2　たわみ３（北から）
3　たわみ５（南から）
図版76　1　たわみ６（南東から）
2　たわみ８（北西から）
3　素掘溝群１・２（北から）
図版77　土器１（弥生土器）
図版78　土器２（弥生土器）
図版79　土器３（弥生土器）
図版80　土器４（弥生土器）
図版81　土器５（弥生土器）
図版82　土器６（弥生土器）
図版83　土器７（弥生土器）
図版84　土器８（弥生土器）
図版85　土器９（弥生土器）
図版86　土器10（弥生土器）
図版87　土器11（弥生土器）
図版88　土器12（弥生土器）
図版89　土器13（弥生土器）
図版90　土器14（弥生土器）
図版91　土器15（弥生土器）
図版92　土器16（弥生土器）
図版93　土器17（弥生土器）
図版94　土器18（弥生土器）
図版95　土器19（弥生土器）
図版96　土器20（弥生土器）
図版97　土器21（弥生土器）

図版98　土器22（弥生土器）
図版99　土器23（須恵器・土師器）
図版100　土器24（須恵器・土師器）
図版101　土器25（須恵器・土師器）
図版102　土器26（須恵器・土師器）
図版103　土器27（土師器）
図版104　土器28（須恵器・土師器）
図版105　土器29（須恵器・土師器）
図版106　土器30（土師器・瓦質土器）
図版107　石器・石製品１（石鏃・石包丁）
図版108　石器・石製品２（石包丁）
図版109　石器・石製品３（石包丁・石核）
図版110　石器・石製品４
（石鏃・石棒・石錘・石杵・碁石）
図版111　石器・石製品５（砥石・敲石）
図版112　銅鐸１
図版113　銅鐸２
図版114　金属器・金属製品（鉄鏃・銅鏃・摘鎌・曲刃鎌
・火打金・刀子・短刀）
図版115　土製品１（分銅形土製品）
図版116　土製品２（分銅形土製品・円板状土製品）
図版117　土製品３（円板状土製品・土錘・不明土製品
・猪形土製品）
図版118　土製品４（土製支脚）　鍛冶関係遺物
図版119　玉類（ガラス小玉・管玉・臼玉・土製勾玉
・土製丸玉）
図版120　瓦（丸瓦・平瓦）

＜刑部遺跡＞

図版121　1　旧１区（東から）
2　旧２区（南西から）
3　旧３区（東から）
図版122　1　旧３区（西から）
2　旧４区（北東から）
3　旧４区（西から）
図版123　1　旧４－３区（東から）
2　旧４－２区（西から）
3　旧５区（北から）
図版124　1　竪穴住居１（北西から）
2　竪穴住居２～４（北から）
3　竪穴住居２新（西から）
図版125　1　竪穴住居４（南から）
2　竪穴住居５～７（北から）
3　竪穴住居６（東から）
図版126　1　竪穴住居８（西から）
2　竪穴住居９・10（北から）
3　竪穴住居８～11（北から）
図版127　1　竪穴住居11（北から）
2　竪穴住居14（北から）
3　竪穴住居15（北から）
図版128　1　竪穴住居16（北から）
2　竪穴住居17（南東から）
3　竪穴住居18（南東から）
図版129　1　竪穴住居19（北から）
2　竪穴住居19・20（北から）
3　竪穴住居20（東から）
図版130　1　竪穴住居21（北から）
2　竪穴住居21・22（北から）
3　竪穴住居23（北東から）
図版131　1　竪穴住居25（東から）
2　竪穴住居26（北から）
3　竪穴住居27（西から）
図版132　1　竪穴住居28（南から）
2　竪穴住居29（南東から）
3　竪穴住居30（南東から）
図版133　1　竪穴住居31（南西から）
2　竪穴住居32（南東から）
3　竪穴住居33（西から）
図版134　1　竪穴住居34（南西から）
2　竪穴住居35（南東から）
3　竪穴住居36新（南から）
図版135　1　竪穴住居36古（南から）
2　竪穴住居37新（北西から）
3　竪穴住居37古（北西から）
図版136　1　竪穴住居38（南西から）
2　竪穴住居39（南東から）
3　竪穴住居40（南から）
図版137　1　竪穴住居41（北東から）
2　竪穴住居42新（北東から）
3　竪穴住居42・43（北西から）
図版138　1　竪穴住居44（南東から）
2　竪穴住居45（南東から）
3　竪穴住居45～47（南東から）
図版139　1　竪穴住居48（南東から）
2　竪穴住居49（南東から）
3　竪穴住居50（北西から）
図版140　1　竪穴住居51（南から）
2　竪穴住居52（南東から）
3　竪穴住居53（北西から）
図版141　1　竪穴住居54炭化材検出状況（南から）
2　竪穴住居54（西から）
3　竪穴住居54・55（北東から）
図版142　1　竪穴住居56遺物出土状況（北東から）
2　竪穴住居56（北東から）
3　竪穴住居57（西から）
図版143　1　竪穴住居58（南東から）
2　竪穴住居58カマド（南東から）
3　竪穴住居58（南西から）
4　竪穴住居58カマド（南から）
5　竪穴住居58カマド（南西から）
図版144　1　竪穴住居59・60（南西から）
2　竪穴住居61（南西から）
3　竪穴住居62（北西から）
図版145　1　竪穴住居63古（北西から）
2　竪穴住居64（北西から）

3　竪穴住居65（北西から）
図版146　1　掘立柱建物１（南西から）
2　掘立柱建物２（南東から）
3　掘立柱建物４（西から）
図版147　1　掘立柱建物５（西から）
2　掘立柱建物６（北から）
3　掘立柱建物７・８（東から）
図版148　1　掘立柱建物８（北東から）
2　掘立柱建物９（北東から）
3　掘立柱建物10（南西から）
図版149　1　掘立柱建物11（南西から）
2　掘立柱建物12（北西から）
3　掘立柱建物13（南西から）
図版150　1　掘立柱建物14（南東から）
2　掘立柱建物15（南東から）
3　掘立柱建物15柱穴内遺物出土状況
図版151　1　掘立柱建物16・17（西から）
2　掘立柱建物18（南東から）
3　掘立柱建物20（西から）
図版152　1　掘立柱建物22（東から）
2　掘立柱建物23（北東から）
3　掘立柱建物24（北東から）
図版153　1　掘立柱建物25（南東から）
2　掘立柱建物26（南西から）
3　掘立柱建物27（南西から）
図版154　1　掘立柱建物28（南西から）
2　掘立柱建物29（南西から）
3　掘立柱建物30（北西から）
図版155　1　井戸１（北西から）
2　井戸２（南から）
3　井戸３（東から）
図版156　1　井戸４（北西から）
2　墓１（東から）
3　墓２（東から）
図版157　1　墓４（北西から）
2　墓４歯出土状況（北から）
3　炉１（南から）
図版158　1　土坑１（南から）
2　土坑４（南東から）
3　土坑５（南東から）
図版159　1　土坑10（南西から）
2　土坑７（南から）
3　土坑８（南から）
4　土坑９（南東から）
5　土坑11（南東から）
図版160　1　土坑12（南東から）
2　土坑13（東から）
3　土坑14（北東から）
図版161　1　土坑15（北東から）
2　土坑20（北西から）
3　土坑21（北西から）
図版162　1　土坑22（南西から）
2　土坑23（南東から）
3　土坑25（南西から）
図版163　1　土坑29（北西から）
2　土坑30（南東から）
3　土坑36（南から）
図版164　1　土坑37（南東から）
2　土坑39（北から）
3　土坑43（南から）
図版165　1　土坑46（北から）
2　土坑51（東から）
3　土坑52（東から）
図版166　1　土坑53（北から）
2　土坑54（東から）
3　土坑55（南東から）
図版167　1　土坑56（南から）
2　土坑57（北西から）
3　土坑68（南から）
図版168　1　土坑69（北東から）
2　土坑77（南西から）
3　土坑80（南から）
図版169　1　土坑87（南西から）
2　土坑88（北西から）
3　土坑90（西から）
図版170　1　土坑92（北西から）
2　土坑93（南東から）
3　土坑95（南東から）
図版171　1　土坑96（北東から）
2　土坑99（南東から）
3　土坑102（南東から）
図版172　1　土坑103（北東から）
2　土坑106（西から）
3　土坑111（北東から）
図版173　1　土坑113（南東から）
2　土坑115（南から）
3　土坑116（南東から）
図版174　1　土坑118・119（北から）
2　土坑120（南西から）
3　土坑122（南東から）
図版175　1　土坑123（東から）
2　土坑124（北から）
3　土坑126（南から）
図版176　1　溝３（北東から）
2　溝５（南から）
3　溝６（南東から）
図版177　1　溝８・30断面（南西から）
2　溝８・９（西から）
3　溝９・12・31（北東から）
図版178　1　溝11南端（南西から）
2　溝11断面（北東から）
3　溝14・16（南東から）
図版179　1　溝21・22（南から）
2　溝23・25（西から）

3　溝24・26（西から）
図版180　1　溝27・28（北から）
2　溝28（北西から）
3　溝29南端南壁断面（北西から）
図版181　1　溝30（南西から）
2　溝30断面（南西から）
3　溝31断面（南西から）
図版182　1　溝34（北から）
2　溝35（西から）
3　溝35断面（南西から）
図版183　1　溝42（南東から）
2　溝43・44（南東から）
3　溝45（東から）
図版184　1　溝46（東から）
2　溝51（南東から）
3　溝52（南東から）
図版185　1　河道１（北東から）
2　河道１旧２区中央（北東から）
3　河道１旧３区土器出土状況（北西から）
図版186　1　河道１旧３区（北東から）
2　河道１旧３区（南から）
3　河道３旧１区中央（北西から）
図版187　1　たわみ３（北東から）
2　たわみ４（南から）
3　柱穴14（北東から）
4　柱穴24（南から）
図版188　1　旧４－３区トレンチ（北東から）
2　旧６－２区Ｔ１（西から）
3　旧６－２区Ｔ２（南西から）
図版189　土器１（弥生土器）
図版190　土器２（弥生土器）
図版191　土器３（弥生土器）
図版192　土器４（弥生土器）
図版193　土器５（弥生土器）
図版194　土器６（弥生土器）
図版195　土器７（弥生土器）
図版196　土器８（弥生土器）
図版197　土器９（土師器）
図版198　土器10（土師器）
図版199　土器11（土師器）
図版200　土器12（土師器）
図版201　土器13（須恵器・土師器）
図版202　土器14（土師器）
図版203　土器15（土師器）
図版204　土器16（土師器）
図版205　土器17（須恵器・土師器・緑釉緑彩陶器）
図版206　石器・石製品１（石鏃・石包丁）
図版207　石器・石製品２（石斧・敲石・石錘・砥石）
図版208　金属器・金属製品（鉄鏃・銅鏃・銅鏡・摘鎌・曲刃鎌・刀子・銭）
図版209　土製品（分銅形土製品・円板状土製品・土錘）
図版210　玉類（翡翠製勾玉･ガラス製小玉･碧玉製管玉･ガラス製管玉・土製勾玉・土製丸玉）

第１章　発掘調査及び報告書作成の経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

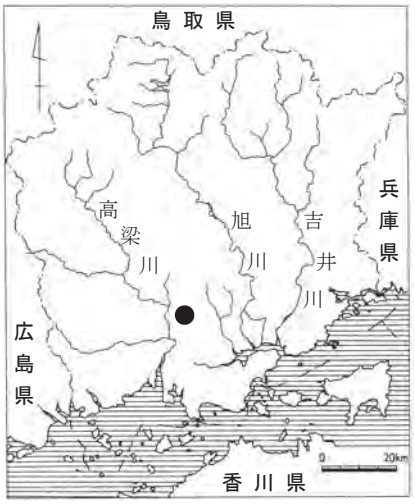
一般国道180号は、岡山市西部から総社市・高梁市を経て鳥取県へ至る主要幹線道路で、とりわけ岡山市西部から総社市間は利用頻度が高く、昭和40年代以降、飛躍的に交通量が増大した。これに対し、交通混雑の緩和と経済活力の向上及び交通安全の確保等を目的に、岡山市北区楢津から総社市井尻野間の延長15.9㎞に及ぶ総社・一宮バイパスの建設が計画され、昭和48年に事業化された。昭和63年８月には総社地区、平成３年２月には一宮地区の都市計画決定がなされ、平成元年から総社市長良～窪木間において用地買収や工事が着手された。

路線の埋蔵文化財の取り扱いについては、事業化以降今日に至るまで、岡山県教育庁文化財課（当初は文化課､以下県文化財課と略す）と事業を管轄する国土交通省中国地方整備局岡山国道事務所（当初は建設省中国地方建設局岡山国道工事事務所、以下は国道事務所と略す）間で密接に協議を重ねてきた。まず、県教育委員会宛に昭和62年11月に国道事務所から「一般国道180号総社バイパス計画路線に係る文化財の存在について」の照会がなされ、教育長名で昭和63年３月に埋蔵文化財包蔵地の所在を回答した。

平成４年９月に、国道事務所から総社市長良～窪木間について、埋蔵文化財発掘の通知（文化財保護法第57条の３（現法第94条））が提出された。これに対し、工事立会等の対応を行った結果、平成８年度までに延長1.8㎞の４車線供用が開始された。

続いて平成10年には、国道事務所から総社市窪木～総社間の1.6㎞の区間について埋蔵文化財包蔵地の照会が行われたが、一帯は条里制地割（総社条里）が明瞭に残っていることや備中国府推定地に隣接するなど、埋蔵文化財の取り扱いに十分に注意を要する地域であった。そこで、県文化財課と国道事務所との間において、埋蔵文化財保護についての慎重な協議を行い、平成13年２月には、国道事務所から埋蔵文化財発掘の通知（文化財保護法第57条の３（現法第94条））が提出された。そして、平成13～18年度には、総社遺跡・金井戸遺跡・北溝手遺跡・南溝手遺跡・窪木遺跡について、記録保存調査の措置をとり、調査後の平成19年度には供用が開始されている。また、発掘調査の成果については、発掘調査報告書『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』209・214（平成19・20年）の２冊を刊行している。

本書において報告する総社市総社～小寺にかけての1.9㎞の区間については（第２図)、平成20年度から具体的な取り扱い協議を行った。その結果、平成23年４月から周知の埋蔵文化財包蔵地である神明遺跡については、地権者の了解を得



第１図　遺跡位置図（1/2,000,000）

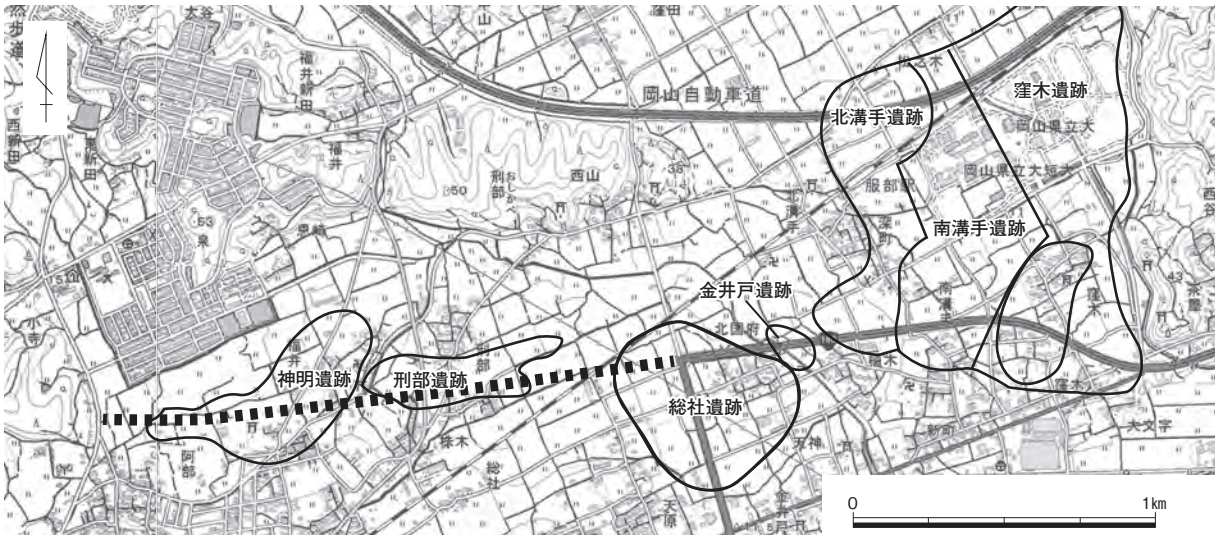
た箇所から、その範囲を明らかにするための確認調査を実施した（第３図）。また、神明遺跡東方の刑部・総社地区内において実施した試掘調査（第４図）においては、新たに弥生時代ほかの集落跡の存在を確認するに至り、代表的な字名をもって刑部遺跡と呼称することとした。さらに同年11・12月に再び神明遺跡の確認調査及び総社遺跡の確認調査（第３・４図）を実施した。

写真１　試掘・確認調査実施状況（H22－Ｔ９）

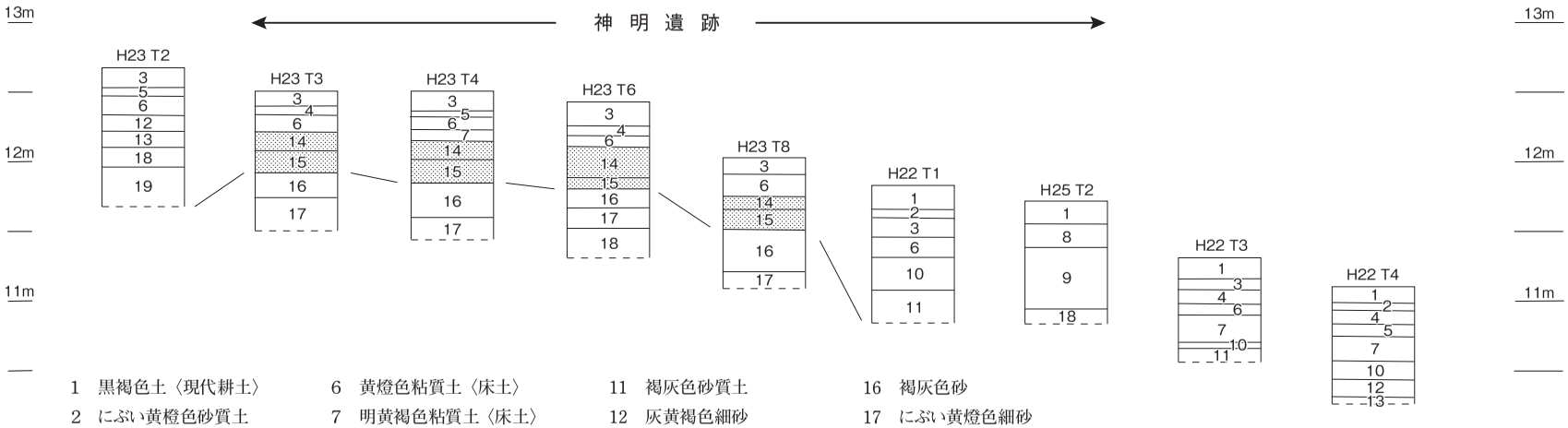
これらの調査成果を受け、平成23年12月には国道事務所から法第94条に基づく埋蔵文化財発掘の通知が提出され、県教委はそれに対し、平成23年12月28日付、教文埋第1072号により発掘調査の勧告を行った。そして、未確定であった発掘調査範囲を確定するため、平成25年１～２月には、刑部遺跡・総社遺跡・総社条里（第４図）において、確認調査を実施した。さらに、同年11月に神明遺跡と総社遺跡（第３・４図）において確認調査を実施した。この結果、総社遺跡では遺構の存在は確認できず、また、総社条里についても条里遺構の証左と考えられていた現水田畦畔下に遺構が存在せず、また現畦畔が中世以前にさかのぼる可能性に乏しいことから、２遺跡ともに記録保存調査の対象から外すこととした。

平成22～25年度にかけて実施した試掘・確認調査は、トレンチ41カ所、調査面積237㎡である。確認できた遺構は、本調査の対象として本文に掲載しているが、トレンチから出土した遺物については、遺構内、包含層中にかかわらず、試掘・確認調査出土遺物として第５・６図に示した。

遺物は、本発掘調査を実施した２遺跡のみならず総社遺跡・総社条里ほかの各トレンチからも出土しているものの、総社遺跡・総社条里においては明確な違構が確認できなかったことから、周辺部からの流れ込みと考えている。遺物の種別では、弥生土器・土師器・須恵器・瓦質土器、石器・石製品、

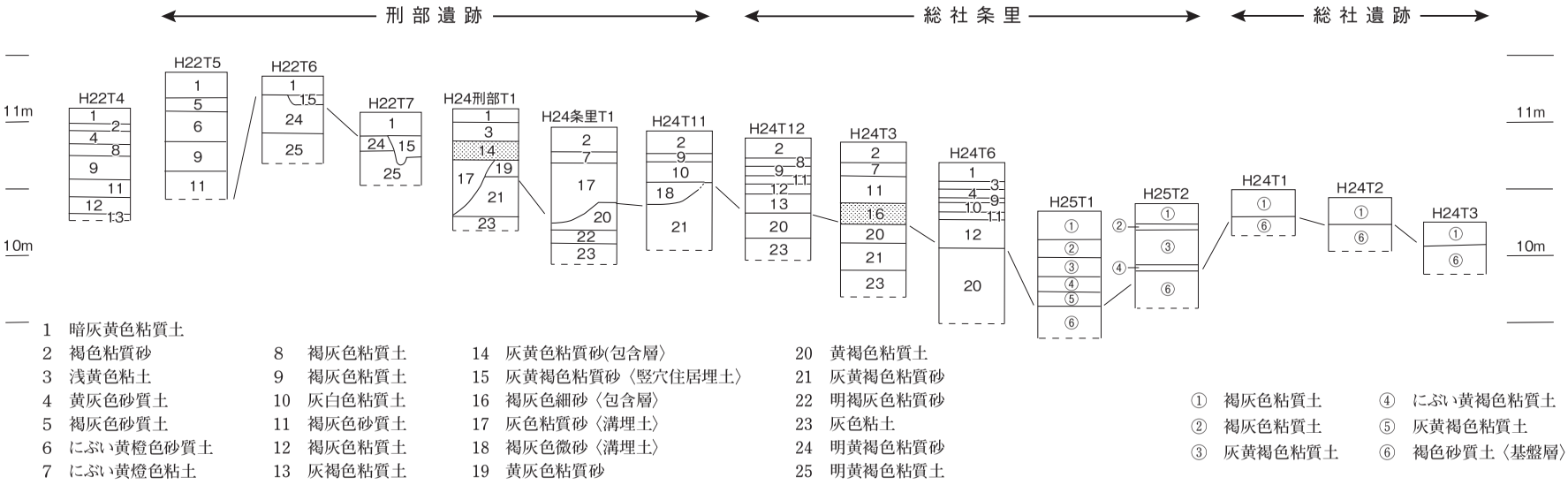


第２図　予定路線と調査対象遺跡（1/25,000）



1 黒褐色土〈現代耕土〉
2 にぶい黄橙色砂質土
3 褐灰色土
4 褐灰色粘質土〈耕土〉
5 灰色土〈耕土〉
6 黄燈色粘質土〈床土〉
7 明黄褐色粘質土〈床土〉
8 暗褐色砂質土
9 明黄褐色砂質土
10 褐灰色粘質土
11 褐灰色砂質土
12 灰黄褐色細砂
13 にぶい黄燈色細砂
14 褐灰色土〈包含層〉
15 灰褐色土〈包含層〉
16 褐灰色砂
17 にぶい黄燈色細砂
18 黄灰色粗砂〈礫層〉
19 灰褐色砂礫

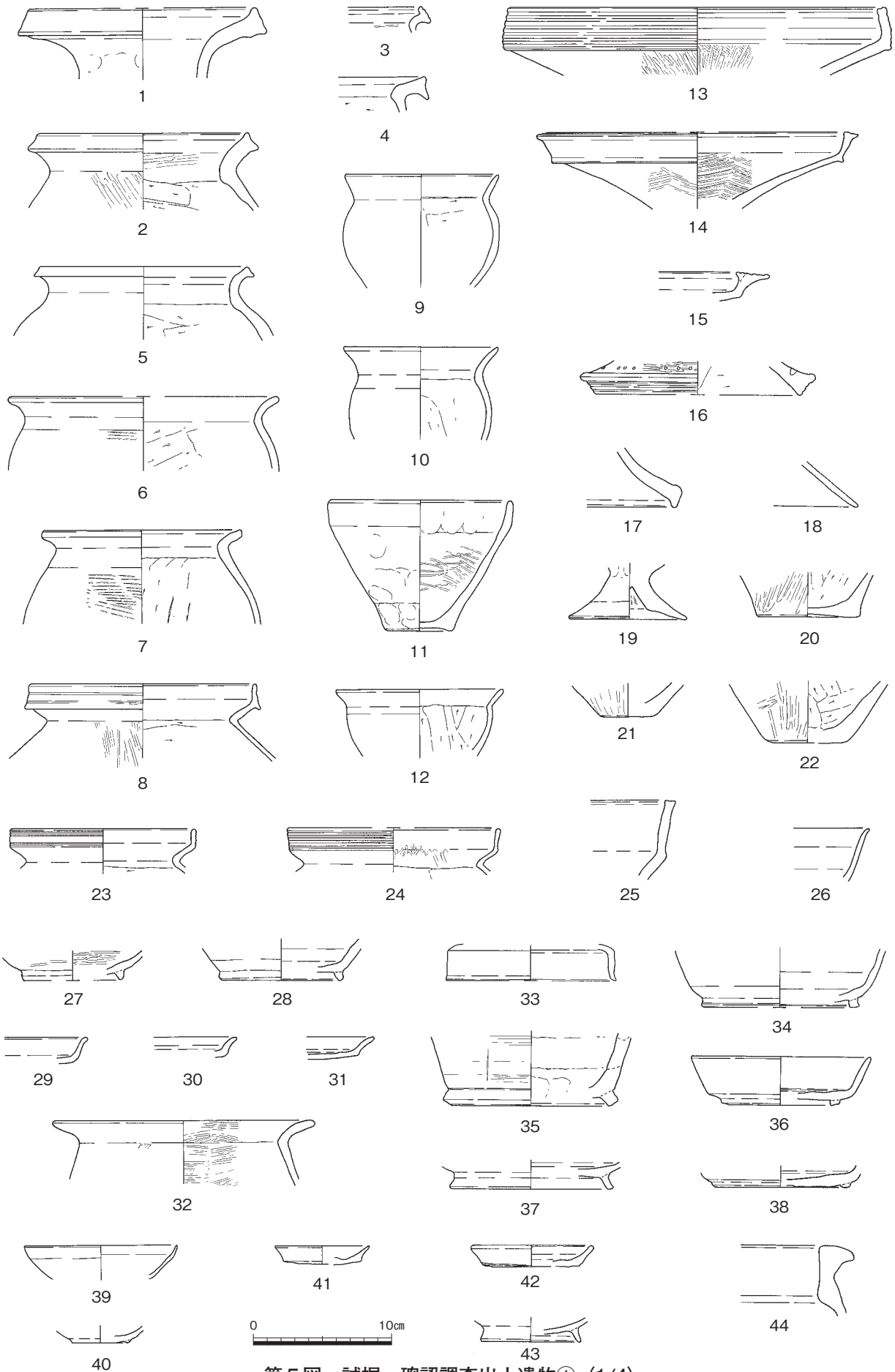
第３図　神明遺跡確認調査トレンチ配置図（1/5,000）・土層柱状図（高さ1/50・幅任意）



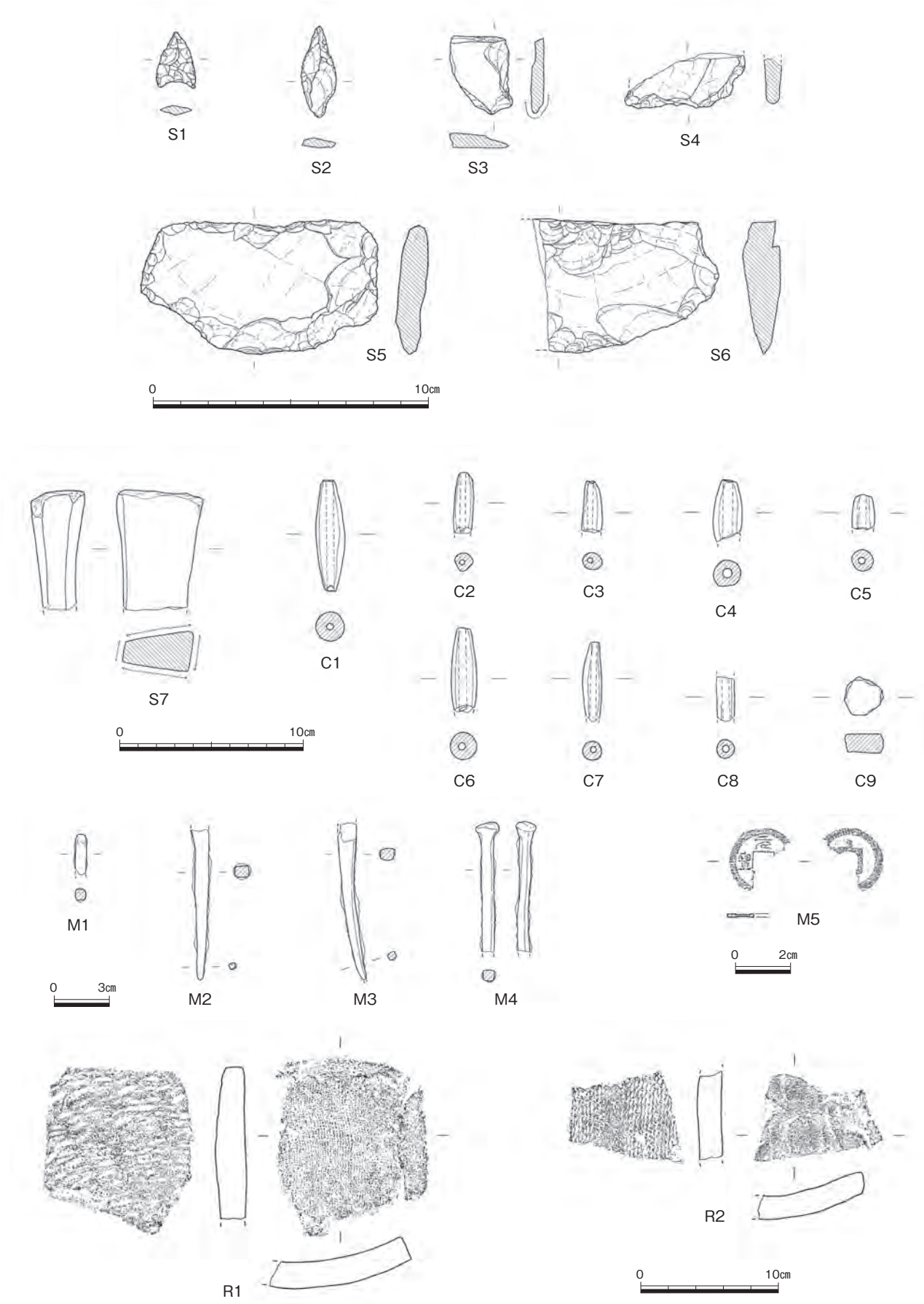
1　暗灰黄色粘質土
2　褐色粘質砂
3　浅黄色粘土
4　黄灰色砂質土
5　褐灰色砂質土
6　にぶい黄橙色砂質土
7　にぶい黄燈色粘土
8　褐灰色粘質土
9　褐灰色粘質土
10　灰白色粘質土
11　褐灰色砂質土
12　褐灰色粘質土
13　灰褐色粘質土
14　灰黄色粘質砂(包含層)
15　灰黄褐色粘質砂〈竪穴住居埋土〉
16　褐灰色細砂〈包含層〉
17　灰色粘質砂〈溝埋土〉
18　褐灰色微砂〈溝埋土〉
19　黄灰色粘質砂
20　黄褐色粘質土
21　灰黄褐色粘質砂
22　明褐灰色粘質砂
23　灰色粘土
24　明黄褐色粘質砂
25　明黄褐色粘質土

①　褐灰色粘質土
②　褐灰色粘質土
③　灰黄褐色粘質土
④　にぶい黄褐色粘質土
⑤　灰黄褐色粘質土
⑥　褐色砂質土〈基盤層〉

第４図　刑部遺跡・総社条里・総社遺跡試掘・確認調査トレンチ配置図（1/5,000）・土層柱状図（高さ1/50・幅任意）



第５図　試掘・確認調査出土遺物①（1/4）



第６図　試掘・確認調査出土遺物②（1/2・1/3・1/4）

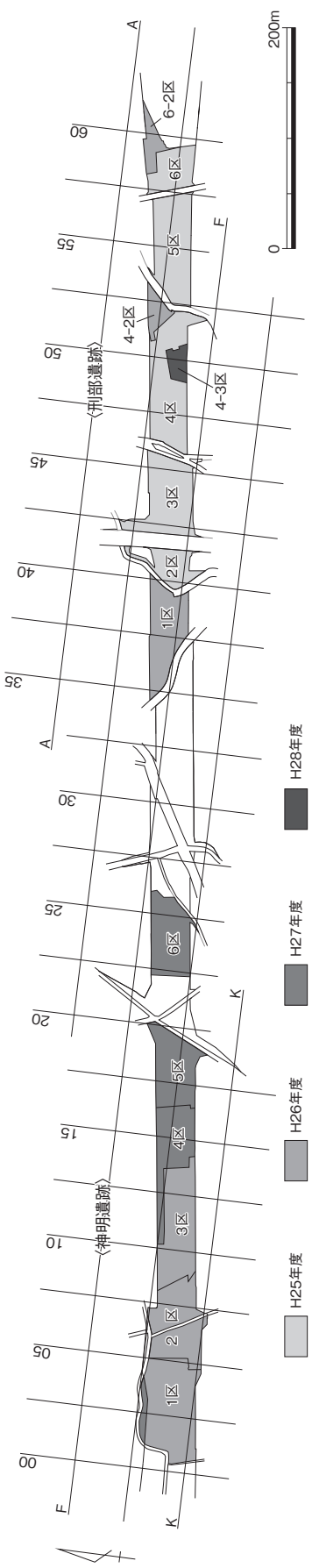
土製品、金属製品がある。

弥生土器には、壺１、甕２～８、鉢11・12、高杯13～17、脚部19、底部20～22がある。古墳時代では、土師器の小型丸底壺９・10、甕23・24、壺25と須恵器壺蓋33がある。古代の土器には、土師器椀27・28、皿29～31、甕32、須恵器壺35、杯26・34・36～38がみられる。なかでも土師器椀27では、内面にヘラミガキを、内外面に丹塗りを施す。土師器皿29～31のうち、29・30は内外面に丹塗りを施しており、31も僅かに丹塗りが見られる。中世では、土師器の高台付椀・皿39～43、備前焼の甕44がある。石器・石製品には、サヌカイト製の石鏃Ｓ１・Ｓ２、楔形石器Ｓ３、剥片石器Ｓ４、打製石包丁Ｓ５・Ｓ６と砥石Ｓ７がある。Ｓ３の刃部、Ｓ５・Ｓ６の上下端は使用による摩滅、光沢が顕著に認められる。

土製品には、土錘Ｃ１～Ｃ８と土器片の周囲を打ち欠いた円板状土製品Ｃ９がある。金属製品には、鉄鏃の可能性があるＭ１のほか鉄釘Ｍ２～Ｍ４と宋銭の元□通寶Ｍ５がある。平瓦２点は、外面に縄目と平行タタキが残り、内面には布目痕が残る。

以上の試掘・確認調査結果をふまえた平成22～25年度の時点での調査対象面積は、神明遺跡・刑部遺跡を併せて33,000㎡にものぼり、国道事務所と協議を重ねた結果、本発掘調査を平成25～27年度にかけて実施する計画を策定した。さらに発掘調査を進めていく中で、当初想定した範囲外へと遺構が拡がる状況が確認できたことから、調査範囲を一部拡張する必要が生じたことと、道路改築工事の計画変更によって道路用地が拡大し、それによる調査範囲の拡大もあって、最終的な調査面積は33,950㎡となった。

なお、記録保存調査対象地として国道事務所に提示・協議していた神明遺跡の範囲内において、工事関係者の認識の欠如、連絡体制の未整備から調査前にもかかわらず工事業者が掘削工事を行い、その結果、遺跡の一部を破壊したことが平成25年２月に判明した。県文化財課はこのことについて、重大な埋蔵文化財保護の問題として国道事務所に厳しく申し入れを行うとともに、工事に至った詳細な経緯につ



X座標	A	−145,680	B	−145,700	C	−145,720	D	−145,740	E	−145,760	F	−145,780	G	−145,800	H	−145,820	I	−145,840	J	−145,860	K	−145,880
Y座標	00	−53,400	05	−53,300	10	−53,200	15	−53,100	20	−53,000	25	−52,900	30	−52,800	35	−52,700	40	−52,600	45	−52,500	50	−52,400	55	−52,300	60	−52,200

第７図　神明遺跡・刑部遺跡調査区配置及びグリッド設定図（1/6,000）

いて説明を求め、対応について協議を重ねた。県文化財課は、同年９月に国道事務所長宛に注意文書を発出し、それに対して10月には国道事務所から再発防止を図る旨の文書の提出があったことを記しておく。（大橋雅也・弘田）

第２節　発掘調査の経過

神明遺跡と刑部遺跡の発掘調査は、平成25年４月から平成27年10月までと用地買収の遅れから調査ができなかった地点を平成28年４～６月にかけての都合２年10か月間実施し、全工程を終了した。神明遺跡の調査面積は17,305㎡で、刑部遺跡の調査面積は16,645㎡、合計33,950㎡となった。この間、地元の総社・刑部・福井地区の方々を中心に、発掘作業に従事あるいは御協力いただき、発掘調査は、神明遺跡での銅鐸の発見を始めとして大きな成果を挙げて無事終了することができた。

平成25年度の調査は、調査員数７名の２班体制で、刑部遺跡から開始した。調査区は、既存の道や水路を境にして、西から順に１～６区に分けた。その中でも、バイパス予定地と県道総社足守線が直交する地点の西側（２区）と東側（３区）から開始し、順次東の４・５・６区へと調査を進めた。ただし４・６区は、国側の用地取得状況や年間の調査面積の都合から、その一部を４－１区・６－１区として調査を行った。２・３区は、弥生時代中～後期を中心とする集落であったが、とりわけ３区に遺構が集中しており、その調査にほぼ１年を費やすこととなった。４区では、３区に比して弥生時代の遺構は少なかったものの、古墳時代前期～中期の竪穴住居が密に分布しており、また弥生・古墳時

写真２　銅鐸埋納坑調査に関する現地指導（難波氏・吉田氏）

写真３　銅鐸埋納坑の高解像度写真撮影

写真４　銅鐸埋納坑の三次元計測

写真５　銅鐸埋納坑の立体剥ぎ取り

代の溝も深く調査は難航した。５・６区は、低位部の状況を呈し、地形に沿って並行する溝状遺構が存在するのみであった。調査地周辺は主に水田が広がり、調査区内には周辺の耕作地へ進入するための仮設農道や仮設水路が付けられていた。仮設農道部分は発掘調査を実施すること、仮設水路部分については､遺構の分布状況をみて調査が必要かどうかの判断を行うことが事前に取り決められていた。それらの撤去から調査そして復旧という工程が調査の効率を下げ、かつ６～９月の農繁期には周囲からの浸水、湧水があり、その対応で調査は難航した。

平成26年度は、調査員数８名の２班体制で、刑部遺跡の１・４・６区（未買収箇所を除く）と神明遺跡１～３区の発掘調査を行った。神明遺跡も刑部遺跡同様、調査区を西から順に、１～６区と分けた。１班が１・３区（北側仮設農道部分を除く）を担当し、もう１班は、刑部遺跡の６－２区、４－２区、神明遺跡２区、刑部遺跡１区の順に調査を行った。その中の８月21日に、神明遺跡２区において銅鐸が出土した。調査において埋納状況が確認できる例は、全国的にみても未だ少なく、本例も土坑中に横位で鰭を立て埋納されている状況が確認できたことから、８月30日には、難波洋三氏（奈良文化財研究所)、吉田広氏（愛媛大学）の現地指導を受け、慎重に調査を進めた。９月10日には、県庁教育記者クラブで記者発表を行い、現地にも多数の報道関係者が詰めかけた（難波氏にはその際も御足労いただき、指導を仰いだ。)。銅鐸の発見を受け県文化財課は、路線変更を含めた保存協議を国道事務所と行ったが、工事着工済区間であることや道路建設への地元の強い要望、代替用地取得等の諸問題から、現地での遺構の保存は断念せざるを得なかった。ただし、当該区域での二度にわたる調査期間の延長は、その理解を得た。

銅鐸の出土以降、埋蔵文化財専門委員稲田孝司氏や埋蔵文化財保護対策委員会の各委員をはじめ新納泉氏（岡山大学）から御指導、御教示をいただいたほか、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの協力を得て、銅鐸出土状況の三次元計測を行った。また、十分な記録措置をとる必要から、業者委託による埋納坑断面の高解像度写真撮影を実施した。その後、銅鐸を９月11日に取り上げ、９月13日に行われた古代吉備文化財センター開所30周年記念講演会の場や９月20日の現地説明会において公開した。さらに銅鐸取り上げ後には埋納坑の三次元計測、埋納坑の立体剥ぎ取りを行ったほか、鈴木茂之氏（岡山大学）と武智泰史氏（倉敷市立自然史博物館）から、土壌の構造についての教示を得た。

平成27年度の調査は、３班体制で神明遺跡の調査を行った。前年度に比べて調査員数が増えて４・５月は10名で始まり、６月からは１名が整理に入ったものの、新たに２名が加わって、計11名となった。４･５区は、弥生時代後期から古墳時代後期にかけてと古代から中世にかけての遺構が存在した。とりわけ５区は、微高地縁辺部にあたるものの、西側の３・４区に比べると遺構検出面が高く、遺構密度も高かった。５区と６区の間には旧河道が流れ、１～５区とは別の微高地の南縁部にあたることから、古代末から中世にかけての遺構は存在するものの、それより古い時代の遺構はみられなかった。なお、１区北側について、道路事業計画の見直しがあり、現道・水路を除いた範囲220㎡を対象にして、追加調査を実施した。神明遺跡も刑部遺跡と同様に、調査区の北・南辺に沿って仮設農道が、東西・南北方向に仮設水路が設置されていた。水路は大半を残したが、農道は順次撤去・復旧しながら調査を進めた。また、５区を中心に、農繁期には周囲からの浸水・湧水が著しかった。以上の経過を経て、９月末で調査を終了し、10月初めに埋め戻し作業を実施した。10月以降は、調査担当職員のうち３名が整理作業に従事した。

平成28年度は、４～６月にかけて刑部遺跡で一部未買収となっていた箇所、485㎡の調査を調査員

２名で実施した（刑部遺跡４－３区）。これにより、発掘調査の全工程が完了した。

発掘調査期間中、埋蔵文化財保護調査指導会（旧埋蔵文化財保護対策委員会）を９回実施し、委員の先生方からは、遺構・遺物の評価などについて数多くの有益な御教示をいただいた。また、調査上の様々な問題点について、その都度、岡山国道事務所と協議を行った。神明遺跡２区では、ボックス工事箇所にあたることから調査を急ぐ必要があったが、銅鐸出土という慎重な調査を求められる事態を受け、当該区域での調査期間の延長が認められた。また、刑部遺跡東端や神明遺跡東端においても、さらに東へと遺構が拡がることが予想され、調査区を拡幅し調査を行った。

なお、市町村教育委員会職員の研修として、山本原也主事（笠岡市教育委員会：平成25年度）、村田晋主事（総社市教育委員会：平成26年度）を受け入れている。

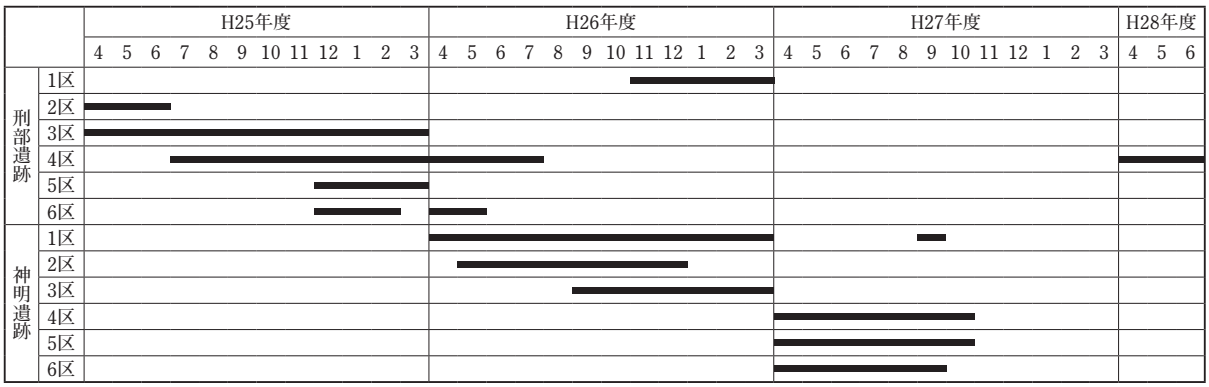
全工程中、現地公開・現地説明会を６回（表３）実施し、発掘現場の状況を見学していただく機会を設けるとともに、出土遺物や写真パネルの展示を行った。平成25年11月30日の見学会以降は、国道事務所による、180号バイパス事業に関するパネル展示、パンフレット配布が行われた。

銅鐸出土後の平成26年９月20日に開催した説明会には、480名の参加者があった。いずれの回も、県内はもとより、県外からの参加もあり、埋蔵文化財に対する関心の高さがうかがえた。　（弘田）

表１　調査一覧

遺跡名	地区名	年度	面積（㎡）	遺物数（箱）	担当者
試掘・確認		H22	54	1	石田爲成
試掘・確認		H23	60	2	上栫武
確認		H24	99	1	物部茂樹・上栫武
確認		H25	24	1	物部茂樹
刑部遺跡	１区	H26	2,569	13	渡邉恵里子・弘田和司・杉山一雄・河合忍
	２区	H25	1,218	44	渡邉恵里子・弘田和司・小林利晴・井田智
	３区	H25	3,076	276	金田善敬・圃奈歩・上栫武
	４区	H25	3,600	100	渡邉恵里子・弘田和司・小林利晴・井田智
	５区	H25	3,048	54	金田善敬・圃奈歩・上栫武
	６区	H25	1,658	1	渡邉恵里子・弘田和司・小林利晴・井田智
	４-２区	H26	371	15	渡邉恵里子・弘田和司・杉山一雄・河合忍
	６-２区	H26	620	4	渡邉恵里子・弘田和司・杉山一雄・河合忍
	４-３区	H28	485	16	渡邉恵里子・松尾佳子
	小計		16,645	523	
神明遺跡	１区	H26	3,774	107	柴田英樹・小林利晴・圃奈歩・井田智
	１区北	H27	220	1	小林利晴・髙田恭一郎・石田爲成・藤井翔平
	２区	H26	2,942	178	渡邉恵里子・弘田和司・杉山一雄・河合忍
	３区	H26	3,164	291	柴田英樹・小林利晴・圃奈歩・井田智
	４区	H27	2,270	149	小林利晴・髙田恭一郎・石田爲成・藤井翔平
	５区	H27	2,450	228	柴田英樹・松尾佳子・森本直人
	６区	H27	2,485	20	渡邉恵里子・弘田和司・氏平昭則・圃奈歩・河合忍
	小計		17,305	974	
合計			33,950	1,497	

表２　調査経過



第３節　報告書作成の経過

調査をした遺構数約900遺構、出土した遺物数約1,500箱を数える。それらについて、平成27年６月から整理作業を開始し、平成30年度末までの３年半をかけ（年度ごとの体制、担当職員についての詳細は第５節を参照）、３分冊で総頁数1,430頁の発掘調査報告書を刊行する運びとなった。

遺物の洗浄・注記作業は、基本的に発掘現場事務所で行ったが、一部は文化財センターにおいて実施した。また、土器の注記作業には注記システムを導入して効率化を図った。遺物実測・写真撮影、トレース、金属器の錆落としは、文化財センターにおいて実施し、その一部は整理作業員が担当した。

本報告書整理作業開始から、個別遺構、遺構配置図、地形図のトレースについては、デジタルトレースを基本にした。遺物出土状況など必要に応じて手書きトレースとした場合もあるが、スキャニングによってデジタルデータと合成している。遺物トレースについては、所要時間との比較や仕上がりを考慮して手書きトレースとし、土器などは原図を１/２に縮小して実施した。遺物写真は、デジタルカメラで撮影しているが、現場で撮影した写真にはデジタルとフィルムカメラが混在しているため、フィルムはスキャニングを行い、デジタルデータによる編集と入稿をした。報告書全体の編集作業は、従来どおり割り付け用紙を使用して行った。

平成27年６月から平成31年３月にかけての報告書作成期間中においても、埋蔵文化財保護調査指導会（旧埋蔵文化財保護対策委員会）を７回開催した。席上、各委員より有益な御教示、御指導をいただいた。

さらに、出土品のうちで鑑定・分析・保存処理が必要なものについては、各分野の専門家、機関の指導を受けるか、あるいは業務委託を行った。土器類の胎土分析については白石純氏（岡山理科大学）の御協力を得て、かつ報文をいただいた。また、石材の鑑定には、鈴木茂之氏（岡山大学）から、人骨・歯の鑑定では、大塚愛二氏（岡山大学）から御教示を受けた。

神明遺跡出土銅鐸については、保存処理やＸ線画像撮像を奈良文化財研究所に委託したが、髙妻洋成氏には様々な御協力をいただいた。また、難波洋三氏からは、銅鐸の鉛同位体比や微量元素の成分分析の結果についての報文をいただいた。三次元計測は、奈良県立橿原考古学研究所との共同研究で実施した。計測作業から図化作業まで、同研究所の北井利幸氏らの手を煩わせた。　（弘田）

写真６　平成28年度埋蔵文化財保護調査指導会

写真７　鈴木氏による石材鑑定

第４節　日誌抄

平成22年度
平成23年
２月１日（火）　刑部遺跡・神明遺跡試掘・確認調査開始
２月24日（木）　試掘・確認調査終了

平成23年度
平成23年
７月25日（月）　神明遺跡試掘・確認調査開始
８月２日（火）　試掘・確認調査終了

平成24年度
平成25年
１月15日（火）　刑部遺跡・総社条里・総社遺跡確認調査開始
２月12日（火）　確認調査終了

平成25年度
平成25年
４月１日（月）　発掘調査事業開始
４月２日（火）　刑部遺跡２・３区調査開始
６月５日（水）　刑部遺跡２区調査終了
６月13日（木）　刑部遺跡現地公開開催
６月25日（火）　ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影（刑部遺跡２・３区）
７月16日（火）　刑部遺跡４区調査開始
７月29日（月）　第１回埋蔵文化財保護対策委員会開催
11月５日（火）　神明遺跡・総社遺跡確認調査開始
11月７日（木）　第２回埋蔵文化財保護対策委員会開催
11月８日（金）　確認調査終了
11月30日（土）　刑部遺跡現地説明会開催
12月19日（木）　ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影（刑部遺跡３・４区）
12月20日（金）　刑部遺跡６区調査開始
12月25日（水）　刑部遺跡５区調査開始
平成26年
２月10日（月）　第３回埋蔵文化財保護対策委員会開催
２月24日（月）　刑部遺跡６区調査終了
３月４日（火）　刑部遺跡５区調査終了
３月14日（金）　刑部遺跡３・４区調査終了

平成26年度
平成26年
４月８日（火）　神明遺跡１区、刑部遺跡４−２・６−２区調査開始
５月２日（金）　神明遺跡２区調査開始
５月９日（金）　刑部遺跡６−２区調査終了
７月２日（水）　ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影（神明遺跡１区・刑部遺跡４−２区）
７月３日（木）　第１回埋蔵文化財保護対策委員会開催
７月29日（火）　刑部遺跡４−２区調査終了
８月21日（木）　神明遺跡２区で銅鐸出土
８月27日（水）　埋蔵文化財保護対策委員中田啓司氏、松本直子氏、光本順氏、山本悦世氏による銅鐸埋納坑調査に関する現地指導
８月30日（土）　奈良文化財研究所難波洋三氏、愛媛大学吉田広氏による銅鐸埋納坑調査に関する現地指導
９月１日（月）　県埋蔵文化財専門委員稲田孝司氏による銅鐸埋納坑調査に関する現地指導
９月２日（火）　岡山大学新納泉氏による銅鐸埋納坑調査に関する現地指導
９月４日（木）　岡山大学鈴木茂之氏による堆積土層に関する現地指導及び試料採取
埋蔵文化財保護対策委員亀田修一氏による銅鐸埋納坑調査に関する現地指導
９月５日（金）　銅鐸埋納坑の高解像度写真撮影
９月８日（月）　愛媛大学吉田広氏による銅鐸埋納坑調査に関する現地指導
９月９日（火）　神明遺跡３区調査開始
９月10日（水）　銅鐸埋納坑の報道発表。奈良文化財研究所難波洋三氏による銅鐸埋納坑調査に関する現地指導
９月11日（木）　岡山大学埋蔵文化財調査研究センターによる銅鐸出土状況の三次元計測
銅鐸取り上げ
９月17日（水）　ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影（神明遺跡１・２区）
９月20日（土）　神明遺跡現地説明会開催
９月22日（月）　銅鐸埋納坑完掘
９月26日（金）　銅鐸埋納坑の三次元計測
９月30日（火）　銅鐸埋納坑の立体剥ぎ取り作業
10月６日（月）　岡山大学鈴木茂之氏による堆積土層に関する現地指導及び試料採取
10月９日（木）　倉敷市立自然史博物館武智泰史氏による堆積土層に関する現地指導
11月10日（月）　刑部遺跡１区調査開始
11月14日（金）　大阪大学において、高橋照彦氏による刑部遺跡出土緑釉陶器の産地・製作年代に関する鑑定実施
奈良文化財研究所において、難波洋三氏による銅鐸の年代・保存に関する指導
11月21日（金）　第２回埋蔵文化財保護対策委員会開催
12月11日（木）　奈良文化財研究所において、難波洋三氏による銅鐸の保存・調査に関する指導
12月25日（木）　神明遺跡２区調査終了

平成27年
２月10日（火）　第３回埋蔵文化財保護対策委員会開催
２月24日（火）　刑部遺跡・神明遺跡現地公開開催
２月25日（水）　ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影（神明遺跡３区・刑部遺跡１区）
３月６日（金）　神明遺跡１区調査終了
３月17日（火）　刑部遺跡１区調査終了
３月25日（水）　神明遺跡３区調査終了

平成27年度
平成27年
４月６日（月）　神明遺跡４・５・６区調査開始
４月21日（火）　奈良文化財研究所による銅鐸の調査指導
６月１日（月）　報告書作成事業開始
６月４日（木）　第１回埋蔵文化財保護対策委員会開催
６月19日（金）　奈良文化財研究所による銅鐸の調査指導
８月10日（月）　岡山理科大学富岡直人氏による獣骨に関する現地指導
８月24日（月）　奈良文化財研究所による銅鐸の調査指導
９月２日（水）　神明遺跡１区北調査開始
９月３日（木）　第２回埋蔵文化財保護対策委員会開催
９月４日（金）　ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影（神明遺跡４・５区）
９月５日（土）　神明遺跡現地説明会開催
９月18日（金）　神明遺跡１区北調査終了
９月29日（火）　神明遺跡６区調査終了
10月８日（木）　神明遺跡４・５区調査終了
平成28年
１月８日（金）　奈良文化財研究所による銅鐸の調査指導
１月29日（金）　第３回埋蔵文化財保護対策委員会開催
３月９日（水）　奈良文化財研究所による銅鐸の調査指導
３月16日（水）　岡山大学鈴木茂之氏による石材鑑定

平成28年度
平成28年
４月13日（水）　刑部遺跡４－３区調査開始
５月26日（木）　第１回埋蔵文化財保護対策委員会開催
６月１日（水）　刑部遺跡現地公開開催
６月30日（木）　刑部遺跡４－３区調査終了
発掘調査事業完了
７月28日（木）　岡山理科大学白石純氏による胎土分析試料採取指導
８月29日（月）　奈良県立橿原考古学研究所による銅鐸三次元計測
11月11日（金）　岡山大学大塚愛二氏による人骨・歯の鑑定
11月24日（木）　岡山大学鈴木茂之氏による石材鑑定
平成29年
２月21日（火）　第２回埋蔵文化財保護対策委員会開催

平成29年度
平成29年
10月５日（木）　岡山大学鈴木茂之氏による石材鑑定
平成30年
１月26日（金）　第１回埋蔵文化財保護調査指導会開催
３月９日（金）　岡山大学鈴木茂之氏による石材鑑定

平成30年度
平成30年
８月30日（木）　難波洋三氏による銅鐸の調査指導
10月25日（木）　第１回埋蔵文化財保護調査指導会開催
平成31年
３月31日（日）　報告書作成事業完了
一般国道180号（総社・一宮バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査事業終了

表３　現地説明会（現地公開）一覧

年度	開催日	遺跡	参加人数
H25年度	６月13日(木) 11月30日(土)	刑部遺跡	120名 280名
H26年度	９月20日(土) ２月24日(火)	神明遺跡 神明･刑部遺跡	480名 170名
H27年度	９月５日(土)	神明遺跡	247名
H28年度	６月１日(水)	刑部遺跡	120名
参加者計			1,417名

写真８　神明遺跡現地説明会（H26.９.20）

表４　文化財保護法に基づく提出書類

埋蔵文化財試掘・確認調査の報告

番号	文書番号 日　付	周知・ 周知外	種類及び名称	所在地	面積 (㎡)	原因	包蔵地 の有無	報告者	担当者	期間
1	岡吉調 第153号 H23.3.10	周知外	集落跡 刑部遺跡	総社市刑部98、 総社市総社1486ほか	36	道路	有	岡山県古代吉備文化財センター所長	石田爲成	H23.2.1 ～H23.2.24
		周知	散布地 神明遺跡	総社市福井181-1ほか	18		無			
2	岡吉調 第123号 H24.1.6	周知外		総社市総社ほか	12	道路	無	岡山県古代吉備文化財センター所長	上栫　武	H23.11.24 ～H23.12.22
		周知	集落跡 神明遺跡	総社市福井ほか	48		有			
3	岡吉調 第162号 H25.2.26	周知	集落跡 刑部遺跡	総社市総社1490-6	99	道路	有	岡山県古代吉備文化財センター所長	物部茂樹 上栫　武	H25.1.15 ～H25.2.12
		周知	その他の遺跡（条里） 総社条里	総社市総社1570-6ほか			有			
		周知	散布地・城館跡 総社遺跡	総社市総社1775-1ほか			無			
4	岡吉調 第87号 H25.11.14	周知	集落跡 神明遺跡	総社市福井172-2ほか	24	道路	有	岡山県古代吉備文化財センター所長	物部茂樹	H25.11.5 ～H25.11.8
		周知	集落跡・城館跡 総社遺跡	総社市総社1807-1ほか			無			

埋蔵文化財発掘の通知（法第94条）

番号	文書番号 日　付	種類及び名称	所在地	面積（㎡）	目的	通知者	期間	主な勧告事項
1	教文埋 第1072号 H23.12.28	散布地・集落跡・その他の遺跡（条里） 神明遺跡・刑部遺跡・総社条里	総社市総社～ 総社市小寺地内	約60,000	道路	国土交通省　中国地方整備局 岡山国道事務所長	H24.1～ H31.3.31	発掘調査

埋蔵文化財発掘調査の報告（法第99条）

番号	文書番号 日　付	種類及び名称	所在地	面積 (㎡)	原因	報告者	担当者	期間
1	岡吉調 第2号 H25.4.1	集落跡 刑部遺跡	総社市刑部・総社	12,600	道路	岡山県古代吉備文化財センター所長	弘田・渡邉・金田・小林・團・上栫・井田	H25.4.1 ～H26.3.31
2	岡吉調 第3号 H26.4.1	集落跡 神明遺跡・刑部遺跡	神明遺跡：総社市福井287-3ほか 刑部遺跡：総社市刑部97-3ほか	13,440	道路	岡山県古代吉備文化財センター所長	弘田・柴田・渡邉・杉山・小林・團・河合・井田	H26.4.1 ～H27.3.31
3	岡吉調 第3号 H27.4.1	集落跡 神明遺跡	総社市福井219-3ほか	7,314	道路	岡山県古代吉備文化財センター所長	髙田・氏平・小林・石田・藤井・弘田・柴田・渡邉・團・河合・松尾・森本	H27.4.1 ～H27.9.30
4	岡吉調 第2号 H28.4.1	集落跡 刑部遺跡	総社市総社1479ほか	485	道路	岡山県古代吉備文化財センター所長	渡邉・松尾	H28.4.1 ～H28.6.30

埋蔵文化財発見の通知（法第100条第2項）

番号	文書番号 日　付	物件名	出土地・名称	出土年月日	発見者	土地所有者	現保管場所
1	教文埋 第1321号 H23.2.24	神明遺跡：土器（弥生土器・土師器・須恵器など）　計整理箱1箱 刑部遺跡：土器（弥生土器・土師器・須恵器など）、土製品（錘）、金属製品（銅銭）　計整理箱1箱	総社市福井134、180、181-1：神明遺跡、総社市福井38-1、刑部98、113-3、総社1486、1491-1、1571-1：刑部遺跡	H23.2.1 ～H23.2.24	岡山県教育委員会 教育長　門野八州雄	個人	岡山県古代吉備文化財センター
2	教文埋 第1042号 H23.12.22	土器（弥生土器・土師器・須恵器など）　計整理箱2箱	総社市福井287ほか 神明遺跡ほか	H23.11.24 ～H2312.22	岡山県教育委員会 教育長　竹井千庫	個人	岡山県古代吉備文化財センター
3	教文埋 第1293号 H25.2.12	刑部遺跡：土器（弥生土器・土師器・須恵器など）　整理箱1箱 総社条里：土器（弥生土器・土師器・須恵器など）　整理箱1箱 総社遺跡：土器（弥生土器・土師器・須恵器など）　整理箱1箱　　計整理箱３箱	総社市総社1490-6：刑部遺跡、総社市総社1570-6ほか：総社条里、総社市総社1775-1ほか：総社遺跡	H25.1.15 ～H25.2.12	岡山県教育委員会 教育長　竹井千庫	国土交通省・個人	岡山県古代吉備文化財センター
4	教文埋 第926号 H25.11.8	総社遺跡：土器（弥生土器・陶器）　整理箱1箱 神明遺跡：土器（土師器・須恵器）　整理箱1箱 計整理箱2箱	総社市総社1807-1：総社遺跡、総社市福井172-2：神明遺跡	H25.11.5 ～H25.11.8	岡山県教育委員会 教育長　竹井千庫	国土交通省・個人	岡山県古代吉備文化財センター
5	教文埋 第1386号 H26.3.13	土器（弥生土器、土師器、須恵器など）、土製品（紡錘車、分銅形土製品、土錘、土玉など）、石製品（石鏃、石錘、砥石、管玉、勾玉など）、金属製品（刀子、曲刃鎌、銅鏃など）、ガラス製品（小玉）　計整理箱475箱	総社市刑部115-3ほか：刑部遺跡	H25.4.1 ～H26.3.13	岡山県教育委員会 教育長　竹井千庫	国土交通省	岡山県古代吉備文化財センター
6	教文埋 第1480号 H27.3.16	神明遺跡：土器(縄文土器・弥生土器・須恵器・土師器ほか)、緑釉陶器、金属器（銅鐸ほか）、石器、玉、骨　　計整理箱575箱 刑部遺跡：土器（縄文土器・弥生土器・須恵器、土師器ほか）、緑釉陶器、金属器（銅鏡ほか）、磁器、石器、骨　　計整理箱32箱	総社市福井285-1ほか：神明遺跡、総社市刑部97-3ほか：刑部遺跡	H26.4.11 ～H27.3.16	岡山県教育委員会 教育長　竹井千庫	国土交通省	岡山県古代吉備文化財センター
7	教文埋 第896号 H27.10.1	土器（弥生土器・須恵器・土師器ほか）、土製品（分銅形土製品・土玉ほか）、石製品（石包丁・石鏃・管玉・砥石ほか）、金属器（鉄釘ほか）、その他（人骨・獣骨ほか）　　計整理箱399箱	総社市福井219-3ほか：神明遺跡	H27.4.13 ～H27.9.30	岡山県教育委員会 教育長　竹井千庫	国土交通省	岡山県古代吉備文化財センター
8	教文埋 第392号 H28.6.17	土器（縄文土器・弥生土器・土師器ほか）・石製品（石錘・砥石ほか）、金属製品（鉄釘）・木製品（柱材）　　計整理箱16箱	総社市総社1479ほか：刑部遺跡	H28.4.13 ～H28.6.17	岡山県教育委員会 教育長　竹井千庫	国土交通省	岡山県古代吉備文化財センター

第５節　調査及び整理の体制

平成22年度

岡山県教育委員会

教　育　長　　門野八洲雄

岡山県教育庁

教育次長　　増本　好孝

文化財課

課　　長　　田村　啓介

参　　事（大型整備担当）
光永　真一

総括副参事（埋蔵文化財班長）
宇垣　匡雅

主　　任　　米田　克彦

主　　事　　一色　　武

古代吉備文化財センター

所　　長　　児仁井克一

次　　長（総務課長事務取扱）
片山　淳司

参　　事（文化財保護担当）
中野　雅美

〈総　務　課〉

総括副参事（総務班長）
上田　利弘

主　　任　　植木寿美子

主　　任　　越野　　忍

主　　任　　行守　智和

〈調査第一課〉

課　　長　　江見　正己

総括副参事（第一班長）
髙田恭一郎

主　　任　　石田　爲成
（試掘・確認調査担当）

平成23年度

岡山県教育委員会

教　育　長　　竹井　千庫

岡山県教育庁

教育次長　　阿部　淳二

文化財課

課　　長　　村木　生久

参　　事（大型整備担当）
光永　真一

総括副参事（埋蔵文化財班長）
宇垣　匡雅

主　　任　　石田　爲成

主　　任　　一色　　武

古代吉備文化財センター

所　　長　　平井　泰男

次　　長（総務課長事務取扱）
片山　淳司

参　　事（文化財保護担当）
中野　雅美

〈総　務　課〉

総括副参事（総務班長）
上田　利弘

主　　任　　植木寿美子

主　　任　　行守　智和

〈調査第一課〉

課　　長　　江見　正己

総括主幹（第一班長）
柴田　英樹

主　　任　　上栫　　武
（試掘・確認調査担当）

平成24年度

岡山県教育委員会

教　育　長　　竹井　千庫

岡山県教育庁

教育次長　　松尾　茂樹

文化財課

課　　長　　光永　真一

参　　事（文化財保護・活用担当）
嶋田健一郎

総括副参事（埋蔵文化財班長）

宇垣　匡雅
主　　任　石田　爲成
主　　任　河野　但彰

古代吉備文化財センター

所　　長　平井　泰男
次　　長（総務課長事務取扱）
大崎　智浩
総括参事（調査第一課長事務取扱）
中野　雅美

〈総　務　課〉

総括主幹（総務班長）
岡部　　一
主　　任　行守　智和
主　　任　岡村　涼平

〈調査第一課〉

総括副参事（第一班長）
柴田　英樹
主　　任　物部　茂樹（確認調査担当）
主　　任　上栁　　武（確認調査担当）

平成25年度

岡山県教育委員会

教　育　長　竹井　千庫

岡山県教育庁

教育次長　伊藤　史恵

文化財課

課　　長　谷名　隆治
参　　事（文化財保護・活用担当）
宇垣　匡雅
総括副参事（埋蔵文化財班長）
大橋　雅也
主　　任　石田　爲成
主　　任　河野　但彰

古代吉備文化財センター

所　　長　平井　泰男
次　　長（総務課長事務取扱）
大崎　智浩
参　　事（文化財保護担当）
光永　真一
総括参事（調査第一課長事務取扱）
島崎　　東

〈総　務　課〉

総括主幹（総務班長）
岡部　　一
主　　任　宮岡　佳子
主　　任　岡村　涼平

〈調査第一課〉

総括主幹（第二班長）
物部　茂樹（確認調査担当）

〈調査第三課〉

課　　長　弘田　和司（調査担当）
総括主幹（第一班長）
渡邉恵里子（調査担当）
主　　任　小林　利晴（調査担当）
主　　事　井田　　智（調査担当）
総括主幹（第二班長）
金田　善敬（調査担当）
主　　任　圃　　奈歩（調査担当）
主　　任　上栁　　武（調査担当）

平成26年度

岡山県教育委員会

教　育　長　竹井　千庫

岡山県教育庁

教育次長　伊藤　史恵

文化財課

課　　長　山田　寛人
参　　事（文化財保護・活用担当）
宇垣　匡雅
総括副参事（埋蔵文化財班長）
大橋　雅也
主　　任　岡﨑　行康
主　　任　石田　爲成

古代吉備文化財センター

所　　長　村木　生久
次　　長（総務課長事務取扱）
大崎　智浩
参　　事（文化財保護担当）
光永　真一
総括参事（調査第一課長事務取扱）
島崎　　東

〈総　務　課〉

総 括 主 幹（総務班長）
岡部　一
主　任　宮岡　佳子
主　任　山内　基寛
〈調査第三課〉
課　長　弘田　和司（調査担当）
総括副参事（第一班長）
柴田　英樹（調査担当）
主　幹　小林　利晴（調査担当）
主　任　圍　奈歩（調査担当）
主　事　井田　智（調査担当）
総括副参事（第二班長）
渡邉恵里子（調査担当）
主　幹　杉山　一雄（調査担当）
主　任　河合　忍（調査担当）

平成27年度
岡山県教育委員会
教 育 長　竹井　千庫
岡山県教育庁
教 育 次 長　内田　広之
文化財課
課　長　山田　寛人
参　事（文化財保護・活用担当）
横山　定
総括副参事（埋蔵文化財班長）
大橋　雅也
主　幹　物部　茂樹
主　任　岡﨑　行康
古代吉備文化財センター
所　長　宇垣　匡雅
次　長（総務課長事務取扱）
成本　俊治
参　事（文化財保護担当）
光永　真一
〈総　務　課〉
総 括 主 幹（総務班長）
金藤　賢史
主　任　宮岡　佳子
主　任　山内　基寛
〈調査第二課〉
課　長　髙田恭一郎（調査担当）
総括副参事（第一班長）
氏平　昭則（調査担当）
主　任　石田　爲成（調査担当）
総 括 主 幹（第二班長）
小林　利晴（調査担当）
主　事　藤井　翔平（調査担当）
〈調査第三課〉
課　長　弘田　和司
（調査・整理担当）
総括副参事（第一班長）
柴田　英樹（調査担当）
主　任　松尾　佳子（調査担当）
主　事　森本　直人（調査担当）
総括副参事（第二班長）
渡邉恵里子
（調査・整理担当）
主　任　圍　奈歩
（調査・整理担当）
主　任　河合　忍（調査担当）

平成28年度
岡山県教育委員会
教 育 長　竹井　千庫
岡山県教育庁
教 育 次 長　内田　広之
文化財課
課　長　小見山　晃
参　事（文化財保護・活用担当）
横山　定
総 括 参 事（埋蔵文化財班長）
大橋　雅也
主　幹　杉山　一雄
主　任　平井　健太
古代吉備文化財センター
所　長　宇垣　匡雅
次　長（総務課長事務取扱）
成本　俊治
〈総　務　課〉
総 括 主 幹（総務班長）
金藤　賢史

主　　任　　浦川　徳子
主　　任　　山内　基寛

〈調査第三課〉
課　　長　　弘田　和司（整理担当）
総括副参事（第二班長）
渡邉恵里子
（調査・整理担当）
主　　任　　圍　　奈歩（整理担当）
主　　任　　松尾　佳子
（調査・整理担当）

平成29年度
岡山県教育委員会
教　育　長　　竹井　千庫
岡山県教育庁
教 育 次 長　　日比謙一郎
文化財課
課　　長　　小見山　晃
参　　事（文化財保護・活用担当）
横山　　定
総括副参事（埋蔵文化財班長）
柴田　英樹
主　　幹　　平井　健太
主　　任　　上栁　　武
古代吉備文化財センター
所　　長　　宇垣　匡雅
次　　長（総務課長事務取扱）
髙田　　亮
参　　事（文化財保護担当）
大橋　雅也
〈総　務　課〉
総括副参事（総務班長）
金藤　賢史
主　　任　　浦川　徳子
主　　任　　東　　恵子
〈調査第三課〉
課　　長　　弘田　和司
総括副参事（第二班長）
渡邉恵里子（整理担当）
主　　幹　　圍　　奈歩（整理担当）
主　　任　　石田　爲成（整理担当）

平成30年度
岡山県教育委員会
教　育　長　　鍵本　芳明
岡山県教育庁
教 育 次 長　　日比謙一郎
文化財課
課　　長　　大西　治郎
参　　事（文化財保護・活用担当）
横山　　定
総括副参事（埋蔵文化財班長）
柴田　英樹
主　　幹　　上栁　　武
主　　任　　原　　珠見
古代吉備文化財センター
所　　長　　向井　重明
次　　長（総務課長事務取扱）
髙田　　亮
参　　事（文化財保護担当）
大橋　雅也
〈総　務　課〉
総 括 主 幹（総務班長）
甲元　秀和
主　　任　　浦川　徳子
主　　任　　東　　恵子
〈調査第三課〉
課　　長　　弘田　和司
総括副参事（第二班長）
渡邉恵里子（整理担当）
主　　幹　　圍　　奈歩（整理担当）

調査協力者
北井利幸（奈良県立橿原考古学研究所）　　新納　泉（岡山大学）
南健太郎（岡山大学埋蔵文化財調査研究センター）　　森　勇一（東海シニア自然大学）

第６節　時期区分

本書で使用した時期区分については、表５の編年対比表のように表記し、それ以外の時期については一般的な政治史区分に準拠し、必要に応じて文化史区分・世紀などを併用した。

表５は津寺遺跡において示された時期区分(1)で、これは、百間川遺跡群の時期区分(2)を基礎とし、津寺遺跡での調査成果を加え、さらには高橋護氏の型式細分(3)との対比も行ったもので、岡山県南部における弥生時代～古墳時代の編年の指標の一つとなっている。その中で「地域性や編年上の問題点については今後まとめの中で示されていくもの」とされているとおり、新しい資料の増加に伴い細分化が進み、型式変化や他地域との並行関係などに細かな修正点は生じているものの、現在でもその枠組は変わらず、有効性は高い。そして、その後刊行された高塚遺跡(4)の報告書にも採用されている。

高塚遺跡は津寺遺跡と同じ足守川流域に属する集落遺跡で、神明遺跡からは僅か東へ５㎞程の、非常に近い位置にある。また、集落の盛行期は弥生時代後期～古墳時代で、銅鐸埋納坑や導入期のカマドが発見されるなど、神明遺跡・刑部遺跡の位置付けを考える上で看過することのできない遺跡である。そこで、本書では、両者の動向を比較するため、同じ時期区分を採用することとした。もちろん、神明遺跡・刑部遺跡の発掘調査によって不足していた資料が見つかり、従来の編年との相違点も認められるが、それらについては総括で述べていきたい。

先述したとおり、古墳時代の表記も表５に準じているが、須恵器出現以降はできるだけ須恵器の型式を示し、必要に応じて実年代を記した。古代以降は実年代を用いることとしたが、本書でいう古代の始まりは、神明遺跡における掘立柱建物群の展開から、７世紀後葉とした。古代の終わり、すなわち中世の始まりは、神明遺跡・刑部遺跡ともに当該期の資料が少なく明確には捉えられないが、おおむね11世紀中頃を目安とした。　（渡邉）

註

（1）亀山行雄1996「２．時期区分」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』104　岡山県教育委員会

（2）正岡睦夫1995「Ⅴ．時期区分について」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』98　岡山県教育委員会

（3）高橋護1986「上東式土器の編年細分基準」『岡山県立博物館研究報告』７　岡山県立博物館

（4）江見正己ほか編2000『高塚遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告150　岡山県教育委員会

表５　編年対比表

年代	時代	時期		津　寺	上　東	百間川	雄　町	高橋編年		田辺編年
	弥生時代	前期	津　島	弥・前・Ⅰ		百・前・Ⅰ		Ⅰ期	a	
									b	
									c	
				弥・前・Ⅱ		百・前・Ⅱ	雄町１	Ⅱ期	a	
			門　田	弥・前・Ⅲ		百・前・Ⅲ	雄町２		b	
									c	
		中期	南　方	弥・中・Ⅰ		百・中・Ⅰ		Ⅲ期	a	
							雄町３		b	
			菰　池	弥・中・Ⅱ		百・中・Ⅱ		Ⅳ期	a	
									b	
							雄町４		c	
			前山Ⅱ	弥・中・Ⅲ		百・中・Ⅲ		Ⅴ期	a	
							雄町５		b	
			仁　伍		鬼川市０		雄町６	Ⅵ期	a	
50									b	
		後期	上　東	弥・後・Ⅰ	鬼川市１	百・後・Ⅰ	雄町７	Ⅶ期	a	
									b	
							雄町８		c	
				弥・後・Ⅱ	鬼川市２	百・後・Ⅱ	雄町９		d	
							雄町10	Ⅷ期	a	
				弥・後・Ⅲ	鬼川市３	百・後・Ⅲ			b	
									c	
									d	
			酒　津	弥・後・Ⅳ	才ノ町１ 才ノ町２	百・後・Ⅳ	雄町11	Ⅸ期	a	
							雄町12		b	
									c	
250	古墳時代	前期		古・前・Ⅰ	下田所	百・古・Ⅰ	雄町13	Ⅹ期	a	
									b	
				古・前・Ⅱ	亀川上層	百・古・Ⅱ	雄町14		c	
									d	
									e	
350				古・前・Ⅲ		百・古・Ⅲ		ⅩⅠ期	a	
									b	
400		中期		古・中・Ⅰ	川入大溝			ⅩⅡ期	a	TK73～TK208
									b	
				古・中・Ⅱ				ⅩⅢ期	a	TK23～TK47
									b	
500		後期		古・後・Ⅰ						MT15～TK10
				古・後・Ⅱ						TK43～TK209
600				古・後・Ⅲ						TK217

第２章　歴史的地理的環境

（１）地理的環境

総社平野は、岡山県の南西部に位置する。北は吉備高原の南端の山地である鬼城山や経山に、南は福山など都窪丘陵に、西を高梁川、東は足守川に囲まれた、東西約８㎞、南北約５㎞の沖積平野である。本書に収載する神明遺跡・刑部遺跡が位置するのは、この平野北西の縁辺部である。

古地図や航空写真などを参照して読み取れる旧高梁川の東分流は、総社平野を網目状に東流し、さらに平野東部で古足守川に合流し、現在の岡山市北区吉備津あたりで「吉備の穴海」と呼ばれた瀬戸内海の内海に注いでいたと思われる。平安時代末に掘削されたと伝えられる湛井十二箇郷用水もこれら旧河道を利用していたと考えられ、今回の調査地周辺に「堀」や「大溝」といった字を残している。

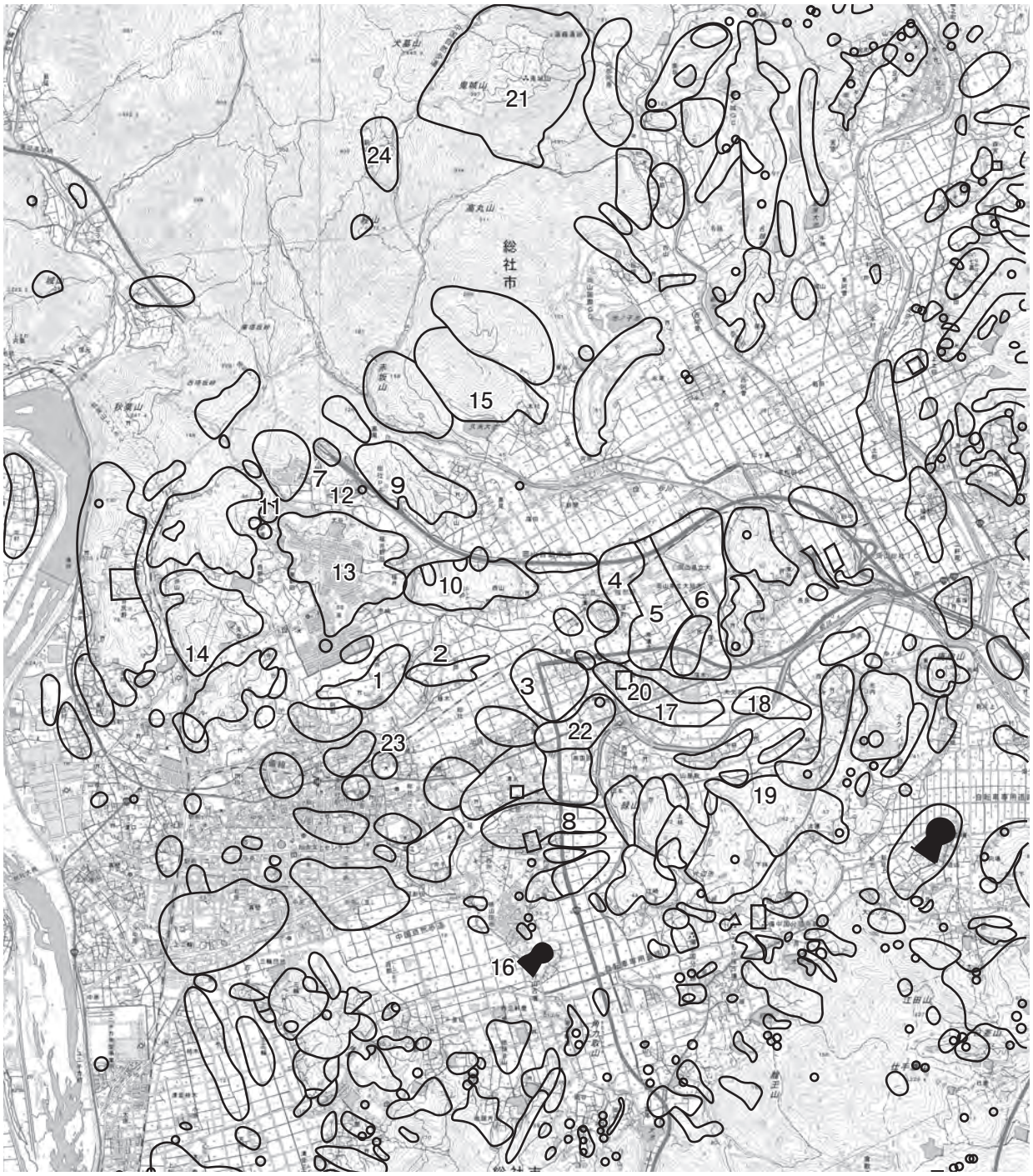
また、旧高梁川東分流によって大小数多くの微高地や後背湿地が形成されており、神明遺跡・刑部遺跡もその微高地上に立地している。一方、総社平野は、条里地割が明瞭に残ることで知られるが、神明遺跡・刑部遺跡の中心部分において条里地割が不明瞭となるのは、遺跡が位置する微高地部分が集落域として残り、開墾されなかったことによるとみられる。刑部遺跡東部から総社遺跡にかけての条里地割は、今回の発掘調査に先立つ試掘・確認調査においてその痕跡を考古学的に確認できなかったが、「備中国賀陽郡服部郷図」にその様相が描かれている。この図において、服部郷の西隣に描かれた刑部郷の一部が、刑部遺跡・神明遺跡に相当する。

（２）歴史的環境

総社平野では、網目状に流れる旧河道が形成する微高地上のほとんどに弥生時代以降の集落が営まれているといっても過言ではない。神明遺跡・刑部遺跡では、遺跡の北に接して旧高梁川東分流の一つが東流する。この水系でつながる下流側の微高地にも数多くの遺跡が存在し、縄文時代から現代までの人々の生活の場として利用され続けている。また、２遺跡の北側に位置する低丘陵上やその谷筋にも、弥生時代の墳墓や前期～後期の古墳ほかの遺跡が無数に存在している。これらは、神明・刑部の集落を母体として、その墳墓域あるいは生産遺跡といった関係でとらえることも可能であろう。

この地域において人々が生活を始めるのは、縄文時代後期のことである。窪木遺跡では、斜面堆積層から後期初頭の土器や石器が数多く出土している(1)。南溝手遺跡では、後期中葉の土器や打製石鏃などの石器とともに土坑や集石遺構を調査している。集石は、その下部において土坑を検出したことから墓とみられ、農耕具類の出土とともに居住域が近いことをうかがわせる(2)。この２遺跡とも、引き続く晩期に火処や土坑及び遺物が認められるなど、沖積低地での縄文人の活動を示す良好な資料となった。さらに、神明遺跡北側の丘陵斜面に位置する金黒池東遺跡においても、遺構は存在しなかったが、後期～晩期にかけての土器や石錘などの石器類が出土している(3)。

弥生時代には、南溝手遺跡や窪木遺跡において、前期から中期にかけての集落が営まれる。南溝手遺跡では、「松菊里型」の住居が見つかっている(4)ほか、南溝手遺跡(5)と北溝手遺跡(6)において、玉作りが行われていたことが明らかとなった。さらに中期後半から後期にかけては、三須畠田遺跡(7)など新たな遺跡が成立したり、それまで継続してきた遺跡においても、集落規模が拡大するなどの発展が認められるようになり、弥生社会の成熟と安定化を示すものと考えられている。また、丘陵部にお



１：神明遺跡　２：刑部遺跡　３：総社遺跡　４：北溝手遺跡
５：南溝手遺跡　６：窪木遺跡　７：金黒池東遺跡　８：三須畠田遺跡
９：中山遺跡　10：西山遺跡　11：すりばち池古墳群　12：奥ヶ谷窯跡
13：小寺２号墳　14：井山古墳　15：久米大池古墳　16：作山古墳
17：大文字遺跡　18：窪木薬師遺跡　19：法蓮古墳群　20：賀夜廃寺
21：鬼城山　22：金井戸天原遺跡（御所遺跡）　23：諸上遺跡
24：新山廃寺

第８図　周辺遺跡分布図（1/50,000）

いても、中期後葉から後期にかけて、中山遺跡[8]や西山遺跡[9]といった小規模な集落が形成されている。一方、この時代の墳墓は、平野南部や高梁川西岸域に比べ、明確とはなっていない。すりばち池南墳墓群[10]は、その中の数少ない例である。１号墓は、14×８ｍの長方形の墳丘をもち、墳端には配石を巡らせていた。墳丘内には19基の墓坑があり、その中からは、鉄剣や鉄鏃、管玉、ガラス玉が出土している。墳丘や周溝からは高杯を中心とした土器が出土しており、時期は後期末である。これ以外にも、古墳と認識されているものの中に、このような弥生時代の墳墓が含まれている可能性がある。

古墳時代では、遺跡北方の丘陵上や谷部に注目すべき古墳や遺跡が多い。奥ヶ谷窯跡は、全国的にみても最古級の須恵器窯跡であり、１基が単独で存在した[11]。窯に近接した作業面において、陶質土器や軟質土器が出土しており、渡来人が生産に関与した可能性も考えられる。中山６号墳は、１辺13ｍ程の小方墳であるが[12]、竪穴式石室に納められた棺に鋏を用いることから、渡来人との関わりを指摘する意見がある[13]。５世紀末の在地産とみられる須恵器の副葬と基底部にタタキ痕の残る埴輪が出土している。この地域には、陶質土器もしくは初期須恵器が出土した小寺２号墳[14]が存在しているが、これまで陶質土器と考えられていたものも、奥ヶ谷窯産の可能性があろう。また、近在に未知の須恵器窯が存在するかもしれない。さらに、西山古墳群は、１辺８～20ｍほどの方墳が数十基ほど群集する中期の古墳群であるが、墳丘規模に対し、家形・盾形・靭形など形象埴輪が豊富である[15]。加えて、特製円筒棺が出土したことから埴輪（形象）生産に携わった工人の墓の可能性も考えられる。ただし、遺跡近辺の総社平野北部丘陵上には前方後円墳がほとんど存在せず、小形の帆立貝形や造出付円墳が古墳群構成の中心といえる。作山古墳などが存在する平野南部の窪屋郡側と比べ、この地域の特徴といえる。古墳時代の集落では、陶質土器、軟質土器が出土した大文字遺跡[16]や陶質土器や竪穴住居のカマドから鉄鋌（てい）が出土し、鉄器生産、鍛冶関連の工房群と思われる窪木薬師遺跡[17]がある。この２遺跡についても、背後の丘陵上に立地し、陶質土器を出土した法蓮古墳群[18]を加え、居住域と生産の場、墓域といった関係を認めることができよう。そして、当地域が、朝鮮半島とつながりを持ち、先進的な技術を獲得していた証といえる。

さて、律令期にこの地は、賀夜郡刑部郷となる。吉備氏の有力氏族である賀夜（賀陽）氏が本拠とし、その氏寺とみられる賀夜廃寺（栢寺廃寺跡）[19]が７世紀後半に建立された。平安時代中期に編纂された『和名抄』に、備中国府が賀夜郡に存在したことが記されるなど、この地は備中国の中心でもあった。『日本書紀』などの文献に記載がないが、古代山城の一つ、鬼城山が築かれたのもこの頃である。国府の所在地自体は、今のところ判然としないが、総社市金井戸地区には、今も「国府」・「北国府」・「御所」といった地名が残り、国府の有力な候補地である。また、金黒池東遺跡では、３基の火葬墓を調査しており、そのうち１基から巡方が出土している[20]。すりばち池１～３号墓においても、同様の石囲いの中に、骨壺として須恵器の短頸壺を入れていた[21]。これらは、在地豪族層もしくは官人層の墓と思われる。

平安時代に入り各地で荘園が形成される中、刑部郷は国衙領であった。この時期、平野部における集落の様相は明らかでないが、鬼城山中に新山廃寺・岩屋寺跡といった山岳寺院が建立される。今回の調査地内においても「里坊」という字が存在するが、それらとの関わり示すのであろうか。現在も流域の水田を潤す十二箇郷用水の掘削は、岡山市妹尾あたりの開発領主といわれる妹尾兼康により整備されたと伝えられている。その真偽はともかく、水田開発にこの用水が果たした役割は大きい。な

お、金井戸地区の御所遺跡では、幅６ｍにも及ぶ大溝や土塁で周囲を囲む平安時代後期の方形居館が確認されており、同時期の国府の可能性が指摘されている(22)。近年、総社市域は岡山市や倉敷市のベッドタウンとして住宅地化が著しいものの、条里を基にした現在の景観はこの頃には形成されていたと思われる。中世の集落は、その立地が近世以降の集落に踏襲されたものか、調査事例は少ない。ただし、この地における在地有力者の存在を示すものとして、今回の調査地に隣接した総社市福井の清雲寺境内に、室町後期以降の宝筐印塔や五輪塔が存在している。

戦国後期の刑部郷は、高松城主、清水宗治の娘婿、中島元行の本拠であった。元行は戦の後、小早川隆景より刑部郷を領地に与えられたものの、天正11（1583）年の備中国分けに際して備中南部では高梁川以東が宇喜多領になると、川辺村（現在の倉敷市真備町川辺）に退いた。その後、隆景の筑前移封に従って、いったんこの地から退出したが、隆景の死後は再びこの地に戻る。総社市小寺の報恩徳寺には元行の墓が残っている。関ヶ原の合戦により宇喜多氏が失領すると、刑部村一帯は足守藩木下氏や浅尾藩蒔田氏などの所領となり、やがて明治維新を迎えることになる。　（弘田）

なお、本稿は『総社市史　通史編』総社市　1998　及び石田爲成2008「第２章　遺跡の位置と環境」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』211　岡山県教育委員会を参考にして執筆した。

註

（1）平井泰男ほか編1998『窪木遺跡２』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告124　岡山県教育委員会
（2）平井泰男ほか編1996『南溝手遺跡２』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告107　岡山県教育委員会
（3）浅倉秀昭編1997『金黒池東遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告121　岡山県教育委員会
（4）平井泰男ほか編1995『南溝手遺跡１』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告100　岡山県教育委員会
（5）註（4）文献に同じ。
（6）渡邉恵里子ほか編2012『窪木遺跡　南溝手遺跡　北溝手遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告235　岡山県教育委員会
（7）物部茂樹ほか編2001『三須畠田遺跡ほか』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告156　岡山県教育委員会
（8）江見正己編1997『中山遺跡・中山古墳群ほか』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告121　岡山県教育委員会
（9）江見正己編1997『西山遺跡・西山古墳群ほか』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告121　岡山県教育委員会
(10) 谷山雅彦1997『すりばち池南墳墓群』総社市埋蔵文化財調査年報７　総社市教育委員会
(11) 江見正己編1997『奥ヶ谷窯跡ほか』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告121　岡山県教育委員会
(12) 註（8）文献に同じ。
(13) 亀田修一「渡来人」『古墳時代研究の現状と課題』（下）土生田純之・亀田修一編　同成社　2012
(14) 葛原克人「小寺２号墳」『総社市史』考古資料編　1987
(15) 註（9）文献に同じ。
(16) 平井典子「南溝手地内の保育園建設に伴う発掘調査概要報告」『総社市埋蔵文化財調査年報』22　総社市教育委員会　2013
(17) 島崎　東ほか編1999『窪木薬師遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告86　岡山県教育委員会、武田恭彰「し尿処理場（浄化園）増築に伴う発掘調査２」『総社市埋蔵文化財調査年報』15　総社市教育委員会　2006
(18) 村上幸雄「法蓮古墳群」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』２　総社市教育委員会　1985
(19) 岡本寛久編1979『栢寺廃寺緊急発掘調査報告書』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告34　岡山県教育委員会
(20) 註（3）文献に同じ。報文中の違構名は「石囲い」であるが、火葬墓と考えられている。
(21) 高田明人ほか「すりばち池古墳群」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』13　総社市教育委員会　1993
(22) 武田恭彰「第５章　総社市御所遺跡の調査成果」『地理情報システムを用いた歴史的域景観復元のための技術的検討』岡山大学社会科学研究科　新納泉編　2008
なお、おかやま全県統合型ＧＩＳには御所遺跡は記載がなく、金井戸天原遺跡の一部である。

第３章　神明遺跡

第１節　遺跡の概要

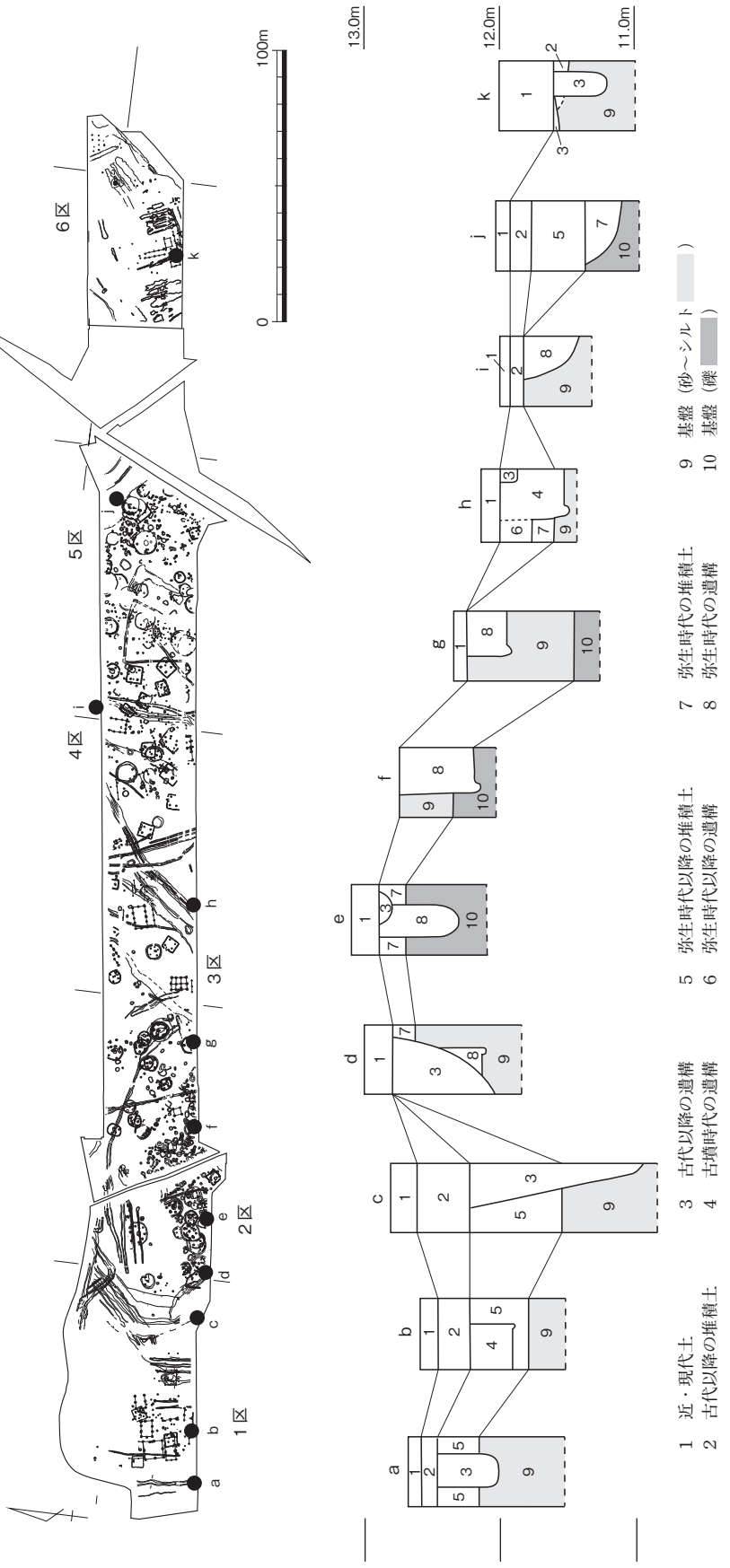
神明遺跡は、総社平野中央北部の沖積平野上に立地しており、所在地は総社市大字小寺から同福井に跨がっている。かなり以前から遺物の散布が知られていたが、福井地区内にある神明神社において総社市教育委員会が行った立会調査（『総社市埋蔵文化財調査年報』20　総社市教育委員会　2011）によってその存在が確実なものとなり、神明遺跡と命名されることとなった。

遺跡は、旧高梁川の東分流が形成する自然堤防上に立地するが、神明遺跡とその北にある泉丘陵（現在は大規模な住宅団地となっており、かつての景観は失われている。）との間にその一つが復元されいる（「高梁川東分流の流路について」『井手天原遺跡・総社遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告198　2006）。これは、神明遺跡のすぐ西側には小字名「河原」が残り、北側では、「沼出」や「中沼」といった流路が湿地化する過程で生まれたと考えられる地名（小字名）が存在することからも推測できる。この河道痕跡以外にも、現在の十二箇郷用水がその名残である可能性は高く、遺跡の境界を画している可能性は高い。この地域周辺では、十二箇郷用水は南西方向から北東方向に向けて流走しており、微高地の形状もそれによって規定されていると思われる。

岡山県ＧＩＳによると（平成30年８月現在）、遺跡の規模は南西から北東方向に約600ｍ、北西から南東方向に約250ｍとなり、総面積が約164,000㎡になる。発掘調査は、この微高地を東西方向に約500ｍ、幅35～40ｍで横断する形となり、調査面積は約17,000㎡にも及んだ。

平成26・27年度の発掘調査では、調査区を１～６区に分けて行った（第９図）。このうち５区東端で微高地の肩口が確認できたことと確認調査の結果から、５区と６区との間には旧河道が介在することが明らかとなり、これを以て神明遺跡は大きく２つの微高地から成り立つと推察される。なお、東側の微高地の中心は北に所在する現在の福井集落にあり、６区がその南端にあたる可能性がある。神明遺跡の範囲については、今後の周辺部の調査によって検討・修正の余地があろう。

西側の微高地が今回の発掘調査の中心となった場所で、第９図の基本土層柱状模式図によると、銅鐸埋納坑が立地するｅ地点周辺が最も地盤高が高い。調査前の状況においても水田化されず畑地として残された高まりで、弥生時代の遺構の集中が見られた。そこから西へは弥生時代の基盤となる層（第９層）は下がって行き、微高地西端部のａ地点で再び高まる。ａ～ｃ地点は弥生時代においては低位部であり、ここが微高地化するのは、第５層が堆積した後、古墳時代以降である。さらにその西側の包蔵地外では、小字名「河原」が指し示すとおり、現地表から深さ数メートルに及ぶ礫層の堆積が見られ、まさに旧流路の堆積といった状況を呈した。一方、ｅ地点から東へは自然堤防の南東斜面であるｆ・ｇ地点を経てこの微高地東端にあたるｊ地点へと基盤層は下がっているが、ほぼ中央部にあたるｈ地点が微高地上の大きなたわみとなっており、遺構も希薄であった。ここを境に、弥生時代の中心的な居住域は大きく東西２つの高まりに分かれていたようである。古墳時代にはｉ地点周辺に遺構が集中し、集落の中心となっていたと考えられる。



第９図　神明遺跡全体図（1/2,500）・基本土層柱状模式図（高さ1/50・幅任意）

一方、東側の微高地では、古代以降の遺構は散見されたが、弥生時代及び古墳時代の遺構は確認できなかった。微高地の形成がかなり遅れていたと考えられる。k 地点以東では、遺構面上面で南東に下がる奈良時代の包含層を確認している。

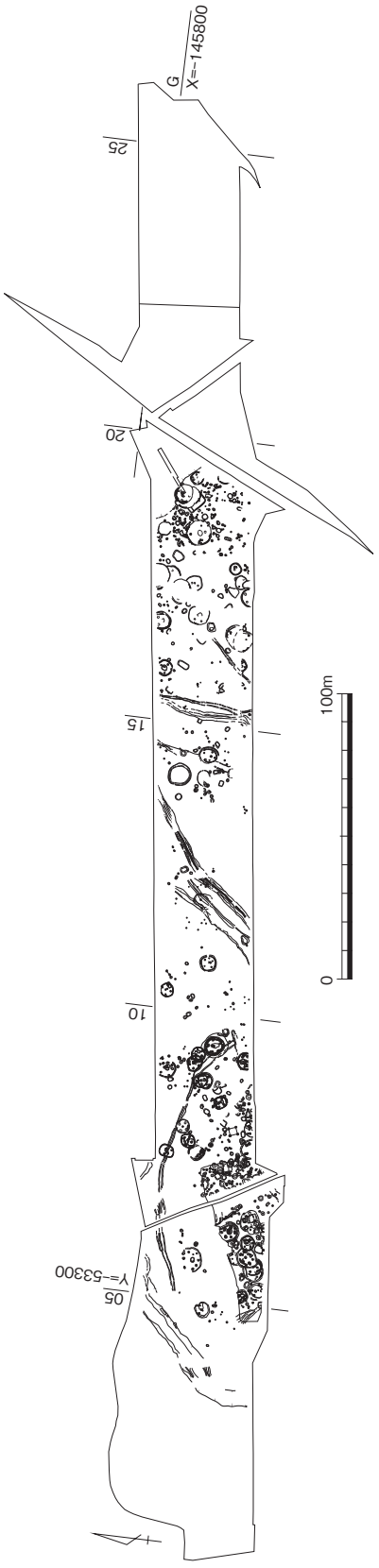
次節以後に各時代の遺構と遺物について詳しく述べるが、検出した遺構は弥生時代中期に遡り、古墳時代から古代、中世に及んでいる。竪穴住居74軒、掘立柱建物18棟、柱穴列18列、井戸３基、土器棺１基、土坑墓４基、土坑234基、溝48条、河道５条、たわみ７カ所、柱穴多数などがある。遺物には、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦のほかに、太型蛤刃石斧や石包丁、石鏃、砥石などの石器・石製品、分銅形土製品や土錘などの土製品、碧玉製管玉やガラス小玉など玉類、銅鐸や銅鏃、鉄斧、鉄鏃ほかの金属器、人骨、獣骨、桃核などが整理箱で575箱出土している。(弘田)

第２節　弥生時代以前の遺構・遺物

１　概要

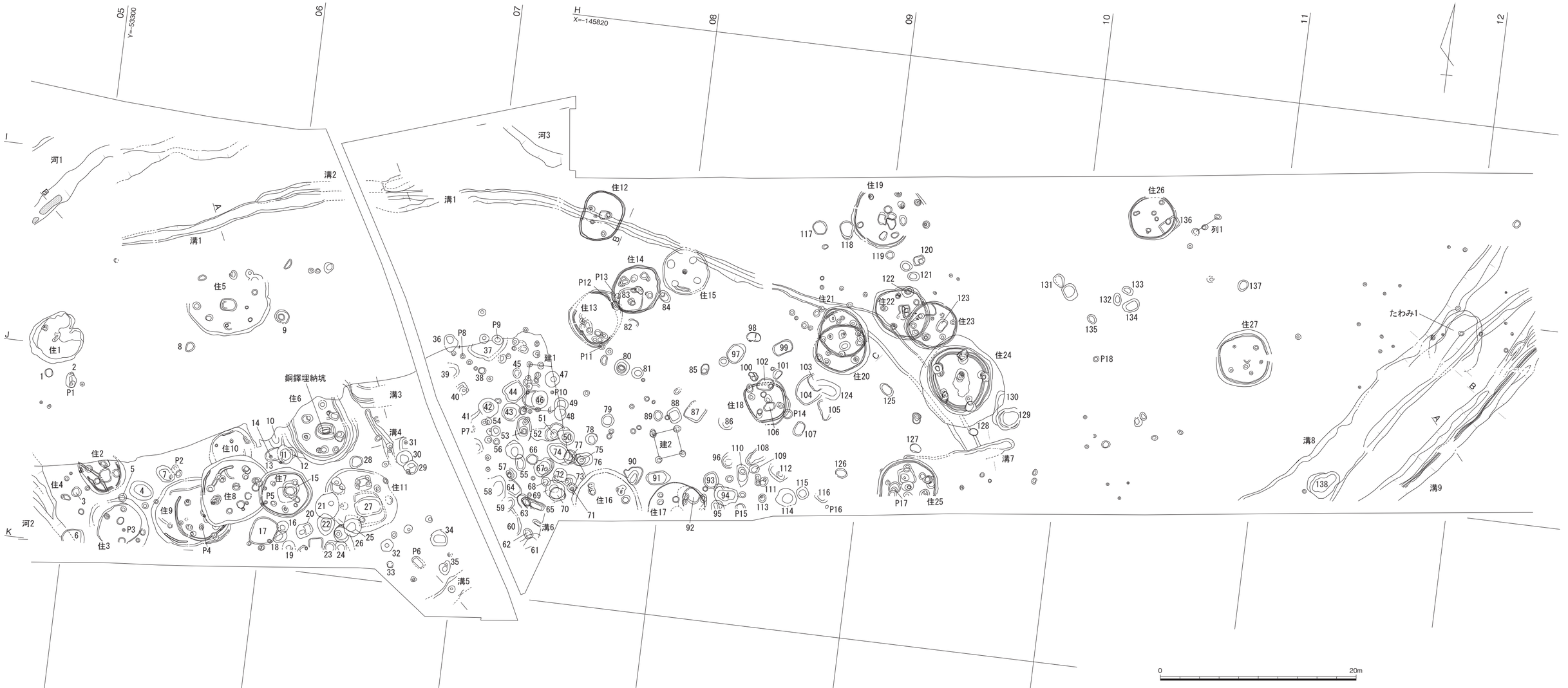
縄文時代以前の遺構は確認しておらず、図示できなかったが、基盤の砂礫層から縄文時代晩期頃の深鉢細片が１点出土している。一方、包含層中から弥生時代中期前半の土器片が出土しており、神明遺跡の初現を示す資料の可能性がある。弥生時代の遺構は、中期後葉～後期末葉の竪穴住居51軒、掘立柱建物２棟、柱穴列１列、井戸１基、銅鐸埋納坑１基、土器棺１基、土坑216基、溝13条、河道４条などを確認している。遺物としては、大量の土器片と共に分銅形土製品等の各種土製品、石器、鉄器、玉類などが出土している。

弥生時代の微高地は旧１区東半から旧５区にかけて確認され、遺構は、大きく東西２カ所の高まりに分かれて存在する。遺跡内で最も標高の高い西側の高まりでは、中期後葉から後期後葉にかけての竪穴住居や土坑等を密集した状態で検出しており、遺構密度はかなり高い。特筆すべきは、銅鐸埋納坑の発見であり、銅鐸**M36**がほぼ完形で出土した。この高まりの西側から北側にかけては河道１～３が巡り、これらの河道を境にして低位部となる。なお南側はより標高が高くなり、集落は南側の調査地外にさらに続くと想定される。遺跡の中央部には、溝８・９が流れるが、遺構密度は低く、土坑やたわみが散在する程度である。周辺に比べて遺構面の標高も低く、窪地状の地形になっており、東西の高まりを隔てている。東側の高まりの遺構確認面は標高11.80ｍ付近で、西側に比べ１ｍ程度低くなる。弥生時代後期前葉から後期末葉にかけての竪穴住居や土坑を中心に検出しているが、遺構密度は西側に比べて低い。東側高まり上でも西半部については、弥生時代後期前葉の竪穴住居や土坑等が一時期に集中して営まれている。東半部は、焼失住居の竪穴住居32など弥生時代後期後葉から末葉にかけての遺構が中心になる。東側に流れる河道４を境に遺構は皆無で、刑部遺跡までの間は、確認調査等の結果からも低位部あるいは流路と考えられる。　　（石田）

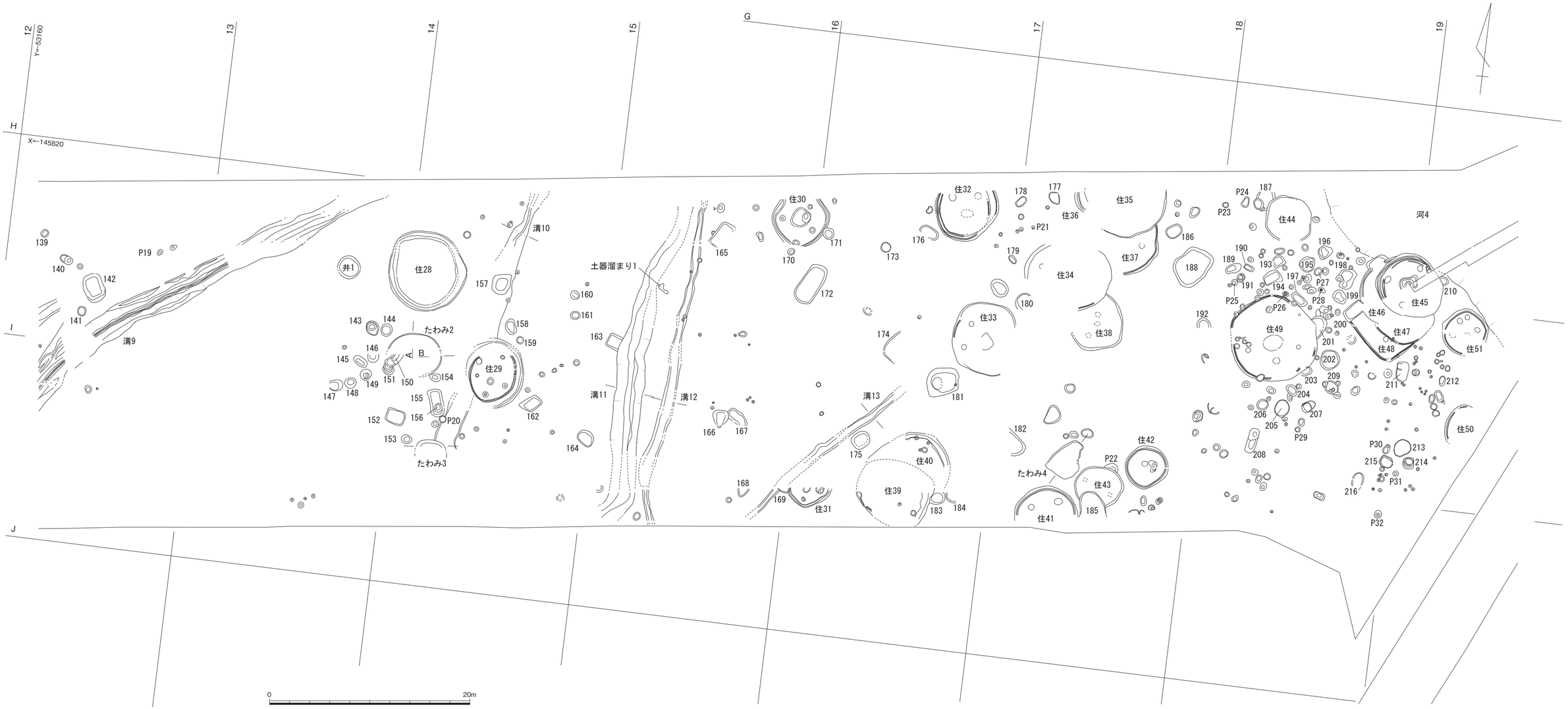


第10図　弥生時代遺構全体図①（1/2,500）

第11図　弥生時代遺構全体図②（1/400）



第12図　弥生時代遺構全体図③（1/300）

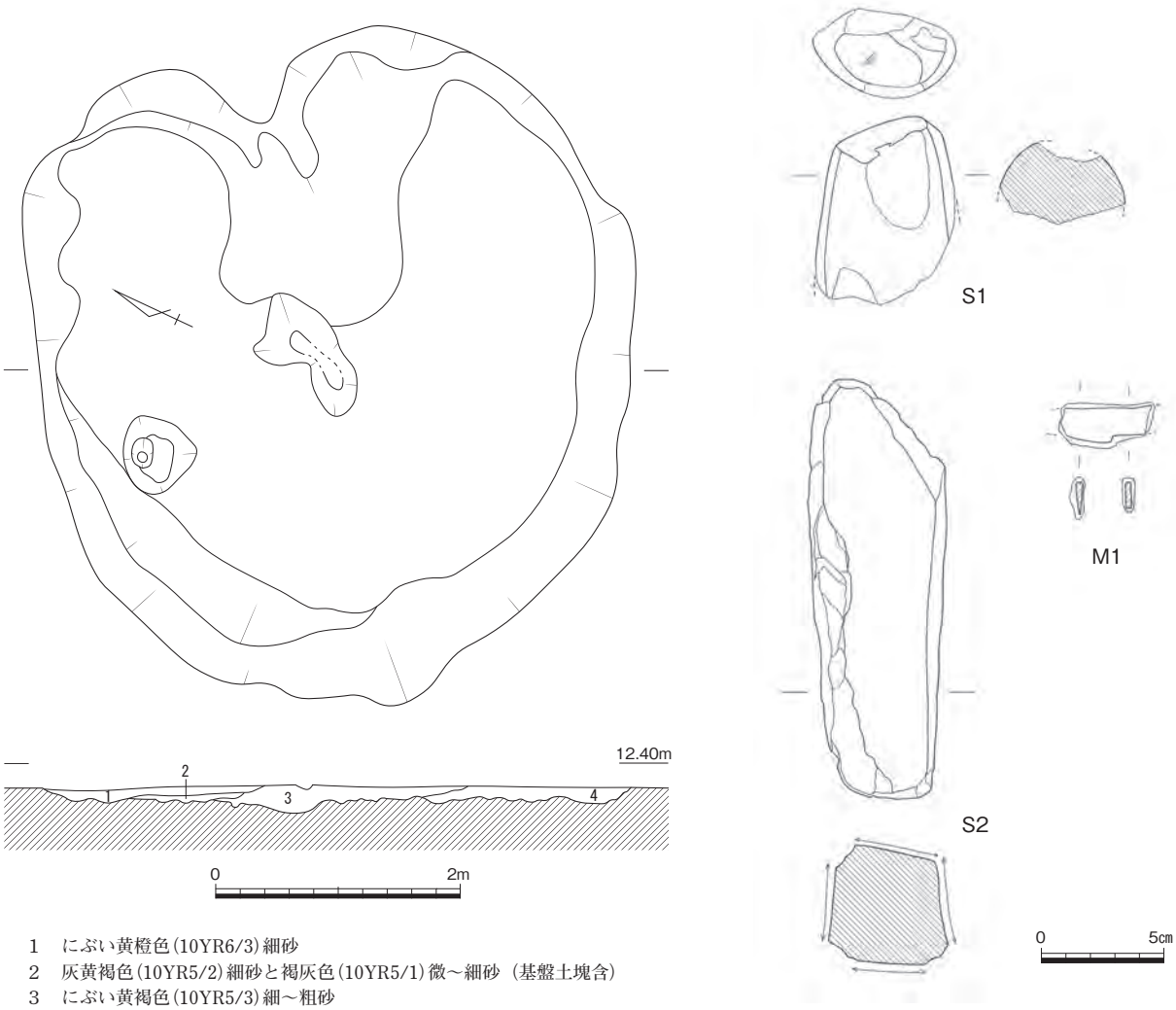


第13図　弥生時代遺構全体図④（1/300）

２　竪穴住居

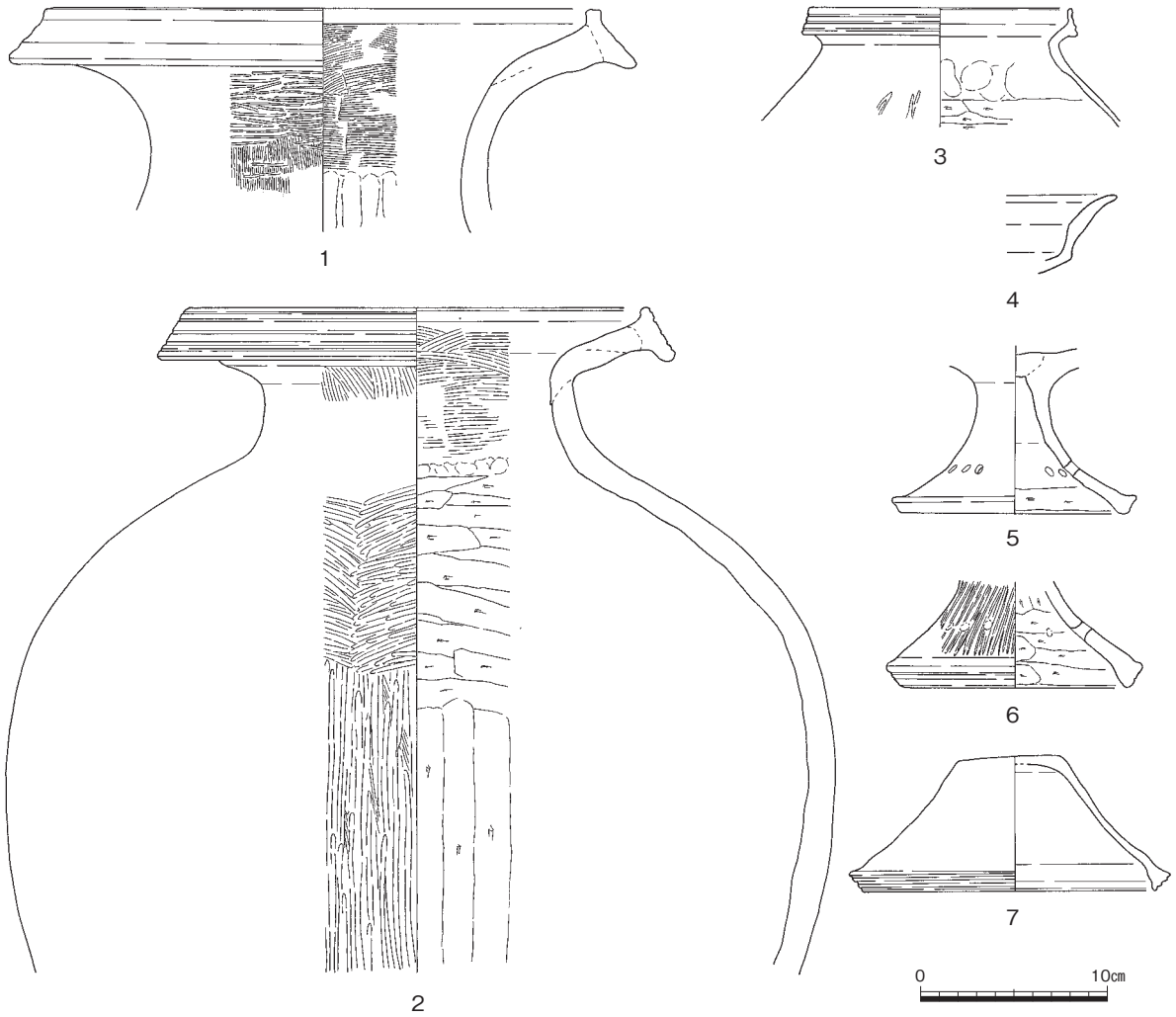
竪穴住居１（第11・14～16図、図版１－１・77、写真９）

Ｊ04の南東端に位置する遺構である。検出時の平面形は不整形なもので、底面も凹凸が見られるものであった。調査時には竪穴住居というよりも、たわみと認識していたものである。調査後、周辺の遺構、特に竪穴住居の調査が進んだことで基盤自体が軟弱であることから遺構の肩口が崩れているものが多く、楕円形を呈する竪穴住居も見られることや、この竪穴住居を検出した基盤に粗砂を含んでいることから、床面の凹凸は基盤の砂層に埋土が落ち込んだためであると理解し、また土器の出土状況や検出規模などから、最終的には竪穴住居であると判断したものである。規模は、長軸277㎝、短軸238㎝、検出面からの深さ10～22㎝である。主柱穴は検出していないが、西側の62×60㎝、深さ18～23㎝のピット状の落ち込みが主柱穴、中央部分の103×60㎝、深さ６㎝のくぼみが中央穴である可能性が考えられる。壁体溝は、平面及び断面の観察からも不明である。床面は凹凸があるものの、土器の接地面などから、標高12.10ｍ程度であったと考えられる。中央穴と考えられるくぼみの東側の一段高い部分はしまっており、標高12.18ｍである。このことから、東側にベッド状の遺構があった可能



1　にぶい黄橙色(10YR6/3)細砂
2　灰黄褐色(10YR5/2)細砂と褐灰色(10YR5/1)微～細砂（基盤土塊含）
3　にぶい黄褐色(10YR5/3)細～粗砂
4　にぶい黄橙色(10YR6/3)細～粗砂

第14図　竪穴住居１（1/60）・出土遺物①（1/3）



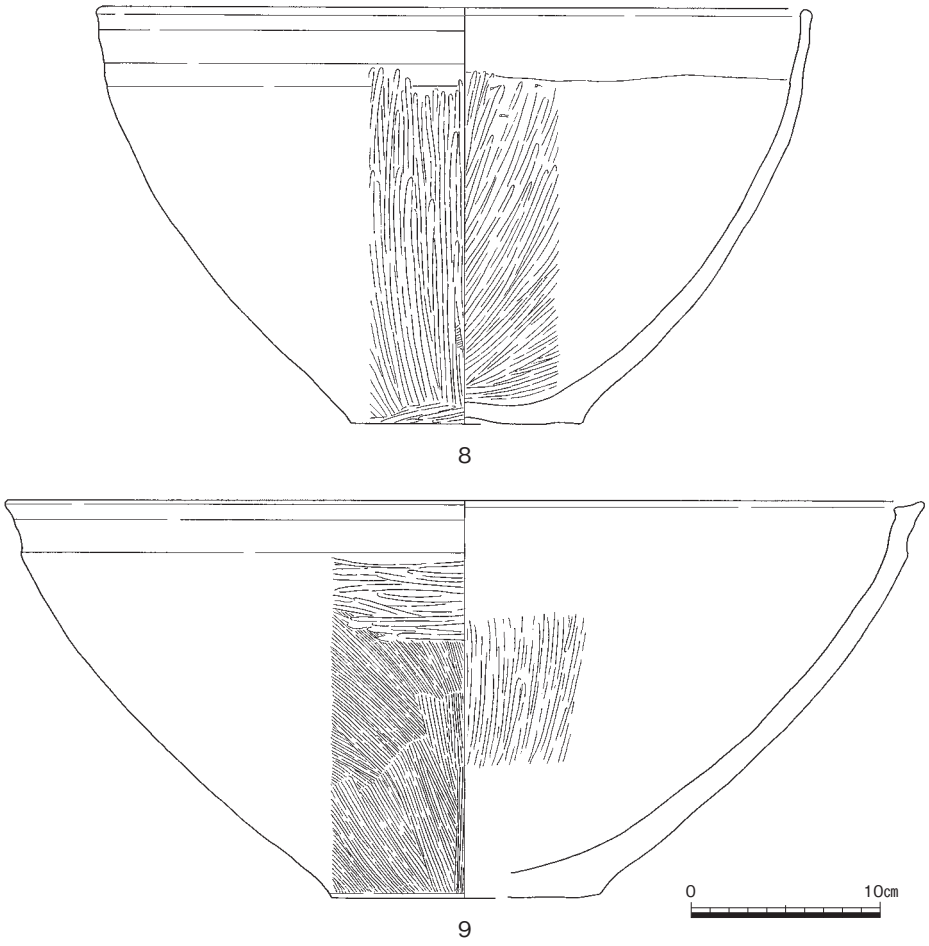
第15図　竪穴住居１出土遺物②（1/4）

性が考えられる。出土遺物には、壺１・２、甕３、高杯４～６、蓋７、鉢８・９、石器には安山岩製の太型蛤刃石斧Ｓ１、流紋岩製の砥石Ｓ２があり、鉄器では刀子Ｍ１がある。これらのうち土器については、写真９のように床面の西側でまとまって検出されており、残存状況も比較的良いものが多い。壺はいずれも大形のもので、口縁端部を面取りし、口縁下端部が拡張している。３は床面直上で出土している。口縁部は上方へ立ち上がる形状を持つが、外面には凹線を施し内面のケズリの位置がやや下がるものである。４は外反する口縁内面の半ばに段を持つ。７については、接地面の端部の形状が断面三角形状を呈しており上部外面が凸になっていることから蓋として掲載している。鉢も、壺同様に大形のものである。

これらの土器の特徴から、この竪穴住居の時期は、弥・後・Ⅱであると考えられる。

（圃）

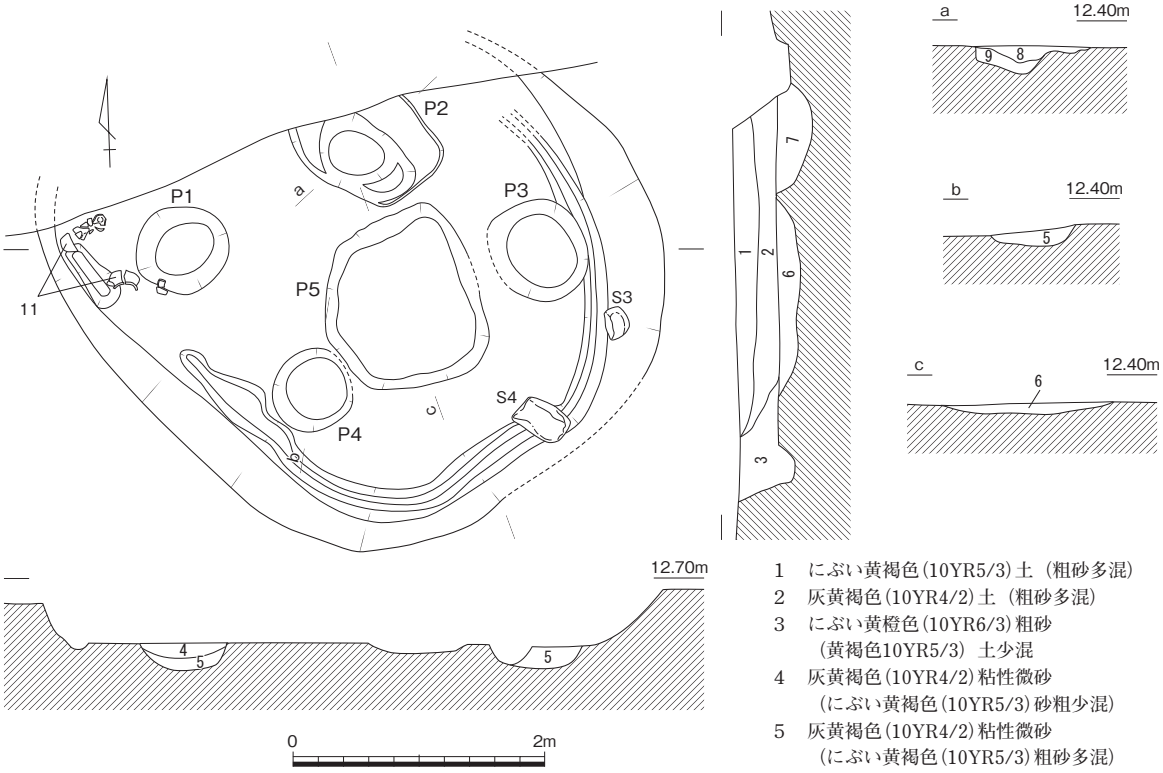
写真９　竪穴住居１土器出土状況（南西から）



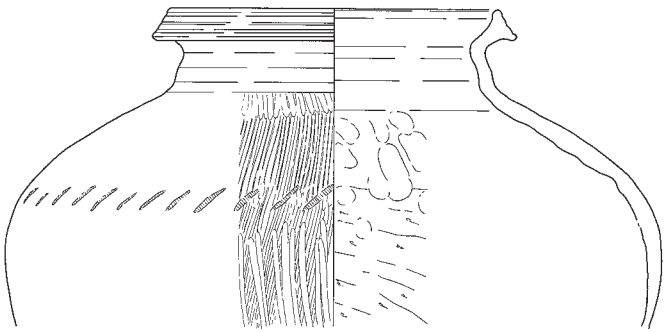
第16図　竪穴住居１出土遺物③（1/4）

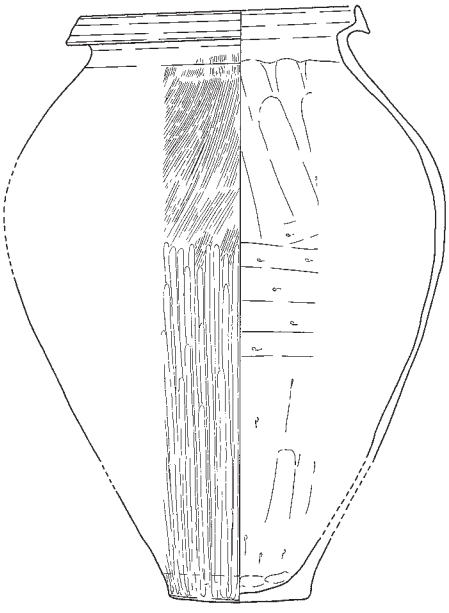
竪穴住居２（第12・17・18図、図版１－２・77、写真10）

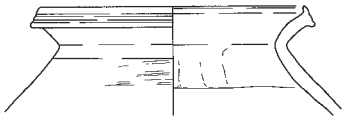
Ｊ05の西側に位置する竪穴住居で、河道２のすぐ東側に位置しており、北東側は土取りによって削平を受けている。平面形は隅丸方形を呈している。東側の上面部分の肩が崩れているものとも考えられるが、南東辺と南西辺の壁体溝が直線的に延びることから、元々隅丸方形の平面形であったと推測される。規模は418㎝と350㎝以上で、床面までの深さ35㎝を測り、床面の標高は12.18ｍである。主柱穴は４本で、柱穴同士は近接している。また、中央穴と考えられるＰ５は浅く、炭などの広がりは見られない。Ｐ１と壁体溝との間で甕11が一個体分、まとまって出土し（写真10）、南東側の壁体溝には、台石**Ｓ３・Ｓ４**が置かれている状況であった。出土遺物には、土器は壺10、甕11～15、高杯16～18、土製品は円板状土製品**Ｃ１**、石製品は台石**Ｓ３・Ｓ４**がある。**Ｃ１**は土器の転用であるが、復元される径からは想定される中心部分に穿孔は見られない。台石は、いずれも使用した痕跡が明瞭である。**Ｓ３**は花崗斑岩製、**Ｓ４**は石英斑岩製である。出土した土器はいずれも弥生時代後期の範疇のものであるが、時期幅が見られる。床面直上から出土しているものに甕11と高杯18があるものの、高杯18は上層出土のものとも接合できることから、河道２埋土のものが混在した可能性を考えたい。甕11は、内面のケズリが体部半ばまで施され、口縁部には凹線が見られる。高杯は16のように口縁部を直線的に立ち上がるものと、17のように口縁部の立ち上がりを外方へ開くものが見られる。これらの遺物からこの竪穴住居の時期は、弥生時代後期前半の範疇に収まるものと考える。　（圃）



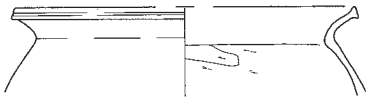
1　にぶい黄褐色(10YR5/3)土（粗砂多混）
2　灰黄褐色(10YR4/2)土（粗砂多混）
3　にぶい黄橙色(10YR6/3)粗砂
　（黄褐色10YR5/3）土少混
4　灰黄褐色(10YR4/2)粘性微砂
　（にぶい黄褐色(10YR5/3)砂粗少混）
5　灰黄褐色(10YR4/2)粘性微砂
　（にぶい黄褐色(10YR5/3)粗砂多混）
6　褐灰色(10YR4/1)細～粗砂
7　〈Ｐ２〉
8　暗褐色(10YR3/4)シルト質細砂
9　褐色(10YR4/6)砂質土

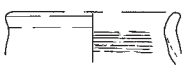

10

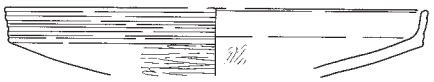

11

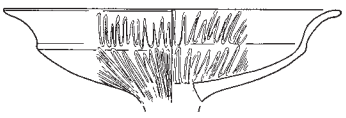

12

14


13


15

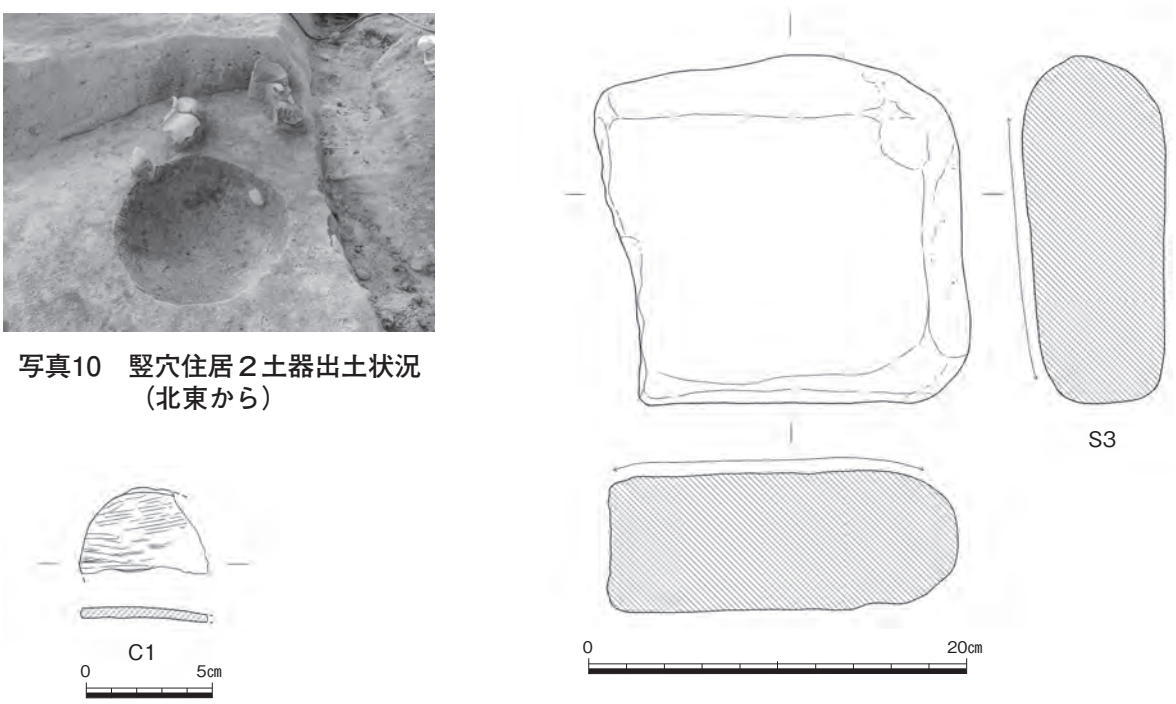

16


18

17

第17図　竪穴住居２（1/60）・出土遺物①（1/4）

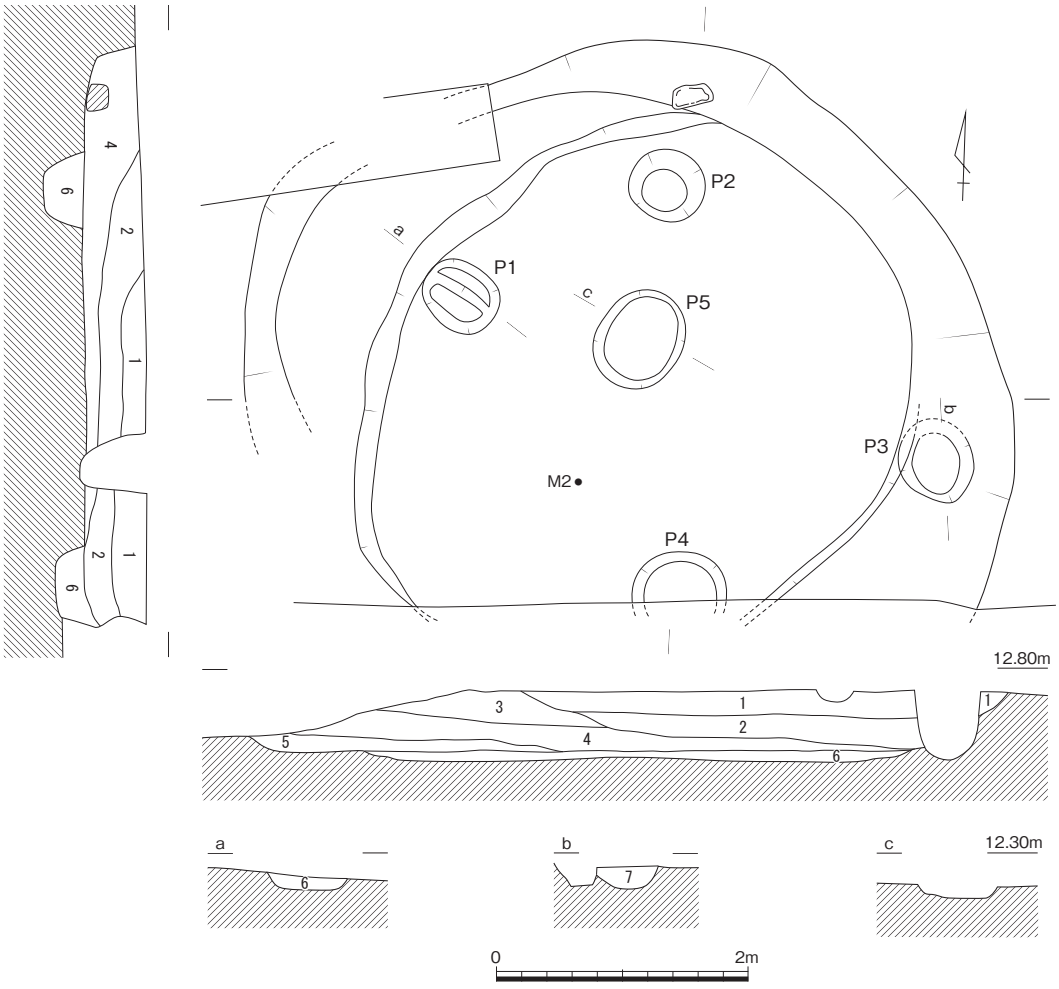
写真10　竪穴住居２土器出土状況
（北東から）



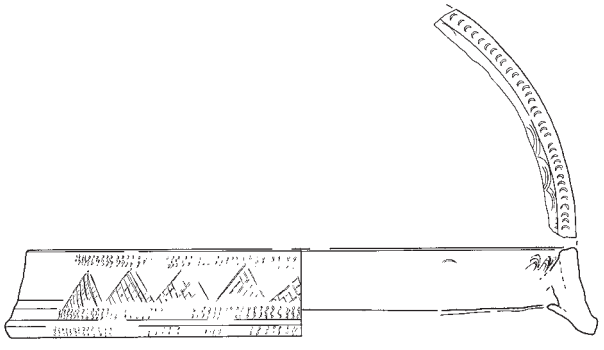
第18図　竪穴住居２出土遺物②（1/3・1/4・1/6）

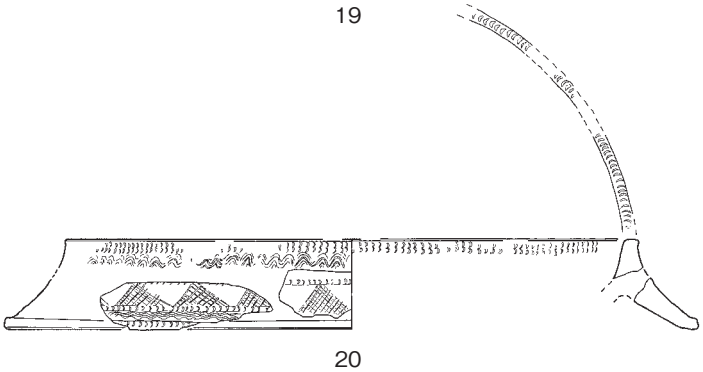
竪穴住居３（第12・19～22図、図版１－３）

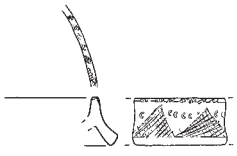
Ｊ05の南、竪穴住居２の南側に位置している。東側の一部は河道２と重複しており、削平を受けている。平面形は円形を呈すると考えられるが、中央穴と考えられるＰ５と４本の主柱穴が南東側へ偏っており、Ｐ３については、床面ではなく壁面で検出しているものである。壁体溝は検出していない。規模は長軸、短軸ともに505㎝、検出面から床面までの深さ36㎝で、床面の標高は12.14～12.08ｍ

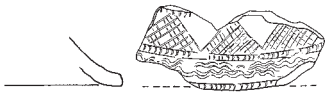


1　灰黄褐色(10YR4/2)細～粗砂土
　（にぶい黄橙色(10YR6/4)粘質土塊含）
2　灰黄褐色(10YR4/2)細～粗砂土（粗砂多含）
3　褐灰色(10YR4/1)細～粗砂土
4　黒褐色(10YR3/1)細～粗砂土
5　にぶい黄褐色(10YR5/4)細～粗砂土
6　黒褐色(10YR3/1)粘性微砂（礫混）
7　黒褐色(10YR3/1)微砂

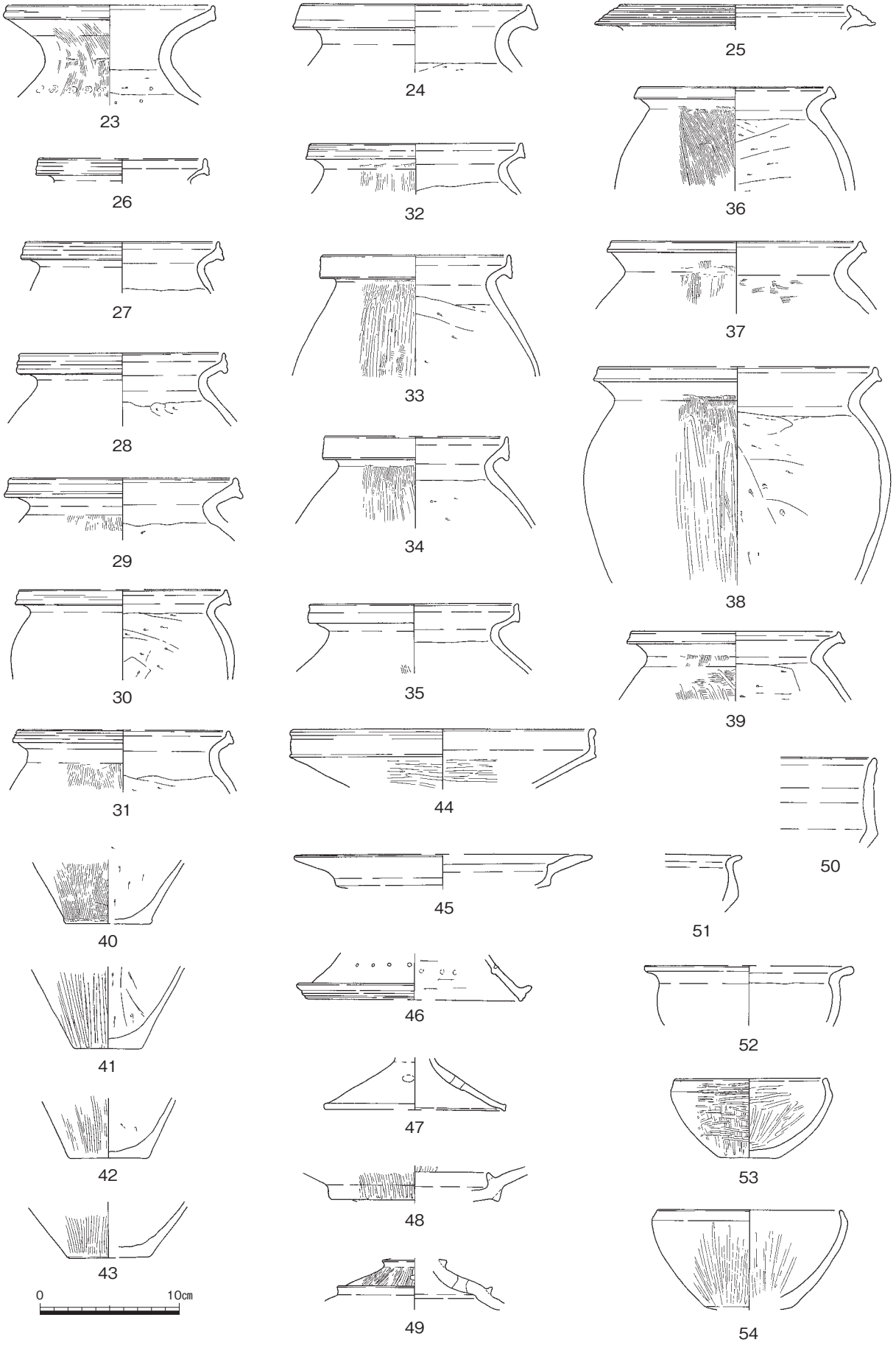

19


20

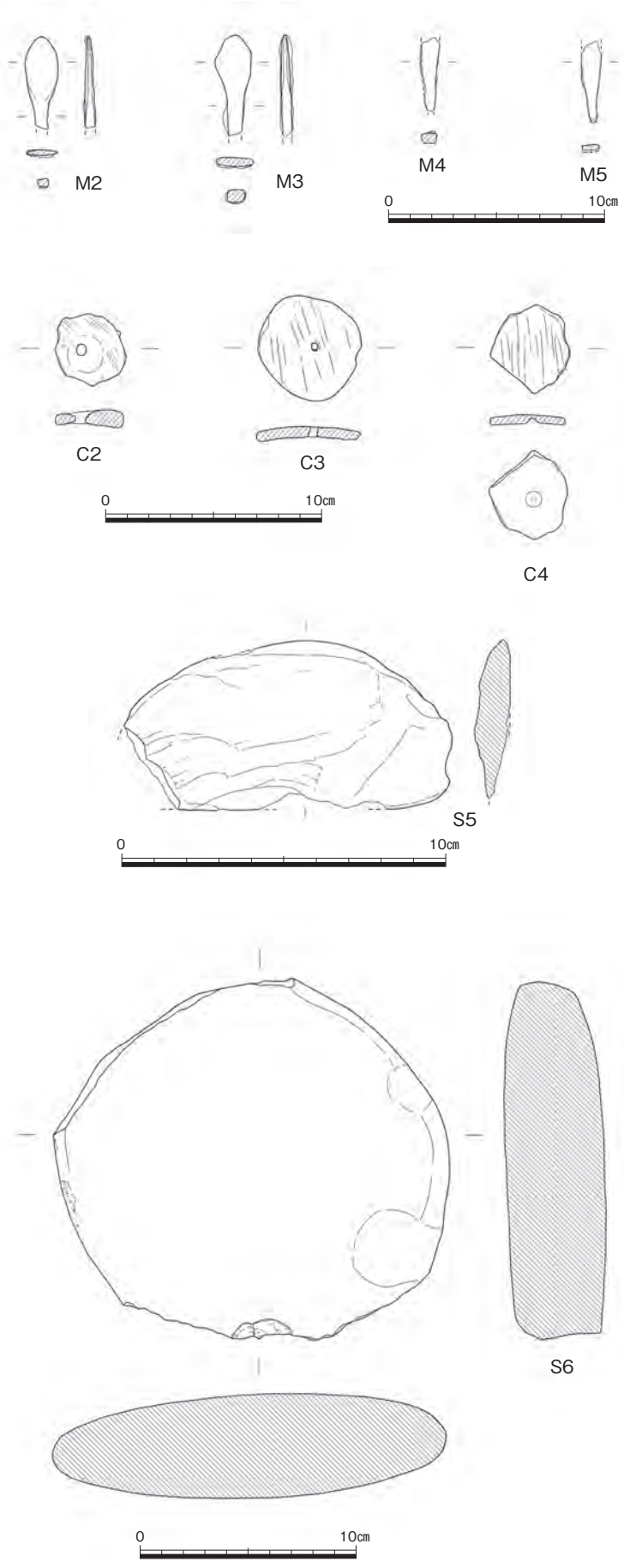

21


22

第19図　竪穴住居３（1/60）・出土遺物①（1/4）



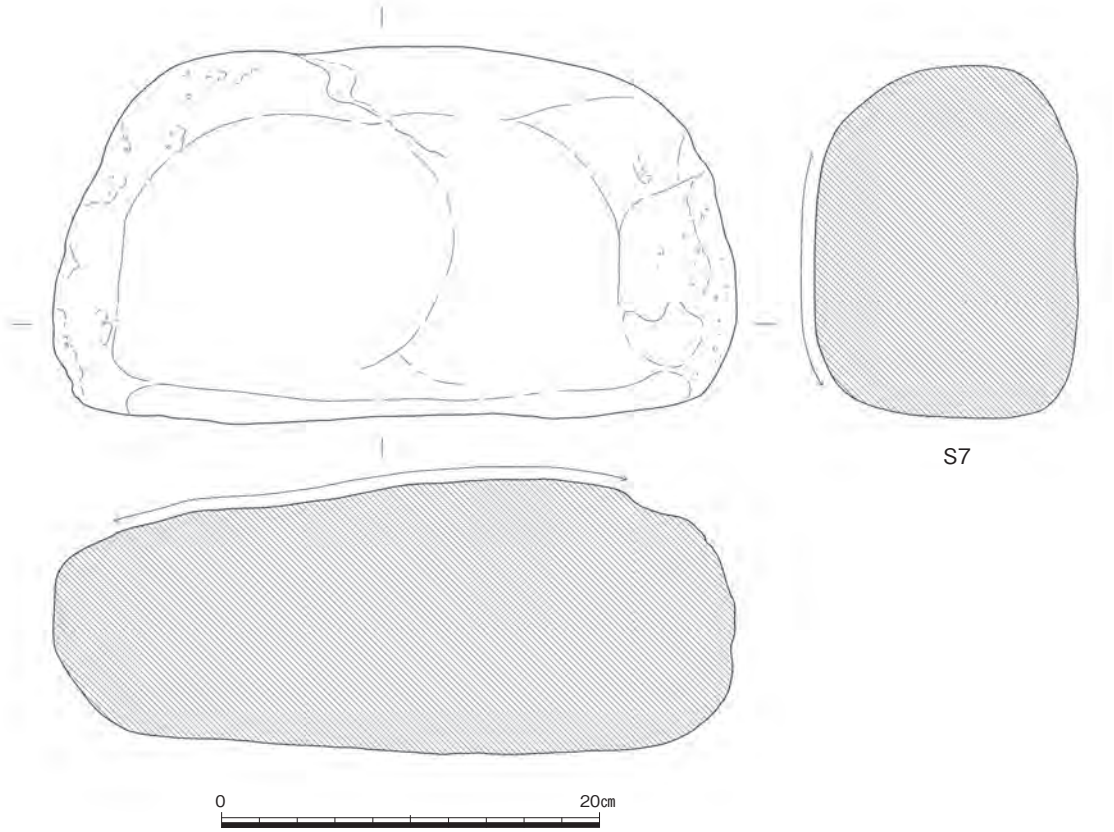
第20図　竪穴住居３出土遺物②（1/4）



第21図　竪穴住居３出土遺物③（1/3・1/2）

である。周辺の他の竪穴住居と比較して、床面までの深さは深い。土層断面の観察から、西方向から埋土が埋まっている状況が見られるため、河道２からの流入土によるものである可能性が考えられる。土層断面から第６層が貼り床と想定したが、礫を含むものであることからその可能性は低いと思われ、Ｐ１、Ｐ２の西側は４㎝程度高く、ベッド状遺構を設えていた可能性が考えられる。中央土坑Ｐ５は80×66㎝、深さ10㎝の浅いもので、炭層などは検出していない。床面からは、鉄鏃**Ｍ２**と台石**Ｓ７**が出土している。

出土遺物は、図示した土器は36点と多いものの、全体的に細片が多い。土器には、装飾器台もしくは装飾高杯と考えられる19～22、壺23～43、高杯44～49、鉢50～54、鉄鏃**Ｍ２～Ｍ５**、土器を転用して作られた円板状土製品**Ｃ２～Ｃ４**、粘板岩製の打製石包丁**Ｓ５**、石英安山岩製の敲石**Ｓ６**、石英斑岩製の台石**Ｓ７**がある。これらの出土遺物には時期幅が認められ、新しい時期のものとしては弥生時代後期後半のものと考えられる、短脚で明赤褐色を呈する高杯47が床面付近から出土しているほか、鉢53・54がある。その他の大多数の土器は、弥生時代後期前半の範疇に収まるものと考えられる。遺構の時期は、竪穴住居２と同様に新しい時期の遺物は河道２からの混入と考えられるならば、弥生時代後期前半の時期であると考えられる。　（圃）



第22図　竪穴住居３出土遺物④（1/4）

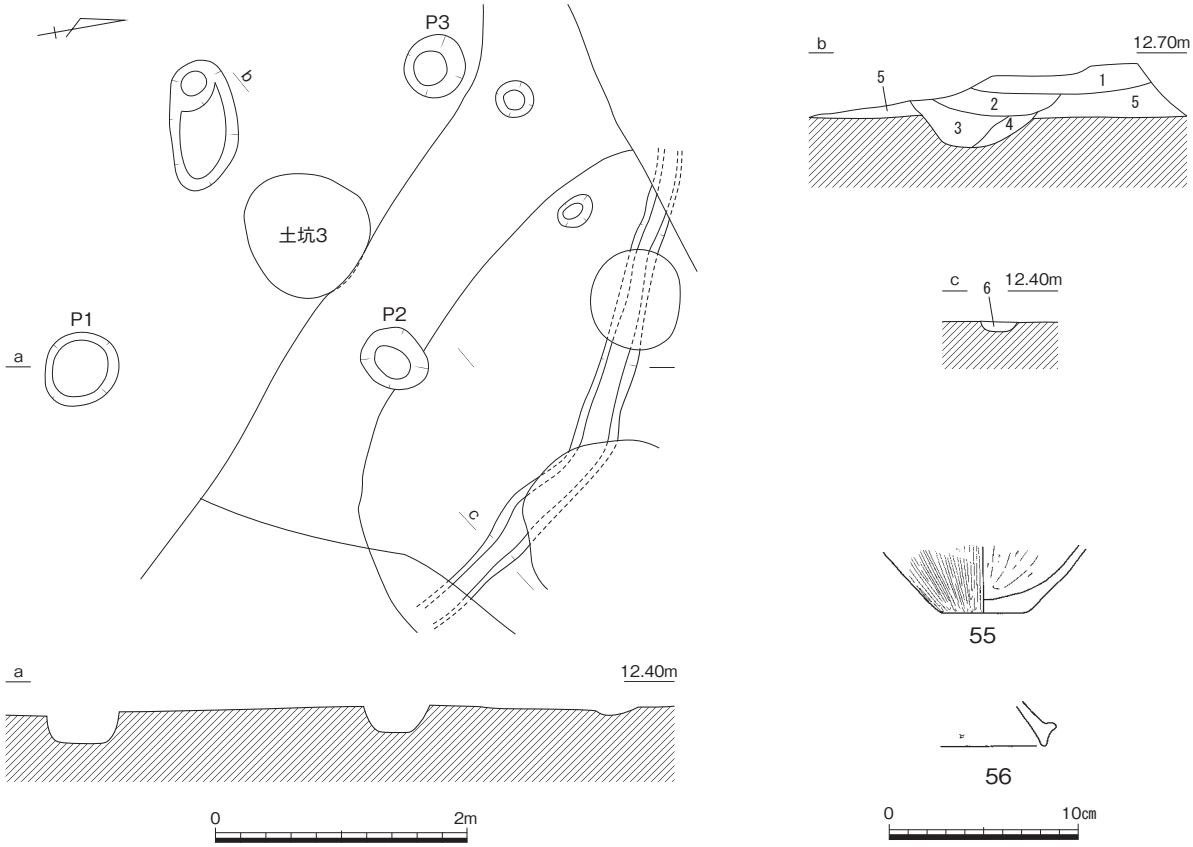
竪穴住居４（第12・23図）

Ｊ04の南東端、竪穴住居２の西側に位置する竪穴住居である。河道２に接しており、西側を河道２によって大幅に削平されている。また、東側は竪穴住居２によって削平されており、柱穴と壁体溝の一部を検出するにとどまっている。また、壁体溝は竪穴住居２の床面下層のみで検出することができた。主柱穴はその配置から、本来４本であると考えられ、そのうちの３本（Ｐ１～３）を検出している。Ｐ２と壁体溝の距離から、直径およそ6.5ｍの円形を呈する竪穴住居であると考えられる。本来の検出面から床面までの深さは41㎝を測る。土層断面にある第２～４層は土坑３の埋土であるため、土層断面の観察からは、竪穴住居２が一定程度埋まった段階で掘削された土坑であることが理解される。竪穴住居埋土に偽礫も含まないことからも、この竪穴住居は自然に埋没し、人為的な埋め戻しが行われていないことが判る。

出土遺物には、図示したものでは甕**55**、高杯**56**があるが、出土量も少ない。**55**は壁体溝から出土している。底部のみの出土である。**56**の脚端部は、断面三角形状を呈するものである。遺構の時期は、土器の特徴と遺構の切り合い関係から、弥生時代後期前半のものであると考えられる。　（團）

竪穴住居５（第12・24～26図、図版２－１・77・107・119）

Ｉ05南東で調査区北部に位置する。周辺の遺構の分布状況から、集落の北端にあたると考えられる。基盤層はしまりのない粗砂層で、北半は中世以降の溝により既に床面付近まで掘削されていたため、埋土は南半でしか確認できなかった。検出時は壁面が緩やかに下がることと立地からたわみ状遺構と考えたが、床面で柱穴Ｐ１～Ｐ９が検出されたことから径約860㎝を測る円形の竪穴住居と判断した。



1　灰黄褐色(10YR5/2)土（粗砂混）
2　灰黄褐色(10YR4/2)土（小礫少混）
3　暗褐色(10YR3/3)細砂
4　にぶい黄橙色(10YR6/4)細～粗砂
5　にぶい黄褐色(10YR5/4)土（粗砂多含）
6　黒褐色(10YR3/1)微砂

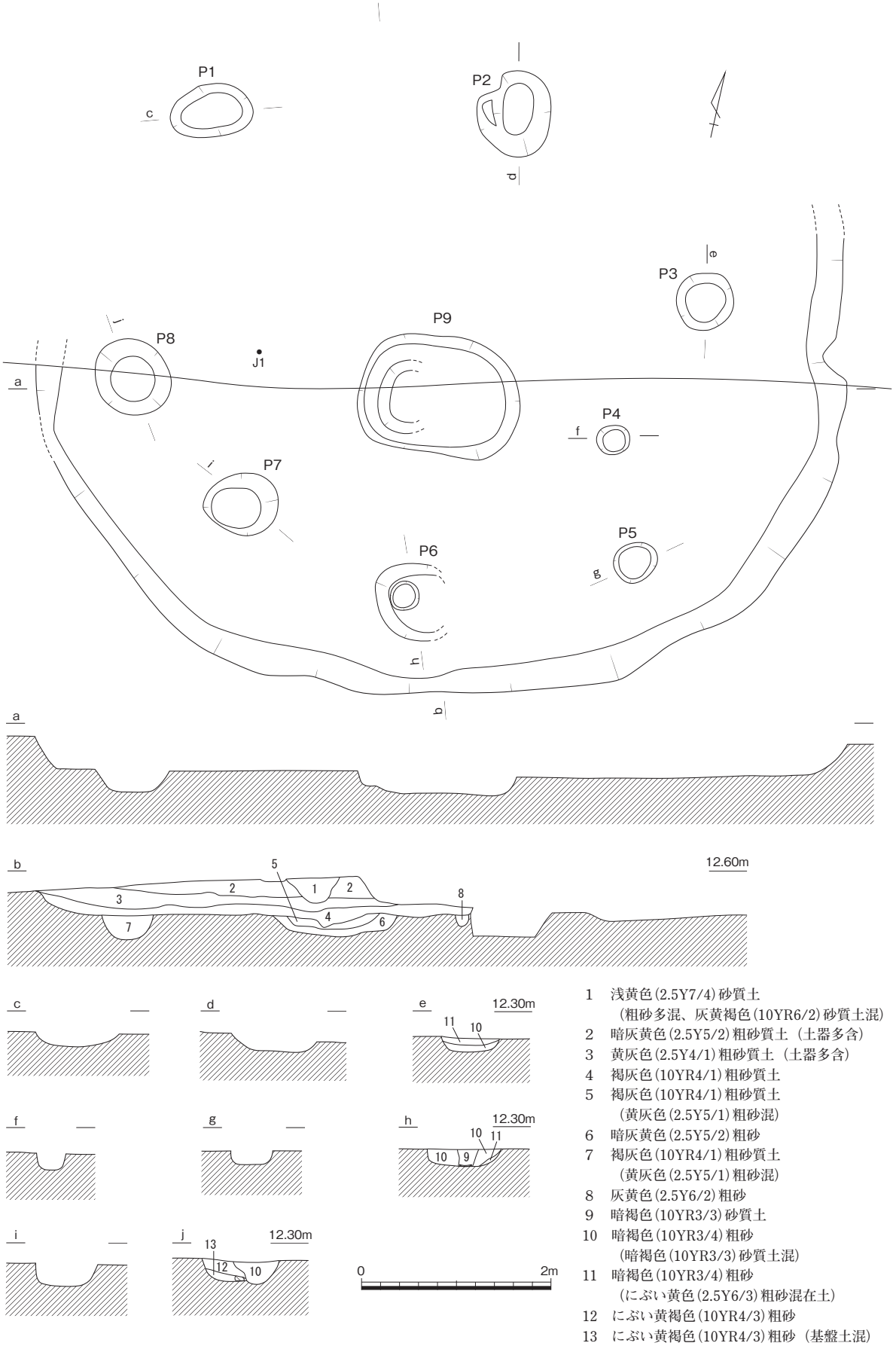
第23図　竪穴住居４（1/60）・出土遺物（1/4）

埋土は大きく３層に分層され、第２・３層には比較的土器片が多く含まれるが、いずれも粗砂質で自然堆積層と推察される。第７層が溝状の断面を呈しているが、床面では壁体溝は検出されず、主柱穴は配置からＰ１～３・Ｐ５～８の７本と考えられる。土質の影響からか掘り方の規模は約40～90㎝とばらつきがあるが、深さは約20㎝である。中央穴と想定したＰ９はほぼ中央に位置し、上面170×120㎝、深さ約20㎝を測る。埋土中には炭・焼土は見られない。

出土遺物は、第２・３層を中心に弥生土器、石器などがある。土器には、壺57・59、器台60、甕61～71、高杯72～77、脚78・80、鉢58・79・81・82があり、これらのうちＰ６から67・73、Ｐ７から63、Ｐ８から65、Ｐ９から68、床面から59・64・69・74が出土した。Ｊ１はＰ８とＰ９の間の床面で出土したもので青色をした完形品である。粘板岩製の打製石包丁Ｓ８はＰ１近くの床面で出土した長さ85.7㎜の完形品で、片面に円礫の自然面を残す。サヌカイト製の剥片Ｓ９は埋土中から出土したもので上面が平らで、上下からの打撃による大きな剥離面を有している。最大長57.1㎜、最大幅66.0㎜、最大厚9.3㎜を測る比較的大形であることから、打点は見られないが素材と推察される。

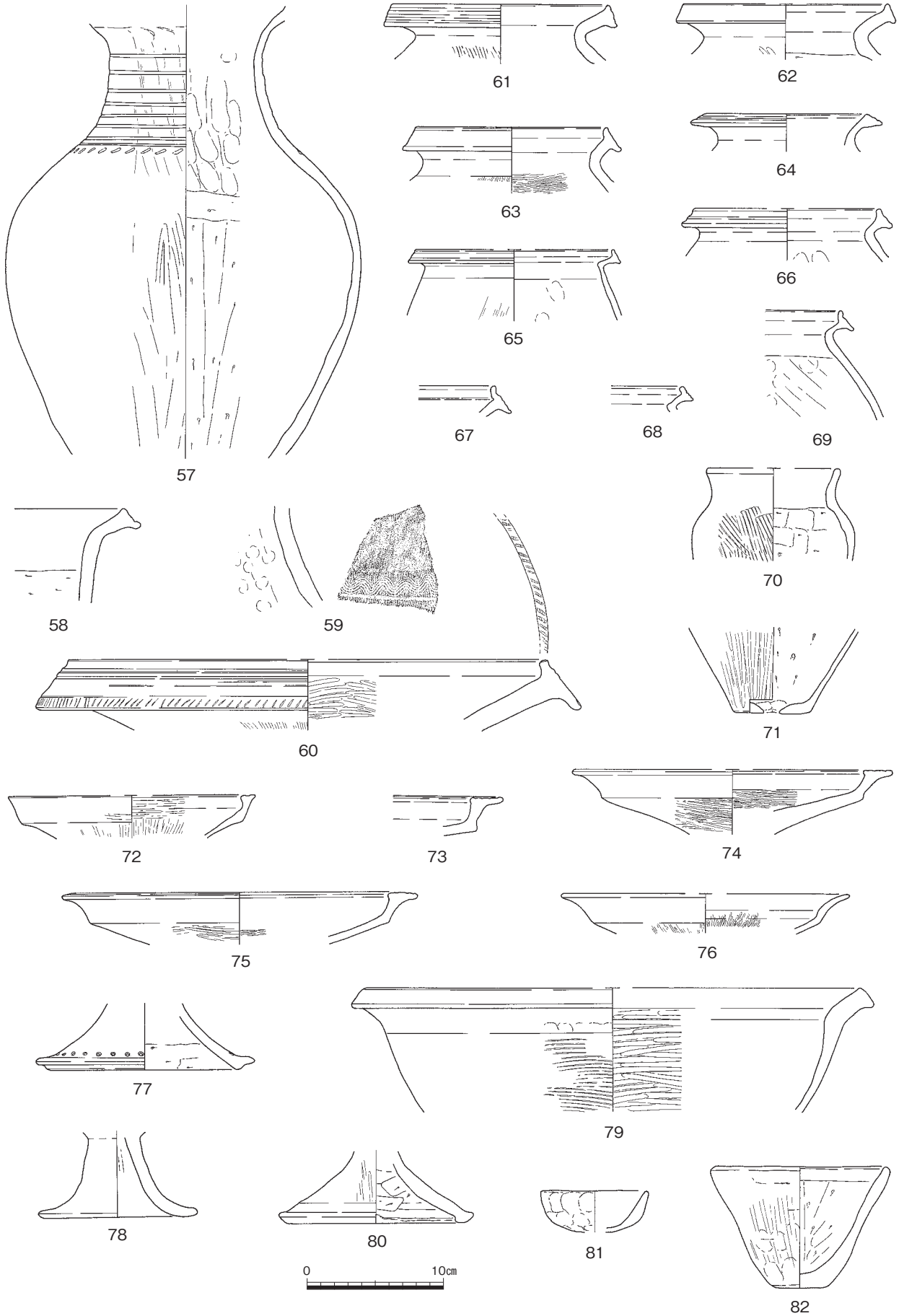
時期は床面と柱穴から出土した土器から弥・後・Ⅱと考えられ、集落内では古い時期を示している。

なお、竪穴住居掘り方の南外側に土坑８・９がある。北側の状況が不明ではあるが、周辺に他に該期の遺構がないことから、本竪穴住居に関連する遺構の可能性がある。　（杉山）

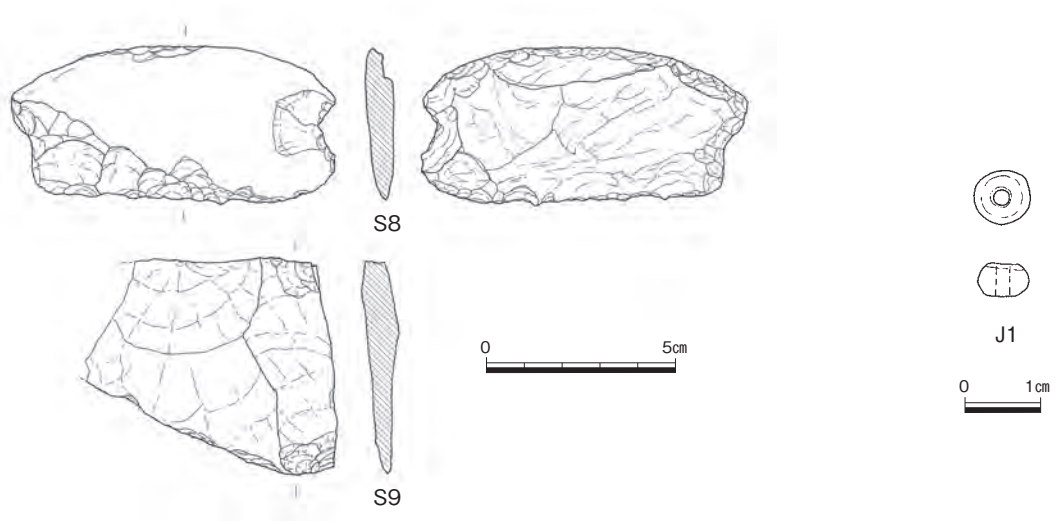


1　浅黄色(2.5Y7/4)砂質土
　(粗砂多混、灰黄褐色(10YR6/2)砂質土混)
2　暗灰黄色(2.5Y5/2)粗砂質土（土器多含）
3　黄灰色(2.5Y4/1)粗砂質土（土器多含）
4　褐灰色(10YR4/1)粗砂質土
5　褐灰色(10YR4/1)粗砂質土
　(黄灰色(2.5Y5/1)粗砂混)
6　暗灰黄色(2.5Y5/2)粗砂
7　褐灰色(10YR4/1)粗砂質土
　(黄灰色(2.5Y5/1)粗砂混)
8　灰黄色(2.5Y6/2)粗砂
9　暗褐色(10YR3/3)砂質土
10　暗褐色(10YR3/4)粗砂
　(暗褐色(10YR3/3)砂質土混)
11　暗褐色(10YR3/4)粗砂
　(にぶい黄色(2.5Y6/3)粗砂混在土)
12　にぶい黄褐色(10YR4/3)粗砂
13　にぶい黄褐色(10YR4/3)粗砂（基盤土混)

第24図　竪穴住居５（1/60）



第25図　竪穴住居５出土遺物①（1/4）



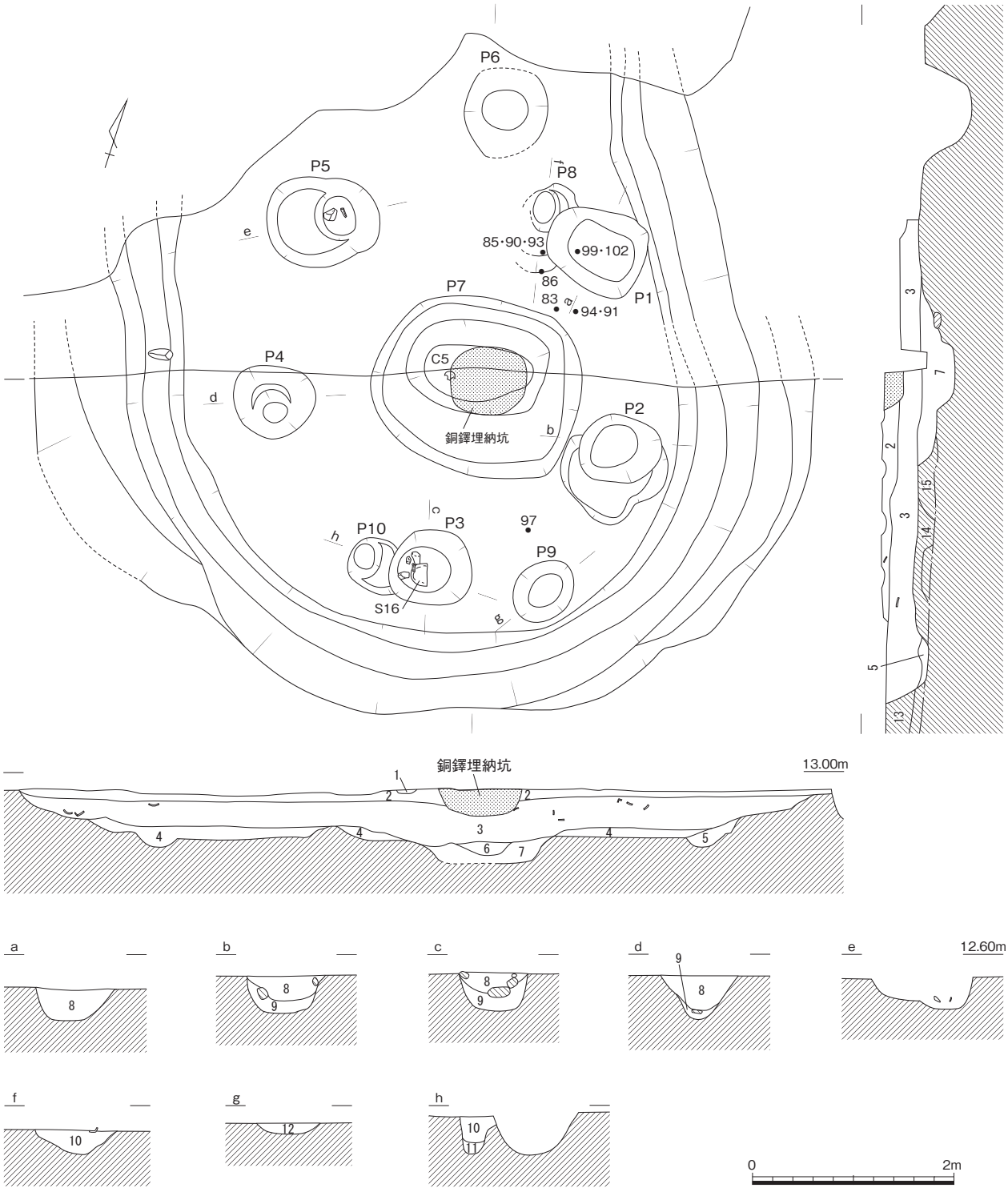
第26図　竪穴住居５出土遺物②（1/2・1/1）

竪穴住居６（第12・27～31図、図版２－２・77・107・111・115、写真11）

Ｊ06北西角、竪穴住居５の南東に位置し、路線外南方から延びる微高地上に立地している。調査前、調査地北半は水田、南半は畑地で、微高地斜面部にあたる北側は開墾や土取りにより削平されていた。また、遺構の状況を把握しない段階で調査区を南北に分けて北側の調査を先行したため、竪穴住居中央に東西方向の側溝を掘削し、多くの部分を削平してしまった。また、北半調査時に銅鐸埋納坑の存在にも気付いていなかった。第27図に示した東西断面は北側調査区の側溝南壁にあたる。

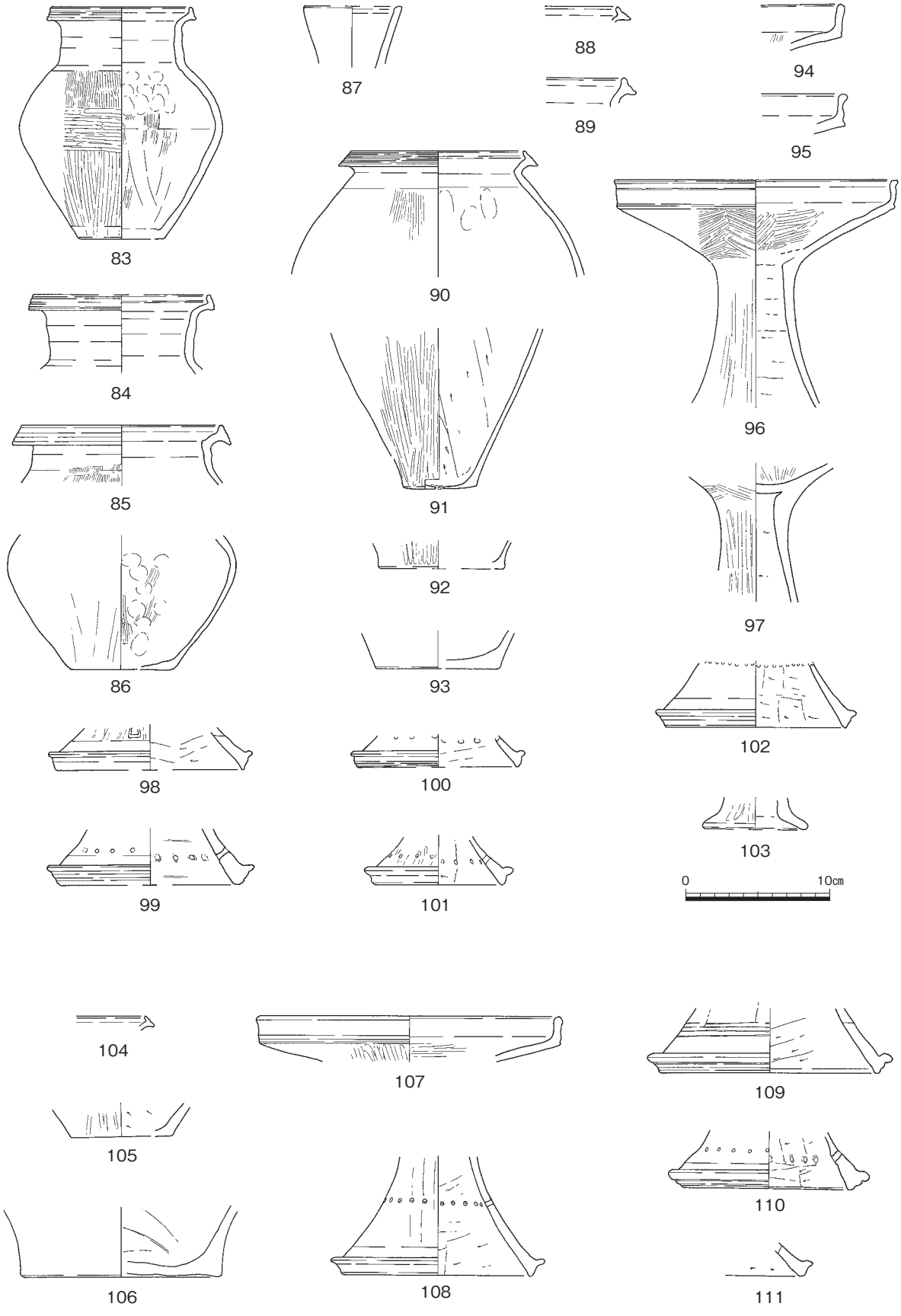
検出面の標高は約12.70ｍで、竪穴住居５との比高は40㎝を測る。表土直下で検出したが、上部は耕作により著しく攪乱されていた。第１層は近世以降の耕作痕にあたる。残存する規模は南北642㎝、東西636㎝で、柱穴及び壁体溝の状況から、楕円形と考えられる。断面は、肩口が崩落して擂り鉢状を呈し、壁体溝も本来より幅が広くなっている可能性がある。埋土は基盤や周辺の遺構同様に縞状構造が発達しており、堆積層の分離が困難であったため、東西土層断面を参考に人為的にレベルを設定し、おおむね５㎝ずつ段階的に掘り進めていった。特に床面近くの遺物は注意を払い、遺物の分離に努めた。主柱穴はＰ１～６と考えているが、Ｐ１・３は２本重複しており、建て替えられた可能性がある。この場合、配置から古段階にＰ６が伴うとは考え難く、Ｐ８・２・10・４・５の５本柱と想定される。床面は貼り床や被熱面などは確認できなかった。砂礫で凹凸が激しい。中央土坑Ｐ７は二段掘りで、上段で206×159㎝、下段で130×80㎝、深さ約30㎝を測る。中央やや西寄りで分銅形土製品**Ｃ５**が出土した。底より10㎝強浮いた、下段の上面とほぼ同じレベルで出土した。表を上に向けてほぼ水平な状態で出土しており、中央土坑を埋めるにあたって意図的に置かれた可能性が考えられる。

出土遺物のうち、**83～103**は床面近く、**104～111**は柱穴や壁体溝、**112～167**は中・上層、**168～176**は検出時に出土した土器である。Ｐ１・８周辺では、土器細片が比較的多く出土した。壺、甕、高杯があるが、柱穴出土土器では高杯の占める割合が高い点を指摘しておく。Ｐ３からは台石**Ｓ16**も出土した。打製石器はすべてサヌカイト製で、**Ｓ13**・**Ｓ14**にはコーングロスらしき光沢が認められる。砥石**Ｓ17**は上面出土である。**Ｃ５**は厚手・大形で、白く堅致に焼き上げられている。表面は櫛描き文で飾られ、全面に丁寧にミガキが施された優品である。壁体溝及び中央土坑内の土器はすべて白色～浅橙色で中期後葉に位置付けられる。柱穴内土器や下層土器は赤色化しているが形態は中期と区別が難しいものが含まれていた。形態から後期に下る壺**115**・**116**、高杯**157**・**158**などは上層からの出土で

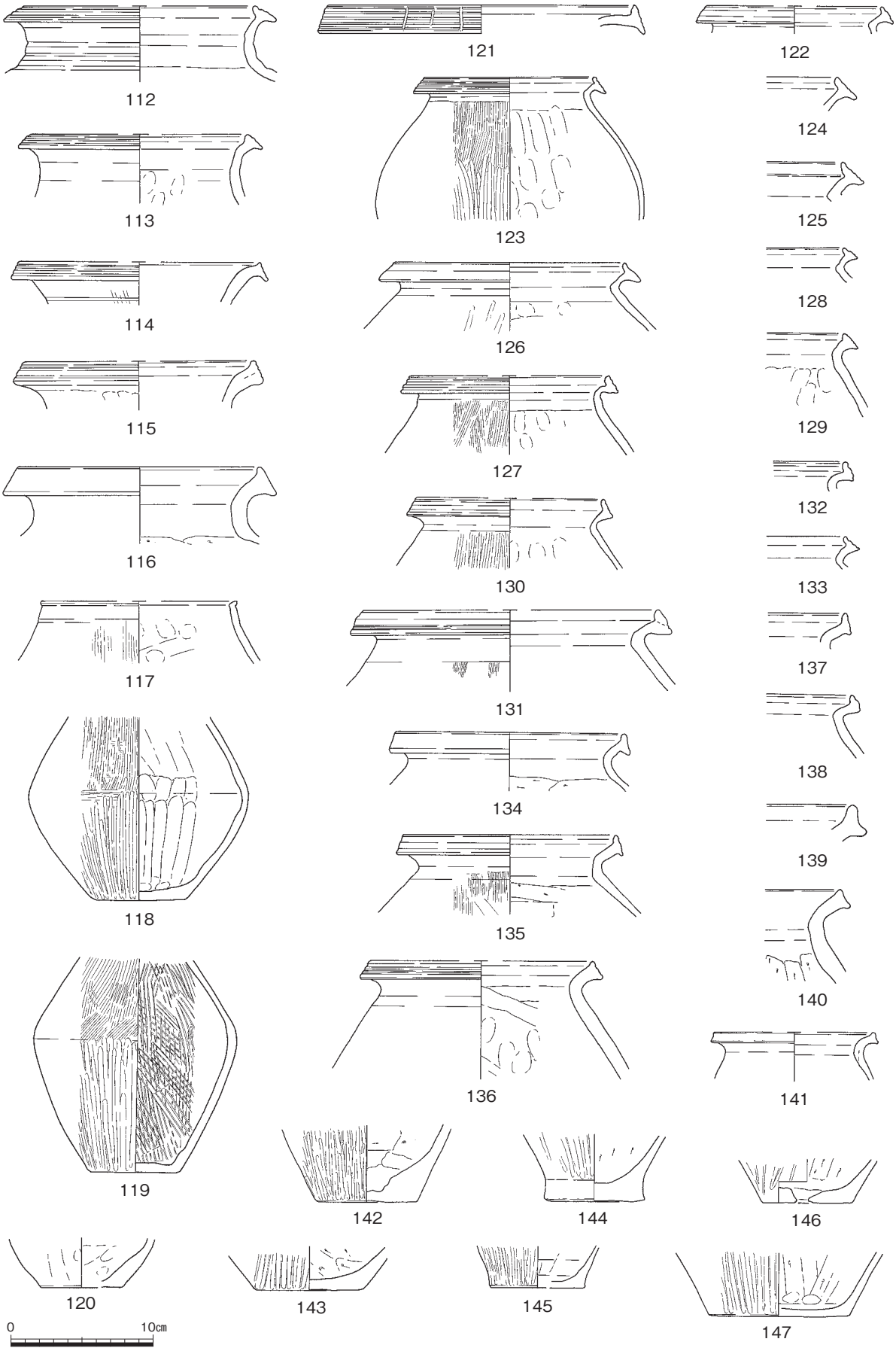


1　耕作土
2　暗褐色(10YR3/3)砂質土
3　暗褐色(10YR3/4)砂質土（礫少混）
4　暗褐色(10YR3/4)粘性粗砂
5　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性粗砂
6　暗褐色(10YR3/4)粗砂
7　にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土
8　黒褐色(10YR3/2)粘性砂質土（黄色土粒多混）
9　暗褐色(10YR3/3)砂質土（黄褐色土粒含）
10　暗褐色(10YR3/3)粘性砂質土（黄褐色土粒やや多含）
11　灰黄褐色(10YR4/2)粘性砂質土
12　暗褐色(10YR3/4)粘性砂質土（黄褐色土粒少含）
13　暗褐色(10YR3/4)砂質土
14　礫
15　粗砂

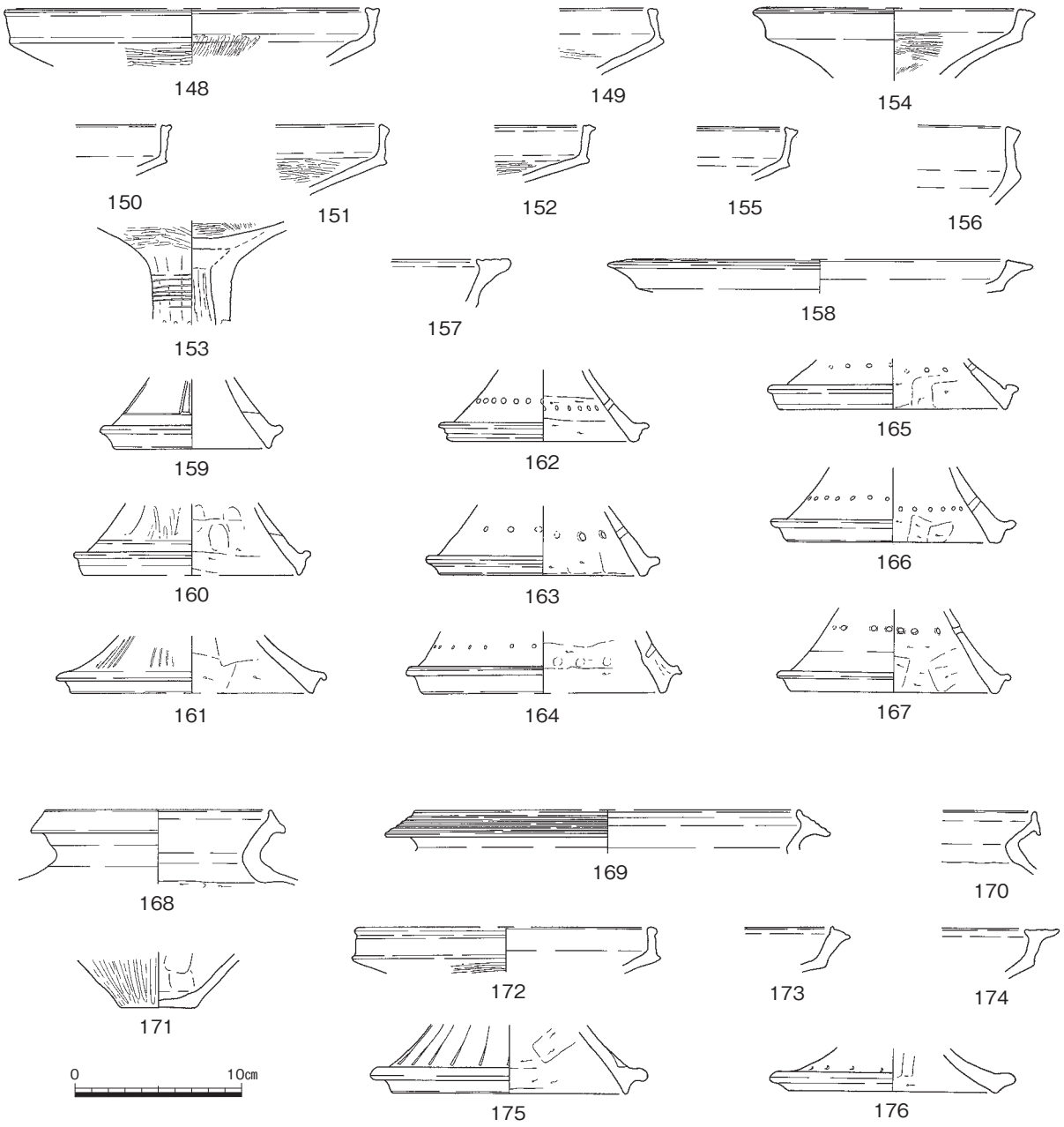
第27図　竪穴住居６（1/60）



第28図　竪穴住居６出土遺物①（1/4）



第29図　竪穴住居６出土遺物②（1/4）



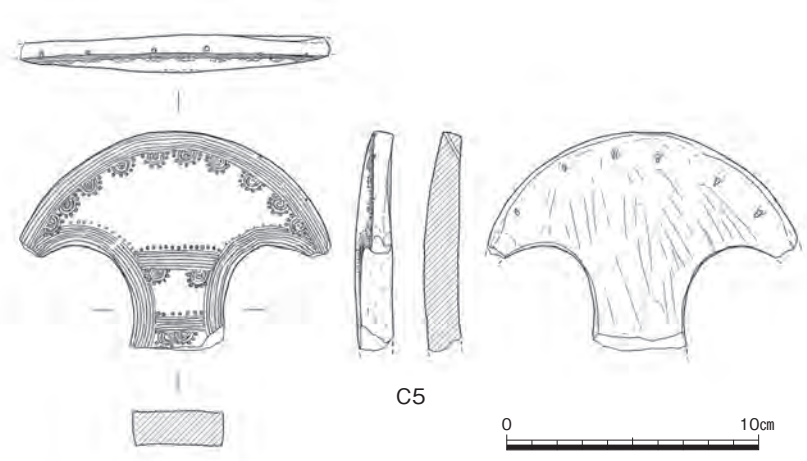
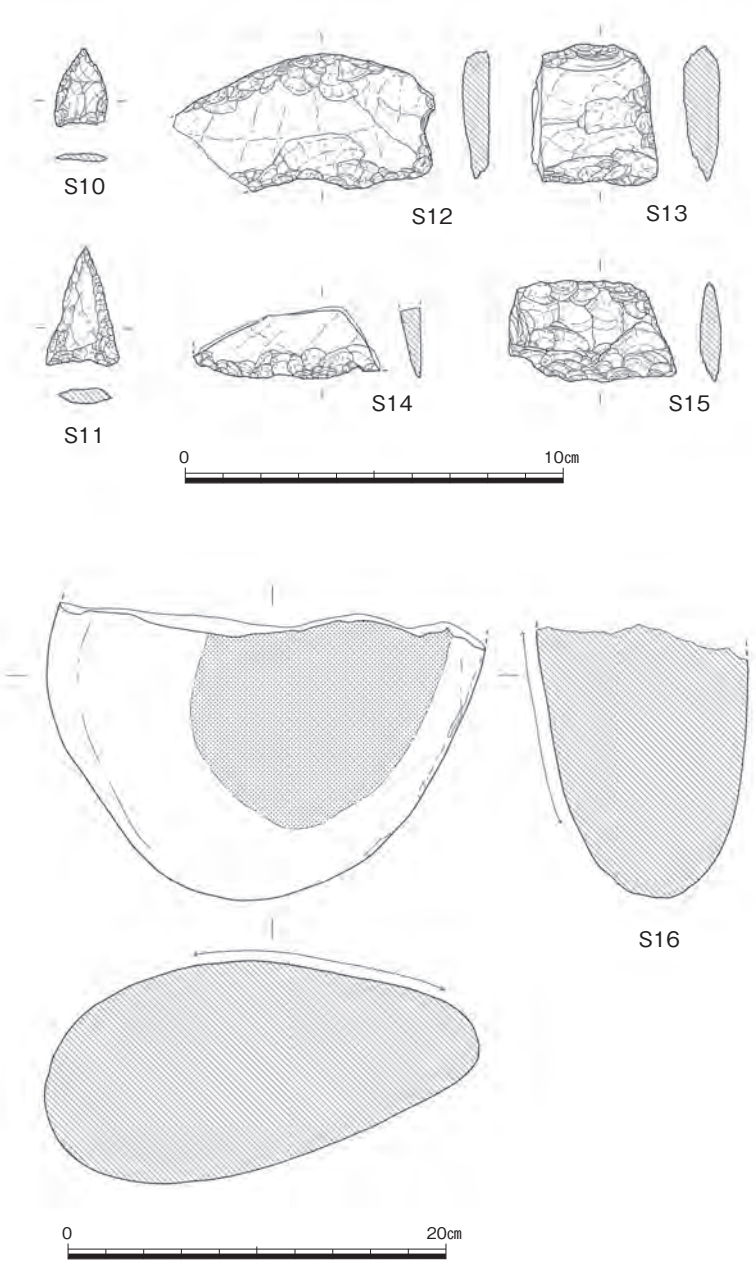


写真11　Ｃ５出土状況
（北から）

第30図　竪穴住居６出土遺物③（1/4・1/3）



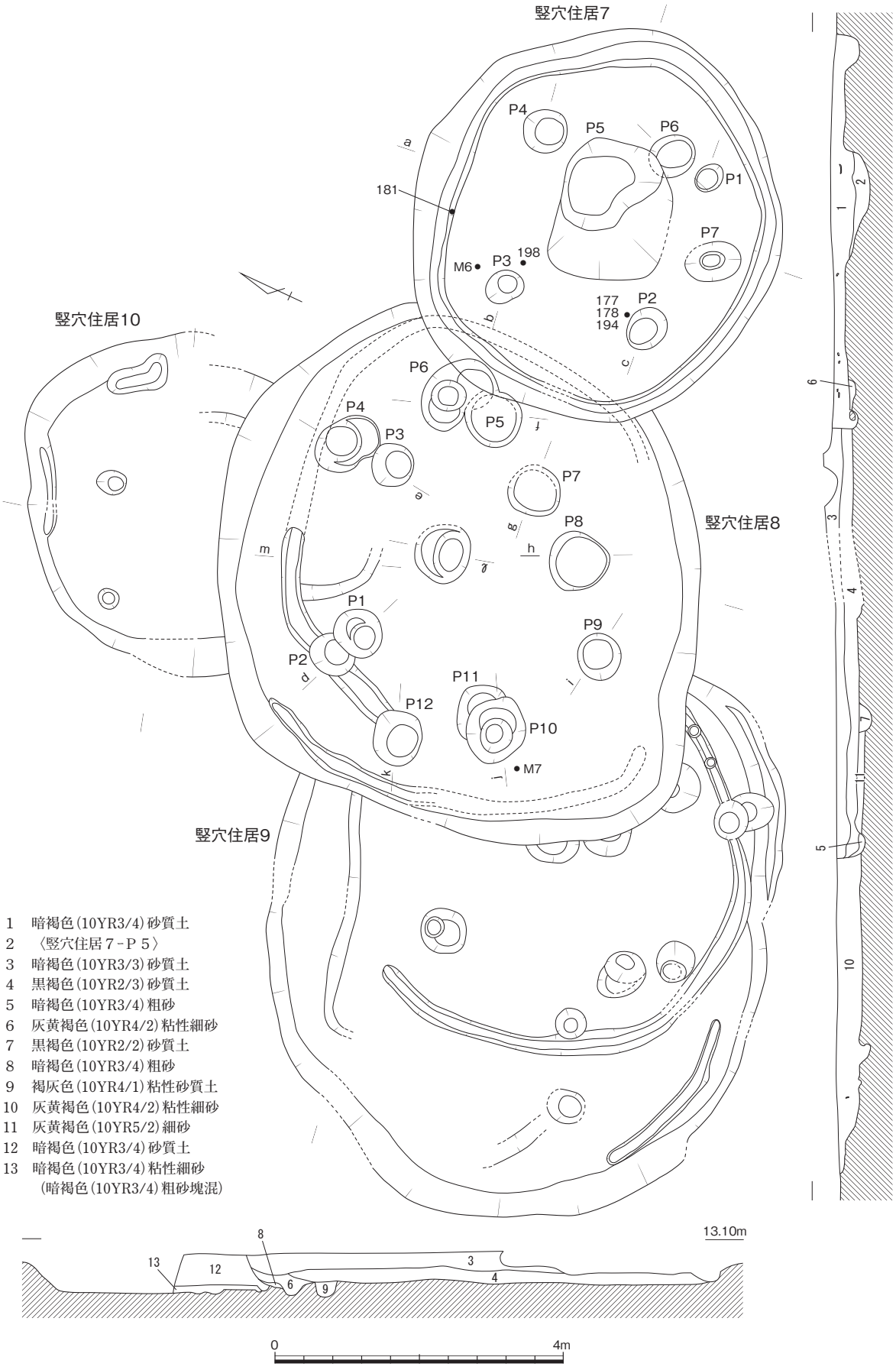
ある。赤色の土器片を含む割合は下層で約１割、上層で５割程度である。上層からは古代～中世の椀も出土し、明らかな混入も認められる。最下層から出土した甕89は赤色化しているが口縁端部を強く下に引き出しており、中期的な様相が認められる。一方、最も新しく位置付けられるのは高杯158などで、口縁端部上面を外方に引き出している。このような状況から、本竪穴住居は中期の終わり頃に造られ、後期の早い段階で埋没したと考えられ、弥・中・Ⅲ～弥・後・Ⅰに位置付けられる。(渡邉)

第31図　竪穴住居６出土遺物④（1/2・1/3・1/4）

竪穴住居７（第12・32～34図、図版２－３・３－１・107・116）

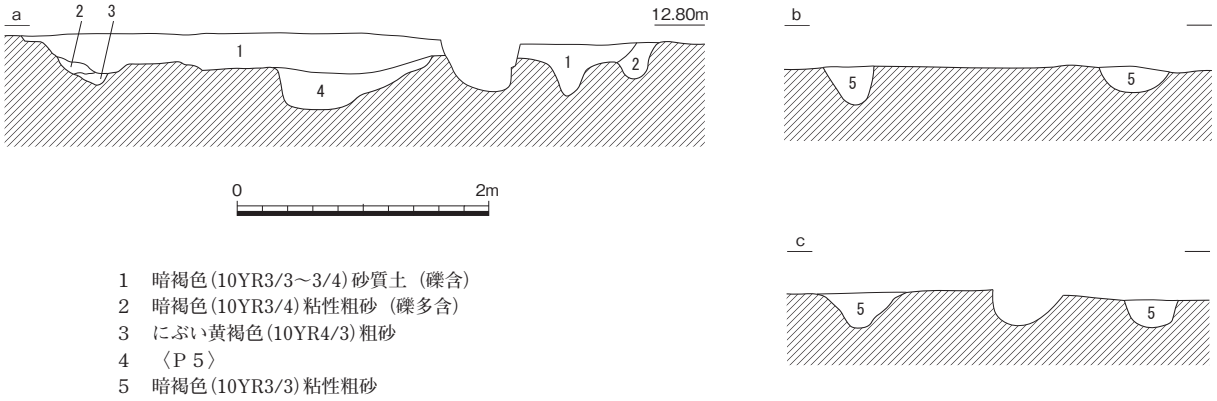
竪穴住居６の南西に位置する。今回の調査の中では最も高所に位置する一群の、少なくとも４軒が重複する中で最も新しい竪穴住居である。径6.5～6.8ｍの円形で、Ｐ１～４を主柱とすると想定したが、ベースが砂のため肩が崩れて、本来の形状をとどめていない遺構が多くあった。本竪穴住居もＰ１・３・４外側がやや強く屈曲し、壁体も直線的である点から、五角形であった可能性も考えられる。この場合、主柱穴はＰ２～３・６・７の５本と想定できよう。だが、埋土の分層はできず、堆積状況からは判断できない。中央土坑Ｐ５も土坑16と重複しているため、東側を本来より大きく検出した可能性がある。Ｐ５からは甕186・鉢205、打製石包丁Ｓ18が出土した。

出土土器はすべて細片で、中期後葉から後期後葉までの幅が認められる。しかし、他遺構からの混入もあり、床近くや下層から壺179・180や高杯197が出土していることから、後期中葉以降に造られた可能性が高い。Ｐ４から出土した甕182は中期末に遡るが、土坑16と重複しており、混入したもの

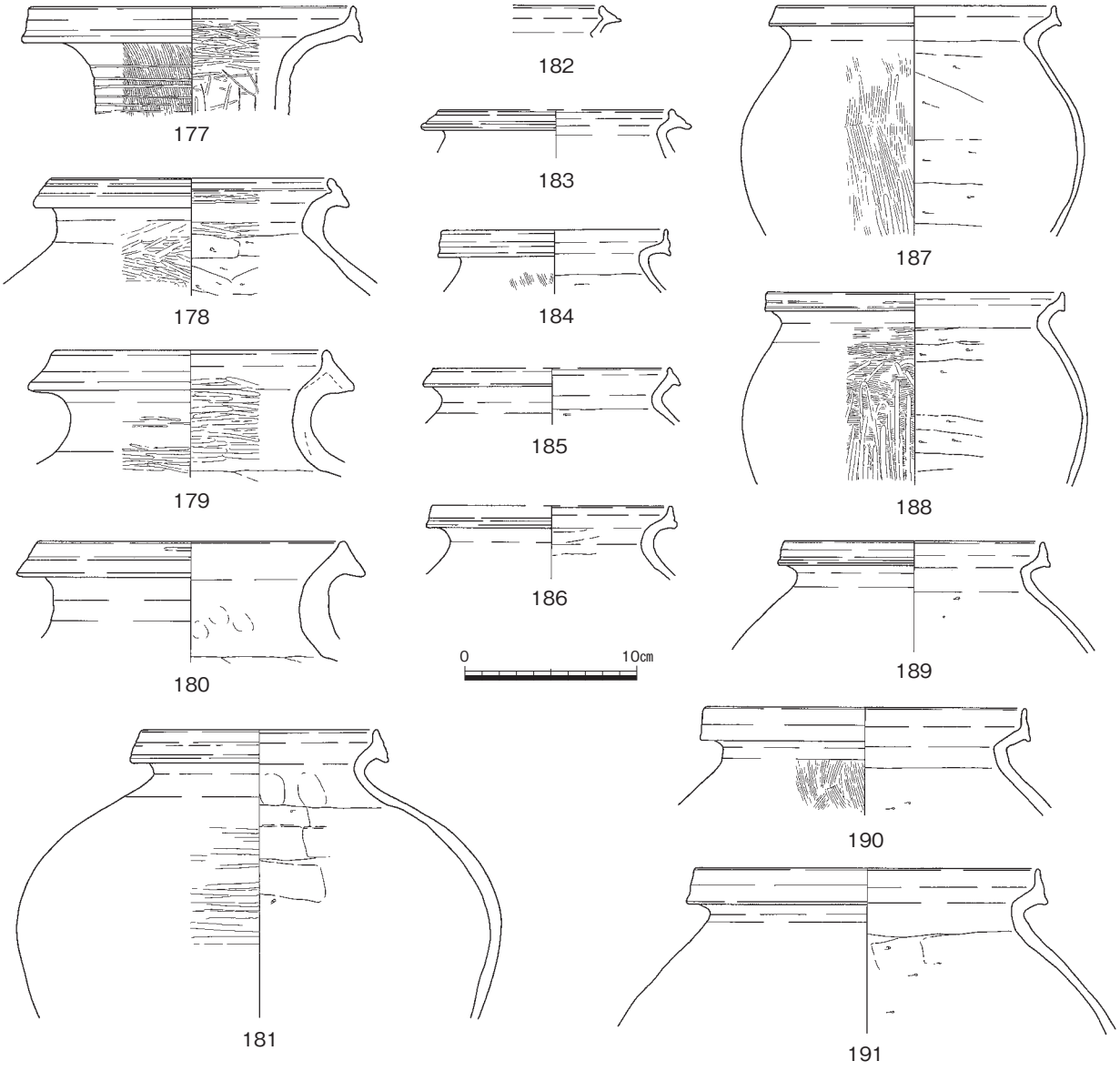


第32図　竪穴住居７～10（1/80）

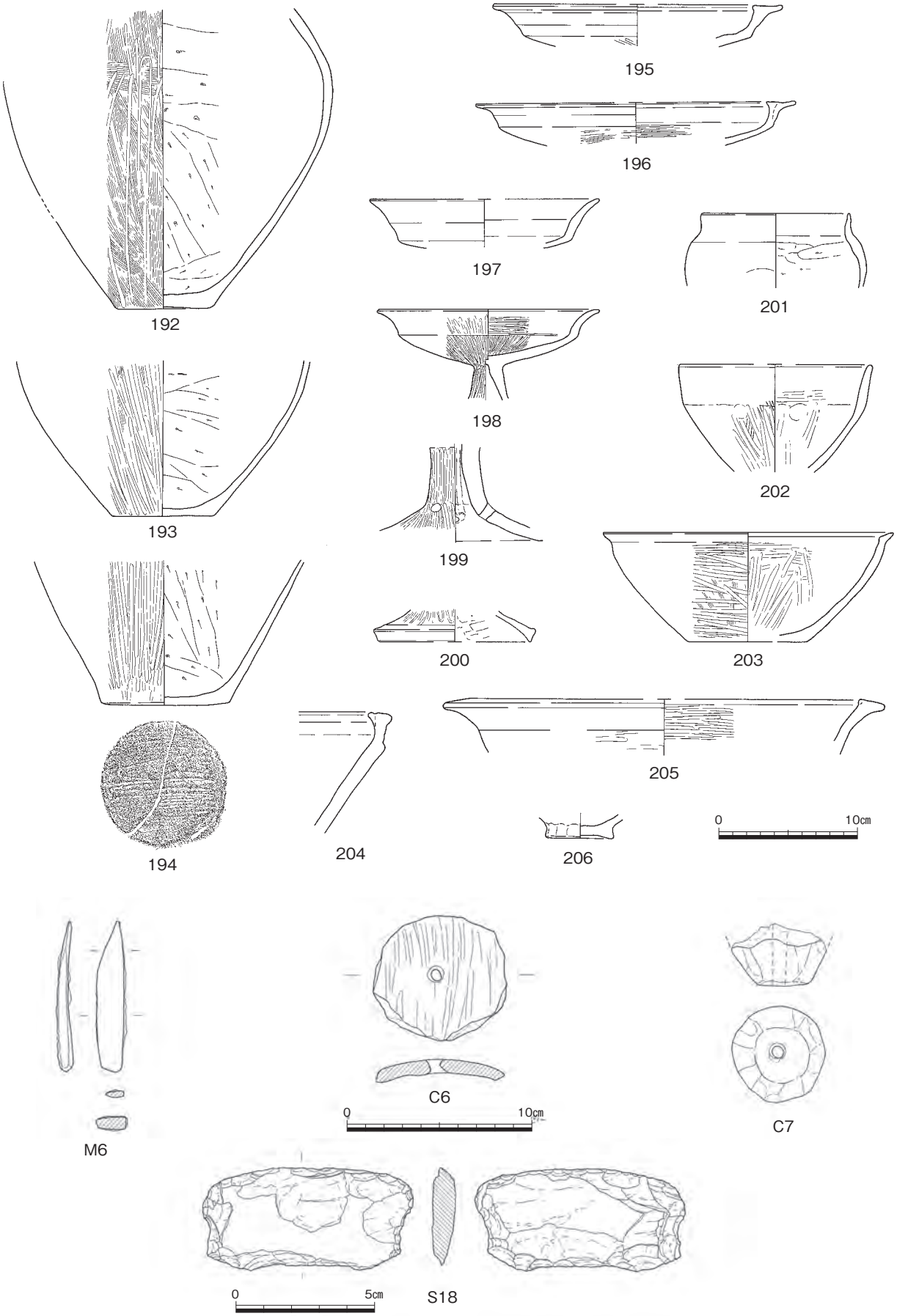
と思われる。また、新しく後期後半に位置付けられる甕191は上層と下層から出土した土器片が接合したことから、埋没の最終段階を弥・後・Ⅲとしておきたい。　（渡邉）



1　暗褐色(10YR3/3～3/4)砂質土（礫含）
2　暗褐色(10YR3/4)粘性粗砂（礫多含）
3　にぶい黄褐色(10YR4/3)粗砂
4　〈Ｐ５〉
5　暗褐色(10YR3/3)粘性粗砂



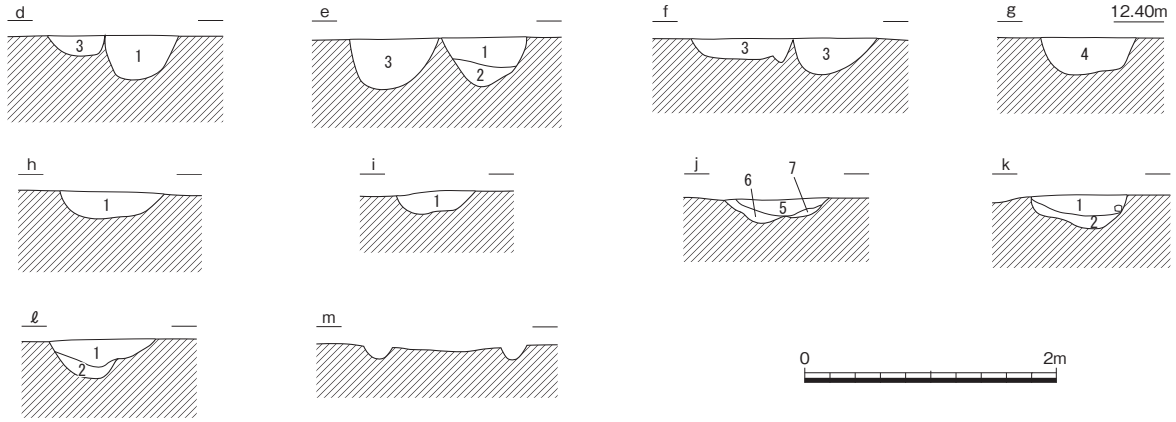
第33図　竪穴住居７断面（1/60）・出土遺物①（1/4）



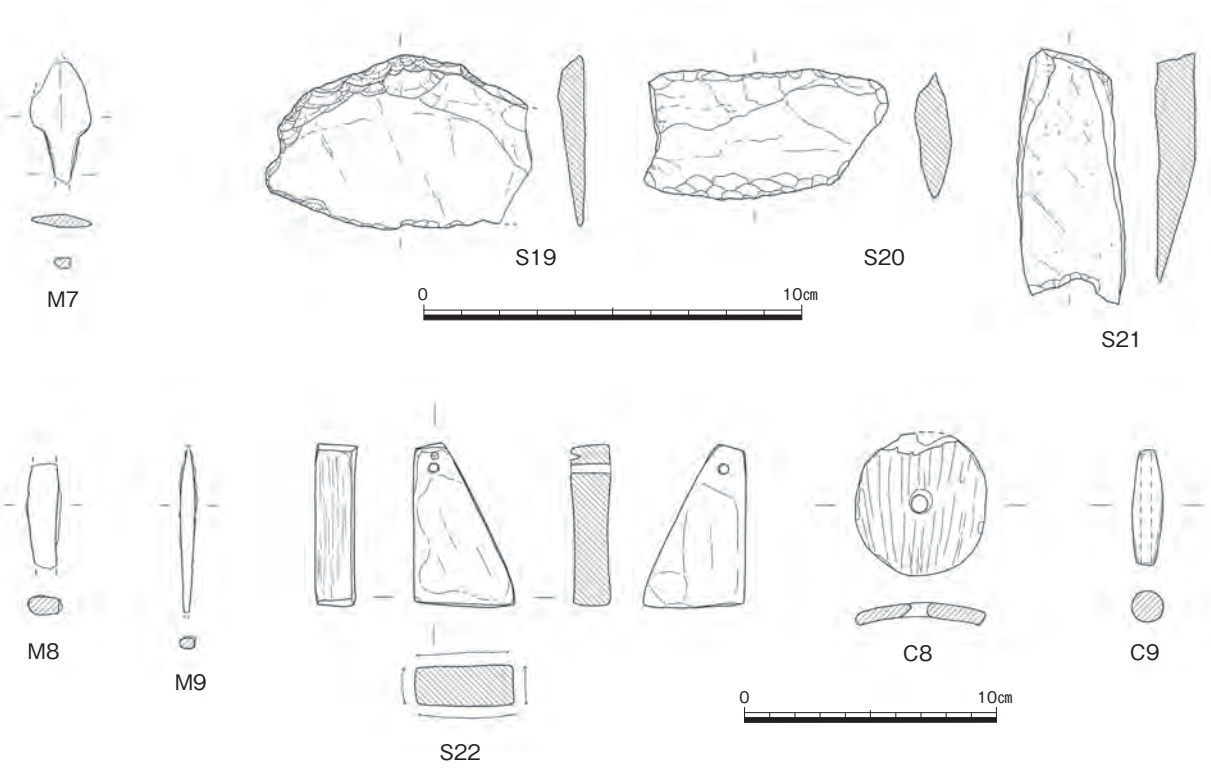
第34図　竪穴住居７出土遺物②（1/4・1/3・1/2）

竪穴住居８（第12・32・35・36図、図版３－１・111・116・117）

竪穴住居７の西に位置し、東端の一部が切られている。およそ東西6.8×南北6.5ｍの不整円形を呈する。床面の標高は12.40ｍ前後で、竪穴住居７より10㎝程度低い。規則的ではないがＰ13を中心に環状に小柱穴が並んでおり、これらを主柱穴と認定した。Ｐ１・５・10は２本重複し、壁体溝も部分的ではあるが二重に検出されたことから、建て替えを想定できる。南北断面第９層が古段階の壁体溝埋土に対応する。また、Ｐ２が内側の壁体溝と重複することから、拡張を肯首できる。柱穴埋土ではＰ１・４・８・９・12・13が共通しており、６本柱の可能性もあるが断定はできない。Ｐ10・11は位置から、竪穴住居９の主柱穴を誤認した可能性がある。

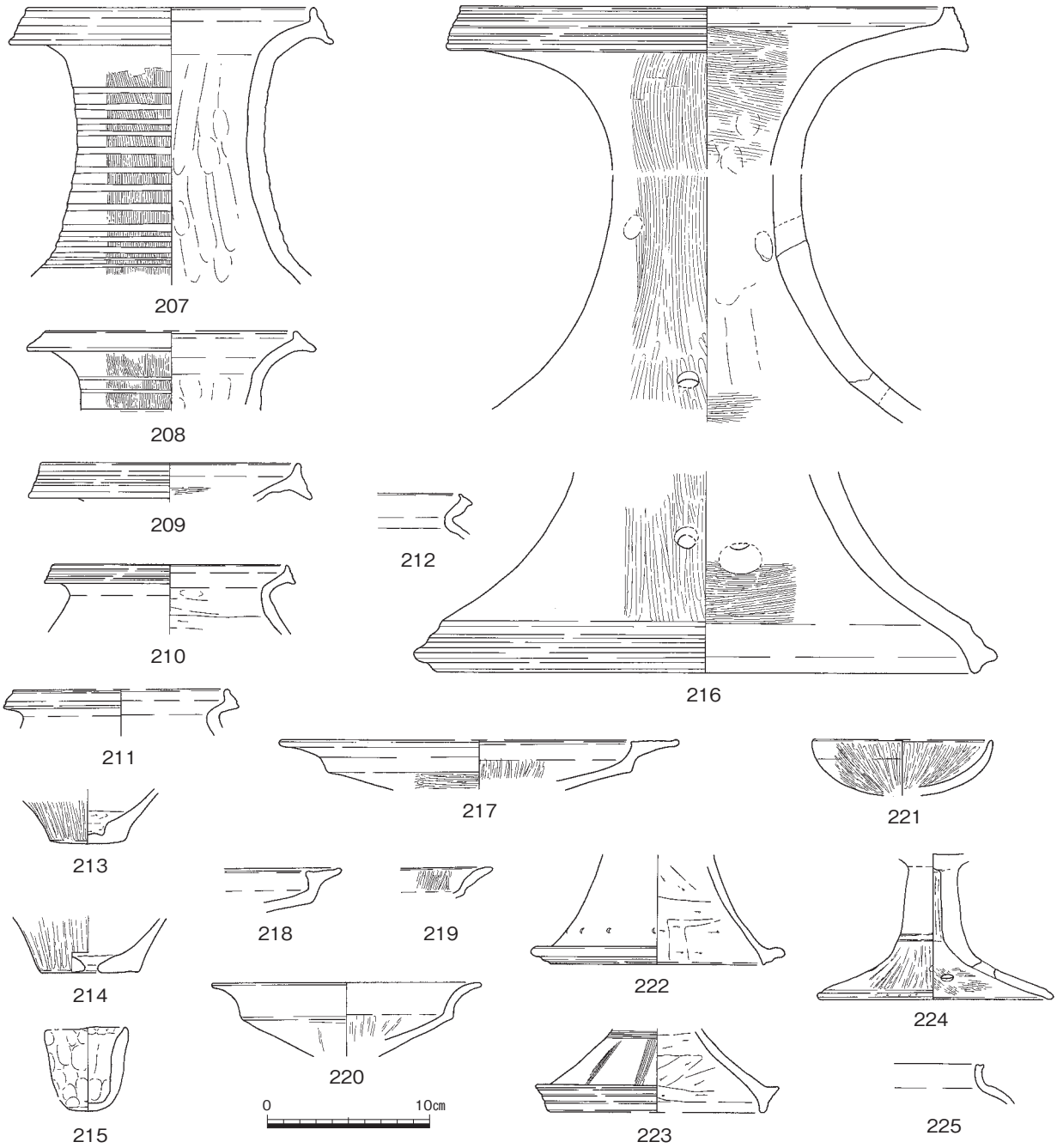


1　暗褐色(10YR3/3)粘性砂質土（にぶい黄橙色(10YR6/3)粘性砂質土塊含）
2　にぶい黄褐色(10YR4/3)粗砂（にぶい黄橙色(10YR6/3)粘性砂質土塊含）
3　灰黄褐色(10YR5/2)粗砂
4　黒褐色(10YR3/2)粗砂質土
5　暗褐色(10YR3/3)粘性砂質土（褐灰色(10YR6/1)土粒多・黄褐色土粒少含）
6　暗褐色(10YR3/4)粘性砂質土
7　暗褐色(10YR3/4)砂質土
8　暗褐色(10YR3/3)粘性砂質土（黄褐色土多含）



第35図　竪穴住居８断面（1/60）・出土遺物①（1/2・1/3）

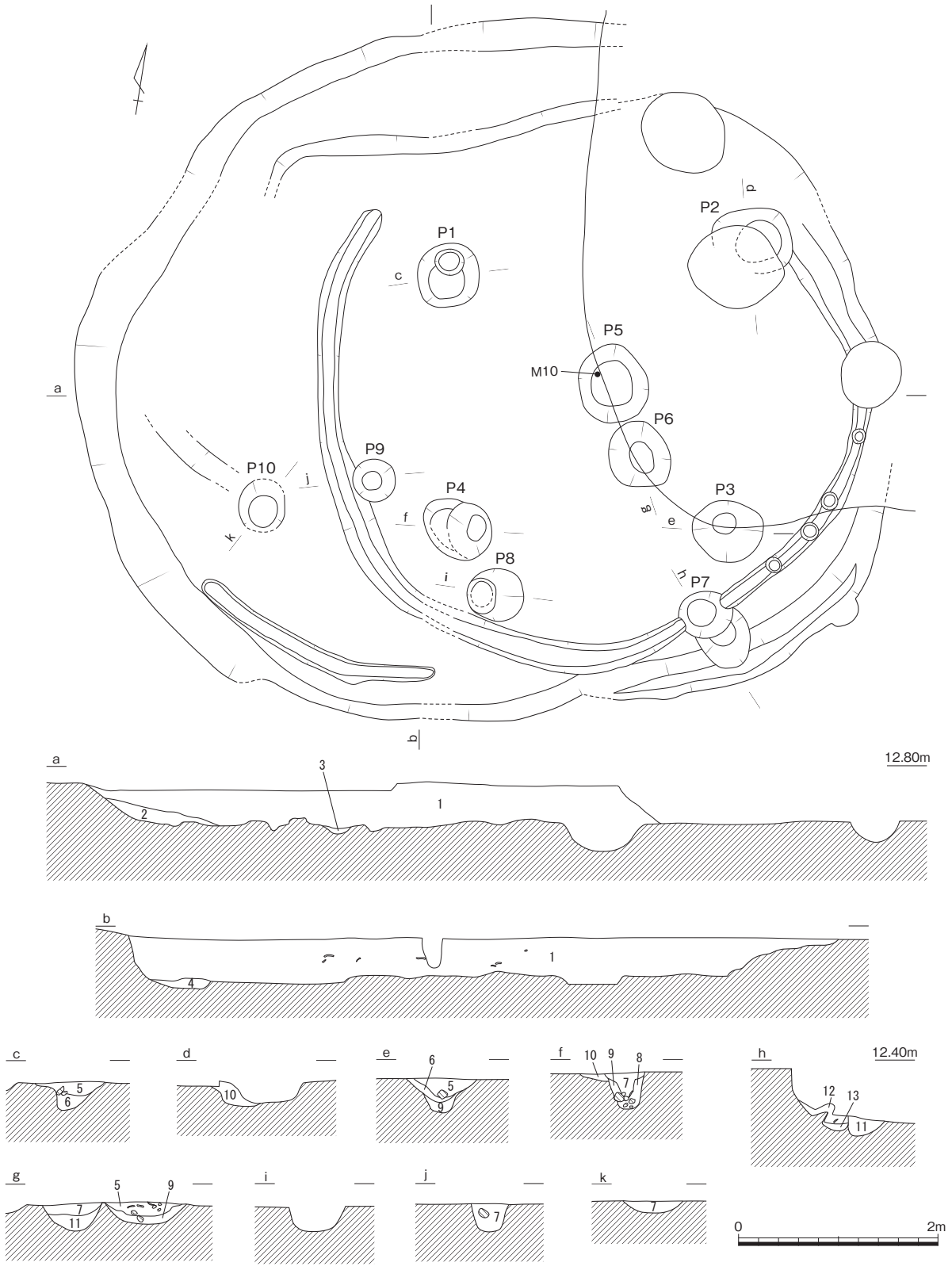
出土遺物には銅鏃**Ｍ７**や鉄器、石器、土製品がある。土器は少なく、混入も考慮しなければならないが、Ｐ５から素縁の高杯**219**、下層から長頸壺**207**が出土したことから、後期中葉以降に造られたと考えている。銅鏃**Ｍ７**は床面より５㎝程浮いた状態で出土した。竪穴住居７及び竪穴住居９との関係から、本住居の時期を弥・後・Ⅱを中心とする時期で考えておきたい。　（渡邉）



第36図　竪穴住居８出土遺物②（1/4）

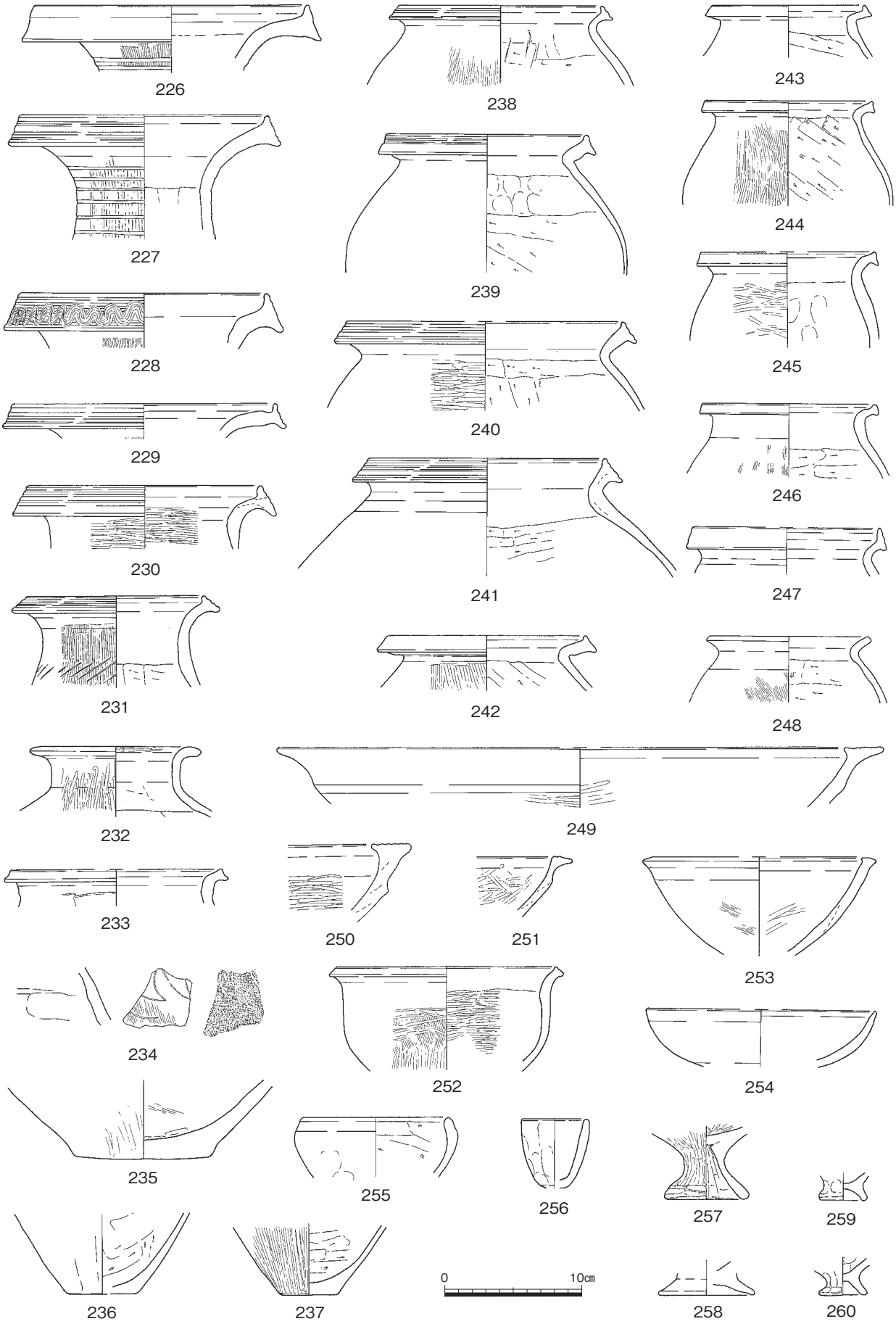
竪穴住居９（第12・32・37～40図、図版３－１・116・119）

竪穴住居８の東に位置し、東端を同竪穴住居に切られている。床面の標高は12.30ｍ前後で、竪穴住居８より10㎝程度低い。検出面での規模は東西８ｍ、南北７ｍの楕円形であったが、床面東寄りで径

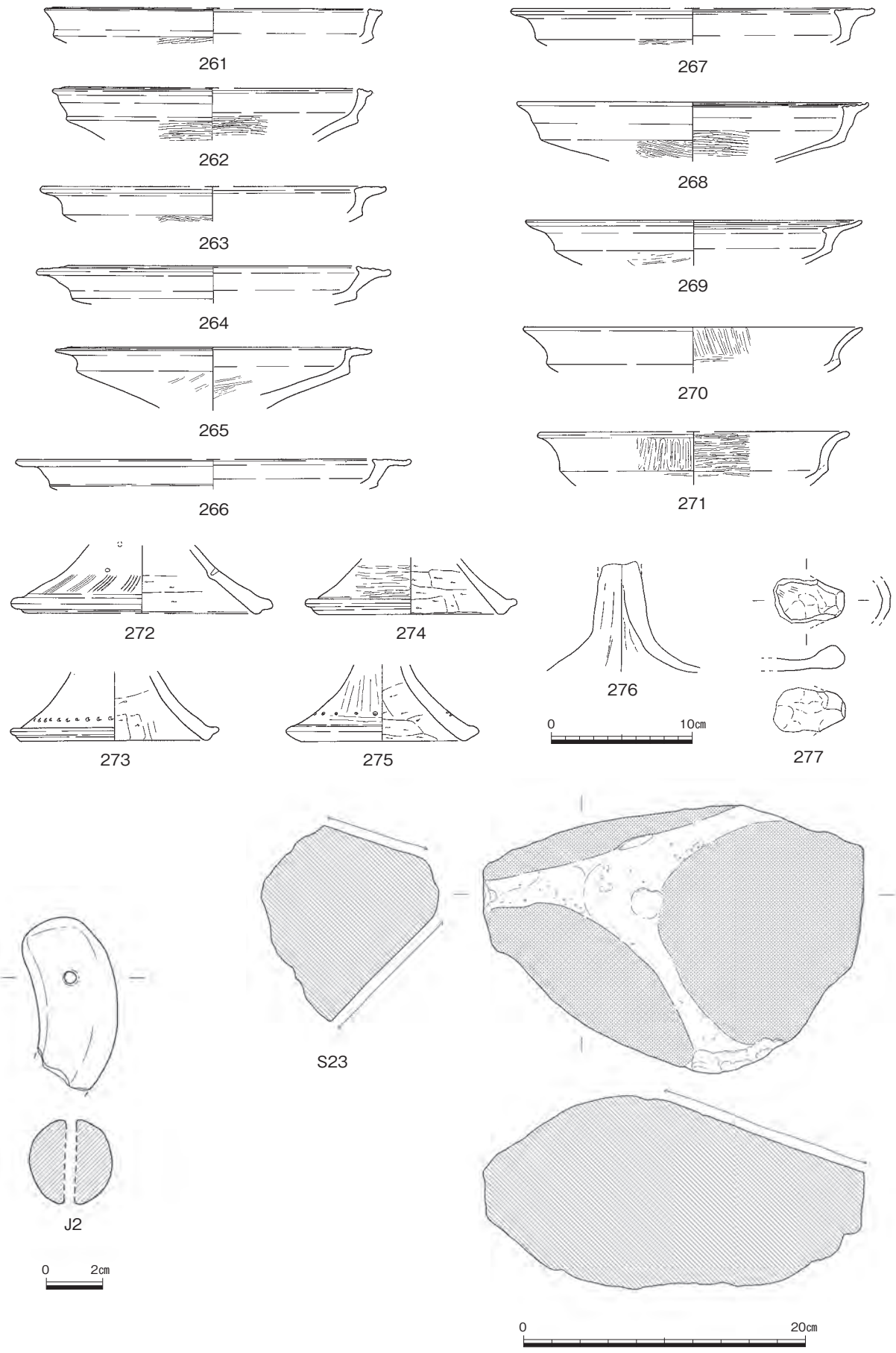


1　黒褐色(2.5Y3/2)砂質土
2　褐灰色(10YR4/1)粗砂（礫多含）
3　にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土
4　暗褐色(10YR3/4)粗砂
5　黒褐色(10YR3/1)粘質砂質土
　（黄褐色(10YR5/6)土粒やや多含）
6　暗褐色(10YR3/3)粗砂
7　暗褐色(10YR3/3)粘性砂質土
8　灰黄褐色(10YR4/2)砂質土
9　暗褐色(10YR3/3)砂質土（礫多含）
10　黒褐色(10YR3/1)粘性砂質土
　（黄褐色土粒少･褐灰色土粒混）
11　暗褐色(10YR3/4)砂質土
12　灰黄褐色(10YR4/2)粘性砂質土（黄褐色土粒混）
13　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性砂質土（小礫多含）
14　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性砂質土
　（黄色土粒多含）

第37図　竪穴住居９（1/60）



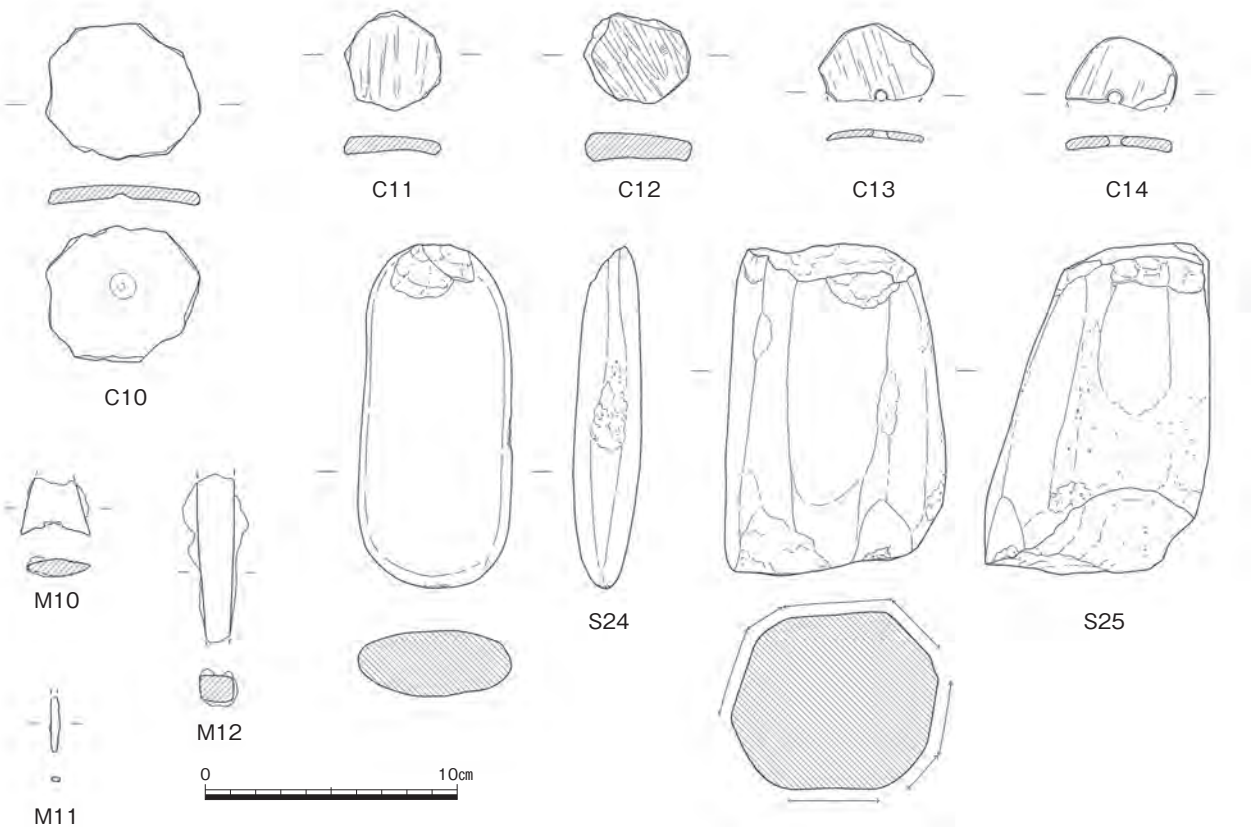
第38図　竪穴住居９出土遺物①（1/4）



第39図　竪穴住居９出土遺物②（1/4・1/2）

約5.6ｍの円形に壁体溝を検出した。内側の壁体溝西端の立ち上がりが検出面まで及んでいなかったので、拡張と考えた。ａ断面第３層が内側の壁体溝埋土にあたる。ただし、広がった西側から北側にかけての壁体はダラダラと傾斜しており、肩が崩れて広がった可能性もある。内側壁体溝の南東部では、壁体溝内で径15㎝程度の小柱穴を検出したが性格は不明である。築造当初の主柱穴はＰ１～４の４本で、検出状況から、Ｐ７～９は拡張時以降に掘削されたものと考えられる。Ｐ10は当竪穴住居に伴うかどうかも定かでないため、拡張後の主柱穴の組み合わせは明確にできていない。なお、Ｐ２は竪穴住居８のＰ10・11と重複している。中央にあるＰ５は、他の柱穴は深さ30㎝あるのに対し20㎝と浅く、平面規模も変わらないため、中央土坑ではなく、中央穴とした。

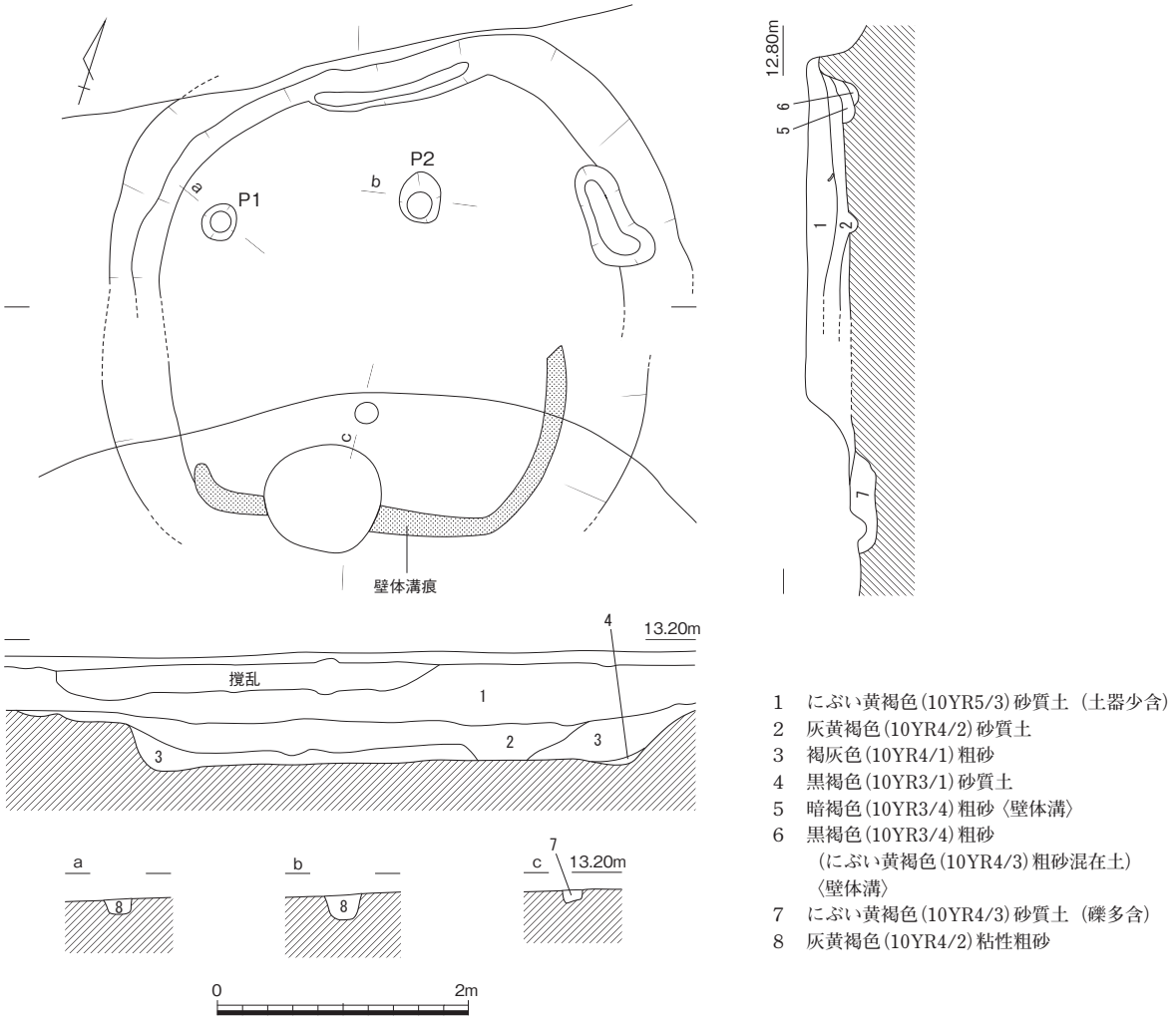
出土遺物は比較的多く、後期前半が主体を占める。埋土の分層はできなかったが、任意に10㎝ずつ上中下層とし、さらに床面近くの４段階に分けて掘り進め、遺物の分離に努めた。下層以下で**226**・**234**・**238**・**245**・**251**～**253**・**255**・**256**・**270**、床面で**260**・**261**、Ｐ６で**235**、Ｐ７で**271**、Ｐ８で**247**、Ｐ10で**266**・**273**が出土した。図化し得なかったが、床面出土土器には弥・後・Ⅰしか含まれていない。**234**には線刻が見られる。**277**は内湾した体部に瘤状の突起が付いた素焼きの土製品で、舟形の可能性を考えたが、船首にしては先端が丸く、船尾にしては末端部が厚く肥厚しているため、木製品を模倣した把手付皿のような容器と類推している。今後の類例の増加を待ちたい。土製勾玉**Ｊ２**は残存部で６㎝を越える大形で、中層から出土した。円板状土製品が比較的多く、有孔のもの、無孔のもの、穿孔途中のものがある。**Ｃ12**以外は床付近で出土しており、当竪穴住居の生業活動に伴うと考えられる。台石**Ｓ23**、砥石**Ｓ25**は上層出土で、竪穴住居の廃絶時に投棄したと考えられる。Ｐ８が当竪穴住居より新しい別柱穴であるとすれば、弥・後・Ⅰ～Ⅱにかけて営まれたと位置付けられる。　（渡邉）



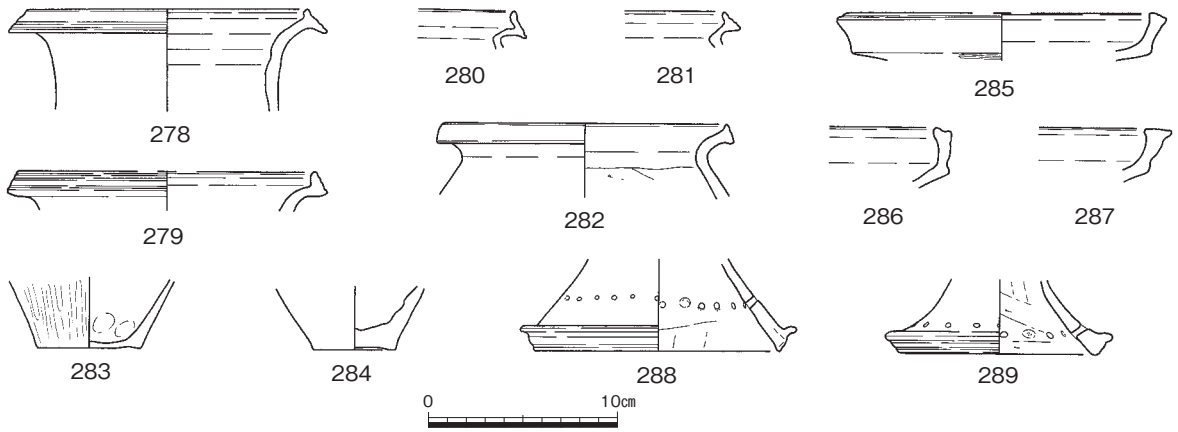
第40図　竪穴住居９出土遺物③（1/3）

竪穴住居10（第12・32・41図、図版３－２）

竪穴住居８の北に位置する。北半は竪穴住居６同様に後世の削平を受け、南半の大部分は竪穴住居８に切られる。また、竪穴住居埋土とベースの識別が困難で、第１層を調査時には包含層と認識していたが、埋土の可能性もある。床面の標高は12.24ｍと竪穴住居８より20㎝程度低い。柱穴を３本検出



1　にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土（土器少含）
2　灰黄褐色(10YR4/2)砂質土
3　褐灰色(10YR4/1)粗砂
4　黒褐色(10YR3/1)砂質土
5　暗褐色(10YR3/4)粗砂〈壁体溝〉
6　黒褐色(10YR3/4)粗砂
（にぶい黄褐色(10YR4/3)粗砂混在土）
〈壁体溝〉
7　にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土（礫多含）
8　灰黄褐色(10YR4/2)粘性粗砂



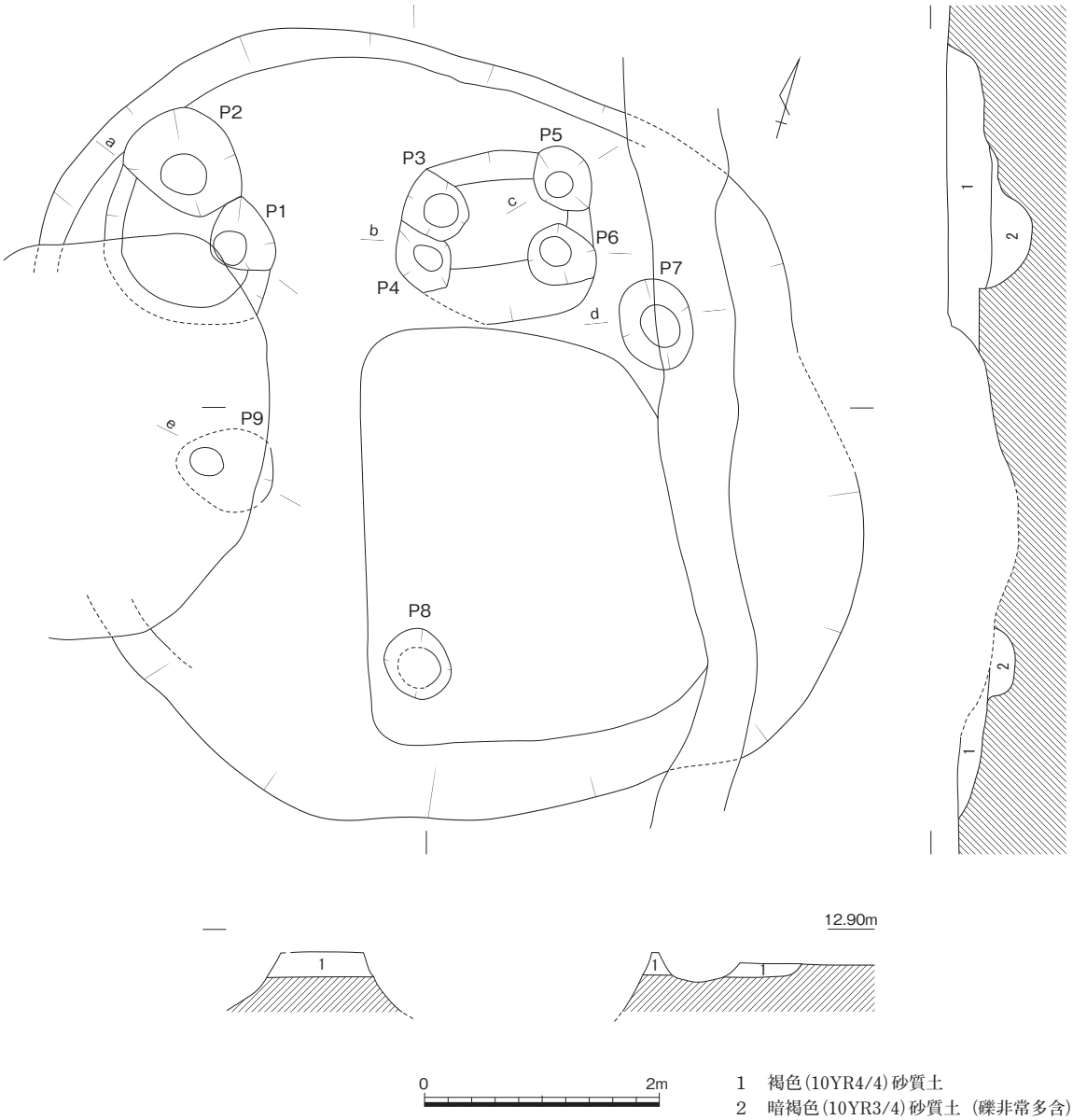
第41図　竪穴住居10（1/60）・出土遺物（1/4）

したが、径20㎝、深さ10～20㎝と規模が小さく、主柱穴とは断定できない。

出土遺物は土器細片のみで、**280・283・286・288**が白色の中期後葉に位置付けられるものである。**280・283**はＰ２から出土した。図示していないが、Ｐ１からも中期後葉の土器が出土している。Ｐ１・２を主柱穴とすれば、竪穴住居６と同じく当竪穴住居が中期後葉に造られたと考えることができる。また、埋土中から出土した高杯**287**の口縁部上端面はまだあまり拡張されておらず、後期前葉でも古い段階に位置付けられることから、後期初頭には埋没したと想定できる。竪穴住居６と比較して、全体的に赤色化した土器が多く、中期土器を竪穴住居構築以前と考えることも可能であるが、弥・後・Ⅰの古い段階には埋没し、竪穴住居６と併存していた可能性が高い。（渡邉）

竪穴住居11（第12・42～44図、図版３－３・108）

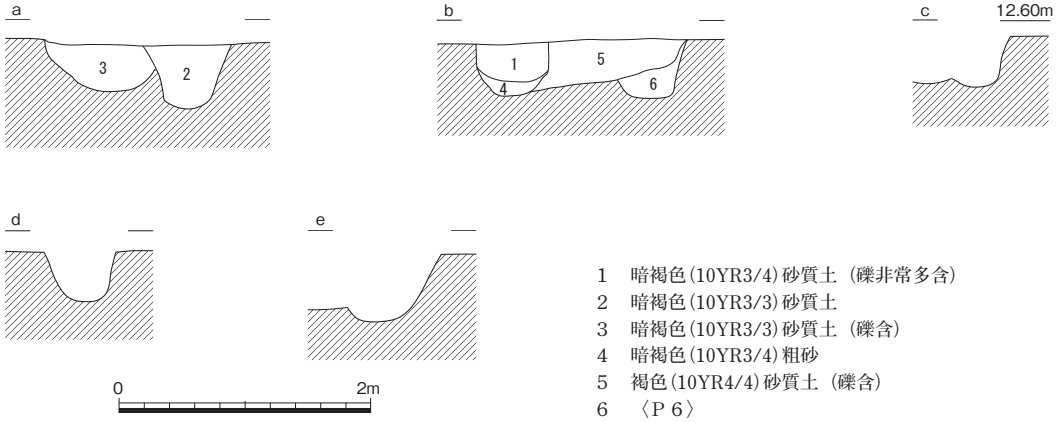
Ｊ06のほぼ中央で検出された竪穴住居で、平面は不整円形を呈する。長軸長754㎝、短軸長652㎝、深さ約30㎝を測り、床面積は現状で37.1㎡である。弥・後・Ⅲの土坑21・27、古墳時代の溝16に切られているため、遺構の残り具合は悪く、この住居に付属する主柱穴の判断も難しいが、柱穴の配置や

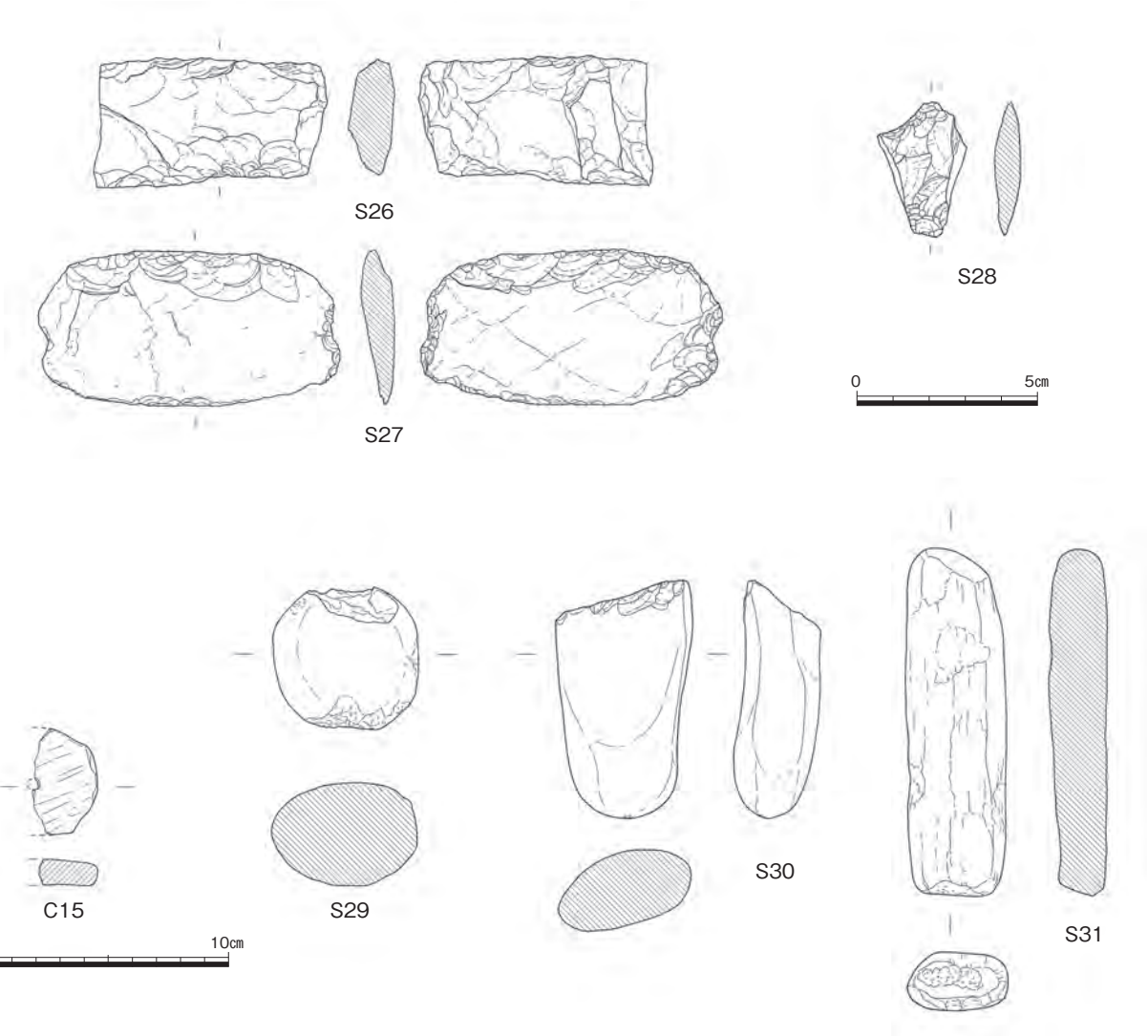


第42図　竪穴住居11（1/60）

間隔などから考えると、Ｐ１・Ｐ３・Ｐ７・Ｐ８・Ｐ９が主柱穴であった可能性が高い。また、Ｐ７とＰ８の間にもう一つ存在した可能性があり、本来は６本柱であったと考えられる。

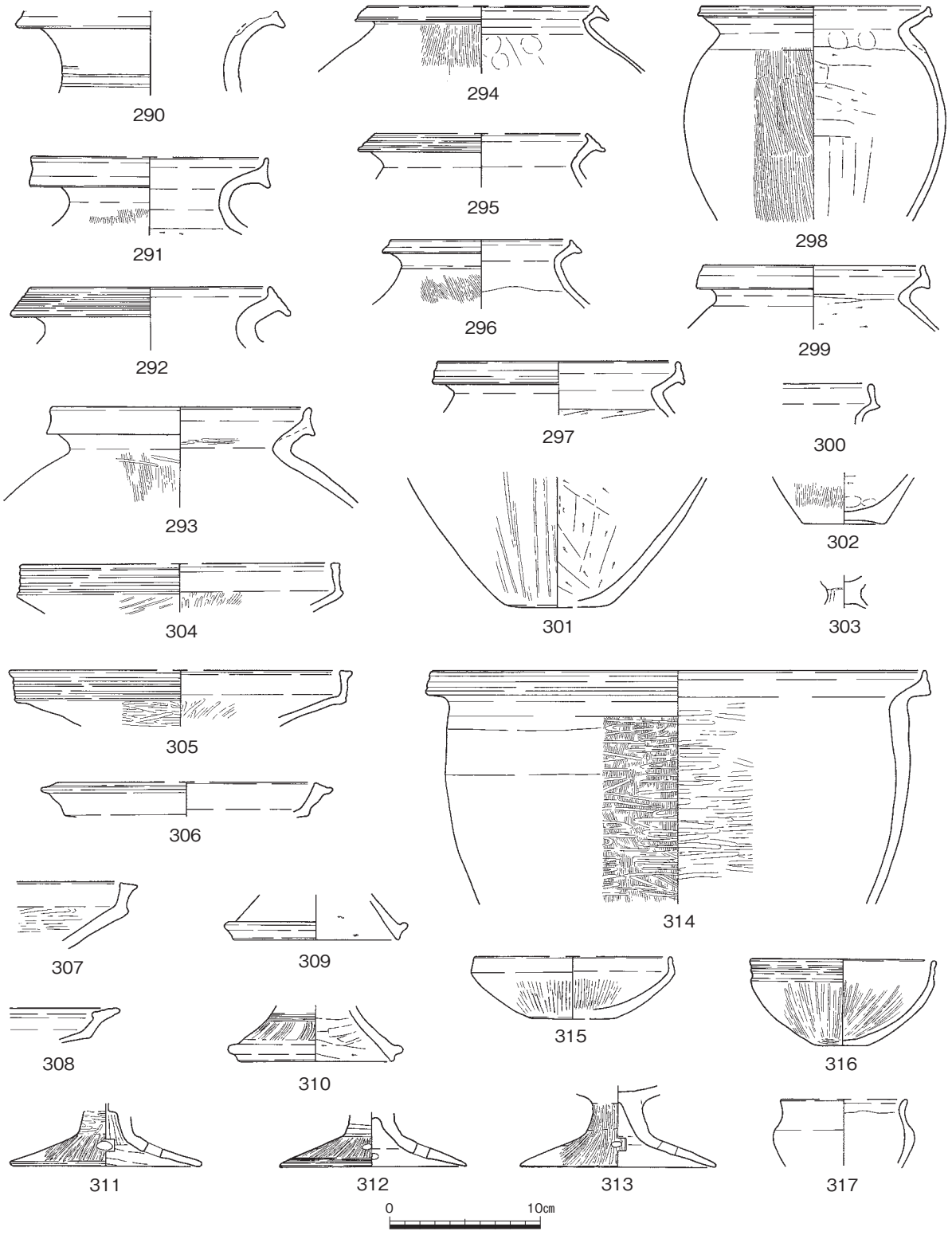
出土土器には多くのものが認められるが、290・292・294～296・298・302・304～310・314が





第43図　竪穴住居11柱穴断面図（1/60）・出土遺物①（1/2・1/3）

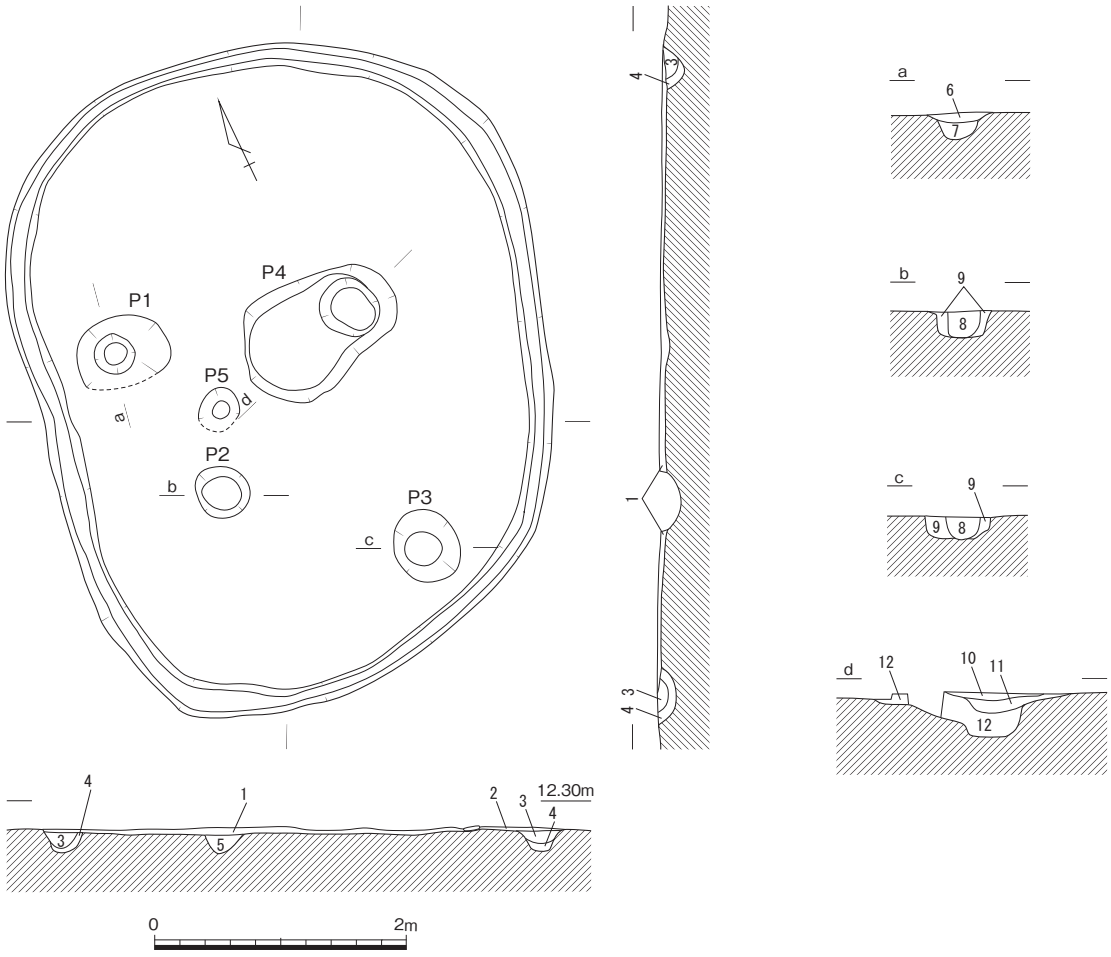
弥・中・Ⅲ～弥・後・Ⅰ、それ以外の多くが弥・後・Ⅲのものと大別できる。前者が重複関係にある弥・後・Ⅰの土坑25や周辺の遺構に由来する遺物の可能性が高く、後者が土坑27に由来する遺物の可能性が高いと考えられる。その他の遺物として、円板状土製品**C15**、打製石包丁**S26**・**S27**、楔形石器**S28**、石錘の可能性がある礫石器**S29**、敲石**S30**・**S31**が認められる。　（河合）



第44図　竪穴住居11出土遺物②（1/4）

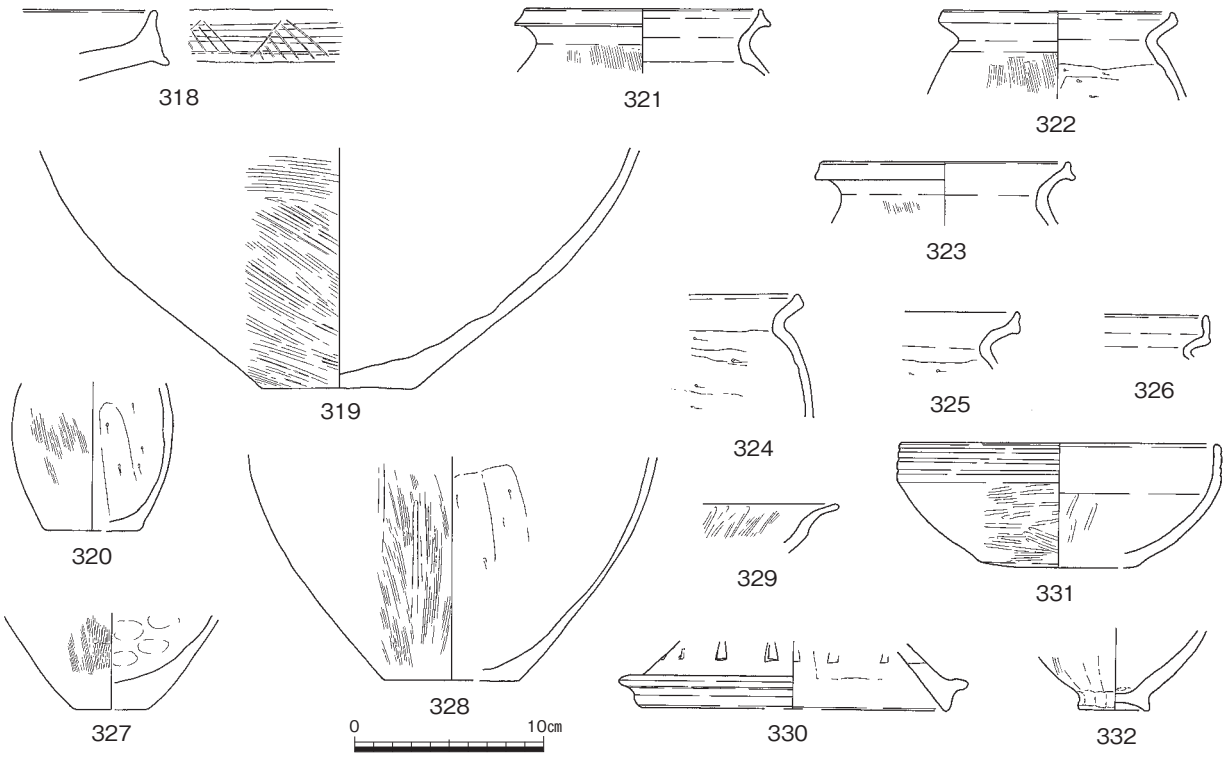
竪穴住居12（第12・45・46図、図版４－１・77・108）

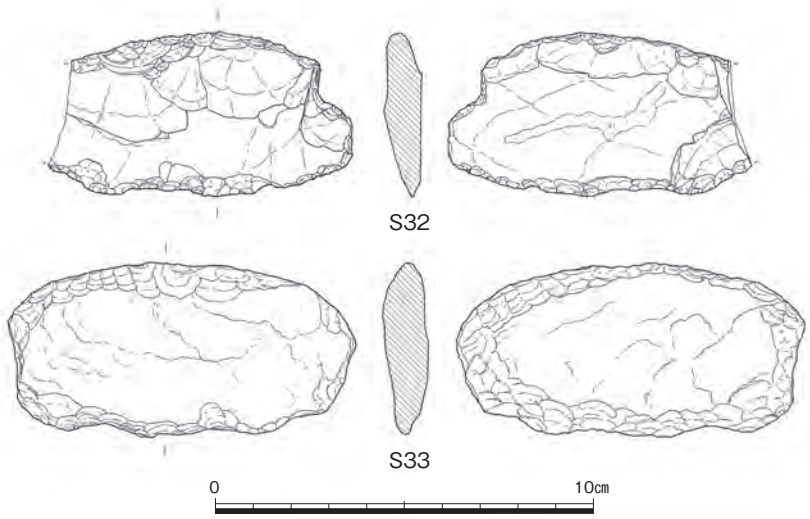
Ｈ07とＩ07に跨がる位置から検出された竪穴住居で、調査時は楕円形として把握した。長軸長533㎝、短軸長405㎝、床面積は18.2㎡である。弥・中・Ⅲ～弥・後・Ⅰの遺物を含む溝１を切って建てられた竪穴住居であるが、床面は深い所でも５㎝程度の残存状況で、中央に溝１の埋土が検出されたこともあり、柱穴や壁体溝等の検出は困難であった。平面は西辺が不自然にくびれており、円形と隅丸方形の住居が２つ切り合いを持って存在していた可能性が高いと考えている。そこで、仮に北に想定される竪穴住居を12Ａ、南の竪穴住居を12Ｂとして記述したい。Ａ・Ｂを通じて、検出された柱穴も限られており、本来の主柱穴の位置や本数を想定するのも困難であるが、ここでは可能性も含めて積極的に評価することにしたい。まず12Ａであるが、径約4.2ｍの円形の竪穴住居と想定した場合、Ｐ４とＰ５の２本柱と中央土坑が伴う可能性が考えられる。一方、12Ｂは一辺約４ｍの隅丸方形の竪穴住居と考えた場合、Ｐ１とＰ３がこれに伴い、さらにその位置関係から、あと２本の主柱穴の存在が想定され（Ｐ４の上から掘り直した痕跡が、そのうちの一つに該当する可能性もある）、本来は４本柱であった可能性がある。この両者の先後関係はｄ断面から12Ｂが後出する可能性を考えておきたい。



1　暗褐色(10YR3/3)砂質土
2　暗褐色(10YR3/4)砂質土（粗砂混）
3　暗褐色(10YR3/4)砂質土（しまりあり）
4　暗褐色(10YR3/4)砂質土
5　暗褐色(10YR3/4)砂質土
6　暗褐色(10YR3/4)砂質土
7　暗褐色(10YR3/4)粗砂
8　暗褐色(10YR3/4)砂質土
9　暗褐色(10YR3/3)砂質土
10　黒褐色(10YR3/1)土（炭粒多・土器含）
11　褐灰色(10YR6/1)粗砂（褐灰色(10YR4/1)土混）
12　褐灰色(10YR4/1)砂質土

第45図　竪穴住居12（1/60）





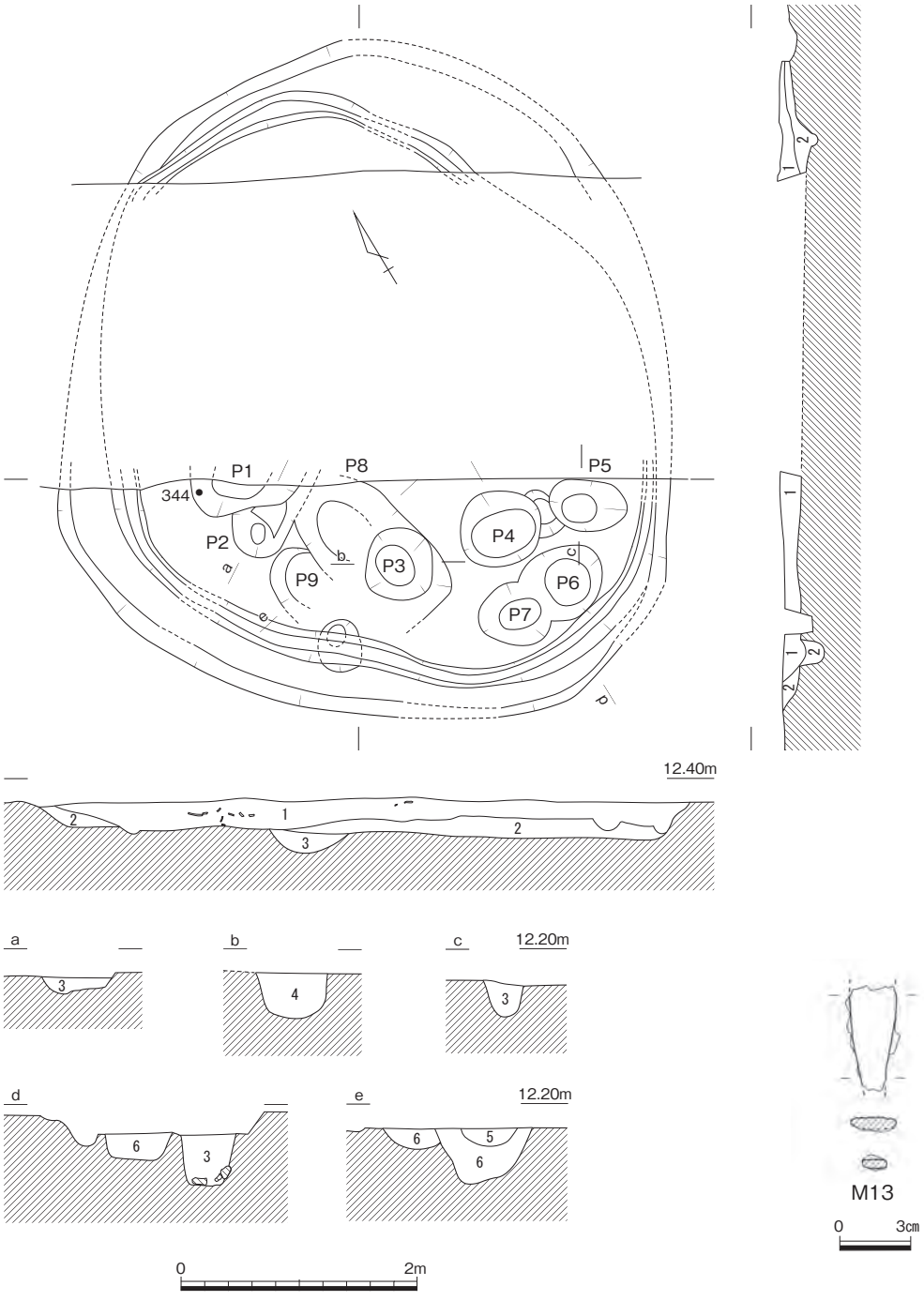
第46図　竪穴住居12出土遺物（1/4・1/2）

出土遺物には、壺318・319、甕320～328、高杯329・330、鉢331・332のほか、打製石包丁Ｓ32・Ｓ33がある。このうち、打製石包丁Ｓ32はサヌカイト製で、表面にはコーングロスが明瞭に観察できる。中央土坑からは320・324・328・330・331、Ｐ１から329が検出されているが、弥・後・Ⅰの330を除くと、ほとんどが弥・後・Ⅲの範疇に収まる遺物であり、12Ａと12Ｂの間には大きな時期差は認められない。（河合）

竪穴住居13（第12・47・48図、図版４－２、写真12・13）

Ⅰ07のほぼ中央で検出された竪穴住居で、平面は不整円形を呈する。一度の建て替えが認められる。

遺構のほぼ中央を現代の水路が横切っているため、正確な規模は不明であるが、古段階の規模は、長軸長569㎝、短軸長517㎝、深さ約30㎝を測り、床面積は23.7㎡と想定される。埋土はおおむね２層に分かれるが、２層が古段階の埋土にほぼ相当し、それを掘り直す形で新段階が形成され、その埋土が第１層に相当する。柱穴は現代水路の南から多数検出されているが、このうち新段階に関わる主柱穴

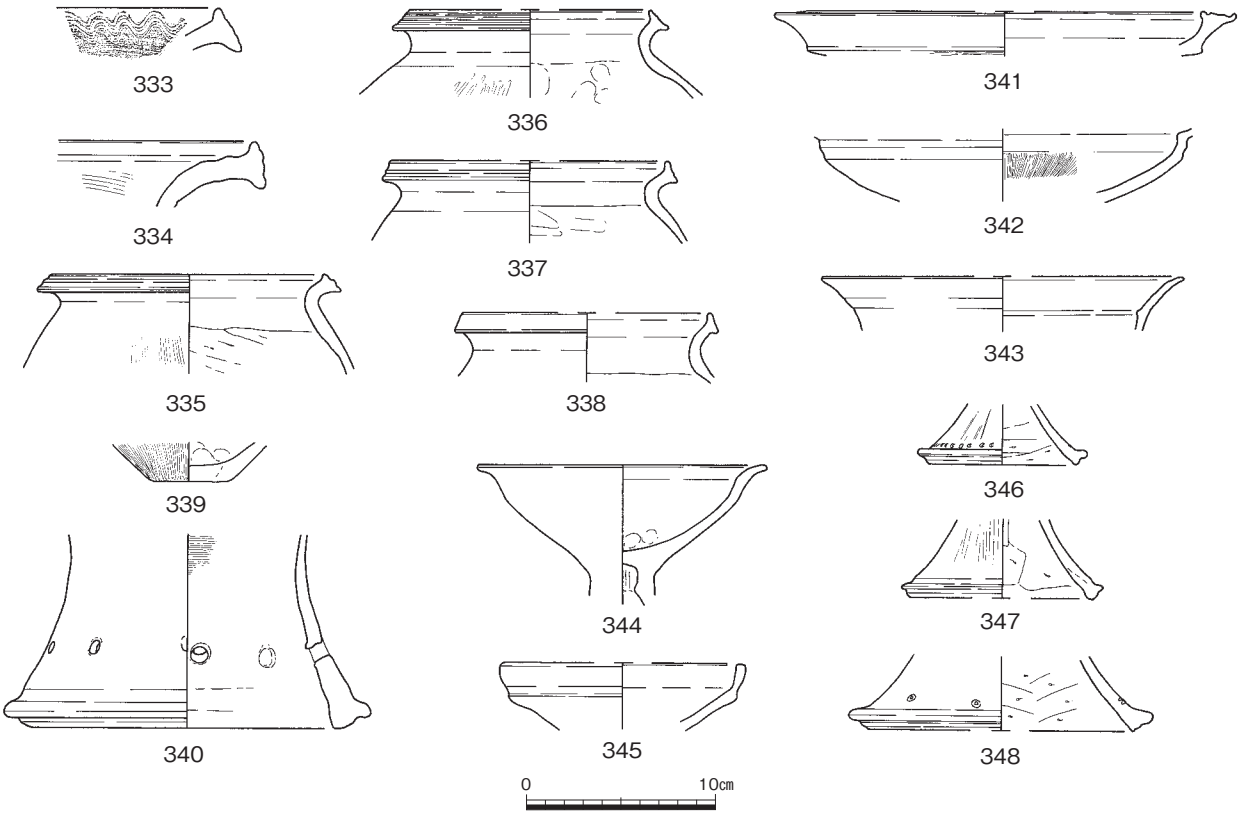


1　黒褐色(10YR2/2)粘性砂質土（土器・炭含）
2　灰黄褐色(10YR4/2)砂礫土
3　黒褐色(10YR2/2)粘性砂質土
4　灰黄褐色(10YR4/2)砂質土
5　灰白色(2.5Y7/1)細砂
6　黒褐色(10YR3/2)粘性砂質土

第47図　竪穴住居13（1/60）・出土遺物①（1/3）

になるのは、重複関係からＰ１・Ｐ４である可能性が考えられ、それと対になる２本が現代水路の下にあるものと想定される。一方、古段階に関わるのは、Ｐ２・Ｐ３・Ｐ５の可能性があり、現代水路の下にあと３～５本存在すると考えられる。以上から、古段階は６～８本柱、新段階は４本柱であった可能性を考えておきたい。

出土遺物は第１層と柱穴から多く認められ、壺**333**・**334**、甕**335**～**339**、器台**340**、高杯**341**～**348**のほか、鉄鏃の可能性のある**M13**がある。遺構の時期は、新段階が、出土遺物から弥・後・Ⅰと考えられる。（河合）



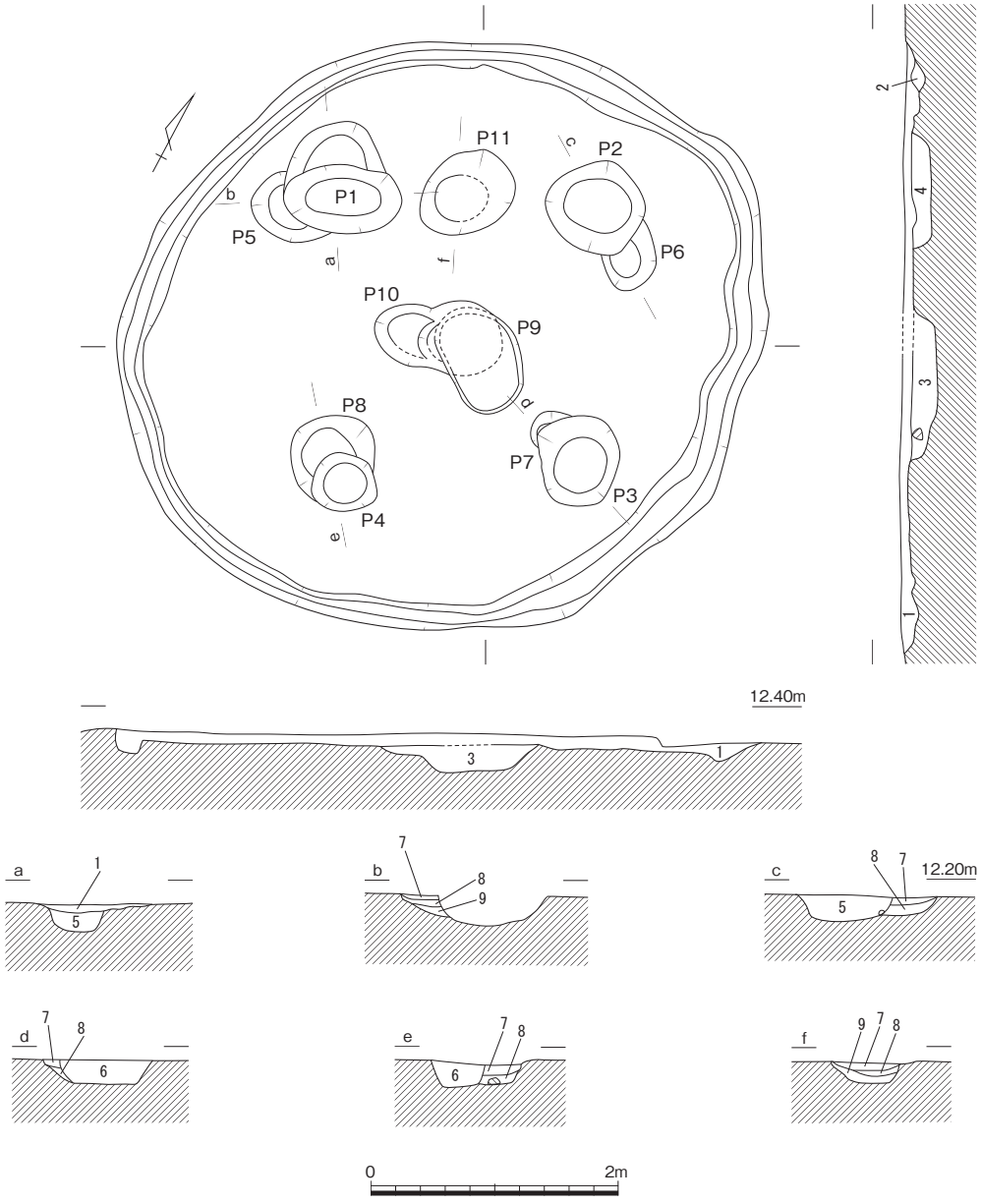
第48図　竪穴住居13出土遺物②（1/4）

写真12　竪穴住居13（北西から）

写真13　竪穴住居13（東から）

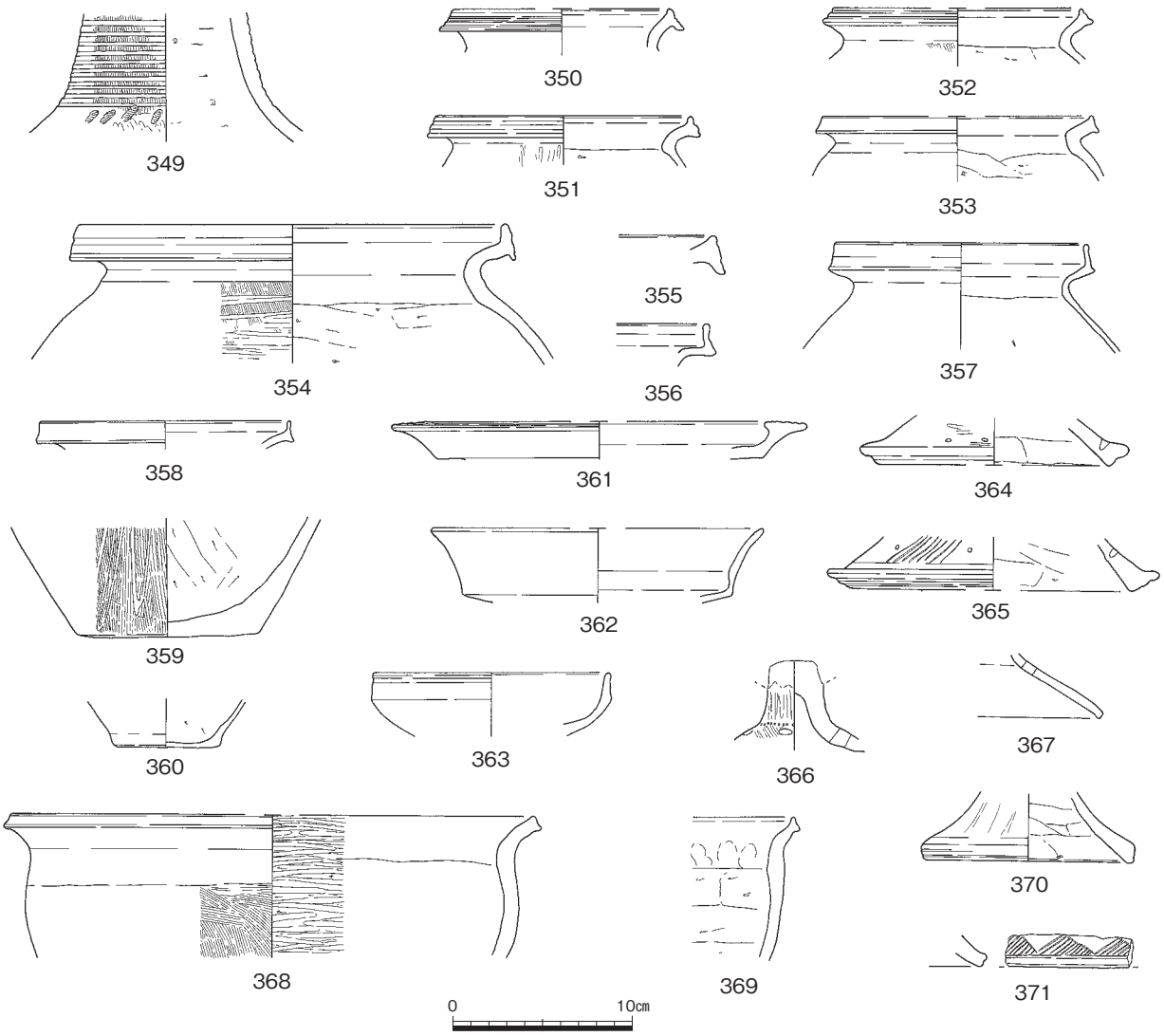
竪穴住居14（第12・49・50図、図版４－３）

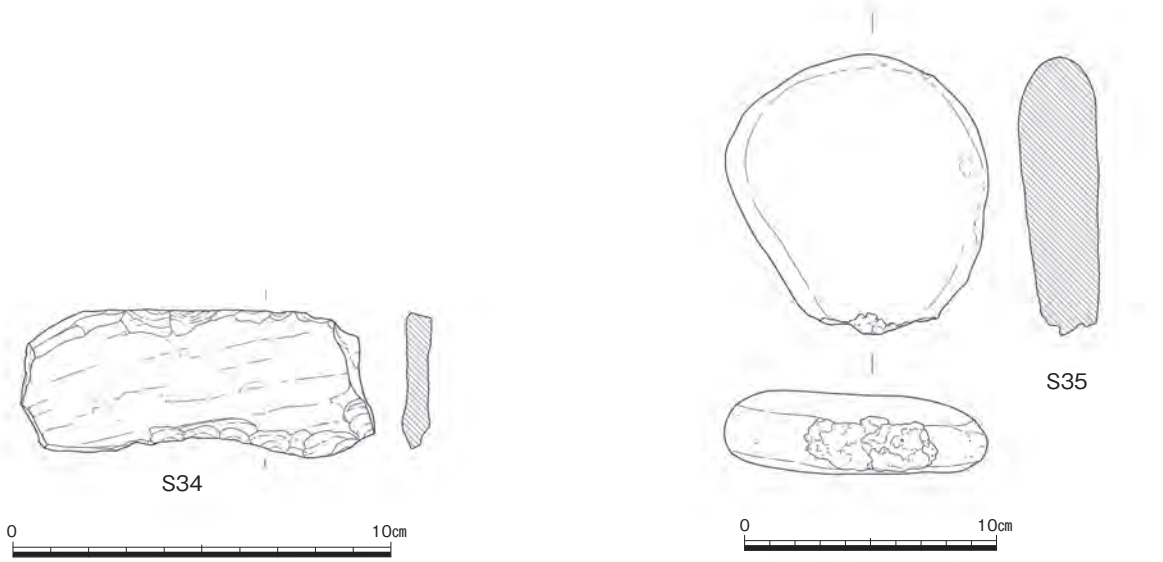
竪穴住居13の北東に位置する竪穴住居で、これを一部切っている。平面は円形を呈し、長軸長496㎝、短軸長480㎝、深さ約10㎝を測り、床面積は19.5㎡である。主柱穴はＰ１～Ｐ４、これに対応する中央土坑はＰ９と想定されるが、Ｐ１～Ｐ４とそれぞれ重複するＰ５～Ｐ８は、埋土が共通していることからも、建て替え前の主柱穴であった可能性が高い。Ｐ５とＰ６の間で検出されたP11も、Ｐ６などと埋土が共通するが、柱間が狭いため、同時期のものか判断が難しい。これらに対応する中央土坑がP10である。つまり、主柱穴は４または５本で、少なくとも１回の建て替えがあったものと考



1　黒褐色(10YR2/2)砂質土
2　暗褐色(10YR3/4)粘性粗砂
3　黒褐色(10YR2/3)砂質土（炭少混）
4　暗褐色(10YR3/4)粘性粗砂（礫少含）
5　褐灰色(7.5YR4/1)粘性砂質土
6　黒褐色(10YR2/1)粘性砂質土
7　黒褐色(10YR2/2)粘質粗砂
8　黒褐色(10YR3/2)粗砂
9　灰黄褐色(10YR4/2)粘質粗砂

第49図　竪穴住居14（1/60）





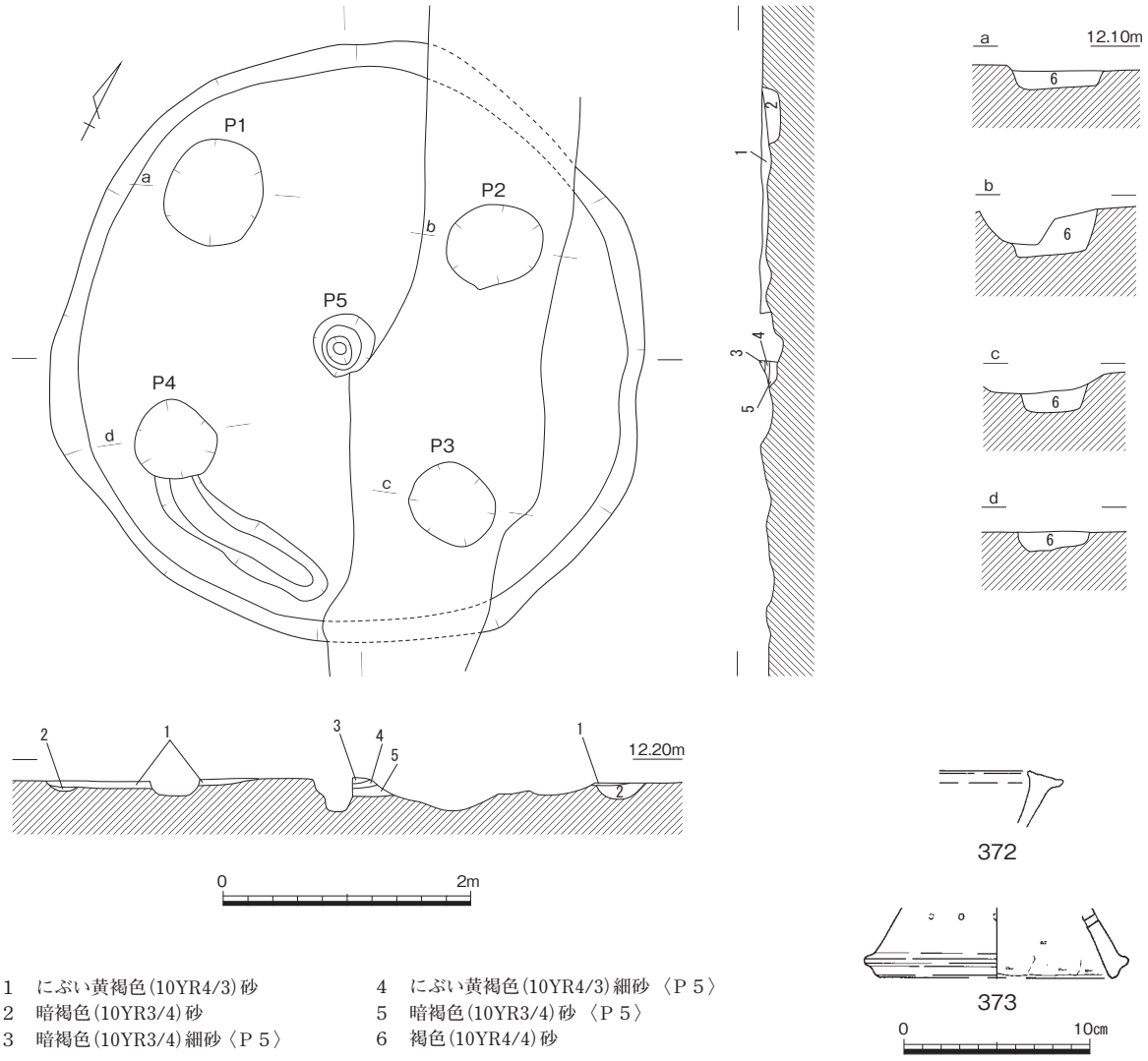
第50図　竪穴住居14出土遺物（1/4・1/2・1/3）

えられる。竪穴住居を取り巻く壁体溝は20～30㎝の幅である。

出土遺物としては、壺349・359、甕350～358・360、高杯361～367、鉢368～370、器台371のほか、刃部が使用によって摩滅した泥質片岩（結晶片岩）製の打製石包丁Ｓ34、流紋岩製の敲石Ｓ35がある。弥生土器は350～355・359～361・364・365・371が弥・後・Ⅰで、それ以外は弥・後・Ⅲの範疇に収まるものが主体を占める。このうち、前者は、この竪穴住居の調査後に南西隅で検出された、この竪穴住居と重複関係にある弥・後・Ⅰの土坑83などに由来する遺物の可能性があるため、この遺構の時期は弥・後・Ⅲと考えておきたい。（河合）

竪穴住居15（第12・51図、図版５－１）

竪穴住居14の北東に位置する竪穴住居で、弥・中・Ⅲ～弥・後・Ⅰの遺物を含む溝１を切るが、東半の大部分を古墳時代の溝17に切られている。平面は円形を呈し、長軸長488㎝、短軸長472㎝を測り、床面積は18㎡である。深さは５㎝程度で、遺存状況は全体的に良くない。主柱穴は直径50㎝前後の掘り方を持つＰ１～Ｐ４の４本柱で、二段に掘り込んだ直径約50㎝、深さ約30㎝の中央穴を有する。地盤が砂質のため、判然としない部分もあるが、壁体溝が周囲を取り囲んでいたものと考えている。



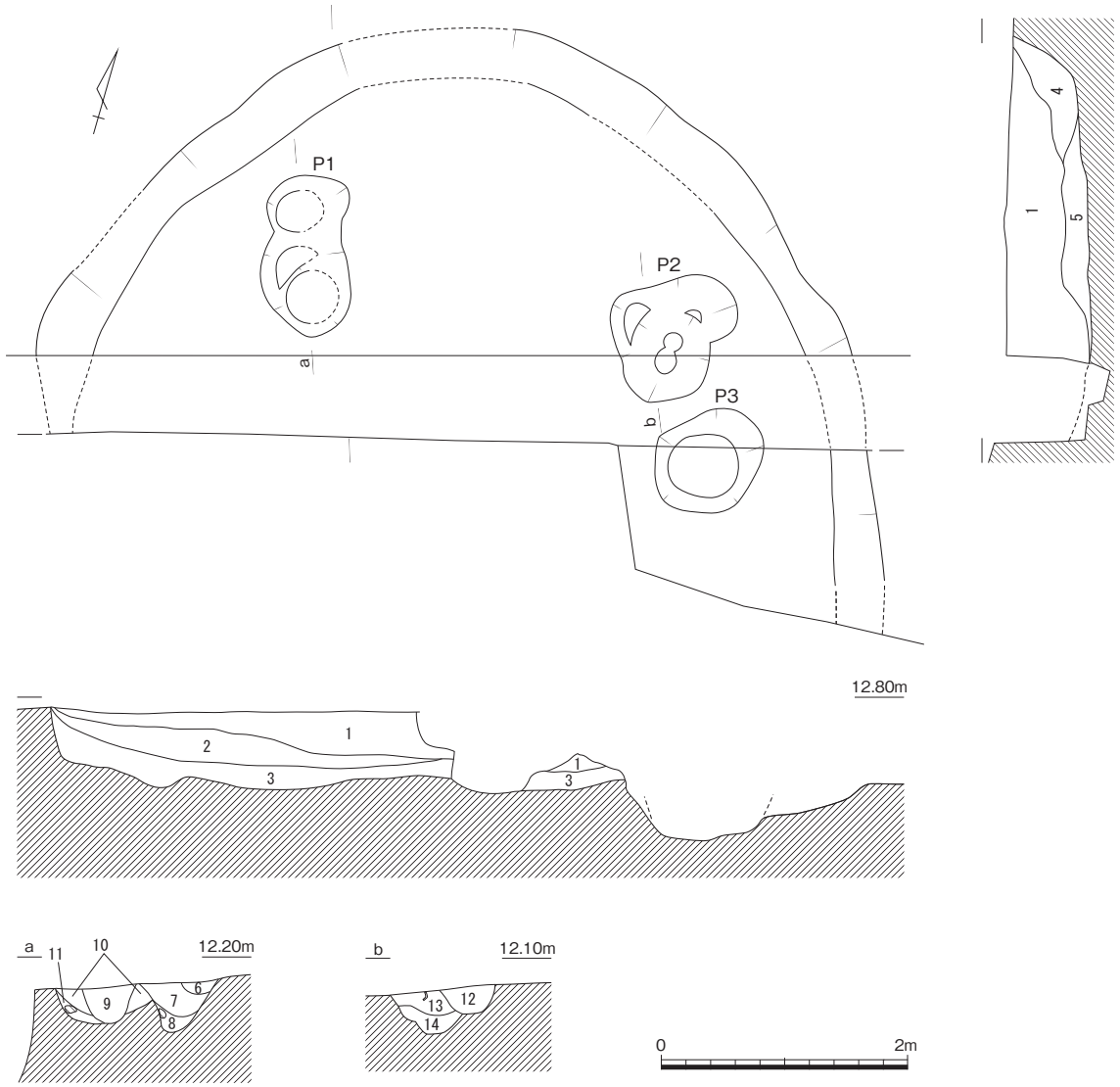
1　にぶい黄褐色(10YR4/3)砂
2　暗褐色(10YR3/4)砂
3　暗褐色(10YR3/4)細砂〈Ｐ５〉
4　にぶい黄褐色(10YR4/3)細砂〈Ｐ５〉
5　暗褐色(10YR3/4)砂〈Ｐ５〉
6　褐色(10YR4/4)砂

第51図　竪穴住居15（1/60）・出土遺物（1/4）

出土遺物には、台付鉢372、高杯373がある。372は口縁部の破片であるが、口縁部を斜め方向に肥厚させ広い面を持つ特徴と、おそらく胴部は稜を持たず丸みを持って台部に至る特徴を持つ。373は高杯の脚部としたが、台付鉢の台部である可能性もある。連続した円形の透かし孔をも持ち、脚端部の折り返しは顕著ではない。内面は横方向のケズリを入念に加えている。373などから、この遺構の時期は弥・後・Ⅰと考えておきたい。（河合）

竪穴住居16（第12・52・53図、図版５－２、写真14）

竪穴住居13より南へ約12ｍ離れたＪ07に位置する。ここは竪穴住居６～10が営まれた微高地が西に下がる緩い斜面にあたる。南半は調査区外となり未調査であるが、径約７ｍの円形を呈すると考えら

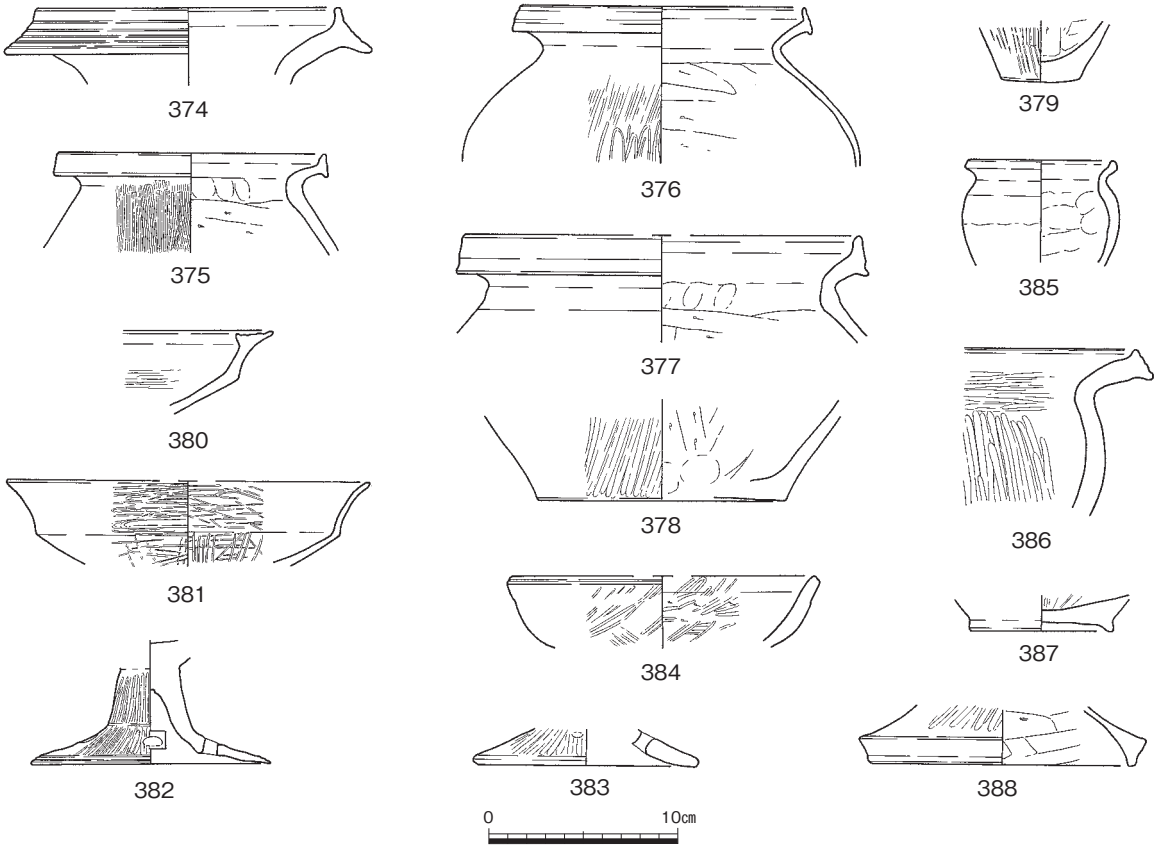


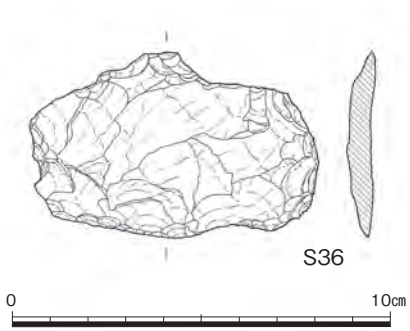
1　黒褐色(10YR3/1)粘性砂質土（土器多・黄褐色土粒多含）
2　黒褐色(10YR2/3)粘性砂質土（土器多・黄褐色土粒多含）
3　黒褐色(10YR2/2)粘質砂質土（土器多・黄褐色土粒多含）
4　暗褐色(10YR3/3)砂質土
5　暗褐色(10YR3/3)砂礫土（礫多含）
6　暗褐色(10YR3/4)粗砂（礫少混）
7　黒褐色(10YR3/2)シルト（炭・焼土・礫極少混）
8　黒褐色(10YR2/3)粘性粗砂（礫多混）
9　黒褐色(10YR2/2)シルト（炭・焼土・礫少混）
10　黒褐色(10YR2/2)シルト（粗砂多・礫少混）
11　黒褐色(10YR2/2)粘性粗砂（礫多混）
12　黒褐色(10YR2/3)シルト（礫含）
13　黒褐色(10YR3/2)シルト（炭・焼土少混）
14　黒褐色(10YR2/2)シルト（粘性強、炭・焼土混）

第52図　竪穴住居16（1/60）

れる。また、造成や開墾により東半上部を削平されていたため、検出面の標高が西端で12.50ｍ、東端で12.10ｍと著しい差がある。そのためＰ３周辺には床面は残っておらず、Ｐ３が当竪穴住居に伴うかどうかは断定できない。Ｐ１～３では検出面の高さは違うが、底面の標高にはあまり差がない。主柱穴をＰ１・２と考えているが、Ｐ１は同規模の２本の柱穴が重複しており、Ｐ２とＰ３がそれに対応して新旧関係にある可能性もある。柱穴の重複から建て替えを想定できるが、壁体溝や埋土の状況からは確認できなかった。

出土遺物は専用の遺物箱２箱分と比較的少なく、石器はＳ36の１点のみである。粘板岩製で定形化していないが、打製石包丁の代用品の可能性がある。土器も細片のため図示し得たのは少ない。中期





第53図　竪穴住居16出土遺物（1/4・1/2）

写真14　微高地東斜面周辺調査風景（北から）

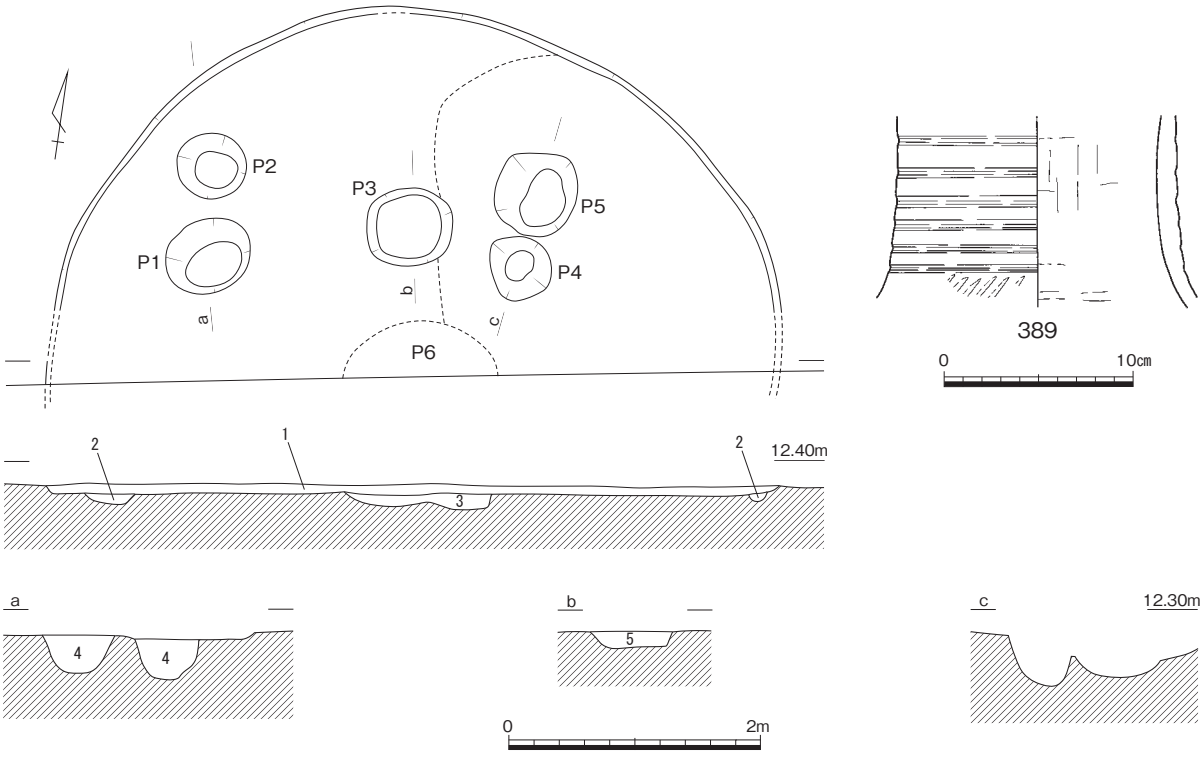
後葉～後期後葉の幅が認められるが、中期後葉の土器は僅かで、後期前半の土器が主体を占めていた。短脚の高杯片も含まれている。当竪穴住居は土坑71を切っており、後期前葉以前の遺物は構築時に壊された遺構から混入した可能性が高い。**388**は角閃石と雲母を多量に含み茶褐色に焼かれた小田川流域特有の土器で、外面に丹塗りを施す。小型の器台と思われる。**377**・**383**はＰ３から出土した。Ｐ３が本竪穴住居に伴うかどうかは断定できないが、これらの状況から、本竪穴住居を弥・後・Ⅲに位置付けておきたい。（渡邉）

竪穴住居17（第12・54図、図版５－３）

竪穴住居16の東に位置する。南半は調査区外のため未調査であるが、径約5.8ｍの円形を呈すると考えられる。周辺は微高地から下がって平坦に削平されており、覆土直上は耕作土であった。検出面の標高は12.2ｍ前後、底面の標高は12.14ｍで、深さ10㎝弱しか遺存していない。

柱穴の配置からＰ１・２とＰ４・５が主柱穴と考えた。２本ずつあり、建て替えを想定できる。壁体溝は、断面では第２層が埋土に対応すると考えたが、平面プランでは明確にし得なかった。Ｐ３は当竪穴住居に伴うと断定はできない。Ｐ６は調査区南側溝により削平され、土層断面で確認したのみである。位置関係から中央土坑と考えた。

出土遺物は少なく、中期後葉～後期後葉の土器が混在している。古い土器は土坑92からの混入の可能性が高い。**389**はＰ１から出土した。図示していないがＰ２から裾部に沈線を施し、端部を丸めた高杯脚部片が出土している。Ｐ１より新しく位置付けられる。古い土器は築造時の混入の可能性があるため、柱穴出土土器の様相から、弥・後・Ⅱ～弥・後・Ⅲに営まれたと考えられる。（渡邉）

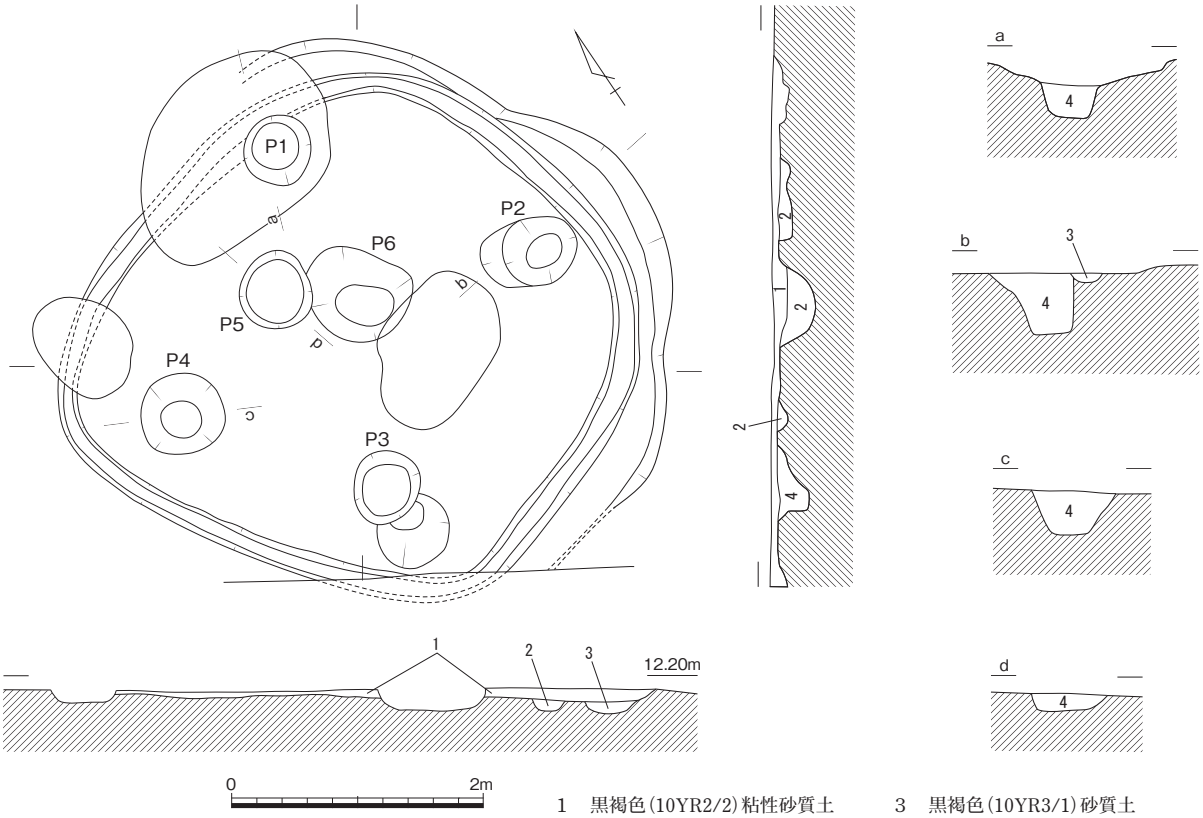


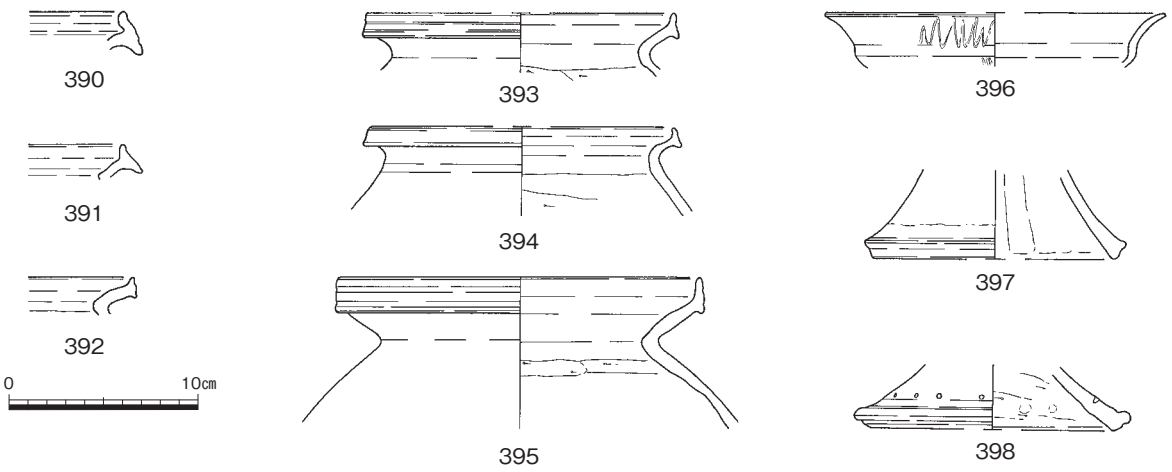
1　灰黄褐色(10YR4/2)砂質土（礫少含）
2　にぶい黄色(2.5Y6/4)（灰黄褐色(10YR4/2)砂質土塊含）
3　黒褐色(10YR3/2)シルト（炭・焼土混）
4　暗褐色(10YR3/3)シルト（炭少混）
5　暗褐色(10YR3/3)細砂〈壁体溝〉

第54図　竪穴住居17（1/60）・出土遺物（1/4）

竪穴住居18（第12・55図、図版６－１、写真15）

竪穴住居17の北東約７ｍに位置する。一辺約４ｍの隅丸方形を呈す小形の竪穴住居である。周囲は微高地最高所より60～70㎝低い平坦地で、上部を著しく削平されている。また、土坑102・106に切られている。検出面の標高は12.10ｍ、床面の標高は12.00ｍを測る。ベースは小円礫を多く含む砂礫層で、床面も凹凸が激しく、掘り方上部も著しく崩れている。柱穴の配置からＰ１～４を主柱穴と考えた。中央に位置するＰ６は柱穴と同規模で埋土も差がないが、浅く、底面に平坦面を有することから





第55図　竪穴住居18（1/60）・出土遺物（1/4）

中央土坑とした。Ｐ５も埋土は同じであるがＰ６を切り、当竪穴住居に伴うかどうか不明である。

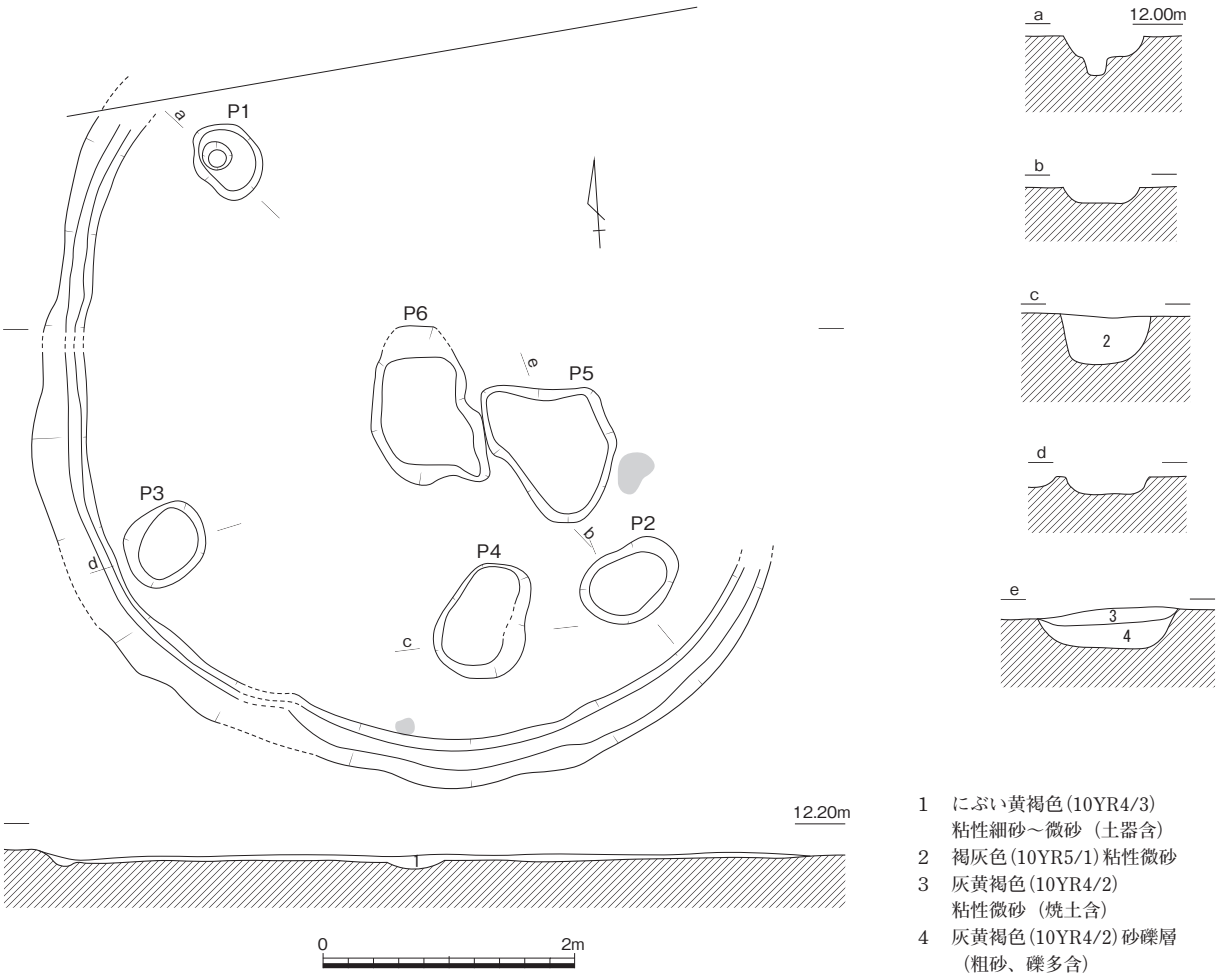
出土土器は少なく、石器もなく、サヌカイト片が２片のみである。土器はいずれも細片で、中期後葉～後期後葉の幅が認められる。柱穴や中央土坑から中期に遡る土器は出土しておらず、古い段階の遺物は混入の可能性が高い。**390・392**が床面から、**394**がＰ４から、**395**がＰ６から出土した。また、図示していないが、壁体溝から素縁の高杯口縁部片が出土している。以上のことから、弥・後・Ⅲの範疇で考えておきたい。　（渡邉）

写真15　竪穴住居18－Ｐ１（南東から）

竪穴住居19（第12・56・57図、図版６－２・８－２・108）

Ｈ08とＨ09南側の間に立地している。西側に近接して土坑117・118、南側から南東側にかけて土坑119～122があり、その先に竪穴住居22～24が存在する。また遺構集中区の縁辺部を廻っていた溝１の外側に位置することとなる。

本竪穴住居は、かなり下がった所で確認したこともあり、南西側半分のみ比較的遺構が良好に残る

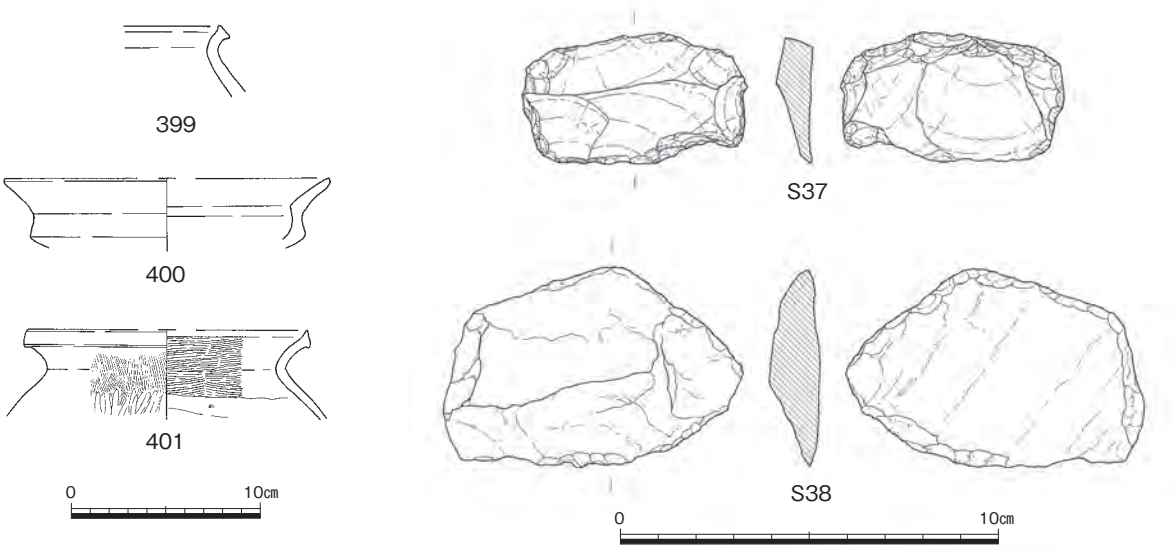


第56図　竪穴住居19（1/60）

ものの、北東側半分は地山が上がってきており、一部判然としない箇所が存在する。よって本竪穴住居の規模も長軸長は把握できるが、短軸長は不明である。その長軸長は655㎝になり、確認面からの深さは８㎝前後しかない。なお床面の標高は11.92ｍを測る。平面形状は円形である。柱穴は本来４本であったと思われるが、確認したのは３本である。中央穴は存在し、規模は64×43㎝で、深さは９㎝である。平面形状は不整円形である。壁体溝が北西側～南西側～南東側にかけて存在する。床面には、一部に被熱面が存在する。

出土遺物には、以下のものがある。**399**は壺である。口縁部は斜め内側を向き、端部は上下両方にやや張り出す。**400**は高杯である。身の口縁部は、段を持って逆「ハ」字に外反する。**401**は甕で、Ｐ３から出土した。口縁部はやや斜め内側方向を向き、端部は上下両方にやや張り出す。胴部外面は、頸部の直下までヘラミガキが施される。**Ｓ37**と**Ｓ38**は打製石包丁である。**Ｓ37**はサヌカイトで、**Ｓ38**は砂質の粘板岩である。

これらの遺物は、弥・後・Ⅲであり、竪穴住居の時期も同じになると考えている。　　（小林）



第57図　竪穴住居19出土遺物（1/4・1/2）

竪穴住居20（第12・58・59図、図版６－３・８－２・77・107・111、写真16）

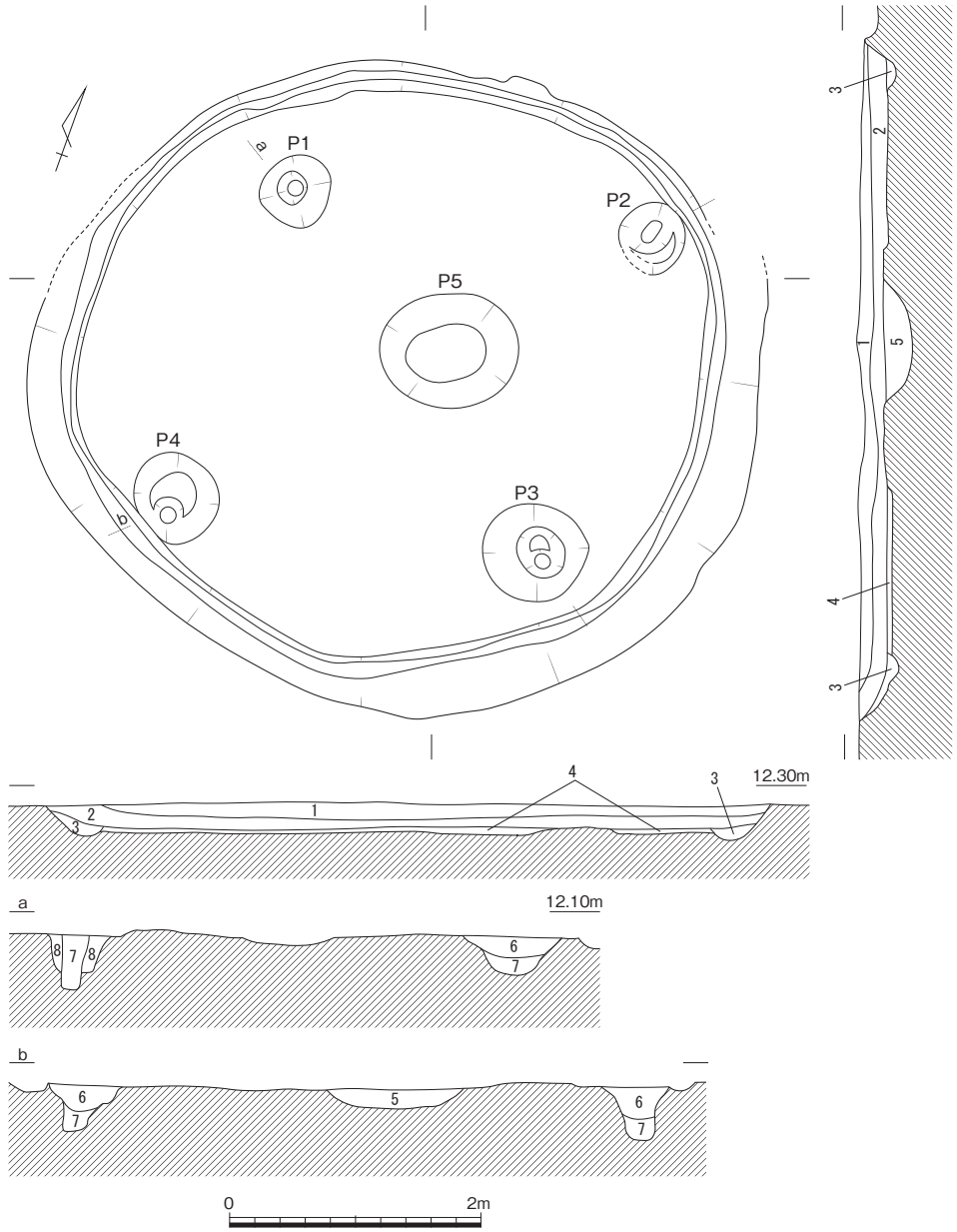
Ｉ08に位置する竪穴住居で、竪穴住居21と重複して検出している。調査当初には、竪穴住居21と併せて１軒の竪穴住居であるとの認識であったが、時期の異なる２軒が重複していることが判明した。前後関係は竪穴住居20が新しく、竪穴住居21を切っている。

直径は長軸579㎝、短軸530㎝の円形を呈する竪穴住居で、検出面から床面までの深さは18～22㎝である。主柱穴は４本で、中央部分に中央穴と考えられるＰ５を持つ。この中央穴の周辺は基盤を掘り残して高くなっているが、その面に合わせて第４層の貼り床を施しており、床面を平坦に仕上げている。ただし、北側については貼り床を確認することができなかったため、平面では検出できていないものの、南半分にベッド状遺構があった可能性がある。柱穴はＰ１がやや壁体溝から離れているが、他のＰ２～Ｐ４の３本の柱穴については壁体溝に近接して造られている。Ｐ４の断面には柱痕跡が見られ、直径約20㎝程度の柱材が用いられていたことが判る。中央穴は平面が楕円形、断面が椀状を呈

している。床面に被熱痕跡や炭層などは検出していない。

出土遺物には甕402、高杯403～407、鉢408、壺を模したと考えられるミニチュア土器409、サヌカイト製で平基式の石鏃Ｓ39、砥石は流紋岩製のＳ40とＳ41がある。Ｓ41は断面図で表している上下を除いた四面すべてを使用しており、よく使い込まれていることがわかる。402は、口縁部の器壁がやや厚く上方へ立ち上がり、外面にナデ調整を行っている。高杯は、口縁部を長く直線上に開いて杯部が深くなる403と、短く外反する404～406がある。

これらの出土遺物から、竪穴住居の時期は弥・後・Ⅲ～Ⅳであると考えられ、重複している竪穴住居21の時期や検出状況とも矛盾がないものである。　（團）



1　灰黄褐色(10YR4/2)粘性微砂
　（にぶい黄橙色(10YR7/3)
　粘性微砂小土塊多含）
2　灰黄褐色(10YR4/2)粘性微砂
3　にぶい黄褐色(10YR5/3)粘性微砂
4　褐灰色(10YR5/1)微～細砂〈貼り床〉
5　黒褐色(10YR3/2)細砂（礫混）
6　黒褐色(10YR3/2)細砂
7　黒褐色(10YR3/2)細砂
　（にぶい黄橙色(10YR6/4)
　細～粗砂土塊混）
8　にぶい黄橙色(10YR6/4)細砂

第58図　竪穴住居20（1/60）

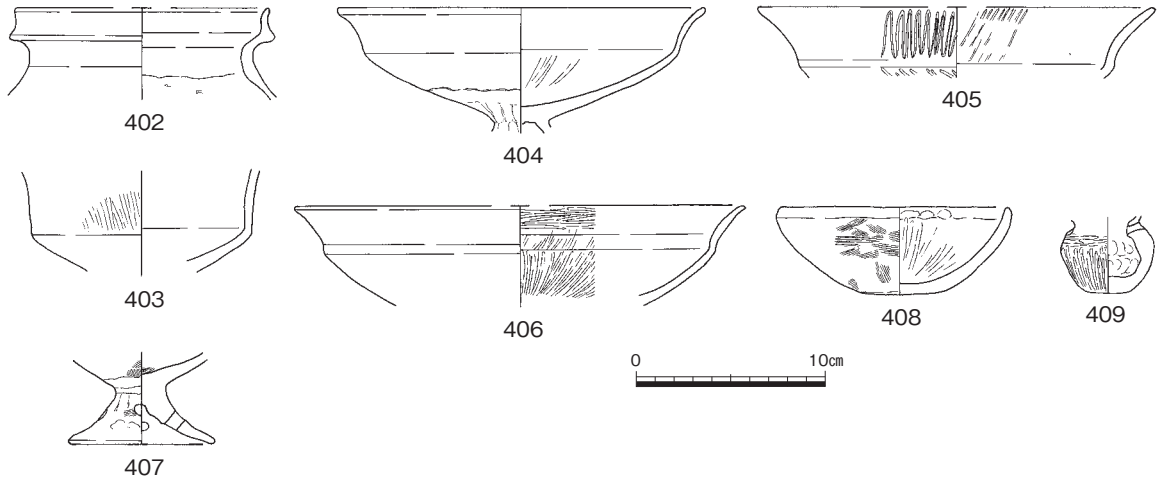
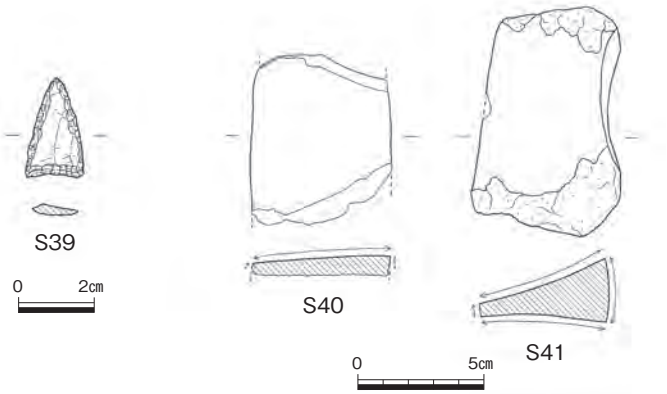


写真16　竪穴住居20調査風景
（南から）



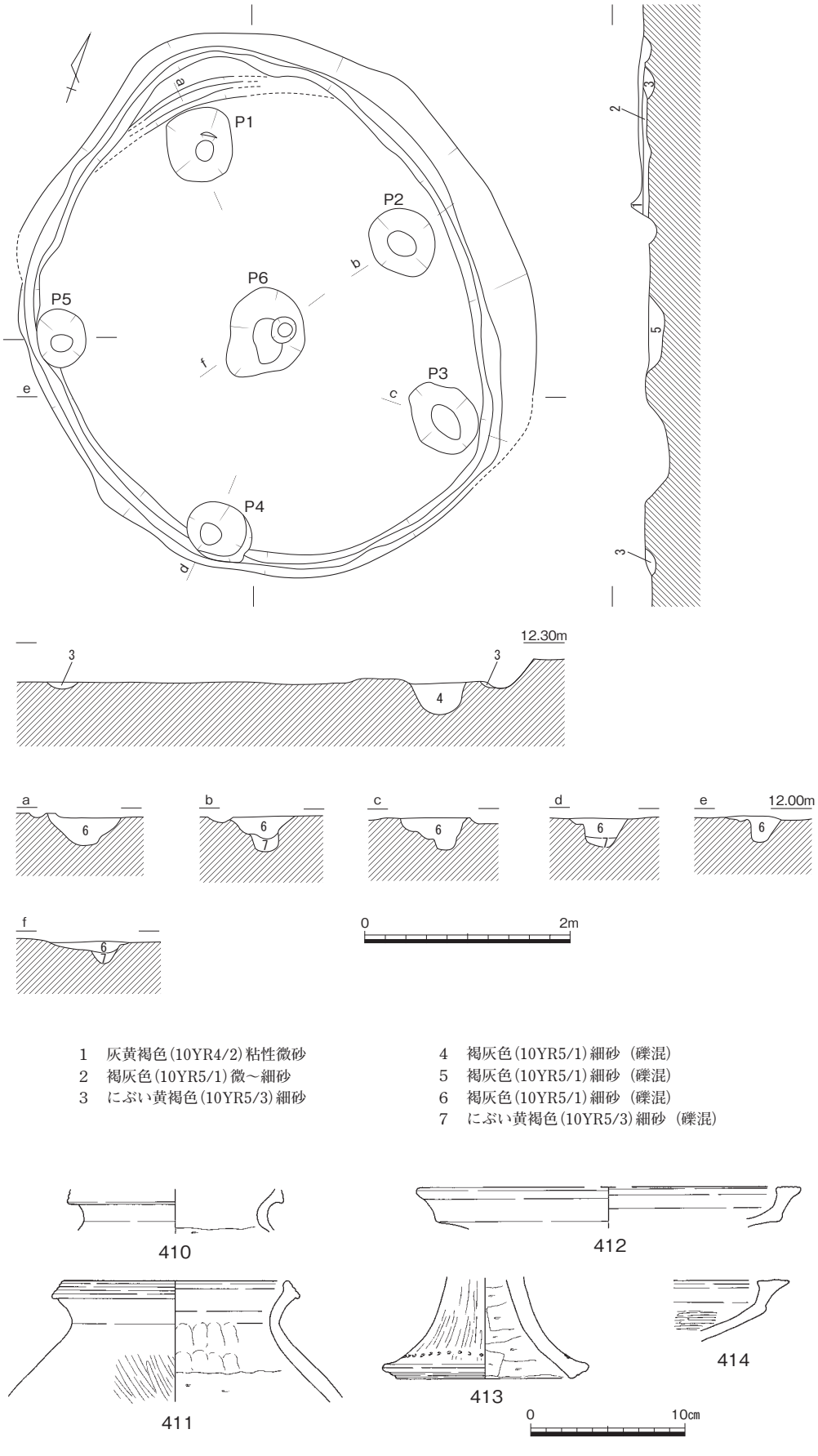
第59図　竪穴住居20出土遺物（1/4・1/2・1/3）

竪穴住居21（第12・60図、図版６－３・８－２）

Ｉ08に位置する竪穴住居で、竪穴住居20及び溝１と重複して検出し、竪穴住居20の北側に、溝１の西側に位置している。調査当初、竪穴住居20と竪穴住居21を１軒と認識して調査に入ったが、結果として時期の違う２軒の竪穴住居が重複していることが判った。

規模は、直径が長軸579㎝、短軸530㎝のやや楕円形を呈する竪穴住居で、床面の標高は竪穴住居20より数㎝程度深い、11.95ｍである。主柱穴は５本であり、Ｐ１～３は壁体溝に接し、Ｐ４とＰ５は壁体溝と重複する。Ｐ５は掘り方の部分が壁体溝と重複しているにとどまるが、Ｐ４は柱自体が壁体溝と重複している。中央部分には中央穴と考えられるＰ６があり、規模は45×45㎝、深さ26㎝である。周辺に炭層などは認められない。基盤層には礫を多く含むためか、竪穴住居20と同様に貼り床が見られ、土層断面の第２層が相当するものと考えられる。厚さは約３㎝で、褐灰色の微～細砂である。壁体溝は北側で一部分のみで二重になって検出しており、全周していない。このことから、北側の壁面部分の一部分を、改修している可能性が考えられる。

出土遺物は、当初竪穴住居20と一緒に掘り下げを行ったため、本住居に確実に伴う遺物の出土量は多くない。図示したものには、甕**410・411**、高杯**412・413**がある。**411**は、体部内面の上部にケズリが及んでいない。**412・414**の口縁部は端部を外方へ拡張するものである。**413**の脚端部は断面が逆三角形で、列点文で飾られている。これらの出土遺物の特徴から、弥・後・Ⅱの竪穴住居であることと考えられ､重複している竪穴住居20の時期や検出状況とも矛盾がない。　（圃）



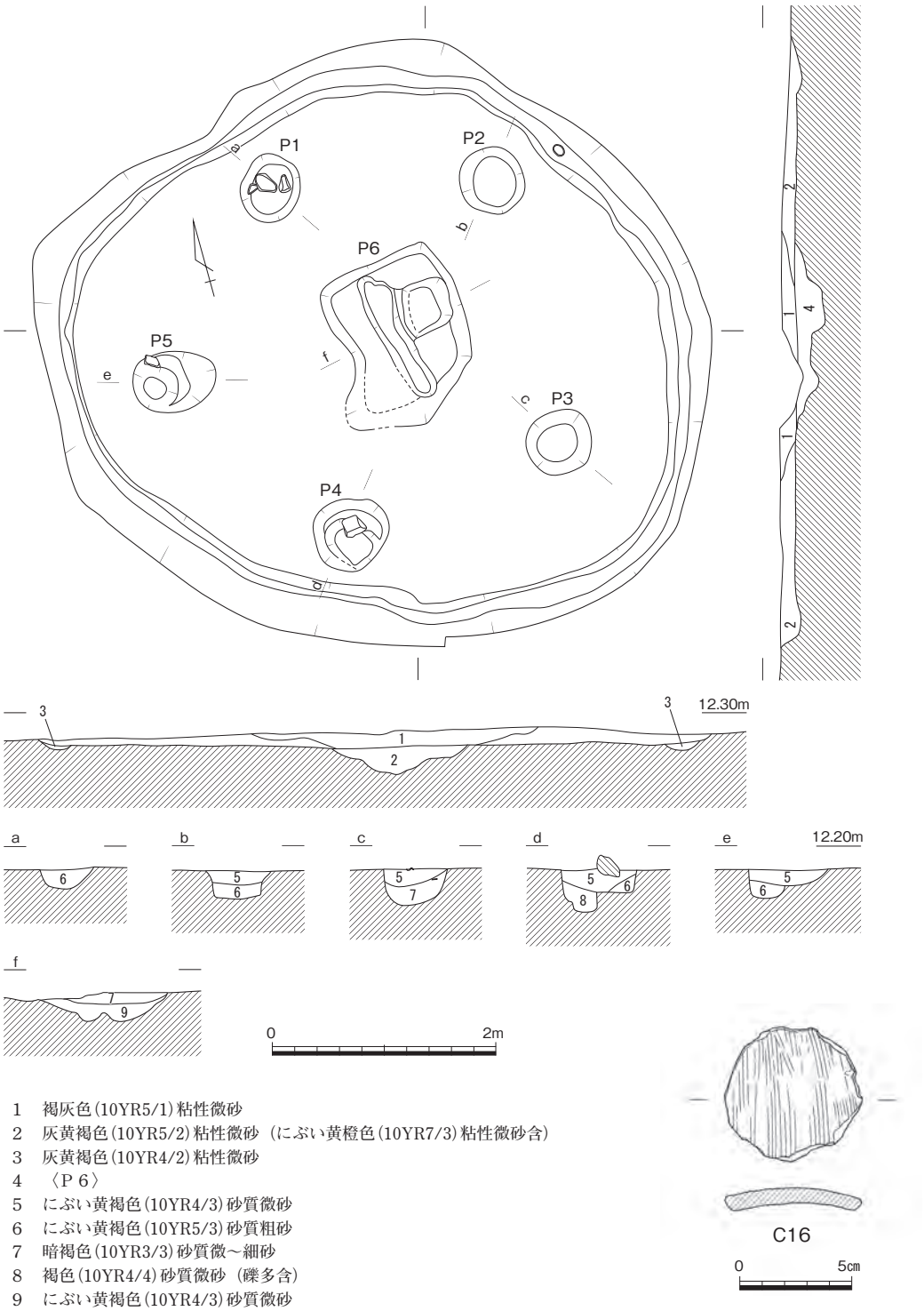
1　灰黄褐色(10YR4/2)粘性微砂
2　褐灰色(10YR5/1)微～細砂
3　にぶい黄褐色(10YR5/3)細砂
4　褐灰色(10YR5/1)細砂（礫混）
5　褐灰色(10YR5/1)細砂（礫混）
6　褐灰色(10YR5/1)細砂（礫混）
7　にぶい黄褐色(10YR5/3)細砂（礫混）

第60図　竪穴住居21（1/60）・出土遺物（1/4）

竪穴住居22（第12・61・62図、図版７－１・８－２・116）

Ｉ08とＩ09の間にあるが、大半は後者の北東側に立地している。西側に近接して竪穴住居23があり、その先に竪穴住居24が存在する。また遺構集中区の縁辺部を廻っていた溝１の外側に近接して位置することとなる。

長軸長は610㎝で、短軸長は540㎝になる。平面形状は、ほぼ円形を呈する。確認面からの深さは、６㎝前後で、かなり掘削した後に見つかった。なお床面の標高は12.00ｍを測り、床面積は24.77㎡で



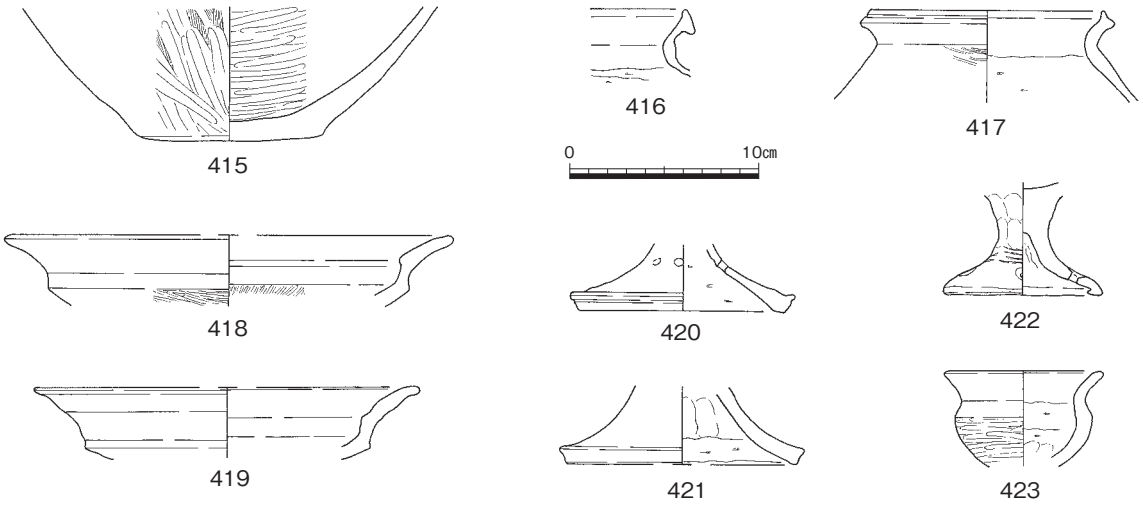
1　褐灰色(10YR5/1)粘性微砂
2　灰黄褐色(10YR5/2)粘性微砂（にぶい黄橙色(10YR7/3)粘性微砂含）
3　灰黄褐色(10YR4/2)粘性微砂
4　〈Ｐ６〉
5　にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質微砂
6　にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質粗砂
7　暗褐色(10YR3/3)砂質微～細砂
8　褐色(10YR4/4)砂質微砂（礫多含）
9　にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質微砂

第61図　竪穴住居22（1/60）・出土遺物①（1/3）

ある。柱穴は５本であり、すべてが見つかっている。ほぼ等間隔に配置されており、60～70㎝前後の規模で、深さは20～30㎝前後である。中央穴が存在し、規模は45×45㎝で、深さは26㎝である。平面形状は隅丸方形である。壁体溝は全周にわたって確認できた。

出土遺物には、以下のものがある。**415**は壺である。底部はやや張り出しており、内外面ともヘラミガキが施される。**416・417**は甕である。**416**は口縁端部が上下につまみ出されているのに対し、**417**は上方のみに張り出す。**418～422**は高杯である。**418・419**は身で、段を持ちながら外反し、内面が強調されている。**420～422**は脚部である。短脚であり、**420・421**は端部が肥厚に面を作り出している。**422**は接続部が中実である。**423**は小型の鉢である。外面はヘラミガキで、内面はヘラケズリされる。**Ｃ16**は円板状土製品である。

これらの遺物は、弥・後・Ⅱ～Ⅲであり、竪穴住居の時期も同じになると考えている。　（小林）

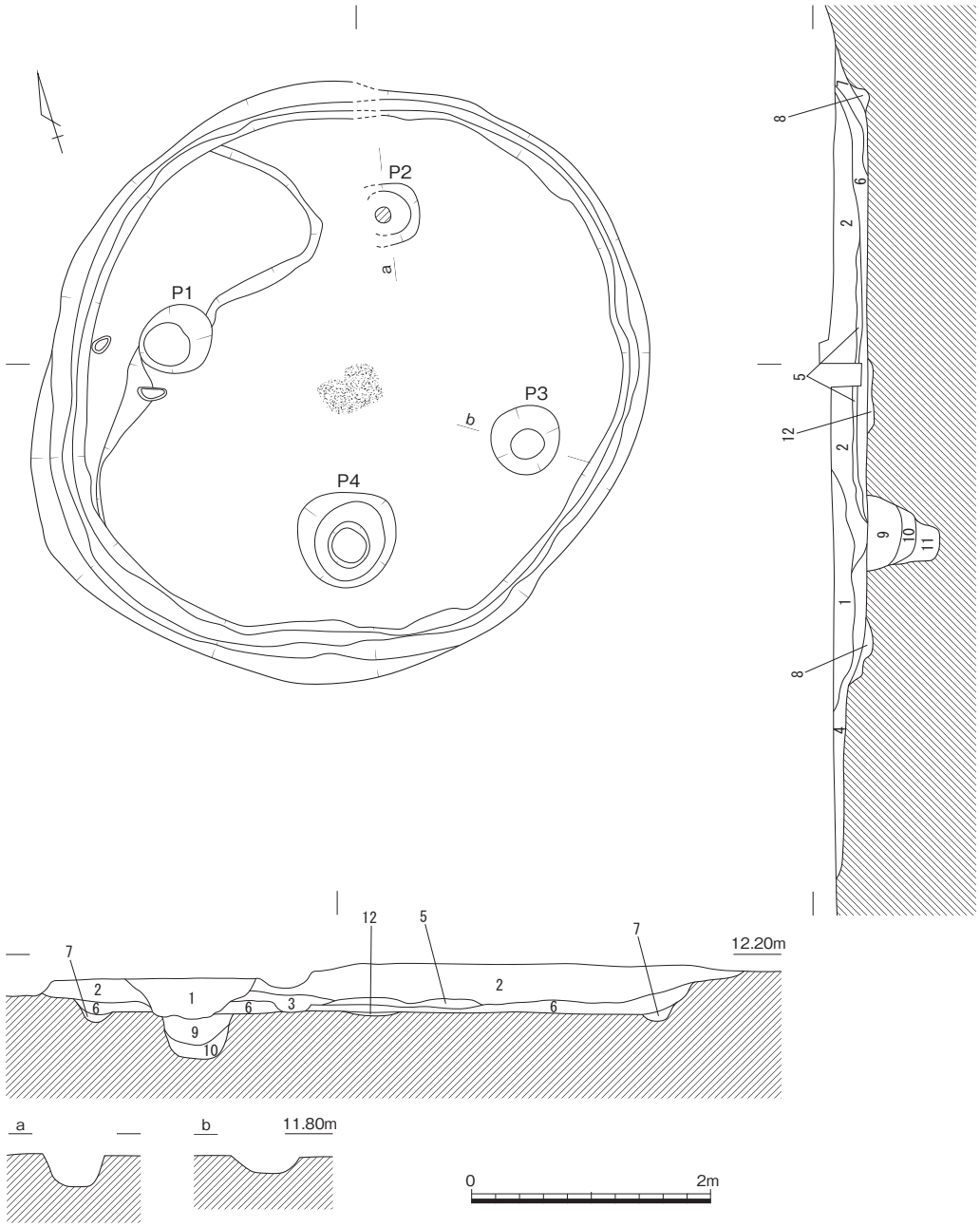


第62図　竪穴住居22出土遺物②（1/4）

竪穴住居23（第12・63・64図、図版７－２・８－２・116）

Ｉ09の北西に位置し、竪穴住居22と西側部分で重複している。検出状況からは、竪穴住居22によって上面を削平されており、竪穴住居22の方が新しいものと考えられる。規模は、直径502×500㎝、検出面から床面までの深さ40㎝、床面の標高11.72ｍを測る。平面では図化できていないが、断面観察からは後述する竪穴住居24のように肩が崩れていることがわかる。主柱穴は４本で、中央部分で炭を多く含む場所を１カ所検出しているが、基盤層が砂層であり、明らかに被熱と思われる面は確認できなかった。柱穴のうち、Ｐ１とＰ４については、しっかりとしたものであったが、Ｐ２・Ｐ３については、埋土に砂を多く含み、Ｐ３は９㎝と浅いものであった。しかしＰ２は、柱痕跡を平面で確認したため確実に主柱穴の一つであると考えられる。Ｐ１周辺西側部分には、ベッド状遺構を設えており、東西断面の第６層にあたる。床面との高低差は３～５㎝である。

出土遺物には、甕**424～426**、高杯**427～433**、鉢**434**、砥石**Ｓ42**、円板状土製品**Ｃ17～Ｃ19**、土製勾玉**Ｊ３**、鉄器**Ｍ14～Ｍ16**がある。**425**のように、体部内面のケズリが上半に及んでいないものがある。高杯の口縁部は、上方へ大きく拡張する**427**のほか、外半して内面途中に段を持つ**428～430**などがある。遺構の時期は、遺物からは竪穴住居22との明瞭な前後関係は不明である。しかし検出状況からは竪穴住居22よりは古く、弥・後・Ⅱの範疇の遺構であると考えられる。　（圃）

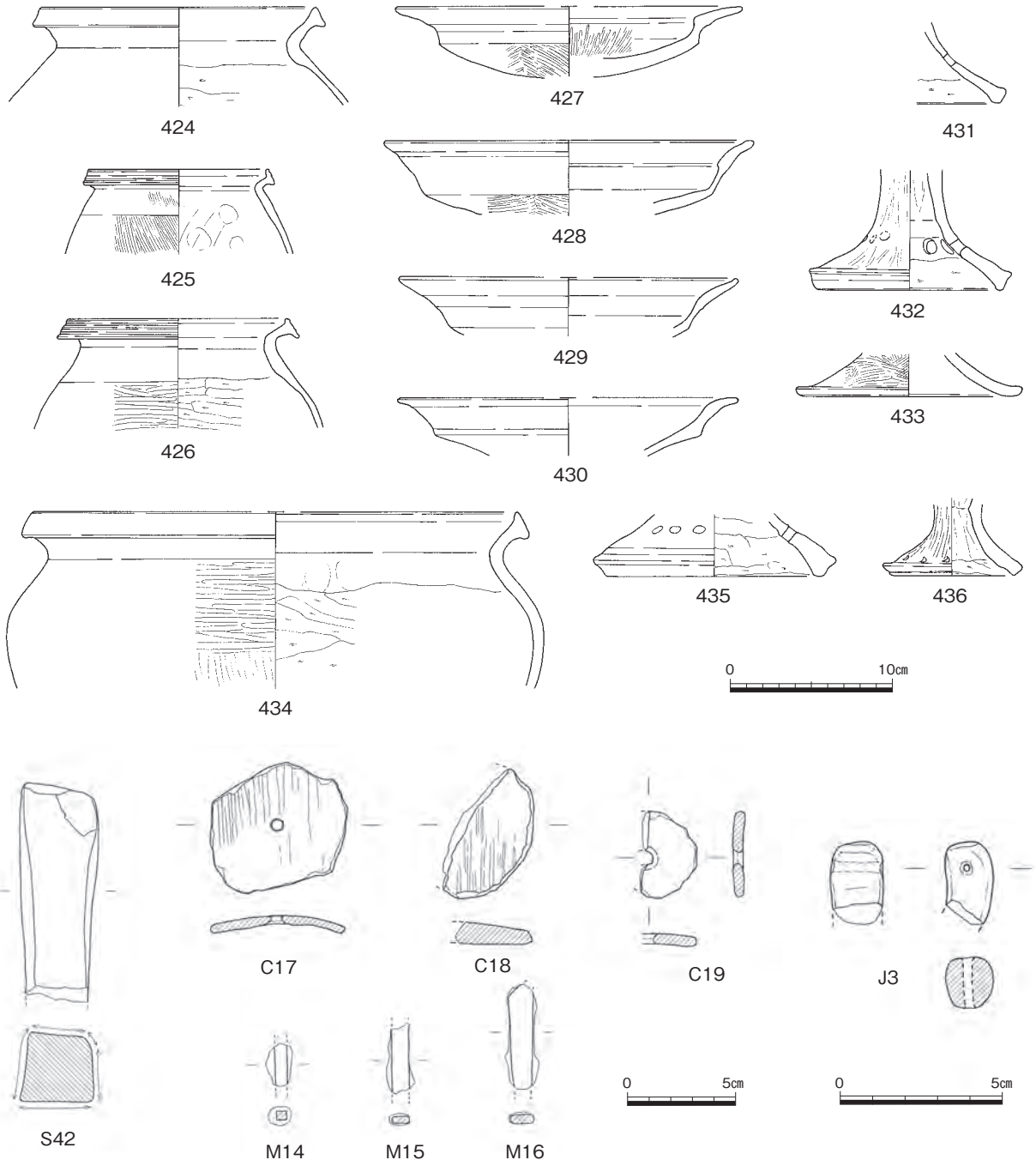


1　黒褐色(10YR3/2)微砂
2　暗褐色(10YR3/4)微砂
3　褐灰色(10YR5/1)微砂
4　にぶい黄褐色(10YR4/3)微砂（土器・礫含）
5　褐灰色(10YR4/1)微砂（炭含）
6　褐灰色(10YR4/1)微砂（炭多・基盤土塊含）
7　灰黄褐色(10YR4/2)微砂
8　灰黄褐色(10YR4/2)微砂
9　灰黄褐色(10YR4/2)細砂
10　にぶい黄橙色(10YR6/3)粗砂（灰黄褐色(10YR4/2)微砂塊混）
11　暗褐色(10YR3/3)シルト混粗砂
12　黒褐色(10YR3/1)細砂（炭多含）

第63図　竪穴住居23（1/60）

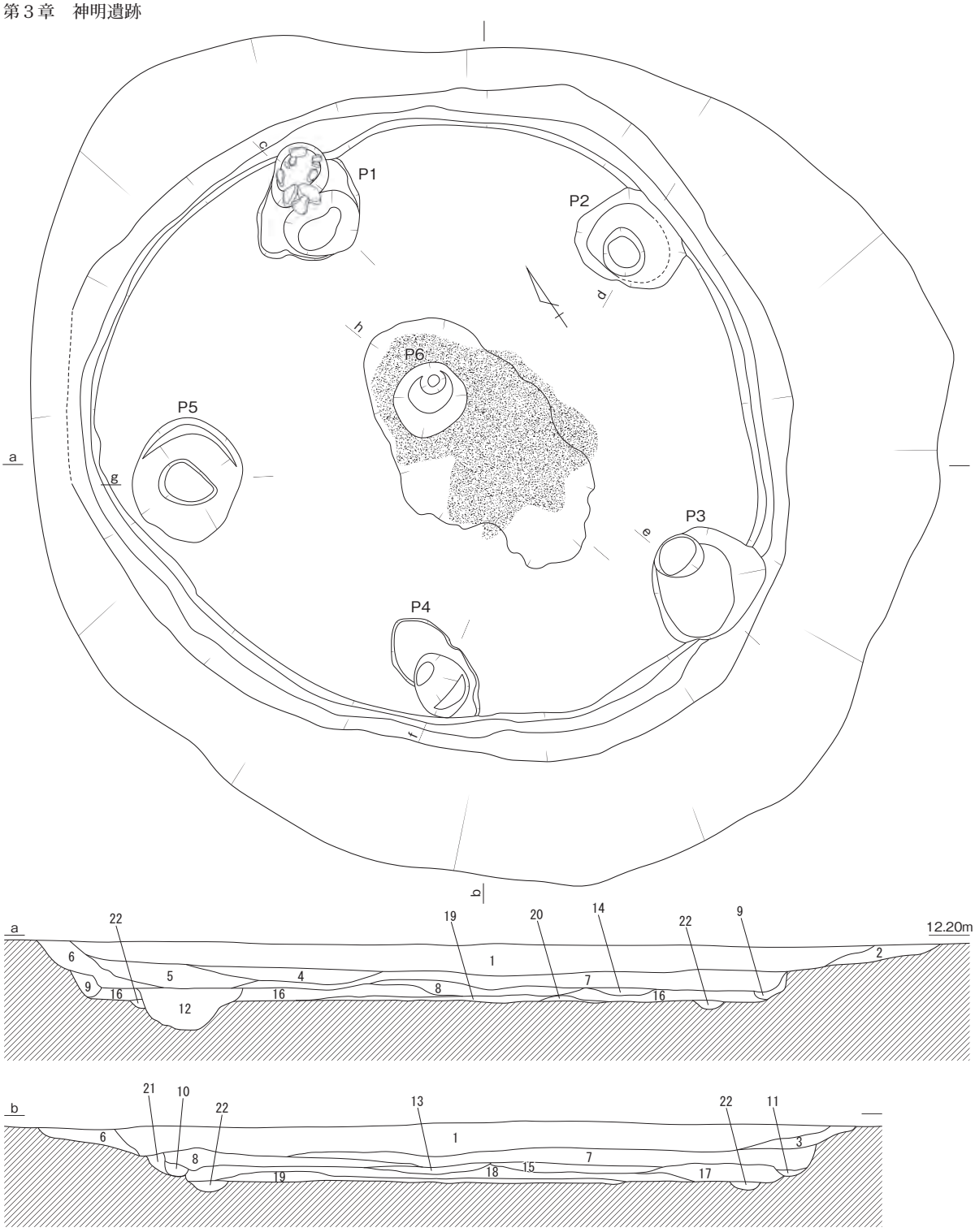
竪穴住居24（第12・65～70図、図版７－３・８－１・２・77・111・116・119）

Ｉ09に位置し、竪穴住居23の南側に接している。１回の建て替えが行われている。新段階の竪穴住居は、当初940×825㎝のやや不整形のものとして確認し、観察用の土手を設定して調査に入った。結果、全周で大きく肩部が崩れていたためで、本来は695×662㎝の規模で、円形を呈する竪穴住居であ



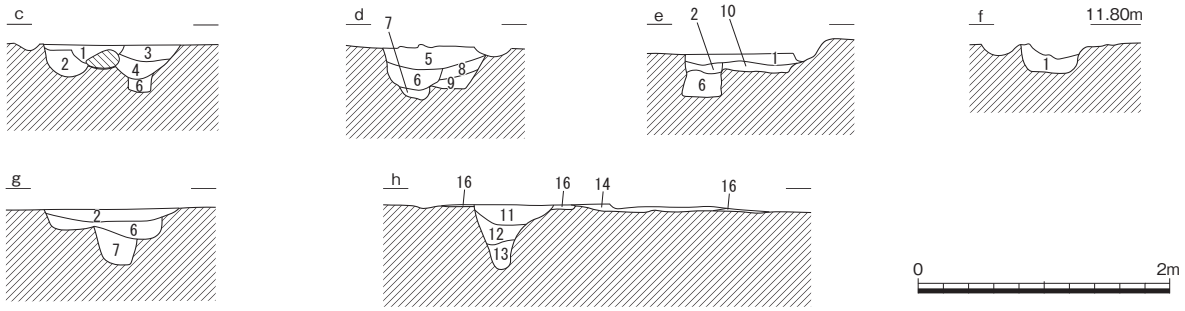
第64図　竪穴住居23出土遺物（1/4・1/3・1/2）

ることが判明した。検出面からの深さは55㎝を測る。主柱穴は５本で、いずれも掘り方は壁体溝に接している。中央には284×165㎝、深さ４～６㎝の浅い掘り込みを伴う柱穴状の中央穴Ｐ６があり、主にこの浅い掘り込みに炭層が広がっている。Ｐ１のみ南北２カ所で柱穴状の掘り込みが見られ、北側のものには柱の周辺に入れられた根石が見られる。土層断面の観察からは、北側のものが南側のものより新しいため、北側に作り替えをした時に地盤を補強するために石が入れられた可能性がある。古段階の住居は、590×543㎝を測る円形を呈するものである。主柱穴は５本であり、新段階の主柱穴とほぼ同じ位置で検出している。中央部分には中央穴と考えられるＰ11・12を検出している。新段階のものと違い、炭層の広がりは認められない。床面の標高は11.57ｍであり、新段階の床面との差は13㎝



1　灰黄褐色(10YR4/2)粘性微砂
2　にぶい黄橙色(10YR6/3)微～細砂
3　にぶい黄褐色(10YR5/3)粘性微砂
4　灰黄褐色(10YR5/2)粘性微砂（基盤層含）
5　にぶい黄褐色(10YR5/3)粘性微砂
（灰白色(10YR7/1)微砂混）
6　にぶい黄褐色(10YR5/4)粘性微砂
7　灰黄褐色(10YR5/2)粘性微砂（炭片含）
8　褐灰色(10YR4/1)粘性微砂
9　灰黄褐色(10YR4/2)微～細砂
（暗褐色(10YR3/4)微～細砂混）
10　褐灰色(10YR5/1)微～細砂
11　にぶい黄橙色(10YR7/4)微～細砂
（灰黄褐色(10YR5/2)粘性微砂混）
12　〈Ｐ３〉
13　にぶい黄褐色(10YR5/4)微砂（炭層２層）
14　灰黄褐色(10YR5/2)微～細砂褐灰色
(10YR5/1)粘性微砂互層堆積
15　にぶい黄褐色(10YR5/4)微砂（炭層２層）
16　にぶい黄褐色(10YR5/3)微～細砂
17　にぶい黄褐色(10YR5/3)微～細砂
18　にぶい黄褐色(10YR5/3)微～細砂
19　灰黄褐色(10YR5/2)粘性微砂
（淡黄色(2.5Y8/3)粘質土層状含）
20　褐灰色(10YR4/1)細砂
〈上面炭層、下層住居中央土坑凹〉
21　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性微砂
22　灰黄褐色(10YR4/2)細砂

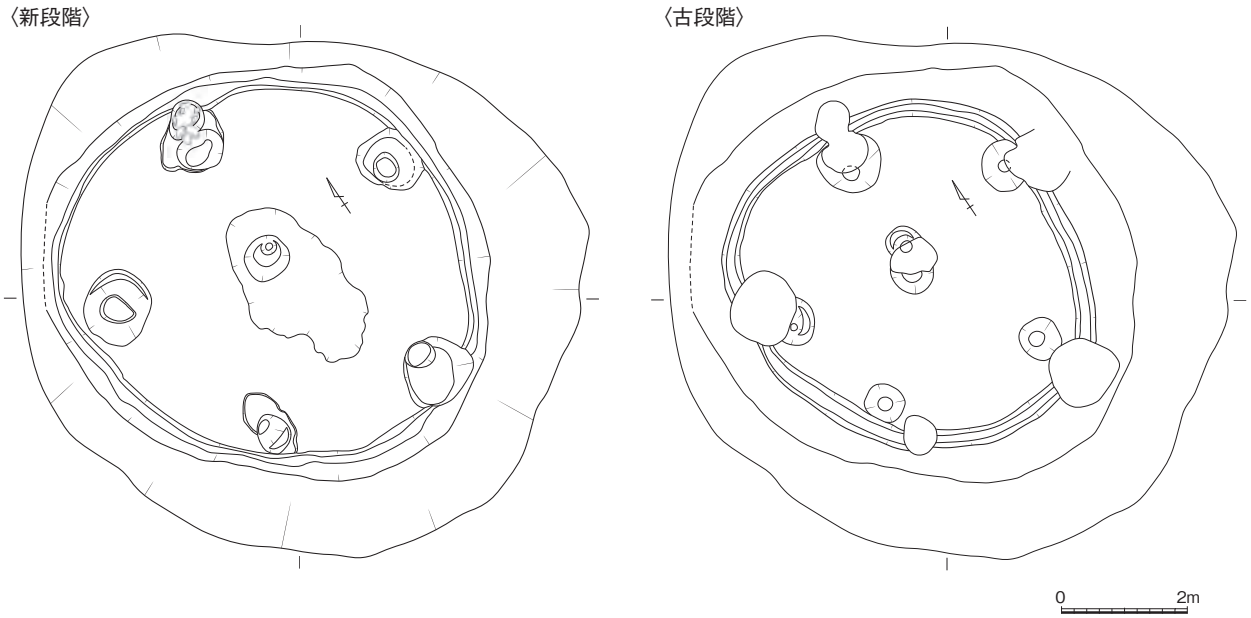
第65図　竪穴住居24新（1/60）



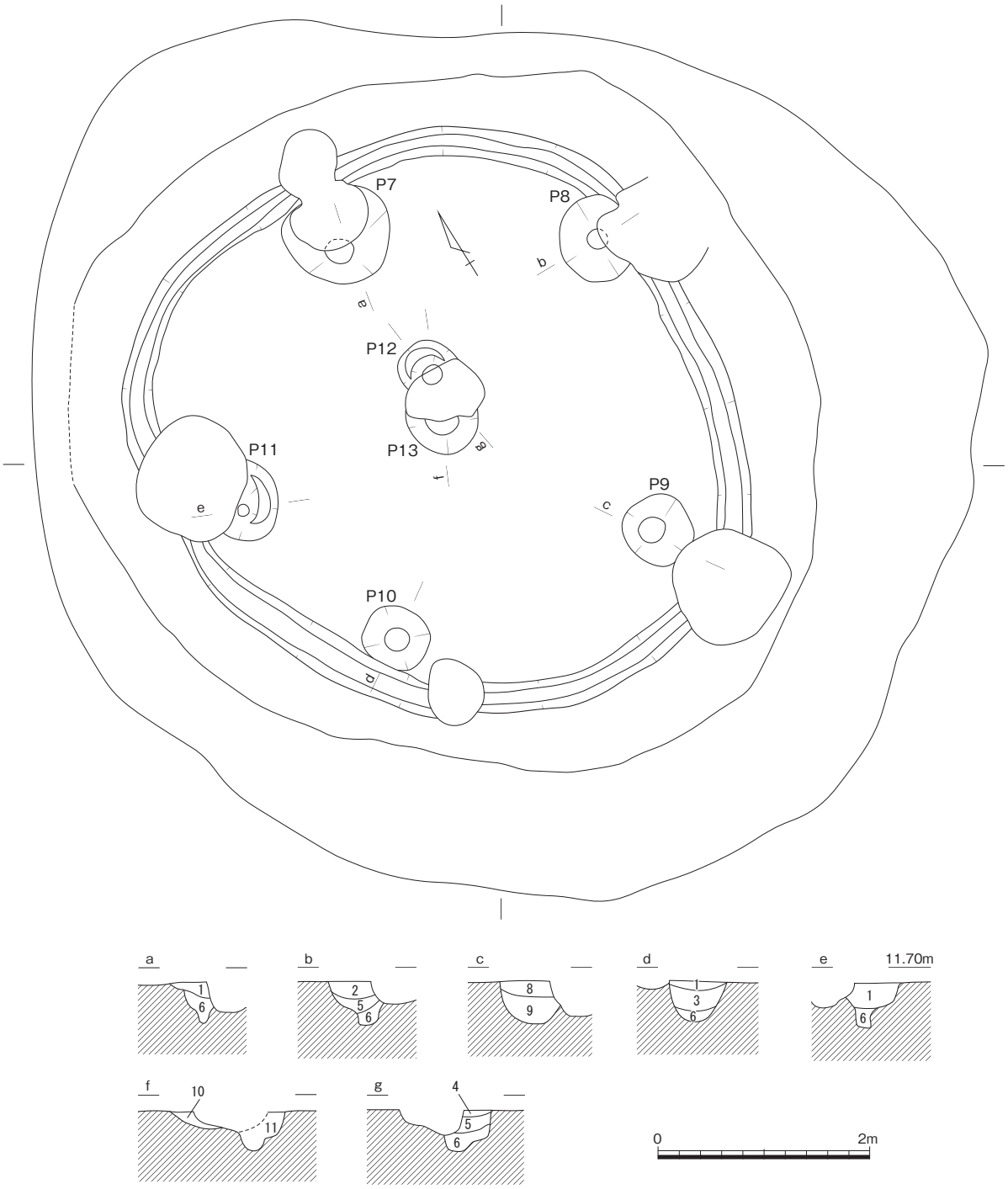
1　黒褐色(10YR3/2)砂質微～細砂（礫多含）
2　暗褐色(10YR3/3)砂質微砂（礫多含）
3　褐色(10YR4/4)砂質微～細砂（礫多含）
4　暗褐色(10YR3/4)砂質微砂（礫含）
5　褐色(10YR4/4)砂質微～粗砂（黒褐色(10YR3/2)砂質微～粗砂混）
6　にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質微砂
7　にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質粗砂
8　褐色(10YR4/4)砂質微砂
9　にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質微砂
10　褐色(10YR4/4)砂質微～細砂（礫多含）
11　灰黄褐色(10YR4/2)微～細砂（焼土・炭含）
12　にぶい黄褐色(10YR5/4)細砂
13　灰黄褐色(10YR6/2)細砂
14　黒色(10YR2/1)（灰黄褐色(10YR5/2)微砂混）〈炭層〉
15　褐灰色(10YR4/1)細砂
16　灰黄褐色(10YR6/2)微砂（炭少混）

第66図　竪穴住居24新断面図（1/60）

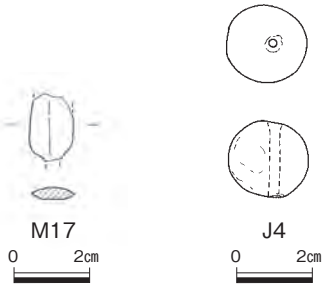
となる。出土遺物は、新段階での竪穴住居から出土したものが大半であり、鉢460のみ古段階の竪穴住居の柱穴Ｐ10に伴うものである。土器は、壺437～445、甕446～452、高杯453～459、鉢460～464、ミニチュア土器465～468がある。土器以外のものには、金属器が銅鏃Ｍ17、不明鉄製品Ｍ18～Ｍ20、土製品として、土玉Ｊ４、円板状土製品Ｃ20～Ｃ24、石製品として砥石Ｓ43・Ｓ44、石包丁Ｓ45、敲石Ｓ48・Ｓ49、台石Ｓ50などがある。そのほか、図示していないが弥生時代中期末や古墳時代前期の遺物を一定程度含んでいたことから、肩部が崩落した場所にこれらの時期の遺構があった可能性が考えられる。これらの出土遺物は、一部に弥生時代後期前半のものも含むが、新段階の壁体溝底面から453が出土しており、多くの遺物が弥・後・Ⅲを中心とする時期のものである。このことから時期は弥・後・Ⅲであり、古段階と新段階ではあまり時期差がないものと考えられる。　（圃）



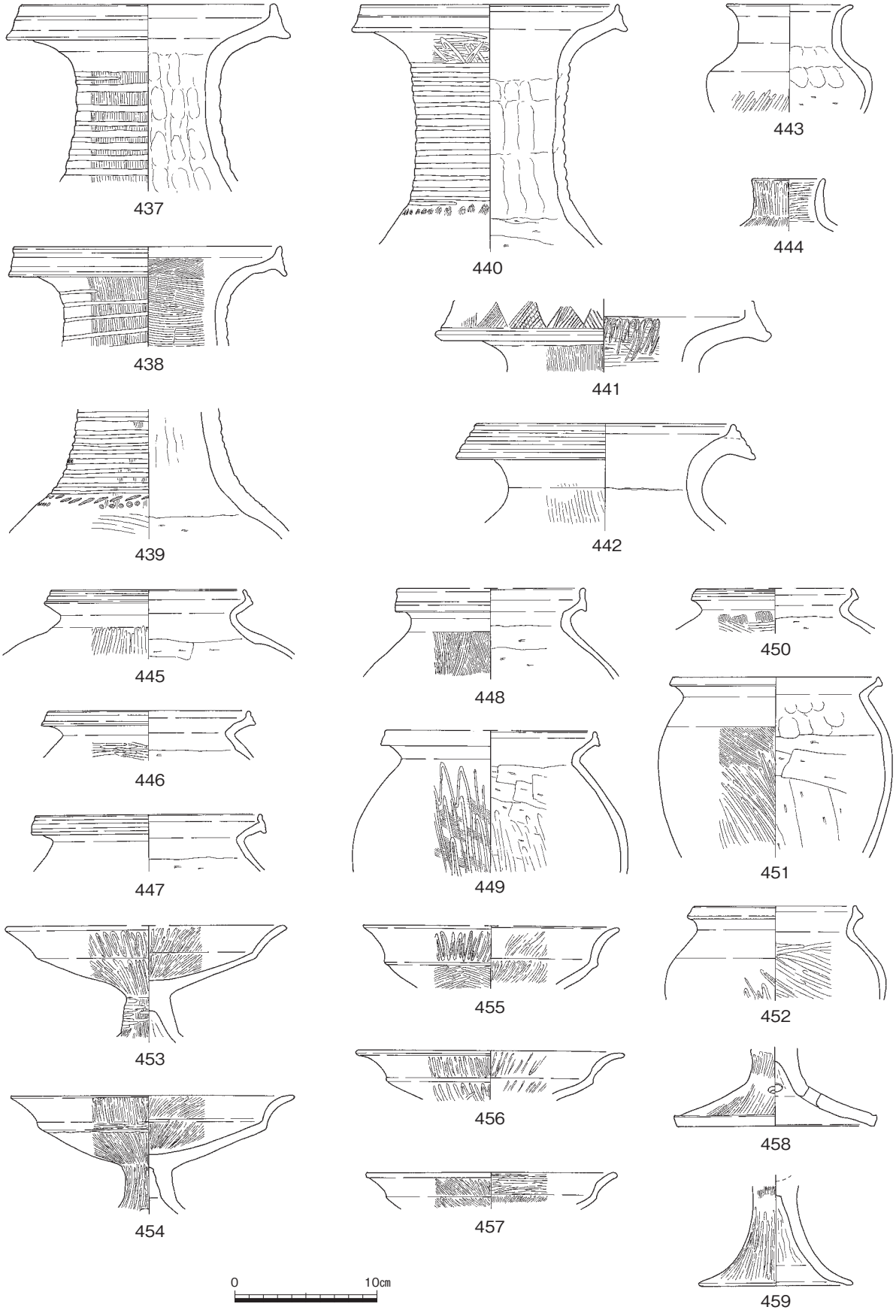
第67図　竪穴住居24変遷図（1/120）



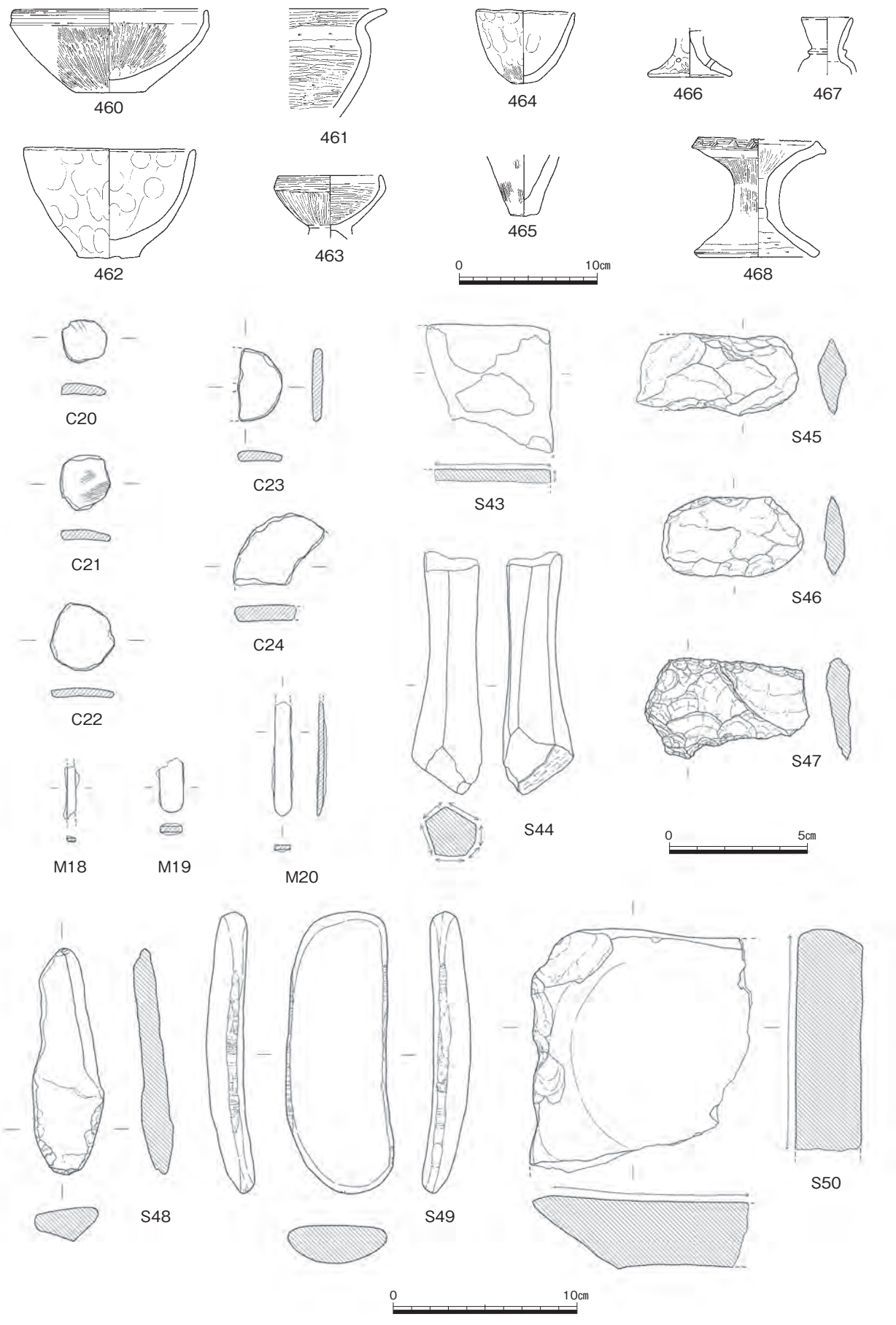
1　にぶい黄褐色(10YR5/3)粗砂（シルト混）
2　灰黄褐色(10YR5/2)粗砂（シルト混）
3　灰黄褐色(10YR5/2)粗砂（シルト・炭混）
4　褐灰色(10YR4/1)微～細砂（淡黄色(2.5Y8/3)粘質土層状含、焼土・炭含）
5　灰黄褐色(10YR5/2)粗砂
6　にぶい黄褐色(10YR5/3)粗砂
7　灰黄褐色(10YR6/2)粗砂
8　黒褐色(10YR3/1)粘性微砂（炭・焼土含）
9　黒褐色(10YR3/1)粘性微砂（にぶい黄橙色(10YR5/3)粗砂塊混）
10　黒褐色(10YR3/1)細砂
11　〈P12〉



第68図　竪穴住居24古（1/60）・出土遺物①（1/2）



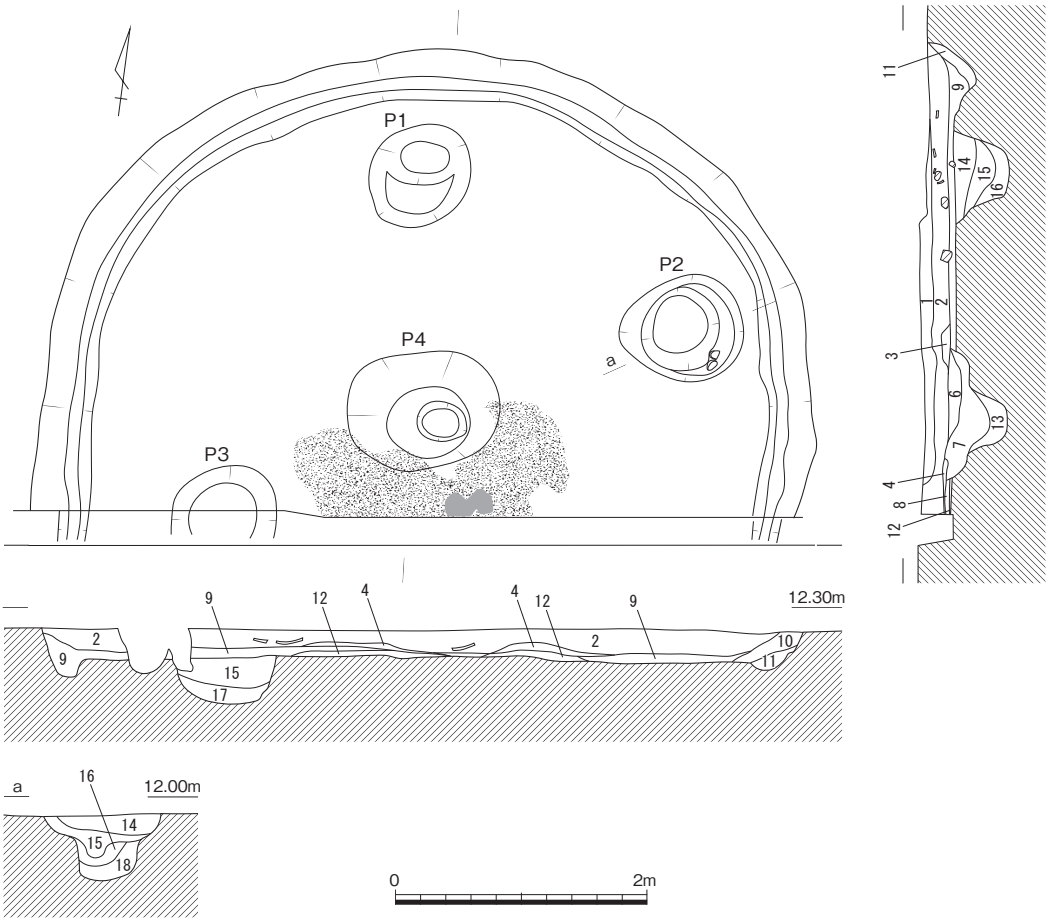
第69図　竪穴住居24出土遺物②（1/4）



第70図　竪穴住居24出土遺物③（1/4・1/3・1/2）

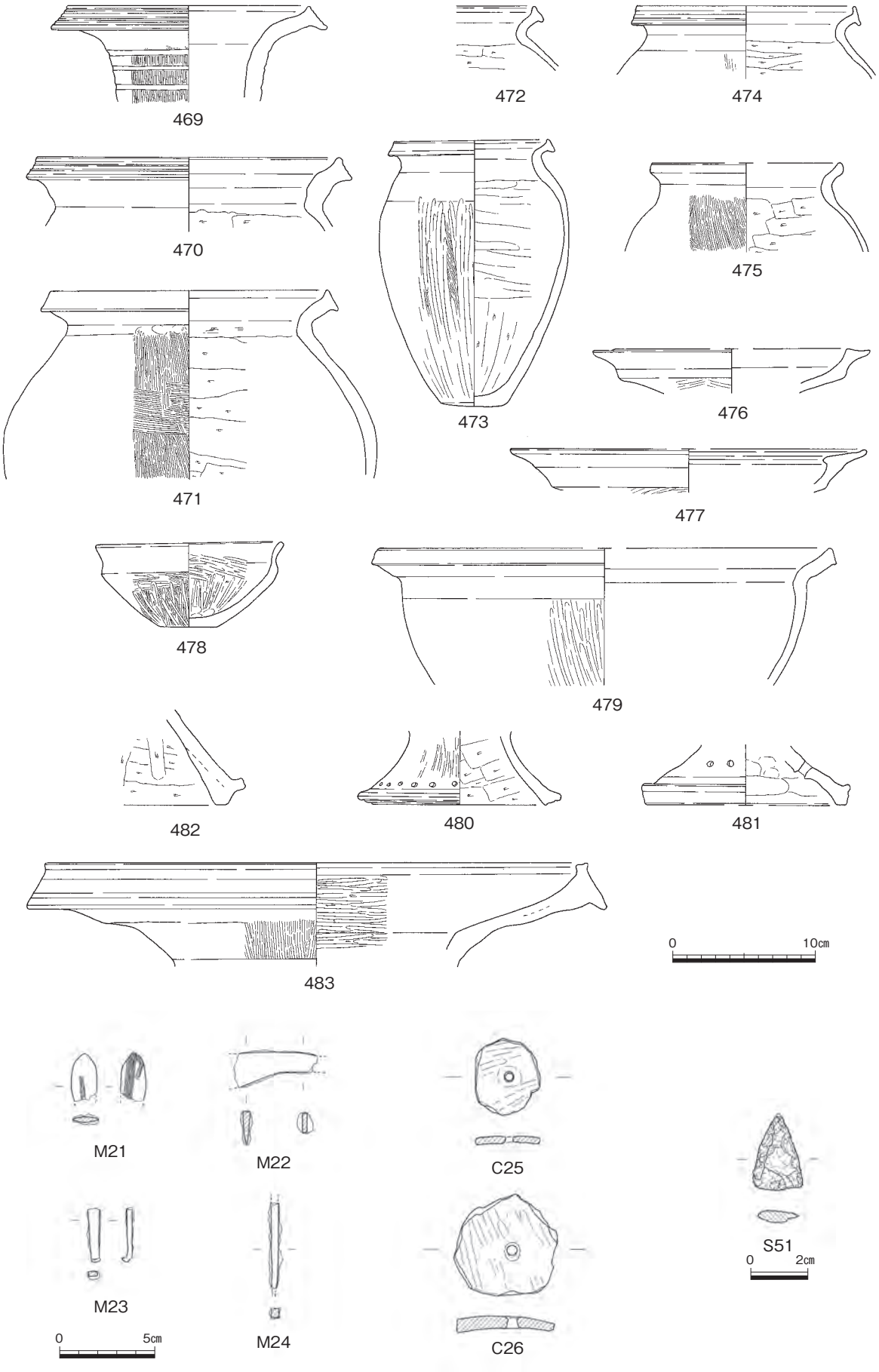
竪穴住居25（第12・71・72図、図版８－３・77・107・116）

Ｊ09に位置する竪穴住居で、南側半分は調査区外となる。平面形は円形を呈しており、本来の主柱穴は４本であるものと考えられる。規模は残存している東西幅で606㎝、床面までの深さ約20㎝を測る。中央穴と考えられるＰ４の南側に被熱面を１カ所検出し、炭層の広がりが上下２層（第４層と、第12層）あることを確認した。また、平面での検出ができなかったが、断面の観察から中央穴の周辺に土手があったことが理解される。中央穴は中央部分が柱穴状に深く掘り込まれており、途中にテラス部分を持つものである。出土遺物には、壺**469・470**、甕**471～475**、高杯**476・477**、鉢**478～482**、器台**483**のほか、サヌカイト製の石鏃**Ｓ51**、鉄器**Ｍ21～Ｍ24**、土器を転用して作られた円板状土製品**Ｃ25・Ｃ26**があり、穿孔が見られる。高杯は口縁端部を外方へ拡張しているものである。**Ｍ21**は鉄鏃で、木質の付着が見られる。**Ｍ22**は刀子、**Ｍ23・Ｍ24**は釘である。これらの出土遺物から、遺構の時期は弥・後・Ⅲであると考えられる。（團）



1　灰黄褐色(10YR6/2)細～粗砂
2　灰黄褐色(10YR4/2)粘性微砂
3　にぶい黄橙色(10YR6/3)微～細砂
4　灰黄褐色(10YR4/2)粘性微砂（炭多含）
5　にぶい黄橙色(10YR6/3)微砂
6　暗褐色(10YR3/3)微～細砂
7　灰黄褐色(10YR4/2)微砂
8　黒褐色(10YR3/2)微砂（炭多含）
9　にぶい黄橙色(10YR6/4)微砂
10　にぶい黄橙色(10YR6/4)粘性微砂
11　にぶい黄褐色(10YR4/3)微砂
12　灰黄褐色(10YR4/2)粘性微砂（炭多含）
13　黒褐色(10YR3/2)微砂
14　灰黄褐色(10YR4/2)粘性微砂
15　灰黄褐色(10YR4/2)粘性微砂（にぶい黄橙色(10YR7/2)細砂混）
16　灰黄褐色(10YR6/2)微～細砂
17　にぶい黄褐色(10YR4/3)微砂（にぶい黄橙色(10YR7/2)細～粗砂塊混）
18　灰黄褐色(10YR4/2)微砂（にぶい黄橙色(10YR7/2)粗砂多含）

第71図　竪穴住居25（1/60）



第72図　竪穴住居25出土遺物①（1/4・1/3・1/2）

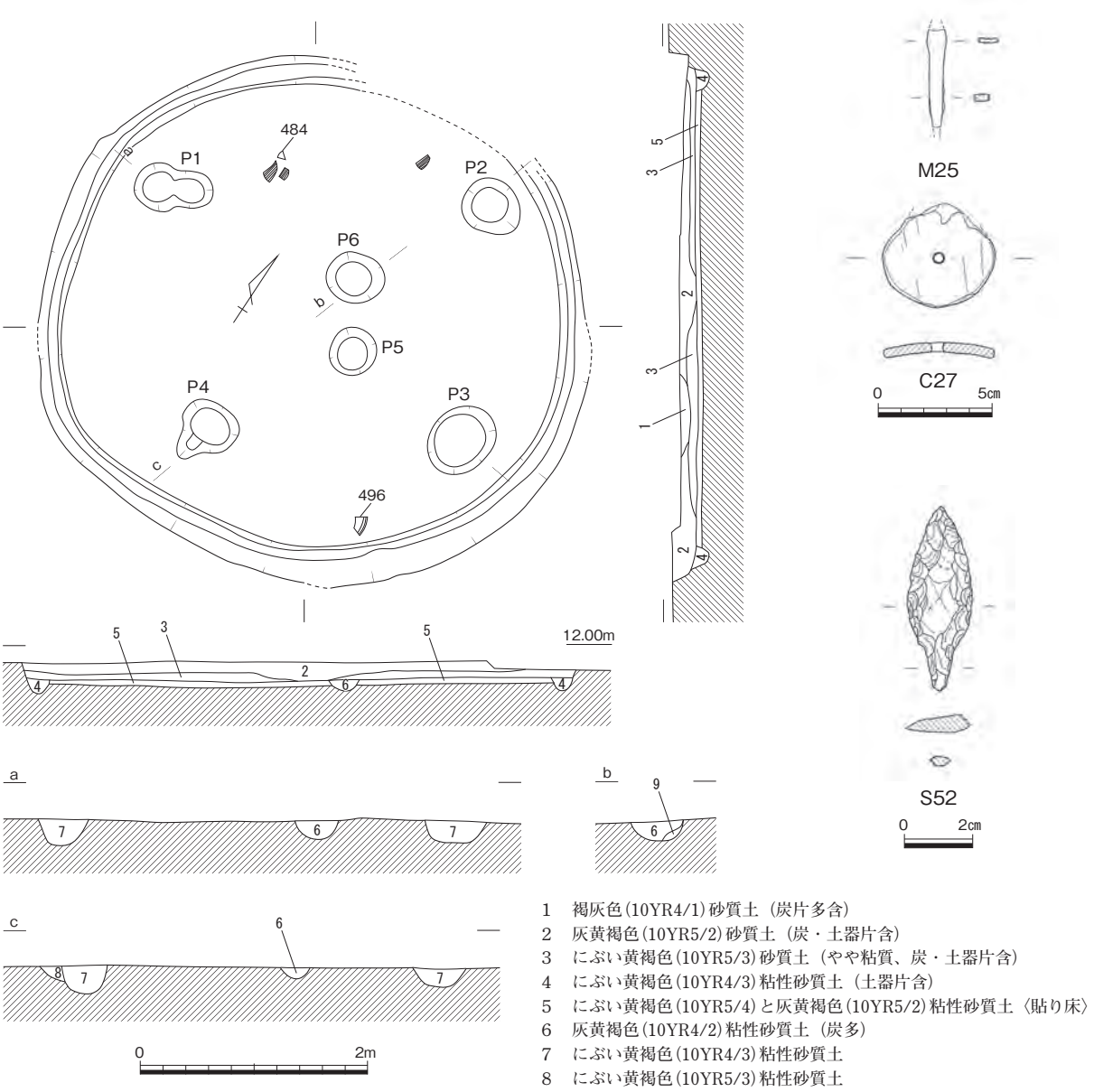
竪穴住居26（第12・73・74図、図版９－１・78・107・117）

Ｈ10の南西部、竪穴住居27の北西約12ｍに位置する。周辺の遺構は希薄であるが、東約２ｍには柱穴列１があり、竪穴住居の南東部には土坑136が重複して存在している。

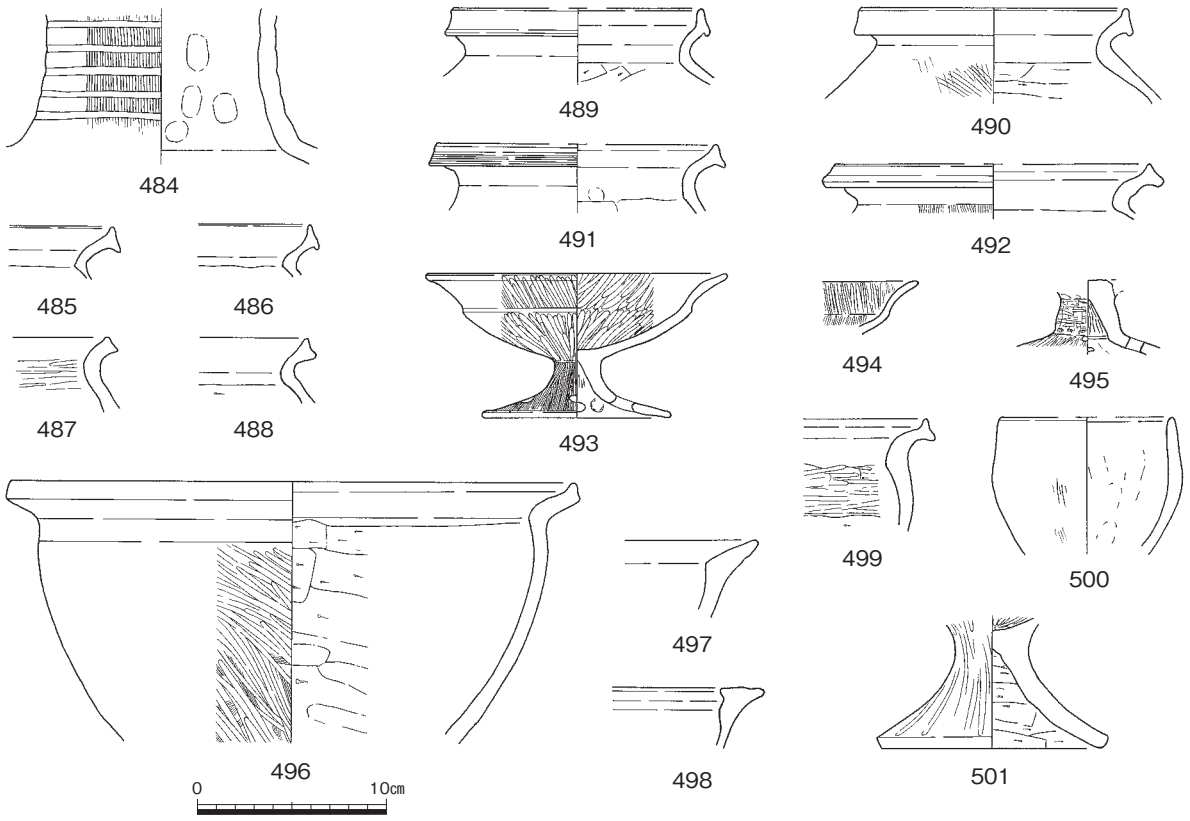
平面は円形の竪穴住居で、調査区境にあたる北端部を欠くが、長軸で482㎝、短軸で463㎝を測り、床面積は復元で17.70㎡になる。検出面から床面までの深さは約20㎝である。

埋土は砂質土で、粘質の第５層上面が堅く締まっており、第５層が厚さ約５㎝の貼り床になる。床面上では２カ所で炭化材片を検出している。主柱穴はＰ１～４の４本で、柱穴の規模は径50～70㎝程度になる。Ｐ５・Ｐ６は円形を呈する径40～60㎝程度の中央穴で、埋土に炭片を多く含んでいた。床面周囲には壁体溝が巡り、全周していたと考えられる。

竪穴住居の埋土及び床面付近から弥生土器、石器、鉄器、土製品が出土している。土器は壺**484**、甕**485**～**492**、高杯**493**～**495**、鉢**496**～**501**がある。長頸壺**484**と鉢**496**は床面直上で、甕**485**と高杯**493**



第73図　竪穴住居26（1/60）・出土遺物①（1/3・1/2）



第74図　竪穴住居26出土遺物②（1/4）

は壁体溝から出土した。**S52**はサヌカイト製の有茎式石鏃で、全長5.3㎝と大形である。**M25**は耳かき状を呈する不明鉄製品、**C27**は土器片を転用した円板状土製品で中央部を穿孔している。なお、石鏃**S52**については、住居検出時に遊離した状態で出土しており、重複する土坑136から混入している可能性がある。出土した土器は弥・後・Ⅲの特徴を示し、住居の時期も同様と考えられる。（石田）

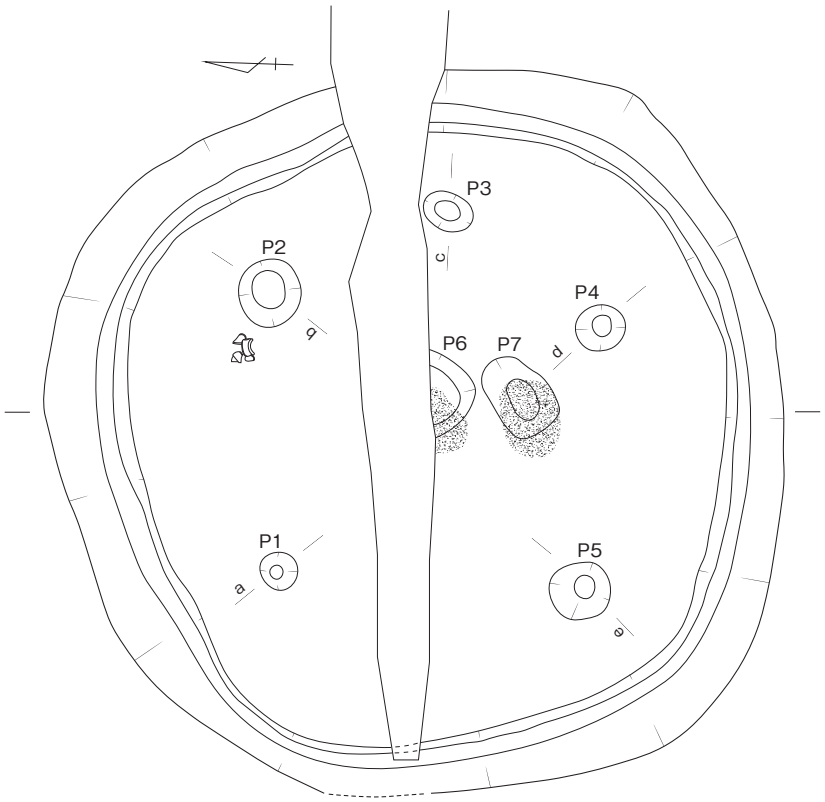
竪穴住居27（第12・75・76図、図版９－２・78・117）

Ⅰ10の北東側に立地し、一部Ⅰ11に達している。付近には遺構がそれほど多くは存在しないが、北西側に離れて竪穴住居26があり、南東側には溝８が存在する。また古墳時代には本住居の真上に溝19が存在しており、元々地形の低い場所に建てられていたようだ。

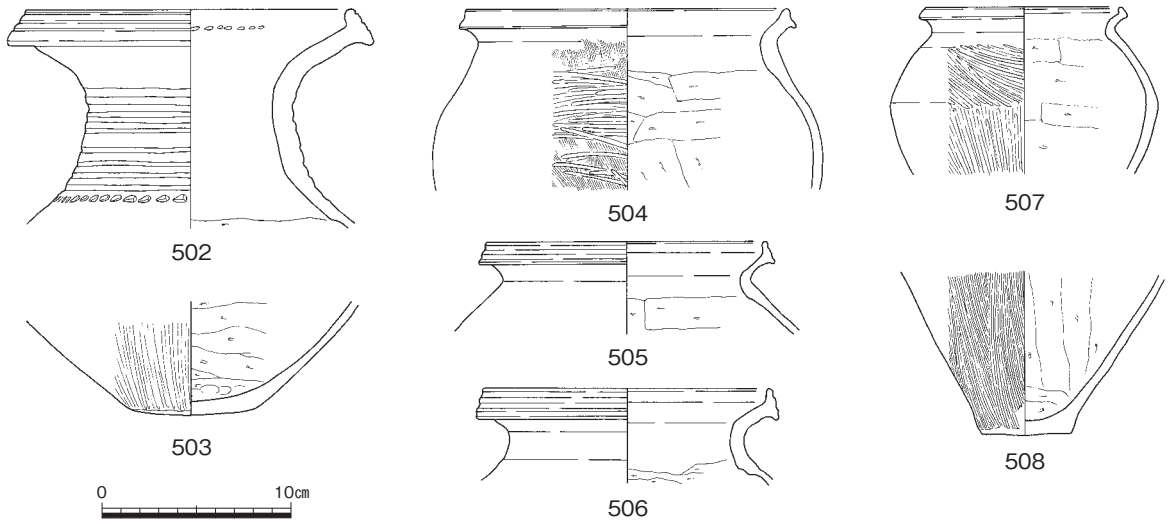
本住居の規模は、長軸長584㎝、短軸長571㎝で、平面形状はほぼ円形を呈する。確認面からの深さは52㎝前後で、覆土はある程度残っている。なお床面の標高は11.32ｍを測り、床面積は27.25㎡である。柱穴は５本であり、すべてが見つかっているが湧水が激しく、深さに関しては必ずしも十分な調査ができていない。柱穴規模は、30～50㎝前後である。中央穴が存在し、規模は68×46㎝で、深さは４㎝である。平面形状は楕円形である。壁体溝は全周にわたって確認できた。

出土遺物には、以下のものがある。**502・503**は壺である。**502**は長頸壺である。**504～508**は甕である。口縁部は、端部が上下につまみ出されているものが多いが、上方のみ立ち上がるものもある。**509～513**は高杯である。**509～512**は身で、段を持ちながら外反し、内面が強調されている。**514～520**は鉢である。**521～523**は器台である。**521**と**523**の口縁端面には、鋸歯文が施されている。**C28・C29**は円板状土製品である。

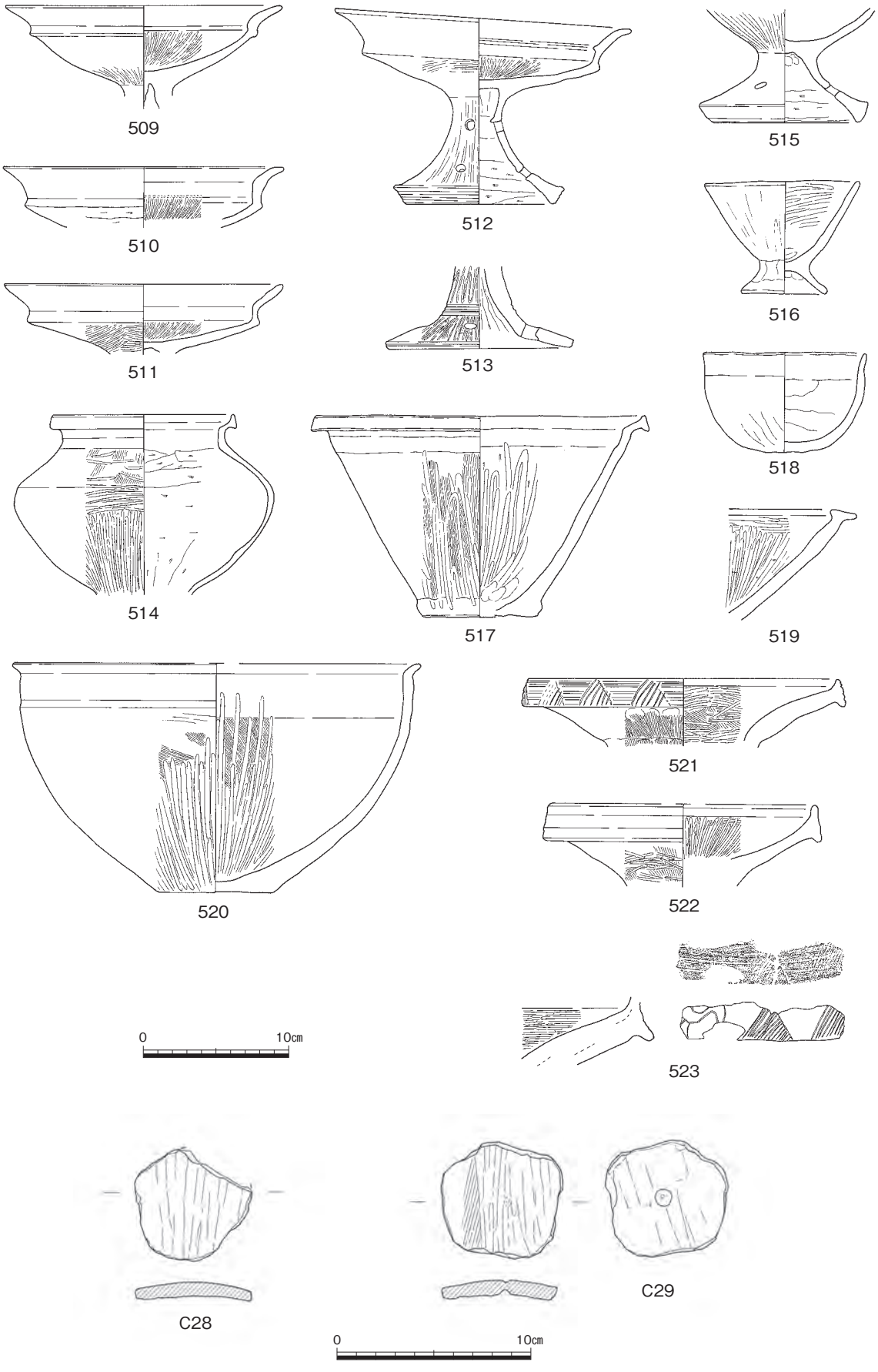
これらの遺物は、弥・後・Ⅲであり、竪穴住居の時期も同じになると考えている。　（小林）



1　灰黄褐色(10YR5/2)細砂
2　灰黄褐色(10YR4/2)細砂
3　にぶい黄褐色(10YR4/3)細砂
　（にぶい黄橙色(10YR6/3)
　粘性微砂土塊混、炭・焼土粒含）
4　にぶい黄褐色(10YR5/4)細砂
5　にぶい黄橙色(10YR6/4)微～細砂
6　灰黄褐色(10YR5/2)微～細砂
7　炭層
8　にぶい黄橙色(10YR6/4)
　粘性微～細砂〈貼り床〉
9　褐灰色(10YR5/1)粘性微砂
　〈Ｐ６〉



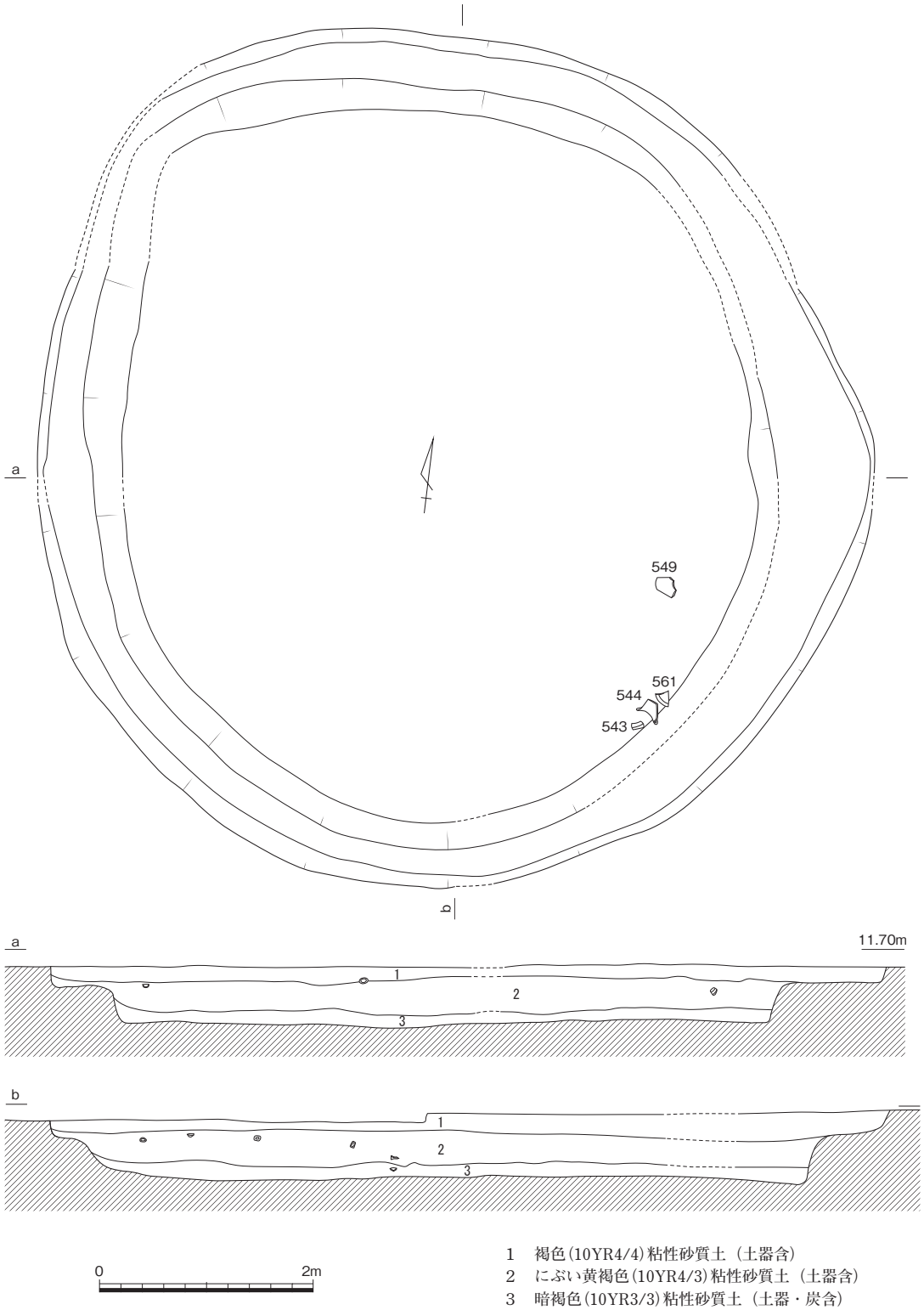
第75図　竪穴住居27（1/60）・出土遺物①（1/4）



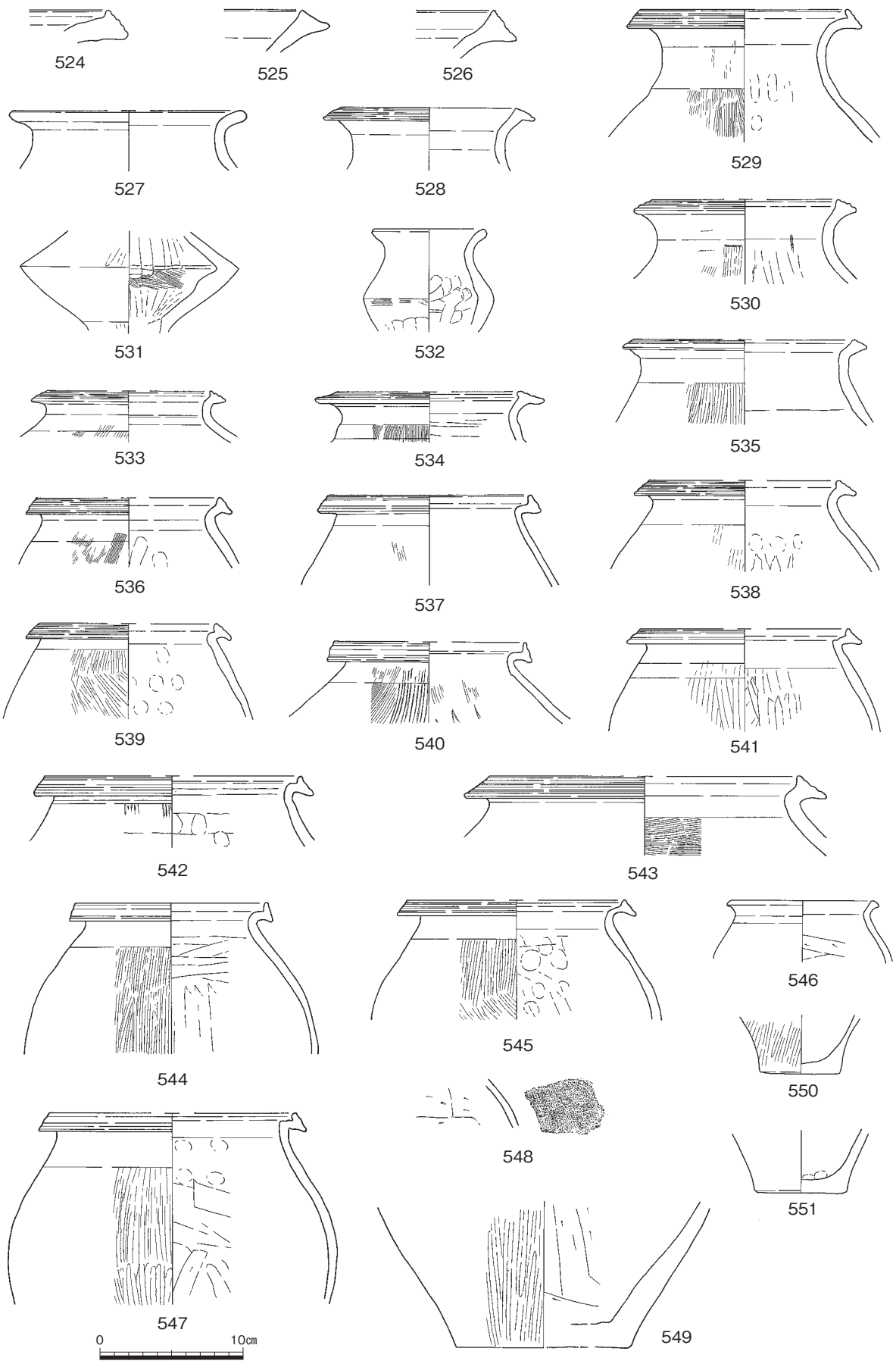
第76図　竪穴住居27出土遺物②（1/4・1/3）

竪穴住居28（第13・77～80図、図版９－３・78・115）

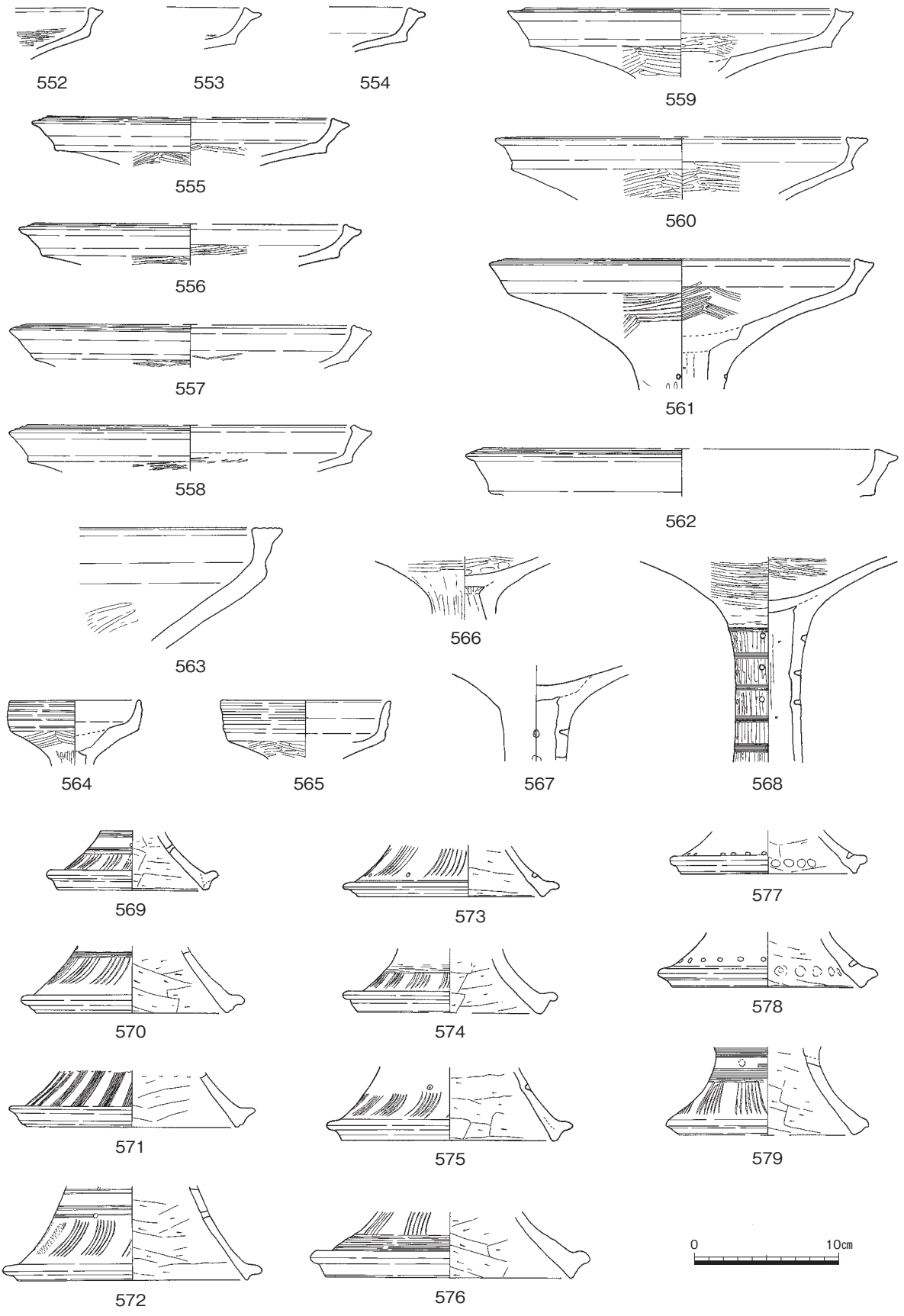
H13とH14に跨がって位置する。掘り方は竪穴住居を全周する「段」を有する二段掘になっており、平面形は不整円形である。規模は外側の掘り方で793×780㎝、内側の掘り方で750×626ｍを測る。検出面からの深さは約60㎝である。壁体溝や柱穴、中央穴などの構造については、掘り進めるうちに湧



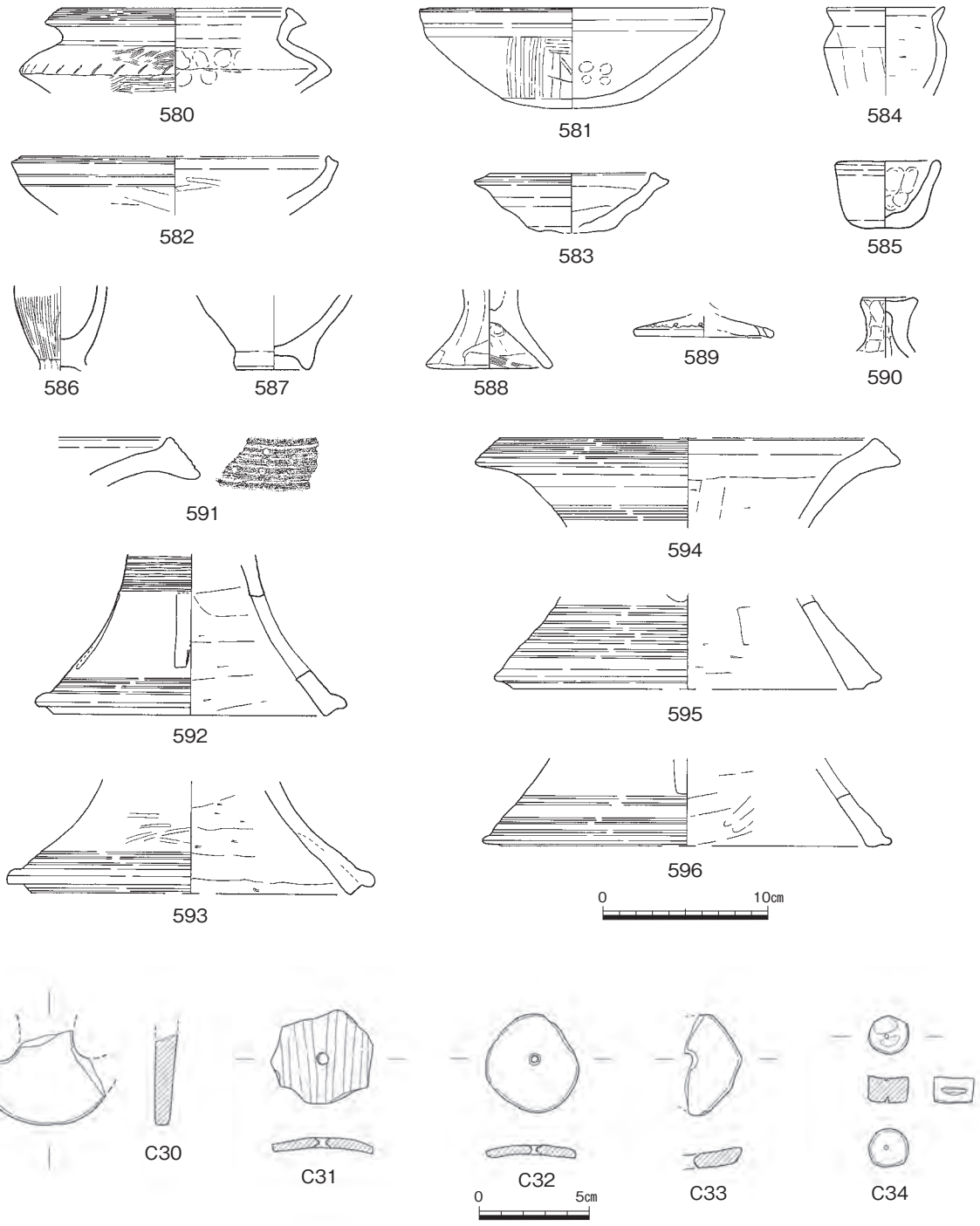
第77図　竪穴住居28（1/60）



第78図　竪穴住居28出土遺物①（1/4）



第79図　竪穴住居28出土遺物②（1/4）

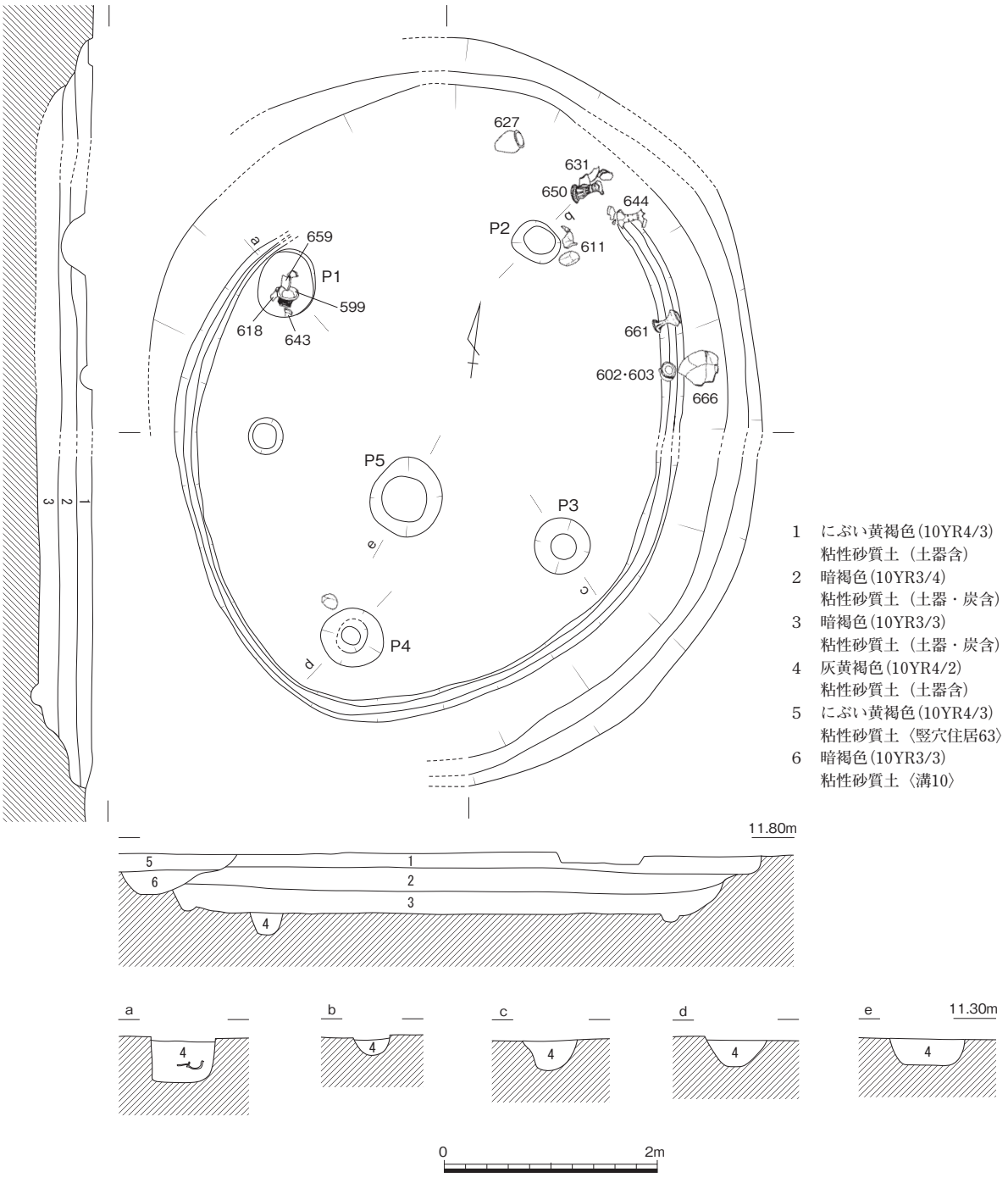


第80図　竪穴住居28出土遺物③（1/4・1/3）

水が激しくなり、明らかにし得なかった。住居を巡る「段」にはテラス状の平坦面が造られており、その幅は20～80㎝と一定ではなく、東側がやや広くなっている。「段」の性格については不明であるが、同様の構造を持つ住居は北東約2.5㎞の地点に所在する南溝手遺跡（『南溝手遺跡　窪木遺跡』岡山県教育委員会　2008年）に見られ、また、後述する竪穴住居29にも見られる。埋土中からは多くの遺物が出土している。524～532は壺、533～551は甕、552～579は高杯、580は台付鉢、581～588は鉢、589・590は蓋、591～596は器台である。このほか、分銅形土製品C30、土器を転用したと考えられる円板状土製品C31～C33などが出土している。住居の時期は、弥・後・Ⅰと考えられる。　（藤井）

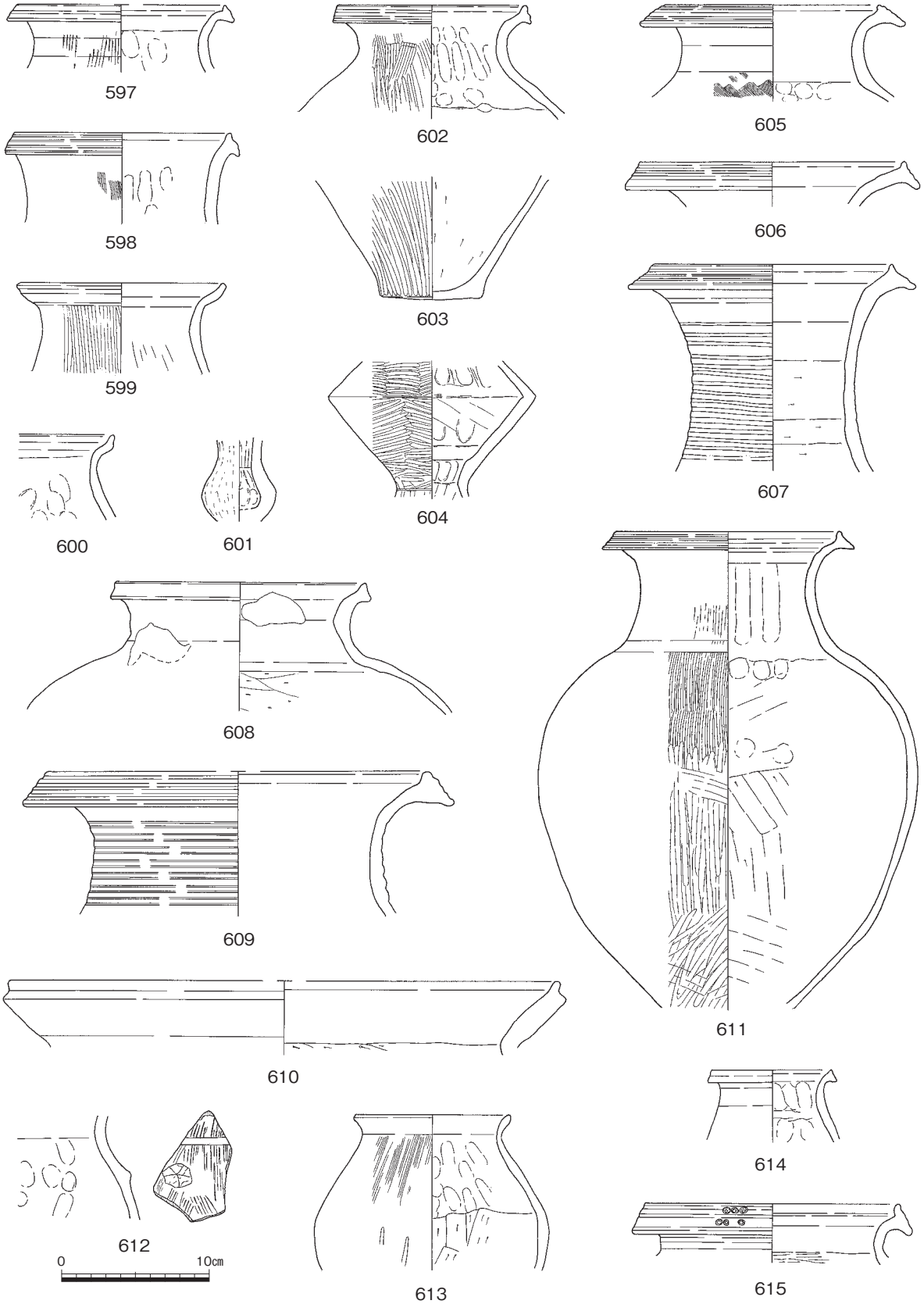
竪穴住居29（第13・81～86図、図版10－１・78・119）

竪穴住居28の南東、Ｈ14とＩ14に跨がって位置する。掘り方は竪穴住居28と同じく「段」を有する二段掘で、平面形は、西側の状況が不明であるが、不整円形を呈すると考えられる。規模は外側の掘り方で径約700㎝、内側の掘り方で590×534㎝を測る。検出面からの深さは約60㎝である。床面では壁体溝と柱穴、中央穴を検出した。壁体溝は北側が不鮮明であったが、全周していたと考えられる。柱穴は径50㎝程のものを４本確認している。中央穴Ｐ５は床面中央からやや南東にずれた位置にあり、大きさは70×67㎝、深さは33㎝を測る。「段」の平坦面の幅は10～20㎝程度で、竪穴住居28よりやや幅

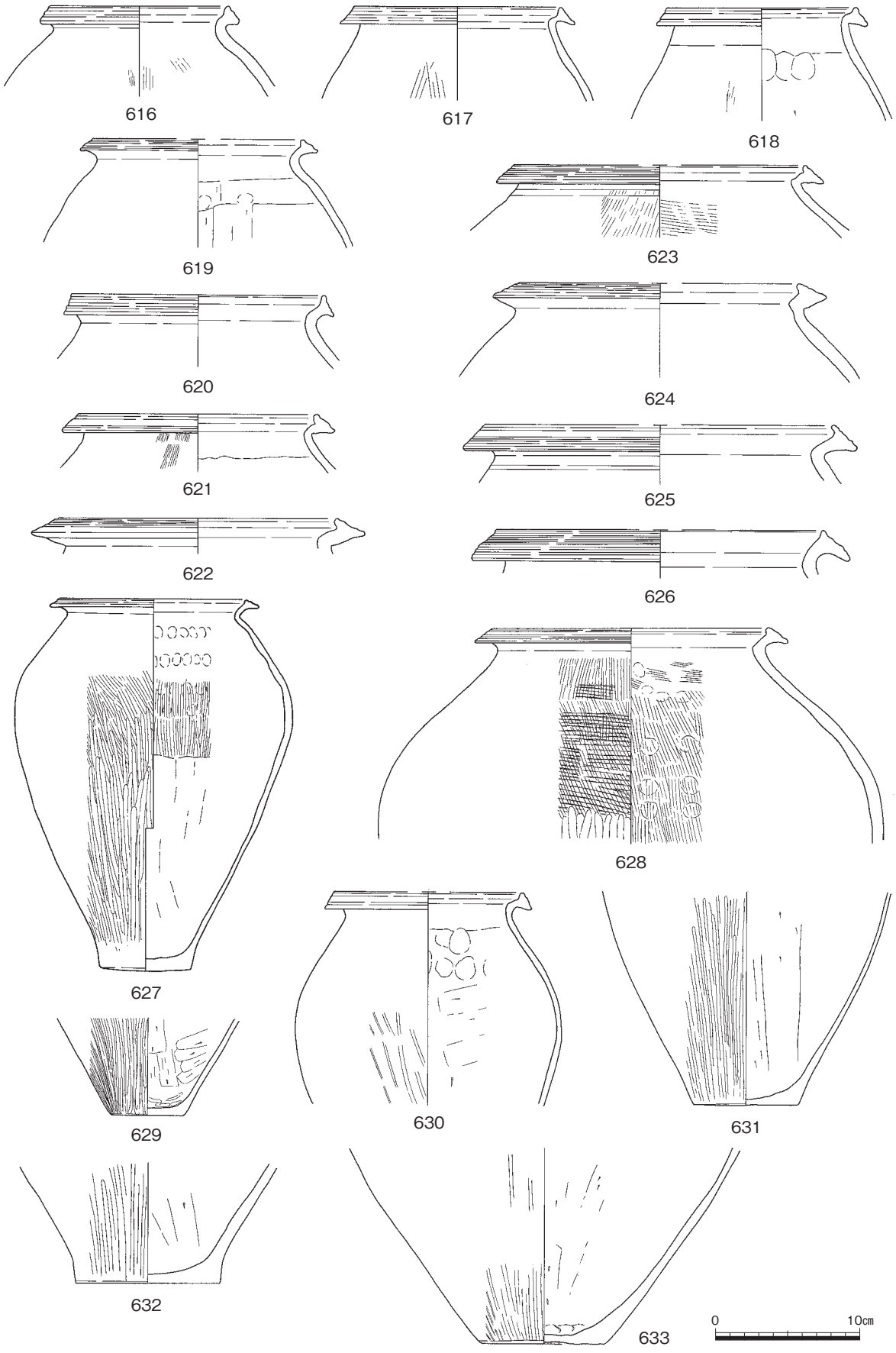


第81図　竪穴住居29（1/60）

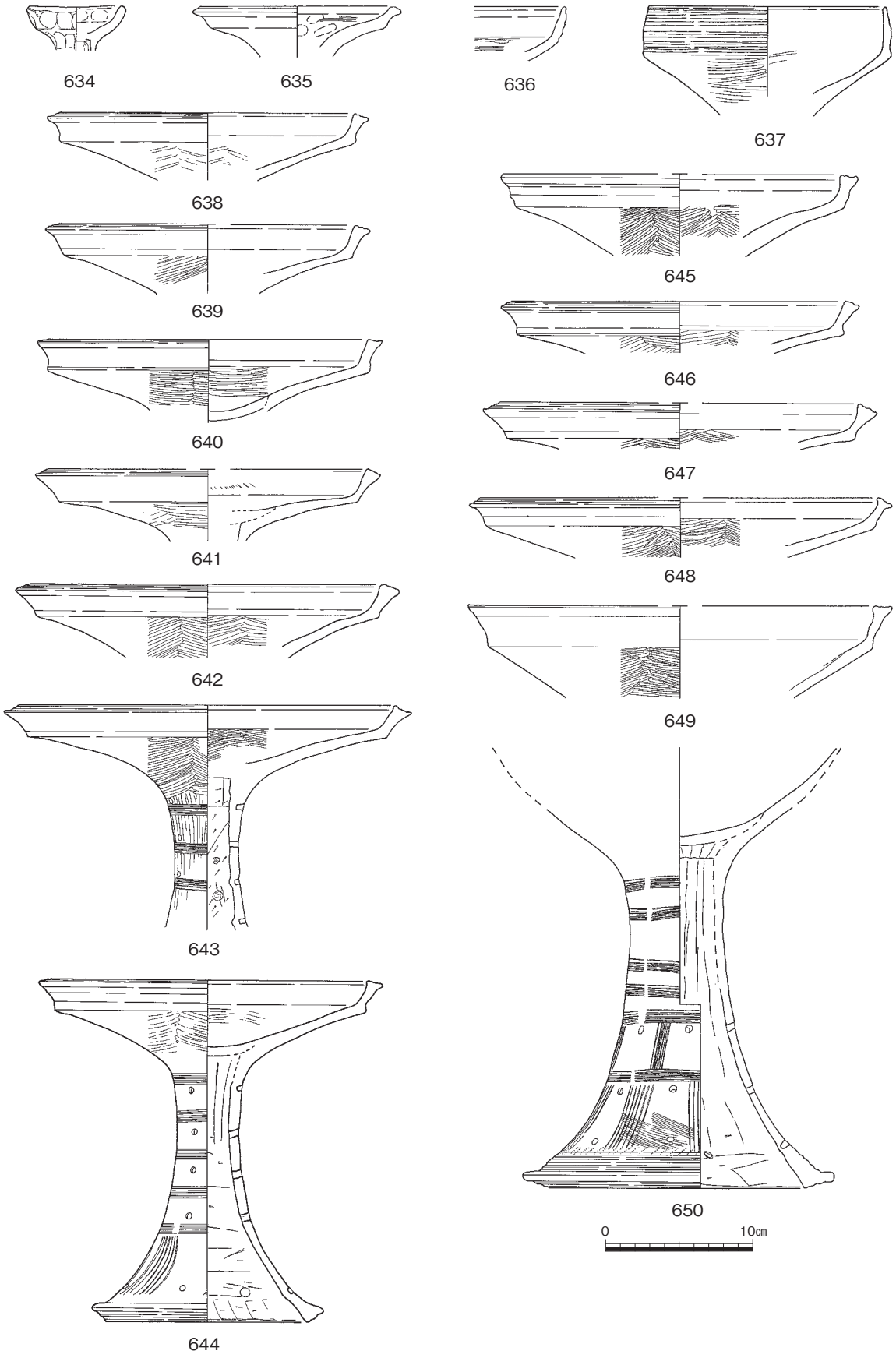
が狭い。埋土中からは多くの遺物が出土している。壺597～615、甕616～633、高杯634～656、鉢657～667、器台668のほか、土製の丸玉Ｊ５・Ｊ６がある。時期は、弥・後・Ⅰと考えられる。　（藤井）



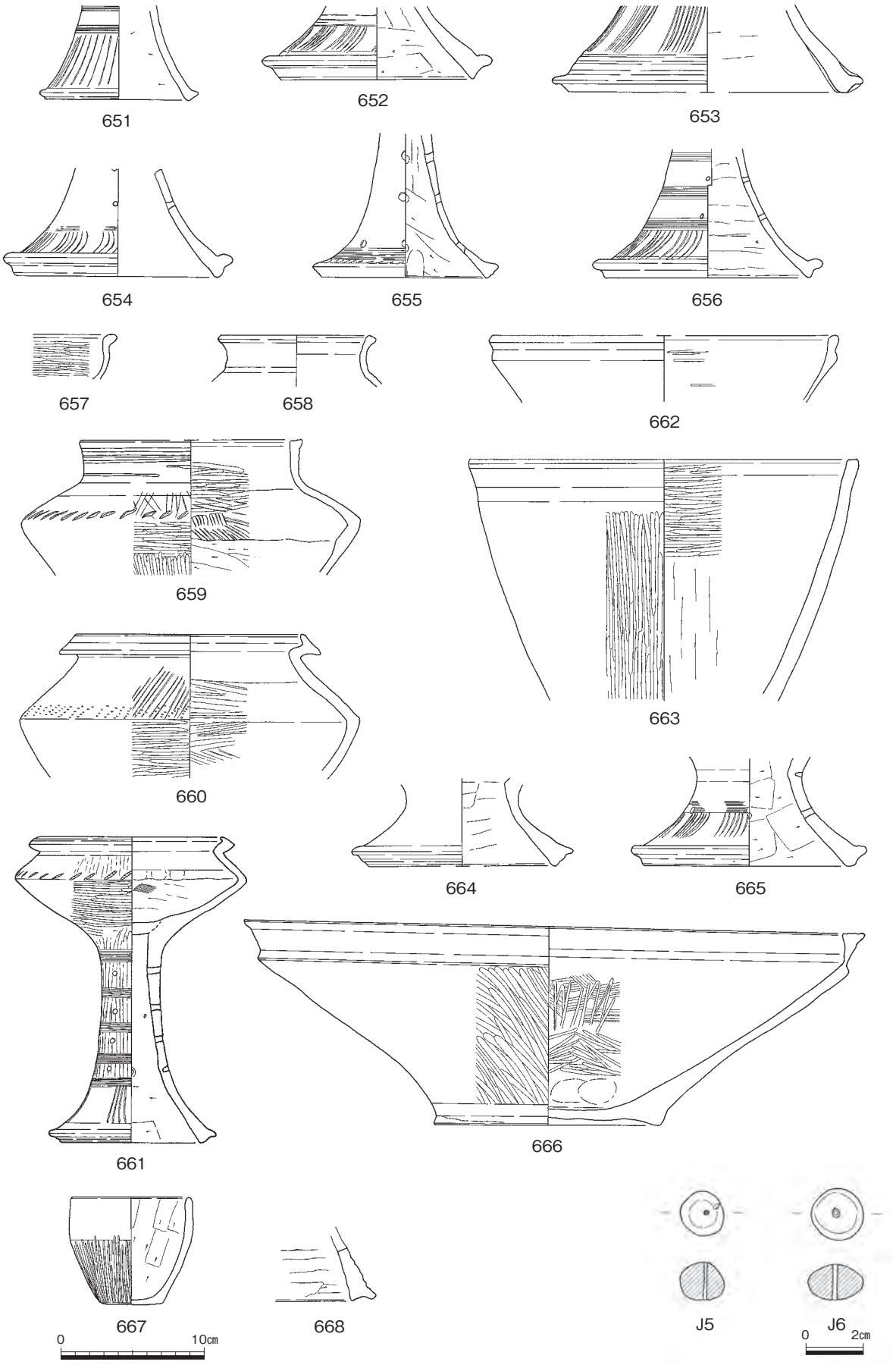
第82図　竪穴住居29出土遺物①（1/4）



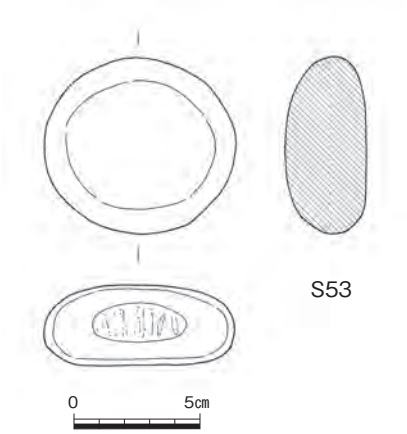
第83図　竪穴住居29出土遺物②（1/4）



第84図　竪穴住居29出土遺物③（1/4）



第85図　竪穴住居29出土遺物④（1/4・1/2）



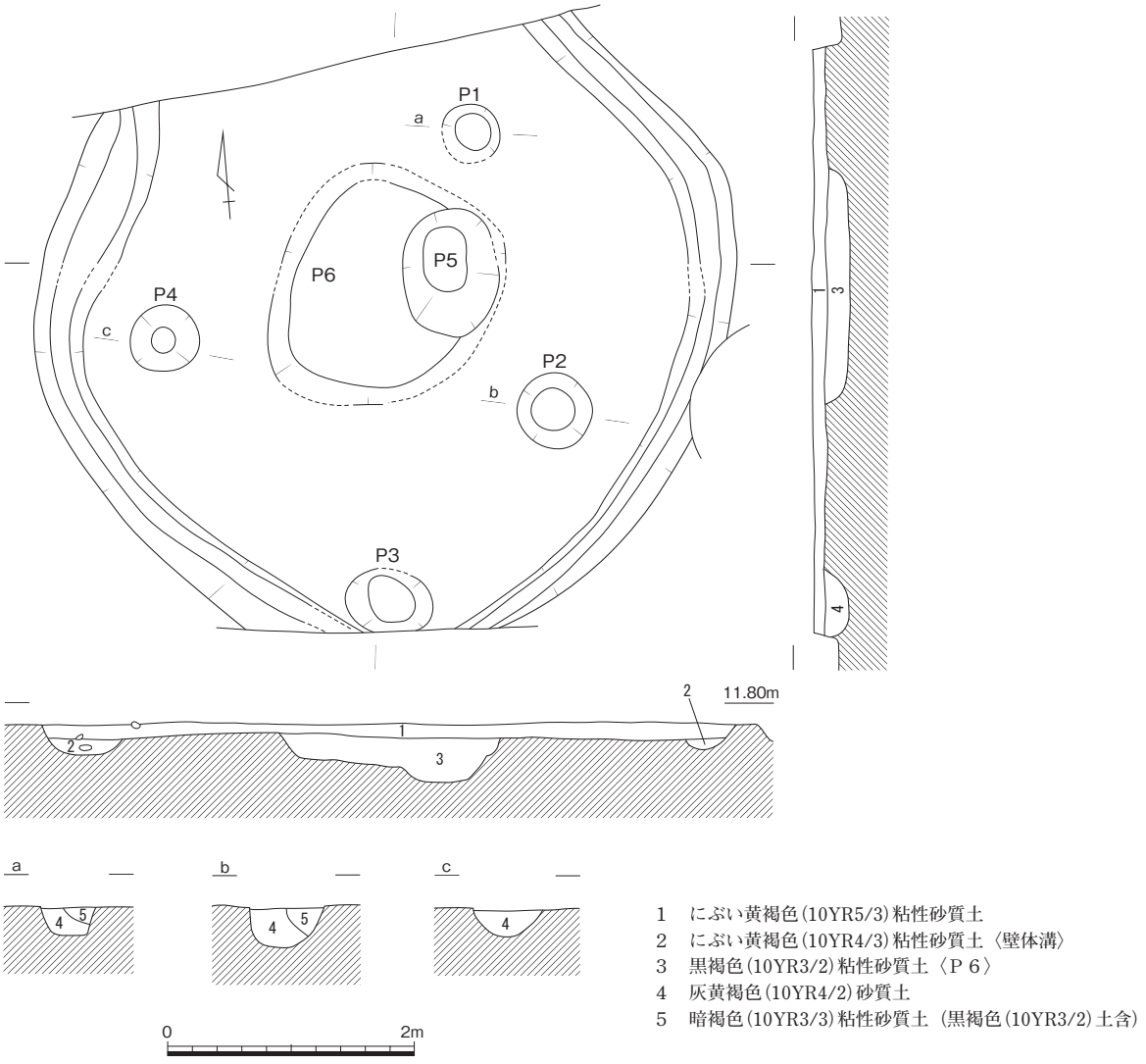
第86図　竪穴住居29出土遺物⑤（1/3）

竪穴住居30（第13・87・88図、図版10－２）

Ｇ15・Ｇ16・Ｈ15・Ｈ16に跨がるが、主にＧ15の南東側に立地している。溝11・溝12の東側にあり、南側に近接して土坑170～172が存在する。東側約10ｍ離れた所に竪穴住居32が存在するが、近隣には竪穴住居は造られない。

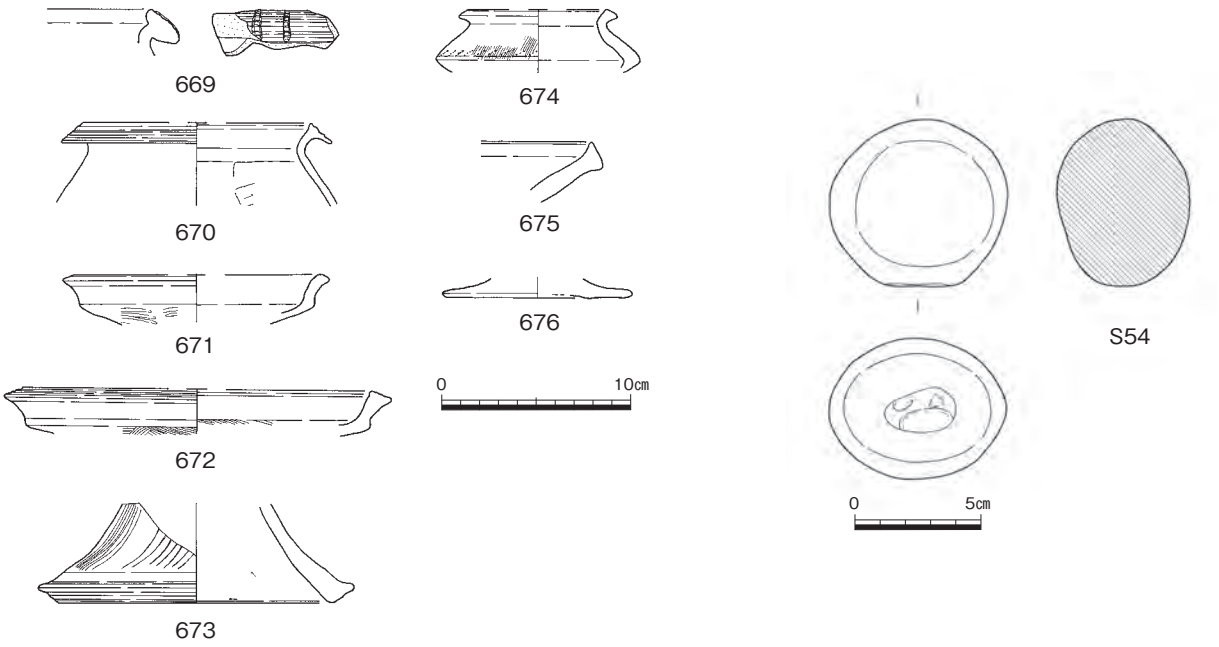
本竪穴住居の規模は、長軸長563㎝、短軸長約470㎝で、平面形状は不整円形を呈する。確認面からの深さは10㎝前後で、床面ぎりぎりの段階で検出した。なお床面の標高は11.50ｍを測り、床面積は約26㎡である。柱穴は本来は５本であろうが、４本のみ見つかっている。規模は、40～60㎝前後である。中央穴の規模は194×180㎝で、深さは35㎝を測り、平面形状は不整円形である。壁体溝は、全周にわたって確認できた。

出土遺物には、以下のものがある。669は壺である。670は甕であ



1　にぶい黄褐色(10YR5/3)粘性砂質土
2　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性砂質土〈壁体溝〉
3　黒褐色(10YR3/2)粘性砂質土〈Ｐ６〉
4　灰黄褐色(10YR4/2)砂質土
5　暗褐色(10YR3/3)粘性砂質土（黒褐色(10YR3/2)土含）

第87図　竪穴住居30（1/60）



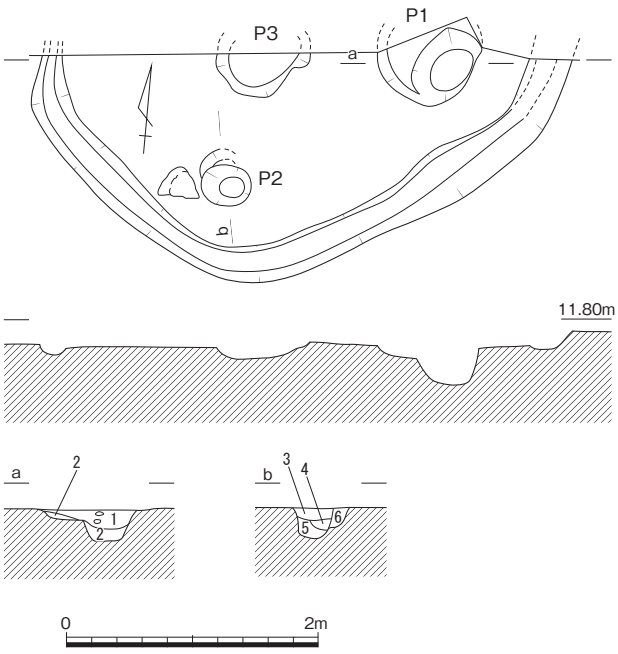
第88図　竪穴住居30出土遺物（1/4・1/3）

る。669・670の口縁部は内側に立ち上がり、外面には沈線が施される。671～673は高杯である。671と672は杯部で、口縁は逆「ハ」字に立ち上がる。673は脚部で、外面に斜めに連続した線刻が施される。674は鉢である。675は器台である。676は蓋である。S54は敲石で、閃緑岩製である。これらの遺物は、弥・後・Ⅰであり、竪穴住居の時期も同じになると考えている。（小林）

竪穴住居31（第13・89・90図、図版10－３）

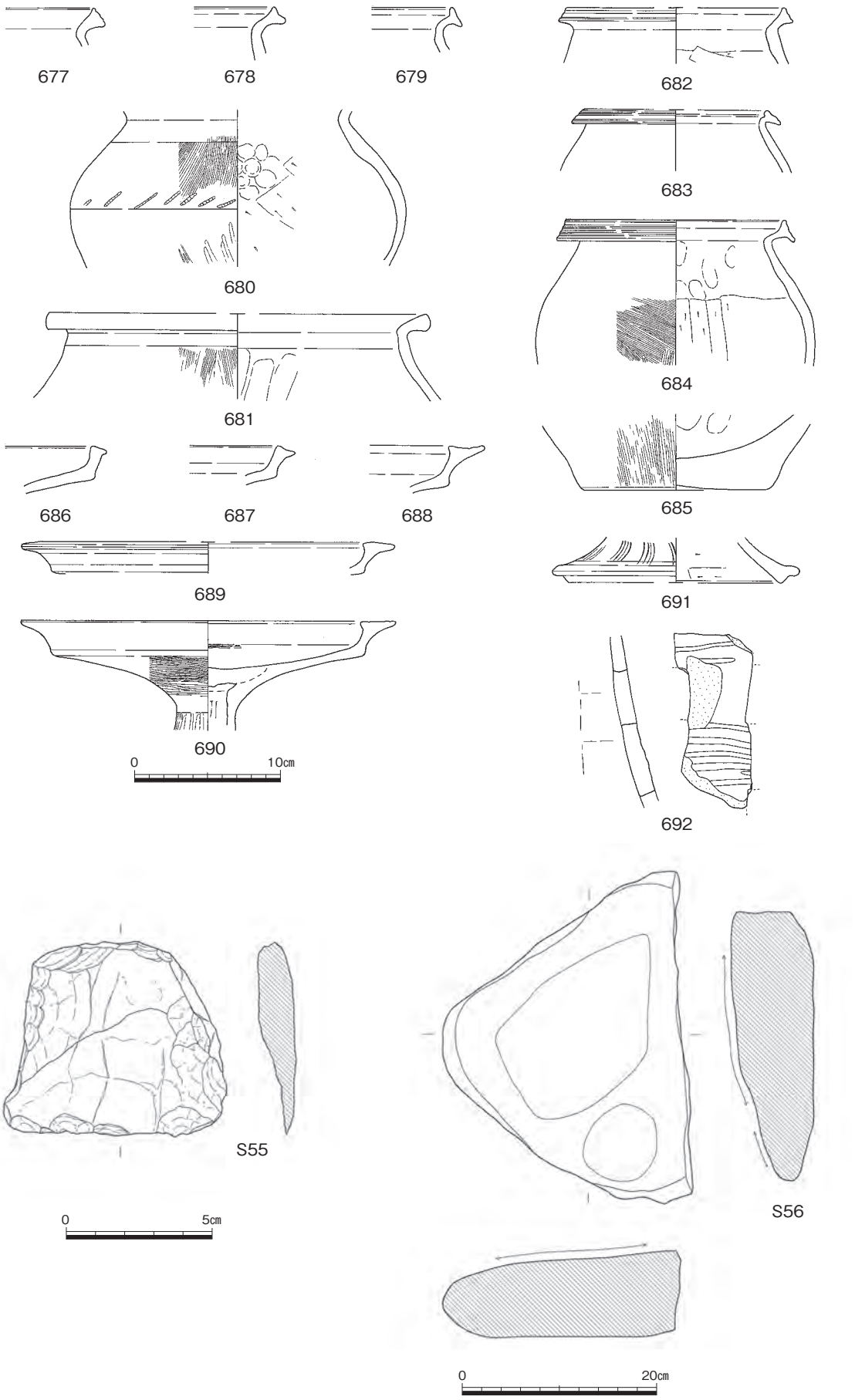
Ⅰ16西端に位置する。切り合い関係により土坑169より古く位置付けられる。平面形は隅丸の多角形状を呈する。床面は検出面から深さ10㎝、貼り床は確認できなかった。竪穴住居の埋土は黒褐色粘質細砂であった。検出できた柱穴は２本（Ｐ１・２）であるが、本来４本柱と想定できる。それぞれ埋土の堆積が異なり、Ｐ２は新旧の柱穴の切り合い、Ｐ１は全体が一度に埋まったと考えられる。また、Ｐ３（中央穴）の掘り方うわばの東端から中央にかけて約50㎝の範囲で、炭化物と橙色の熱影響の広がりが見られる。

出土遺物には土器と石器がある。土器はいずれも小片である。石器は粘板岩製の打製スクレイパーS55と床面直上の台石S56がある。竪穴住居の時期は、出土土器の特徴より弥・後・Ⅰである。（氏平）



1　暗褐色（10YR3/3）粘質土
2　にぶい黄褐色（10YR4/3）細砂
3　黒褐色（7.5YR3/1）粘質細砂
4　灰黄褐色（10YR4/2）粘質細砂
5　にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質土
6　黒褐色（7.5YR3/2）粘質細砂

第89図　竪穴住居31（1/60）



第90図　竪穴住居31出土遺物（1/4・1/2・1/6）

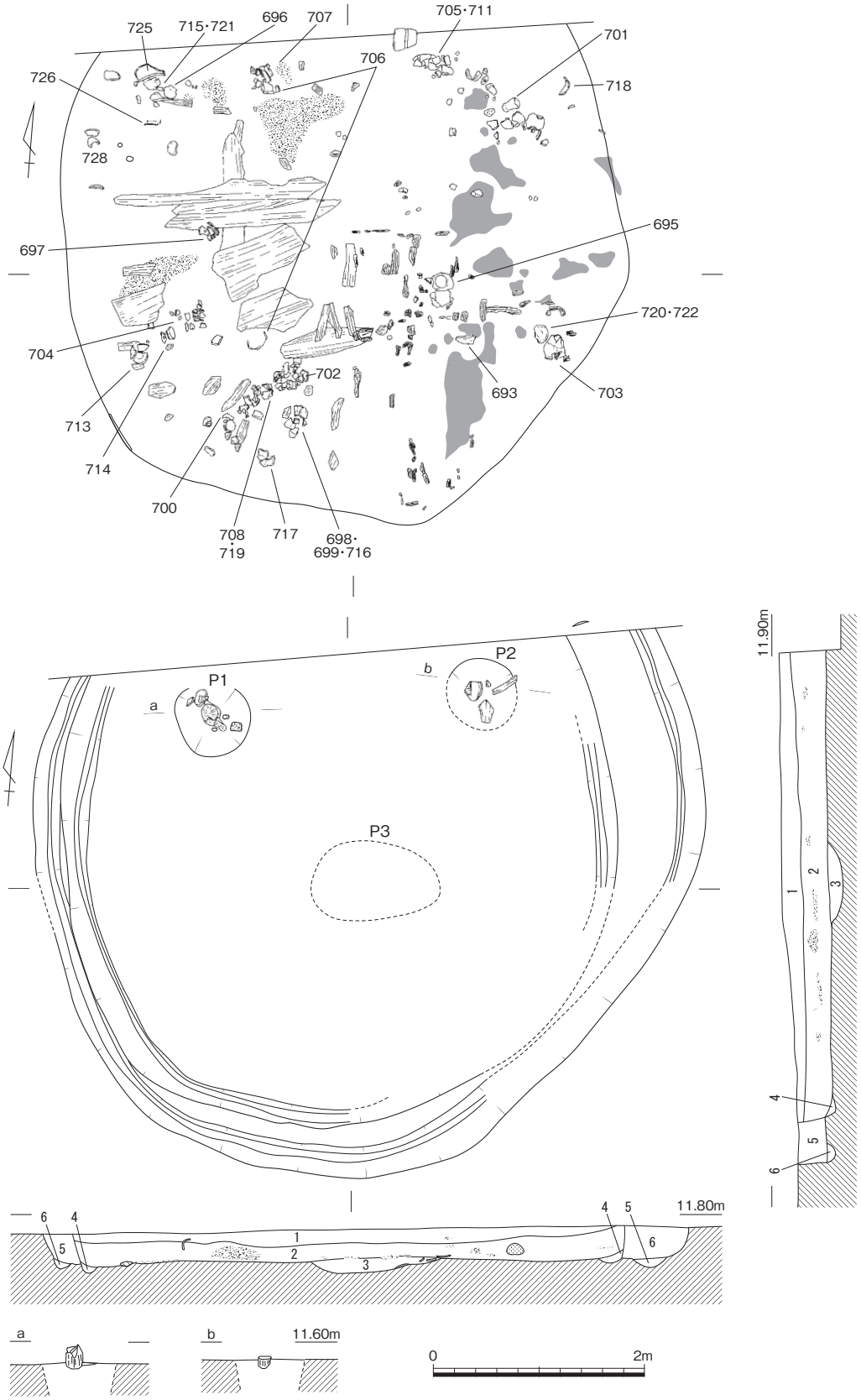
竪穴住居32（第13・91～94図、巻頭図版６－１・８－１、図版11－１・79・80・119）

Ｇ16南東に位置する。二重に巡る壁体溝と断面観察から、新・古の二段階に分けることができる。

新段階は平面形がやや歪な円形を呈し、長軸268㎝、短軸264㎝を測る。埋土である第１・２層ともに焼土と炭を多く含んでいた。第91図上は床面直上で確認した土器・焼土・炭化材等の出土状況である。炭化材は、竪穴住居中心から放射状に延びた垂木などの屋根材が主であり、西半ではその屋根材の下から直交するような部材が確認できた。樹種同定では、屋根材としてコナラ属アカガシ亜属・コナラ属コナラ節・クスノキ・マツ属複維管束亜属、屋根材に直交して確認した部材はマツ属複維管束亜属との鑑定結果が出ている。炭や焼土も広範囲に分布しており、特に焼土は東半に集中し、炭化材よりも５㎝程度高い標高で確認した。残念なことに、調査期間と北に隣接する水田の取水期が重なったため、度々竪穴住居内が水没し、炭化材等遺物の検出や検討、床面や主柱穴など竪穴住居内施設の確認などが十分にはできなかった。竪穴住居の周囲には幅20～50㎝程度、深さ約10㎝の壁体溝が巡る。竪穴住居内ではＰ１～３を確認し、Ｐ１・２は主柱穴、Ｐ３は中央穴に比定できる。主柱穴は本来４本であったはずだが、前述の理由から、北側の２本のみの確認にとどまっている。Ｐ１・２は共に掘り方の平面形が直径約70㎝を測る円形を呈す。掘り方の断面形は逆台形もしくは筒形と推察されるが、湧水が激しく深さの確認はできなかった。共に炭化した柱材が残っており、樹種同定によるとＰ１の柱材はクスノキ、Ｐ２の柱材はコナラ属アカガシ亜属との結果が出ている。またＰ１の柱材は放射性炭素年代測定を実施しており、同位体補正を行った測定値は1805±20BPである。中央穴としたＰ３は断面のみの確認ではあるが、深さ10㎝程度、幅約120㎝を測る。

古段階は、平面規模が新段階よりも若干大きく、長軸318㎝、短軸303㎝を測る。平面形はやや歪な円形を呈し、特に南東部の一部は直線気味であった。竪穴住居の周囲には幅25～40㎝程度、深さ約10㎝の壁体溝が巡る。床面の標高は新段階とほぼ同じであるため、主要な部分は削平を受けていた。主柱穴や中央穴などは確認できていない。

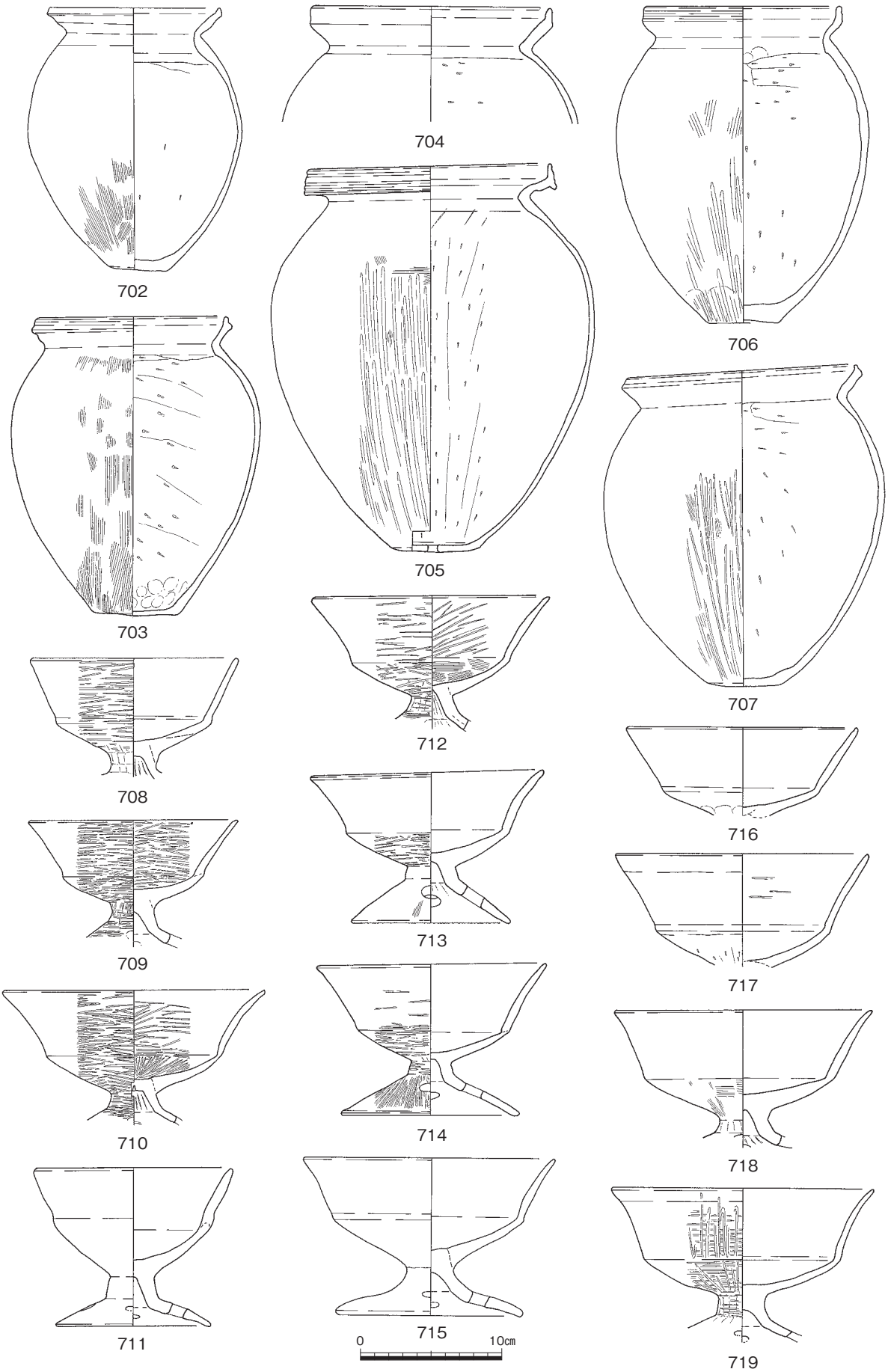
遺物は、新段階からの出土が大部分を占めており、古段階出土遺物は細片ばかりで図化できていない。第92図～第94図はすべて新段階からの出土。その多くは第91図上の遺物出土状況に出土地点を示している。ただし、高杯709・710・712、鉢727・730は第１層掘り下げ中に出土した。また、壺694・鉢723・724は床面直上から出土している。693・694は二重口縁壺。696は直立気味に立ち上がる口縁を持つ小型壺。697～700は台付壺。701の壺は東四国系か。702～704、707は口縁端部が若干立ち上がる甕。705・706は二重口縁を有する甕。708～719は口縁がやや外反気味に立ち上がる高杯で、短い脚柱部に「ハ」字に開く裾部には４方向に円孔が配置される。720～723は口縁が直立する浅い鉢。724・725・727・731は二重口縁の鉢で、725には脚が付く。728～730は「ハ」字に開く鉢。土器以外の遺物としては、鉄製摘鎌Ｍ26、土製玉Ｊ７、流紋岩製の砥石Ｓ57、流紋岩製敲石Ｓ58がある。いずれも竪穴住居新段階掘り下げ中に出土。鉄製摘鎌Ｍ26は木質が若干残存している。土製玉Ｊ７表面には、先端が尖った工具による刺突と細い沈線が観察できる。第91図上の竪穴住居新段階遺物出土状況に図示している壺696、甕702・706・707、鉢722・725、高杯713～716は器壁が赤変しており、竪穴住居焼失時に被熱している可能性が高く、その分布は竪穴住居西半に偏在する傾向が見られる。土器は層位毎に取り上げを実施したが、炭化材や焼土を挟んだ上層と下層とで著しい土器の型式差はなく、比較的短期間のうちに埋没したものと思われる。土器の特徴から新段階は弥・後・Ⅳ、古段階は弥生時代後期後半に比定できる。（松尾）



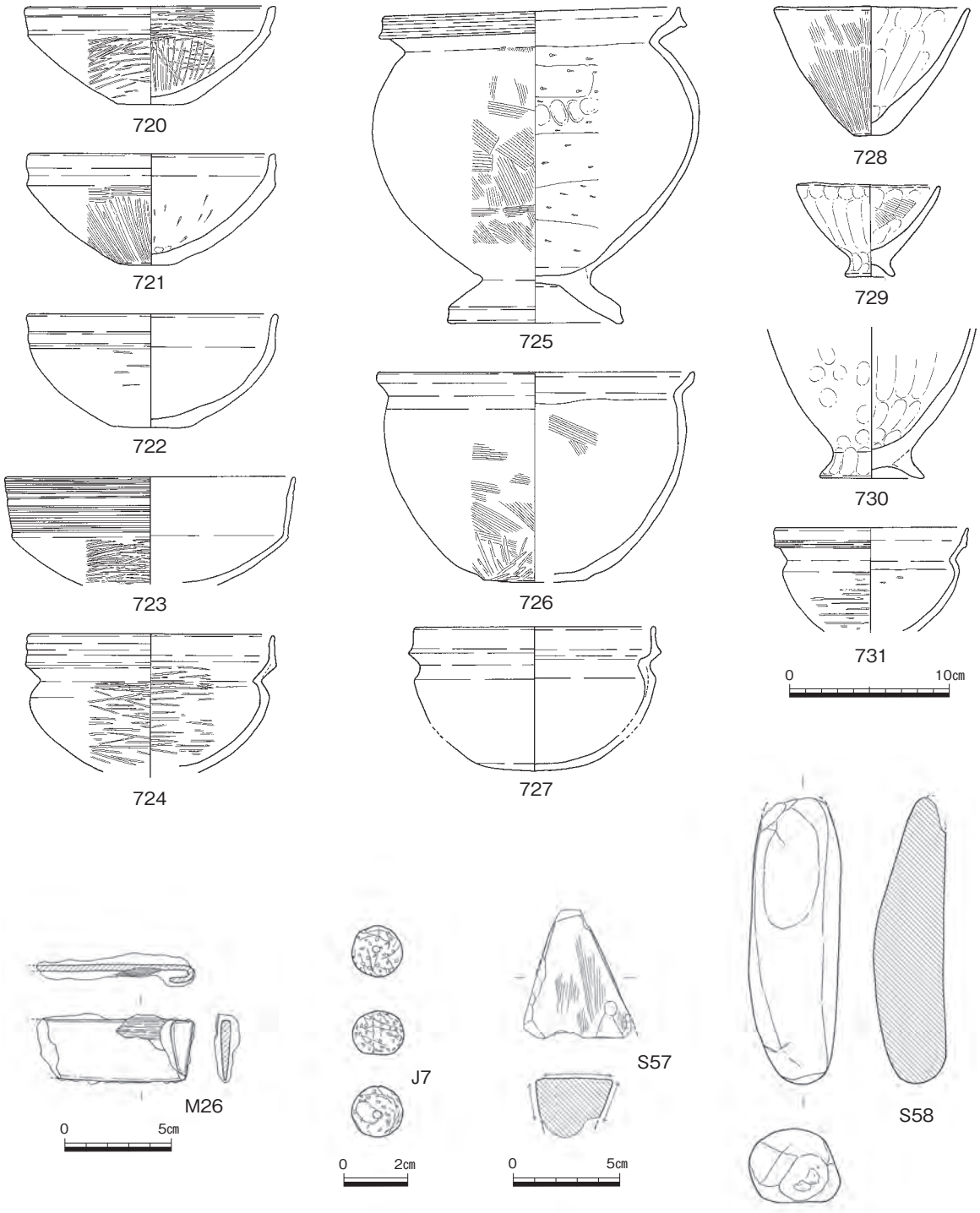
1　灰黄褐色(10YR4/2)細砂（炭・焼土・土器含）
2　黒褐色(10YR3/2)細砂（炭・炭化材・焼土多含）
3　褐灰色(10YR4/1)細砂（焼土・炭・土器含）〈Ｐ３〉
4　褐灰色(10YR4/1)細砂
5　灰黄褐色(10YR5/2)細砂（炭・焼土少含）
6　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト～細砂

第91図　竪穴住居32（1/60）

第92図　竪穴住居32出土遺物①（1/4）



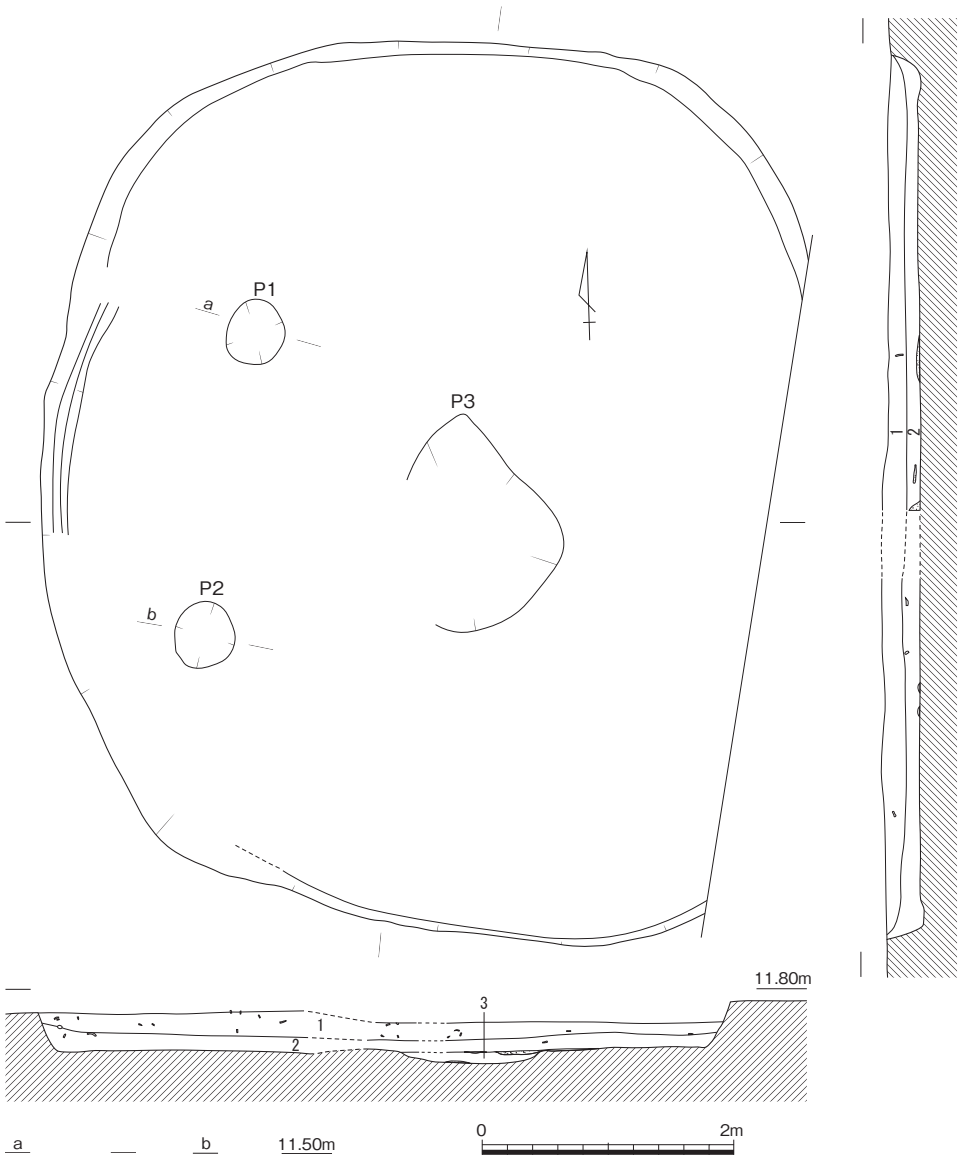
第93図　竪穴住居32出土遺物②（1/4）

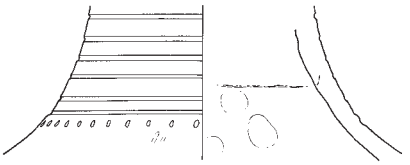


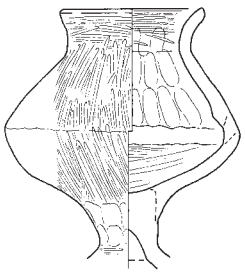
第94図　竪穴住居32出土遺物③（1/4・1/3・1/2）

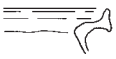
竪穴住居33（第13・95・96図、図版11－２・119）

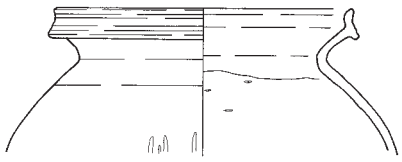
Ｈ16の東端で確認し、一部はＨ17まで延びている。ただし東端に用水路が設置されていたため、その部分については調査できていない。平面形は隅丸方形を呈し、長軸700㎝、短軸は推定580㎝を測る。周囲の調査状況同様、湧水が激しく調査は困難を極めた。竪穴住居の周囲には壁体溝が全周していると思われるが、西側の一部分のみを検出し、幅約30㎝、深さ６㎝程度であることを確認している。Ｐ１～３のうち、Ｐ１・２は主柱穴、Ｐ３は中央穴に比定できる。Ｐ１・２は掘り方の平面が直径約50㎝の円形で、深さの確認はできなかった。Ｐ３は平面形が不定形で長軸が170㎝、短軸は135㎝程度。




732

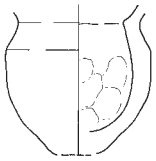

733


734

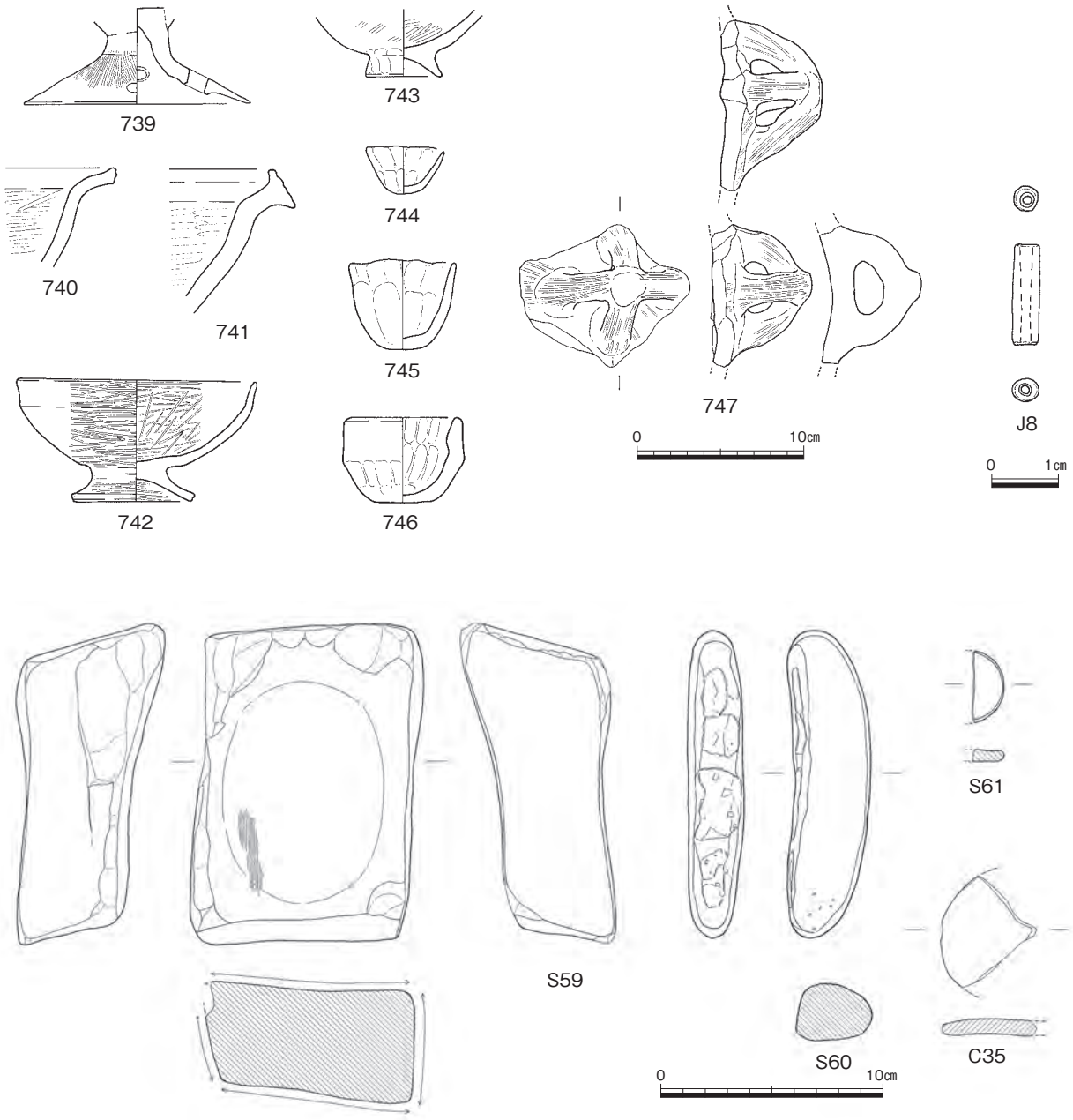

735

736

737


738

第95図　竪穴住居33（1/60）・出土遺物①（1/4）



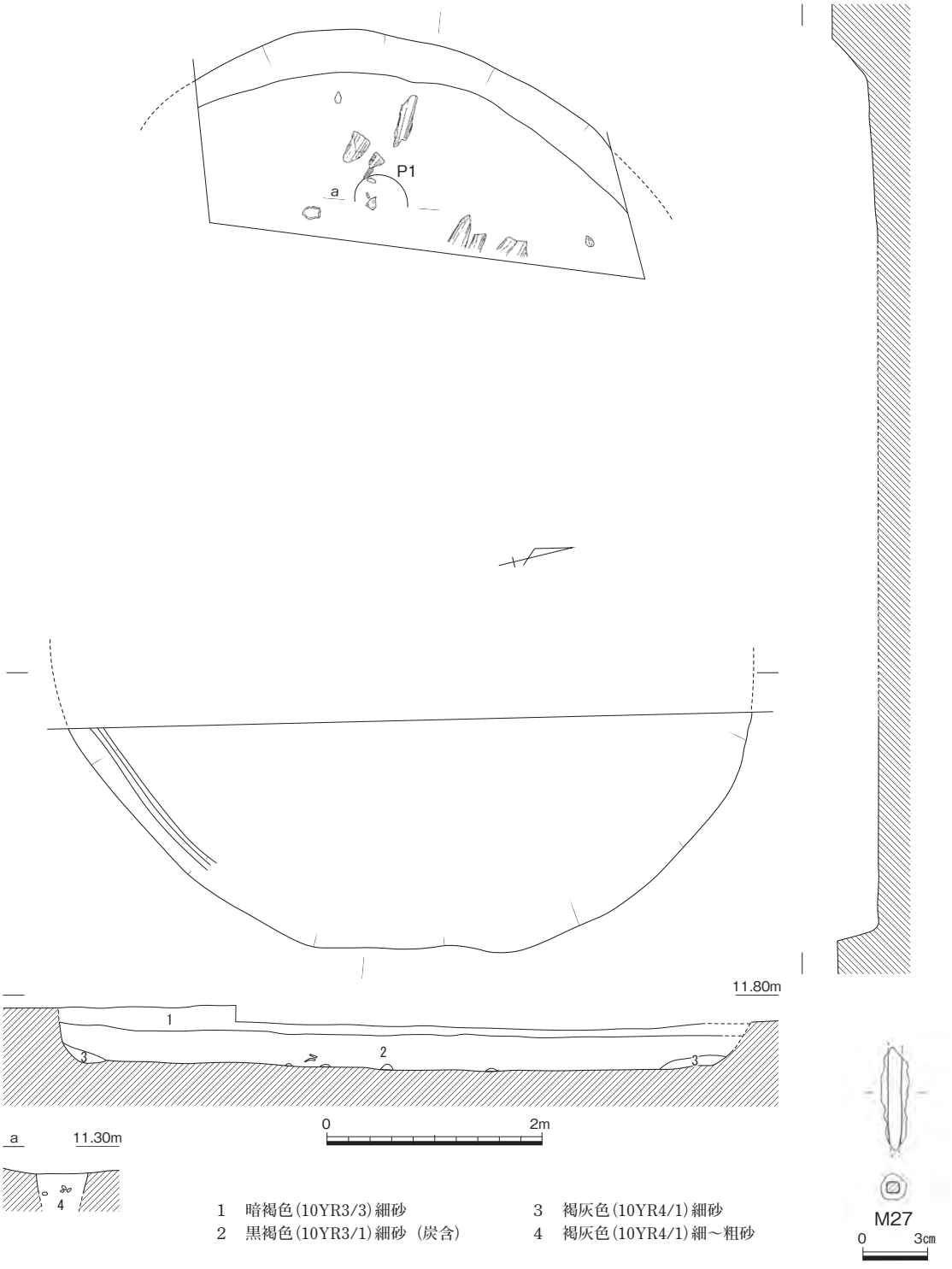
第96図　竪穴住居33出土遺物（1/4・1/3・1/1）

東西断面によると、深さ約10㎝で埋土には多量の炭を含んでいた。出土遺物は、土器732～747、碧玉製の管玉Ｊ８、流紋岩製砥石Ｓ59、流紋岩製敲石Ｓ60、細粒花崗岩製円板状石製品Ｓ61、円板状土製品Ｃ35がある。732は長頸壺、733は短い口縁と脚を有する壺。734～736は二重口縁の甕、737は体部にタタキを施す「く」字状口縁甕、738小形甕、739高杯の脚部、740～743鉢、744～746は粗製の小形鉢。747は特徴的な遺物で、十字状の把手。大形鉢に付属するものであろうか。これら土器の諸特徴から、竪穴住居33は弥・後・Ⅲに位置付けることができる。　（松尾）

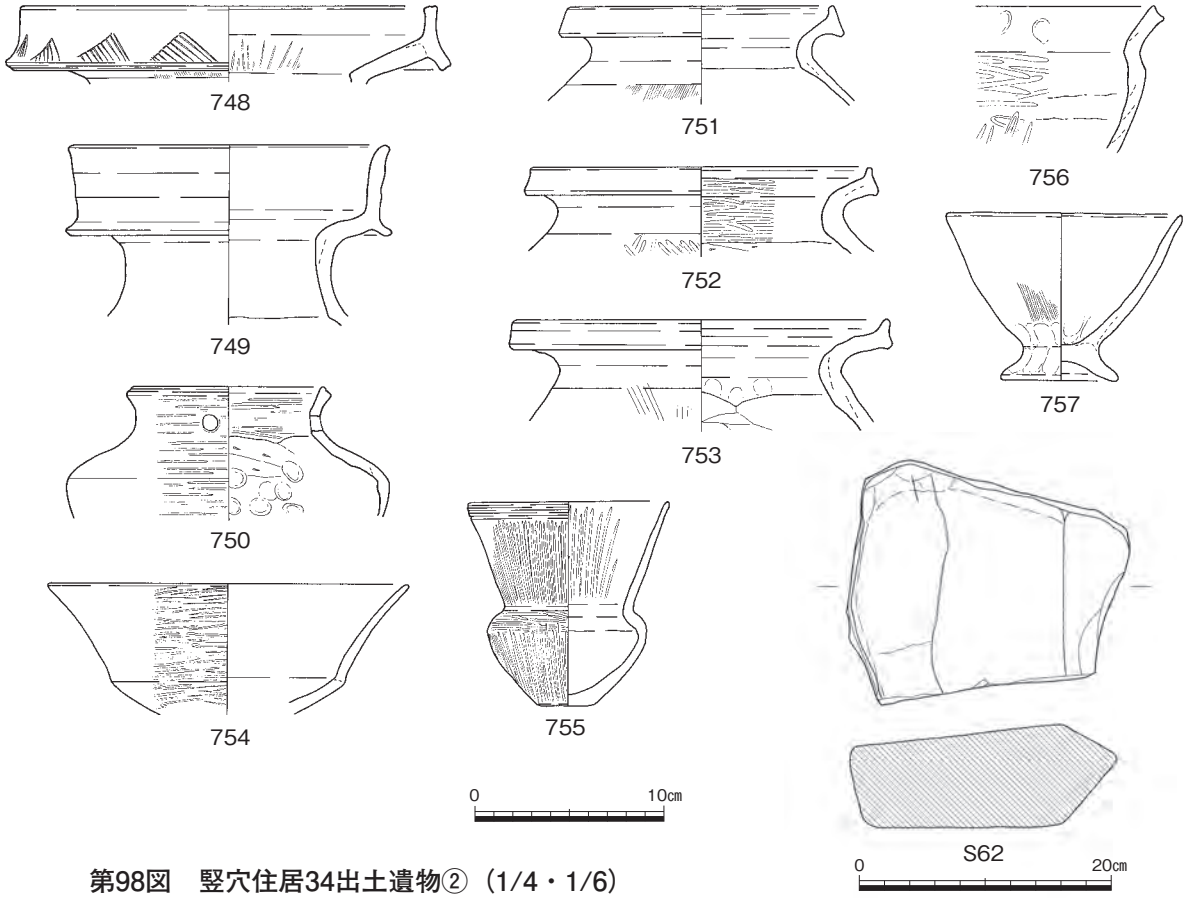
竪穴住居34（第13・97・98図、図版11－３・81）

竪穴住居33の北東、Ｇ17・Ｈ17境に位置する。竪穴住居33と同様の用水路が竪穴住居中心に位置していることから、竪穴住居の東と西の一部分のみの調査。後述する竪穴住居37と竪穴住居38の一部を壊して建てられている。平面形は不整円形を呈し、長軸は842㎝を測る。竪穴住居の周囲には幅25㎝、

深さ５㎝程度の壁体溝を部分的に確認した。竪穴住居西側では、炭化材を比較的多く検出した。焼失住居であろう。その炭化材の下から、主柱穴に比定できる直径50㎝の掘り方を持つＰ１を検出したが、周辺で確認した竪穴住居同様、湧水が激しく底面の確認には至っていない。出土遺物は土器748～757、棒状鉄製品Ｍ27、流紋岩質凝灰岩製台石Ｓ62がある。748・749は二重口縁壺、750は短頸壺、751～753は甕、754高杯、755は表面を丁寧にミガキ調整した小形壺、756・757は鉢。土器の特徴や検出状況などから、弥・後・Ⅲ～Ⅳの時期と考える。　（松尾）



第97図　竪穴住居34（1/60）・出土遺物①（1/3）



第98図　竪穴住居34出土遺物②（1/4・1/6）

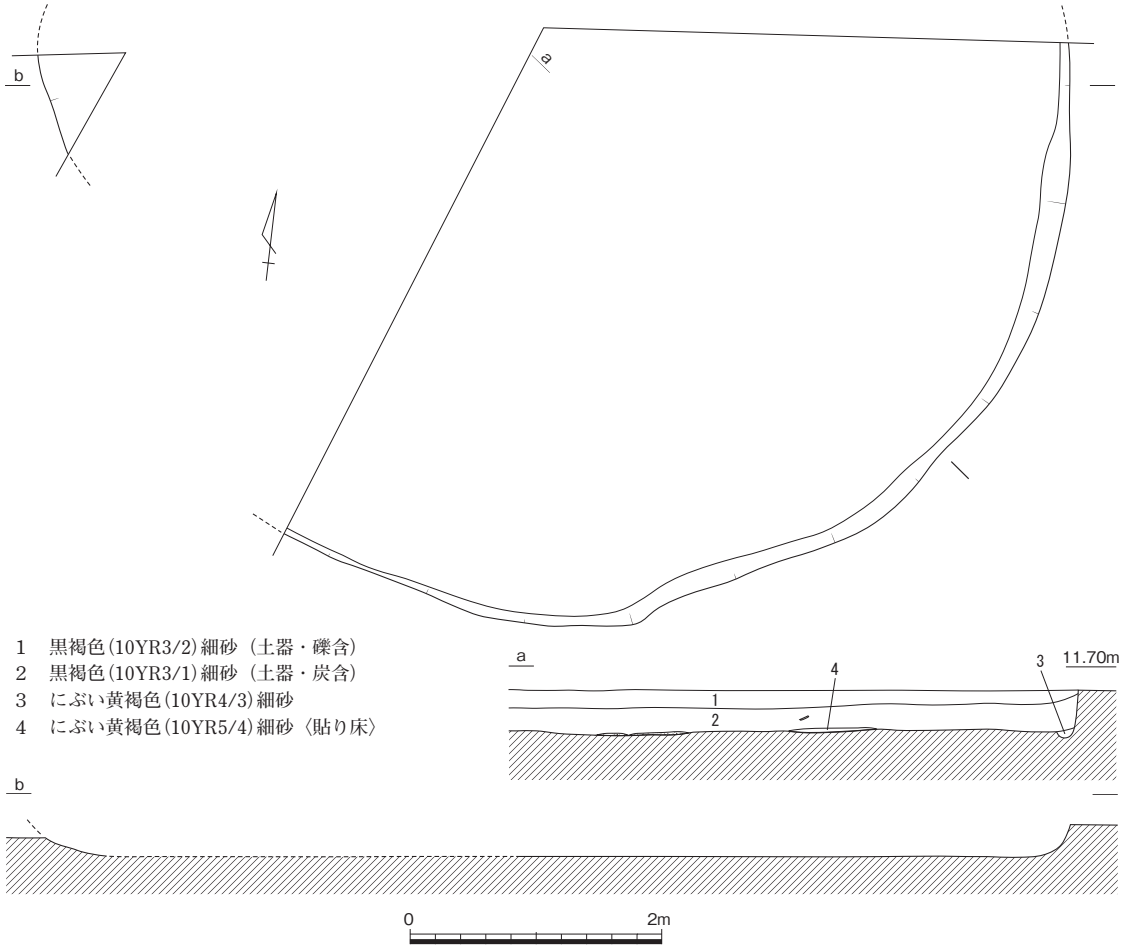
竪穴住居35（第13・99図、図版12－１・81・117、写真17）

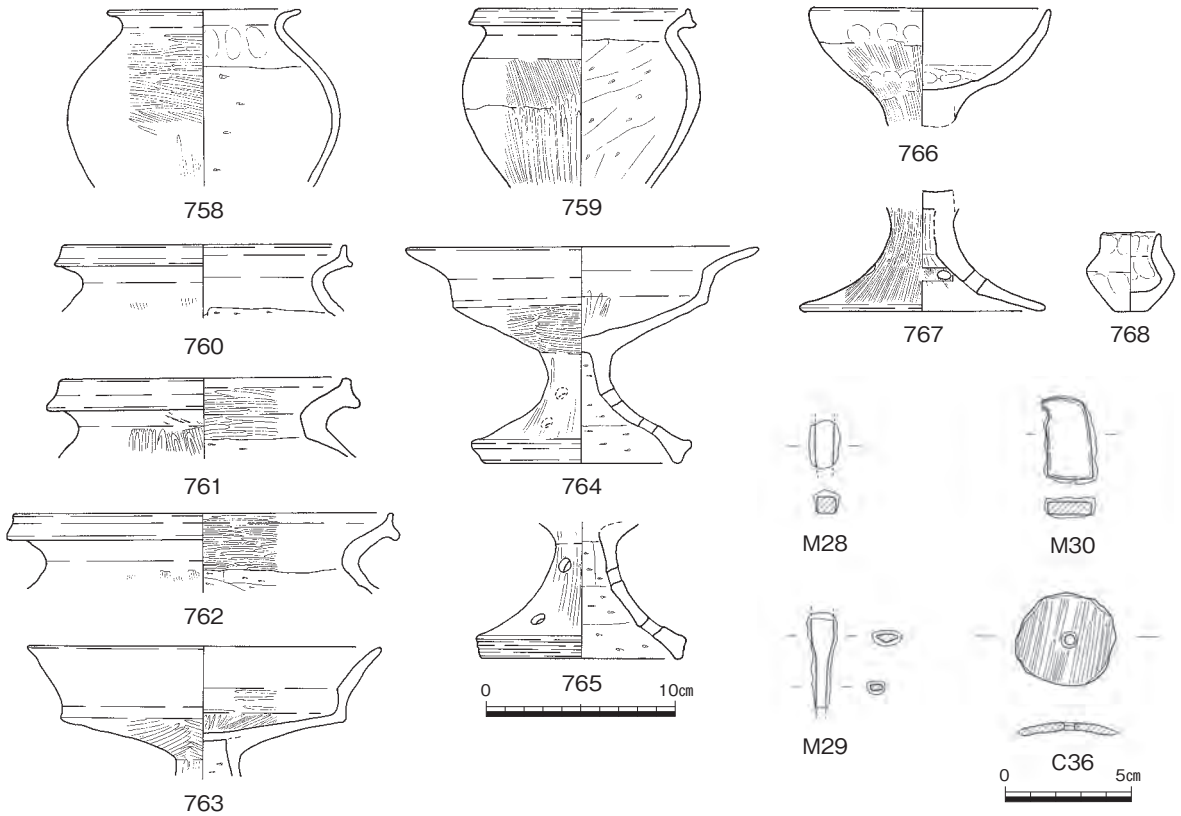
G17中央に位置する。北半は調査区外へ延び、西側は用水路により十分な調査ができていない。後述する竪穴住居36・37を壊して建てられている。平面形は円形を呈し、長軸810㎝を測る。調査中は湧水が激しく、平面的には壁体溝を検出できていないが、断面では幅25㎝、深さ６㎝の溝を確認している。このことから、本来は竪穴住居掘り方内面に沿って壁体溝が巡っていたと考えられる。主柱穴や中央穴なども確認できていない。

出土遺物は、土器758～768、鉄製品M28～M30、土製品C36がある。758～762は甕で、759～762は口縁端部が上下に肥厚している。763～767は高杯。脚裾端部が肥厚する764・765、脚裾部がなだらかに開く767がある。甕760・761、高杯765は床面直上からの出土。M28・M29は鉄鏃の可能性が高い。M30は不明鉄製品。C36は円板状土製品。

出土している土器の特徴や、検出状況などから、弥・後・Ⅱ～Ⅲの時期に比定することができる。　（松尾）

写真17　竪穴住居35（南から）

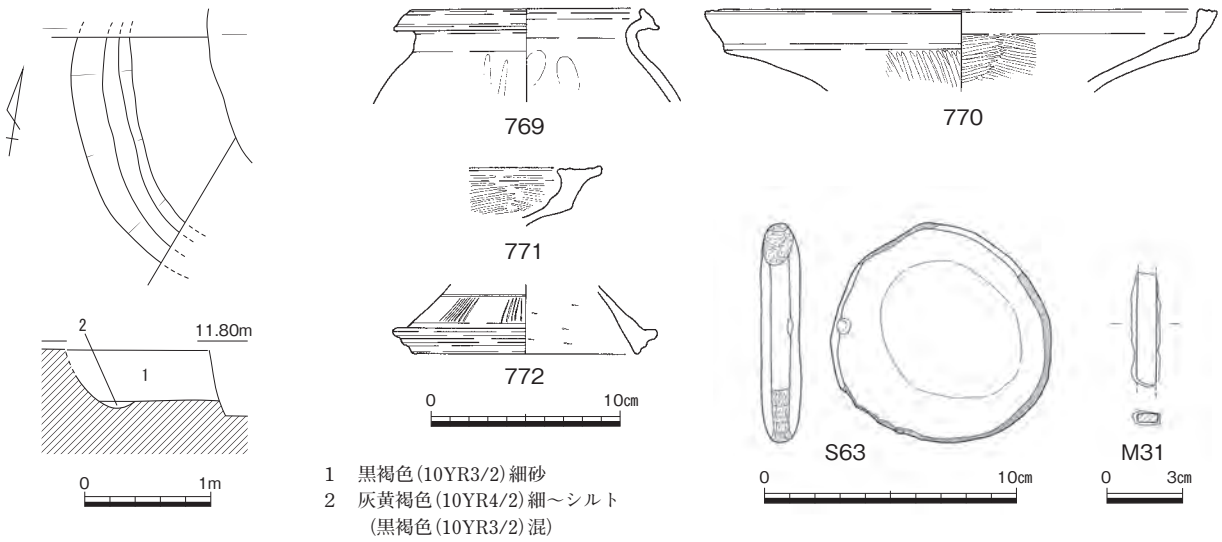




第99図　竪穴住居35（1/60）・出土遺物（1/4・1/3）

竪穴住居36（第13・100図、図版12－２）

竪穴住居35の西で検出した。大部分が竪穴住居35により壊されている。平面形は円形を呈する可能性が高い。断面観察から床面の標高は11.20ｍで、竪穴住居35の床面標高より約10㎝高い。ごく一部分の調査ではあるが、幅25㎝で深さ６㎝程度の壁体溝を確認している。出土遺物は、土器769～772、S63は流紋岩質溶結凝灰岩製の敲石、M31は鉄製ヤリガンナの可能性がある。769甕は口縁端部が肥厚する甕。770～772は高杯で、口縁端部が肥厚する770、端部を内外面に拡張させる771がある。これら土器の特徴から、弥・後・Ⅰと判断する。（松尾）

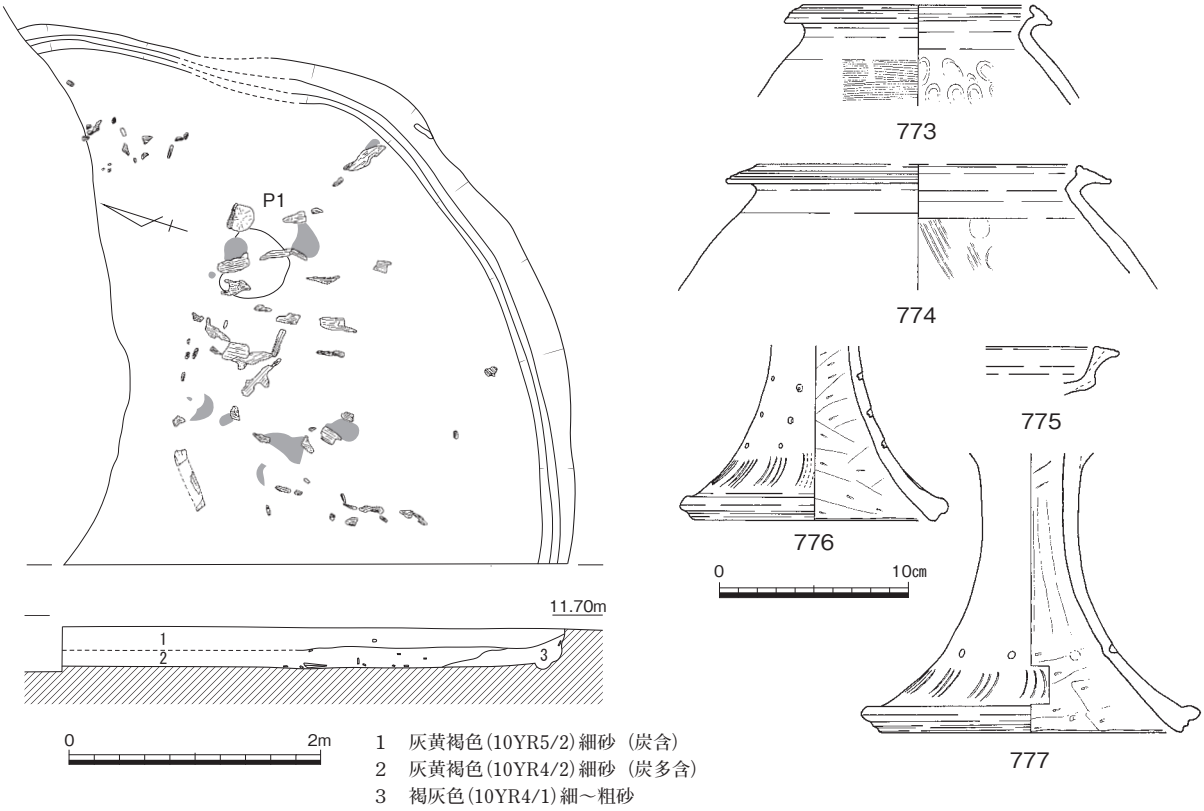


第100図　竪穴住居36（1/60）・出土遺物（1/4・1/3）

竪穴住居37（第13・101図、図版12－３、写真18）

竪穴住居34と竪穴住居35の間に位置し、検出状況から両竪穴住居より古い時期の竪穴住居であることが分かる。平面形は円形であろう。床面直上から多数の炭化材や焼土が出土していることから、焼失住居である。ただし調査状況が悪く、炭化材の配置など不明瞭な点が多い。竪穴住居掘り方内面に沿って、幅30㎝、深さ６㎝程度の壁体溝が巡る。炭化材や焼土を取り除くと、Ｐ１を確認することができた。主柱穴の可能性は高いが、掘り方の平面形が、直径50㎝程度の不整円形を呈するということ以外は確認できていない。出土遺物は773～777の土器のみ。773・774は口縁端部が上下に広く拡張し、上面に凹線を施した甕。775～777は高杯。775は杯部の一部のみで、口縁部が短く外反し、端部は肥厚する。776・777は脚部で、脚裾端部は肥厚する。外面は櫛状工具による施文などが見られる。弥・後・Ⅰであろう。（松尾）

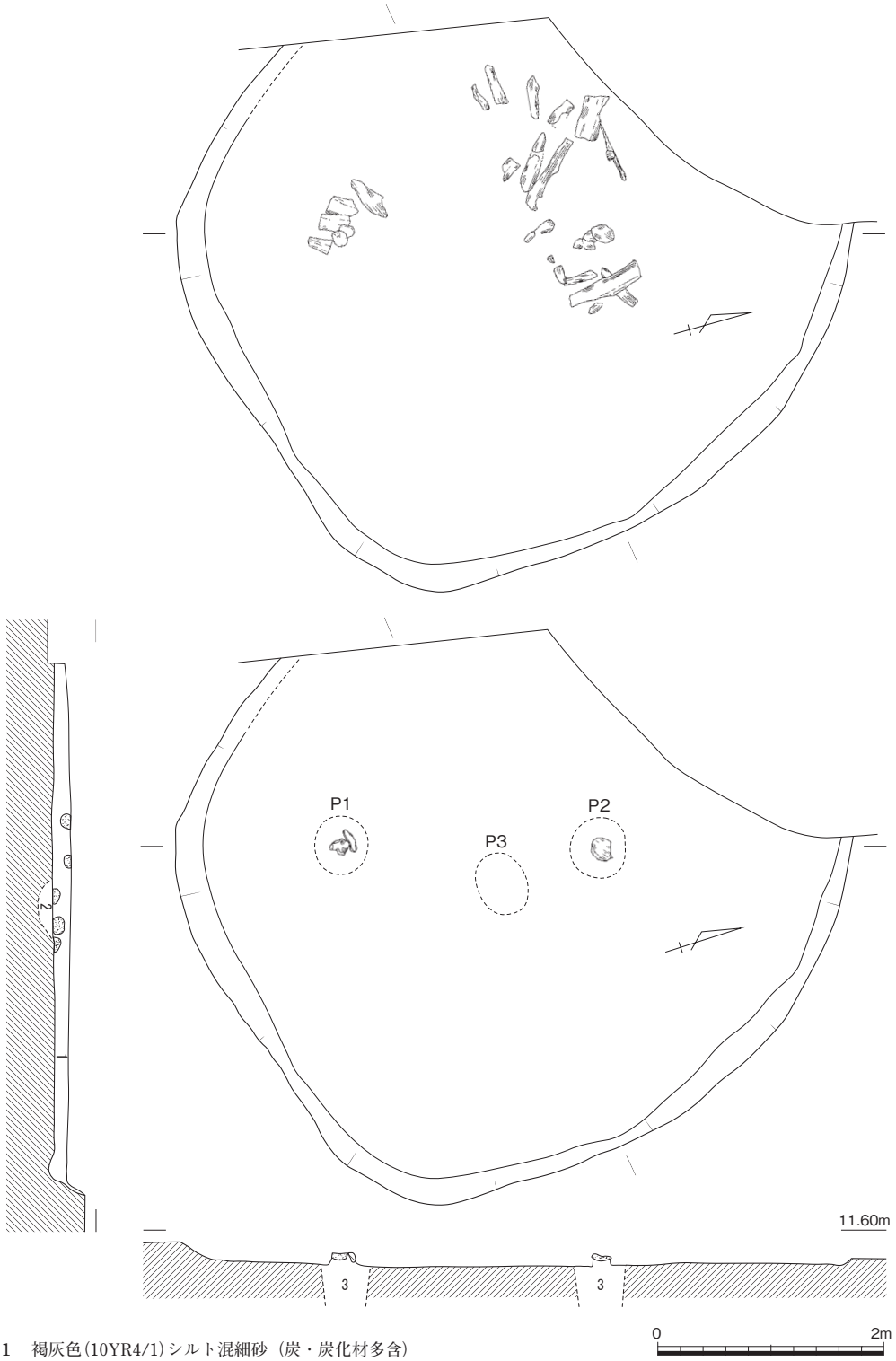
写真18　竪穴住居37調査風景（南東から）



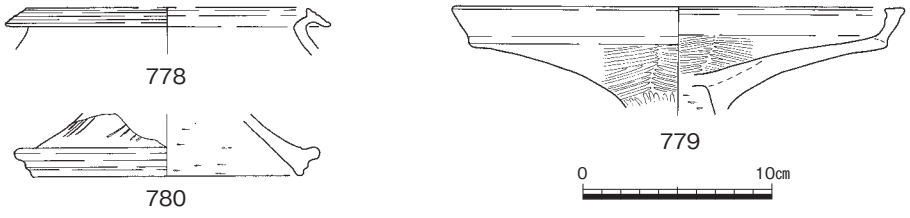
第101図　竪穴住居37（1/60）・出土遺物（1/4）

竪穴住居38（第13・102図、図版13－１）

Ｈ17の北寄りで、竪穴住居34の南東に位置する。北西部分は竪穴住居34により壊されている。また、用水路が設置されていたため、十分な調査ができていない箇所がある。平面形は不整円形を呈し、長軸556㎝、短軸538㎝を測る。埋土の第１層は炭や炭化材が多く含まれ、また平面的にも床面直上から炭化材を確認し、その一部は図化を行った（第102図上）。焼失住居であると考える。ただし周辺の調査状況同様、湧水が激しく、炭化材については部分的な検出しかできていない。本来ならば竪穴住居掘り方の内面に沿って壁体溝が巡っていると思われるが、前述の理由により確認できていない。炭化材を取り除くと、Ｐ１～３を検出した。Ｐ１･２は主柱穴、Ｐ３は中央穴。Ｐ１～３はいずれも断面のみ確認しており、平面形については想定ラインを示している。Ｐ１・２の掘り方平面形は直径50㎝程度の円形を想定することができるが、深さについては確認できなかった。Ｐ１・２ともに柱材と思われる炭化材が残っており、樹種同定の結果Ｐ１はヤマグワ、Ｐ２はスダジイである。柱材である炭化材の残存直径は、Ｐ１・２ともに約20㎝を測る。Ｐ１の柱材に沿うように長軸25㎝、短軸５㎝の自然石を確認した。被熱のため赤変しているが、用途については不明。中央穴であるＰ３についても、断面のみの確認であり、幅55㎝程度で平面形については想定。底面まで掘り下げを行うことはできなかったが、埋土には比較的多くの炭が含まれていた。出土遺物は少なく、図示できたものも**778～780**の土器３点のみ。甕**778**は頸部が外反し、上下に拡張した口縁端部上に凹線が巡る。**779・780**は高杯。**779**の杯部は左右に広く拡張し、口縁部は短く外反する。時期は弥・後・Ⅰであると推察される。なお、Ｐ２の柱材は放射性炭素年代測定を実施し、同位体補正を行った測定値は1805±20BPとの結果が出ている。これは竪穴住居32Ｐ１の柱材に近しい年代であり、出土土器の年代観とは齟齬がある。（松尾）



1　褐灰色(10YR4/1)シルト混細砂（炭・炭化材多含）
2　褐灰色(10YR5/1)シルト混細砂（炭含）〈Ｐ３〉
3　褐灰色(10YR5/1)粗砂（砂粒多含）

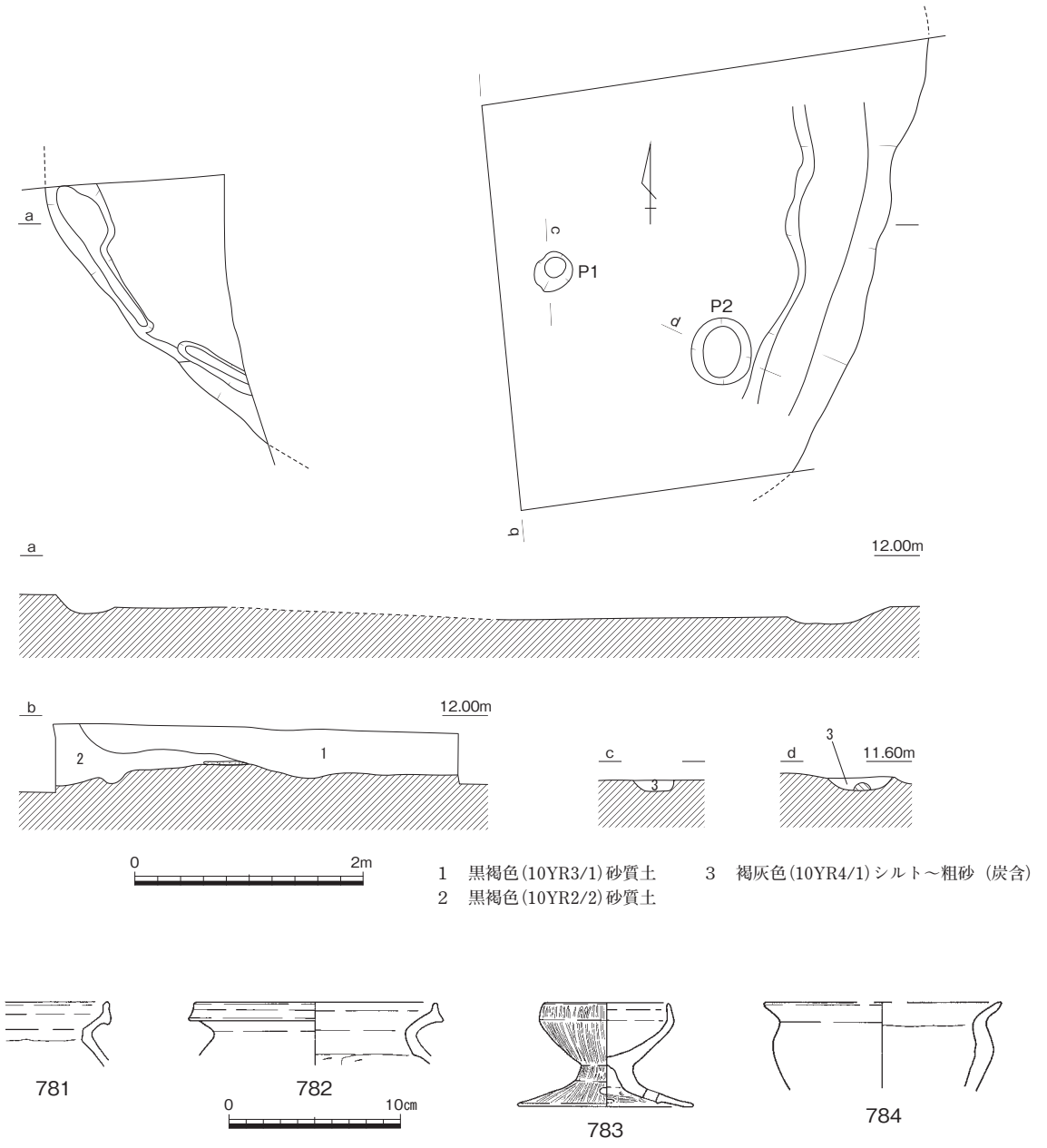


第102図　竪穴住居38（1/60）・出土遺物（1/4）

竪穴住居39（第13・103図、図版13－２）

Ｉ16北に位置する。調査日程等の都合上、分割して調査を行っていること、現用水路を残して調査をせざるを得なかったことから、竪穴住居40との重複関係など不明瞭な点が多い。検出状況などから平面形は隅丸方形を呈し、推定で長軸720㎝、短軸680㎝を測る。竪穴住居掘り方の内面に沿って幅15～65㎝、深さ10㎝程度を測る壁体溝が巡るが、ベース層がシルト～粗砂であることから掘り方は崩れて不明確である。竪穴住居床面でＰ１・２を確認している。いずれも深さ10㎝程度と浅いことから、主柱穴にはなり得ない。

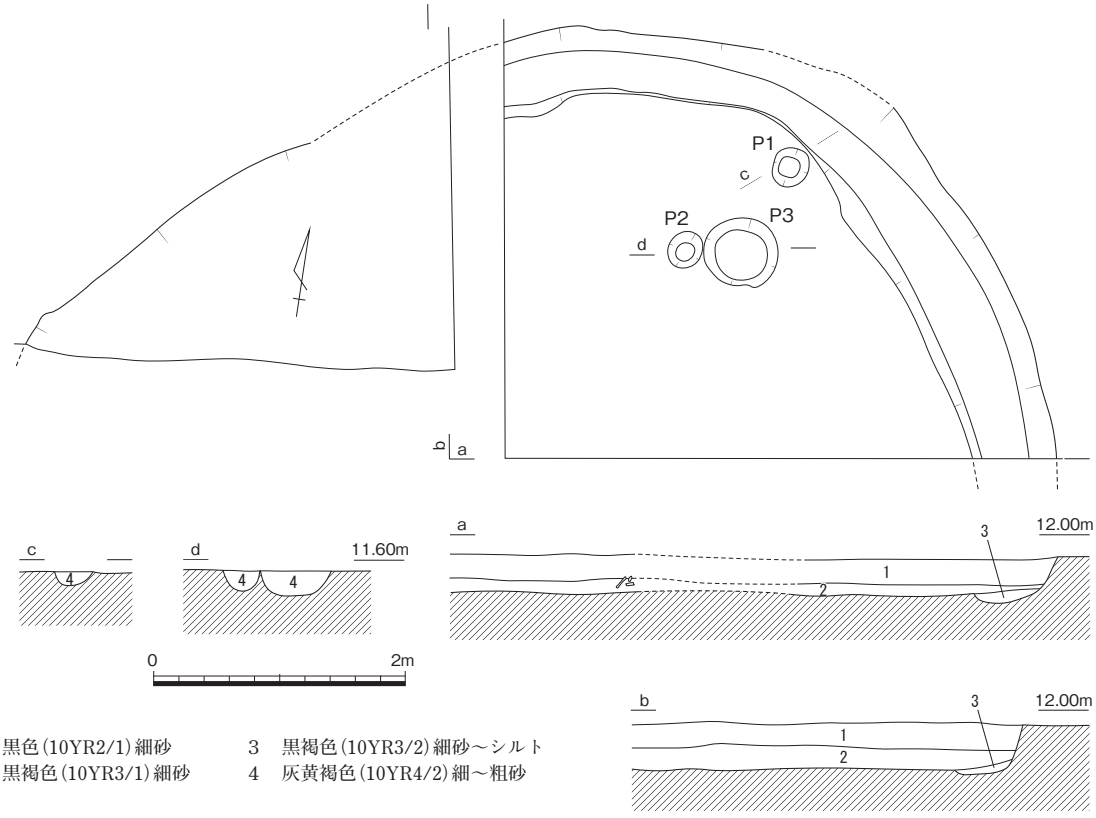
遺物には土器**781**～**784**がある。甕**781**・**782**は口縁端部が上方に立ち上がる。**783**は椀形の杯部を持つ高杯で、脚部には４方向の円孔が配置される。**784**は頸部が「く」字状に屈曲する鉢。土器の特徴などから弥・後・Ⅲであると思われる。（松尾）



第103図　竪穴住居39（1/60）・出土遺物（1/4）

竪穴住居40（第13・104図、図版13－３）

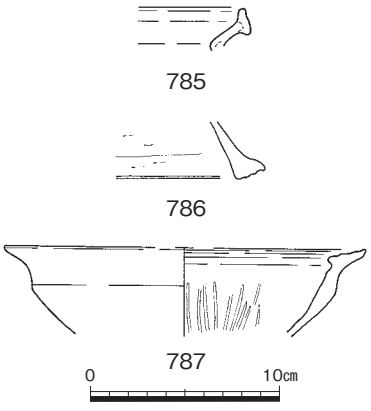
竪穴住居39の北側に位置する。検出状況や土器の出土状況から、竪穴住居39によって南側が削平を受けていると考えたい。平面形は隅丸方形を呈すると思われ、長軸790㎝、短軸410㎝を測る。竪穴住居掘り方の内面に沿って幅50～80㎝の壁体溝が巡ると想定できるが、場所によっては検出できていな



第104図　竪穴住居40（1/60）・出土遺物（1/4）

い所もある。竪穴住居39同様にベース層がシルト～粗砂であることから、掘り方の立ち上がりが不明瞭であった。竪穴住居内からはＰ１～３を確認した。竪穴住居に伴うと考えて図示したが、いずれも深さ10～30㎝程度と浅く、主柱穴にはなり得ない。

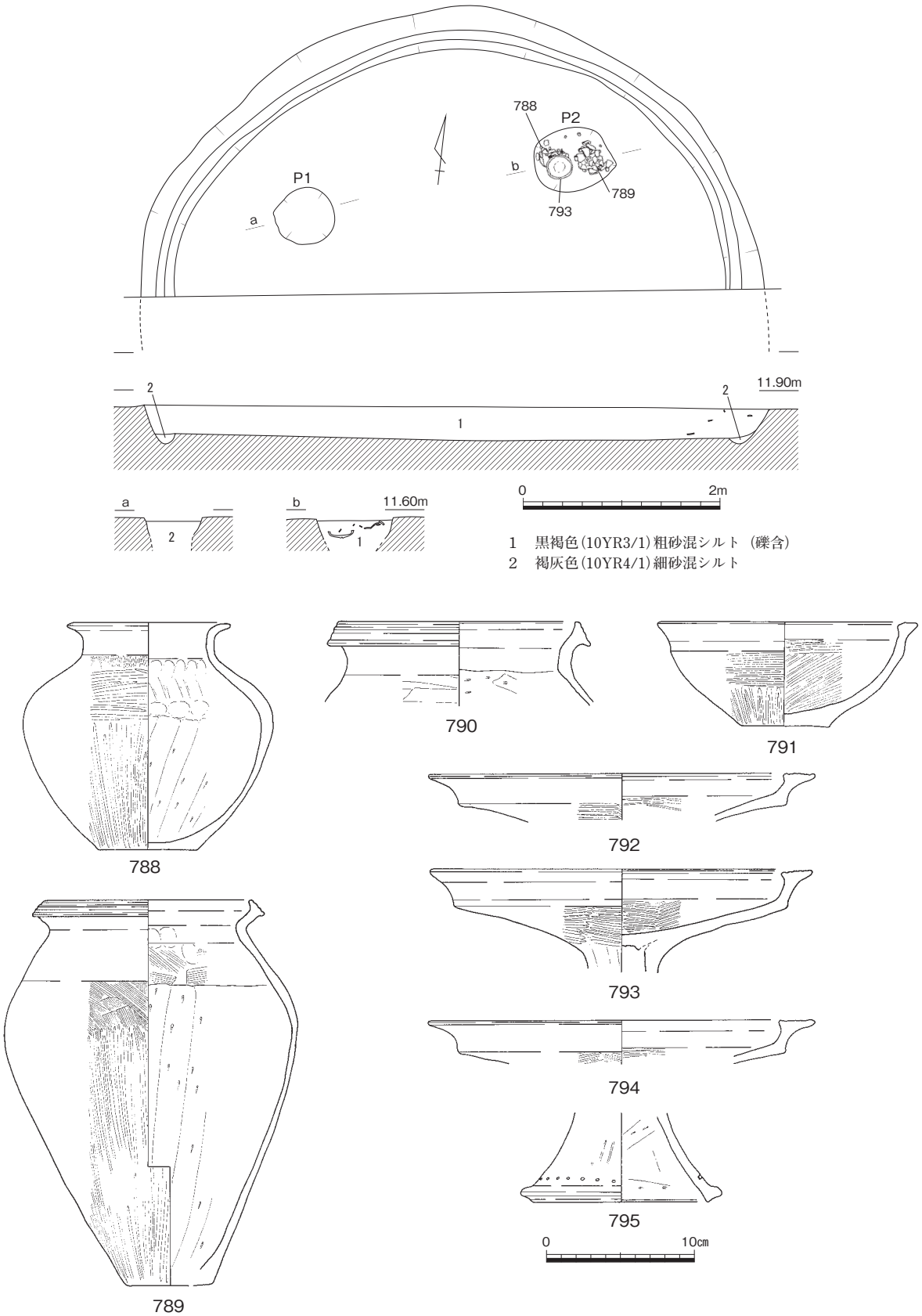
出土遺物は土器のみで、細片が多い。甕**785**は口縁端部が上方に立ち上がる。**786・787**は高杯。土器の特徴や検出状況から、弥・後・Ⅱ～Ⅲと推察される。　（松尾）



竪穴住居41（第13・105図、図版14－１）

Ｉ17北西に位置する。南半が調査区外へ延びているが、平面形は直径633㎝を測る円形を呈すると推察される。竪穴住居掘り方の内面に沿って幅27～43㎝、深さ約８㎝の壁体溝が巡る。竪穴住居内では主柱穴と思われるＰ１・２を確認した。Ｐ１は平面形が円形を呈し、直径は55㎝を測る。Ｐ２は平面形が不整円形を呈し、長軸75㎝、短軸60㎝を測る。周辺の調査状況同様、湧水が激しく、Ｐ１・２ともに底面まで掘り下げることができなかった。Ｐ２は埋土上面から５㎝程度掘り下げると、土器が

比較的多く出土している。出土遺物は土器がほとんどで、794はＰ１から、788～793はＰ２から出土した。788は頸部が短く、口縁部が開く壺。789・790は甕。791は鉢。792～795は高杯で、杯部が逆

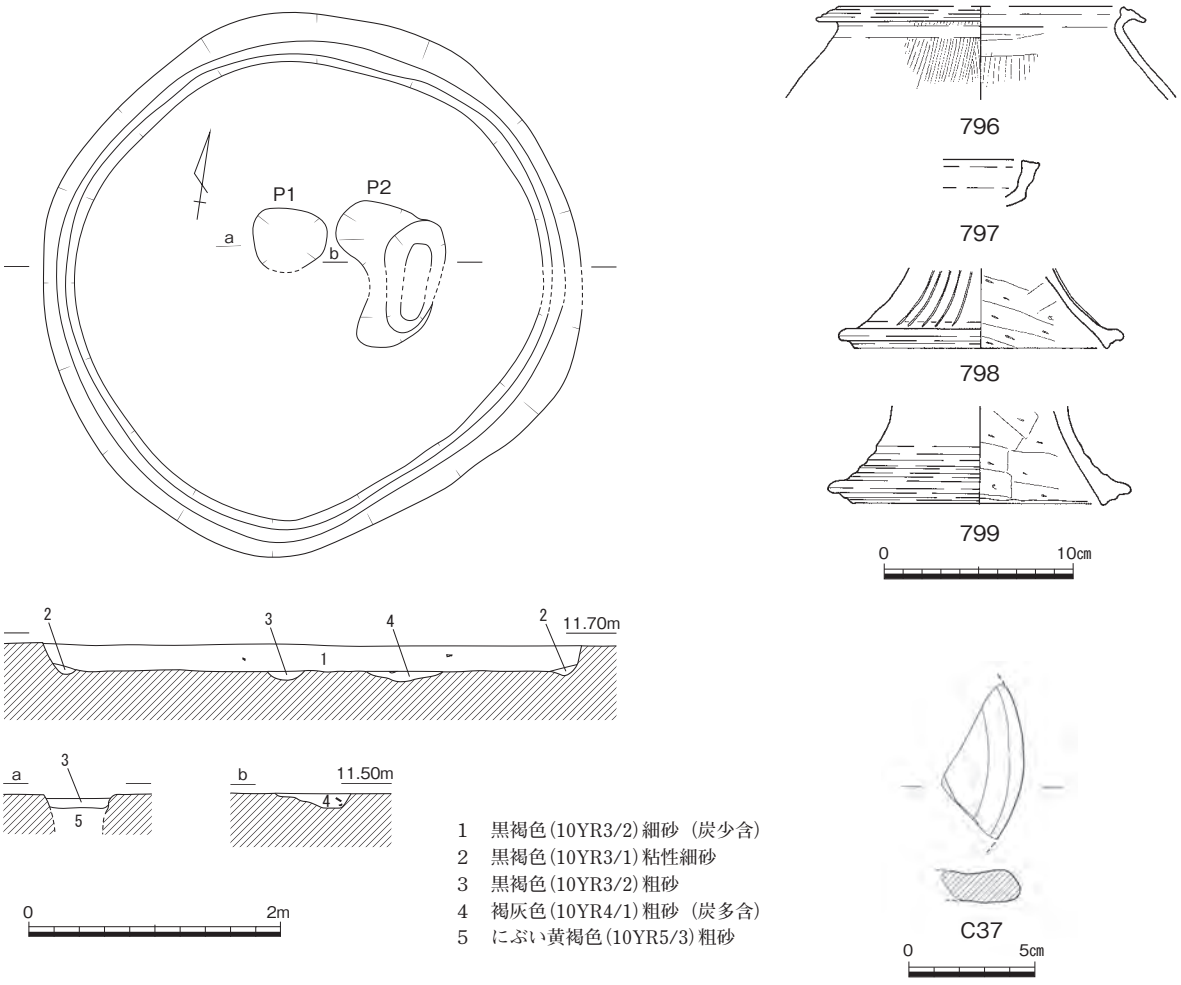


第105図　竪穴住居41（1/60）・出土遺物（1/4）

「ハ」字に大きく開き、左右に広く拡張した口縁端部上には凹線が巡る。土器の特徴から弥・後・Ⅰの時期であると思われる。（松尾）

竪穴住居42（第13・106図、図版14－２）

Ｈ17とＩ17の境に位置する。平面形は不整円形を呈し、長軸430㎝、短軸424㎝を測る。竪穴住居掘り方の内面に沿って、幅25～40㎝、深さ５㎝程度の壁体溝が巡る。竪穴住居内ではＰ１・２を確認した。Ｐ１は平面形が不整円形を呈し、長軸58㎝、短軸50㎝を測る。底面は湧水が激しく確認できていない。主柱穴である可能性は高いが、対となる柱穴が見つかっておらず判然としない。Ｐ２は平面形が不整形で、東寄りに長軸80㎝、短軸45㎝を測る長楕円形の落ち込みを有する。深さは20㎝程度で、埋土には多量の炭を含んでいたことから、中央穴であろう。出土遺物は**796**～**799**の土器や、円板状土製品**Ｃ37**がある。**796**は上下が拡張した口縁端部上に凹線文が巡る。**797**～**799**は高杯。**798**・**799**は脚裾部で、端部は肥厚する。時期は弥・後・Ⅰ。（松尾）



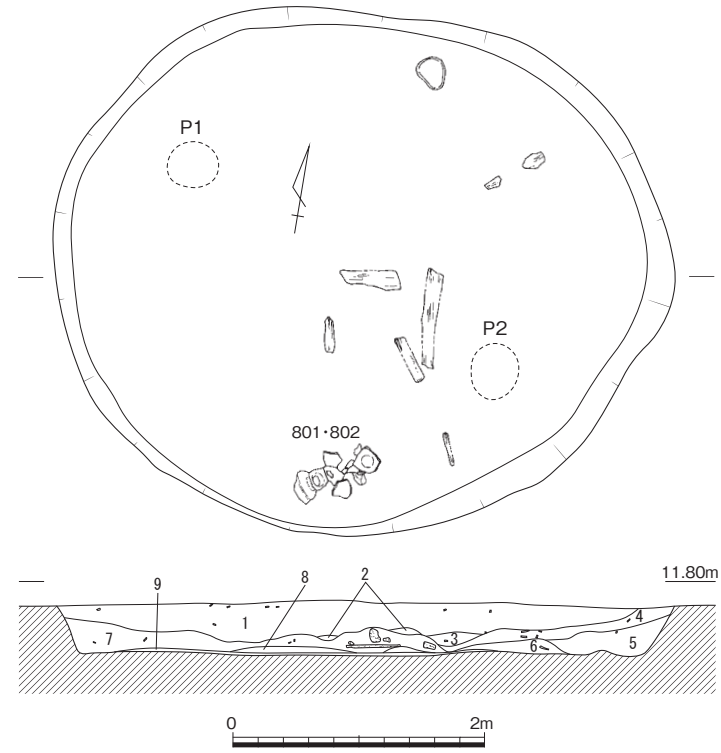
第106図　竪穴住居42（1/60）・出土遺物（1/4・1/3）

竪穴住居43（第13・107・108図、図版14－３・81）

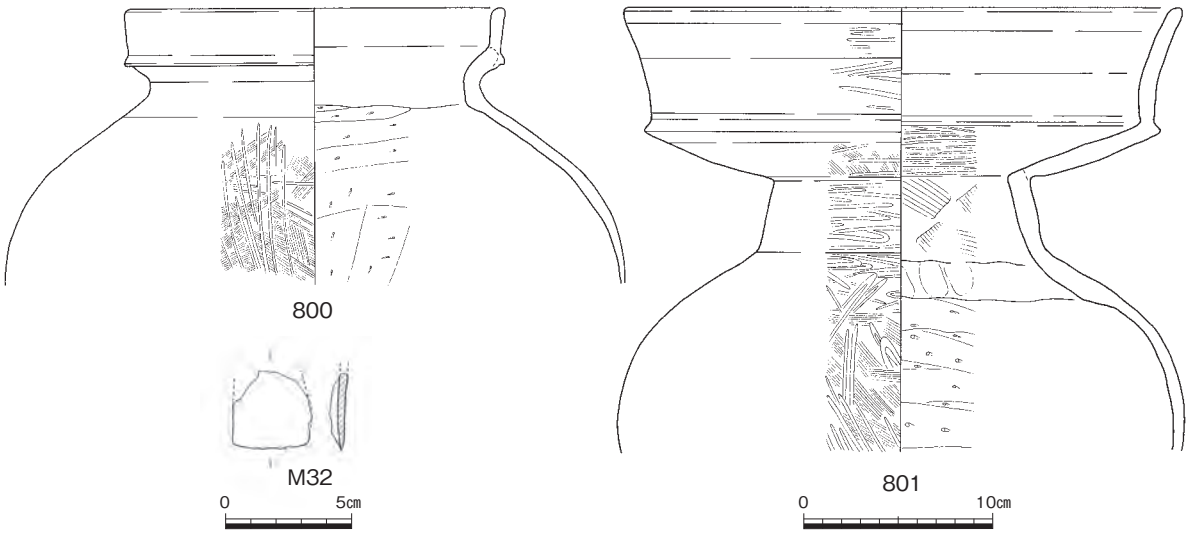
Ｉ17の北端で、竪穴住居41と竪穴住居42の間に位置する。後述する土坑185に住居南側の一部が壊されているが、土坑185の底面が浅いため床面はかろうじて残っていた。また竪穴住居北側に位置する

Ｐ22の南半を壊している。平面形は東西に長い楕円形を呈し、長軸490㎝、短軸415㎝を測る。埋土の第７層には多くの炭や炭化材を含んでおり、平面的にも炭化材を確認していることから、焼失住居であると考えられる。ただし、周囲の調査状況同様湧水が激しく、炭化材の出土状況等について完全には確認しきれておらず、図示できたのは一部に過ぎない。竪穴住居中心の床面に厚さ３㎝程度の灰黄褐色細砂（第９層）がほぼ水平に堆積しており、貼り床と推察される。竪穴住居内にはＰ１・２を輪郭のみ検出した。いずれも平面形が円形で、直径は40㎝程度、主柱穴であろう。

遺物は土器800～811、鉄器M32不明鉄製品がある。801・802の壺は頸部が短く、口縁部が大きく開く。第107図上の平面図に示しているように、竪穴住居南半の床面上でまとまって出土した。803・804は二重口縁の甕で、体部外面は縦方向のヘラミガキ、体部内面は横・斜め方向のヘラケズリ。805～808は「く」字状口縁の甕。809は高杯。810は台付直口壺で、内外面ともに細かいヘラミガキを行う。811鉢は全体の形状が不明瞭であるが、上から見ると楕円形を呈すると思われる。内外面ともに横・斜め方向の細かいヘラミガ

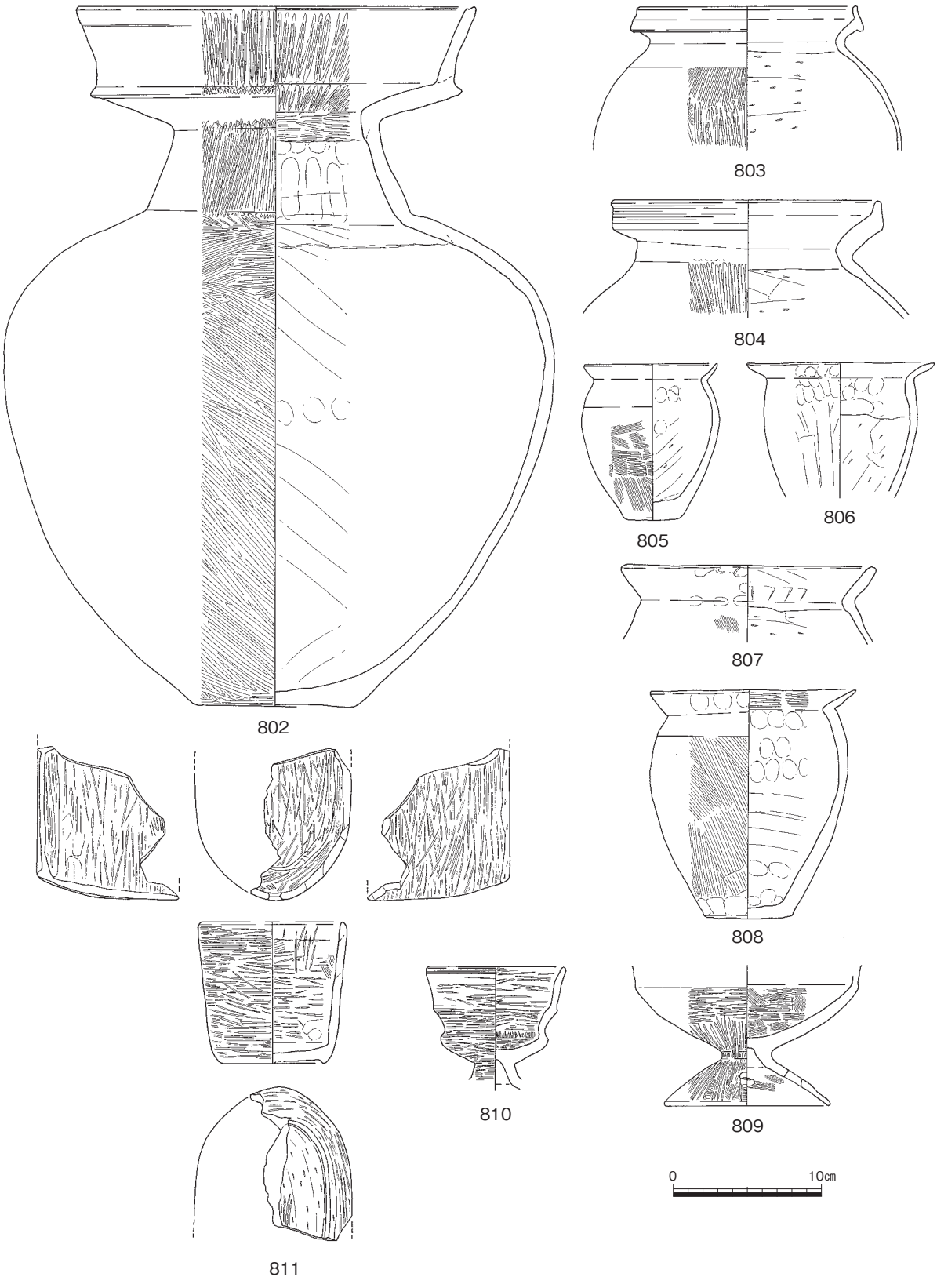


1　褐灰色(10YR4/1)細砂～粗砂
2　褐灰色(10YR4/1)細砂
　（にぶい黄橙色(10YR6/4)焼土混）
3　灰黄褐色(10YR4/2)細砂
4　灰黄褐色(10YR4/2)細砂（炭多含）
5　にぶい黄褐色(10YR5/3)細砂
6　黒褐色(10YR3/2)細～粗砂（炭多含）
7　褐灰色(10YR5/1)細～粗砂
8　褐灰色（10YR4/1）細砂
9　灰黄褐色（10YR5/2）細砂〈貼り床〉



第107図　竪穴住居43（1/60）・出土遺物（1/4・1/3）

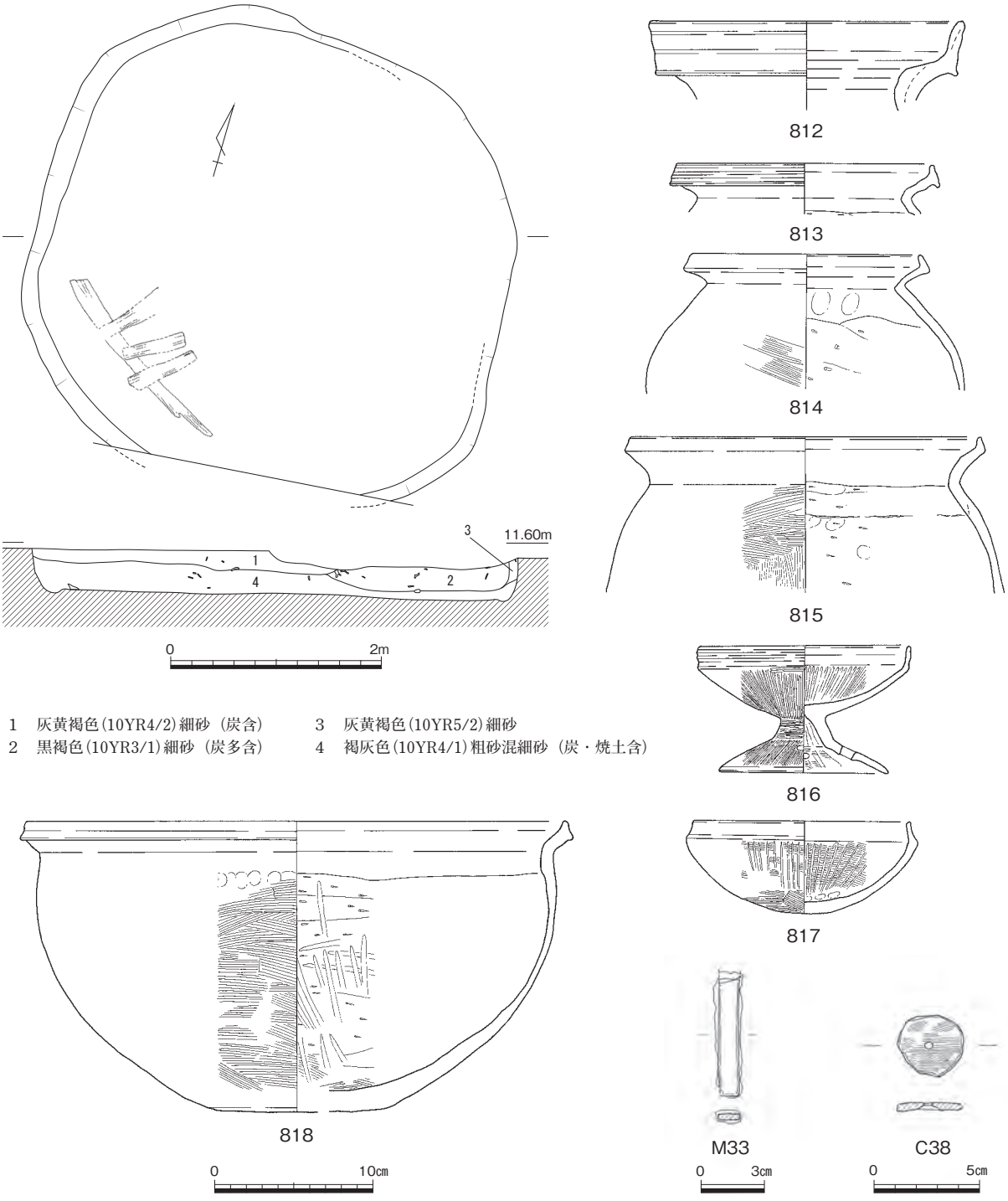
キを施し、底面はヘラケズリで、高台が付く。木製品を写した精製品であろう。出土土器の特徴などから、弥・後・Ⅳの時期に比定できる。（松尾）



第108図　竪穴住居43出土遺物（1/4）

竪穴住居44（第13・109図、図版15－１・81・117）

Ｇ18南西寄りに位置する。南側辺の一部が調査用の側溝により削平されているものの、平面形は隅丸方形を呈し、長軸450㎝、短軸は推定420㎝を測る。壁体溝は平面では確認できていないが、断面図を観察すると幅15㎝・深さ３㎝程度のくぼみが観察できることから、周囲に壁体溝が巡っていた可能性は高い。埋土はいずれの層位にも炭が含まれ、竪穴住居南端で炭化材がまとまって出土しており、焼失住居と思われる。ただし調査状況が悪く、絶えず水が湧き出てくる状態であったため、炭化材等の出土状況については第109図に示しているように、部分的な検出しかできていない。また主柱穴や



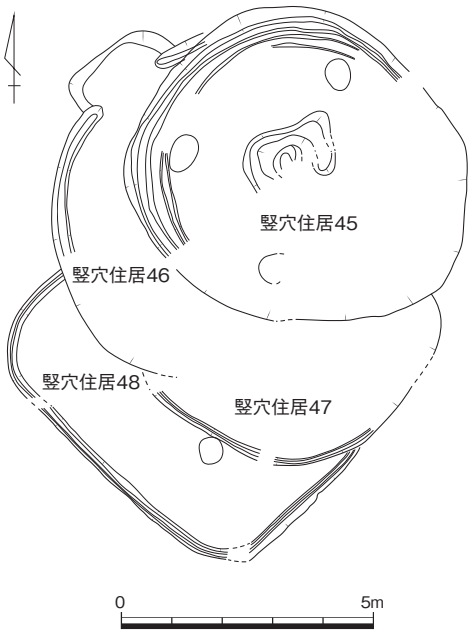
1　灰黄褐色(10YR4/2)細砂（炭含）
2　黒褐色(10YR3/1)細砂（炭多含）
3　灰黄褐色(10YR5/2)細砂
4　褐灰色(10YR4/1)粗砂混細砂（炭・焼土含）

第109図　竪穴住居44（1/60）・出土遺物（1/4・1/3）

中央穴なども確認できなかった。出土遺物はヤリガンナの可能性がある**M33**、円板状土製品**C38**のほか、**812**～**818**の土器が出土した。土器の特徴から、弥・後・Ⅲの時期であろう。　（松尾）

竪穴住居45～48（第13・110図）

竪穴住居44の南東、微高地東端に位置する。竪穴住居45～48の４軒を重複して検出した。周囲の調査状況同様、湧水が激しく十分な調査ができたとは言い難い。以下、重複状況から新しい時期と思われる竪穴住居より順に詳述する。



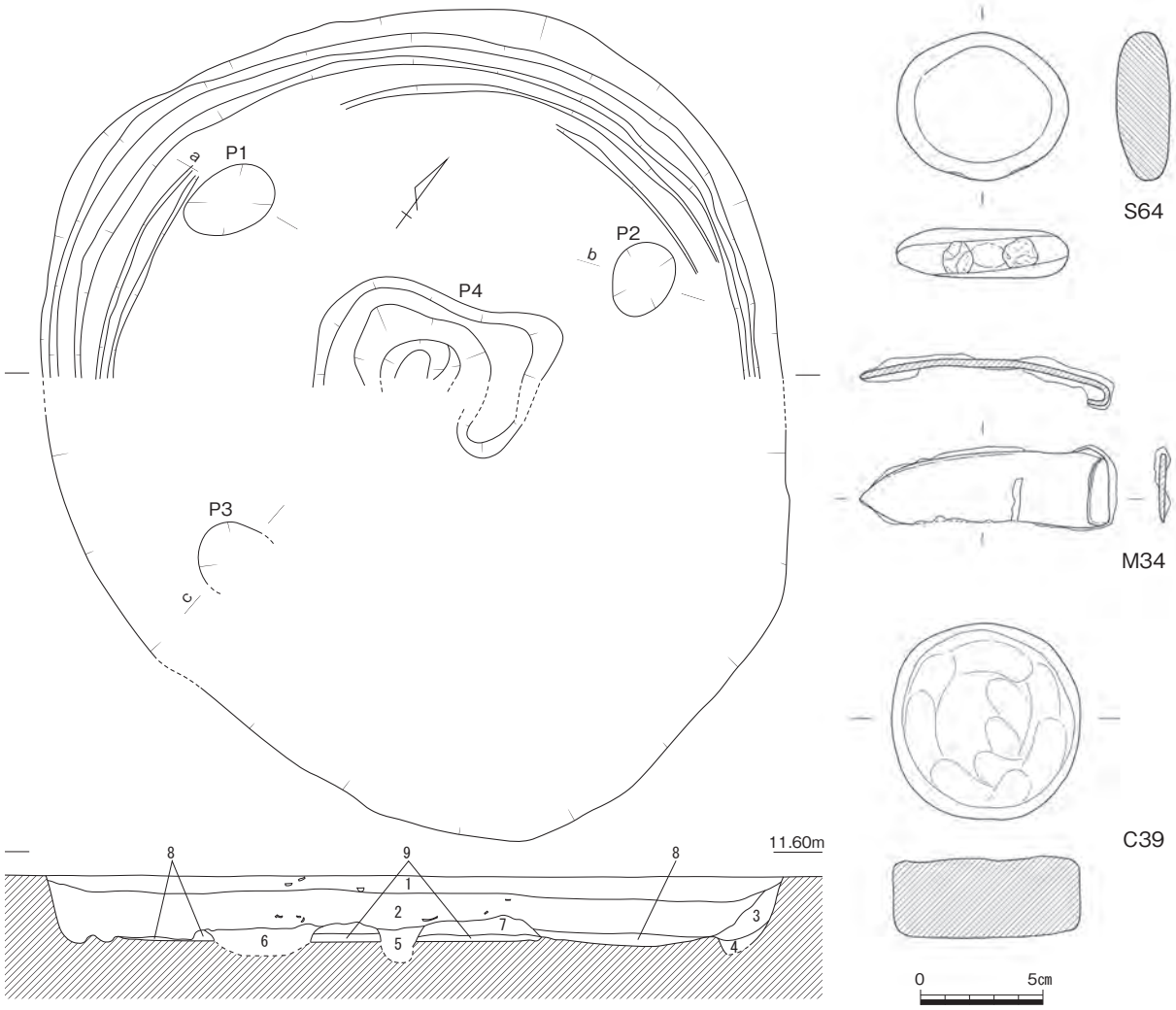
第110図　竪穴住居45～48（1/150）

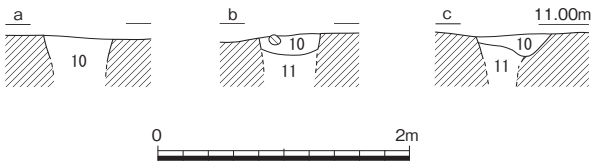
竪穴住居45（第13・110～112図､図版15－２・81・117）

４軒の竪穴住居のうち、重複関係から最も新しい住居である。平面形は不整円形を呈し、長軸672㎝、短軸586㎝を測る。竪穴住居掘り方内面に沿って二重の壁体溝が巡っているが、南東部については湧水のため検出できていない。内側の壁体溝は幅15～25㎝、深さ３㎝程度、外側の壁体溝は幅25～40㎝、深さ８㎝程度を測る。Ｐ１～３は主柱穴で、掘り方の平面形は楕円形を呈し、長軸60～75㎝、短軸55～60㎝を測る。いずれも底面まで確認できていない。本来は４本柱であろう。Ｐ４は中央穴で、平面形は不整円形を呈すると思われ、幅63㎝・深さ30㎝程を測る。南側を除く周囲には幅50～80㎝・高さ10㎝程度の盛土が巡る。盛土は断面図の第７層が相当し、褐灰色粗砂に明黄褐色極細砂（第８層）を若干含んでいた。断面観察によると、Ｐ４中央穴の南西に隣接して幅１ｍの掘り込みが見られ、埋土中には炭層がラミナ状に堆積している。平面的には確認できていないので明確ではないが、中央穴に伴う施設であると思われる。Ｐ４中央穴の盛土下には厚さ５㎝程度の明黄褐色極細砂層（第８層）があり、同じ層がＰ４中央穴盛土の東側において、盛土の上に堆積している。第８層は貼り床であると考えられることから、床面が部分的に新旧二面存在した可能性が高い。これは、壁体溝が二重に巡っていることからも指摘することが可能であり、内側の壁体溝とＰ１・２との間隔が狭いことから、外側の壁体溝とＰ１～３主柱穴の組み合わせにより拡張を伴う住居の建て替えが行われたと考えたい。出土遺物は石英安山岩製敲石**S64**、埋土第１層から鉄鎌**M34**と不明土製品**C39**、土器**819**～**823**がある。**819**・**820**は「く」字状口縁の甕。**821**は口縁を上に拡張する二重口縁甕。**822**は口縁部が広がり、短い脚柱部、「ハ」字に広がる裾部には４方向に円孔が配置される。**823**は底部に穿孔がある鉢。土器の特徴から弥・後・Ⅲ～Ⅳの時期であると思われる。　（松尾）

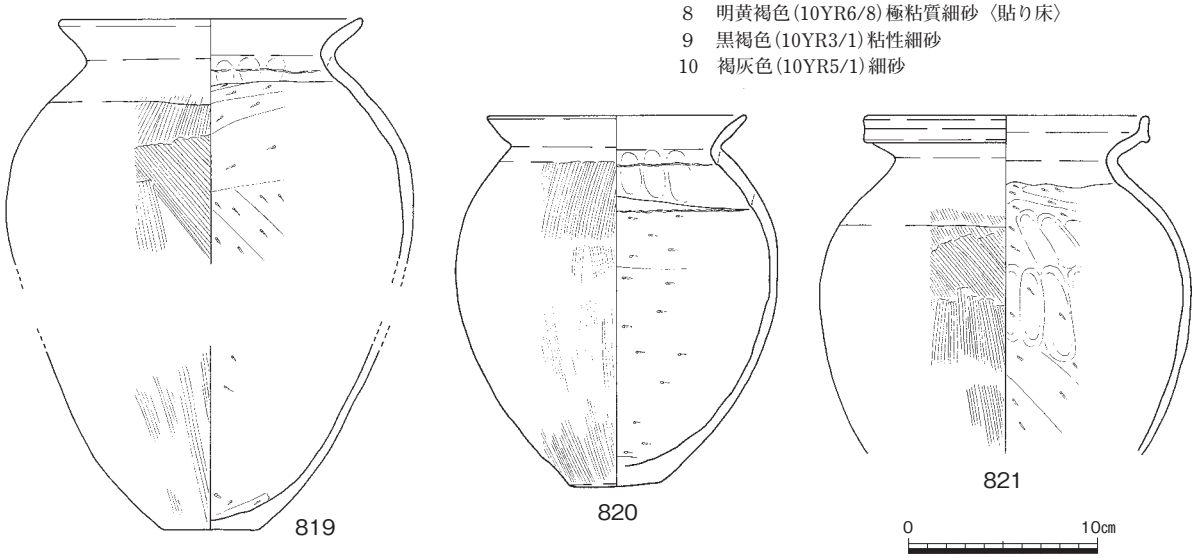
竪穴住居46（第13・110・113図、図版15－３）

竪穴住居45から南西に約２ｍずれた位置に所在する。大部分が竪穴住居45により削平を受けており、南東部は調査の都合上確認できていない。平面形は推定直径660㎝を測る円形を呈すると思われるが、北西の一部分に平面形が長方形を呈する張り出し部を有する。この張り出し部は長軸214㎝×短軸70㎝を測り、当初竪穴住居46とは別遺構である可能性を考えながら調査を行った。調査の結果、張り出し部と竪穴住居の埋土を通した断面から特に新旧関係が見受けられないこと、張り出し部の前面で壁体溝が途切れること、張り出し部の底面と床面の標高がほぼ同じ高さであること、張り出し部





1　黒褐色(7.5YR3/2)細～粗砂
2　黒褐色(7.5YR3/1)細砂
3　黒褐色(7.5YR3/1)細～粗砂（にぶい黄褐色(10YR5/4)混）
4　黒褐色(7.5YR2/2)極細砂
5　黒褐色(10YR3/1)細～粗砂
6　黒褐色(10YR3/2)細砂
　（明黄褐色(10YR6/8)混、炭層ラミナ状混）
7　褐灰色(7.5YR4/1)粗砂（明黄褐色(10YR6/8)混）
8　明黄褐色(10YR6/8)極粘質細砂〈貼り床〉
9　黒褐色(10YR3/1)粘性細砂
10　褐灰色(10YR5/1)細砂

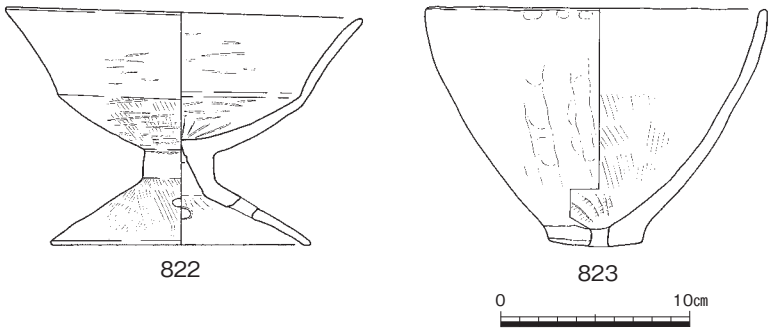


第111図　竪穴住居45（1/60）・出土遺物①（1/4・1/3）

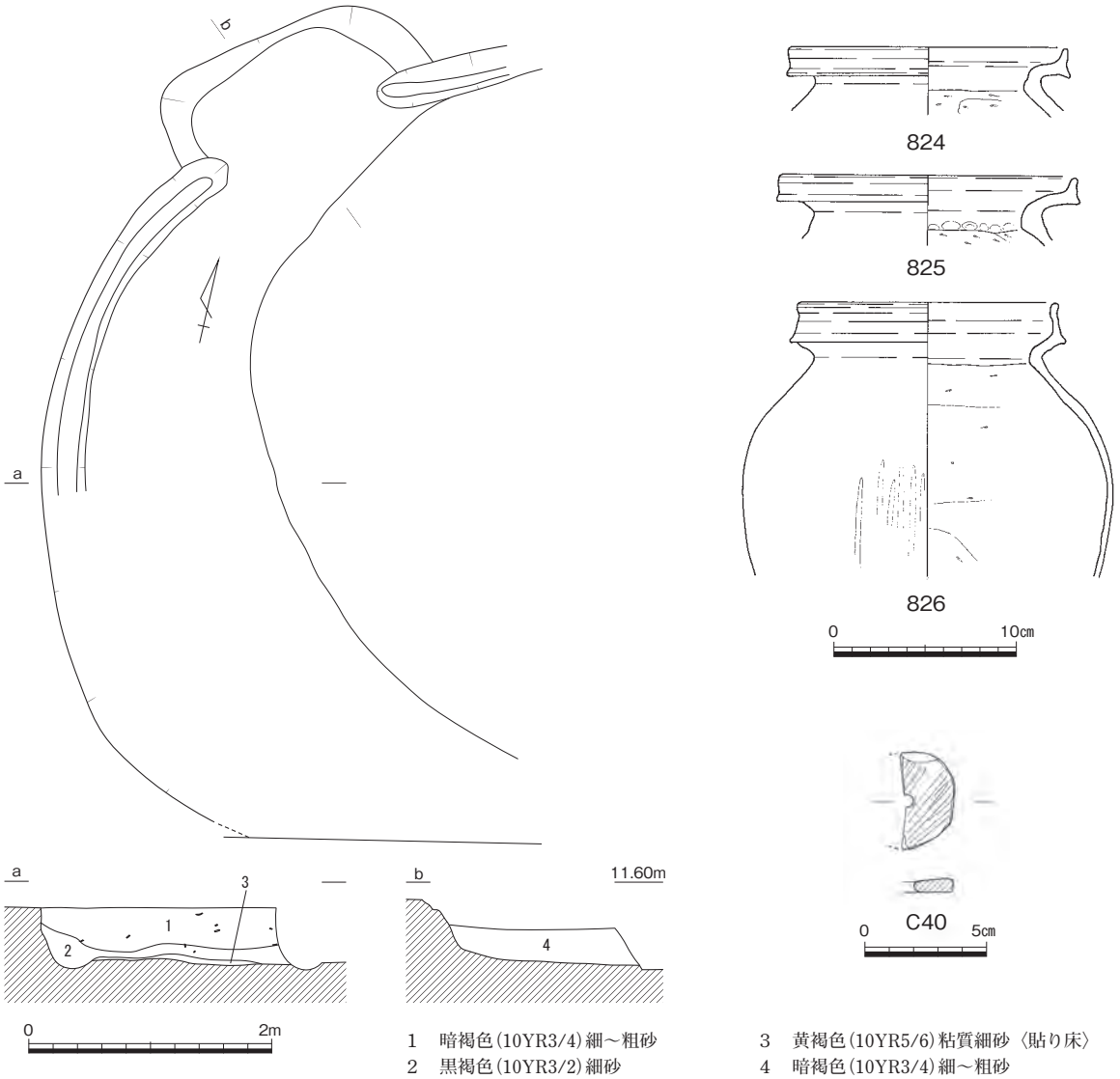
の底面標高が竪穴住居外に向かって徐々に高くなること、などの理由により竪穴住居の付属施設であるとの結論に達した。張り出し部の機能については明らかでないが、調査の状況からは竪穴住居の出入り口である可能性が最も高いと思われる。そのほか、竪穴住居内部施設については、竪穴住居45の影響もあり不明点が多いものの、竪穴住居掘り方内面に沿って幅30㎝、深さ５㎝程度の壁体溝が巡り、埋土第３層黄褐色粘質細砂である貼り床土が床面の一部に認められることを確認した。

出土遺物は甕824～826、円板状土製品C40などがある。土器の特徴などから、弥・後・Ⅲであろう。

（松尾）



第112図　竪穴住居45出土遺物②（1/4）

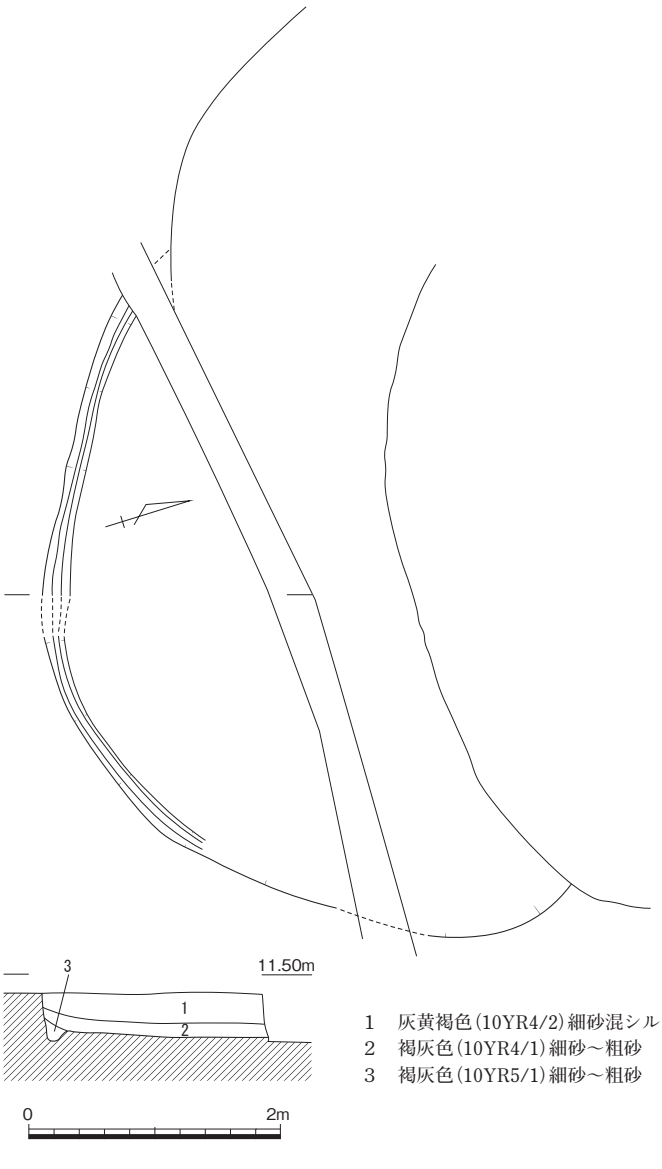


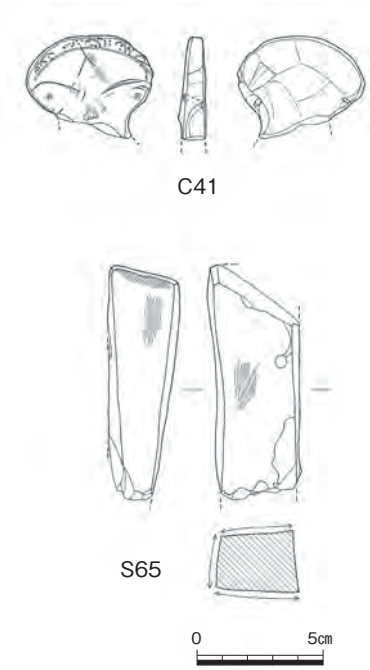
1　暗褐色(10YR3/4)細～粗砂
2　黒褐色(10YR3/2)細砂
3　黄褐色(10YR5/6)粘質細砂〈貼り床〉
4　暗褐色(10YR3/4)細～粗砂

第113図　竪穴住居46（1/60）・出土遺物（1/4・1/3）

竪穴住居47（第13・110・114図、図版15－３・111・115）

竪穴住居45・46の南に位置する。北側の大部分が竪穴住居45・46により削平を受けている。平面形は隅丸方形を呈すると思われ、推定で長軸500㎝、短軸450㎝を測る。竪穴住居掘り方内面に沿って幅20㎝、深さ５㎝の壁体溝を一部確認しているが、本来は全周しているものと想定される。主柱穴や中央穴などは確認できていない。遺物としては、土器の細片や流紋岩製砥石**S65**のほか、床面直上から分銅形土製品**C41**が出土している。分銅形土製品**C41**は上半部のみ残存。眉・目・鼻と思われる顔面表現が明瞭で、縁に施文された刺突文や篦描き文・眉・鼻の部分には赤色顔料が残っていた。出土した土器の細片や調査状況から、弥・後・Ⅲと推察される。（松尾）





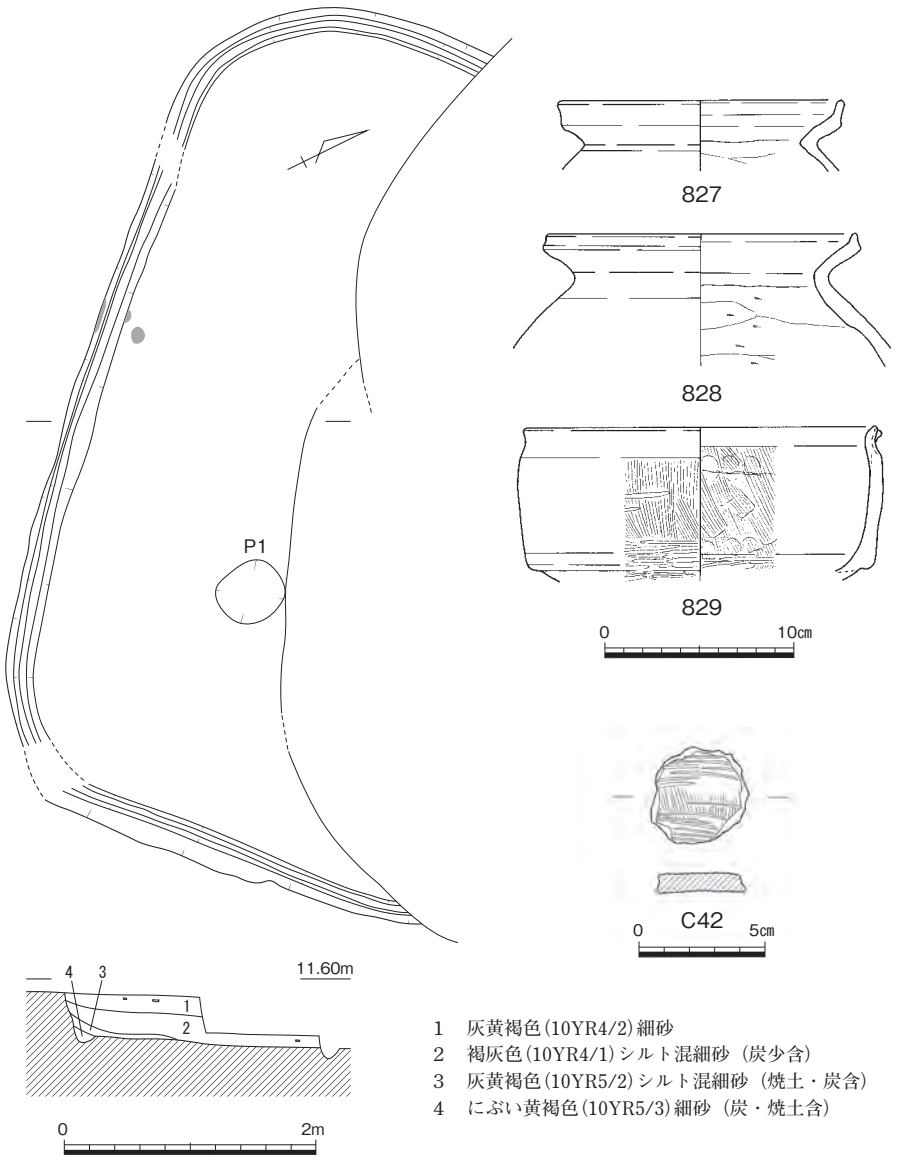
第114図　竪穴住居47（1/60）・出土遺物（1/3）

竪穴住居48（第13・110・115図、図版15－３・117）

竪穴住居46・47の南西側に位置し、北東側の大部分が竪穴住居46・47により削平を受けている。竪穴住居45～48のうち、重複関係から最も古い竪穴住居であると言える。平面形は隅丸方形を呈するものと思われ、長軸685㎝、短軸は残存長で188㎝を測る。掘り方の内側を沿うように幅約25㎝、深さ３㎝程度の壁体溝が巡る。南西側の壁体溝中央やや北西寄りでは、床面や壁の一部に焼土が認められた。埋土の第１層を含むすべての層には炭や焼土が含まれていることから、その一部が残存したものと思われる。床面ではＰ１を確認している。掘り方の平面形は隅丸方形を呈し、一辺約50㎝を測る。深

さについては湧水のため確認できていない。

出土遺物は土器827～829、円板状土製品C42を図示している。827・828は甕で、口縁端部を上方に立ち上げている827や口縁端部をつまみ上げている828がある。827・828ともに体部内面は横方向のヘラケズリ。829は体部外面が荒いタテハケのち横方向のヘラミガキ、体部内面はタテハケのち下半のみ横方向のヘラミガキが行われている。手焙り形土器の可能性も考えられるが、覆部との接合痕跡などが見受けられないことから、鉢として報告しておきたい。土器の特徴などから、弥・後・Ⅲに該当するものと思われる。（松尾）

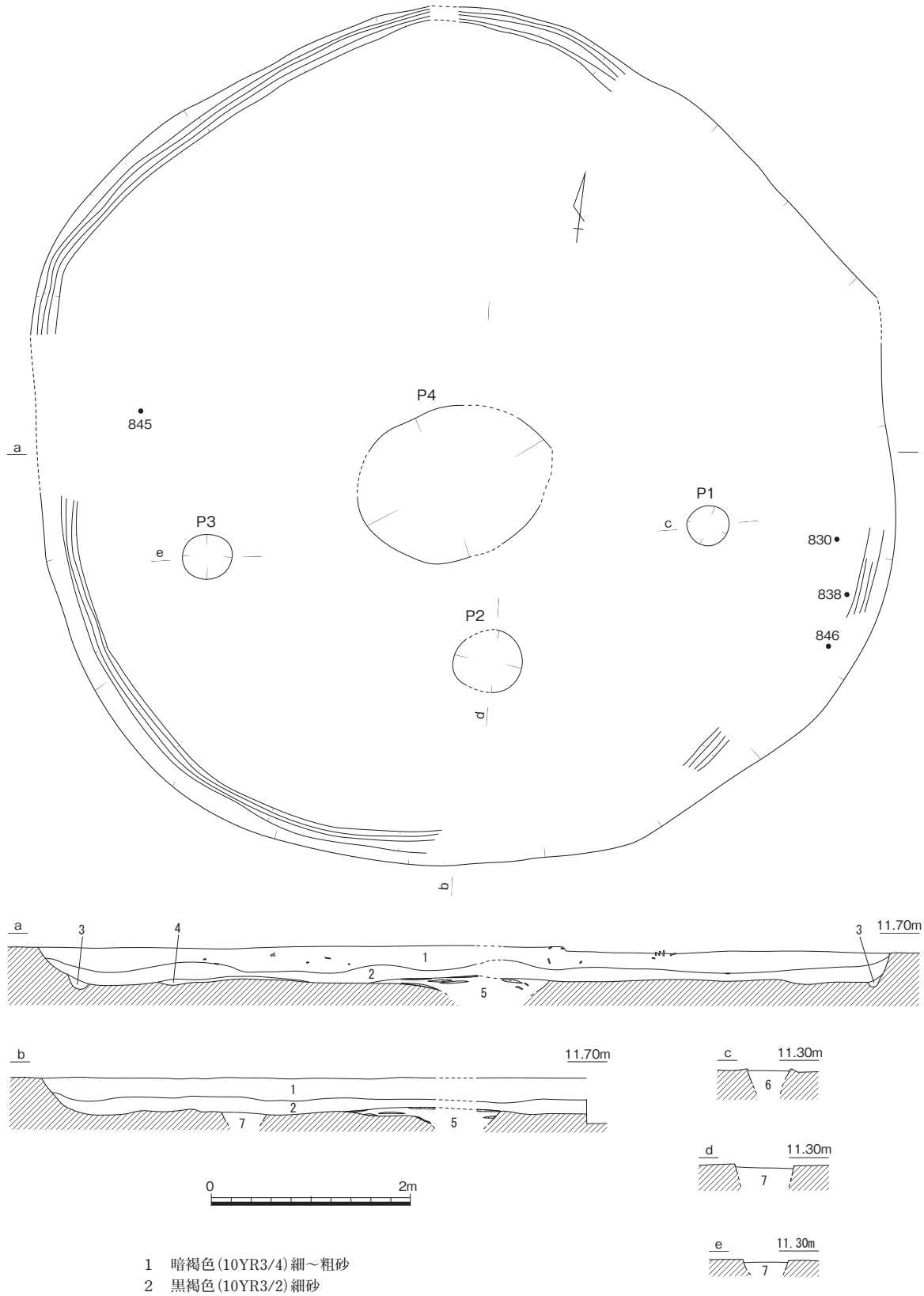


第115図　竪穴住居48（1/60）・出土遺物（1/4・1/3）

竪穴住居49（第13・116・117図、図版16－１・82）

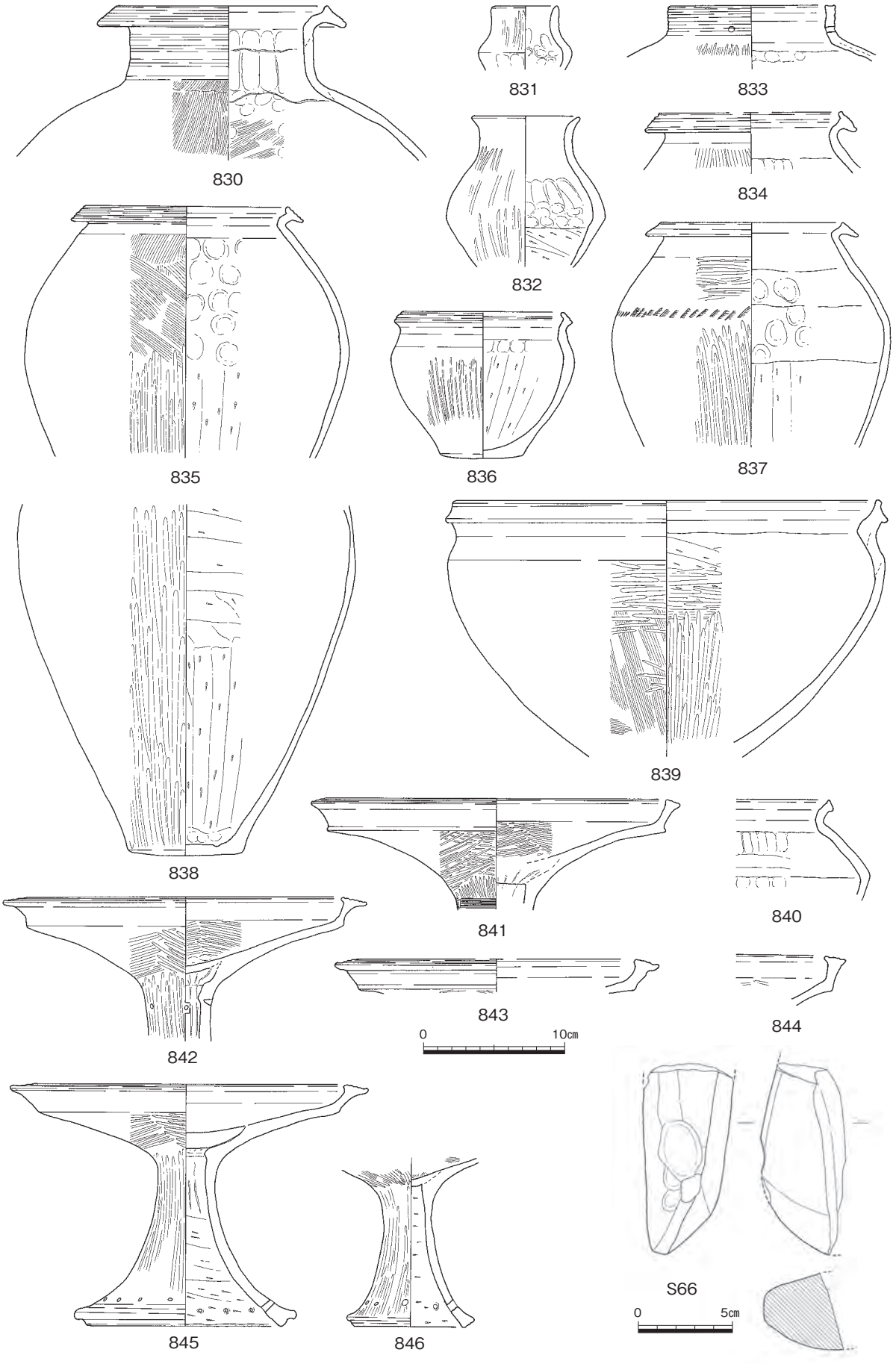
竪穴住居48の西約10ｍに位置する。平面形は不整円形で、直径860㎝を測る。西半部の壁際には幅15㎝前後、深さ10㎝前後の壁体溝が巡る。東半部は一部しか確認できていないが、壁体溝は全周するものと思われる。検出面からの深さは30㎝を測る。第４層は黄褐色粘質細砂で、西側の一部の床面直上に厚さ３㎝ほど堆積していることから貼り床と考えられる。主柱穴は北半部で３本検出しており、位置から類推すると本来は６本柱と想定される。柱穴は直径40～60㎝程の円形を呈する。湧水が激しく底面まで掘り下げることはできなかった。Ｐ５は断面で確認しただけであるが、竪穴住居のほぼ中央に位置しており、中央穴と考えられる。長径約２ｍの楕円形で、埋土には多量の炭が含まれていた。

壺830～832、短頸壺833、甕834・835、鉢836～840、高杯841～846、石斧Ｓ66などが出土している。口縁部を上下に拡張させる壺、甕は凹線文が巡る。内面のヘラケズリは胴部中位から肩部付近まで及ぶようである。高杯は口縁部がやや外傾して立ち上がり、端部は拡張して平坦面を作り凹線文を巡らしている。安山岩製石斧Ｓ66は、太型蛤刃石斧と考えられる。時期は弥・後・Ⅰである。（森本）

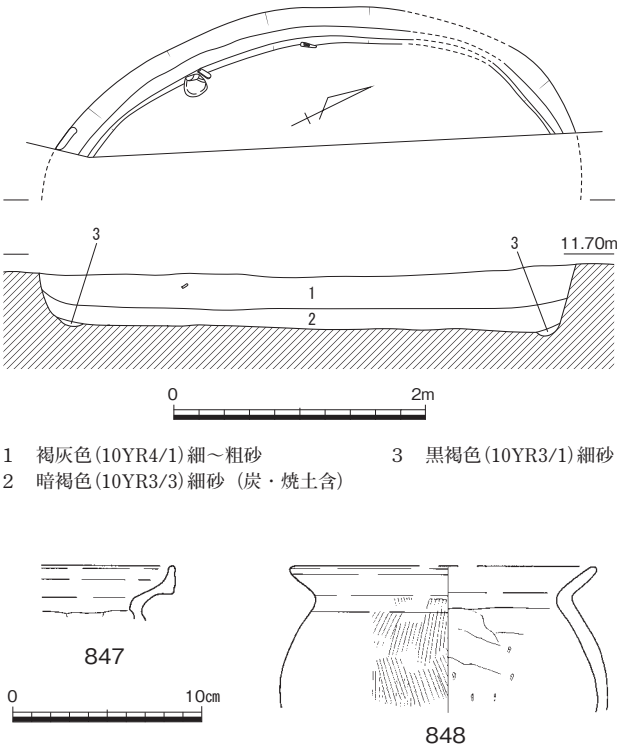


1　暗褐色(10YR3/4)細～粗砂
2　黒褐色(10YR3/2)細砂
3　黒褐色(10YR3/1)粘質細砂
4　黄褐色(10YR5/6)粘質細砂〈貼り床〉
5　灰黄褐色(10YR5/2)細砂（炭多含）
6　黒褐色(10YR3/2)細砂
7　褐灰色(10YR4/1)細砂

第116図　竪穴住居49（1/60）

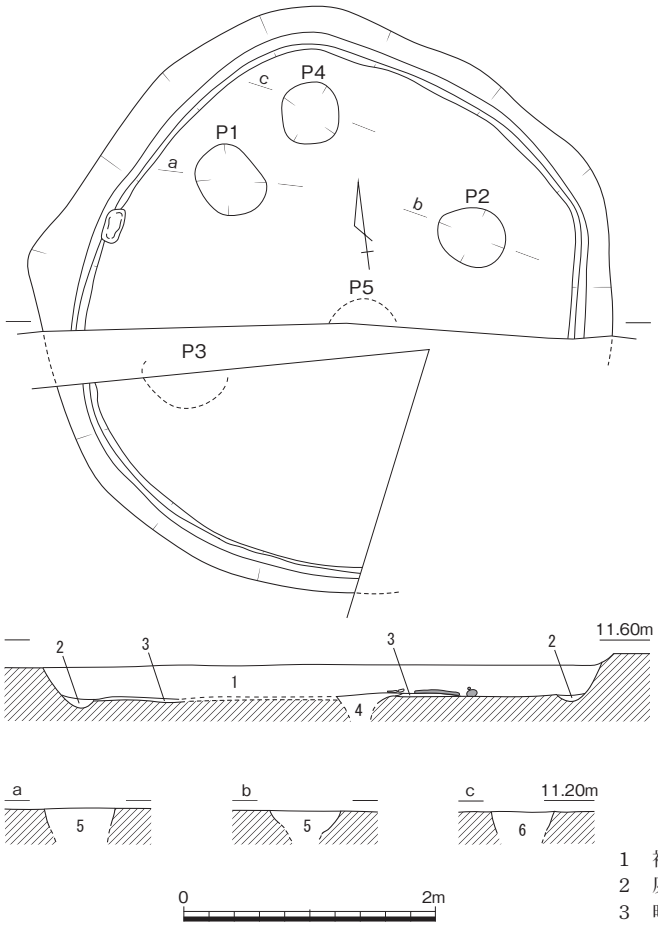


第117図　竪穴住居49出土遺物（1/4・1/3）



1　褐灰色(10YR4/1)細～粗砂　　3　黒褐色(10YR3/1)細砂
2　暗褐色(10YR3/3)細砂（炭・焼土含）

第118図　竪穴住居50（1/60）・出土遺物（1/4）



1　褐灰色(10YR4/1)細～粗砂　　4　暗褐色(10YR3/4)細砂
2　灰黄褐色(10YR4/2)細砂　　5　黄褐色(10YR5/6)粘質細砂
3　暗褐色(10YR3/3)粘質細砂　　6　灰黄褐色(10YR6/2)粘質細砂

第119図　竪穴住居51（1/60）

竪穴住居50（第13・118図、図版16－２）

Ｈ19中央やや西寄りに位置し、大部分が調査区外となる。平面形は推定直径４ｍを測る円形を呈する可能性が高い。竪穴住居掘り方内面に沿って幅30㎝、深さ５㎝の壁体溝が巡る。床面直上には、壁体溝の内側ラインに沿って自然石や炭化材が部分的に認められる。また南端の掘り方法面にへばりつくように焼土塊が残っていた。

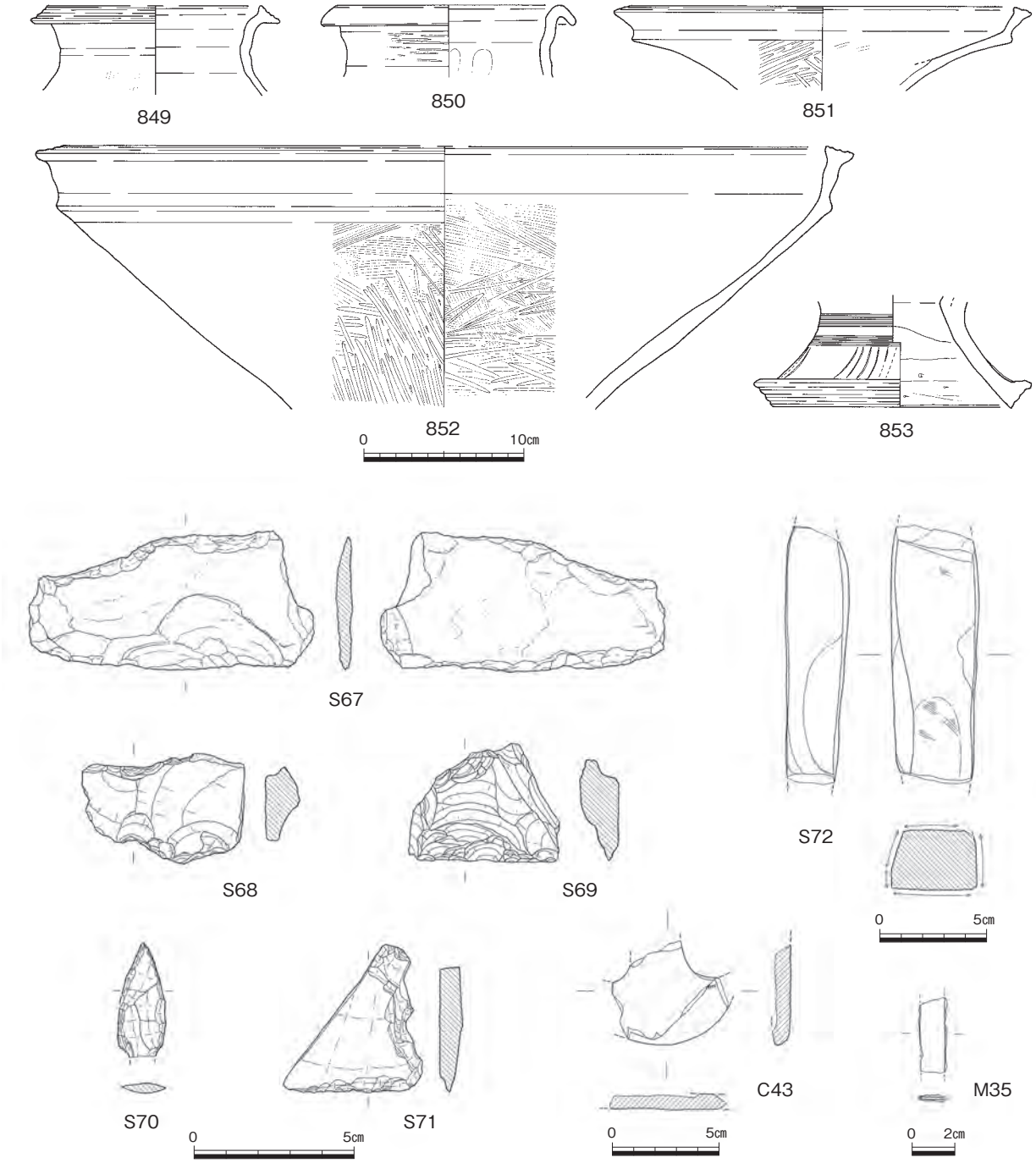
出土遺物は甕**847**・**848**がある。**847**は口縁端部を上方に立ち上げ二重口縁となる。**848**は「く」字状の口縁で、体部はタテハケ、内面は斜め方向あるいはタテ方向のヘラケズリ。土器の特徴から弥・後・Ⅲの時期に比定できる。　（松尾）

竪穴住居51（第13・119・120図、図版16－３・107・111）

Ｈ19で、竪穴住居45～48の東、微高地の東端に位置する。調査の都合上、南東の一角については調査できていないものの平面形は不整円形を呈し、長軸460㎝、短軸442㎝を測る。竪穴住居掘り方の内面に沿って、幅20～40㎝、深さ５㎝程度の壁体溝が巡る。住居西側の壁体溝内側に図示しているのは自然石である。埋土第３層は貼り床で、床面直上には中央穴Ｐ５に伴うと思われる炭層や焼土塊が認められた。竪穴住居内ではＰ１～５を確認し、そのうちＰ１～３が主柱穴である。未確認ではあるが本来は４本柱であろう。いずれの柱穴も掘り方が直径50㎝程度の不整円形を呈し、湧水のため底面まで確認できなかった。前述の中央穴Ｐ５

は、平面的に確認できていないものの、断面での観察によると幅約50㎝であることが分かる。なお中央穴Ｐ５の底面についても、他のピット同様湧水のため確認には至らなかった。

出土遺物は比較的多く、土器849～853、石器Ｓ67～Ｓ72、土製品Ｃ43、鉄製品Ｍ35がある。849・850は壺で、849の口縁端部は上下に拡張し、上面には凹線が施される。851は高杯。852は大形の鉢で、口縁端部上面には凹線が巡り、体部内外面はヨコハケあるいはナナメハケの後にヘラミガキが見られる。853は台付鉢の脚部。Ｓ67は粘板岩ホルンフェルス製の石包丁。Ｓ68～Ｓ71はサヌカイト製で、Ｓ68・Ｓ69は楔形石器。Ｓ70は石鏃。Ｓ71は打製石包丁であろうか。Ｓ72は流紋岩製の砥石。不明鉄製品Ｍ35は、主柱穴の一つＰ１からの出土。土器の特徴から弥・後・Ⅰの時期であろう。（松尾）



第120図　竪穴住居51出土遺物（1/4・1/2・1/3）

３　掘立柱建物

掘立柱建物１（第12・121図、図版29－１）

Ｊ07北半、微高地北西端に立地する。東辺は造成により削平されているが、３×２間の側柱建物と想定される。検出面の標高は12.30～12.40ｍである。柱穴は径50㎝前後の不整円形で、深さ10～20㎝、底面の標高12.20～12.30ｍである。Ｐ４が特に小さいが、土坑46に上部を削平されたためである。

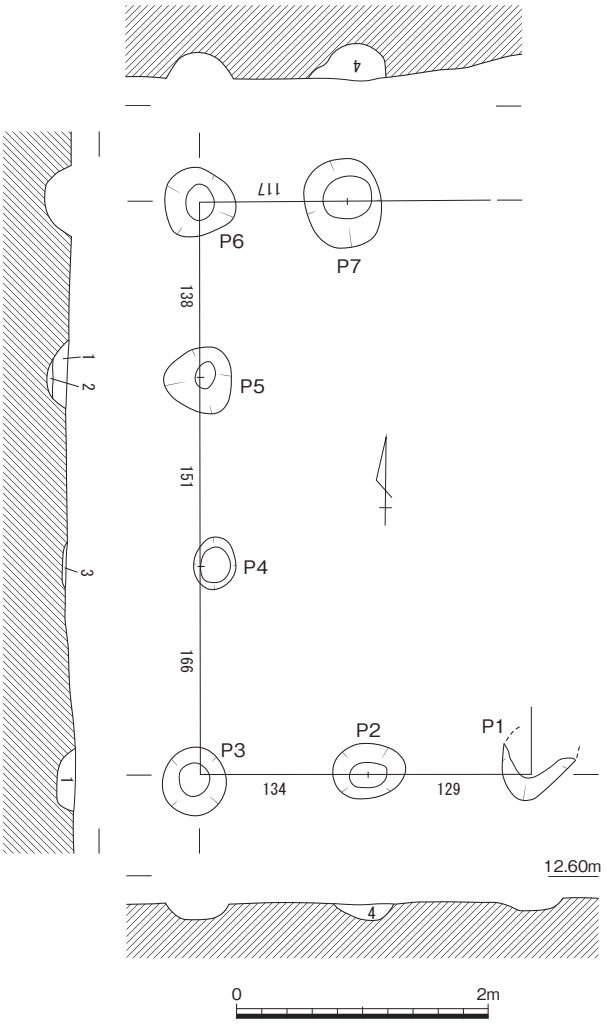
出土遺物は土器のみで、**854・856**はＰ３から、**855**はＰ６から出土した。また、Ｐ７からも中期後葉の土器片が出土した。切り合いから土坑46より古く位置付けられること及び土器の様相から、弥・中・Ⅲと考えられる。竪穴住居６出土土器の古い一群と同時期であり、竪穴住居６と有機的な関係にあったと推察される。（渡邉）

掘立柱建物２（第12・122図、図版29－２）

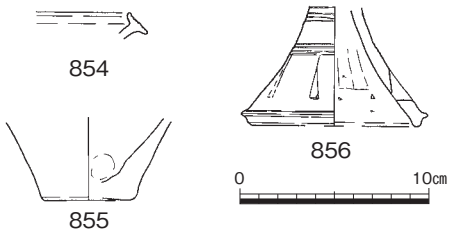
掘立柱建物１から東へ約10ｍ離れた平坦地に位置する。水田化された際の削平が著しい地点で、検出面の標高は12.10ｍ、底面の標高は11.40～11.60ｍである。検出面では掘立柱建物１との比高が30㎝以上あるが、残存する深さからみて、本来の高さよりあまり削平を受けていない可能性もある。平面プランは１×１間で、柱穴は掘立柱建物１より一回り大きく、径70㎝を測る。また深さも55～65㎝と深く、底面も比較的平坦でしっかりした柱穴である。

Ｐ２～４から土器が出土しているが、中期後葉に比定されるもののみであった。**857**はＰ４から、**S73**はＰ１から出土した。**S73**はサヌカイト製の打製石包丁で、使用により刃部片面（第122図左側）が著しく摩滅し、コーングロスが観察できた。

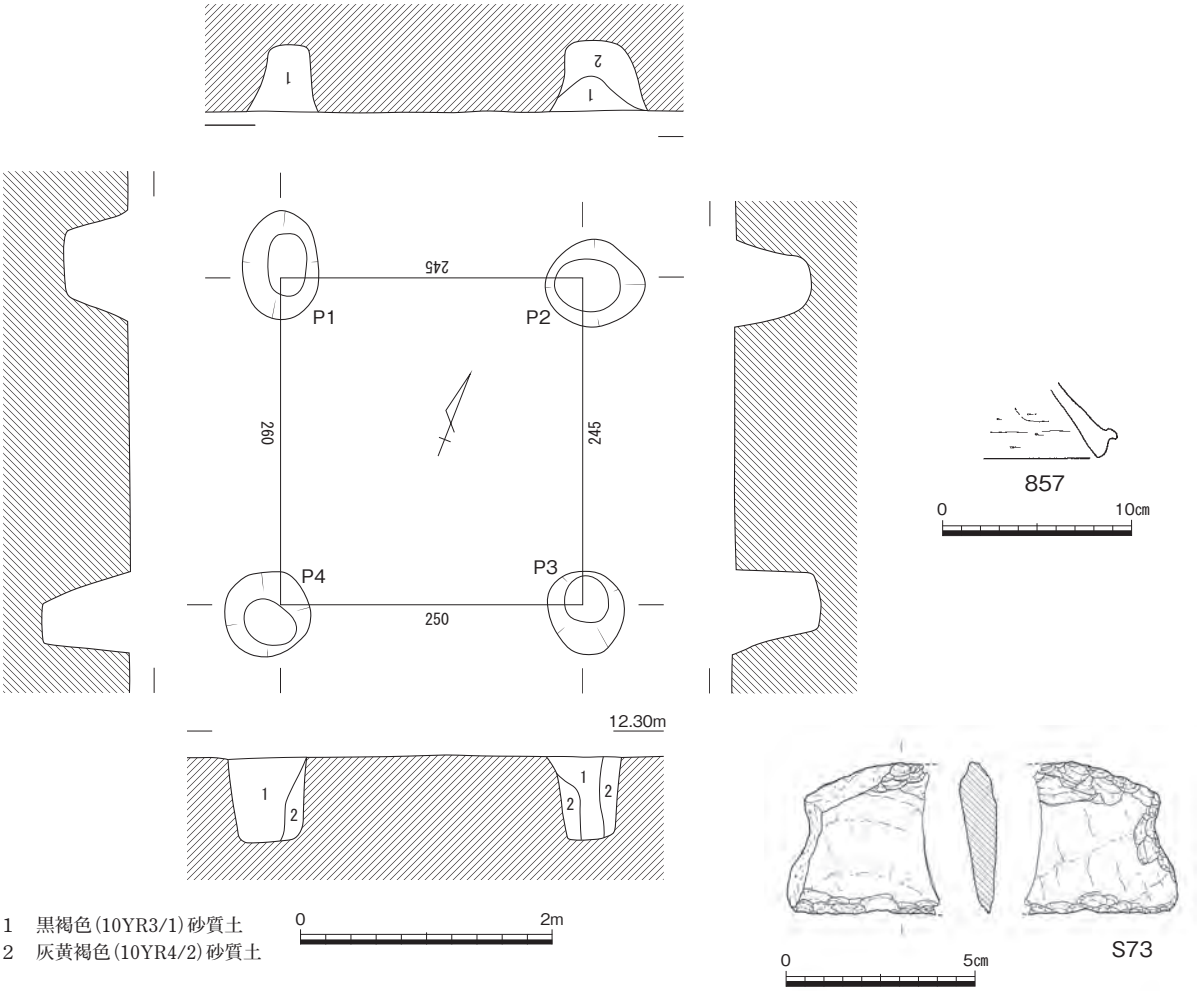
時期は弥・中・Ⅲで、掘立柱建物１と併存していた可能性が高く、平面プランや柱穴規模の違いは時期差に起因するのではなく、機能の違いを示唆すると推察される。（渡邉）



1　黒褐色(10YR3/1)粘性砂質土（黄褐色土粒多含）
2　灰黄褐色(10YR4/2)砂質土
3　にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土
4　灰黄褐色(10YR4/2)粘性砂質土



第121図　掘立柱建物１（1/60）・出土遺物（1/4）



1　黒褐色(10YR3/1)砂質土
2　灰黄褐色(10YR4/2)砂質土

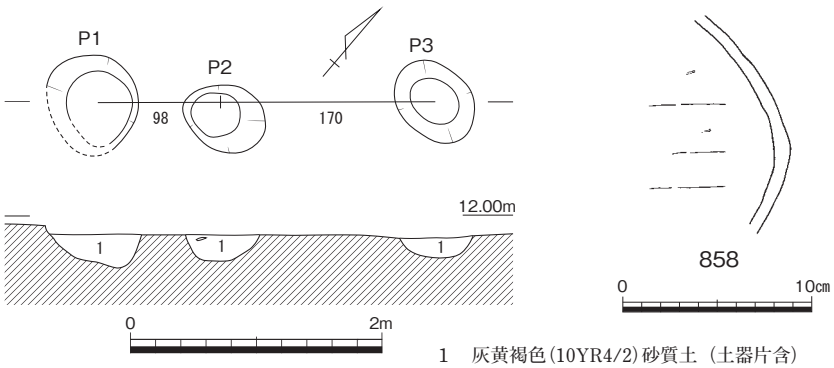
第122図　掘立柱建物２（1/60）・出土遺物（1/4・1/2）

４　柱穴列

柱穴列１（第12・123図、図版35－１）

Ｈ10の中央から南東寄り、竪穴住居26の東約２ｍに位置している。規模は２間で、全長は268㎝を測る。柱間距離は、Ｐ１－Ｐ２間が98㎝で、Ｐ２－Ｐ３間は170㎝と広い。柱穴の平面形はいずれも不整な円形を呈しており、長径は約70㎝となる。Ｐ１～３の埋土から土器片が出土しているが、いずれも細片で、図示できたのはＰ２から出土した壺**858**のみである。**858**は胴部の破片で器壁は厚く、内面は横方向のヘラケズリを施している。

時期は、弥生時代後期後半の範疇と考えられる。　（石田）



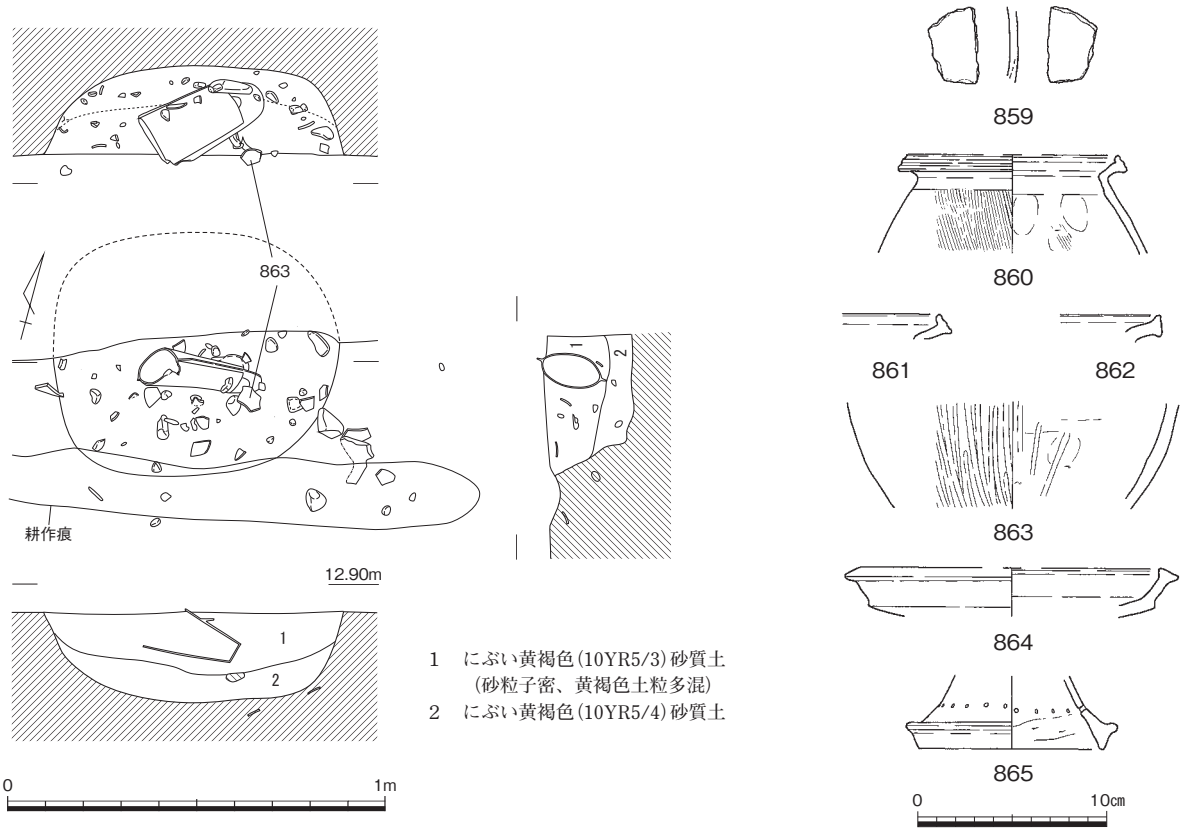
1　灰黄褐色(10YR4/2)砂質土（土器片含）

第123図　柱穴列１（1/60）・出土遺物（1/4）

５．銅鐸埋納坑

銅鐸埋納坑（巻頭図版３～５、第12・124～129図、図版37－１～５・112・113、写真19・20）

銅鐸埋納坑はＪ06北西角、旧２区南西部に位置する。Ｊ05～07南半は調査範囲のうち最も高所にあたる。調査前の現況は畑地として利用されていた高まりで、埋納坑真南の調査区外には果樹が植えられていた。一方、北側は一段下がり、水田が広がる。高まり周辺の状況を第125図に、東西断面を第126図に、南北断面を第127図に示す。斜面部は大きく掘削され、等高線も部分的にしか計測していないが、ある程度旧地形を反映していると考えられる。第127図ｂ断面にみる遺構検出面標高は、高まりにあたる南端で12.80ｍ、水田化された低地にあたる北端で12.00ｍである。このような状況から、埋納坑周辺は南から北へ張り出した微高地の先端にあたり、高まり上の遺構検出状況から、居住域の一角であったと考えられる。旧２区の発掘調査は現道を境に大きく東西に分け、さらにその西半をおおよそａ断面を境に南北に分け、北側から着手した。当時、銅鐸はおろか埋納坑に気付かぬまま調査区境に東西方向のトレンチ（側溝）を設けたため、結果として埋納坑北半部分を削平してしまった。銅鐸埋納坑の存在を認識したのは、西半北側調査終了後、西半南側の表土を重機で掘削してからである。表土掘削直後には銅鐸の一端が地表に露出しており、何らかの青銅製品が出土したことは認識したが、周辺径約20㎝の範囲が銅イオンの湧出により黒ずんだ状況で、この部分を柱穴と誤認してしまった。表土直下では弥生時代だけでなく古墳時代や近世に至るまでの遺構が同一面で観察されていたため、古墳時代以降の柱穴であろうと思い調査を始めたが、ここに至って銅鐸と気付き、直ちに調査を中断して関係諸機関に連絡を取り、埋蔵文化財保護調査指導会並びに難波洋三氏や吉田広氏の指導を仰ぎながら進めることとなった。

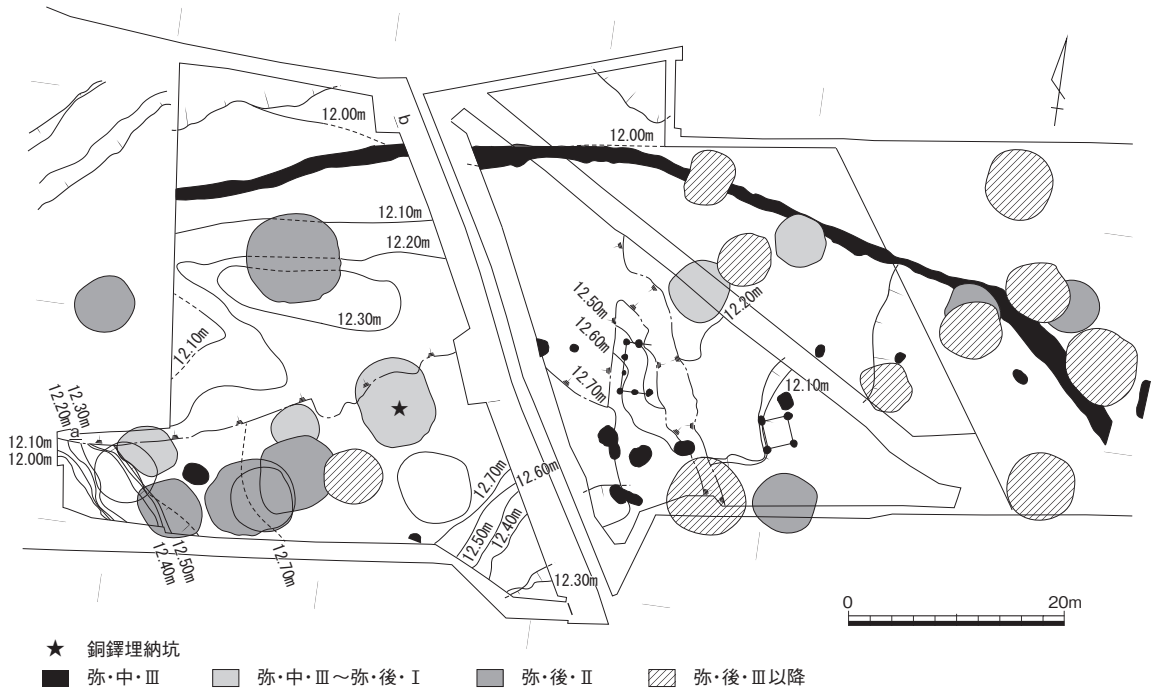


第124図　銅鐸埋納坑（1/20）・出土遺物（1/4）

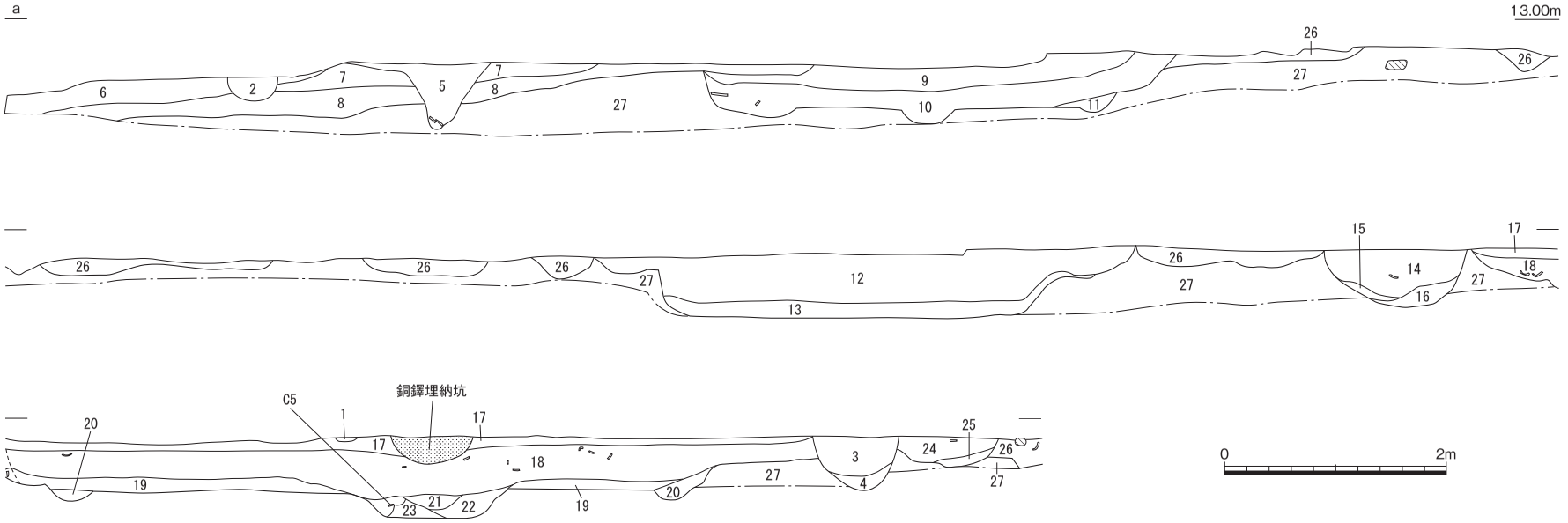
埋納坑は、竪穴住居６が弥生時代後期前半に埋没した後、そのほぼ中央に、埋土を切って掘り込まれていた。検出面の標高は12.84ｍを測る。上面には上部に堆積した耕作土がまばらに残り、攪拌された状態であった。竪穴住居埋土と埋納坑埋土に明瞭な差は無く、プランの認定には検討を重ね、慎重を期した。また、断面においても埋納坑内外を貫いて褐色の縞模様が観察され、プランの特定は困難を極めた。この縞模様は埋納坑の立地する高まり周辺のみで観察された状況で、今後の検証が可能となるよう、岡山大学新納泉氏の御助言により、埋納坑を含めた堆積状況の高解像度画像撮影を実施した(巻頭図版３－１)。同様の現象が総社市八紘古墳群で確認され、倉敷市立自然史博物館武知泰史氏にリーゼガング現象に起因するとの教唆を受けていたので（『岡山県埋蔵文化財報告』233　岡山県教育委員会2011)、同氏に現地視察を依頼したところ、リーゼガング現象の可能性があり、雨水や地下水の影響でも起こりうる自然現象との所見であった。埋土の蛍光Ｘ線分析でも、埋土の化学的組成に差が認められず、埋蔵環境に起因するとの結果を得ている（第５章第３節)。

坑内の調査には細心の注意を払い、銅鐸を中心に大きく４分割し、ブロック毎に土壌を採取しながら進めた。出土遺物や石はできうる限り位置を記録し、土器についてはすべて番号を付けて取り上げた。第124図上段は見通しの断面図であり、平面図には高低差関係なく出土した土器を図示した。また、埋納坑上部の攪拌を示すものとして中世以降と思われる東西方向の耕作痕も示した。

埋納坑の規模は、先行した北側の調査により北半を消失したが、遺存部分で東西長77㎝、南北長37㎝、検出面からの深さ26㎝を測る。銅鐸を中心とすると南北長64㎝に復元され、この場合、本来は長短にあまり差がない楕円形を呈していたと想定できる。断面は、やや平坦な底面から緩く湾曲して上方に開く椀形を呈す。銅鐸が坑底に接地していない点、第２層が第１層に比べて色調がやや暗く砂の粒子が粗い点、坑内に小礫と土器片が多く含まれているが、第１層と第２層の間に比較的多くかんでいた点から埋土を２層に分けた。銅鐸は鰭が直立した状態で出土したが、鐸身はＡ面が南、Ｂ面が北を向き、鈕は東側であった。埋納坑底面の標高は12.58ｍ、銅鐸接地面の標高は東側で12.64ｍ、西側



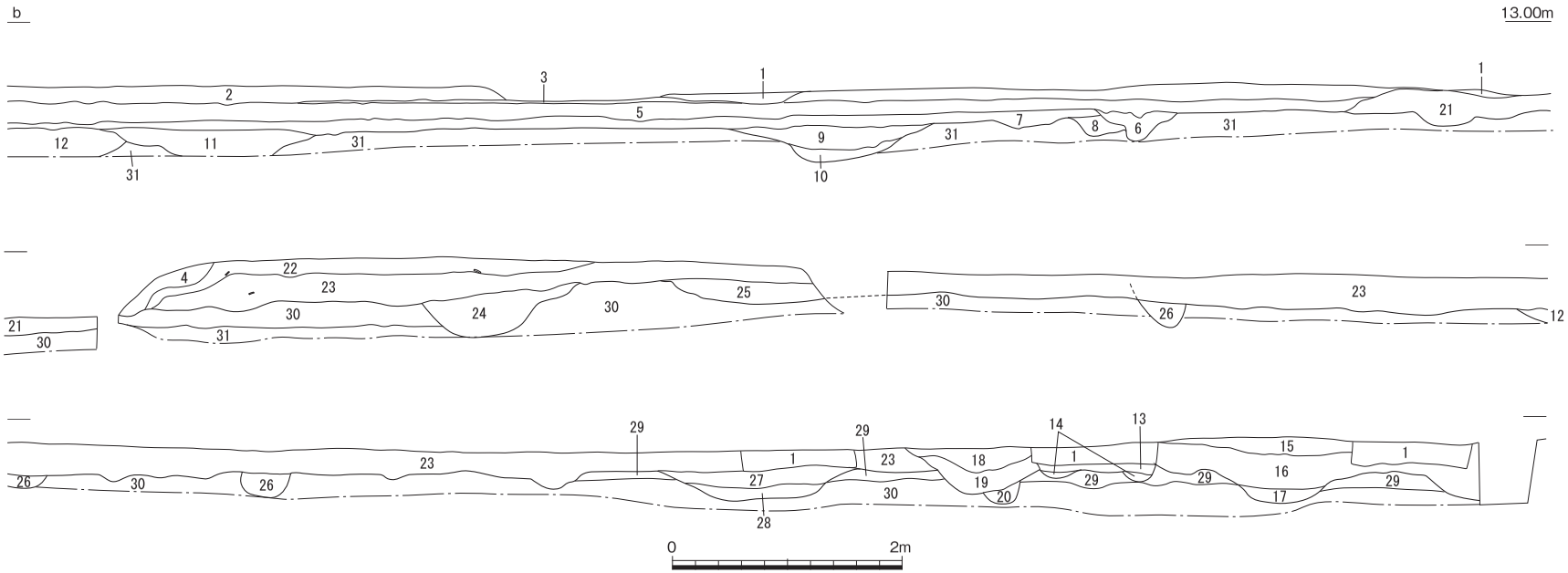
第125図　銅鐸埋納坑周辺の地形（1/700）



1　灰黄褐色(10YR5/2)粘性砂質土
2　黄褐色(2.5Y5/3)砂質土〈溝15〉
3　暗褐色(10YR3/4)砂質土〈溝16〉
4　暗褐色(10YR3/3)粘性粗砂〈溝16〉
5　にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土
6　暗褐色(10YR3/4)弱粘性砂質土（礫含）〈河道５〉
7　暗褐色(10YR3/3)砂質土〈河道５〉
8　暗褐色(10YR4/3)粘性粗砂〈河道２〉
9　暗褐色(10YR3/4)砂質土〈竪穴住居２〉
10　褐色(10YR4/4)粘性粗砂〈竪穴住居２〉
11　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性粗砂〈竪穴住居２〉
12　暗褐色(10YR3/3)砂質土〈竪穴住居10〉
13　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性粗砂〈竪穴住居10〉
14　暗褐色(10YR3/3)砂質土〈土坑10〉
15　暗褐色(10YR3/4)粘性粗砂〈土坑10〉
16　暗褐色(10YR3/4)粗砂〈土坑10〉
17　暗褐色(10YR3/3)砂質土〈竪穴住居６〉
18　暗褐色(10YR3/4)砂質土〈竪穴住居６〉
19　暗褐色(10YR3/4)粘性粗砂
　　(暗褐色(10YR3/4)粗砂土塊混)〈竪穴住居６〉
20　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性粗砂〈竪穴住居６〉
21　暗褐色(10YR3/4)粗砂〈住６〉
22　にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土〈竪穴住居６〉
23　にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土（粗砂混）〈竪穴住居６〉
24　にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土〈溝４〉
25　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性粗砂〈溝４〉
26　暗褐色(10YR3/4)砂質土
27　にぶい黄橙色(10YR6/4)粗砂

第126図　銅鐸埋納坑周辺堆積状況①（1/60）

写真19　微高地東西ａ断面（北西から）

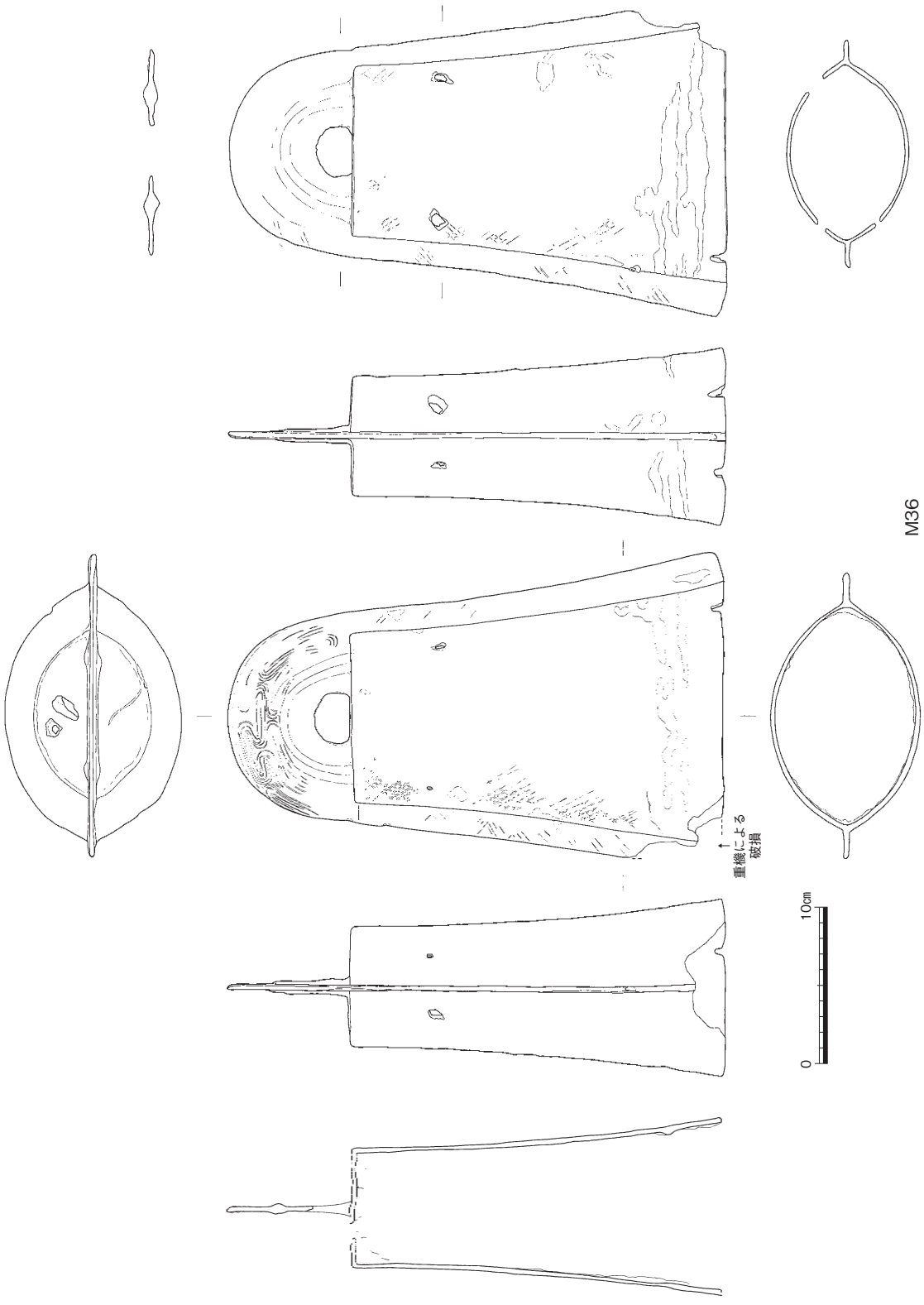


1　造成土
2　黄灰色(2.5Y5/1)土
3　褐灰色(10YR5/2)土
4　褐灰色(10YR5/1)粘性砂質土
5　灰黄色(2.5Y6/2)土
6　黄灰色(2.5Y6/1)粗砂〈溝38〉
7　暗灰黄色(2.5Y4/2)粘性粗砂
8　灰黄褐色(10YR4/2)粘性粗砂
9　灰黄色(2.5Y6/2)粘性砂質土
10　黄灰色(2.5Y6/1)粘性粗砂
11　灰黄褐色(10YR4/2)粘性細砂
12　灰黄褐色(10YR5/2)粘性細砂
13　黒褐色(10YR3/1)粘性砂質土（黄褐色土粒含）
14　灰黄褐色(10YR4/2)粘性砂質土
15　にぶい黄褐色(10YR5/4)粘性砂質土（土器少）
16　黒褐色(10YR3/2)粘性砂質土（土器多）
17　黒褐色(10YR3/1)粘性砂質土（黄褐色土粒多含）
18　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性砂質土（土器少）
19　黒褐色(10YR3/2)粘性砂質土（黄褐色土粒含）
20　暗褐色(10YR2/3)粘性砂質土（黄褐色土粒少含）
21　灰黄褐色(10YR4/2)粘性粗砂質土（土器少含）
22　にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土
23　褐灰色(10YR4/1)砂質土
24　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性砂質土〈溝３〉
25　黄褐色(10YR4/3)砂質土
26　黒褐色(10YR3/2)粘性砂質土
27　暗褐色(10YR3/3)粘性砂質土
28　にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土（黄褐色土粒少含、礫混）
29　にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土
30　砂礫
31　灰黄褐色(10YR5/2)粗砂

第127図　銅鐸埋納坑周辺堆積状況②（1/60）

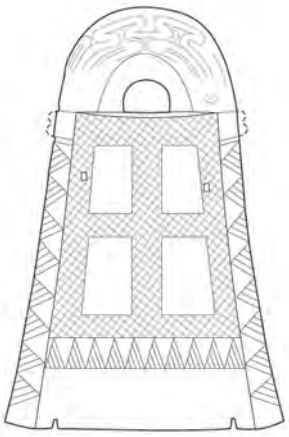
写真20　銅鐸埋納坑調査風景（北から）

で12.72ｍと紐側が沈んでいたが、第２層上面にほぼ対応する。鰭もやや北側に傾いていたが、埋土に砂が多く脆弱なため、土圧と自重で傾いた可能性が考えられる。鰭を垂直方向に立てた埋納姿勢は岡山市高塚遺跡（『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』150　岡山県教育委員会　2000）や井原市明見遺跡（『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』23　岡山県教育委員会　1993）でも確認されているが、両遺跡とも埋納坑埋土は２層に分かれ、銅鐸は底より浮いた状態で出土している。



第128図　銅鐸（1/4）

このような３者に共通する状況から、まず坑内に土を置き、鰭を立てた状態で下層の土に鰭を差し込むように横たえ、埋めていった手順が想起される。銅鐸の姿勢を保持するための支持具や銅鐸を保護する布・箱の痕跡、被覆粘土等は認められなかった。銅鐸は内部に土が入ったまま取り上げ、内部の土の除去及びクリーニングについて奈良文化財研究所に御尽力いただいた。内部の土の状況について除去前にＸ線による観察を行ったが、自然流入土と考えられる。なお、銅鐸が全容を現した段階で岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの御協力により三次元計測を実施し、完掘後に再度三次元計測を行い、立体剝ぎ取りを実施した。



第129図　銅鐸模式図

銅鐸は、重機により鰭と鐸身下端の一部を欠いたが、完形であった。全高31.6㎝と小型の部類で、難波洋三氏により扁平鈕式古段階の四区袈裟襷文銅鐸に比定されている。難波氏から多くの教示を得たが、氏が第６章第２節に詳述されているので、ここでは概略を述べるにとどめる。教示を元にＡ面の復元模式図を作成し、第129図に示した。飾耳はＡ面左側に切り落とされた痕跡があり、本来は左右１対有していたと考えられる。鐸身上部の型持孔は錆ですべて塞がっており、本来の形状をとどめていない。Ｘ線写真では、Ａ面左側が最も大きく、長２㎝程度の不整楕円形を呈していた。裾部の型持孔はＡ面左側は破損のため未確認であるが、Ｂ面右側は破損部の下端が緩やかな弧を描いており、型持孔の痕跡とみなされる。舞上部ではＡ面側に無く、Ｂ面側に大小２孔あった。小は湯回り不良による欠孔と考えられる。Ｘ線ＣＴでもＡ面側には確認できず、鋳上がり時点から塞がっていたようである。内面突帯も土で覆われ全形が把握できないが、幅５㎜、高さ１～４㎜程度の断面蒲鉾形で、難波氏から使用による摩滅が指摘されている。

文様は、銅鐸表面が錆と泥で覆われ、特に北に傾いて下側になっていたＢ面には土がこびりつき、ほとんど見えなかった。土や錆と共に器壁が剥落し、ネガティブとなっていた部分もある。Ａ面鈕に施された流水文が本銅鐸の最大の特徴に挙げられるが、Ｂ面は鈕外縁部に鰭部から続く鋸歯文帯とその界線がかすかに認められるのみであった。難波氏によると、石製鋳型で製造されたため元々文様が不鮮明なうえ、内面突帯の摩滅から長期間にわたる使用が想定でき、使用により摩滅した可能性もあるとのことである。鋳掛けの痕跡や鋳造欠陥も確認されたが、これについても後節に譲る。なお、橿原考古学研究所のグループにより文様及び形状の三次元計測を実施している（第５章第12節）。

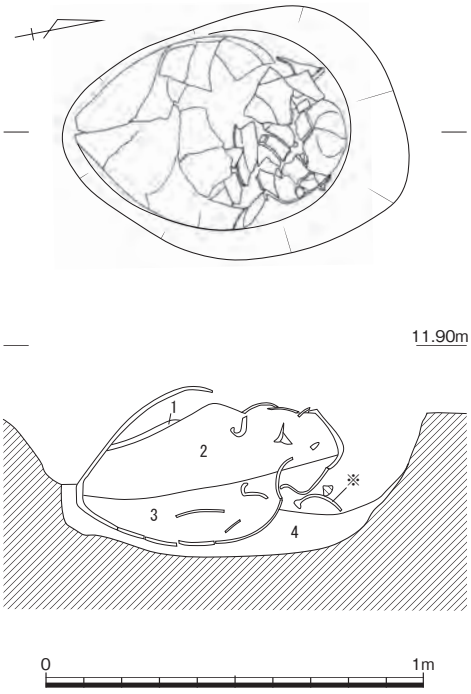
土器のうち、**859**は銅鐸内部から、**863**は埋納坑最上部で出土した。白磁と須恵器細片も埋納坑上部で出土したが、混入と判断した。**859**は４×2.5㎝の細片で天地も不明だが、甕の体部片と思われる。内外面とも平滑で、内面には砂粒のかすかな動きはあるが明瞭なケズリ痕跡は確認できない。薄手で中期後葉の可能性が高い。銅鐸下部から同一個体とみられる破片が出土している。**863**は壺で、胎土に砂粒が多く、明赤褐色を呈する。外面はミガキ、内面はケズリを施し、厚手で、後期に下ると考えられる。２点以外は埋納坑検出のための精査時に出土した土器で、形態から**860**・**861**は弥・中・Ⅲに、**862**・**864**・**865**は弥・後・Ⅰに位置付けられる。ほかはすべて図化し得ない細片で、時期の特定は困難であるが、胎土及び焼成から弥・中・Ⅲ～弥・後・Ⅰに位置付けられ、埋納坑の下部にある竪穴住居６の様相と重なる。このような状況から、埋納坑内の土器は、埋納坑掘削時に竪穴住居６から掘り出された土器が土と共に坑内に再び埋め戻されたものと理解するのが妥当であろう。すなわち、これらの土器からでは埋納の時期を特定できず、弥・後・Ⅰ以降に埋納されたとしか言えない。　（渡邉）

６　土器棺

土器棺１（第11・130～132図、図版38－１・82）

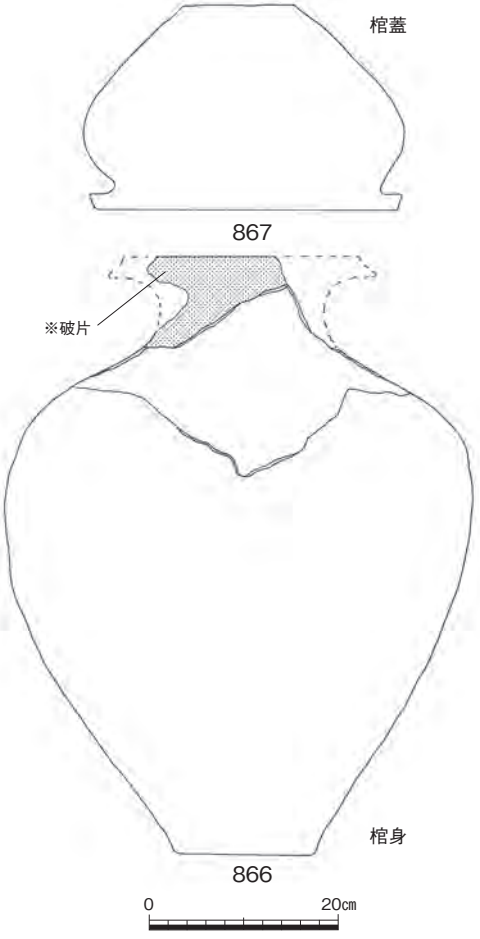
Ｊ04の北西隅に位置する土器棺墓で、河道１の東側４ｍに位置している。神明遺跡全体でも、土器棺の検出はこの１基のみとなる。河道１の東側には弥生時代の集落が立地しており、集落から河道１に向かって緩やかに下っていく地形を呈している。この微高地の西端の下がり際の端所で、土器棺１を検出している。

規模は、掘り方が南北に160㎝以上、検出面からの深さは90㎝を測る。壺を棺身、鉢を棺蓋としており、棺自体の規模は長軸76㎝、短軸53㎝である。掘り方底面から棺身は10㎝浮いた状態のため、第130図の断面図にある第４層の土を入れながら棺を固定させたものと考えられる。また、棺身の壺は復元すると完形となったが、出土状況から第131図にあるように上面部分を大きく打ち欠いたものを使用し、頸部の破片の一部は棺蓋の鉢を支えるために使用していた（第130・131図の※印）。また、壺の破片だけではなく小振りの河原石も用いて棺蓋を保持している。また、保持するのに使用せずに残った他の破片も棺身の中に落ち込む形で出土しているものや、棺蓋の鉢と重なって出土しているものがあることから、鉢とともに蓋をするパーツの一部として利用されたのであろう。このことから、土器棺墓の傍らで完形だった壺を打ち欠いて使用したものと考えられる。また、棺身の壺には第132図にあるように、外面に籠目の痕跡が明瞭に残っている（籠目の痕跡は観察できた状態で図化しているが、

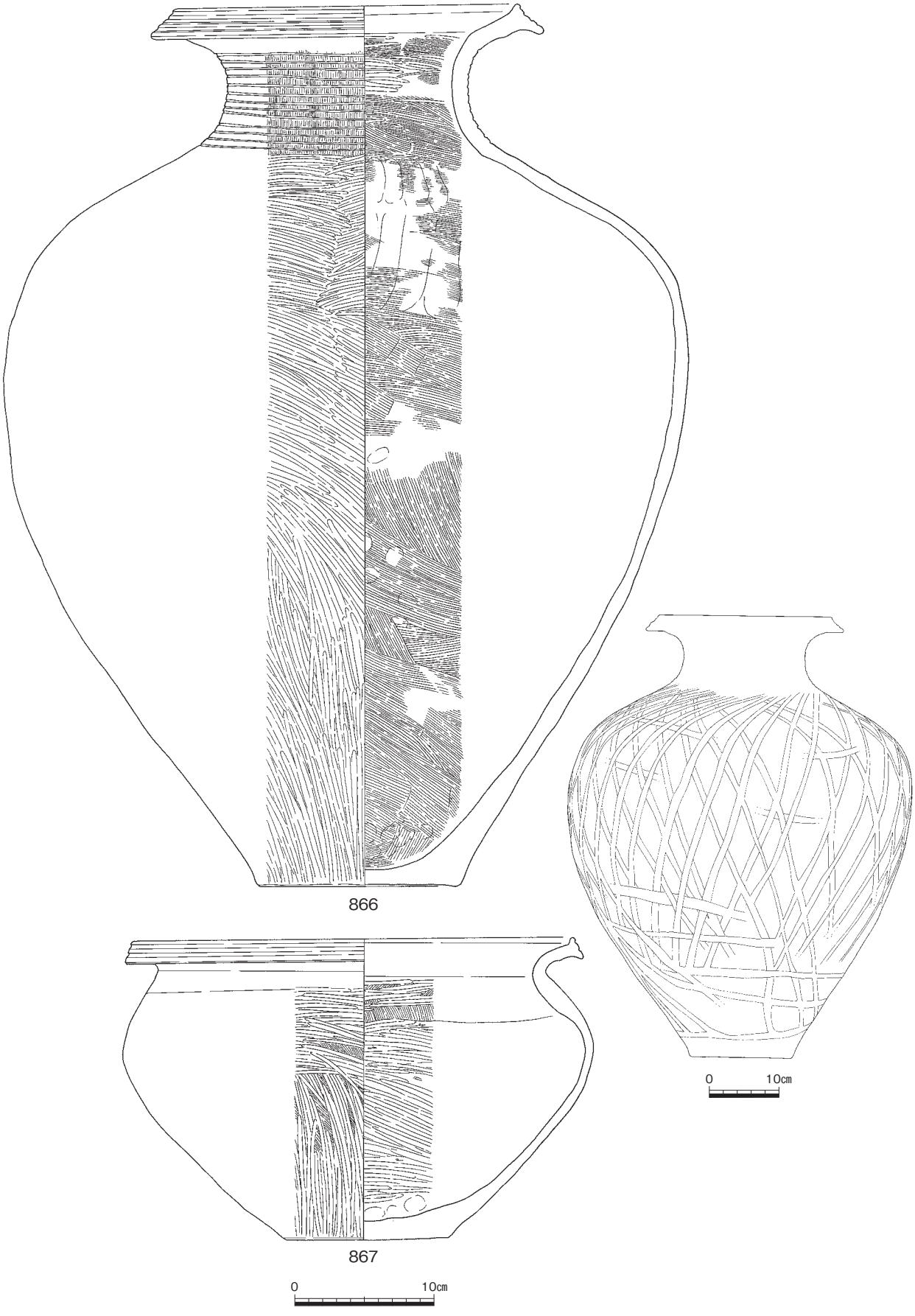


1　褐灰色(7.5YR5/1)粘質土
2　暗褐色(10YR3/4)粗砂
3　暗褐色(10YR3/3)微砂
4　褐灰色(10YR6/1)粘砂質土（暗褐色(10YR3/3)砂質土混）

第130図　土器棺１（1/20）



第131図　土器棺の状況（1/8）



第132図　土器棺１出土遺物（1/4）・壺866外面籠目（1/8）

これは転写された状態であると思われる)。この痕跡から､壺を覆っていた籠ごと埋葬された可能性が考えられる。中身の土については精査を行ったが、歯などは出土していない。棺身・棺蓋ともに内外面の調整が明瞭に残っており、擦れた痕跡なども見られないことから、使用していたものを棺として転用したものではなく、新しい土器を用いたものと考えられる。

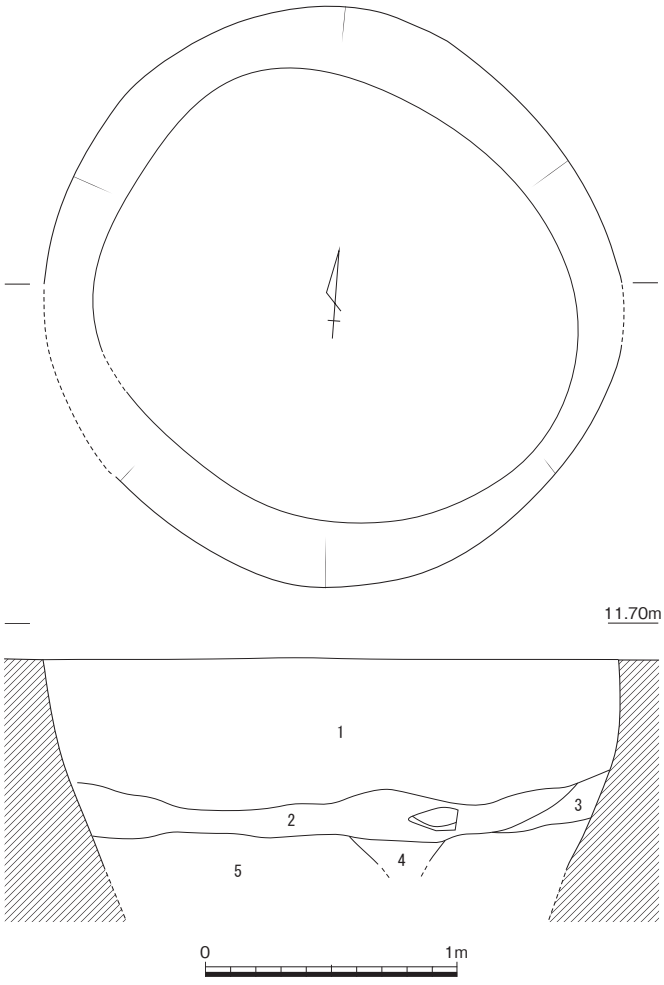
棺に使用された土器は、棺身とされた壺866と、棺蓋とされた壺867である。866の口縁部は下方へ拡張して凹線を施す。外面は縦方向のハケを施したのち、体部全体にミガキを施している。頸部には13条の沈線を巡らせる。頸部は短く、緩やかに開く。内面はハケで全体を調整し、頸部の一部に横方向のミガキを施している。867は口縁部に凹線を施し、内外面にハケ調整後に全面にミガキが見られる。体部最大径は上半にあるが、球形の体部を維持する。この土器から、土器棺１の時期については弥・後・Ⅰの新段階～弥・後・Ⅱの古段階の時期のものであると考えられる。　　(圃)

7　井戸

井戸１（第13・133・134図、図版40－１、写真21）

H13の中央東側、竪穴住居28の西約３ｍに位置する。遺構密度は、この井戸を境にして東側が高くなる。円形を呈し、規模は長径224㎝、短径218㎝を測る。埋土は上層の第１層や第２層が粘質の土で、下層の第５層から下は微砂が続いていた。検出面から約１ｍ掘り下げた標高10.60ｍ付近で湧水が激しくなり、崩落が始まったため、これより下部は調査できなかった。埋土中からは木材片等は検出しておらず、素掘りの井戸であったと思われる。

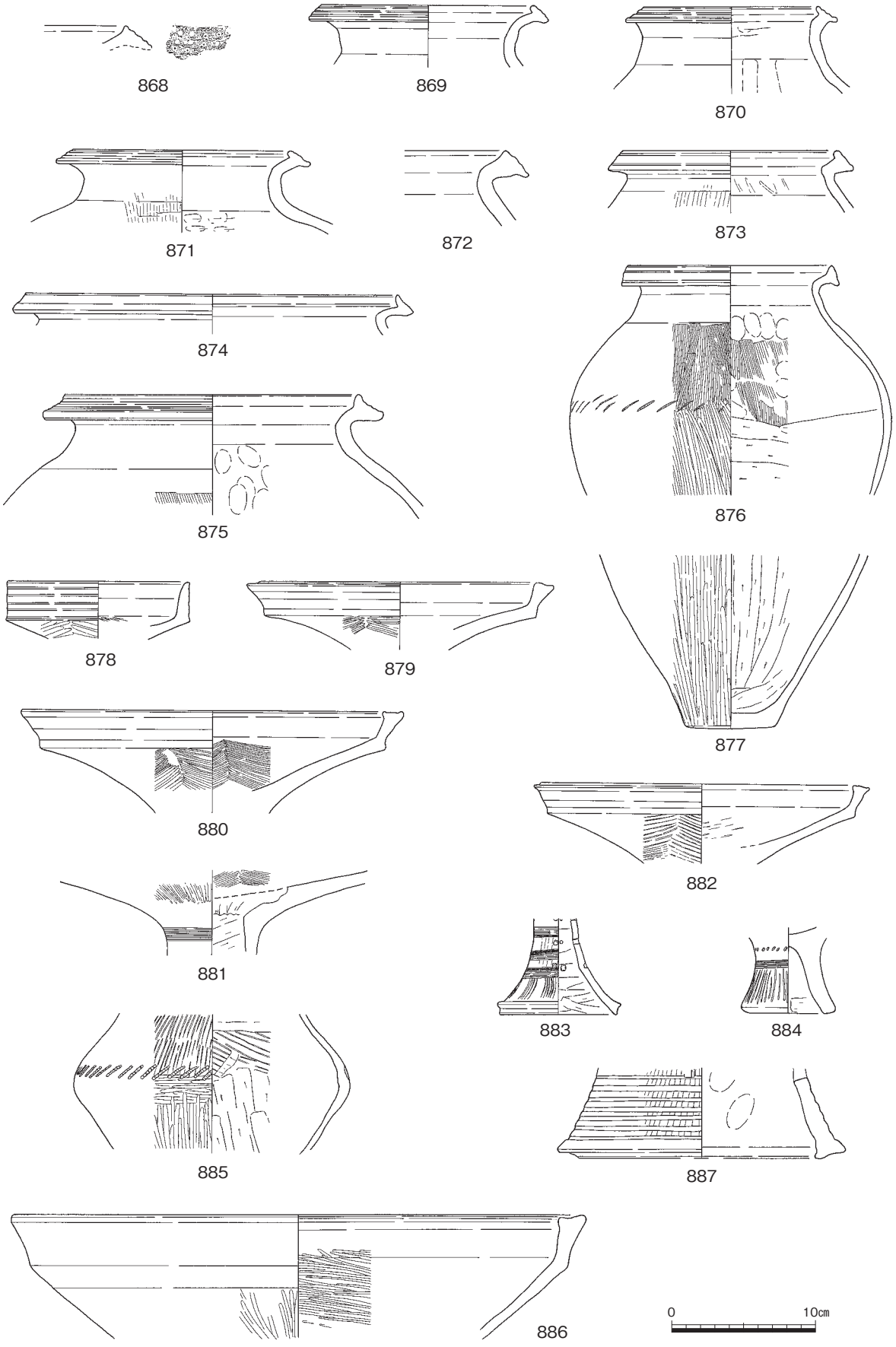
第１層及び第２層から土器が出土した。壺868・869、甕870～877、高杯878～883、台付鉢884、鉢885・886、器台887がある。出土した土器の様相からみて、井戸は弥・後・Ⅰには廃棄されているが、使用時期もほぼ同時期と考えられる。　　(石田)



1　にぶい黄褐色(10YR5/3)粘性砂質土
2　褐色(10YR4/4)粘性砂質土
3　明黄褐色(10YR6/6)砂質土
4　灰黄褐色(10YR5/2)粘質土
5　暗灰黄色(2.5Y5/2)微砂

第133図　井戸１（1/30）

写真21　井戸１（南から）



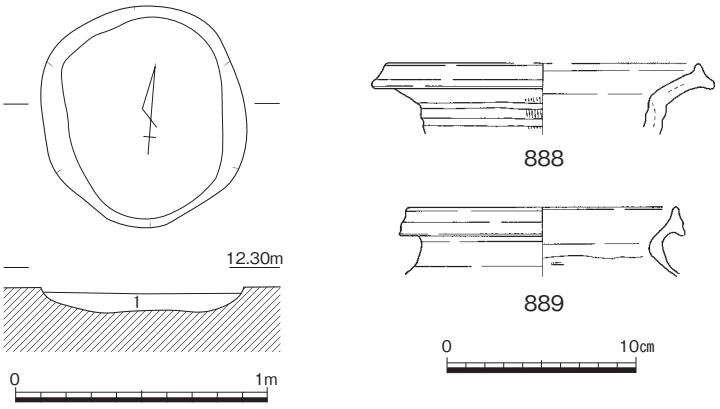
第134図　井戸１出土土器（1/4）

８　土坑

土坑１（第12・135図、図版42－１）

Ｊ04の北、竪穴住居１の南側に位置している。平面形は円形、断面形は浅い皿状を呈している。埋土は細砂の単一層である。規模は、長軸87㎝、短軸80㎝、深さ10㎝を測る。

出土遺物のうち図示できたものには、壺**888**と甕**889**の２点がある。**888**は長頸壺で、頸部上端が屈曲して開き、口縁部は上方へやや立ち上がりが見られる形状である。**889**の口縁部は上下に拡張し、凹線を持たない。遺構の時期は、これらの土器の特徴から、弥・後・Ⅱであると考えられる。　（圃）



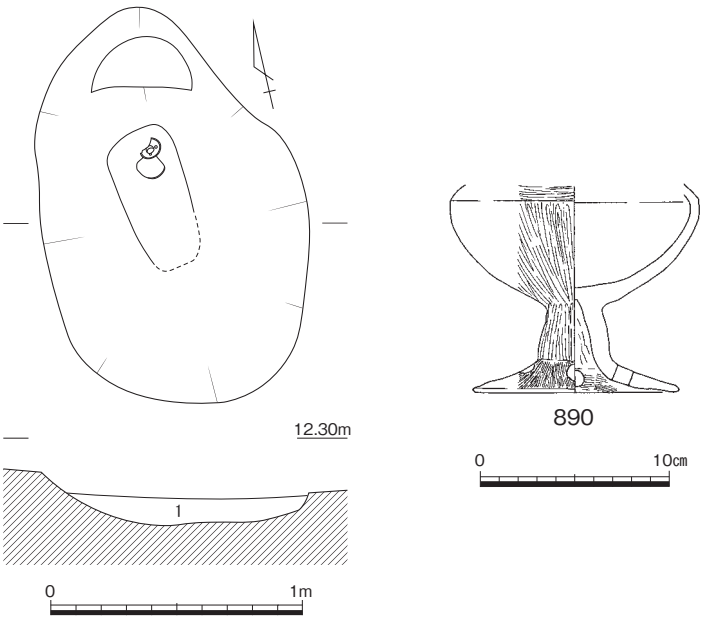
1　にぶい黄褐色(10YR5/3)細砂

第135図　土坑１（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑２（第12・136図）

Ｊ04の北、土坑１の東側に位置している。平面形は楕円形、断面形は浅い皿状を呈している。規模は長軸160㎝、短軸105㎝、深さ21㎝を測る。柱穴１と重複しており、調査時には同時に掘り下げを行ったが、断面観察等により柱穴１が土坑２より新しいと判断している。

出土遺物には、口縁部が欠損しているものの、直口壺と考えられる**890**が１点、床面直上から出土している。この出土遺物から、遺構の時期は弥生時代後期後半であると考えられる。　（圃）



1　にぶい黄褐色(10YR5/3)微砂（礫含）

第136図　土坑２（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑３（第12・137図）

Ｊ05の西端、竪穴住居４と重複している遺構である。平面形は円形で、規模は103×97㎝、深さ34㎝を測る。図示し得ないほどの細片だが、弥・後・Ⅰと思われる土器細片が出土している。竪穴住居４は柱穴のみ検出した竪穴住居であり、その床面より下層で検出したことから竪穴住居４より古い遺構になると考えられ、時期は弥生時代後期前半の範疇であると考えられる。　（圃）

土坑４（第12・138図、図版42－２）

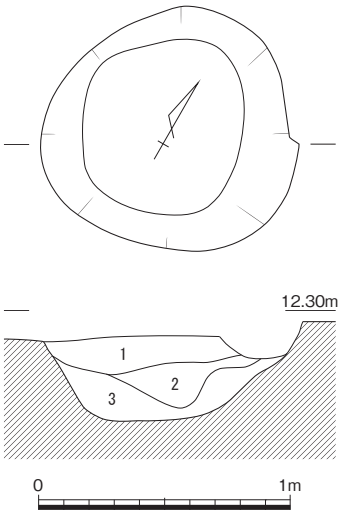
竪穴住居２・３・９の間に位置する土坑で、平面は楕円形を呈する。長軸長241㎝、短軸長188㎝、深さ54㎝を測り、断面は逆台形を呈する。埋土は３層に大別できた。底面はほぼ平坦で、長軸長180㎝を測り、平面の形態も整っており、貯蔵穴の可能性がある。

出土遺物には、壺**891**、甕**892**、高杯**893**～**895**がある。**895**にやや新しい要素が認められるが、おおむね弥・中・Ⅲの新しい段階のまとまった資料として捉えることが可能であり、遺構の時期を示すものと考える。（河合）

土坑５（第12・139図、図版42－３）

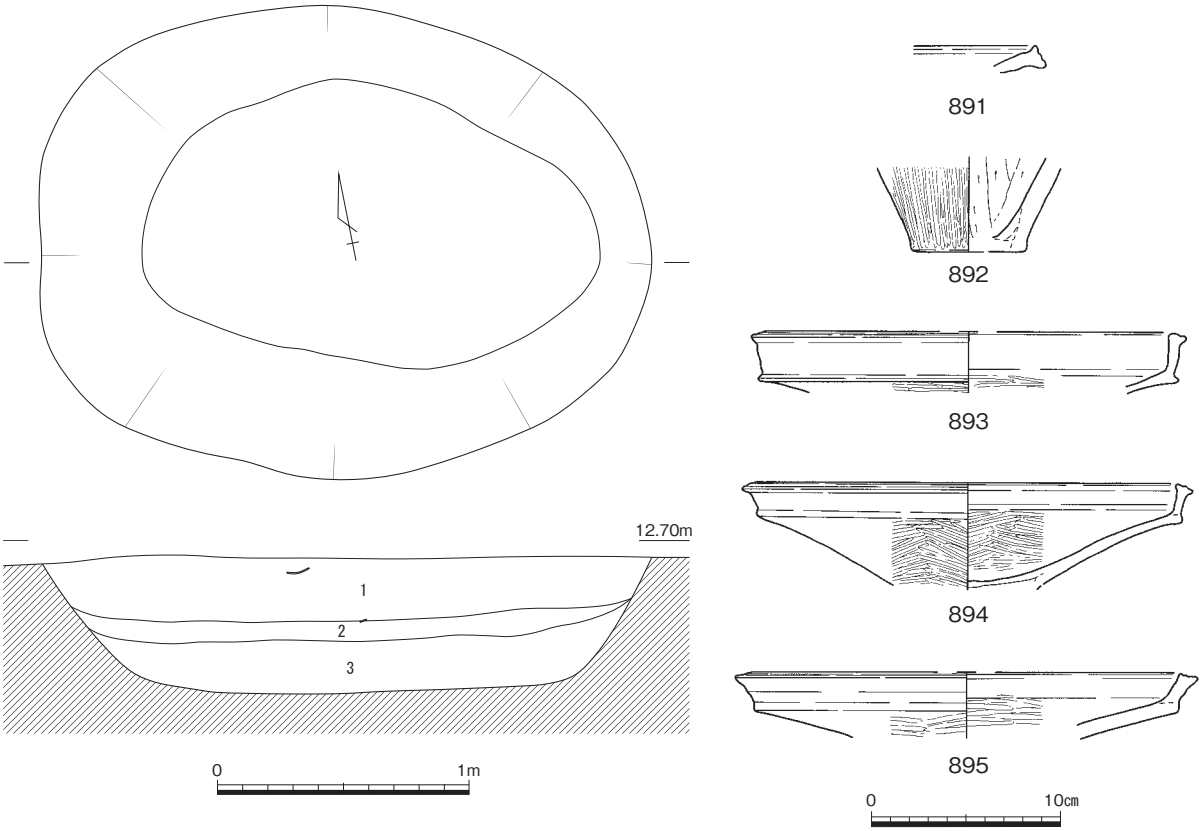
土坑４の西側に位置し、竪穴住居３に一部切られている土坑で、平面は円形を呈する。長軸長84㎝、短軸長83㎝、深さ25㎝を測り、断面は逆台形を呈する。埋土は４層に大別でき、そのうち土器は第１層に多く含まれていた。

出土遺物には、甕**896**、壺**897**などが認められる。このうち、**896**は頸部から口縁部に向かって直線的に外傾し、口縁端部を上下に拡張する特徴を持つ。遺構の時期は、これらの土器などから弥・後・Ⅱと考えておきたい。（河合）



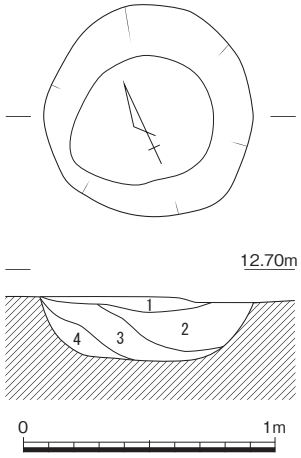
1　暗褐色(10YR3/4)シルト質微砂
2　褐色(10YR4/6)シルト質細砂
3　褐色(10YR4/4)砂質土

第137図　土坑３（1/30）

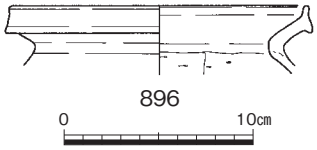


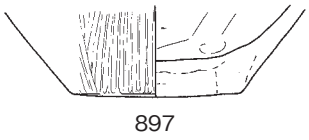
1　にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土
2　暗褐色(10YR3/4)粘性粗砂
3　にぶい黄褐色(10YR4/3)粗砂

第138図　土坑４（1/30）・出土遺物（1/4）

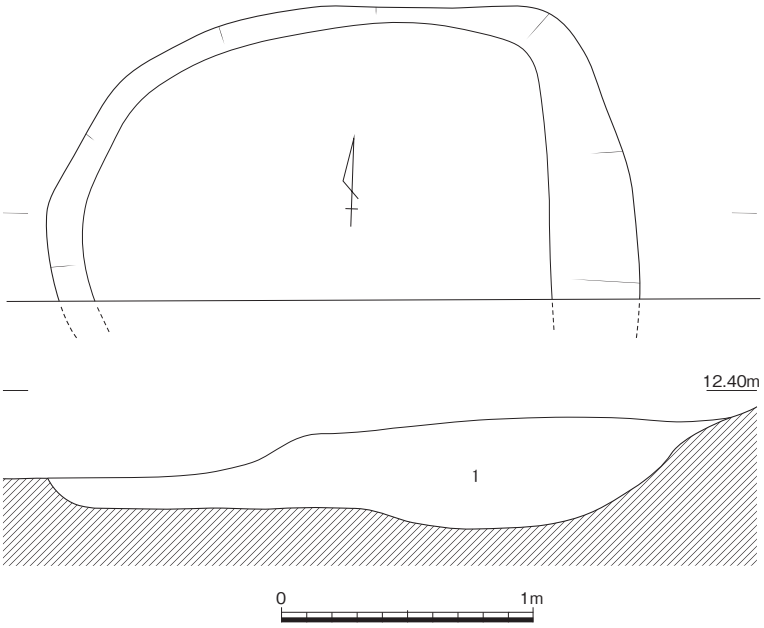


1　暗褐色(10YR3/4)砂質土（土器多含）
2　暗褐色(10YR3/4)粘性粗砂
3　にぶい黄褐色(10YR4/3)
4　暗褐色(10YR3/4)粘性粗砂



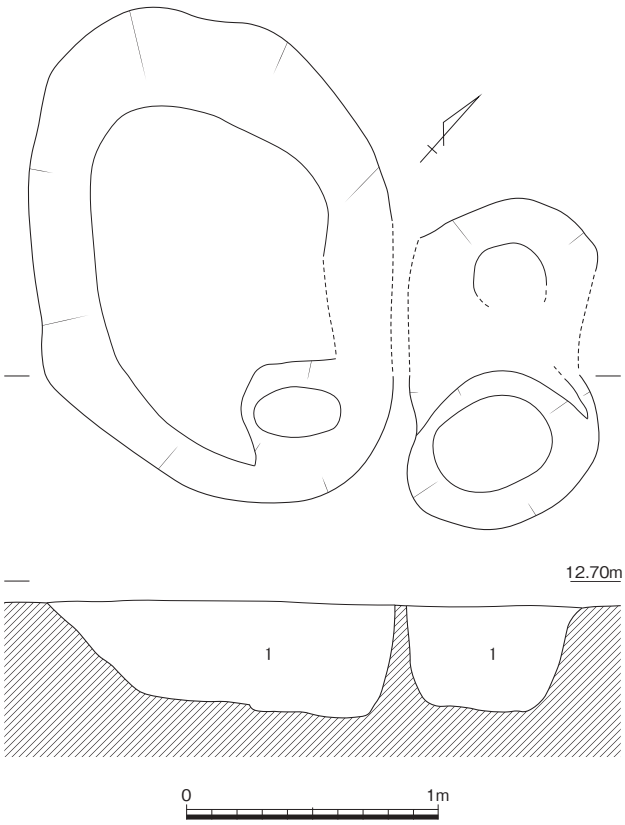


第139図　土坑５（1/30）・出土遺物（1/4）



1　褐灰色(10YR4/1)粘性砂質土

第140図　土坑６（1/30）



1　にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土

第141図　土坑７（1/30）

土坑６（第12・140図）

Ｊ05の南西端、河道２と重複して検出している土坑であるが、西側の上面を河道２によって削平されており、河道２より古い時期の遺構となる。南側は調査区外となる。平面形は楕円形で、長軸は233㎝、深さ51㎝を測る。

図示し得なかったが、中期末葉と後期後半の土器細片が出土している。検出状況などから、弥生時代の遺構であると考えられる。（團）

土坑７（第12・141図）

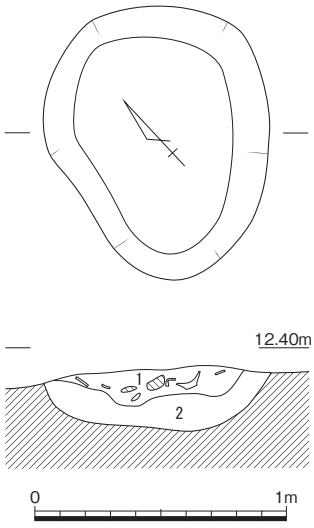
Ｊ05において、竪穴住居９の南西部に接して位置する土坑である。連続する２基の遺構として図示しているが、東側は径70×60㎝と小規模なことから柱穴の可能性があり、土坑として扱わなかった。西側が本土坑で、平面形が楕円形で、断面形は逆台形状を呈する。規模は、長さが206㎝、幅は145㎝で、深さが45㎝である。

細片のため図化し得なかったが、東西２遺構を通して設定したトレンチで中期末葉の土器が出土した。また、本土坑からは中期末葉～後期初頭の土器が出土していることから、弥・後・Ⅰには埋没したと考えられる。（弘田）

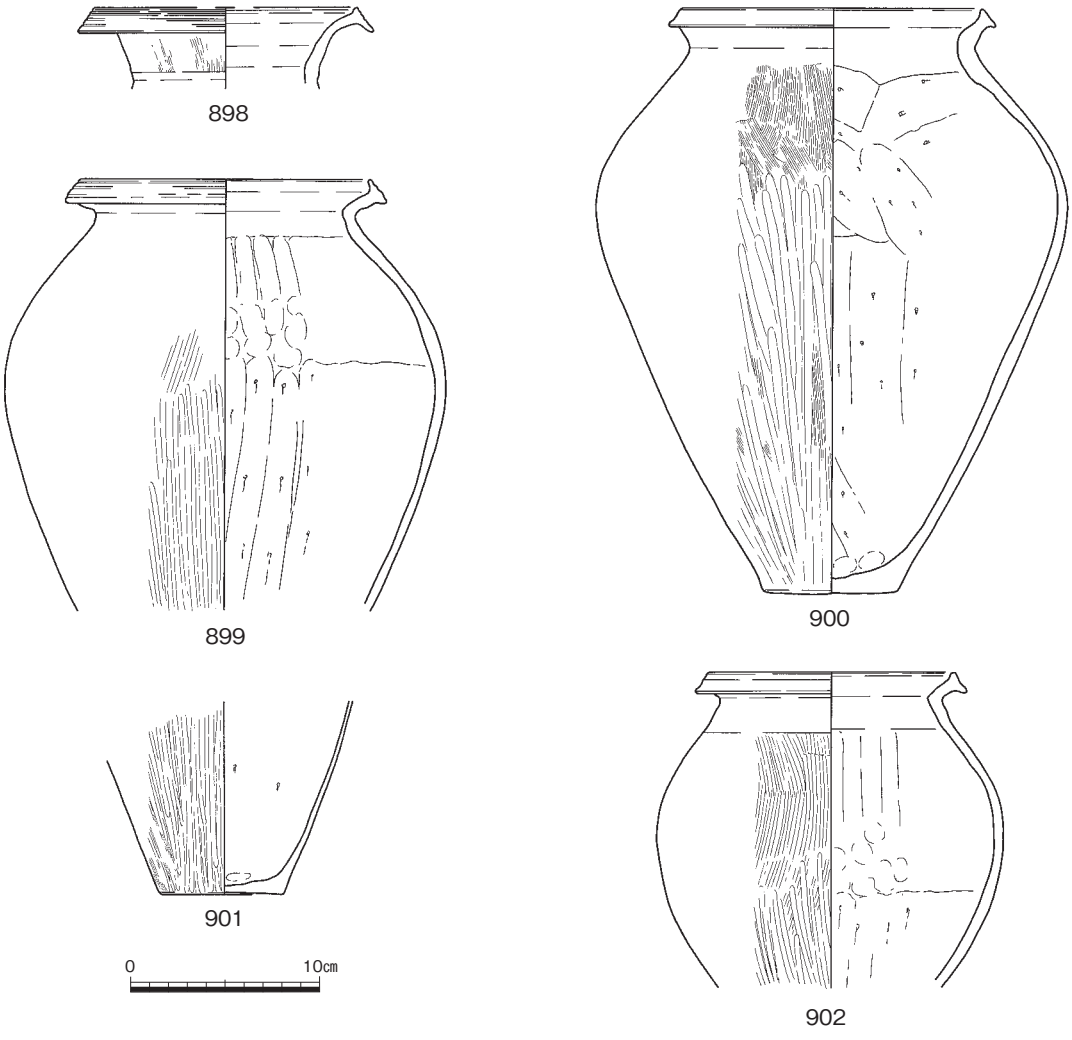
土坑８（第12・142図）

竪穴住居５の南西約２ｍに位置する土坑で、平面は楕円形を呈する。長軸長108㎝、短軸長90㎝、深さ26㎝を測り、断面は椀状を呈する。埋土は礫を多く含む暗褐色砂質土（第１層）と暗褐色粗砂（第２層）に大別できたが、このうち図示できた土器を含んでいたのは第１層である。

出土遺物には、壺**898**、甕**899**～**902**があり、弥・中・Ⅲの範疇に含まれるものが主体を占めるが、このうち、**900**は胴部内面の肩部までケズリが確認できるものであり、弥・後・Ⅰに下る資料である。出土遺物からこの遺構の時期は弥・後・Ⅰと考えておきたい。（河合）



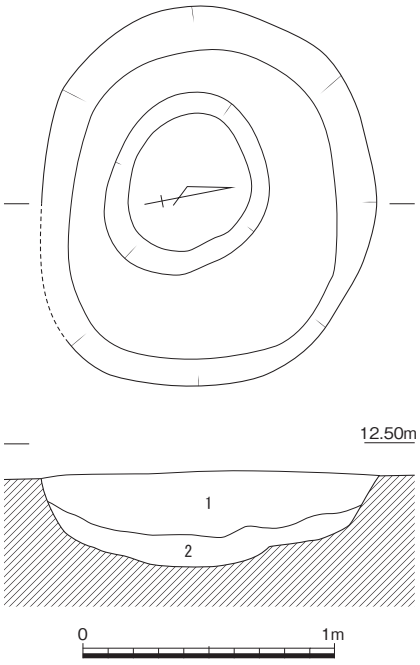
1　暗褐色（10YR3/3）砂質土（礫多含）
2　暗褐色（10YR3/4）粗砂



第142図　土坑８（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑９（第12・143図、図版43－１）

竪穴住居５の南東約１ｍに位置する。平面は楕円形を呈する。長軸長150㎝、短軸長133㎝、深さ38㎝を測り、断面は椀状を呈し、中央が少しくぼんでいる。出土遺物は細片で図化できないが、弥・後・Ⅰと考えられ、埋土等の情報とも矛盾しない。（河合）



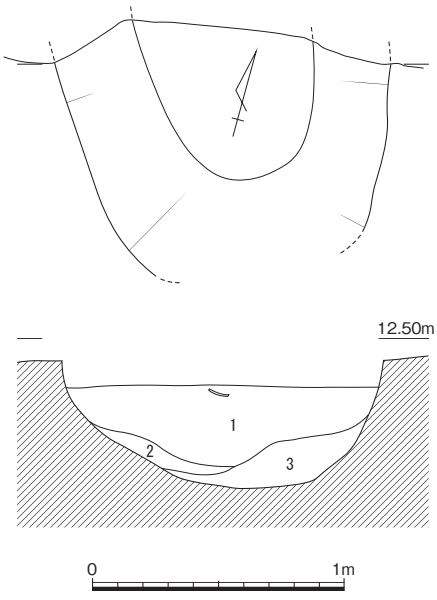
1　にぶい黄褐色(10YR5/3)細砂
2　灰黄褐色(10YR4/2)細砂

第143図　土坑９（1/30）

土坑10（第12・144図）

竪穴住居９より約12ｍ南に離れた微高地上で、竪穴住居６と竪穴住居10の間に位置する。南半は削平され、南端は土坑11に切られる。検出面からの深さは50㎝を測る。

図化し得ないが、中期後葉～後期前葉の土器細片が出土している。切り合いから土坑11より古く位置付けられ、弥・後・Ⅰの古い段階で埋没したと考えられる。（渡邉）

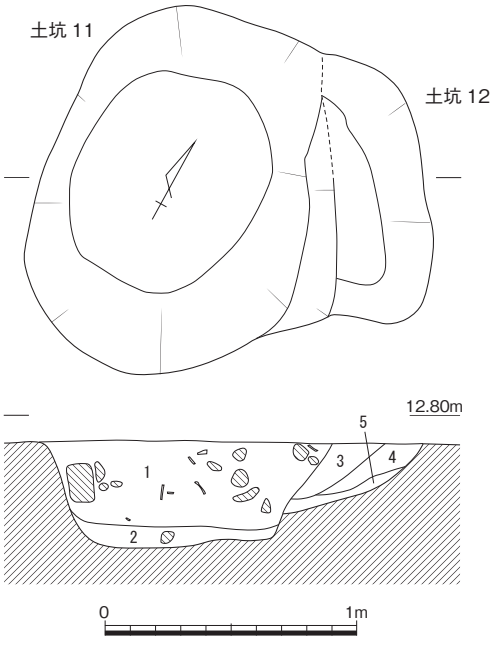


1　暗褐色(10YR3/3)砂質土（礫多含）
2　暗褐色(10YR3/4)粘性粗砂
3　暗褐色(10YR3/4)粗砂

第144図　土坑10（1/30）

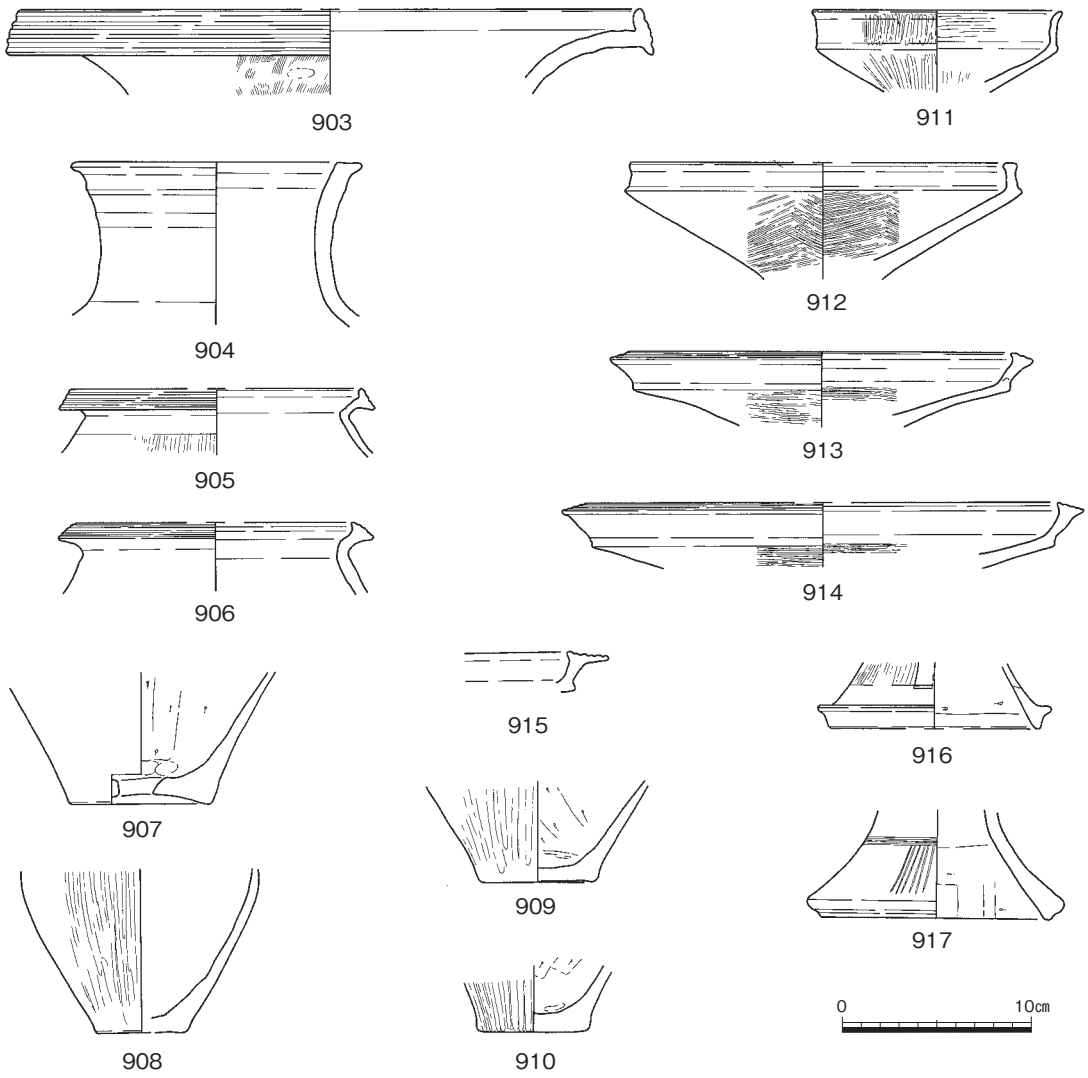
土坑11（第12・145・146図）

土坑10の南に位置し、一部重複していた。また、土坑12も切っている。南北146㎝、東西110㎝の楕円形を呈す。底面は平坦、断面は逆台形で、底面の標高は12.27ｍである。第１層から礫と共に比較的多くの土器が出土した。打製石包丁らしき石器細片も出土している。土器には高杯916のように中期後葉の土器もあるが、幅があり、白色の土器と赤色の土器の割合はほぼ半々であった。最も



1　にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土（土器多・礫含）
2　暗褐色(10YR3/4)砂質土
3　暗褐色(10YR3/3)砂質土
4　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性粗砂
5　にぶい黄褐色(10YR4/3)粗砂

第145図　土坑11（1/30）



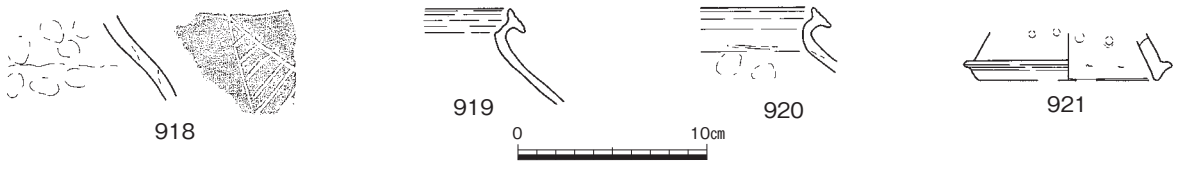
第146図　土坑11出土遺物（1/4）

新しい様相を示すのは高杯**915**で、口縁端部上面を外方に強く引き出していることから弥・後・Ⅰでも新しい段階に位置付けられ、この頃に埋没したと考えられる。　（渡邉）

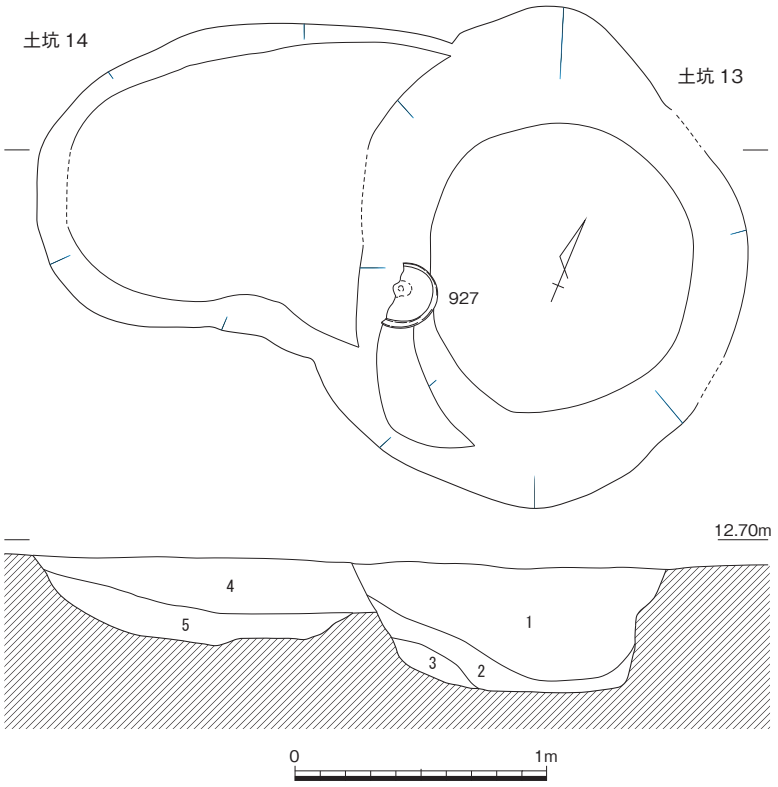
土坑12（第12・145・147図）

土坑11と重複し、東側の一部のみ検出した。第145図断面第３～５層が当土坑埋土にあたる。

出土遺物は中期後葉～後期前葉の土器細片のみである。**918**は赤色厚手の壺で、外面にやや太めの篦描き文が施されている。**919**と**920**は口縁端部をＴ字状に上下に拡張した甕で、形態的に大差ないが、**919**は灰色、**920**は赤色を呈している。中期から後期の過渡的な様相と捉えられ、**920**は後期初頭に位置付けられる。このことから、弥・後・Ⅰの古い段階に埋没したと考えられる。　（渡邉）



第147図　土坑12出土遺物（1/4）

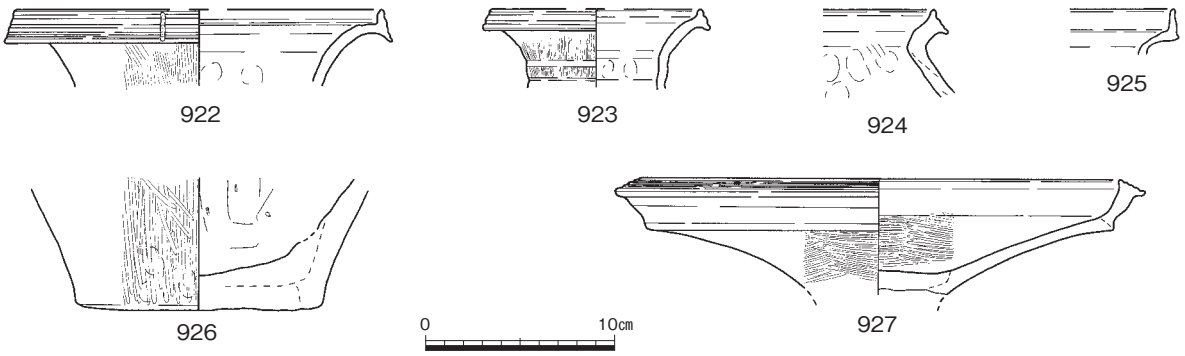


1　にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土
2　にぶい黄褐色(10YR5/4)粗砂
　（にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土混）
3　にぶい黄褐色(10YR5/4)粗砂
4　暗褐色(10YR3/4)砂質土
5　にぶい黄褐色(10YR5/3)粗砂
　（砂礫混、暗褐色(10YR3/4)砂質土塊混）

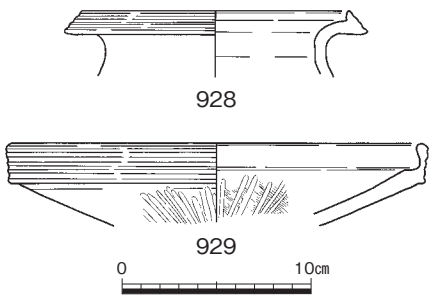
土坑13（第12・148図、図版43－２）

土坑11と重複する。比較的大形で断面逆台形のしっかりした土坑である。検出面からの深さは約50㎝で、底面の標高は約12.10ｍを測る。大部分を土坑11で削平されていたが、検出面より約30㎝下、西側壁面の傾斜がやや緩くなった所から高杯**927**が出土した。第２層と第３層の境界にあたる。

出土遺物は土器のみで、中期後葉～後期前葉の時期幅があるが、土坑11・14との前後関係から、弥・後・Ⅰの古い段階に位置付けておきたい。　（渡邉）



第148図　土坑13・14（1/30）・土坑13出土遺物（1/4）



第149図　土坑14出土遺物（1/4）

土坑14（第12・148・149図、図版43－２）

土坑13の西に位置する。東側を土坑13に切られるが、東西に長い楕円形を呈す。検出面からの深さは35㎝で、底面は凹凸がある。底面標高は最も深い所で約12.30ｍである。

出土土器には中期後葉～後期前葉の時期幅があるが、多くは中期後葉に比定されるものである。切り合いから土坑13よりは古く位置付けられ、弥・後・Ⅰの中で埋没したと考えられる。土坑12と同一遺構の可能性もある。　（渡邉）

土坑15（第12・150図）

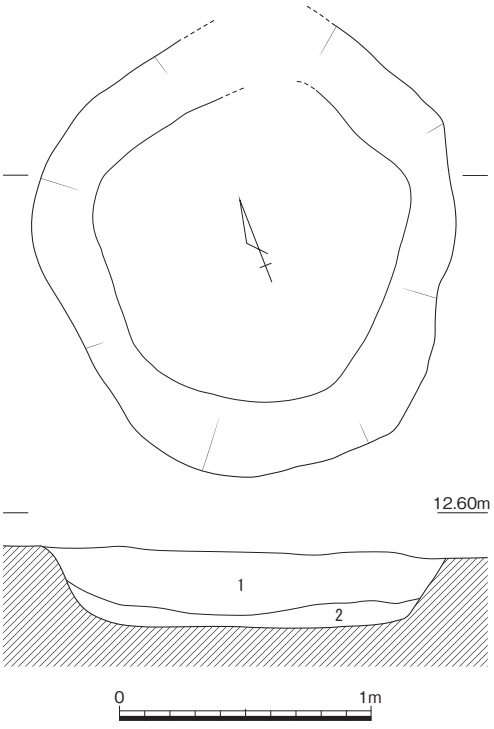
Ｊ06において、竪穴住居７の床面の上で検出した土坑で、一部が竪穴住居の柱穴に切られる。平面形は不整楕円形で、やや五角形に近く、断面形は逆台形を呈する。規模は、長さが175㎝、幅が170㎝で、深さが30㎝である。

出土遺物には、甕底部片**930**、高杯口縁部片**931**がある。遺物からみたこの土坑の時期は、弥・後・Ⅰである。（弘田）

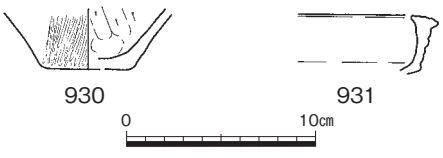
土坑16（第12・151図、図版43－３）

Ｊ06において、竪穴住居７の南に接する土坑である。平面形は円形で、断面形はＵ字形を呈する。規模は、長さが12㎝、幅が120㎝で、深さが58㎝である。

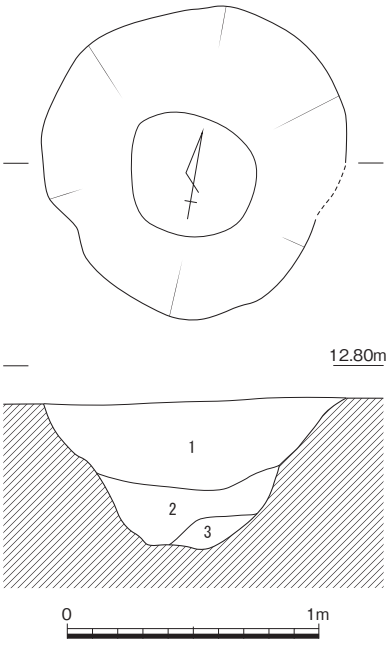
出土遺物には、高杯の口縁部片**932**があり、それからみたこの土坑の時期は、弥・後・Ⅰと考えられる。（弘田）



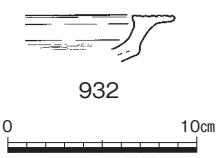
1　にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土
2　灰黄褐色(10YR4/2)砂質土（礫多含）



第150図　土坑15（1/30）・出土遺物（1/4）



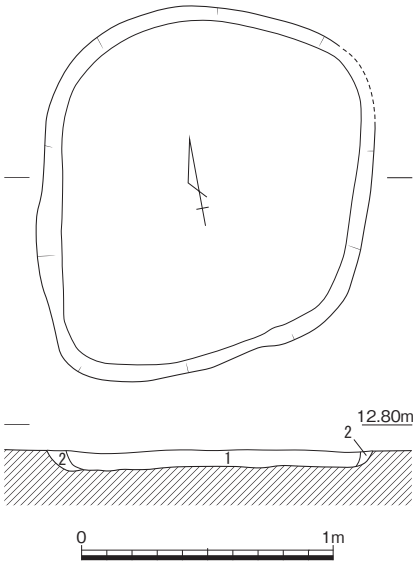
1　暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土（土器少含）
2　灰黄色(2.5Y6/2)砂質土
3　黄灰色(2.5Y5/1)砂質土（円礫多含）



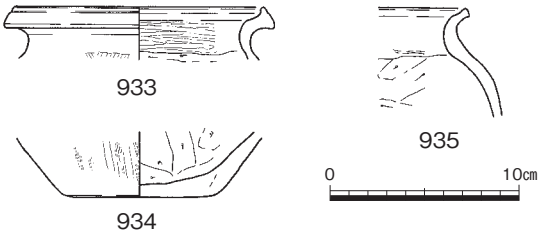
第151図　土坑16（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑17（第12・152図）

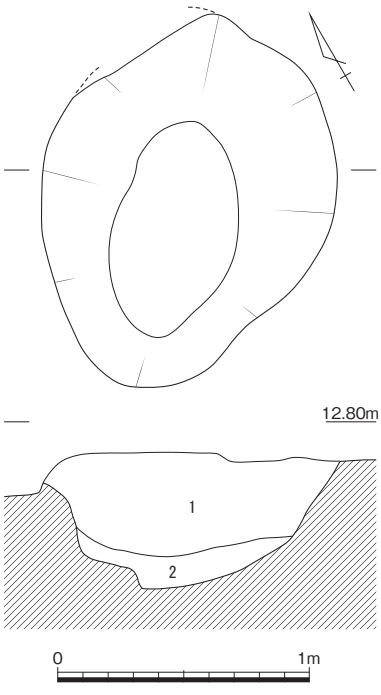
竪穴住居７の南西約50㎝に位置する土坑で、平面は隅丸方形を呈する。長軸長292㎝、短軸長260



1　暗褐色(10YR3/3)粘性粗砂　　2　暗褐色(10YR3/4)砂質土



第152図　土坑17（1/30）・出土遺物（1/4）



1　にぶい黄橙色(10YR6/3)砂質土
2　灰黄褐色(10YR4/2)砂質土（礫少含）

第153図　土坑18（1/30）

cm、深さ14cmを測り、断面は逆台形を呈する大形の土坑である。大部分が削平を受けているため、本来の用途等は不明である。土坑16・18とは重複関係にあり、土坑18を切り、土坑16には切られている。

出土遺物には甕**933・935**、壺の底部片**934**がある。遺構の時期は、この土器などから弥・後・Ⅰと考えておきたい。　（河合）

土坑18（第12・153図、図版44－１）

Ｊ06において、土坑16の南に位置する土坑である。土坑16及び西側に接する土坑17によって切られていた。平面形は不整形で、断面形はU字形を呈する。規模は、長さが151cm、幅が117cmで、深さが54cmである。

図示し得るほどの遺物はないが、周辺の遺構の状況から判断して、この土坑の時期は弥生時代後期と考えられる。また、切り合いから土坑16より古く位置付けられる。　（弘田）

土坑19（第12・154図、図版44－２）

Ｊ06において、土坑18の南東すぐに接して位置する土坑である。およそ南半部が調査区外とみられるが、平面形は楕円形で、断面形はU字形を呈している。規模は、残存部での長さが135cmで、深さが60cmである。

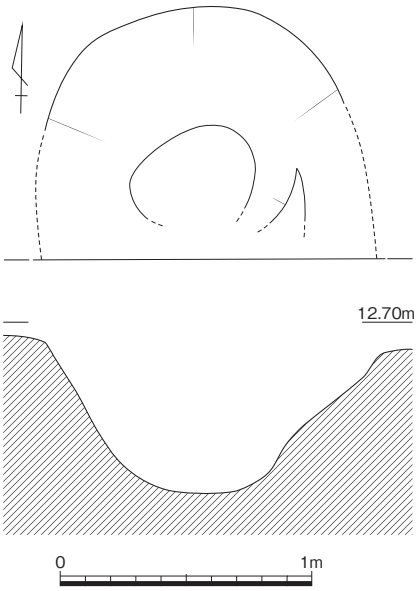
出土遺物には、甕の口縁部から体部にかけての破片**936**と高杯もしくは台付壺の脚裾部片**937**がある。甕**936**ではハケメの下にタタキの痕跡が確認できる。

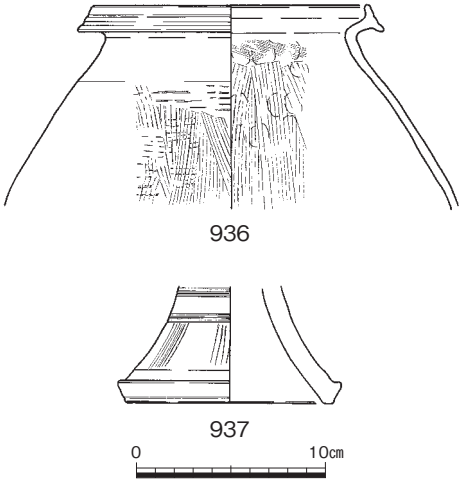
これらからみたこの土坑の時期は、弥・後・Ⅰと考えている。　（弘田）

土坑20（第12・155図、図版44－３）

Ｊ06において、土坑16の東１ｍの所に位置する土坑である。平面形は隅丸長方形状をなすが、西側がやや丸みを帯びる。断面を見ると東側が浅く、西側が深いことから２基の土坑の可能性があり、切り合いからその場合は西側が新しい。断面形は共に逆台形を呈する。規模は、長さが173cm、幅は139cmで、深さは西側が58cmで、東側は20cmである。

出土遺物には、弥生土器の細片**938**がある。土坑の時期は、弥・後・Ⅲと考えている。　（弘田）





第154図　土坑19（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑21（第12・156・157図）

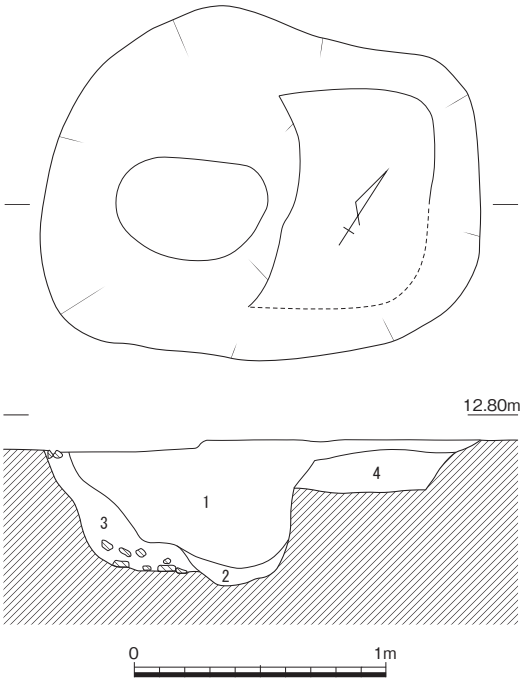
竪穴住居11の西端部分で、これと重複するように検出された土坑で、平面は不整円形を呈する。長軸長370㎝、短軸長315㎝、深さ74㎝を測り、断面は緩やかな椀形を呈する大形の土坑である。弥・後・Ⅲの竪穴住居11のほか、後述する土坑22を切っている。埋土は３層に大別できたが、第２・３層は少しずつ埋まったものと考えられる。

出土遺物には、長頸壺**939**が認められる。遺構の時期は、この土器などから弥・後・Ⅲと考えておきたい。（河合）

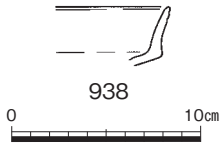
土坑22（第12・156・158図）

土坑21の南に位置し、これと重複して一部を切られている土坑で、平面は楕円形を呈すると考えられる。長軸長220㎝以上、短軸長179㎝、深さ75㎝を測り、断面は椀状を呈する。埋土は３層に大別できた。

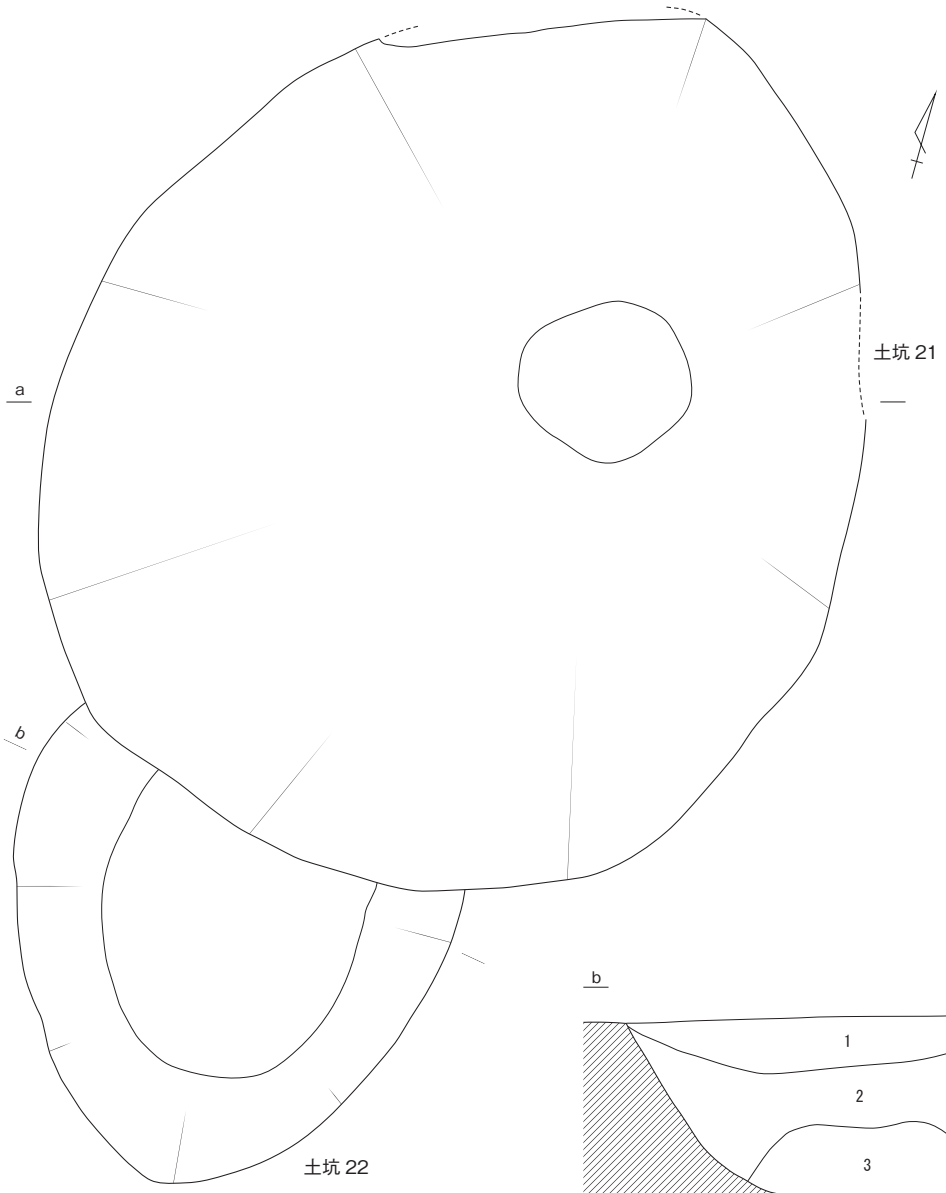
出土遺物は少なく、土器細片のみであるが、図示した壺**940**、高杯**941**のほか、口縁上端部を外方へ拡張した弥・後・Ⅰに特徴的な高杯も出土している。土坑21の切り合いと矛盾ないことから、遺構の時期は弥・後・Ⅰで、周囲にあるほぼ同時期の土坑23～26とともに、貯蔵穴として利用されていた可能性を考えておきたい。（河合）

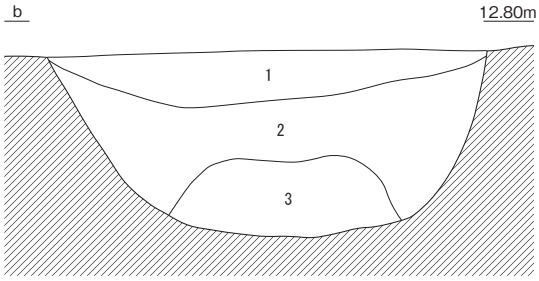


1　にぶい黄褐色（10YR4/3）粘性砂質土
2　にぶい黄褐色（10YR5/3）粗砂
3　灰黄褐色（10YR4/2）砂質土（粗砂質強、礫含）
4　灰黄褐色（10YR4/2）砂礫

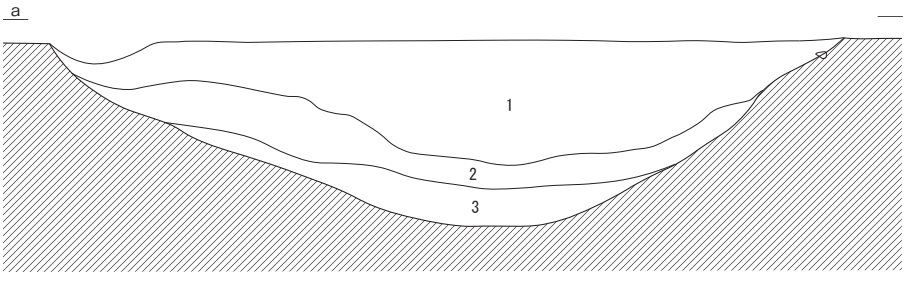


第155図　土坑20（1/30）・出土遺物（1/4）



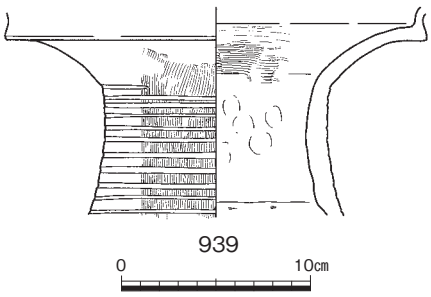


1　灰黄褐色(10YR6/2)砂質土
2　灰黄褐色(10YR4/2)粗砂礫層
3　灰黄褐色(10YR5/2)粗砂

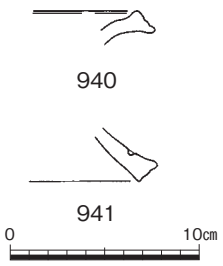


1　暗褐色(10YR3/4)砂質土
2　褐色(10YR4/4)砂質土
3　褐色(10YR4/4)細砂

第156図　土坑21・22（1/30）



第157図　土坑21出土遺物（1/4）

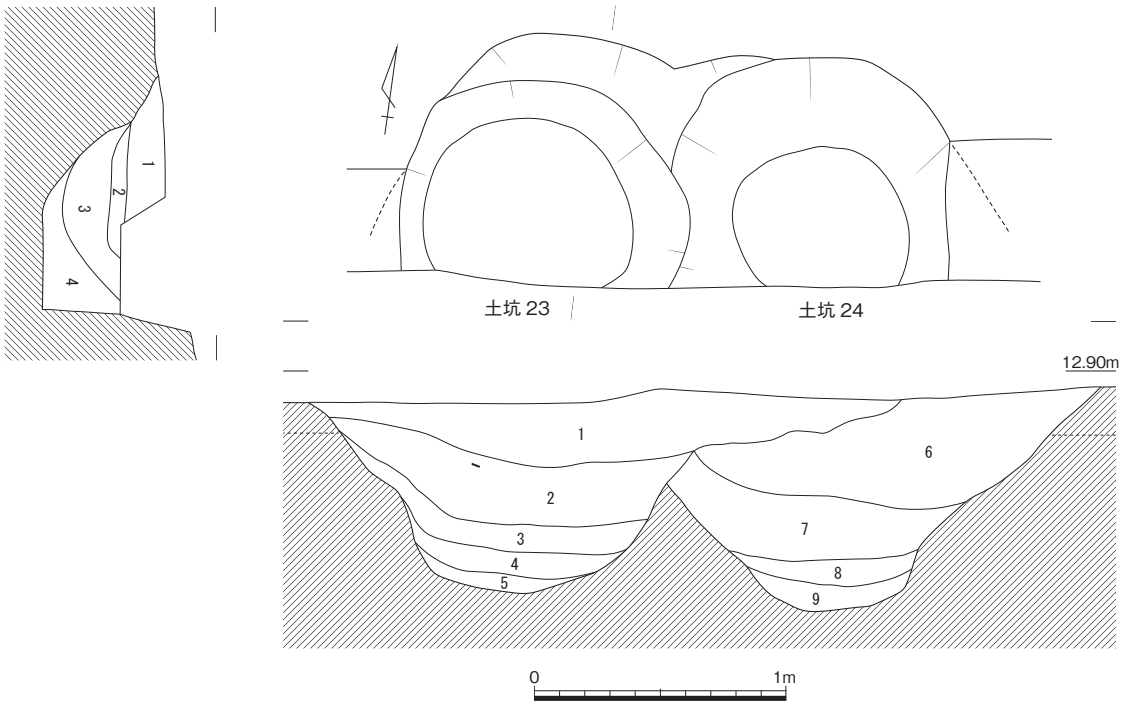


第158図　土坑22出土遺物（1/4）

土坑23・24（第12・159・160図）

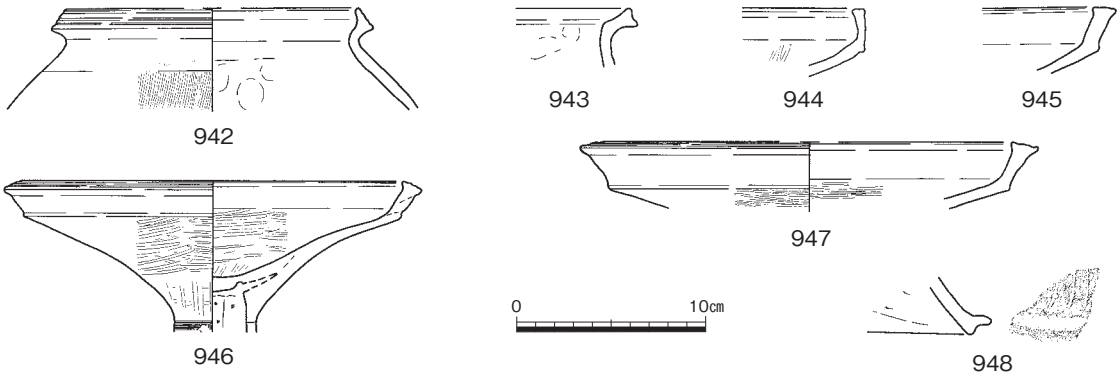
竪穴住居11の南東約1.5ｍで検出された土坑群で、不整円形の土坑24が埋まりきった後に、円形の土坑23が掘り直されている。ちなみに、土坑24は後述する土坑26にも一部切られている。規模は一部が調査区外に延びていることや、土坑の上層が外側に拡大していることなどから、不正確ではあるが、現状で土坑23は長軸長115㎝、深さ75㎝、土坑24は長軸長101㎝以上、深さ83㎝を測り、断面は共に逆台形を呈する。

出土遺物は、土坑23からややまとまって出土しており、甕942・943、高杯944～948が認められるが、弥・中・Ⅲの942・944を除くと、すべて弥・後・Ⅰの古い段階に位置付けられ、遺構の時期を示すものと考える。土坑24については、出土遺物が細片で図化できないものの、遺構の切り合い関係な



1　暗褐色(10YR3/3)砂質土（粘性有、にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土塊混）
2　暗褐色(10YR3/4)砂質土（粘性有、にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土塊少混）
3　暗褐色(10YR3/3)粘性粗砂（にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土塊少混）
4　暗褐色(10YR3/3)粘性粗砂（礫含・砂質塊混）
5　暗褐色(10YR3/3)粗砂（礫多含）
6　暗褐色(10YR3/3)砂質土（粘性有、礫混）
7　暗褐色(10YR3/3)シルト質土（砂質・粒性有）
8　暗褐色(10YR3/3)シルト質土（砂質・粒粗）
9　暗褐色(10YR3/3)粗砂（礫多含）

第159図　土坑23・24（1/30）



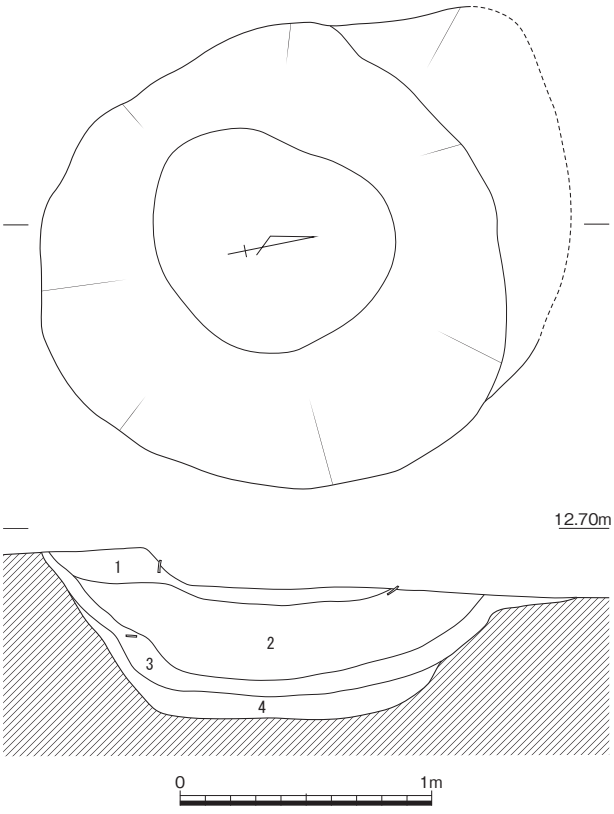
第160図　土坑23出土遺物（1/4）

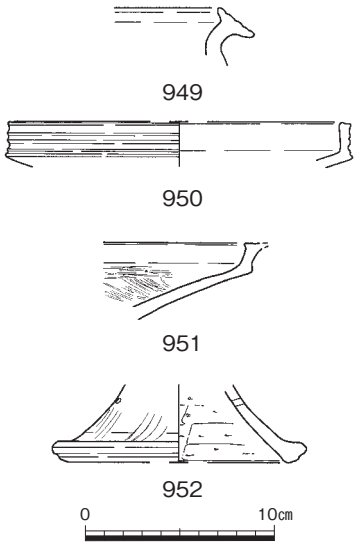
どからも、弥・中・Ⅲと考えられる。遺構の性格については、周囲にあるほぼ同時期の土坑22・25・26とともに、貯蔵穴として利用されていた可能性を考えておきたい。　（河合）

土坑25（第12・161図）

竪穴住居11の南西端部分で、これと重複するように検出された土坑で、上面の一部は竪穴住居11に切られている。平面は円形を呈する。長軸長185㎝、短軸長182㎝、深さ67㎝を測り、断面は逆台形を呈する。

出土遺物には、甕**949**、高杯**950**～**952**が認められる。このうち、弥・中・Ⅲの**949**・**950**と、弥・後・Ⅰの**951**・**952**の両者が含まれているが、後述する土坑26を切っていることから、後者が遺構の時期を示すものと考える。遺構の性格については、周囲にあるほぼ同時期の土坑22～24・26とともに、貯蔵穴として利用されていた可能性を考えておきたい。　（河合）





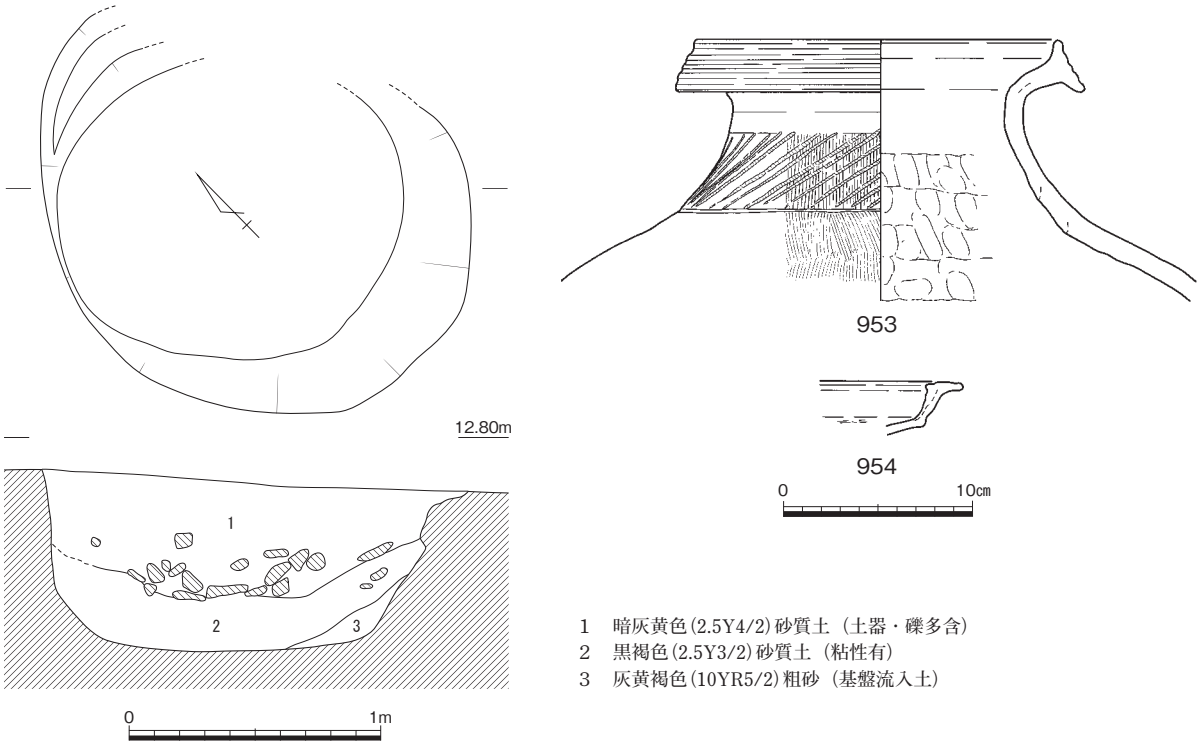
1　にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土（粒性有）
2　暗褐色(10YR3/3)砂質土（粒性有）
3　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性粗砂
　（礫含、暗褐色(10YR3/3)砂質土塊混）
4　にぶい黄褐色(10YR4/3)粗砂（礫多含）

第161図　土坑25（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑26（第12・162図）

竪穴住居11の南西端部分で、これと重複するように検出された土坑で、土坑25にも一部を切られている。平面は楕円形を呈する。長軸長188㎝、短軸長158㎝、深さ68㎝を測り、断面は箱形に近い逆台形を呈する。埋土は大きく３層に分かれるが、そのうち第１層の下半には多くの礫が認められた。

出土遺物には、**953・954**がある。遺構の時期は、この土器などから弥・後・Ⅰと考えられる。形態等から貯蔵穴として利用されていた可能性を考えておきたい。（河合）



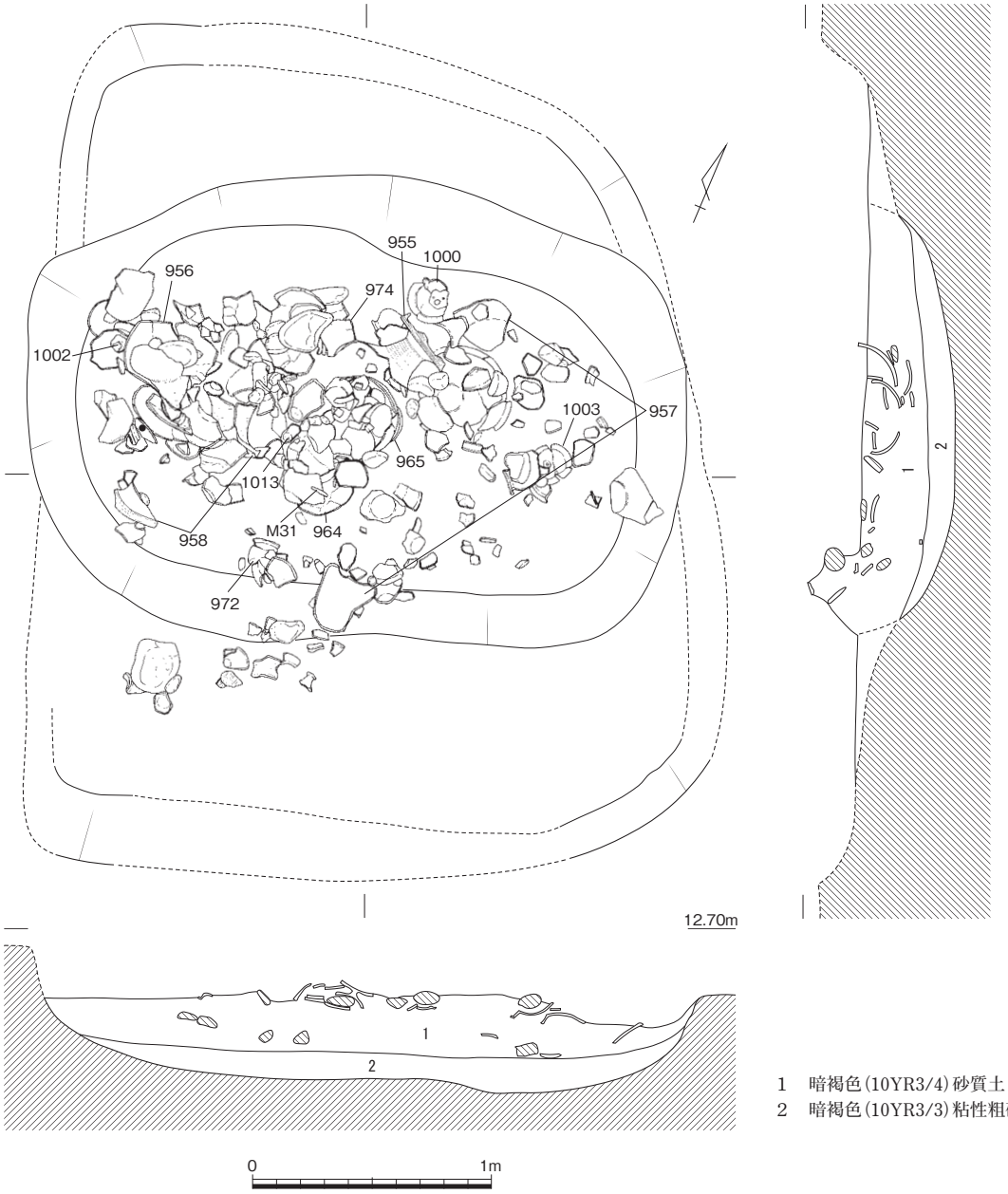
第162図　土坑26（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑27（第12・163～170図、図版45－１・２・82～84・98・110・114、写真22・23）

銅鐸埋納坑から南東方向に約７ｍの位置に所在し、長軸347㎝、短軸279㎝の隅丸方形を呈する大形の土坑である。弥・後・Ⅲの竪穴住居11と重複している。中央が一段深くなる段差を持った土坑と調査時には把握したが、整理段階で検討し直すと、新古の２つの土坑が重複したものであった可能性も考えられる。このうち、図化できたものだけでも約70点を数える多量の土器が検出されたのは、新しく掘り直された可能性のある土坑内（長軸276㎝、短軸192㎝）の範囲にほぼ収まる。この土坑の深さは38㎝を測る。土層は暗褐色砂質土（第１層）と暗褐色粘性粗砂（第２層）に大別できるが、このうち遺物を多く含むのは第１層である。

この遺構が特筆されるのは、上述したように大量の土器が廃棄されていたことに加え、その出土状況が特異なこと、銅鏃や鉄鏃、打製石包丁、有溝石錘、桃核などの多種多様な遺物を含むことなどにある。更には、この遺構が位置する微高地の中で最も新しい土器が出土することも、遺構の性格を考える上で注目される。以下に詳述したい。

出土遺物は土器が多数を占め、長頸壺**955**～**958**、**961**・**962**、広口壺**963**～**966**・**968**・**969**、直口壺**967**、甕**970**～**991**、高杯**1000**～**1008**、脚付直口壺**1009**、器台**1010**、鉢**1014**～**1024**、台付鉢**1025**の

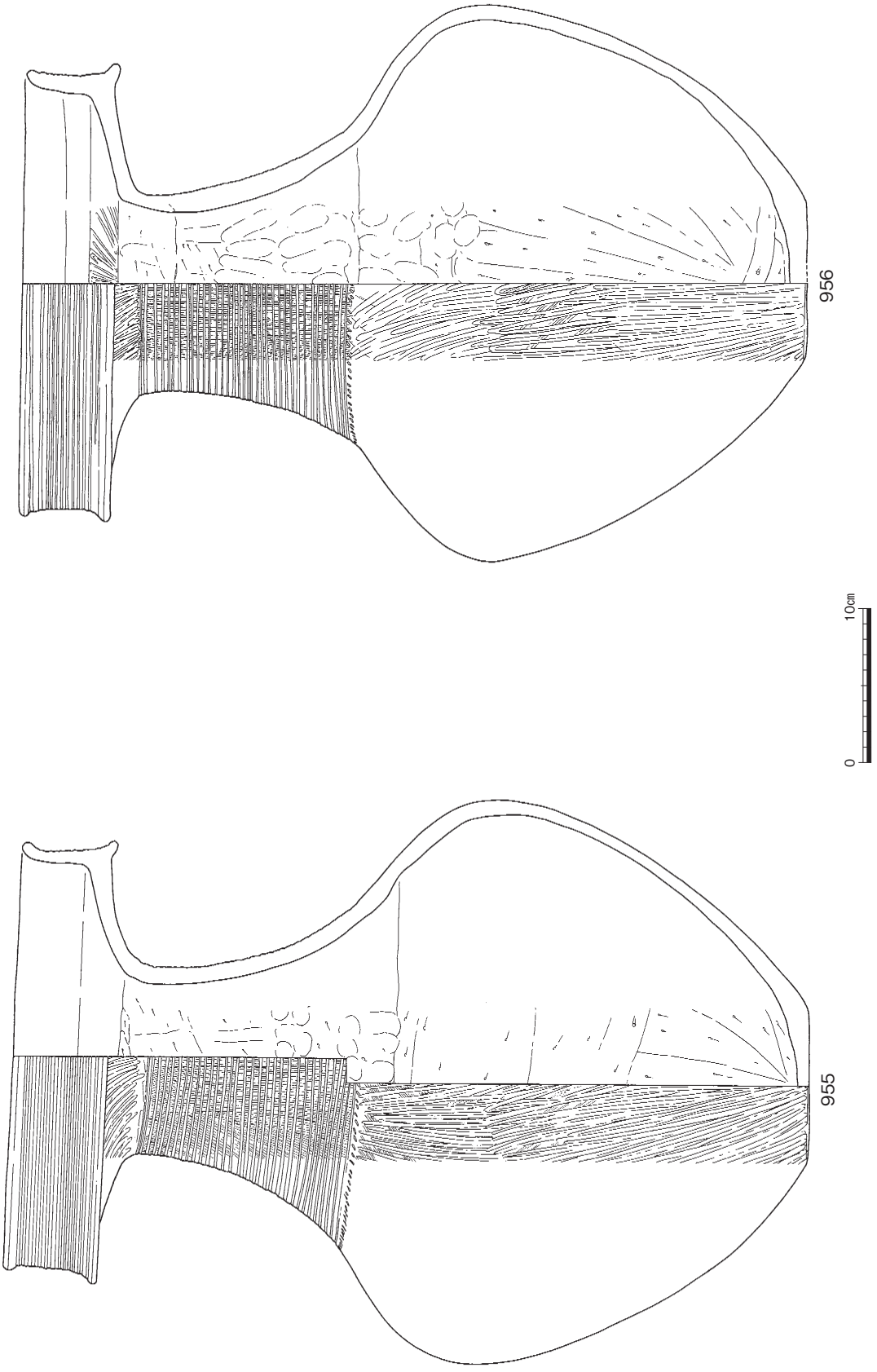


1　暗褐色(10YR3/4)砂質土
2　暗褐色(10YR3/3)粘性粗砂

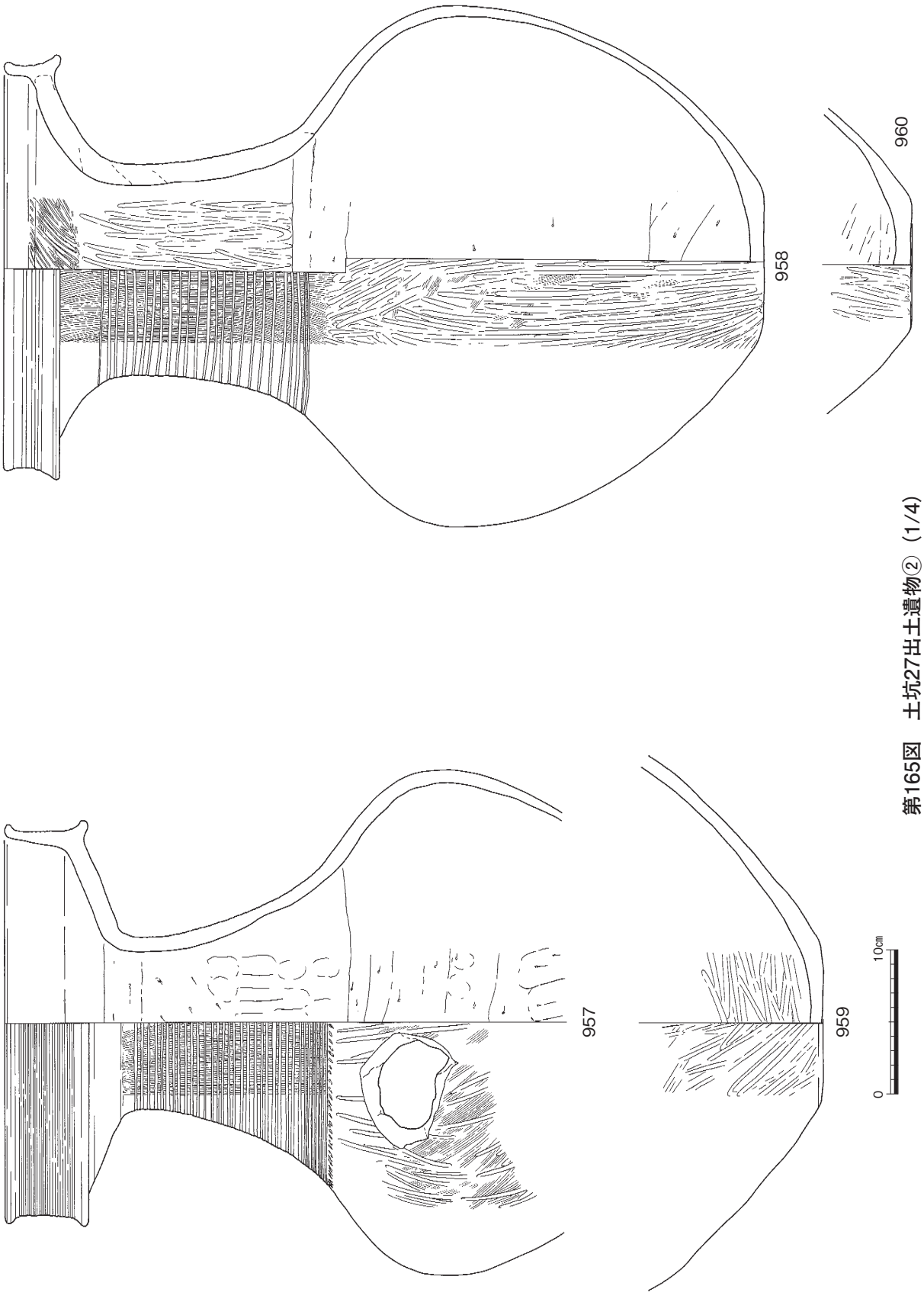
第163図　土坑27（1/30）

写真22　長頸壺955・高杯1000出土状況（北西から）

写真23　長頸壺956出土状況（北から）

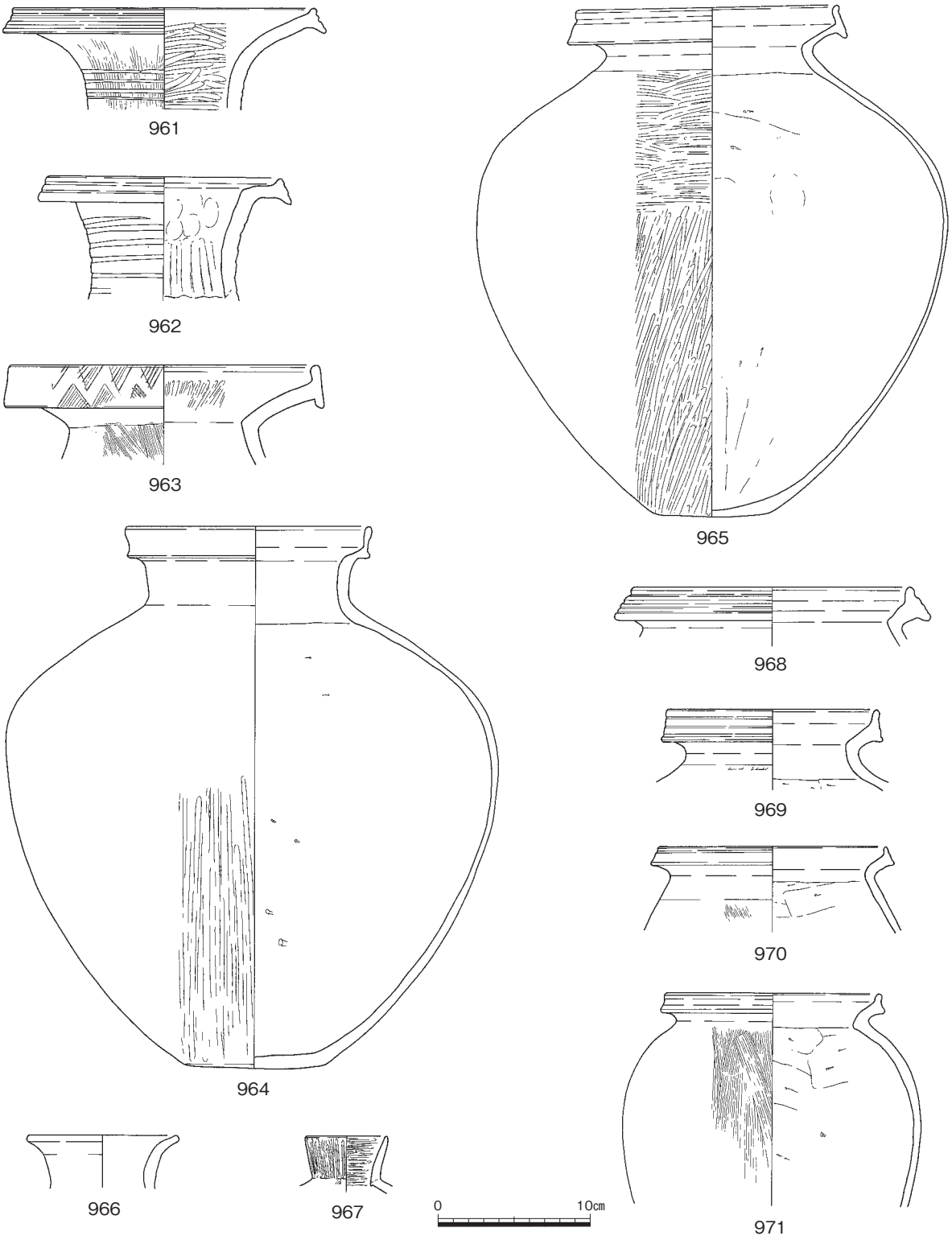


第164図　土坑27出土遺物①（1/4）

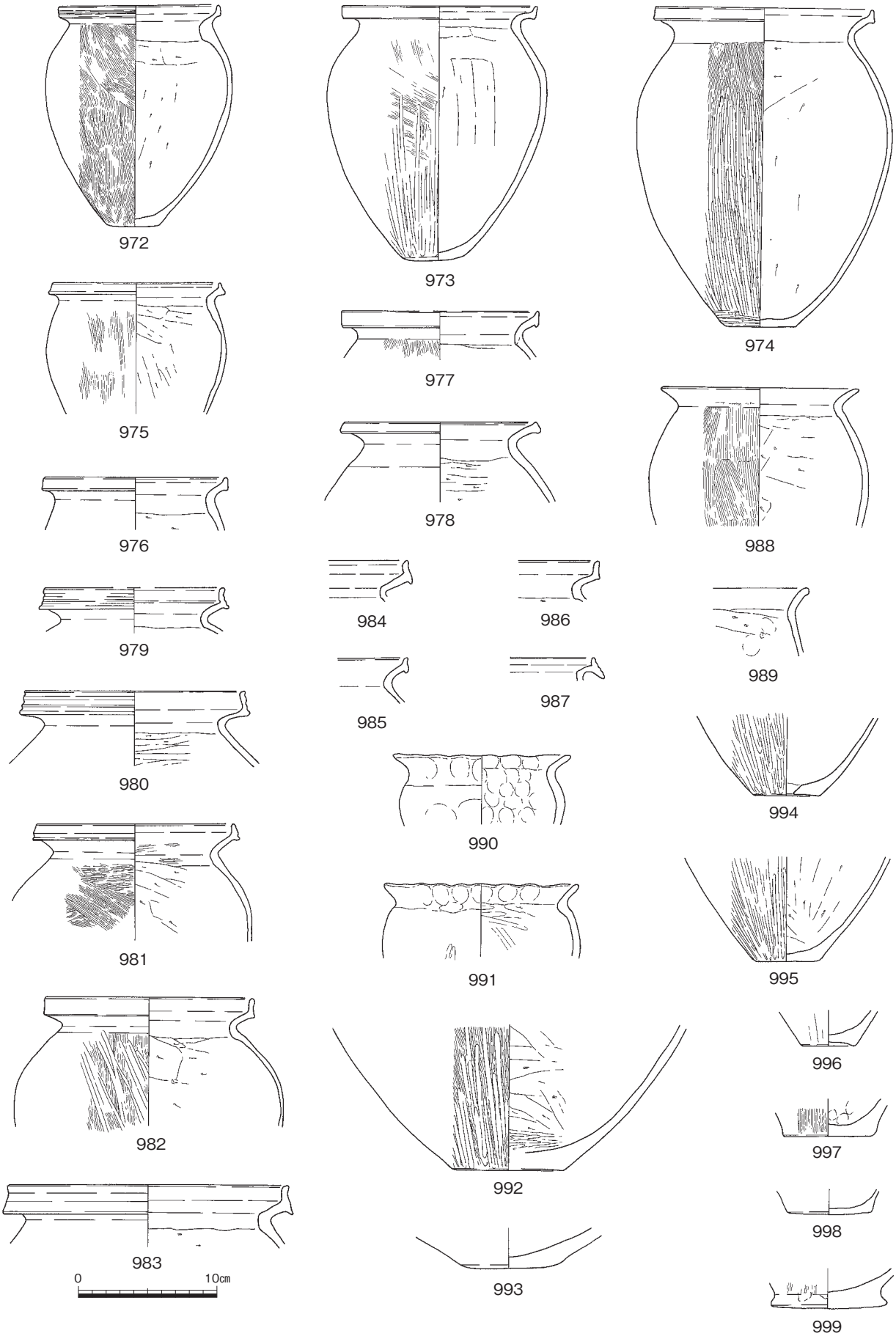


第165図　土坑27出土遺物②（1/4）

ほか、ミニチュア土器1011～1013などがある。このうち、長頸壺955～958は器高が50㎝を超える大型品であり、大きさも揃っている。特に955～957の３点は５㎝を超える口縁部の立ち上がりやその丁寧な作りは、当時限られた場所で使用されていた特殊壺に酷似した精製品である。これらは、出土した土器群の上面付近に分布しており、破片同士が１ｍ離れて廃棄されているもの（957）もあるた

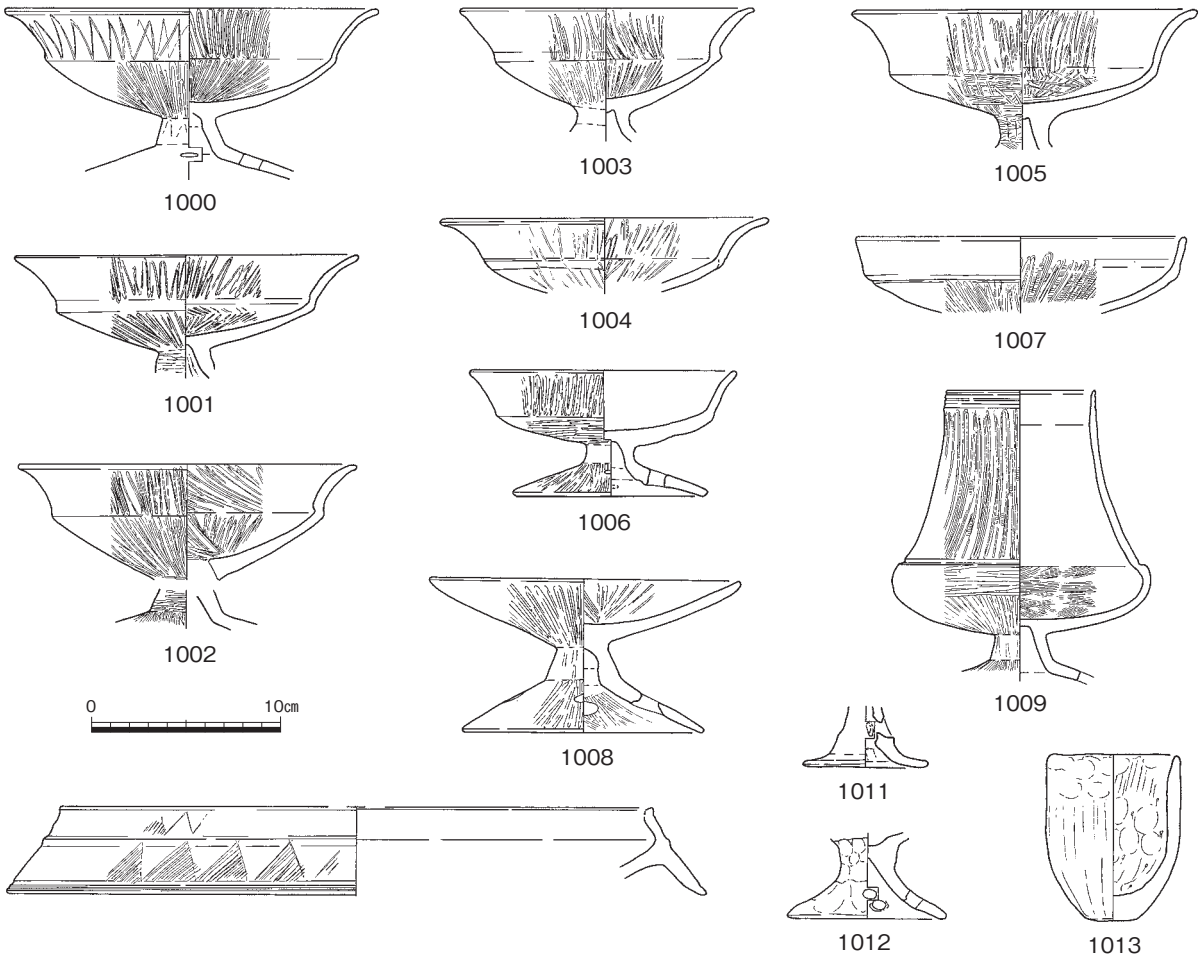


第166図　土坑27出土遺物③（1/4）

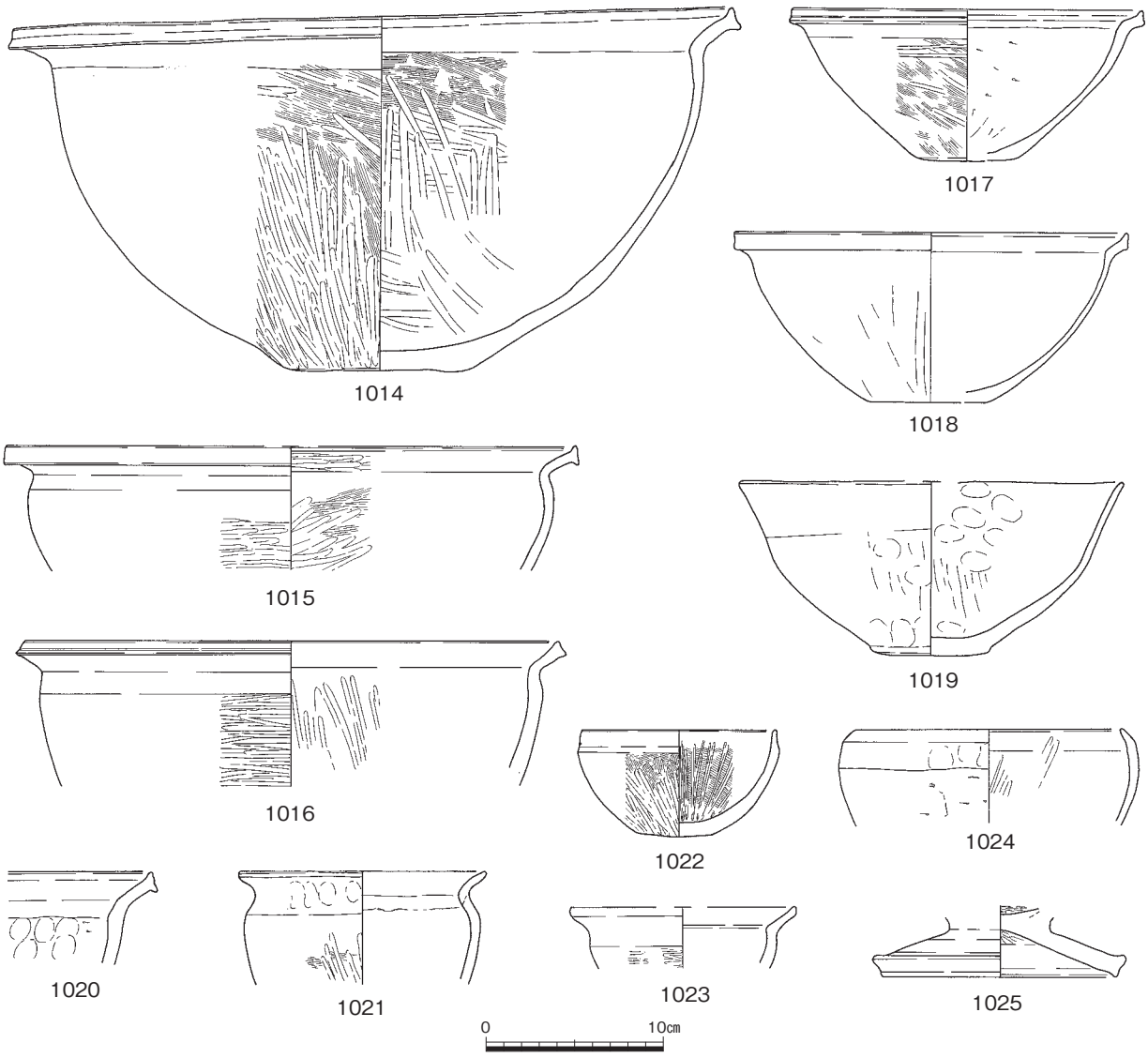


第167図　土坑27出土遺物④（1/4）

め、何らかの祭祀行為が行われた後に、意図的に割られ（957の肩部に意図的な穿孔が認められる）、最終段階で廃棄された可能性が考えられる。また、当遺構の土器群は多量の直径５㎝を超える円礫と共に廃棄されていることも注目されるが、これらの４点の長頸壺の胴内部には大きめの円礫が含まれており、意図的に置かれた可能性もある。一方、これらの長頸壺を載せたであろう器台が破片で１点のみの検出にとどまることについては、周囲に器台が集中する遺構（溝９・土坑138など）も認められるため、別々に廃棄された可能性が高いと考えている。また、完形で伏せられた状況で出土した大型鉢1014（長頸壺955の直下で検出）と周囲から出土した精製高杯1000～1008、精製脚付直口壺1009などの存在は、祭祀行為を具体的に復元する上で重要である。土器以外の遺物としては、打製石包丁S74、スクレイパーS75、石包丁未成品の可能性のあるS76、磨石S77、有溝石錘S78、台石S79・S80のほか、銅鏃M37、鉄鏃M38、鉄製ヤリガンナM39など多種多様なものが認められる。これらの遺物は、出土位置に大きな偏りはなく、土器や礫と混ざり合うように出土している。ただし、銅鏃や有溝石錘などは神明遺跡全体を見渡しても類例に乏しく、こうした希少な遺物がまとまって含まれていること自体がこの遺構の性格を特徴付けている可能性が考えられる。遺構の時期は、出土土器から弥・後・Ⅲの最新相と考えられるが、遺構が密集するＪ05からＪ08の中で最新の遺物を含むことから、集落の廃絶に伴って何らかの祭祀が執り行われた後、使用された道具類がまとめて廃棄された土坑である可能性がある。祭祀性を帯びた遺構から出土することの多い桃核の出土もその解釈を補強す

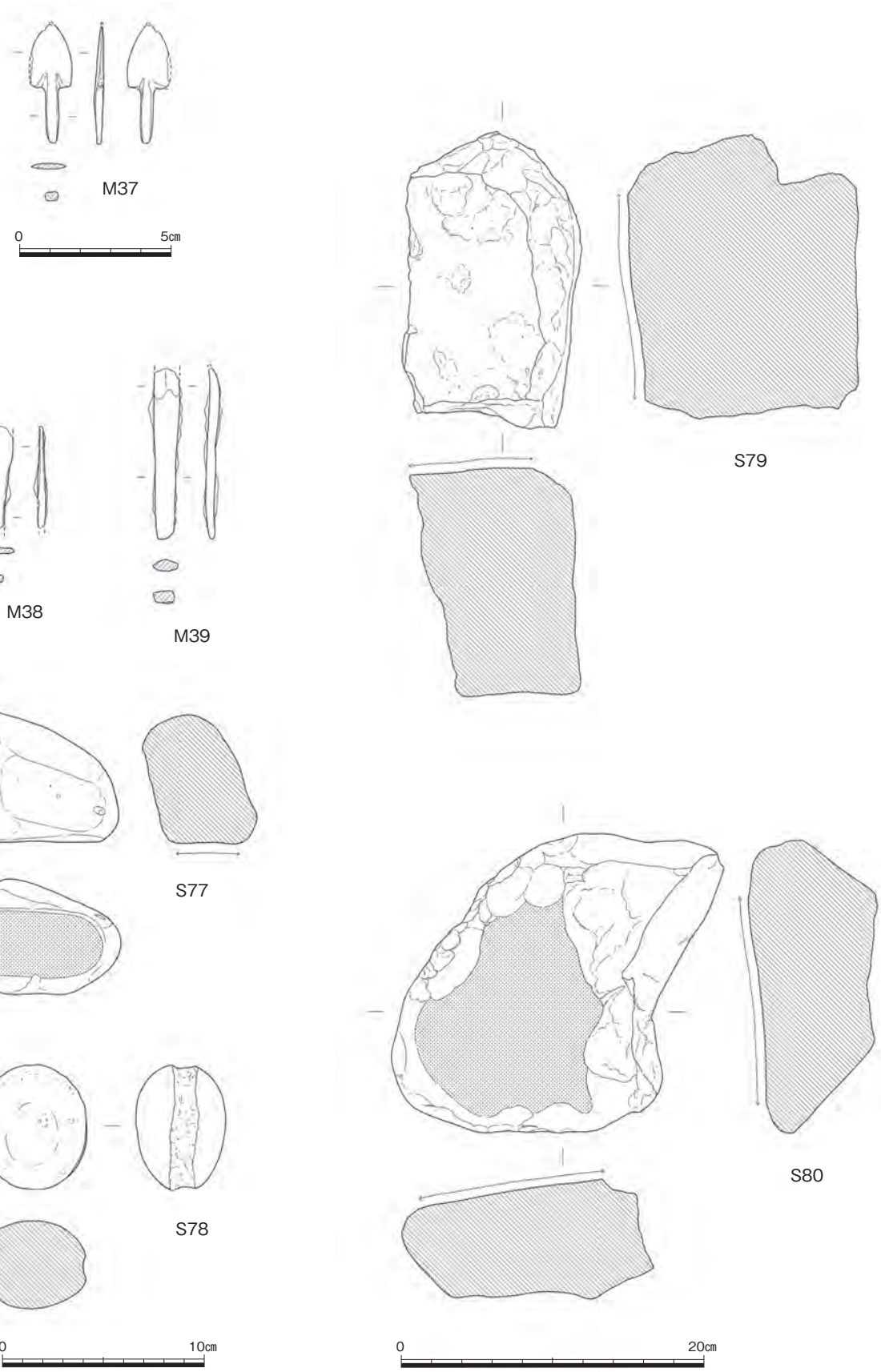


第168図　土坑27出土遺物⑤（1/4）

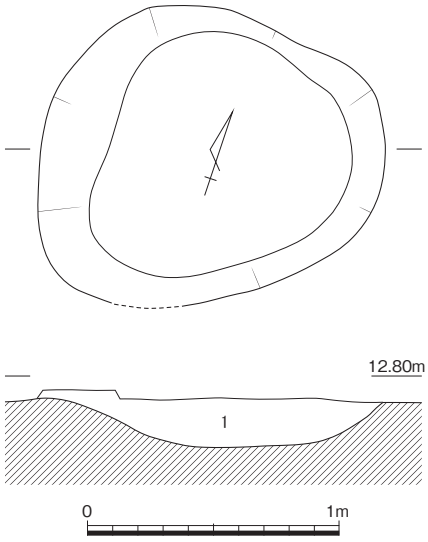


第169図　土坑27出土遺物⑥（1/4・1/2）

る。また、銅鐸出土地点に近接した遺構であることから、その関連性が注目される。　　（河合）



第170図　土坑27出土遺物⑦（1/2・1/3・1/4）



1　暗褐色(10YR3/4)砂質土（礫混）

第171図　土坑28（1/30）

土坑28（第12・171図）

竪穴住居11に北接して位置する土坑で、竪穴住居６との間に位置する。平面は不整円形を呈する。長軸長136㎝、短軸長120㎝、深さ20㎝を測り、断面は皿状を呈する。

遺構の削平が著しいこともあり、出土遺物は乏しく、所属時期の判断は難しいが、埋土の特徴などから、弥・後・Ⅰに近い時期を考えておきたい。　（河合）

土坑29（第12・172図、図版45－３）

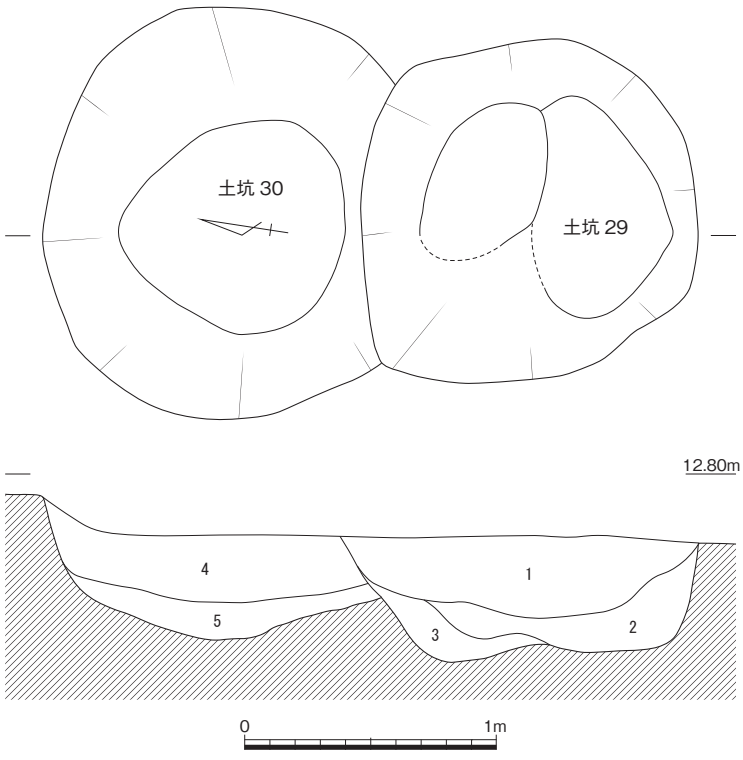
Ｊ06において、竪穴住居11の北東２ｍの所に位置する土坑である。平面形は円形で、断面形は逆台形を呈する。土坑30に切られるが、それとほぼ同規模・同形状で、規模は、長さが140㎝、幅が134㎝で、深さが50㎝である。

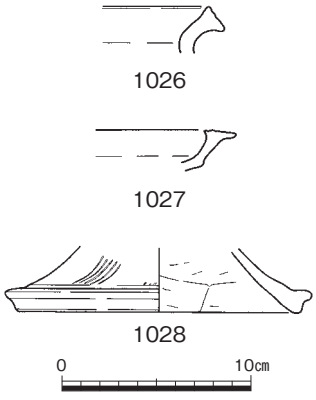
出土した遺物として、壺の口縁部**1026**、高杯口縁部片**1027**、高杯脚部片**1028**がある。出土遺物からみたこの土坑の時期は、弥・後・Ⅰである。　（弘田）

土坑30（第12・172・173図、図版45－３）

Ｊ06において、土坑29の北西に接して位置し、土坑29に南東部を切られている。平面形は円形で、断面形は椀状を呈する。規模は、長さが164㎝、幅が130㎝で、深さが42㎝である。

出土遺物には、壺口縁部片**1029**、高杯口縁部片**1030**、高杯脚部片**1031**～**1034**、分銅形土製品**C44**

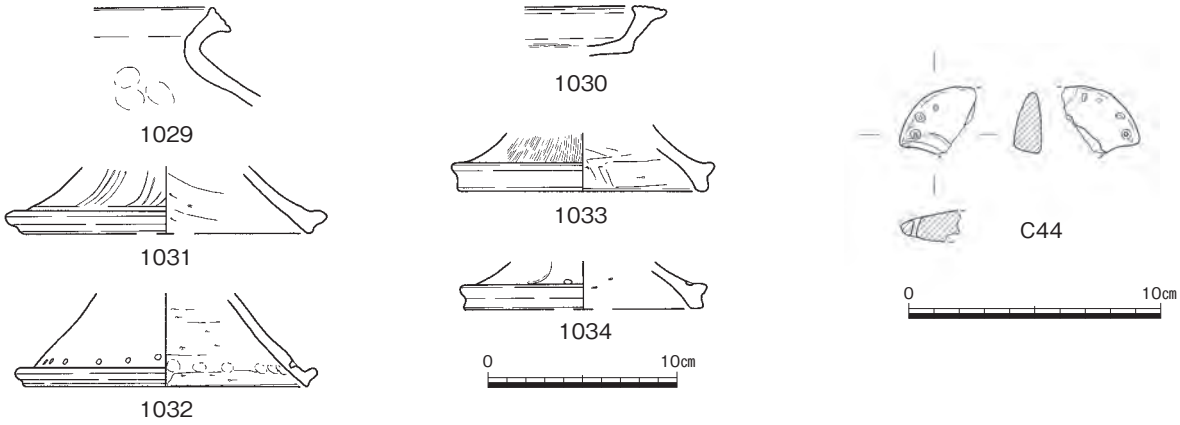




1　暗褐色(10YR3/3)粘性砂質土
　（黄褐色土粒多）
2　黒褐色(10YR3/2)粘性砂質土
　（黄褐色土粒少）
3　暗褐色(10YR3/4)砂質土
　（黄褐色土粒少）
4　黒褐色(10YR3/2)粘性砂質土
　（黄褐色土粒僅）
5　暗褐色(10YR3/3)砂質土
　（黄褐色土粒少）

第172図　土坑29・30（1/30）・土坑29出土遺物（1/3）

がある。**C44**は抉り部に平行して、櫛描き文が残る。出土土器の様相は土坑29とほぼ同じ弥・後・Ⅰであるが、切り合いから土坑29より古く位置付けられる。　（弘田）

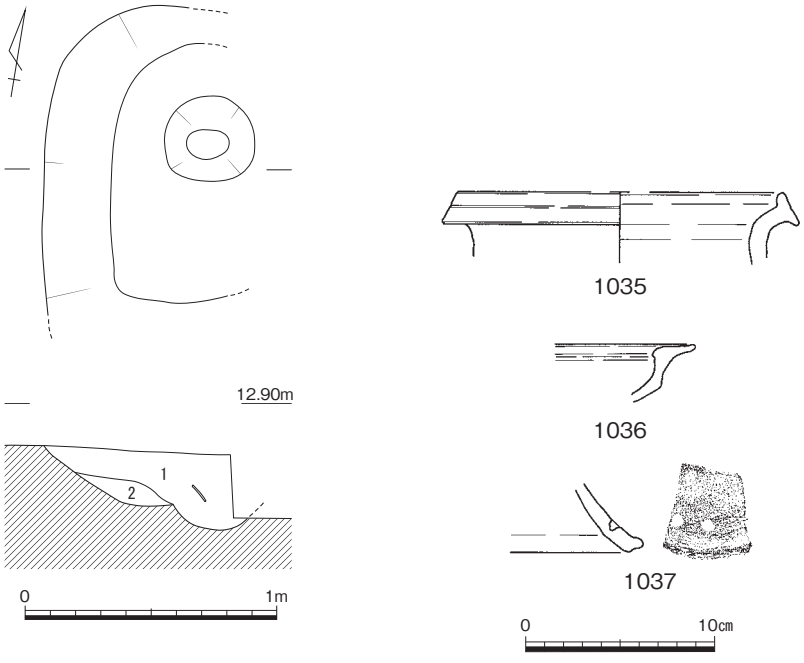


第173図　土坑30出土遺物（1/4・1/3）

土坑31（第12・174図）

Ｊ06において、土坑30の北に接して位置する土坑である。南を土坑30に切られており、東側は調査時の側溝によって詳細は不明である。平面形は楕円ないし隅丸方形をなしており、底面からさらに直径35㎝ほどの椀状のくぼみが存在する。断面形は椀状を呈すると思われる。規模は、長さ・幅とも不明であるが、深さは30㎝である。

出土遺物には、壺**1035**、高杯**1036・1037**があり、これらからみたこの土坑の時期は、弥・後・Ⅰである。（弘田）



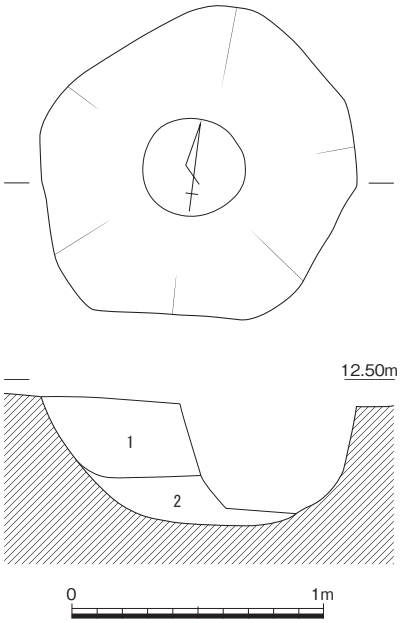
1　にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質土
2　灰黄褐色（10YR5/2）砂礫土

第174図　土坑31（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑32（第12・175図）

Ｊ06において、竪穴住居11の南東1.5ｍの所に位置する土坑である。平面形は円形で、断面形は椀状を呈する。規模は、長さが125㎝、幅が123㎝で、深さが48㎝である。

出土遺物には、壺**1038**、甕**1039**がある。**1038**は極端に下方へ拡張した口縁端部と直線的に立ち上がるやや長い頸部の特異なプロポーションを有し、薄手で丁寧に作られた土器で、後述する土坑48の一群と酷似しており、同時に作られた可能性が高い。時期は弥・後・Ⅰである。　（弘田）

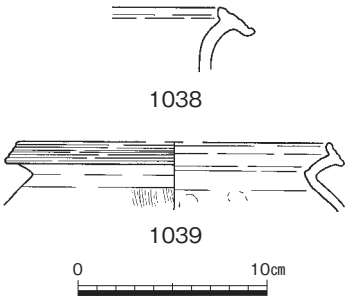


1　にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土
2　灰黄褐色(10YR4/2)砂礫土

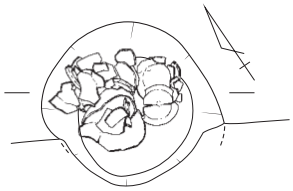
土坑33（第12・176・177図、図版46－１）

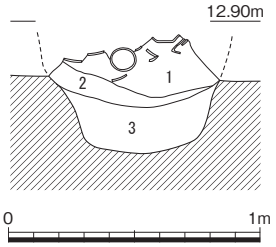
竪穴住居11の南東約3.5ｍに位置する土坑で、平面は円形を呈する。調査中に、土器が集中的に出土した地点があり、注意深く確認したところ、この土器群は本来、土坑の中に収まっていたことが判明した。そのため、土坑の正確な規模は不明である。

出土遺物には、多量の弥生土器が認められたが、ほとんどが第１層内で折り重なるように出土し、なかでも**1047・1049**の高杯は杯部を上に向けて整然と配置されたかのような状況であった。

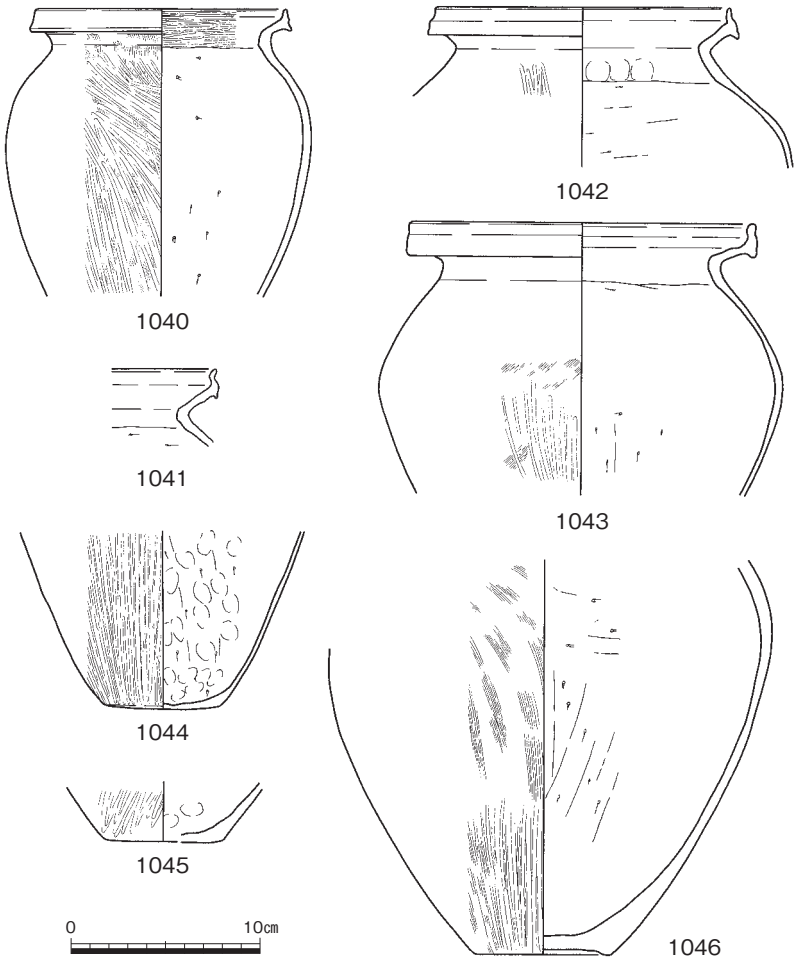


第175図　土坑32（1/30）・出土遺物（1/4）

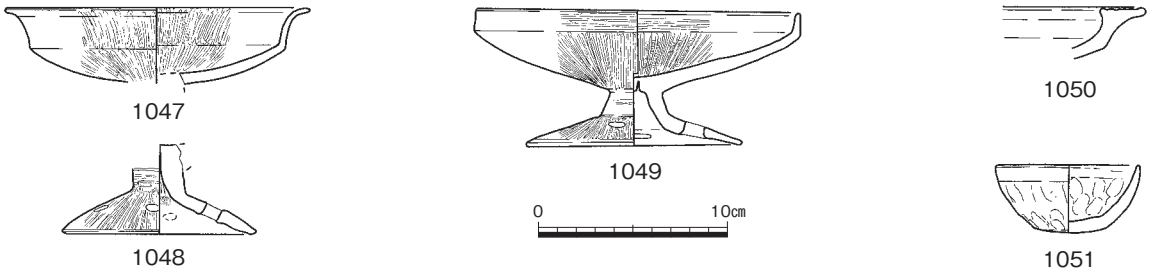




1　黒褐色(10YR3/2)粘性砂質土
2　暗褐色(10YR3/3)砂質土
3　暗褐色(10YR3/3)粗砂
　（暗褐色(10YR3/3)砂質土斑状含）



第176図　土坑33（1/30）・出土遺物①（1/4）



第177図　土坑33出土遺物②（1/4）

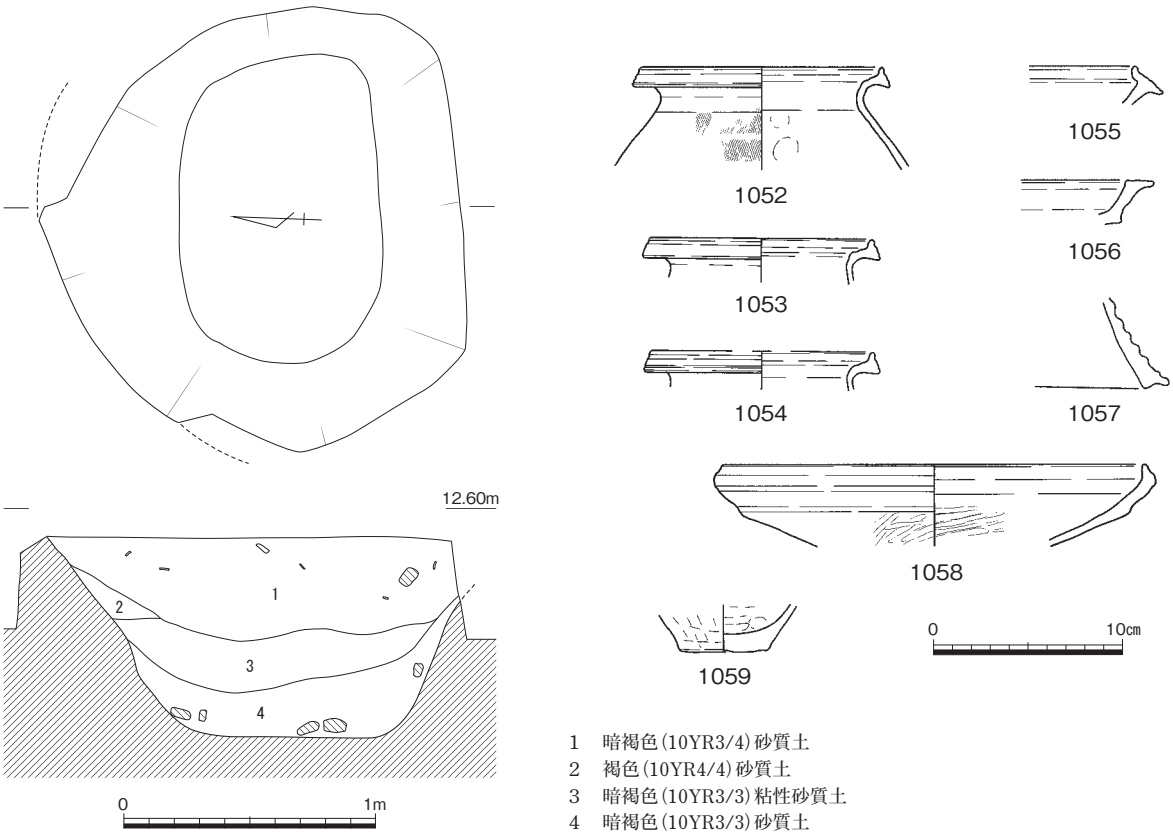
遺構の時期は、1050以外の土器が示す弥・後・Ⅲと考えられる。（河合）

土坑34（第12・178図）

竪穴住居11の南東約6.5ｍに位置する土坑で、平面は楕円形を呈する。周囲を掘り下げる途中で検出されたため遺構の正確な規模は不明であるが、現状で長軸長175㎝、短軸長167㎝、深さ80㎝を測り、断面は逆台形を呈する。出土遺物には、弥生土器1052～1059が認められる。弥・中・Ⅱ～弥・中・Ⅲのものが主体を占めるが、弥・後・Ⅰの高杯1056が下層から出土したため、遺構の時期は弥・後・Ⅰと考えておきたい。形態等から貯蔵穴としての利用を想定している。（河合）

土坑35（第12・179図）

土坑34の南東に位置する土坑で、平面は不整楕円形を呈する。長軸長143㎝、短軸長112㎝、深さ55㎝を測り、断面は逆台形を呈する。出土遺物には、甕1060・1061・1063、壺1062が認められ、弥・

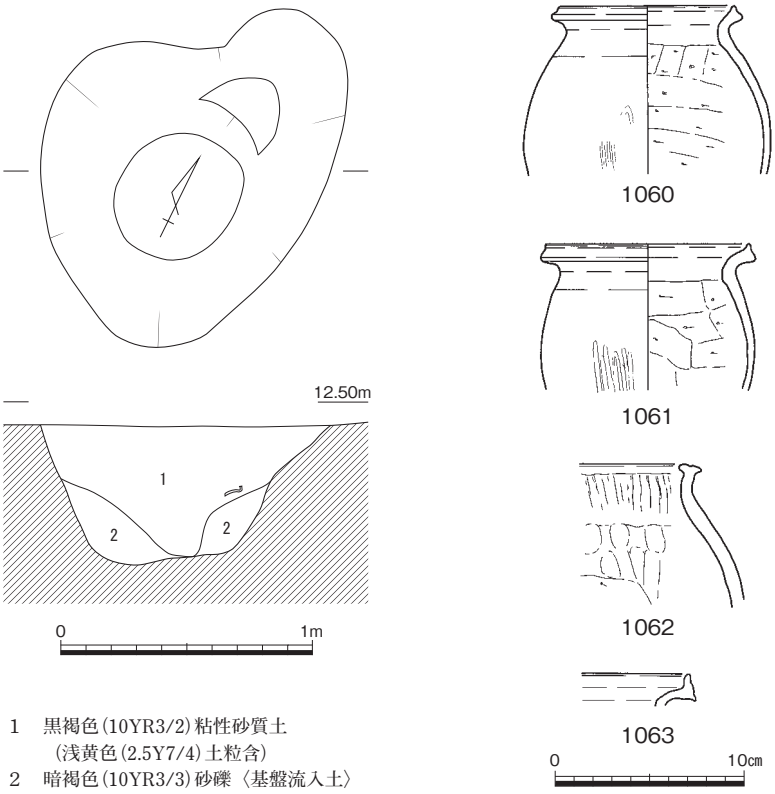


1　暗褐色（10YR3/4）砂質土
2　褐色（10YR4/4）砂質土
3　暗褐色（10YR3/3）粘性砂質土
4　暗褐色（10YR3/3）砂質土

第178図　土坑34（1/30）・出土遺物（1/4）

中・Ⅲの1063も含まれているが、それ以外は弥・後・Ⅰに属しており、遺構の時期は、弥・後・Ⅰと考えられる。土坑の断面形態や深さ、さらには所属時期などから周辺の土坑32・34などと同じく、貯蔵穴として利用されていた可能性を考えておきたい。

（河合）



1　黒褐色(10YR3/2)粘性砂質土
　(浅黄色(2.5Y7/4)土粒含)
2　暗褐色(10YR3/3)砂礫〈基盤流入土〉

第179図　土坑35（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑36（第12・180図）

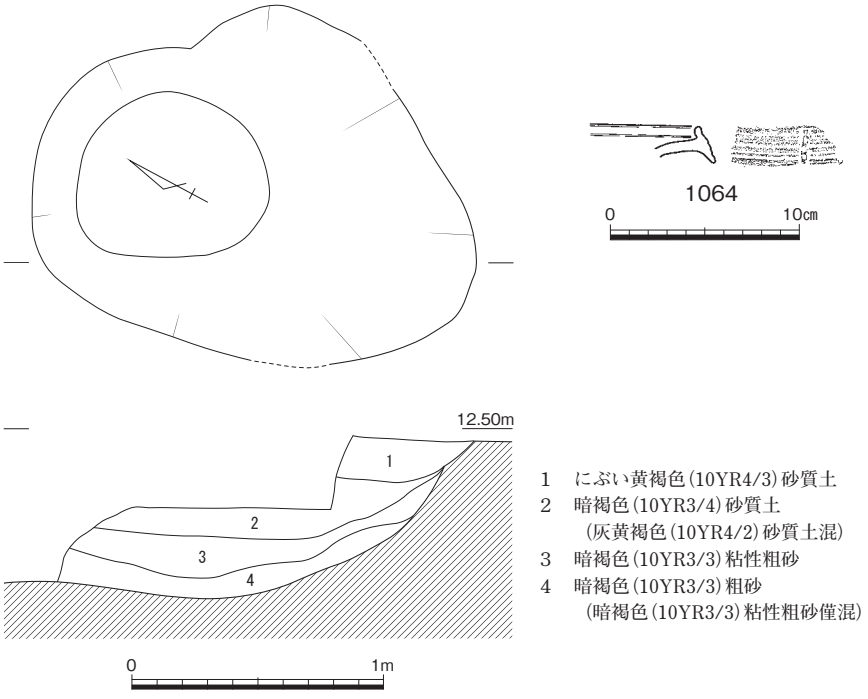
Ｉ６の南東隅付近で検出された土坑で、平面は不整楕円形を呈する。北半の大部分が現代の削平を受けているため、正確な規模は不明であるが、現状で長軸長180㎝、短軸長140㎝、深さ64㎝を測り、断面は椀状を呈する。埋土は４層に分かれ、徐々に埋まった状況を示している。

出土遺物には、弥生土器壺1064がある。この遺物などから、遺構の時期は弥・後・Ⅰと考えておきたい。遺構の形態や所属時期などから貯蔵穴としての利用を想定したい。　（河合）

土坑37（第12・181図）

土坑36の東に位置する。微高地から北に下がる斜面に立地し、北半は削平されている。検出面の標高は12.48ｍである。不整形で底面も凹凸が激しく、中央部に径約１ｍのくぼみがある。堆積層も微高地（南）側から斜面下方（北）側に流れており、人為的な遺構でない可能性もある。

土器細片が少し出土している。甕1066が新しい様相



1　にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土
2　暗褐色(10YR3/4)砂質土
　(灰黄褐色(10YR4/2)砂質土混)
3　暗褐色(10YR3/3)粘性粗砂
4　暗褐色(10YR3/3)粗砂
　(暗褐色(10YR3/3)粘性粗砂僅混)

第180図　土坑36（1/30）・出土遺物（1/4）

を示すが、混入の可能性もあり、高杯にみる弥・後・Ⅰと考えておきたい。　（渡邉）

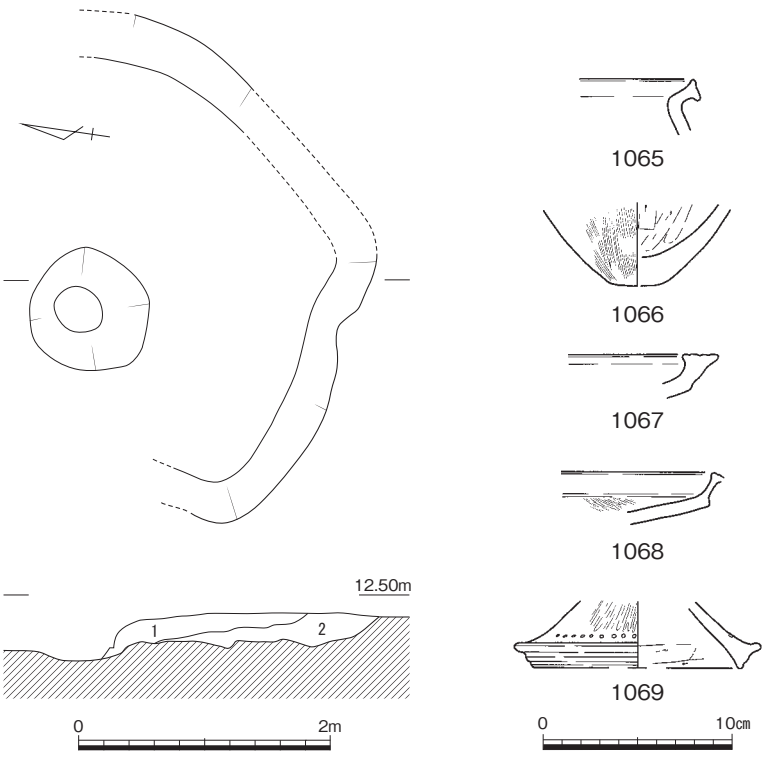
土坑38（第12・182図）

土坑37の南に位置する。径１ｍに満たないが、深さ約30㎝遺存し、断面もＵ字形を呈する。

図化し得なかったが土器細片が出土しており、弥・中・Ⅲに比定できる。　（渡邉）

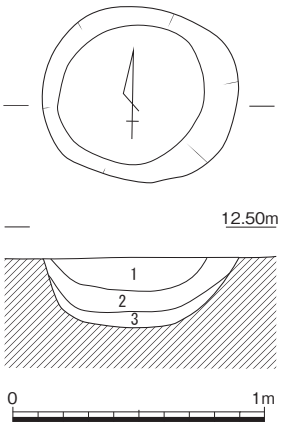
土坑39（第12・183図）

土坑38の西に位置する。西半は調査区外となる。検出面の標高は12.37ｍであるが、調査区壁面の観察では近代以降の耕作土（第３層）直下の12.8ｍまで立ち上がり、深さ約70㎝を測る。底面は平らで、北側壁面は緩く上方へ開いているが南側の壁面は直線的に立ち上がっており、本来は土坑26の様な形状を呈していたと思われる。



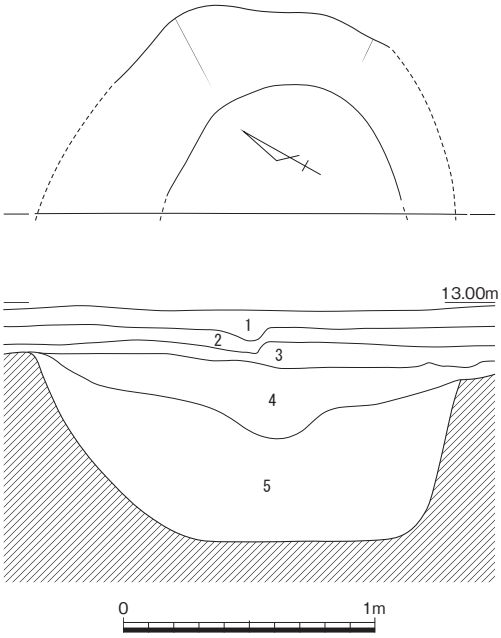
1　黒褐色(7.5YR3/1)粗砂質土
2　灰黄褐色(10YR4/2)砂礫土～粗砂

第181図　土坑37（1/60）・出土遺物（1/4）



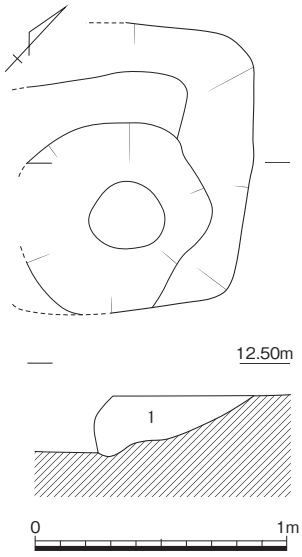
1　褐色(10YR4/4)砂質土（礫少含）
2　暗褐色(10YR3/4)砂質土（礫含）
3　暗褐色(10YR3/4)粘性粗砂

第182図　土坑38（1/30）



1　道路整地層
2　真砂土
3　暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土
4　黒褐色(10YR3/2)砂質土
5　灰黄褐色(10YR4/2)砂質土（礫少含）

第183図　土坑39（1/30）



1　黒褐色(10YR3/2)砂質土

第184図　土坑40（1/30）

土器細片が僅かに出土したのみである。上下に拡張した口縁端部に凹線を施す甕があり、弥・中・Ⅲに位置付けられる。　（渡邉）

土坑40（第12・184図）

土坑39の南東に位置する。西半は調査区外となる。平面は方形を呈するが底面はダラダラと西に下がり、凹凸もある。

弥・後・Ⅰと思われる土器細片が僅かに出土した。　（渡邉）

土坑41（第12・185図）

土坑40の南に位置する。南～西側は調査区外となる。また、本調査地点は工程に合わせて調査区を細かく区切っており、その際に設けた側溝により大部分を削平してしまった。断面図は調査区壁面で観察された状況で、南北長２ｍを超える大形の遺構で、最深部で深さ49㎝ある。底面は凹凸が激しく、土坑37に似ている。

出土遺物は土器細片のみで、中期後葉から後期前葉の幅がある。1071の口縁端部が外方へ引き出されている特徴から弥・後・Ⅰでも新段階に比定され、その頃には埋没したと考えられる。（渡邉）

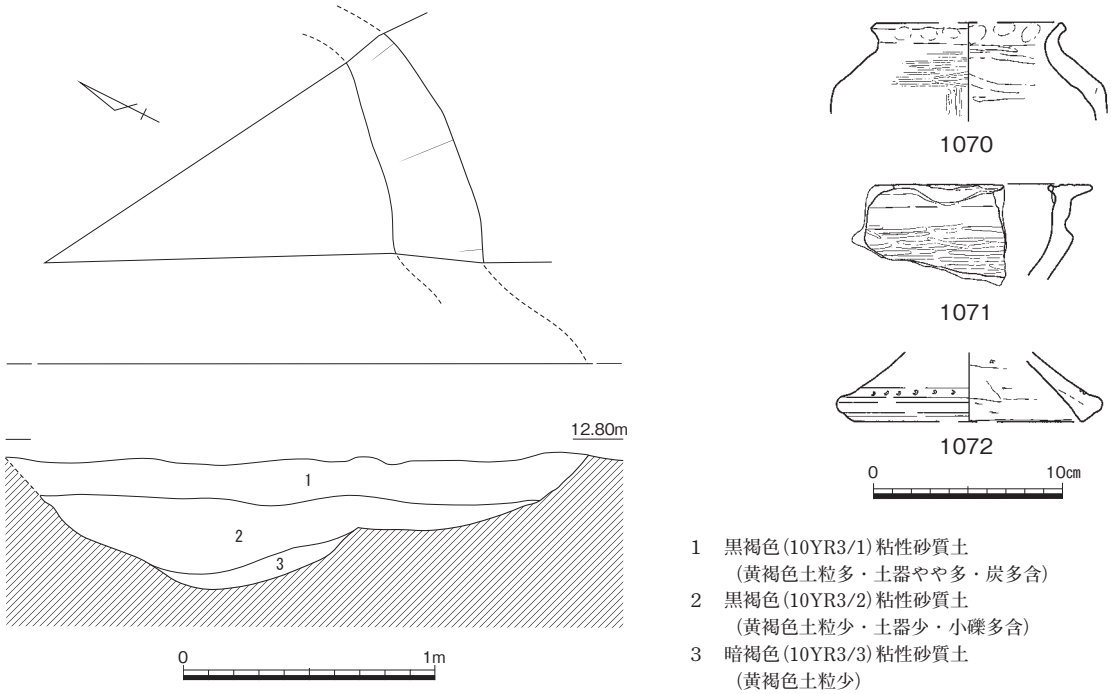
土坑42（第12・186図）

土坑41の北東に位置する。微高地上部に近く、検出面の標高は12.50ｍである。径約２ｍの大形の土坑で、断面椀形としているが、底面の比較的平らな、ほぼ逆台形を呈している。

出土遺物は僅かな土器細片のみで断定できないが、弥・後・Ⅰの範疇であろう。　（渡邉）

土坑43（第12・187図）

土坑42の東に位置する。検出面の標高は12.56ｍである。土坑42と同等の規模を有する大形の土坑で、底面は平らで断面逆台形を呈す。埋土は大きく２層に分かれ、土器の大半は上層から出土した。



1　黒褐色(10YR3/1)粘性砂質土
（黄褐色土粒多・土器やや多・炭多含）
2　黒褐色(10YR3/2)粘性砂質土
（黄褐色土粒少・土器少・小礫多含）
3　暗褐色(10YR3/3)粘性砂質土
（黄褐色土粒少）

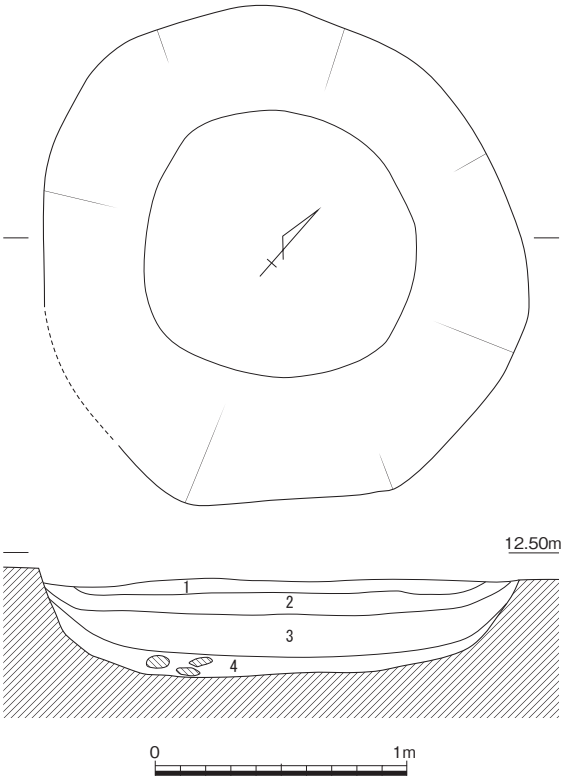
第185図　土坑41（1/30）・出土遺物（1/4）

なお、当土坑は工事の都合で２度に分けて調査しており、最初に調査を行った部分は埋め戻し、再調査した際に、その埋め土に含まれた土器細片も当土坑出土として取り上げた。新しい様相を示す高杯**1074**は埋め戻し部分から出土しており、混入の可能性が高い。攪乱を受けていない部分から出土した土器は中期後葉～後期前葉の土器のみで、ある程度の時期幅があるが、高杯**1073**から、弥・後・Ⅰに埋没したと考えられる。　　（渡邉）

土坑44（第12・188図）

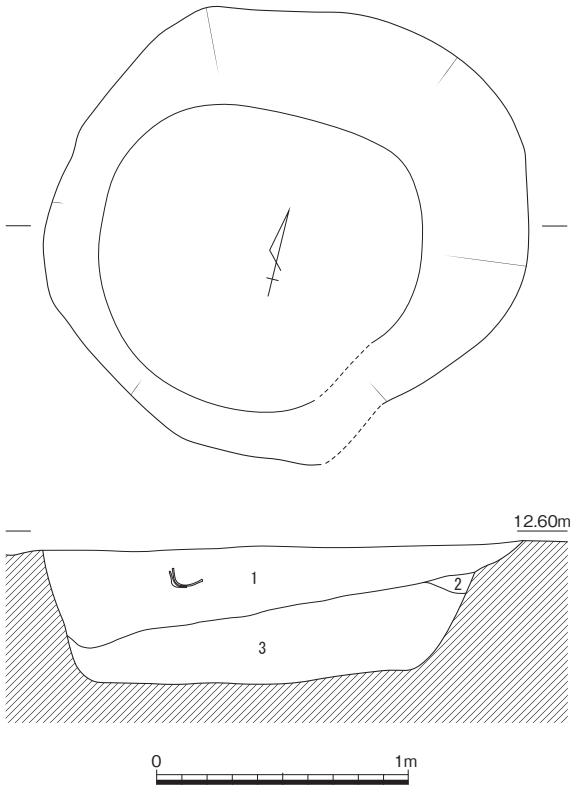
土坑43の北に位置する。当土坑も分割して調査しており、一貫した土層断面を作成できていない。

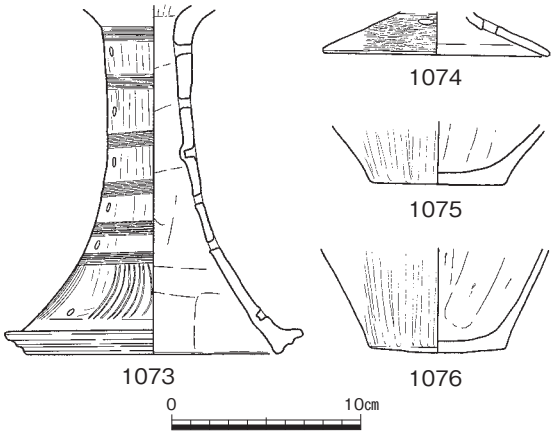
検出面からの深さ23㎝と浅く、上部の削平も一因ではあるが、底面の標高が12.20ｍと大形で断面逆台形の一群より20㎝以上高く、土坑の機能差を表していると推察される。埋土や土器の様相に大差は認められなかった。



1　にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土
2　暗褐色(10YR3/4)砂質土
3　暗褐色(10YR3/3)砂質土
4　暗褐色(10YR3/4)粘性粗砂（礫含）

第186図　土坑42（1/30）





1　黒褐色(10YR3/2)粘性砂質土
2　にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土
3　暗褐色(10YR3/3)粘性砂質土

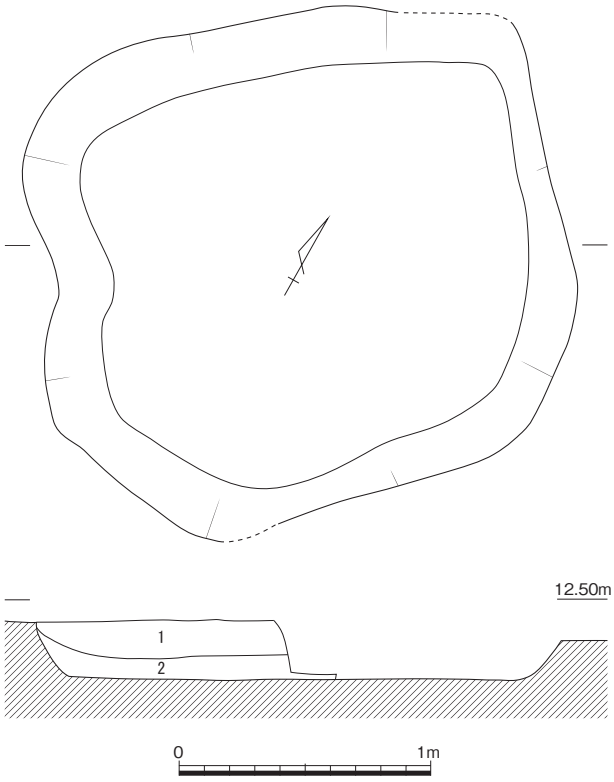
第187図　土坑43（1/30）・出土遺物（1/4）

出土遺物は土坑の遺存状況からすると比較的多いが、細片ばかりであった。主に中期後葉の土器を含んでいたが、図示した土器はいずれも後期前葉のものである。掘削は中期に遡る可能性があるが、弥・後・Ⅰに埋没したと考えられる。（渡邉）

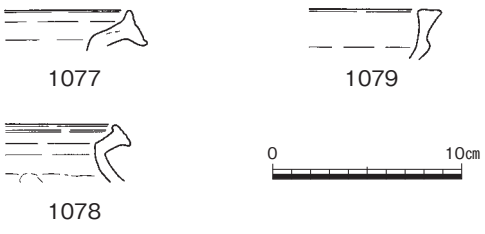
土坑45（第12・189図）

土坑44の北に位置する土坑で、平面は楕円形を呈する。長軸長105㎝、短軸長82㎝、深さ38㎝を測り、断面は椀状を呈する。埋土は礫を比較的多く含んでおり、遺物は第１層に多く含まれていた。

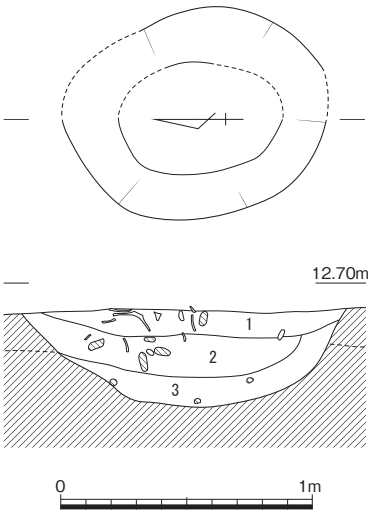
図化できたのは、甕の底部**1080**であり、弥生時代中期のものであるが、他に後期の高杯片なども含まれていることから、遺構の時期は弥・後・Ⅰと考えておきたい。（河合）



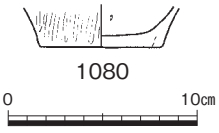
1　黒褐色(7.5YR3/1)粗砂質土　　2　灰黄褐色(10YR4/2)砂礫土～粗砂



第188図　土坑44（1/30）・出土遺物（1/4）



1　褐色(10YR4/4)砂質土（土器多含）
2　暗褐色(10YR3/4)砂質土（礫含）
3　暗褐色(10YR3/4)粘性粗砂（礫多含）

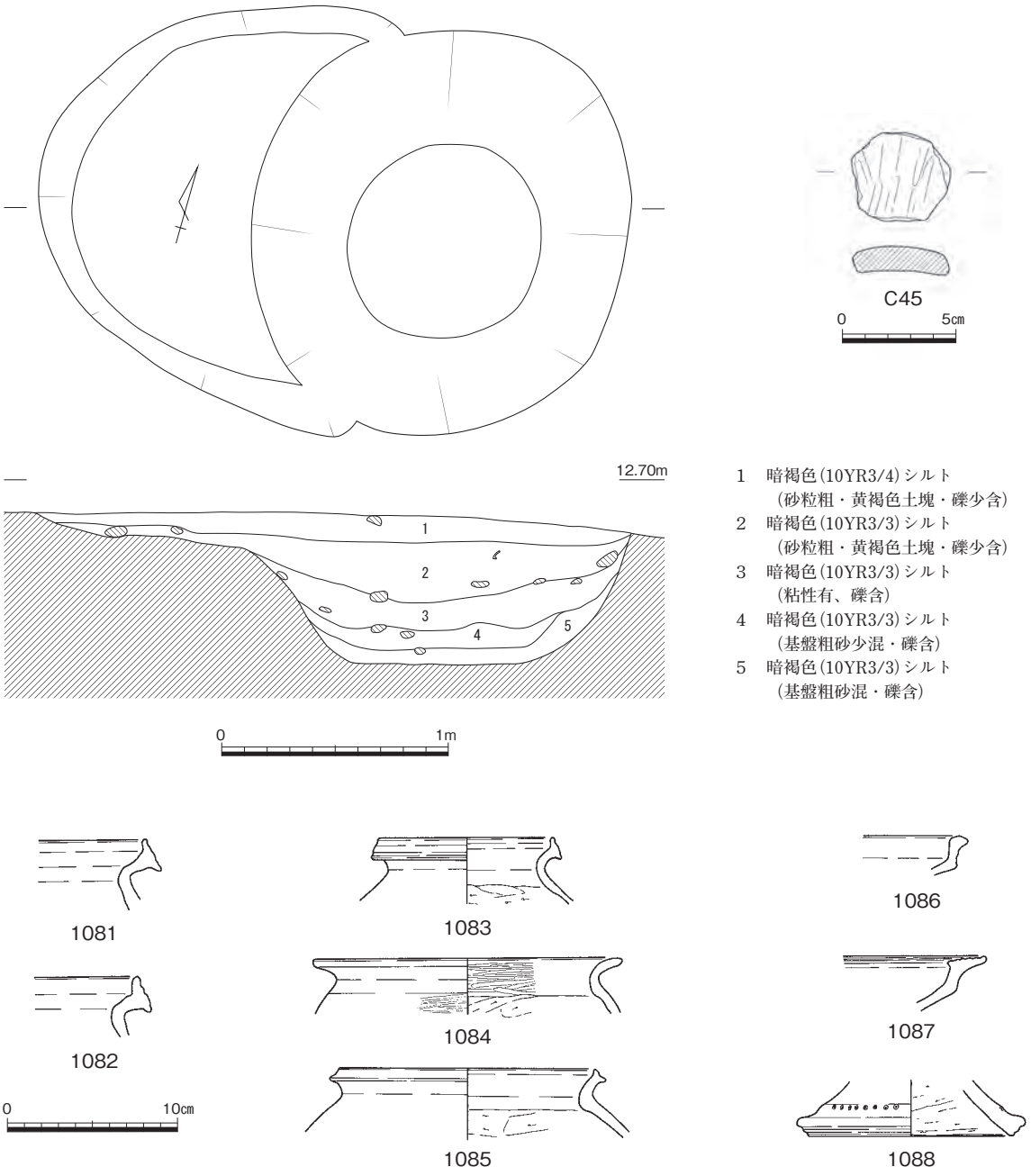


第189図　土坑45（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑46（第12・190図）

土坑44の東に位置する土坑で、平面は円形を呈するが、西側が緩やかに傾斜しながら外側に拡張されている。中心の土坑の規模は長軸長177㎝、短軸長168㎝、深さ66㎝を測り、断面は逆台形を呈する。埋土は礫を比較的多く含んでいた。

出土遺物には、甕1081～1085、高杯1086～1088がある。遺構の時期は、この土器などから弥・後・Ⅰと考えることができ、周囲にあるほぼ同時期の土坑とともに、貯蔵穴として利用されていた可能性を考えておきたい。　（河合）

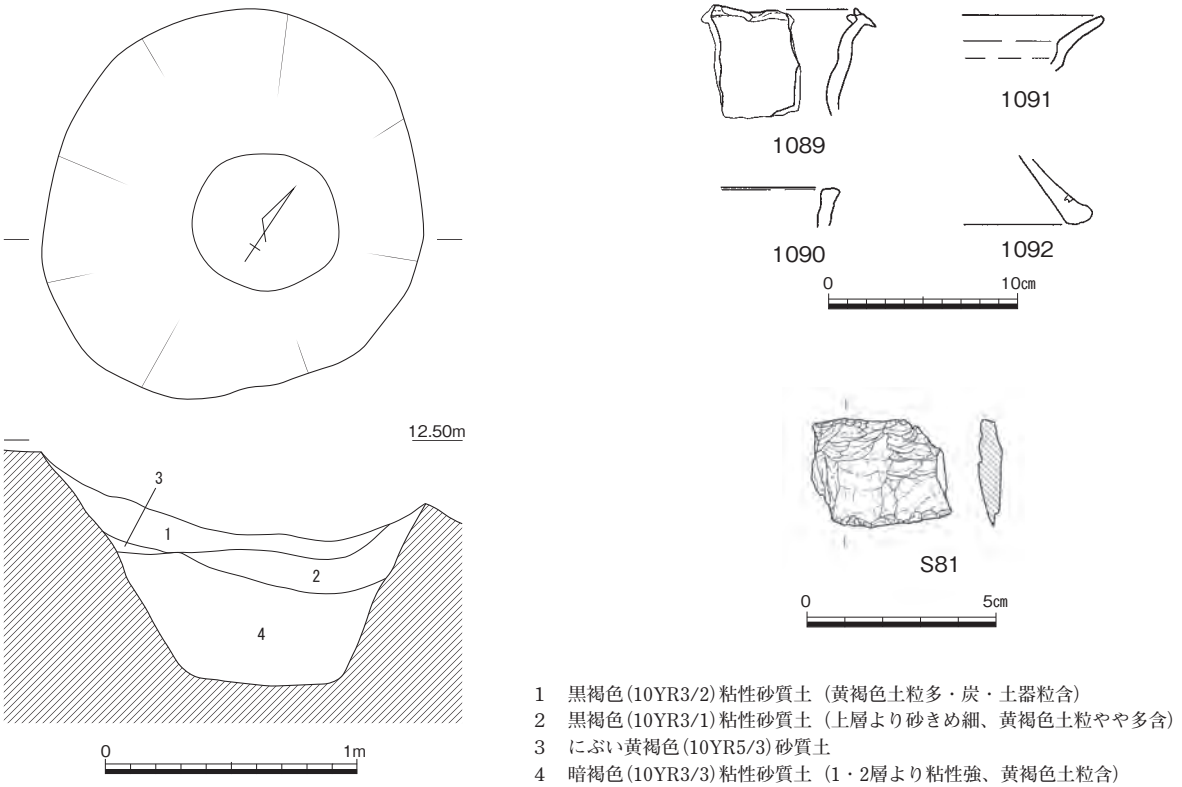


第190図　土坑46（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）

土坑47（第12・191図）

土坑46の北東に位置する。微高地東斜面で、東半は地形改変により削平を受けている。検出面上面での規模は径約1.5ｍで、底面では65㎝と比較的壁面が急に傾斜している。最上層には炭を含み、土器の多くも第１層から出土した。

出土遺物は土器細片のみで、弥・中・Ⅲが主体を占める。しかし高杯1091はなかでも新しい様相を示し、弥・後・Ⅰの新しい段階に埋没したと考えられる。　（渡邉）

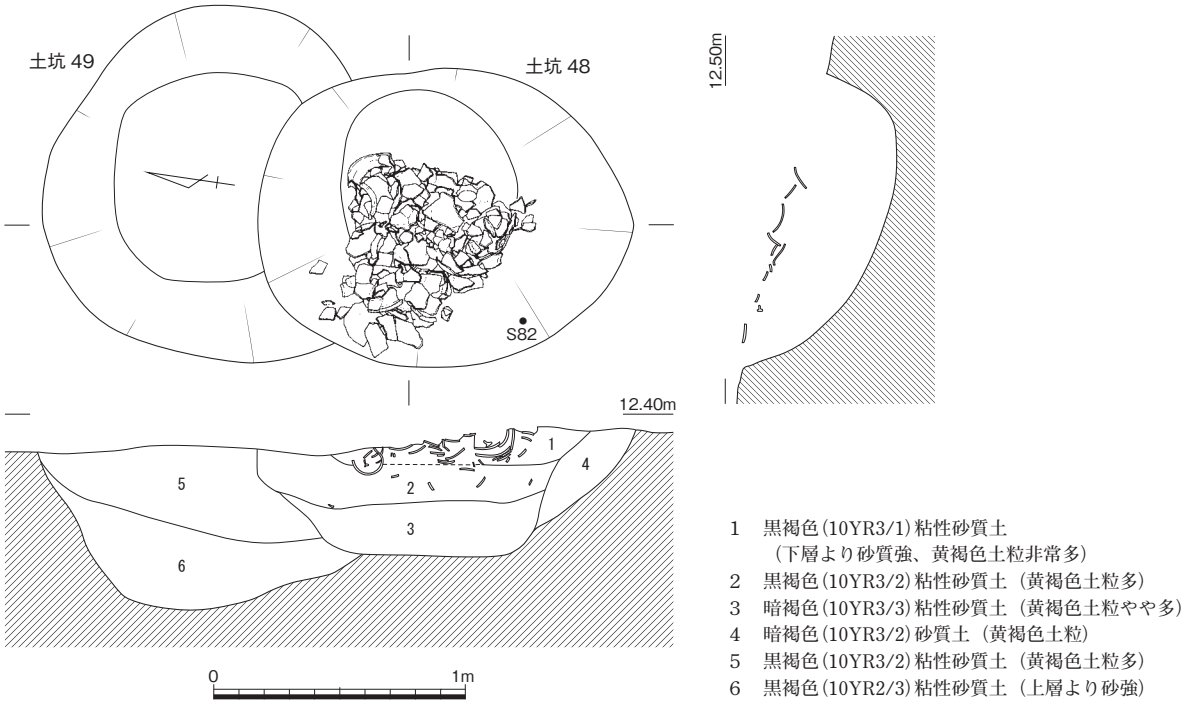


1　黒褐色(10YR3/2)粘性砂質土（黄褐色土粒多・炭・土器粒含）
2　黒褐色(10YR3/1)粘性砂質土（上層より砂きめ細、黄褐色土粒やや多含）
3　にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土
4　暗褐色(10YR3/3)粘性砂質土（1・2層より粘性強、黄褐色土粒含）

第191図　土坑47（1/30）・出土遺物（1/4・1/2）

土坑48・49（第12・192～196図、図版46－２・84～86・107）

土坑46の東、土坑47の南に位置する。東半は微高地の東側斜面地で、地形の改変を受けている。重

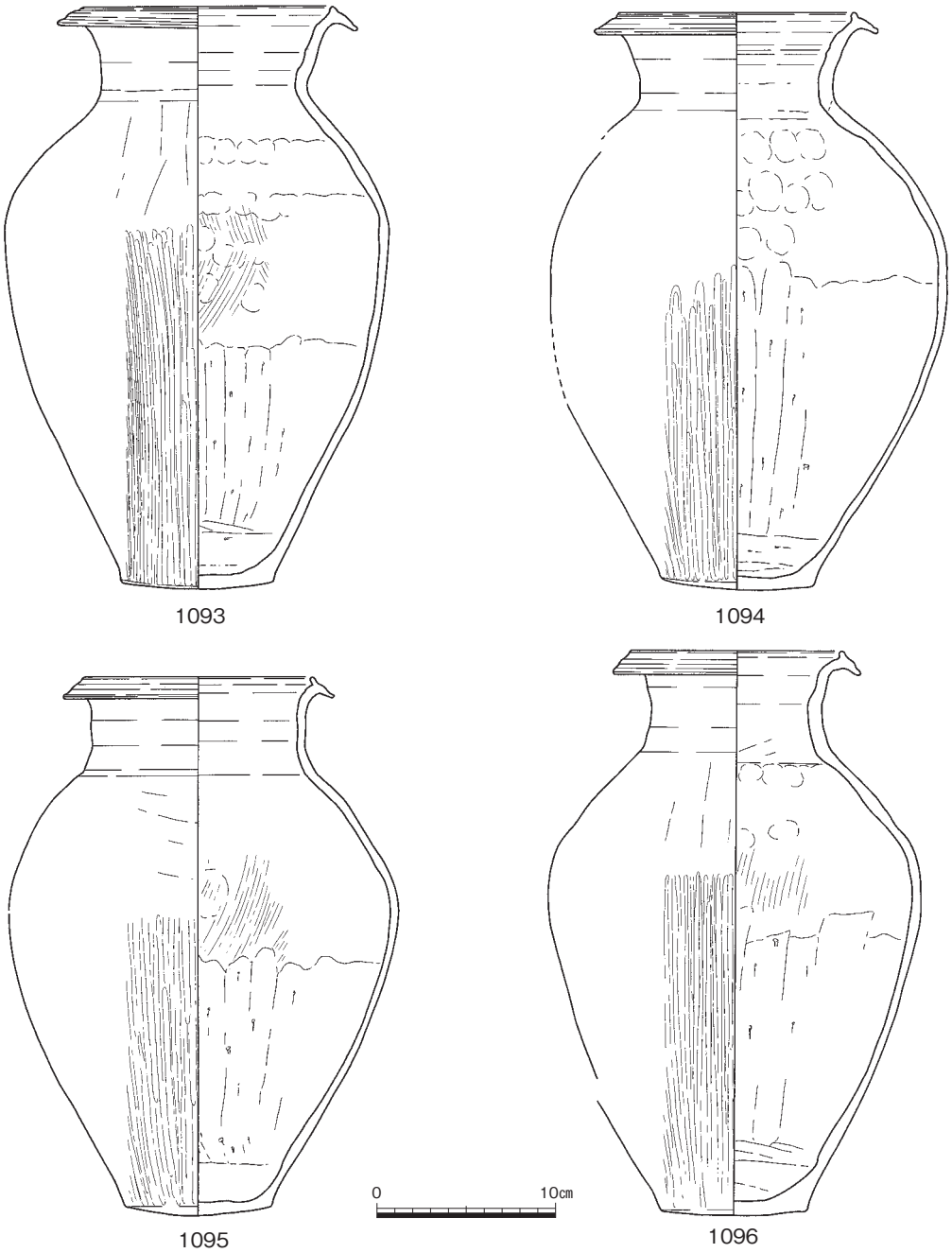


1　黒褐色(10YR3/1)粘性砂質土
　（下層より砂質強、黄褐色土粒非常多）
2　黒褐色(10YR3/2)粘性砂質土（黄褐色土粒多）
3　暗褐色(10YR3/3)粘性砂質土（黄褐色土粒やや多）
4　暗褐色(10YR3/2)砂質土（黄褐色土粒）
5　黒褐色(10YR3/2)粘性砂質土（黄褐色土粒多）
6　黒褐色(10YR2/3)粘性砂質土（上層より砂強）

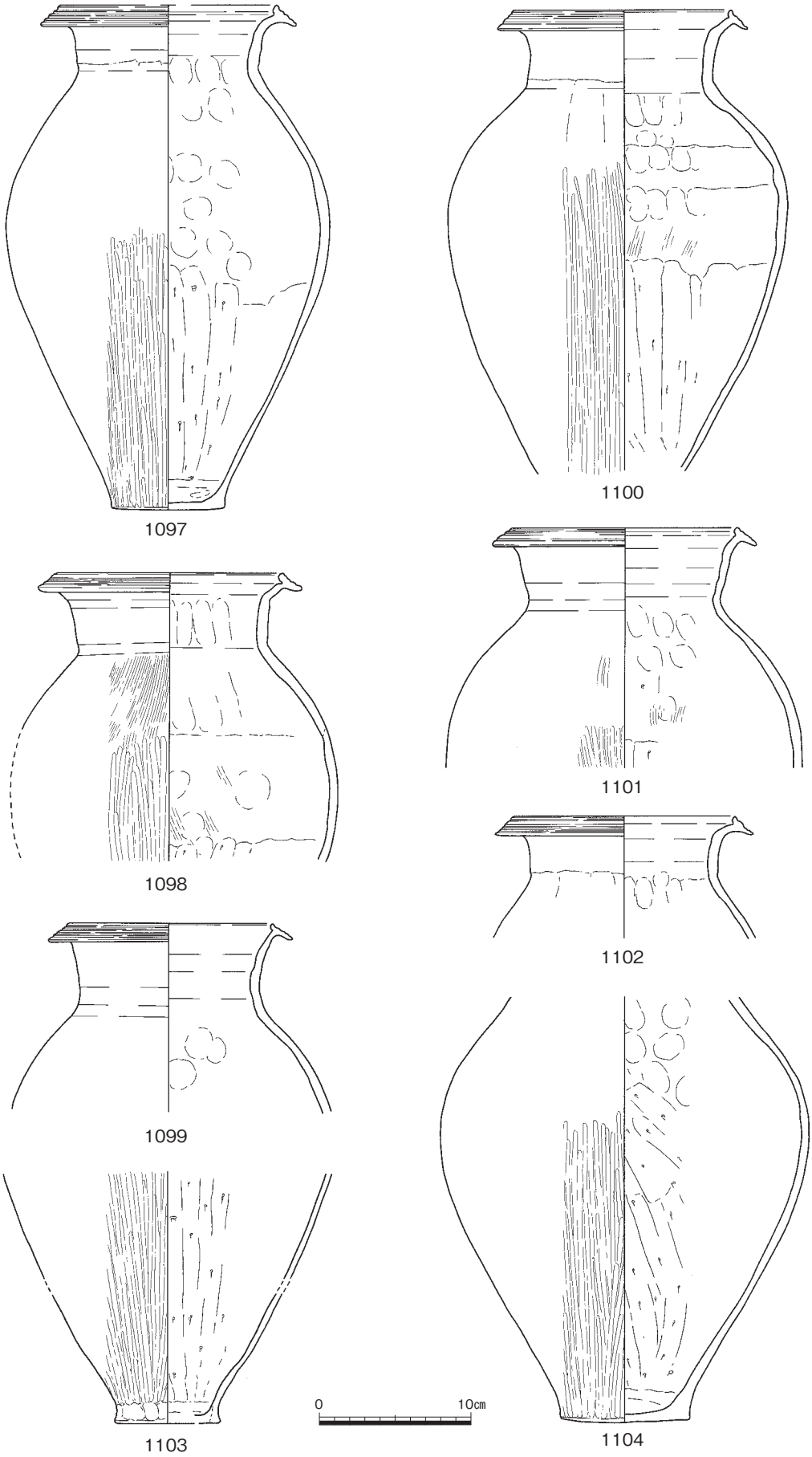
第192図　土坑48・49（1/30）

複した２基の土坑で、南側の新しい土坑を48、北側の古い土坑を49とした。土坑48は第１～４層、土坑49は第５・６層に対応する。底面は土坑48の方が約20㎝高い。土器は第１～２層から特に多く出土した。土坑49の下層と接合した個体もあり、２基の土坑の遺物を、完全には分離できていない。

土坑48出土とした土器は細かく割れた破片ばかりであったが、図面上では完形に復元できた土器も多く、完形で置かれていた可能性がある。大部分は**1093～1102**のような土器で、強いヨコナデを施した長い頸部と下方に著しく引き出して拡張した口縁端部を有する。頸部の形状から壺としたが、胴部の張りは弱く、器壁も薄く甕と区別し難い。頸部の立ち上がりは直線的なものとやや外方へ開くものがあるが、いずれも口縁端部を折り曲げて特に下方へ引き出し、端面に凹線を施す。そのほかの特徴として、内面のケズリの位置が低い、底部が突出気味でミガキを施す、薄手でやや硬質に焼成される、



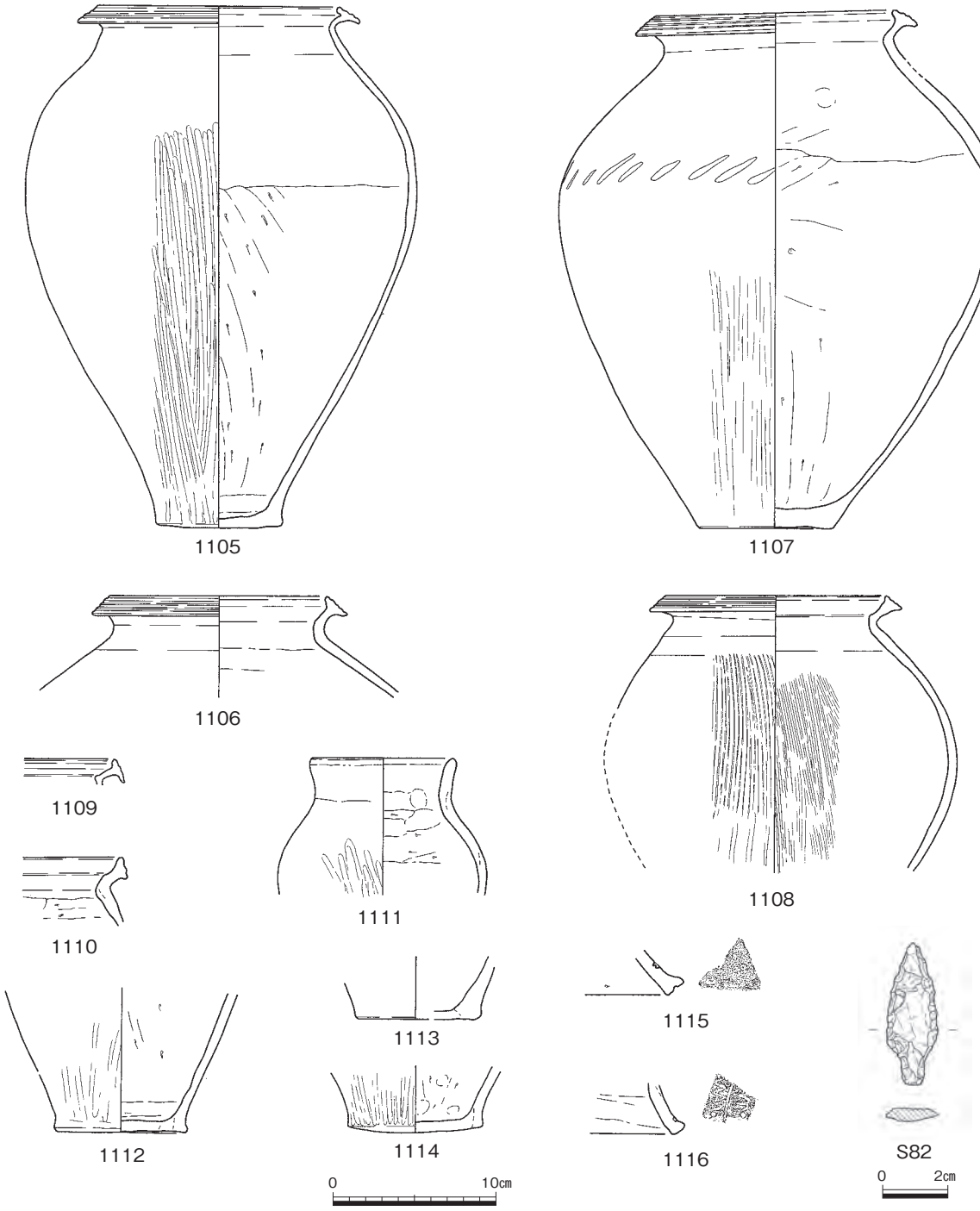
第193図　土坑48出土遺物①（1/4）



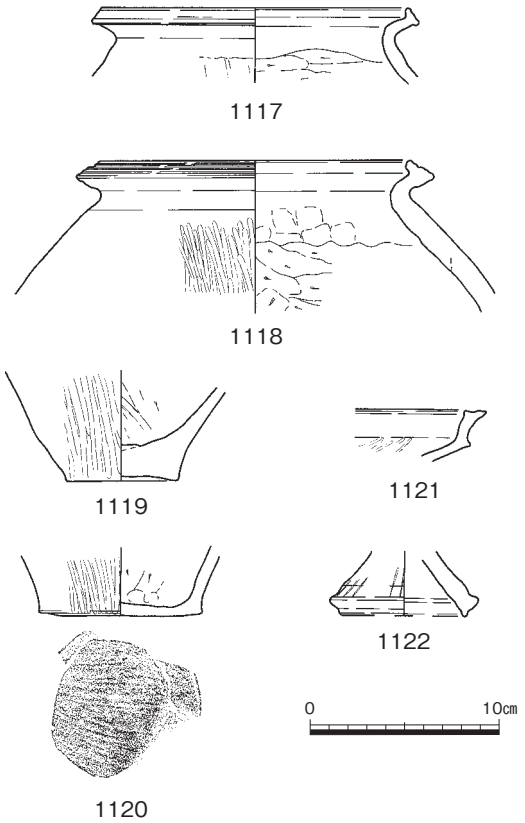
第194図　土坑48出土遺物②（1/4）

黄褐色の色調を呈すなどが挙げられる。このような土器群は他に見られず、特別に一括して作られた可能性が高い。1105～1110などの通有の土器も出土している。1116は高杯の脚部で、縦方向の直線と波形の沈線文を篦で描いている。稚拙な鋸歯文にも見えるが、門前池遺跡（『門前池遺跡』岡山県教育委員会　1975年）の銅鐸形土製品の文様との類似を指摘しておく。石鏃S82はほぼ検出面で出土した。

第196図に土坑49から出土した土器を示す。1120は先述した共通の特徴を有する土器の底部片で、土坑48からの混入である可能性が高い。両土坑とも中期後葉～後期前葉の土器を含むが、弥・後・Ⅰの間に、あまり時間を置かずに埋没したと推察される。（渡邉）



第195図　土坑48出土遺物③（1/4・1/2）



第196図　土坑49出土遺物（1/4）

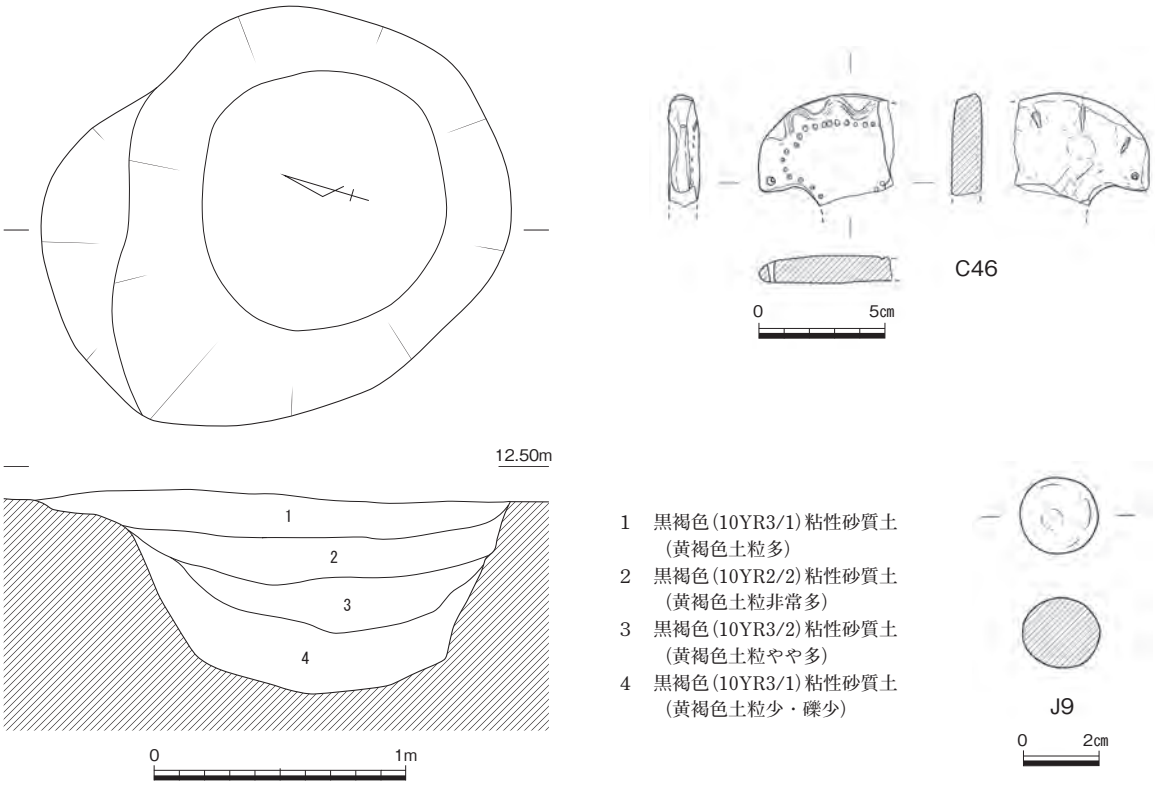
土坑50（第12・197・198図、図版46－３・115・119）

土坑49の南に位置する。土坑51・52と東西方向に連なる３基の土坑の東端にあり、一番新しい。微高地東斜面にあり、東半は地形改変を受けている。

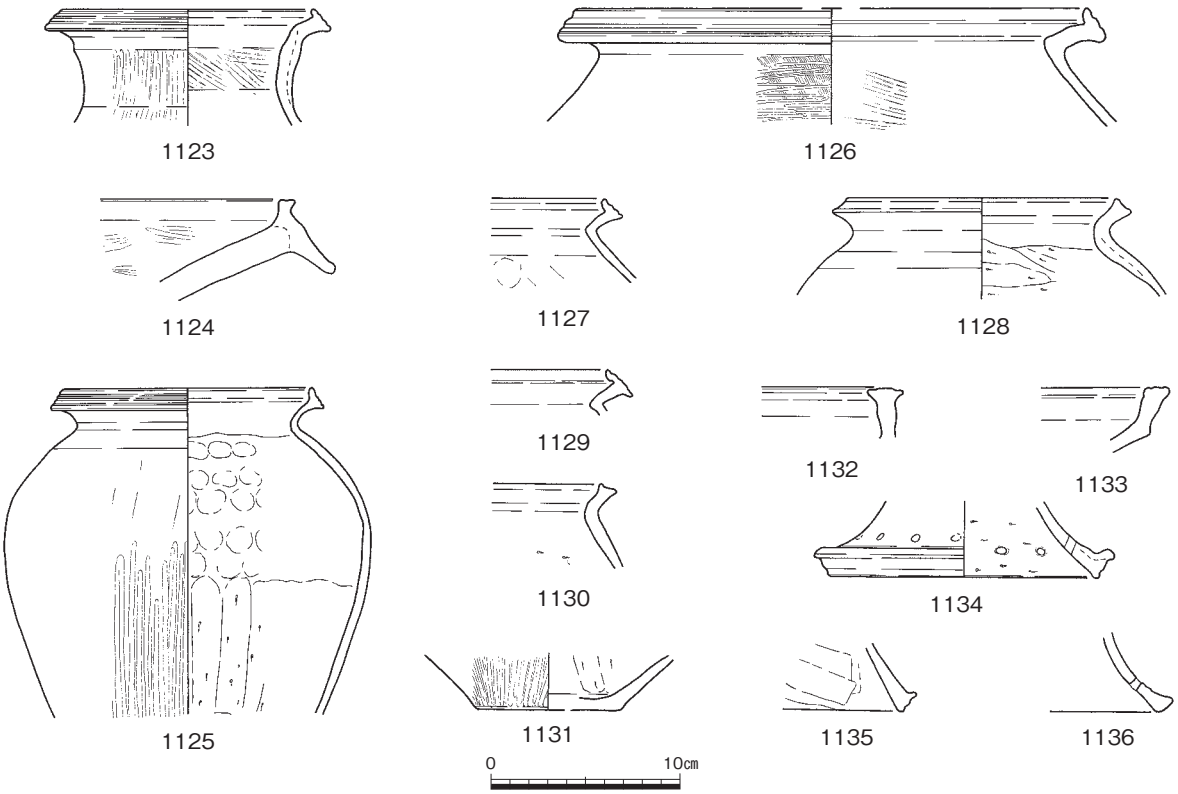
堆積状況から大きく上層（第１～３層）と下層（第４層）に分かれ、上層には地山由来の偽礫を多く含んでいた。断面形も、下層は筒形に近いが、上層はたわみ状を呈す。また土器も、上層には後期の土器を含むが、下層は中期後葉しか含まないなど、埋没過程が２段階に分かれると想定できる。

土器は細片が多く、図示し得たのは少ない。上層から出土した土器が多く、下層出土土器は弥・中・Ⅲの**1127**のみである。一方、上層出土土器は、**1129**・**1131**・**1132**・**1135**が弥・中・Ⅲの土器であるが、弥・後・Ⅰの土器が主体を占める。**1124**は弥・後・Ⅱ以降のもので、混入であろう。分銅形土製品**C46**及び練り玉**Ｊ９**は上層から出土した。

以上の状況から、掘削は弥・中・Ⅲに遡るが、弥・後・Ⅰに埋没したと考えられる。　（渡邉）



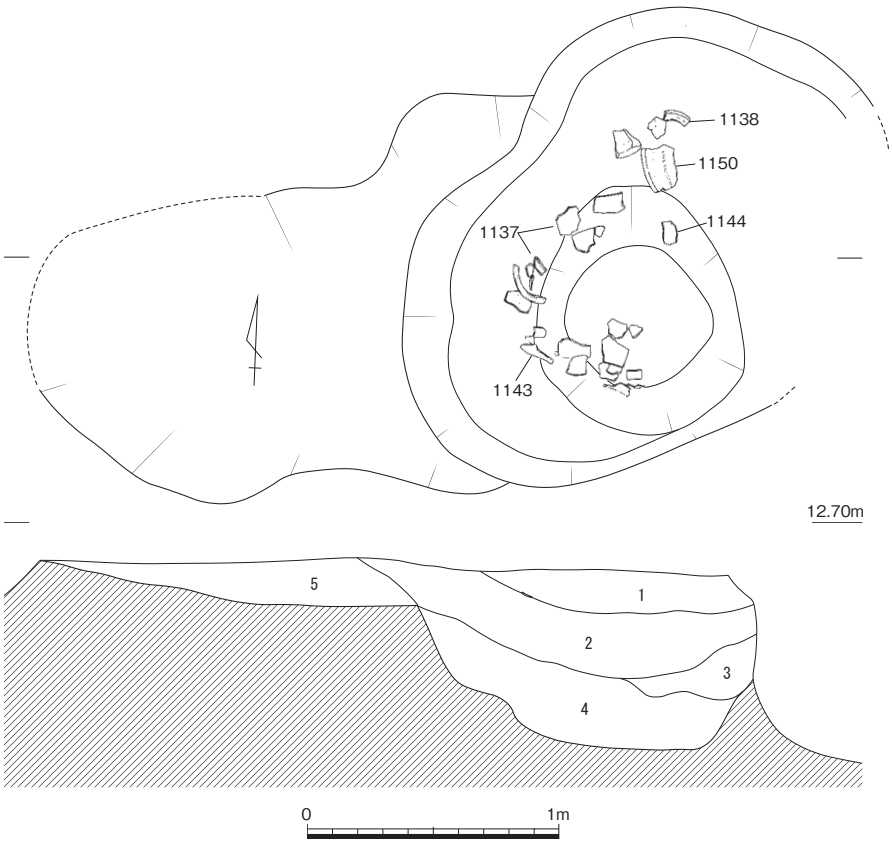
第197図　土坑50（1/30）・出土遺物①（1/3・1/2）



第198図　土坑50出土遺物②（1/4）

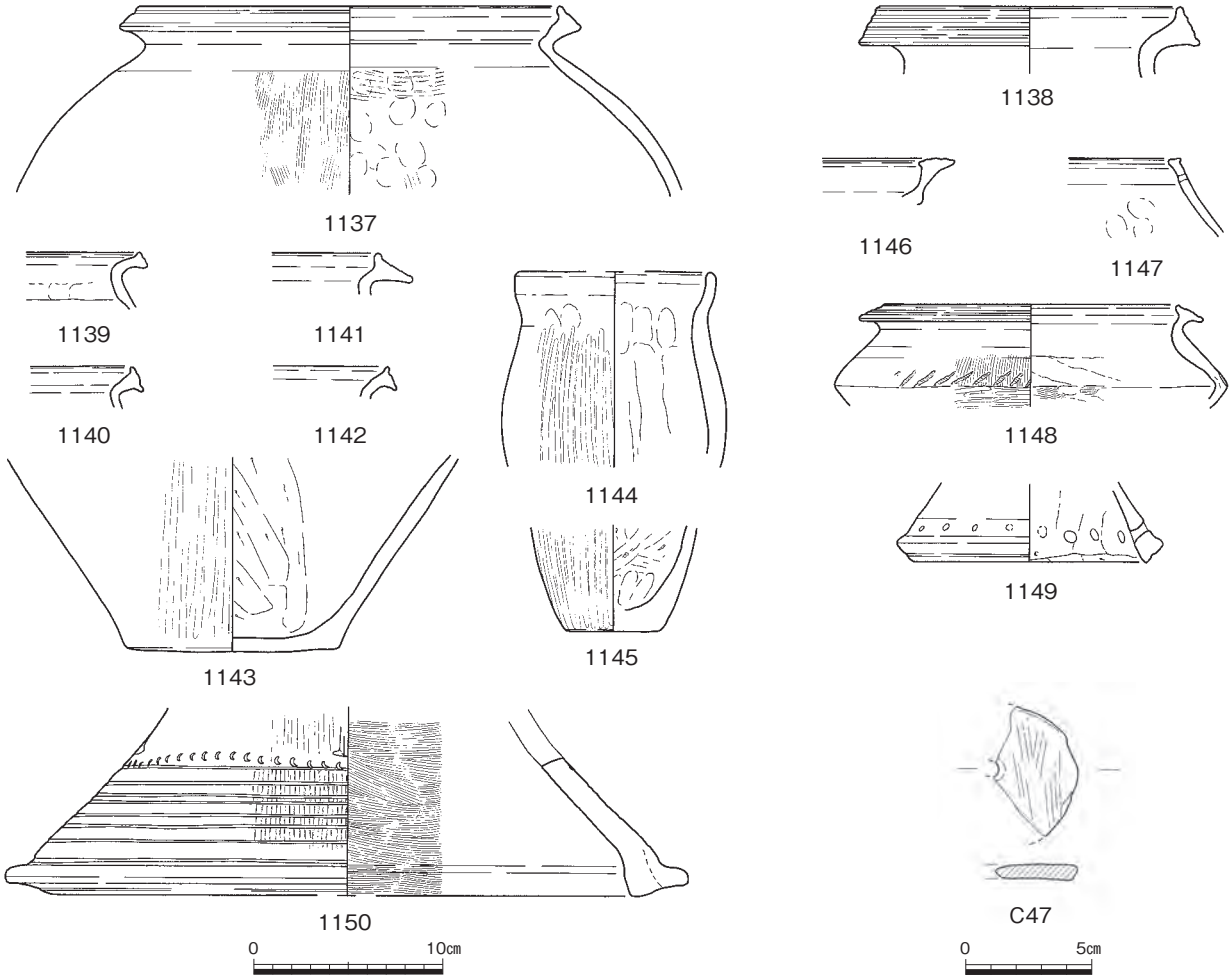
土坑51（第12・199・200図、図版47－１）

土坑50の西に並ぶ。土坑50同様に大きく上下に分かれ、上層（第１・２層）には地山由来の土塊を多く含んでいた。土器も第２層上方で多く出土した。細片のため図化し得なかったが、下層からは中期後葉の土器しか出土していない。第200図はすべて上層出土



1　黒褐色(10YR3/1)粘性砂質土（砂質強）（黄褐色土粒多）
2　黒褐色(10YR2/2)粘性砂質土（黄褐色土粒多）
3　暗褐色(10YR3/4)砂質土
4　暗褐色(10YR3/2)砂質土（黄褐色土粒少）
5　褐灰色(10YR4/1)粘性砂質土

第199図　土坑51・52（1/30）

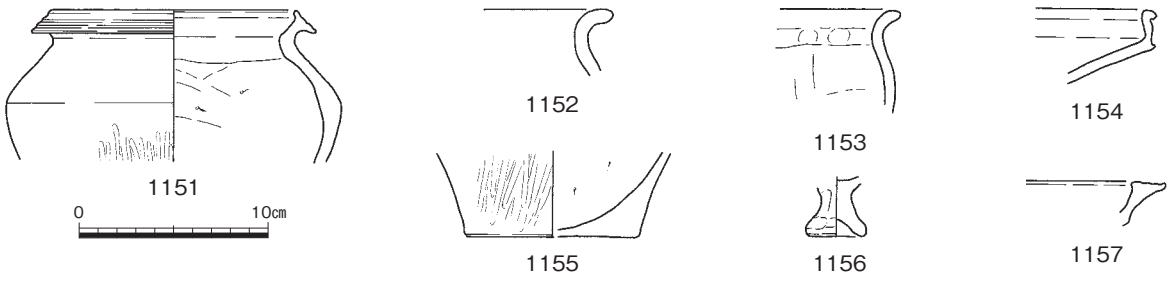


第200図　土坑51出土遺物（1/4・1/3）

で、**1143・1147**が弥・中・Ⅲの土器である。土坑50同様に、弥・中・Ⅲに掘削された土坑の、たわみ状にくぼんだ部分が弥・後・Ⅰに埋没したと考えられる。（渡邉）

土坑52（第12・199・201図）

土坑51の西で、土坑51に切られている。不整形で深さ18㎝の浅いたわみ状を呈し、明確な遺構と認定し難い。出土土器には中期後葉～後期前葉の時期幅があり、**1154**が弥・中・Ⅲの高杯である。弥・後・Ⅰの土器のうち、**1151・1152・1157**は上面で出土した。高杯**1157**は弥・後・Ⅰの新しい段階に位置付けられる。切り合いでは土坑51の上層に切られているが、下層との関係は不明である。（渡邉）



第201図　土坑52出土遺物（1/4）

土坑53（第12・202図、図版47－２）

土坑52の西に位置する。南北に長い楕円形を呈す。底面中央は一段くぼみ、壁体は緩やかに立ち上がる。

出土遺物は少ないが中期後葉～後期後葉の時期幅があり、上面では須恵器も採集している。**1161**は後期後葉の弥・後・Ⅲに下るが、土坑50同様に混入の可能性があり、弥・後・Ⅰに埋没したと考えられる。（渡邉）

土坑54（第12・203図）

土坑54の西に位置する。径約１ｍの小規模な遺構で、西隣のもう一回り小さい遺構は柱穴として扱っている。底面は平らでなく、断面は砲弾形を呈する。

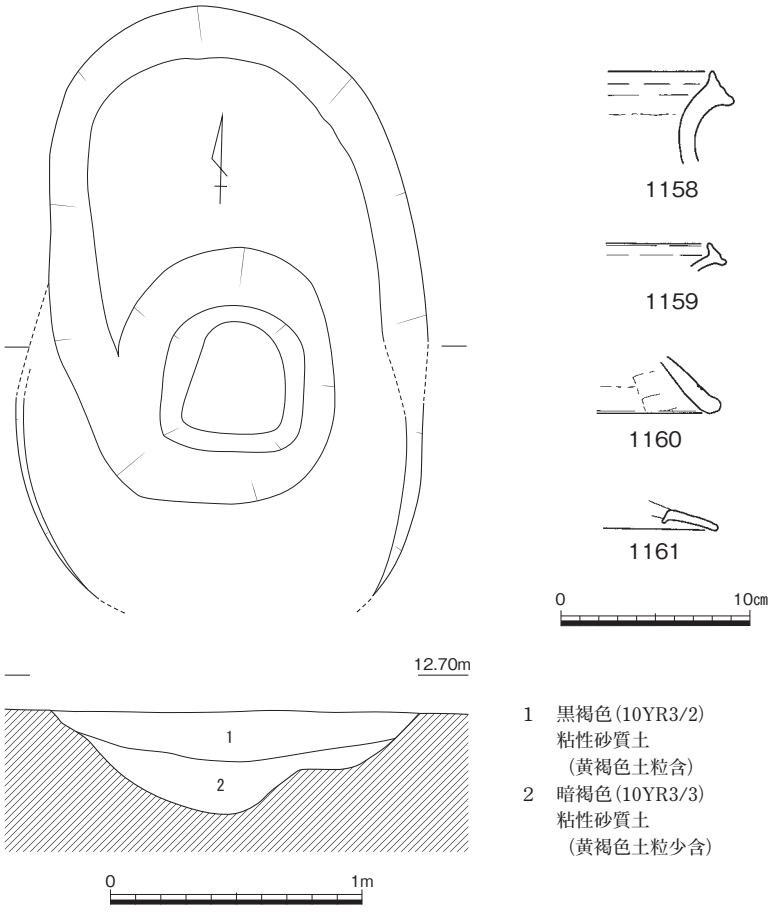
土器は第１層から出土した。高杯**1162**は口縁端部の拡張があまりなく、弥・後・Ⅰの古い段階に比定できる。その頃埋没したと考えられる。　（渡邉）

土坑55（第12・204図、図版47－３）

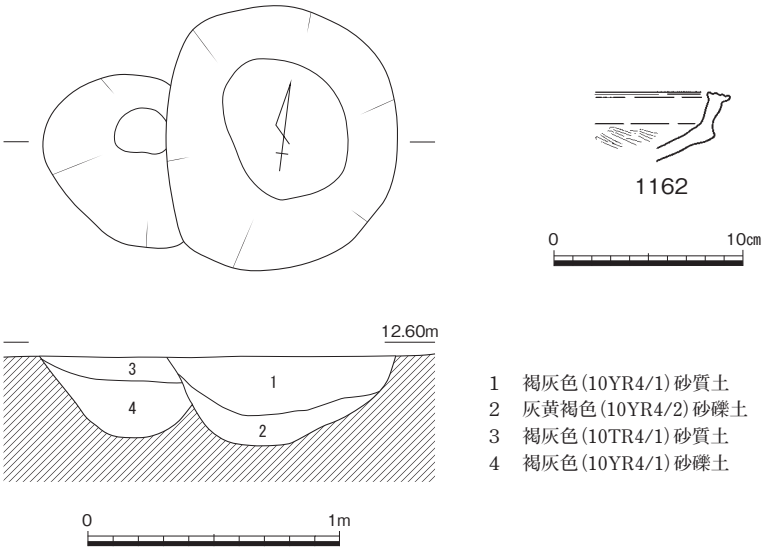
土坑53の南に位置する。北端が土坑56の上に重複している。

切り合いから土坑56より新しく位置付けられるが、弥・中・Ⅲの土器しか出土していない。土器はいずれも坑底より浮いており、土坑56から混入した可能性もある。　（渡邉）

土坑56（第12・205図、図版48－１）

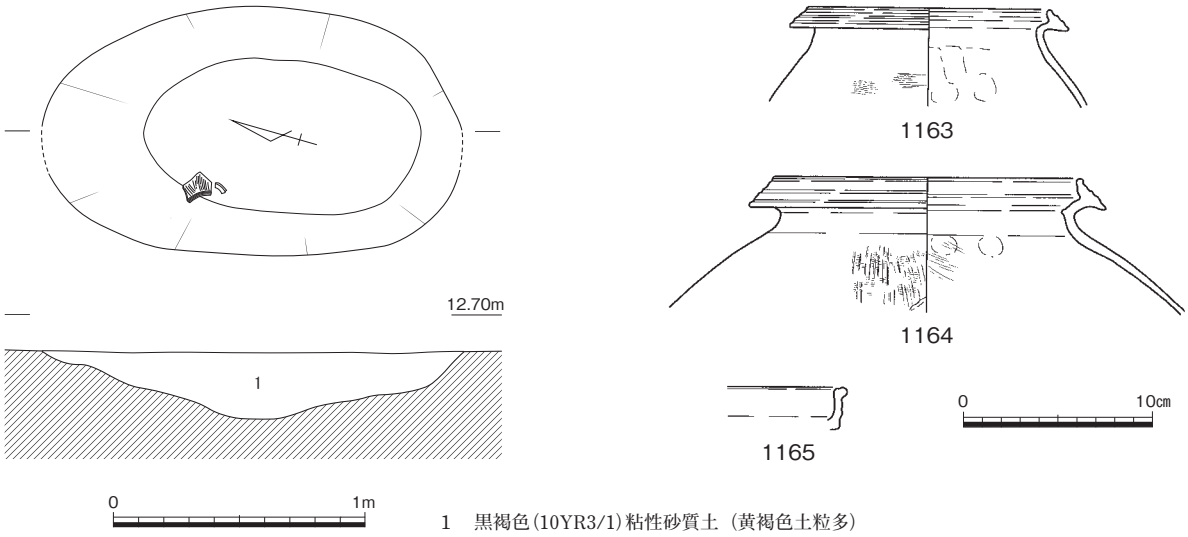


第202図　土坑53（1/30）・出土遺物（1/4）



第203図　土坑54（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑55の北に位置する。上面の削平が著しいが、本来は円形を呈していたと想定される。平らな底面から壁体がほぼ垂直に立ち上がり、深さは90㎝を超える。形状から貯蔵穴の可能性が考えられる。

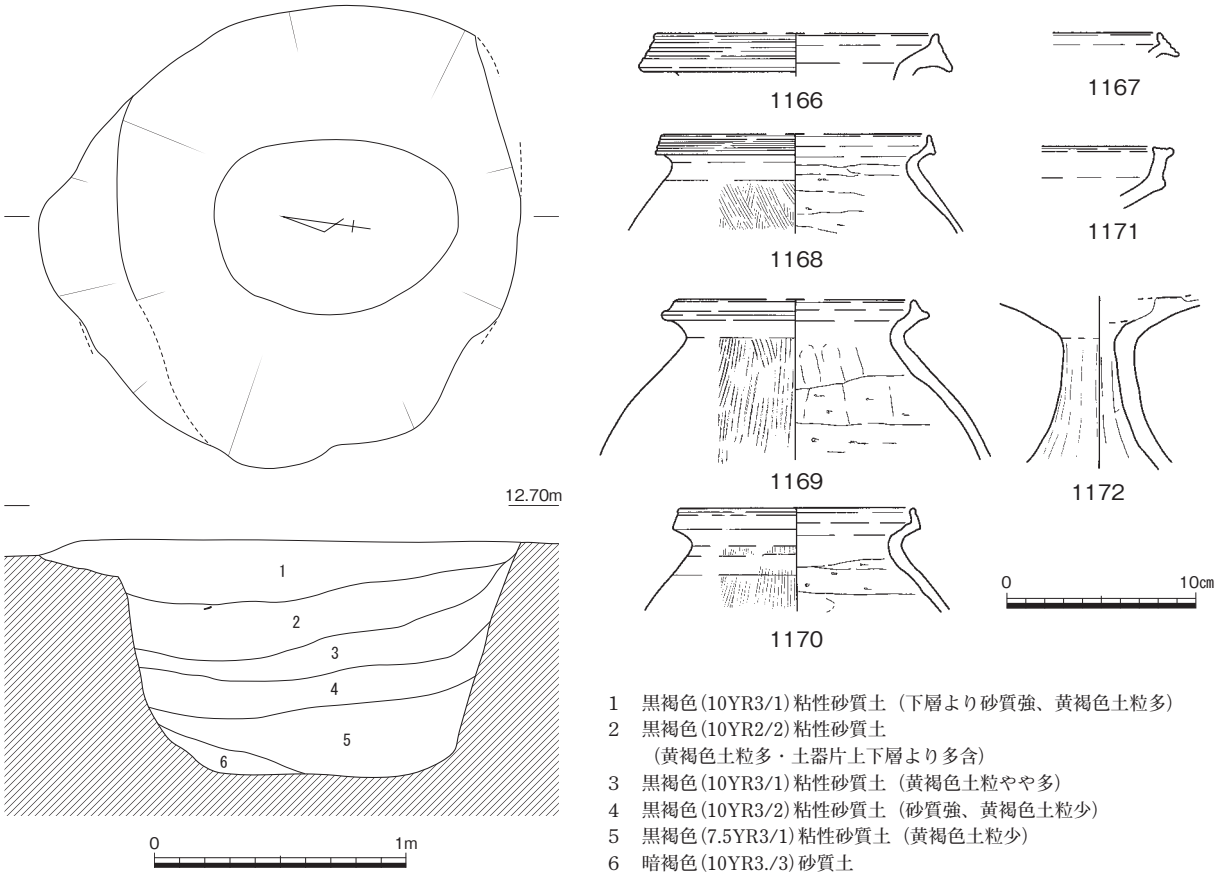


1　黒褐色(10YR3/1)粘性砂質土（黄褐色土粒多）

第204図　土坑55（1/30）・出土遺物（1/4）

第１～３層に地山由来の土塊を多く含み、第２層から上下層と比較して多く土器が出土した。

当土坑の東半について、層毎に遺物を取り上げるよう努めた結果、第１層からは中期後葉～後期前葉の土器が出土したが、第２層以下では中期後葉の土器しか出土しなかった。西半出土土器は、検出面が15㎝ほど低いためか、中期後葉が主体を占める。しかし、中期後葉の土器は細片のみで**1167**しか



1　黒褐色(10YR3/1)粘性砂質土（下層より砂質強、黄褐色土粒多）
2　黒褐色(10YR2/2)粘性砂質土
　（黄褐色土粒多・土器片上下層より多含）
3　黒褐色(10YR3/1)粘性砂質土（黄褐色土粒やや多）
4　黒褐色(10YR3/2)粘性砂質土（砂質強、黄褐色土粒少）
5　黒褐色(7.5YR3/1)粘性砂質土（黄褐色土粒少）
6　暗褐色(10YR3./3)砂質土

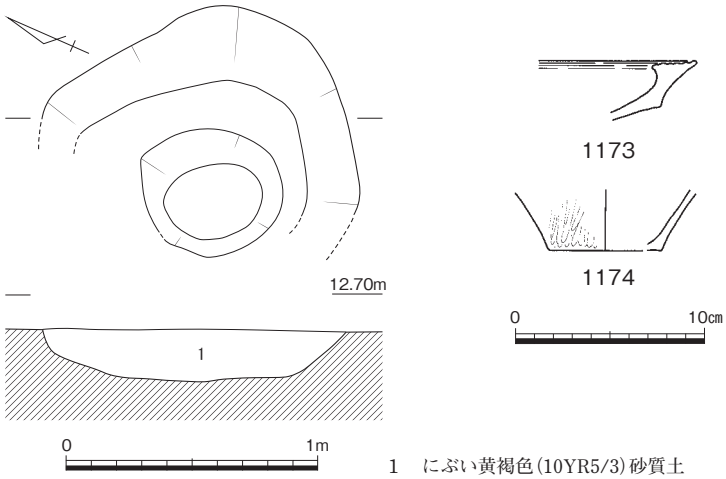
第205図　土坑56（1/30）・出土遺物（1/4）

図化し得なかったが、1167は第４層から出土したものである。このような状況から、弥・中・Ⅲのうちにほぼ埋没し、最終的には弥・後・Ⅰに埋没が完了したと考えられる。　（渡邉）

土坑57（第12・206図）

土坑55の南西に位置する。西半を任意に設けたトレンチで削平されているが、径1.3ｍの不整円形で、底面中央が少しくぼんでいる。

出土土器は少なく、中期後葉の土器も含んでいたが、高杯1173により、弥・後・Ⅰに埋没したと考えられる。　（渡邉）

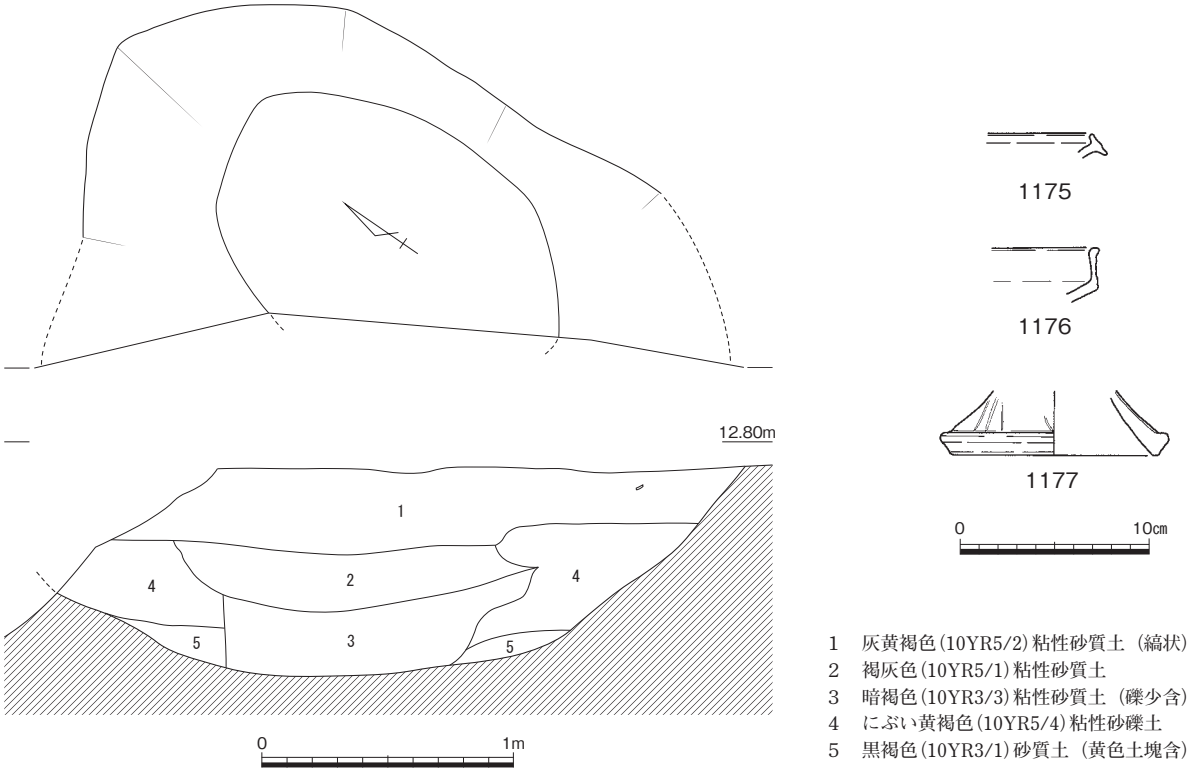


第206図　土坑57（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑58（第12・207図）

土坑57の南西に位置する。西半は調査区外で、全容は不明である。北端を土坑59により切られている。断面は調査区西壁で観察したものである。第１層は縞状構造が発達し、基盤層と区別し難かった。埋没後の自然堆積の可能性がある。第２・３層は中央部に筒形に堆積していた。また外側の第４・５層と比較して暗い色調で、粘性も高かった。何かを埋設していた可能性が想定できるが、有機質等は確認できなかった。

土器細片が少量出土している。1175・1176は白色を呈す弥・中・Ⅲの土器であるが、1177は橙色



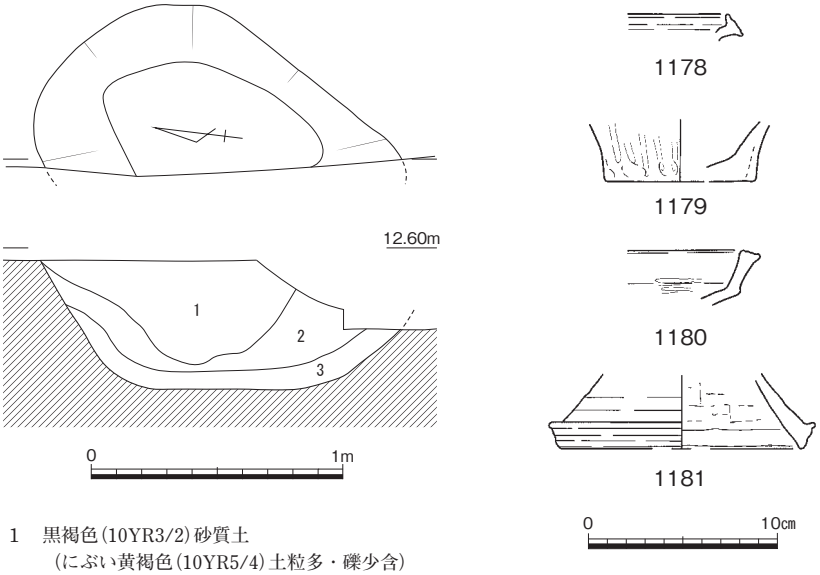
第207図　土坑58（1/30）・出土遺物（1/4）

で、外面に篦描き沈線を施し、後期初頭に比定される。弥・後・Ⅰに埋没したと考えられる。（渡邉）

土坑59（第12・208図）

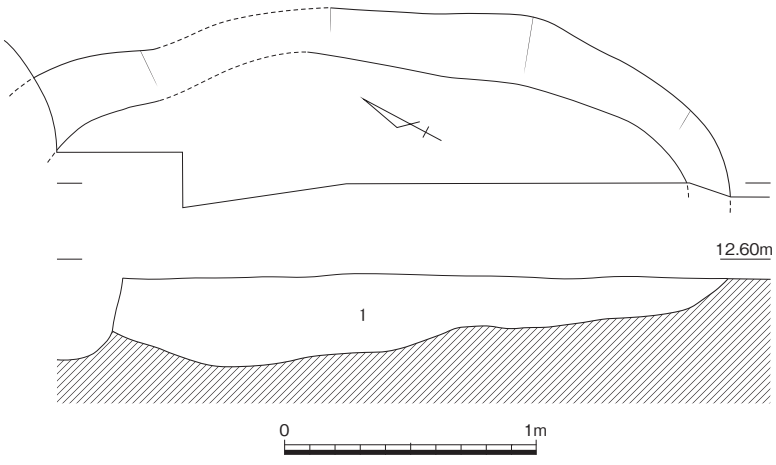
土坑58の南東に位置する。西側の大部分が調査区外となり全容は不明である。残存長約1.2ｍ、幅約１ｍと小規模であるが、深さは50㎝を超え、断面逆台形のしっかりした土坑である。第１層には地山由来の土塊を多く含んでいた。

土器が少量出土した。土器には時期幅があり、**1178・1179・1181**が弥・中・Ⅲ、**1180**が弥・後・Ⅰに比定される。高杯**1180**は口縁端部の拡張があまりなく、弥・後・Ⅰでも古く位置付けられる。弥・後・Ⅰの古い段階に埋没したと考えられる。（渡邉）



1　黒褐色(10YR3/2)砂質土
　（にぶい黄褐色(10YR5/4)土粒多・礫少含）
2　にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土（土器・礫少含）
3　黒褐色(10YR3/2)砂礫土

第208図　土坑59（1/30）・出土遺物（1/4）



1　暗褐色(10YR3/4)粘性砂質土

第209図　土坑60（1/30）

土坑60（第12・209図）

土坑59の南に位置し、北端を土坑59に切られている。西側の大部分が調査区外となり全容は不明だが、残存長2.8ｍを超え、断面の状況から土坑64や土坑65の様な形状を呈すると推察される。

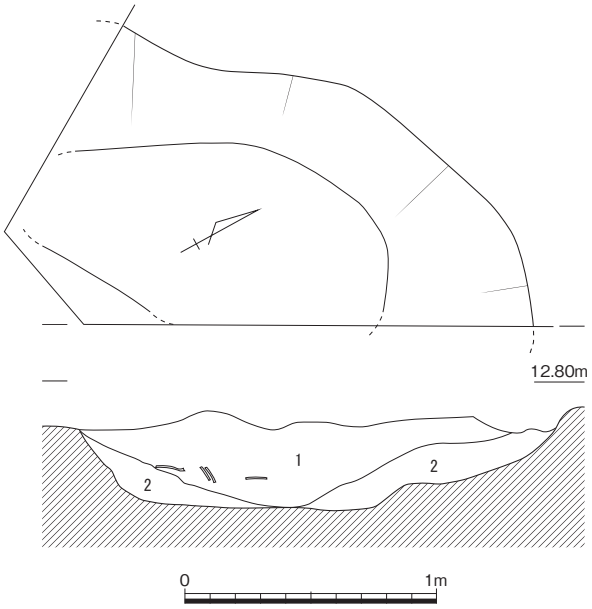
後期と思われる土器細片が僅かに出土しているが、切り合いから土坑59より古く位置付けられる。（渡邉）

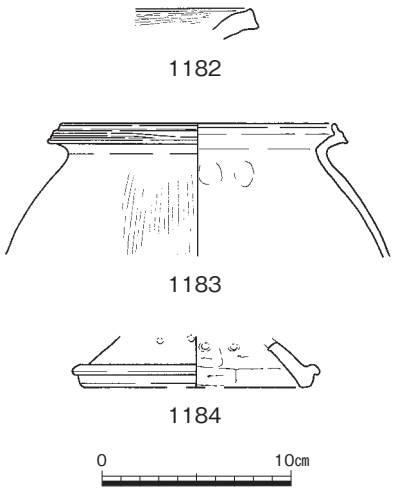
土坑61（第12・210図）

Ｊ07に位置する土坑で、土坑60から南東方向に約１ｍ離れた所にある。調査区端で検出しており、土坑の形状や規模などその全容は明らかではないが、平面形は不定楕円形を呈するものとみられ、検出面からの深さは、約38㎝である。

埋土の第１層からは、弥生土器の破片が出土しており、そのうち壺**1182**・甕**1183**・高杯**1184**を図示している。

これらからみたこの土坑の時期は、弥・後・Ⅰでもやや古い様相を示していると考えられる。（弘田）





1　灰黄褐色(10YR4/2)粘質微砂
2　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質微砂

第210図　土坑61（1/30）・出土遺物（1/4）

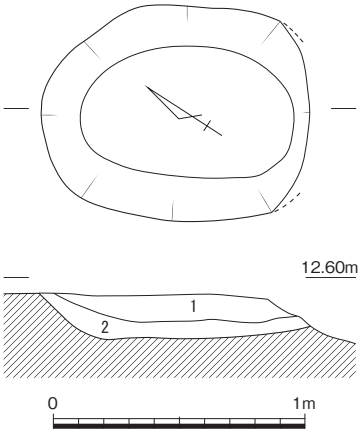
土坑62（第12・211図）

土坑61の北に位置し、土坑61に南端を切られる。径約１ｍ、深さ17㎝の小規模な土坑である。

中期後葉～後期前葉の土器細片が出土している。切り合いから土坑61より新しく位置付けられ、弥・後・Ⅰに埋没したと考えられる。（渡邉）

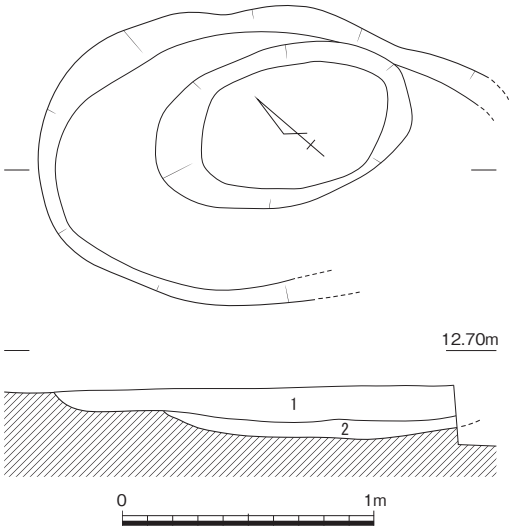
土坑63（第12・212図）

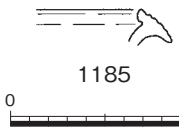
土坑59の東に位置する。土坑64・65と南北方向に鎖状に連なった３基の土坑の中の一つで、土坑65を切る。南端は側溝で削平されている。残存部で長1.7ｍ、幅約１ｍ、深さ20㎝の浅く長



1　黒褐色(10YR3/2)粘性砂質土（黄褐色土粒少・炭粒僅混）
2　暗褐色(10YR3/3)砂質土（黄褐色土粒僅）

第211図　土坑62（1/30）





1　黒褐色(10YR3/2)粘性砂質土
（黄褐色土粒やや多）
2　暗褐色(10YR3/3)粘性砂質土
（上層より粘性弱）（黄褐色土粒少）

第212図　土坑63（1/30）・出土遺物（1/4）

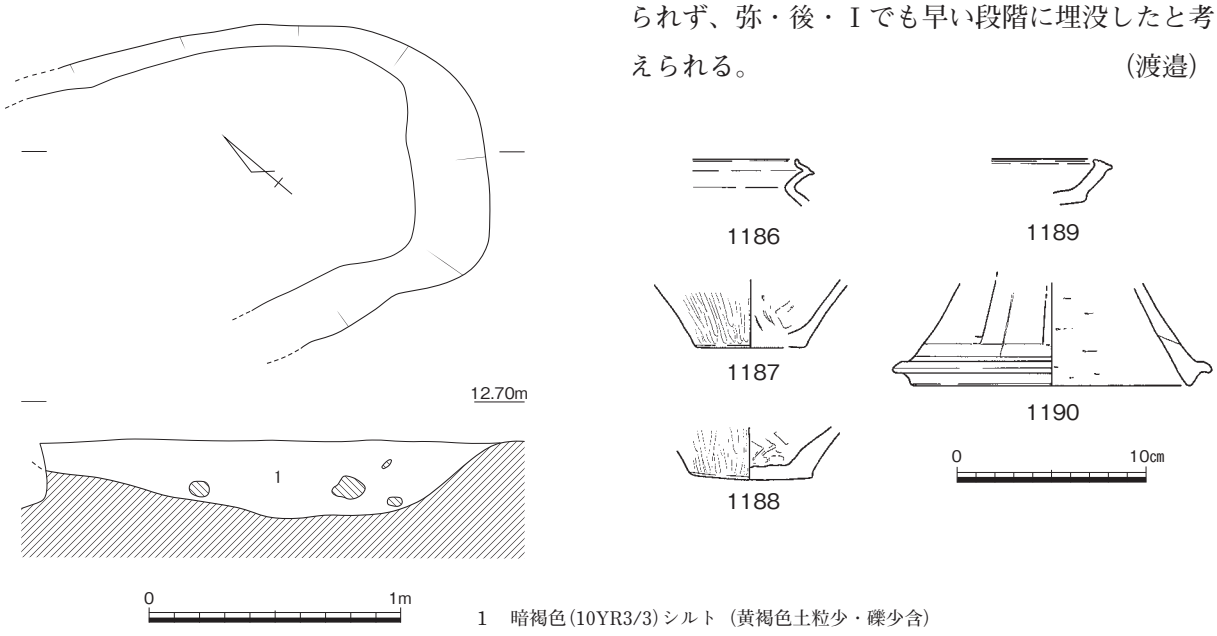
大な形状を呈す。底面も平坦でなく、壁体の立ち上がりも皿状に緩やかである。

出土遺物は土器細片のみで、赤味の強いものも見受けられるがすべて中期後葉に比定できる土器ばかりであった。甕1185は大きく拡張した口縁端部に凹線を施す中期後葉でも新しい様相を示す。弥・中・Ⅲのうちに埋没したと考えられる。（渡邉）

土坑64（第12・213図）

土坑63の北に位置し、南端は土坑64に接している。北部が調査区を細分した際に設けた側溝により削平されている。そのため土坑57との切り合いは確認できていない。

出土土器は、中期後葉のものが主体を占め、後期に下る土器は１割程度含まれていた。1186は口縁端部を強く折り曲げた中期後葉の甕、1189は赤色で後期前葉の高杯、1190は白色で方形透かしを持つ中期後葉の高杯である。1189の口縁部は肥厚が見られず、弥・後・Ⅰでも早い段階に埋没したと考えられる。（渡邉）



1　暗褐色(10YR3/3)シルト（黄褐色土粒少・礫少含）

第213図　土坑64（1/30）・出土遺物（1/4）

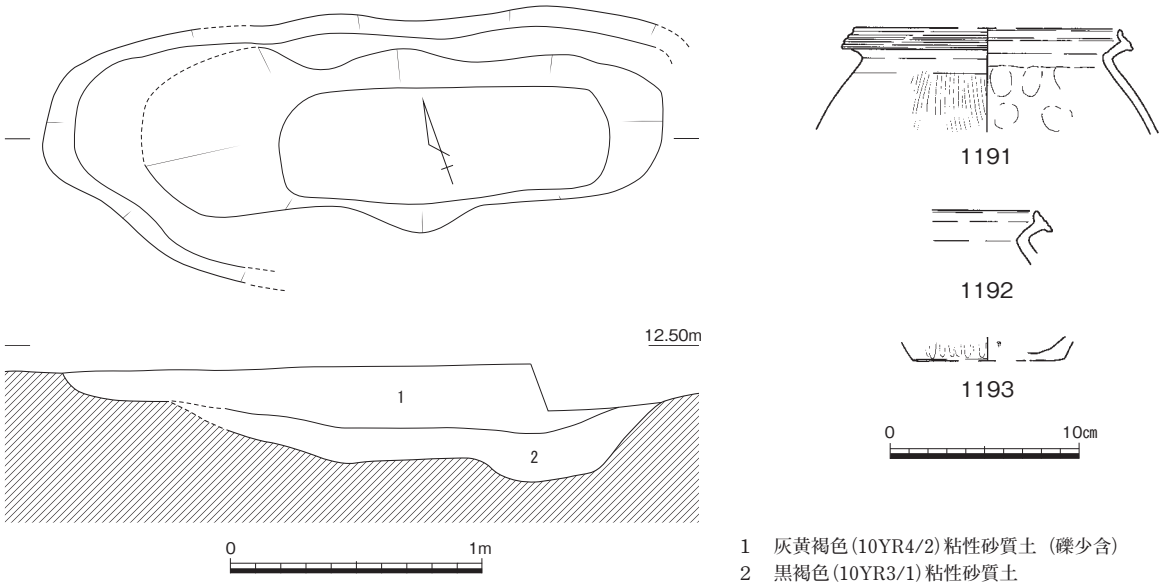
土坑65（第12・214図）

土坑63の南東に位置する。南東部は調査区側溝により削平されている。中央部が長方形に一段下がり、下段上面の規模は205㎝×70㎝を測る。長大な平面形と二段掘りであることから土坑墓の可能性を考えたが、下段の底面は平坦ではなく、棺痕跡や木質、歯骨なども出土せず、確証はない。

出土遺物は中期後葉の土器のみである。図示したほか、口縁上端部を押さえて小さく肥厚させた高杯も出土している。弥・中・Ⅲの新しい段階に位置付けられる。（渡邉）

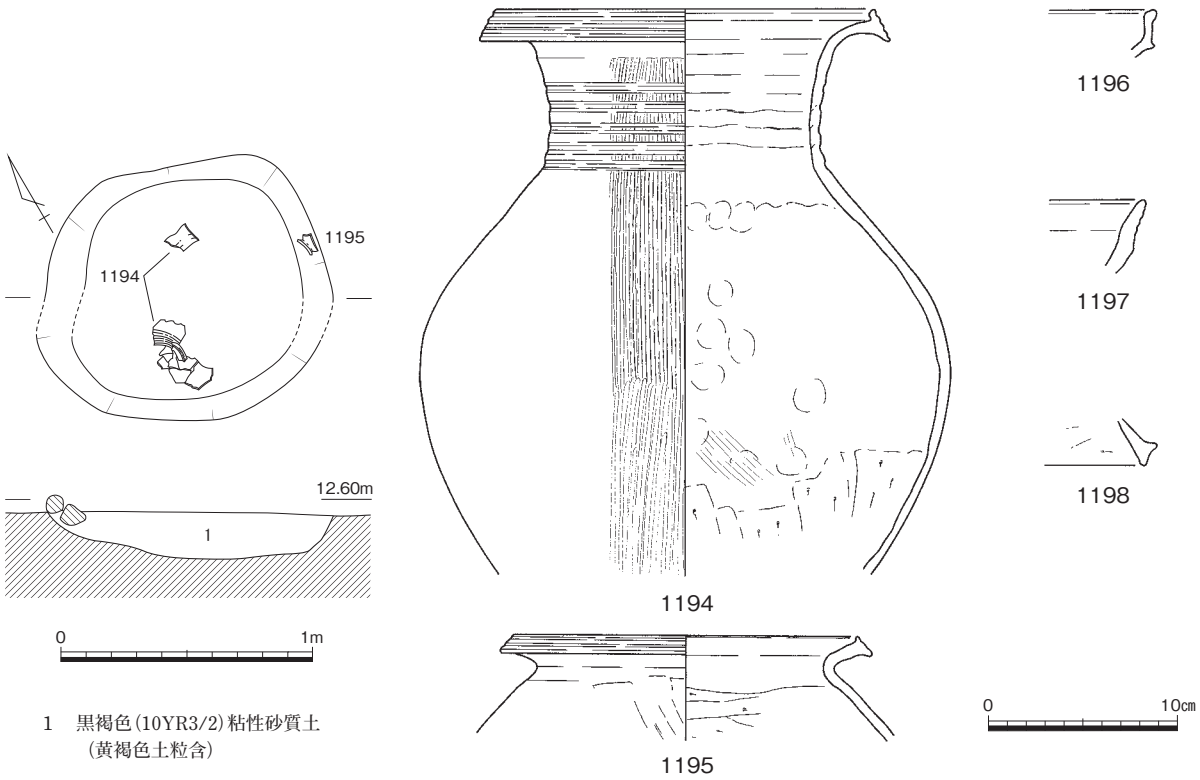
土坑66（第12・215図、図版48－２）

土坑55の東に位置する。径約１ｍの小さく浅い土坑であるが、比較的大形の土器が出土した。出土土器には中期後葉～後期前葉の時期幅があり、1195・1197は後期に下る。1194は白色薄手の壺で、口縁端部を折り曲げて上下に拡張し、頸部に凹線を施す。弥・中・Ⅲに比定される。底部を欠くが、土圧で潰れた状態で出土した。坑底には接地していない。1196は凹線がなく、中期後葉でも新しい様相を示す。1195は肩口上面で出土した。このような状況から、1194は意図的に投棄され、1195は埋没後に流入した可能性がある。いずれにせよ、弥・後・Ⅰには埋没したと考えられる。（渡邉）



1　灰黄褐色(10YR4/2)粘性砂質土（礫少含）
2　黒褐色(10YR3/1)粘性砂質土

第214図　土坑65（1/30）・出土遺物（1/4）

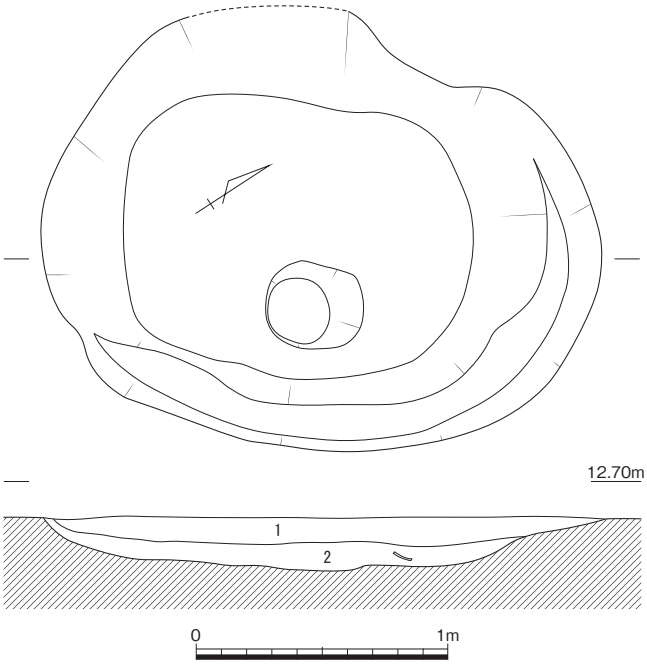


1　黒褐色(10YR3/2)粘性砂質土
（黄褐色土粒含）

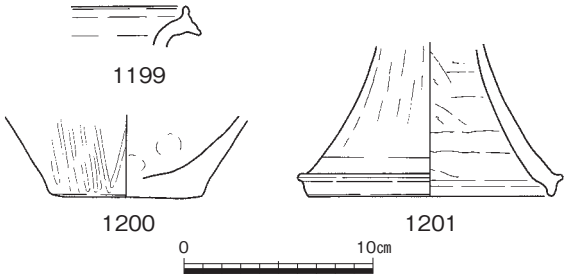
第215図　土坑66（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑67（第12・216図）

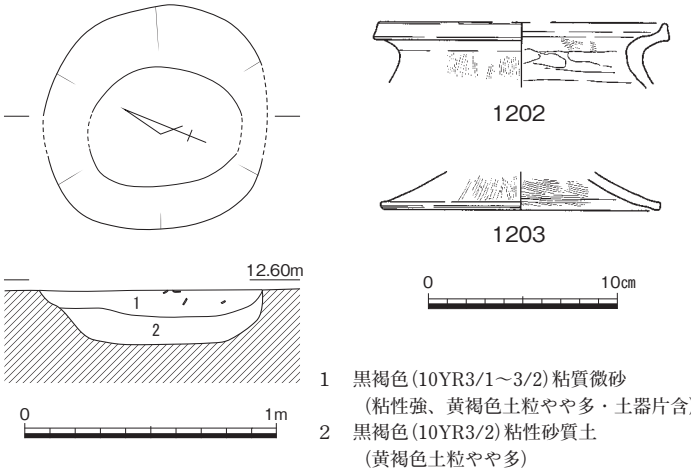
土坑66の南東に位置する土坑で、平面は不整円形を呈する。長軸長213㎝、短軸長173㎝、深さ21㎝を測り、断面は皿状を呈する。南東部に部分的にテラス状の傾斜を持っている。底面には柱穴状のくぼみが検出されたが、この土坑に伴わない可能性もある。



1　暗褐色(10YR3/3)シルト（礫極少含、褐色(10YR4/4)シルト土塊多混）
2　暗褐色(10YR3/4)シルト（礫極少含、褐色(10YR4/4)シルト土塊混）



第216図　土坑67（1/30）・出土遺物（1/4）



1　黒褐色(10YR3/1～3/2)粘質微砂
（粘性強、黄褐色土粒やや多・土器片含）
2　黒褐色(10YR3/2)粘性砂質土
（黄褐色土粒やや多）

第217図　土坑68（1/30）・出土遺物（1/4）

出土遺物には、甕1199・1200、高杯1201がある。遺構の時期は、この土器などから弥・中・Ⅲと考えておきたいが、遺構は上面が大きく削平を受けており、性格等は不明である。　（河合）

土坑68（第12・217図）

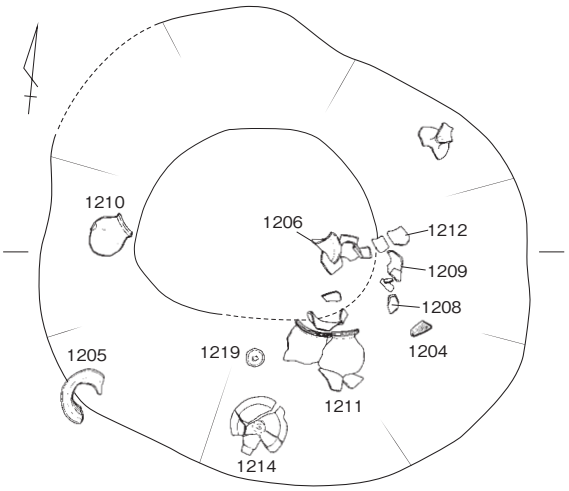
土坑67の南に位置する。深さ20㎝と浅いが埋土は２層に分かれ、土器の多くは上層に含まれていた。

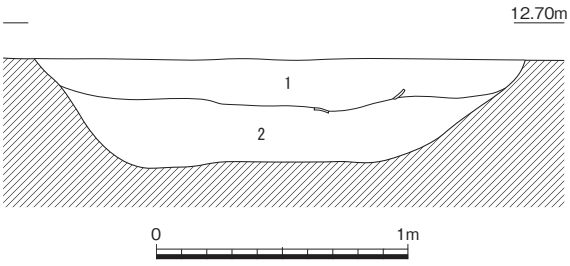
図示した後期中葉の土器のほか、中期後葉の土器も出土している。高杯1203の脚端部は肥厚しないが、面がある。弥・後・Ⅱに位置付けられる。　（渡邉）

土坑69（第12・218・219図、図版48－３・86、写真24）

土坑68の南に位置する。長軸２ｍの不整円形の擂り鉢状のくぼみを呈す。埋土には地山由来の土塊を多く含み、土器は第２層に多く含まれていた。土器の多くは土坑内壁の傾斜に沿う様な状態で出土したが、1205は土坑上面で出土した。

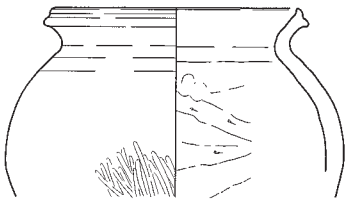
出土土器には中期後葉～後期中葉の時期幅があるが、壺の多くが中期に遡り、注視される。意識的に壺のみ古い土器を選択したのであろうか。1204の内面にはＵ字形の櫛描き沈線文を連続して施している。銅鐸に施文されるの流水文との類似を指摘しておく。甕には口縁上端を折り返した薄手硬質の1207・1209と厚手の1211・1212があり、高杯も拡張の弱い1213と強い1214がある。1214は後期前葉でも新しい段階に位置付けられる。しかし中期に遡る壺1205は土坑上面で、1206は土坑中央で他の後期土器片と混在していた。これらの土器が段階を経ず一時に投棄され、弥・後・Ⅰのなかで埋没したと考えられる。　（渡邉）



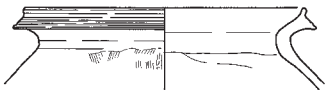


1　黒褐色(10YR3/2)粘性砂質土（砂質強、黄褐色土粒非常多）
2　黒褐色(10YR2/2)粘性砂質土（黄褐色土粒やや多・土器多・礫混）

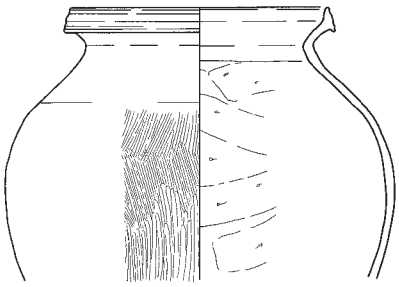
写真24　壺1204出土状況（南から）



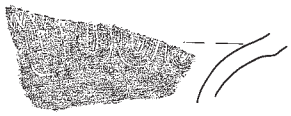
1208



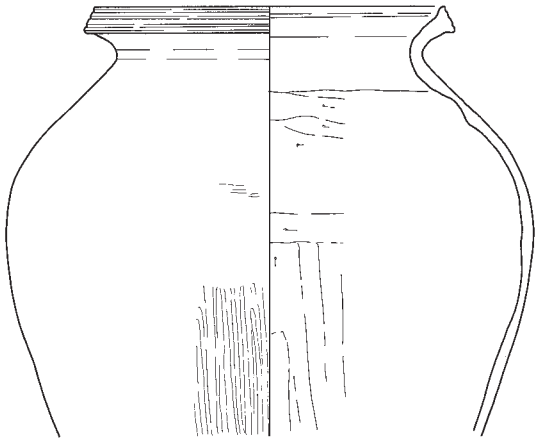
1209



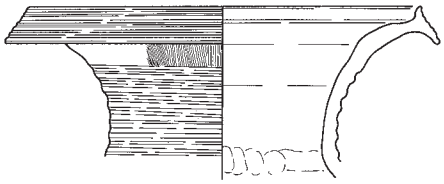
1210



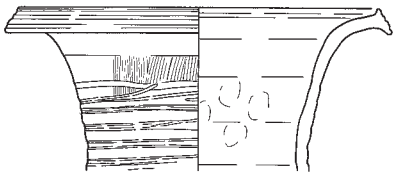
1204



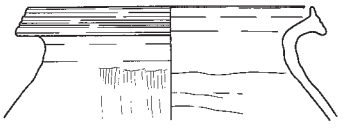
1211



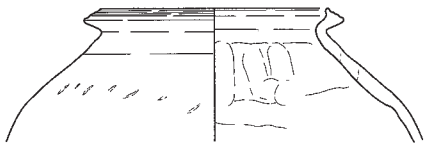
1205



1206

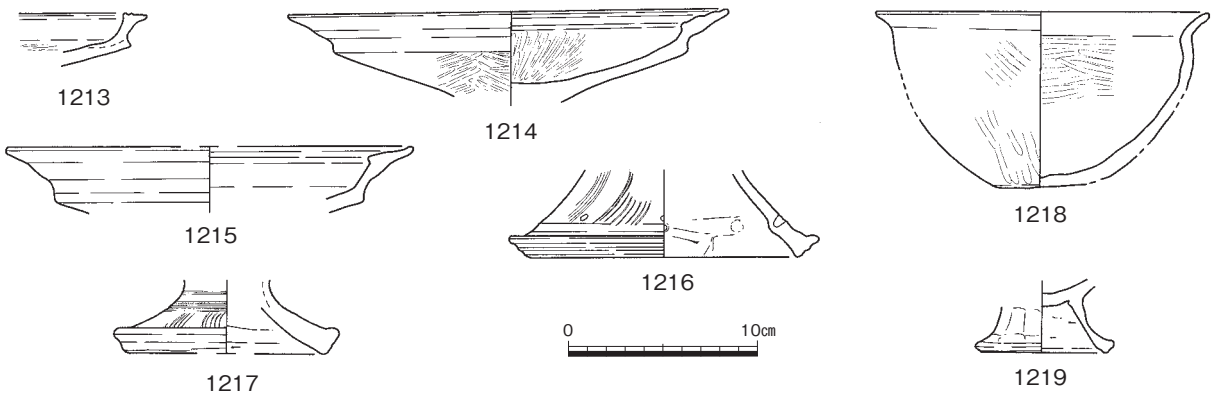


1207



1212

第218図　土坑69（1/30）・出土遺物①（1/4）

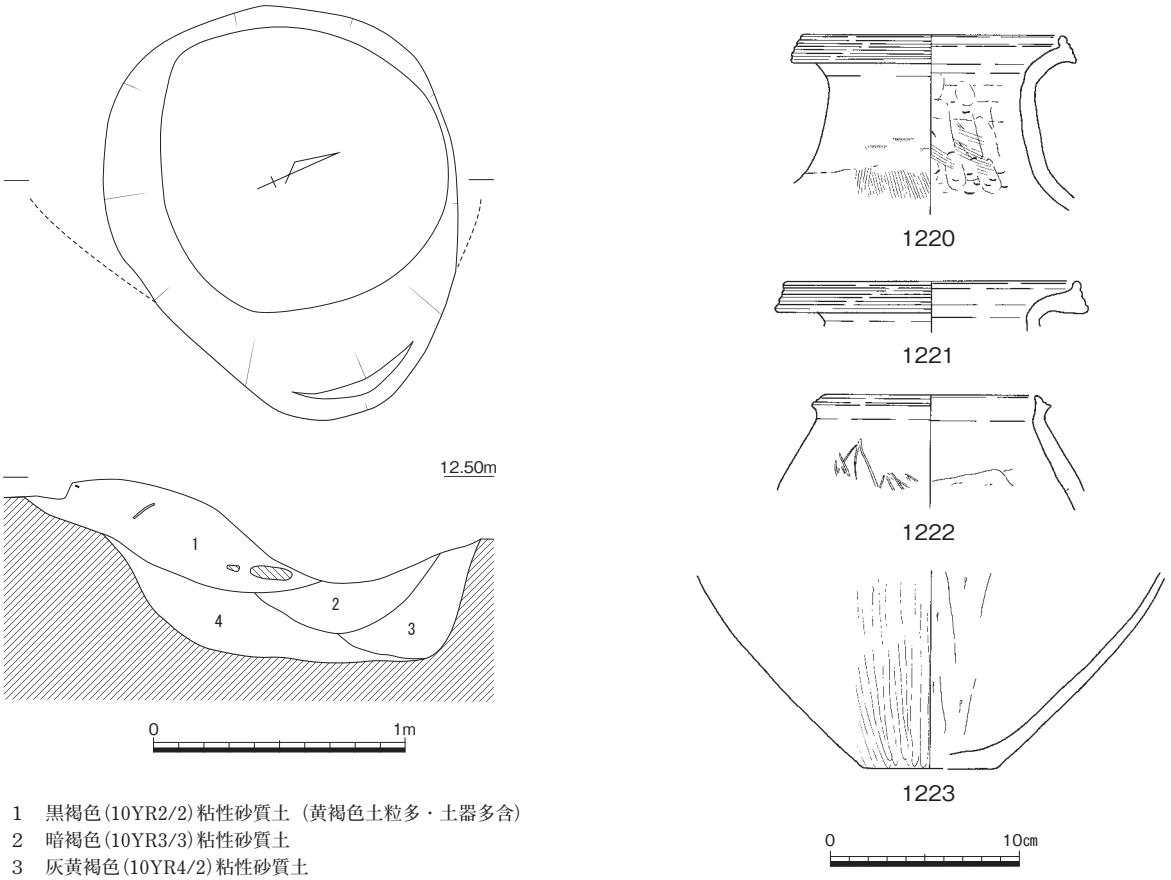


第219図　土坑69出土遺物②（1/4）

土坑70（第12・220・221図）

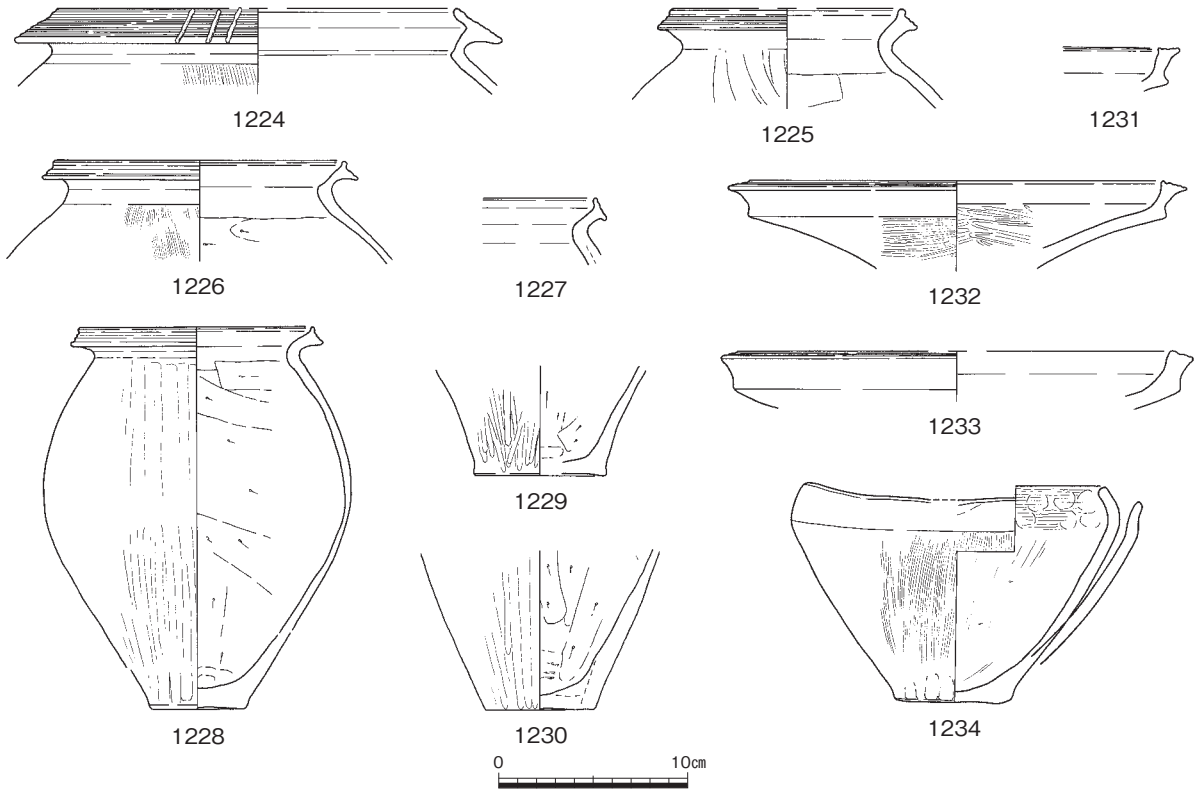
土坑69と重複し、土坑69調査後に検出した。上部のくぼみが土坑69にあたる。南側の肩が崩れているが断面逆台形を呈し、底面標高が11.76ｍと低いことから、貯蔵穴と判断している。

土器の多くは第１層から出土した。中期後葉～後期前葉の時期幅があるが、後期前葉が主体で８割を占める。図示した中では**1224**のみ中期後葉に位置付けられる。高杯**1231**～**1233**は口縁端部の拡張があまりなく、弥・後・Ⅰでも古い段階に位置付けられる。土坑69との矛盾はなく、土坑69は、当土坑の埋没の最終段階であった可能性も考えられる。（渡邉）



1　黒褐色(10YR2/2)粘性砂質土（黄褐色土粒多・土器多含）
2　暗褐色(10YR3/3)粘性砂質土
3　灰黄褐色(10YR4/2)粘性砂質土
4　暗褐色(10YR3/4)粘砂　黒褐色(10YR2/2)粘砂混土

第220図　土坑70（1/30）・出土遺物①（1/4）

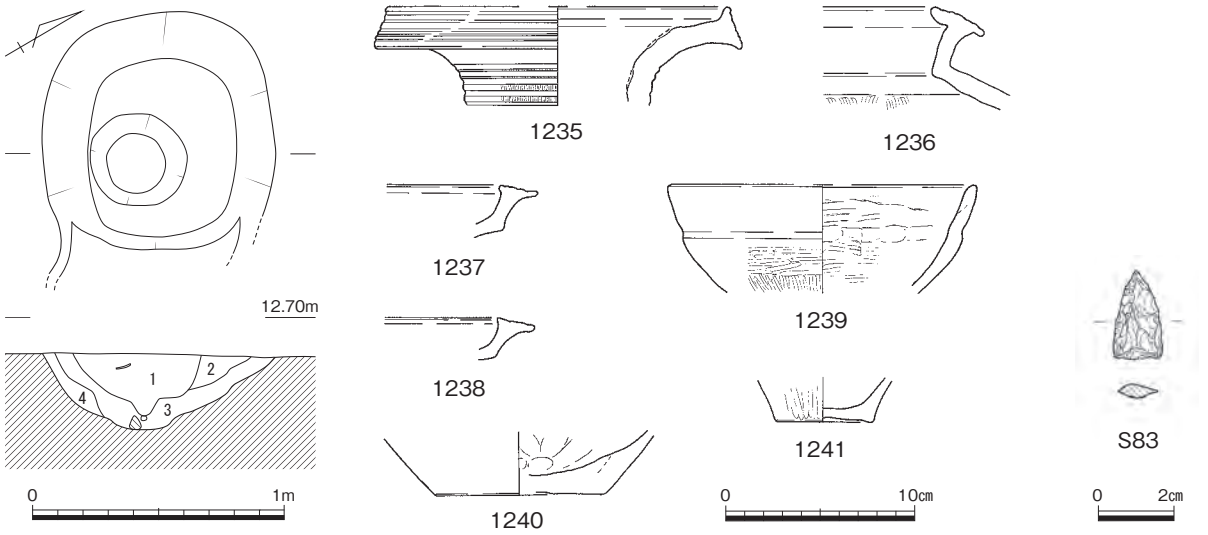


第221図　土坑70出土遺物②（1/4）

土坑71（第12・222図、図版107）

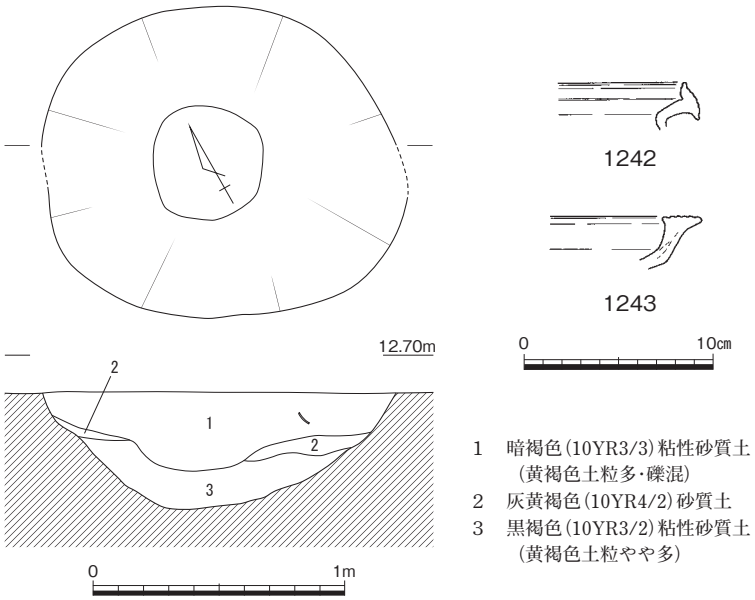
土坑70の北東に位置する。南西部を竪穴住居16に切られる。径90㎝程度の小規模な遺構である。底面中央に径40㎝のくぼみがあり、それに対応する様に第１層が堆積している状況から柱穴の可能性もあるが、比較的遺物が多く出土したので土坑として扱った。土器は第１層からの出土が多い。

出土土器は細片のみで、中期後葉～後期中葉の時期幅がある。切り合いから竪穴住居16よりは古く位置付けられ弥・後・Ⅱまでには埋没したと考えられる。（渡邉）

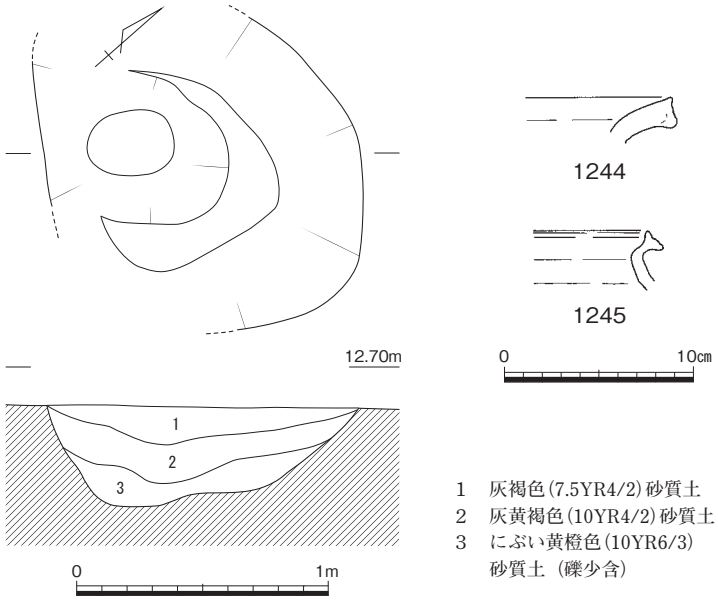


1　黒褐色(10YR3/1)粘性砂質土（黄褐色土粒多・土器片やや多混）
2　黒褐色(10YR3/2)粘性砂質土（黄褐色土粒やや多）
3　暗褐色(10YR3/3)粘性砂質土（上層より粘性弱、黄褐色土粒やや多）
4　黒褐色(10YR3/2)砂質土（黄褐色土粒少）

第222図　土坑71（1/30）・出土遺物（1/4・1/2）



第223図　土坑72（1/30）・出土遺物（1/4）



第224図　土坑73（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑72（第12・223図､図版49－１）

土坑71の北西に位置する。約1.4×1.25ｍの中規模の土坑で、断面椀形を呈する。中間に黄色土層を挟み（第２層)､それより上（第１層)から土器が出土した。第１層、第３層ともに地山由来の土塊を多く含んでいた。

土器は細片のみで、甕**1242**は中期後葉、高杯**1243**は後期前葉に位置付けられる。切り合いから土坑73よりは新しく位置付けられ、**1243**の示す弥・後・Ⅰに埋没したと考えられる。　（渡邉）

土坑73（第12・224図）

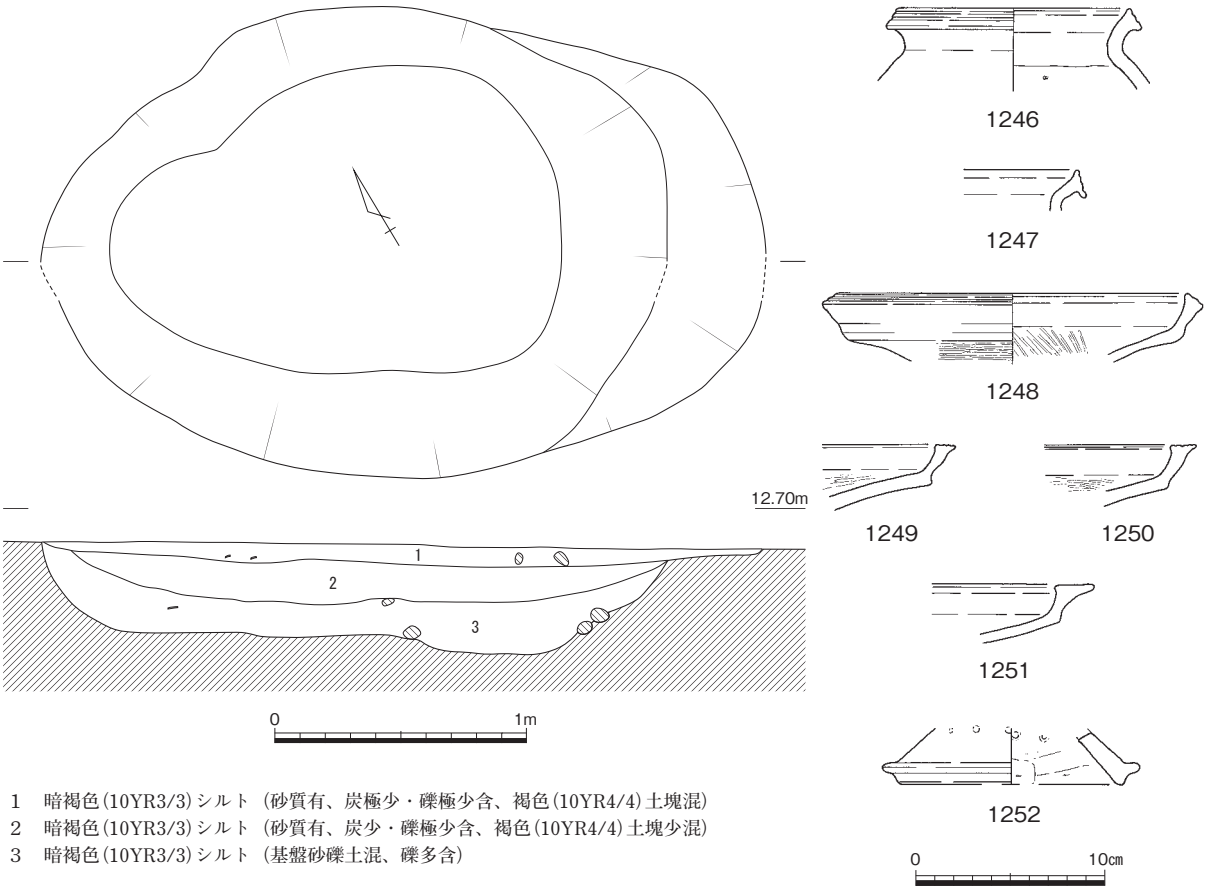
土坑71と土坑72の間に位置する。両土坑に南北両端を削平されて全容は不明であるが、径1.3ｍ程度の中規模の土坑とみられる。底面は平坦ではなく、底面北半がくぼんでいる。

出土遺物は土器細片のみである。切り合いから重複する土坑71～73の中で最も古く位置付けられるが、後期に下る土器しか出土していない。坑底からも後期とみられる赤色の土器片が出土している。細片のため細かく時期を絞ることはできないが、これらの状況から、弥・後・Ⅰでも早い段階に埋没したと考えられる。（渡邉）

土坑74（第12・225図）

土坑67の北東に位置する土坑で、平面は楕円形を呈する。弥・中・Ⅲ～弥・後・Ⅰ古相の土坑76・77と重複関係にあり、これらを切っている。規模は、長軸長287（249）㎝、短軸長187㎝、深さ43㎝を測り、断面は逆台形を呈する。埋土は３層に大別でき、このうち第３層に礫が多く含まれていた。

出土遺物には、甕**1246・1247**、高杯**1248～1252**がある。遺構の時期は、この土器などから弥・後・Ⅰと考えることができ、周囲にあるほぼ同時期の土坑とともに、貯蔵穴として利用されていた可能性を考えておきたい。　（河合）

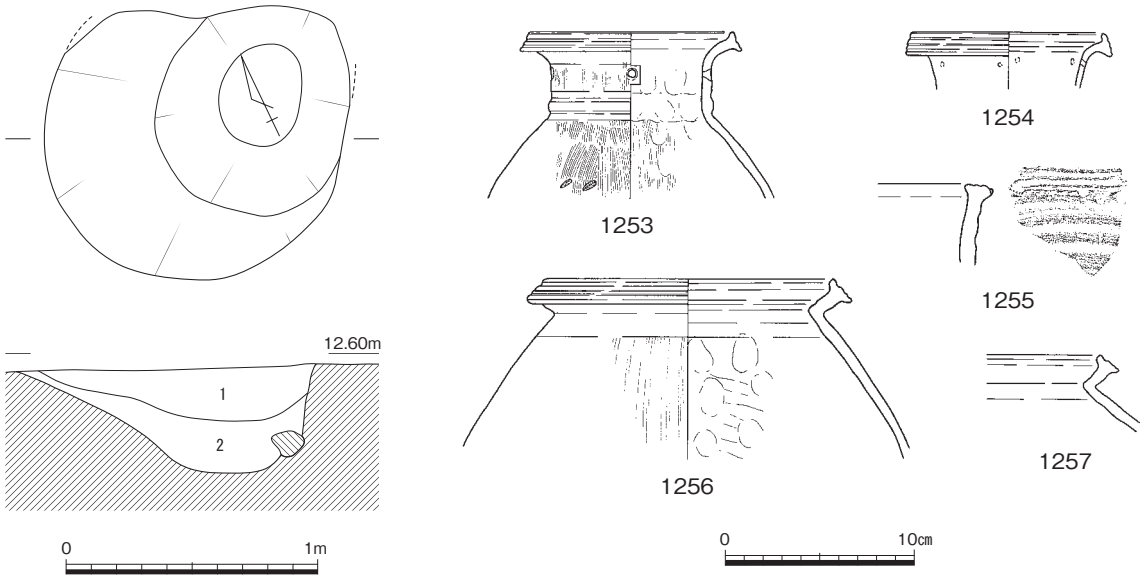


1　暗褐色(10YR3/3)シルト（砂質有、炭極少・礫極少含、褐色(10YR4/4)土塊混）
2　暗褐色(10YR3/3)シルト（砂質有、炭少・礫極少含、褐色(10YR4/4)土塊少混）
3　暗褐色(10YR3/3)シルト（基盤砂礫土混、礫多含）

第225図　土坑74（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑75（第12・226図）

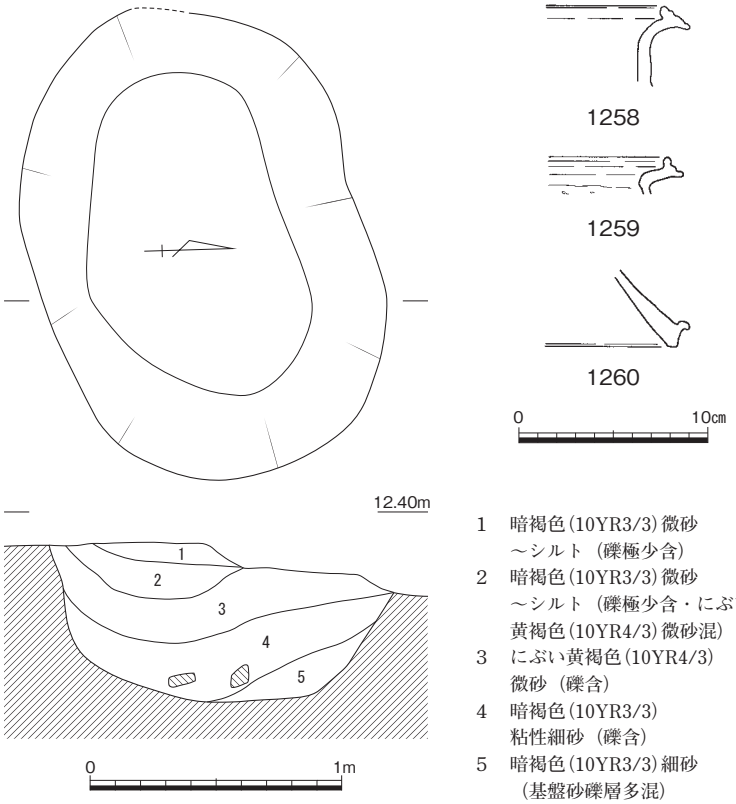
土坑74の東に位置する。土坑72に北側を切られる。径約1.2ｍで、底も平坦でないが、規模に比して図示し得る土器が多く出土している。



1　黒褐色(7.5YR3/2)砂質土（土器含、にぶい黄褐色(10YR5/4)土塊多含）
2　黒褐色(7.5YR2/2)砂質土（粗砂質強）

第226図　土坑75（1/30）・出土遺物（1/4）

出土土器には中期後葉～後期前葉の時期幅がある。1255・1257が赤色味を帯びた後期の土器と考えられるが、1255は頸部に太い凹線を巡らし、1257は肩が強く張るなど古い様相をとどめている。弥・後・Ⅰの古い段階に位置付けられる。（渡邉）



第227図　土坑76（1/30）・出土遺物（1/4）

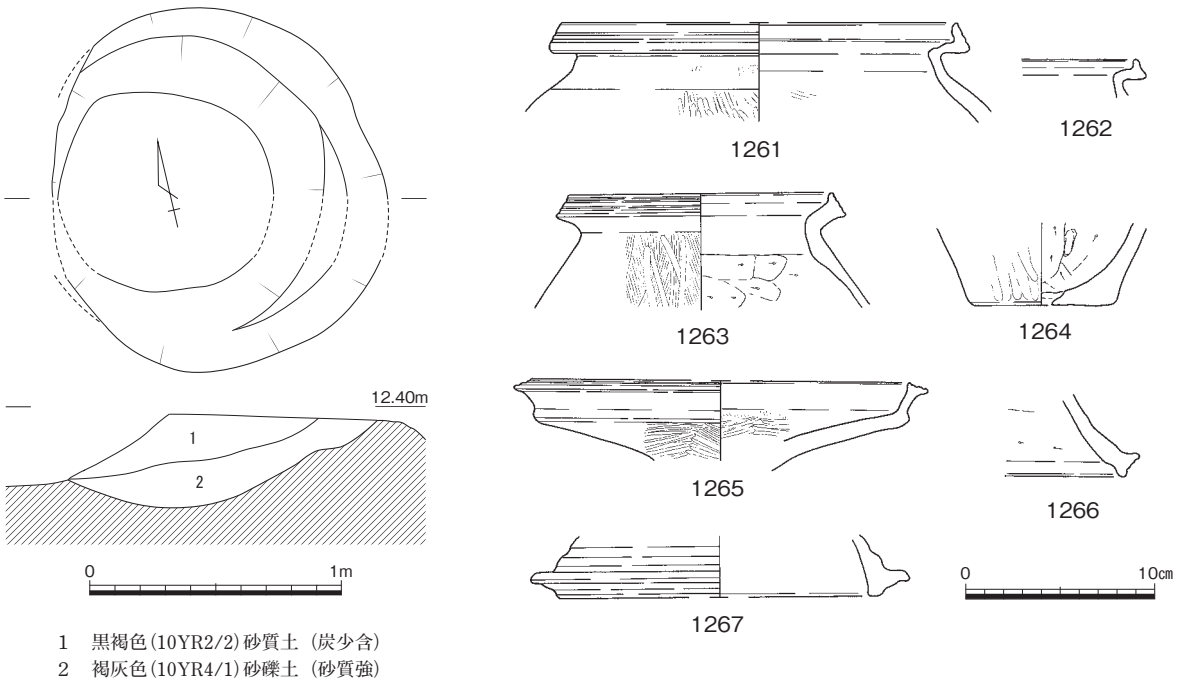
土坑76（第12・227図）

土坑75調査後に検出し、西半は土坑75と重複している。微高地先端の斜面に立地しており、検出面に高低差が差があるが、最も高い位置から底までの深さは70㎝を超える深い土坑である。

土器は中期後葉が主体であるが、後期初頭まで含んでいた。甕の口縁端部の拡張は大きく、薄手硬質であるが赤味を帯びていて、中期と後期の中間的な様相を示す。調査状況から土坑75より古く位置付けられることから、弥・中・Ⅲに機能し、弥・後・Ⅰには埋没したと考えておきたい。（渡邉）

土坑77（第12・228図）

土坑76の北西に位置する。西部を土坑74で切られている。



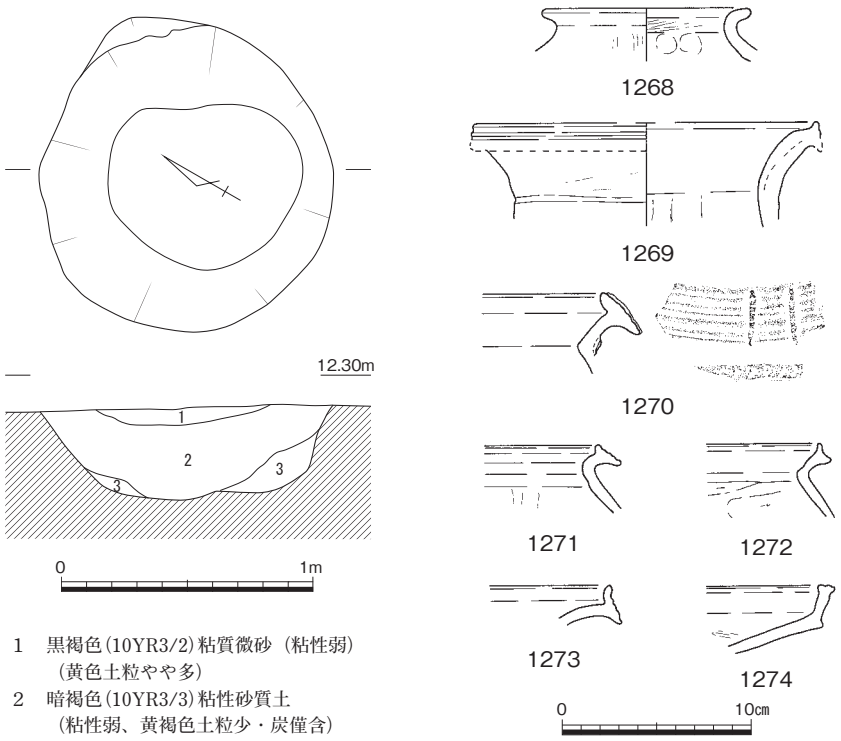
第228図　土坑77（1/30）・出土遺物（1/4）

出土土器は中期後葉～後期前葉の時期幅があるが、後期が主体であった。高杯1265の口縁はあまり拡張されておらず、土坑74出土の高杯1251より古い様相を示し、切り合いと矛盾がない。弥・後・Ⅰの古い段階に位置付けられる。（渡邉）

土坑78（第12・229図）

土坑77の北東に位置する。微高地先端であるが削平されて低地となった部分に立地している。検出面の標高は12.18ｍと低く、深さ40㎝足らずと浅いが、底面の標高は約11.80ｍで、本来は深さのある土坑であったと考えられる。底面もほぼ平らで断面逆台形を呈しており、貯蔵穴の可能性が想起される。

出土土器には中期後葉～後期前葉の時期幅が認められる。高杯1274は口縁端部上面に沈線を有するが硬質で黄橙色を呈し、中期と後期の中間的な様相を示す。弥・後・Ⅰの古い段階に位置付けておきたい。（渡邉）



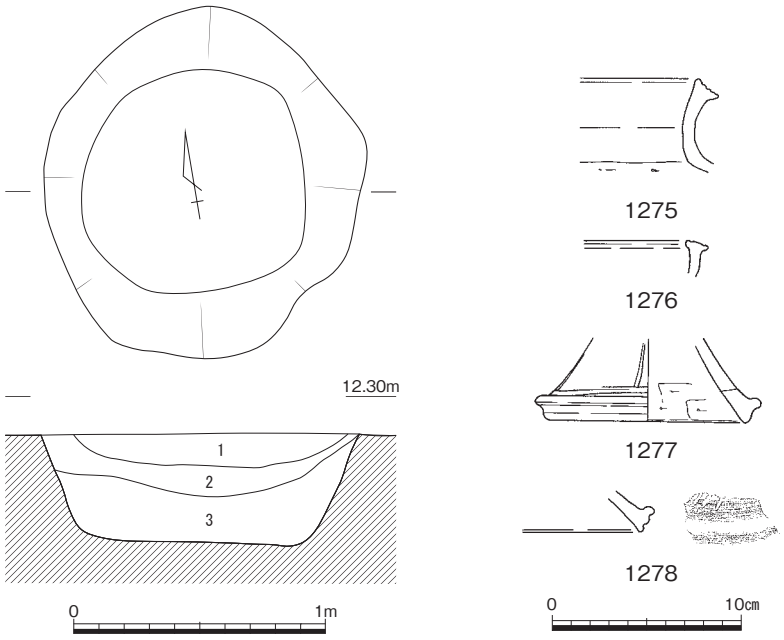
1　黒褐色(10YR3/2)粘質微砂（粘性弱）（黄色土粒やや多）
2　暗褐色(10YR3/3)粘性砂質土（粘性弱、黄褐色土粒少・炭僅含）
3　暗褐色(10YR3/4)砂質土

第229図　土坑78（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑79（第12・230図）

土坑78の北東に位置し、土坑78と同じ低地で検出した。規模・形状ともに土坑78と似ており、同様に貯蔵穴の可能性がある。

出土土器には中期後葉～後期前葉の時期幅がある。1277は方形透かしを有する。1275・1276は中間的な様相を示す。1278は赤色で外面に篦描き沈線文を有する。弥・後・Ⅰの古い段階と考えられる。　（渡邉）

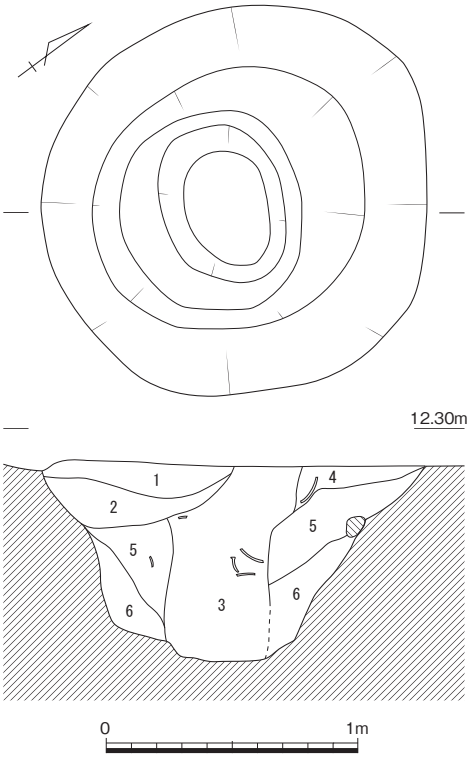


1　黒褐色(10YR3/2)粘質微砂（粘性弱）（黄色土粒やや多混）
2　灰黄褐色(10YR4/2)砂質土
3　黒褐色(10YR3/2)粘性砂質土（炭少・礫多混）

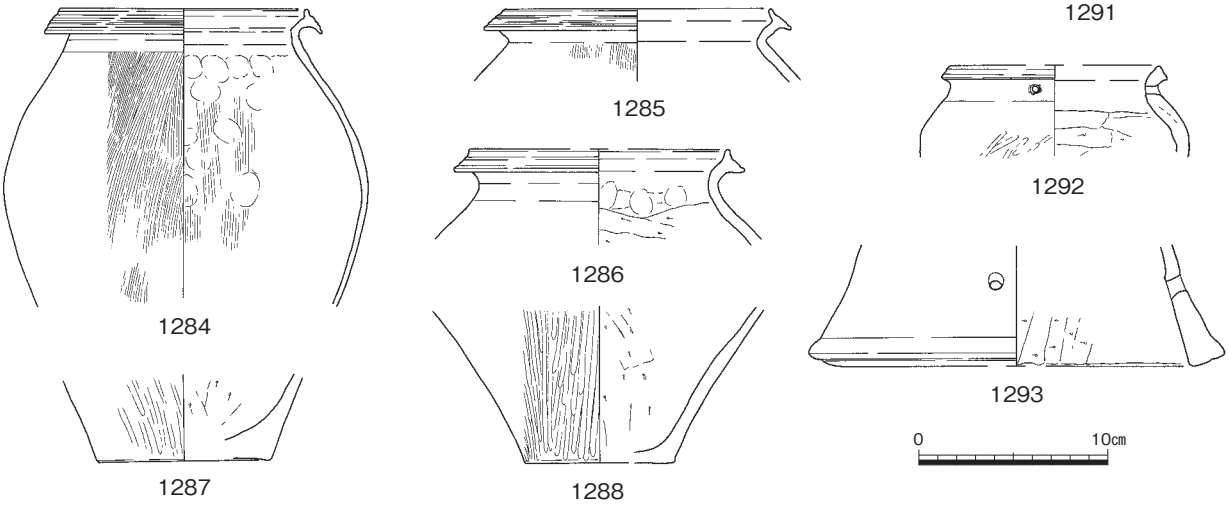
第230図　土坑79（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑80（第12・231図、図版49－２・86）

竪穴住居13の南東約２ｍに位置する土坑で、平面は円形を呈する。長軸長153㎝、短軸長153㎝、深さ78㎝を測り、断面は逆台形を呈する。埋土は大きく６層に大別できたが、柱痕状に検出された３層のあり方が異質である。この埋土は粘性の強い黒褐色シルトであり、周りの埋土と確実に異なるため、



1　暗褐色(10YR3/3)シルト
2　暗褐色(10YR3/3)シルト（砂質強、炭混）
3　黒褐色(10YR2/2)シルト（粘性強、炭混）
4　暗褐色(10YR3/3)シルト
5　黒褐色(10YR3/2)シルト（粘性有、炭混）
6　暗褐色(10YR3/3)シルト（基盤粗砂混）



第231図　土坑80（1/30）・出土遺物（1/4）

掘り間違う可能性は低いと考えており、本来の形状をとどめているものと判断している。遺構の性格等は不明であるが、第３層の中間付近で図示した弥生土器がまとまって出土した。

出土土器には弥・中・Ⅲの壺**1279**、甕**1284**・**1285**なども含まれるが、弥・後・Ⅰの古相を示す土器が主体を占めていることから、遺構の時期は弥・後・Ⅰと考えられる。（河合）

土坑81（第12・232図）

土坑80の南東に位置する土坑で、平面は円形を呈する。長軸長115㎝、短軸長113㎝、深さ50㎝を測り、断面は逆台形を呈する。埋土は３層に分かれ、廃絶時は一気に埋まった状況を示している。

出土遺物には、甕**1294**、高杯**1295**・**1296**がある。この遺物などから、時期は弥・後・Ⅰと考えておきたい。遺構の形態や所属時期などから貯蔵穴としての利用を想定したい。（河合）

土坑82（第12・233図）

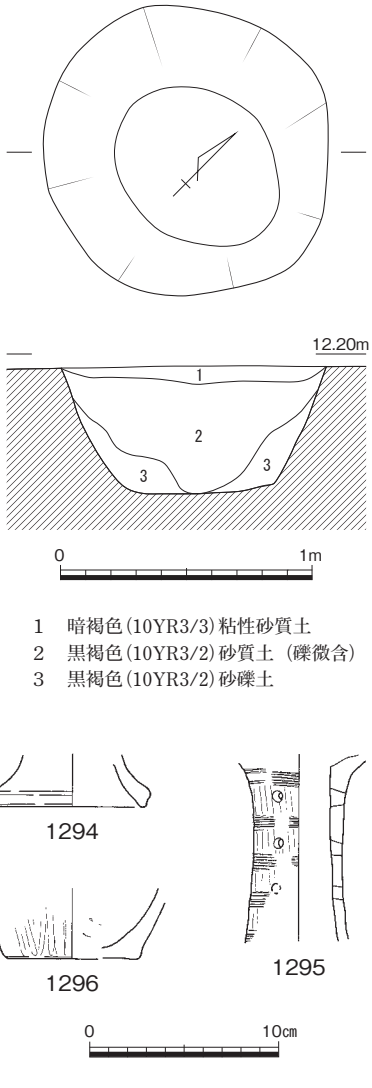
竪穴住居14の南約50㎝に位置する土坑で、遺構の南西部分は現代の水路の下であるため、調査はできなかった。現状で、長軸長111㎝、深さ23㎝を測り、断面は逆台形を呈する。埋土は７層に大別できるが、このうち第６・７層は第１～５層に切られているため､本来は２基の土坑が重複していたと考えられる。

出土遺物には､弥生土器**1297**が含まれており､遺構の時期は､弥・後・Ⅲと考えておきたい。（河合）

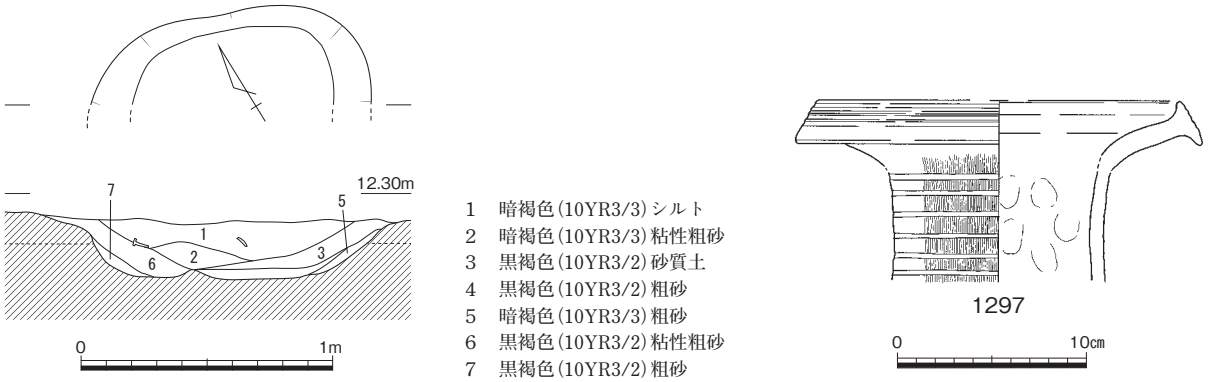
土坑83（第12・234図、図版49－３・119）

弥・後・Ⅲの竪穴住居14の調査後、床面付近で検出された土坑で、平面は方形を呈する。長軸長125㎝、短軸長120㎝、深さ10㎝を測り、断面は逆台形を呈する。

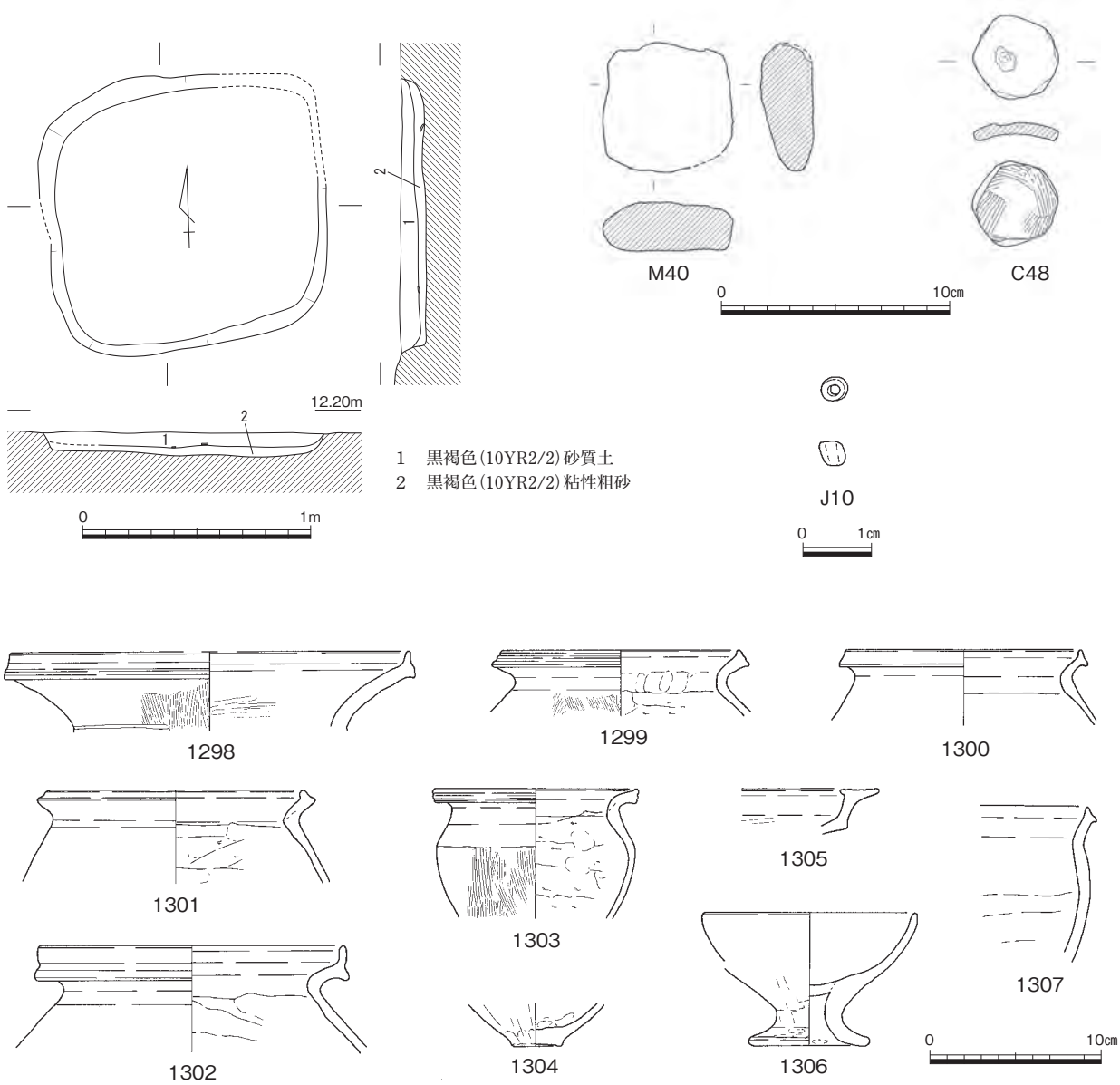
出土遺物には、鋳造鉄斧の可能性がある**M40**、円板状土製品**C48**のほか、土器**1298**～**1307**が認められる。このうち、**1302**は竪穴住居14に所属する可能性が高い。遺構の時期は出土遺物から弥・後・Ⅰと考えられるが、性格は不明である。（河合）



第232図　土坑81（1/30）・出土遺物（1/4）



第233図　土坑82（1/30）・出土遺物（1/4）



第234図　土坑83（1/30）・出土遺物（1/4・1/3・1/1）

土坑84（第12・235図）

竪穴住居14に東接する土坑で、平面は楕円形を呈する。検出時は区別できずに同時に掘り上げたが、本来は柱穴と土坑が重複関係にある遺構である。このうち、土坑の規模は長軸長112㎝、短軸長95㎝、深さ57㎝を測り、断面は逆台形を呈する。

図化できた出土遺物には高杯**1308**があり、他に弥・後・Ⅰと考えられる土器片が含まれていた。遺構の時期は出土遺物から弥・後・Ⅰと考えられるが、遺構の性格は不明である。　（河合）

土坑85（第12・236図、図版50－１）

土坑81の東約5.5ｍに位置する土坑で、平面は楕円形を呈する。底部は段差を持って南半が一部深いが、２つの土坑が重複した可能性がある。長軸長118㎝、短軸長81㎝、深さ29㎝を測る。

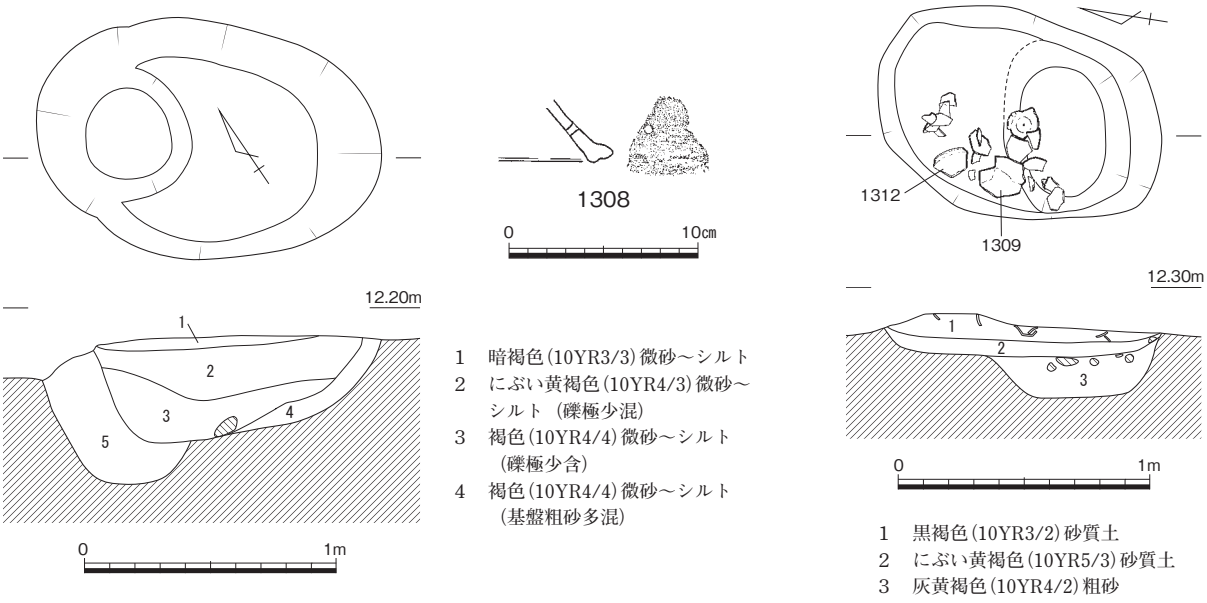
出土遺物は第１層内からまとめて検出された。甕**1309**～**1311**、高杯**1312**・**1313**、器台**1314**がある。これらはすべて弥・中・Ⅲに属するものであり、遺構の時期を示していると考える。遺構の性格等

は、削平が著しいため、不明である。　（河合）

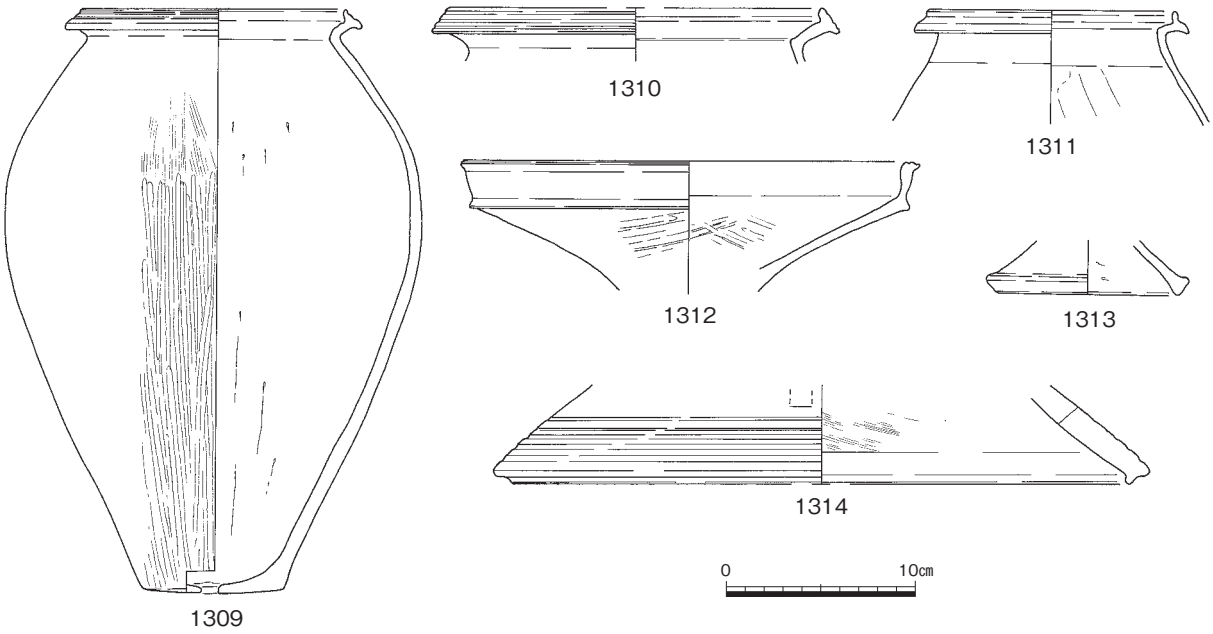
土坑86（第12・237図、図版50－２）

竪穴住居18の南西約2.5ｍに位置する土坑で、遺構の北東部分は現代の水路の下であるため、調査はできなかった。現状で、長軸長162㎝、深さ71㎝を測り、断面は逆台形を呈する。埋土は３層に大別でき、このうち第１層は北西方向に広がっていた。

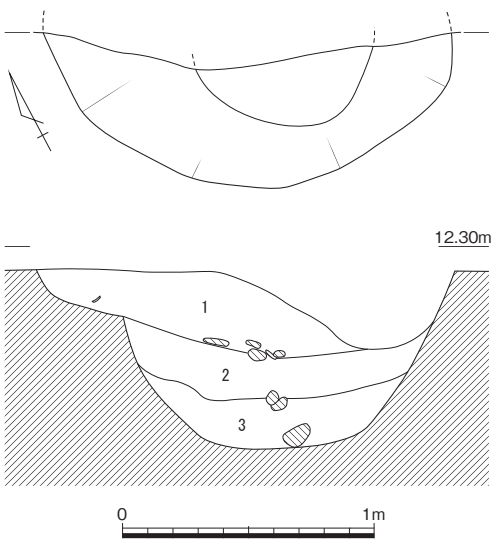
出土遺物の多くが第１層から出土しており、弥・中・Ⅲ～弥・後・Ⅰに属する壺**1315**、甕**1316**・**1317**などが含まれていた。

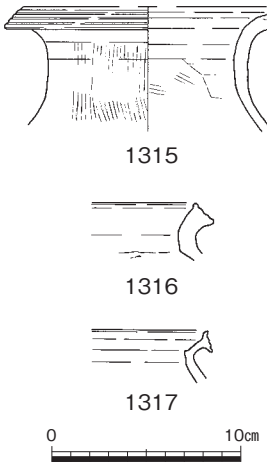


第235図　土坑84（1/30）・出土遺物（1/4）



第236図　土坑85（1/30）・出土遺物（1/4）





1　にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土
（土器多含）
2　黒褐色(10YR3/2)粘性砂質土
3　にぶい黄橙色(10YR6/4)粗砂

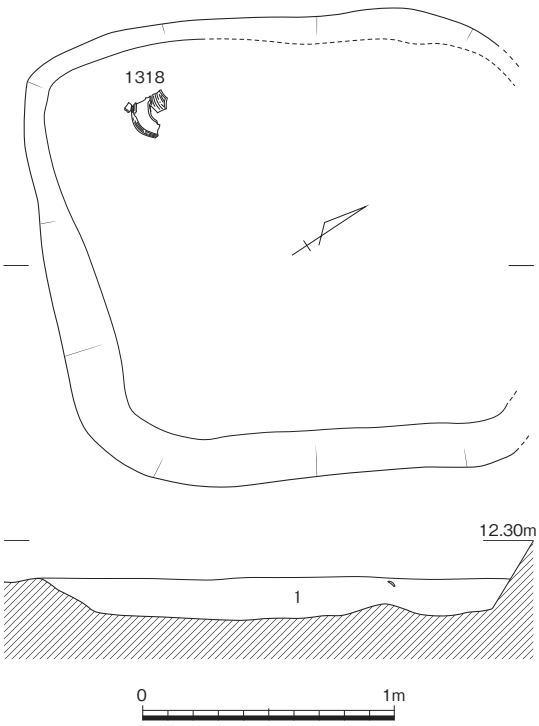
第237図　土坑86（1/30）・出土遺物（1/4）

遺構の時期は弥・後・Ⅰと考えられ、貯蔵穴として利用されていた可能性を考えておきたい。　（河合）

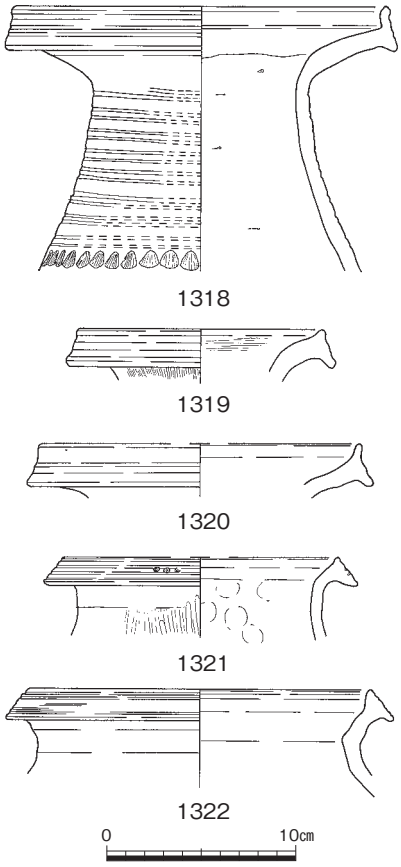
土坑87（第12・238・239図、図版50－３）

竪穴住居18の西約4.5ｍに位置する土坑で、平面は方形を呈する。北東辺は現代の水路の下であるため、調査はできなかった。現状で長軸長190㎝以上、短軸長183㎝、深さ16㎝を測り、断面は逆台形を呈する。

出土遺物としては、壺**1318**～**1321**、甕**1322**・**1323**・**1327**、高杯**1324**～**1326**、鉢**1328**などがある。これらの遺物には時期幅が認められるが、壺**1318**・**1320**と高杯**1326**などが示す弥・後・Ⅲの最新相を遺構の時期として考えておきたい。遺構の性格等は不明である。　（河合）



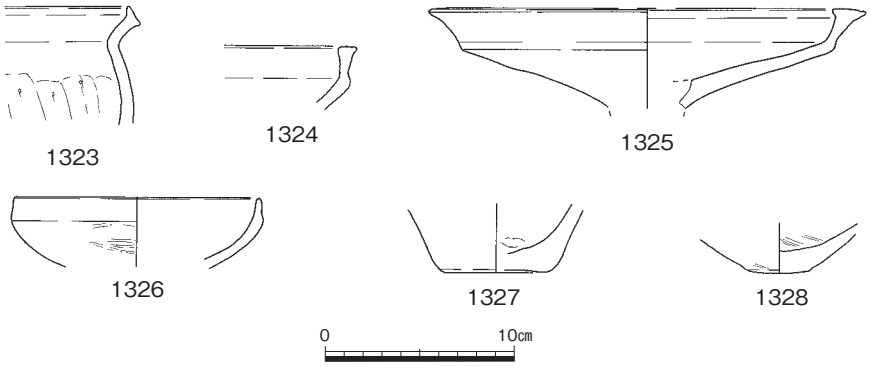
1　黒褐色(10YR3/1)粘質細砂（土器片やや多含）



第238図　土坑87（1/30）・出土遺物①（1/4）

土坑88（第12・240図）

土坑87の西に位置する土坑で、平面は隅丸方形を呈する。長軸長151㎝、短軸長118㎝、深さ60㎝を測り、断面は逆台形を呈する。埋土は３層に分かれ、廃絶時は一気に埋まった状況を示している。



第239図　土坑87出土遺物②（1/4）

出土遺物としては、高杯**1329**・**1330**、壺**1331**などがある。この遺物などから、時期は弥・中・Ⅲと考えておきたい。遺構の形態や所属時期などから貯蔵穴としての利用を想定したい。　（河合）

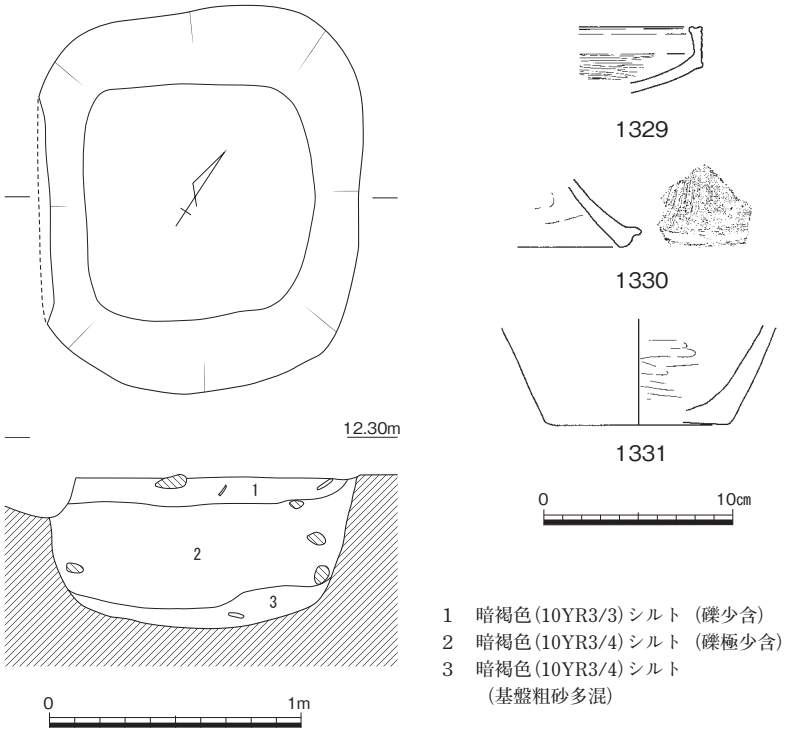
土坑89（第12・241図）

Ｉ07とＪ07に跨がって位置する小土坑で、土坑88のすぐ西に接する。平面形が楕円形、断面形は椀状を呈する。規模は、長径は110㎝、短径が93㎝、深さは30㎝である。

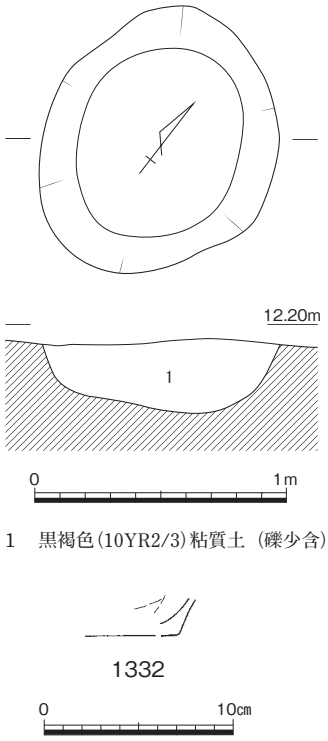
出土遺物には、熱を受けた甕底部片**1332**があり、それからみた土坑の時期は、弥生時代後期と考えられる。　（弘田）

土坑90（第12・242図）

Ｊ07に位置する土坑で、竪穴住居16の北東部に接するが、切り合い関係は不明であった。検出面での平面形及び断面形は不整形であるが、底部付近で、長さ197㎝、幅188㎝ほどの隅丸長方形状の落ち

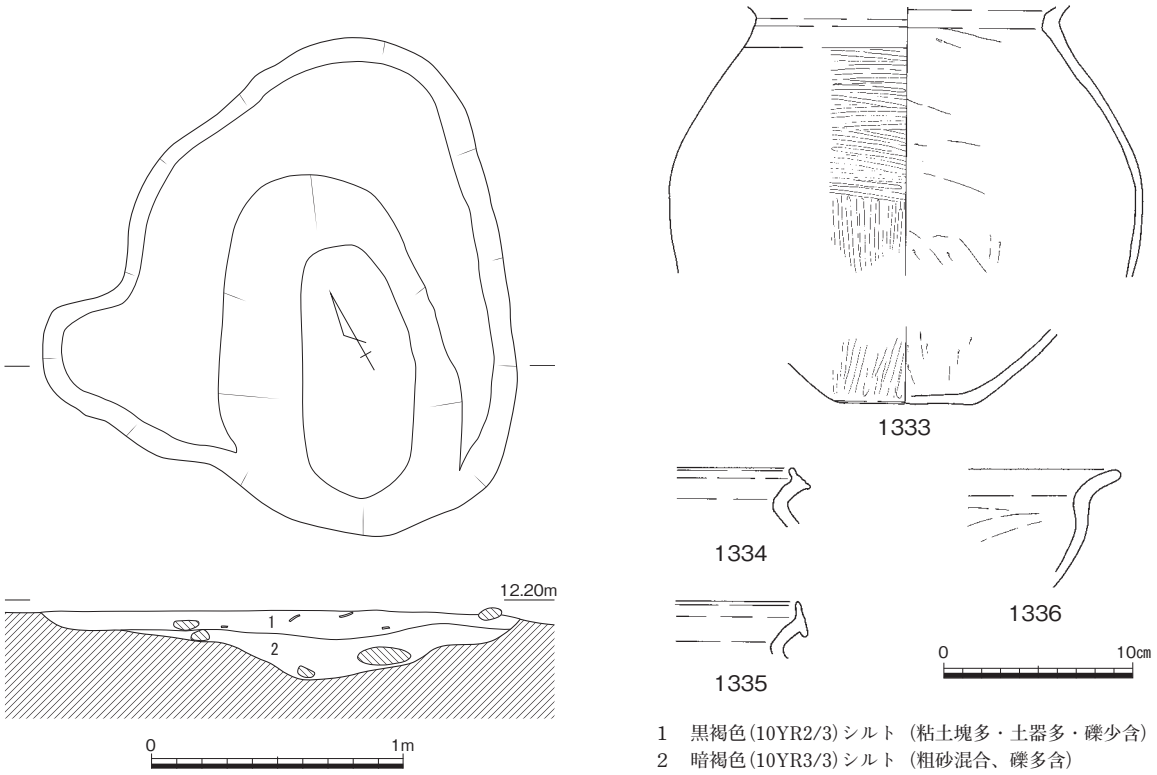


第240図　土坑88（1/30）・出土遺物（1/4）

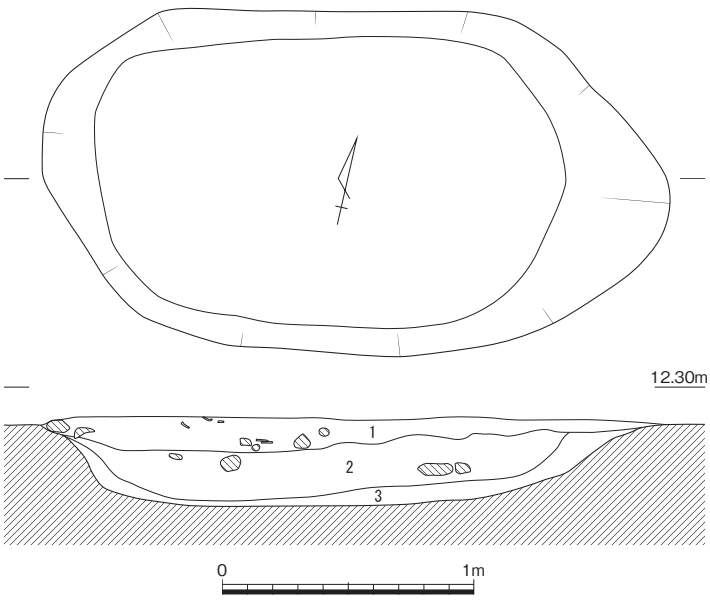


第241図　土坑89（1/30）・出土遺物（1/4）

込みがある。埋土は２層に分かれ、上層には粘土塊や土器片が多く見られた。出土遺物には、同一個体とみられる壺の体部片と底部片1333、甕口縁部片1334・1335、鉢口縁部片1336があり、時期は弥・後・Ⅰである。　（弘田）



第242図　土坑90（1/30）・出土遺物（1/4）

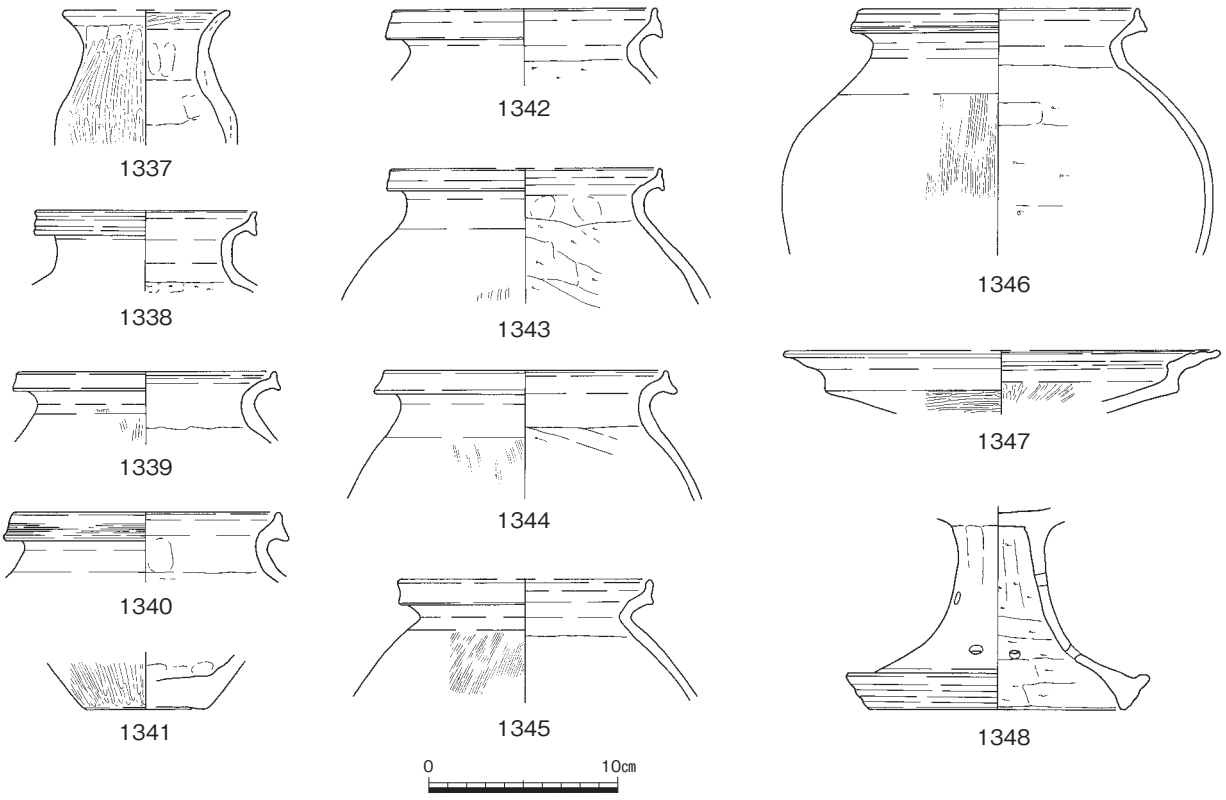


第243図　土坑91（1/30）

土坑91（第12・243・244図）

Ｊ07とＪ08に跨がって位置する土坑で、土坑90の東に接している。平面形は長楕円形をなし、断面形は逆台形状を呈する。規模は、長さが248㎝、幅は197㎝で、深さが36㎝である。埋土は３層に分かれるが、そのうちの上、中層の第１・２層では、土器片とともに礫を多く含み、下層の第３層にも含んでいた。

出土遺物には、壺口縁部片1337・1338、甕口縁部片1339・1340～1342～1346・甕底部片1341、高杯口縁部1347、同脚部片1348がある。これらからみたこの土坑の時期は、弥・後・Ⅱと考えておきたい。　（弘田）



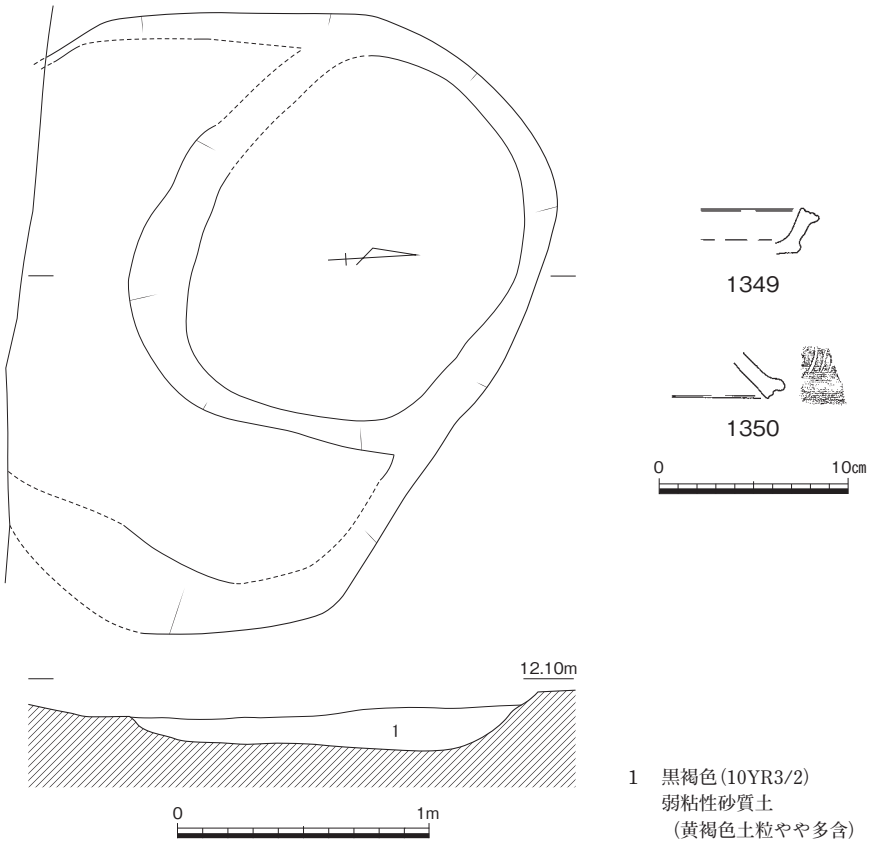
第244図　土坑91出土遺物（1/4）

土坑92（第12・245図）

Ｊ08に位置する土坑で、竪穴住居17の床面下層において検出したことから、竪穴住居17に先行する。また、土坑の南側は調査区外へと続いていた。

平面形はやや不定の隅丸方形で、断面は皿状をなす。規模は、残存する軸の長さが248㎝に対して、深さは18㎝と浅い。

出土した遺物には高杯口縁部片**1349**、高杯脚部片**1350**がある。これらの土器から、この土坑の時期は弥・後・Ⅰである。　（弘田）



第245図　土坑92（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑93（第12・246図、図版51－１）

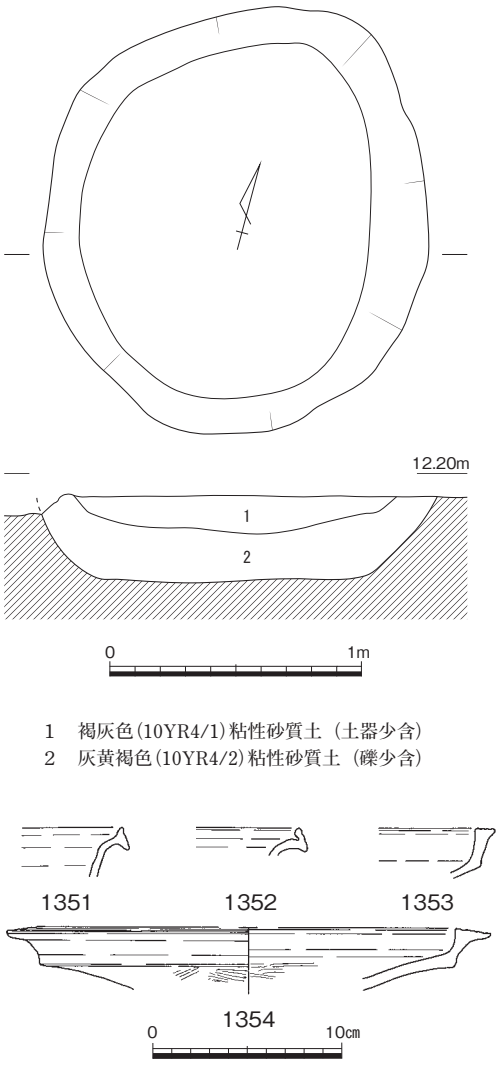
Ｊ08に位置し、土坑92からは北東に１ｍ離れた所に位置する土坑である。平面形は、やや歪な隅丸方形で、断面形は逆台形をなす。規模は、長さが168㎝、幅が151㎝で、深さは35㎝である。埋土は２層に別れ、レンズ状に堆積していた。

出土した遺物には、壺**1351**、甕**1352**、高杯**1353**・**1354**がある。いずれも細片であった。高杯には口縁端部の拡張がない**1353**と外方へ拡張する**1354**があるが、弥・後・Ⅰの範疇と考えられる。（弘田）

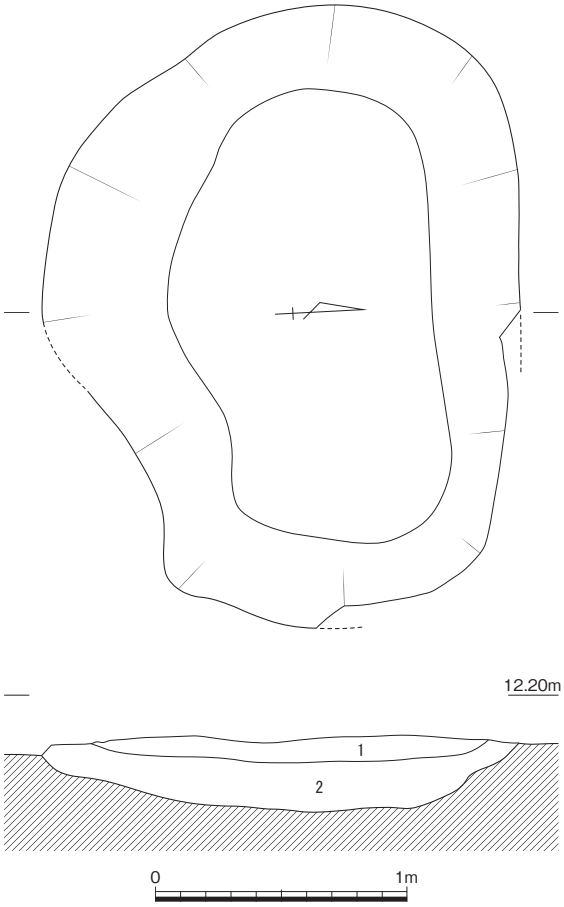
土坑94（第12・247・248図）

Ｊ08に位置する土坑で、竪穴住居17の東１ｍ、土坑93の南東に接して位置する大形の土坑である。平面形はやや歪な楕円形をなし、断面形は皿状をなす。規模は、長さが248㎝、幅は190㎝で、深さは29㎝である。

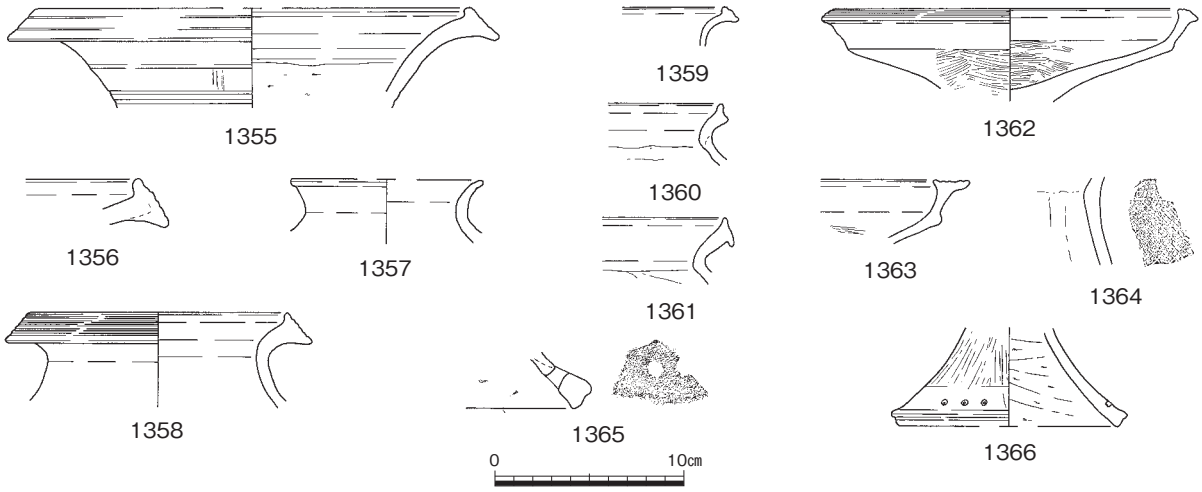
出土した遺物は細片が主であるが、器台片**1355**、壺口縁部片**1356**～**1358**、甕口縁部片**1359**～**1361**、高杯杯部**1362**・**1363**、同脚部**1364**～**1366**がある。**1364**は細片で、外面に銅鐸の袈裟襷文を思わせるような細かい斜格子文が描かれている。これらの遺物からみたこの土坑の時期は、弥・後・Ⅰと考えられる。（弘田）



第246図　土坑93（1/30）・出土遺物（1/4）



第247図　土坑94（1/30）

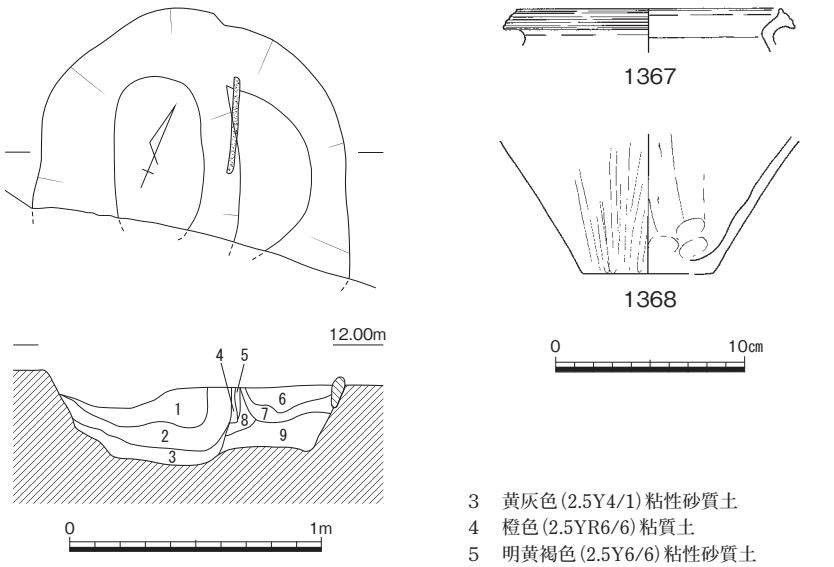


第248図　土坑94出土遺物（1/4）

土坑95（第12・249図）

Ｊ08に位置する土坑で、土坑94と切り合い関係にある。平面形は楕円形を呈するとみられるが、土坑の南側は調査区外に続く。規模は、残存部長が124㎝で、深さは30㎝である。１基の土坑としたが、土層の堆積状況から切り合い関係にある２基の土坑ともみられ、東側の土坑が埋没後に西側土坑を掘削した状況が看取できる。その際、東土坑との壁面上部を粘土で目張り（第4･5層）し、かつ炭層の痕跡から木材を構架していたとみられる。東土坑も埋没後の掘り返し（第６・７層）がみられ、繰り返しの使用を窺わせる。貯蔵穴の可能性もある。

出土遺物には、甕片**1367・1368**があり、これからみた土坑の時期は、弥・後・Ⅰと考えておきたい。（弘田）



1　灰黄褐色(10YR4/2)粘性砂質土
　（炭少・にぶい黄色(2.5Y6/4)粘性砂質土塊多含）
2　褐灰色(10YR4/1)粘性砂質土（炭少含）
3　黄灰色(2.5Y4/1)粘性砂質土
4　橙色(2.5YR6/6)粘質土
5　明黄褐色(2.5Y6/6)粘性砂質土
6　にぶい黄色(2.5Y6/4)粘性砂質土
7　暗褐色(10YR3/3)粘性砂質土（炭多含）
8　黒褐色(10YR3/2)粘性砂質土（炭多含）
9　褐灰色(10YR4/1)粘性砂質土

第249図　土坑95（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑96（第12・250図）

Ｊ08に所在する土坑で、土坑94の北２ｍに位置する。古墳墳時代の溝17により東側が削平を受けているが、平面形は円形、断面形は逆台形状を呈し、規模は残存部での長さが150㎝で、深さは20㎝である。

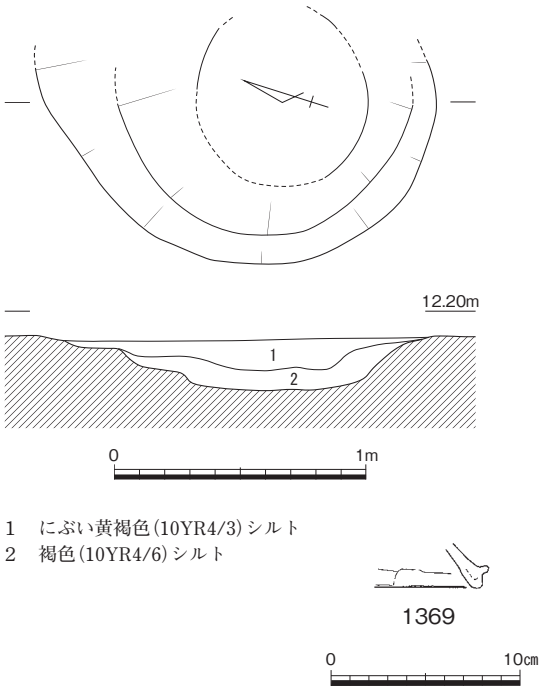
出土した遺物のうち、図示し得たのは高杯脚端部の細片**1369**のみであるが、これから判断してこの土坑の時期は、弥・後・Ⅰと考えられる。（弘田）

土坑97（第12・251・252図、図版51－２・86）

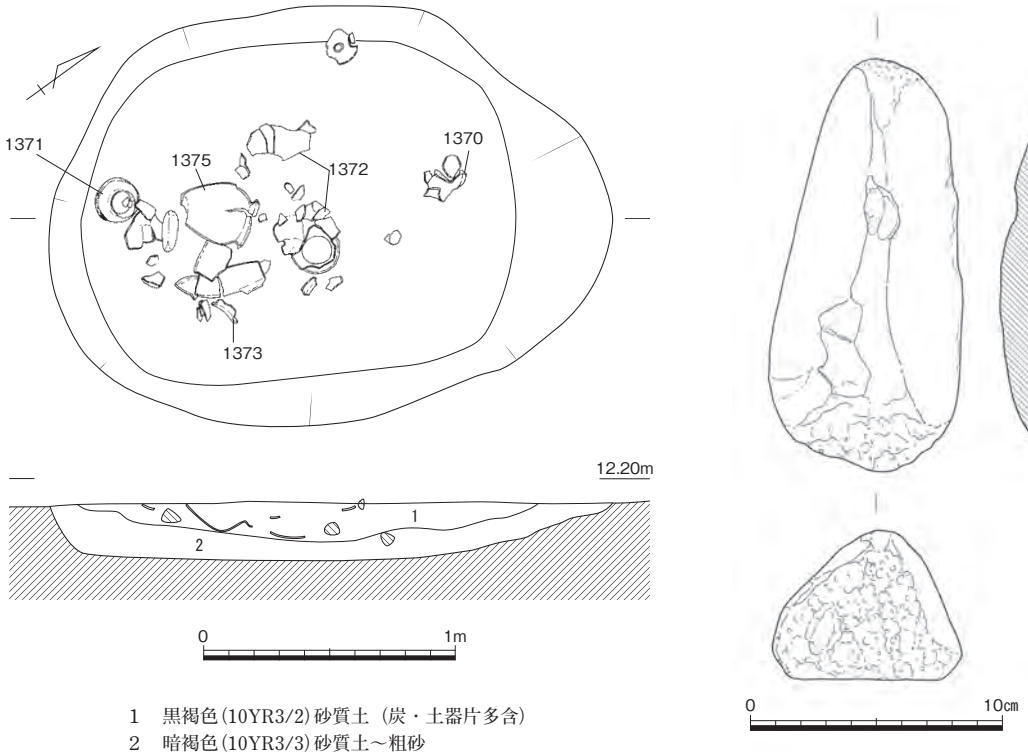
Ｊ08において竪穴住居18の北西３ｍの所に位置する土坑である。平面形は楕円形もしくは隅丸方形を呈し、断面形は椀状をなす。規模は、長さが222㎝、幅は165㎝で、深さは23㎝である。埋土は上下２層に分かれるが、第１層（上層）中において炭とともに多くの土器片が出土している。

出土遺物には、土器と石器がある。土器のうち全容が明らかなものは、甕**1375**のみである。その他には長頸壺の口縁部片**1370**・**1371**、壺口縁部片**1372**、甕口縁部**1373**・**1374**・**1376**、高杯口縁部片**1377**、高杯脚部片**1378**、鉢の口縁部から体部にかけての破片**1379**・**1380**がある。また、図示していないが、杯部と脚部が別作りの高杯脚柱部も出土している。石器には花崗岩製の敲石**Ｓ84**がある。

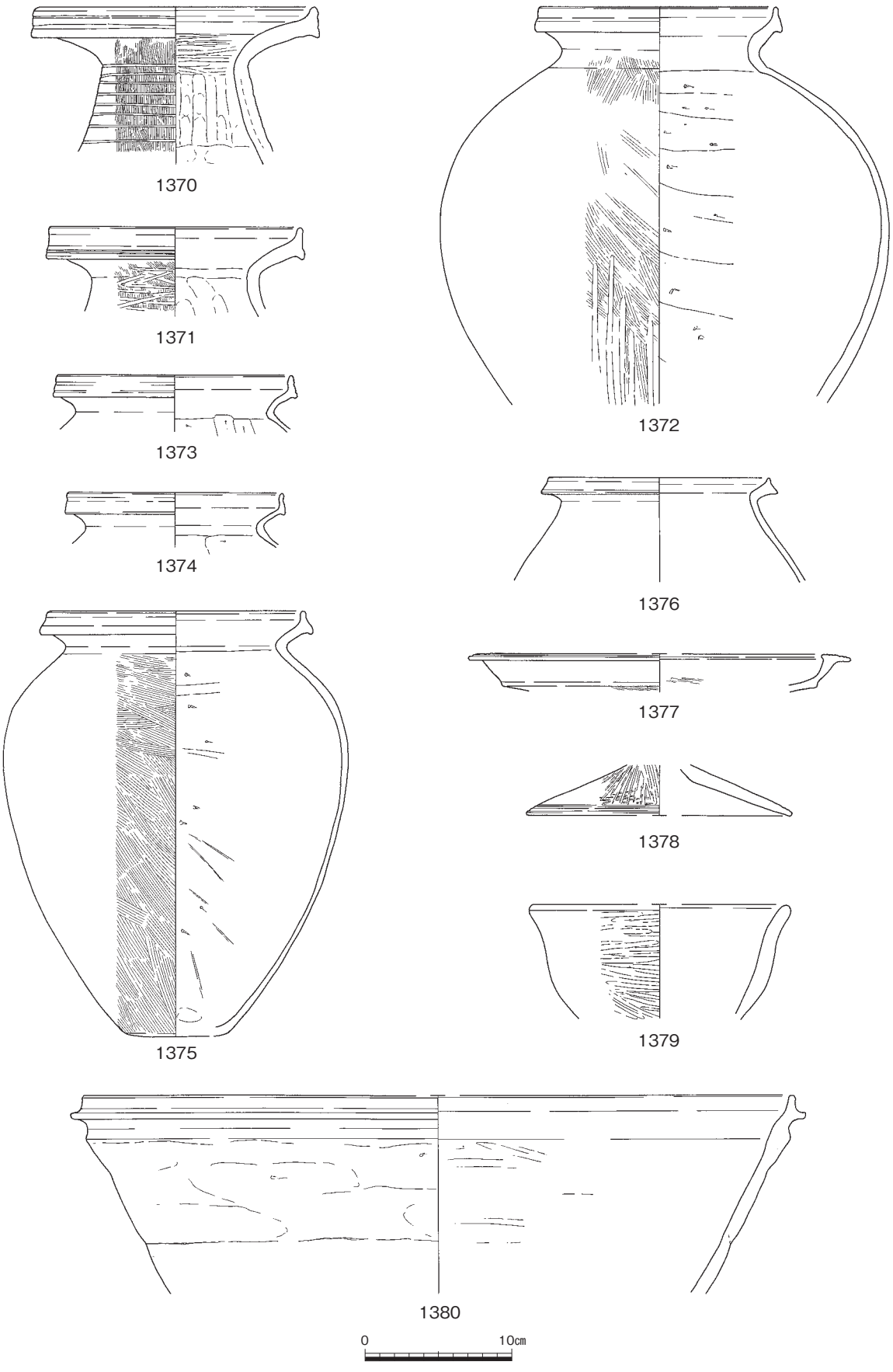
土器には時期幅があり、高杯では**1377**のように口縁上端部を拡張する弥・後・Ⅰの特徴を示す個体や**1378**のように短脚となった弥・後・Ⅲの特徴を示すものがある。しかし、壺**1370**～**1372**や甕**1373**～**1375**は後者に伴う時期のもので、土坑の時期は弥・後・Ⅲと考えておきたい。（弘田）



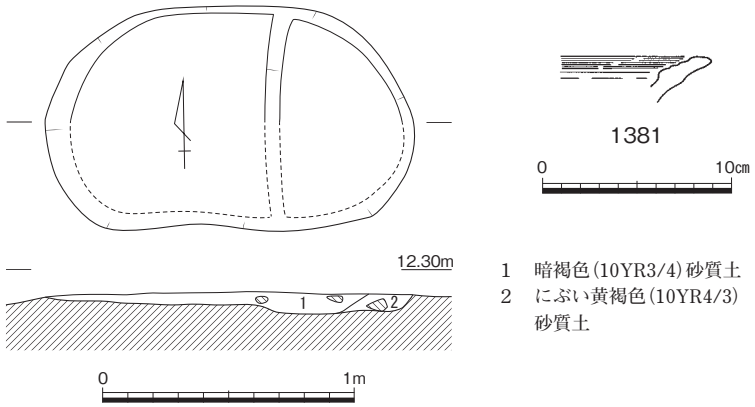
第250図　土坑96（1/30）・出土遺物（1/4）



第251図　土坑97（1/30）・出土遺物①（1/3）



第252図　土坑97出土遺物②（1/4）

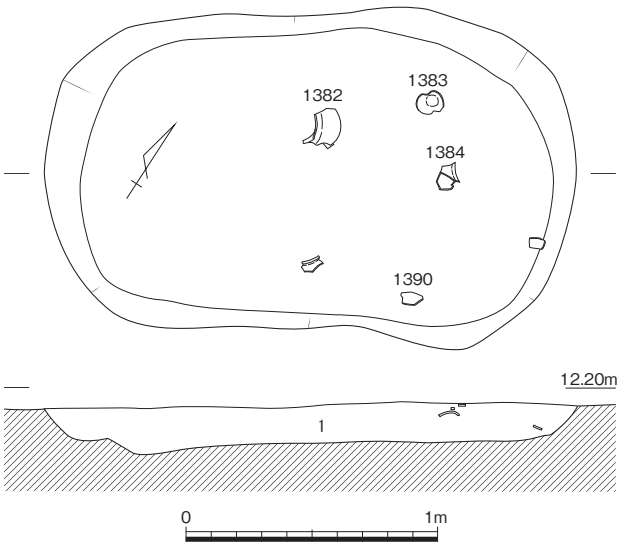


第253図　土坑98（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑98（第12・253図）

竪穴住居18の北約4.5ｍに位置する土坑で、平面は楕円形を呈する。長軸長146㎝、短軸長90㎝、深さ９㎝を測り、断面は皿状を呈する。削平が著しく、用途や本来の形状などの詳細は不明であるが、現状では底面の東半が一段低くなっている。埋土には礫を多く含んでいる。

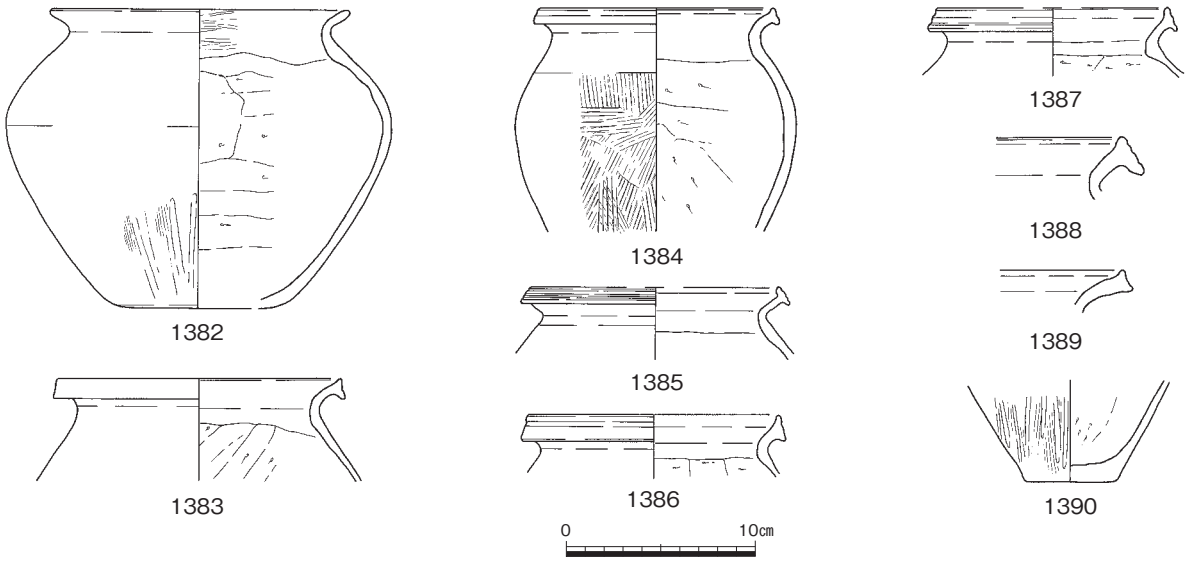
出土遺物も乏しく、図化できたのは高杯**1381**である。出土遺物等から、遺構の時期は弥・後・Ⅰと考えたい。　（河合）



土坑99（第12・254図）

竪穴住居20の西約２ｍに位置する土坑で、平面は楕円形を呈する。長軸長210㎝、短軸長134㎝、深さ18㎝を測り、断面は逆台形を呈する。削平が著しく、用途や本来の形状などの詳細は不明であるが、埋土内に比較的多くの遺物が含まれていた。

出土遺物としては、弥・中・Ⅲ～弥・後・Ⅰに属する鉢**1382**、甕**1383**～**1388**・**1390**、壺**1389**などがある。これらなどから、遺構の時期は弥・後・Ⅰと考えられる。　（河合）

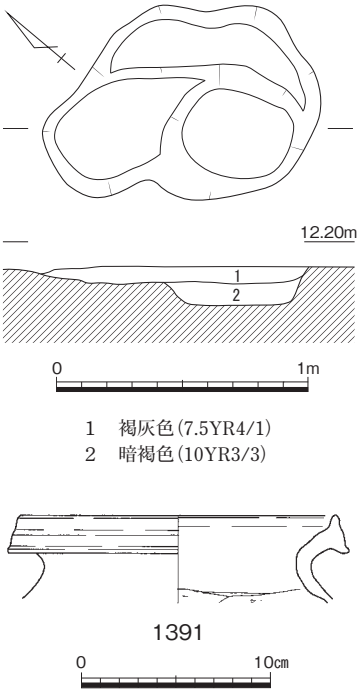


第254図　土坑99（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑100（第12・255図）

竪穴住居18の北約50㎝に位置する土坑で、平面は不整形を呈する。長軸長107㎝、短軸長77㎝、深さ15㎝を測る。土坑として調査したが、形態が不整形で、底面も顕著な凹凸（段差）があるため、人為的な遺構でない可能性もある。

出土遺物には、甕**1391**などがある。出土遺物等から、遺構の時期は弥・後・Ⅰと考えておきたい。（河合）



第255図　土坑100（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑101（第12・256図）

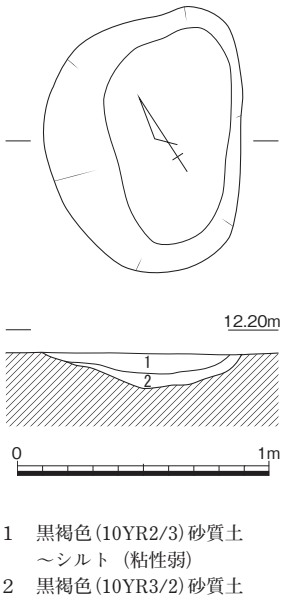
竪穴住居18の北約50㎝、土坑100の東約1.5ｍに位置する土坑で、平面は楕円形を呈する。長軸長104㎝、短軸長78㎝、深さ13㎝を測り、断面は皿状を呈する。埋土は２層に大別できたが、全体的に削平が著しい。出土遺物には、弥・中・Ⅲに属する土器の細片が認められる。（河合）

土坑102（第12・257図）

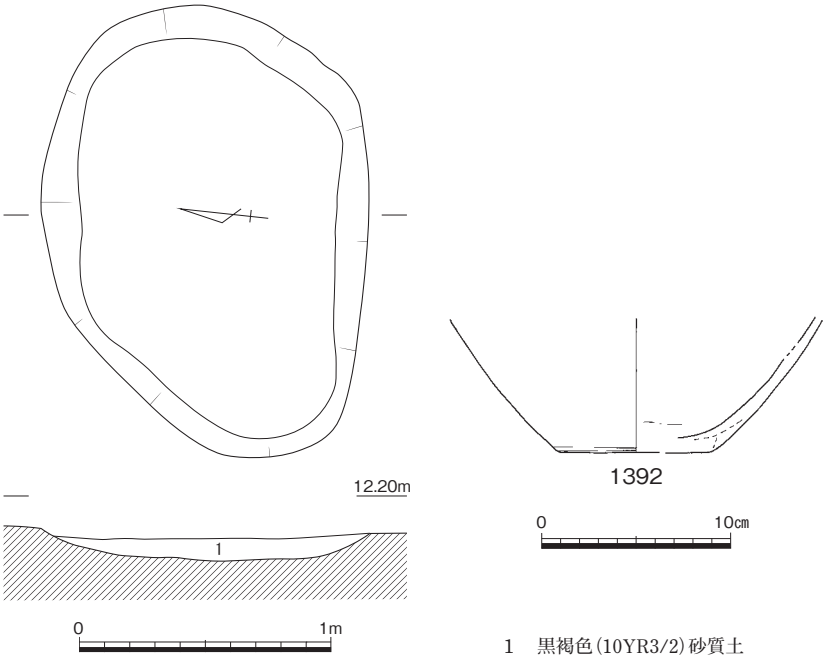
弥・後・Ⅲに比定される竪穴住居18の東で重複する土坑で、これを切っている。平面は楕円形を呈する。長軸長182㎝、短軸長130㎝、深さ９㎝を測り、断面は皿状を呈する。削平が著しく、用途や本来の形状などの詳細は不明である。埋土内には、壺**1392**などが含まれていた。出土遺物等から、遺構の時期は弥・後・Ⅲと考えておきたい。（河合）

土坑103・104（第12・258図、図版86）

竪穴住居18の東約１ｍに位置する土坑群である。調査当初は一つの大形土坑として検出したが、掘り進めていく間に、２つの土坑が重複していることを確認したため、同時並行で調査を進めた。その



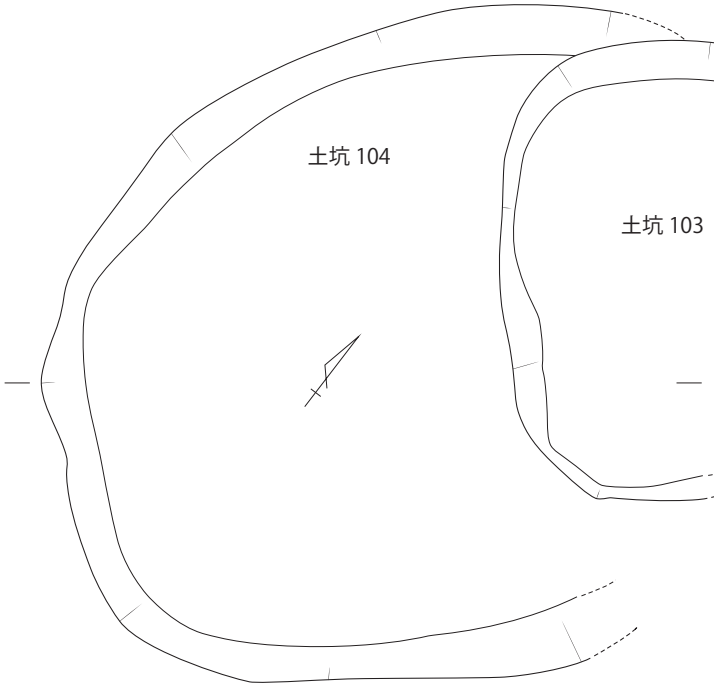
第256図　土坑101（1/30）

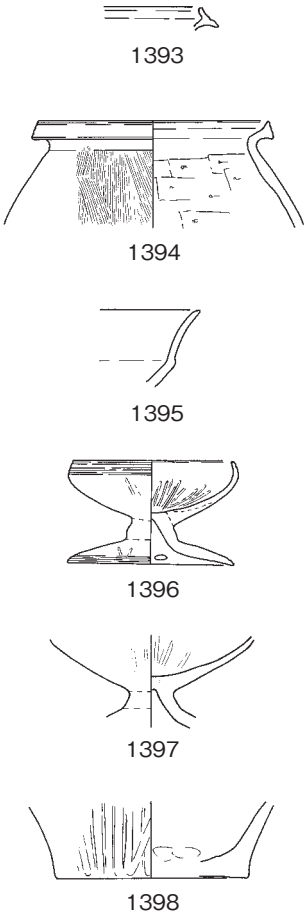


第257図　土坑102（1/30）・出土遺物（1/4）

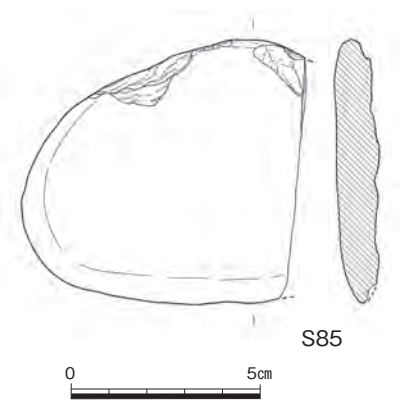
ため、まとめて報告したい。２つの土坑のうち、新しい方を土坑103、古い方を土坑104とする。ともに東辺は調査区の側溝にあたることから、正確な規模は不明である。

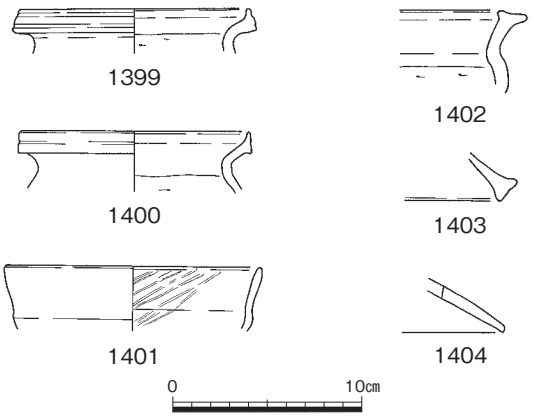
出土遺物は、土坑103には土器1393～1398、土坑104には土器1399～1404がある。石包丁未製品の可能性のあるS85は上部掘り下げ中に出土しており、どちらの土坑に帰属するかは不明である。遺構の時期は、土坑103が弥・後・Ⅲの最新相、土坑104も弥・後・Ⅲの範疇で捉えて良いと考える。（河合）





1　黒褐色(10YR3/2)砂質土（灰黄褐色(10YR4/2)土塊混）
2　黒褐色(10YR3/2～3/3)粘性砂質土（灰黄褐色(10YR4/2)土塊少混）
3　暗褐色(10YR3/3)粘性粗砂
4　暗褐色(10YR3/3)砂質土（灰黄褐色(10YR4/2)土塊混）





第258図　土坑103・104（1/30）・出土遺物（1/4・1/2）

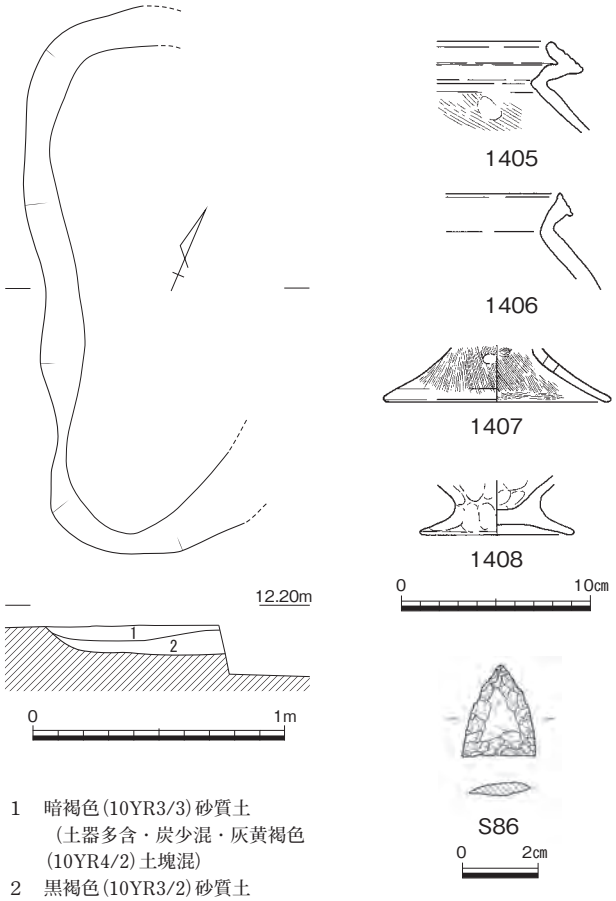
土坑105（第12・259図、図版107）

竪穴住居20の南約３ｍに位置する土坑で、平面は長楕円形を呈する。東辺が調査区の側溝にあたるため、正確な規模は把握できないが、現状で長軸長217㎝、深さ12㎝を測り、断面はⅢ状を呈する。

出土遺物には、サヌカイト製の石鏃**S86**のほか、弥・中・Ⅲ～弥・後・Ⅲに属する甕**1405・1406**、高杯**1407**、台付鉢**1408**などがあるが、**1407・1408**が示す弥・後・Ⅲを遺構の時期として考えておきたい。遺構の性格等は不明である。　（河合）

土坑106（第12・260図）

弥・後・Ⅲに比定される竪穴住居18のほぼ中央に重複する土坑で、これを切る。平面は楕円形を呈する。長軸長124㎝、短軸長85㎝、深さ13㎝を測り、断面はⅢ状を呈する。出土遺物に乏しいが、重複関係や埋土などから弥・後・Ⅲの範疇に収まると考える。　（河合）

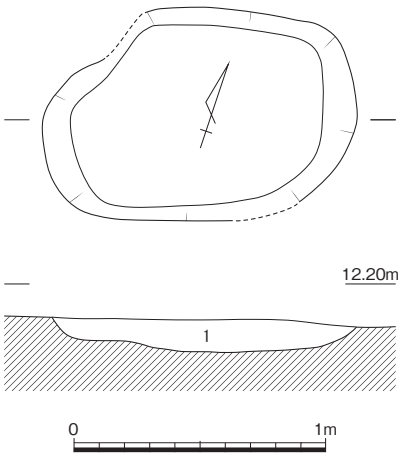


1　暗褐色(10YR3/3)砂質土
（土器多含・炭少混・灰黄褐色(10YR4/2)土塊混）
2　黒褐色(10YR3/2)砂質土

第259図　土坑105（1/30）・出土遺物（1/4・1/2）

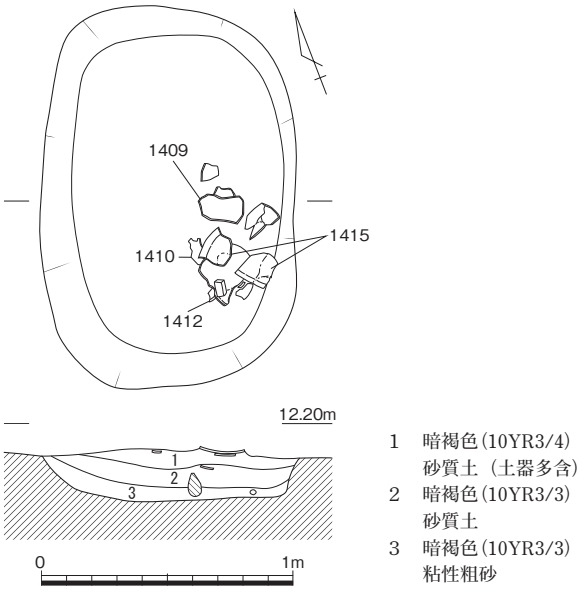
土坑107（第12・261・262図、図版51－３）

竪穴住居18の南東約1.5ｍに位置する土坑で、平面は楕円形を呈する。長軸長151㎝、短軸長101㎝、深さ20㎝を測り、断面は逆台形を呈する。埋土は現状で３層に大別でき、このうち第１層から土器



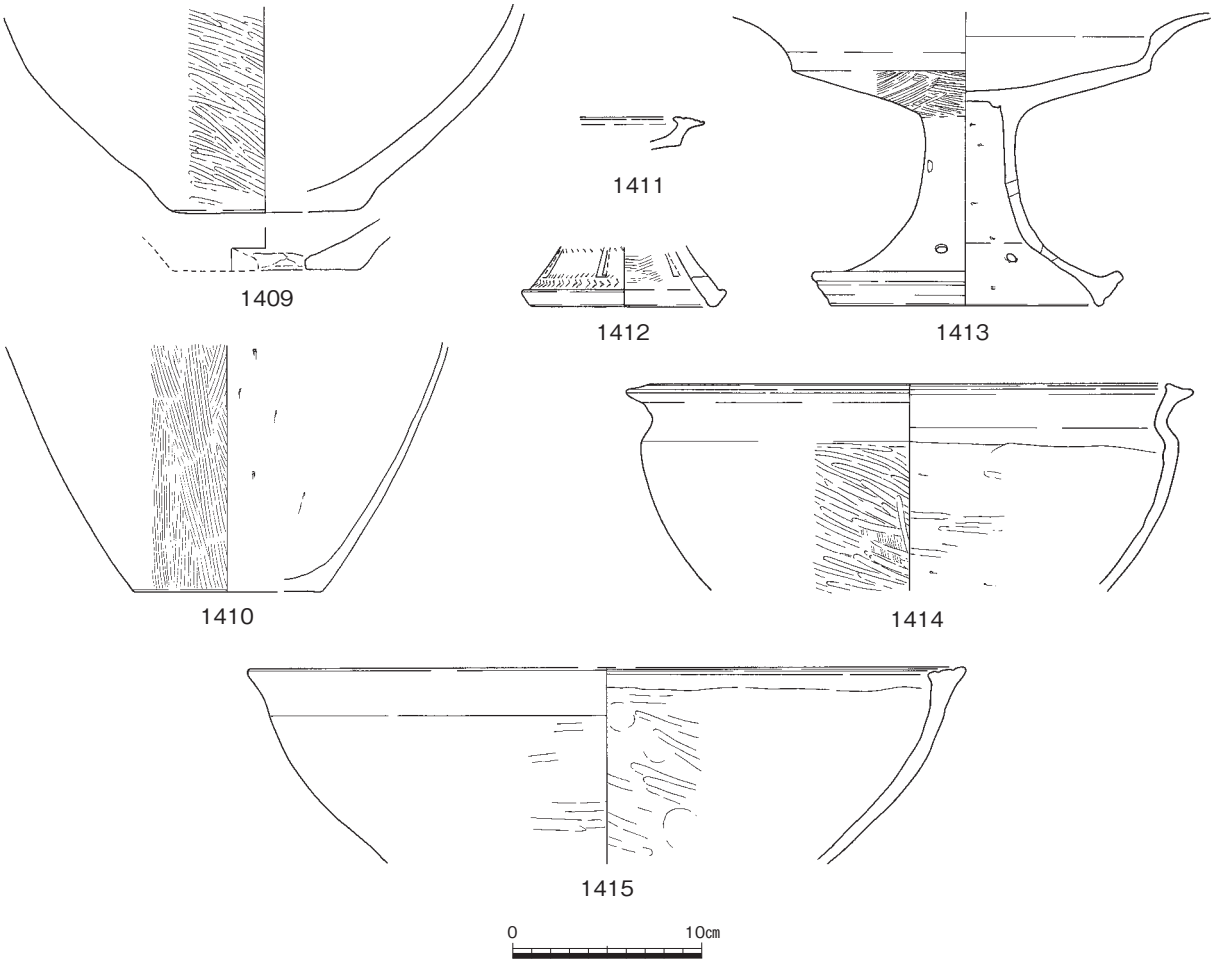
1　黒色(10YR2/1)粘性砂質土（基盤土塊含）

第260図　土坑106（1/30）



1　暗褐色(10YR3/4)
砂質土（土器多含）
2　暗褐色(10YR3/3)
砂質土
3　暗褐色(10YR3/3)
粘性粗砂

第261図　土坑107（1/30）



第262図　土坑107出土遺物（1/4）

1409～1415がまとまって出土した。土器には、壺1409、甕1410、高杯1411～1413、大型鉢1414・1415などがある。弥・後・Ⅰの土器も含まれているが、高杯1413、大型鉢1414・1415は弥・後・Ⅱの範疇であり、遺構の時期も弥・後・Ⅱと考えられる。遺存状況は良くないが、形状などから、貯蔵穴として利用されていた可能性を考えておきたい。（河合）

土坑108（第12・263図）

Ｊ08に位置する土坑で、土坑96の東１ｍにある。土坑北東側の一部が削平されているが、平面形は隅丸長方形を呈するとみられ、断面形は逆台形をなす。規模は、幅が136㎝で、深さが22㎝である。

出土した遺物には、甕口縁部片1416・1417、高杯口縁部片1418、高杯脚部片1419・1420があり、後期前葉～後期後葉の幅が認められるが、土坑の時期は、短脚の高杯1420が示す弥・後・Ⅲと考えておきたい。（弘田）

土坑109（第12・264図）

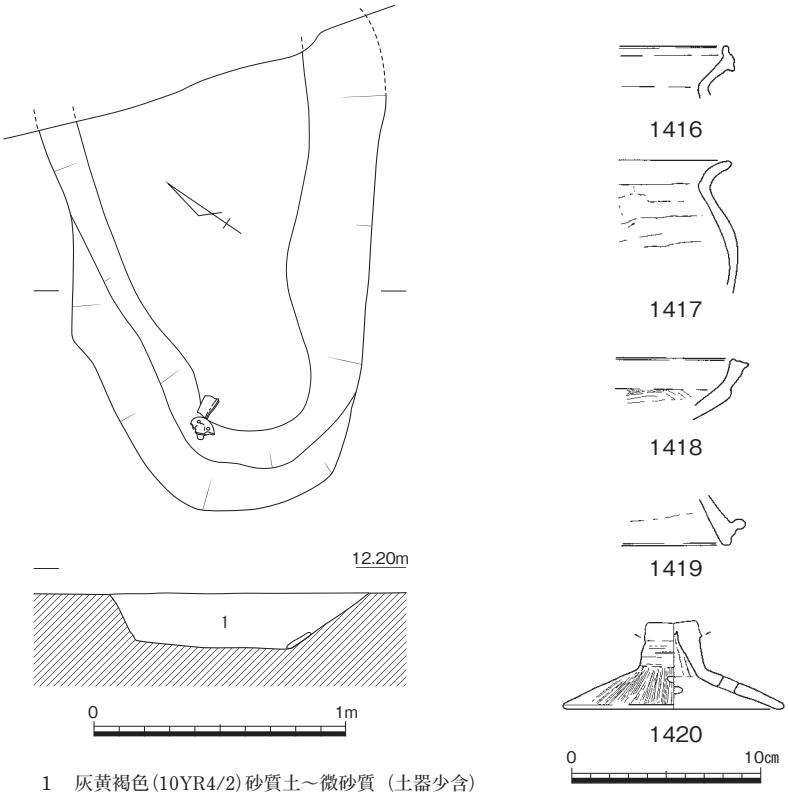
Ｊ08において、土坑108のすぐ南に接して位置する土坑である。平面形は楕円形を呈し、断面形は椀状をなす。規模は、長さが104㎝、幅は84㎝で、深さが14㎝である。

出土遺物には、甕口縁部片1421・1422、高杯脚部片1423、器台脚部片1424がある。うち1422は混入とみられ、この土坑の時期は、弥・後・Ⅰと考える。（弘田）

土坑110（第12･265･266図、図版86）

Ｊ08において土坑109の西に接するように位置する土坑である。平面形は楕円形を呈し、断面形は皿状をなす。規模は、長軸が234㎝である。短軸は溝17によって削平されているものの、残存部で123㎝、深さが18㎝である。

出土遺物には、甕口縁部片**1425**･**1426**、高杯脚部片**1427**･**1431**、壺底部片**1429**、蓋**1430**、土製の丸玉**Ｊ11**がある。これらの遺物からみた土坑の時期は、弥・後・Ⅰと考えられる。　（弘田）



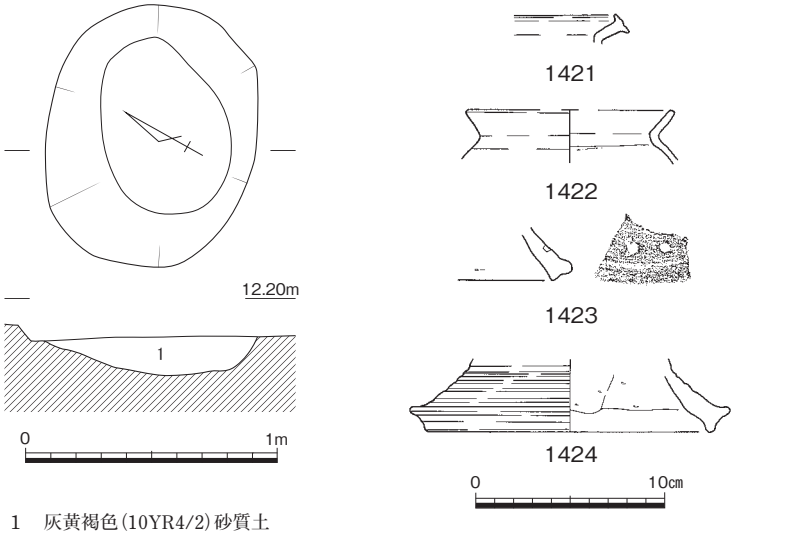
1　灰黄褐色(10YR4/2)砂質土～微砂質（土器少含）

第263図　土坑108（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑111（第12・267図）

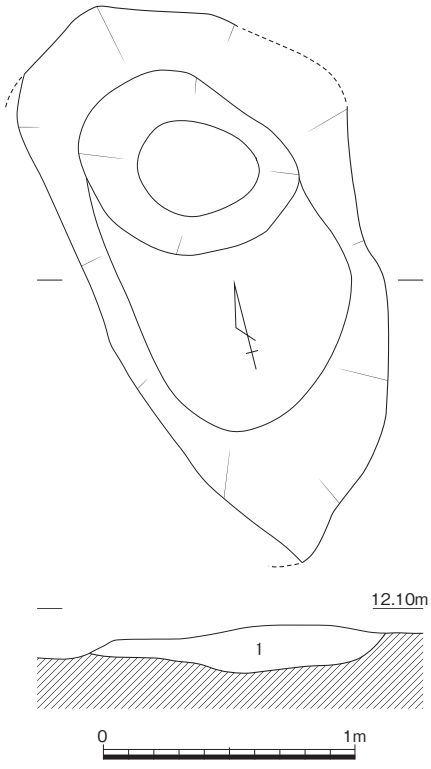
Ｊ08に位置する土坑で、土坑110の東に接する。楕円形を呈した２基の土坑が連結した状態で検出したが、西側は柱穴の可能性が高い。東側の土坑は、規模が長さ104㎝、幅80㎝、深さ12㎝である。土層の切り合いから西側が新しい。

出土遺物に甕口縁部片**1432**～**1434**があり、この土坑の時期は、弥・後・Ⅰと考えられる。　（弘田）



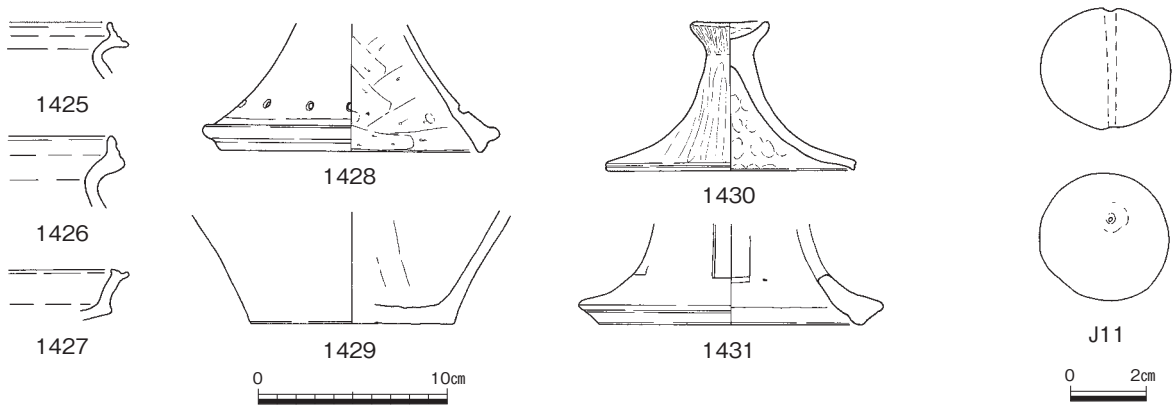
1　灰黄褐色(10YR4/2)砂質土

第264図　土坑109（1/30）・出土遺物（1/4）



1　褐灰色(10YR4/1)粘性砂質土
（黒褐色(10YR3/1)砂質土塊含）

第265図　土坑110（1/30）

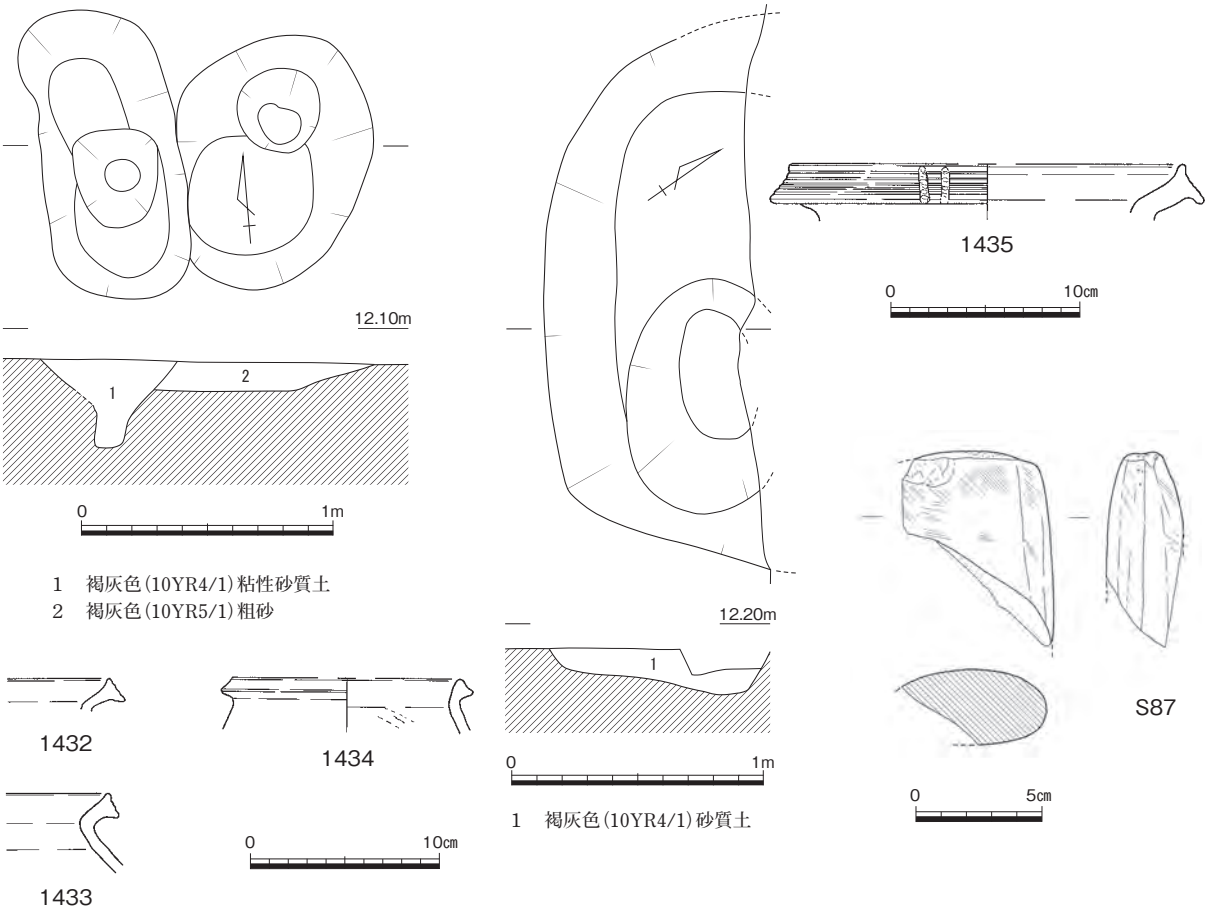


第266図　土坑110出土遺物（1/4・1/2）

土坑112（第12・268図）

土坑111の北東に位置する。東半は既存の水路があり、未調査である。残存部で長2.1ｍあり、長大な部類に入る。上部の削平が著しい地点で、検出面の標高は12.1ｍ前後である。

出土遺物は、土器細片と太型蛤刃石斧Ｓ87がある。基部細片のみである。Ｓ87は精査中に、土坑検出面上面で見つけた。土器には中期後葉～後期前葉の時期幅があるが、最も新しい様相を示す弥・後・Ⅰに埋没したと考えておきたい。　（渡邉）



第267図　土坑111（1/30）・出土遺物（1/4）　第268図　土坑112（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）

土坑113（第12・269図）

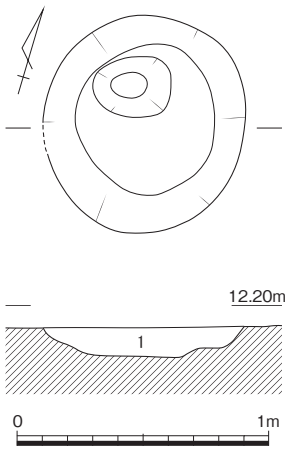
土坑111の南に位置する。径80㎝程度の小規模な遺構で、北半に30×25㎝のくぼみがあり、柱穴の可能性もある。しかし断面を見ると、壁体が緩やかに立ち上がる皿状で、その形状から土坑とした。

出土遺物は僅かであるが、中期後葉～後期前半の土器細片が出土している。　（渡邉）

土坑114（第12・270図、図版52－１）

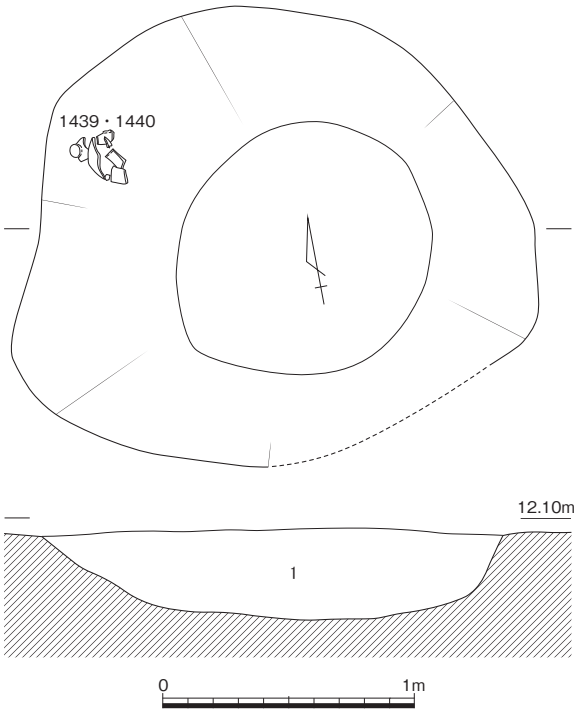
土坑113の東に位置する。南端の一部が調査区南側溝により削平されている。径２ｍ近いやや大形の土坑である。西側の壁体は緩やかに傾斜するが東側は急に立ち上がっている。西側の一角で、坑底より浮いた状態で**1439・1440**が出土した。**1440**は甕の体部～底部片で、比較的大きな破片である。土坑埋土には包含層や地山土由来の土塊が多く含まれており、人為的に埋められたと考えられる。土器もその際に意図的に置かれたと理解できる。

出土土器は**1440**を除いて細片ばかりであった。中期後葉～後期前葉の幅があり、古墳時代初頭の甕も混入していた。図示した中では、**1436・1438**が白色薄手で、中期後葉に位置付けられる。一方、**1437・1439・1440**は薄手硬質であるが色調は赤味を帯びており、中期と後期の中間的な様相を示す。甕**1440**の内面のケズリは体部下半にとどまる。出土状況から**1439**と**1440**は同時に廃棄された可能性が高く、後期でも早い段階に埋められたと考えられ、弥・後・Ⅰに位置付けられる。　（渡邉）

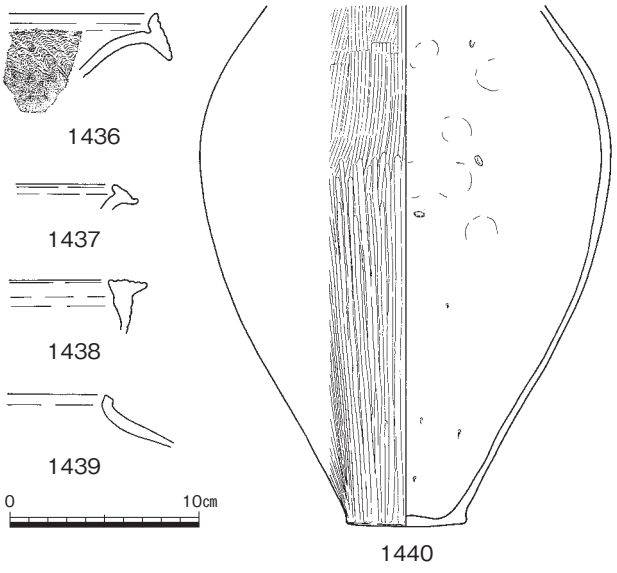


1　黒色（10YR2/1）粘性砂質土（炭少含）

第269図　土坑113（1/30）



1　黒褐色（10YR3/2）粘性砂質土と暗褐色（10YR3/4）粘性砂質土の混土（黄褐色土粒混）

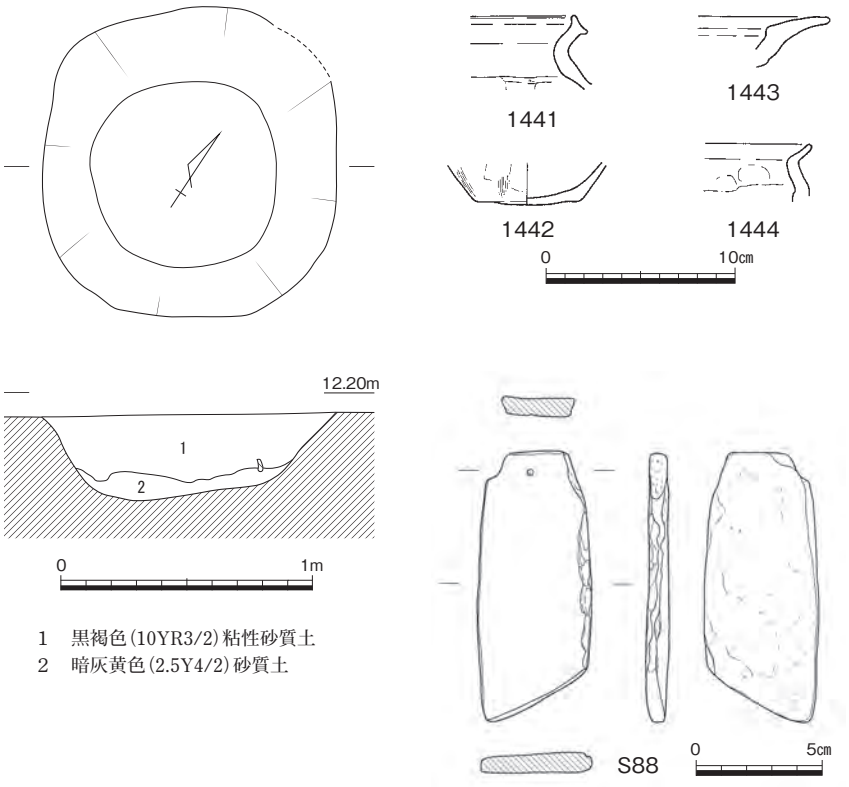


第270図　土坑114（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑115（第12・271図、図版52－２・111）

土坑114の東に位置する。径1.2ｍとやや小形ではあるが、断面逆台形のしっかりした土坑である。

出土遺物には、土器細片**1441**～**1444**と石器**Ｓ88**がある。**Ｓ88**は扁平な長方形を呈し、端部に小さなくぼみを有する。扁平面片面は自然面で、もう片面は研磨により光沢を帯びていた。側面にも成形痕が認められる。くぼみが穿孔途中の紐穴で、腰から提げる小型の砥石と考えている。時期は、高杯**1443**の口縁端部が大きく外方へ延びており、弥・後・Ⅰの新しい段階に位置付けられる。　（渡邉）



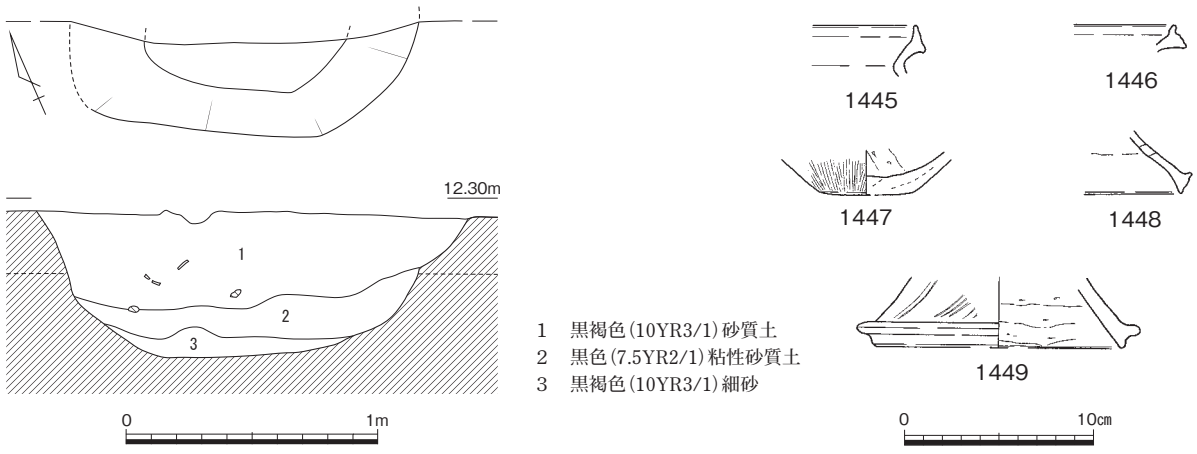
1　黒褐色(10YR3/2)粘性砂質土
2　暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土

第271図　土坑115（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）

土坑116（第12・272図）

土坑115の東に位置する。北半は既存の水路のため未調査である。断面図は水路壁面で記録したもので、実際の検出面は土坑上面より20㎝下の標高12.00ｍである。当土坑周辺は包含層との識別が難しく、遺構面からかなり掘り下げて検出したため、遺構本来の深さより浅いと思われる。

出土遺物は土器細片のみで、主に第１層から出土している。時期幅があり、弥・後・Ⅲには埋没したと考えておきたい。　（渡邉）



1　黒褐色(10YR3/1)砂質土
2　黒色(7.5YR2/1)粘性砂質土
3　黒褐色(10YR3/1)細砂

第272図　土坑116（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑117（第12・273図、図版52－３）

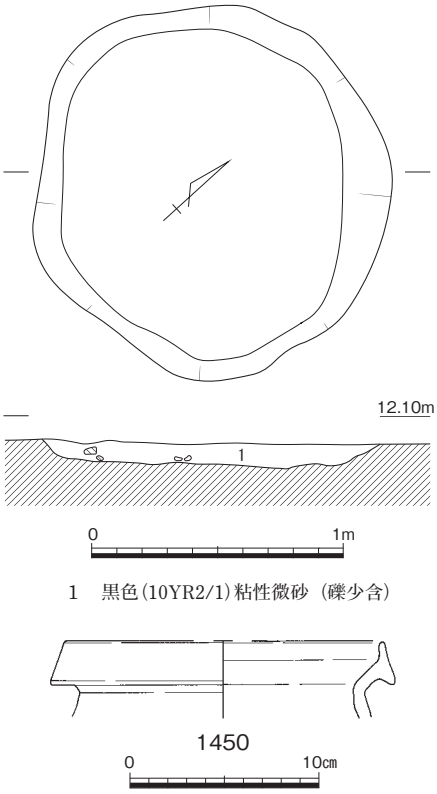
Ｈ08の南、竪穴住居19の西側に位置している土坑である。平面形は円形、断面形は浅い皿状を呈している。規模は長軸148㎝、短軸139㎝、深さ９㎝を測る。基盤層に礫を多く含むため、埋土にも礫を含み、底面には礫を多く検出している。出土遺物は甕**1450**があり、口縁部が上下に拡張する。遺構の時期は、弥・後・Ⅲであると考えられる。　（圃）

土坑118（第12・274図、図版53－１）

Ｈ08の南で、土坑117の東側に隣接している土坑である。平面形は楕円形、断面形は浅い皿状を呈している。規模は、長軸195㎝、短軸146㎝、深さ14㎝を測る。土坑117同様に、基盤層には礫を多く含んでいる。出土遺物には、甕**1451**・**1452**、鉢**1453**がある。**1451**の口縁部は下方に拡張し、**1452**の底部は平底である。これらの土器の特徴から、遺構の時期は弥生時代後期前半であろう。　（圃）

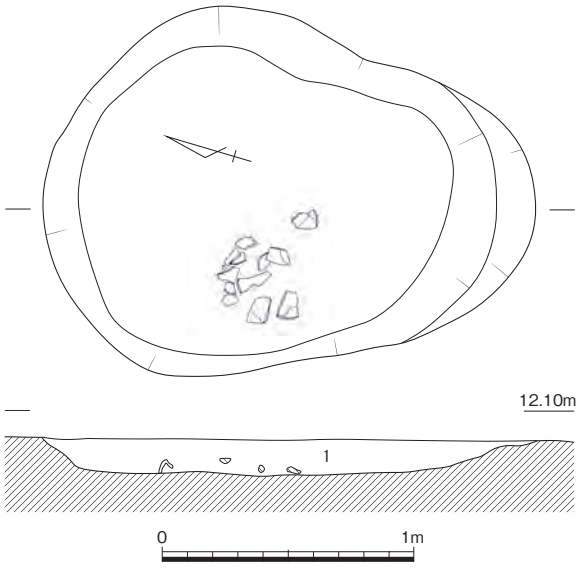
土坑119（第12・275図）

Ｉ09の北西端、竪穴住居19の南側に位置する土坑である。

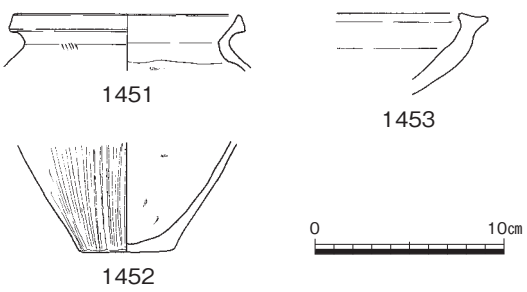


1　黒色(10YR2/1)粘性微砂（礫少含）

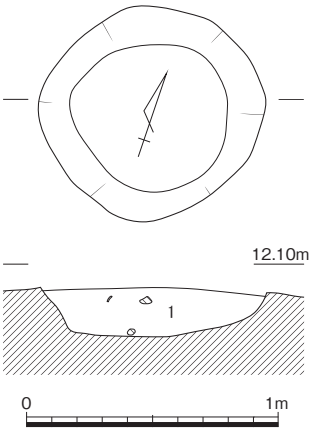
第273図　土坑117（1/30）・出土遺物（1/4）



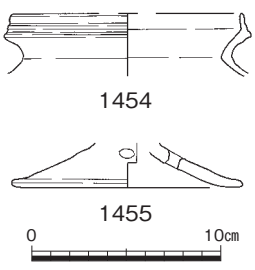
1　黒色(10YR2/1)粘性微砂（礫少含）



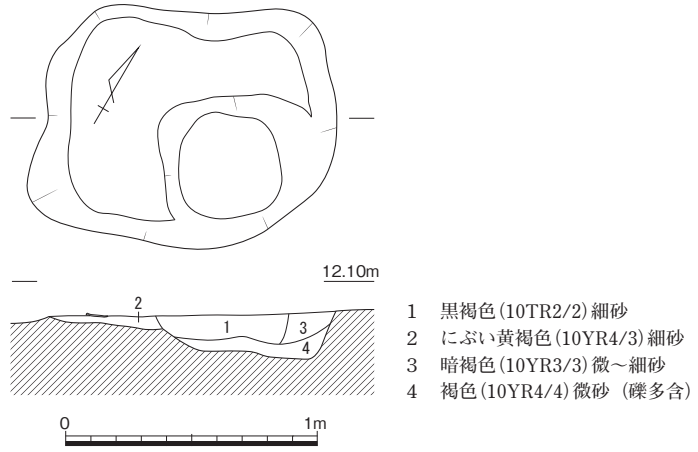
第274図　土坑118（1/30）・出土遺物（1/4）

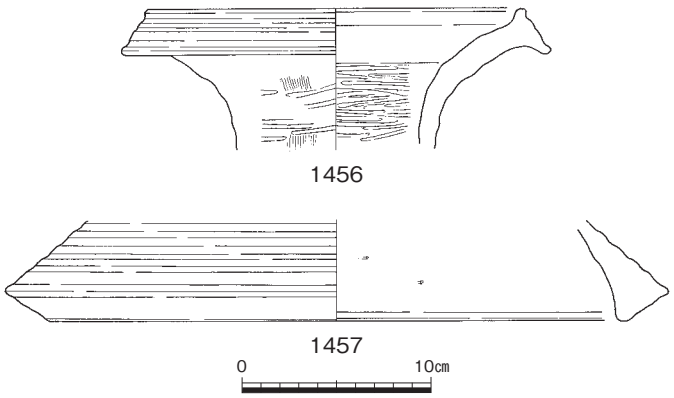


1　にぶい黄褐色(10YR4/3)細砂



第275図　土坑119（1/30）・出土遺物（1/4）





第276図　土坑120（1/30）・出土遺物（1/4）

平面形は円形で、規模は長軸84㎝、短軸80㎝、深さ20㎝を測る。

出土遺物には、甕**1454**、高杯**1455**がある。**1454**の口縁部は上方へ立ち上がり、沈線が施される。**1455**は短脚で４方向の透かし孔を持つものである。これらの土器から、弥生時代後期後半の遺構であると考えられる。　（圍）

土坑120（第12・276図）

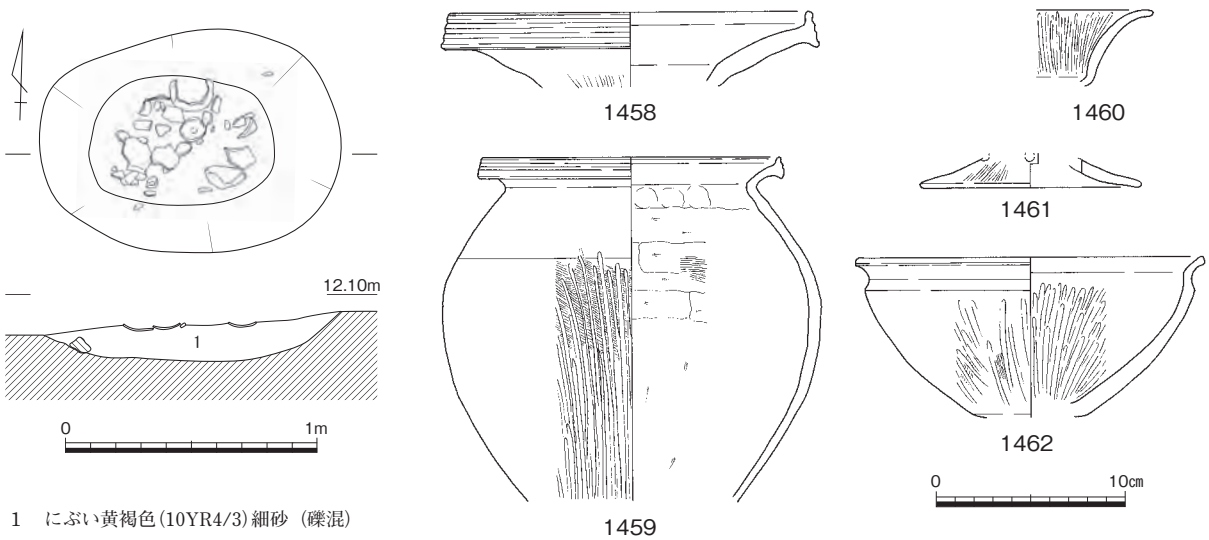
Ⅰ09の北西端で、土坑119の東側に位置する土坑である。平面形は不整形であるが、方形を意識したものと考えられる。土坑の東側でやや深くなっており、規模は長軸115㎝、短軸93㎝、深さ18㎝を測る。

出土遺物には、器台**1456**・**1457**がある。**1456**は口径約20㎝の小型のもので、**1457**は底径約30㎝と大型で、脚端部の形状が断面三角形状を呈している。遺構の時期は、これらの土器から弥生時代後期前半であると考えられる。　（圍）

土坑121（第12・277図）

Ⅰ09の北西端で、土坑120の南側に位置する土坑である。平面形は楕円形で、規模は長軸118㎝、短軸82㎝、深さ20㎝を測る。埋土はにぶい黄褐色細砂の単一層である。

出土遺物には、壺**1458**、甕**1459**、高杯**1460**・**1461**、鉢**1462**などがある。いずれも検出面でまと



第277図　土坑121（1/30）・出土遺物（1/4）

まって出土したものである。**1458**は口縁部が上方へ立ち上がり、拡張した端部外面に沈線を巡らす。**1459**も**1458**同様に口縁部に沈線を施している。高杯**1460**は口縁部に縦方向のミガキを施す。**1461**は短脚で４方向の透かし孔を持つものである。**1462**は平底になると考えられ、内外面にミガキを施す。これらの土器の特徴から、遺構の時期は弥・後・Ⅲであると考えられる。（圃）

土坑122（第12・278図）

Ｉ09の北西端で、土坑121の南側、竪穴住居22と重複して検出した土坑である。平面形は円形、断面形は椀状を呈している。埋土は礫を多く含む単一層である。規模は長軸119㎝、短軸102㎝、深さ36㎝を測る。

出土遺物には、甕**1463**がある。口縁部は下方へ延びる形状であり、内面の上半にミガキが施される。この土器の特徴から、遺構の時期は弥・後・Ｉであると考えられる。（圃）

土坑123（第12・279図）

Ｉ09に位置しており、竪穴住居23に切られている土坑である。平面形は隅丸方形で、長軸139㎝、短軸81㎝、深さ27㎝を測る。

竪穴住居23の床面下層で検出しており、図示し得ないが、出土した甕の口縁部細片の特徴と切り合い関係から、竪穴住居23より古い時期の遺構となる。弥生時代後期前半の範疇の時期であると考えられる。（圃）

土坑124（第12・280図）

Ｉ08の南東側に位置し、西側に土坑103・104が近接して存在する。規模は、長軸長約250㎝以上、短軸長約167㎝で、平面形状は楕円形を呈する。確認面からの深さは32㎝で、底面の標高は10.93ｍである。断面形状は、皿形に近い椀形である。

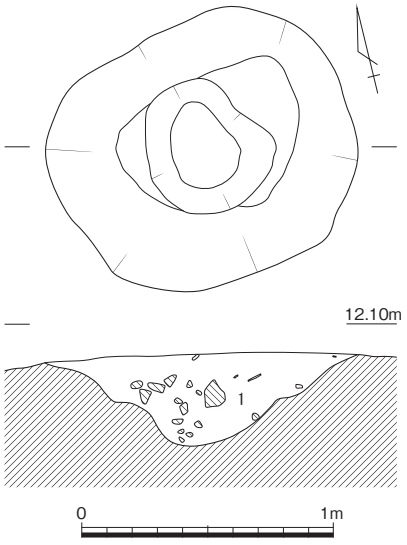
出土土器には、**1464**・**1465**がある。**1464**は甕で口縁部が直に立ち上がり口唇部がつまみ出される。**1465**は高杯で、身は丸みを帯びる。弥・後・Ⅲの時期である。（小林）

土坑125（第12・281図）

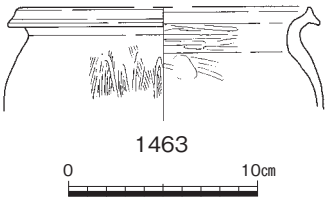
Ｉ09の南西側に位置し、竪穴住居20と竪穴住居24の中間に位置する。

規模は、長軸長160㎝、短軸長92㎝で、平面形状は楕円形である。確認面からの深さは40㎝で、底面の標高は 11.62ｍである。断面形状は逆台形である。

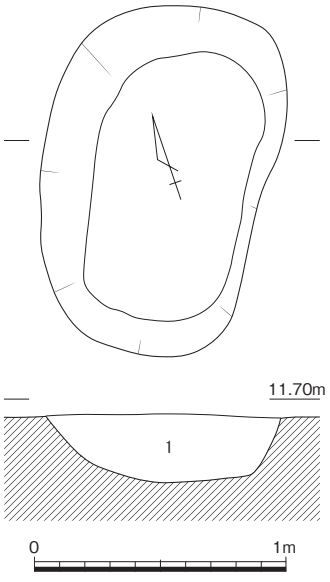
覆土には土器が多く含まれ、**1466**～**1469**を図示している。**1466**・**1467**は壺、**1468**は甕、**1469**は高杯である。



1　にぶい黄褐色(10YR4/2)細～粗砂（礫混）



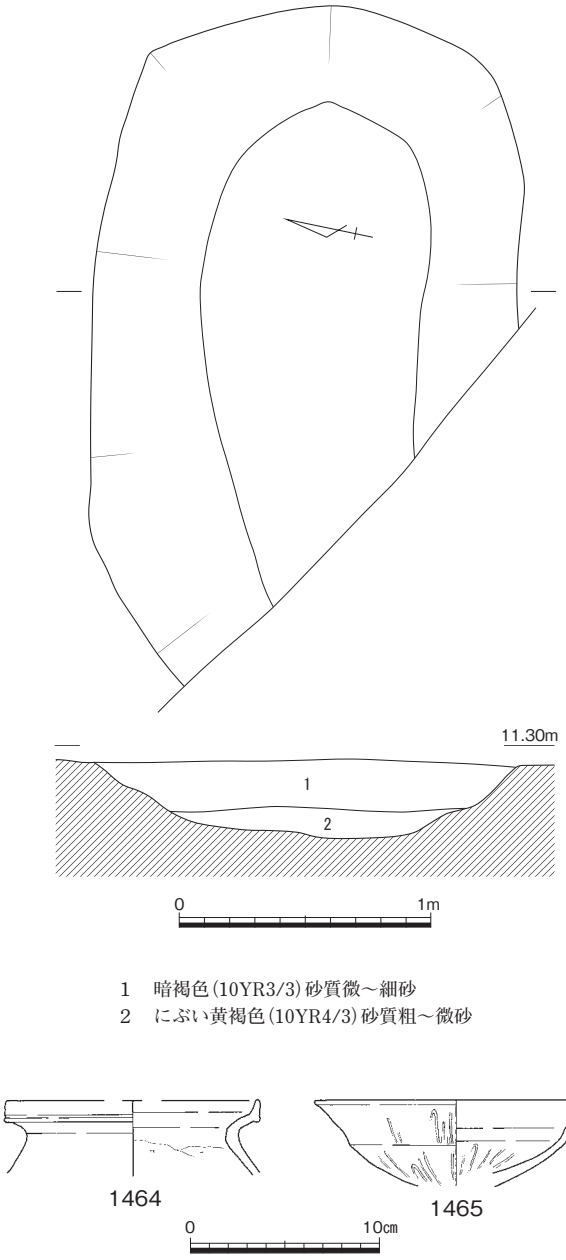
第278図　土坑122（1/30）・出土遺物（1/4）



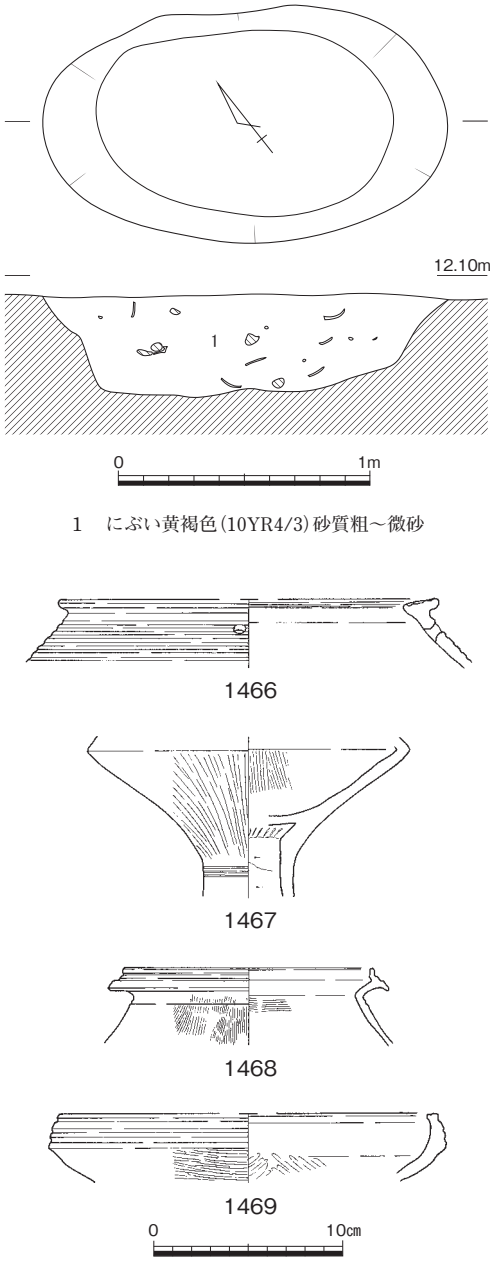
1　暗褐色(10YR3/3)微～細砂

第279図　土坑123（1/30）

1466・1467は胴部が「く」字形に張り出す。1468・1469の口縁部は、凹線文が施される。時期は弥・中・Ⅲであり、本土坑の時期も同じである。（小林）



第280図　土坑124（1/30）・出土遺物（1/4）

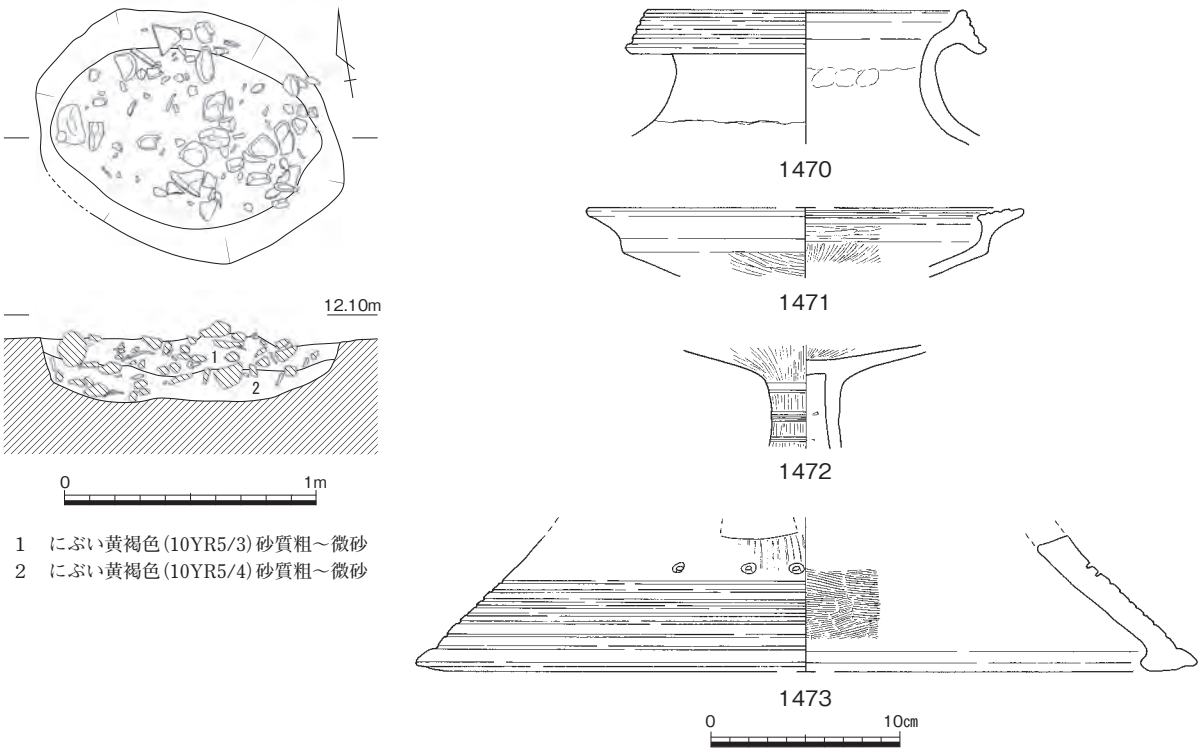


第281図　土坑125（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑126（第12・282図）

Ｊ08の北東側に位置する。東側に竪穴住居25、南西側に土坑116が存在するが、本来は遺構密集度が高い調査区の中でも、比較的周辺に遺構が少ない場所である。

規模は、長軸長128㎝、短軸長94㎝で、平面形状は楕円形を呈する。確認面からの深さは30㎝で、底面の標高は11.70ｍである。断面形状は皿形に近い椀形である。覆土中には、石や土器片が比較的多く含まれている。1470は壺、1471・1472は高杯、1473は器台である。高杯や器台などが多いのが特徴で、時期は弥・後・Ⅰになる。（小林）



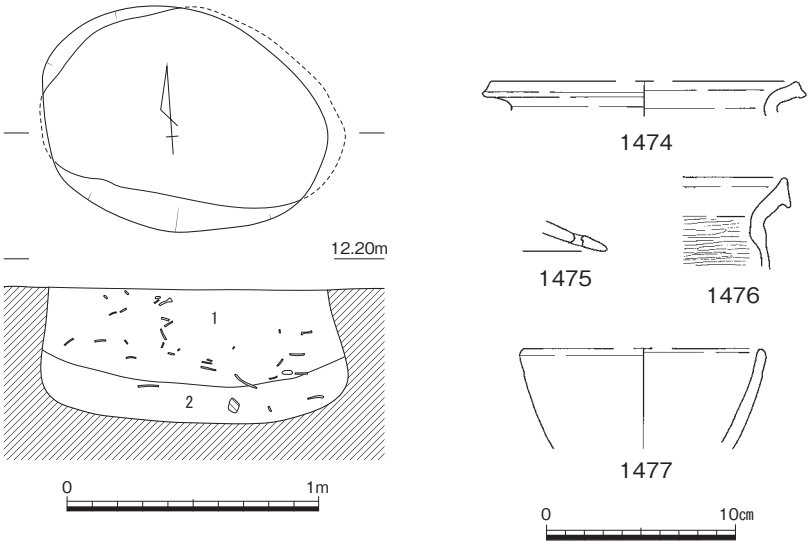
1　にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質粗～微砂
2　にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質粗～微砂

第282図　土坑126（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑127（第12・283図、図版53－２）

Ｉ09の南西に位置している土坑である。平面形は楕円形、断面形は袋状を呈する土坑で、いわゆる袋状土坑である。規模は長軸115㎝、短軸87㎝、深さ53㎝を測る。

出土遺物には甕**1474**、高杯**1475**、鉢**1476**・**1477**がある。**1475**は胎土が橙色で胎土が精緻のため、短脚であろう。**1477**は粗製で器壁が厚い。遺構の時期は、弥生時代後期後半の範疇であると考えられる。　（圃）



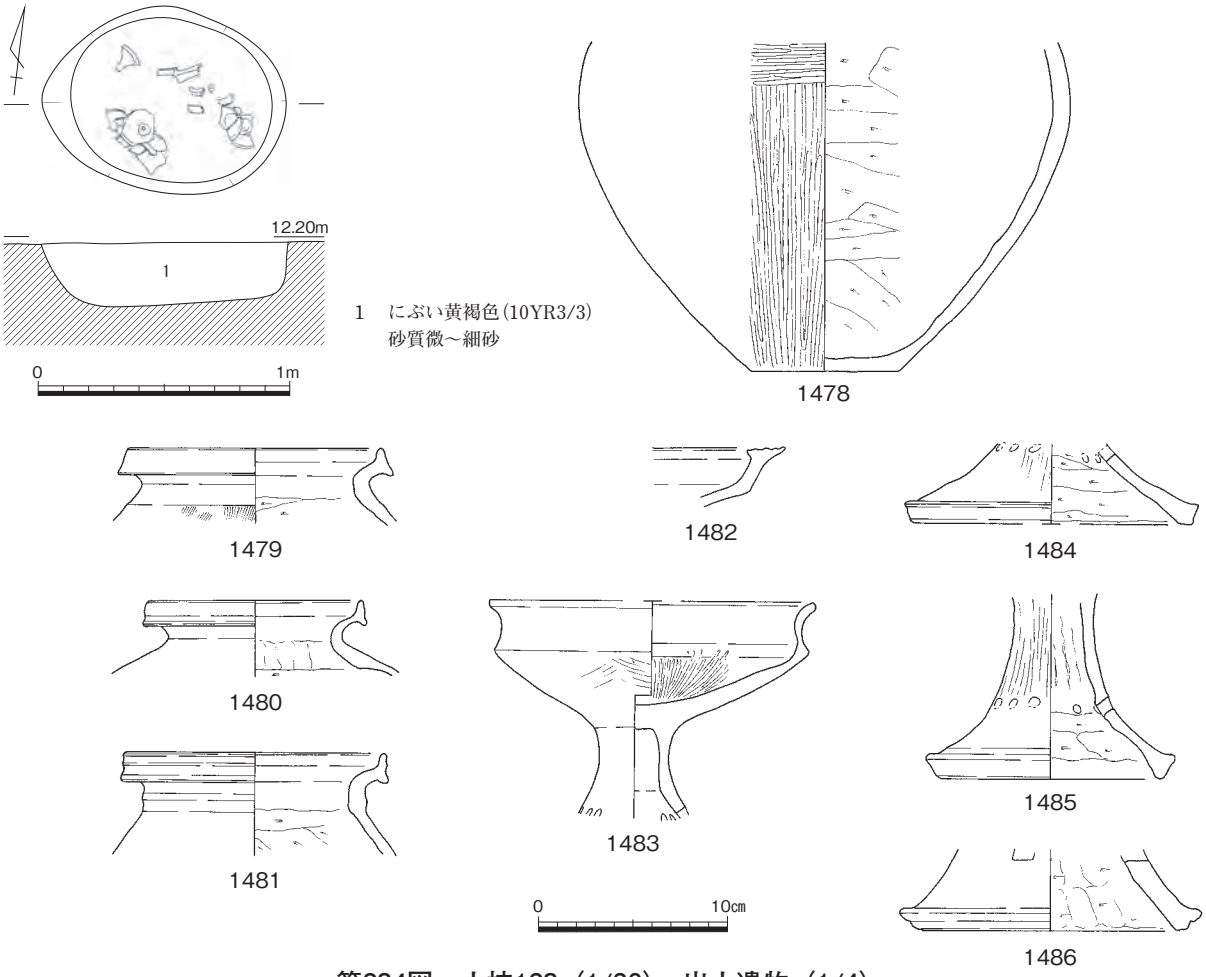
1　灰黄褐色(10YR4/2)微～細砂
2　灰黄褐色(10YR4/2)微～細砂
　（にぶい黄橙色(10YR7/4)土塊混）

第283図　土坑127（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑128（第12・284図）

Ｉ09の南、竪穴住居24の南側に位置している土坑である。平面形は楕円、断面形は逆台形を呈して

いる。規模は長軸97㎝、短軸74㎝、深さ25㎝を測る。遺構図に出土状況を図示している土器は、底面直上で検出しているものである。出土遺物には、壺1478、甕1479～1481、高杯1482～1485、器台1486がある。1478は底面外側にも丁寧なミガキを施している。高杯には、口縁端部が水平に外方へ拡張する1482と、口縁部が外反する1483がある。高杯・器台の脚部の端部の形状は、いずれも断面三角形状を呈している。ただ、1484は台付鉢の脚部である可能性もある。これらの出土遺物から、遺構の時期は弥・後・Ⅱであると考えられる。　（圍）



第284図　土坑128（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑129（第12・285図、図版53－３）

Ⅰ９の南東側に位置する。北西側に竪穴住居24・土坑130が近接し、南側に溝７が存在する。

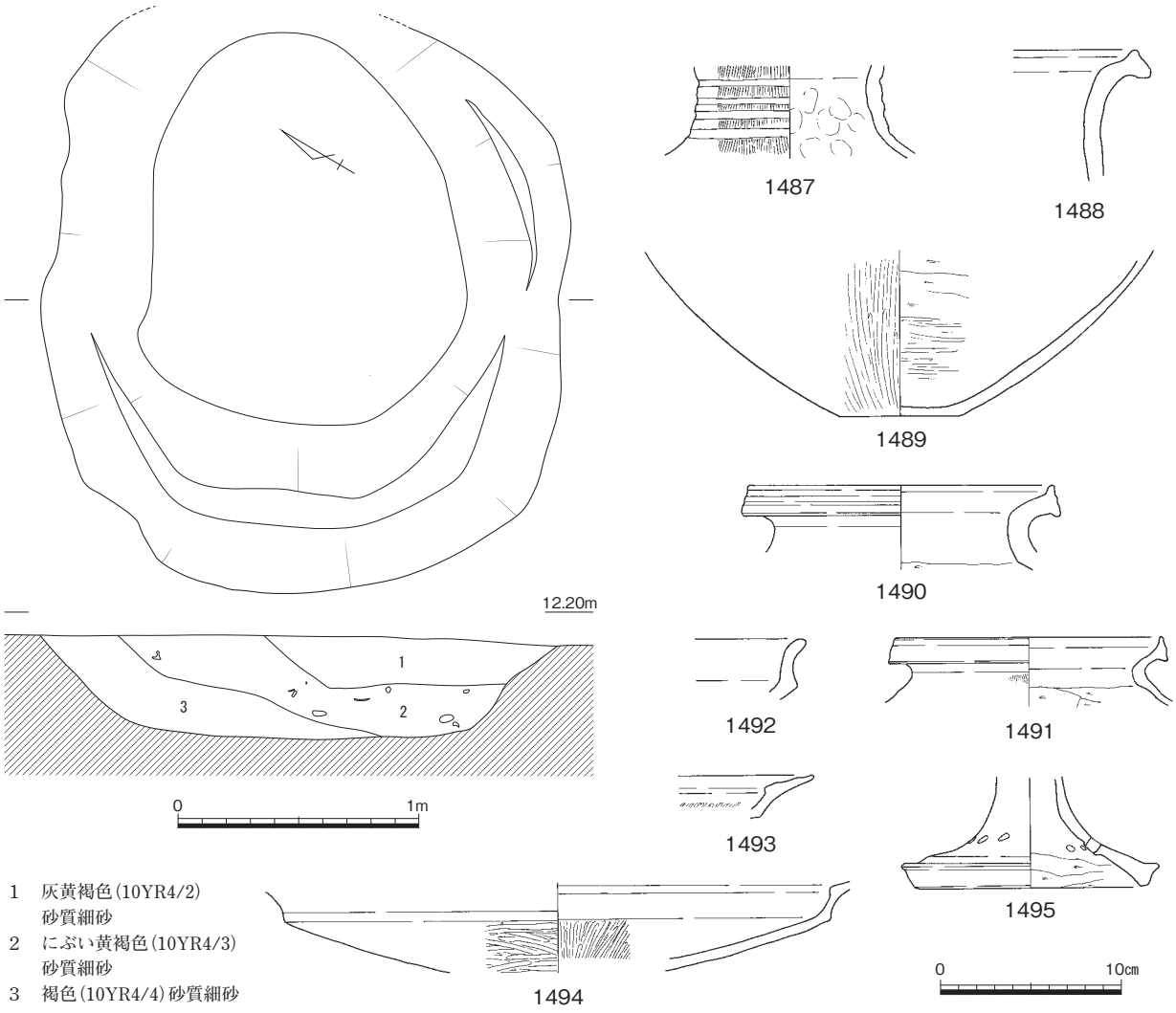
規模は長軸長234㎝以上、短軸長214㎝で、平面形状は楕円形を呈する。確認面からの深さは41㎝で、底面の標高は11.68ｍになる、断面形状は逆台形である。

覆土中からは特に第２層を中心に、土器片が比較的多く含まれている。1487～1489は壺、1490・1491は甕、1492～1494は高杯である。時期は弥・後・Ⅲになる。　（小林）

土坑130（第12・286図、図版54－１）

Ⅰ９の南東側に位置する。北西側に竪穴住居24が、南東側に土坑129が近接する。

規模は長軸長350㎝、短軸長200㎝で、平面形状は長方形を呈する。確認面からの深さは67㎝で、底面の標高は11.32ｍになり、断面形状は逆台形である。



第285図　土坑129（1/30）・出土遺物（1/4）

覆土中からは、第１層を中心に土器片が出土している。**1496**は無頸壺の口縁部で、連続Ｓ字文状の文様が施られている。時期は弥・中・Ⅲになる。（小林）

土坑131（第12・287図）

Ｉ09の北東隅に位置している土坑である。平面形は楕円形、断面形はⅢ状を呈している。規模は長軸140㎝、短軸110㎝、深さ16㎝を測り、胎土は粘性微砂の単一層である。

出土遺物としては、高杯の脚部と考えられる**1498**を１点図示している。脚端部の形状は断面が三角形状を呈している。この遺物から、遺構の時期は、弥・後・Ⅱであると考えられる。（團）

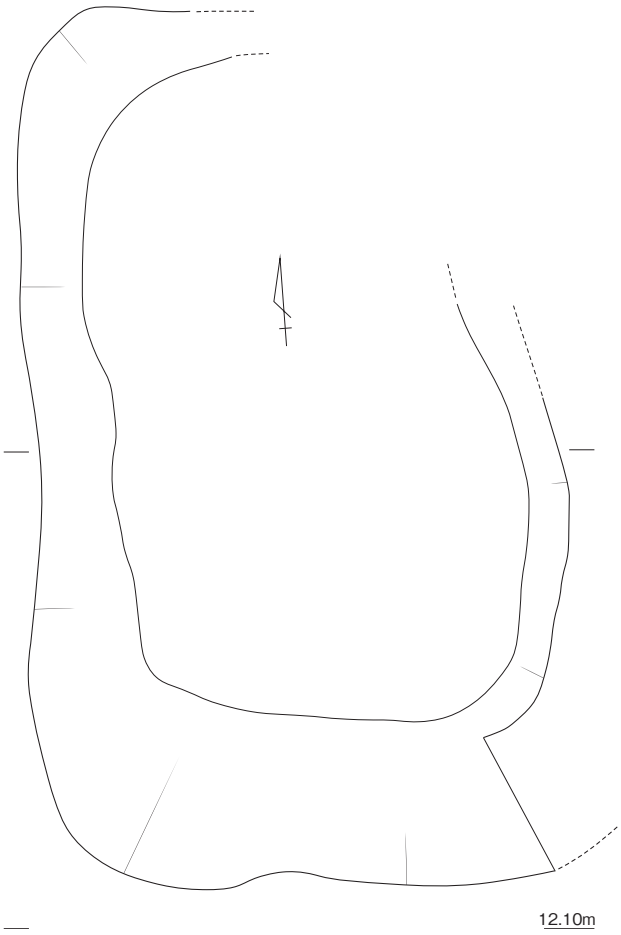
土坑132（第12・288図）

Ｉ10の北西隅に位置している土坑である。平面形は楕円形で、断面形は椀状を呈している。規模は長軸130㎝、短軸75㎝、深さ㎝を測る。

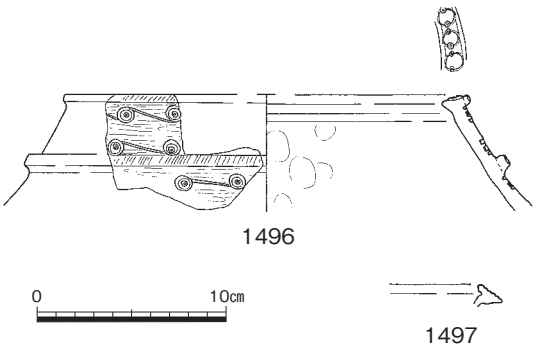
出土遺物で図示できたものには、甕**1499**が１点ある。甕の口縁部外面に凹線を施し、やや内傾している。この遺物から、遺構の時期は弥生時代後期前半であると考えられる。（團）

土坑133（第12・289図）

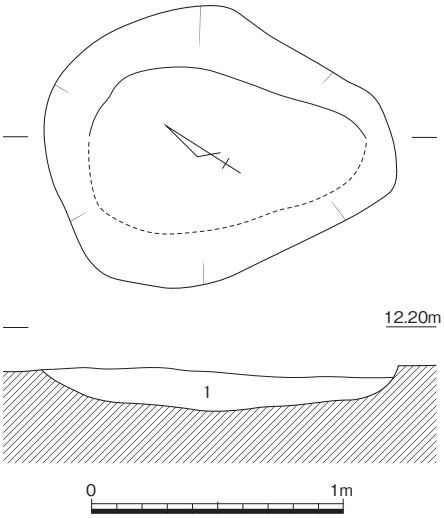
Ｉ10の北西隅、土坑132の北東に隣接して位置している土坑である。平面形は楕円形、断面形は椀



1　褐色(10YR4/4)微砂（土器含）
2　黒褐色(10YR3/2)微砂（炭・粘土混）
3　にぶい黄褐色(10YR5/4)微砂
4　黒褐色(10YR3/2)細砂～微砂（炭混）
5　黄褐色(10YR5/6)細砂

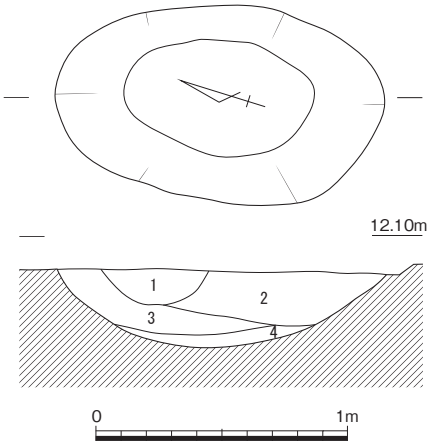


第286図　土坑130（1/30）・出土遺物（1/4）

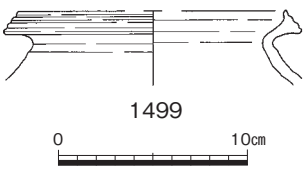


1　褐色(7.5YR4/3)粘性微砂

第287図　土坑131（1/30）・出土遺物（1/4）



1　暗灰黄色(2.5YR5/2)粗砂
2　灰黄褐色(10YR5/2)微～細砂（炭含）
3　にぶい黄橙色(10YR7/4)微～細砂
4　にぶい黄褐色(10YR5/4)微～細砂



第288図　土坑132（1/30）・出土遺物（1/4）

状を呈している。規模は長軸115㎝、短軸75㎝、深さ32㎝を測る。埋土は基本的に微砂～細砂である。出土遺物には、甕1500・1501がある。1501は口縁部に凹線を持ち、口縁端部は上下にやや拡張しており、内面のケズリは体部上部にまで及ぶ。これらの土器の特徴から、遺構の時期は弥生時代後期前半であると考えられる。（圃）

土坑134（第12・290図）

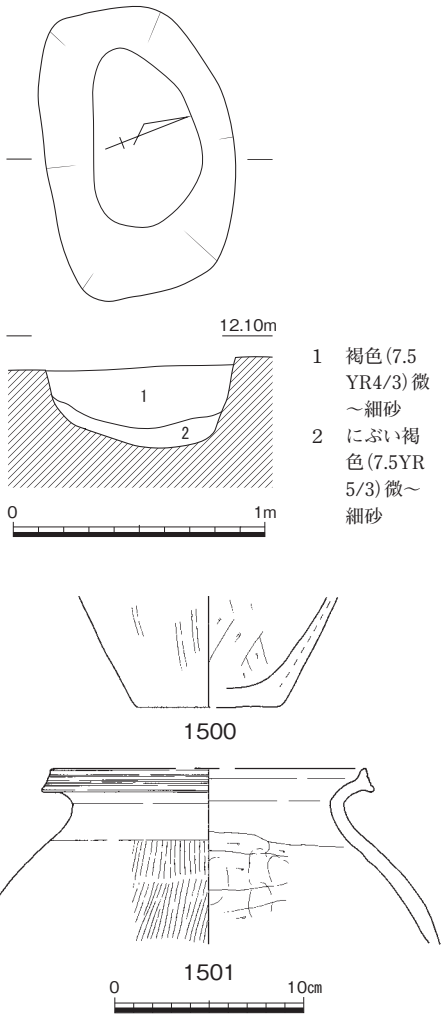
Ｉ10の北西隅、土坑133の南側に隣接している土坑である。平面形は楕円、断面形は浅い椀状を呈している。遺構の規模は長軸174㎝、短軸120㎝、深さ26㎝を測る。遺物は、細片が少量しか出土しておらず、詳細な時期は不明である。しかし検出状況などからも、弥生時代の範疇に含まれる遺構であろう。（圃）

土坑135（第12・291図）

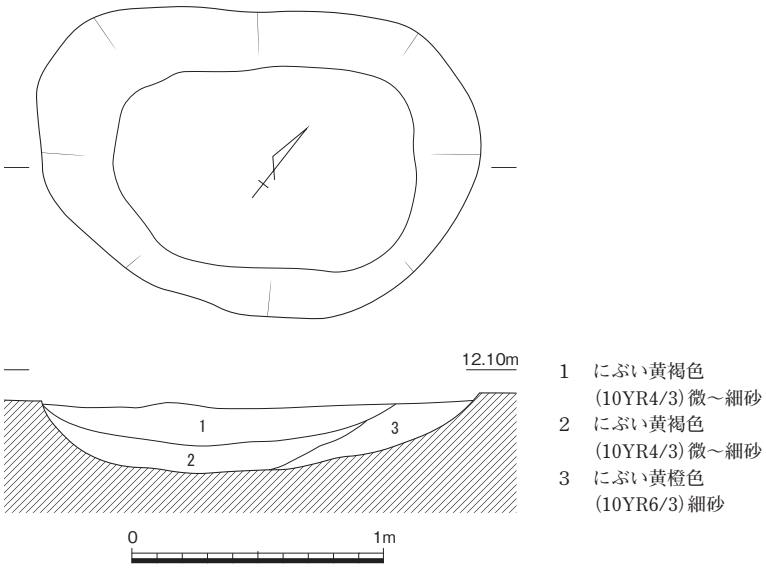
Ｉ10の北西隅に位置している土坑である。平面形は楕円形、規模は長軸103㎝、短軸80㎝、深さ14㎝を測る。断面形は浅い皿状を呈しており、埋土は単一層の微～細砂となる。出土遺物には、壺1502がある。口縁部のみの出土であるが、図化できたものは以上である。口縁部が上方に拡張し、沈線を施している。遺構の時期は、弥生時代後期後半であると考えられる。（圃）

土坑136（第12・292図）

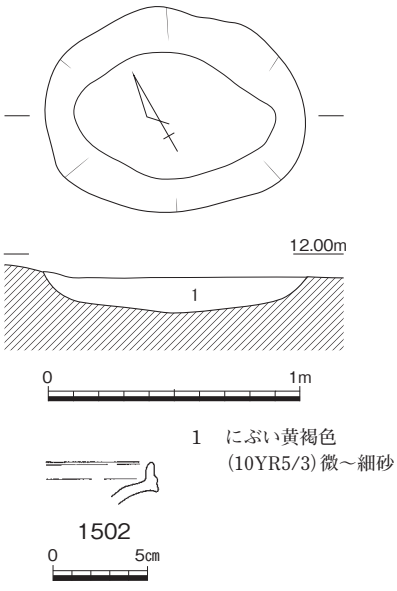
Ｈ10中央からやや南西に位置する土坑である。大部分が



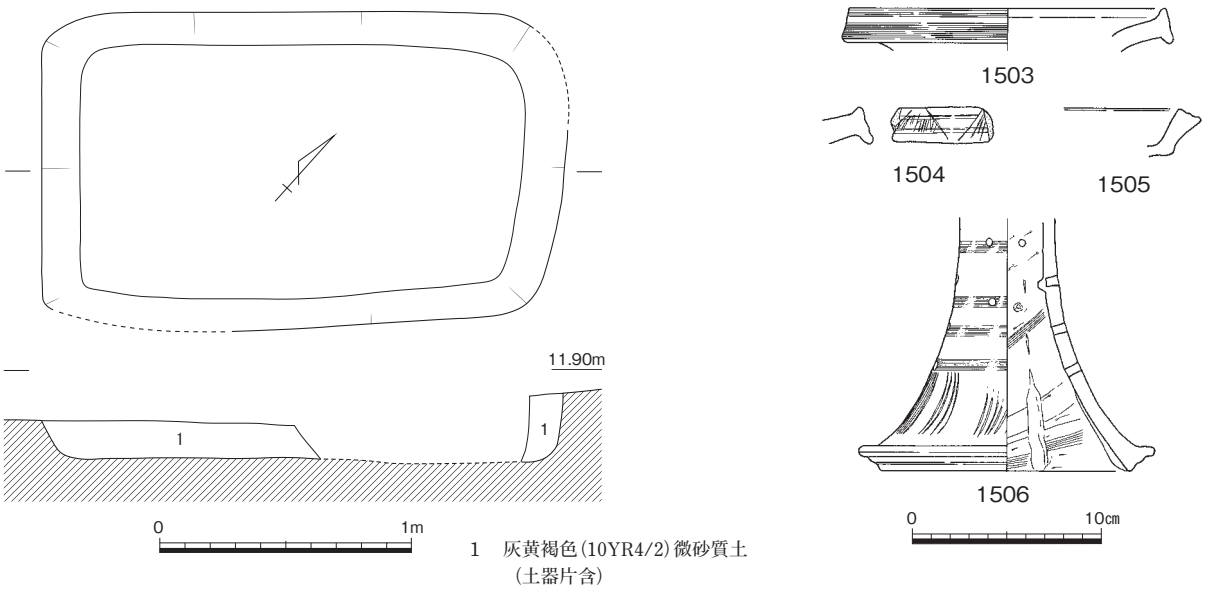
第289図　土坑133（1/30）・出土遺物（1/4）



第290図　土坑134（1/30）



第291図　土坑135（1/30）・出土遺物（1/4）

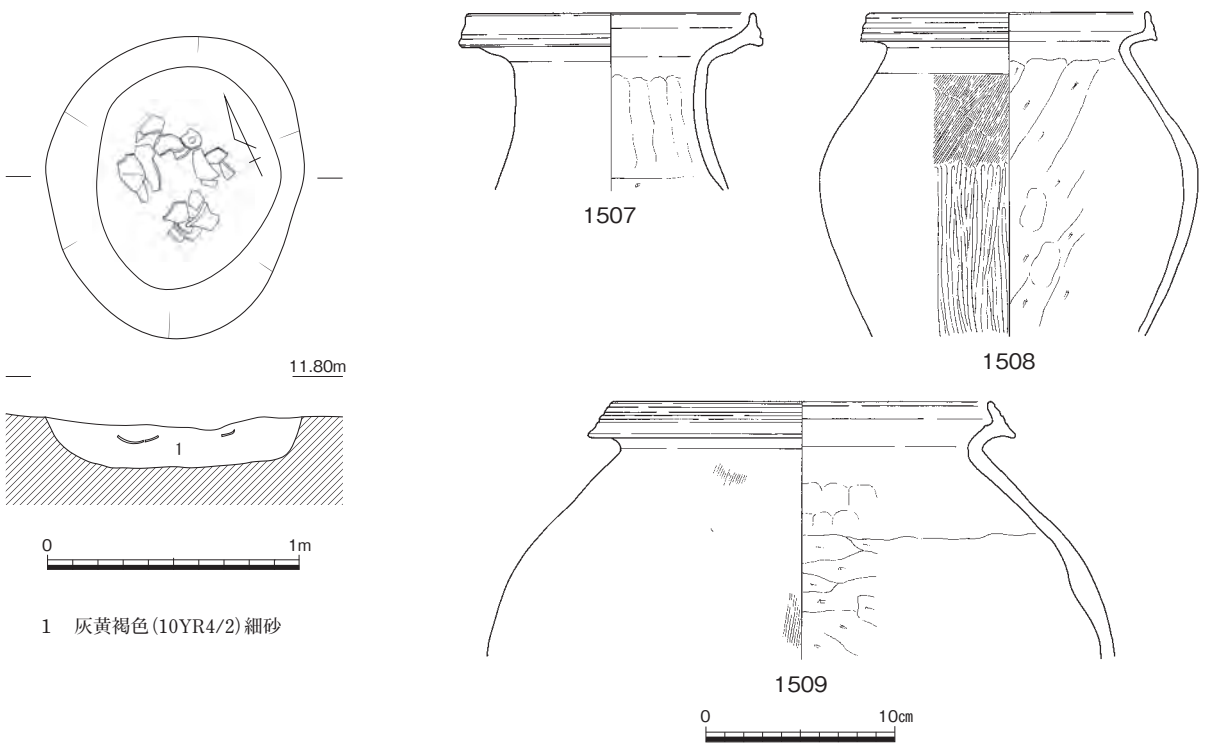


第292図　土坑136（1/30）・出土遺物（1/4）

竪穴住居26と重複しており、上部は竪穴住居によって削平されていた。平面形は隅丸長方形で、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸208㎝、短軸125㎝を測る。検出面からの深さは27㎝で、底面の標高は11.54ｍである。出土遺物には、弥生土器の壺**1503**・**1504**、高杯**1505**・**1506**がある。**1504**の口縁端部には鋸歯文が施されており、**1506**の内面には焼成前の補修痕が認められる。これらの遺物からみて、土坑の時期は弥・後・Ⅰと考えられる。（石田）

土坑137（第12・293図）

Ｈ10の南東隅に位置している土坑である。平面形は楕円、断面形は皿状を呈している。規模は長軸



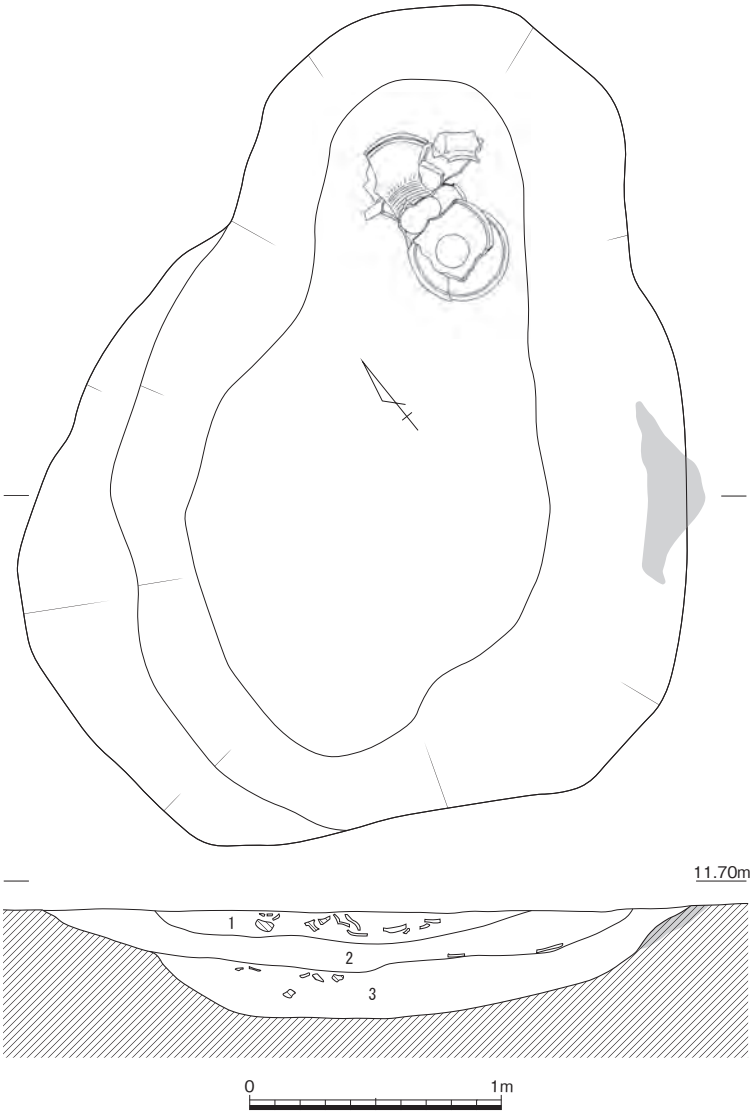
第293図　土坑137（1/30）・出土遺物（1/4）

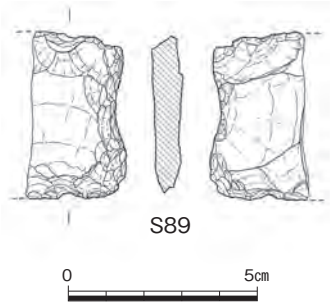
120㎝、短軸102㎝、深さ20㎝を測る。埋土は、灰黄褐色細砂の単一層である。遺物の出土状況としては、埋土中層でまとまって出土しており、底面には接地していない状態であった。

出土遺物には、壺**1507**、甕**1508**・**1509**がある。口縁部をいずれも上方へ立ち上がるものである。これらの出土遺物から、遺構の時期は、弥・後・Ⅳであると考えられる。　（圍）

土坑138（第12・294～297図、図版54－２・87）

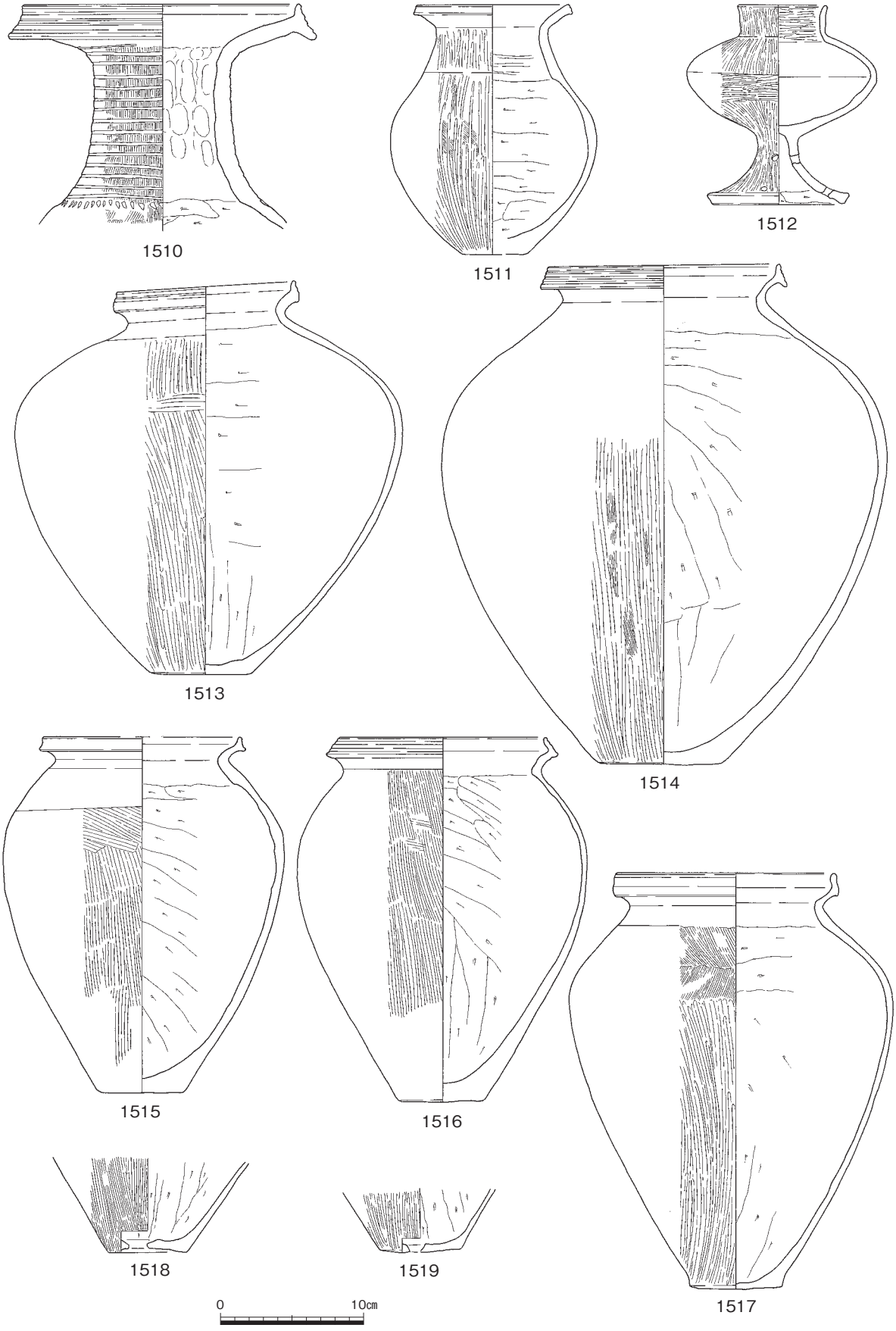
Ⅰ11の南、溝８の底面で検出した土坑である。平面形はやや不整形であるが、全体的には楕円形を、断面形は椀状を呈している。規模は長軸324㎝、短軸265㎝、深さ42㎝を測る、大形の土坑である。土坑の南東側の一部には被熱の痕跡が見られるが、出土した遺物に二次焼成を受けているものは見られない。ただ、下層埋土からは炭や焼土が多く出土している状況が見られた。また、土坑の北東側の底面に接地して、器台**1529**・**1530**が２個体まとまって出土している。これらの器台は復元するといずれも完形になる。また、他にもほぼ完形で出土している土器として、**1512**～**1514**、**1517**・**1528**がある。この土坑自体が、被熱痕跡を持つことと完形の器台が出土することから、何らかの祭祀に関連する可能性も考えられよう。



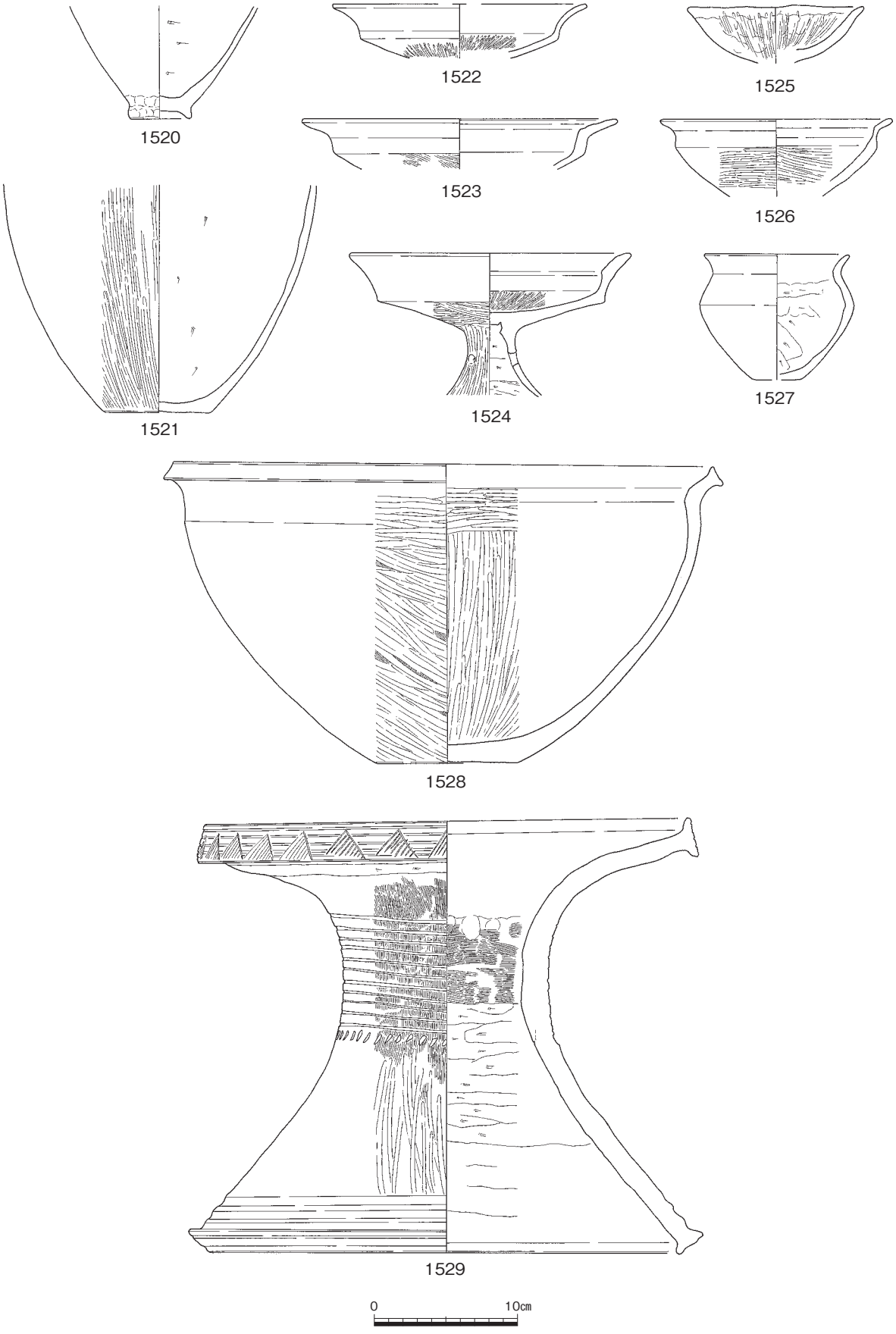


1　灰黄褐色(10YR5/2)粘性微砂（土器片多含）
2　灰黄褐色(10YR4/2)粘性微砂（炭少・焼土含）
3　褐灰色(10YR4/1)微～細砂（炭片多含）

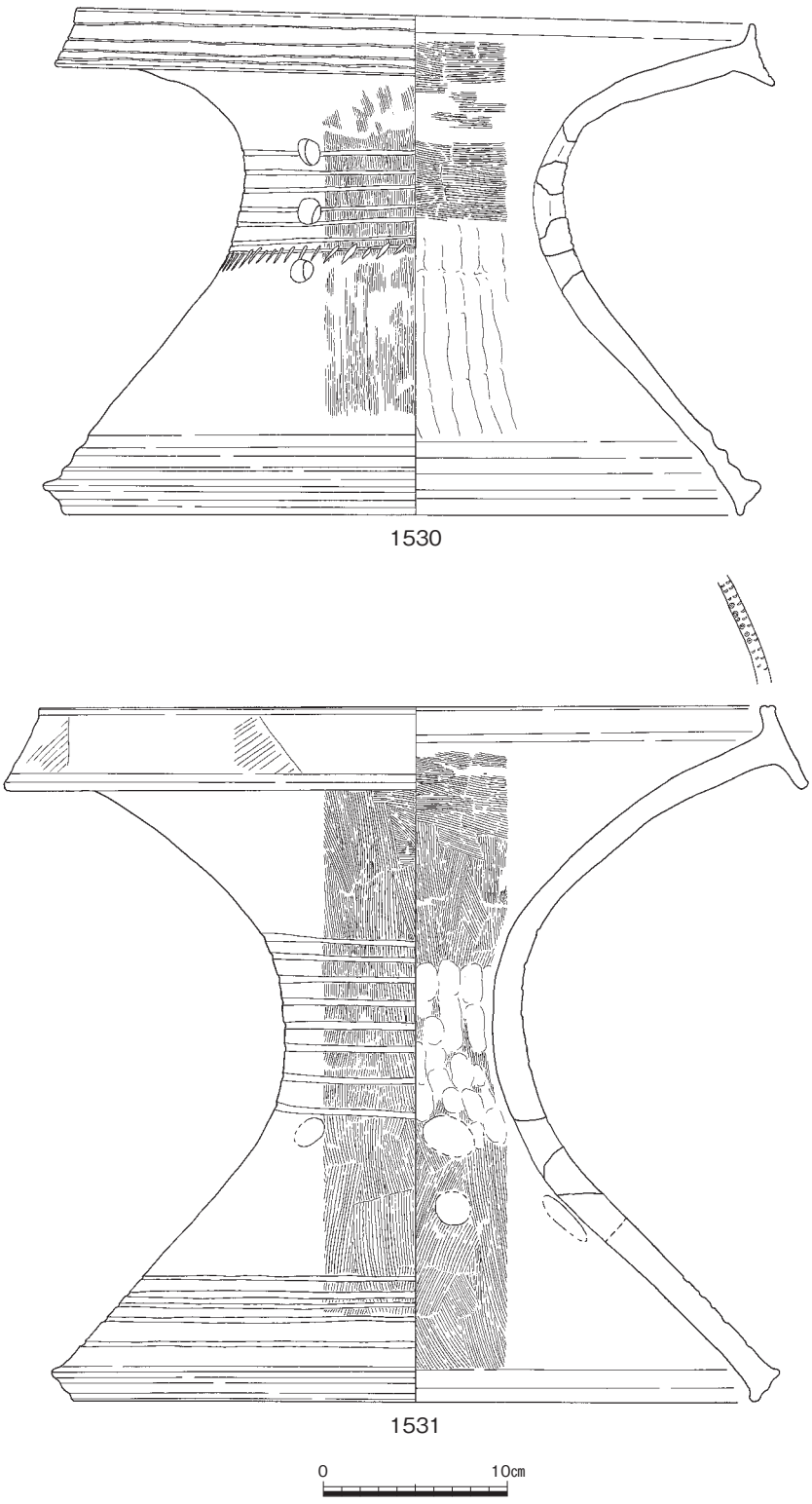
第294図　土坑138（1/30）・出土遺物①（1/2）



第295図　土坑138出土遺物②（1/4）



第296図　土坑138出土遺物③（1/4）



出土遺物は、壺1510～1514、甕1515～1521、高杯1522～1524、鉢1525～1528、器台1529～1531、サヌカイト製の打製石包丁S89がある。出土層位は、前述している器台1529・1530の他には、上・下層関係無く、満遍なく出土しており、また土器には時期幅が認められる。底面から出土している器台は弥生時代後期半ばのものであると考えられ、その時期のものとして高杯1523・1524などがある。しかし、続く弥・後・Ⅲの時期のものと考えられる、頸部に屈曲を持つ長頸壺1510や高杯1522や、完形の直口壺1512や甕1517などもある。

この土坑が最初に掘削され、器台を用いた何らかの祭祀に利用されたのが弥・後・Ⅱの時期であると考えられるが、その後も弥・後・Ⅲになっても完形の土器が出土することから、引き続き祭祀などに使用された可能性が考えられる。遺構の時期は弥・後・Ⅱ～弥・後・Ⅲであろう。(圃)

第297図　土坑138出土遺物④（1/4）

土坑139（第13・298図、図版54－３）

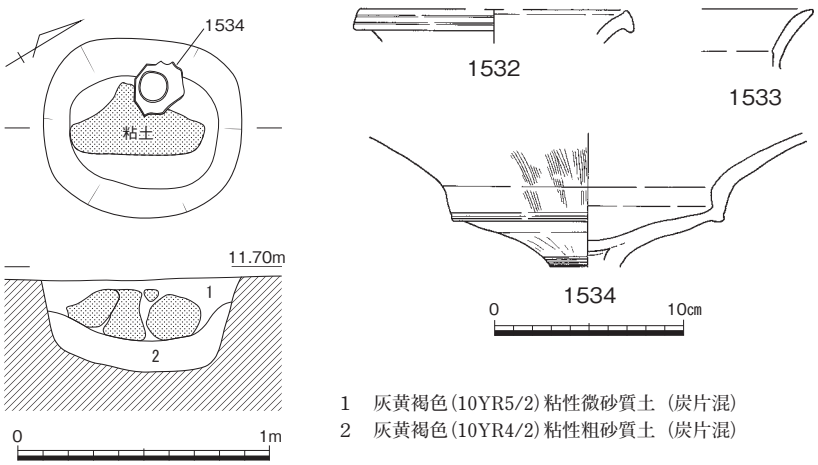
Ｈ12中央の西、土坑140の北西約2.5ｍに位置している。平面形は不整な円形で、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸80㎝、短軸70㎝、検出面からの深さは37㎝を測り、底面の標高は11.29ｍである。

埋土は上下の２層からなるが、上層部分で明黄褐色粘土の塊を検出した。土坑の北西部分では、こ

の粘土塊で上下を挟みこむ形で、高杯1534を検出した。1534は杯部のみの破片で、杯部を上にして、ほぼ水平な状態で置かれていた。

埋土からは、他に炭の細片とともに、壺1532、高杯1533が小片であるが出土している。出土土器からみて、この土坑の時期は弥・後・Ⅱと考えられる。

（石田）

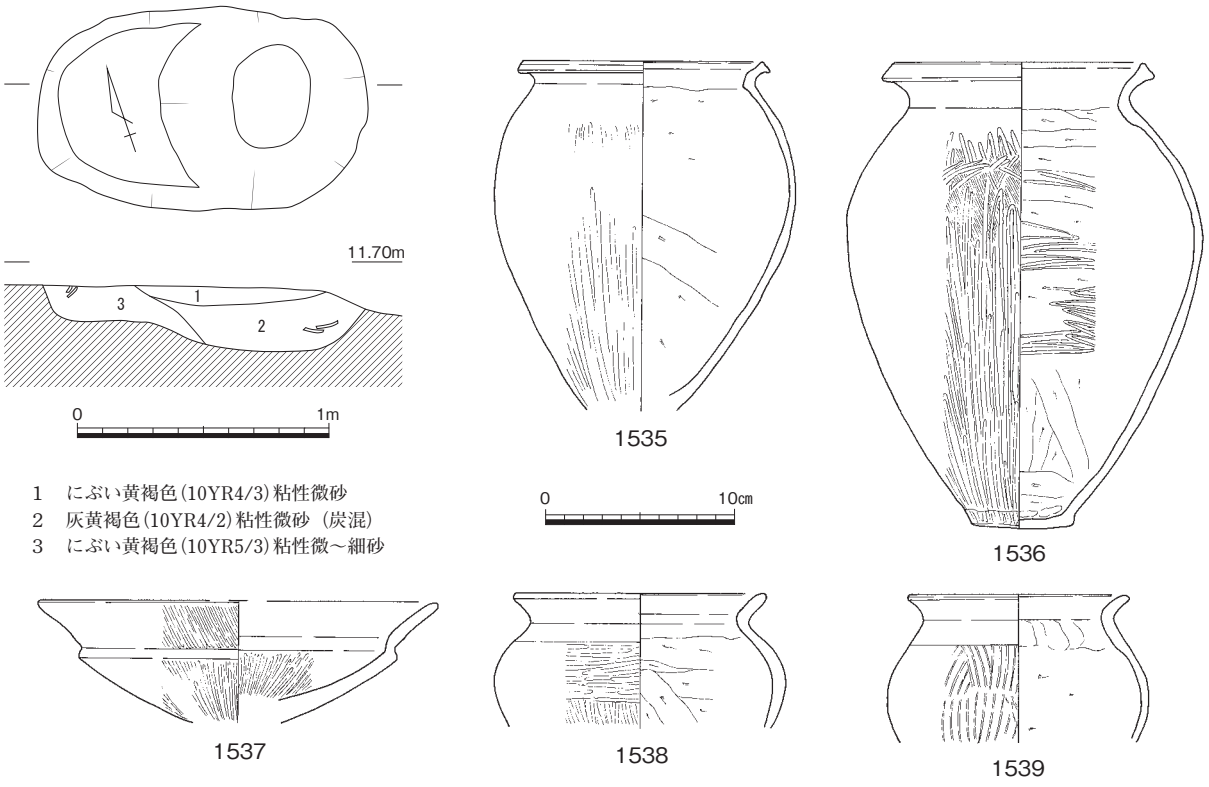


第298図　土坑139（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑140（第13・299図、図版87）

H12の南、土坑140・土坑142の南側に位置する土坑である。平面形は楕円形、規模は長軸130㎝、短軸80㎝、深さ25㎝を測る。出土遺物には、甕1535・1536、高杯1537、鉢1538・1539がある。1536は体部内面にケズリを施したのち、一部に横方向のミガキを施すものである。1537は短い口縁を外反させるが、内面に段を有する。1538・1539はいずれも外反する短い口縁部を持つ鉢である。これらの遺物から、土坑の時期は弥・後・Ⅱであると考えられる。

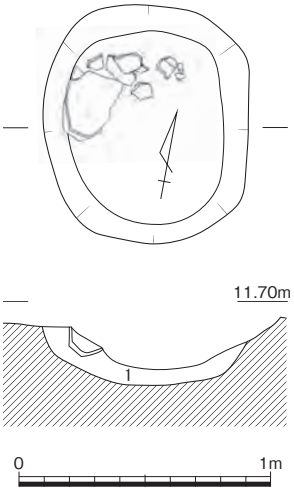
（團）



第299図　土坑140（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑141（第13・300、写真25）

Ｈ12の南、土坑140の南東側に位置している土坑である。平面形は楕円形、断面形は椀状を呈しており、規模は長軸95㎝、短軸80㎝、深さ23㎝を測る。埋土は単一層である。土坑の北西側の底面付近に甕が１点出土している。この甕が、図示している**1540**で、口縁部と体部は接合できていない。口縁端部はやや下方へ拡張し、凹線も持つ口縁部はやや内傾している。底面には穿孔がなされている。この遺物から、土坑の時期は弥生時代後期前半であると考えられる。　（圍）



1　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性微砂

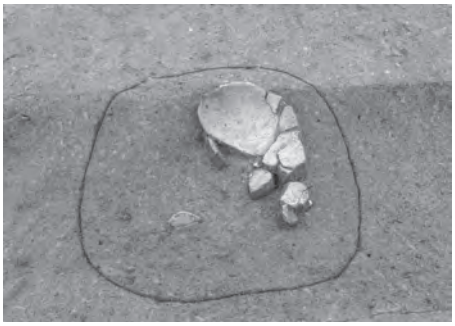
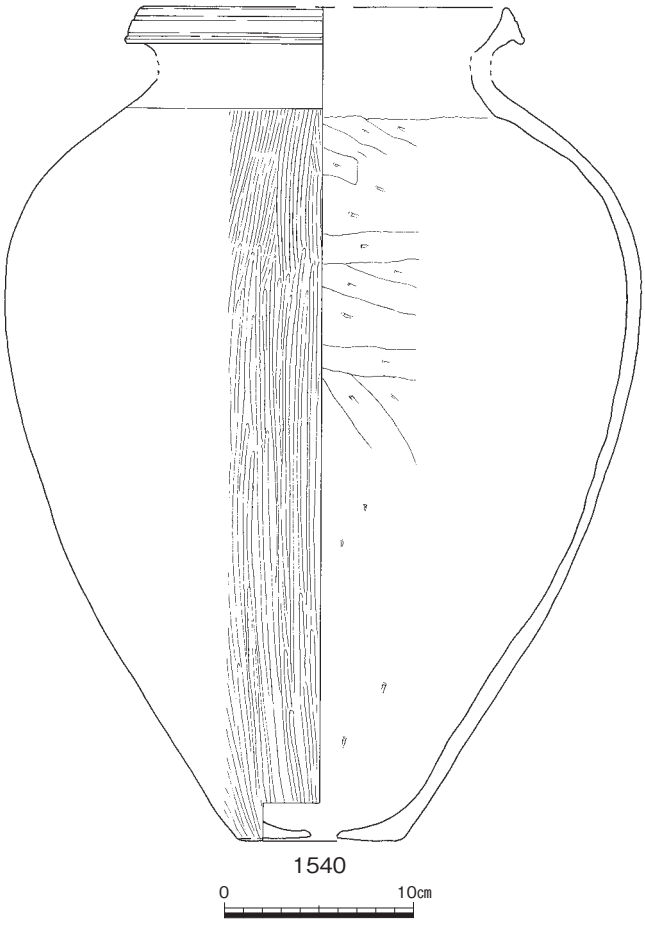


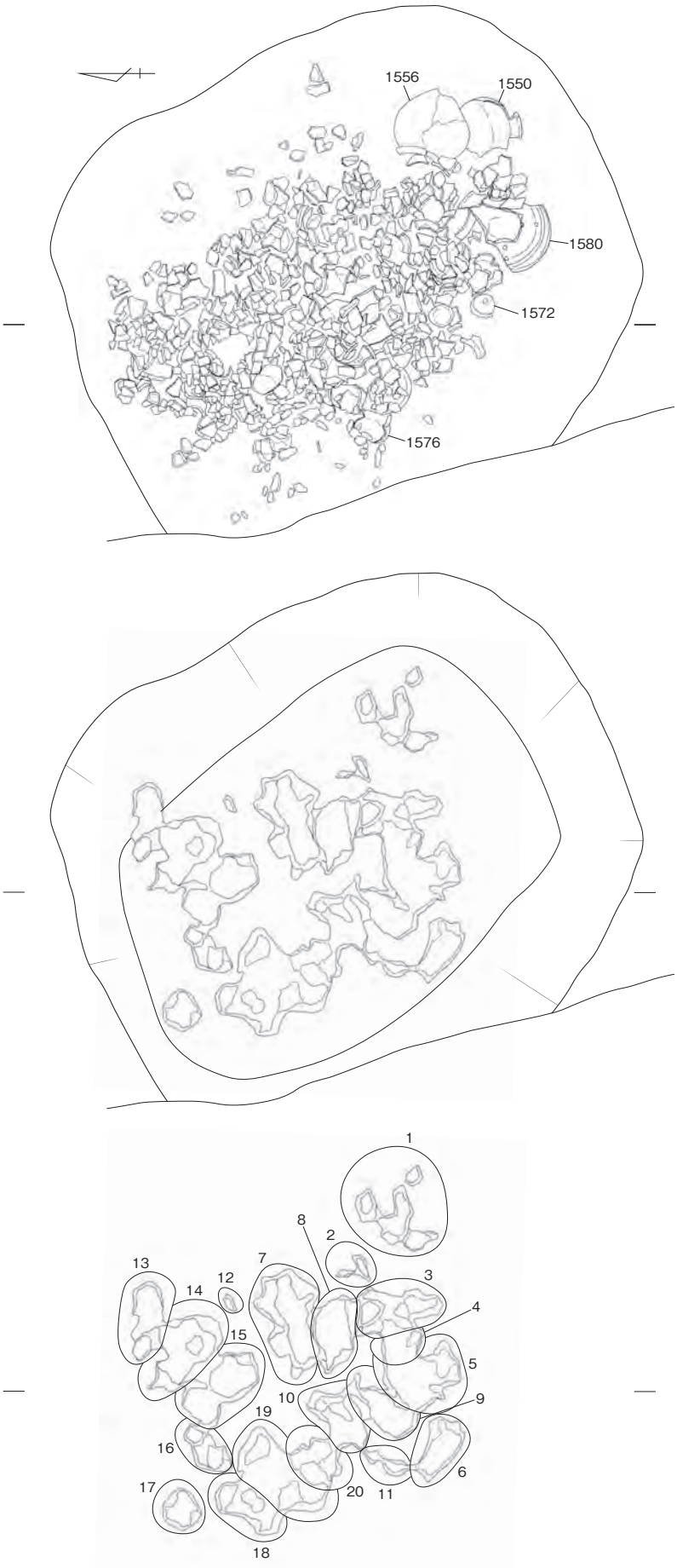
写真25　土坑141土器出土状況（東から）



第300図　土坑141（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑142（第13・301～307図、巻頭図版６－２、図版55－１～３・88・117、写真26・27）

Ｈ12の南、土坑141の北側に位置する土坑である。平面形は隅丸方形、断面形は椀状を呈しており、規模は長軸281㎝、短軸200㎝、深さ64㎝を測る。これは完掘した土坑142の規模であり、当初、この土坑は、第301図の上の図のように、検出面で多くの土器を検出し、調査当初には土器溜まりとして認識していたものである。土器を検出したのはおよそ2.3×1.8ｍの範囲であった。土器の出土量は専用のコンテナ20箱と量は多いが、復元できないものが大半である。第302図の第１層で示しているように、およそ15㎝の厚さで堆積していた。その中でも南側で検出した土器の一群については完形に近い状態で出土しており、他の細片で出土している土器とは、様相が異なる出土状況である。これら完形の土器は、壺**1545**・**1550**、甕**1556**、台付鉢**1576**、器台**1580**である。これらの土器を除去して精査



第301図　土坑142遺物及び粘土出土状況（1/30）

表６　土坑142出土粘土一覧

番号	重さ(kg)	厚さ(cm)
1	4.02	3～9
2	0.47	3
3	1.34	3～4
4	4.17	8～10
5	5.14	4～8
6	2.59	6
7	15.02	8～14
8	8.59	5～7
9	3.29	4～8
10	3.09	6～8
11	0.65	2～6
12	0.33	3
13	4.61	10
14	15.10	9～14
15	7.42	5～9
16	1.68	2～5
17	2.92	5～10
18	4.99	4～6
19	10.22	8～11
20	2.51	5

写真26　土坑142土器・粘土塊
出土状況（西から）

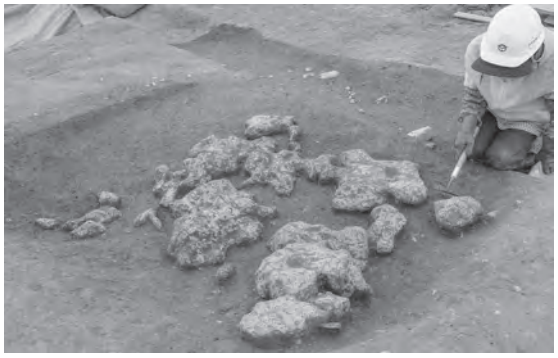
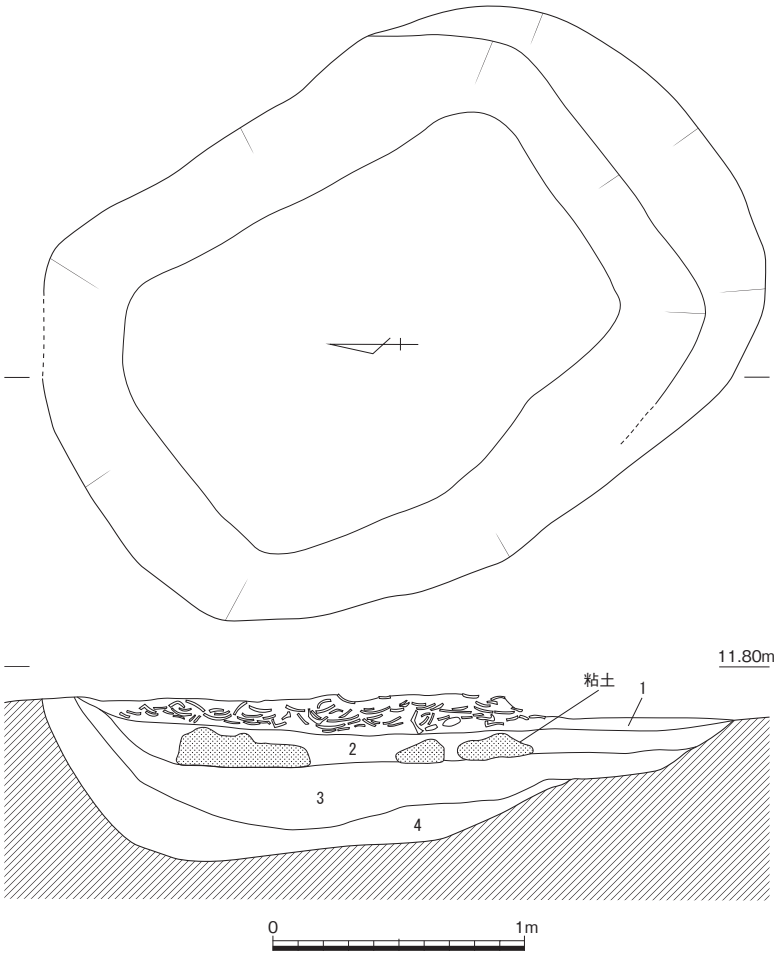
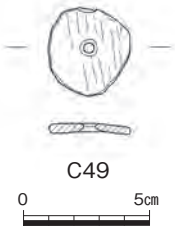


写真27　土坑142粘土塊調査
風景（北西から）

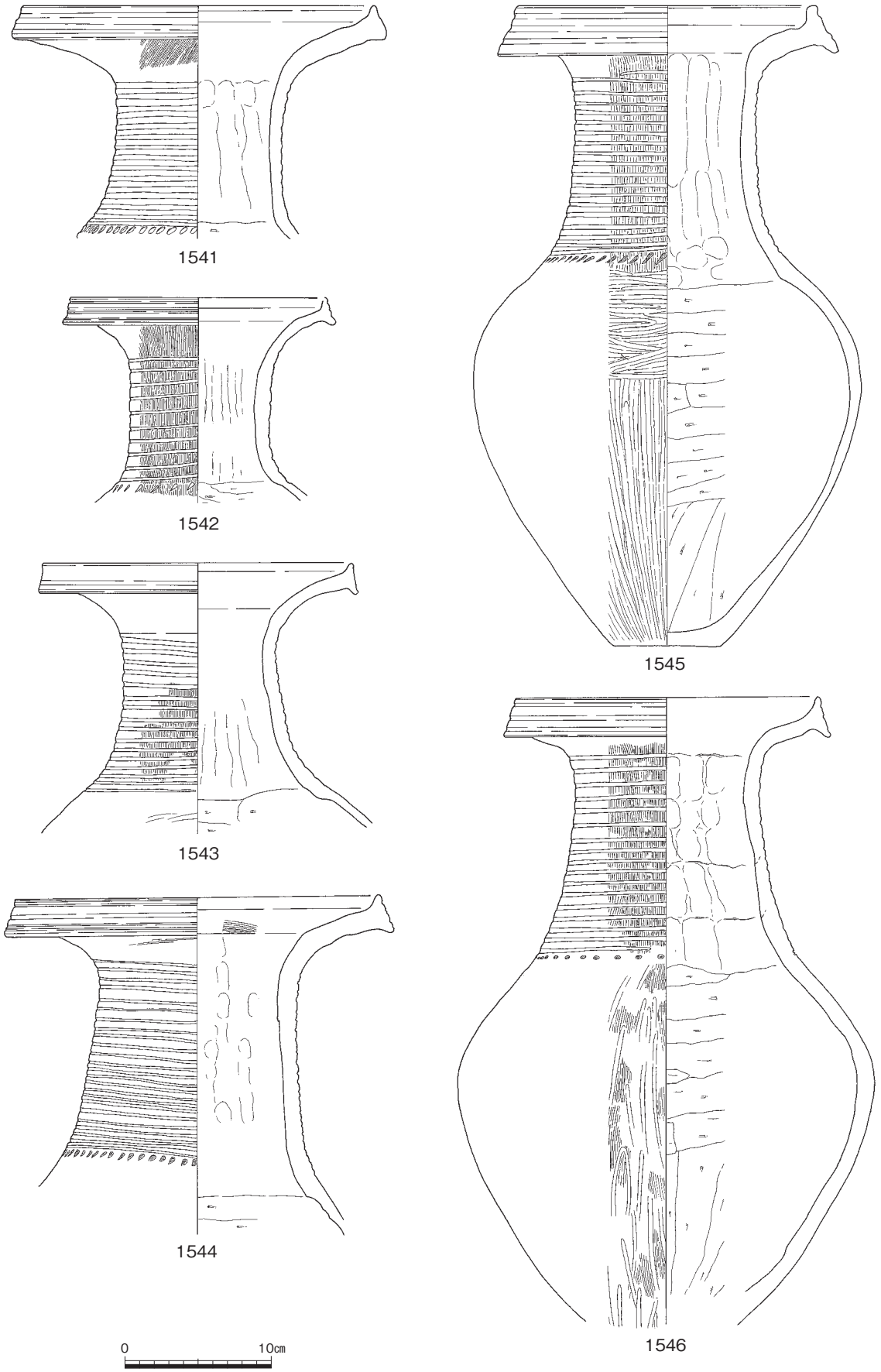
すると、黄色もしくは白色の粘土を検出したため、粘土を残して周辺の褐灰色粘性微砂を掘り下げたところ、平面形が隅丸方形を、断面形が皿状呈する、長軸264㎝、短軸220㎝、深さ26㎝を測る土坑の底面で、第301図の下の図のような状態の粘土塊を多く検出した。この粘土は調査時に取り上げ直後の総重量が、約98kgにのぼるものであった。大半が黄色の粘土であるが、番号12と番号20の上半部については白色を呈する粘土である。これらはすべて未焼成の粘土塊である。粘土塊は、厚さ約16㎝の第２層中で検出しており、底面が平坦な土坑内に接地して出土している。これらの粘土塊の出土状況は、不定形なものが不揃いに出土するというよりも、北西隅で出土している番号17の粘土塊程度の塊を隣接するように置いているような印象を受ける。このような塊での形を保持するための布や籠、筵（むしろ）などの繊維の付着が確認できないか詳細に観察を行ったが、そのような痕跡を見つけることはできなかった。東大阪市鬼塚遺跡出土例（『鬼塚





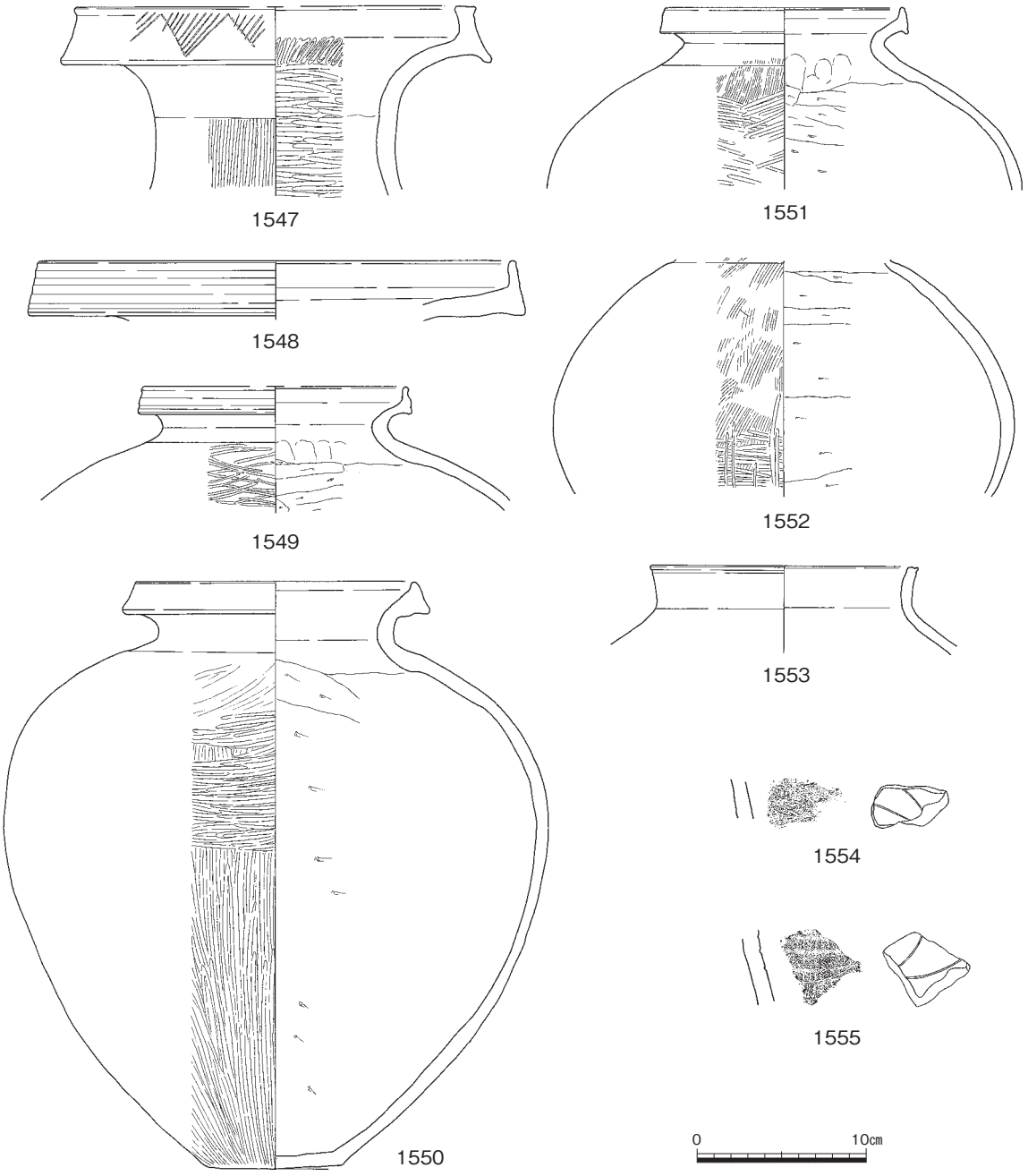
1　灰黄褐色(10YR4/2)粘性微砂（土器片多含）
2　褐灰色(10YR4/1)粘性微砂（土器少含）
3　にぶい黄褐色(10YR5/3)粘性微砂
4　灰黄褐色(10YR4/2)細～粗砂（炭粒多含）

第302図　土坑142（1/30）・出土遺物①（1/3）



第303図　土坑142出土遺物②（1/4）

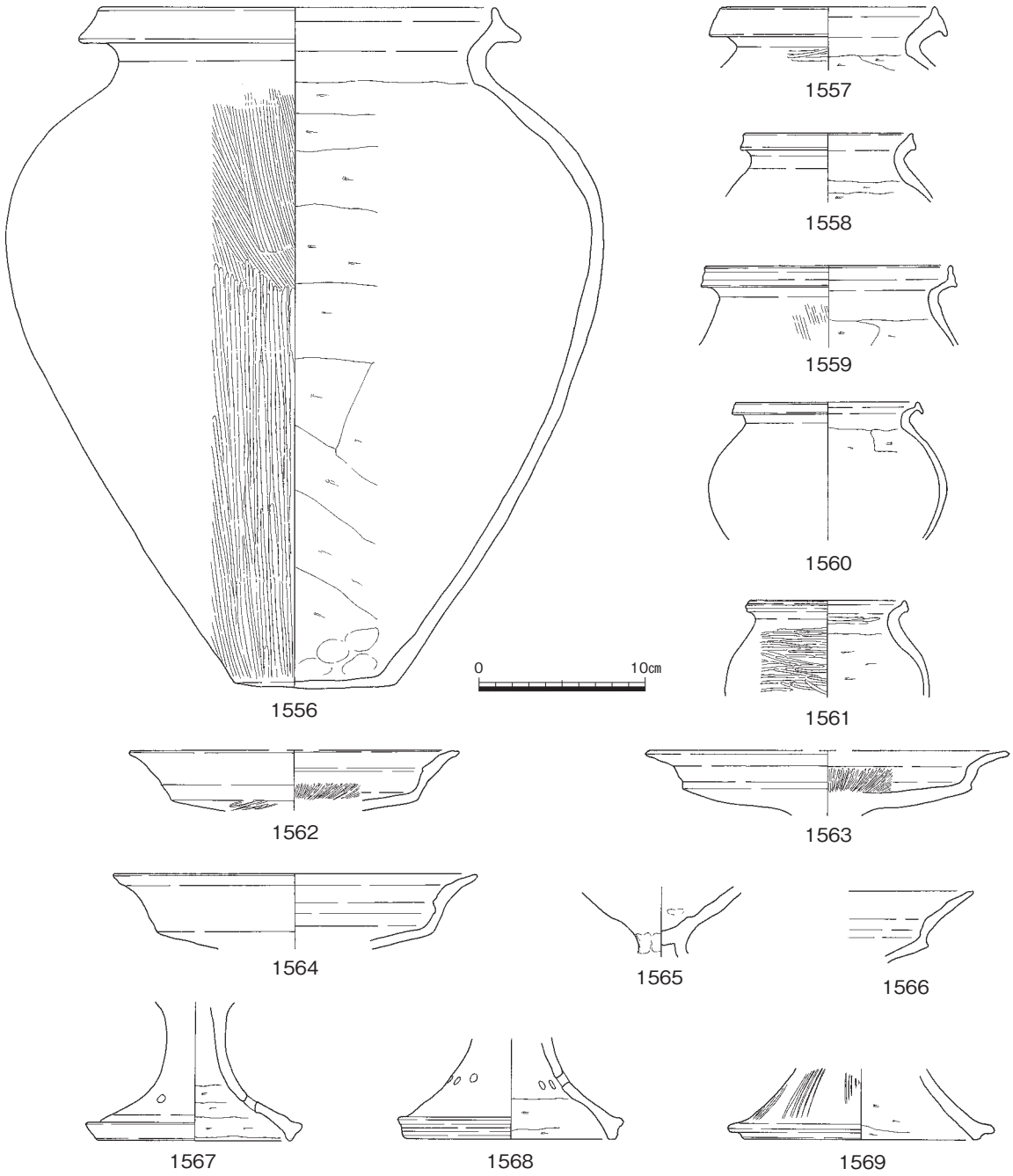
遺跡Ⅱ・若江遺跡』東大阪市遺跡保護調査会　1979年）では籠目の痕跡が見られると言う。このような未焼成粘土塊は県内の弥生時代の遺構からしばしば出土し、今回の調査でも本遺跡の竪穴住居31や土坑31、刑部遺跡の溝５でも出土しているものであるが、本土坑のように多量に出土することはない。このような未焼成粘土塊が土器の原料である可能性を考えて胎土分析を行った結果、土器の原材料として組成に矛盾はないとの結果を得た。また、この粘土塊と上層の土器との関連であるが、ほぼ完形で出土している南側の土器については接地面が細片の土器の標高より低く、粘土塊の接地面とほぼ同じ標高11.60ｍ付近となり、この土器周辺では粘土塊は出土していない。このことから、粘土塊を土器製作の材料の保管と考えるか、何らかの祭祀に伴って完形の土器と共に置かれたとも考えられる。この粘土塊を除去後にサブトレンチを入れたところ、深さ36㎝程度掘り下げすることができ、結果とし



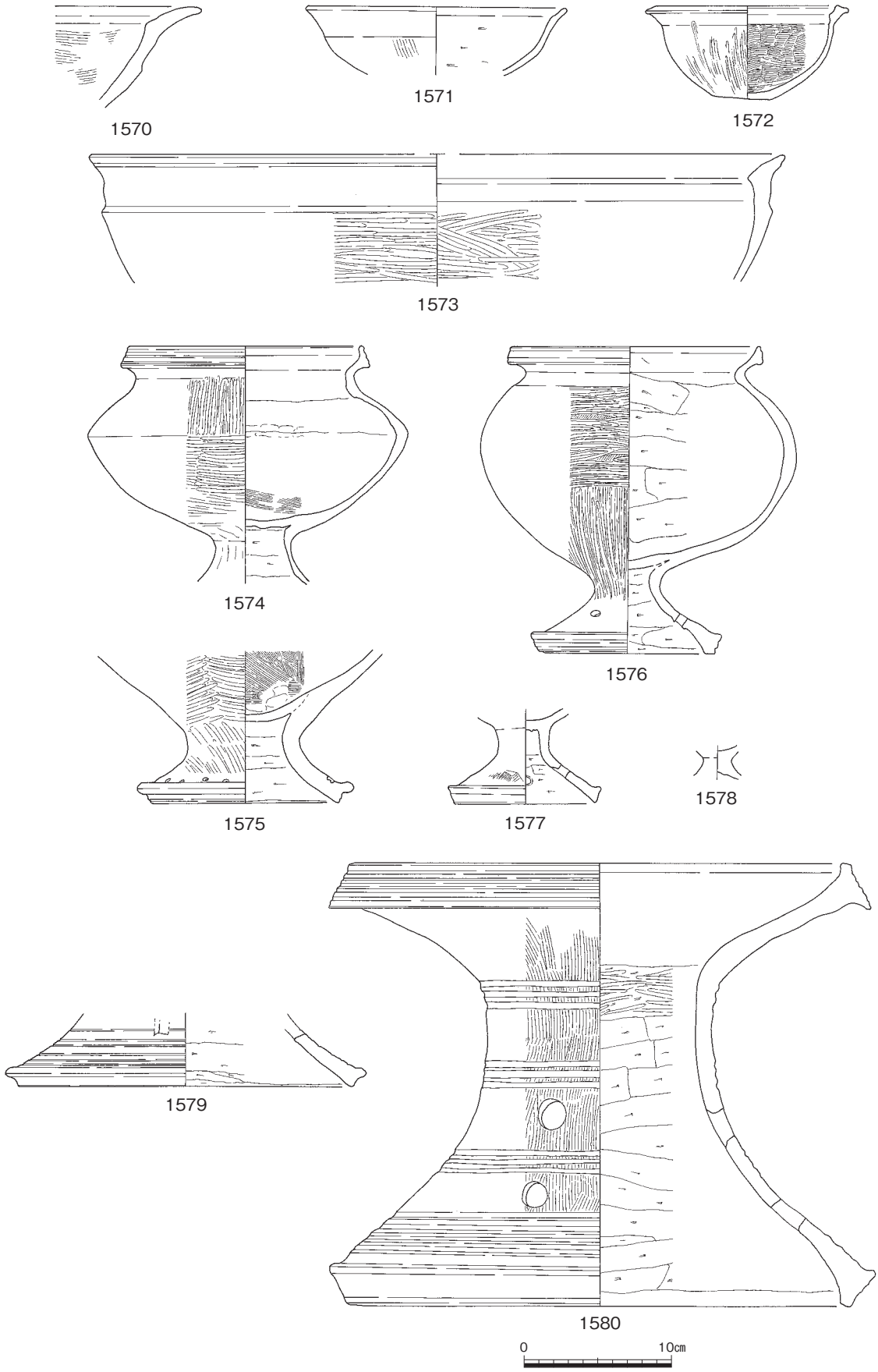
第304図　土坑142出土遺物③（1/4）

て深さ64㎝の方形土坑として完掘できた。粘土塊が出土した第２層より下層の第３層からは細片以外の土器の出土はない。また、埋土には基盤層土塊などの偽礫が混じらないことから人為的な埋め戻しがされていない。このことから、土坑として利用されていたものが一定程度埋まった上面のくぼみを利用して、未焼成粘土塊が置かれたものと考えられる。

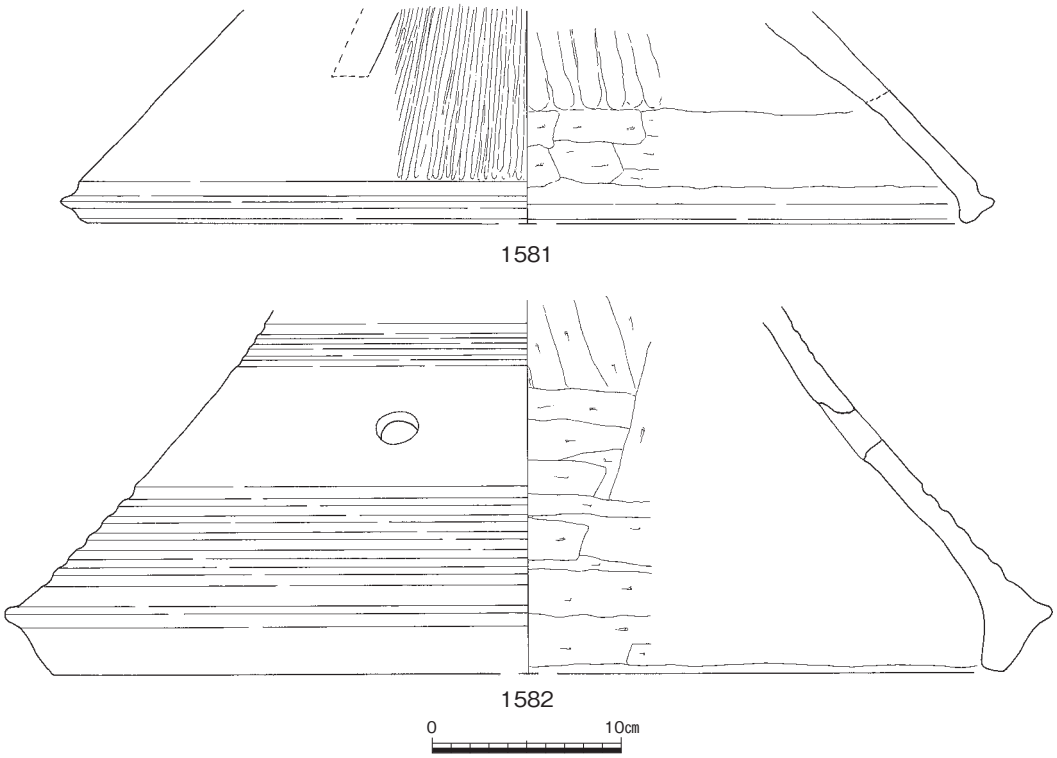
出土遺物には、壺1541～1555、甕1556～1561、高杯1562～1569、鉢1570～1578、器台1579～1582がある。これら図化できた土器はすべて上層の土器溜まりから出土したものである。これらの土器の時期が弥・後・Ⅱであることから、最終的に土坑上面が土器溜まりとなった時期が弥・後・Ⅱであり、粘土塊の置かれた時期も同様であると考えられる。（團）



第305図　土坑142出土遺物④（1/4）



第306図　土坑142出土遺物⑤（1/4）

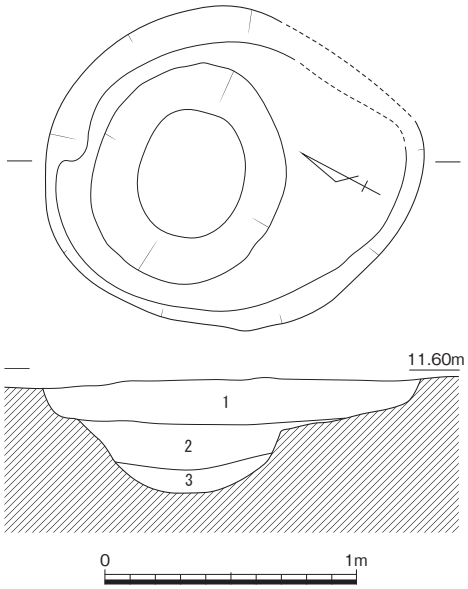


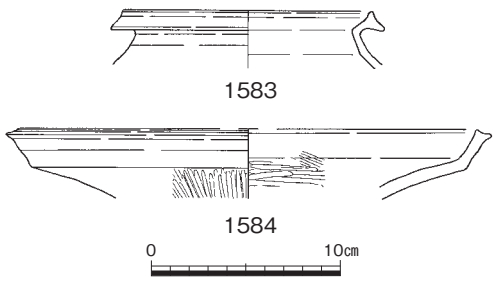
第307図　土坑142出土遺物⑥（1/4）

土坑143（第13・308図）

竪穴住居28の南西に位置する。長軸150㎝、短軸125㎝の不整円形を呈し、検出面からの深さは約45㎝である。掘り方は二段になっており、南東側は平坦になっている。

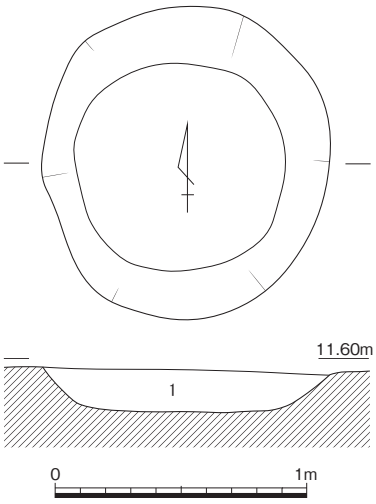
1583は甕の口縁部で、凹線等の文様は見られない。調整については風化による剥落が著しく、詳細は不明である。**1584**は高杯の口縁部で、端部には３条の凹線が見られ、内外面には丁寧なヘラミガキが施されている。土坑の時期は、出土遺物から弥・後・Ⅰと考えられる。（藤井）



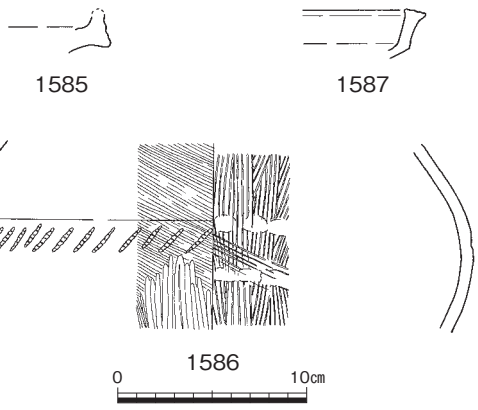


1　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性砂質土
2　暗褐色(10YR3/4)粘性砂質土
3　暗褐色(10YR3/4)粘性砂質土

第308図　土坑143（1/30）・出土遺物（1/4）



1　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性砂質土



第309図　土坑144（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑144（第13・309図）

土坑143の東隣に位置する。長軸124㎝、短軸113㎝の不整円形を呈し、検出面からの深さは約17㎝である。

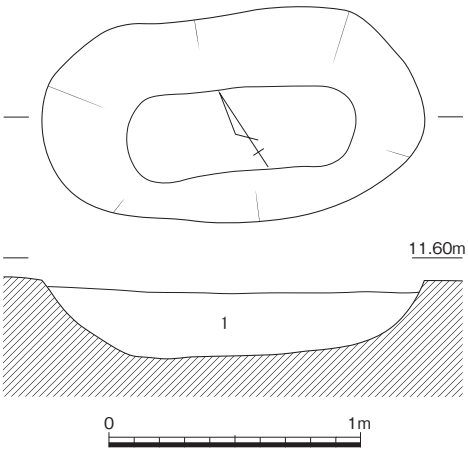
1585は壺の口縁部の破片で、端部に３条の凹線が施されている。**1586**は壺の胴部で、最大径に近い位置に列点文が巡っている。**1587**は高杯の口縁部の破片で、端部には３条の凹線が見られる。土坑の時期は、出土遺物から弥・後・Ⅰと考えられる。(藤井)

土坑145（第13・310図）

土坑144の南西に位置する。長軸152㎝、短軸83㎝の不整楕円形を呈し、検出面からの深さは約32㎝である。遺物は出土していないが、検出レベルや周辺の状況からみて、土坑の時期は弥生時代後期と考えられる。(藤井)

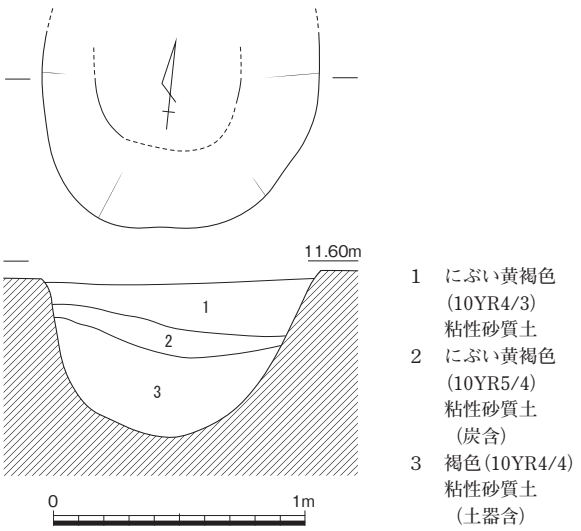
土坑146（第13・311・312図）

土坑145の東隣に位置する。北半の状況が不明であるが、径110㎝程度の不整円形を呈すると考えられ、検出面からの深さは約61㎝である。埋土は３層に分けられ、最下層にあたる第３層から遺物が出土している。**1588**は壺の口縁部で、端部には２条の凹線が見られる。外面の調整については、剥落が著しく不明である。**1589**も壺の口縁部だが、器壁が薄く丁寧な作りで、拡張された端部には３条の凹線文が施されている。**1590**は甕の口縁部で、端部には３条

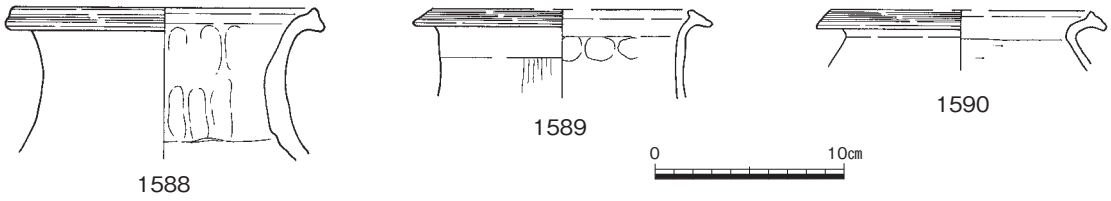


1　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性砂質土

第310図　土坑145（1/30）



第311図　土坑146（1/30）

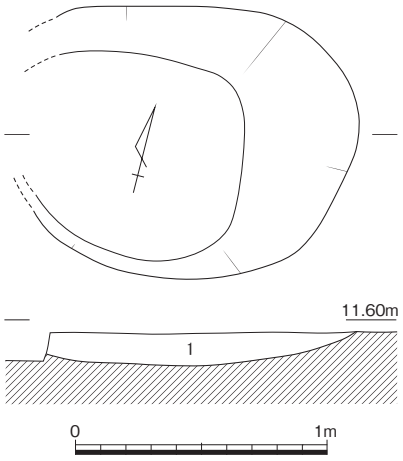


第312図　土坑146出土遺物（1/4）

の凹線文が施されている。土坑の時期は、出土遺物から弥・後・Ⅰと考えられる。（藤井）

土坑147（第13・313図）

土坑145の南東に位置する。西側の状況が不明であるが、長軸約125㎝、短軸107㎝の不整円形を呈すると考えられ、検出面からの深さは約13㎝である。**1591**は甕の口縁部の破片で、口縁部には２条の凹線が見られるが、全体的に摩滅が著しく、凹線の正確な数や調整は不明である。**1592**は甕の胴部の破片で、最大径からやや下がった所に焼成後に穿たれた穴がある。**1593**は高杯の脚部で、端部には３個一対の竹管文と１条の凹線が認められる。土坑の時期は、出土遺物から弥・後・Ⅰと考えられる。（藤井）

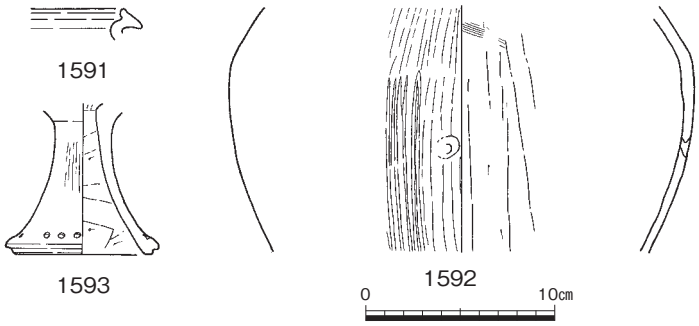


1　暗褐色(10YR3/4)シルト質微砂

土坑148（第13・314図）

土坑147の東隣に位置する。長軸116㎝、短軸103㎝の不整円形を呈し、検出面からの深さは約11㎝である。

1594は甕の口縁部の破片で、剥落が著しく文様・調整は不明である。**1595**は高杯の脚部で、４条一対の沈線のほか、端部には１条の凹線が認められる。土坑の時期は、出土遺物から弥・後・Ⅰと考えられる。（藤井）

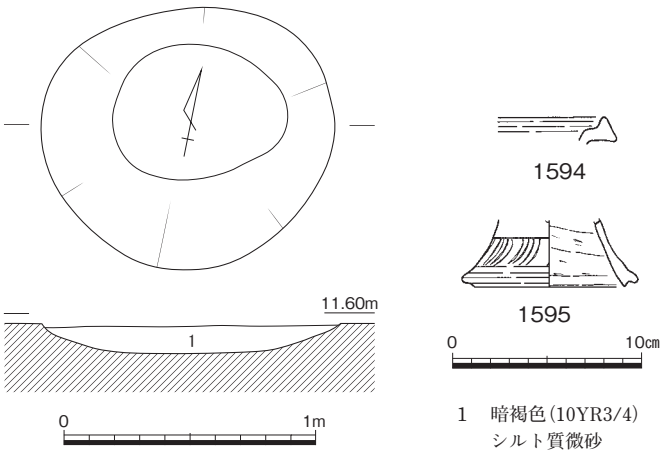


第313図　土坑147（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑149（第13・315図）

土坑148の北東に位置する。長軸115㎝、短軸112㎝の不整円形を呈し、検出面からの深さは約42㎝である。

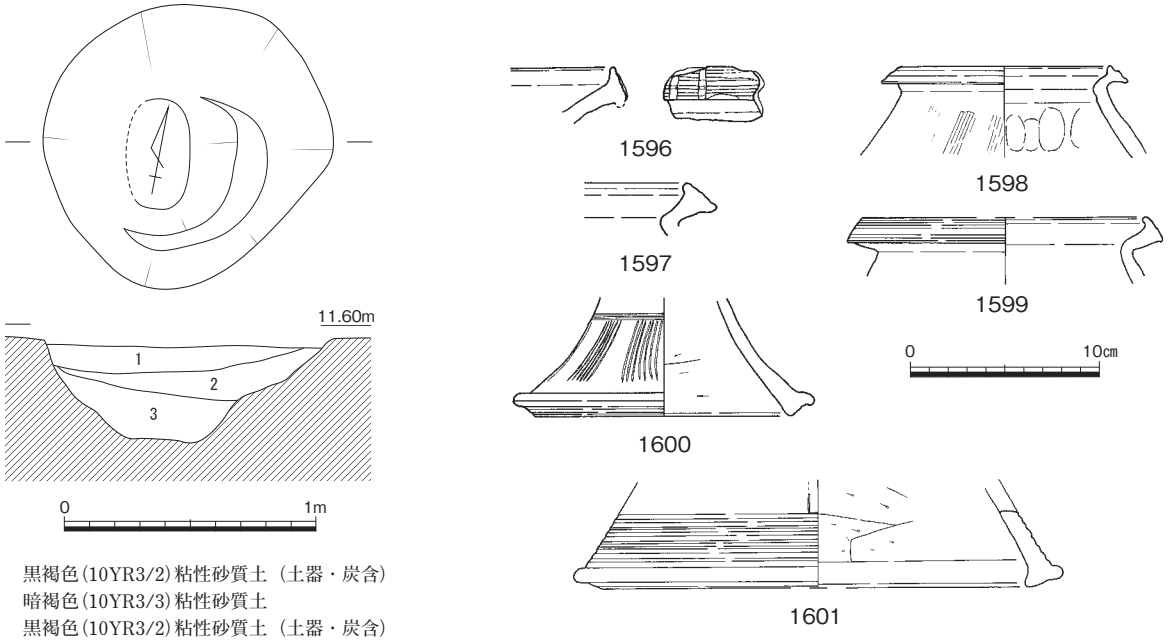
1596は壺の口縁部の破片で、端部には４条の凹線と２条の浮文が認められる。**1597**～**1599**はいずれも甕の口縁部で、**1597**は５条、**1599**は３条の凹線が端部に施されている。**1598**は端部が強く撫でられているが、凹線等の文様は見られな



1　暗褐色(10YR3/4)
シルト質微砂

第314図　土坑148（1/30）・出土遺物（1/4）

い。1600は高杯の脚部で、６～７本を一単位とした沈線と、端部には３条の凹線文が認められる。1601は器台の脚部で、８条の凹線のほか、長方形の透かし穴が認められる。土坑の時期は、弥・後・Ⅰと考えられる。（藤井）

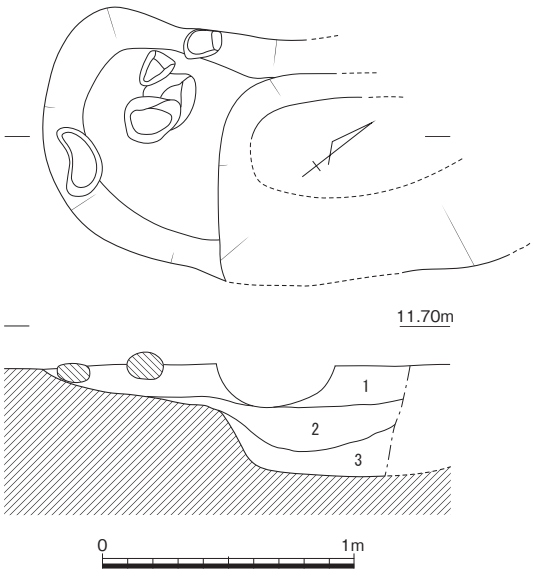


1　黒褐色(10YR3/2)粘性砂質土（土器・炭含）
2　暗褐色(10YR3/3)粘性砂質土
3　黒褐色(10YR3/2)粘性砂質土（土器・炭含）

第315図　土坑149（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑150（第13・316・317図）

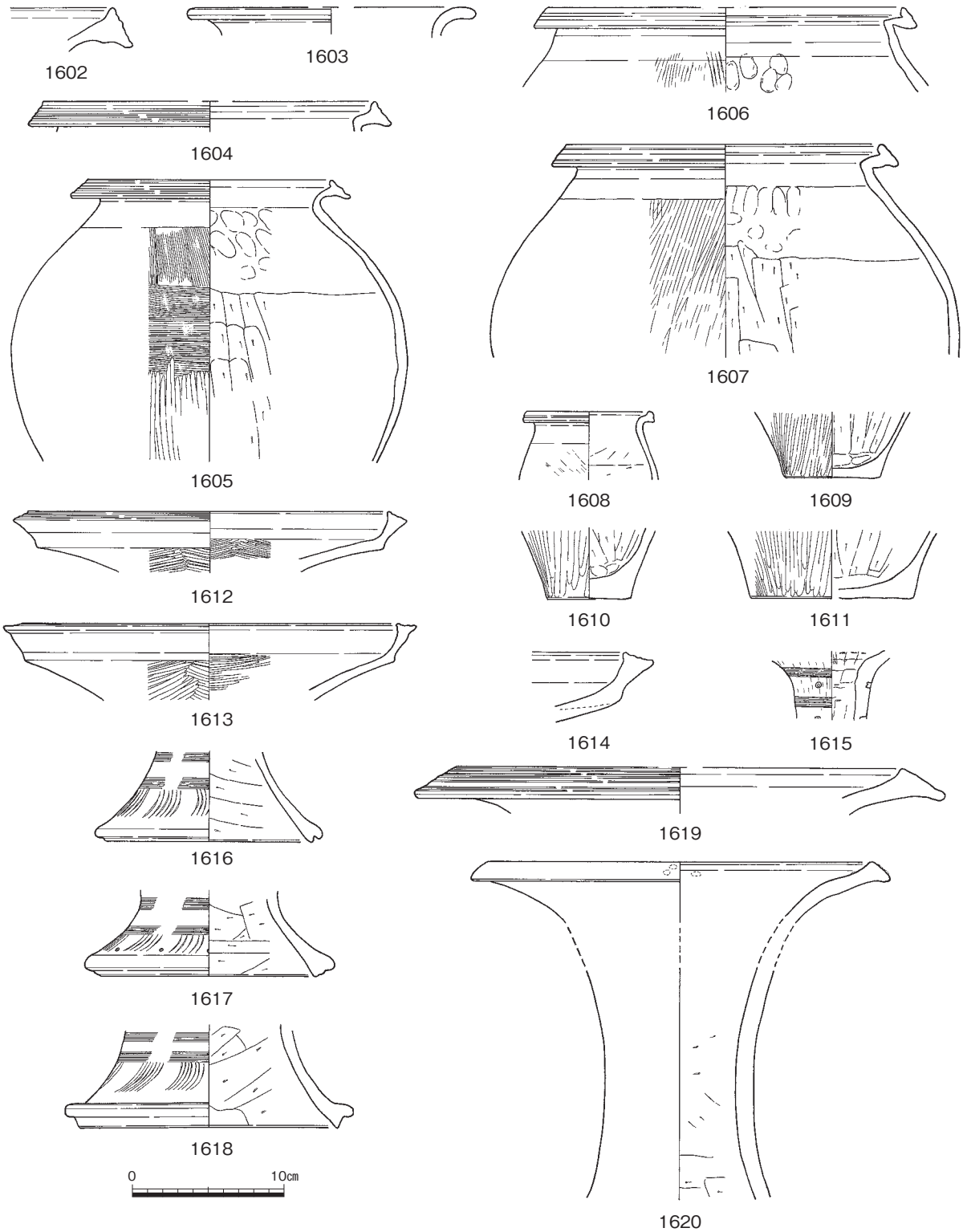
土坑146の東隣に位置する。北側の状況が不明であるが、短軸99㎝の不整楕円形を呈すると考えられ、検出面からの深さは約44㎝である。埋土は３層に分けられ、第１層では人頭大の円礫が認められるが、その性格は不明である。1602・1603は壺の口縁部である。1602の口縁端部には５条の凹線文が認められるが、1603の口縁端部は拡張されておらず、文様も認められない。1604～1608は甕である。1604は口縁部の破片で、端部には４条の凹線文が施されている。1605は胴部から口縁部まで遺存しており、口縁端部には３条の凹線文が認められる。1606は頸部から口縁部にかけての屈曲が強いのが特徴的で、口縁部は強く撫でられているが、凹線などの文様は見られない。1608は口径約８㎝の小形の甕で、口縁端部には１条の凹線が認められる。1609～1611は甕の底部である。1612～1614は高杯の口縁部で、いずれも内外面に丁寧なミガキ調整が認められるほか、口縁端部にはそれぞれ３条、３条、４条の凹線が施されている。1615は高杯の頸部で、５条を一単位とした横方向の櫛描



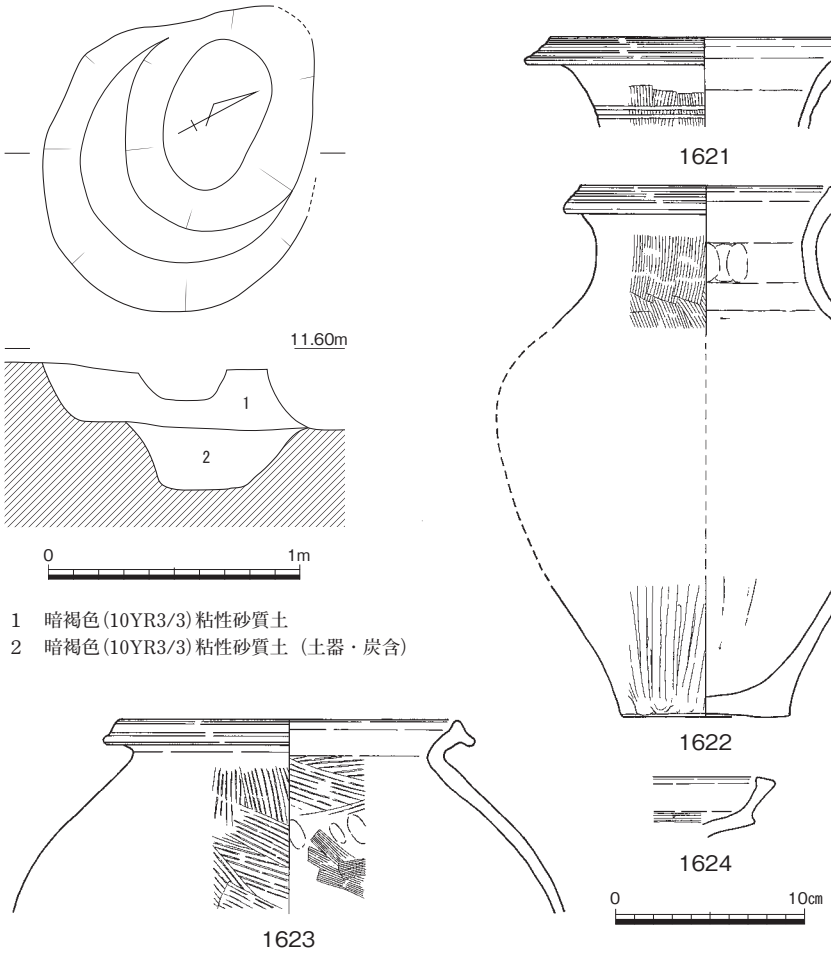
1　灰黄褐色(10YR4/2)粘性砂質土（土器・礫含）
2　暗褐色(10YR3/3)粘性砂質土（土器・炭含）
3　黒褐色(10YR3/2)粘性砂質土（土器含）

第316図　土坑150（1/30）

き文と、竹管文が認められる。1616は高杯の脚部で、６条一対の沈線と７条一対の櫛描き文のほか、端部には１条の凹線が認められる。1617・1618は台付鉢の脚部で、櫛描き文と沈線文、竹管文のほか、1617の端部には２条の凹線がある。1619・1620は器台で、1619には口縁部に８条の凹線文が施されているが、1620には文様が認められない。土坑の時期は、弥・後・Ⅰと考えられる。　（藤井）

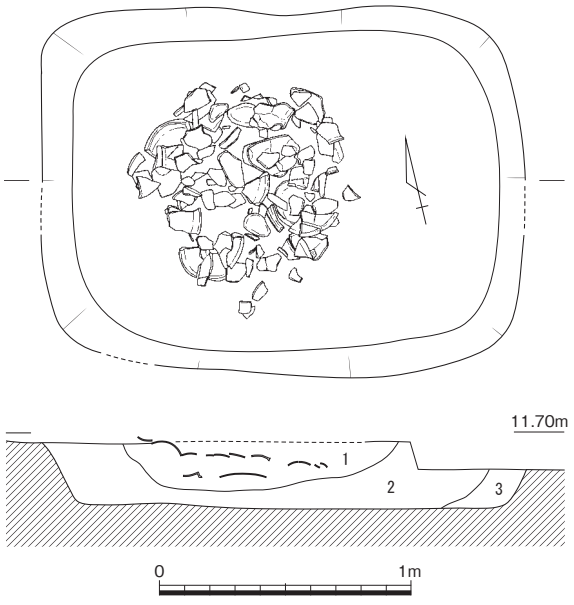


第317図　土坑150出土遺物（1/4）



1　暗褐色(10YR3/3)粘性砂質土
2　暗褐色(10YR3/3)粘性砂質土（土器・炭含）

第318図　土坑151（1/30）・出土遺物（1/4）



1　暗褐色(10YR3/4)粘性砂質土（土器含）
2　暗褐色(10YR3/4)粘性砂質土
3　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性砂質土
　(暗褐色(10YR3/3)一部含)

第319図　土坑152（1/30）

土坑151(第13・318図)

土坑150の南に隣接して位置し、一部を土坑150に切られている。埋土は２層に分けられ、遺物は第２層から出土している。

1621・**1622**は壺である。**1621**の口縁端部には４条の凹線が認められるほか、頸部には２条の沈線が施されている。**1622**の口縁部には３条の凹線が認められる。**1623**は甕口縁部で、端部には２条の凹線が施されている。**1624**は高杯口縁部の破片で、端部には３条の凹線が見られる。土坑の時期は、弥・後・Ⅰと考えられる。　（藤井）

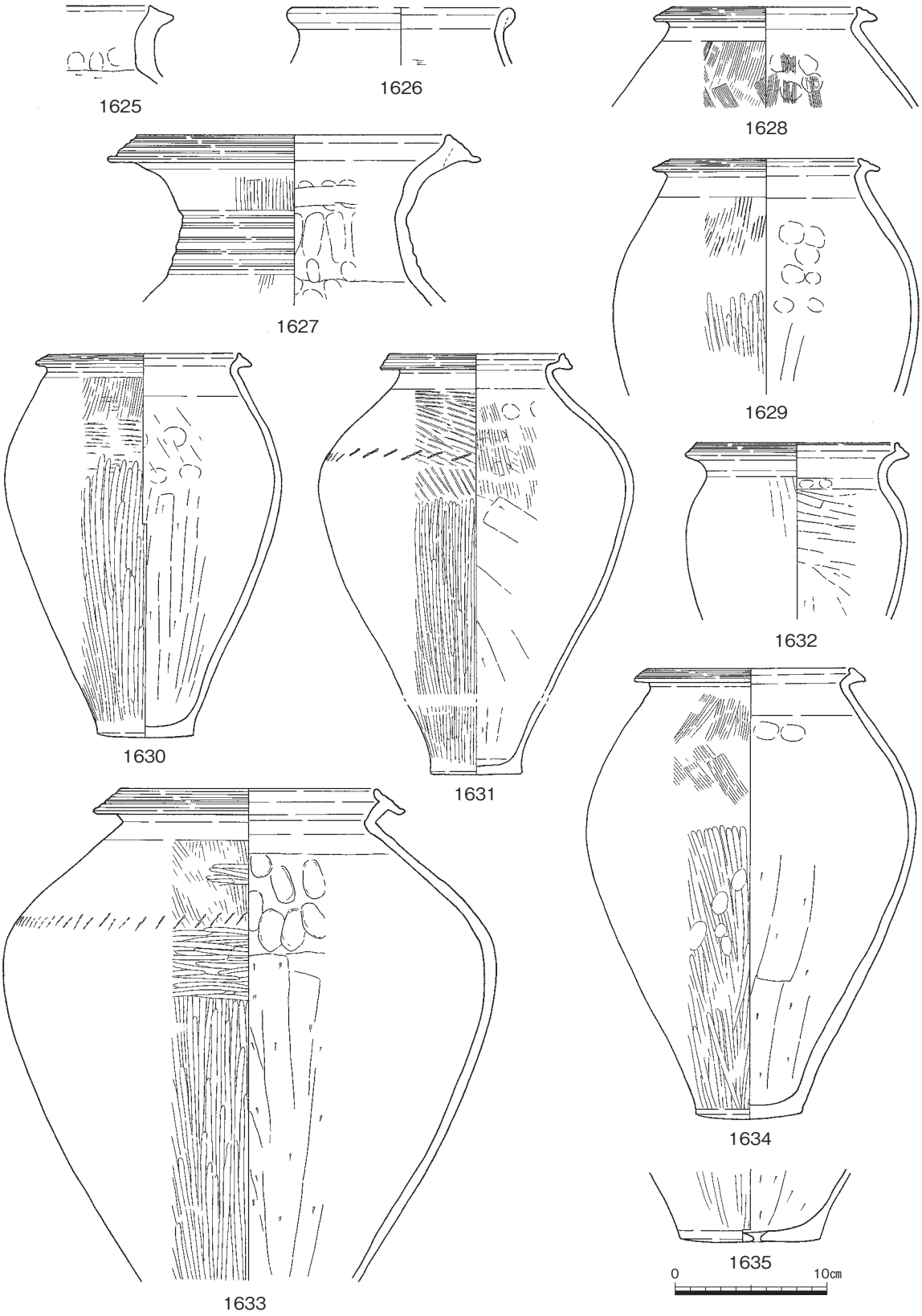
土坑152(第13・319～321図､図版56－1・89)

Ⅰ13とⅠ14の境界線上北側、土坑151の南約３ｍに位置する土坑である。古墳時代の竪穴住居62と大部分が重複しており、上部は竪穴住居により削平されている。平面形は隅丸方形で、断面形は逆台形を呈する。規模は、長軸191㎝、短軸142㎝、検出面からの深さは26㎝を測り、底面の標高は11.40ｍである。

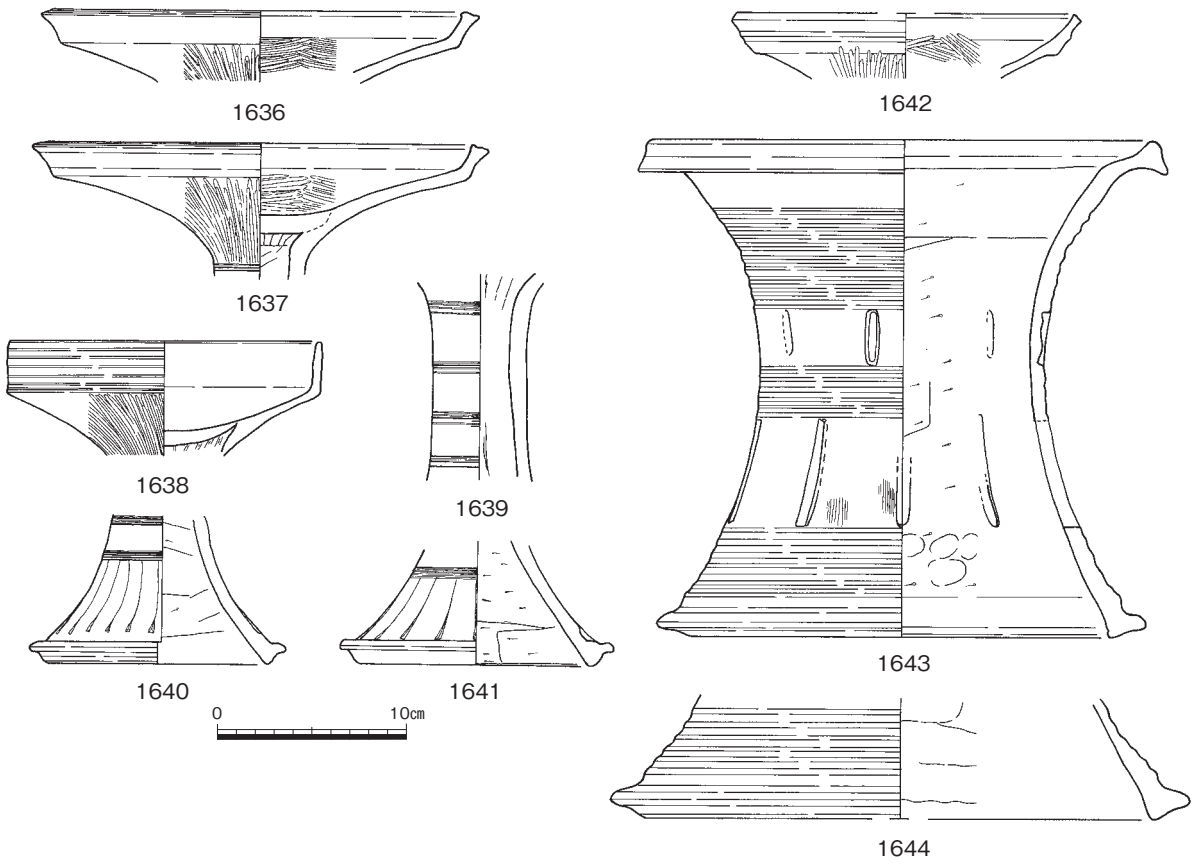
土坑中央付近では、平面95×90㎝、厚さ15㎝の範囲で、多くの土器が破片の状態で重なるように出土した。土坑の埋土は３層からなり、土器がまとまって出土したのは、最上層の第１層になる。

出土した土器は、壺**1625**～**1627**、甕**1628**～**1635**、高杯**1636**～**1641**、鉢**1642**、器台**1643**・**1644**がある。**1626**は口縁端部を折り

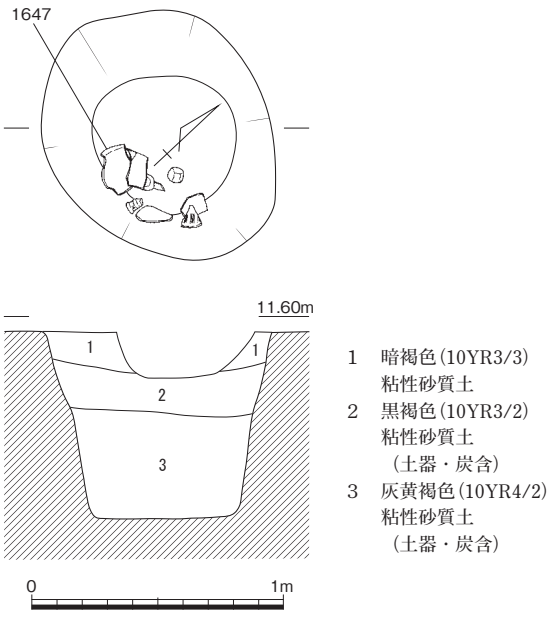
曲げて玉縁状を呈しており、粘土帯系の土器と考えられる。1635は甕の底部で焼成後に穿孔されている。土坑の時期は、これらの土器からみて、弥・後・Ⅰと考えられる。　（石田）



第320図　土坑152出土遺物①（1/4）



第321図　土坑152出土遺物②（1/4）



第322図　土坑153（1/30）

土坑153（第13・322・323図）

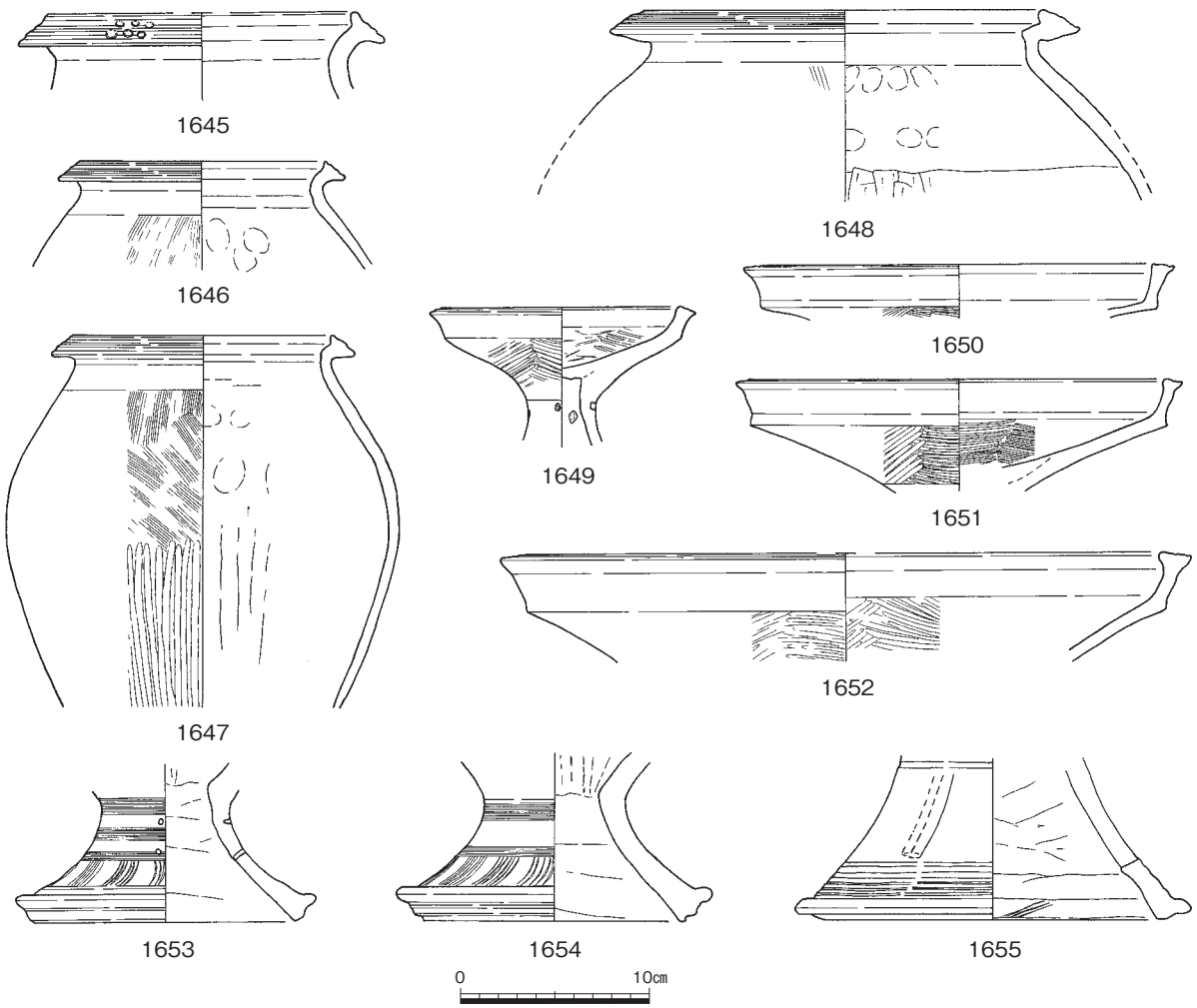
土坑152の南東約１ｍに位置する。古墳時代の竪穴住居62と重複しており、上部は竪穴住居の柱穴によって一部を削平されていた。

平面形は不整な円形、断面形は逆台形を呈している。規模は107×87㎝で、検出面からの深さは74㎝と深く、底面の標高は10.80ｍである。

土坑の埋土は３層からなり、第２層から土器片及び炭片を検出したほか、第３層において底部から約20～30㎝浮いた状態で、土器がまとまって出土した。

出土した土器の中で図示できたものに、壺**1645**、甕**1646**～**1648**、高杯**1649**～**1652**、台付鉢の脚部と考えられる**1653**・**1654**、器台**1655**がある。

土坑の時期は、これらの土器からみて、弥・後・Ⅰと考えられる。（石田）



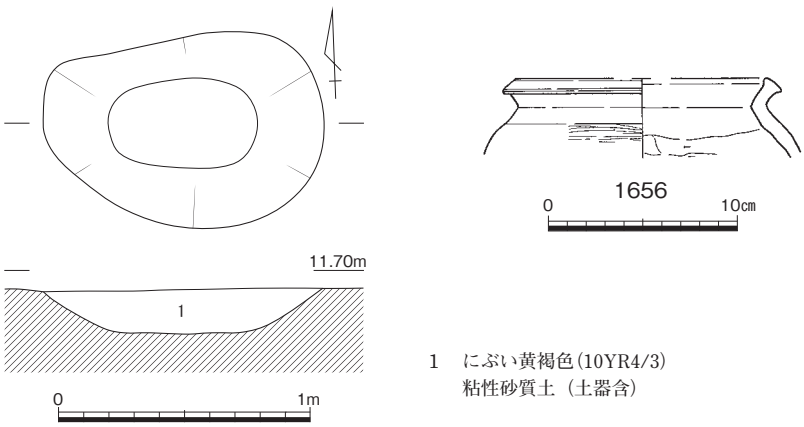
第323図　土坑153出土遺物（1/4）

土坑154（第13・324図）

Ｈ14の南西部、土坑155の北側約１ｍに位置し、たわみ２の南東部分にほぼ接する形で検出した土坑である。平面形は不整な楕円形で、断面形は皿状を呈する。

規模は長軸111㎝、短軸76㎝、検出面からの深さは18㎝を測る。底面の標高は11.45ｍであった。

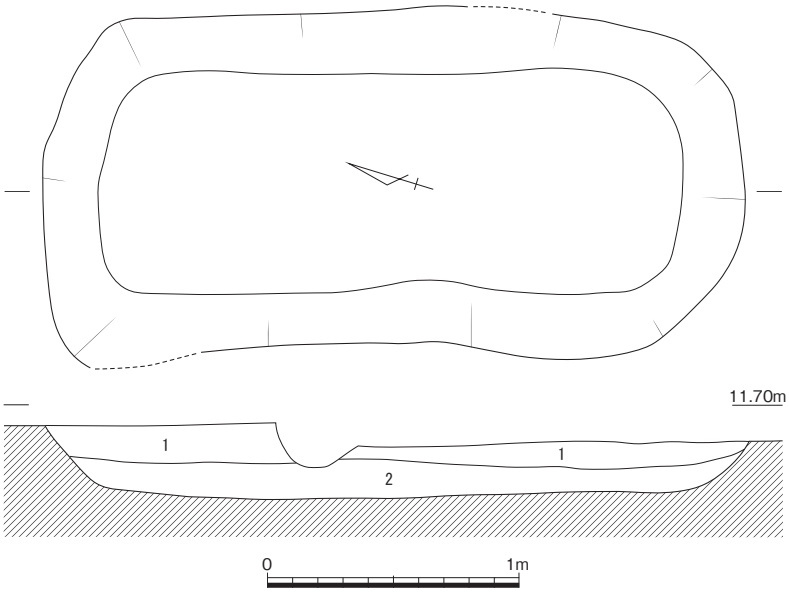
埋土は、にぶい黄褐色粘性砂質土の単一層で、土器片を含んでいた。出土した土器の中で図示できる遺物は少なく、甕の口縁部片**1656**のみである。土坑の時期は、出土した土器からみて、弥・後・Ⅰと考えられる。　（石田）



第324図　土坑154（1/30）・出土遺物（1/4）

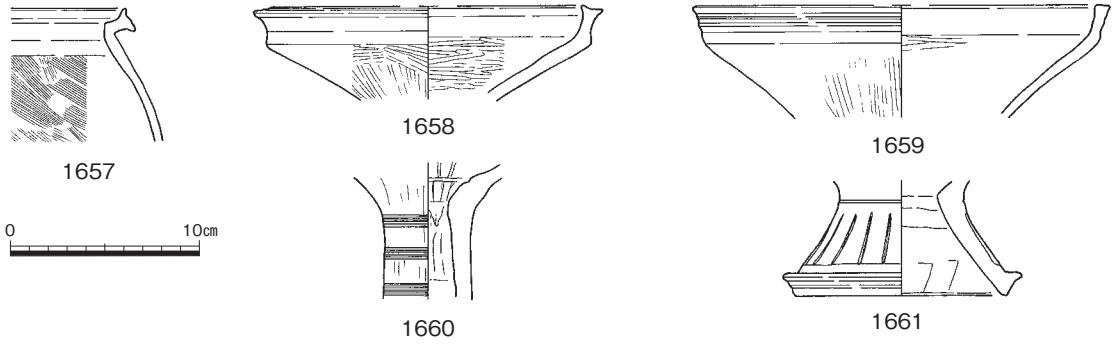
土坑155（第13・325図）

Ⅰ14の、土坑154の南に位置する。長軸279㎝、短軸131㎝の長楕円形を呈し、検出面からの深さは31㎝である。



1　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性砂質土　　2　暗褐色(10YR3/3)粘性砂質土

1657は甕で、口縁端部には３条の凹線が見られる。1658～1660は高杯である。口縁端部にはそれぞれに３条の凹線が施されているが、1659は口縁外面にも３条の凹線が見られる。1660は高杯で、５条一対の櫛描き文が３カ所に認められる。1661は台付鉢の脚部で、沈線のほか、端部には２条の凹線が認められる。土坑の時期は弥・後・Ⅰの古い段階と考えられる。　（藤井）

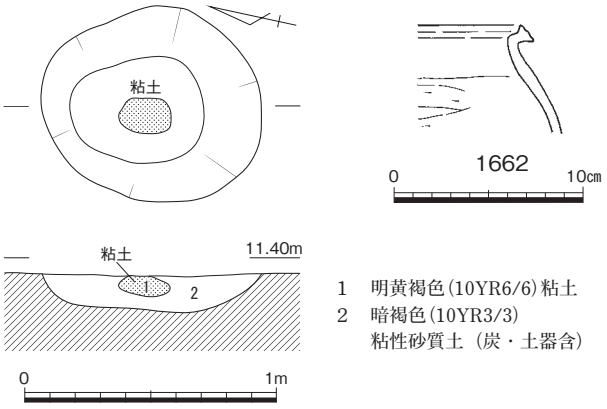


第325図　土坑155（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑156（第13・326図）

Ⅰ14の、土坑155と重なるように位置しており、土坑155を切っている。長軸87㎝、短軸78㎝の不整円形で、検出面からの深さは15㎝である。土坑の中央では、床面からやや浮いた所で長軸20㎝、短軸12㎝の明黄褐色の粘土塊を検出している。

出土遺物のうち、1662は甕口縁部の破片で、端部には３条の凹線が見られる。土坑の時期は、出土遺物から弥・後・Ⅰと考えられる。　（藤井）

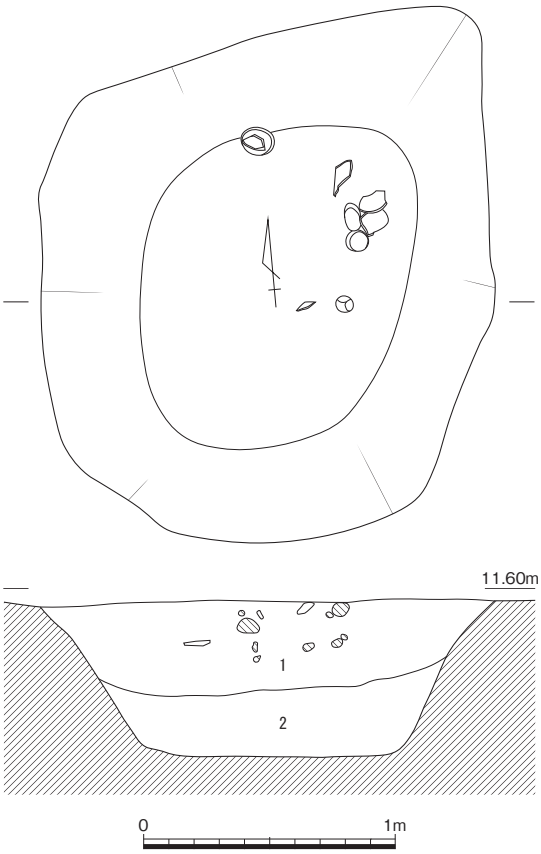


1　明黄褐色(10YR6/6)粘土
2　暗褐色(10YR3/3)
　　粘性砂質土（炭・土器含）

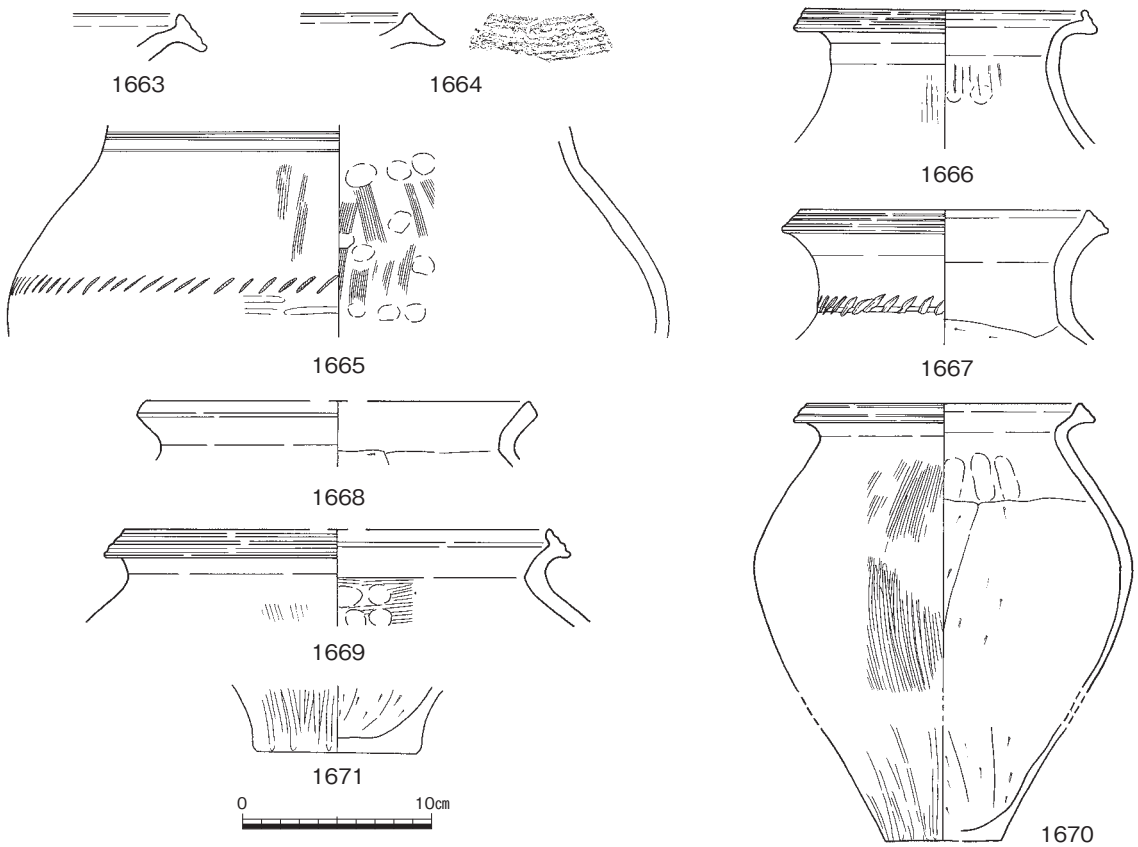
第326図　土坑156（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑157（第13・327・328図）

竪穴住居28の東側に位置する。長軸201㎝、短軸180㎝を測り、検出面からの深さは62㎝である。埋土は２層に分けられ、遺物は第１層から主に出土している。**1663**～**1667**は壺で、口縁部にはいずれも３～６条の凹線が見られる。また、**1664**には凹線の上から４～５点を３列に並べたものを一単位とする竹管文が見られ、特徴的である。**1668**～**1670**は甕で、**1669**・**1670**には口縁端部にそれぞれ３条と２条の凹線が見られる。**1672**～**1678**は高杯で、口縁端部に３条の凹線を持つものが多いが、**1678**は口縁部の立ち上がり外面に６条の凹線が施されている。**1680**～**1682**は台付鉢の脚部である。いずれも横方向の櫛描き文と、縦方向の沈線で装飾されている。**1683**～**1687**は器台で、**1683**～**1686**の口縁部に４～６条の凹線が見られる。また、**1683**には口縁直下にやや大形の竹管文が３つ見られ、**1685**の口縁端部には半裁竹管による文様が巡っている。**1687**は脚部の破片と

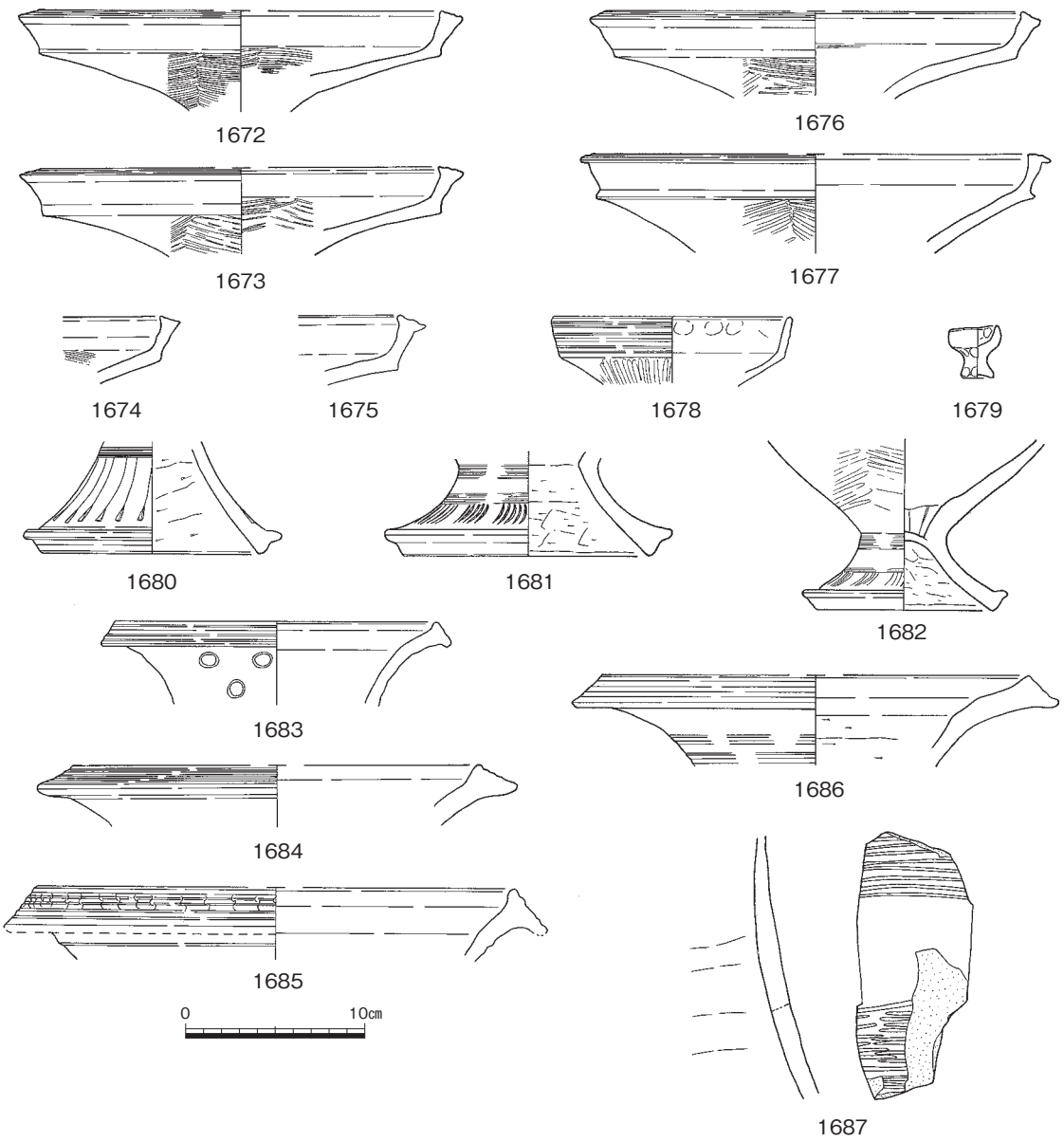


1　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性砂質土（土器・礫含）
2　灰黄褐色(10YR4/2)粘性砂質土



第327図　土坑157（1/30）・出土遺物①（1/4）

考えられるが、左右両端には透かし孔の痕跡が見られるほか、上半に８条、下半には14条の沈線が施されている。土坑の時期は、弥・後・Ⅰと考えられる。（藤井）



第328図　土坑157出土遺物②（1/4）

土坑158（第13・329図）

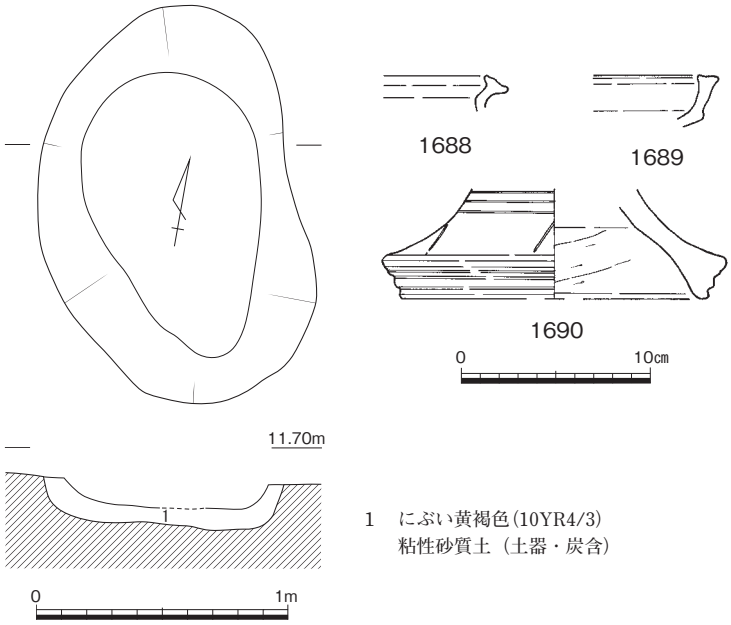
Ｈ14中央で、竪穴住居29の北側に位置する。長軸157㎝、短軸95㎝の不整楕円形を呈し、検出面からの深さは約18㎝である。出土遺物は、甕**1688**、高杯**1689**、台付鉢**1690**などがあり、時期は弥・後・Ⅰと考えられる。（藤井）

土坑159（第13・330図）

土坑158の南東に位置する。長軸74㎝、短軸70㎝の不整円形を呈し、検出面からの深さは64㎝である。埋土は２層に分けられ、主に第２層から遺物が出土している。**1691**～**1693**は壺、**1694**・**1695**は甕である。**1696**～**1698**は高杯で、口縁端部や脚部は凹線や沈線で装飾されている。**1699**、**1700**は鉢で、脚部には刺突による文様が見られる。土坑の時期は、弥・後・Ⅰと考えられる。（藤井）

土坑160（第13・331図）

土坑157の東に位置する。長軸94㎝、短軸85㎝の不整円形を呈し、検出面からの深さは25㎝である。**1701・1702**は甕で、口縁端部には４条の凹線が見られる。**1703～1707**は高杯である。口縁端部には３条の凹線が施され、脚部は櫛描き文や沈線文で装飾されている。**1708・1709**は台付鉢で、脚部には４条一単位の櫛描き文や沈線文のほか、一列３点の刺突文が施されている。**1710**は器台で、口縁部外面には７条の凹線と沈線の文様が見られるほか、脚部中程には４条の凹線や透かし孔が施されている。土坑の時期は、出土遺物から弥・後・Ⅰと考えられる。（藤井）



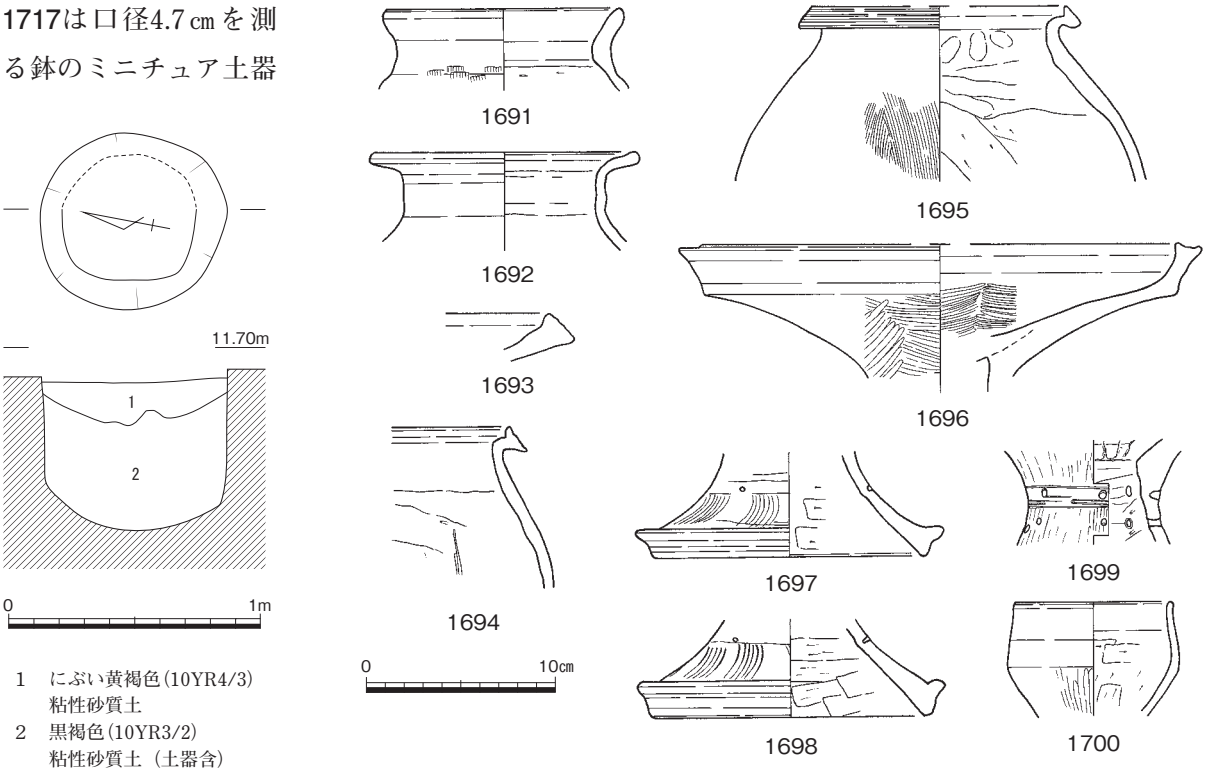
第329図　土坑158（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑161（第13・332図）

土坑160の南に位置する。長軸97㎝、短軸83㎝の不整円形を呈し、検出面からの深さは約38㎝である。

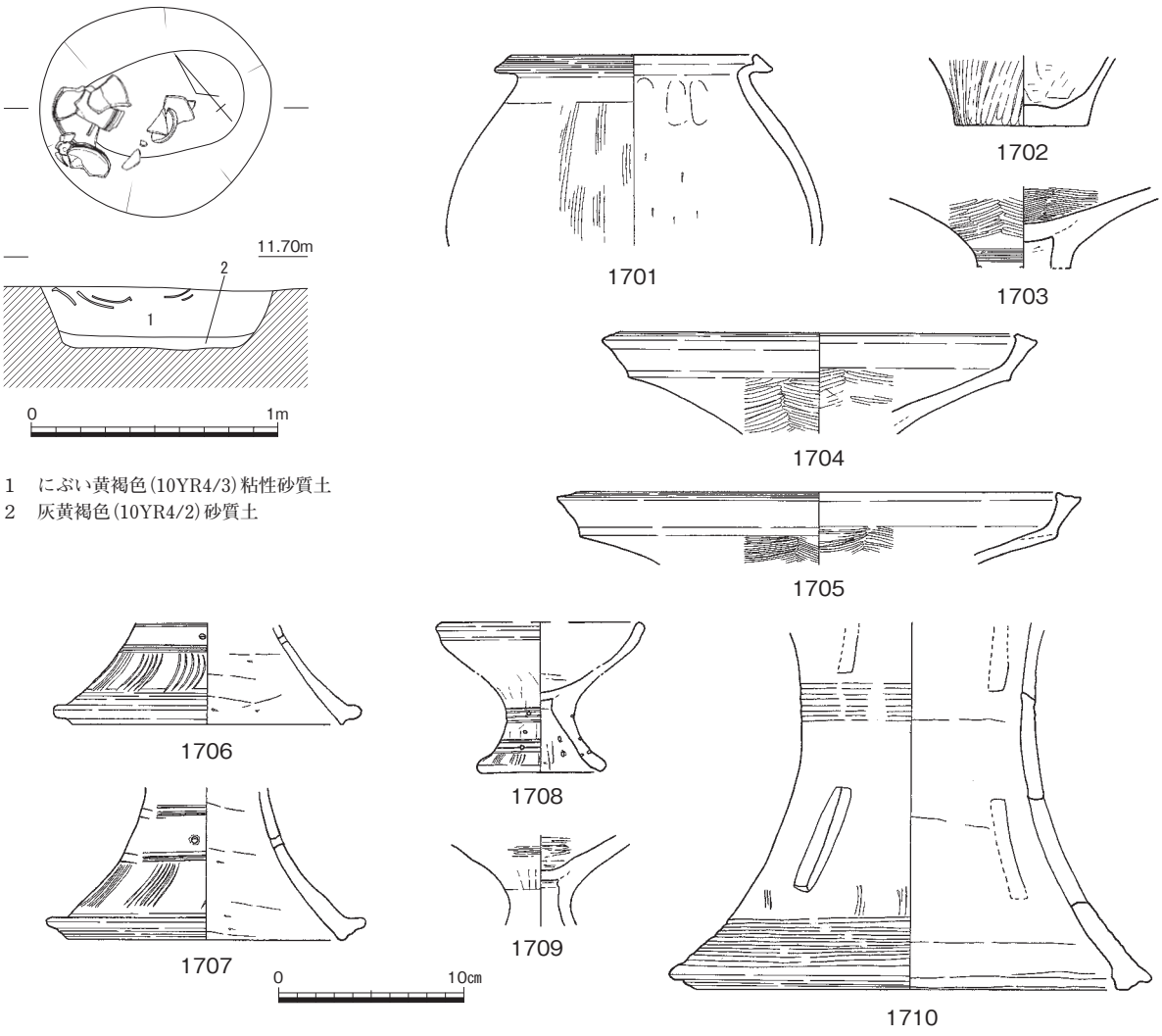
1711～1716は甕である。いずれも口縁端部に凹線等の装飾は見られず、内面のヘラケズリは頸部付近にまで達している。

1717は口径4.7㎝を測る鉢のミニチュア土器



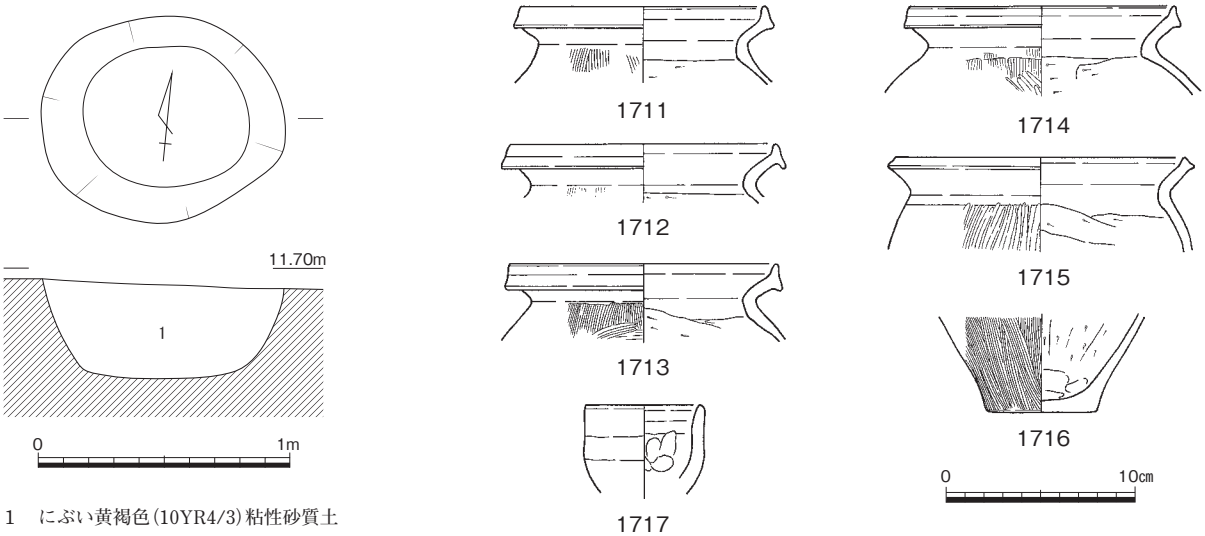
第330図　土坑159（1/30）・出土遺物（1/4）

である。土坑の時期は、出土遺物から弥・後・Ⅱと考えられる。　（藤井）



1　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性砂質土
2　灰黄褐色(10YR4/2)砂質土

第331図　土坑160（1/30）・出土遺物（1/4）



1　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性砂質土

第332図　土坑161（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑162（第13・333図）

Ｈ14とＩ14の境界線上に位置している。上部を古墳時代の竪穴住居65に切られていた。平面形は不整方形、断面形は皿状を呈する。規模は長軸233㎝、短軸128㎝、検出面からの深さは13㎝と浅い。

埋土から焼土片とともに土器の細片が出土している。図示できたのは壺の口縁部片**1718**のみで、土坑の時期は弥・後・Ｉと考えられる。（石田）

土坑163（第13・334・335図、図版56－２・89）

Ｈ15の南西に位置し、東側の一部を溝11に切られている。平面形は隅丸方形、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸が180㎝以上、短軸が143㎝、検出面からの深さは24㎝を測り、底面の標高は11.40ｍである。底部はほぼ平坦で、土坑の西端中央付近には、20×10㎝程度の石が台石状に置かれ、すぐ脇では小形の甕**1721**を検出した。土坑北側では甕**1722**が、南側では壺**1719**と甕**1723**が、いずれも底面の直上で、上部から押し潰されたような状態で出土した。高杯**1724**については底面から25㎝程度浮いた状態で検出している。そのほか、甕**1720**、台付鉢**1725**が出土している。埋葬遺構の可能性も考えたが、木棺等の痕跡は確認しておらず、土坑の性格については不明である。出土土器からみて、時期は弥・後・Ｉと考えられる。（石田）

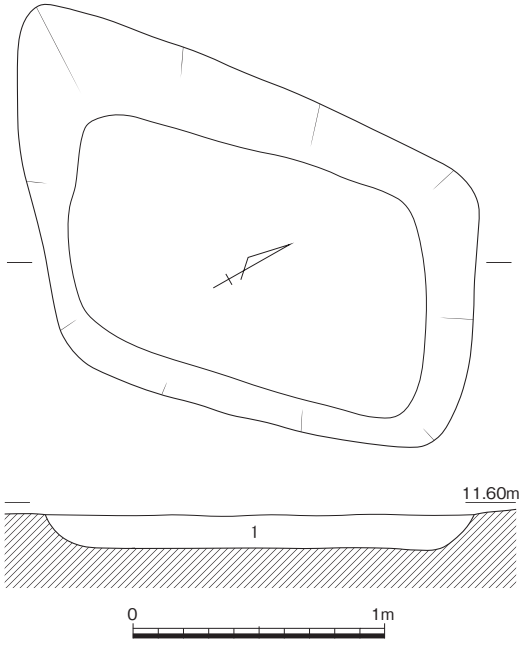
土坑164（第13・336図）

Ｉ14・15の北側境界線上に位置し、古墳時代の竪穴住居65と重複している。上部を竪穴住居により削平されていた。平面形は不整円形、断面形は皿状を呈している。規模は長軸175㎝、短軸140㎝、検出面からの深さは23㎝を測る。

埋土は単層で、甕**1726**と高杯**1727**が出土している。これらの土器からみて、時期は弥・後・Ｉと考えられる。（石田）

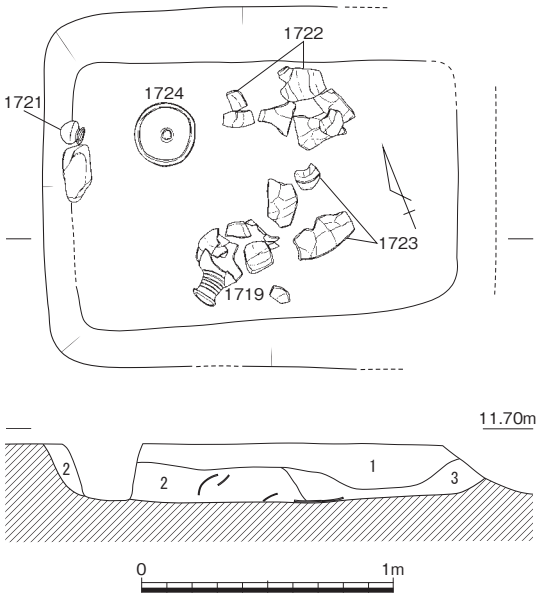
土坑165（第13・337図、図版115）

Ｈ15の中央北端に位置する。南東部については、後世に大きく削平されていたため、全容については不明であるが、平面形は長方形、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸272㎝、短軸は120㎝



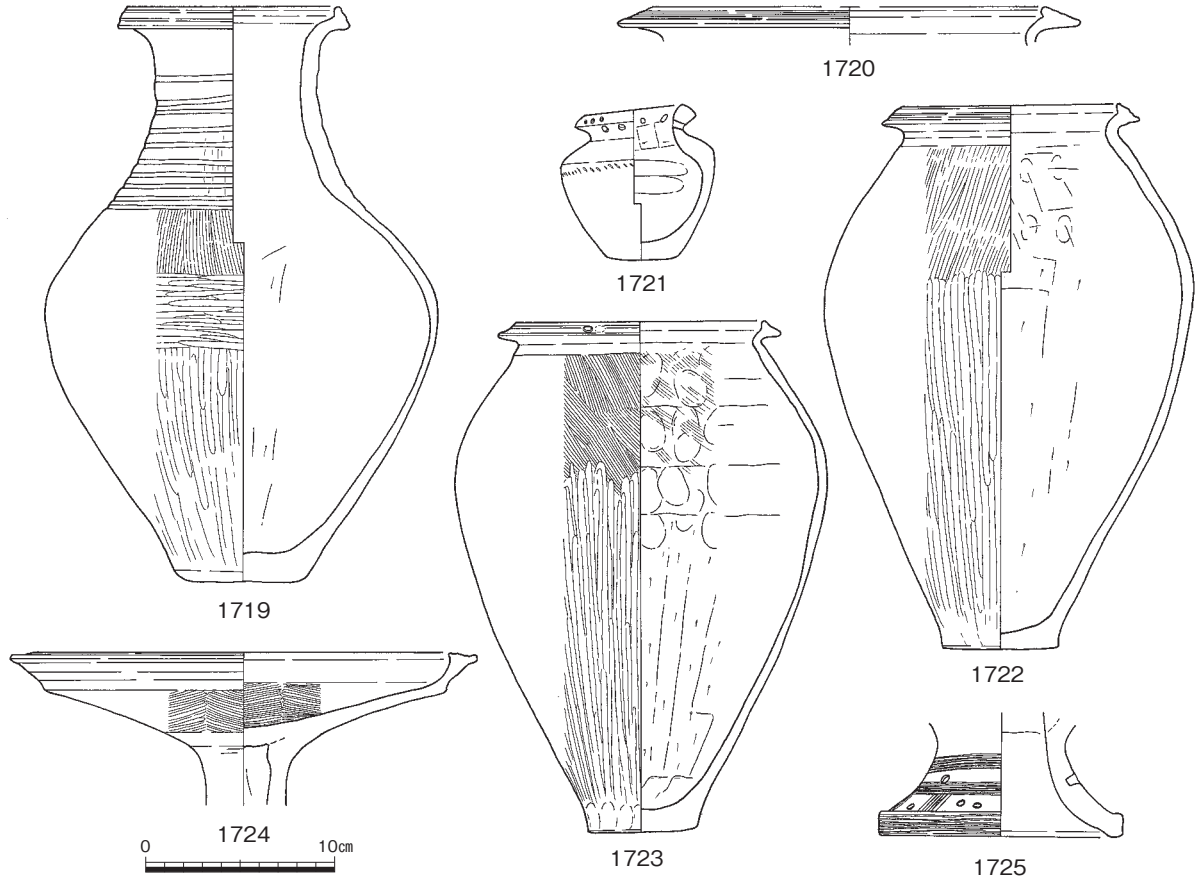
1　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性砂質土
（土器片・焼土片含）

第333図　土坑162（1/30）・出土遺物（1/4）

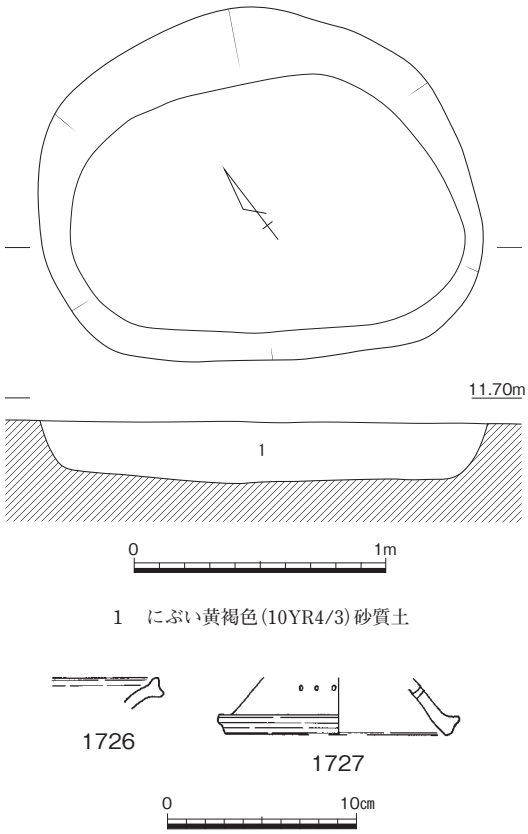


1　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性砂質土（土器片混）
2　灰黄褐色(10YR4/2)粘性砂質土（炭片・土器片混）
3　にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質

第334図　土坑163（1/30）



第335図　土坑163出土遺物（1/4）



第336図　土坑164（1/30）・出土遺物（1/4）

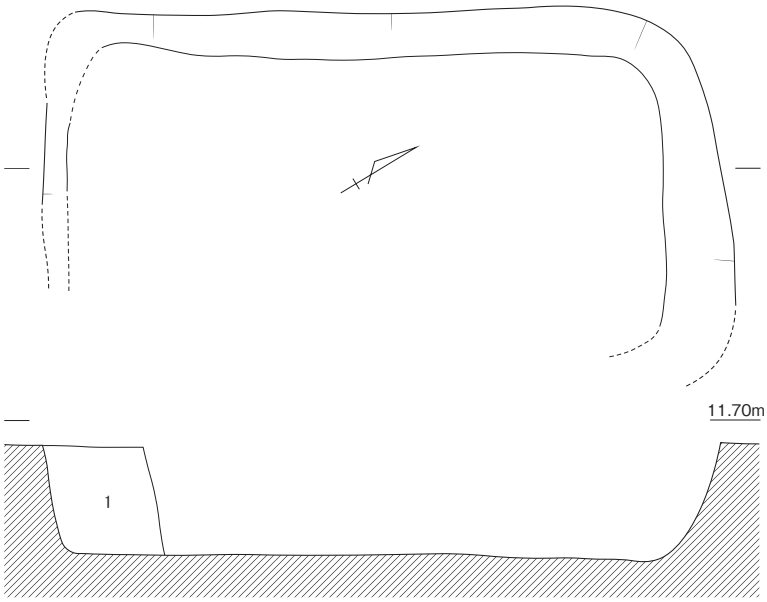
以上で、検出面からの深さは43㎝を測る。埋土には土器片が多く含まれていた。出土遺物には、壺**1728**～**1731**、甕**1732**、高杯**1733**、台付鉢**1734**、鉢**1735**、器台**1736**のほか、分銅形土製品**C50**がある。古い様相を示す土器もあり、混入の可能性もあるが、最終的に土坑は、弥・後・Ⅲを中心とする時期に埋没したと考えられる。　（石田）

土坑166（第13・338図）

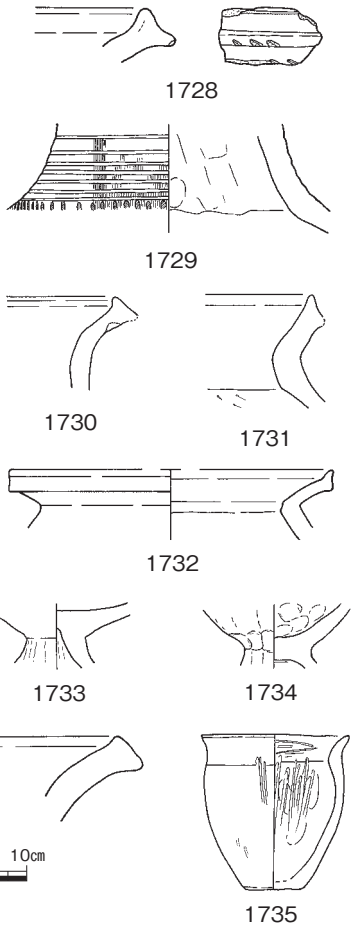
Ｈ15とＩ15の東側境界線付近に位置し、東側は土坑167の一部を切って接している。

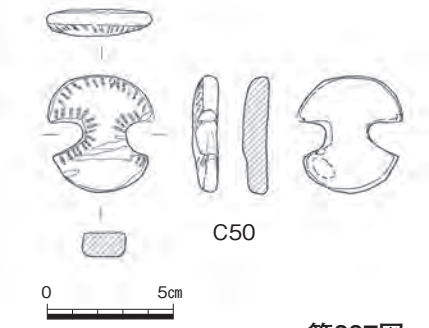
平面形は不整形で、断面形は皿状を呈する。規模は長軸177㎝、短軸159㎝、検出面からの深さは21㎝を測り、底面の標高は11.47ｍである。

埋土から土器片及び炭片が出土している。出土した土器は、壺**1737**、甕**1738**、高杯**1739**・**1740**がある。**1737**・**1739**は古い様相を示すため、混入の可能性がある。土坑は、弥・後・Ⅲを中心とする時期に埋没したと考えられる。　（石田）

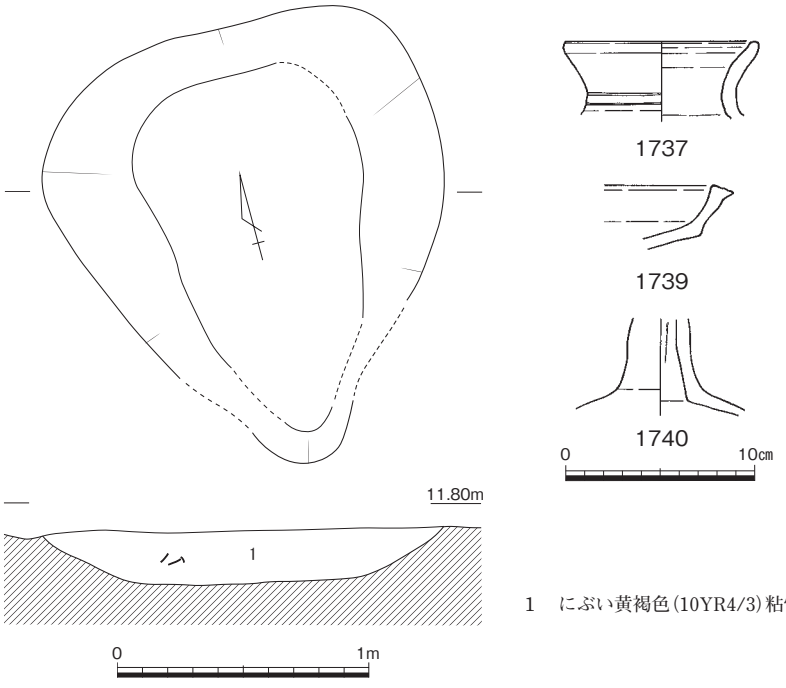


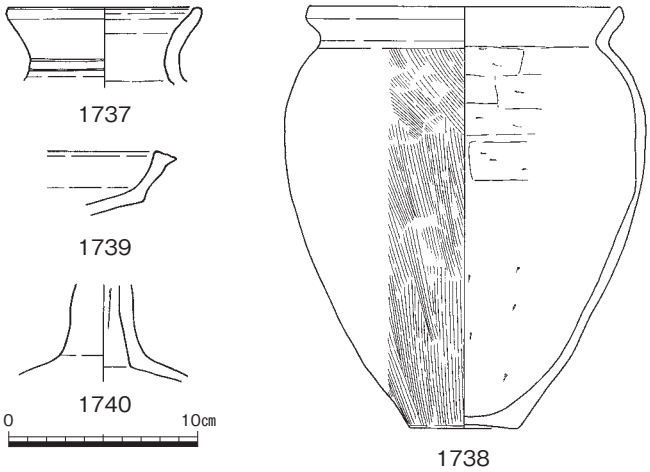
1　灰黄褐色(10YR4/2)
　粘性砂質土（土器片含）





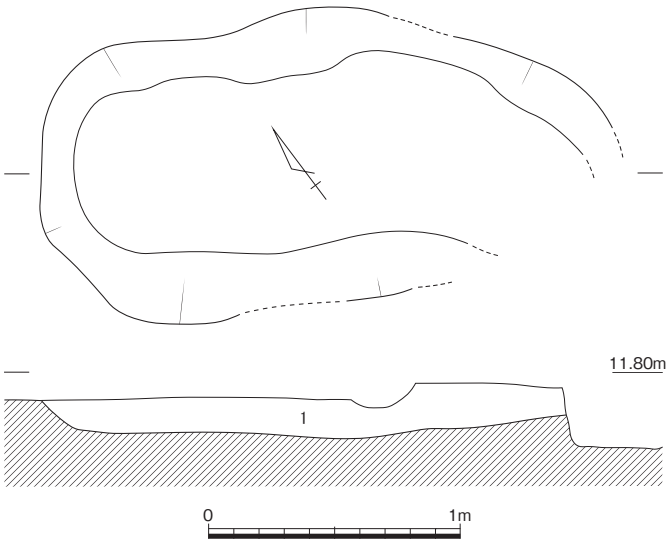
第337図　土坑165（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）





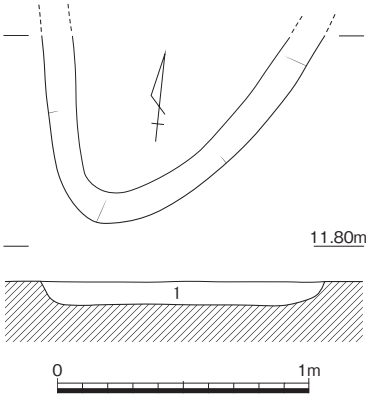
1　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性砂質土（土器・炭含）

第338図　土坑166（1/30）・出土遺物（1/4）



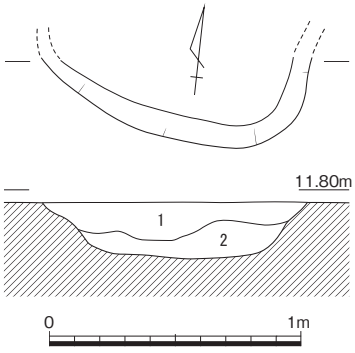
1　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性砂質土（土器・炭含）

第339図　土坑167（1/30）



1　灰黄褐色(10YR6/2)シルト～粗砂（土器含）

第340図　土坑168（1/30）



1　黒褐色(10YR2/2)粘質土（土器含）
2　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性砂質土

土坑167（第13・339図）

土坑166の東側に接して位置する土坑である。平面形は不整な楕円形、断面形は皿状を呈する。規模は長軸226㎝以上、短軸115㎝、検出面からの深さは17㎝を測る。埋土から土器片及び炭片が出土している。出土した土器は細片のみで図示できるものはなかったが、時期は弥・後・Ⅰ～Ⅲの範疇と考えられる。（石田）

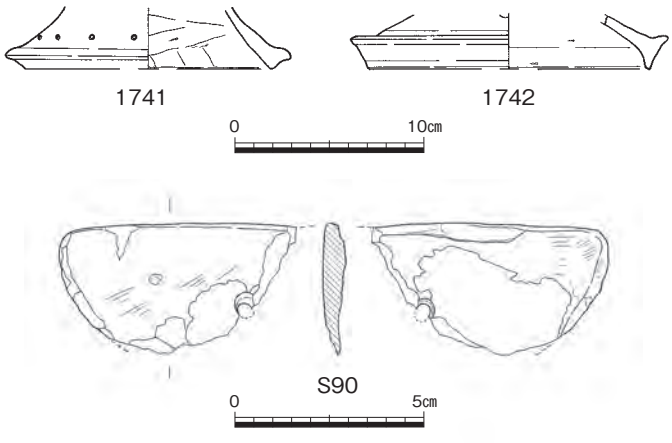
土坑168（第13・340図）

Ⅰ15東側で、土坑169・竪穴住居31の西側に位置する。平面形は楕円形を呈するが、北側は現在の用水路があるため調査できなかった。埋土は基盤層より灰色味が強い色調で、均質である。

遺物は小片がごく少量で、図化はできなかった。周囲の遺構と出土遺物から弥・後・Ⅰと判断される。　（氏平）

土坑169（第13・341図、図版108）

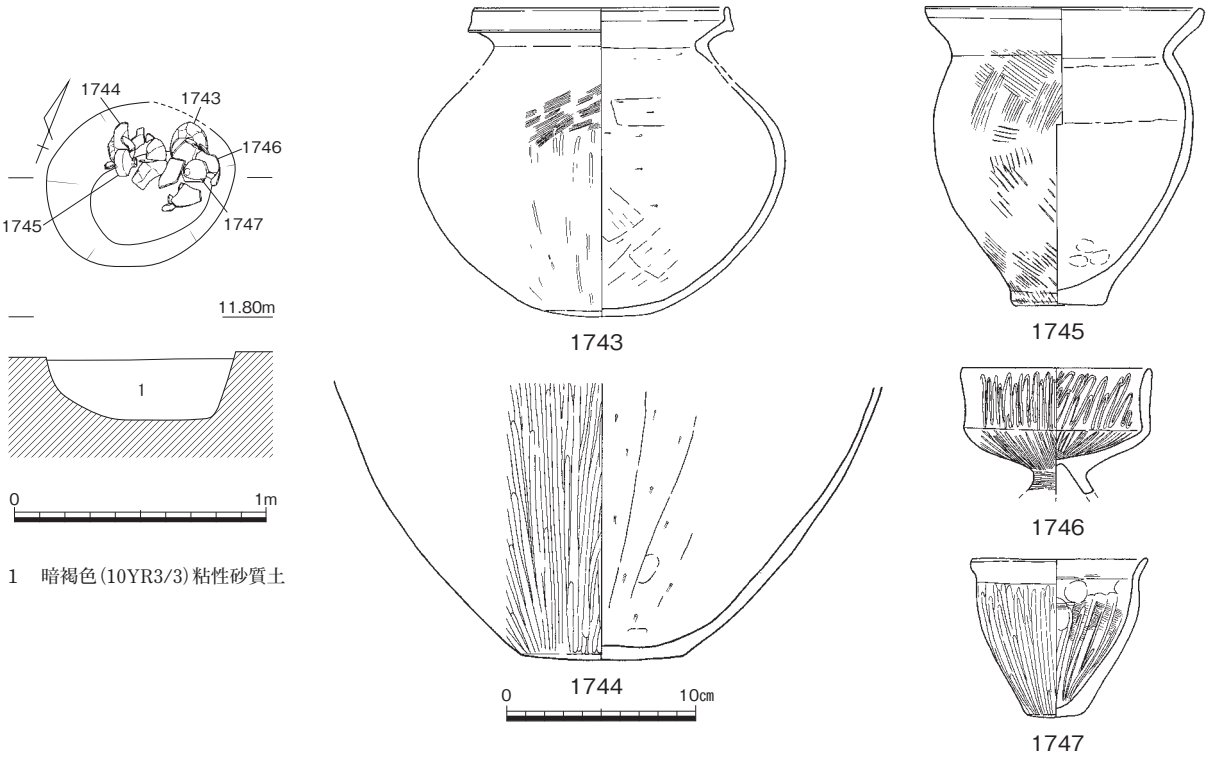
Ⅰ16西端で、竪穴住居31の西側に位置する。先後関係があり、竪穴住居31より新しい。平面形は楕円形を呈するが、北側は現在の用水路のため調査できなかった。埋土は上層が基盤層とはっきり区別できる黒褐色土、下層は基盤層より若干灰色味の強い土でいずれも均質である。遺物は少量で小片である。図示できた土器はいずれも５㎝大の高杯脚裾部で、拡張する端部が丸い**1741**と三角形状の**1742**がある。**S90**は磨製石包丁の破片で、表面全体に光沢が見られる。出土遺物から、弥・後・Ⅰの時期に埋没したと言えよう。　（氏平）



第341図　土坑169（1/30）・出土遺物（1/4・1/2）

土坑170（第13・342図、図版89）

Ｈ15北東角で、竪穴住居30の南に位置する。長軸74㎝、短軸65㎝の不整円形を呈し、検出面からの深さは25㎝である。土坑内からは土器がまとまって出土している。**1743**・**1744**は壺である。**1743**は二重口縁を持つが、文様などの装飾は見られない。**1744**は外面に広く煤が付着しており、甕の可能性もある。**1745**は器高15.8㎝の甕で、外面には全面にタタキ目が見られる。**1746**は台付鉢で、口縁部立ち上がりの内外面には蛇行するヘラミガキが観察できる。**1747**は小型の鉢で、内外面にヘラミガキが認められる。土坑の時期は、出土遺物から弥・後・Ⅳと考えられる。（藤井）



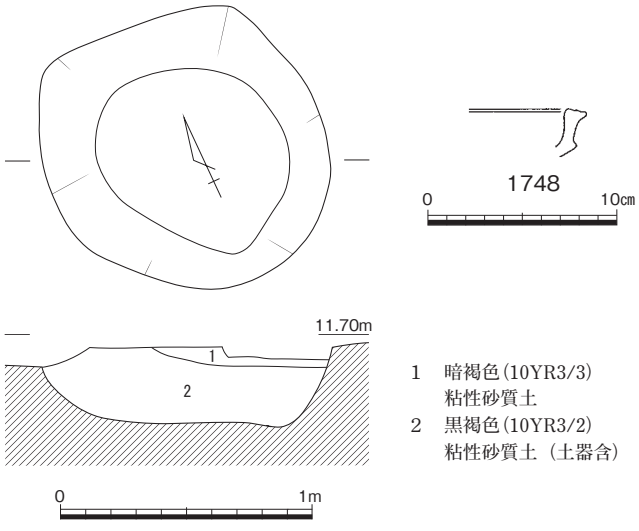
第342図　土坑170（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑171（第13・343図）

Ｇ16とＨ16境の西端に位置する。竪穴住居30の南東隅と接しており、竪穴住居の一部を切った状態で検出した。

平面形は不整な円形、断面形は袋状を呈する。規模は長軸が114㎝、短軸が112㎝、検出面からの深さは30㎝を測り、底面の標高は11.35ｍである。埋土は上下２層で、下層から土器片が出土した。土器は細片のみで、図示できたものに高杯**1748**がある。

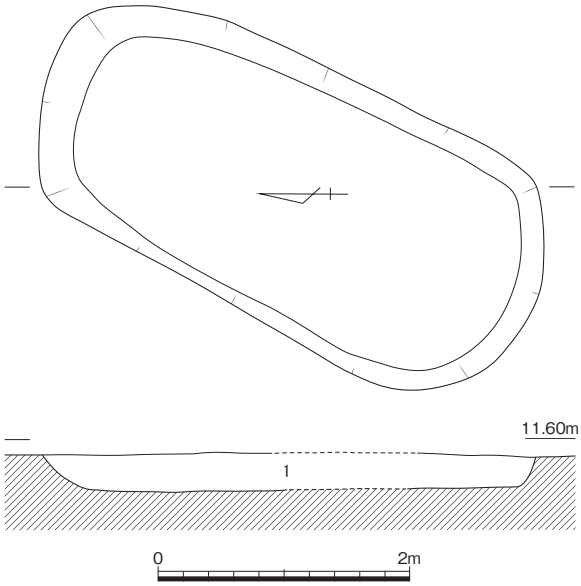
土坑の時期は、この土器からみて弥・後・Ⅰと考えられる。（石田）



第343図　土坑171（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑172（第13・344図）

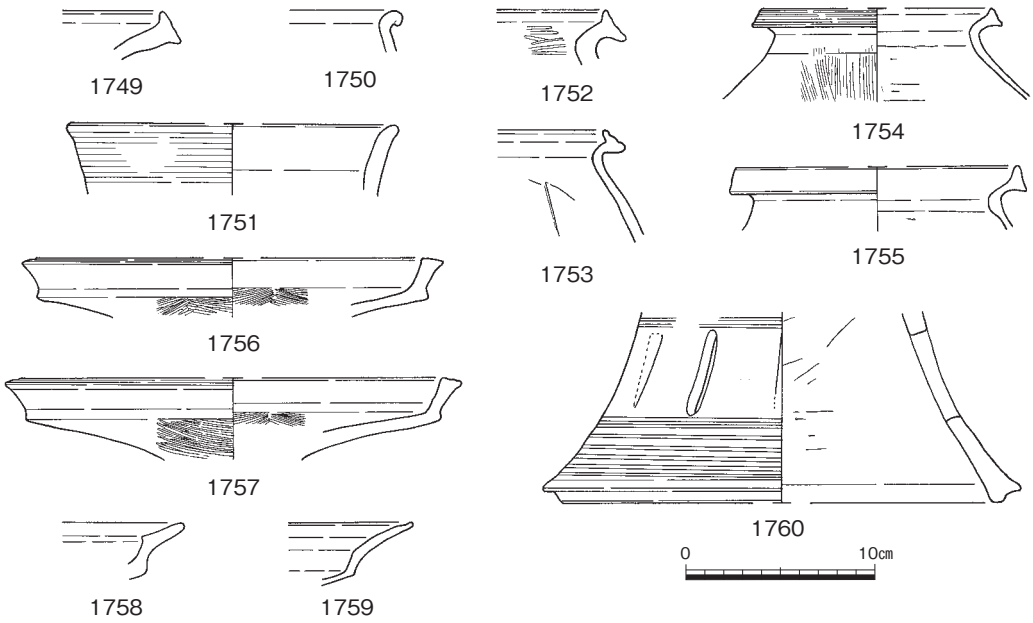
H15・16の境界線上、土坑171の南2.6ｍに位置している。古墳時代の竪穴住居69と大部分が重複しており、上部は竪穴住居に削平されていた。



1　灰黄褐色(10YR4/2)粘性砂質土（土器片多含）

平面形は長楕円形、断面形は皿状を呈し、規模は長軸427㎝、短軸200㎝、検出面からの深さは30㎝を測り、底面の標高は11.29ｍである。埋土は単層で土器片を多く含んでいた。

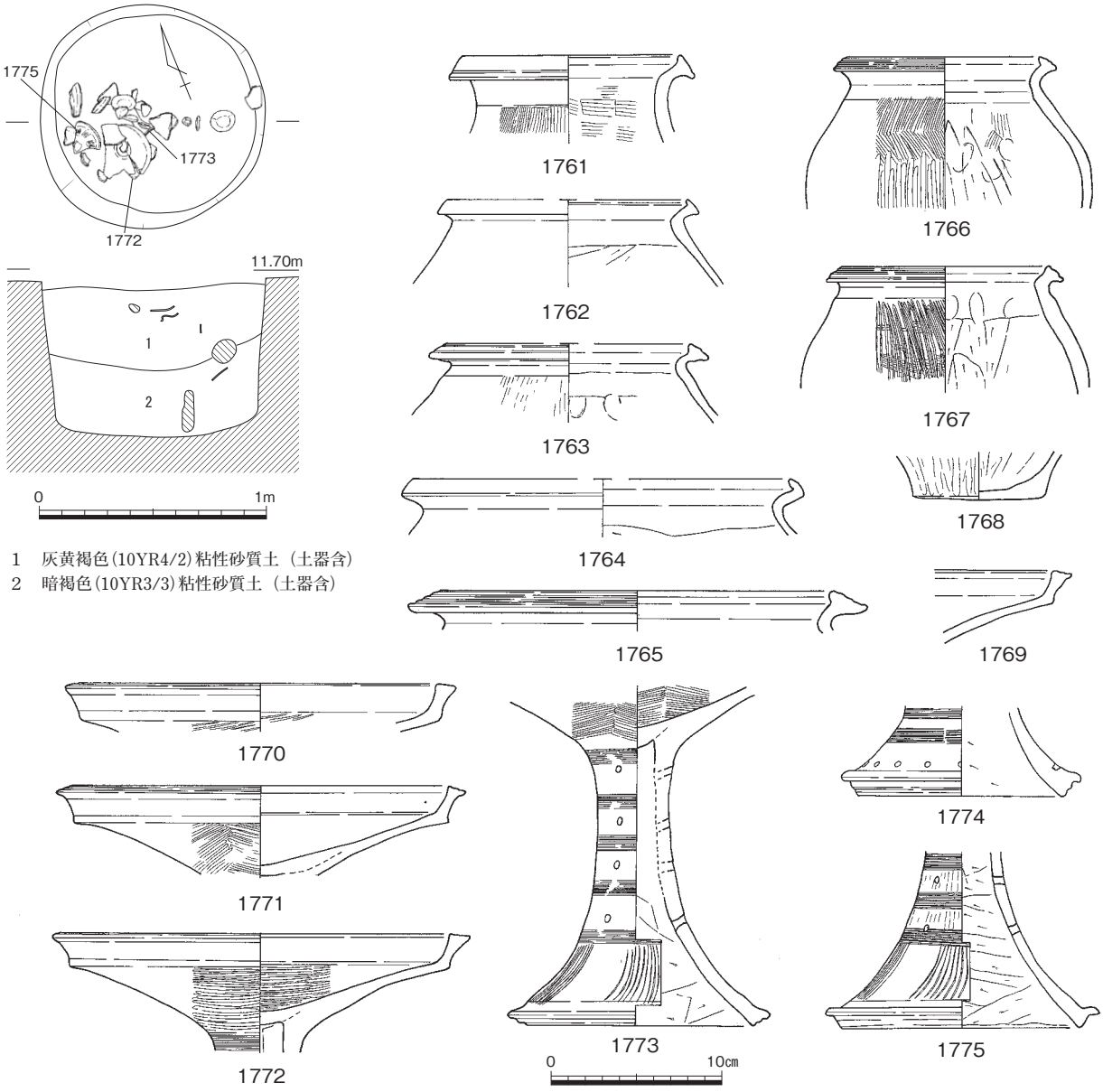
出土した土器は細片が多く、図示できたものに壺**1749**～**1751**、甕**1752**～**1755**、高杯**1756**～**1759**、器台**1760**がある。**1750**は口縁端部を折り曲げて玉縁状を呈しており、粘土帯系の土器と考えられる。**1758**・**1759**は口縁端部が段を持って外側へ拡張しており、新しい様相を持つ。これらの土器からみて、土坑の時期は弥・後・Ⅰ～Ⅱと考えられる。（石田）



第344図　土坑172（1/60）・出土遺物（1/4）

土坑173（第13・345図、図版56－３）

H16の北西角で、土坑172の北東に位置する。直径約１ｍの円形を呈し、検出面からの深さは68㎝である。埋土は２層に分けられ、第１層を中心に土器がまとまって出土している。**1761**は壺の口縁部で、端部は摩滅が著しいが、１条の凹線が確認できる。**1762**～**1768**は甕である。口縁端部には基本的に２～５条の凹線が施されているが、**1762**は外面の剥落が著しく文様等は不明。**1764**は口縁部内外面をナデで仕上げており、無文である。**1769**～**1772**は高杯の口縁部である。端部にはいずれも３条の凹線が施されていて、内外面はヘラミガキで丁寧に仕上げられている。**1773**～**1775**は高杯の脚部であ



第345図　土坑173（1/30）・出土遺物（1/4）

る。それぞれ櫛描き文、沈線文、刺突文で装飾されており、端部には２条の凹線を入れるもののほか、**1775**のように強いナデで仕上げるものがある。土坑の時期は、弥・後・Ⅰと考えられる。　（藤井）

土坑174（第13・346図）

土坑173の南に位置する。検出面からの深さは20㎝を測るが、調査では遺構の東端を検出したのみで、全体の形状や大きさは不明である。土坑からは土器などの時期をはかる遺物は出土していないが、検出レベルや埋土の状況から考えて、土坑の時期は弥生時代後期と考えられる。　（藤井）

土坑175（第13・347図）

H16・Ⅰ16に跨がり、竪穴住居40の北西に位置する。長軸186㎝、短軸152㎝の不整円形を呈し、検出面からの深さは21㎝である。**1776**は直口壺の口縁部で、口縁端部に４条、頸部に３条の凹線が認められる。**1777**～**1781**は甕である。**1777**・**1779**・**1781**には拡張された口縁端部に１～４条の凹線が施されている。**1778**は口径6.8㎝を測る小形の甕で、口縁端部に２条の凹線と、胴部には刻み目が認め

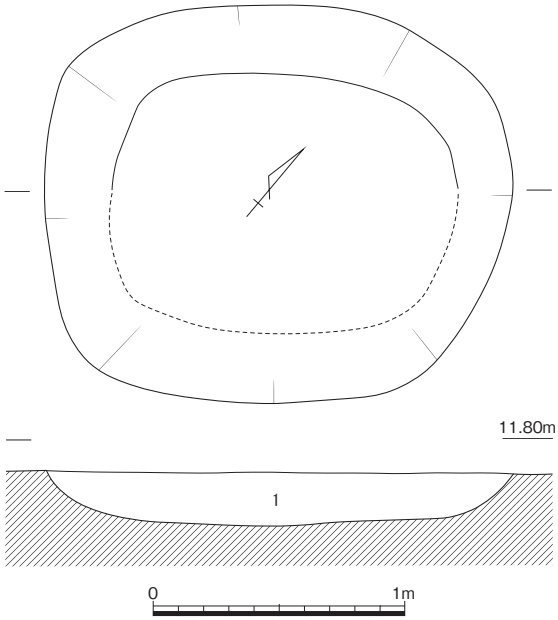
られる。1782～1785は高杯の口縁部である。1783・1784には口縁端部に２～３条の凹線が認められるが、1782は無文である。1785は口縁部を横方向に拡張させているが、文様は認められない。土坑の時期は、弥・後・Ⅰと考えられる。　（藤井）

土坑176（第13・348図、図版57－１）

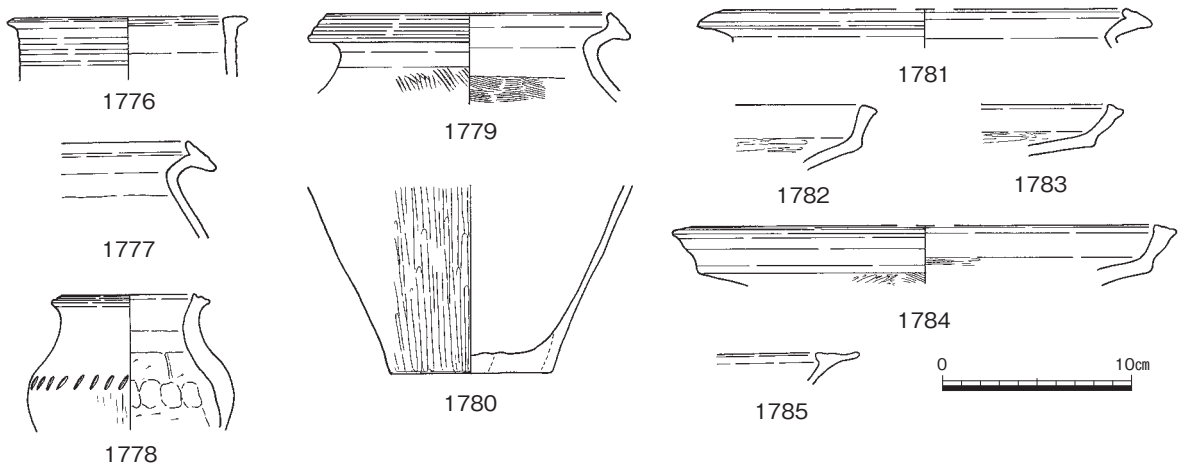
Ｇ16南で、竪穴住居32の南西に位置する。調査の都合上、南西の一角が確認できていないものの、平面形は長楕円形を呈し、長軸199㎝を測る。断面形は逆台形を呈し、検出面から底面までの深さは35㎝。埋土には若干の炭や約５㎝大の礫が含まれていた。比較的多くの土器が出土しており、特に土坑西側に集中している。ただし、ほとんどの土器は埋土中から出土し、唯一

1　暗褐色(10YR3/3)粘性砂質土

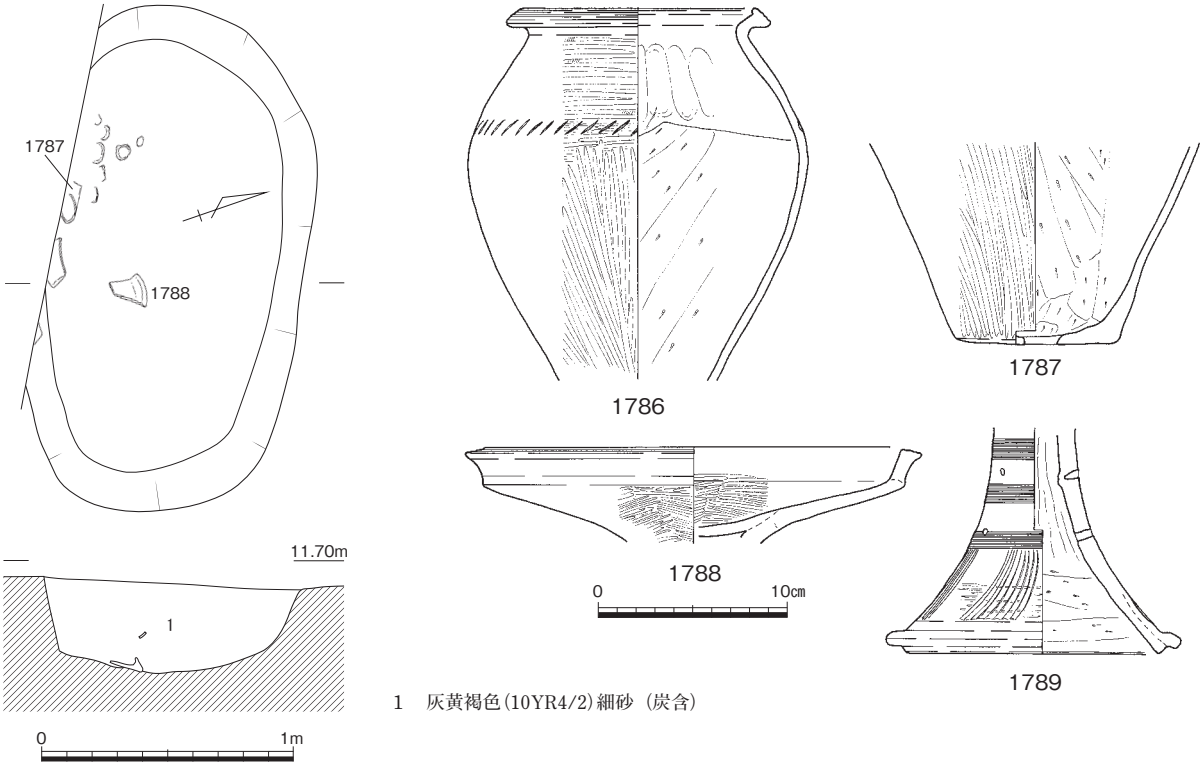
第346図　土坑174（1/30）



1　暗褐色(10YR3/3)シルト質細砂



第347図　土坑175（1/30）・出土遺物（1/4）

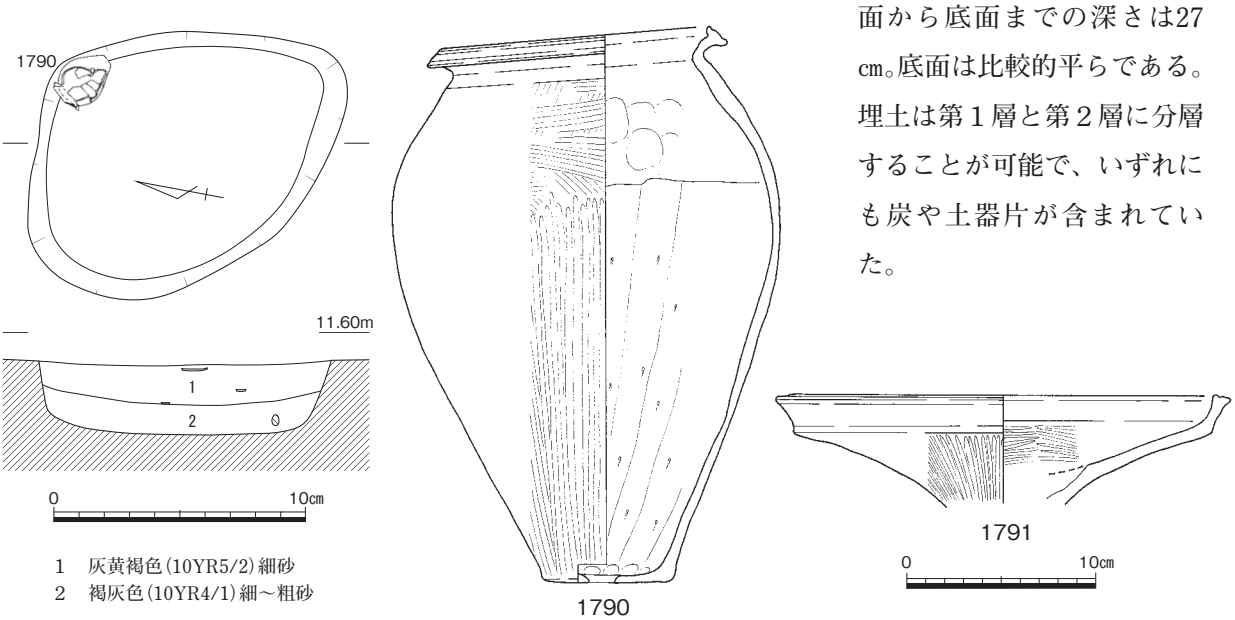


第348図　土坑176（1/30）・出土遺物（1/4）

1788高杯の杯部片のみ底面直上で確認した。1786甕は口縁端部がやや丸みを帯び、上面には凹線が巡る。1787は甕の底部。1788・1789は高杯。土器の特徴から、弥・後・Ⅰの時期である。　（松尾）

土坑177（第13・349図、図版89）

G17西で、竪穴住居36の西に位置する。平面形は不整円形を呈し、長軸116㎝、短軸102㎝を測る。断面形は逆台形を呈し、検出面から底面までの深さは27㎝。底面は比較的平らである。埋土は第１層と第２層に分層することが可能で、いずれにも炭や土器片が含まれていた。



第349図　土坑177（1/30）・出土遺物（1/4）

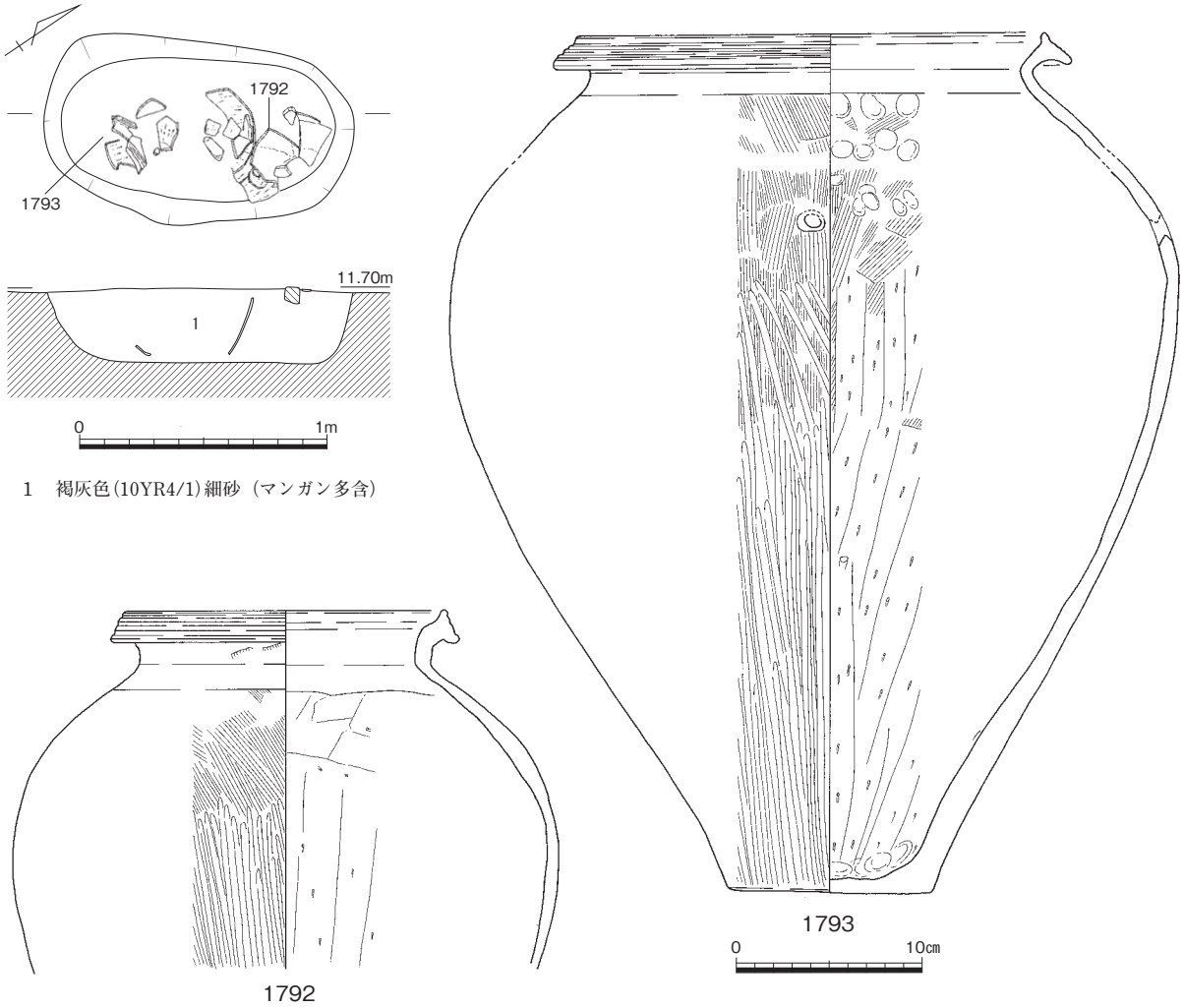
第349図に図示している土器は甕**1790**で、土坑北東の法面にへばりつくように出土した。埋土では第１層と第２層の間に位置する。甕**1790**はほぼ完存しており、口縁端部は上下に拡張し、上面には凹線が巡る。**1791**は短く開く端部上に凹線が巡る高杯。土器の特徴から、弥・後・Ⅰである。　（松尾）

土坑178（第13・350図、図版57－２、写真28）

Ｇ16・17の境で、土坑177と竪穴住居32のほぼ中間に位置する。平面形は長楕円形を呈し、長軸123㎝、短軸73㎝を測る。断面形は逆台形を呈し、検出面から底面までの深さは30㎝。底面は水平である。

遺構検出時から比較的大きな土器片を確認している。埋土上面において出土したのが甕**1792**。上下にやや拡張した口縁端部は分厚く、上面には凹線が巡る。体部外面はタテハケの後に縦方向のヘラミガキを施す。体部内面は頸部直下から始まる横あるいは縦方向のヘラケズリ。甕**1793**は土坑底面近くからの出土。口縁端部は上下に大きく拡張し、上面には凹線が巡る。肩部には焼成後に穿孔したと思われる直径1.5㎝程度の円孔が見られる。弥・後・Ⅰの時期であろう。　（松尾）

写真28　土坑178土器出土状況（北西から）

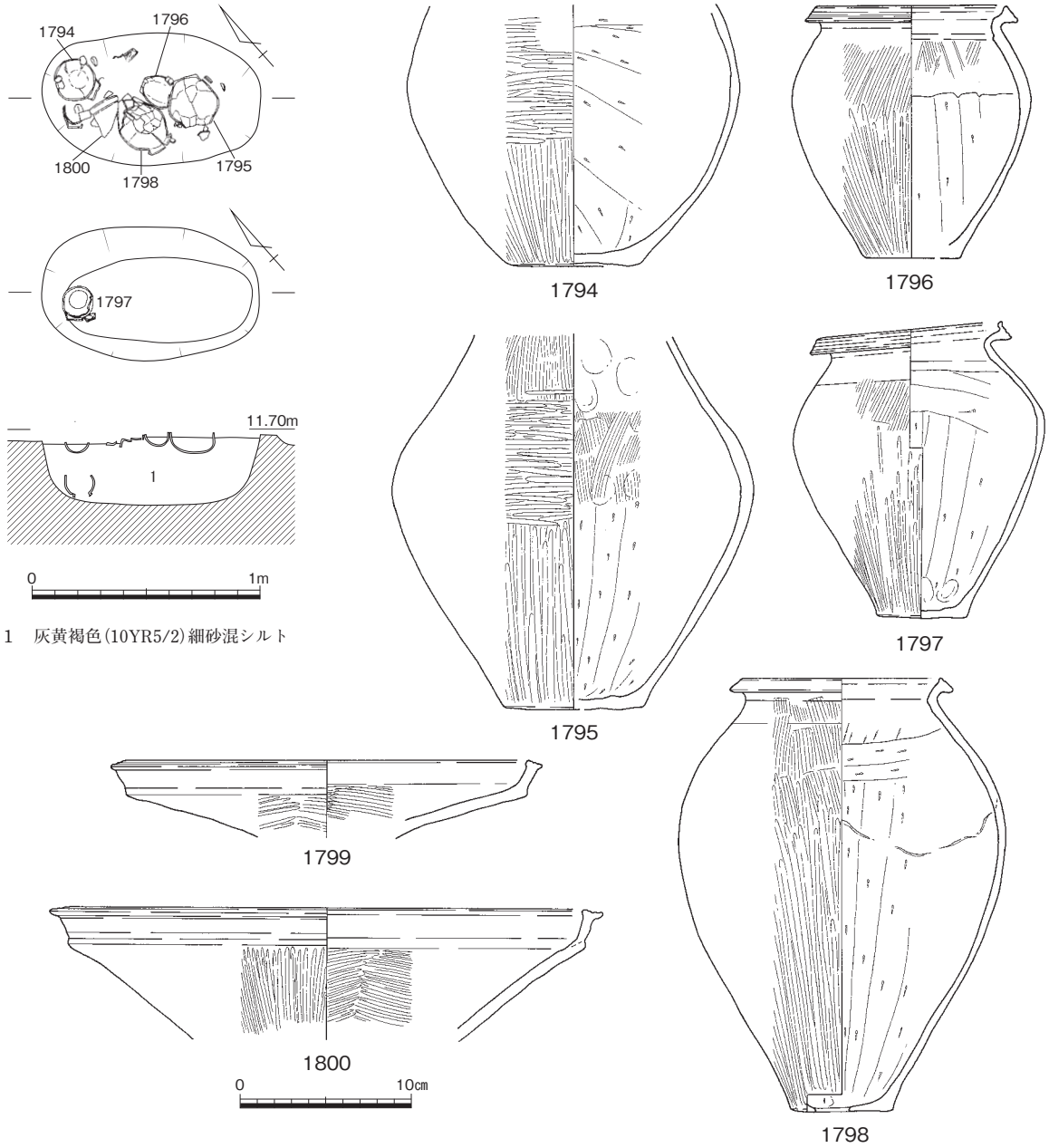


第350図　土坑178（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑179（第13・351図、図版57－３）

Ｈ16・17の境で、竪穴住居34の西に位置する。平面形は不整楕円形を呈し、長軸95㎝、短軸58㎝を測る。断面形は逆台形で、検出面から底面までの深さは30㎝。底面は比較的水平であった。

土器などの出土遺物は埋土上面で確認でき、土器**1794**～**1796**・**1798**～**1800**が該当する。ただし**1797**のみ底面近くから出土し、底部破片の上に口縁部を下にした体部上半部が載った状態で確認した。**1794**・**1795**は壺で体部から底部のみの出土。体部外面は横あるいは縦方向のヘラミガキ、体部内面は下半がヘラケズリ、上半はナデ及びタテハケ。**1796**～**1798**は口縁端部が上下にやや拡張する甕。体部外面はタテハケの後縦方向のヘラミガキ。体部内面はヘラケズリを行うが、ヘラケズリが頸部まで達する**1797**・**1798**と、体部中程までの**1796**がある。**1799**は口縁部がやや開く高杯。**1800**は鉢。内外面いずれもヘラミガキを行う。土器の特徴や出土状況から、弥・後・Ⅰ～Ⅱであろう。　（松尾）

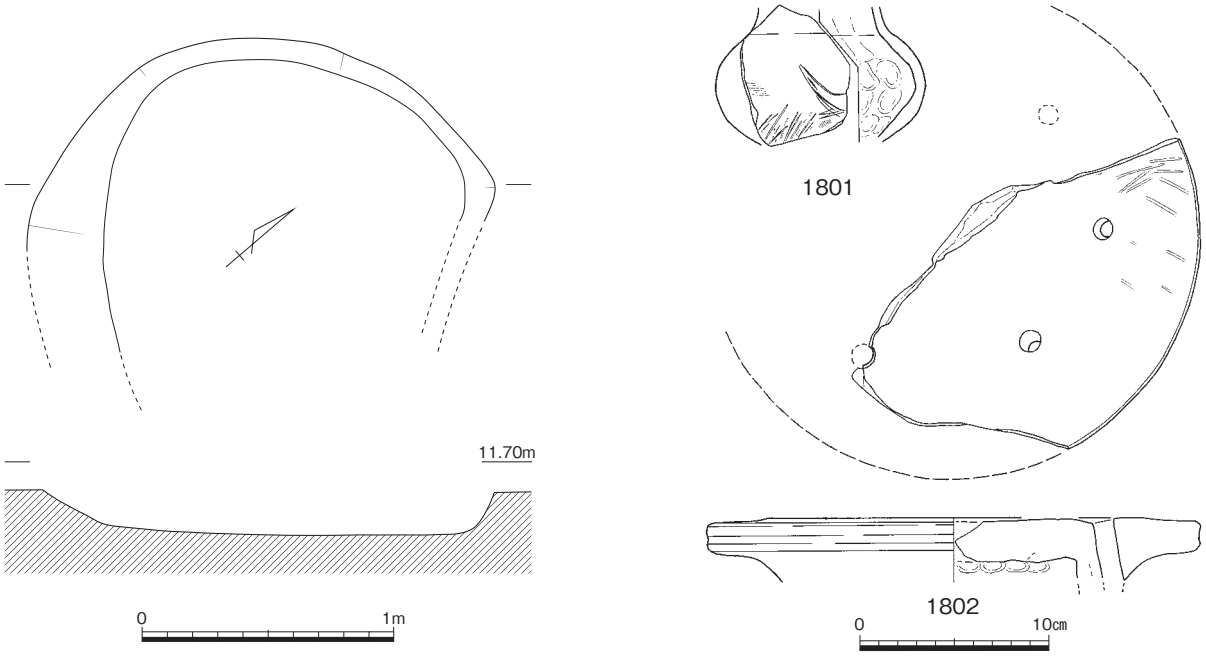


第351図　土坑179（1/30）・出土遺物（1/4）

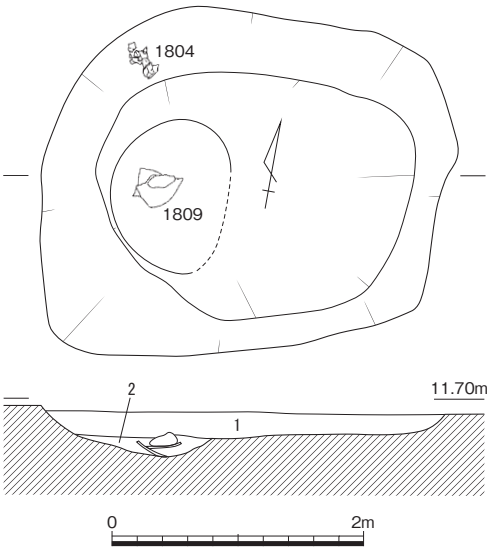
土坑180（第13・352図）

土坑179の南約４ｍに位置し、調査区の側溝により東半は消失している。平面形は円形を呈し、推定長103㎝、幅187㎝、深さ18㎝を残す。床はほぼ平坦で、壁は南壁のみ上方に向かって緩やかに立ち上がるが、他はほぼ垂直である。

遺物は壺**1801**と台形土器**1802**が出土している。壺**1801**は胴部片である。胴部は球状に膨らみ、頸部はやや内傾しながら立ち上がるようである。台形土器**1802**は縁部に凹線が巡り、上面には円孔が穿たれている。時期は弥生時代中期後葉～後期初頭と考えられる。　（森本）



第352図　土坑180（1/30）・出土遺物（1/4）



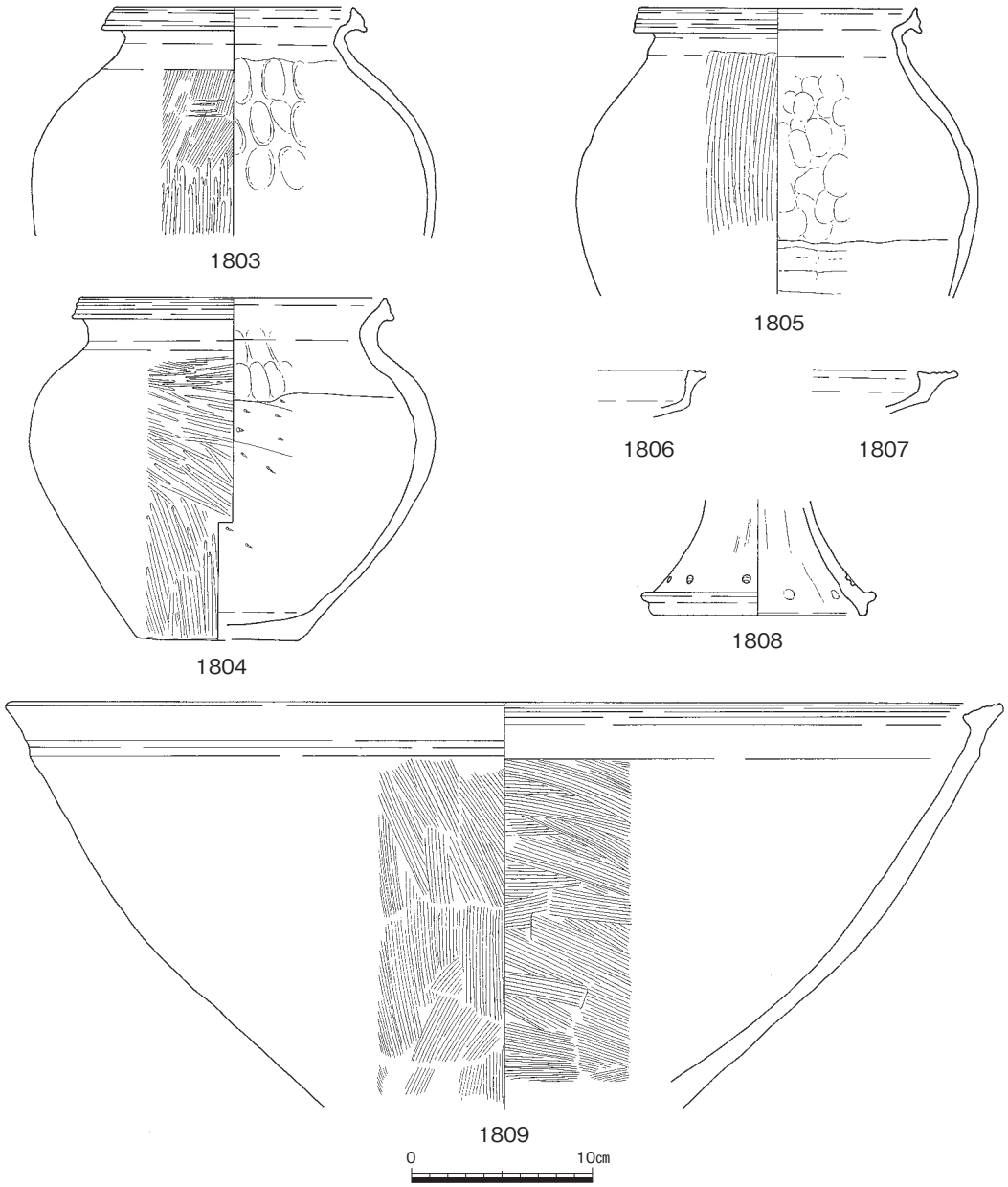
1　にぶい黄褐色(10YR4/3)細砂
2　にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト

第353図　土坑181（1/60）

土坑181（第13・353・354図、図版58－１）

土坑180の南西約10ｍに位置する。平面形は隅丸方形を呈し、長さ270㎝、幅320㎝、深さ40㎝である。床面は西側が落ち込んでおり、そこから鉢**1809**が出土した。断面形は逆台形を呈し、壁は上方に向かって緩やかに立ち上がる。埋土は２層に区分され、西側の落ち込みには上層と異なるシルト質の土が堆積していた。

遺物は、甕**1803**～**1805**、高杯**1806**～**1808**、鉢**1809**などが出土している。甕**1803**～**1805**は上下に拡張した口縁部に凹線文が巡る。内面ヘラケズリは頸部まで及んでいない。高杯の口縁部である**1806**・**1807**は直立気味に立ち上がり、外方に引き出され端部上部に拡張面を持つ。拡張面には浅い凹線が巡る。高杯の脚部である**1808**には裾部に円形の刺突文が穿たれている。これらの特徴から時期は弥・後・Ⅰである。　（森本）



第354図　土坑181出土遺物（1/4）

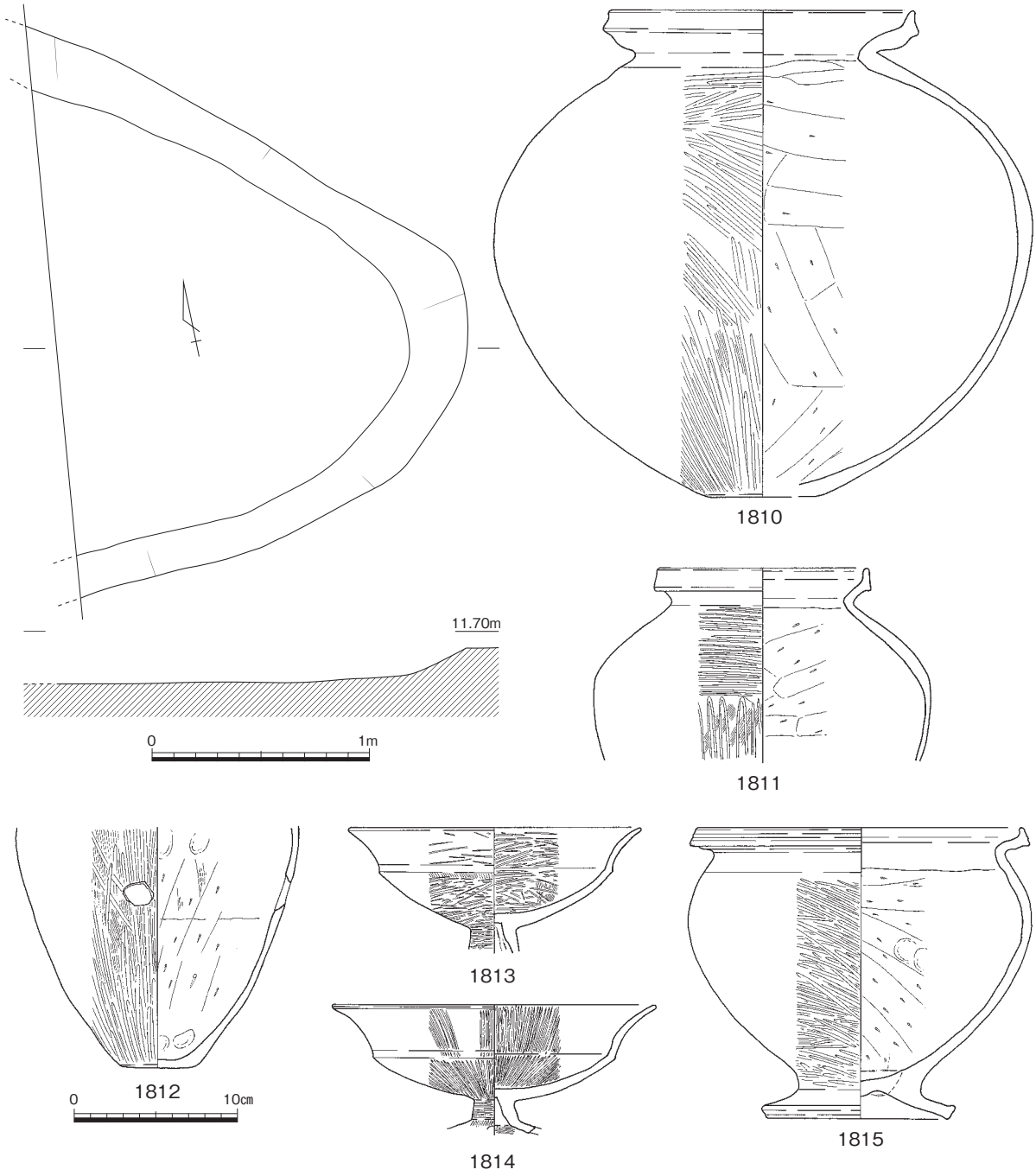
土坑182（第13・355図）

土坑181の南東約９ｍに位置する。調査区の側溝により西側が大きく消失している。全体の平面形は不明だが、確認できる規模は長さ189㎝、幅263㎝を測り、本来は倍以上の大きさと推測される。深さは16㎝、断面形は皿状を呈し、壁は上方に向かって緩やかに立ち上がる。

遺物は、壺**1810**、甕**1811**・**1812**、高杯**1813**・**1814**、台付鉢**1815**などが出土している。壺**1810**は体部が丸味を帯び、底部との境も明瞭でないが、平底を残す。甕**1811**は口縁部が上方へ立ち上がり、肩部から胴部にかけて屈曲部を持つ。甕の下半部にあたる**1812**は胴部中位に孔が穿たれている。焼成後に施されたものと考えられる。高杯**1813**・**1814**は口縁部が外反して外に開く。これらの特徴から、時期は弥・後・Ⅲを示す。（森本）

土坑183（第13・356図）

土坑182の南西約９ｍに位置する。西側は竪穴住居39に切られているが、平面は楕円形を呈するも



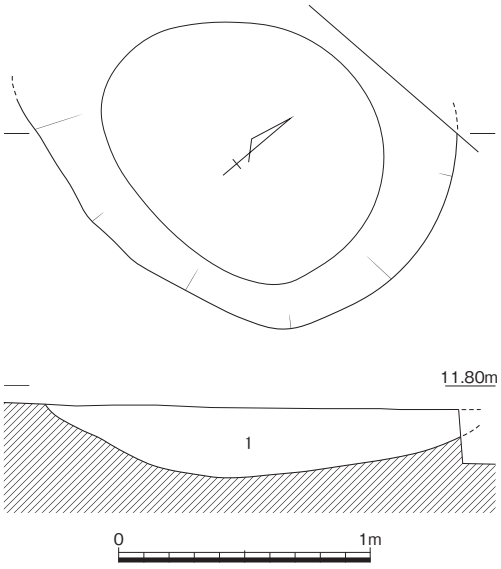
第355図　土坑182（1/30）・出土遺物（1/4）

のと思われる。確認できる規模は長さ141㎝、幅120㎝、深さ28㎝を測る。断面形は皿状を呈し、壁は上方に向かって緩やかに立ち上がる。埋土は炭を含む砂質土で、遺物は少量出土した。

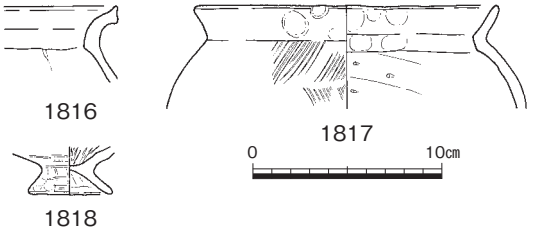
甕は内面のヘラケズリが頸部まで達しており、**1816**は口縁部が上下に少し拡張し、**1817**は「く」字に屈曲して口縁部の先端は丸く収めている。**1818**はミニチュア土器で、鉢などの脚部と考えられる。時期は弥・後・Ⅲである。（森本）

土坑184（第13・357図）

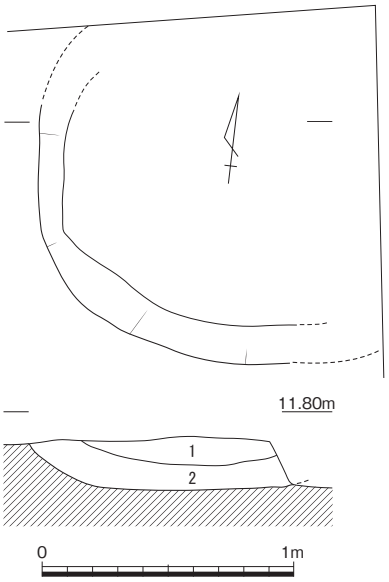
土坑183の東側に近接して位置する。調査区の側溝により北東側が大きく消失しており、本来の形は不明である。確認できる規模は長さ100㎝、幅100㎝、深さ12㎝を測る。埋土は２層に分かれ、レン



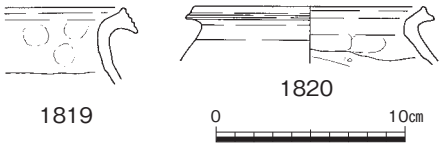
1　黒褐色(10YR3/1)砂質土（炭・土器含）



第356図　土坑183（1/30）・出土遺物（1/4）



1　黒褐色(10YR3/1)砂質土
2　黒褐色(10YR3/2)砂質土



第357図　土坑184（1/30）・出土遺物（1/4）

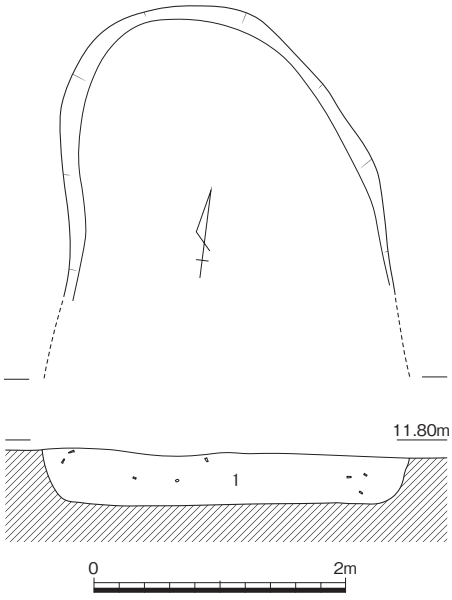
ズ状に堆積する。

遺物は少なく、甕1819・1820などが出土している。口縁部を上下に拡張し、凹線が巡る。時期は弥・後・Ⅰ～Ⅱと考えられる。（森本）

土坑185（第13・358・359図）

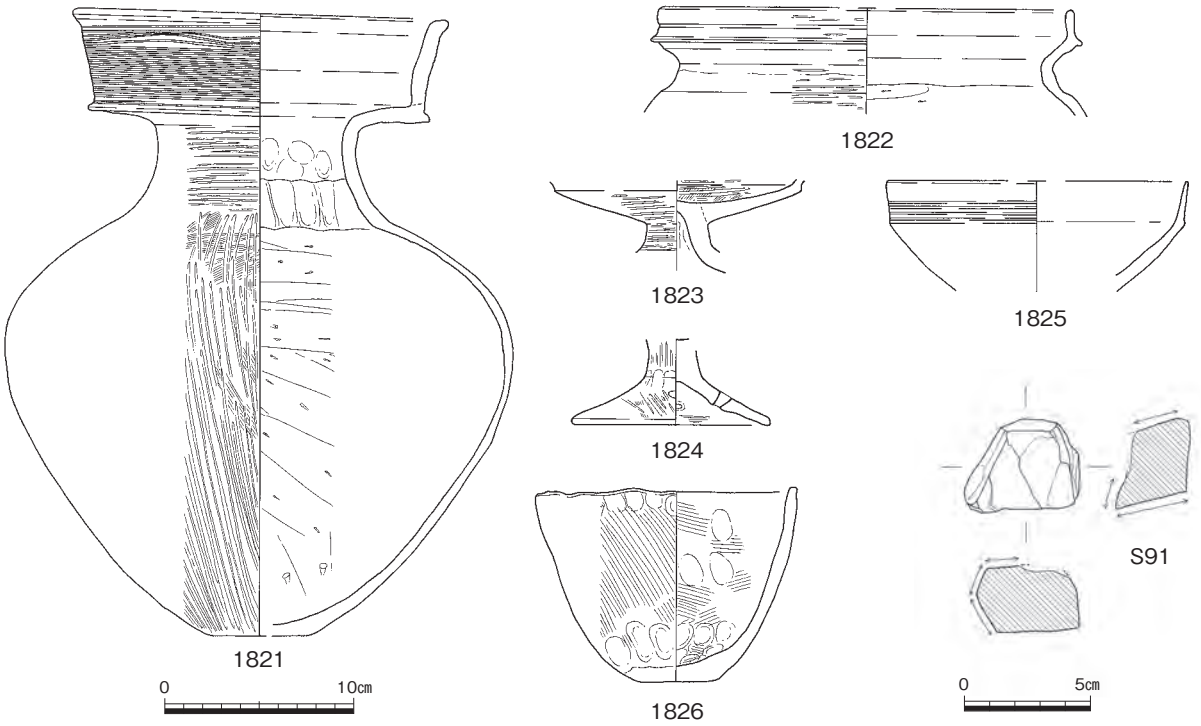
土坑184の東約14ｍに位置し、竪穴住居43を切って検出された。南部は調査区外になるため平面形は不明だが、確認できる規模は長さ295㎝、幅250㎝、深さ40㎝を測る。断面形は逆台形を呈し、壁は外傾して立ち上がる。

遺物は、壺1821や甕1822、高杯1823・1824、鉢1825・1826、砂岩製砥石Ｓ91などが出土している。壺1821は口縁部を上方に大きく拡張させ、沈線を多重に巡らしている。肩部に胴部最大径があり、外面はハケ調整の後ヘラミガキ、内面は頸部直下までヘラケズリされている。甕1822は口縁部が「く」字状に開き、端部は上方に拡張している。鉢1825は口縁下に４条の沈線が巡る。時期は弥・後・Ⅳである。（森本）



1　黒褐色(7.5YR3/1)粗砂混シルト（礫・土器含）

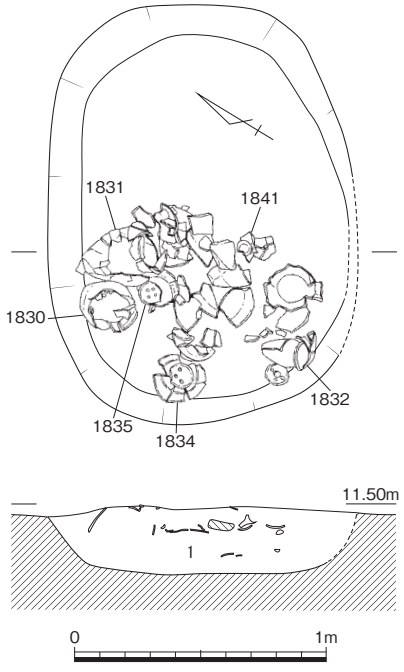
第358図　土坑185（1/60）



第359図　土坑185出土遺物（1/4・1/3）

土坑186（第13・360・361図、図版58－２・90）

Ｇ17南東で、竪穴住居37の東に位置する。平面形は隅丸方形を呈し、長軸165㎝、短軸122㎝を測る。断面形は逆台形で、検出面から底面までの深さは27㎝。底面は比較的平らである。埋土は褐灰色細砂で、多量の土器と炭が含まれていた。第360図に図示するように土坑西半に土器が集中し、第361図の**1827**～**1841**が該当する。



1　褐灰色(10YR4/1)細砂

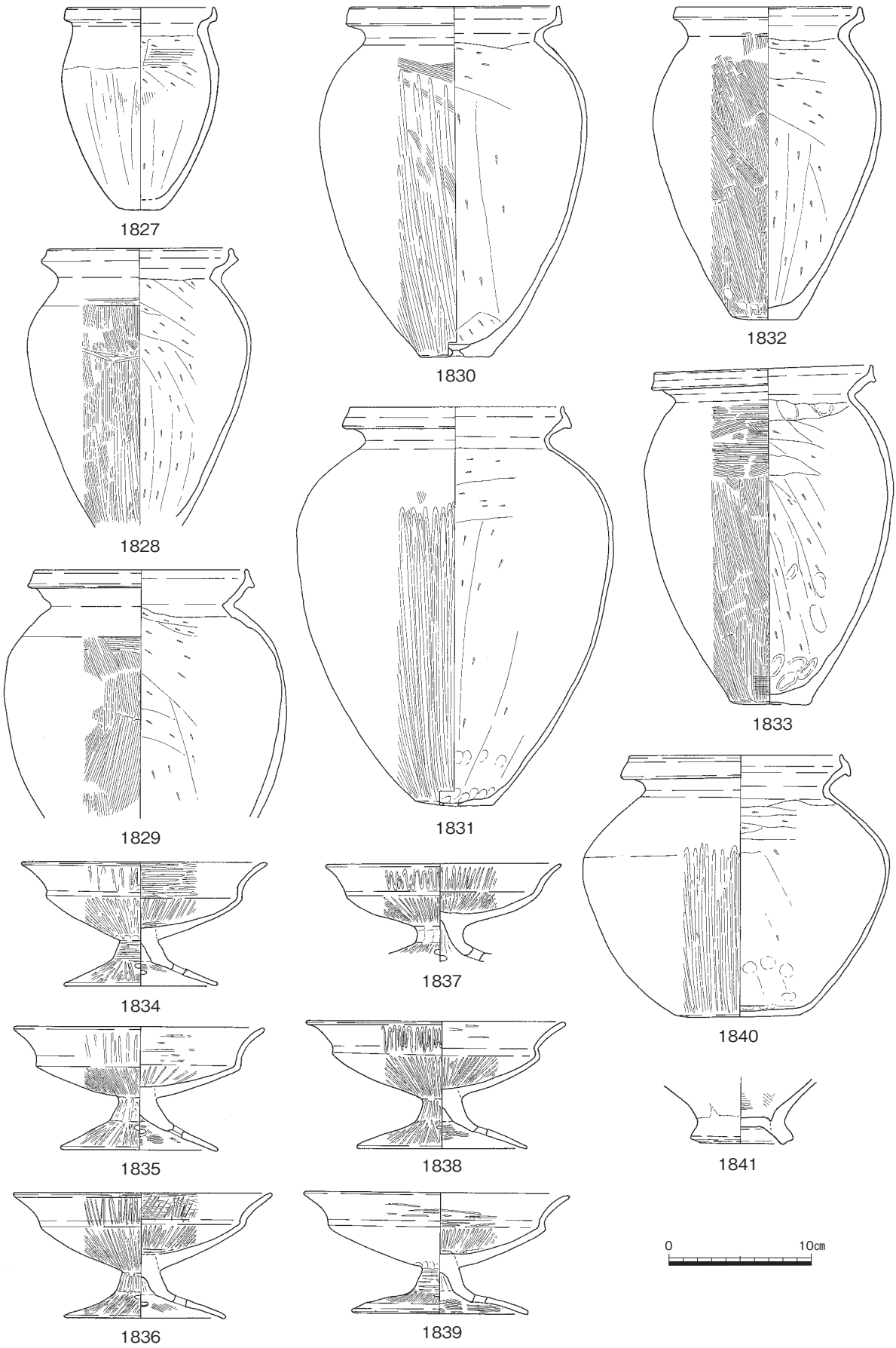
第360図　土坑186（1/30）

埋土の分層はできなかったが、出土レベルから土器を上下に分けることが可能である。埋土上面近くでは甕**1827**・**1830**・**1831**、鉢**1840**・**1841**、底面近くからは甕**1828**・**1829**・**1832**・**1833**、高杯**1834**～**1839**が出土した。高杯は口縁が大きく開き、「ハ」字に開く脚裾部には４方向の円孔が穿孔されている。これらはいずれも土坑底面近くから出土しており、形態的にも非常に似ていることから、一括で廃棄されたものであると言えよう。甕も、上下で明確な型式差は認められない。土器の特徴から、弥・後・Ⅲの時期と推察される。（松尾）

土坑187（第13・362図）

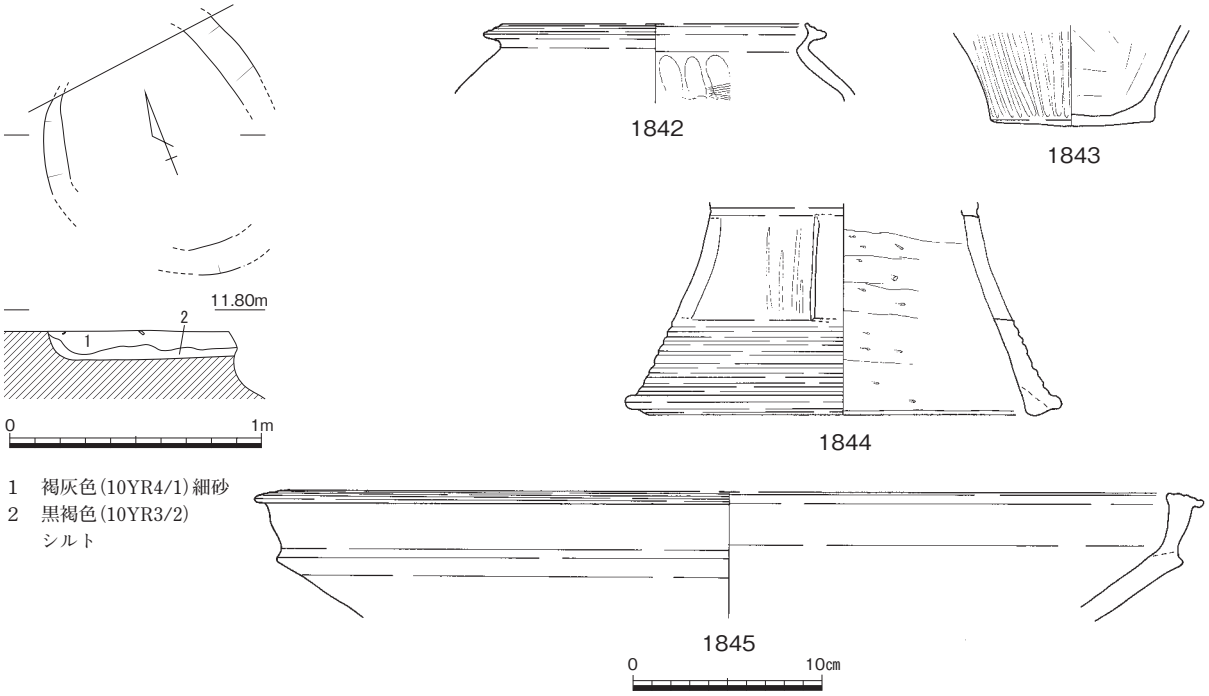
土坑186の北東約10ｍに位置する。南西部を柱穴、南東部を竪穴住居44に切られ、北部は調査区外に延びる。確認できる規模は長さ185㎝、幅183㎝、深さ22㎝を測る。

遺物は、甕**1842**・**1843**、器台**1844**、鉢**1845**などが出土

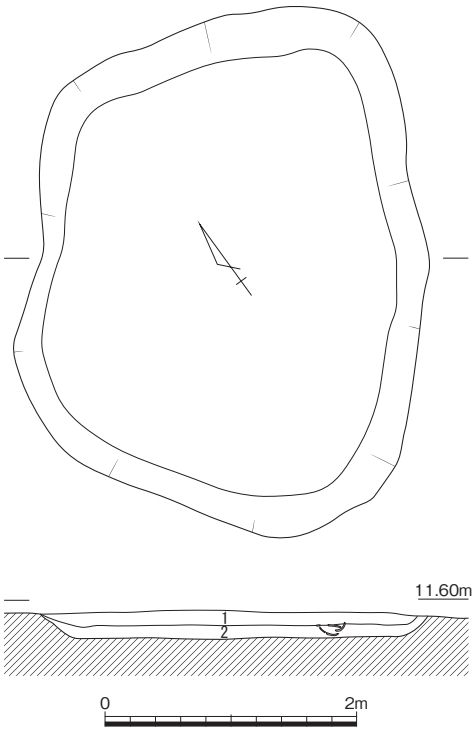


第361図　土坑186出土遺物（1/4）

している。甕1842は口縁部上端を折り返し、下方へ拡張している。土器は中期末から後期初頭の過渡的様相を示し、弥・後・Ⅰには埋没したものと考える。　（森本）



第362図　土坑187（1/30）・出土遺物（1/4）



第363図　土坑188（1/60）

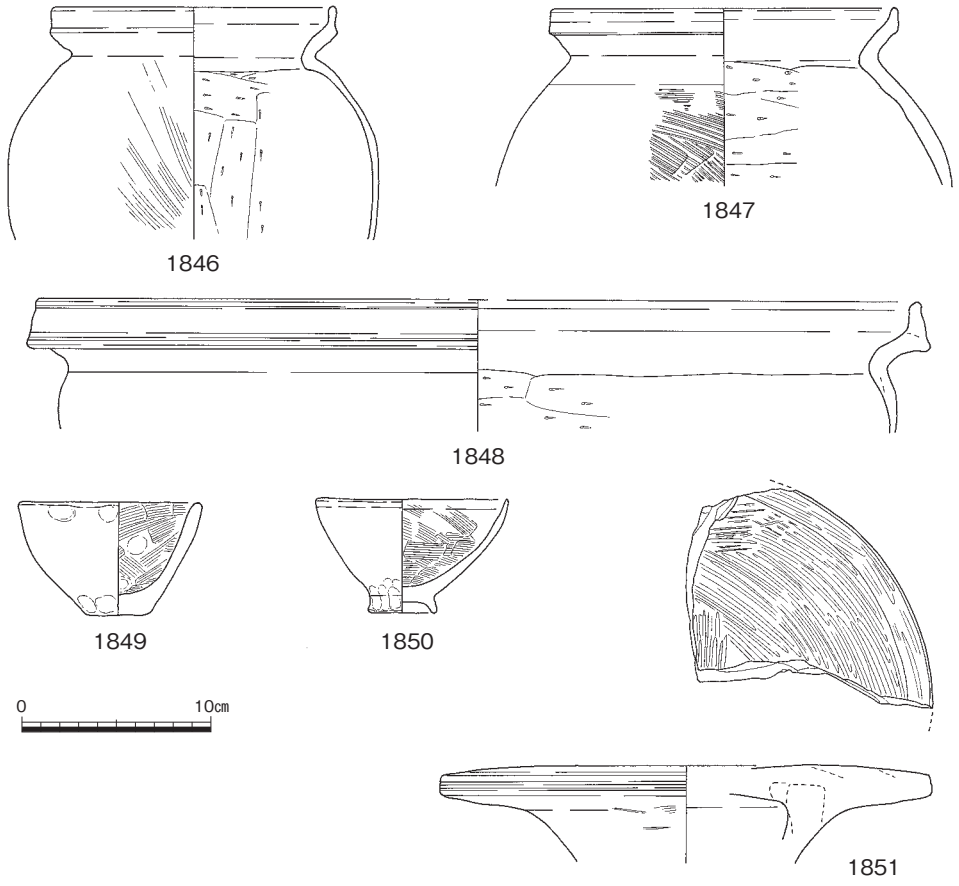
土坑188（第13・363・364図、図版58－３・91）

土坑187の南西約10ｍに位置する。平面形は不整長方形を呈し、長さ404㎝、幅306㎝、深さ22㎝を測る。断面形は皿状を呈し、壁は上方に向かって緩やかに立ち上がる。埋土は褐灰色細～粗砂と黒褐色細砂の２層に分かれ、水平に堆積していた。

遺物は、甕1846・1847、大型鉢1848、鉢1849、脚付鉢1850、台形土器1851が出土している。甕1846・1847は頸部が「く」字に屈曲して、口縁端部は直立して上方へ少し拡張している。内面ヘラケズリは頸部にまで達している。大型鉢1848も口縁部が直立して上方へ立ち上がる。台形土器1851は台部のみ残存しており、縁部には沈線が巡る。これらの土器の特徴から、弥・後・Ⅲと考えられる。　（森本）

土坑189（第13・365図）

土坑188の東約３ｍに位置する。平面形は不整楕円形を呈し、長さ165㎝、幅85㎝、深さ21㎝を測る。断面形は皿状を呈し、床面は西へわずかに傾斜している。



第364図　土坑188出土遺物（1/4）

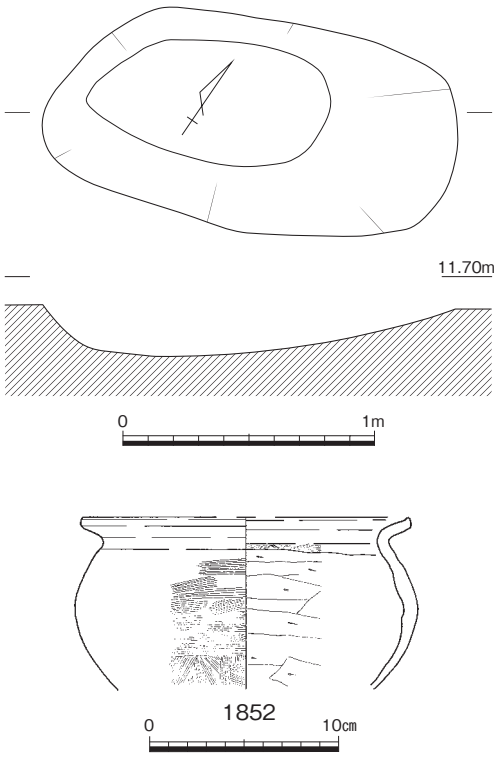
西壁はほぼ垂直に立ち上がり、東壁は上方に向かって緩やかに立ち上がる。

出土遺物は少ないが、甕**1852**は丸みを持つ胴部から頸部が「く」字状に屈曲し、口縁部がわずかに立ち上がる。遺物の特徴から、時期は弥・後・Ⅱ～Ⅲと考えられる。（森本）

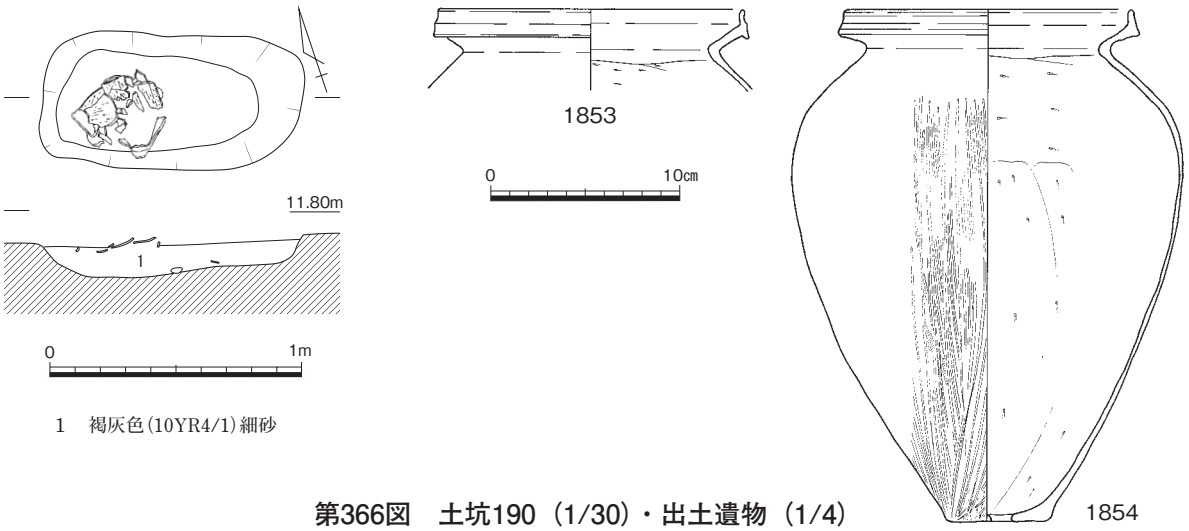
土坑190（第13・366図、図版59－１）

土坑189の東に隣接する。平面形は長楕円形で、長軸103㎝、短軸53㎝を測る。断面形は逆台形を呈し、検出面から底面までの深さは12㎝。埋土は褐灰色細砂。

第366図に図示した出土状況で分かるように、土器は埋土上面で確認をしている。**1853**は口縁端部がやや下垂するものの、上方に立ち上がる甕。**1854**は口縁端部が上方に立ち上がり、体部外面は縦方向のヘラミガキ、体部内面は頸部直下からヘラケズリ。土器の特徴から、弥・後・Ⅲである。（松尾）



第365図　土坑189（1/30）・出土遺物（1/4）

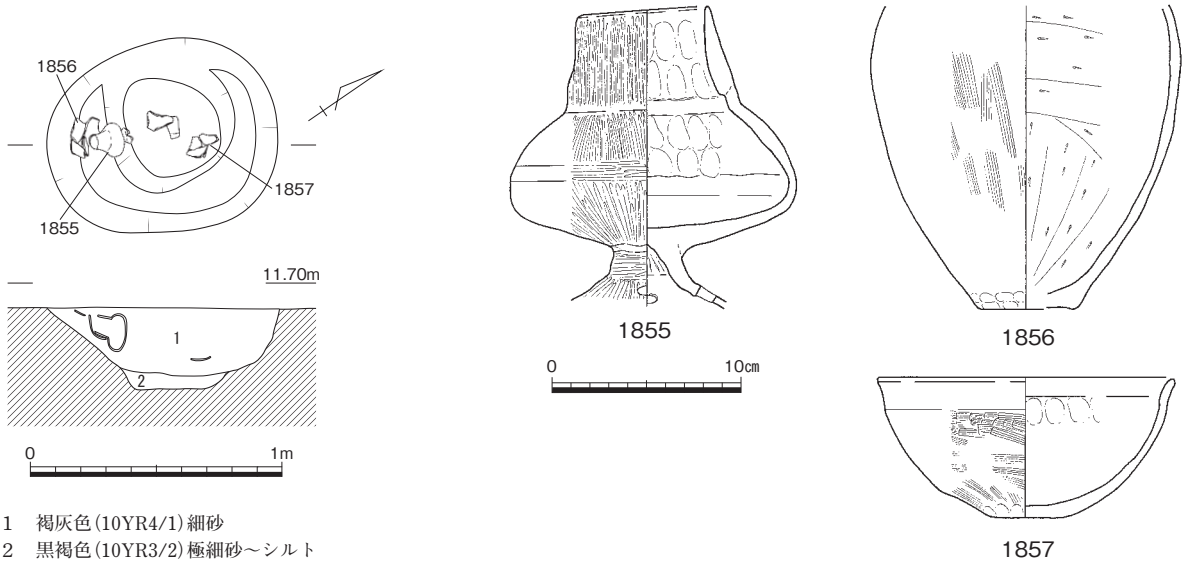


1　褐灰色(10YR4/1)細砂

第366図　土坑190（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑191（第13・367図、図版59－２）

土坑190の南西に位置する。平面形は不整円形を呈し、長軸92㎝、短軸75㎝を測る。断面形は逆台形で、中央に直径約40㎝、深さ５㎝程度の落ち込みを有する。検出面から底面までの深さは32㎝。埋土は大きく２層に別れ、第１層中に土器が含まれる。**1855**・**1856**は第１層の上方で土坑肩口から、**1857**は第１層の下面から出土した。**1855**は台付直口壺。外面は細かいヘラミガキ、内面は指頭ナデ、脚裾部には４方向に円孔が見られる。甕**1856**は底部から体部にかけてのみ残る。鉢**1857**は口縁部がやや外反する。土器の特徴から弥・後・Ⅲ。　（松尾）



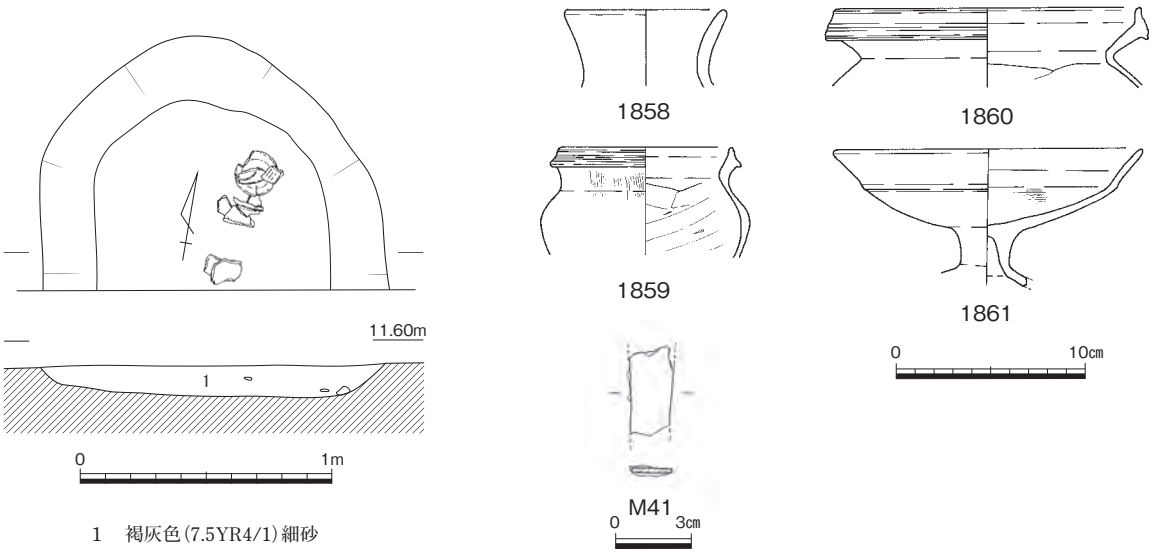
1　褐灰色(10YR4/1)細砂
2　黒褐色(10YR3/2)極細砂～シルト

第367図　土坑191（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑192（第13・368図）

H17・H18境、竪穴住居49の西に位置する。調査の都合で南半については確認できていない。平面形の残存長は137㎝、幅は101㎝を測る。断面形は皿状を呈し、検出面から底面までの深さは12㎝。埋土は単層で、土器片を若干含む褐灰色細砂。第368図の平面図に示す土器は、いずれも埋土上方で確

認したもので、1858～1861が該当する。1858は直口壺。1859・1860は口縁端部がやや下垂し、かつ上方に拡張する甕。1861は浅い杯部で口縁部が「ハ」字に開く高杯。M41は不明鉄製品。土器の特徴から、弥・後・Ⅲであろう。　（松尾）



第368図　土坑192（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）

土坑193（第13・369図）

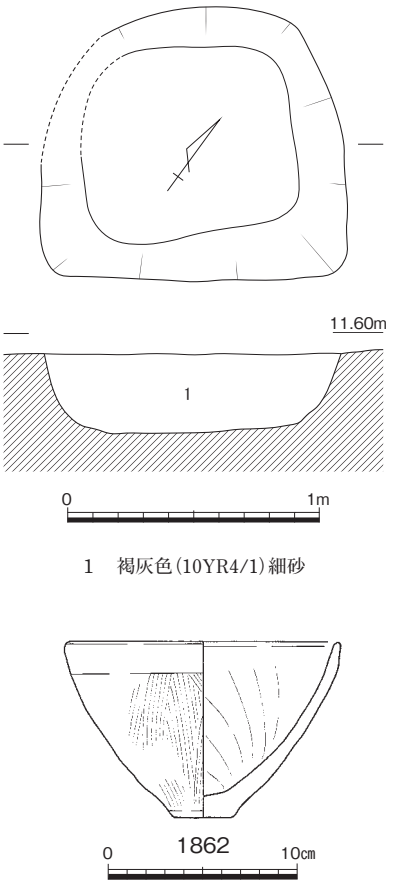
土坑192の北東約10ｍに位置する。土坑西端は後世の遺構に切られて、消失している。平面形は不整方形で、北西側は弧状に湾曲し、南東側は隅部に角を持つ。長さ119㎝、幅108㎝、深さ31㎝を測る。断面形は逆台形を呈し、床は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は褐灰色細砂で、遺物はほとんど出土しなかった。

鉢1862は口径14.2㎝、器高9.3㎝を測る。外面はハケ調整の後、口縁部をヨコナデしている。遺物の特徴から、弥・後・Ⅰ～Ⅱと考えられる。　（森本）

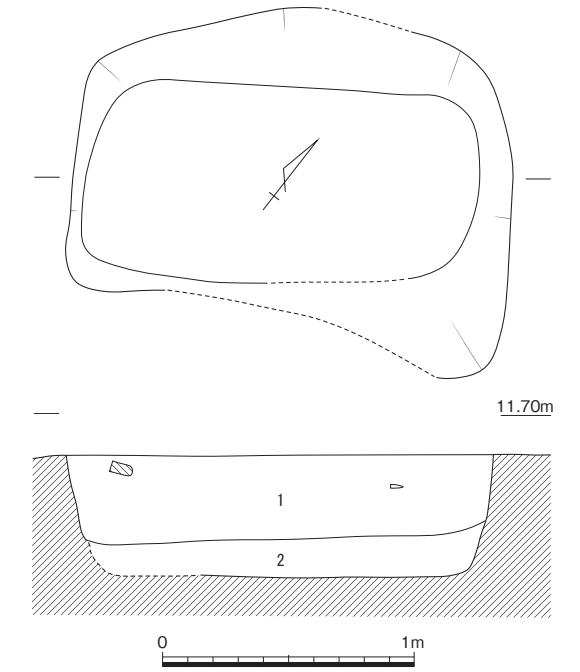
土坑194（第13・370図）

土坑193の南約１ｍに位置する。南東側の一部は、後世の遺構に切られて消失している。平面形は不整方形を呈し、南東隅が突出している。長さ174㎝、幅120㎝、深さ48㎝を測る。断面形は逆台形を呈し、床は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は２層に分かれ、水平に堆積していた。上層の黒褐色細砂には炭化米が含まれていた。

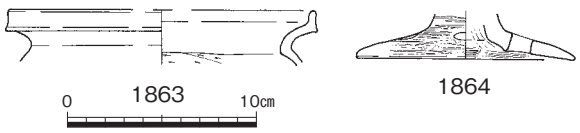
遺物は少ないが、甕1863と高杯1864が出土している。甕1863は、頸部が「く」字状に屈曲し、口縁部



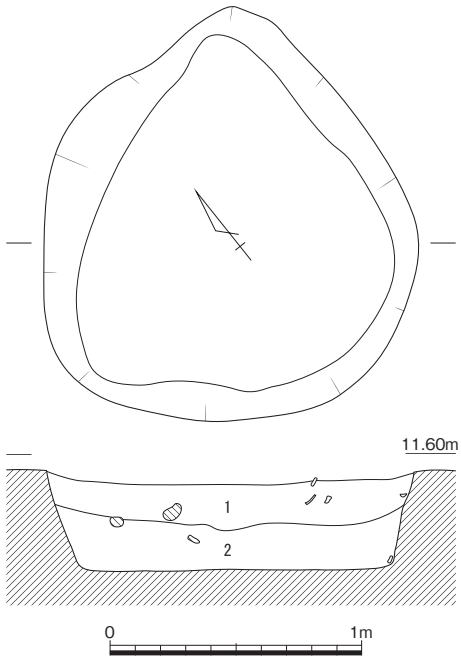
第369図　土坑193（1/30）・出土遺物（1/4）



1　黒褐色(10YR3/1)細砂（炭化米含）
2　褐色(10YR4/4)粗砂



第370図　土坑194（1/30）・出土遺物（1/4）



1　褐灰色(10YR5/1)シルト混細砂（炭化米・礫含）
2　褐灰色(10YR4/1)細～粗砂（炭化米・礫含）

第371図　土坑195（1/30）

は上方に少し立ち上がる。内面はヘラケズリが頸部にまで達している。高杯の脚部である**1864**は、脚が外へと大きく広がる。４カ所に孔が穿たれているようである。外面は丁寧にヘラミガキが施される。時期は弥・後・Ⅲと考えられる。（森本）

土坑195（第13・371・372図、図版108）

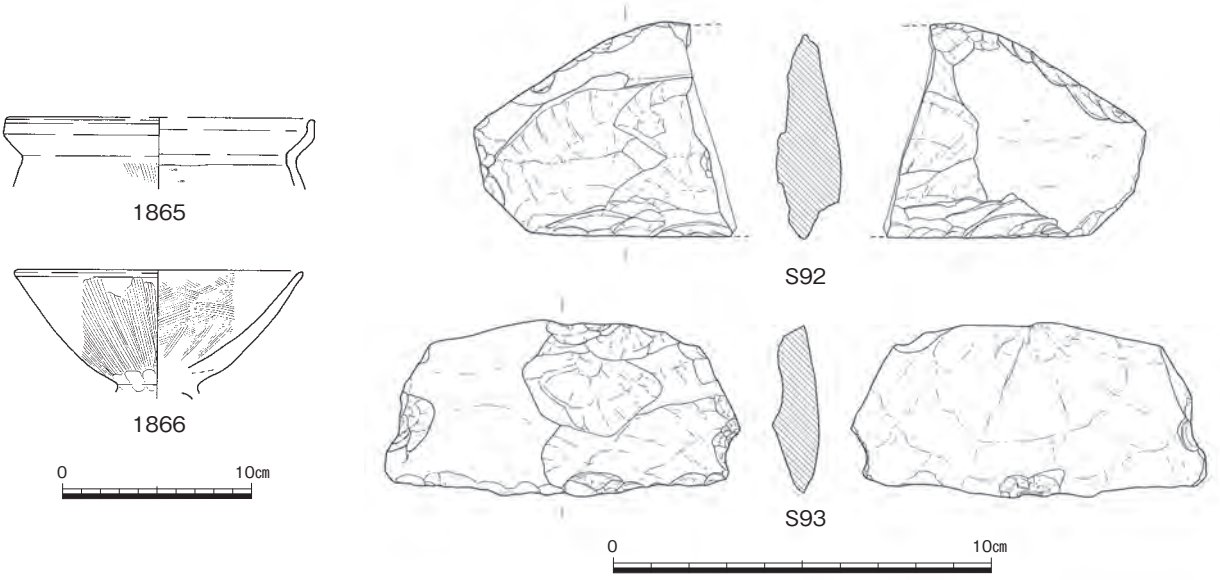
土坑194の東約５ｍに位置する。平面形は円形を呈し、長さ165㎝、幅148㎝、深さ34㎝を測る。断面形は逆台形を呈し、床は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は土質によって大きく２層に分かれる。水平に堆積しているが、両層とも炭化米と５～10㎝大の礫を含み、一度に埋め戻されたものと考えられる。

遺物は、甕**1865**と台付鉢**1866**、粘板岩製の打製石包丁**S92**・**S93**である。甕**1865**は口縁部が上方へ立ち上がり、強いヨコナデを施す。台付鉢は台の下端部が欠損している。内外面ともハケによる調整が施されている。打製石包丁**S92**は両面に剥離調整が施される。**S93**は両側に抉りが入る。剥離調整は背面のみで、腹面には主要剥離面が残る。遺物が少ないため難しいが、土器の特徴から弥・後・Ⅲと考えられる。（森本）

土坑196（第13・373図、図版109）

土坑195の北東約１ｍに位置する。平面形は不整円形を呈し、南西側に一部段を形成する。規模は長さ140㎝、幅120㎝、深さ29㎝を測る。断面は椀形を呈し、ほぼ垂直に立ち上がる壁から緩やかに傾斜して中心部が最も低くなる。

甕**1867**・**1868**、壺**1869**、打製石包丁**S94**などが出土している。甕**1867**・**1868**は口縁部を上下に拡張させ、凹線文が巡る。壺**1869**は口縁部上面に平坦面を作り、凹線文を施す。頸部には４カ所小孔があけられているようである。打製石包丁**S94**は粘板岩ホルンフェルス製で、主に上端を打ち欠いて成形したようである。右側縁は欠損しているが、両側端に抉りが付けられていたと推測される。弥生時代中期末～後期初頭頃の時期幅が認められるが、弥・後・Ⅰに埋没したと考えられる。（森本）

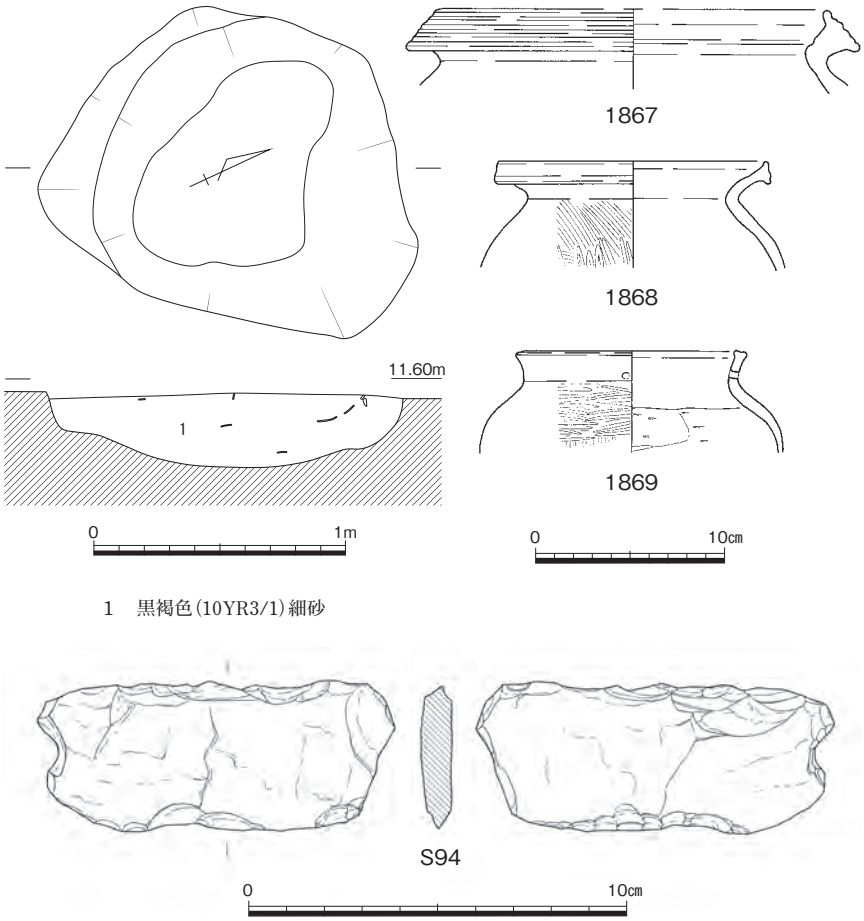


第372図　土坑195出土遺物（1/4・1/2）

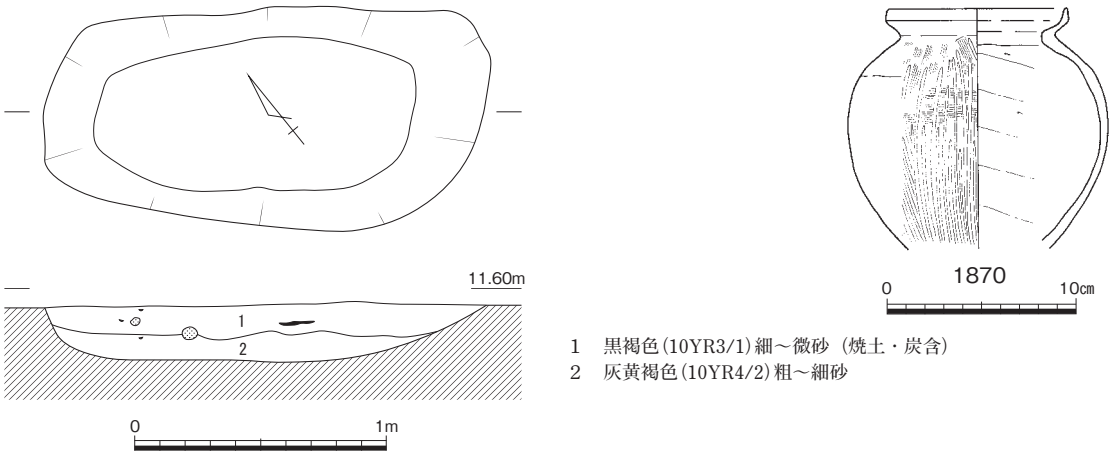
土坑197（第13・374図）

土坑196の南約５ｍに位置する。平面形は長楕円形を呈し、長さ174㎝、幅87㎝、深さ22㎝を測る。北西側の壁はほぼ垂直に立ち上がるが、南東側は底面から上方に向かって緩やかに立ち上がる。底面はおおむね平坦である。埋土は上層の黒褐色細～微砂、下層の灰黄褐色粗～細砂に分かれ、レンズ状に堆積していた。上層には炭と焼土が塊状に含まれていた。

遺物は甕**1870**などが出土した。甕**1870**は胴部が張り、丸みを帯びている。頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は上方に立ち上がる。外面は全面にハケ調整後、縦方向のヘラミガキが施されている。内面は斜め方向のヘラケズリを行い器壁を薄くしている。遺物の特徴から弥・後・Ⅲと考えられる。　（森本）



第373図　土坑196（1/30）・出土遺物（1/4・1/2）



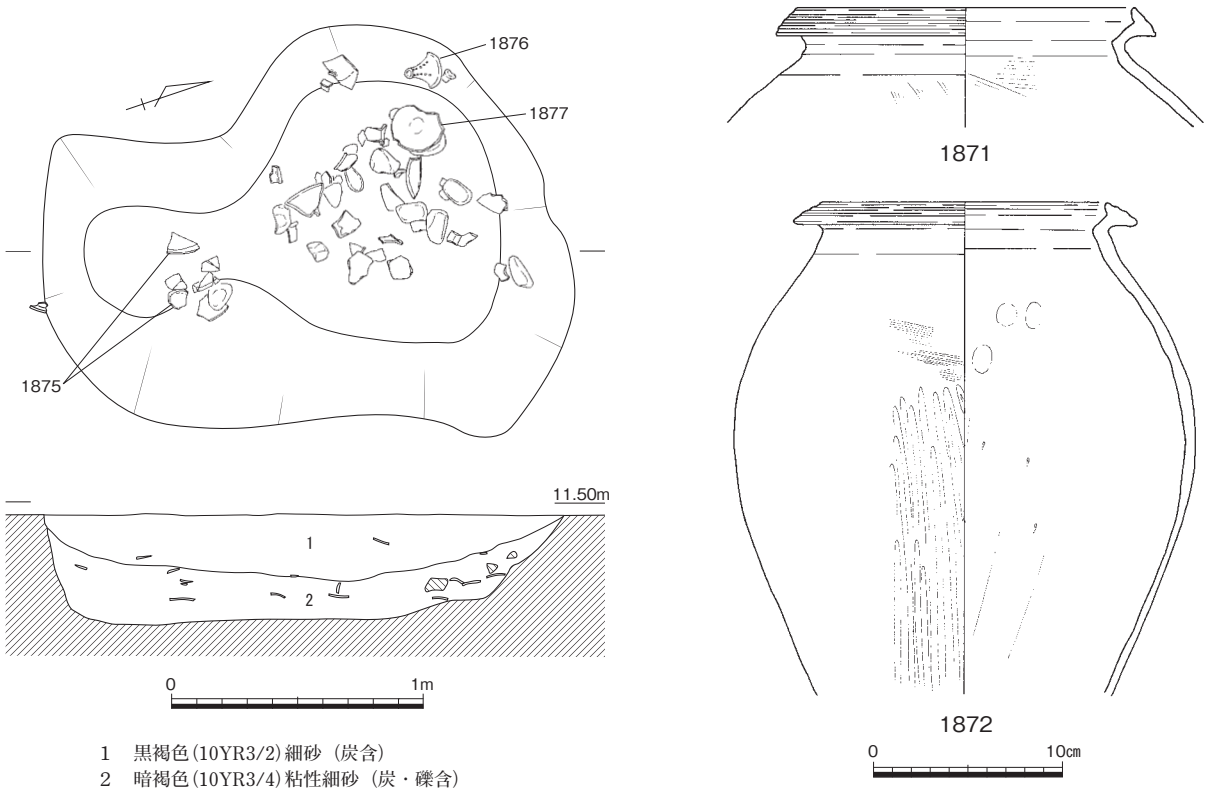
1　黒褐色(10YR3/1)細～微砂（焼土・炭含）
2　灰黄褐色(10YR4/2)粗～細砂

第374図　土坑197（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑198（第13・375・376図、図版59－３）

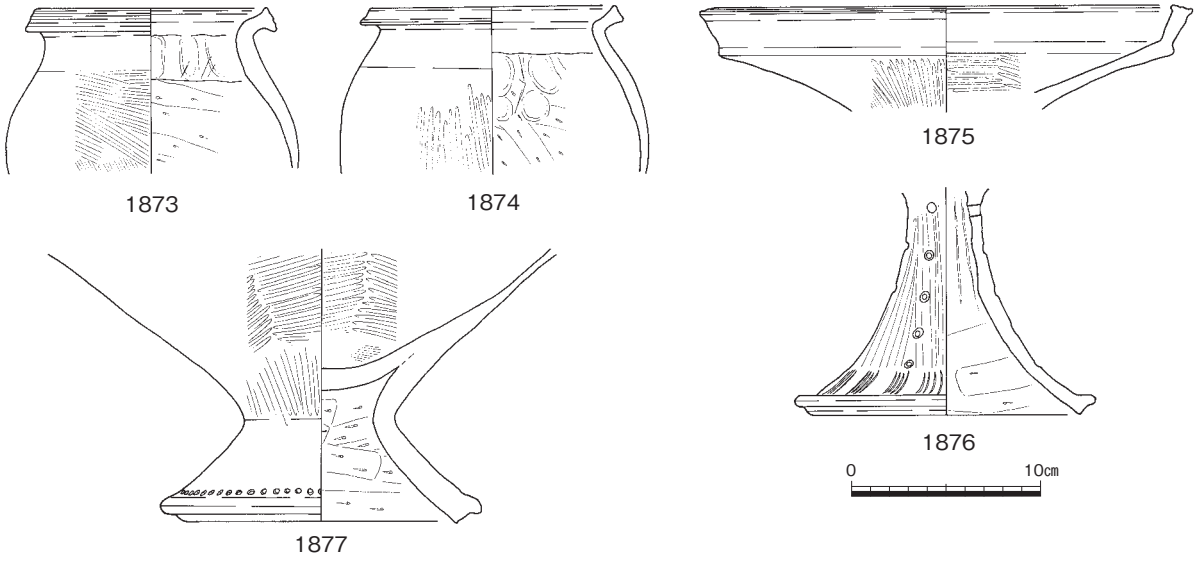
土坑197の北東約５ｍに位置する。平面形は不整形で南北に長く、長さ209㎝、幅154㎝、深さ41㎝を測る。断面形は逆台形を呈し、南壁はほぼ垂直だが、他は外傾して立ち上がる。埋土は２層に分かれ、どちらも炭を少量含んでいた。多くの土器は、礫と混じって、土坑北側の下層から出土した。

遺物は甕**1871**～**1874**、高杯**1875**・**1876**、台付鉢**1877**などが出土している。甕**1871**～**1874**は口縁部が上下に拡張し、凹線文が巡る。内面のヘラケズリは頸部直下まで及んでいる。高杯口縁部**1875**は垂直気味に口縁が立ち上がり、拡張させた上端部に凹線文が巡る。高杯脚部**1876**の透かし孔は、一段目のみ貫通し、それより下段は貫通せず竹管文となっている。時期は弥・後・Ⅰと考えられる。（森本）



1　黒褐色(10YR3/2)細砂（炭含）
2　暗褐色(10YR3/4)粘性細砂（炭・礫含）

第375図　土坑198（1/30）・出土遺物①（1/4）

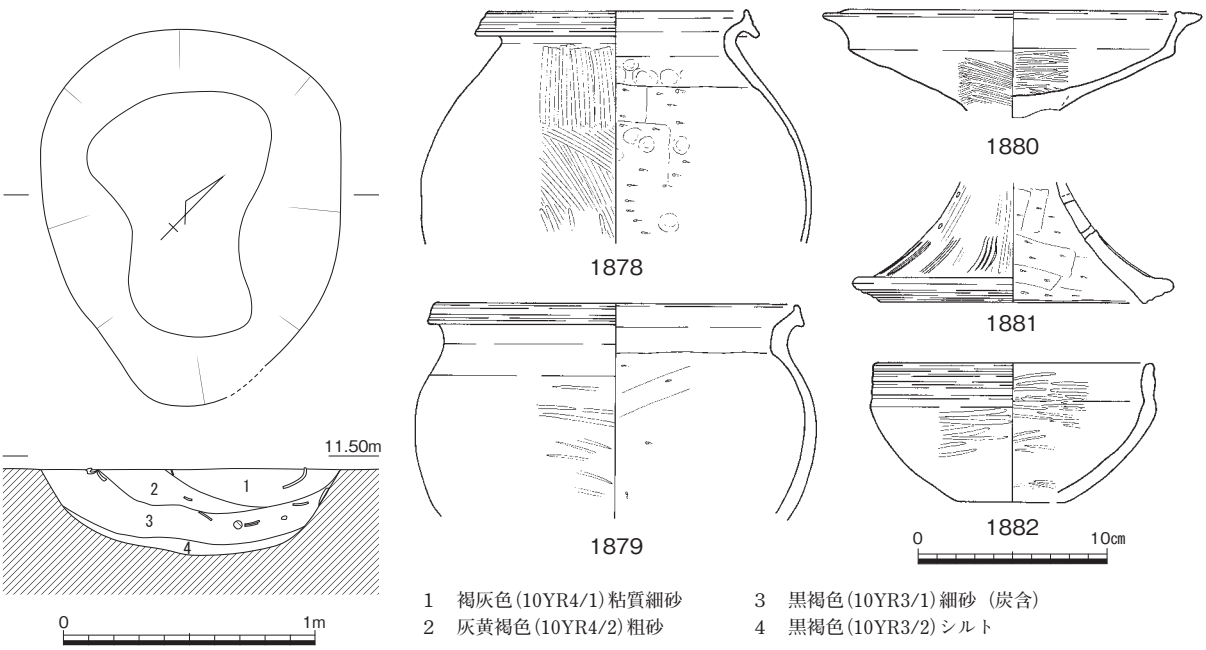


第376図　土坑198出土遺物②（1/4）

土坑199（第13・377図）

土坑198の南約１ｍに位置する。平面形は不整円形を呈し、長さ149㎝、幅118㎝、深さ34㎝を測る。断面形は椀形を呈し、壁は外傾して立ち上がる。埋土は４層に分かれ、レンズ状に堆積していた。第３層のみ炭を含んでいる。第１・２層と第３・４層で土色・土質が大きく異なることから、第２層下面が床面として機能した時期があった可能性も考えられる。

遺物は、甕**1878・1879**、高杯**1880・1881**、鉢**1882**などが出土している。甕**1878・1879**は口縁部を上下に拡張させ、凹線文が巡る。頸部直下まで内面ヘラケズリが施される。高杯**1880**は垂直気味に口縁部が立ち上がり、外方に拡張された上端面には凹線文が巡る。高杯脚部**1881**は肥厚した下端部外面に凹線文が巡る。これらの遺物の特徴から、弥・後・Ⅰ～Ⅱ頃と考えられる。　（森本）



1　褐灰色(10YR4/1)粘質細砂
2　灰黄褐色(10YR4/2)粗砂
3　黒褐色(10YR3/1)細砂（炭含）
4　黒褐色(10YR3/2)シルト

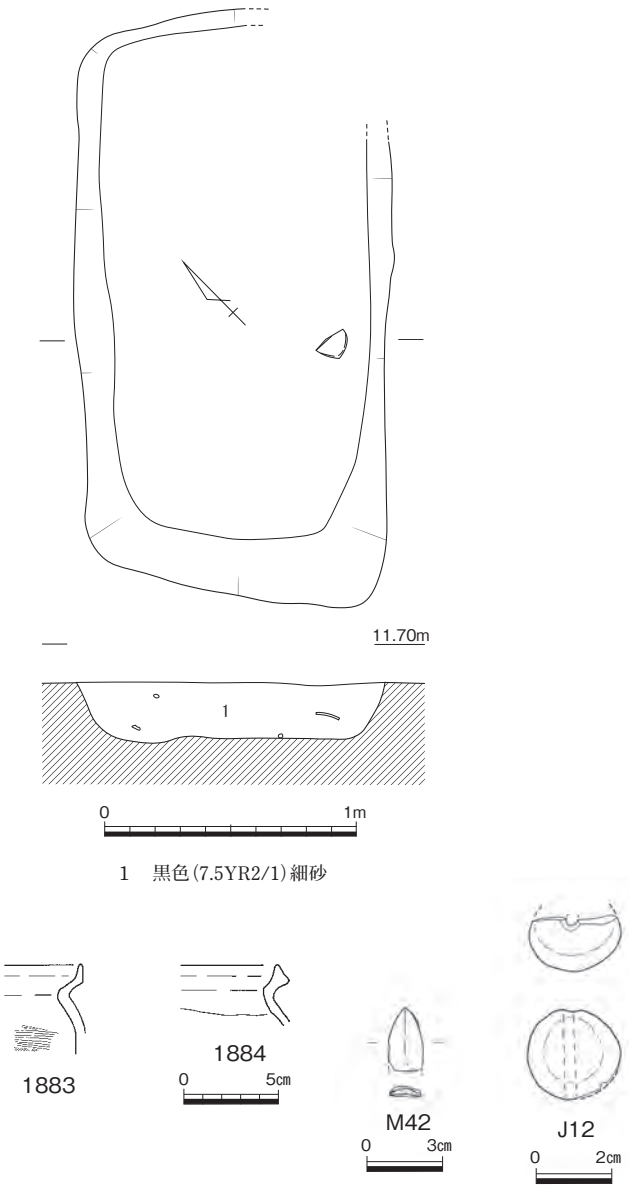
第377図　土坑199（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑200（第13・378図）

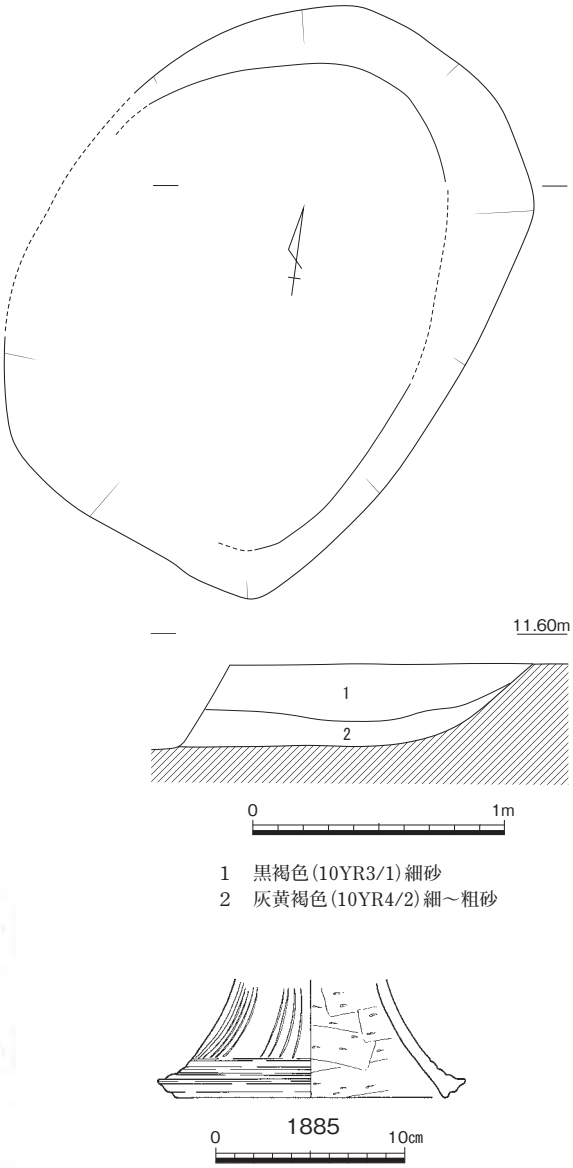
竪穴住居48の西辺に隣接し、東の一角は古代の柱穴列10を構成するＰ２により削平を受けている。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸231㎝、短軸122㎝を測る。断面形は逆台形で、検出面から底面までの深さは21㎝。底面はやや凹凸がある。竪穴住居46と竪穴住居48を検出する前に確認しているので、それらより以降に掘削された土坑である。出土遺物は甕**1883**・**1884**や、鉄製ヤリガンナと思われる**M42**、土製丸玉**J12**がある。土器の特徴や調査状況から、弥・後・Ⅲ以降であると推察される。（松尾）

土坑201（第13・379図）

Ｈ18の中央北側に位置する。南西半分は竪穴住居49により削平を受けているものの、掘り方の一部が残存していたことから、平面形は楕円形を呈することが分かる。長軸は230㎝、短軸172㎝を測る。断面形は皿状で、検出面から底面までの深さは32㎝。底面は平らであった。埋土は１・２層に分層することが可能で、いずれの層からも弥生土器片が出土している。**1885**は高杯の脚裾部。土器の特徴や調査状況から、弥・後・Ⅰの時期である。（松尾）



第378図　土坑200（1/30）・出土遺物（1/4・1/3・1/2）



第379図　土坑201（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑202（第13・380図）

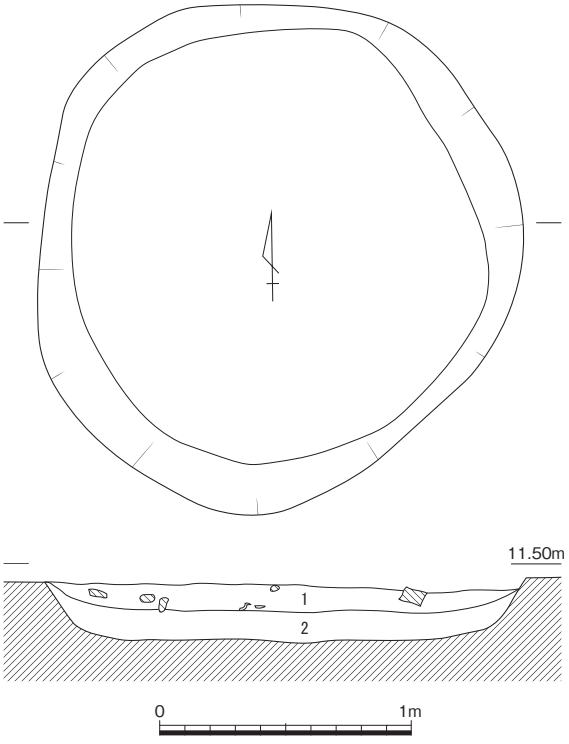
土坑201の南約３ｍに位置する。平面形は円形を呈し、長さ202㎝、幅190㎝、深さ22㎝を測る。断面形は皿形を呈し、壁は外傾して立ち上がる。埋土は下層の暗褐色細砂と上層の褐灰色細～粗砂の２層に分かれ、上層には10㎝大の礫が散在していた。

甕**1886**や高杯**1887**などが出土している。甕**1886**は口縁部を上下に拡張させ、凹線文が巡り、棒状浮文が貼り付けられている。肩部には刺突文が巡る。高杯脚部**1887**は下端部に凹線文が巡り、脚柱部は櫛描き文で飾る。甕は古い様相を示すが、高杯の特徴から、弥・後・Ⅰと考えられる。　（森本）

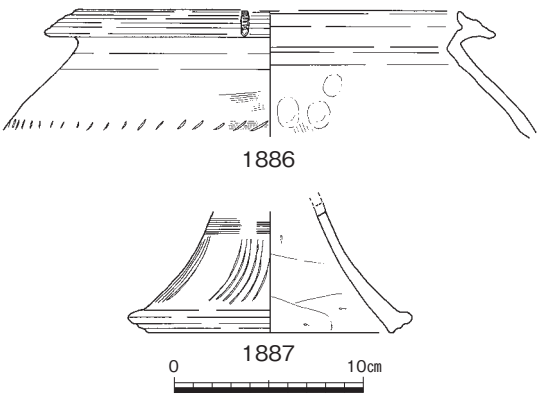
土坑203（第13・381図）

土坑202の南西約２ｍに位置し、竪穴住居49に切られて北西部が消失している。平面形は不整円形を呈し、推定長123㎝、幅80㎝、深さ23㎝を測る。断面形は椀形を呈し、東半部はほぼ垂直に立ち上がるが、西半部は底面から上方に向かって緩やかに立ち上がる。埋土は炭を含む褐灰色細砂で、一度に埋め戻されたものと考えられる。

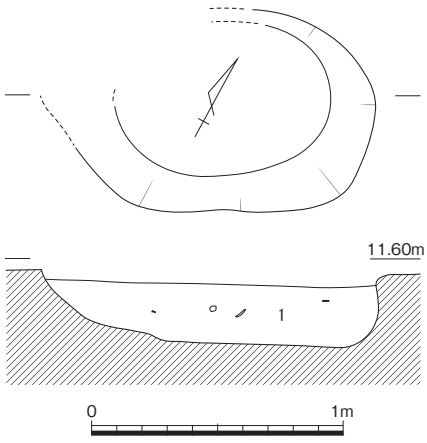
高杯**1888**、円板状土製品**C51**などが出土している。高杯**1888**は口縁部が垂直気味に立ち上がり、上端面に凹線文が巡る。円板状土製品**C51**は直径約1.5㎝と小さい。遺物の特徴から、弥・後・Ⅰである。　（森本）



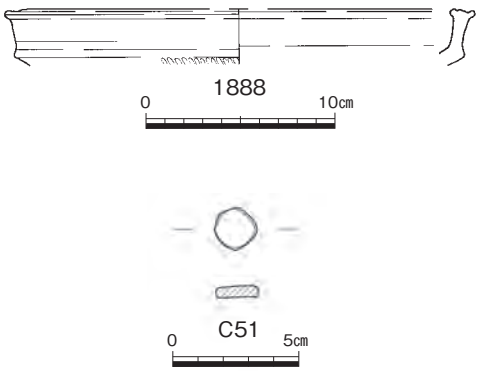
1　褐灰色(10YR4/1)細～粗砂　　2　暗褐色(10YR3/3)細砂



第380図　土坑202（1/30）・出土遺物（1/4）



1　褐灰色(10YR4/1)細砂（炭含）

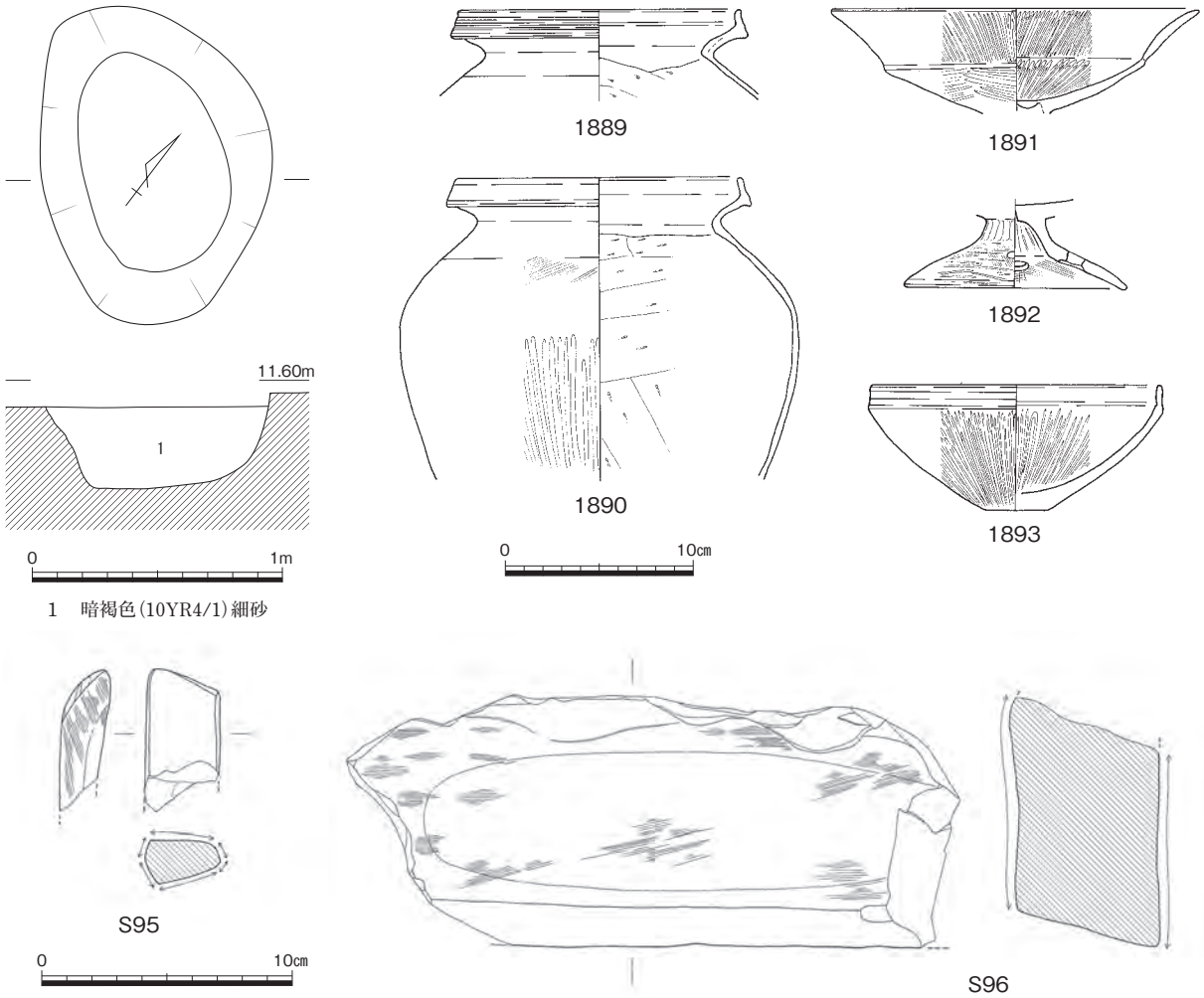


第381図　土坑203（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）

土坑204（第13・382図）

土坑203の南約２ｍに位置する。平面形は不整楕円形を呈し、長さ127㎝、幅91㎝、深さ32㎝を測る。断面は逆台形を呈し、床は南西側に僅かに傾斜するもののほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がる。

遺物は甕**1889**・**1890**、高杯**1891**・**1892**、鉢**1893**、砥石**S95**・**S96**などが出土している。甕**1889**・**1890**は口縁部が上方に立ち上がり、内面は頸部までヘラケズリが施されている。高杯口縁部**1891**は椀状で、口縁が外方に広がる。内外面にヘラミガキが施される。高杯脚部**1892**は短脚で、４カ所に円形の透かし孔が穿たれている。砥石**S95**は流紋岩製で側面部に擦痕が残る。**S96**は粘板岩製で全面に擦痕が残る。時期は弥・後・Ⅲ～Ⅳである。（森本）



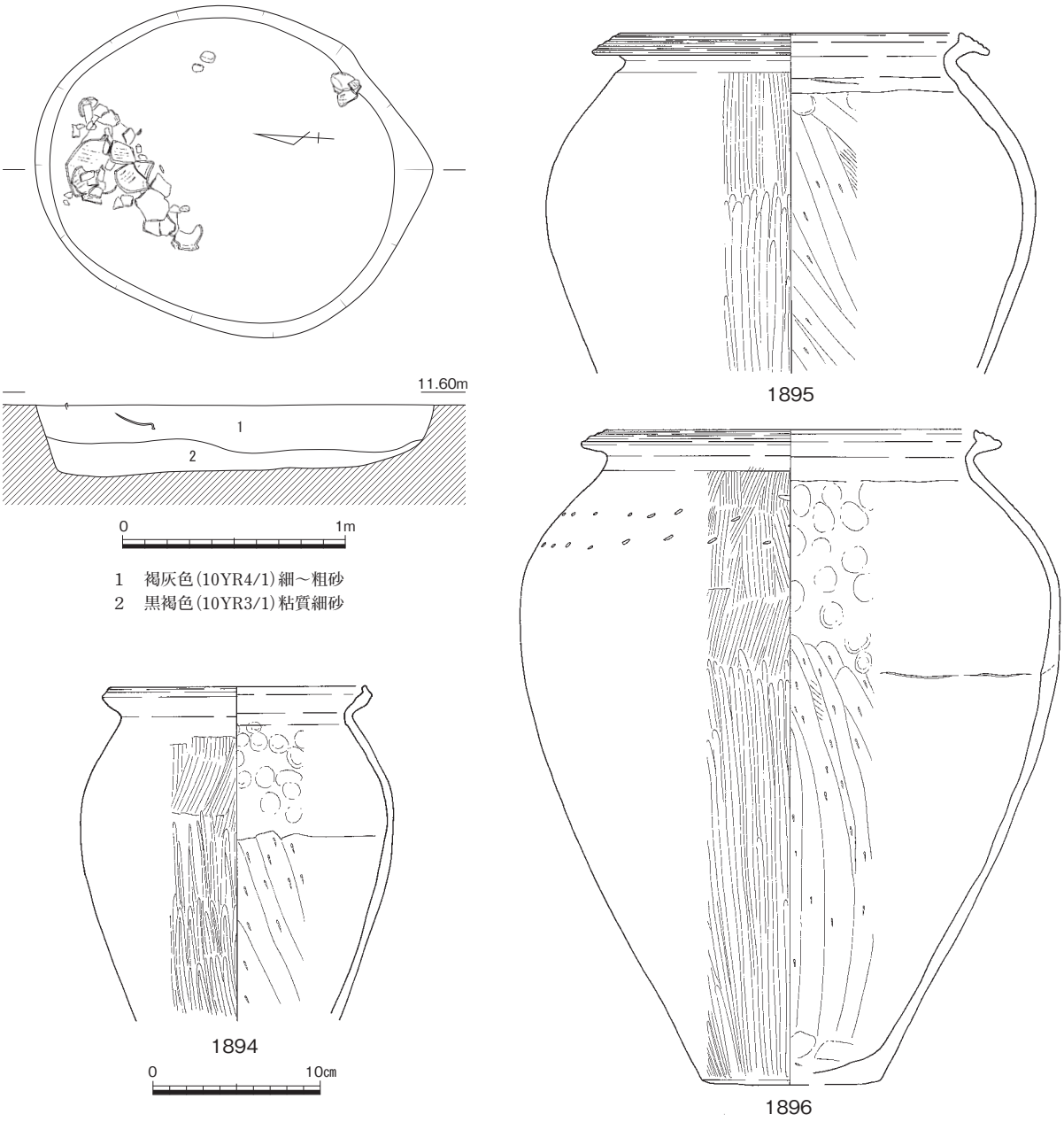
第382図　土坑204（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）

土坑205（第13・383図、図版60－１）

土坑204の南約２ｍに位置する。平面形は不整円形を呈し、長さ178㎝、幅145㎝、深さ30㎝を測る。断面形は逆台形を呈し、壁は外傾して立ち上がる。床面はほぼ平坦だが、北側が少し低くなっている。埋土は上層の褐灰色細～粗砂と下層の黒褐色粘質細砂の２層に分かれ、遺物は土坑北半部の上層からまとまって出土した。

甕**1894**～**1896**などが出土した。**1896**は土坑206・207から出土した破片と接合した。**1894**は口縁部

が少し上方に立ち上がる。1894・1896内面のヘラケズリは胴部中位までと低い。1895・1896は折り返した口縁部を拡張させる古い特徴をとどめる。弥・後・Ⅰの古い段階に位置付けておきたい。（森本）

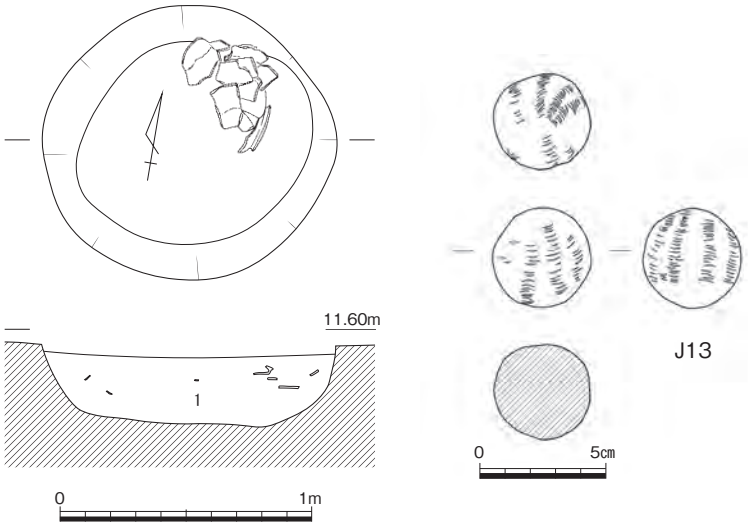


第383図　土坑205（1/30）・出土遺物（1/4）

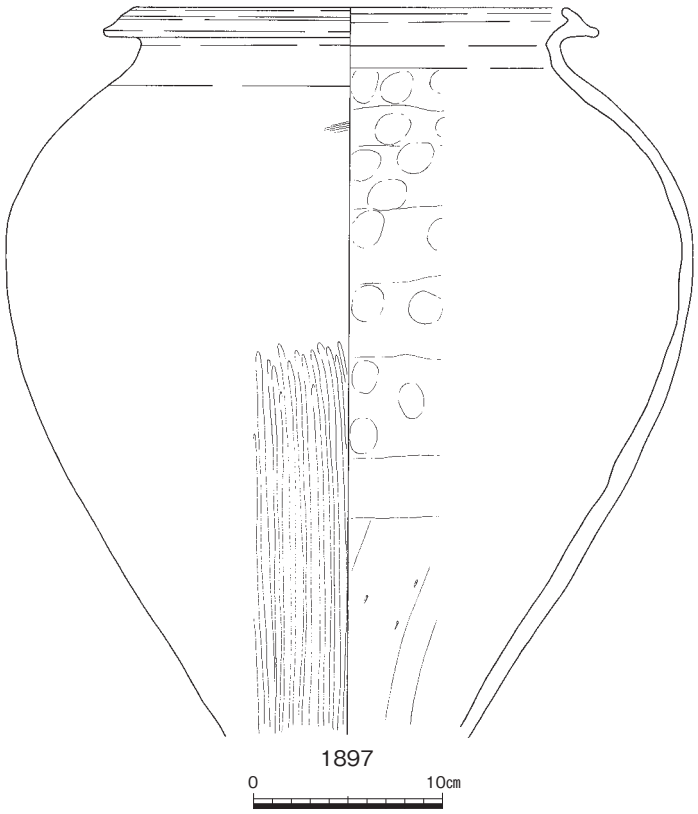
土坑206（第13・384図、図版119）

土坑205の西約１ｍに位置する。平面形は円形を呈し、長さ117㎝、幅119㎝、深さ26㎝を測る。断面形は椀状を呈し、床面はほぼ平坦だが、南西側が僅かに低くなっている。東側壁面はほぼ垂直に立ち上がるが、西側壁面はやや外傾して立ち上がる。埋土は褐灰色シルト混細砂で炭を多く含んでいた。一時に埋没したものと考えられる。

遺物は土坑北東部にまとまっており、床面から15㎝程浮いた状態で出土した。甕1897・土玉Ｊ13などが出土した。土坑205から出土した甕1896の破片も含まれている。甕1897は胴部が強く張り、丸み



1　褐灰色(10YR4/1)シルト混細砂
（土器・炭多含）



第384図　土坑206（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）

を帯びている。頸部は強く屈曲し、折り曲げた口縁端部を上下に拡張させる。特に下外方への引き出しが強く、やや上向きの面に凹線を巡らすなど、古い様相をとどめる。内面のヘラケズリも低い。色調は橙～赤色であるが焼成も堅致で、中期から後期の過渡的な様相を示す。土玉**J13**は直径3.9㎝で色調は橙色である。甕**1897**の出土状況から、土坑205と同時に埋没した可能性が高い。　（森本）

土坑207（第13・385図）

土坑206の東約４ｍに位置する。不整形を呈し、長さ143㎝、幅92㎝、深さ29㎝を測る。南西側の壁面は外傾しているが、北東側の壁面はほぼ垂直に立ち上がる。床面は北東部に一段高い平坦面を形成し、南西部をさらに10㎝程深く掘り込んでいる。底面は楕円形で長軸70㎝程である。中心には10㎝大の円礫の集積が認められた。円礫は床面から少し浮いた状態で見つかった。元々は土坑の上部に配置されていたものかもしれない。

出土した遺物は少ない。甕口縁部**1898**は端部を上下に拡張させ、凹線文を巡らしている。甕**1896**と接合した破片も出土しており、土坑の埋没した時期は弥・後・Ⅰ頃と推測される。　（森本）

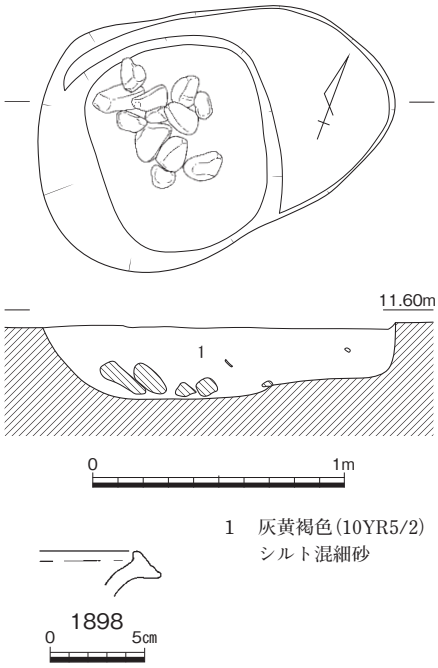
土坑208（第13・386図）

土坑206の南に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸252㎝、短軸96㎝を測る。北側に長軸120㎝、短軸96㎝を測る不整方形の落ち込みを有する。検出面から底面までの深さは浅い所で13㎝、最も深い落ち込みの底面までが24㎝を測る。埋土は２層に分層することができ、いずれも灰黄褐色砂で、下層である第２層がより粗い砂であった。**1899**～**1901**の土器が出土している。**1899**・**1900**は甕。**1899**は口縁端部を上下にやや拡張し、上面には凹線が巡る。体部内面の頸部やや下から横方向

のヘラケズリが行われている。1900は底部のみ。1901は高杯で、上方に短く立ち上がる口縁端部上端には凹線が巡る。土器の特徴から弥・後・Ⅰに比定される。　（松尾）

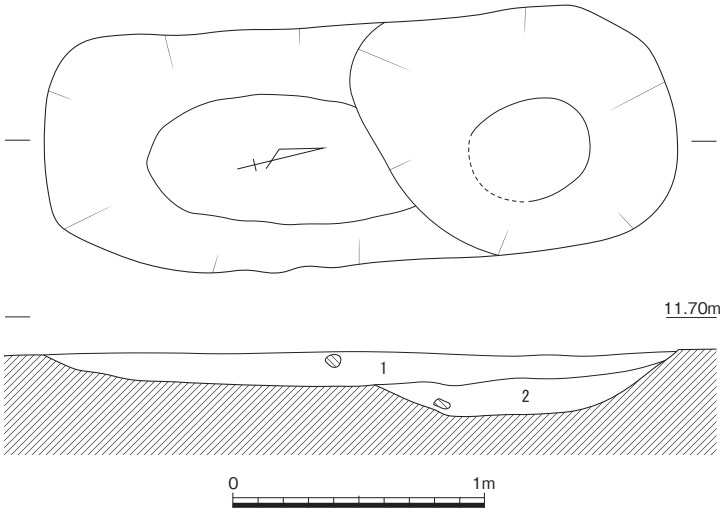
土坑209（第13・387図）

土坑202の南で、土坑203の東に位置する。平面形は不整方形を呈し、長軸137㎝、短軸125㎝を測る。底面は平らであるが、南東隅に２カ所、深さ10㎝程度のくぼみがある。断面形は逆台形で、検出面から底面までの深さは28㎝。埋土は灰黄褐色細砂で、ベース層土である明黄褐色細砂をブロック状に含んでいた。出土遺物は1902・1903の土器や、鉄製ヤリガンナと推測されるM43がある。甕1902は口縁端部が上下に大きく拡張し、その上面には凹線が巡る。体部内面上半には横あるいは斜め方向のハケがある。高杯1903は脚裾部に三角形の刺突文が巡り、裾端部はやや肥厚している。土器の特徴から弥・後・Ⅰである。　（松尾）

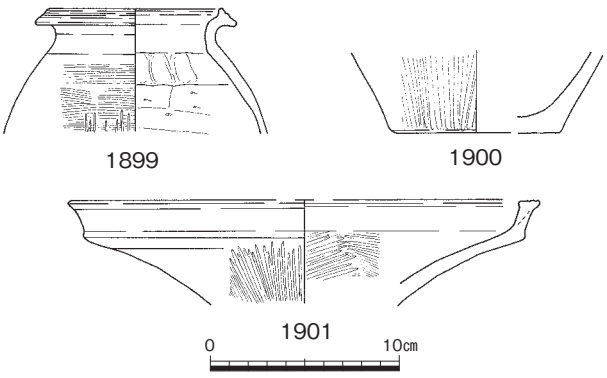


1　灰黄褐色(10YR5/2)
シルト混細砂

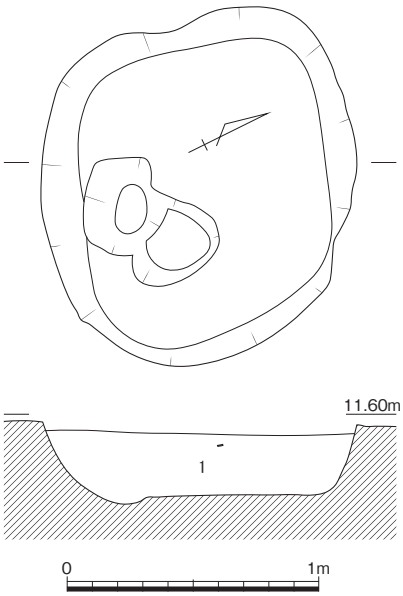
第385図　土坑207（1/30）・出土遺物（1/4）



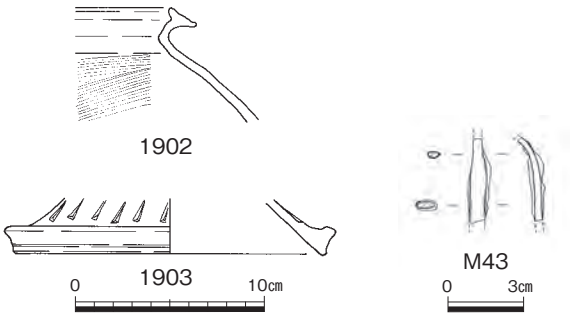
1　灰黄褐色(10YR4/2)細砂　　2　灰黄褐色(10YR5/2)細～粗砂



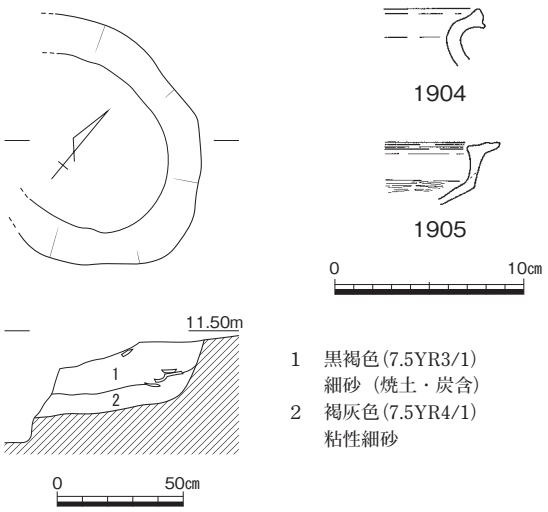
第386図　土坑208（1/30）・出土遺物（1/4）



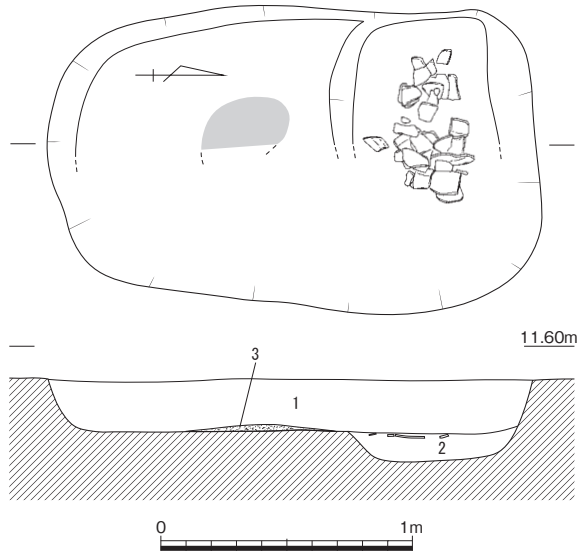
1　灰黄褐色(10YR5/2)細砂



第387図　土坑209（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）



第388図　土坑210（1/30）・出土遺物（1/4）



土坑210（第13・388図）

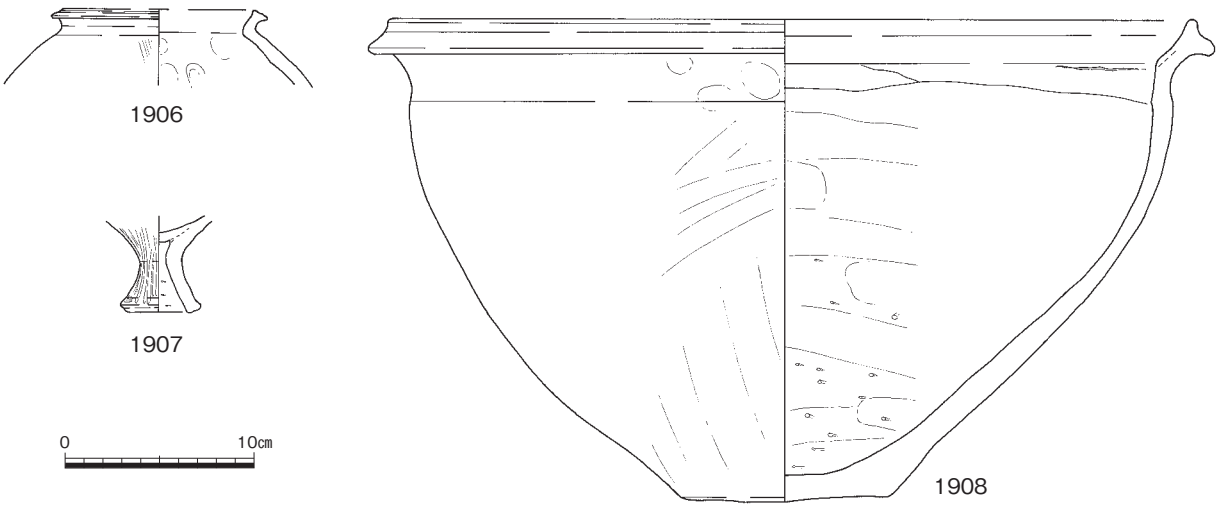
土坑209の北東約13ｍに位置する。土坑西部は竪穴住居45に切られ、消失している。推定長96㎝、推定幅64㎝、深さ25㎝を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面は南西へ僅かに傾斜している。埋土は上層の黒褐色細砂と下層の褐灰色粘性細砂の２層に分かれ、上層には焼土・炭が含まれていた。

遺物は少なく、甕の口縁部**1904**、高杯の口縁部**1905**などが出土している。時期は弥・後・Ⅰ～Ⅱと考えられる。（森本）

土坑211（第13・389図、図版91）

土坑210の南約10ｍに位置する。隅丸長方形を呈し、長さ193㎝、幅117㎝、深さ32㎝を測る。床面は南半部に一段高い平坦面を形成し、中央には被熱面が認められた。被熱面は直径３ｍ程の範囲に広がると考えられ、上部には炭層が堆積していた。北側はさらに10㎝程深く掘り込まれ、平面形は楕円形を呈す。遺物は北側に集中し、床面から10㎝程浮いた状態で出土した。

遺物は、甕**1906**、高杯**1907**、鉢**1908**などが出土している。甕**1906**は口縁部を上下に拡張させ、凹線文が巡る。鉢**1908**は口径42.2㎝と大形で、口縁部を上下に拡張させる。時期は弥・後・Ⅱ～Ⅲである。（森本）

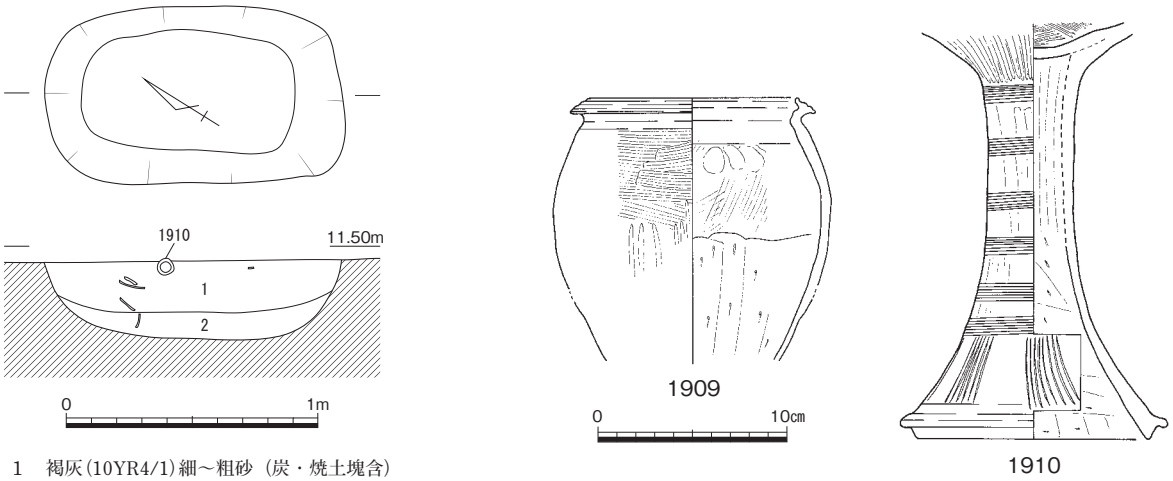


第389図　土坑211（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑212（第13・390図、図版60－２）

土坑211の東約４ｍに位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、長さ118㎝、幅70㎝、深さ31㎝を測る。断面形は逆台形を呈する。床面は南東側へ僅かに傾斜するがほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。埋土は２層に分かれ、レンズ状に堆積していた。上層は炭・焼土塊を含んでいた。

遺物は、甕**1909**、高杯**1910**などが出土している。甕**1909**は口縁部を上下に拡張させ、凹線文が巡る。高杯の脚部**1910**は裾部に段を持つ。脚は下部に縦方向の櫛描き文、その上に７条の櫛描き文を６段巡らせる。時期は弥・中・Ⅲである。　（森本）

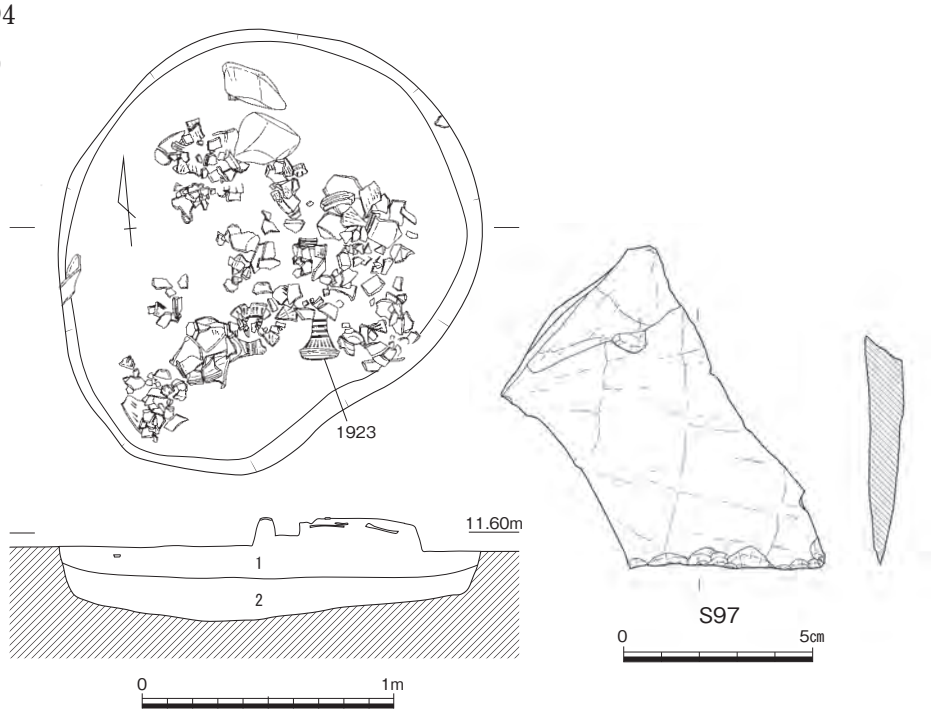


1　褐灰(10YR4/1)細～粗砂（炭・焼土塊含）
2　暗褐(10YR3/3)細砂

第390図　土坑212（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑213（第13・391～394図、図版60－３、写真29）

土坑212の南約７ｍに位置する。不整円形を呈し、長さ176㎝、幅168㎝、深さ40㎝を測る。断面は逆台形を呈し、壁面は外傾して立ち上がる。床面はほぼ平坦だが、西側が少し低くなっている。埋土は暗褐色細～粗砂と灰黄褐色細砂の２層に分かれ、レンズ状に堆積している。上層から大量の土器が出土し、一括で廃棄された様子が窺える。

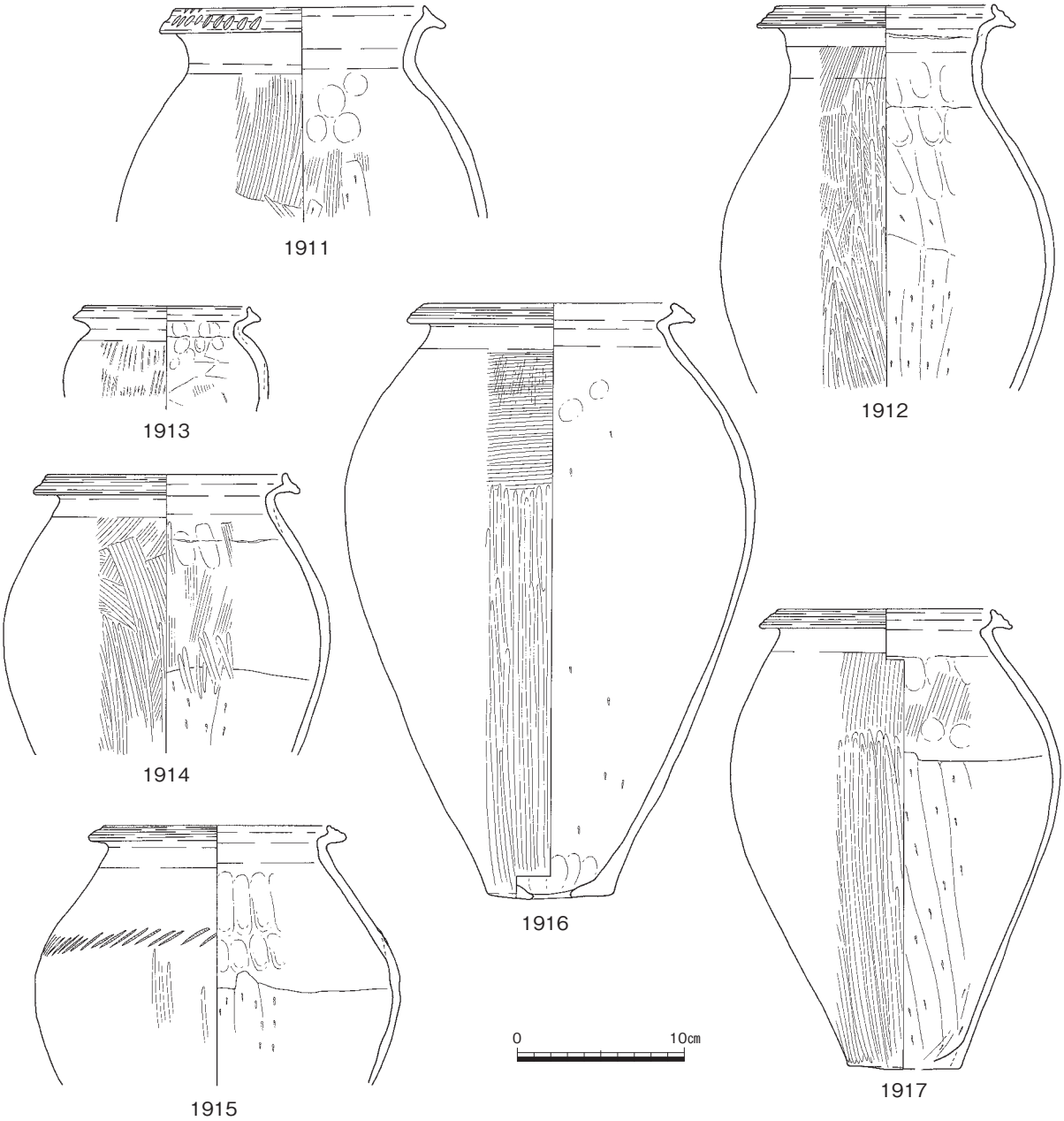


1　暗褐色(10YR3/3)細～粗砂
2　灰黄褐色(10YR4/2)細砂

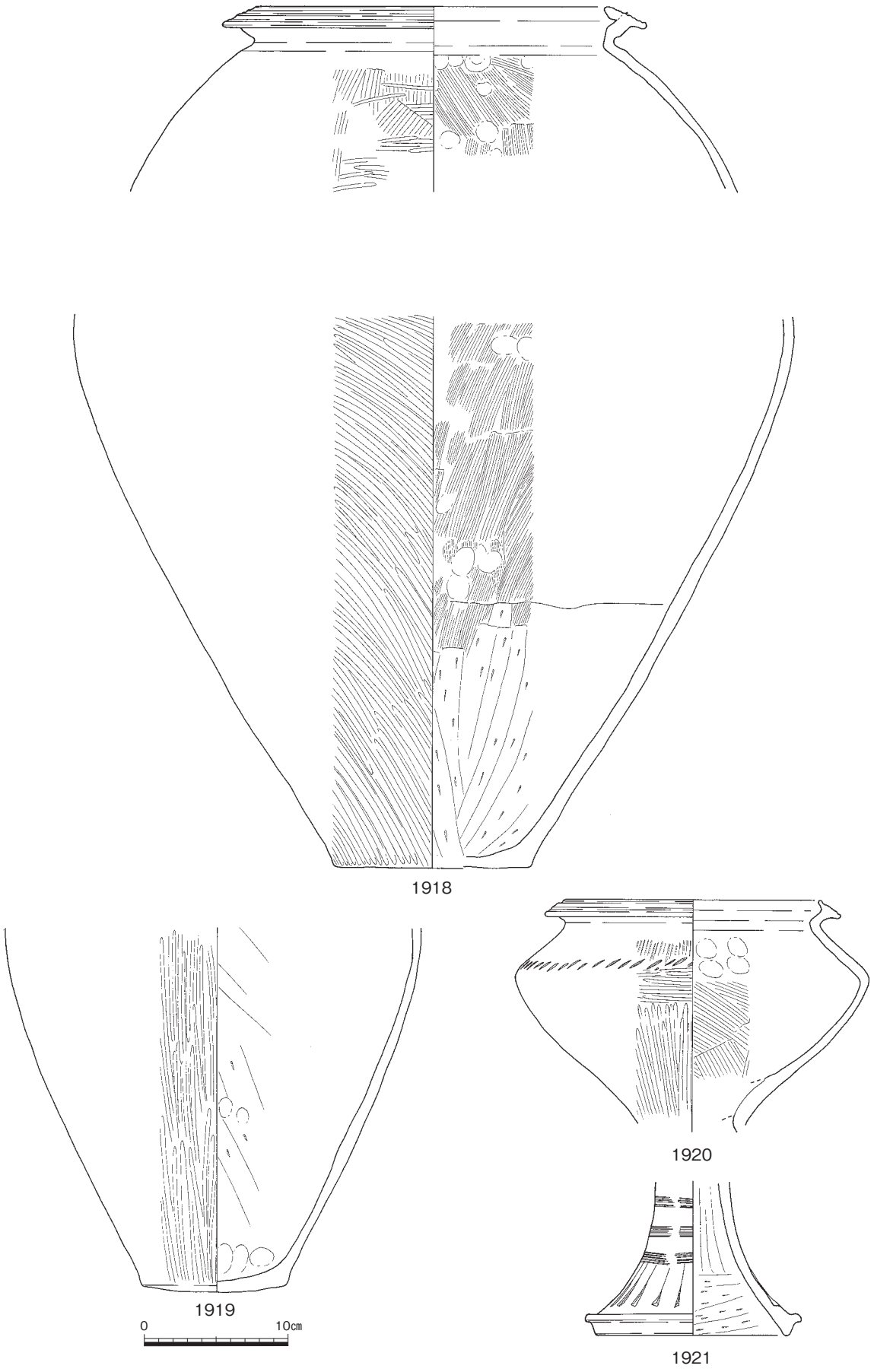
第391図　土坑213（1/30）・出土遺物①（1/2）

写真29　土坑213調査風景
（北から）

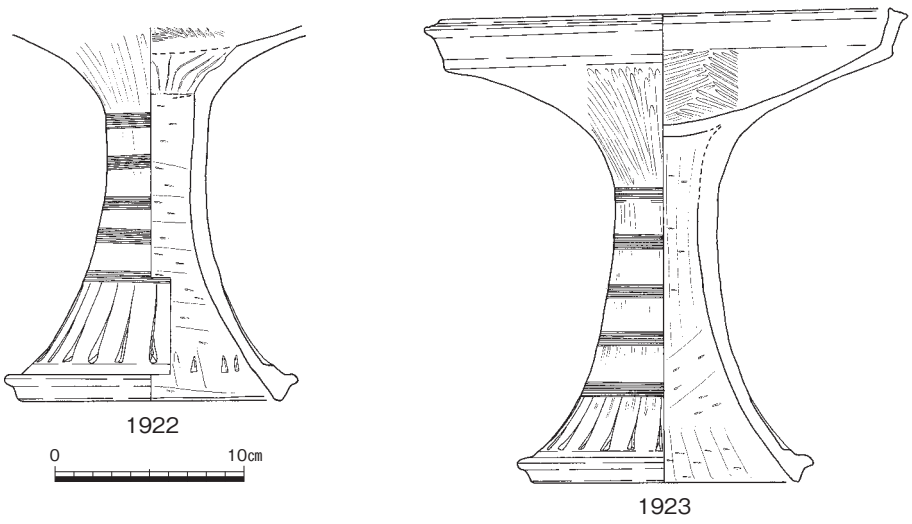
遺物は、壺1911・1912、甕1913～1919、台付鉢1920、高杯1921～1923、スクレイパーS97などが出土している。壺・甕共に口縁部を上下に拡張させ、凹線文が巡る。外面はハケ調整後、下半はヘラミガキ、内面は胴部下半までヘラケズリを施している。壺1911・1912は胴部に最大径を持つが、張りは弱くほっそりとした形態である。1911は口縁部に刻み目が施されている。甕は大きさによって小形の1913、中形の1914～1917、大形の1918・1919に分かれるようである。胴部はやや張りのある形態をとる。甕1915は肩部に刻み目を施している。高杯1921～1923は脚裾部に段を持つ。脚部には三角形



第392図　土坑213出土遺物②（1/4）



第393図　土坑213出土遺物③（1/4）

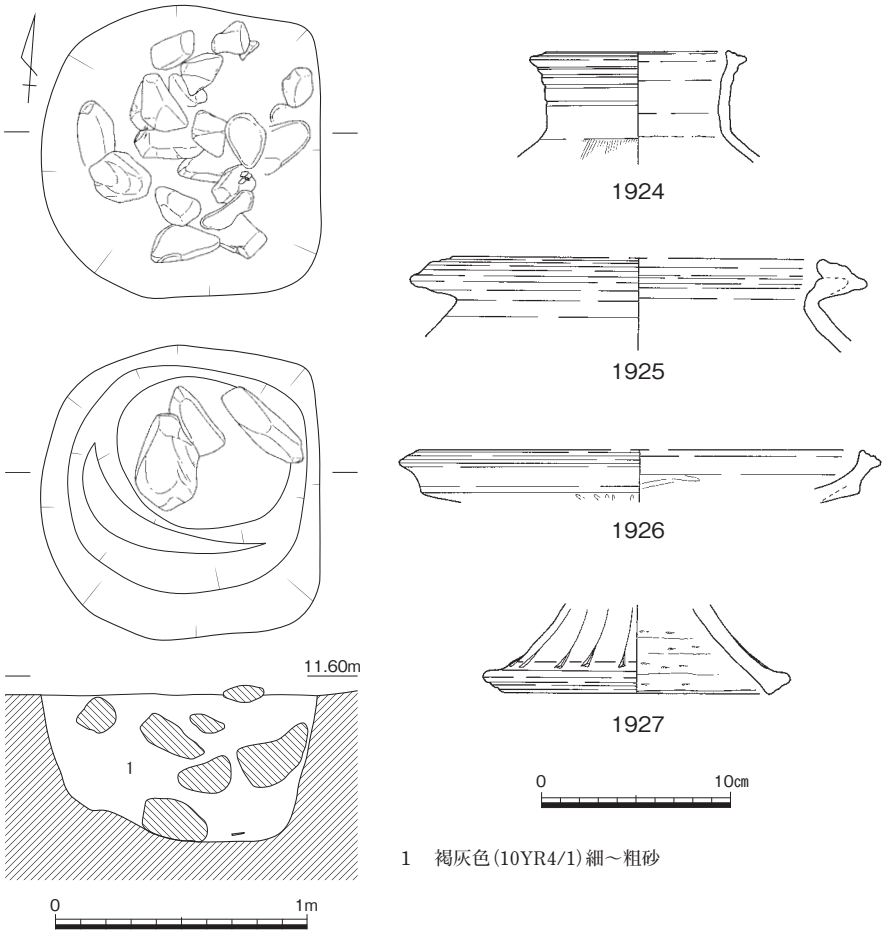


第394図　土坑213出土遺物④（1/4）

の透かし孔、上部には５段の櫛描き文が巡る。口縁部は端部を上方に拡張させ、凹線文が巡る。スクレイパーS97はサヌカイト製の剥片で、剥離調整はあまりみられない。下側縁部に使用痕が残る。遺物の特徴には古い様相もみられるが、弥・後・Ⅰに位置付けられる。　（森本）

土坑214（第13・395図、図版61－１）

土坑213の南東に位置する。平面形は不整方形を呈し、規模は長軸117㎝、短軸109㎝を測る。断面形は逆台形で、検出面から底面までの深さは58㎝。埋土は褐灰色細砂から粗砂で、10～30㎝大の礫を多く含んでいた。検出した礫に規則性はなく、埋土の上層から底面にかけて断続的に出土している。土坑を意図的に埋め戻す際に、故意に投棄された結果であろうか。



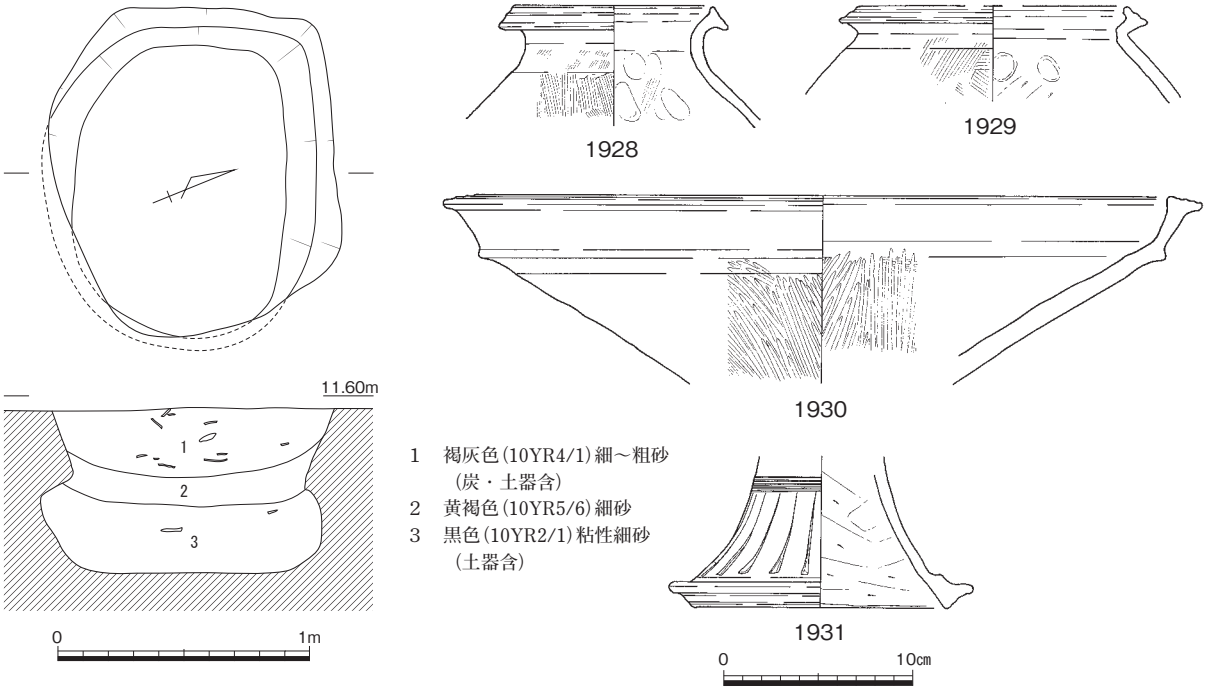
第395図　土坑214（1/30）・出土遺物（1/4）

埋土中からは土器1924～1927が出土している。1924は壺、1925は甕、1926・1927は高杯。甕1925は口縁端部を上下に拡張し、端面に凹線を施す。高杯1926の口縁上端部の拡張は強くない。脚裾部1927の透かしは貫通せず、痕跡的になっている。土器の特徴や調査状況から弥・後・Ⅰの時期に比定できよう。　（松尾）

土坑215（第13・396図、図版61－２）

土坑214の西約２ｍに位置する。断面形がフラスコ状の袋状土坑である。平面形は不整円形を呈し、長さ131㎝、幅112㎝、深さ65㎝を測る。埋土は３層に分かれる。第１層は褐灰色細～粗砂で炭を含み、第２層は黄褐色細砂、第３層は黒色粘性細砂でグライ化していた。遺物は各層から出土しているが、特に第１層で多く認められた。

遺物は、壺**1928**、甕**1929**、高杯**1930**・**1931**などが出土している。壺・甕とも口縁部を拡張させ、凹線文が施されている。高杯の口縁部**1930**は垂直気味に立ち上がる。端部上面を拡張させ平坦面を作り、凹線文が巡る。時期は弥・後・Ⅰである。（森本）

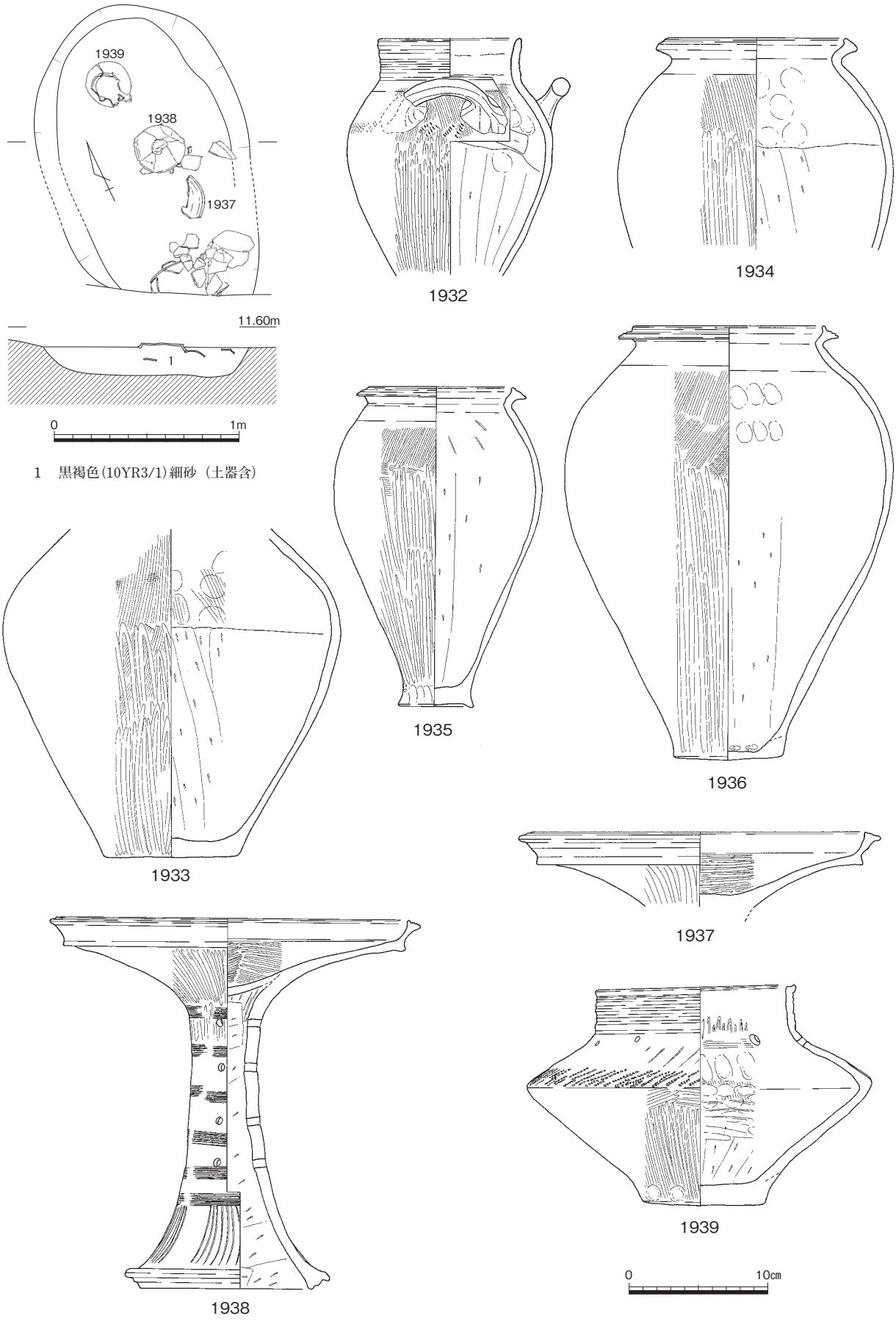


第396図　土坑215（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑216（第13・397図、図版61－３・91）

土坑215の南西約３ｍに位置する。土坑南側の一部は、土層観察用の側溝により消失した。平面形は楕円形を呈するものと推測され、推定長160㎝、幅111㎝、深さ15㎝を測る。断面形は逆台形を呈する。床面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。埋土は黒褐色細砂で、大量の土器が含まれていた。遺物は土坑全体に散在しており、大半は床面から10㎝程浮いた状態で出土した。これらの土器は一括で廃棄されたものと考えられる。

遺物は、把手付壺**1932**、壺**1933**、甕**1934**～**1936**、高杯**1937**・**1938**、鉢**1939**などが出土した。把手付壺は口縁部が上方に立ち上がり、凹線文が巡る。甕**1934**～**1936**は肩部がやや張っている。口縁端部は上下に拡張させ凹線文が巡る。内面のヘラケズリは肩部付近まで及ぶ。高杯**1938**は長脚で、脚裾部には段を持つ。脚部には櫛描き文と透かし孔が交互に施され、下部の透かし部分には縦方向の篦描き文が施される。口縁端部は上面が拡張され、凹線文が巡る。鉢は胴部が強く張り、算盤状の形である。口縁は上方に立ち上がり、凹線文が巡る。古い様相もみられるが、弥・後・Ⅰと考えられる。（森本）

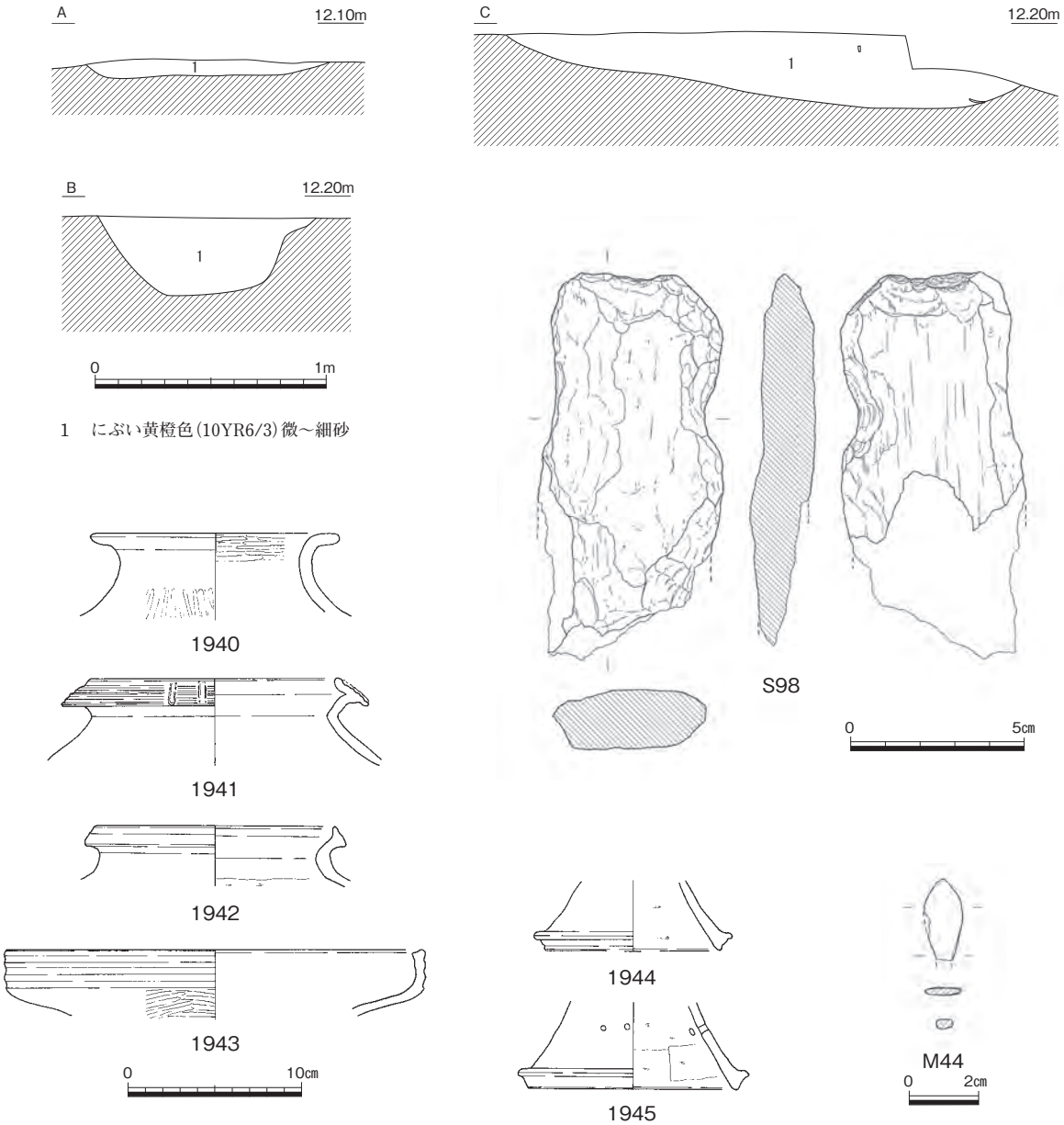


第397図　土坑216（1/30）・出土遺物（1/4）

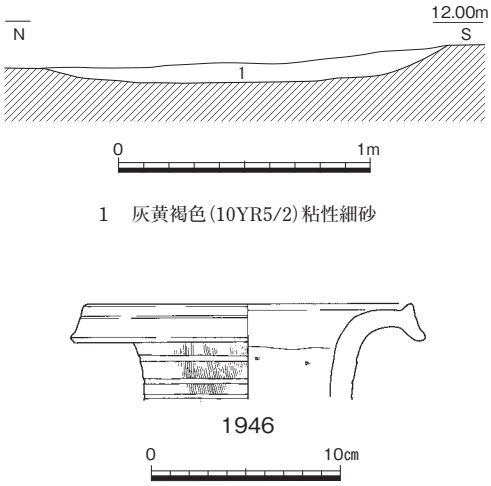
９　溝

溝１（第12・398図、図版65－１・110）

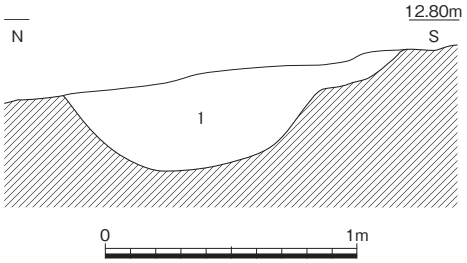
Ｉ05～09に位置しており、河道１の東側の居住域の北側に弧を描くように掘削されている溝である。一部東側では竪穴住居と重複が見られる。規模は幅93～105㎝、深さ８～34㎝、検出した全長は、およそ100ｍに及ぶものである。基盤層に礫を多く含む箇所でも同じ深度で掘削を行っている。埋土はにぶい黄橙色微～細砂の単一層である。出土遺物には、壺**1940**・**1941**、甕**1942**、高杯**1943**～**1945**、緑色片岩製の石鏃**Ｓ98**、鉄鏃**Ｍ44**などがある。これらの遺物には時期幅があり、弥・中・Ⅲ～弥・後・Ｉのものが含まれている。重複のある竪穴住居は先後関係から溝１を削平しており、また遺物からも溝１より新しい時期のものであると考えられることから、弥・中・Ⅲに居住域の北限の境として掘削された溝で、溝が埋没したのち、居住域が北側、東側へ拡大した可能性が考えられる。　（圍）



第398図　溝１（1/30）・出土遺物（1/4・1/2）



第399図　溝２（1/30）・出土遺物（1/4）



溝２（第12・399図）

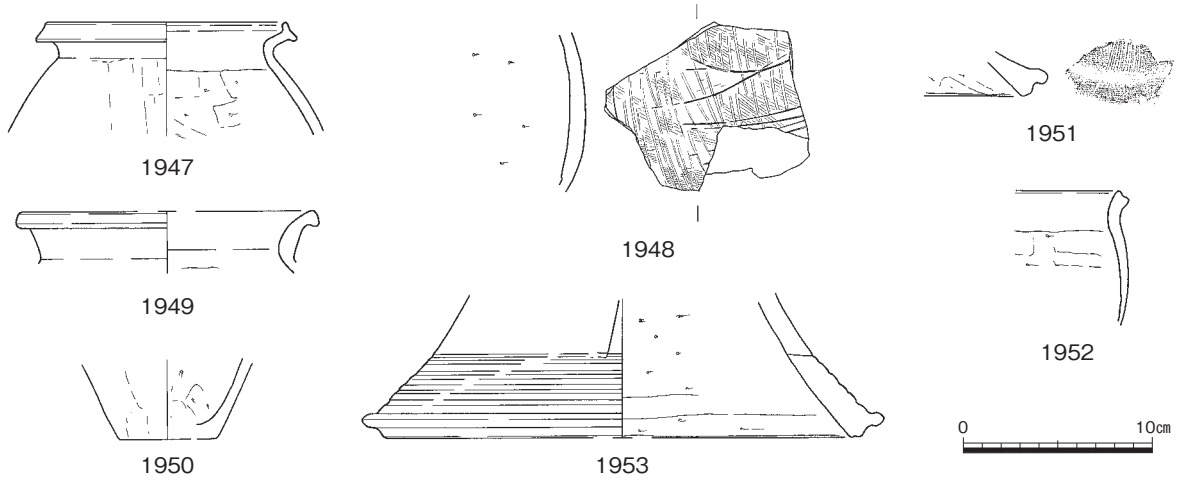
幅は最大で1.8ｍと広く浅い溝で、溝１の北側に並走する。西端は溝１に重複し、東端は削平されている。溝１との関係から、古い流路の可能性が考えられる。検出面の標高は11.90ｍ、底面の標高は11.80ｍである。

出土遺物は後期の土器細片のみである。長頸壺**1946**は溝２東端調査中に出土したが、ここでは溝１と遺物の分離がうまくできておらず、溝１から混入した可能性もある。切り合いから溝１より古く位置付けられることから、後期の早い段階には埋没したと考えられる。　（渡邉）

溝３（第12・400図）

微高地上で、竪穴住居６の東に位置する。大きく弧を描くが北東端は削平され、西端は調査区外のため全容は不明である。断面図は調査区東壁で確認したもので、第127図第24層が溝３埋土に対応する。検出面の標高12.7ｍ、底面の標高12.20ｍ、上端幅135㎝を測る。

出土土器には中期後葉～後期前葉の幅があるが、量的には後期前葉が多い。**1948**は壺体部片で、細い篦描き沈線文が施されている。検出状況と併せて考えて、弥・後・Ⅰには埋没したと考えられる。　（渡邉）

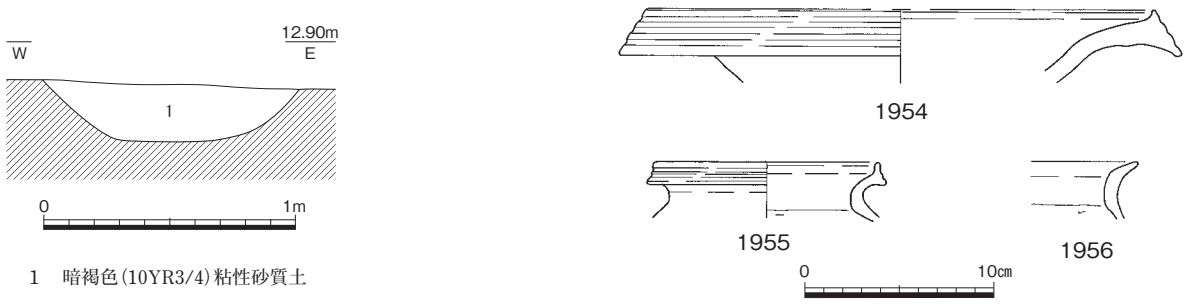


第400図　溝３（1/30）・出土遺物（1/4）

溝４（第12・401図）

溝３南側に位置する。微高地上で南北方向に長約5.5ｍ分検出した。南側は遺構の重複が激しく、確認できていない。検出面の標高は12.70ｍ、底面の標高は12.50ｍである。

検出状況から土坑29～31より新しく位置付けられ、後期前半には埋没したと考えられる。（渡邉）

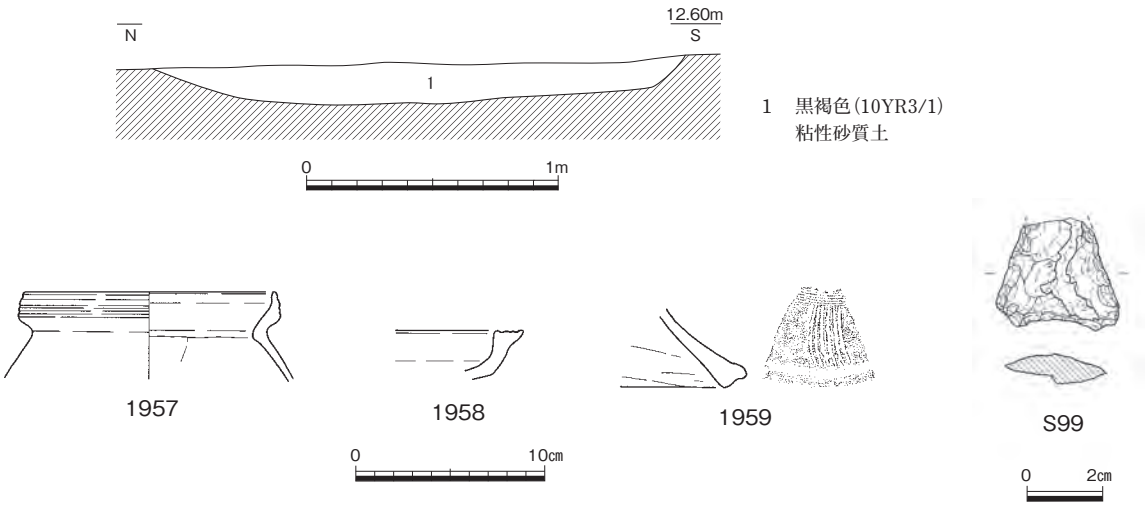


第401図　溝４（1/30）・出土遺物（1/4）

溝５（第12・402図）

溝４の南東約15ｍに位置する。微高地が南東に下がる斜面肩口に立地し、斜面と並行する方向に走る。上面の標高は12.54ｍ、底面の標高は12.44ｍである。第127図第17層が溝５埋土に対応しており、微高地南東下がりより下位にあることが分かる。

出土土器には後期の中でも幅があるが、新しい様相の土器は斜面堆積からの混入の可能性が高く、高杯**1958**・**1959**の示す弥・後・Ⅰに埋没していたと考えられる。（渡邉）



第402図　溝５（1/30）・出土遺物（1/4・1/2）

溝６（第12・403図、図版65－２）

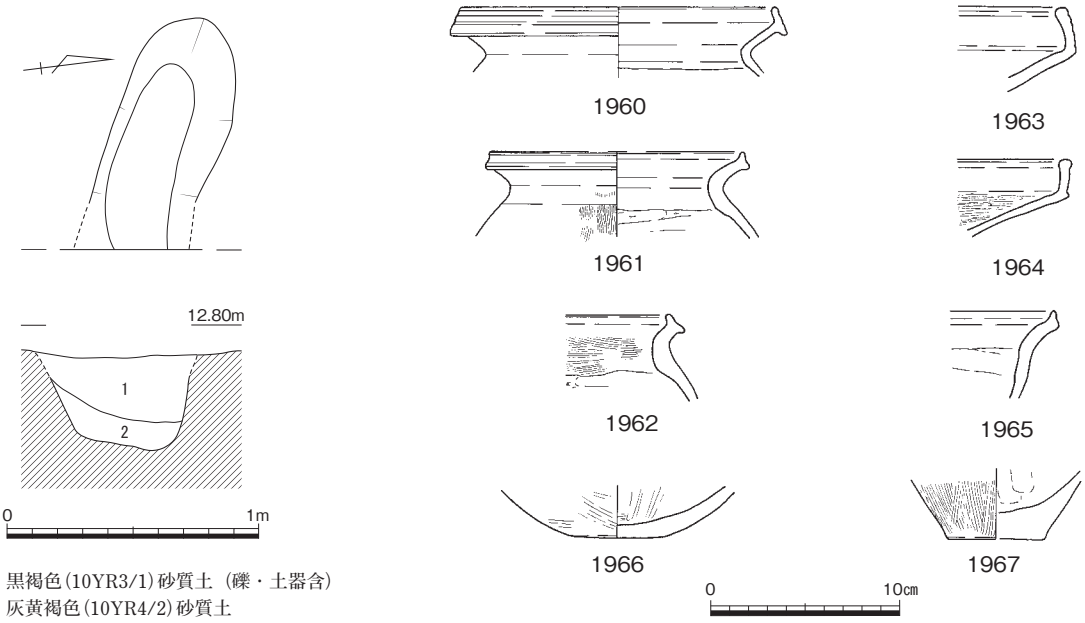
溝５の北東、土坑61の北に位置する。西端の一部を調査したのみである。幅60㎝と細いが深さ35㎝で断面逆台形を呈す、しっかりした溝である。先端も比較的急に立ち上がる。検出面は造成土直下で、標高12.70ｍ、底面の標高は12.30ｍである。

出土土器は少なく細片のみであるが、中期後葉と後期後半に分かれる。上部が撹乱されて混入した可能性もあるが、弥・後・Ⅲと考えておきたい。（渡邉）

溝７（第12・404・405図）

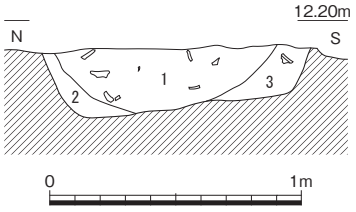
Ⅰ09の南東側からＪ09の北西側へ向かってほぼ東西方向へ走る。溝１とは直交する形である。竪穴住居24と竪穴住居25の間にあり、両者を区切るように位置している。

溝の上端幅は 106㎝、底面幅は83㎝である。確認面からの深さは27㎝で、底面の標高は 11.82ｍを測る。断面の形状は、逆台形を呈している。



1　黒褐色(10YR3/1)砂質土（礫・土器含）
2　灰黄褐色(10YR4/2)砂質土

第403図　溝６（1/30）・出土遺物（1/4）



1　褐灰色(10YR4/1)粘性微砂（炭・土器含）
2　灰黄褐色(10YR4/2)粘性微砂
3　褐灰色(10YR4/1)粘性微砂（にぶい黄橙色(10YR6/4)微砂～細砂（基盤層）多含）

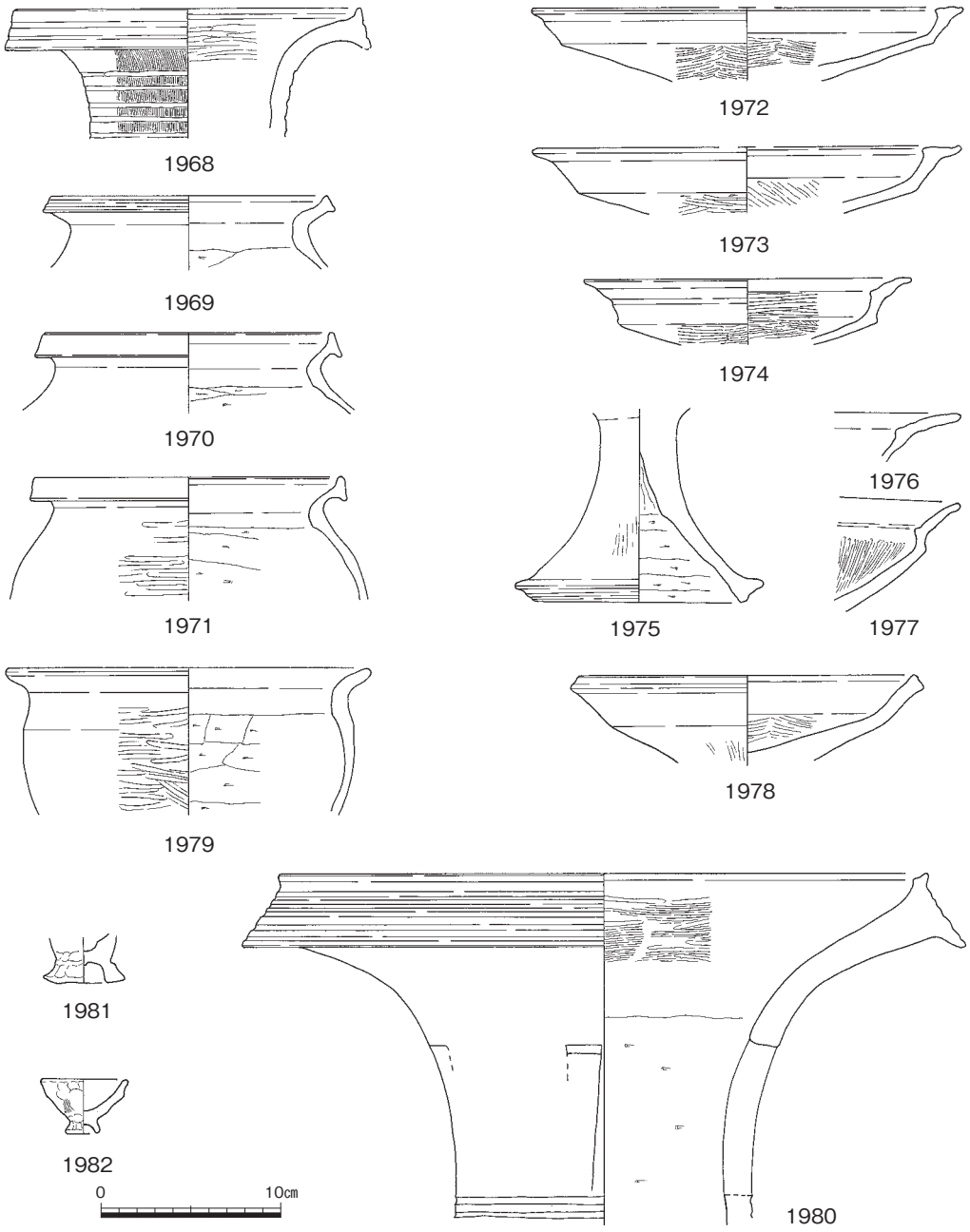
第404図　溝７（1/30）

覆土中からは、特に中央部付近の第１層を中心に、1968～1982などの比較的多くの遺物が出土する。1968は壺である。長頸壺の口縁部にあたる。1969～1971は甕である。端面に擬凹線が施される1969と、口唇部がつまみ出される1970・1971の２種類がある。1972～1978は高杯である。口縁部には、1972・1973のように斜めに立ち上がり端部に面を持つもの、1974・1976・1977のように屈曲して立ち上がり内側が強調されるもの、1978のように直に立ち上がるものがある。1979は鉢である。1980は器台である。1981は製塩土器の脚部である。1982は鉢形のミニチュア土器である。これらの土器は、弥・後・Ⅰと弥・後・Ⅱが中心で、一部は弥・後・Ⅲの様相もある。（小林）

溝８（第12・406・407図、図版65－３）

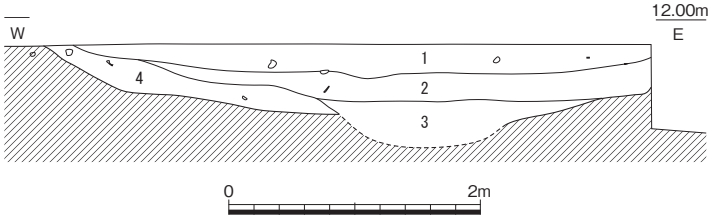
Ⅰ11の南側からH12の南東側に向けて北上する溝で、たわみ状に浅くなって終わりを迎える。東側隣に、ほぼ平行して溝９が走っている。本溝の西側は遺構密度が一端少なくなる箇所であり、東側は再び遺構が増え始めている。本溝の規模は、上端幅460㎝以上、底面幅412㎝以上である。確認面からの深さは75㎝以上で、幅の広さに対してあまり深度がなく、底面の標高は 11.20ｍを測る。断面形状は皿状を呈する。また遺物はどの層からも満遍なく出土し、一定の層に偏ることはない。覆土はシルト質の微砂と細砂が中心であり、その点では粘質系の覆土となる溝９とは一線を画する。どちらかというと溝というより、たまりのような機能が強かったと思われる。そう考えると北東方向部分が判然としなくなり、本来溝が伸びる部分に土坑139～142が存在するのもうなずける。

出土遺物には、以下のものがある。1983・1984は壺である。1983は長頸の壺で、1984は短頸の壺である。どちらも口縁部の振部が下につまみ出されている。1983は受部が肥厚しており、内側はミガキが施されている。1985～1988は甕である。口縁部の形状は、斜めに少し立ち上がる1987、直立気



第405図　溝７出土遺物（1/4）

味に立ち上がる1985・1986、上方に少しだけ持ち上がる1988などがある。胴部の外面調整は、最大径付近から下部にかけてヘラミガキがされる1986・1987と頸部まで施される２種がある。1989～

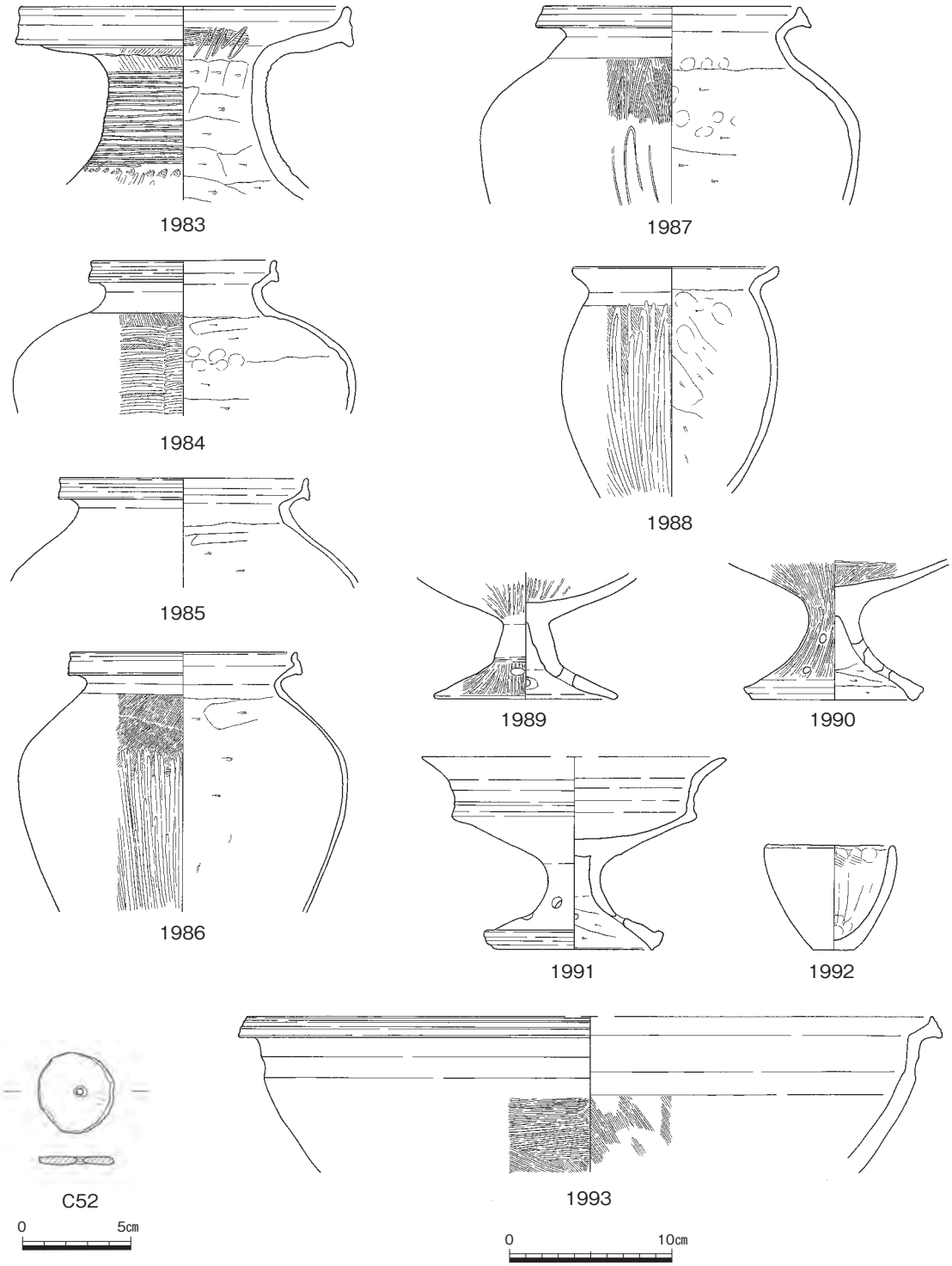


1　暗褐色(10YR3/4)シルト質微砂
2　黒褐色(10YR3/2)シルト質細砂
3　黒褐色(10YR2/1)シルト質細砂
4　暗褐色(10YR3/3)シルト質細砂

第406図　溝８（1/60）

1991は高杯である。脚部は「ハ」字に広がるのみの1989、端部に面を作る1990、端部の面の上方部分がつまみ上がる1991などがある。1989・1990は脚部を身に差し込むタイプで、1991は身の底面を充填させるタイプである。1992・1993は鉢である。1992は小型で、1993は大型である。1993の口縁端部は面を持っている。C52は円板状土製品で、紡錘車の可能性がある。

これらの遺物は、弥・後・Ⅱ～後・Ⅲまでの時期であり、ある程度長い期間の土器が入り交じっている。本遺構の時期も同様になると考えられる。（小林）



第407図　溝８出土遺物（1/4・1/3）

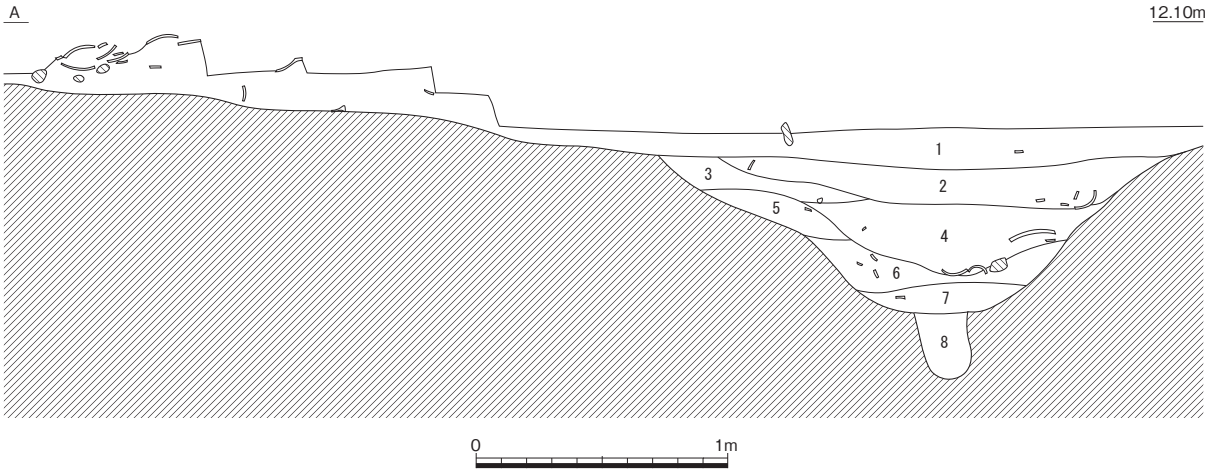
溝９（第12・13・408～415図、図版66－１・２・92・115、写真30）

Ｊ11の南側から北東方向へほぼ直線的に向い、Ｈ12の南側でやや内側に流れを変えＨ13の北東側に至って調査区外になる。この溝の東側は、Ｊ６付近にあった遺構密集地域が一度収まり、希薄になっていく場所である。それに比べ、西側では遺構密度が再び増加しており、これら遺構群の境界線ともいうべき位置付けになっている。

溝の規模は、上端幅205㎝、底面幅18㎝である。確認面からの深さは83㎝で、底面の標高は11.68ｍで、断面形状はＵ字形を呈する。覆土はシルト質土が主体である。第４層直下で遺物が大量に出土することもあり、溝の廃棄には二段階の工程があったと考えられる。最下層にあたる第８層は、幅約20㎝、深さ約25㎝ほどの規模が筋状に掘削されている。溝底部の竣工痕であった可能性があり、この溝の重要性が窺える。

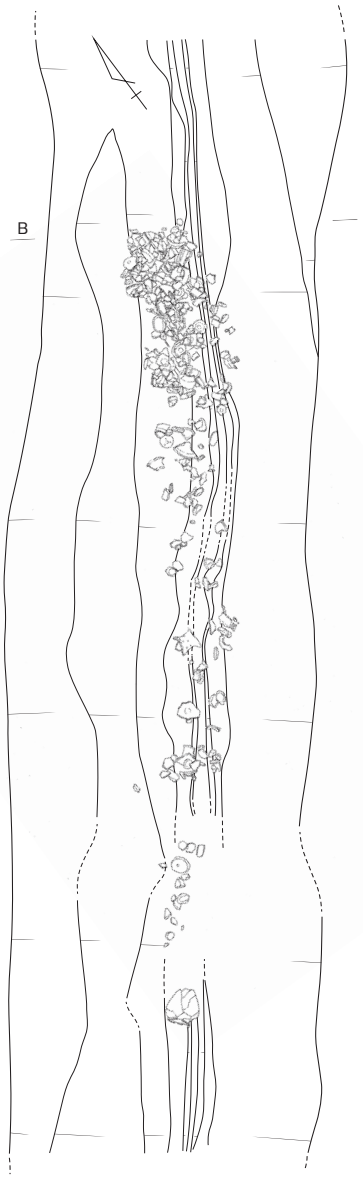
出土遺物は全層から満遍なく出土するが、前出のとおり第４層直下で多量の遺物を意図的に廃棄した可能性がある。また西側の肩口部にも同様の状況が見られる。西肩口出土の土器は、1994～1998が長頸壺である。1999は甕である。2000・2001は高杯である。2002は鉢である。2003は器台である。また覆土中の遺物には、以下のものがある。2004～2008は長頸壺である。2009～2013は壺である。2014・2015は台付直口壺である。2016・2017は台付壺である。2018～2033は甕である。2034～2036は装飾高杯である。2037～2044は高杯である。2045～2049は鉢である。2050～2054は台付鉢である。2055～2059は器台である。2060は装飾器台である。2061～2069ミニチュア土器である。Ｃ53～Ｃ55は分銅形土製品である。Ｃ56～Ｃ58は円板状土製品である。Ｃ59は土錘である。Ｃ60は不明土製品である。Ｓ100はスクレイパーである。Ｓ101～Ｓ104打製石包丁である。Ｓ105～Ｓ107は敲石である。Ｓ108～Ｓ111は砥石である。

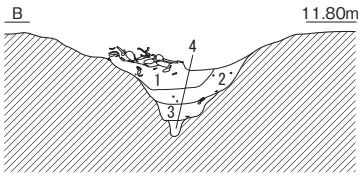
これらの遺物の大半は、弥・後・Ⅲの時期になる。西肩口付近と溝覆土から出土する土器との間に時期差があまり存在せず、ほぼ同時に遺棄されたと考えられる。出土遺物の中に分銅形土製品が複数含まれ、また長頸壺・高杯・器台などの器種が多く含まれるのが注目される。おそらく、この溝の廃棄自体が、儀式的であったことが窺える。（小林）



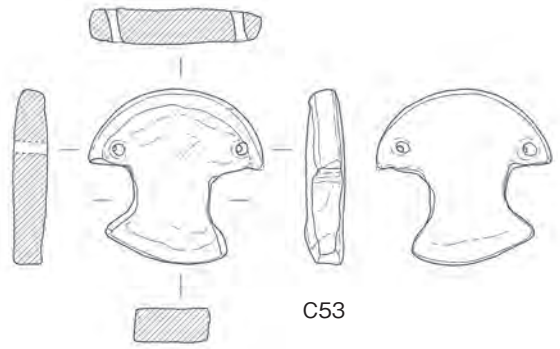
1　暗褐色(10YR3/3)シルト質微砂
2　黒褐色(10YR3/2)シルト質微砂
3　にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質微砂
4　褐色(10YR4/6)シルト質微砂
5　褐色(10YR4/6)シルト質微砂
6　灰黄褐色(10YR4/2)シルト質土
7　灰色(N4/)シルト質土
8　褐灰色(10YR4/1)シルト質土

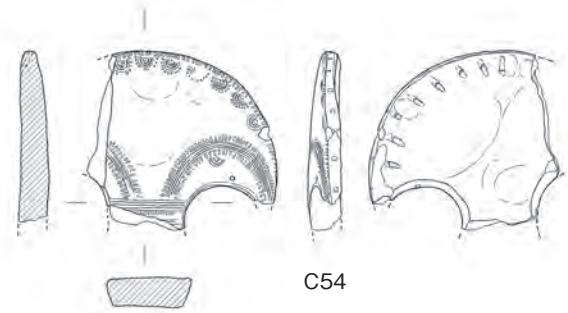
第408図　溝９（1/30）

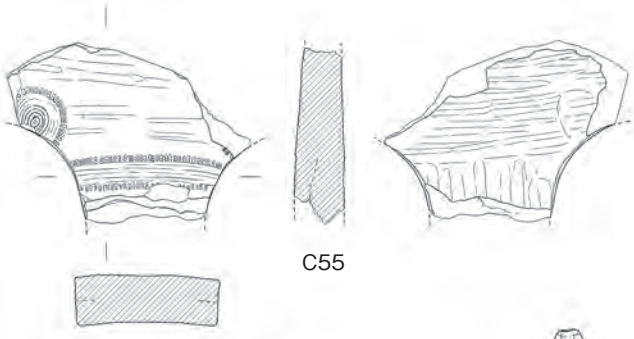


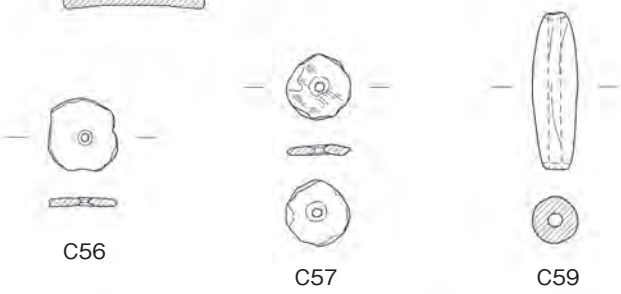


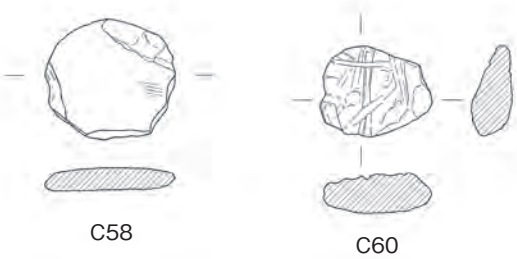
1　褐色(10YR4/6)シルト質微砂
2　灰黄褐色(10YR4/2)シルト質土
3　灰色(N4/1)シルト質土
4　褐灰色(10YR4/1)シルト質土



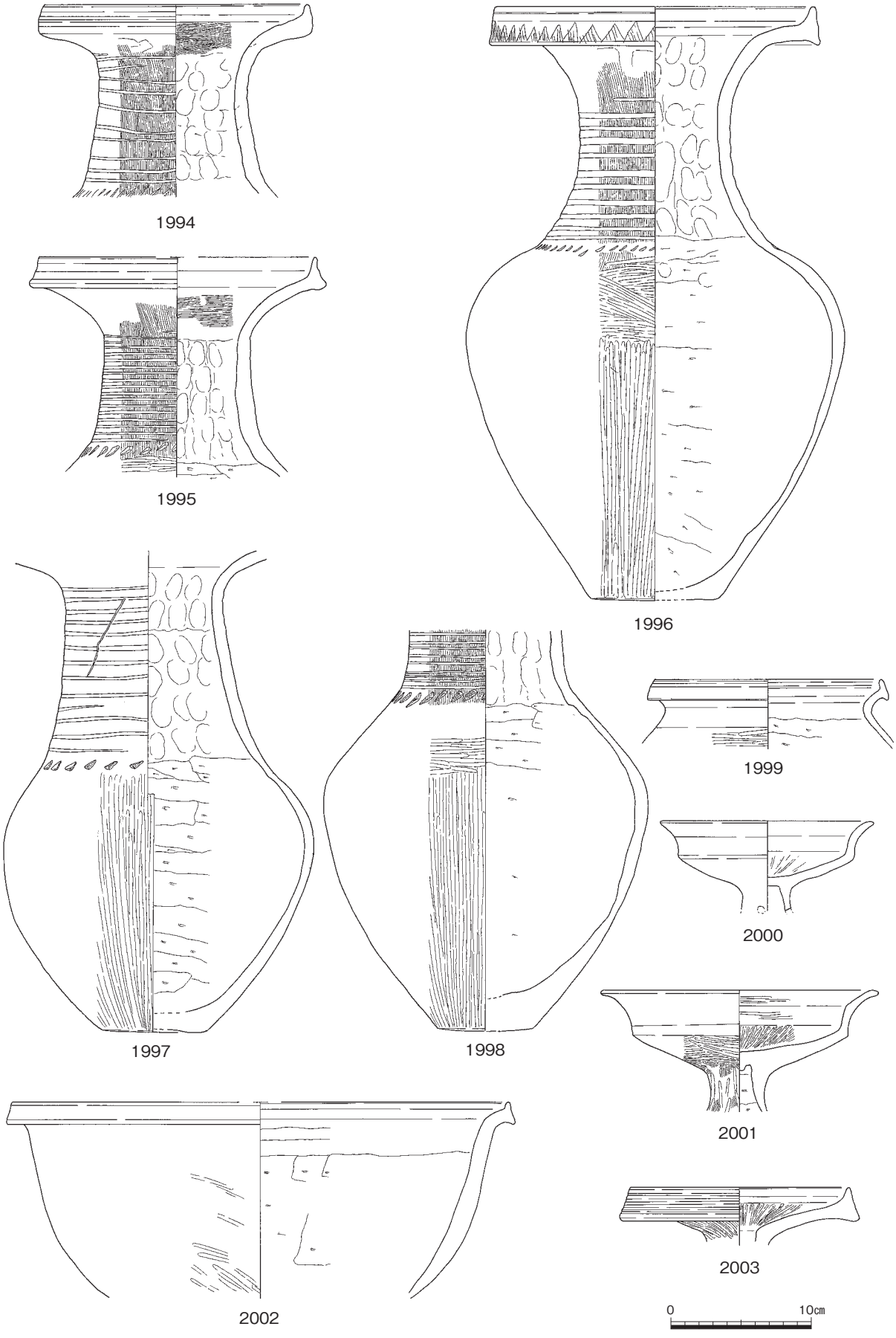




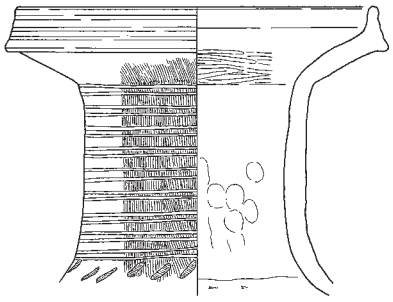


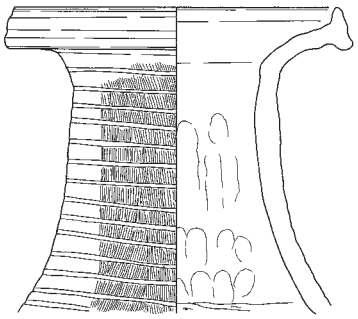


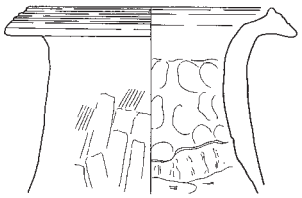
第409図　溝９遺物出土状況（1/80）・出土遺物①（1/3）

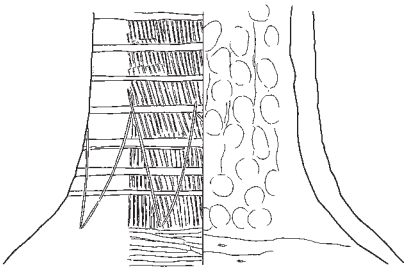


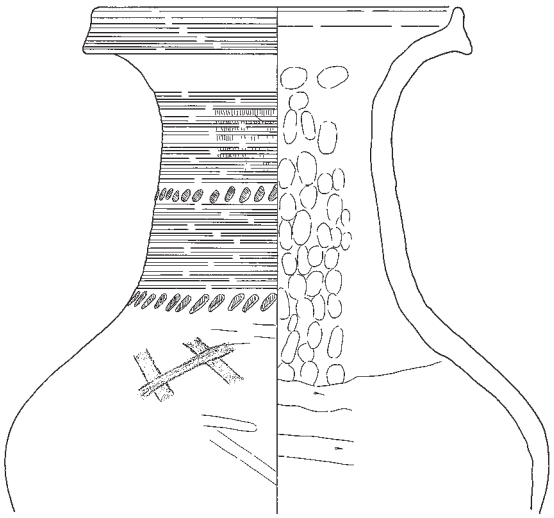
第410図　溝９出土遺物②（1/4）


2004

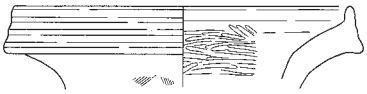

2005

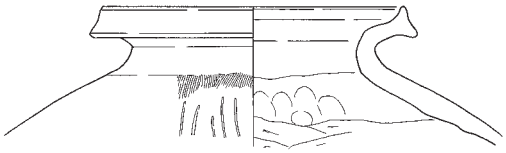

2006


2007

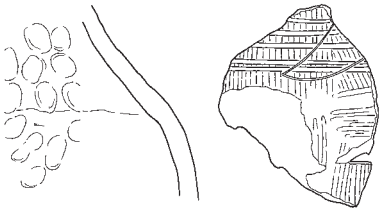

2008

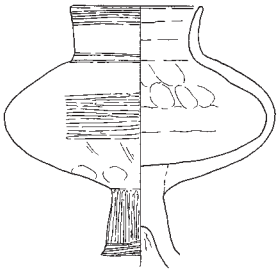
2009

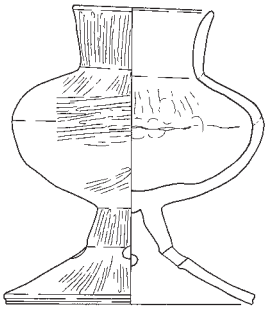

2010

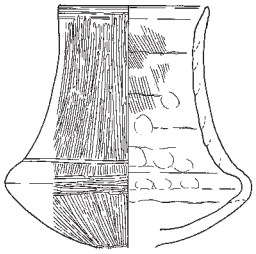

2011

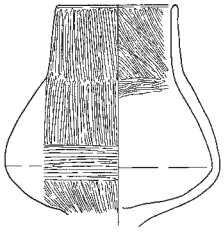
2012


2013


2014


2015


2016


2017

第411図　溝９出土遺物③（1/4）

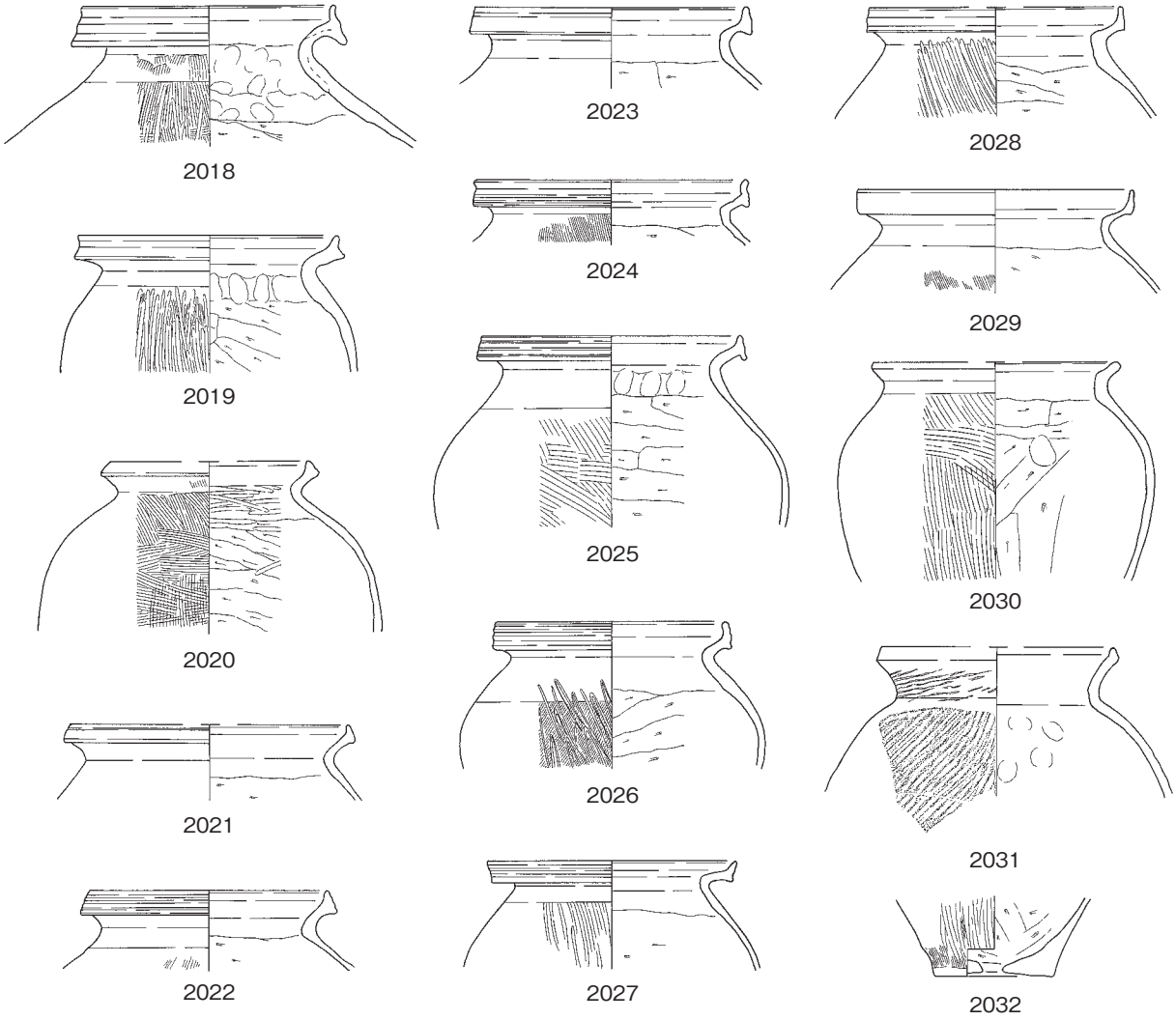
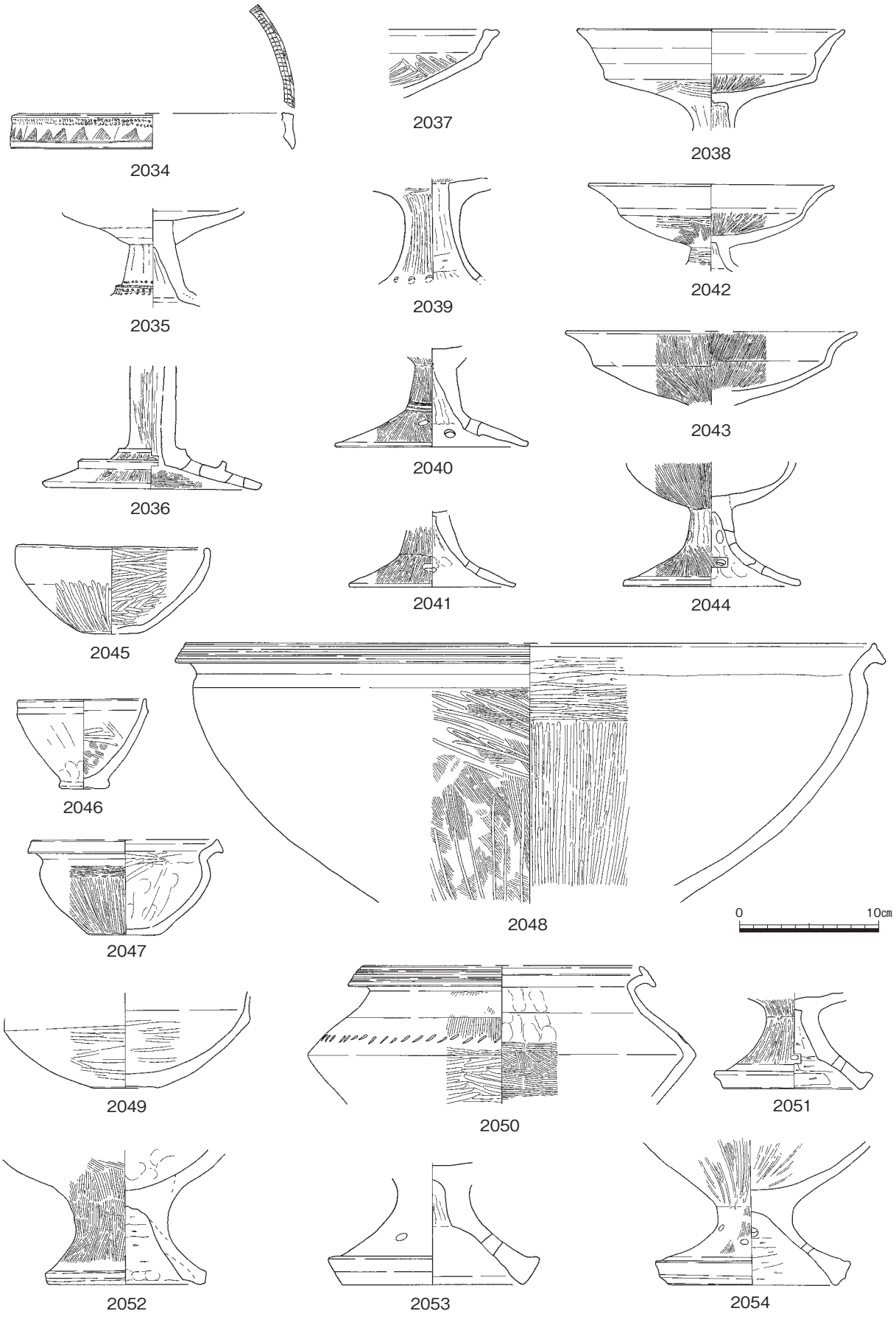
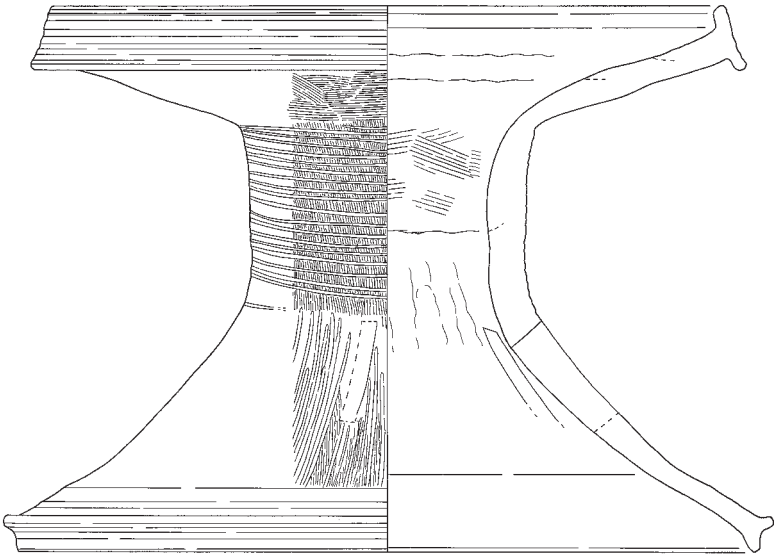


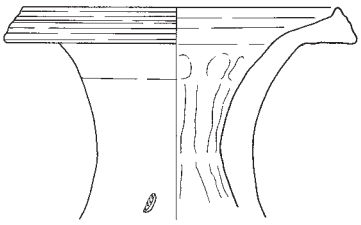
写真30　溝９調査風景（南西から）

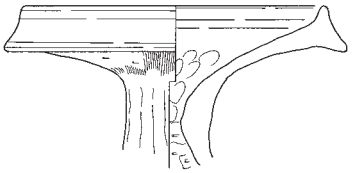
第412図　溝９出土遺物④（1/4）

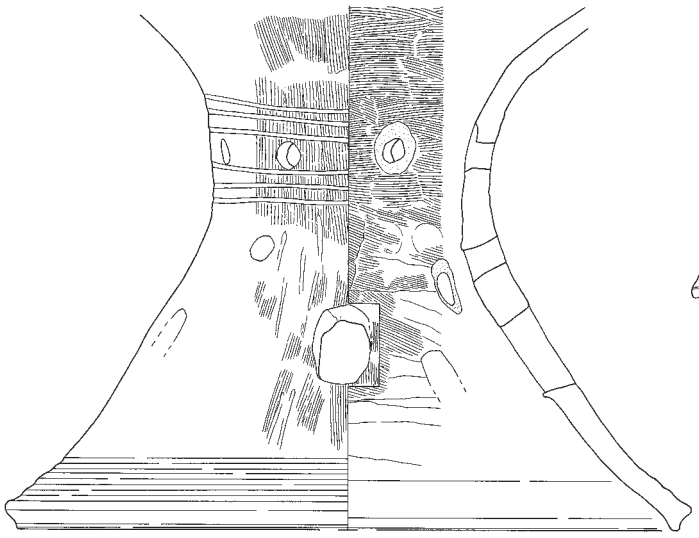


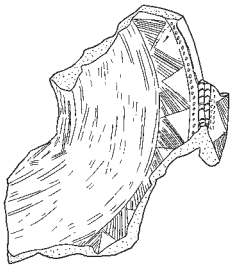
第413図　溝９出土遺物⑤（1/4）


2055


2058

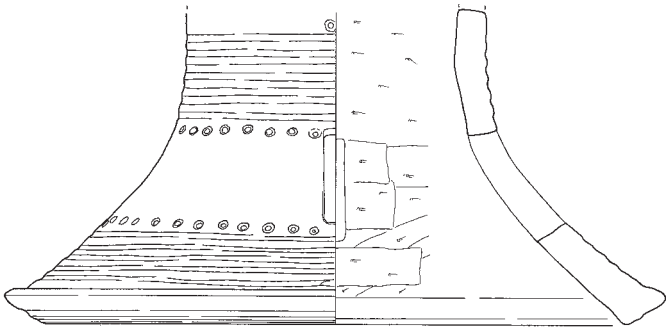

2059

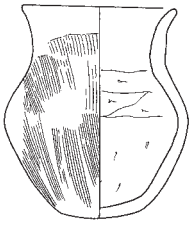

2056

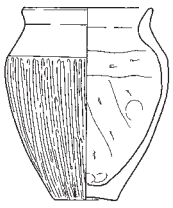


2060

0　10cm

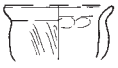

2057

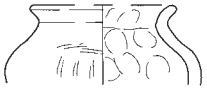

2061

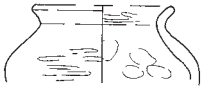

2062

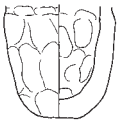
2063

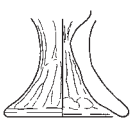
2064


2065

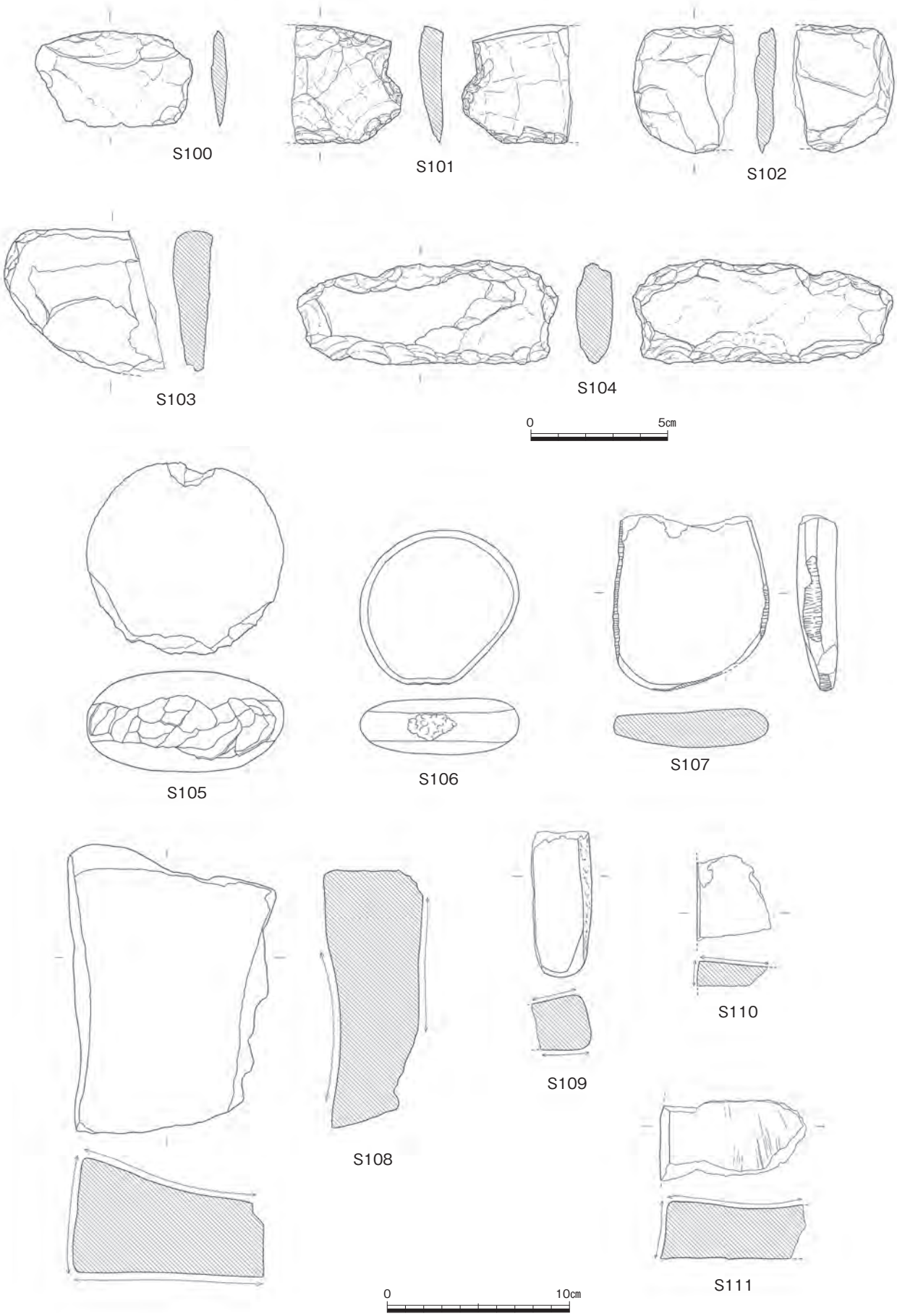

2066


2067


2068


2069

第414図　溝９出土遺物⑥（1/4）



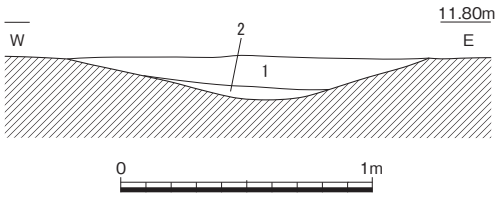
第415図　溝９出土遺物⑦（1/2・1/3）

溝10（第13・416図、図版66－３）

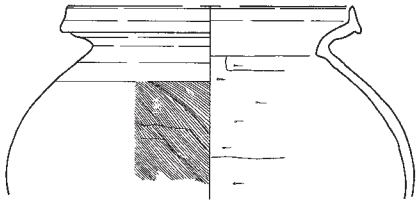
Ｈ14・Ｉ14に位置する溝である。南南西から北北東方向に直線的に流れ、東側の溝12や溝13の流走方向に近い。規模は、上端幅で142㎝、底面幅で22㎝、検出面からの深さで17㎝を測り、底面の標高は11.49ｍである。断面形は皿状を呈する。埋土は２層に大別されるが、いずれも粘性の砂質土である。遺物の出土状況にまとまる傾向は見られない。溝の時期は、弥・後・Ｉと考えられる。（髙田）

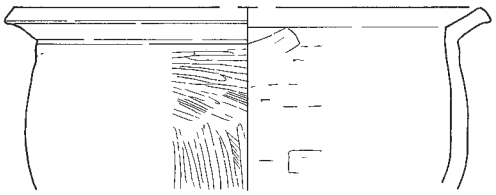
溝11（第13・417～419図、図版67－１・93）

Ｉ15の東側からほぼ真北に走り、Ｈ15の北東側でやや北東に振れながら流れる。東側にほぼ平行する形で溝12が流れている。規模は、上端幅254㎝、底面幅100㎝である。確認面からの深さは50㎝で、底面の標高は11.10ｍで、断面形状は椀形を呈する。覆土は粘質が主体であるが、最下層の第４層は砂質になる。



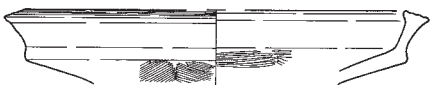
1　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性砂質土
2　灰黄褐色(10YR4/2)粘性砂質土（炭含）

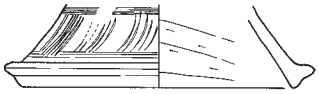

2070

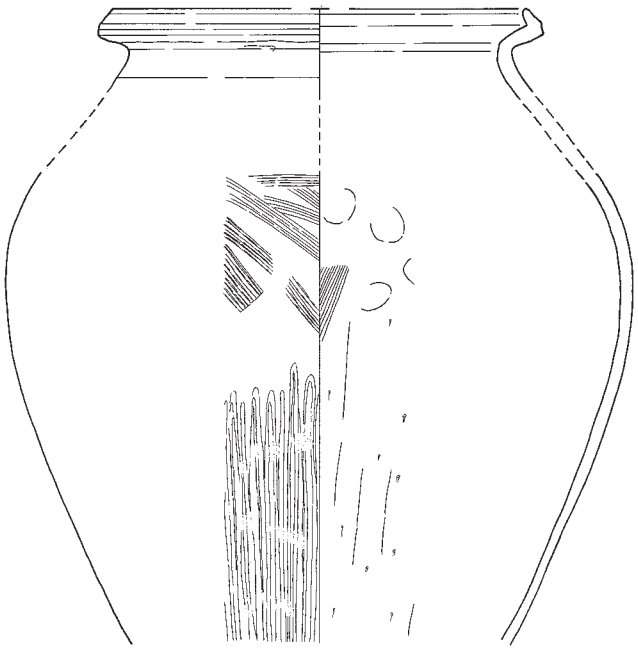

2071

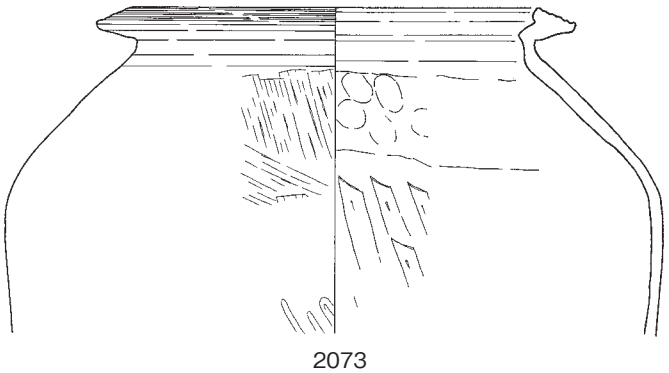
2074

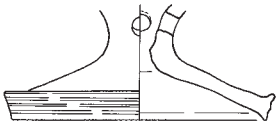
2075


2076


2077

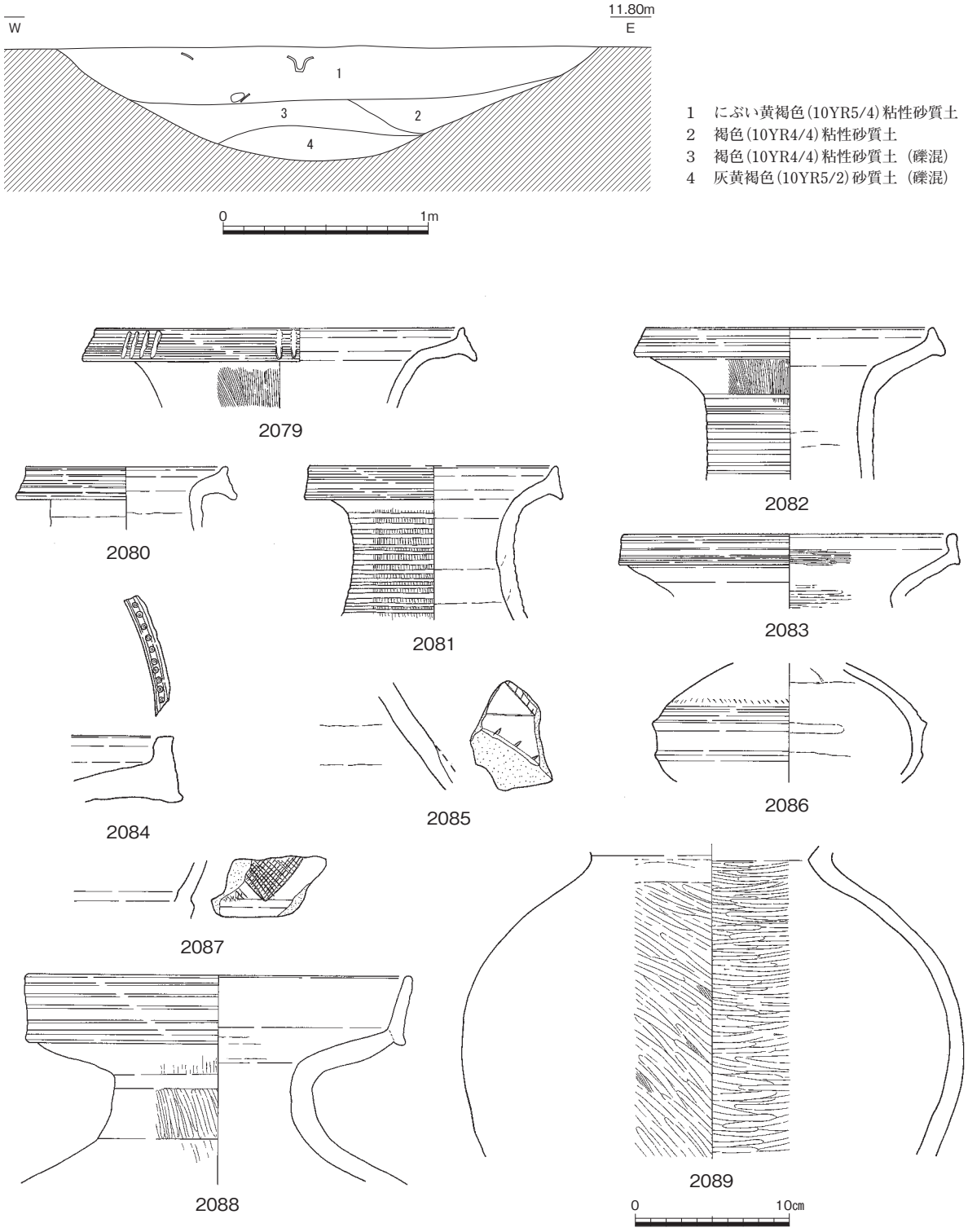

2072


2073

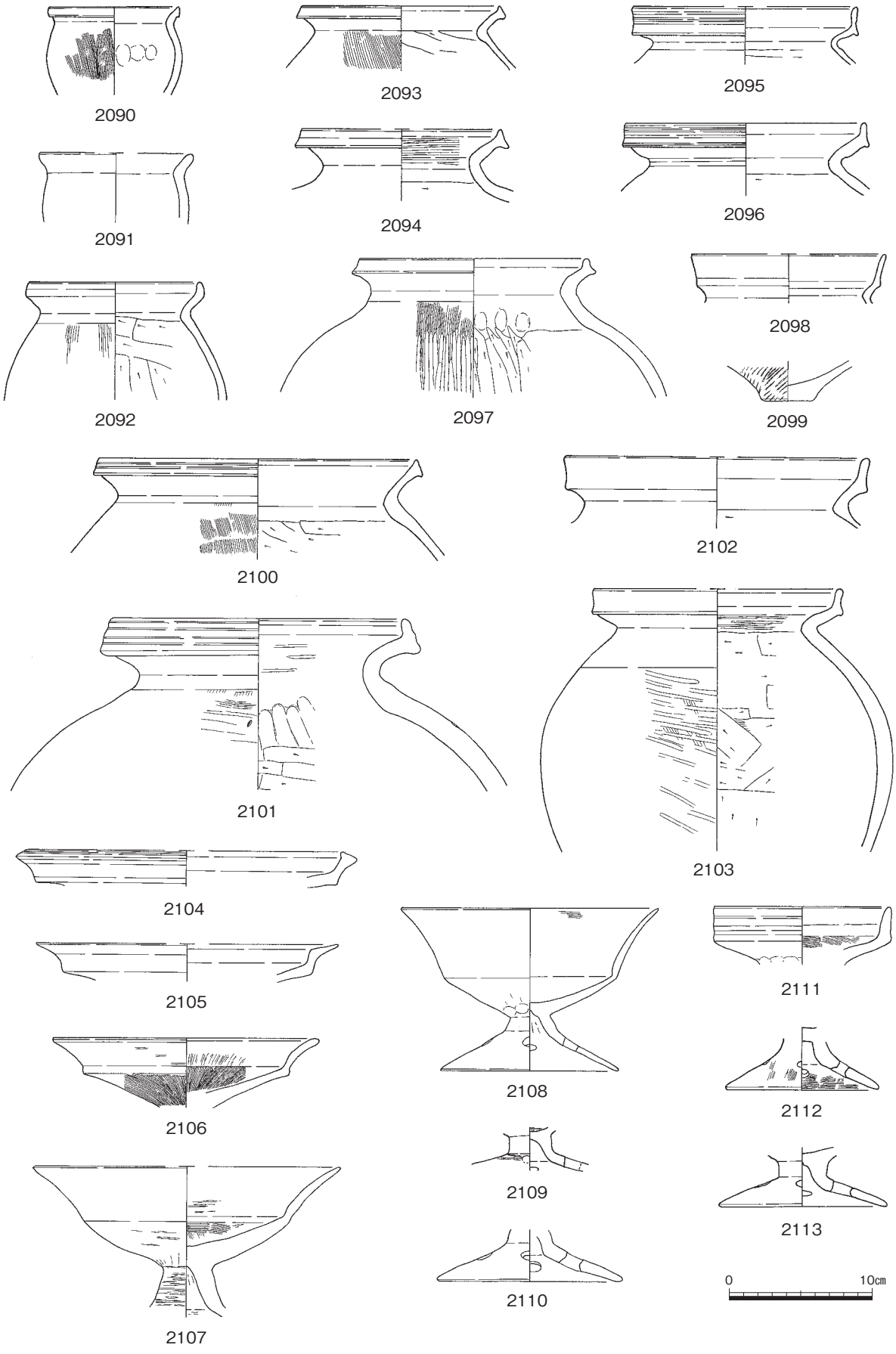

2078

第416図　溝10（1/30）・出土遺物（1/4）

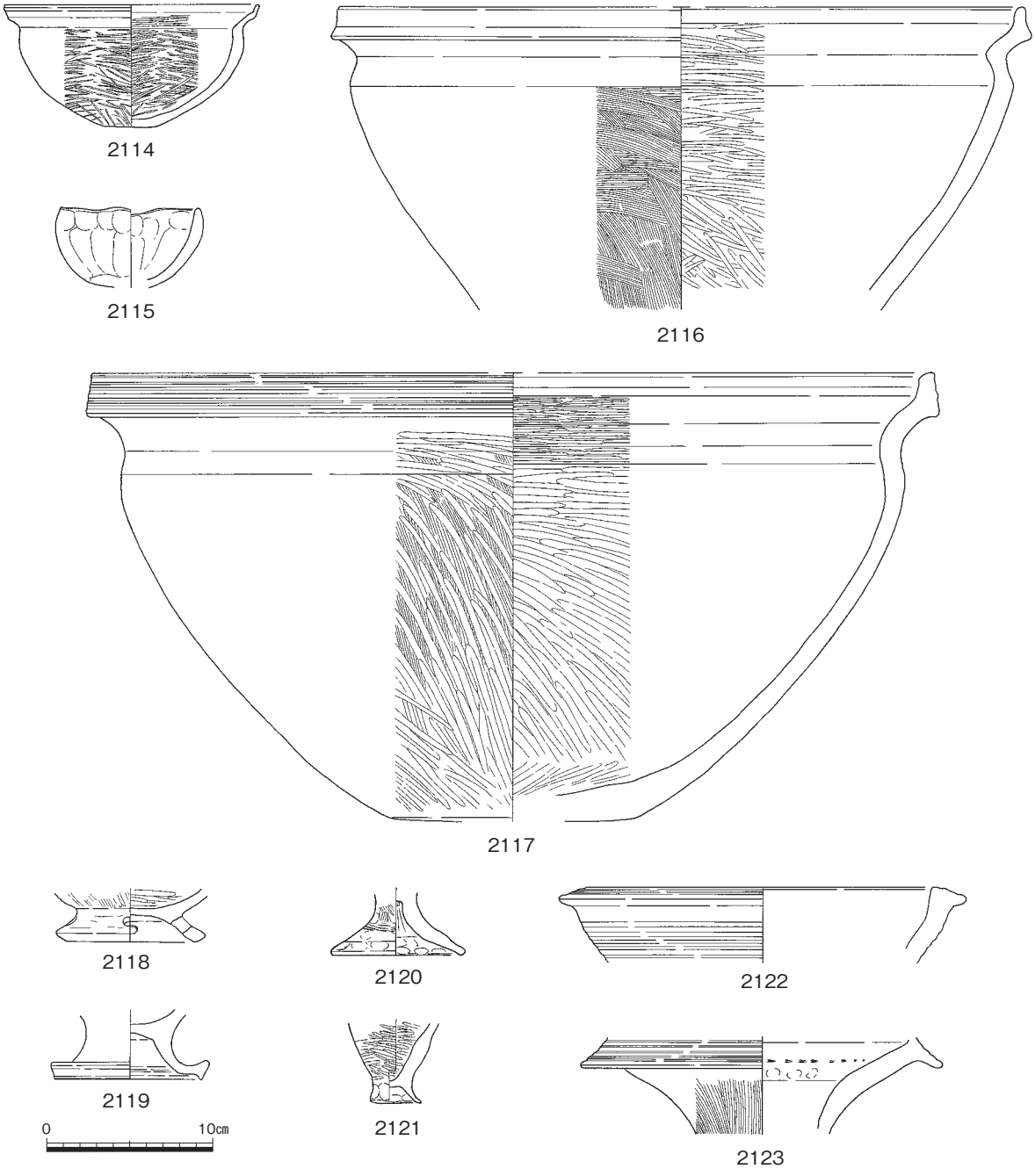
出土遺物は上層である第１層に多く含まれており、以下のものがある。2079～2089は壺である。2090～2103は甕である。口縁部の形態は、斜め内側に向くもの、直に立ち上がるもの、逆「ハ」字に立ち上がるものなど幅広い。2086は小型特殊壺の胴部片である。2104～2113は高杯である。いくつかの種類があるが、短脚になるものが多い。2114～2121は鉢である。2122・2123は器台である。これら遺物の時期は、弥・後・Ⅱ～Ⅳまでバラツキがある。　（小林）



第417図　溝11（1/30）・出土遺物①（1/4）



第418図　溝11出土遺物②（1/4）



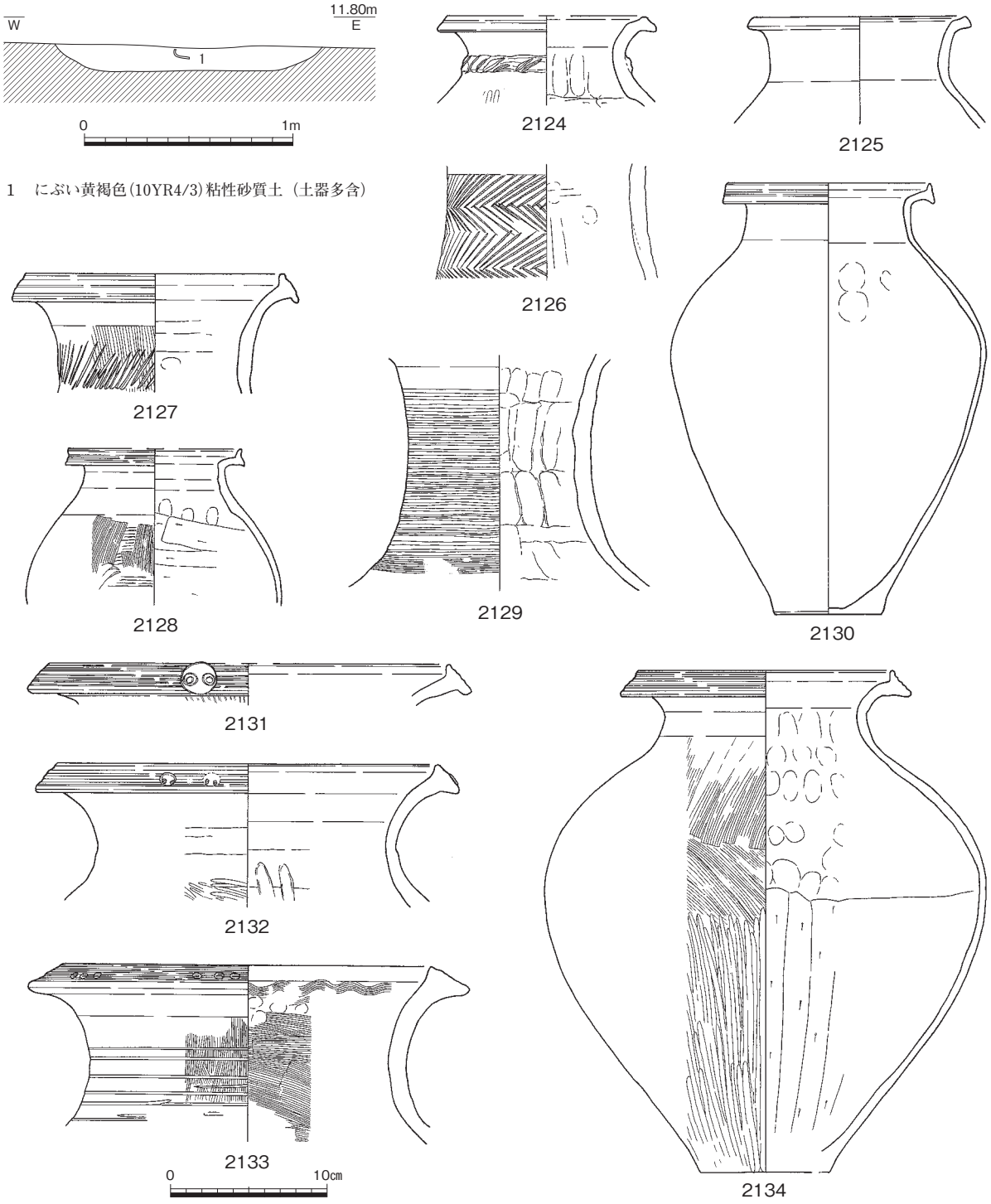
第419図　溝11出土遺物③（1/4・1/3）

溝12（第13・420～422図、図版67－１・93、写真31・32）

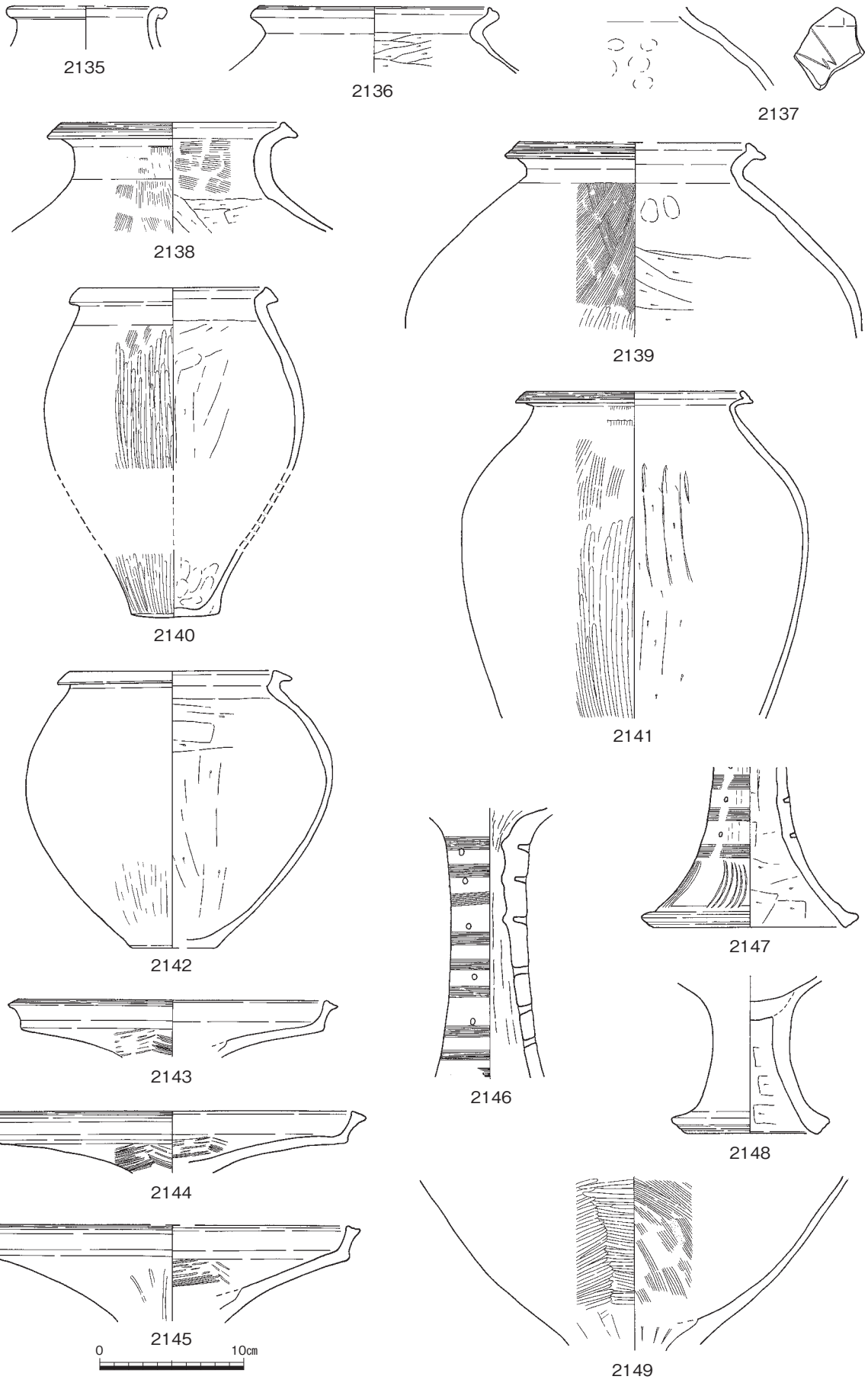
Ｇ15からＩ15にかけて、ほぼ南北方向に直線的に流れ、Ｉ15の北で南東方向に曲がる。すぐ西側には溝11が平行して流れている。

規模は上端幅で127㎝、底面幅が83㎝で、検出面からの深さは11㎝と浅く、底面の標高は11.54ｍである。断面形は皿状を呈しており、埋土は粘質土の単層であった。

溝の底面付近では、数カ所に分かれて土器がまとまって出土しており、一部は完形に近いものも存

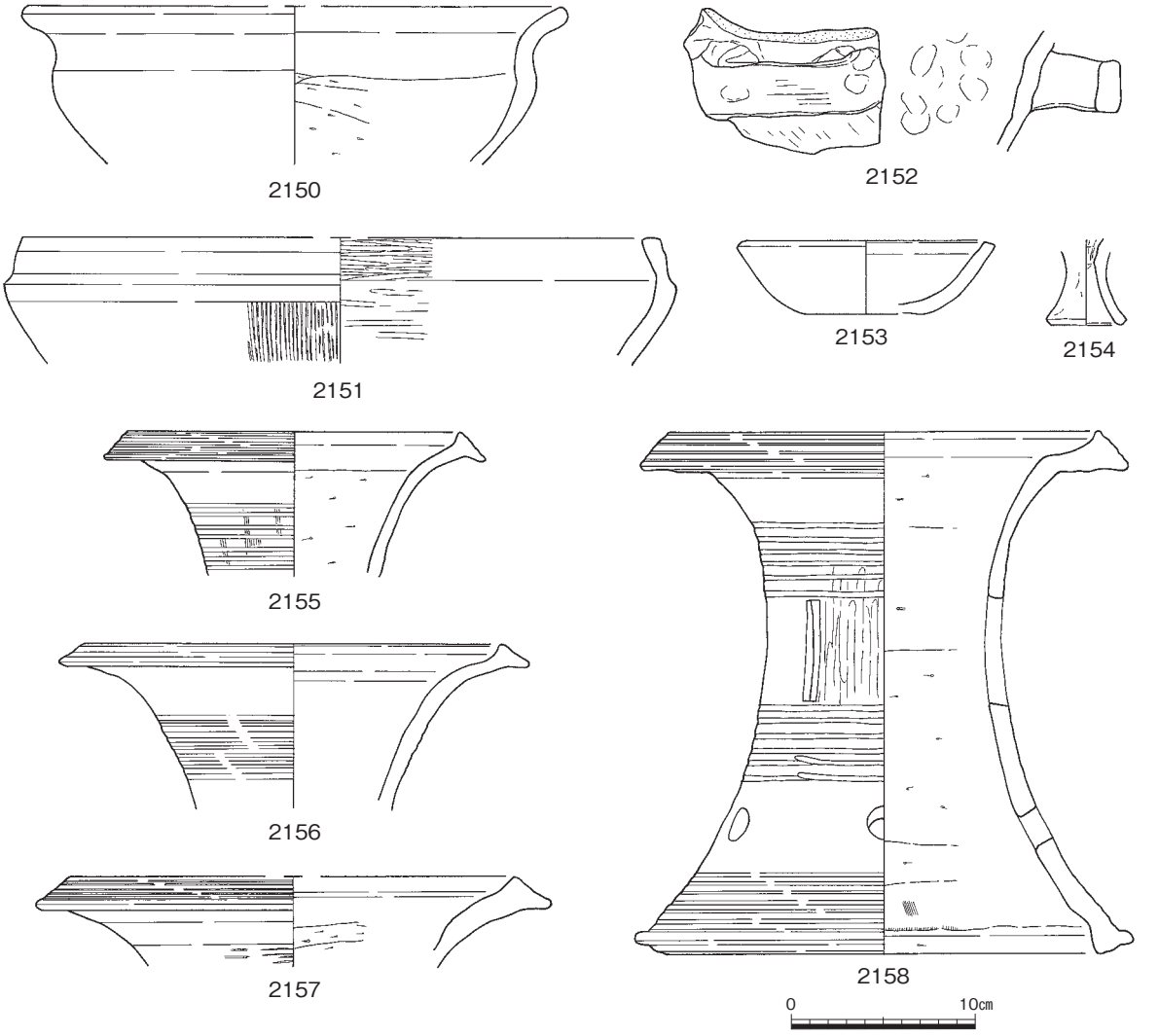


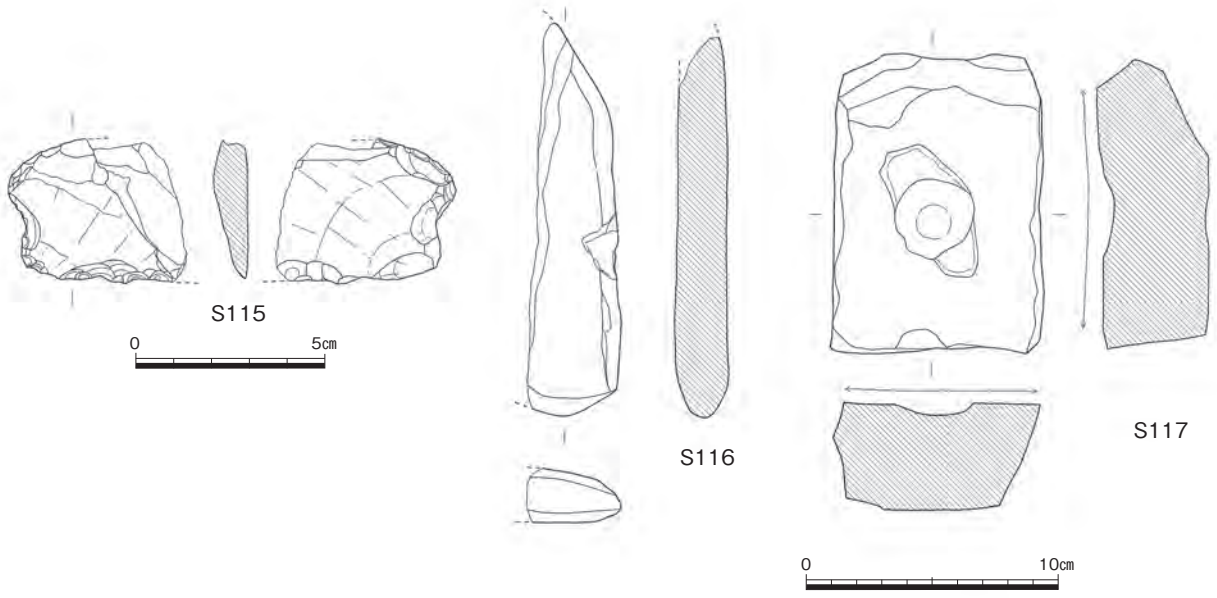
第420図　溝12（1/30）・出土遺物①（1/4）



第421図　溝12出土遺物②（1/4）

在した。出土した土器は、壺2124～2134、甕2135～2142、高杯2143～2149、鉢2150～2153、器台





第422図　溝12出土遺物③（1/4・1/2・1/3）

写真31　溝12土器出土状況（南西から）

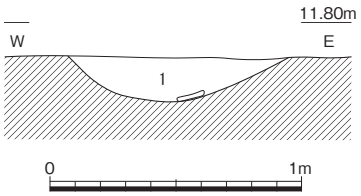
写真32　溝12土器出土状況（東から）

2155～2158がある。2135は口縁端部を折り曲げて玉縁状になっている。2137は肩部の外面に線刻が認められる。そのほかにもサヌカイト製の打製石包丁Ｓ115、緑色片岩製の石斧Ｓ116、砥石Ｓ117が出土している。これらの遺物から見て、遺構の時期は弥・後・Ⅰと考えられる。　（石田）

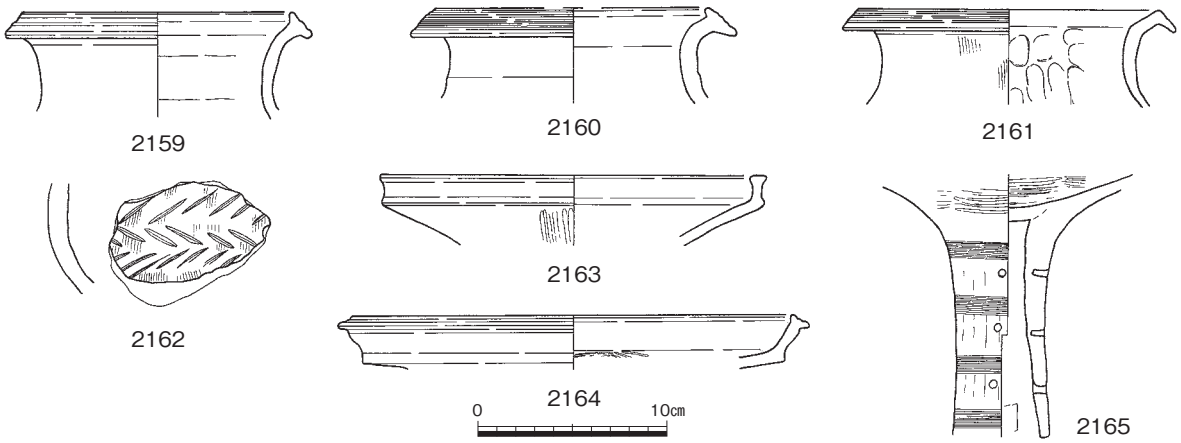
溝13（第13・423図、図版67－２）

溝12の東側、Ｈ16からⅠ15・16にかけて位置する。南側は調査区外へ出ており、北側は途中で切れているが、本来は北東方向により伸びていたものと考えられる。

溝の上端幅は約85㎝、底面幅は約35㎝で、検出面からの深さは17㎝を測る。断面の形状は皿状で、埋土は灰黄褐色を呈していた。出土遺物は、壺2159～2162、高杯2163～2165のほか、サヌカイトの素材剥片と考えられるＳ118がある。溝の時期は、出土遺物から弥・後・Ⅰと考えられる。　（藤井）



1　灰黄褐色(10YR5/2)シルト質細砂



第423図　溝13（1/30）・出土遺物（1/4・1/2）

10　河道

河道１（第11・12・424～431図、図版73－１～３・93～95・107・110）

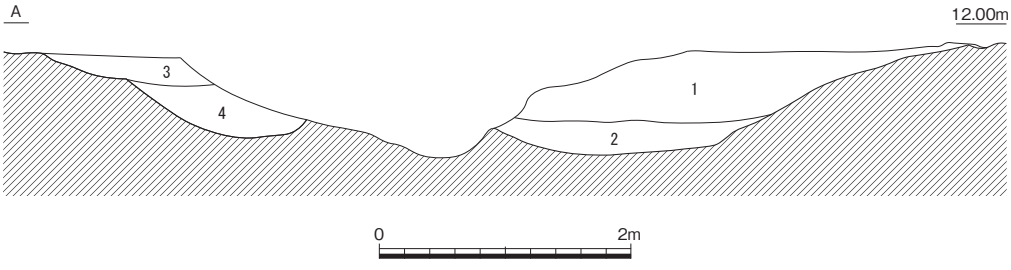
Ｊ03の南側から北側へ向かい、北東方向へ流れを変えて直進し、Ｈ04の南東付近で東へ振れて調査区外に至る。丁度Ｊ06を中心とした遺構密集地域を取り巻くように縁辺部分を流れている。弥生時代には、本河道より北西から西側にかけては、地形が低く、南東から東側にかけては高かったと考えられ、弥生時代集落の北から西側にかけての最端部に位置付けられる遺構であり、弥生時代以前の遺物の出土も、本河道の西側ではごく少量に限られる状況である。また、本河道上層には、古墳時代の河道５が、ほぼ流路を踏襲する形で存在する。南東側にある竪穴住居などの遺構群と本河道の間では、土器棺１を単独で検出している。

本河道の規模は、上端幅740㎝、底面幅385㎝である。確認面からの深さは86㎝で、底面の標高は10.94ｍになる。断面観察の限りでは、底面に２つの凹凸があり、それぞれ先後関係が存在する。同箇所内において数回流れを変えていた痕跡であろう。覆土は、上層は粘質が主体であるが、下層になるにつれて砂質になっていく。

検出当初、本河道の東側肩口付近で第424図に示したような土器の集積が３カ所で見られ、当初は土器溜まりとして認識していたが、本河道の東岸部分に帯状に土器が

1　にぶい黄燈色(10YR6/3)粘性微砂～細砂

第424図　河道１東肩口遺物出土状況（1/30）

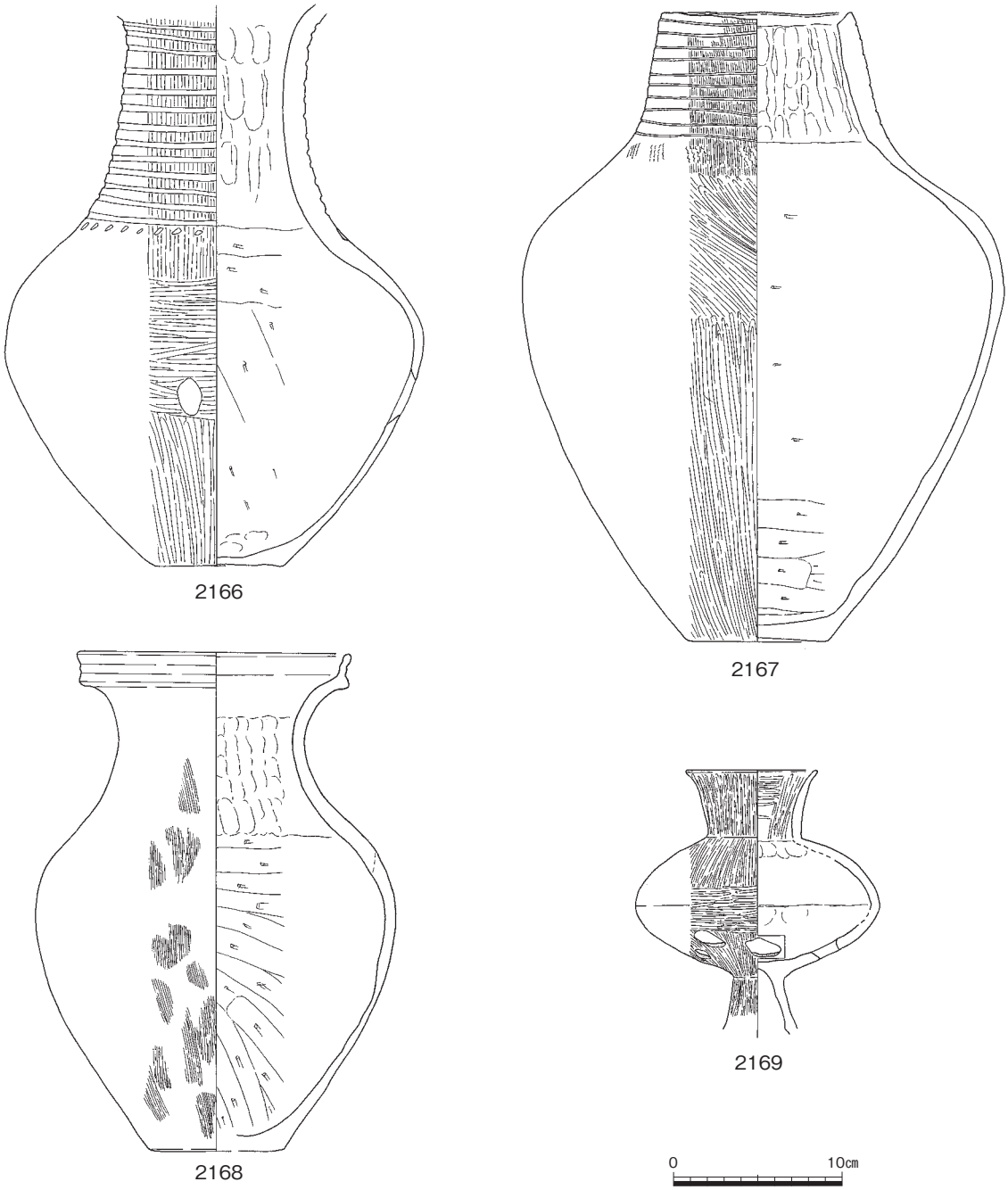


1　にぶい黄橙色(10YR6/3)粘性微～細砂
2　にぶい黄褐色(10YR5/3)微～細砂
3　灰褐色(7.5YR4/2)粘性微砂（礫少含）
4　青灰色(5BG5/1)シルト

第425図　河道１（1/60）

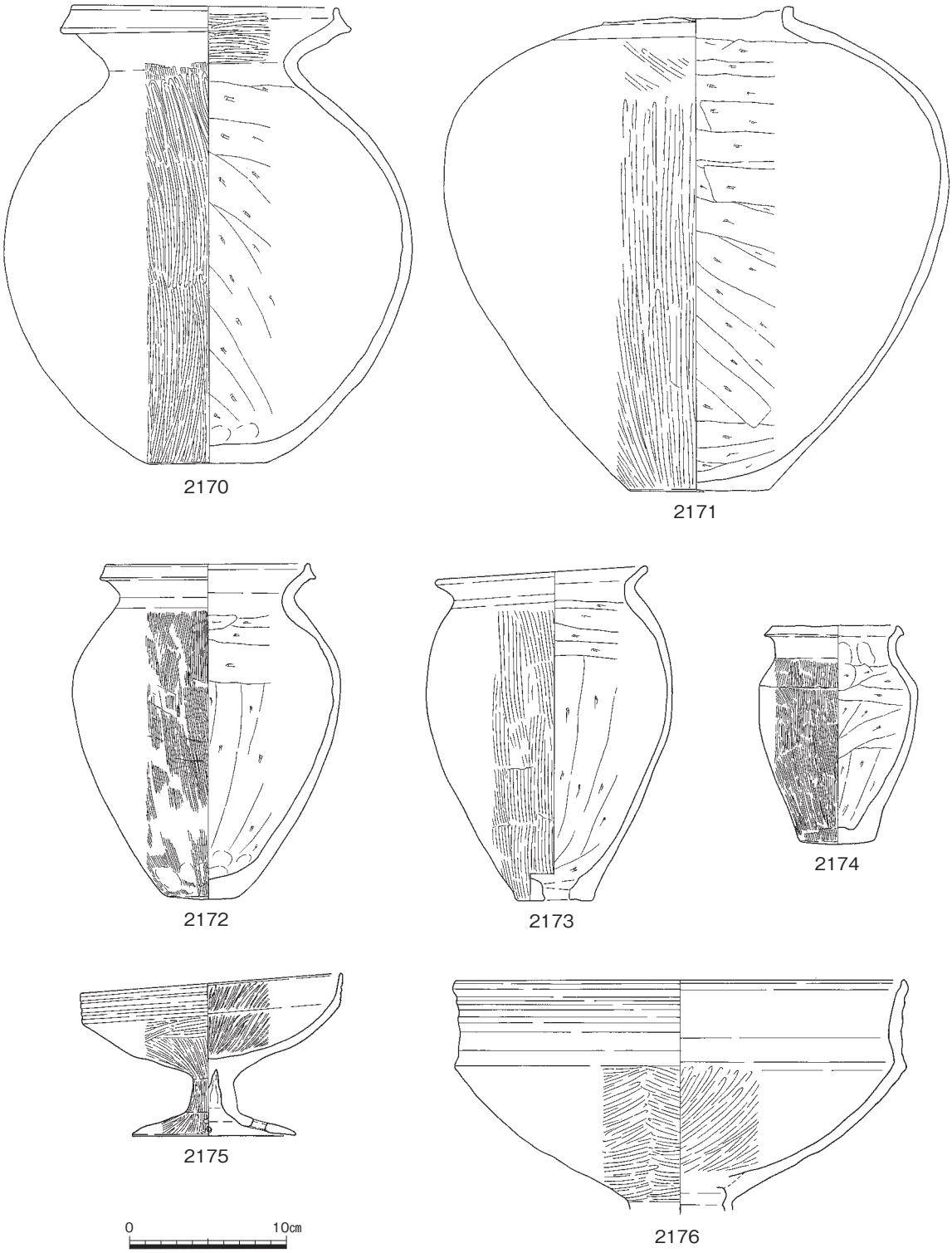
出土している状況が確認できたため（第11・12図河道１東岸、網掛部分）、本河道に伴うものであると判断した。これらの土器に中には、口縁部をわざと打ち欠いた以外に破損の見られない2167・2171、体部に穿孔を施した2166・2169といったような、仮器化されたものが目に付く。遺物は下層よりも上層の方に多く含まれる傾向があり、また東側肩口付近において多量に出土し、西側肩口付近では、東側肩口で見られるような土器の出土状況が見られなかったことからも、本河道東側の集落で使用された土器が河道東側肩口から本河道へ廃棄された可能性が考えられる。

本河道の東側肩口で出土した遺物は、第426・427図に掲載している以下のものがある。2166～2168は長頸壺である。2166の胴部には円孔が穿たれる。2166・2167の底部は、やや内側に抉られている。

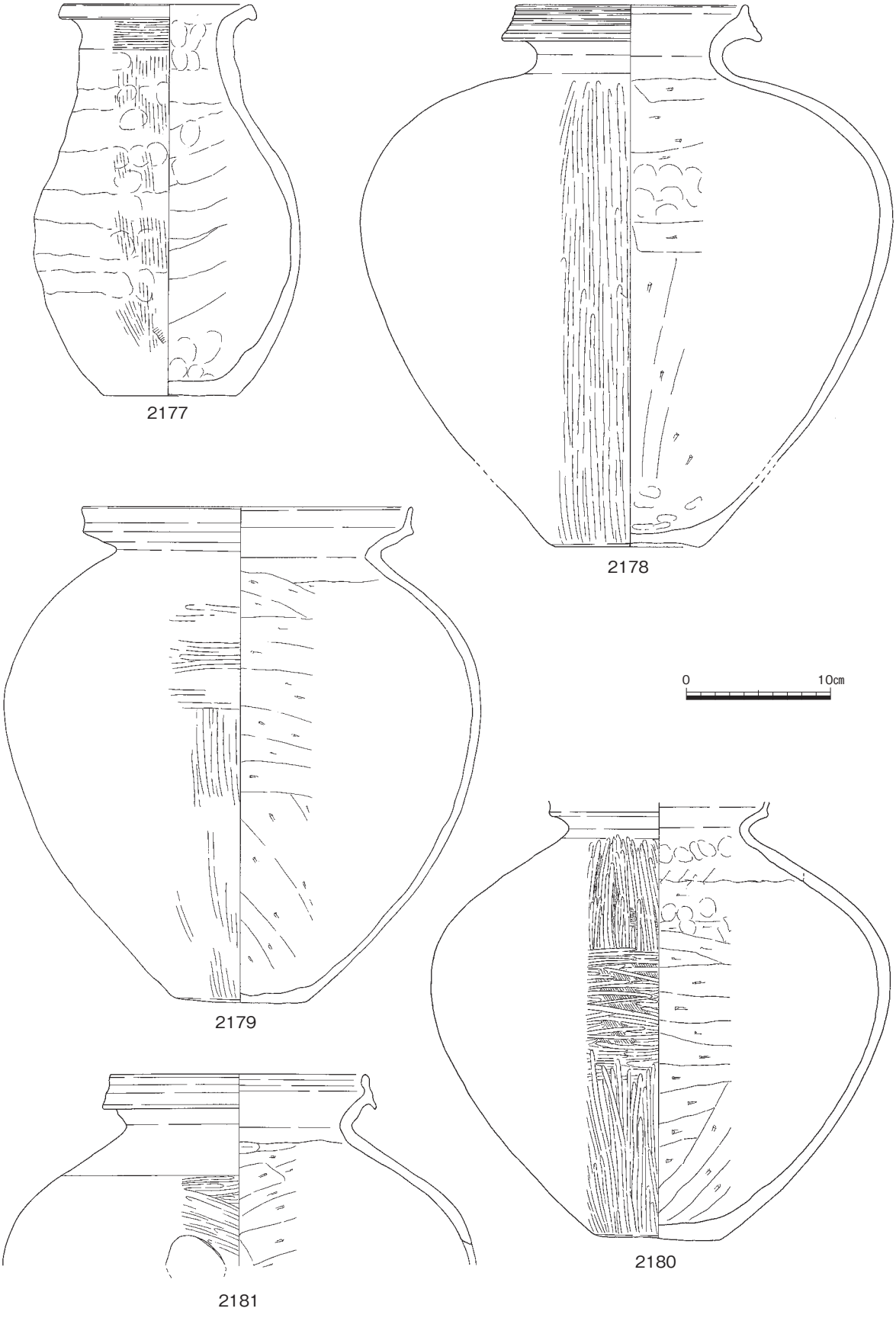


第426図　河道１出土遺物①（1/4）

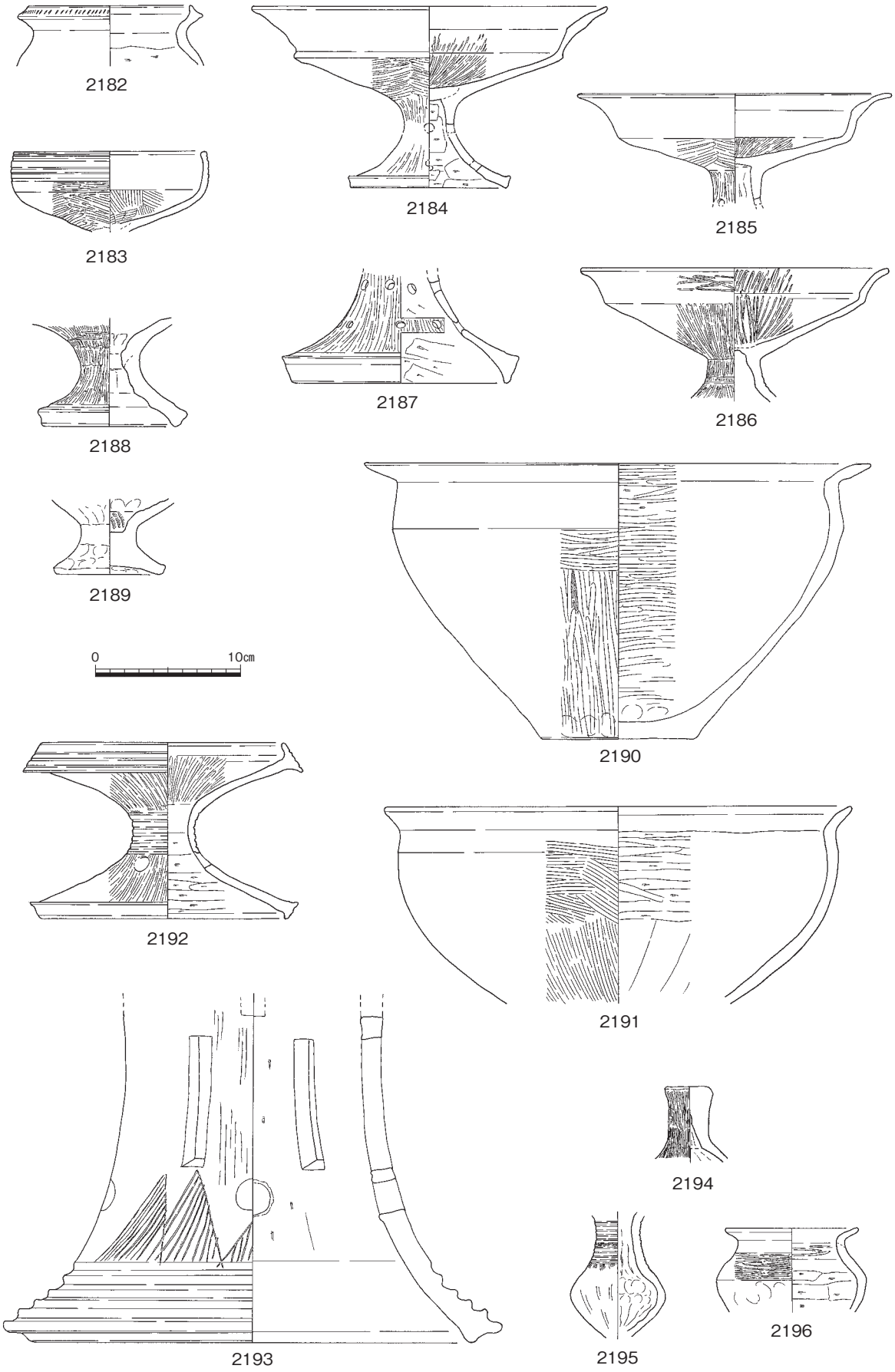
2169は台付直口壺である。壺部の下半に２つの円孔が穿たれている。外面は丁寧に磨かれている。2170・2171は壺である。外面はヘラミガキで、内面はヘラケズリである。2170の口縁部は、内側に立ち上がっている。2172～2174は甕である。口縁部は2172と2174が内側に立ち上がり、2173は「く」字に立ち上がる。また2173の底部には円孔が穿たれている。2175・2176は高杯である。身部分の口



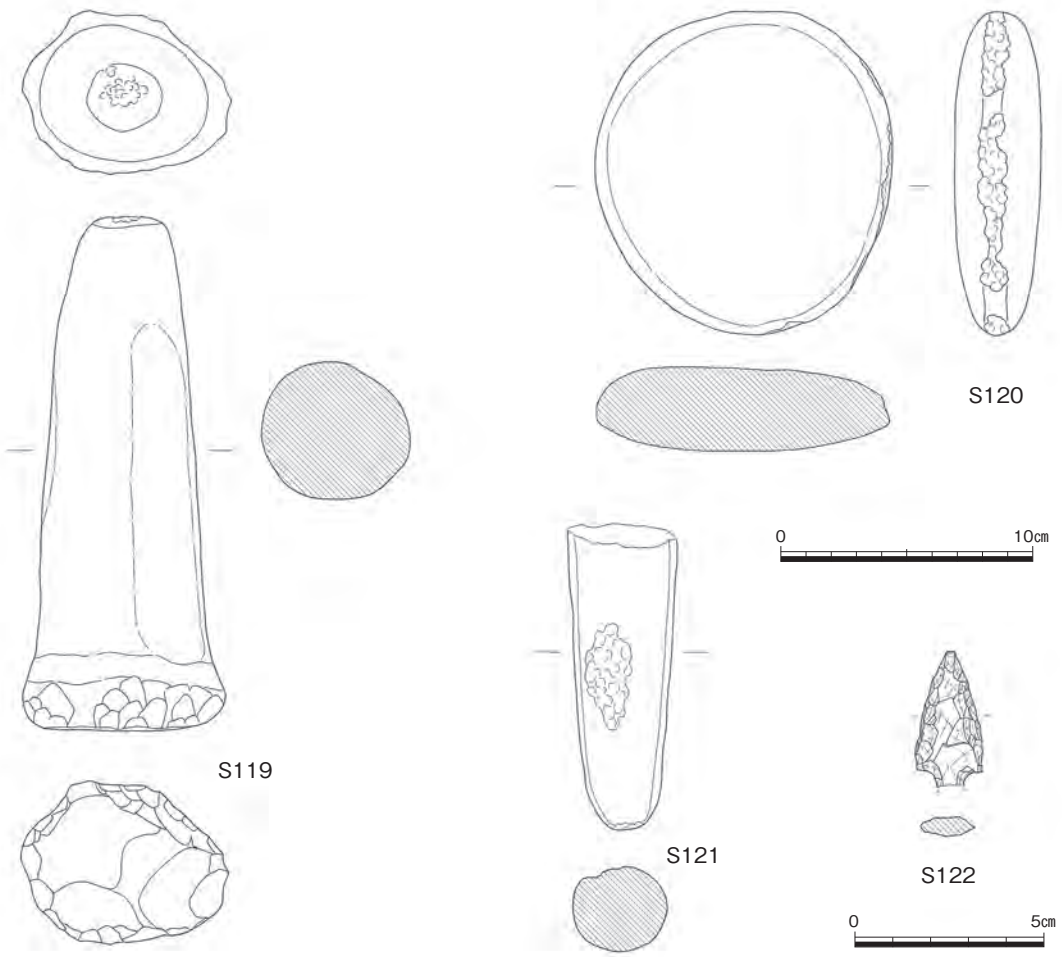
第427図　河道１出土遺物②（1/4）



第428図　河道１出土遺物③（1/4）



第429図　河道１出土遺物④（1/4）

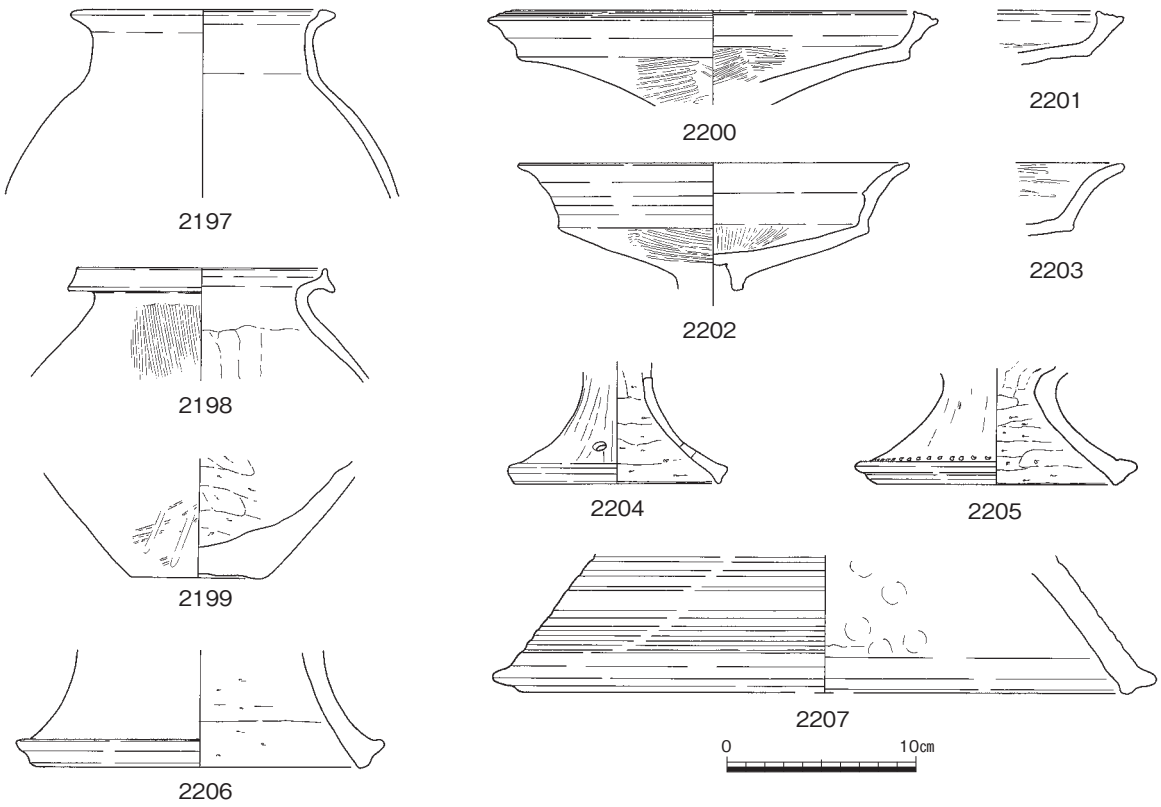


第430図　河道１出土遺物⑤（1/3・1/2）

縁部は、直に立ち上がり、外側に沈線が施される。2175は脚部が短い。これらの特徴は弥・後・Ⅲになるものが多い。

河道覆土から出土した遺物には、第428～431図に掲載した以下のものがある。2177～2181は壺である。東側肩口付近の壺と比べると、長頸壺の比率が少ない。2177は全体的に細長い形状である。口縁部は、2178が内側に立ち上がり外面に沈線が施される。2179・2180は上方に立ち上がる。2181は上方に立ち上がり振部が下に張り出す。胴部には円孔が穿たれる。2182・2197・2198は甕である。2182の外面端部は、刻み目文が施られる。2184～2187・2200～2204は高杯である。2184～2187の身口縁部は、逆「ハ」字状で外方に立ち上がる。内側端部が強調されている。これに対し2200・2201は、外側に直に立ち上がっている。2188～2191は鉢である。2192・2193・2206・2207は器台である。2192は小型であるが、丁寧な作りである。2193は方形の孔が２段と円孔が穿たれる。2194は蓋である。2195はミニチュア土器である。Ｓ119は石杵である。赤色顔料の付着は認められなかった。Ｓ120は敲石である。Ｓ121は結晶片岩製の石棒である。Ｓ122は石鏃である。

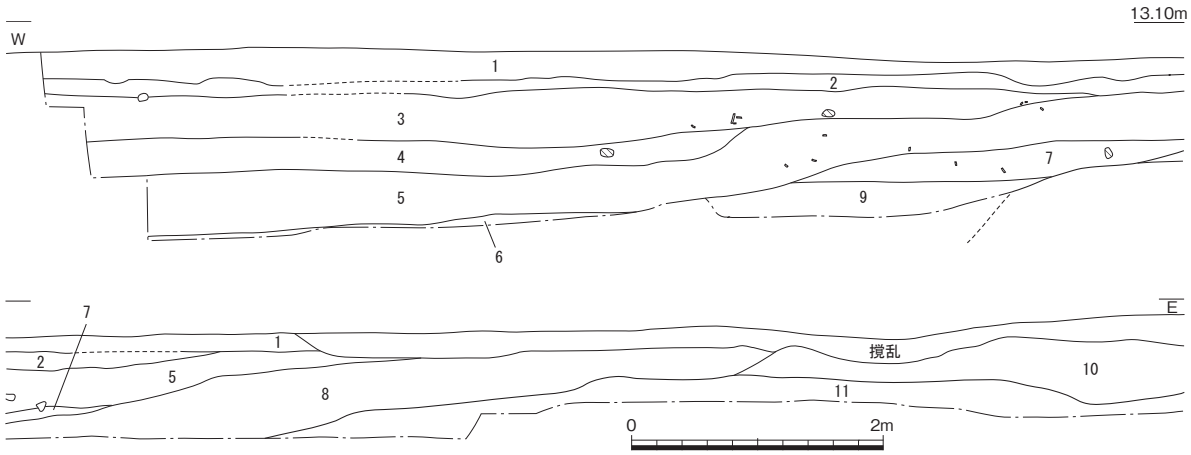
これらの遺物は、弥生時代後期の広い範囲の時期が含まれているが、弥・後・Ⅲが多い。東側肩口付近の土器も同時期が主流であったことから、本河道は弥・後・Ⅰ頃から存在し、弥・後・Ⅲにはほぼ埋まっていった可能性が考えられる。また自然流路の可能性が強く、少なくとも１回は流れを変えたことが推測される。　（小林・圃）



第431図　河道１出土遺物⑥（1/4）

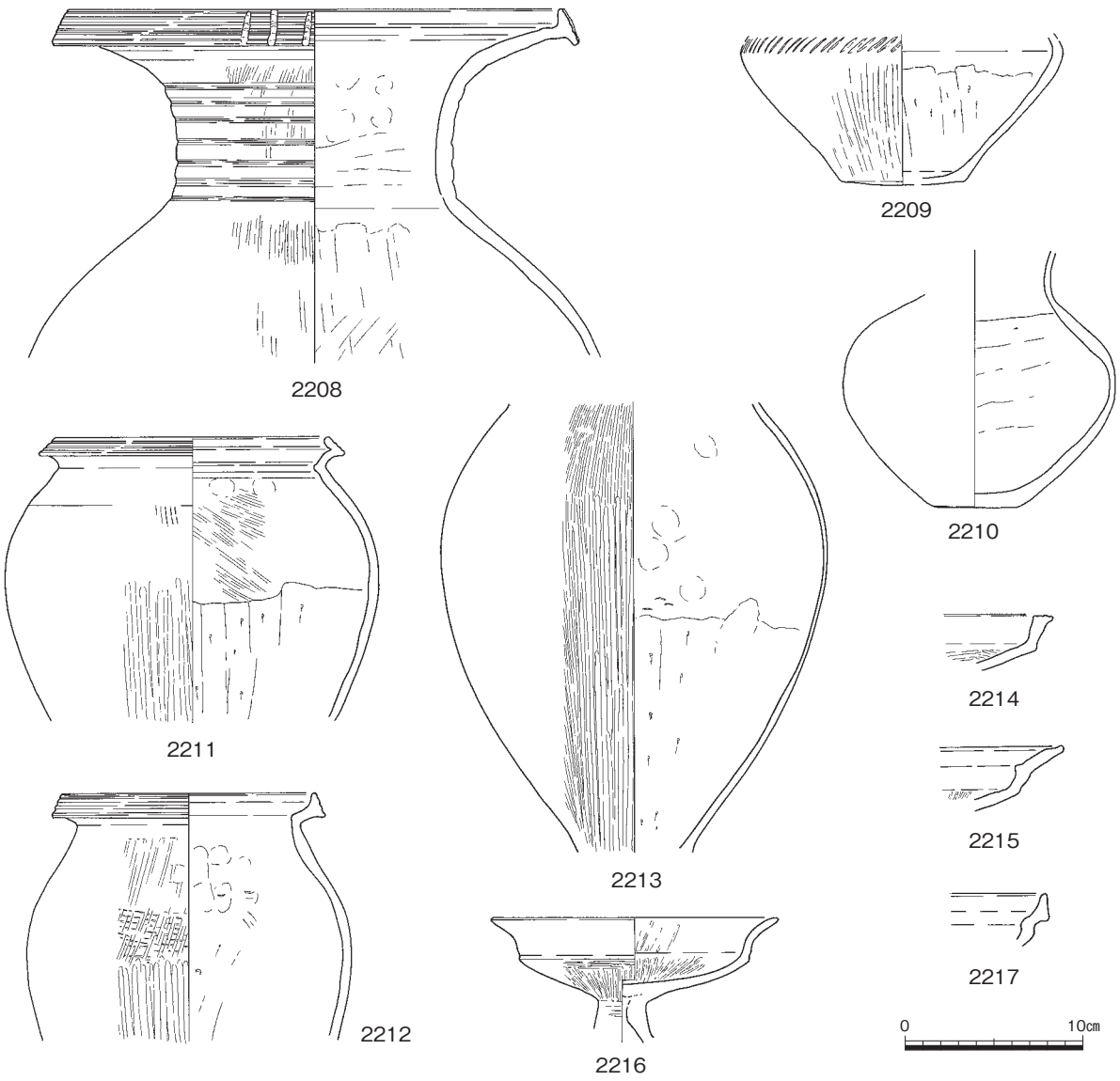
河道２（第11・432～434図、図版74－１・２）

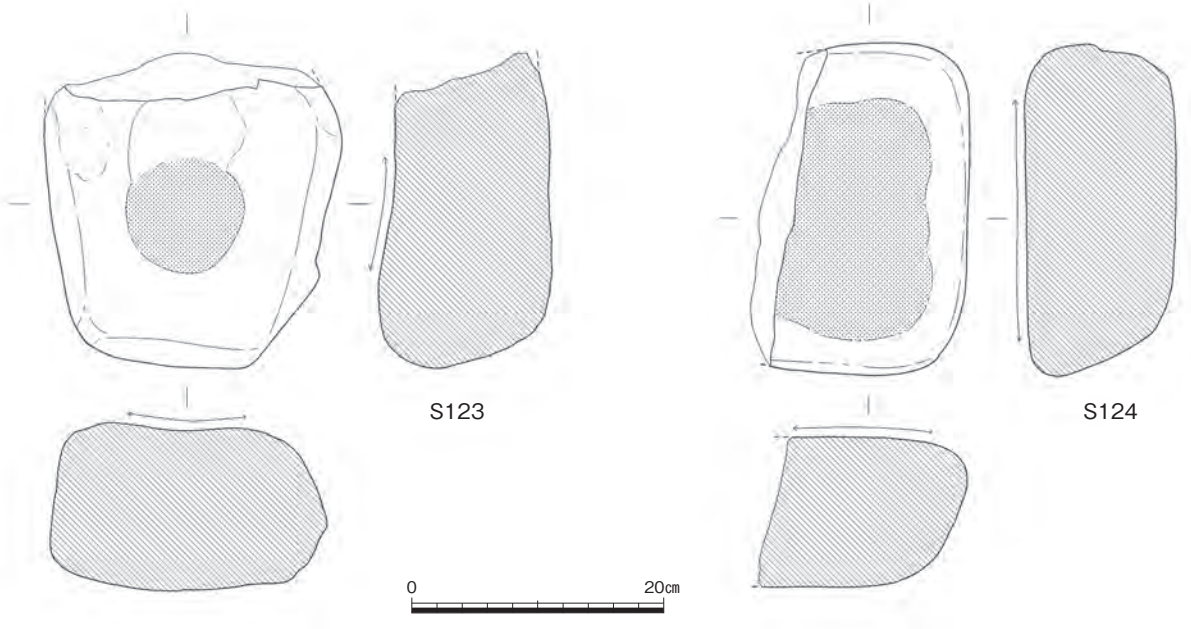
Ｊ05南西角に位置する。河道１東肩口へ繋がると考えられるが、同一堆積層とは特定できないため、河道２として扱った。河道底の標高は約11.60ｍである。第432図は調査区南壁での堆積状況で、第１層は現代土、第９層は土坑６埋土、第10層は微高地上の包含層、第11層は基盤となる粗砂層である。



1　暗灰黄色(2.5Y5/2)粘性砂質土
2　黄褐色(2.5Y5/3)粘性砂質土
3　にぶい黄褐色(10YR5/3)粘性砂質土
4　黒褐色(2.5Y3/2)粘性砂質土
5　黒褐色(10YR3/2)粘性砂質土
6　黒褐色(10YR3/2)粗砂
7　黒褐色(2.5YR3/2)粘性砂礫土（土器多含）
8　にぶい黄橙色（10YR6/4)粗砂
9　褐灰色(10YR4/1)粘性砂質土
10　暗褐色(10YR3/4)砂質土
11　褐灰色(10YR4/1)粗砂

第432図　河道２（1/60）

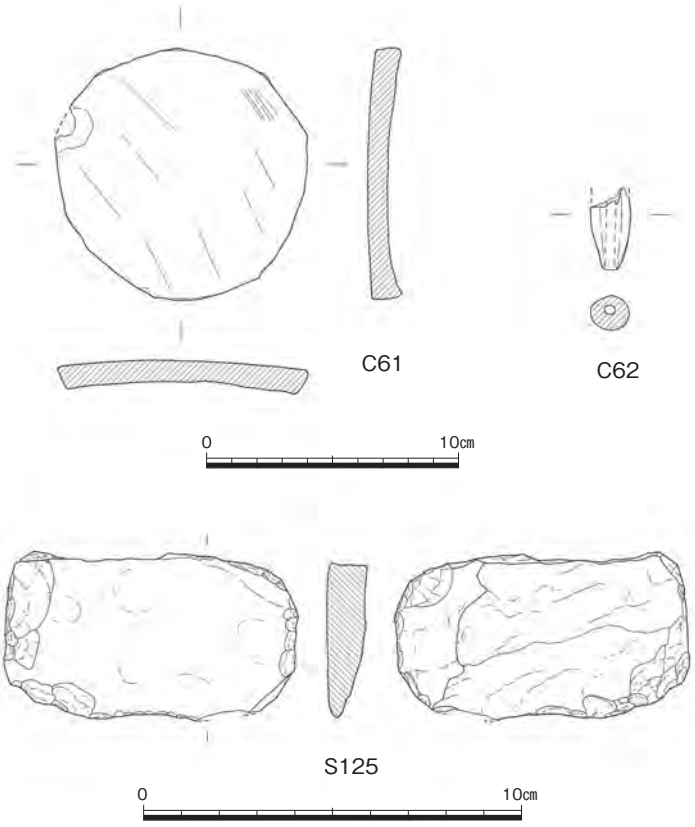




第433図　河道２出土遺物①（1/4・1/6）

河道に対応する堆積は第３～８層で、第５層下面にはマンガンの沈着が認められた。堆積状況から、第３～５層を古墳時代、第７～９層を弥生時代の堆積と考えていたが、弥生土器と土師器は混在して出土し、土器と層序の相関関係は明らかでない。また、微高地上の遺構を削平した際に混入した遺物も多いと思われる。

第433図には層位に関係なく弥生時代の遺物を抽出して掲載した。土器には微高地上に集落が営まれていた中期後葉～後期後葉（弥・中・Ⅲ～弥・後・Ⅲ）の時期幅が認められる。なお**2208～2210・2212**が弥生時代の堆積と考えた層から出土した土器である。**C61・C62**及び**S123～S125**は古墳時代の堆積と考えていた層から出土している。**S123・S124**は大形の台石で、竪穴住居から流入した可能性が高い。　（渡邉）

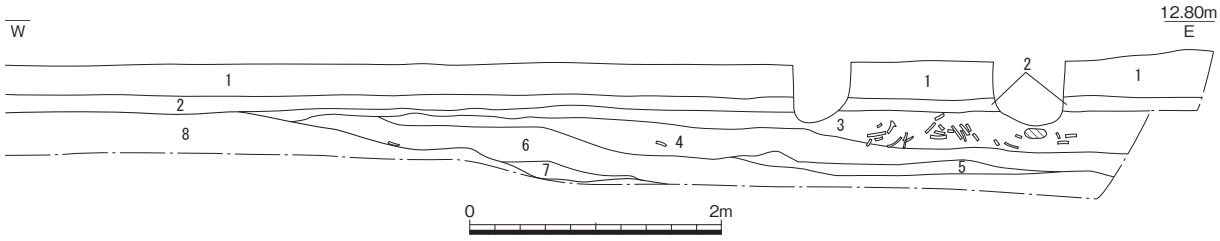


第434図　河道２出土遺物②（1/3・1/2）

河道３（第12・435～439図、図版74－３・95・116）

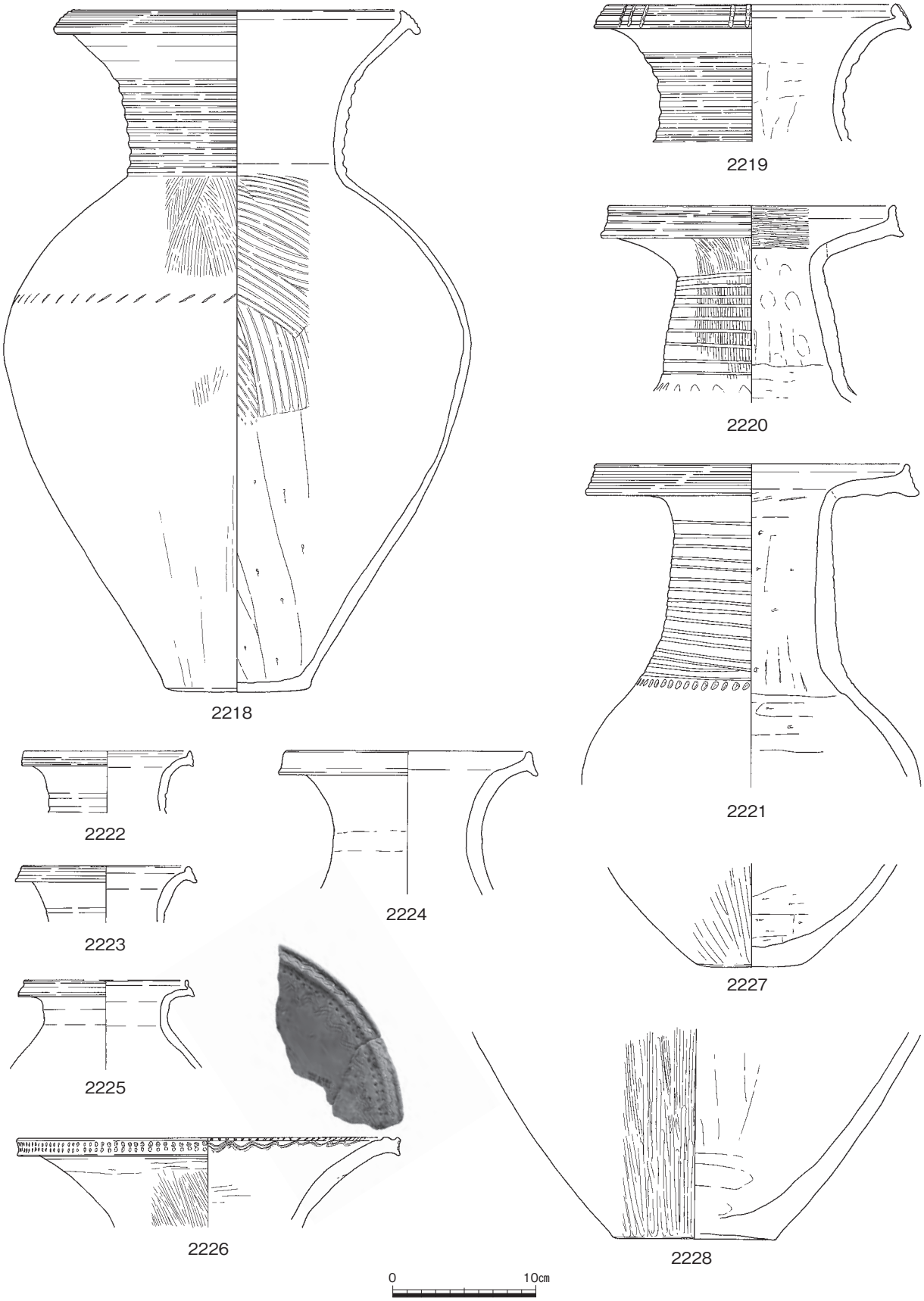
H07南西角で検出した、北東方向への下がりである。突出した調査区の一角に一部がかかったのみであるが、東へ屈曲した河道１がここで南へ張り出し、さらに北へ曲がる屈曲部分にあたると認識している。つまりは河道１と同じ流路の南肩口となるが、直接的な繋がりを確認できていないので河道３として記述を進める。

第435図は東壁で確認した堆積状況で、第１・２層が現代の耕作土、第３～７層が河道内堆積土にあたる。一帯は水田耕作土による削平が著しく、第２層下面が低位部の遺構面となる。標高は約12.00ｍである。河道内堆積土は粘性はあるが脆弱な砂であった。湧水も激しく、深さ60㎝、標高11.40ｍま



1　黄灰色(2.5Y5/1)土（礫少含）
2　明黄褐色(2.5Y7/6)粘質土（Fe密含）
3　褐灰色(10YR5/1)粘性砂質土（土器多含）
4　褐灰色(10YR6/1)粘性細砂
5　褐灰色(5YR4/1)粘性細砂
6　褐灰色(10YR6/1)粘性細砂
7　褐灰色(10YR5/1)粘性細砂
8　灰黄褐色(10YR6/2)細砂

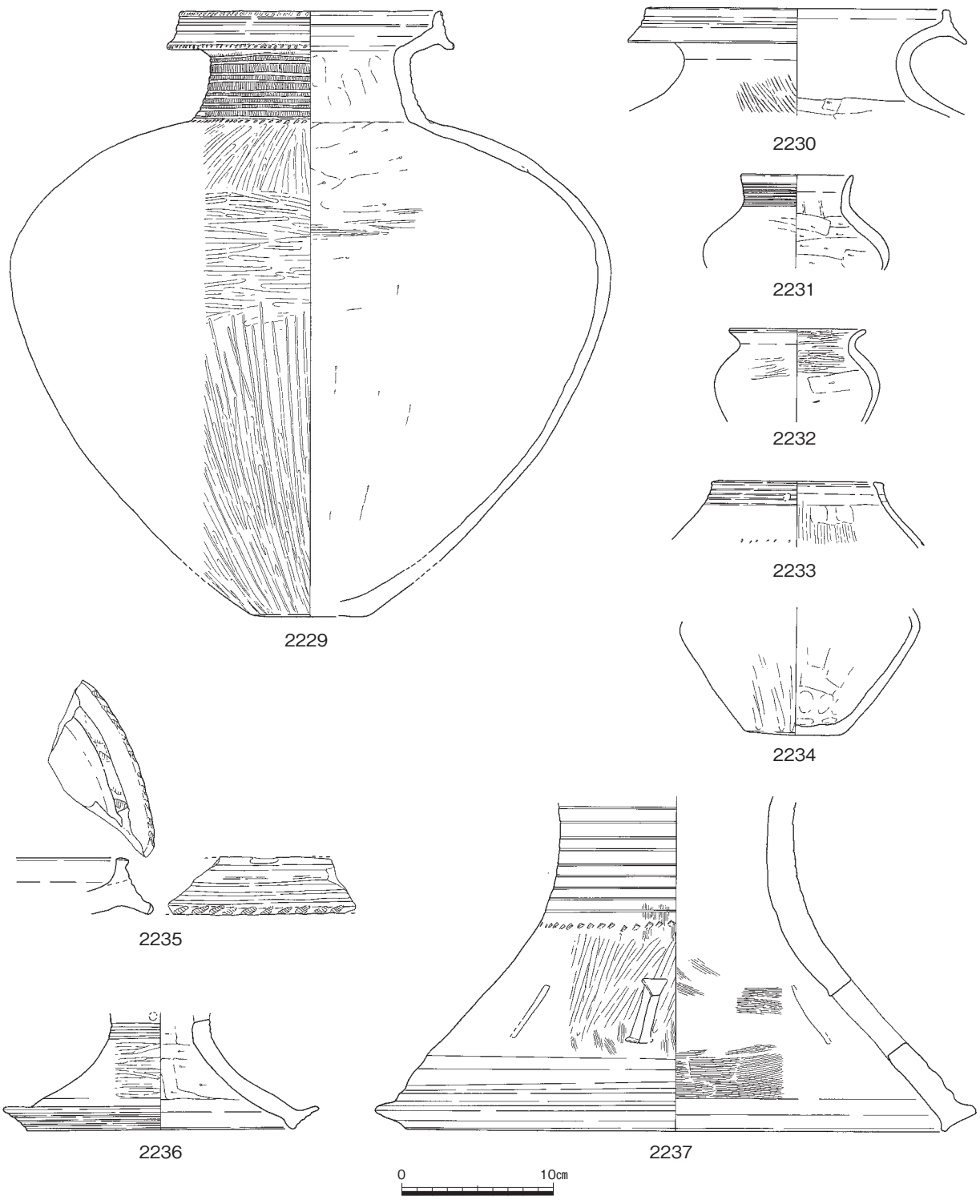
第435図　河道３（1/60）



第436図　河道３出土遺物①（1/4）

でしか掘り進めることができなかった。

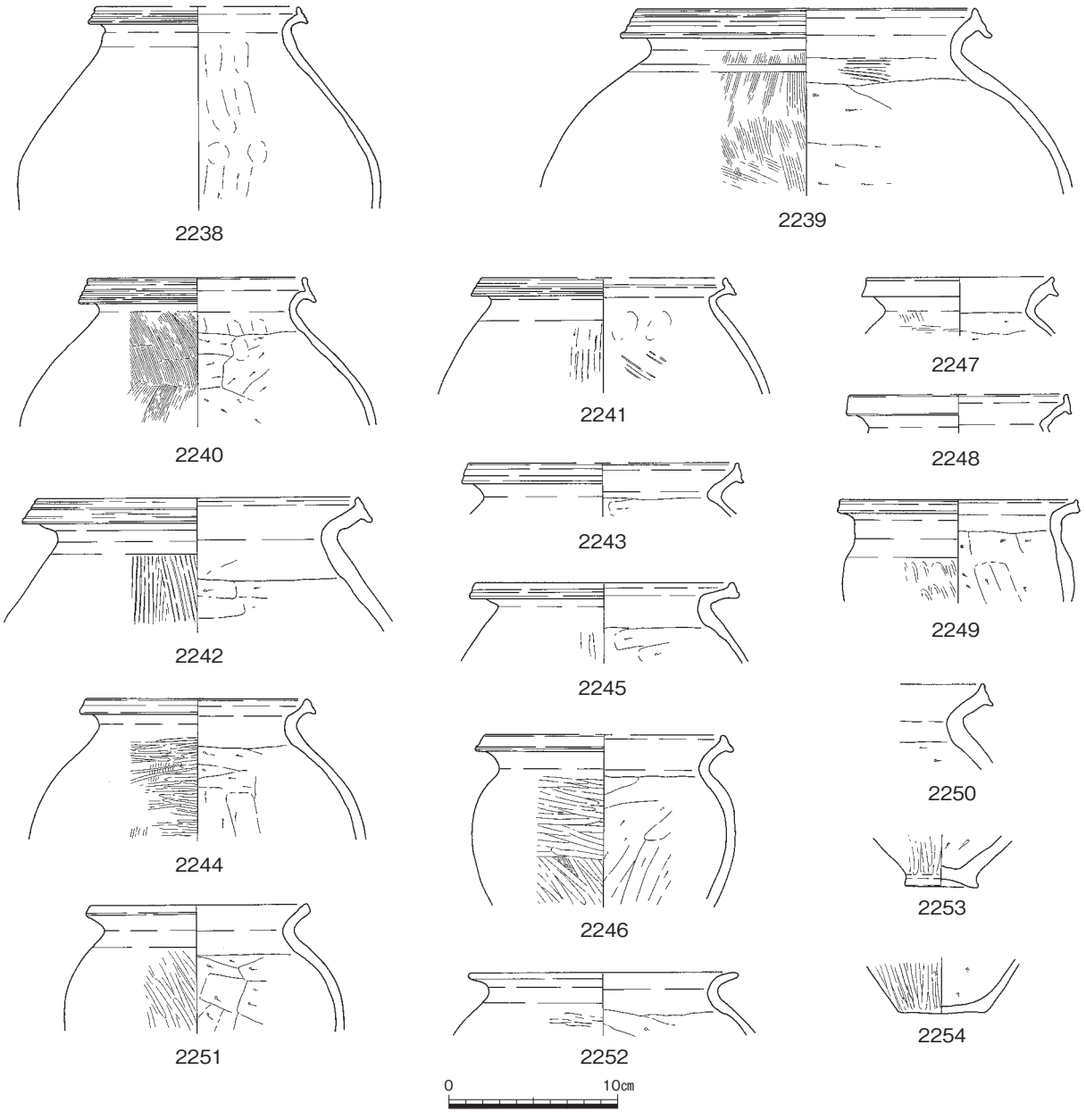
ごく一部の狭小な範囲での発掘であったが、比較的多くの遺物が出土し、とりわけ最上層にあたる第３層からの出土が多かった。遺物専用の箱にして10箱を数える。土器は中期後葉～後期後葉の時期幅がある。完形品はないが、壺2218や2229、器台2237など大形の土器を含み、図上で完形に復元できる個体を含むことが特徴として挙げられる。また分銅形土製品C63が出土した。C63は胎土・焼成



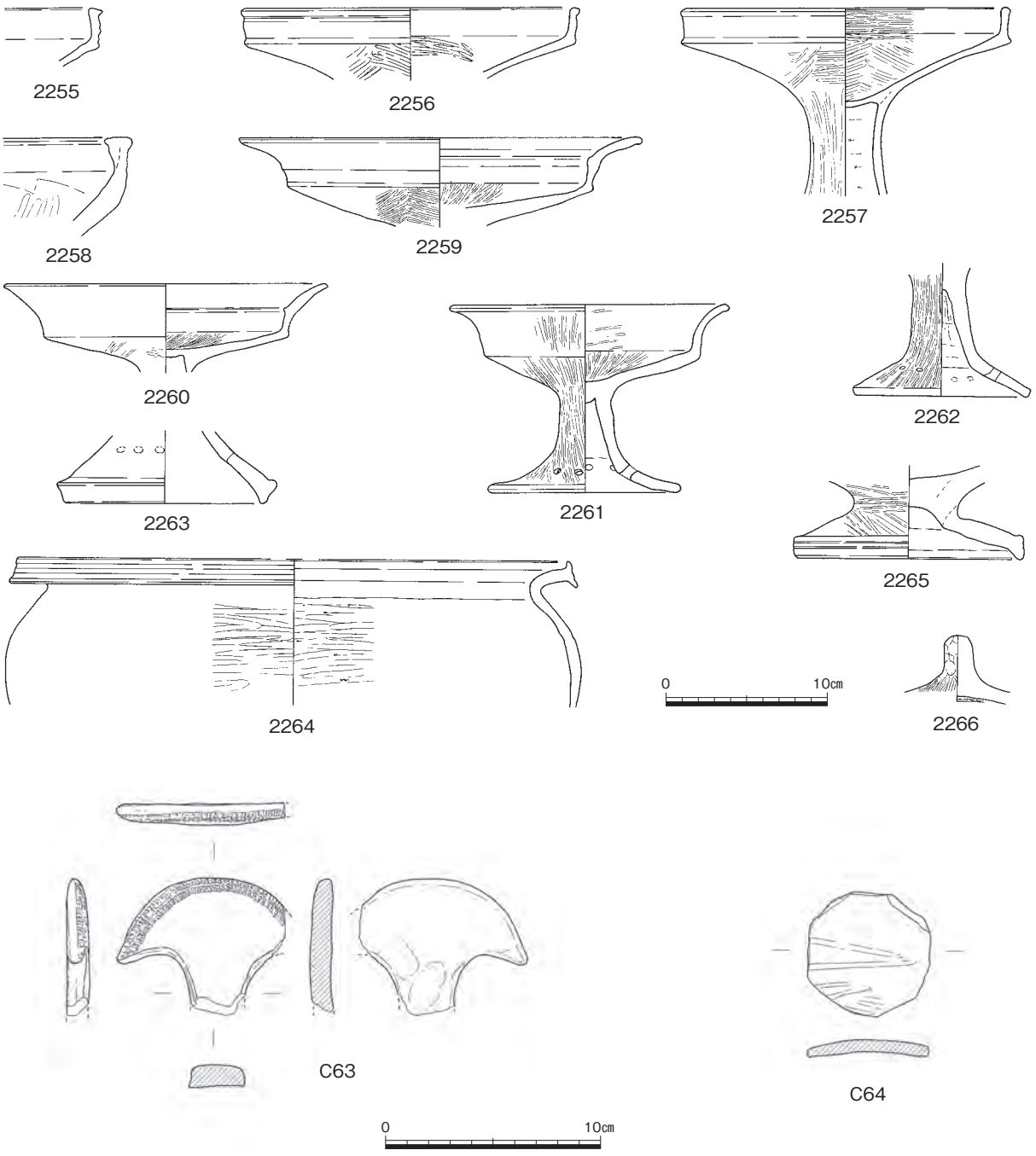
第437図　河道３出土遺物②（1/4）

は後期土器と共通する。文様もやや簡略化が認められ、上縁部に刺突列点文を２重に巡らすのみである。円板状土製品C64も出土した。穿孔はない。石器は少なく、石錐片が出土したのみである。

出土遺物のうち、一部だけではあるが層毎の取り上げを行ったが、中期後葉～後期後葉の土器が混在し、層序と時期の相関は明確ではなかった。図示したうち、2218・2221・2226・2229・2230・2242・2247・2248・2250・2257・2259・2260・2264が第３層から、2222が第５層から出土した。2218・2219・2222・2223・2225・2233・2234・2238・2241・2255～2258が中期後葉に位置付けられるが、出土状況から、微高地上の遺構から流入した可能性が高い。そのほかは高杯2259～2262に示されるように、弥・後・Ⅱ～弥・後・Ⅲ古段階のものが主である。短脚の高杯はない。河道１肩口の一群と似たような内容を示している。2229は一般的な土器とは異なり、角閃石を多量に含む特徴的な胎土を有する壺で、丹塗りを施す。口縁上下両端を刻み、胴部と頸部の境にも列点を施すなど装飾性に富む。（渡邉）



第438図　河道３出土遺物③（1/4）



第439図　河道３出土遺物④（1/4・1/3）

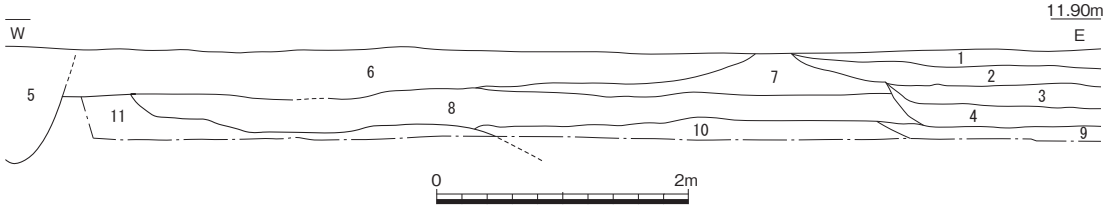
河道４（第13・440～443図、図版95）

調査地の東部分で検出した弥生時代の河道である。河道３から東へ約230ｍ離れた地点（Ｇ18～Ｈ19）に位置する。北側の調査地外に想定される東方に流れる河道の一部と見られ、右岸に当たる部分の長さ約25ｍを確認した。この地点では、おおむね北西から南東方向へ延び、蛇行する。左岸は確認できていない。

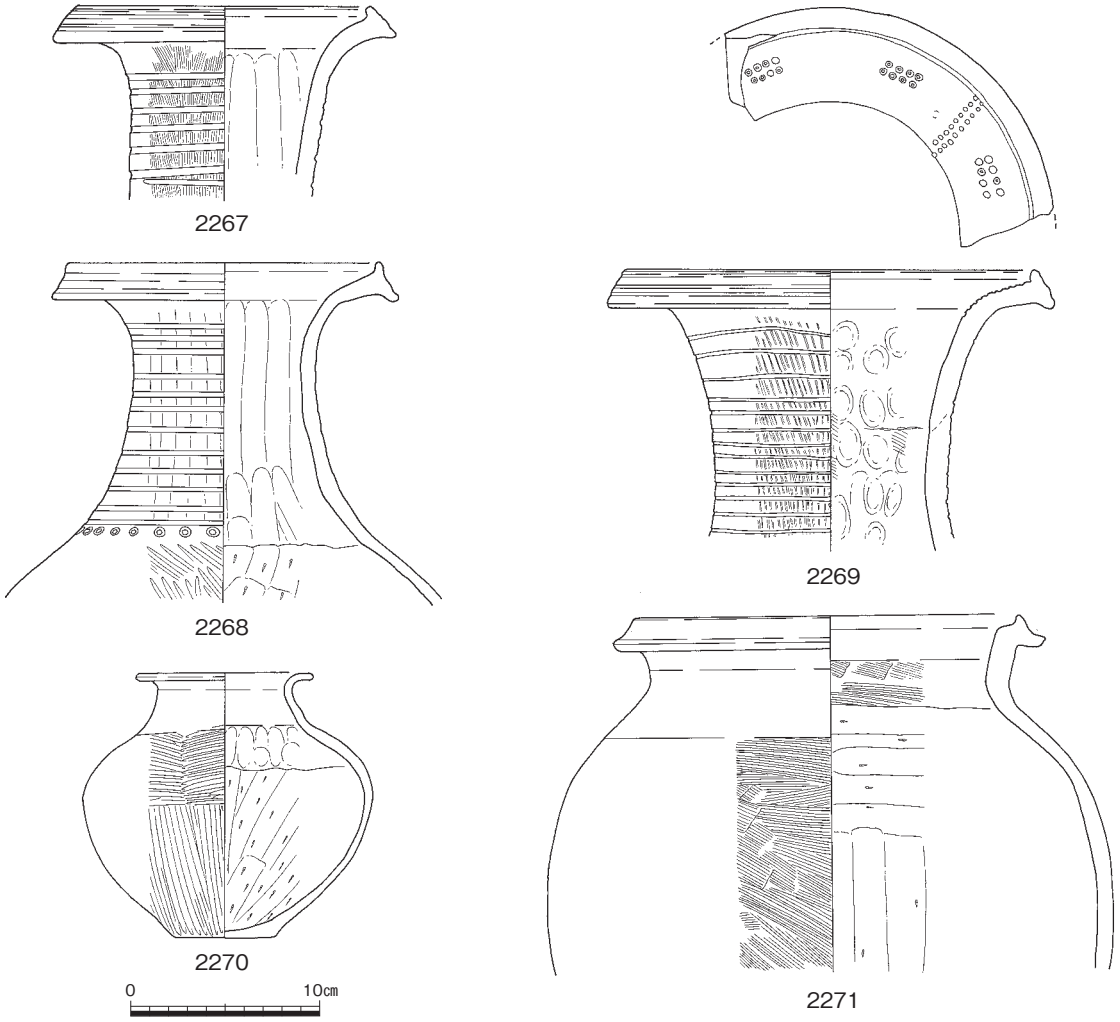
検出面の標高は11.25ｍを測るが、第７・８層堆積以後の浅い流路によって上部は失われている可能性がある。その流路の埋土である第６層から掘り込まれている竪穴住居45（弥・後・Ⅲ～Ⅳ）が河道埋没時期の下限を示す。河道埋土からは、弥生土器2267～2292、石製品Ｓ126～Ｓ128、土製品Ｃ65・

C66などが出土した。埋没以後も基本的に低位部、あるいは流路が形成されやすい場所であり、河道中央寄りでは平安時代の溝31（第１～４層）を確認した。

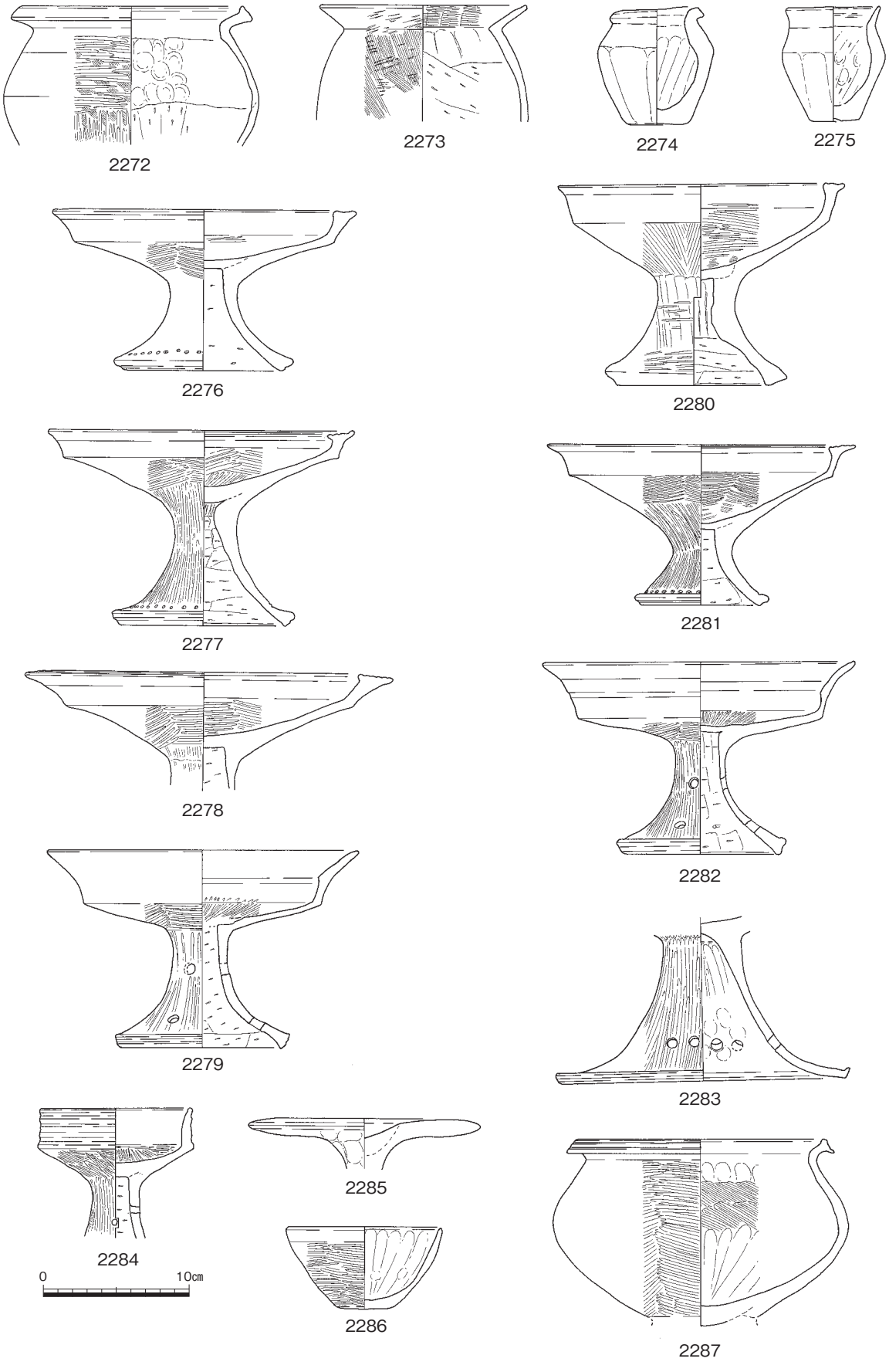
長頸壺2267～2269は、いずれも口縁端部が上下に拡張する。2267の頸部沈線は螺旋状に巡る。2269



1　にぶい黄褐色(10YR4/3)細砂〈溝31〉
2　灰黄褐色(10YR5/2)細砂～粗砂〈溝31〉
3　灰黄褐色(10YR5/2)細砂～粗砂〈溝31〉
4　褐灰色(10YR5/1)シルト〈溝31〉
5　〈竪穴住居45〉
6　黒褐色(10YR3/2)細砂～シルト
7　黒褐色(10YR3/2)粗砂
8　褐色(7.5YR4/5)細砂～シルト
9　明褐色(7.5YR5/8)細砂
10　褐色(7.5YR4/5)細砂（褐灰色(10YR4/1)細砂混）
11　褐色(7.5YR4/5)粗砂〈弥生基盤層〉



第440図　河道４（1/60）・出土遺物①（1/4）

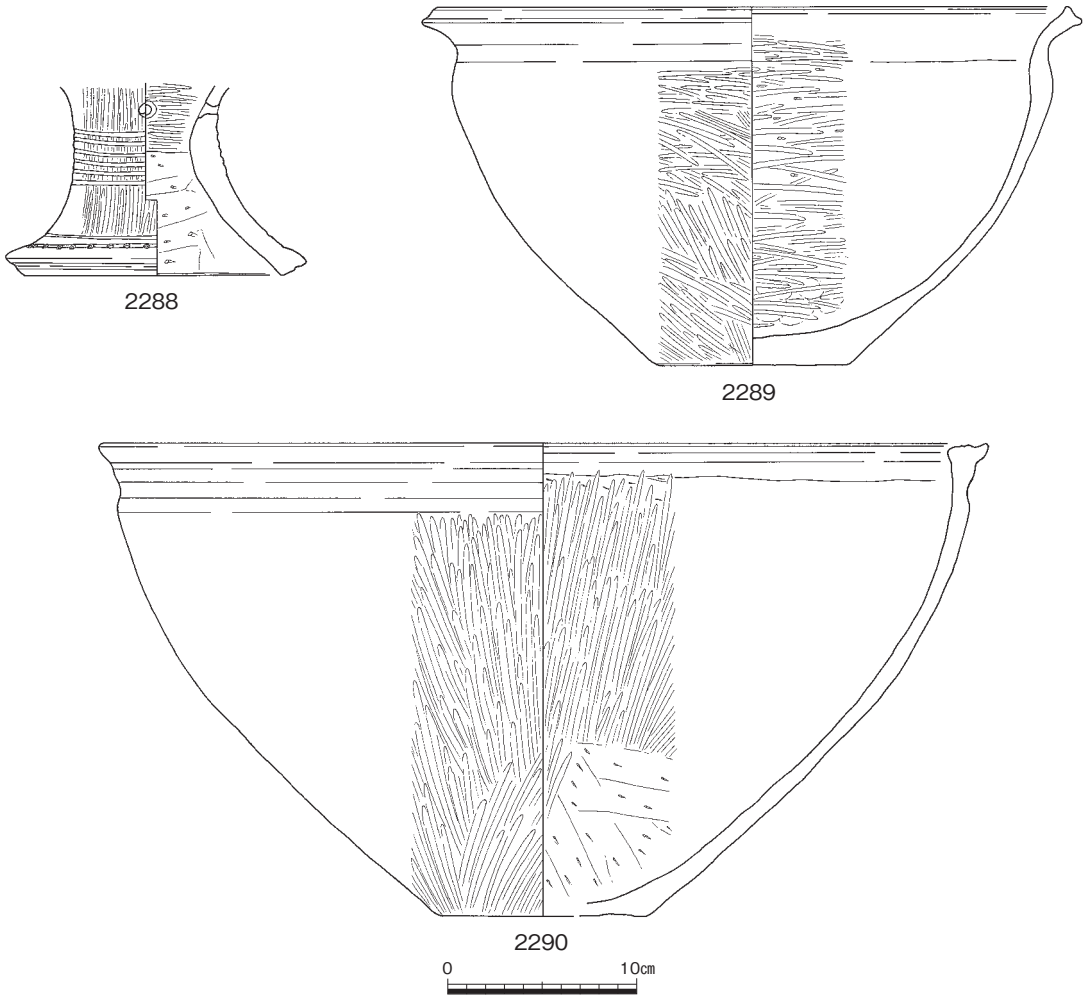


第441図　河道４出土遺物②（1/4）

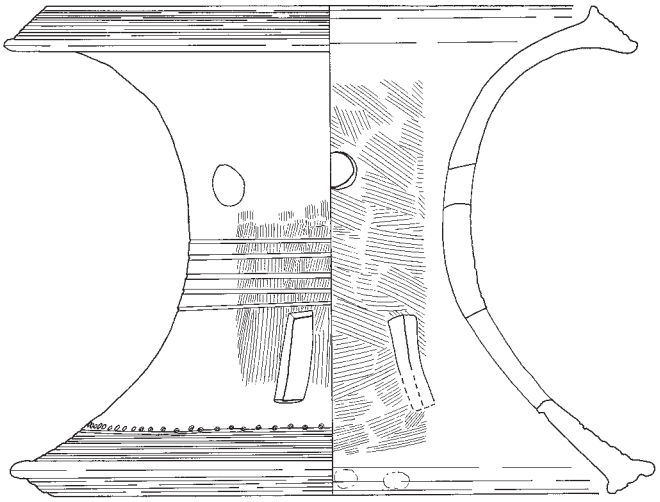
の口縁部内面には、竹管文４個２列と棒状工具の刺突文２列で構成された文様が施される。小形の壺2270は内傾する頸部から口縁部が屈曲し水平に開く。肩部外面には横方向のヘラミガキが施される。大形の甕2271は頸部が短く立ち上がり、口縁端部は拡張する。甕2272の胴部内面のヘラケズリは最大径部分にとどまる。甕2273は口縁部が「く」字に屈曲する。2274・2275は小形の甕である。高杯2276～2278・2280・2281は口縁端部が水平に拡張し、2279・2282は外反しながら上方にのびる。脚部は「ハ」字に開き、端部は肥厚する。小形の高杯2284は口縁が垂直に立ち上がる。2285は器種不明で、端部に剥離の可能性を示す。鉢2286は胴部がわずかに内湾しながら斜め上方にのびる。2287は台付鉢で、胴部中央が最大径になる。口縁端部は上下に拡張する。鉢2289・2290は胴部が内湾しながら開き、前者は「く」字に屈曲して口縁部に続く。後者の口縁端部は水平方向に肥厚する。器台2291・2292は、筒部上段に円形の透かし孔、下段に長方形あるいは円形の透かし孔を施す。

Ｓ126は楔形石器、Ｓ127は削器で、いずれもサヌカイト製である。Ｓ128は石英安山岩製の敲石で、敲打面側の断面が厚い。管状土錘Ｃ65は混入の可能性がある。Ｃ66は薄い粘土板を折り返した土製品で、何らかの個体から剥離した一部分の可能性もある。

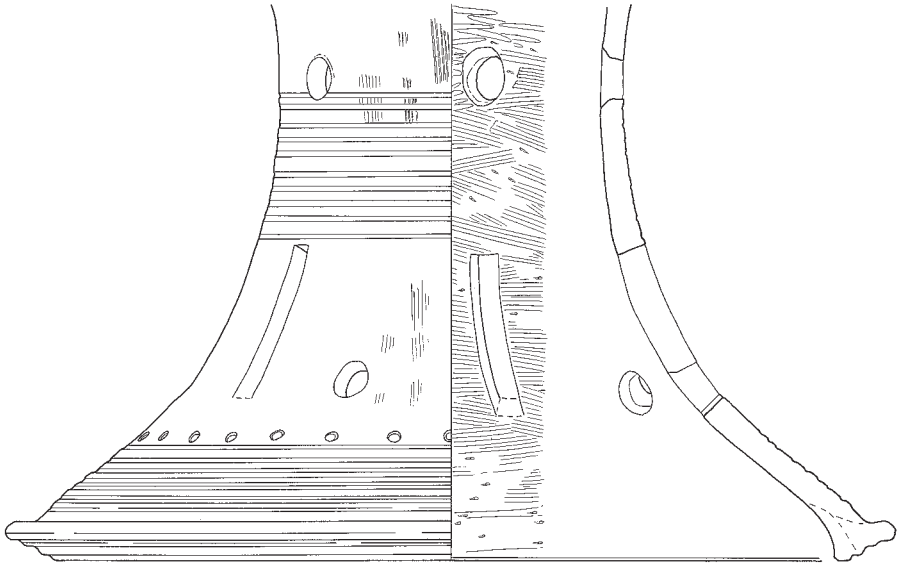
河道４は、遺構との関係や出土遺物から、弥・後・Ⅰ～弥・後・Ⅱには機能しており、弥・後・Ⅲ～弥・後・Ⅳまでに埋没したと考える。（柴田）



第442図　河道４出土遺物③（1/4）

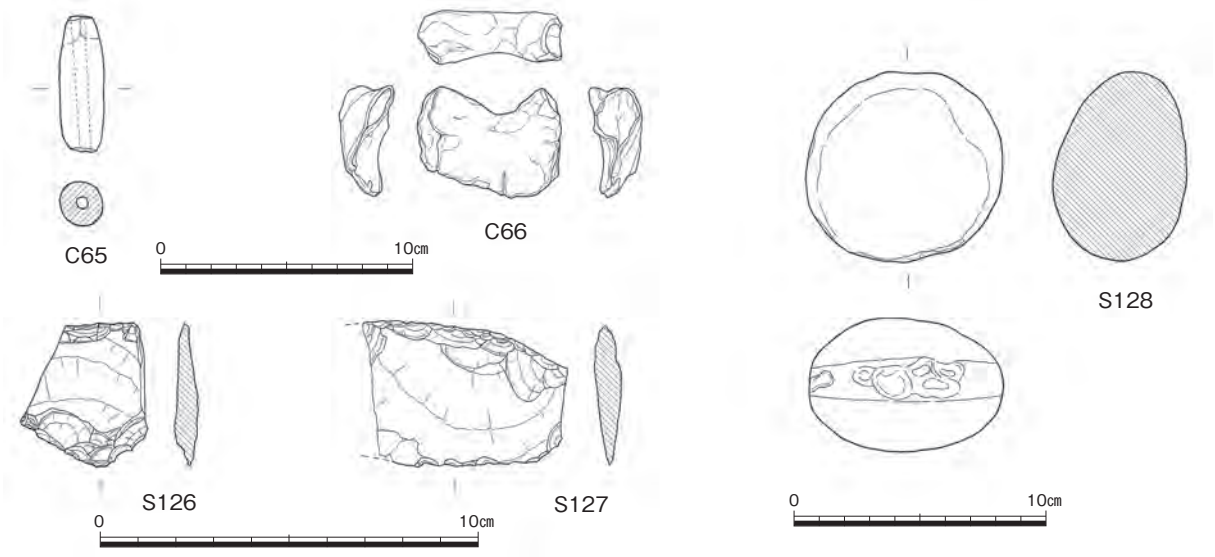


2291



2292

0　10cm



第443図　河道４出土遺物④（1/4・1/3・1/2）

11　たわみ

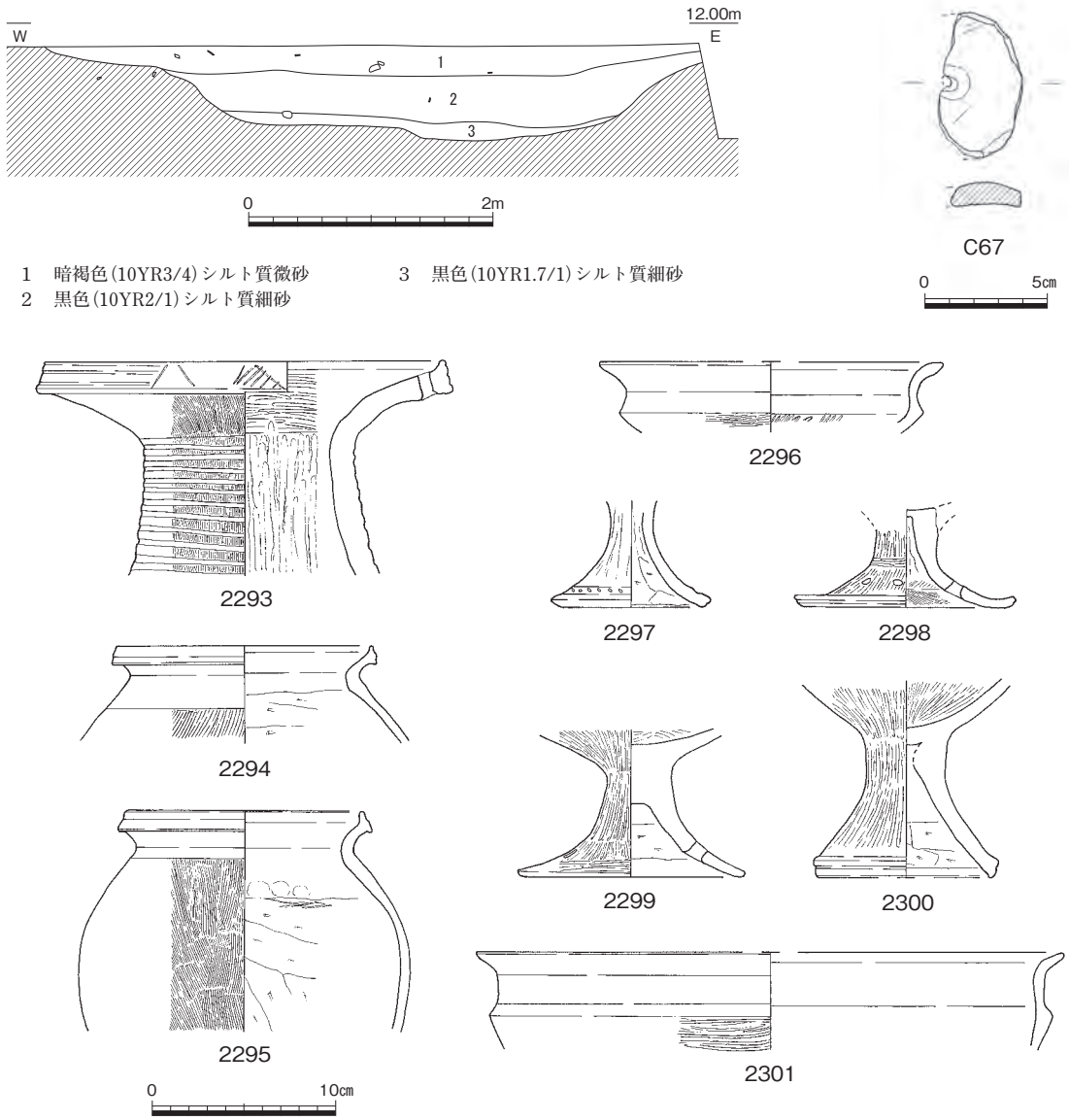
たわみ１（第12・444図、図版75－１）

Ｈ11・12、Ｉ11・12の接点に位置する遺構で、その大半はＩ11の北東側にある。溝８と重複しており、本遺構が先出している。また溝９の西側に位置しており、本来は、やや低位部に位置した遺構である。当初は竪穴住居の可能性も考えたが、柱穴等は見つからなかった。

遺構の規模は、長軸長560㎝以上、短軸長520㎝で、平面形状は不整形である。確認面からの深さは78㎝で、底面の標高は11.50ｍになる。断面形状は逆台形であり、覆土はシルト質土が主体である。

遺物はどの層からも満遍なく出土する。**2293**は長頸壺である。口縁部に鋸歯文が施される。**2294**・**2295**は甕である。口唇部が下に張り出す。**2296**～**2300**は高杯である。脚部がやや肥厚するものが多い。**2301**は鉢である。**C67**は円板状土製品である。

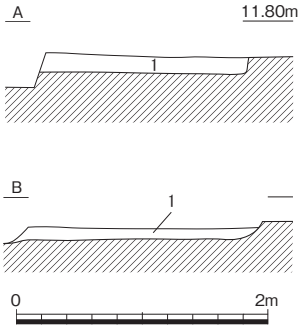
これらの特徴は弥・後・Ⅲであり、遺構の時期も同様になると考える。　（小林）



第444図　たわみ１（1/60）・出土遺物（1/4・1/3）

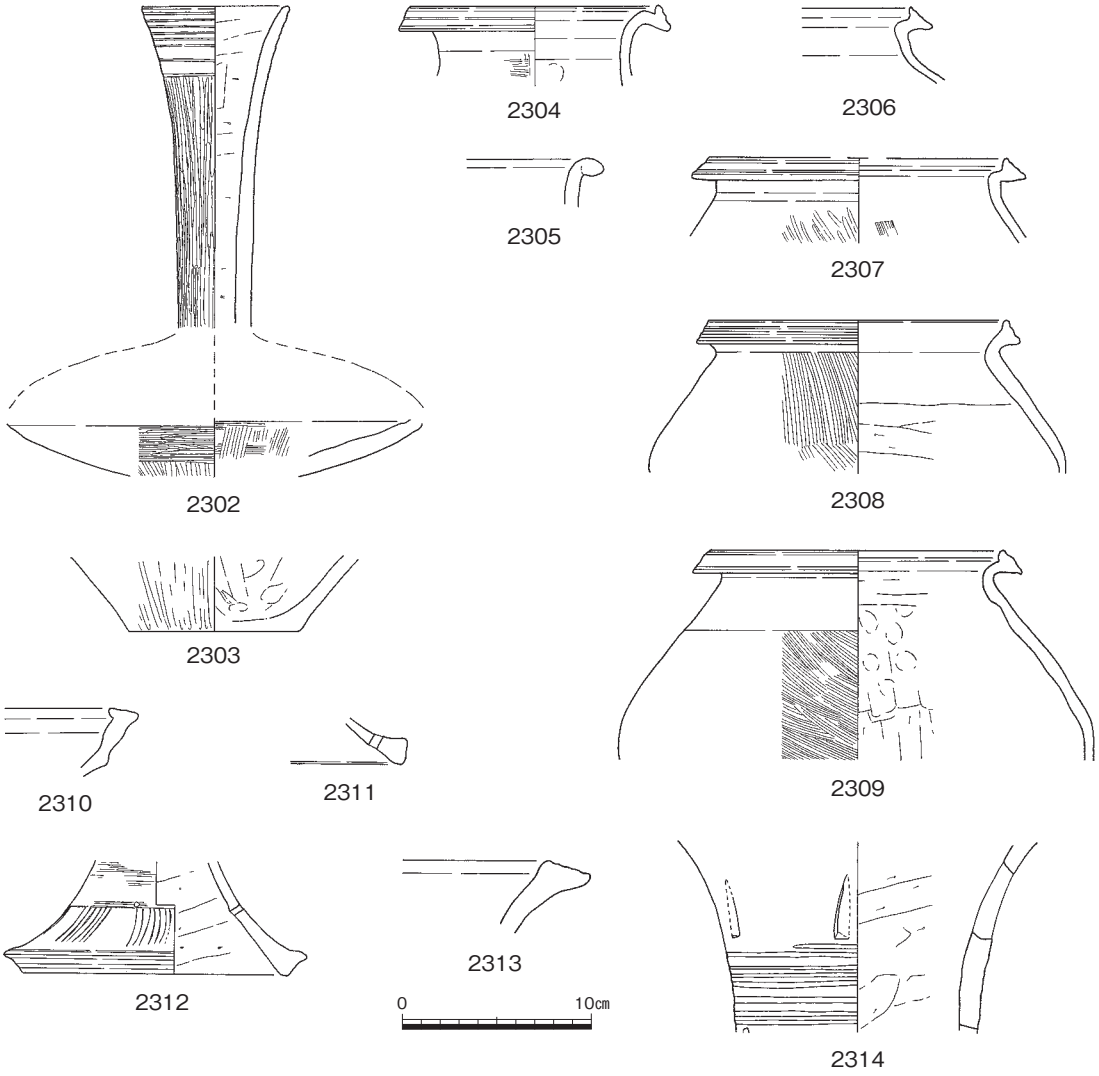
たわみ２（第13・445図、写真33）

H13・14の南端に跨がっており、竪穴住居28の南約２ｍに位置するたわみである。平面形は整った楕円形で、断面形は皿状を呈している。南西部が不明瞭であるが、規模は長軸521㎝以上、短軸350㎝以上で、検出面からの深さは15㎝を測り、底面の標高は11.40ｍである。



1　灰黄褐色(10YR4/2)粘性砂質土（土器含）

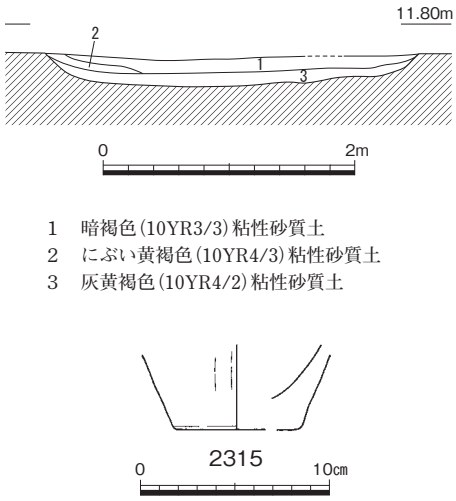
写真33　たわみ２（北西から）



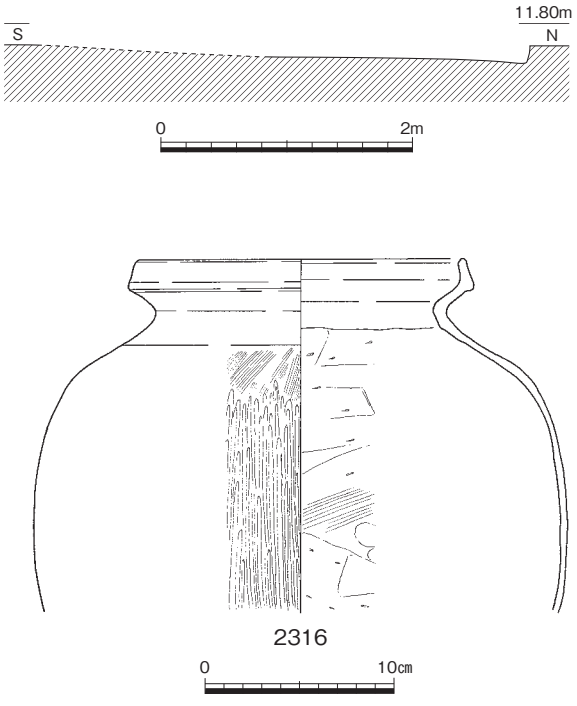
第445図　たわみ２（1/60）・出土遺物（1/4）

埋土は、他の遺構と同様にやや粘質で単層であったが、土器が比較的多く出土した。当初は竪穴住居の可能性を想定して調査を行ったが、壁体溝や柱穴等が全く認められなかったことから、たわみとして取り扱った。

出土した土器は、壺2302～2305、甕2306～2309、高杯2310～2312、器台2313・2314がある。2302は算盤玉状の体部を持つ直口壺で、外面は丁寧にヘラミガキが施されている。2305は口縁端部を折り曲げて玉縁状を呈しており、粘土帯系土器と考えている。これらの土器から、遺構の時期は弥・後・Ⅰに比定できる。　（石田）



第446図　たわみ３（1/60）・出土遺物（1/4）



第447図　たわみ４（1/60）・出土遺物（1/4）

たわみ３（第13・446図、図版75－２）

Ⅰ14の北西に位置する。北東部は溝10と重なり、南半部については、調査区境に設けられた水路下にあたるため調査が行えず、全容については不明である。平面形は隅丸方形で、断面は皿状を呈している。規模は現状で長軸317㎝、短軸160㎝、検出面からの深さは26㎝を測る。底面は平坦で、標高は11.30ｍである。

掘り方はあまり明瞭でなく、埋土は暗褐色を呈した粘質土で、土器片を含んでいた。出土した土器は、いずれも小片で、図示できたのは甕の底部2315のみである。

小片も含めた土器の特徴からみて、遺構の時期は弥・後・Ⅰと考えられる。　（石田）

たわみ４（第13・447図）

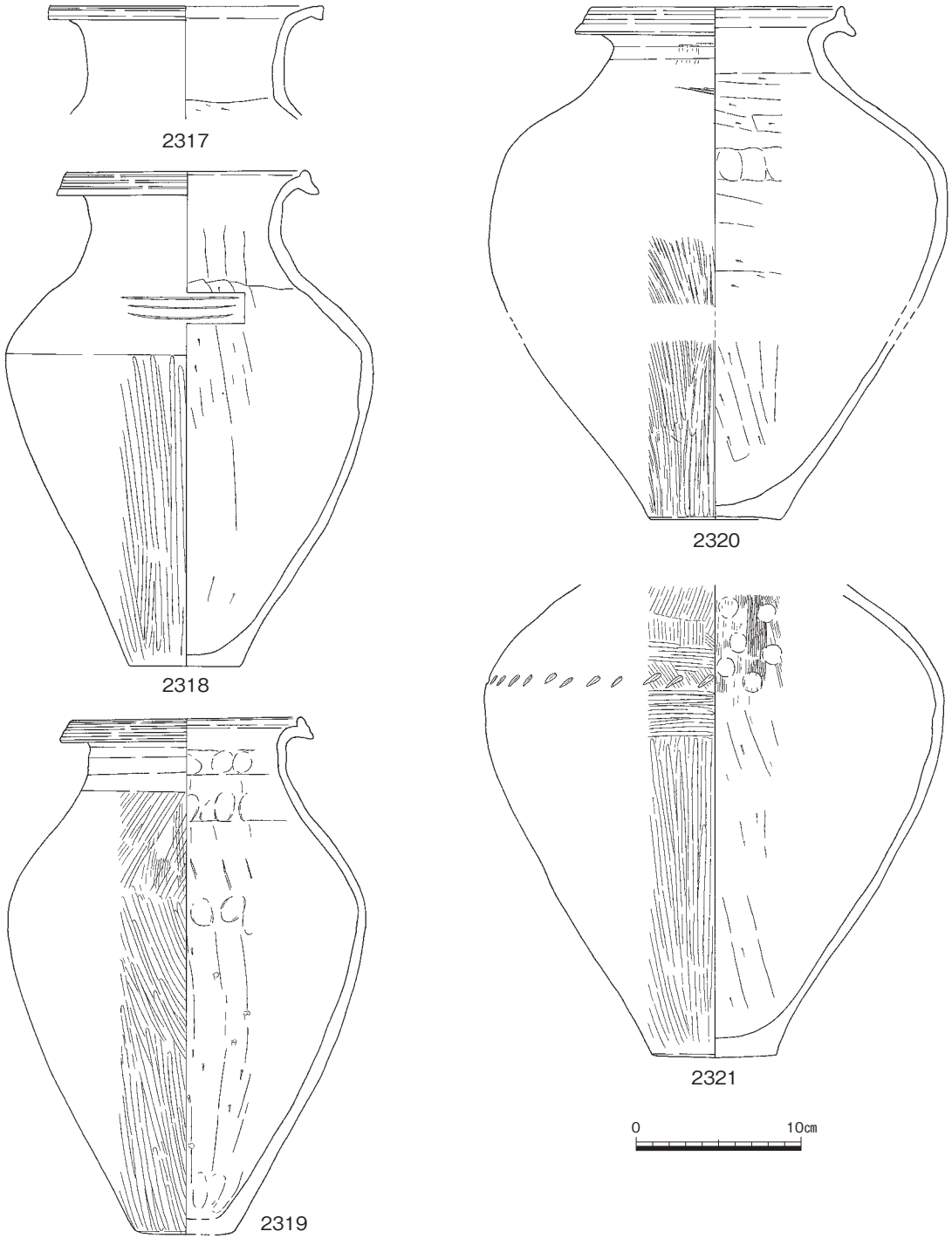
Ｈ17とⅠ17境で、竪穴住居43の北西、竪穴住居41の北に位置する。平面形は長軸約400㎝、短軸約300㎝を測り、北東側にすぼまる形状を呈す。断面を見ると、北壁はほぼ直角に立ち上がり、検出面から底面までの深さは10㎝程度を測るものの、南へ行くほどに浅くなる。したがって、人工的に掘り込まれた遺構というよりは、ベース層がくぼんだ自然的なたわみであると思われる。

出土遺物は少なく、甕2316以外は土器細片のみ。2316は二重口縁を持ち、体部はやや肩が張る。体部外面は縦あるいは斜め方向のハケを施した後に、縦方向のヘラミガキで仕上げている。体部内面は頸部直下から横あるいは斜め方向のヘラケズリを行う。これらの特徴から、弥・後・Ⅳの時期に比定できる。　（松尾）

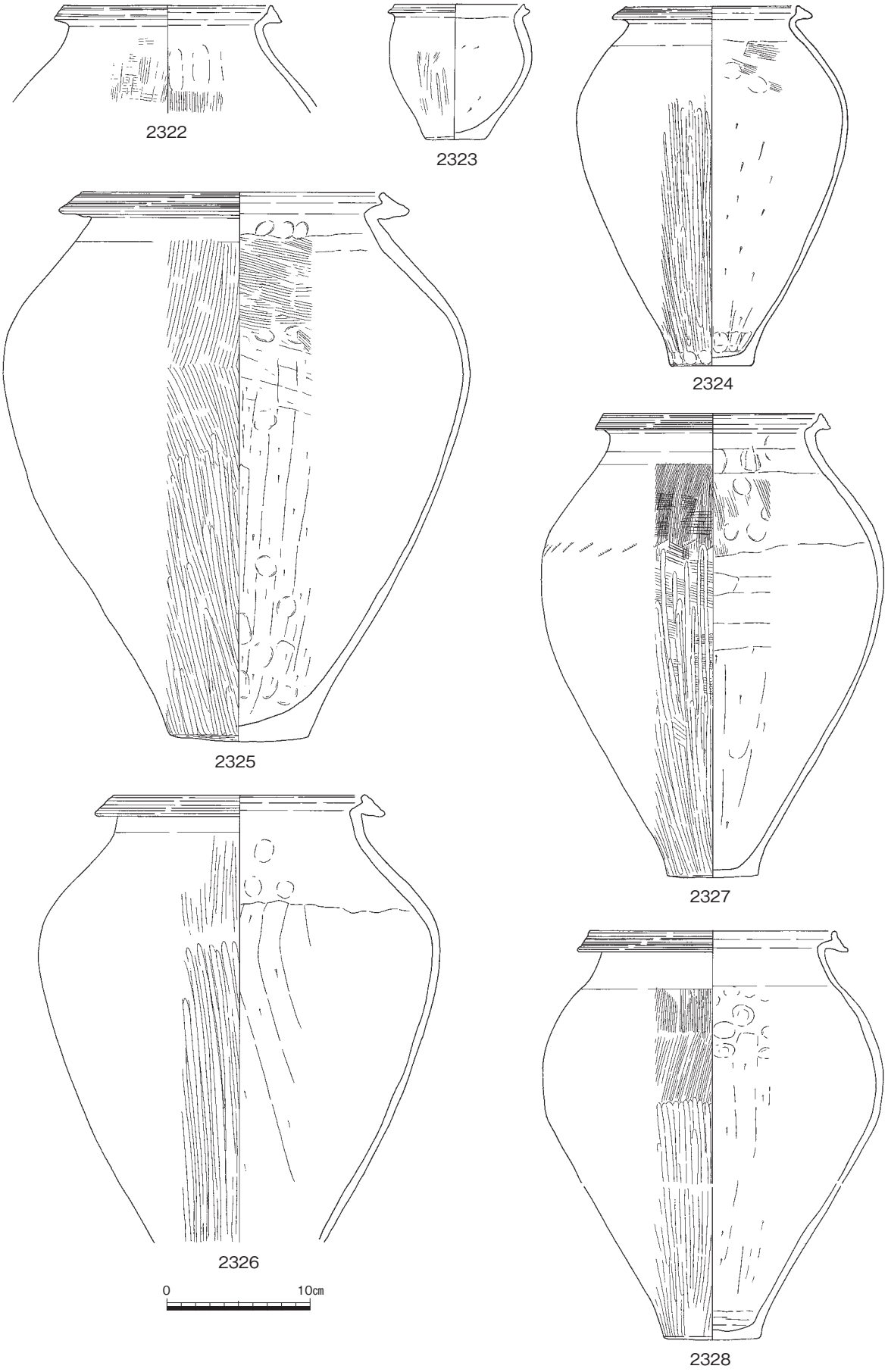
12　その他の遺構・遺物

土器溜まり１（第13・448～450図、図版41－２・96・97）

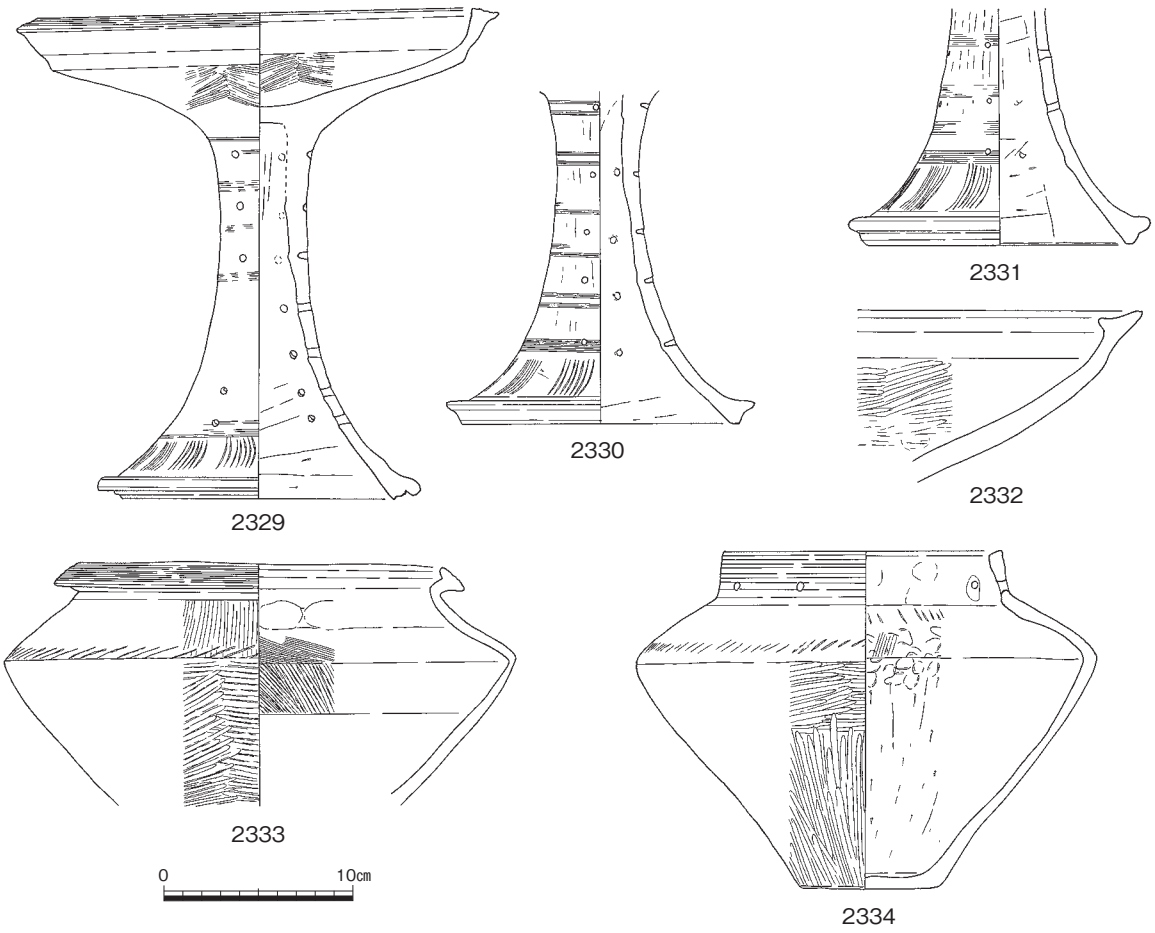
H15の北西、平行して流れる溝11と溝12の間で検出した土器溜まりである。古墳時代の竪穴住居67とも重なっており、一部については竪穴住居に削平されていた。溝11の肩口付近に位置するが、溝の範囲からは外れており、検出できなかったが土坑等の遺構に伴っていた可能性もある。



第448図　土器溜まり１出土遺物①（1/4）



第449図　土器溜まり１出土遺物②（1/4）



第450図　土器溜まり１出土遺物③（1/4）

土器群は標高11.50～11.70ｍ付近で、平面的には120×60㎝の範囲でまとまって出土しており、完形に近い状態に復元できるものが多かった。このような状況から、検出した土器群は何らかの祭祀に使用された後、廃棄した可能性が考えられる。

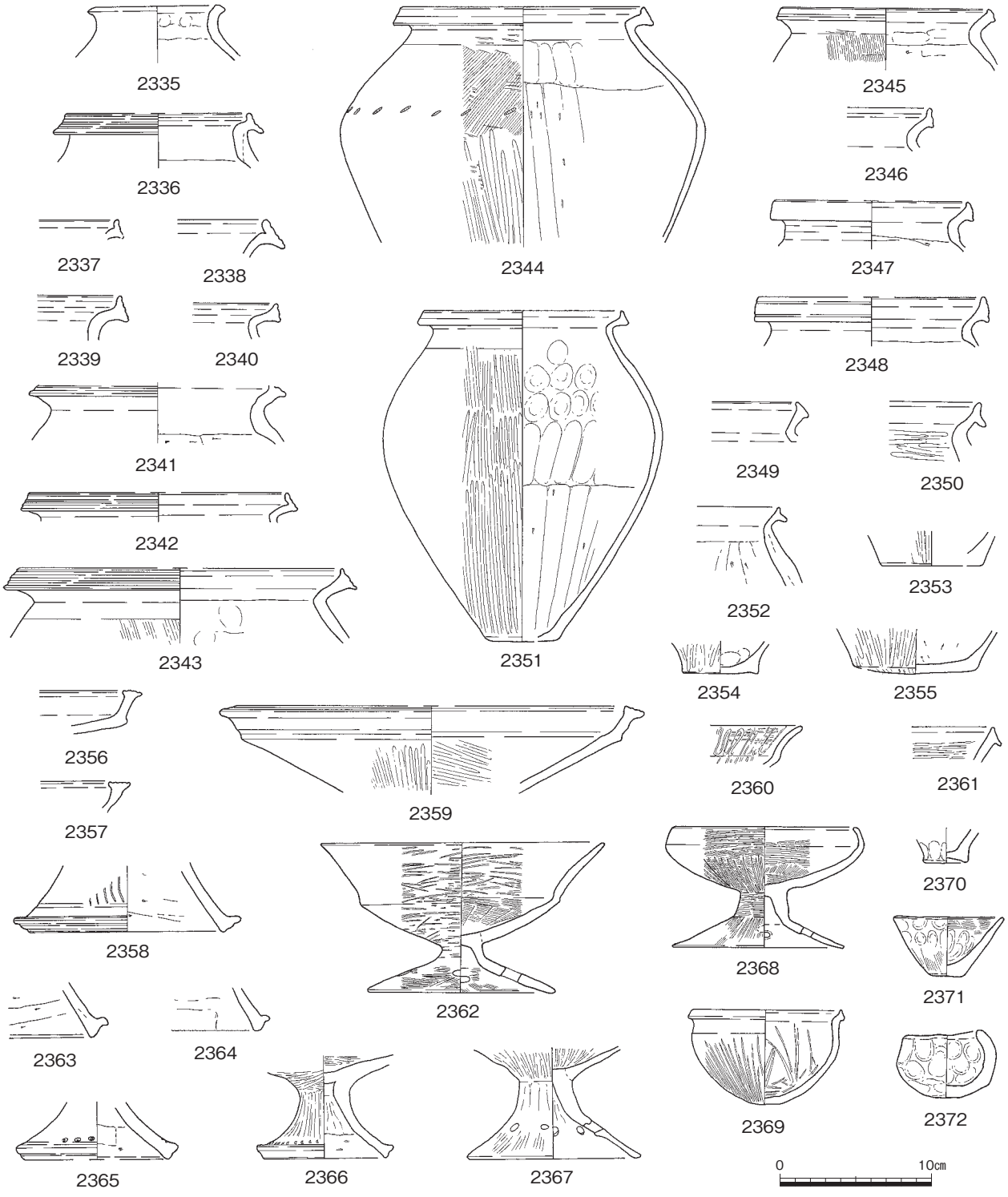
出土した土器は、壺**2317**～**2321**、甕**2322**～**2328**、高杯**2329**～**2331**、鉢**2332**・**2334**、台付鉢**2333**がある。**2318**の肩部外面には篦描きにより沈線が３条平行に刻まれている。これらの土器は弥・後・Ⅰの特徴を示し、一括性の高いものになる。（石田）

柱穴１～32（第11～13・451・452図、図版116）

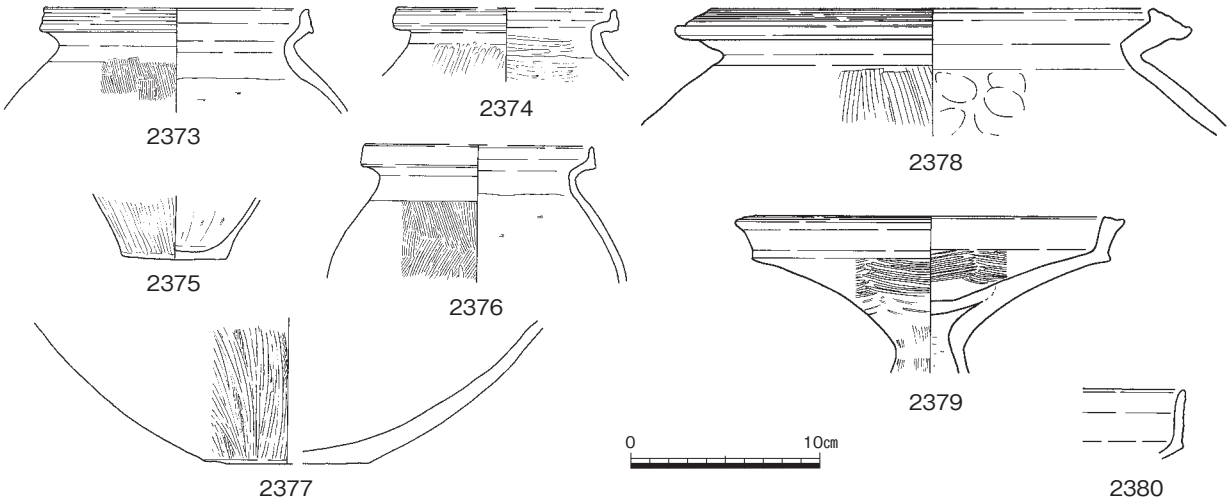
弥生時代と考えられる柱穴は河道１から河道４の間に散在するが、特に銅鐸が出土した微高地最高所周辺と河道４西南側に多く見られる。このうち実測しうる遺物が出土した柱穴32基を抽出し、第451・452図にＰ１～32として掲載している。鉄器や石器など形状から時期を特定できない遺物については、弥生土器が共伴した場合に限ってここに挙げている。なお、分銅形土製品のように弥生時代に限定される遺物が古墳時代以降の柱穴から出土した場合は、遺構に伴わない遺物として扱った。

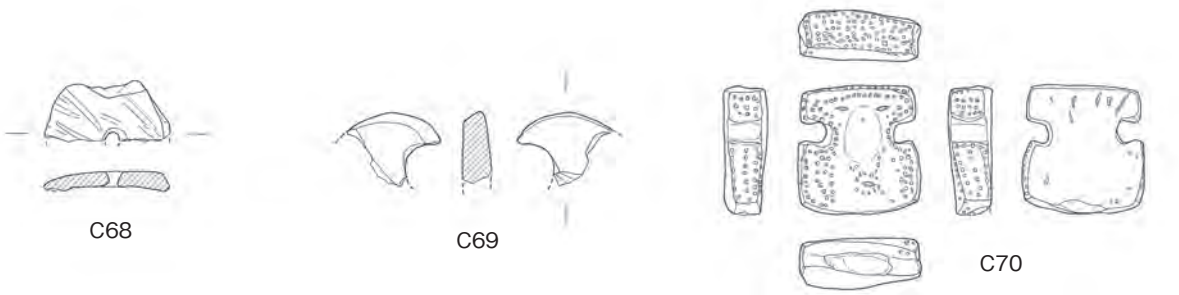
柱穴土器の示す時期をみると、中期後葉～後期初頭は旧２区、後期前葉は旧４区、後期中葉は旧３区、後期後葉は旧５区に多い傾向が看取できる。複数個体出土する柱穴も多く、Ｐ31からは完形の高杯**2362**が手捏ねの**2371**・**2372**と共に出土し、特筆される。Ｐ30から出土した鉢**2369**も完形である。Ｐ４からは**C68**、Ｐ５からは**M45**、Ｐ16からは**M46**・**M47**が出土した。Ｐ29及びＰ32からは分銅形土

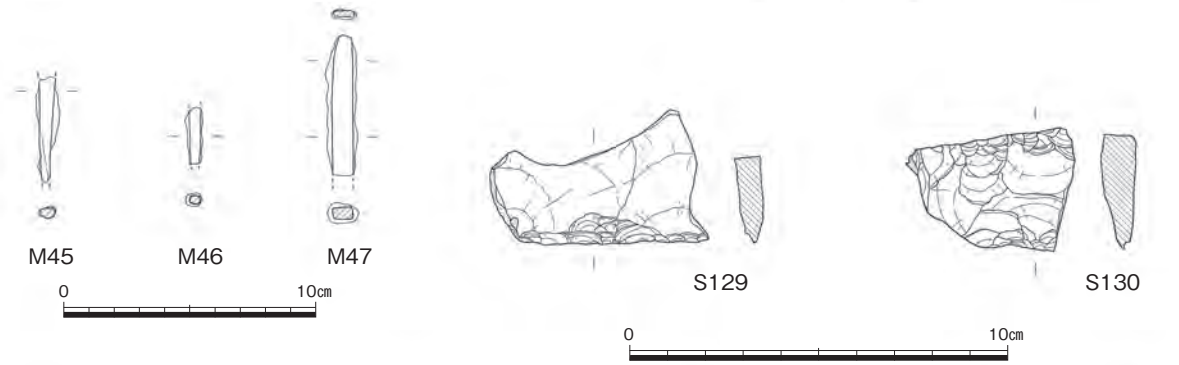
製品が出土した。共に小型で、後期に属すると考えられる。C69は細片だが、幅４㎝程に復元できる。全面丁寧にナデで仕上げられており、無文の可能性が高い。C70は方形基調の完形品で、下端を除く前面周縁と左右両側面、上端面に径約１㎜の刺突による文様が施されている。前面には米粒状の刺突で目口を表現している。両目の中間から約３㎜下がった部分には小さな円形の浅い凹みがあり、鼻を表現した可能性がある。口の周りも浅く、周縁の刺突とは明確な差が認められる。　（渡邉）

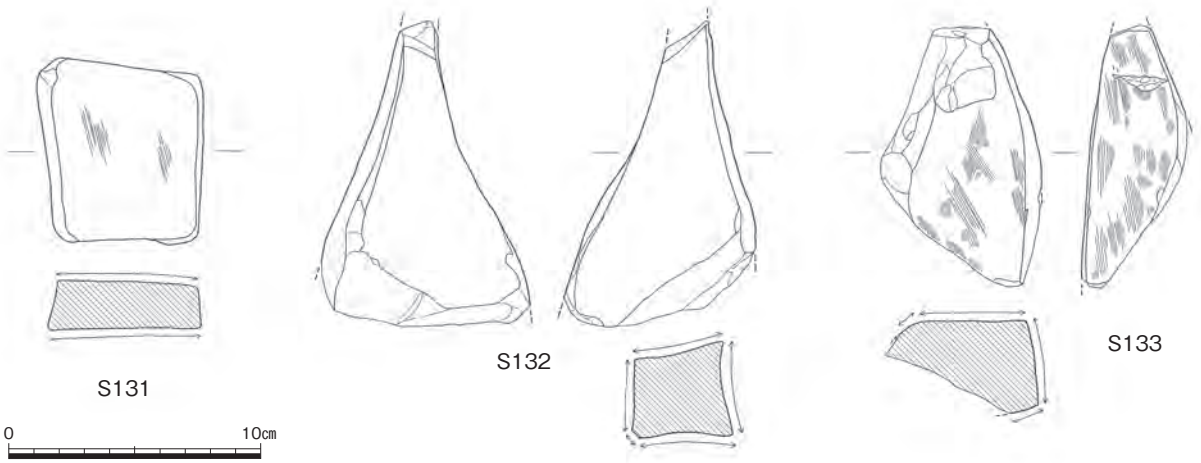


第451図　柱穴出土遺物①（1/4）





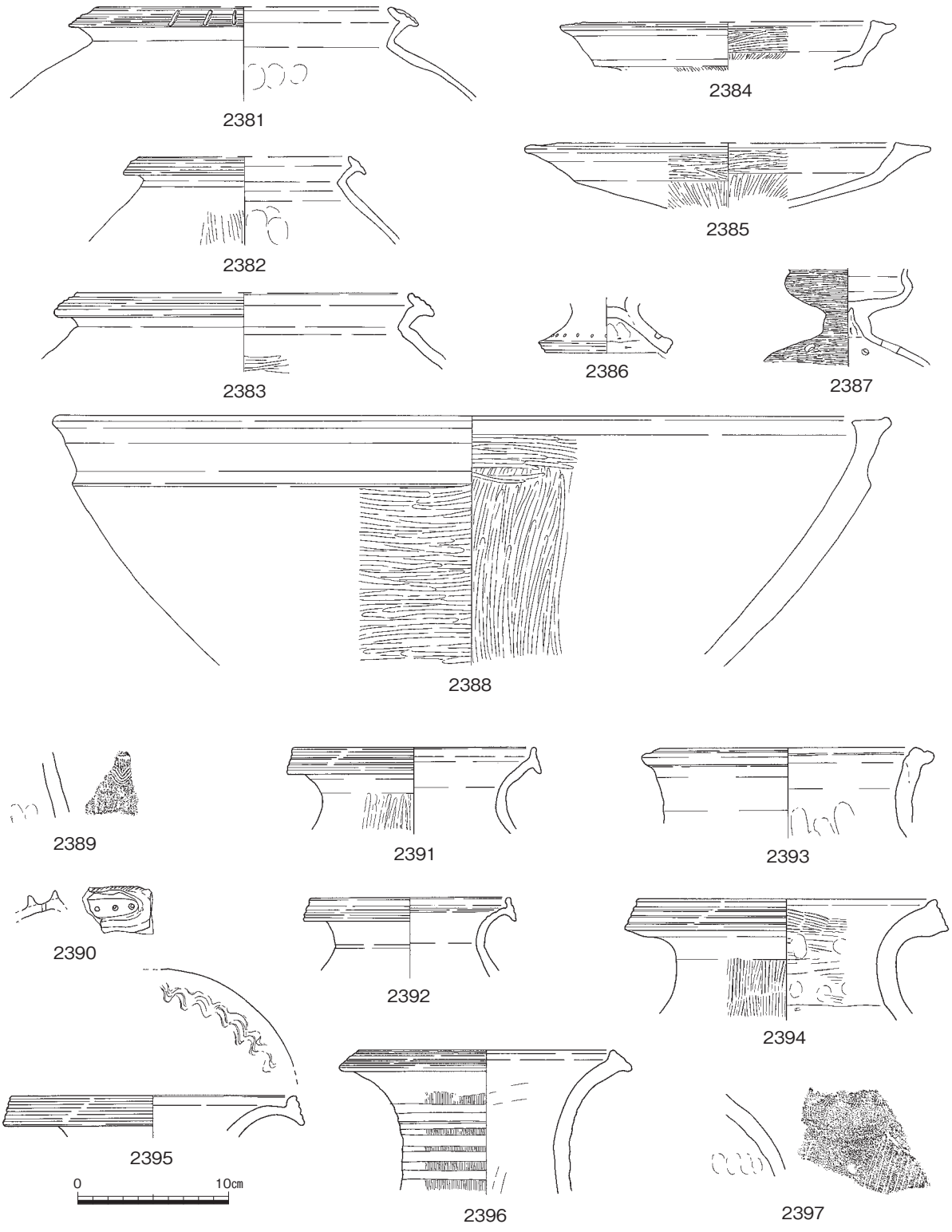




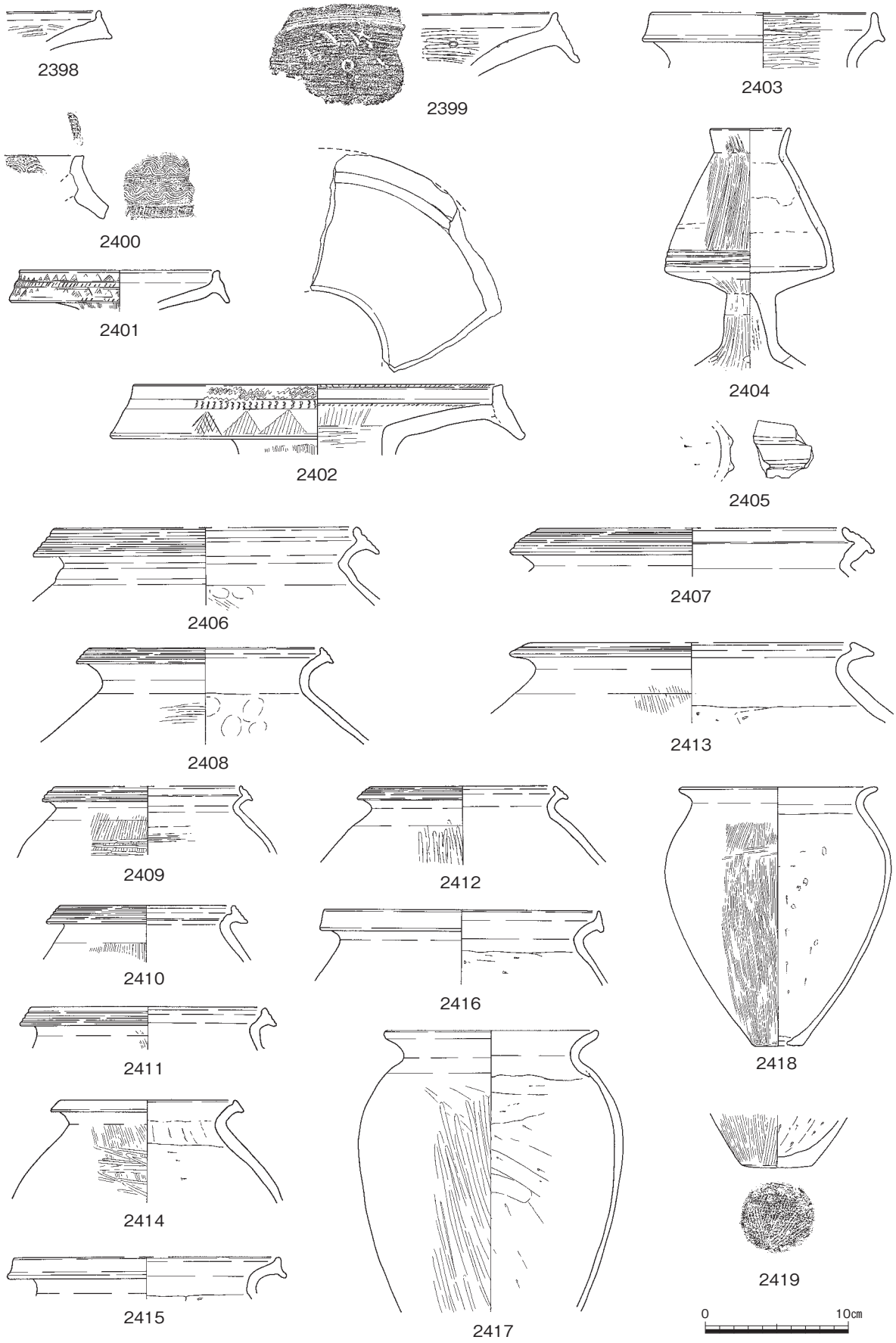
第452図　柱穴出土遺物②（1/4・1/3・1/2）

遺構に伴わない遺物（第453～467図、図版98・107・109・110・116・119）

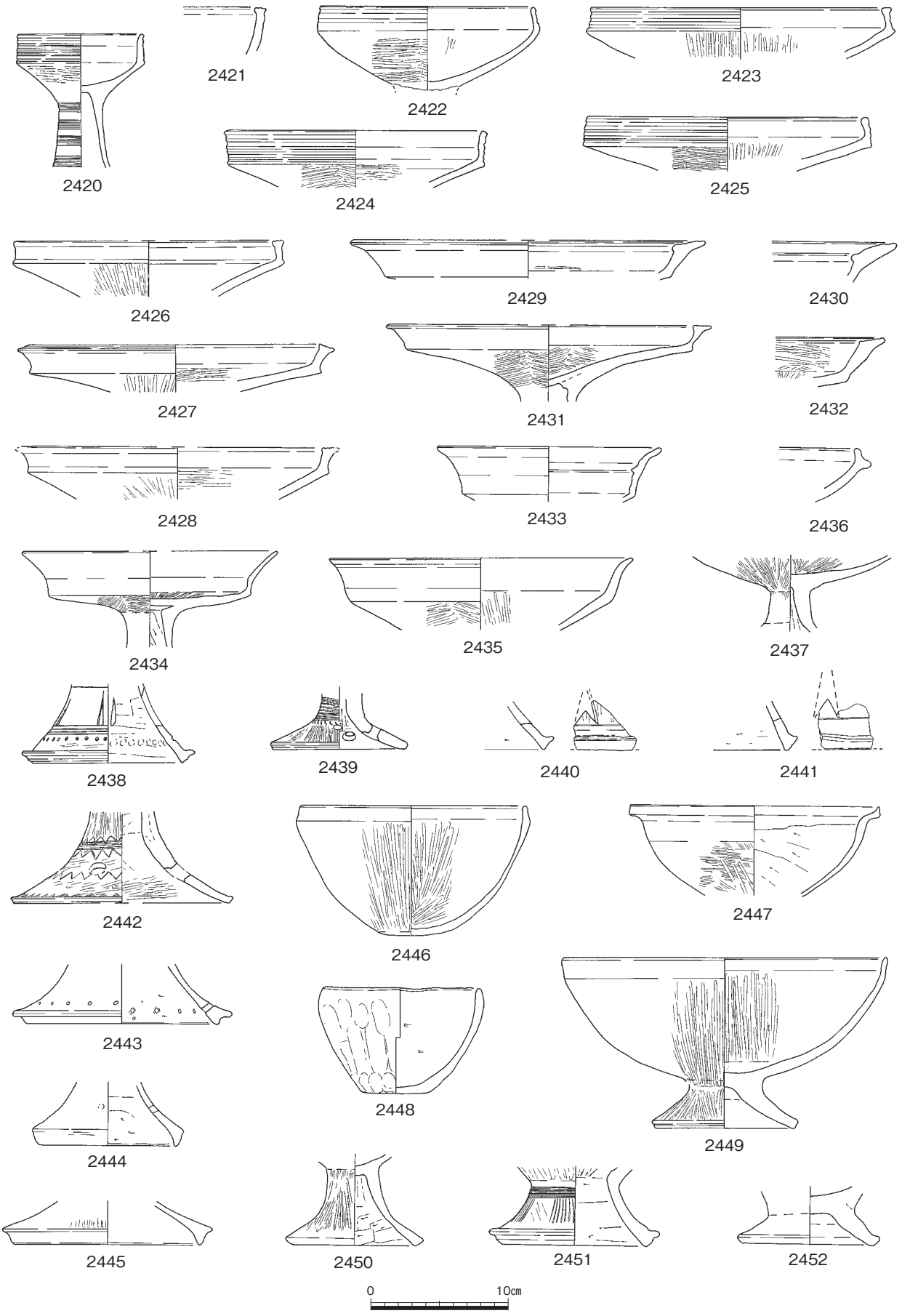
ここでは、掘り下げ作業や側溝掘削時に出土して帰属する遺構の不明な遺物や古墳時代以降の遺構に混在していた遺物を掲載している。当遺跡から出土した遺物量は膨大で、すべてを実測・掲載することは不可能であったので、特殊な器形や文様、時期的に僅少なものを抽出した。



第453図　その他の出土遺物＜弥生時代①＞（1/4）



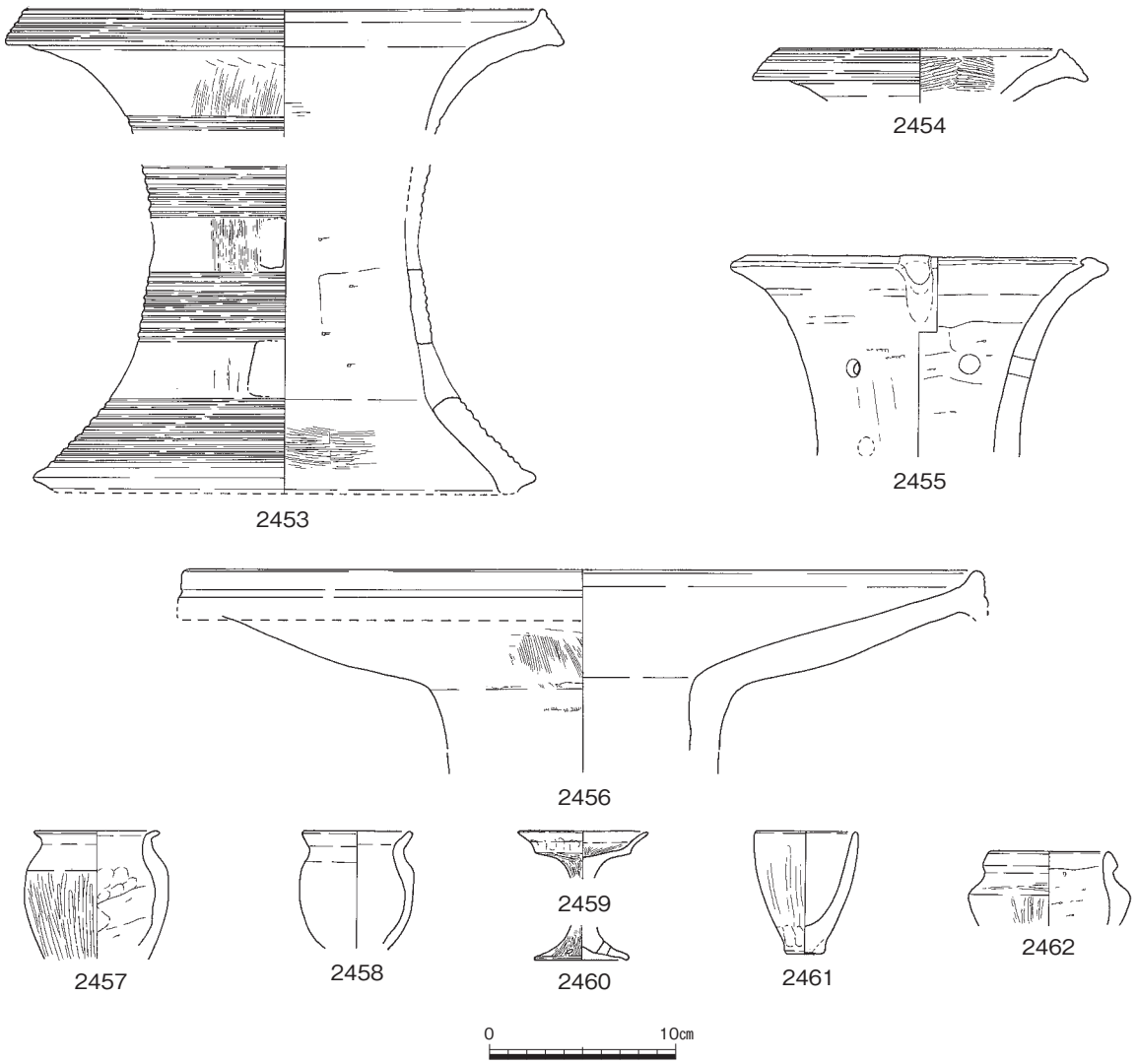
第454図　その他の出土遺物＜弥生時代②＞（1/4）



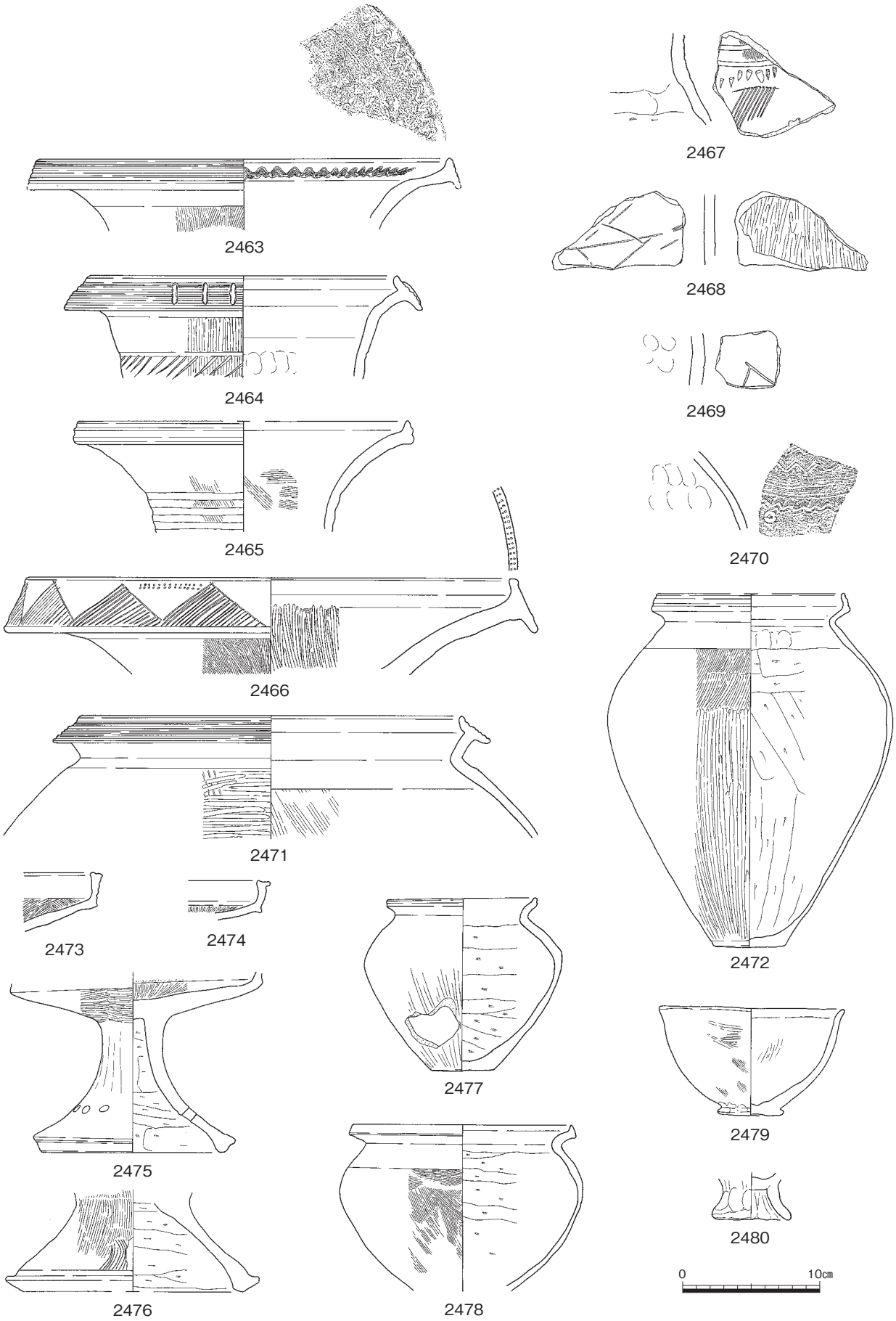
第455図　その他の出土遺物＜弥生時代③＞（1/4）

土器の出土量は旧２区が最も多い。旧２区は今回の調査地の中では弥生時代の遺構密度が最も高く、遺存状況も比較的良かったがゆえ、遺構個々の分離が困難で、遺構上部をかなり掘り下げ、その時に出土した土器が多く含まれているからである。一方、旧５区は遺構密度に比較して出土量が少ないが、開墾により上部を削平され、遺構の遺存状態が悪かったからである。旧６区は弥生時代の遺構は皆無で、弥生土器も出土していない。第453～459図に、地点毎の差異が明瞭になるよう版を分け、2381～2388に旧１区、2389～2462に旧２区、2463～2480に旧３区、2481～2510に旧４区、2511～2515に旧５区から出土した土器を掲載した。

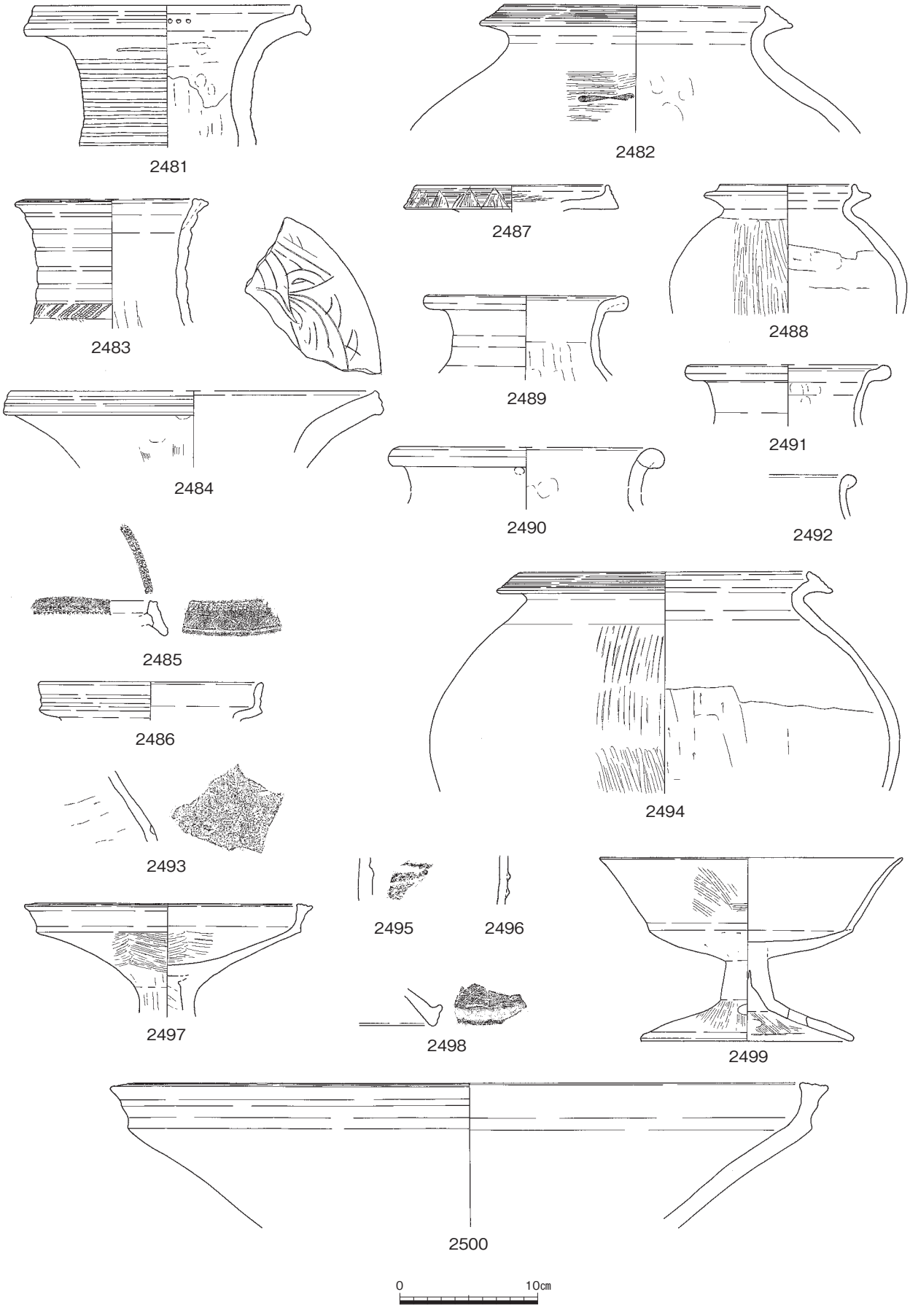
出土土器の時期はおおむね各地区の遺構存続時期に対応し、旧１・２区では中期後半～後期前葉、旧３区では後期中葉、旧４区では後期前葉が主体を占め、旧５区では後期後葉が多い。旧２区から出土した2389及び旧３区から出土した2470は櫛描き沈線文を有する壺で、中期前半に遡る。細片だが摩滅は認められず、遺跡の初現を考えるうえで重要である。2397・2467～2469・2484は篦描きによる絵画文土器である。2397・2467～2469は直線的な文様だが、2484は弧帯文を施している。曲線を不規則に組み合わせた様にも見えるが、左半は撥形で、右半は平行する曲線上部に２個の鈎形があり、龍を表現したようにも見える。2482は壺肩部に竹管２個を交差する極細の直線で連結した文様で、



第456図　その他の出土遺物＜弥生時代④＞（1/4）

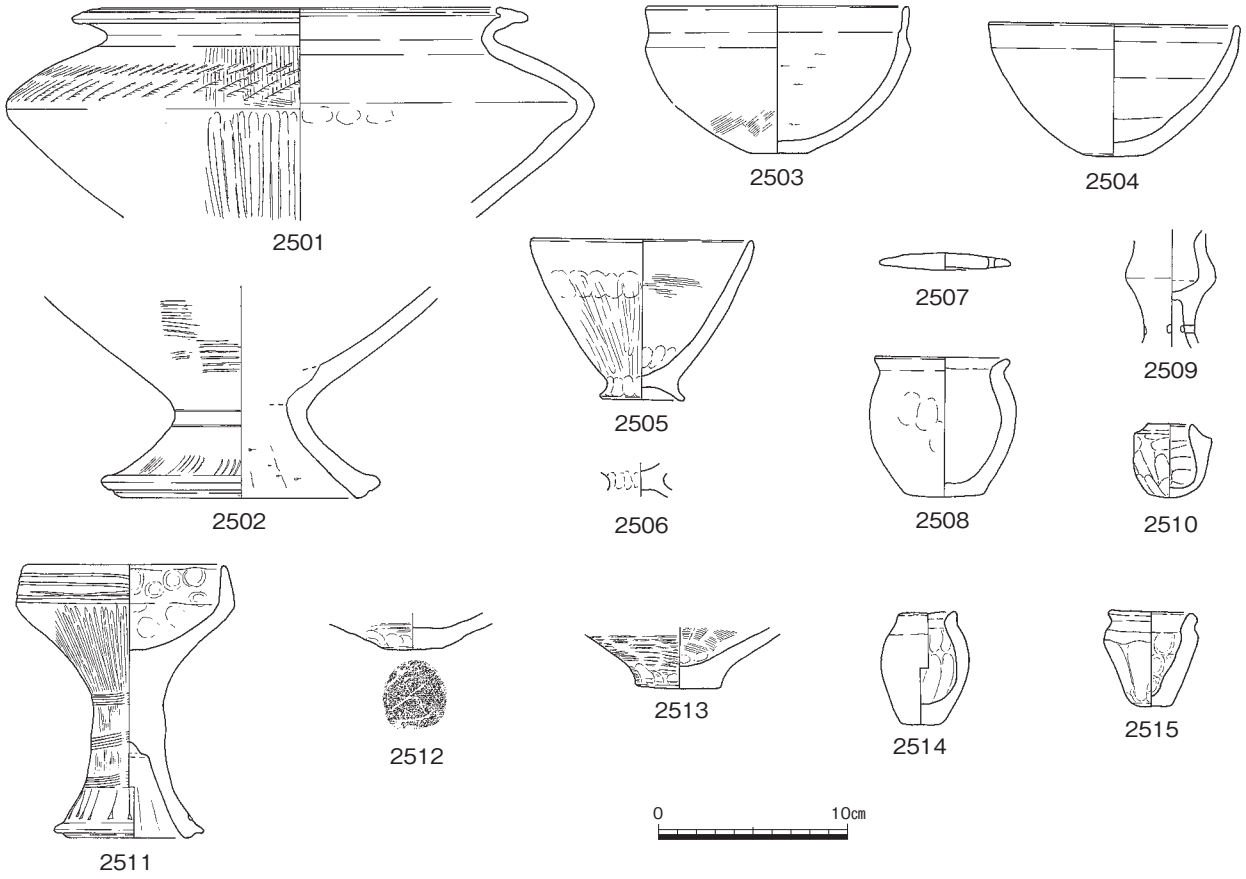


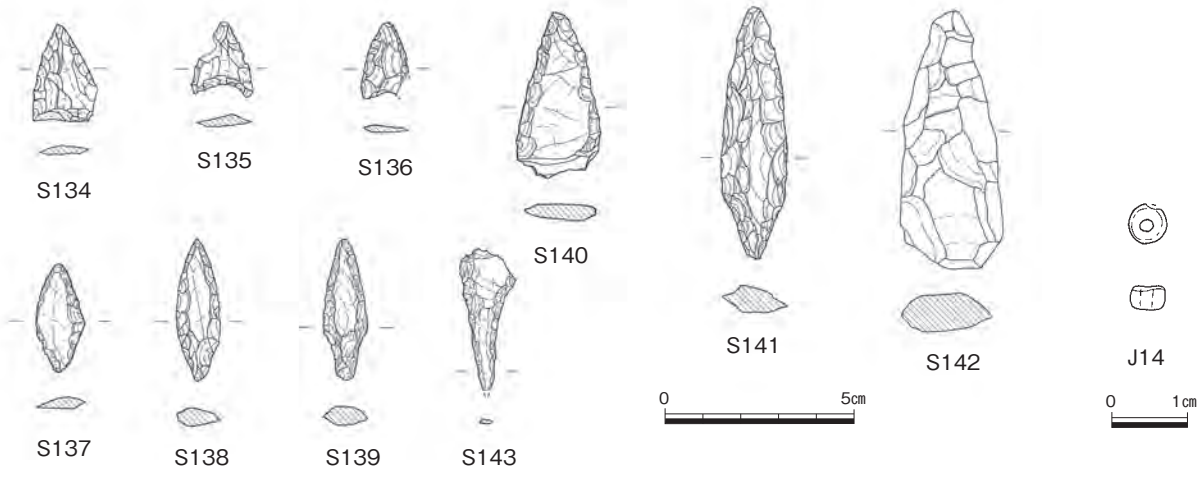
第457図　その他の出土遺物＜弥生時代⑤＞（1/4）



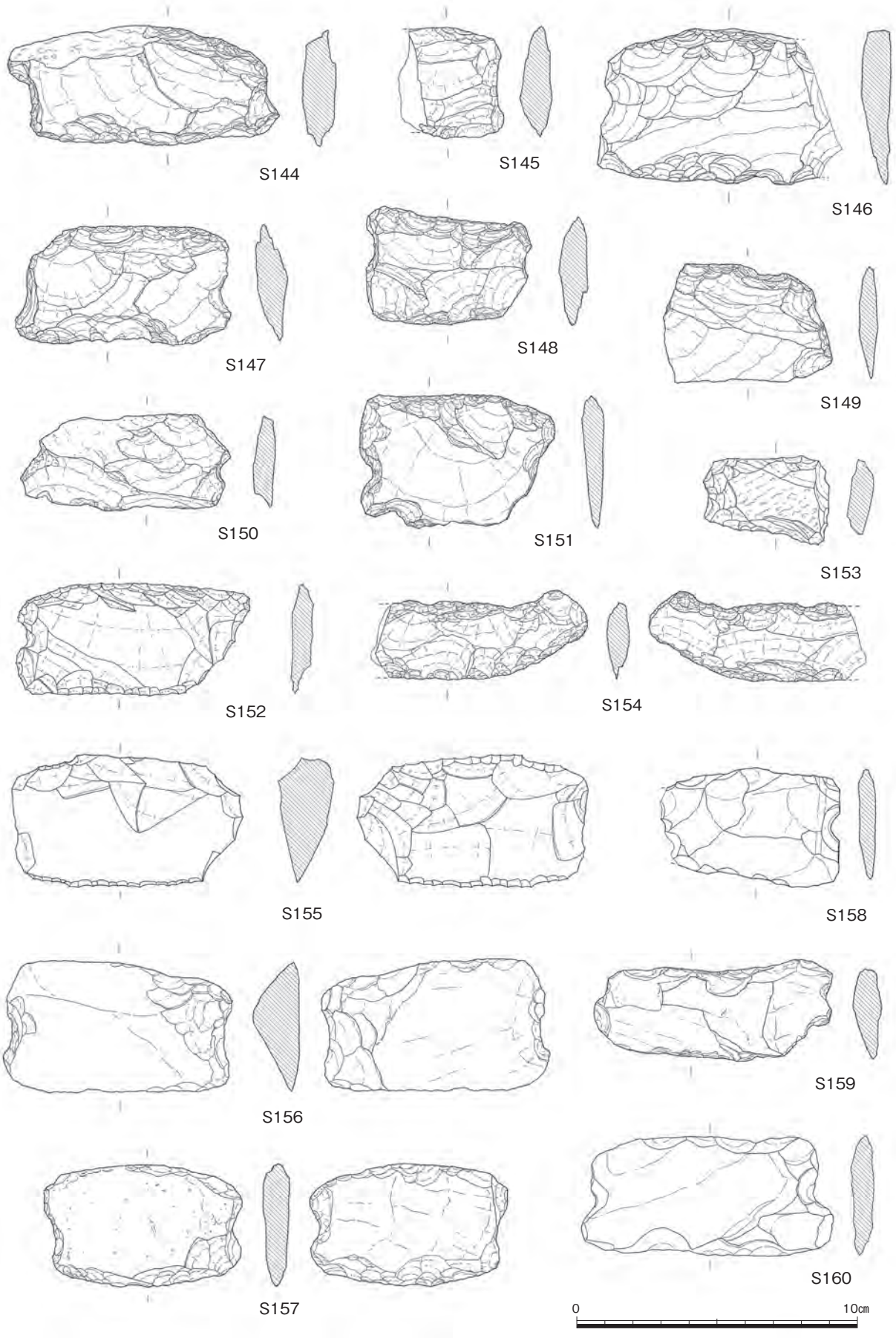
第458図　その他の出土遺物＜弥生時代⑥＞（1/4）

2399の口縁内面には竹管が１点スタンプされている。2481には刺突列点が３個ある。2498は高杯脚部で、縦方向の斜格子文を描いている。脚部にこのような線刻文を施すことは稀である。2384・2385・2387・2405・2432・2445・2486は丹塗り、2400～2402・2442・2466・2485は装飾性に富み、祭祀に用いられた土器と考えられる。2405は胴部最大径付近に貼付突帯を巡らす壺であろうか。2445は角閃石を多く含む特徴的な胎土を持つ。2440・2441は伊予に特徴的な矢羽根形の透かしを持つ高杯脚部

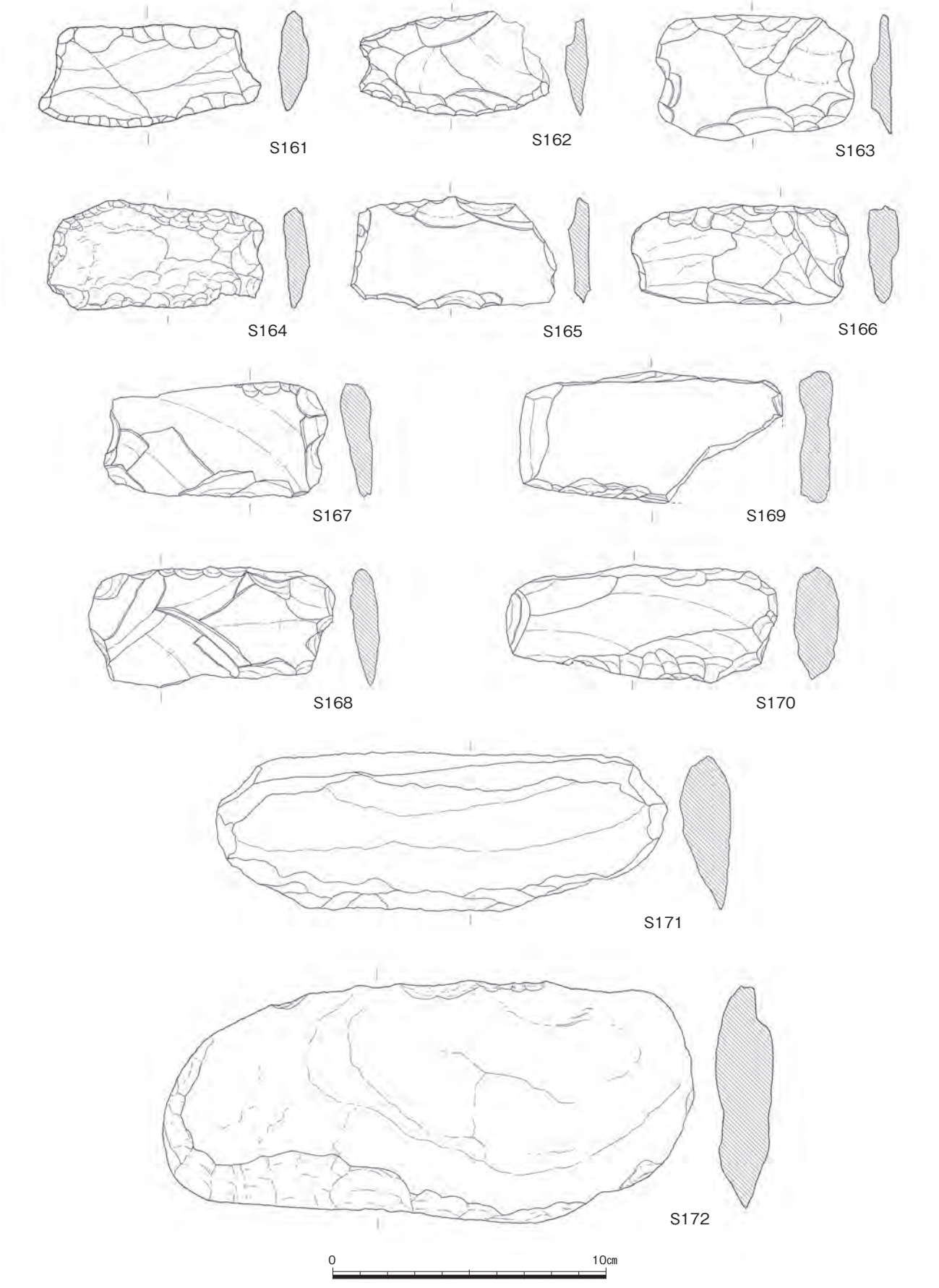




第459図　その他の出土遺物＜弥生時代⑦＞（1/4・1/2・1/1）



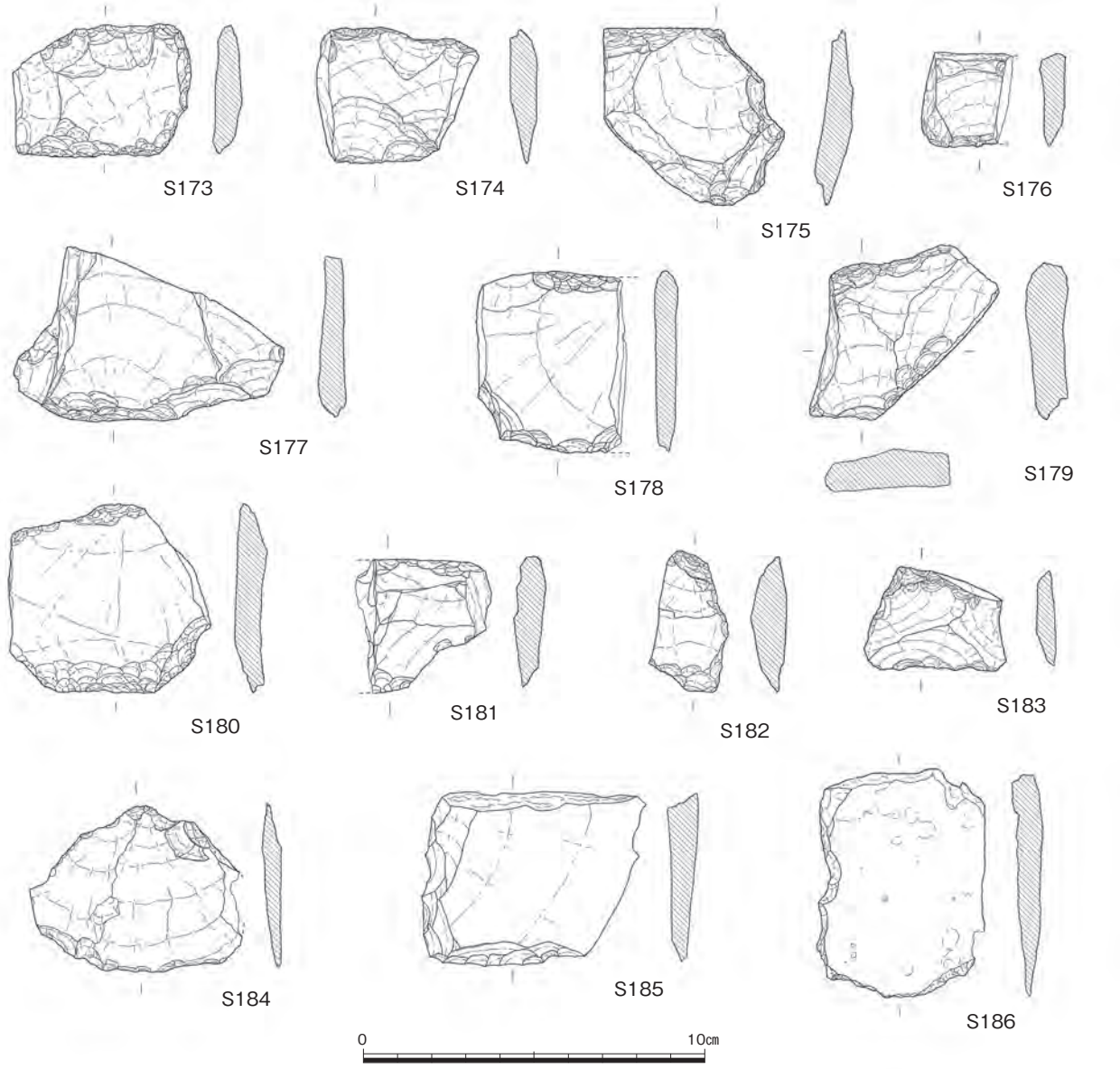
第460図　その他の出土遺物＜弥生時代⑧＞（1/2）



第461図　その他の出土遺物＜弥生時代⑨＞（1/2）

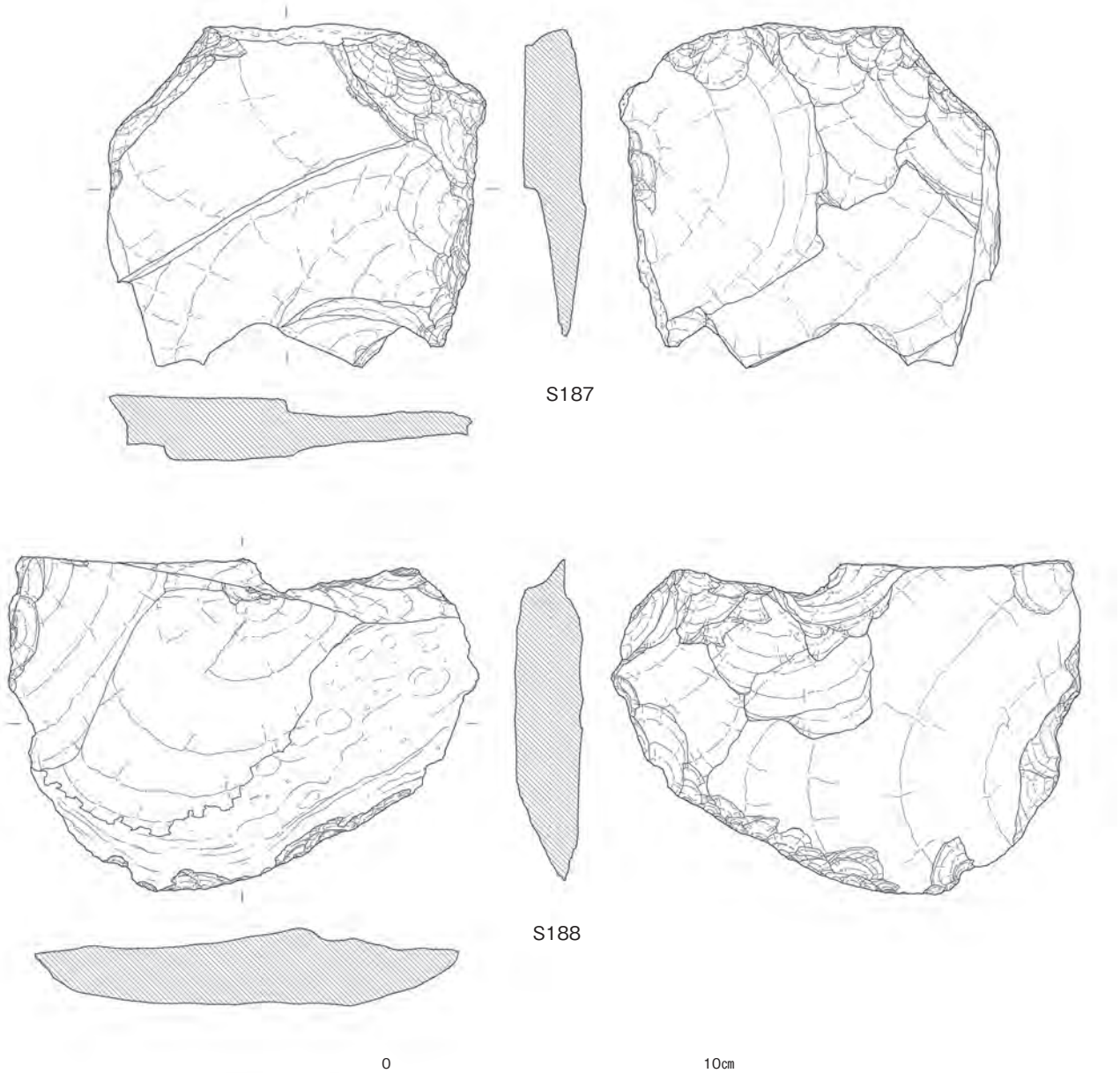
だが、胎土・焼成ともに在地土器と変わりない。2457～2462・2507～2510・2514・2515はミニチュア土器。2493には籾痕が認められる。2512は底部外面に葉脈痕が残されている。

ここでは石器も形状が把握できるものに限ったため、石器数が旧調査区別の出土比率と必ずしも一致しない。総石器数では遺構の最も密集する旧２区が圧倒的に多かった。後期の組成を占める主な石器が出土している。石鏃は全体的に少ないが、中期後半以降主流となる凸基式が半数を占める。S141は全長７㎝近い大形で、石槍状のS142もある。打製石包丁は多く、未成品や破片も含めた出土数は旧１区７点、旧２区23点、旧３区11点、旧４区10点、旧５区13点である。S144～S154はサヌカイト製で、長さ4.5～８㎝と小形で粗雑な作りをしており、後期の特徴を有しているといえる。S155～S161・S163～S169・S171・S172は粘板岩製で、この２つの石材以外で作られた打製石包丁はほとんどなく、石材を限定的に選択していた可能性がある。また、S155～S157の片面には円礫面を残したままで、河原石となった粘板岩を打割し、抉りと刃を付けて打製石包丁の代用品としたと考えられる。また、全長８㎝前後が多く、ある程度の規格も存在していたと思われる。S171・S172は全



第462図　その他の出土遺物＜弥生時代⑩＞（1/2）

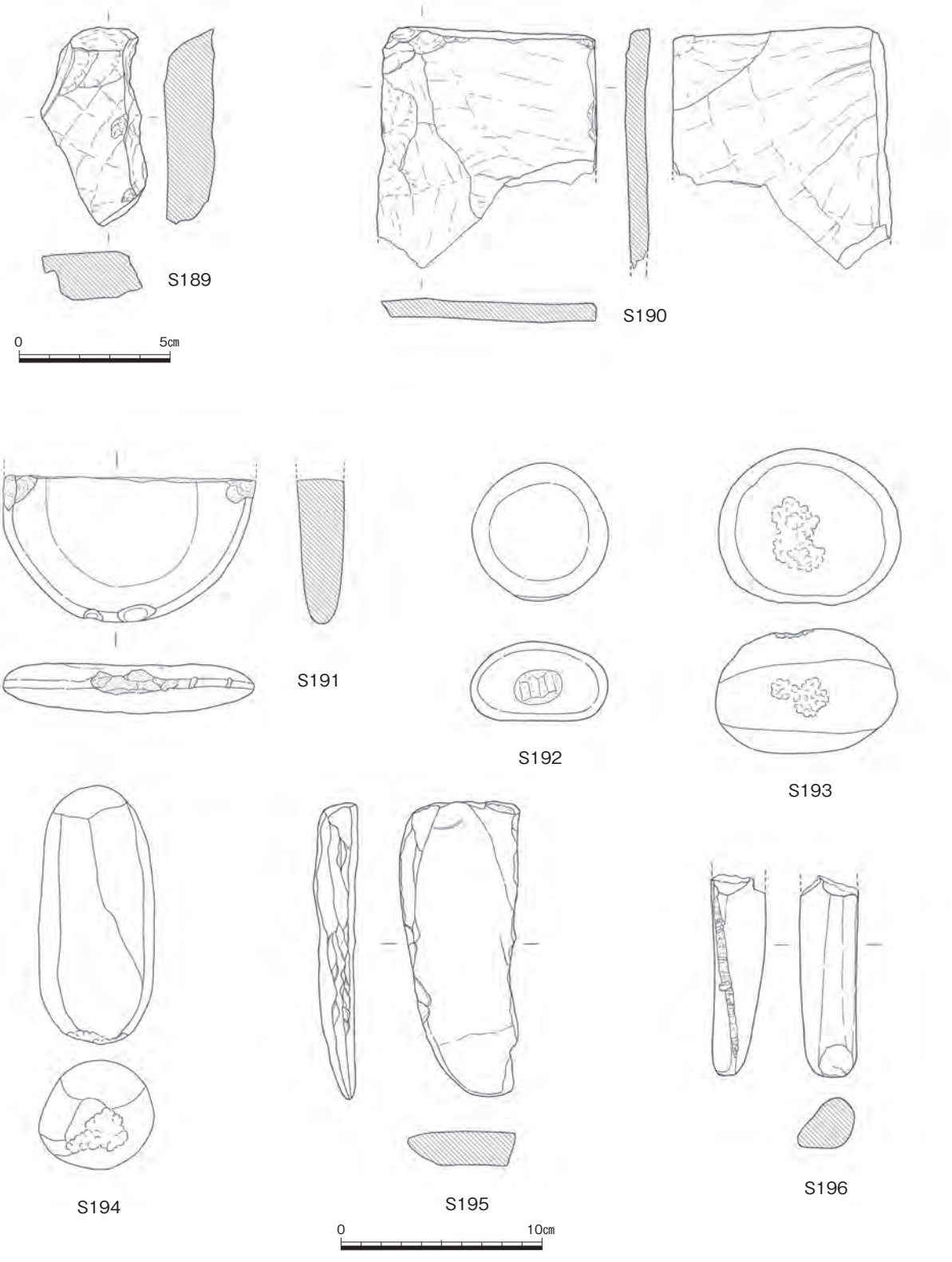
長15㎝以上、厚さ２㎝以上と大形で、S172は刃が部分的にしか付いていない。未成品であろうか。S171は剥離を利用した鋭利な刃部を有するが、使用痕は認められない。S173～S176・S179・S182は楔形石器、S183～S186はスクレイパーで、S185・S186は背部に自然面を残し、長方形の剥片の鋭利な１辺に簡単に刃部調整を加えただけのものである。S187・S188は１辺10㎝、最大厚２㎝を超える大形剥片で、共に旧５区から出土した。掘り下げ作業中に出土したため詳細な出土状況や所属時期は不明であるが、石器素材としてこの状態で遺跡内に持ち込まれた可能性がある。ただし、このサイズの剥片はこの２点しか出土していない。S189も石核の残片と思われる。S188は抉りと刃が付けられており、いわゆる有肩扇状石器として利用されたようである。S197・S198は太型蛤刃石斧、S199は有溝石錘、S200は切れ目石錘。S199は縦位に施溝されるタイプで、弥生時代後期を中心に瀬戸内海沿岸で最もポピュラーな石錘である。S190は流紋岩で、表裏・側縁は平坦に整え、厚さも約８㎜と均一なタブレット状を呈す。この石材で作られた製品はないが、何らかの未成品、あるいは



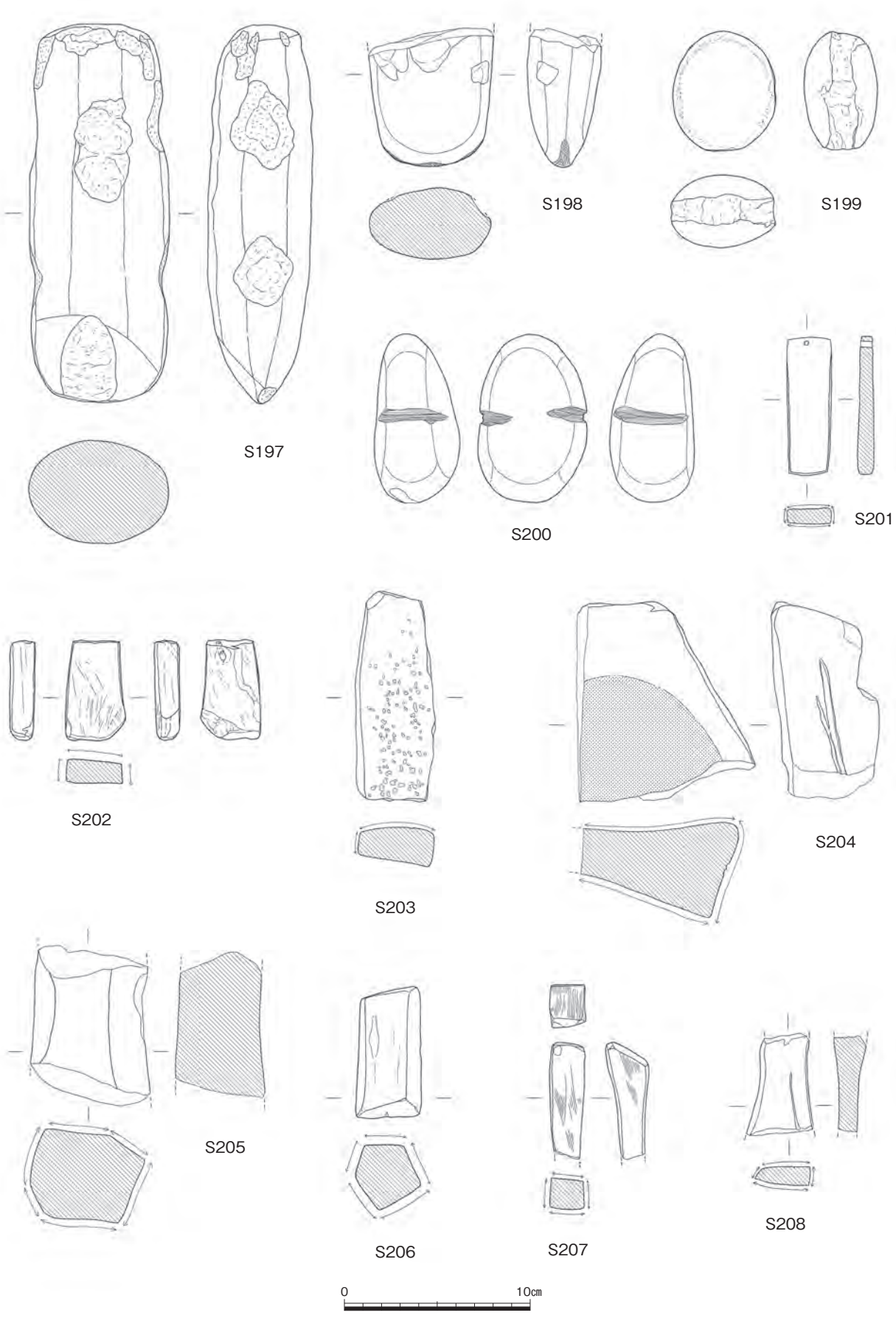
第463図　その他の出土遺物＜弥生時代⑪＞（1/2）

素材の可能性を考え、図示した。S201・S202は小形長方形で、上端に穿孔がある。ほぼ全面に研磨痕が認められる点から、紐で提げるタイプの砥石と考えられる。

土製品は分銅形土製品C71～C74、円板状土製品C76～C84、土錘C85～C95などがある。分銅形土製品は胎土・焼成からすべて後期に比定できる。C71は重弧文型、C72～C74は小形の平行文型で、

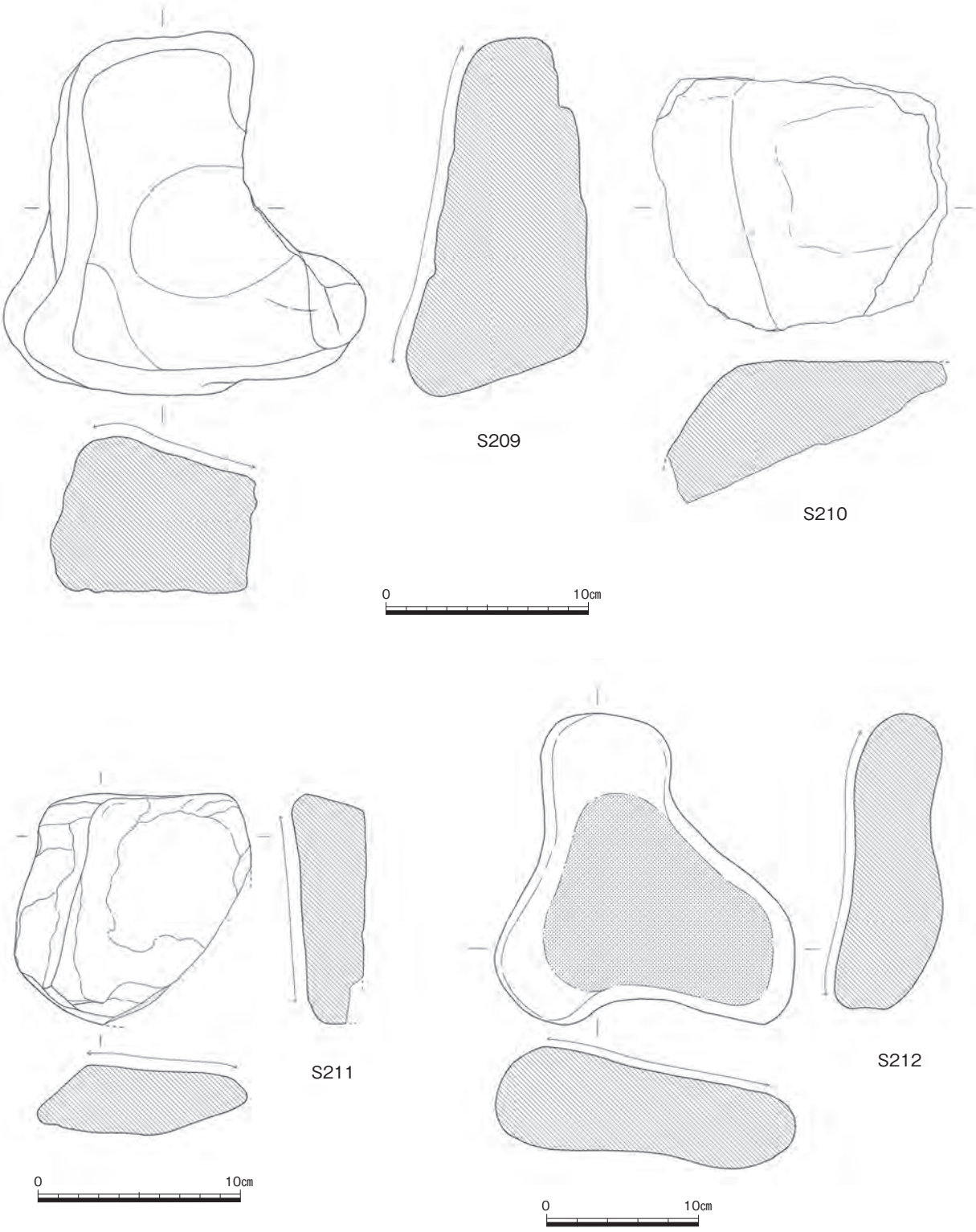


第464図　その他の出土遺物＜弥生時代⑫＞（1/2・1/3）

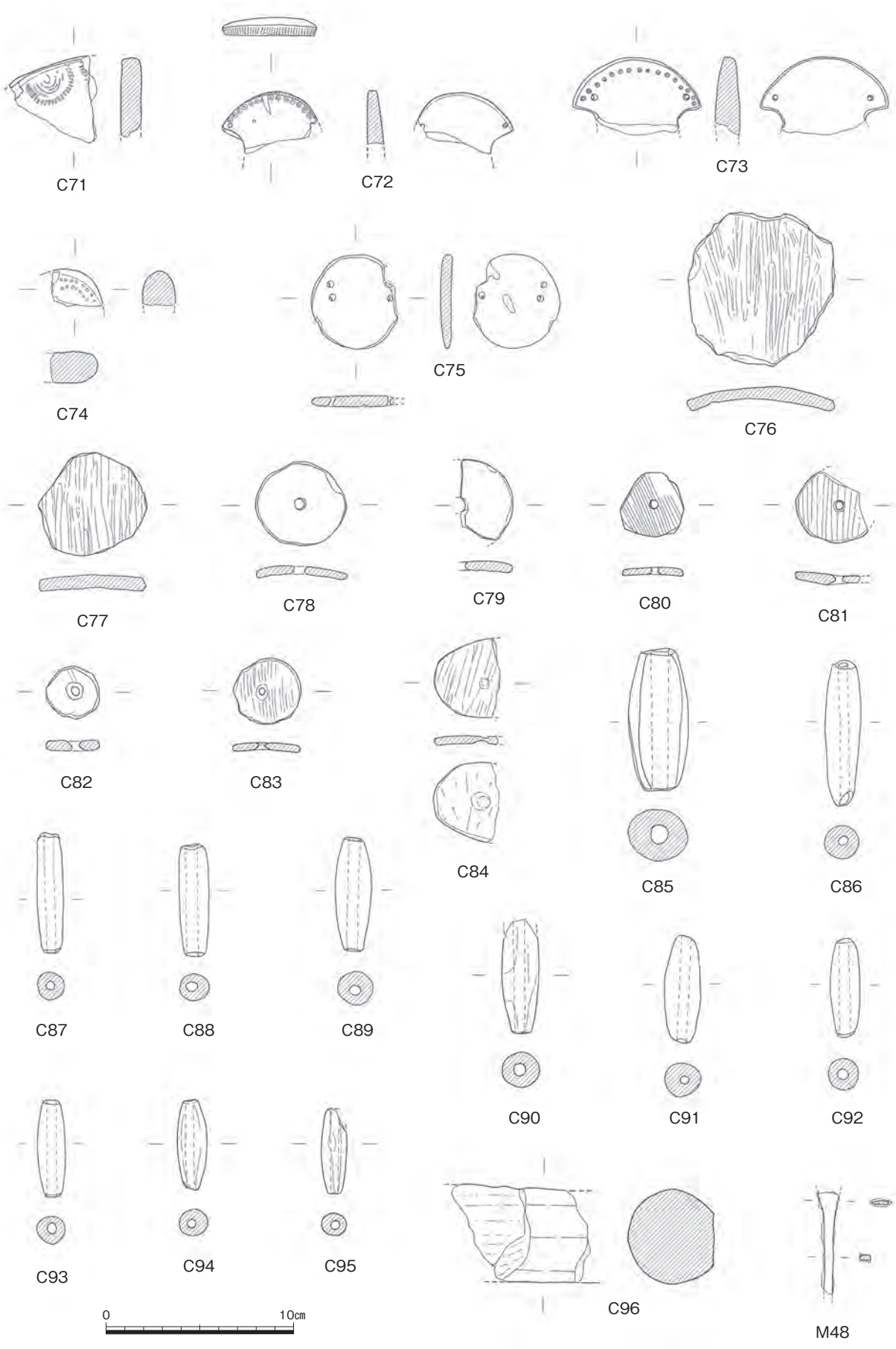


第465図　その他の出土遺物＜弥生時代⑬＞（1/3）

C72・C73は両端孔が穿たれている。C75は円形で２個一対の孔が２カ所に穿たれている。性格は不明。円板状土製品はすべて土器片を転用したもので、穿孔の有無がある。C84は両側から穿孔しかけた痕跡がある。土錘はすべて管状で、細身のものや太いもの、円柱状のものや中膨らみのものなど多様で形状から時期の特定はできていない。弥生土器が伴う土錘は４点のみで、古墳時代以降の土錘が含まれている可能性がある。鉄器は、形状から弥生時代の鉄鏃と特定できたM48のみ示した。（渡邉）



第466図　その他の出土遺物＜弥生時代⑭＞（1/3・1/4）



第467図　その他の出土遺物＜弥生時代⑮＞（1/3）

第３節　古墳時代の遺構・遺物

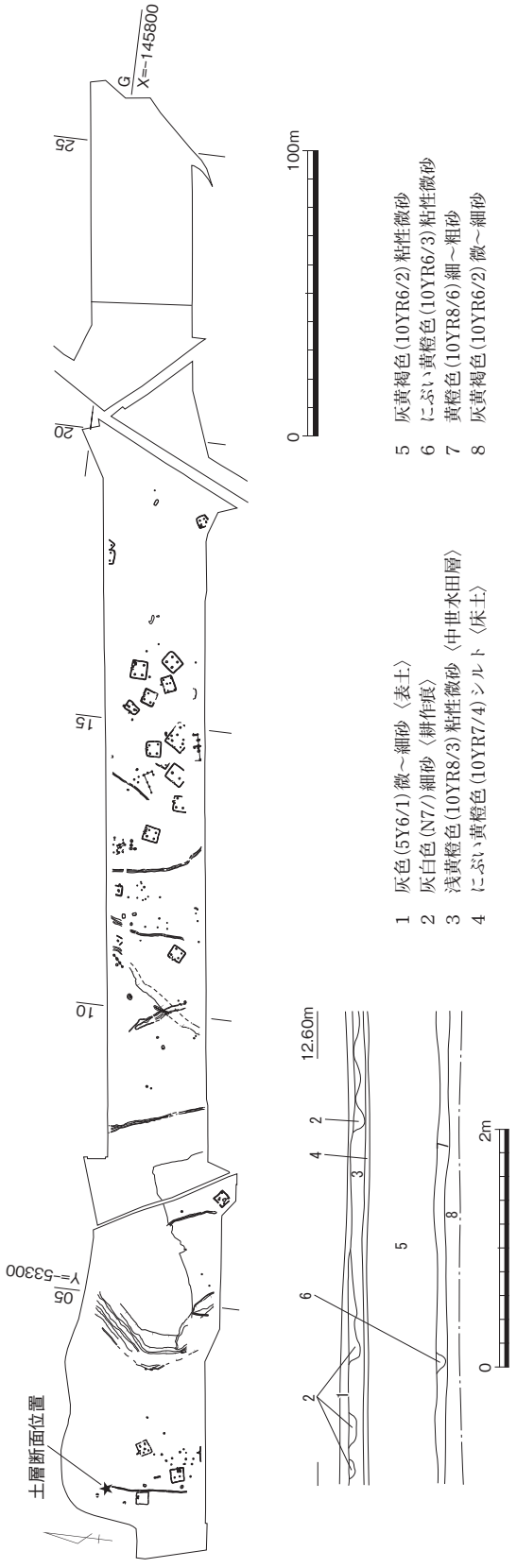
１　概要

古墳時代の遺構は、弥生時代以降の堆積土により安定した調査地西端部や中央部で確認している。第468図に西端部の土層断面図を示したが、第５層は弥生時代後期以降に堆積した粘質土で、厚さは約60㎝を測る。この第５層の上面が古墳時代後半期の遺構面にあたる。

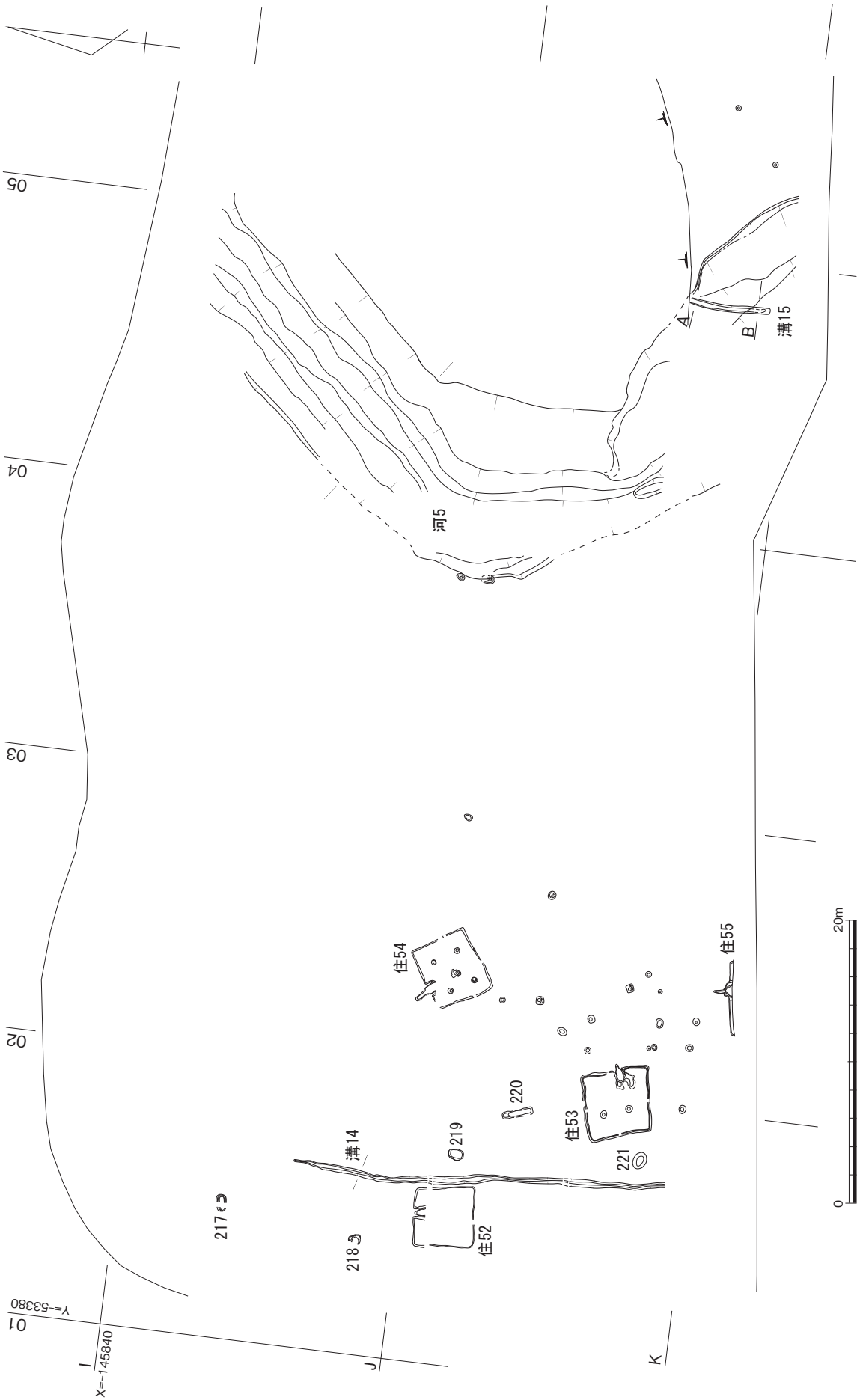
検出した遺構は、竪穴住居23軒、掘立柱建物２棟、柱穴列４列、土坑11基、溝10条、河道１条などで、時期は古墳時代前期～後期になる。竪穴住居は古墳時代中期末～後期にかけてのものが中心で、18軒で造り付けのカマドを確認している。古墳時代の竪穴住居は、調査地中央部でも東側の旧４区付近で密集して確認しており、古墳時代後半期においては集落の中心部分となる。

注目されるのは、鍛冶関連遺物の出土である。竪穴住居65では、竪穴住居内に多くの鉄滓や羽口片が一括投棄された状態で出土しており、付近で操業していた可能性が高い。また、竪穴住居53・69からも鍛冶滓が出土している。調査地西端部の土坑219・220や、旧４区の住居群西側で検出した土坑224～226は被熱土坑であり、鍛冶炉に提供する炭を焼成した可能性が考えられる。　　（石田）

写真34　調査風景＜旧４区＞（東から）

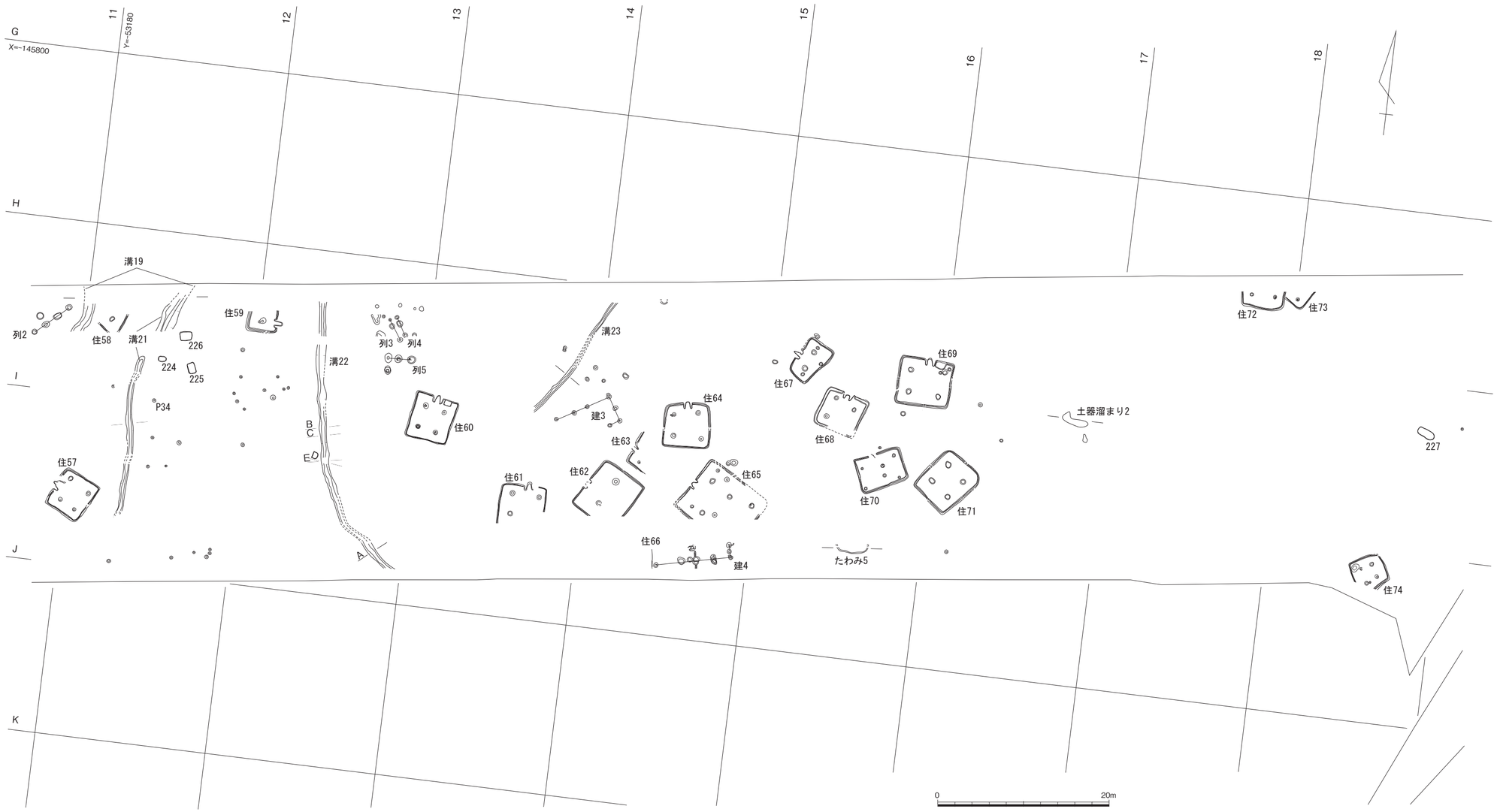


第468図　古墳時代遺構全体図①（1/2,500）・西端土層断面図（1/60）



第469図　古墳時代遺構全体図②（1/400）

第470図　古墳時代遺構全体図③（1/400）



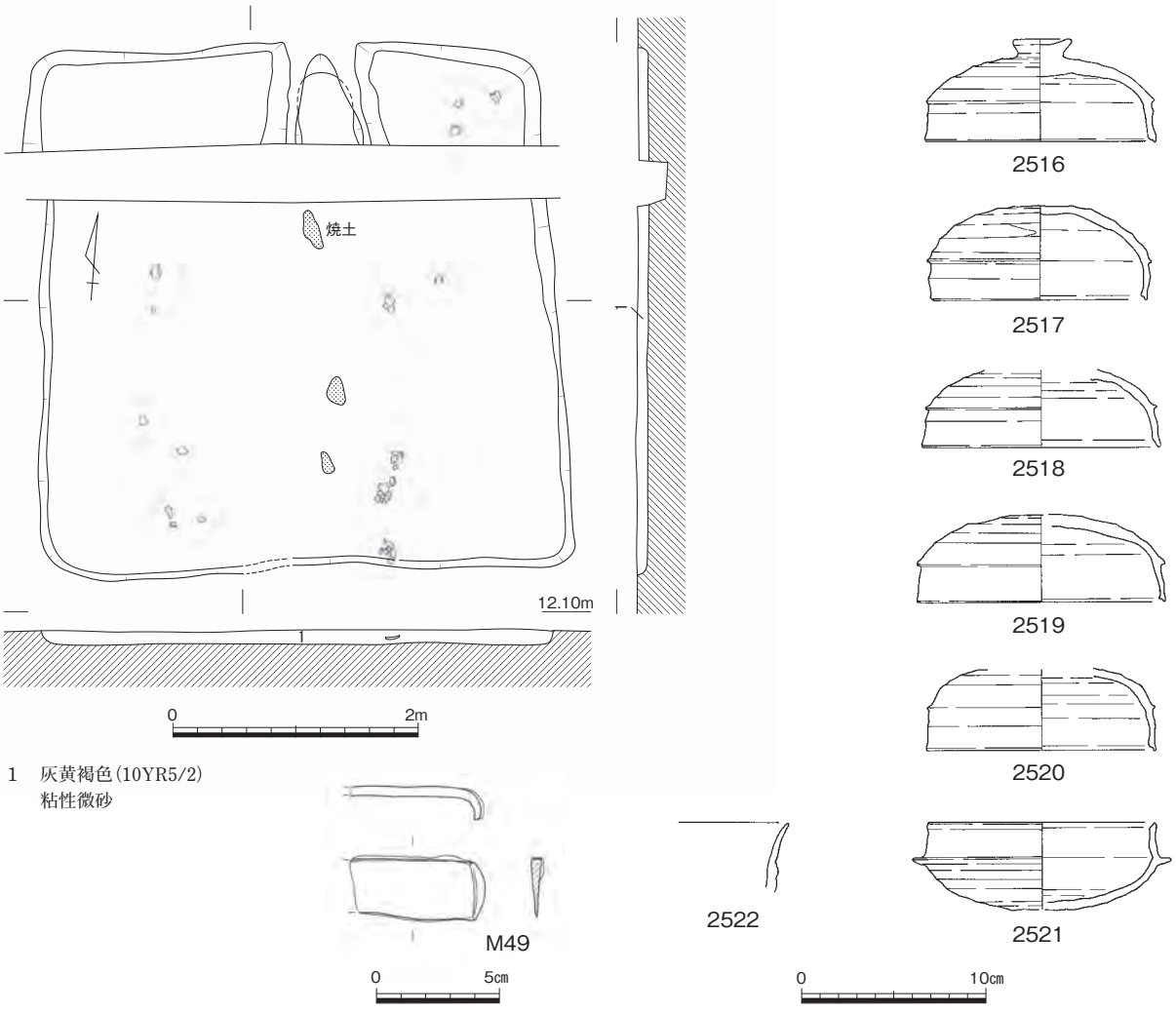
第471図　古墳時代遺構全体図④（1/400）

２　竪穴住居

竪穴住居52（第469・472・473図、図版17－１・18－２・99）

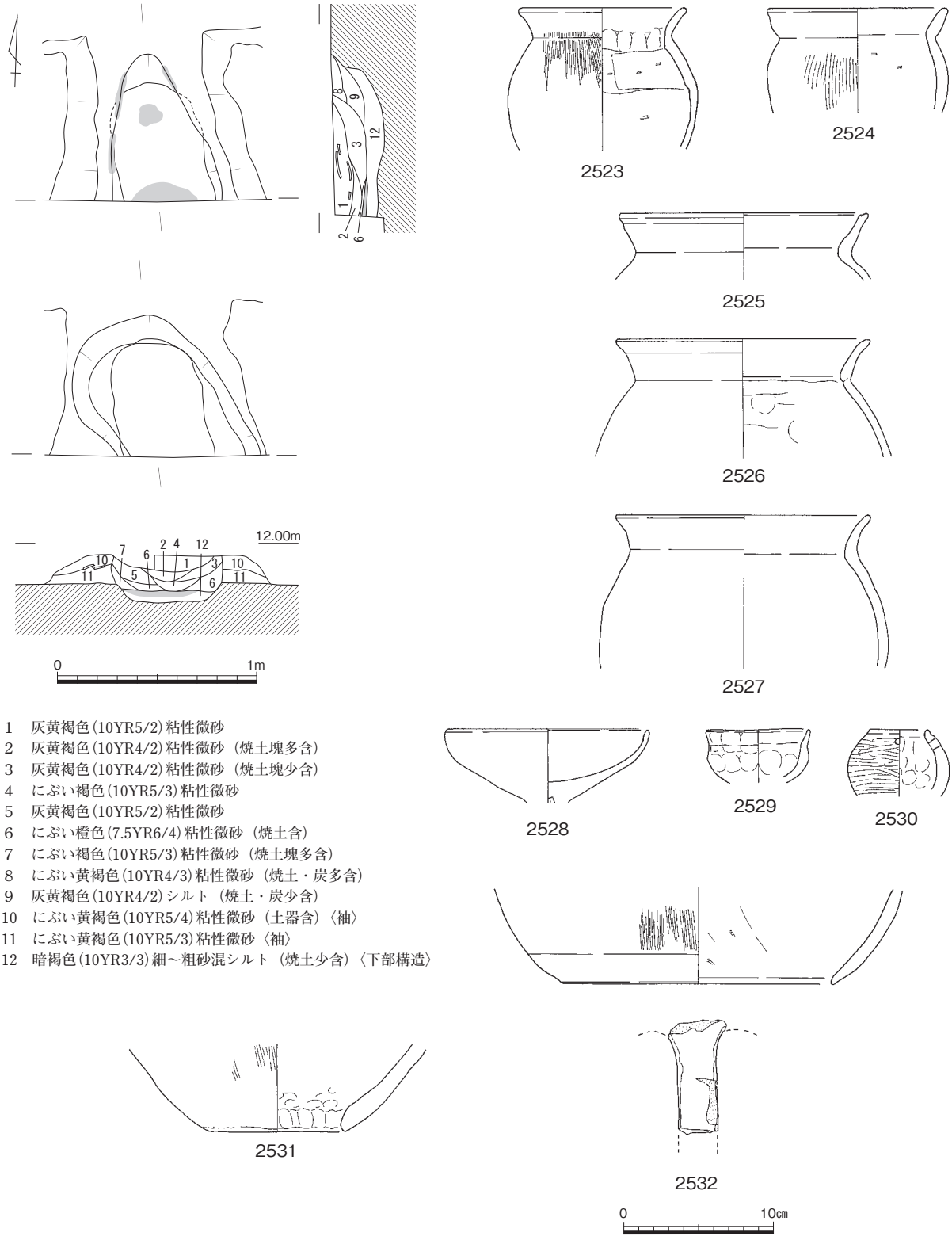
Ｊ01の北側に位置する竪穴住居である。平面形は方形を呈するもので、壁体溝を巡らさない。北辺にカマドが付設されており、カマドの位置はやや東側に寄っている。主柱穴は精査したが検出できなかったため、無柱の竪穴住居であると考えられる。規模は、南北幅432㎝、東西幅428㎝、検出面から床面までの深さは11㎝で、床面の標高は11.84ｍである。床面で焼土塊を３カ所で検出している。この竪穴住居周辺の基盤層の状況は礫を含むものであり、床面でも所々で礫が露出していたが貼り床を施した痕跡は認められなかった。カマドは側溝によって南側を削平され、燃焼部の被熱痕跡が平面では一部でしか検出できていない。燃焼部の幅は36㎝である。燃焼部の奥側の壁面にも被熱が認められるが、その被熱の具合は弱いものであった。検出したカマドはすべて竪穴住居の内側で収まっており、煙道は外に延びずに、北側の立ち上がりは角度を持っている。袖部は、第10層と第11層の２層に分層することができ、土器の細片が出土している。カマドの下部構造は燃焼部と袖部の下に位置しており、平面が楕円形を呈するもので、98㎝以上×65㎝、深さ８～10㎝を測る。

出土遺物には、須恵器の高杯蓋**2516**、杯蓋**2517**～**2520**、杯身**2521**、鹿**2522**、土師器の甕**2523**～



第472図　竪穴住居52（1/60）・出土遺物①（1/4・1/3）

2527、高杯2528、ミニチュア土器2529・2530、甑2531・2532、鎌と考えられるM49がある。また、須恵器の杯蓋の口径が11.6～13.4㎝、杯身の口径が12.2㎝と小さいことや、口縁端部に明瞭な段を持つことなどから、ＴＫ47型式併行期の須恵器であると考えられる。これらの遺物から、この竪穴住居の時期は古・中・Ⅱであると考えられる。　（圃）

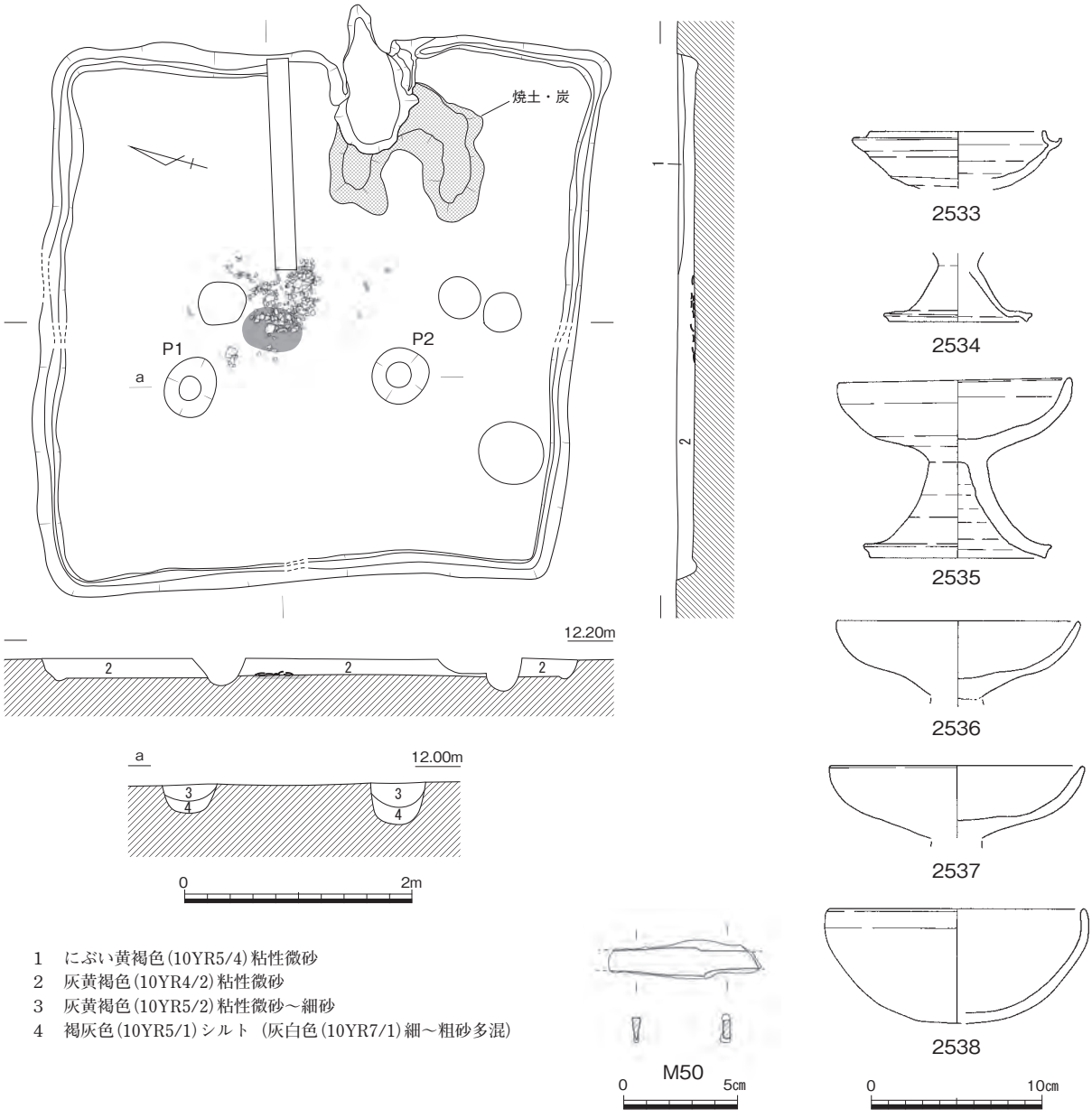


1　灰黄褐色(10YR5/2)粘性微砂
2　灰黄褐色(10YR4/2)粘性微砂（焼土塊多含）
3　灰黄褐色(10YR4/2)粘性微砂（焼土塊少含）
4　にぶい褐色(10YR5/3)粘性微砂
5　灰黄褐色(10YR5/2)粘性微砂
6　にぶい橙色(7.5YR6/4)粘性微砂（焼土含）
7　にぶい褐色(10YR5/3)粘性微砂（焼土塊多含）
8　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性微砂（焼土・炭多含）
9　灰黄褐色(10YR4/2)シルト（焼土・炭少含）
10　にぶい黄褐色(10YR5/4)粘性微砂（土器含）〈袖〉
11　にぶい黄褐色(10YR5/3)粘性微砂〈袖〉
12　暗褐色(10YR3/3)細～粗砂混シルト（焼土少含）〈下部構造〉

第473図　竪穴住居52カマド（1/30）・出土遺物②（1/4）

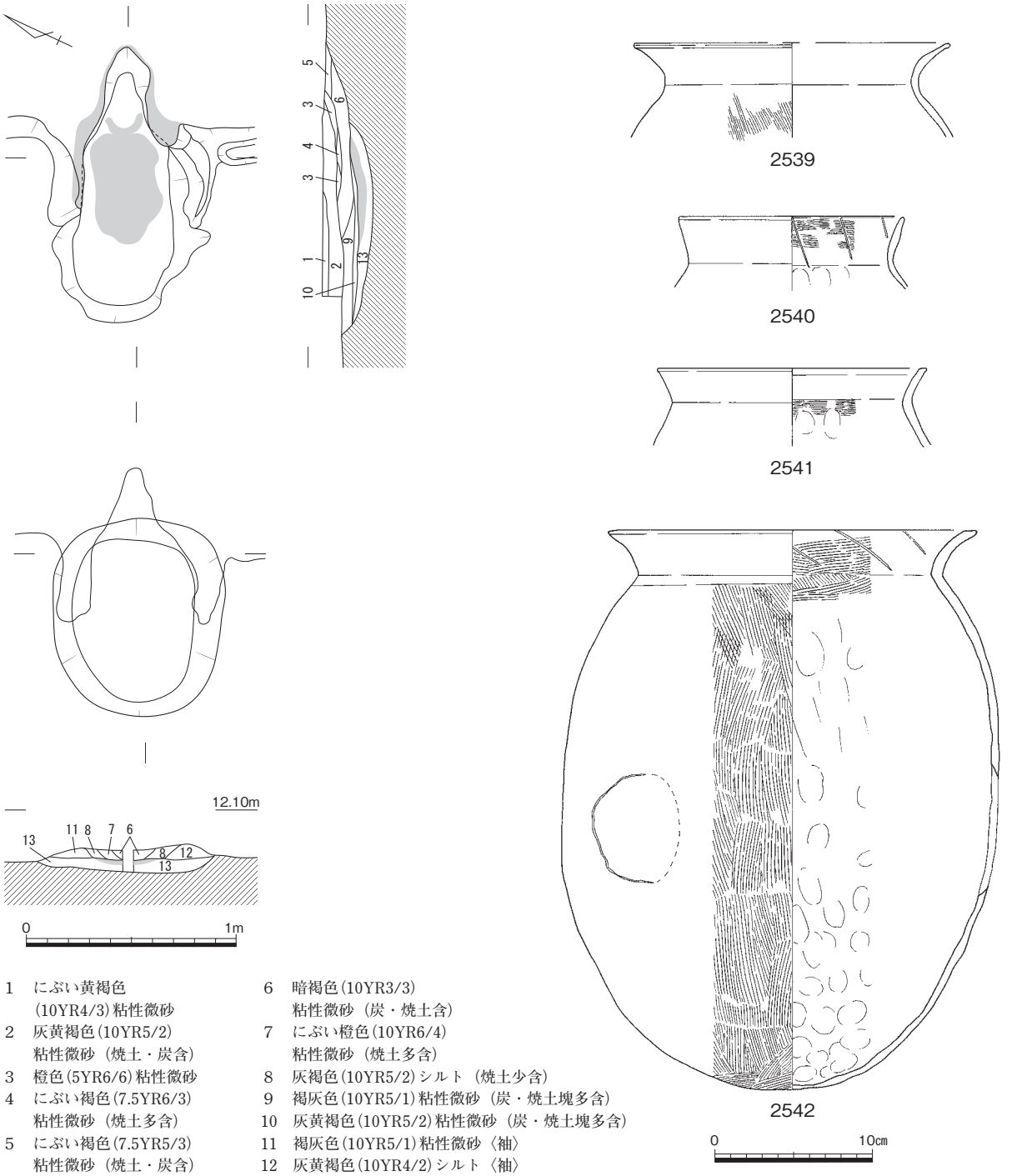
竪穴住居53（第469・474・475図、図版17－２・３・18－２・99）

Ｊ01に位置する竪穴住居である。平面形は方形を呈するもので、壁体溝が巡る。東辺にカマドを有しており、位置はやや南側に寄っている。主柱穴は２本と考えられ、中央部分より西側へ寄っている。規模は、東西幅470㎝、南北幅480㎝、検出面から床面までの深さは14㎝で、床面の標高は11.90ｍである。床面中央部分には、50×36㎝の範囲で灰色を呈する硬化面とその上面に破砕された土器を検出している。出土遺物には鉄滓が少量あり、分析の結果鍛冶滓であることがわかった。しかしこの竪穴住居では鍛造剥片や粒状滓などが出土しておらず、被熱硬化面と鍛冶との関連は定かではない。カマドは燃焼部の幅42㎝、袖は高さ約８㎝が残存していた。幅約21㎝の煙道は竪穴住居外に30㎝程度延びている。被熱は燃焼部の床面にとどまらず、煙道部や袖部にまで及んでいる。また、焚口周辺では炭・焼土が多く混じったものが馬蹄状に４㎝程度の厚さで堆積しており、焚口から掻き出した炭・



第474図　竪穴住居53（1/60）・出土遺物①（1/4・1/3）

焼土が残存していたものと考えられる。カマド内から出土した甕のうち、2542は、胴部に大きく穿孔がなされているため、カマドの使用時のものが放置されているのではなく、カマド廃棄時に何らかの祭祀が行われ、それに使用された可能性が考えられる。カマドの下部構造は95×82㎝、深さ約10㎝で楕円形を呈しており、燃焼部から袖部の下に位置している。出土遺物には、須恵器杯身2533、高杯2534・2535、土師器高杯2536・2537、鉢2538、甕2539～2542、刀子M50がある。2540と2542は口縁部内面に３条の線刻を施している点が共通している。2533がＴＫ209型式併行期のものと考えられ、これらの遺物から、遺構の時期は古・後・Ⅱであると考えられる。　（團）

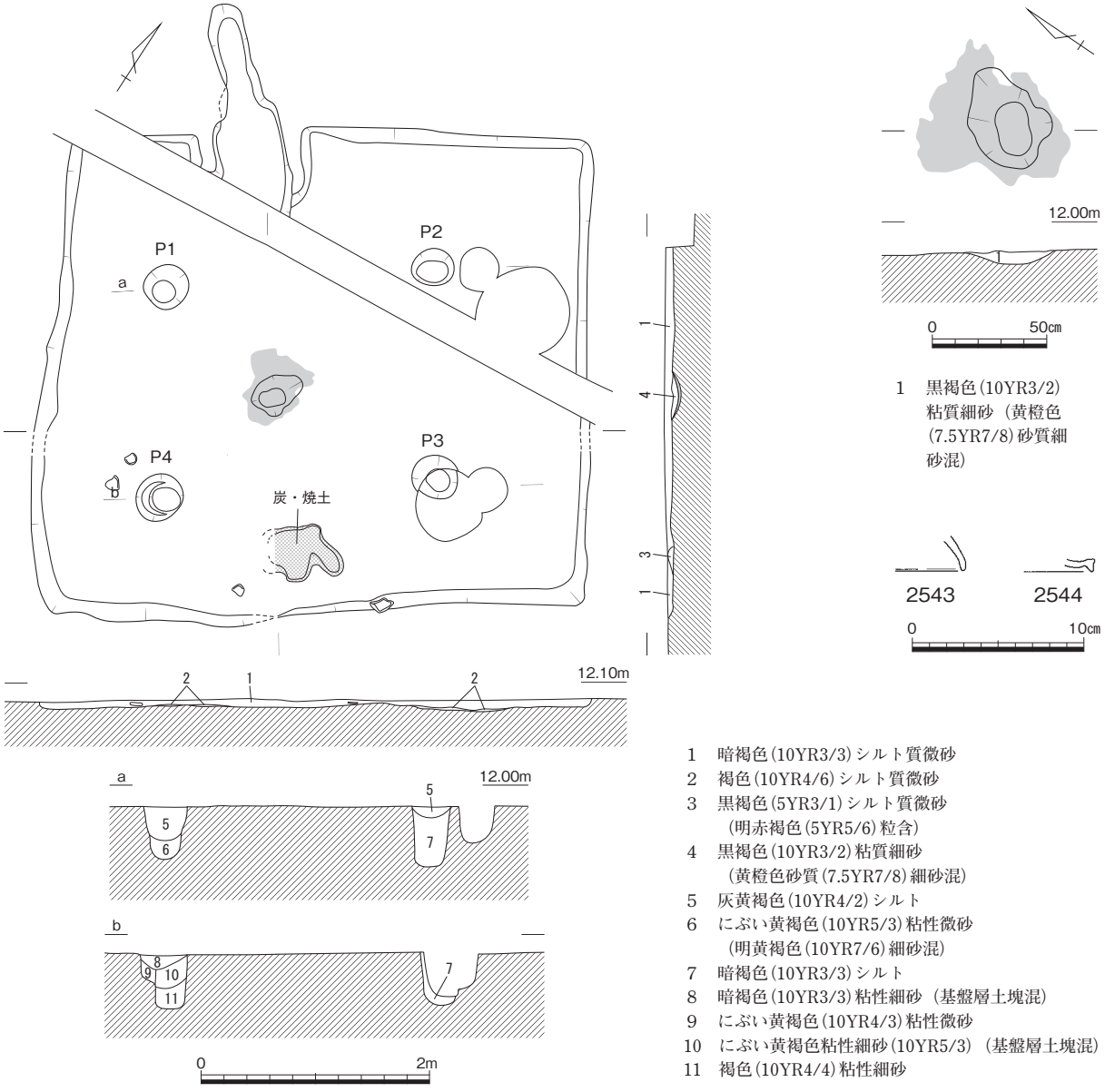


1　にぶい黄褐色（10YR4/3）粘性微砂
2　灰黄褐色（10YR5/2）粘性微砂（焼土・炭含）
3　橙色（5YR6/6）粘性微砂
4　にぶい褐色（7.5YR6/3）粘性微砂（焼土多含）
5　にぶい褐色（7.5YR5/3）粘性微砂（焼土・炭含）
6　暗褐色（10YR3/3）粘性微砂（炭・焼土含）
7　にぶい橙色（10YR6/4）粘性微砂（焼土多含）
8　灰褐色（10YR5/2）シルト（焼土少含）
9　褐灰色（10YR5/1）粘性微砂（炭・焼土塊多含）
10　灰黄褐色（10YR5/2）粘性微砂（炭・焼土塊多含）
11　褐灰色（10YR5/1）粘性微砂〈袖〉
12　灰黄褐色（10YR4/2）シルト〈袖〉
13　褐灰色（10YR4/1）粘性微砂〈下部構造〉

第475図　竪穴住居53カマド（1/30）・出土遺物②（1/4）

竪穴住居54（第469・476・477図、図版18－１・２、写真35）

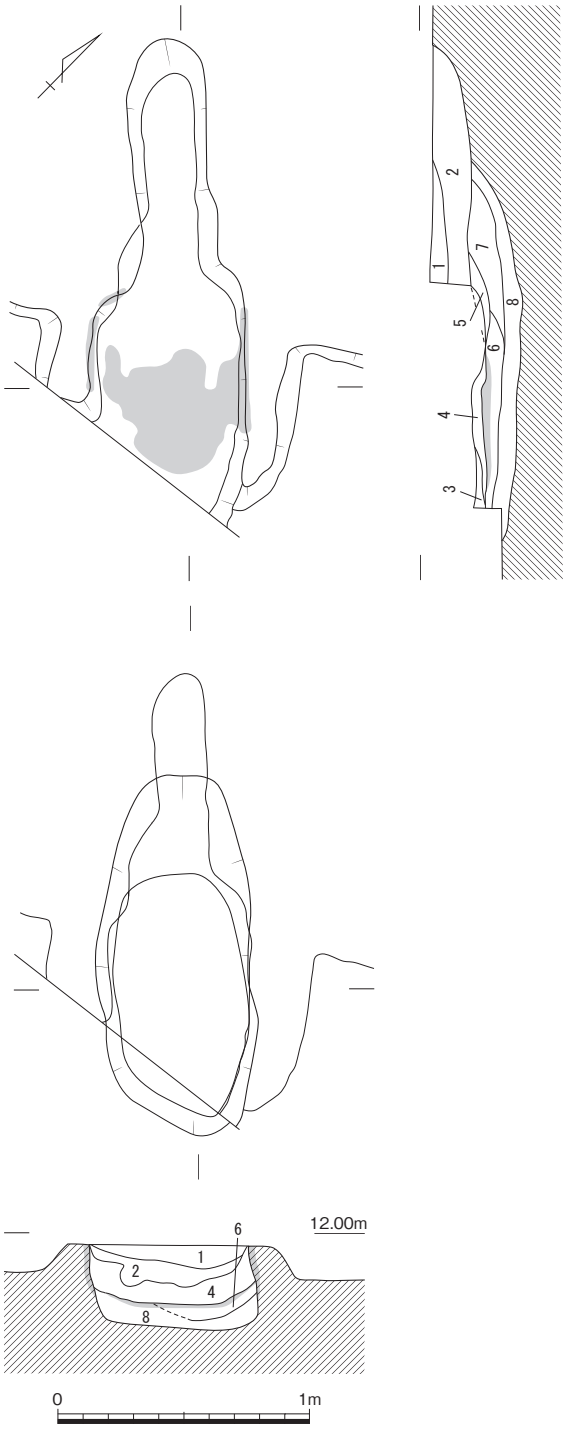
Ｉ02の南側に位置する竪穴住居である。平面形は方形を呈するもので、壁体溝を巡らさない。北辺の西側寄りにカマドを有しており、主柱穴は４本である。規模は、東西幅487㎝、南北幅423㎝、検出面から床面までの深さは５㎝で、床面の標高は11.86ｍである。床面の中央、やや西よりの部分には不整形であるが、47×32㎝、深さ８㎝のくぼみの下で、約65×58㎝の範囲で被熱を検出している。また、その被熱範囲の南辺寄りの部分で炭と焼土の堆積が60㎝以上×47㎝の範囲で見られた。竪穴住居53で見られたような鉄滓は出土していない。しかし、用途としては住居以外に何らかの作業が行われていた可能性があろう。カマドは、燃焼部は幅54㎝で、燃焼部の被熱による影響は大きく、燃焼部の壁面も厚さ４㎝程度変色している。カマド内から土器は細片が少量出土したのみで、支脚も出土していない。煙道は幅30㎝で約１ｍ、竪穴住居外へ延びている。袖部は残存している高さが10㎝である。袖部にトレンチを入れて断面観察を行ったが、基盤層と袖部の土質が均質であり、分層ができなかった。



1　黒褐色(10YR3/2)粘質細砂（黄橙色(7.5YR7/8)砂質細砂混）

1　暗褐色(10YR3/3)シルト質微砂
2　褐色(10YR4/6)シルト質微砂
3　黒褐色(5YR3/1)シルト質微砂（明赤褐色(5YR5/6)粒含）
4　黒褐色(10YR3/2)粘質細砂（黄橙色砂質(7.5YR7/8)細砂混）
5　灰黄褐色(10YR4/2)シルト
6　にぶい黄褐色(10YR5/3)粘性微砂（明黄褐色(10YR7/6)細砂混）
7　暗褐色(10YR3/3)シルト
8　暗褐色(10YR3/3)粘性細砂（基盤層土塊混）
9　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性微砂
10　にぶい黄褐色粘性細砂(10YR5/3)（基盤層土塊混）
11　褐色(10YR4/4)粘性細砂

第476図　竪穴住居54（1/60・1/30）・出土遺物（1/4）



1　暗褐色(10YR3/4)シルト質微砂
2　暗褐色(10YR3/3)シルト質微砂（炭・焼土混）
3　灰黄褐色(10YR5/2)粘性微砂（焼土少混）
4　灰黄褐色(10YR6/2)粘性微砂（焼土塊多混）
5　灰黄褐色(10YR6/2)（焼土少混）
6　暗褐色(10YR3/3)粘性微砂（炭・焼土塊多混）
7　灰黄褐色(10YR5/2)粘性微砂（焼土少混）
8　暗褐色(10YR3/3)粘性微砂（炭・焼土塊混）〈下部構造〉

第477図　竪穴住居54カマド（1/30）

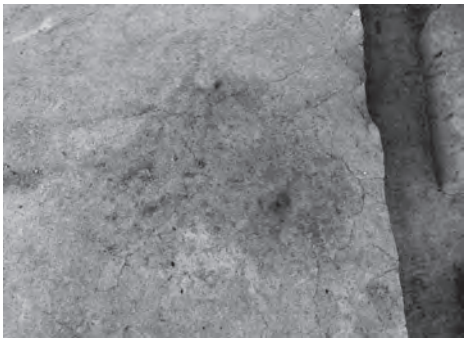


写真35　竪穴住居54中央被熱面検出状況（南から）

しかし下部構造の掘り方上面が袖部と一部で重複していることから、基盤層を削り出して袖を構築したのではなく、盛土で成形しているものと考えられる。この下部構造は細長い楕円形を呈しており、燃焼部から煙道の一部までの範囲で掘削されている。規模は長軸141㎝、短軸60㎝、深さ10～18㎝を測る。

出土遺物には、須恵器の杯蓋**2543**と、高杯脚端部**2544**が出土している。これらの遺物から、古・後・Ⅱの時期の住居であると考えられる。

（團）

竪穴住居55（第469・478図、図版18－３）

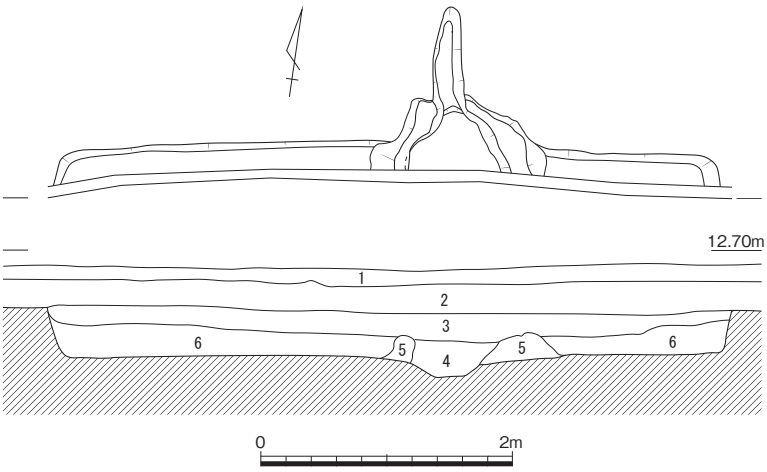
Ｋ02に位置する竪穴住居である。竪穴住居の南側の大部分については調査区外となるため、竪穴住居の北辺と、北辺のやや東寄りに取り付くカマドを検出するにとどまっている。規模は東西幅が525㎝を測るもので、土層断面の観察からは、本来中世の水田層の直下で検出することができ、深さが41㎝あることがわかる。壁体溝は有しない。カマドは煙道が竪穴住居外へ長く延びるもので、幅約25㎝、長さ80㎝を測る。燃焼部は幅72㎝で、被熱痕跡が明瞭に残り、熱影響による変色は煙道部にまで及ぶ。また、第５層は下部構造であると考えられるが、狭い範囲のため平面での形状を確認することはできなかった。他の下部構造が見られる竪穴住居のものと違い、燃焼部の手前に掘削され、袖部や煙道部の下層には位置しない。袖部は20㎝の高さで残存

していたようであるが、南壁面の断面観察から焚口が残存せず埋没していることや、カマド内から支脚や土器が出土していないため、竪穴住居の廃棄時にカマドを壊している可能性が考えられる。

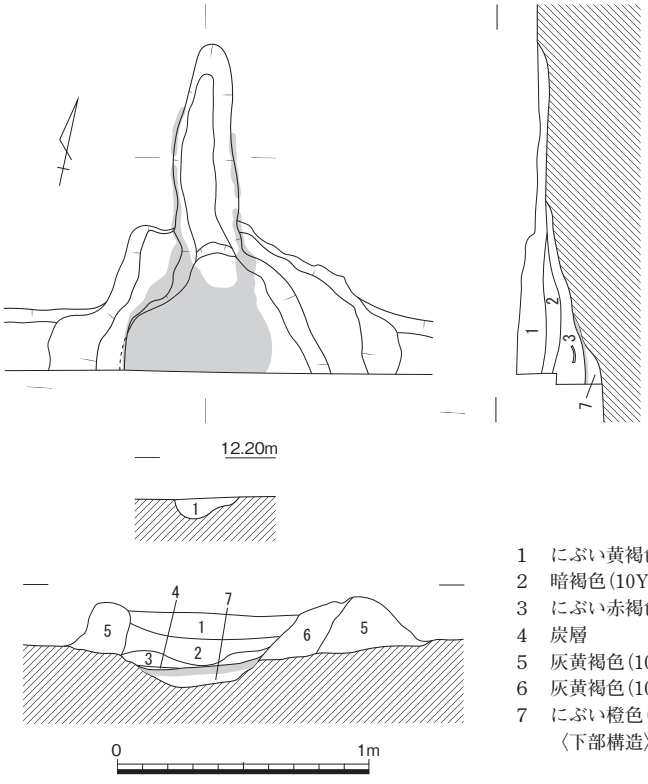
出土遺物には、杯蓋**2545**と甕**2546**がある。**2545**は天井部との境に凹線を巡らすもので、これから古墳時代後期前半の遺構であると考えられる。このような煙道が長く延びるタイプのカマドは、竪穴住居54と同様である。（團）

竪穴住居56（第470・479図、図版19－１）

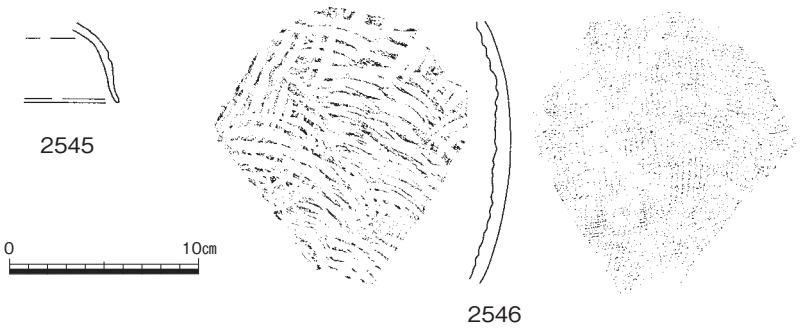
Ｊ06の調査区南東端に位置する、一辺435㎝を測る方形の竪穴住居である。検出時に西辺に焼土が見られたことからカマド付きと想定したが、断面観察の結果、別の土坑によって切られていることを確認した。埋土は約20㎝の単層で、壁体は内傾気味に下がっていく。床面付近の基盤層は細砂で明確な床面の認定は困難であったが、土層断面で床面と



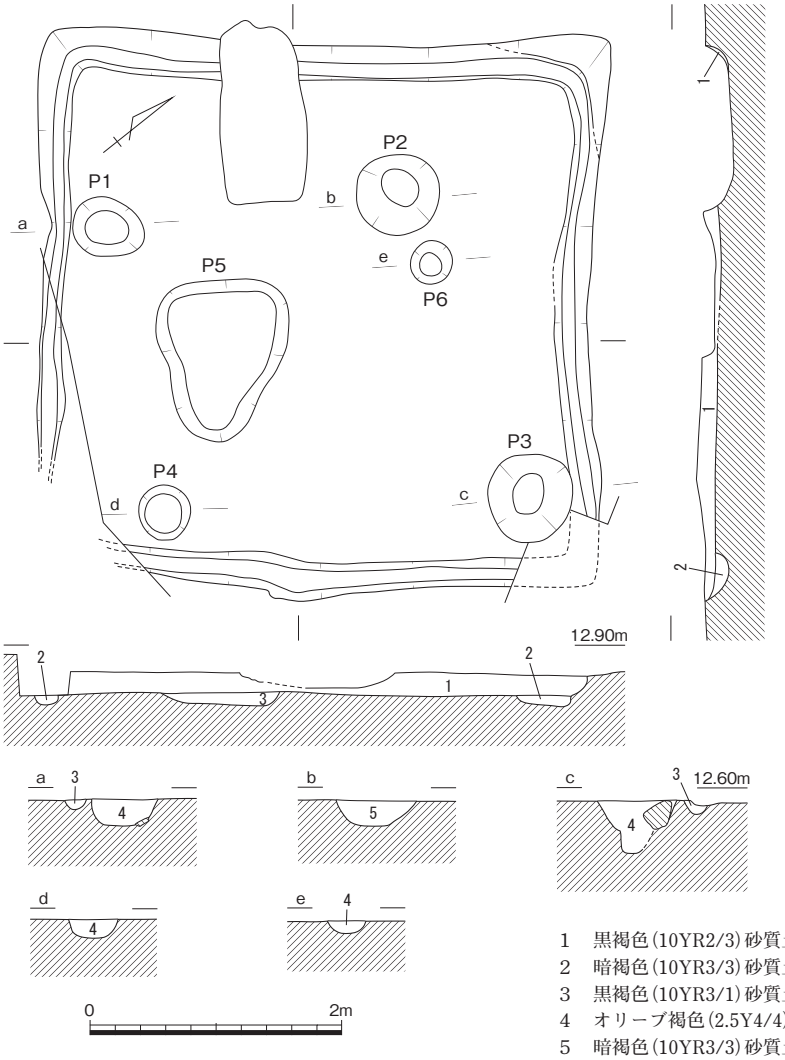
1　灰色(5Y6/1)微～細砂〈表土〉
2　灰黄褐色(10YR6/2)粘性微砂〈中世水田〉
3　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性微砂
4　〈カマド埋土〉
5　〈カマド袖〉
6　灰褐色(7.5YR4/2)粘性微砂



1　にぶい黄褐色(10YR5/3)粘性微砂
2　暗褐色(10YR3/3)粘性微砂
3　にぶい赤褐色(5YR5/4)微砂
4　炭層
5　灰黄褐色(10YR4/2)粘性微砂〈袖〉
6　灰黄褐色(10YR5/2)粘性微砂〈袖〉
7　にぶい橙色(5YR6/4)微砂
　〈下部構造〉



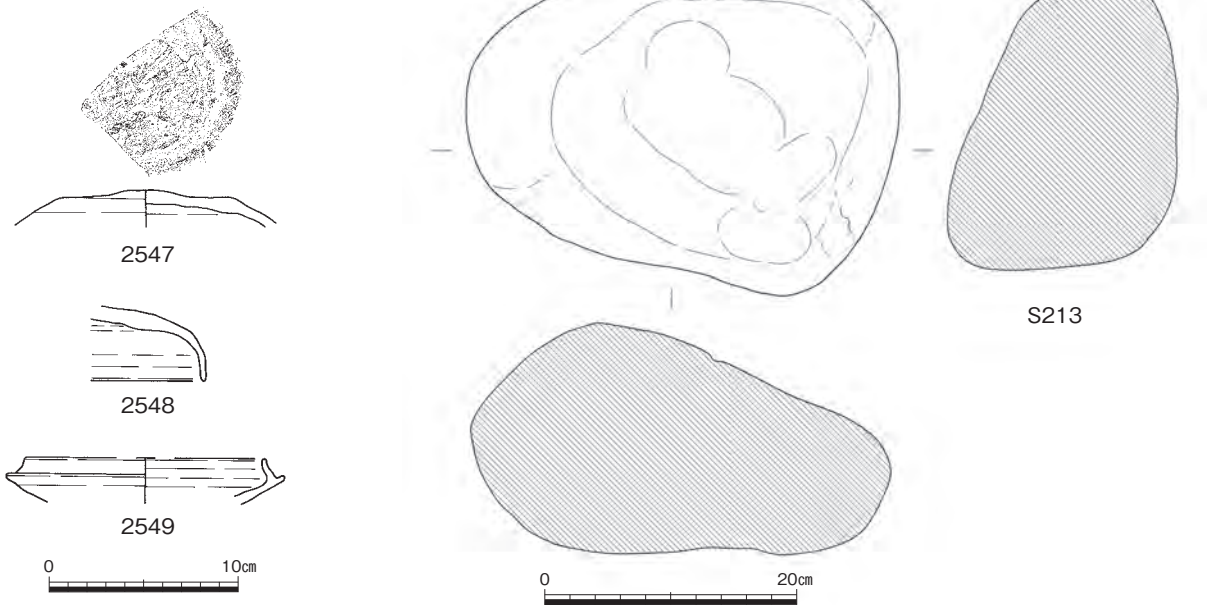
第478図　竪穴住居55（1/60）・カマド（1/30）・出土遺物（1/4）



想定された面付近でＰ１～Ｐ６及び壁体溝を検出した。位置関係からＰ１～Ｐ４が主柱穴と考えられ、Ｐ４が深さ40㎝と深く、他は15～20㎝と浅いが、いずれも基盤層の礫層を若干掘り込んで停止している。Ｐ５は不整形を呈し、深さは10㎝と浅く明確な炭、焼土及び被熱痕跡は見られなかったが、中央穴と想定される。

時期のわかる出土遺物としては須恵器片があるのみで、**2548**が床面から、**2547・2549**は埋土中から出土した。また、流紋岩製の台石**Ｓ213**はＰ４内から出土したもので、上面に使用痕が残っている。時期は出土した須恵器の杯から古・後・Ⅱと考えられる。(杉山)

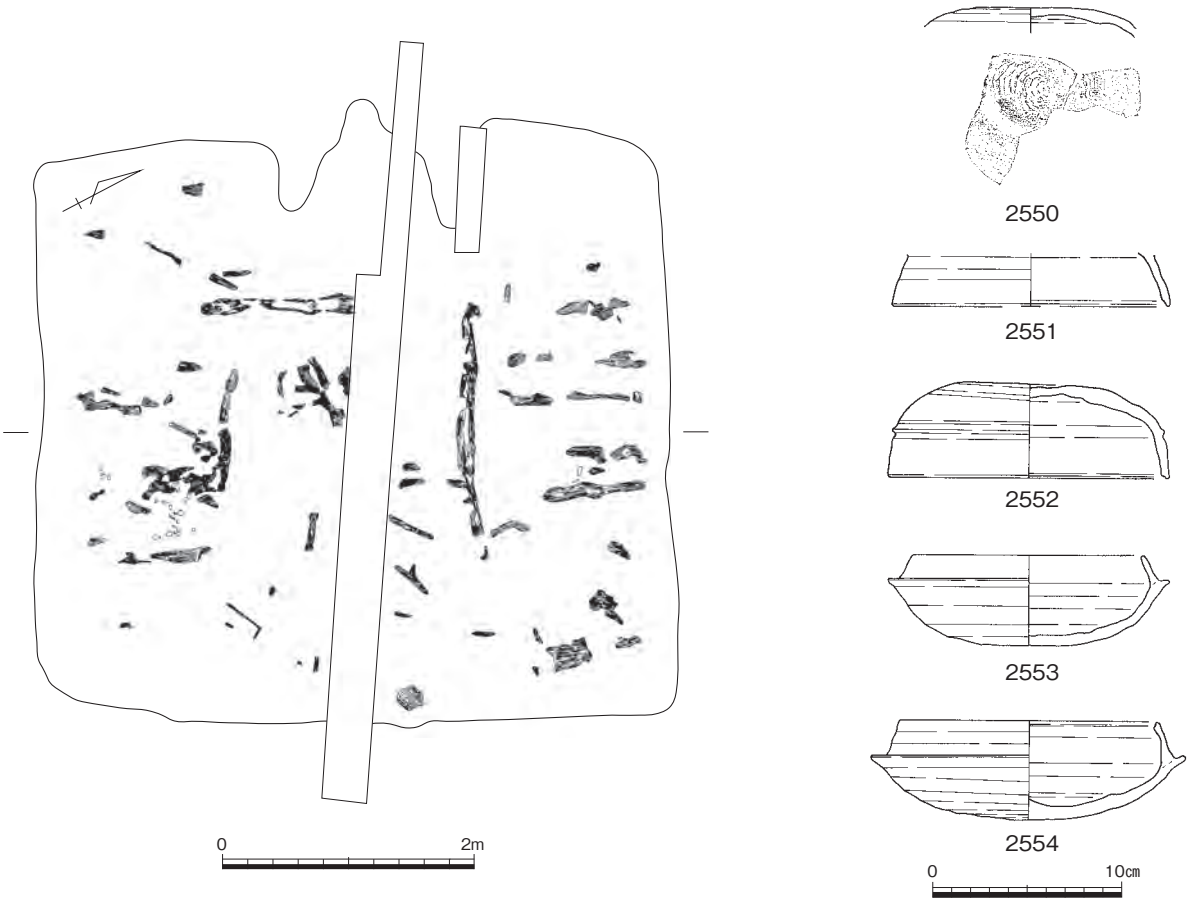
1　黒褐色(10YR2/3)砂質土
2　暗褐色(10YR3/3)砂質土（粘性有）
3　黒褐色(10YR3/1)砂質土
4　オリーブ褐色(2.5Y4/4)砂質土（褐灰色(10YR4/1)土塊含）
5　暗褐色(10YR3/3)砂質土



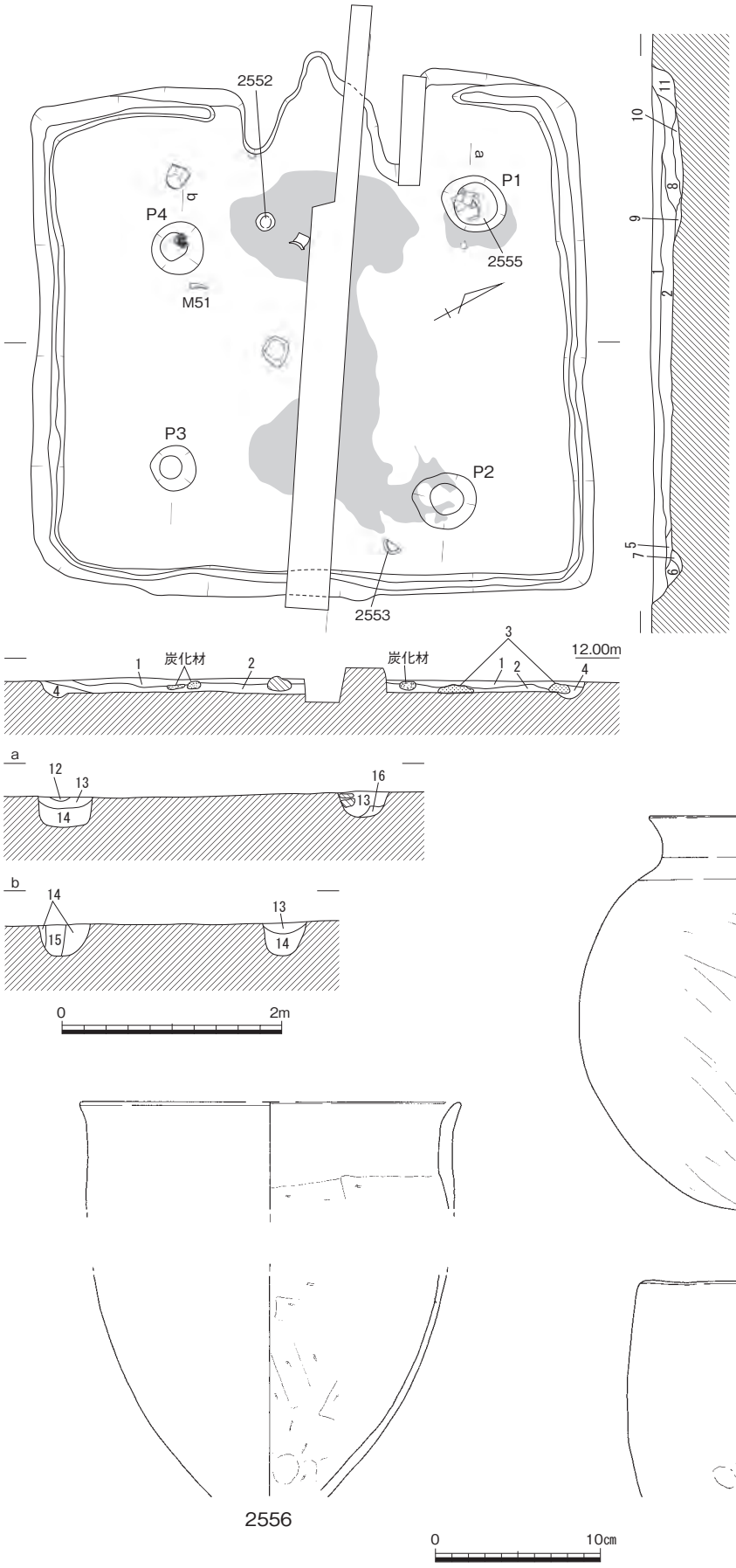
第479図　竪穴住居56（1/60）・出土遺物（1/4・1/6）

竪穴住居57（第470・480～483図、図版19－２・３・20－１・99・100・114・119）

Ｉ10の東側に位置する竪穴住居である。平面形は方形を呈するもので、壁体溝が巡る。西辺にカマドを有しており、主柱穴は４本である。規模は、東西幅460㎝、南北幅496㎝、検出面から床面までの深さは18㎝で、床面の標高は11.70ｍである。床面からは多くの炭化材と被熱痕跡を検出しており、焼失住居である。炭化材には中央部分に「コ」字状に検出された３本の部材があり、北辺の長いものでは約２ｍ残存している。これは主柱の上に渡した桁と梁の部材であると考えられる。また、この北辺の材に直交する形で、少なくとも５本の部材を検出している。これは屋根材であると考えられる。この炭化材を除去すると、中央部分の床面は被熱影響が大きく、断面の厚さにして１㎝程度、赤褐色に変色しているのを確認している。炭化材の検出状況が大きく乱れていないことから、焼失した後の片付けが行われていないことが考えられる。本竪穴住居を検出する際に、上面で手捏ね土器**2562～2577**がまとまって出土していることを確認したため、第483図に竪穴住居に伴うものとして掲載している。詳細な出土位置は不明であるが、炭化材の直上で出土している。この手捏ね土器は被熱していないことから、焼失して時間を経て置かれたものと考えられ、家の廃棄に伴う祭祀に使用されたものであろうか。また、カマドの輪郭を検出中に滑石製の臼玉**Ｊ15～Ｊ36**が出土している。同様にカマドの廃棄に伴う祭祀に使用されたものと考えられる。出土位置ではカマドの外側周辺となる。カマドは竪穴住居の西辺の中央部分に付設されており、燃焼部は幅30㎝で、支柱の石と、その上に掛けられていたと思われる甕**2558**が、底の抜けた状態で出土している。この支柱の手前側のみ10㎝四方の大きさで被熱

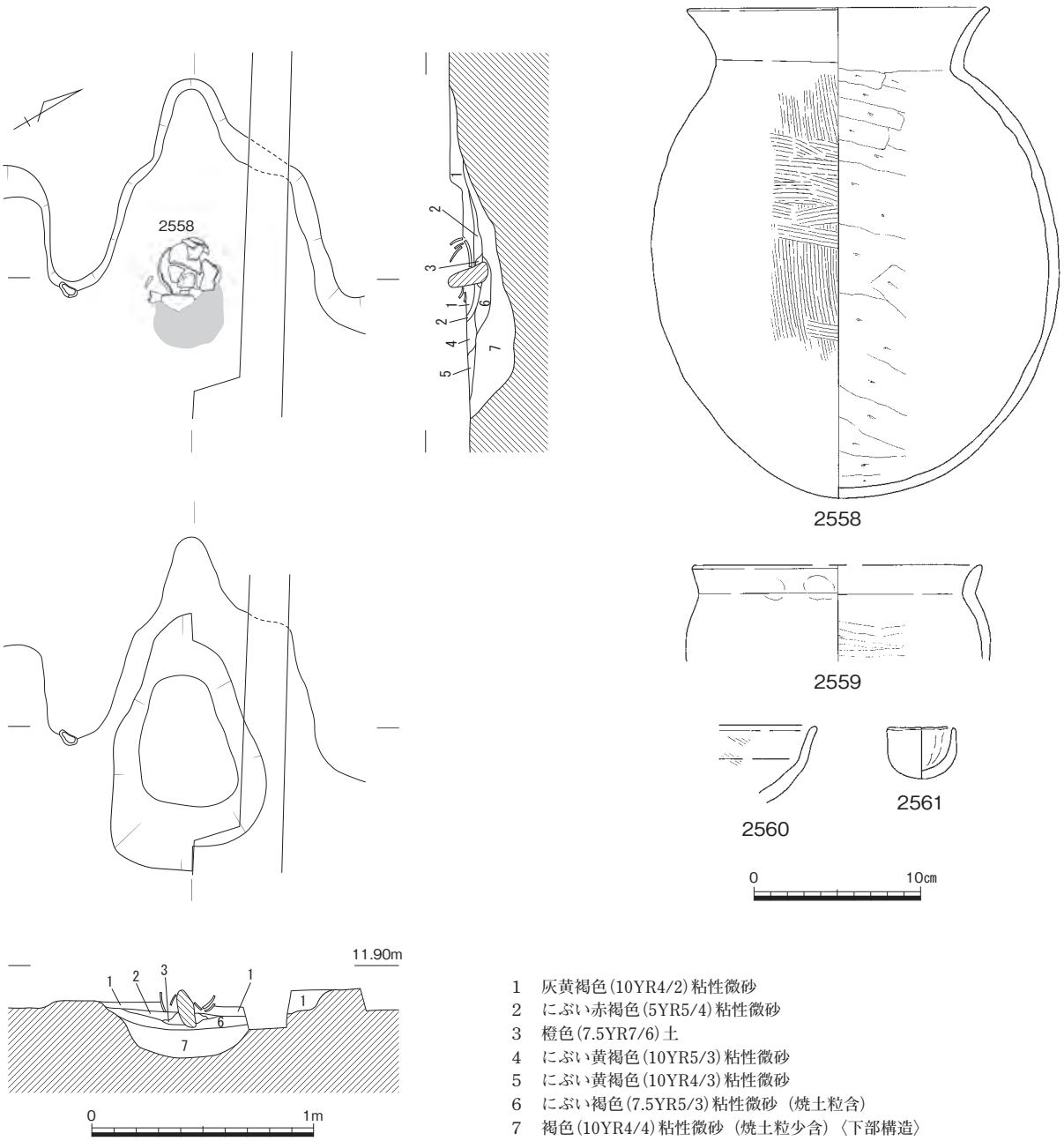


第480図　竪穴住居57炭化材出土状況（1/60）・出土遺物（1/4）



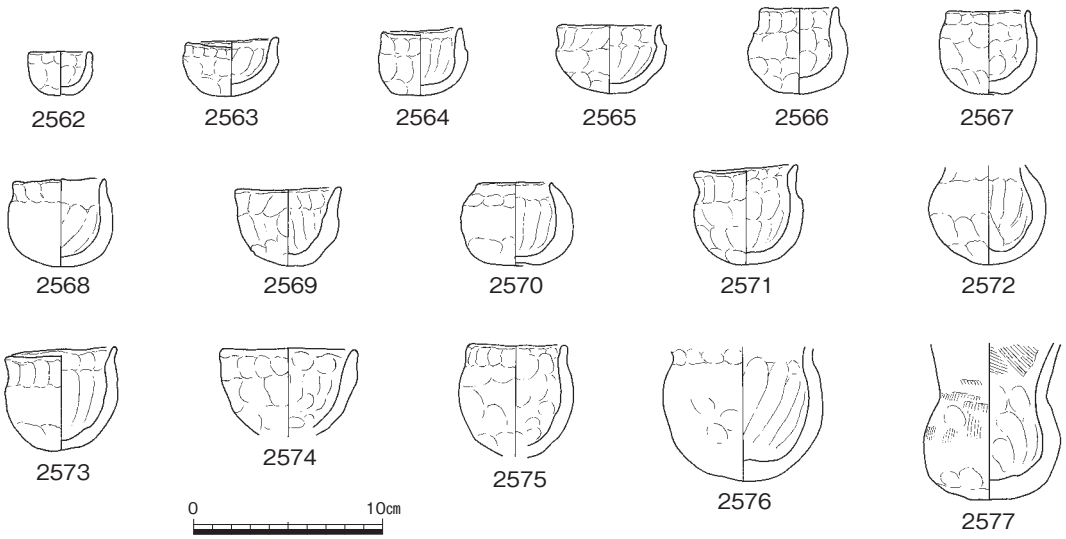
1　灰黄褐色(10YR5/2)粘性微砂
2　灰黄褐色(10YR4/2)粘性微砂
（焼土・炭化材多含）
3　焼土
4　にぶい黄橙色(10YR6/3)微～細砂
5　にぶい黄褐色(10YR5/4)粘性微砂
6　にぶい黄褐色(10YR5/3)微～細砂
（基盤層・焼土塊含）
7　にぶい黄橙色(10YR6/4)微～細砂
8　褐色(7.5YR4/3)粘性微砂
（炭・焼土･土器細片多含）
9　褐色(10YR4/4)微～細砂（炭含）
10　黒褐色(7.5YR3/2)粘性微砂
（炭・焼土若干含）
11　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性微砂
（焼土・炭･土器含）〈下部構造〉
12　黒褐色(7.5YR3/1)粘性微砂
（炭・焼土混）
13　灰黄褐色(10YR6/2)粘性微～細砂
14　灰黄褐色(10YR5/2)粘性微～細砂
15　にぶい黄褐色(10YR5/3)粘性微～細砂
16　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性微～細砂

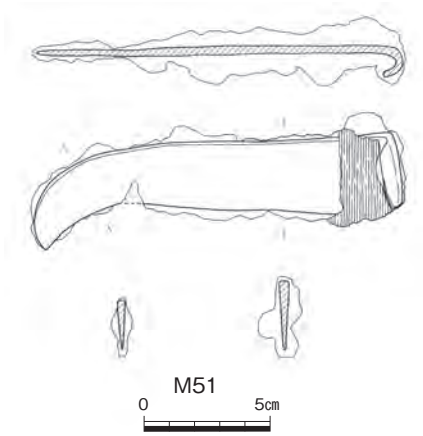
第481図　竪穴住居57（1/60）・出土遺物①（1/4）

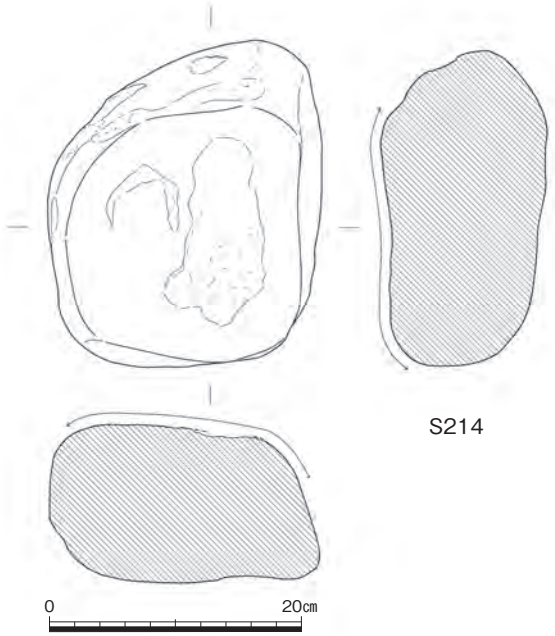


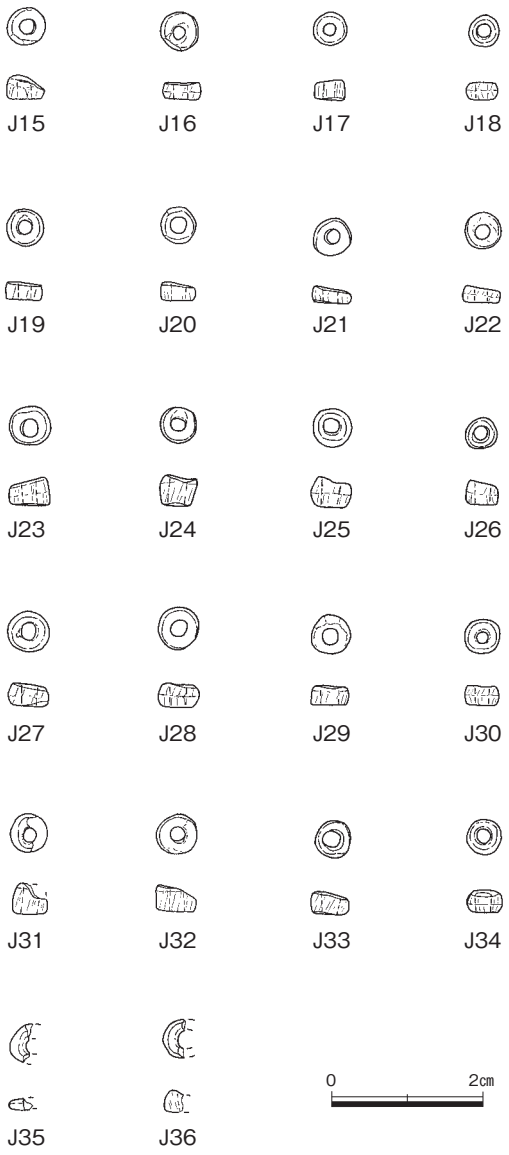
第482図　竪穴住居57カマド（1/30）・出土遺物②（1/4）

痕跡が残存している。この被熱の影響は、支柱を固定するために入れた土（第482図第３層）に及んでいる。煙道は竪穴住居の外側へは大きく延びない。袖は高さ約６㎝程度しか残存していないものの、支柱の石や甕**2558**が残存していることから、当時の使用状況が窺える。カマド下部構造の規模は、長軸118㎝、短軸70㎝、深さ８～16㎝を測る。出土遺物は、須恵器の杯**2550**～**2554**、土師器の甕**2555**・甑**2556**・製塩土器**2557**、カマドからは甕**2558**・鉢**2559**・**2560**・手捏ね土器**2561**が出土している。手捏ね土器はカマド内出土にもかかわらず、被熱していない。このうち、床面直上から出土している**2552**や**2555**～**2557**は被熱を受けている。これらの出土遺物のうち須恵器の形状から、ＴＫ10型式併行期のものであり、古・後・Ⅰであると考えられる。　（圃）







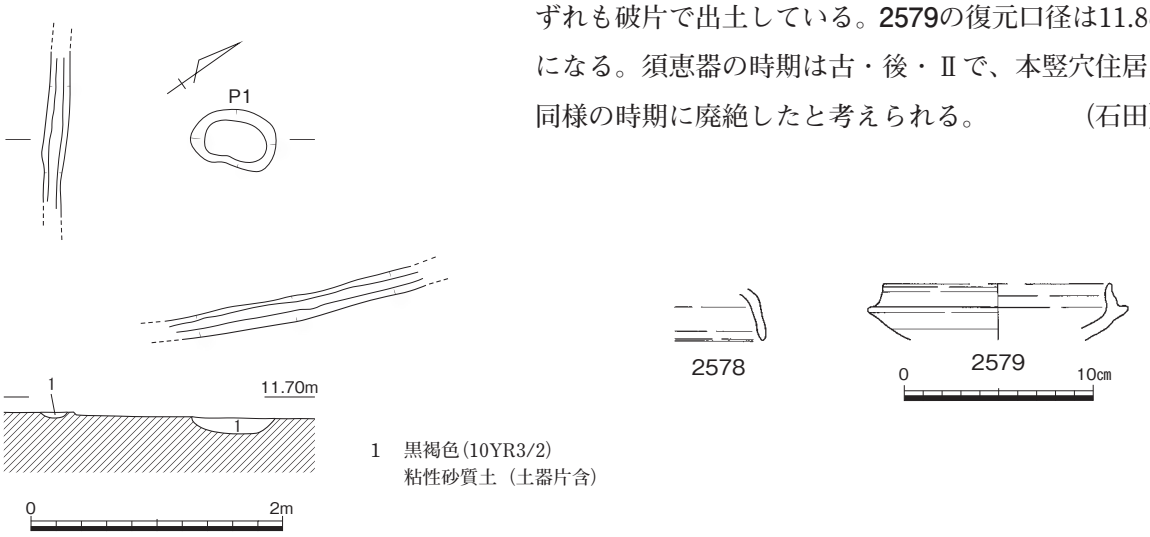


第483図　竪穴住居57出土遺物③（1/4・1/3・1/6・1/1）

竪穴住居58（第471・484図、図版20－２）

Ｈ11の中央西端に位置する竪穴住居である。古墳時代前期の溝19の埋没後に営まれており、東側約６ｍには土坑224・226が存在する。竪穴住居の上部は後世に大きく削平されており、かろうじて壁体溝と柱穴の下部のみを検出した。そのため、竪穴住居の床面については確認できていない。また、竪穴住居北半についても調査用地境にあたるため掘り下げて調査することができなかった。

竪穴住居の規模は、調査範囲内の残存長で長軸304㎝、短軸227㎝になる。壁体溝は、竪穴住居の東側と南側の二辺で確認しており、検出時の幅は約20㎝である。壁体溝の状況から竪穴住居の平面形は、やや歪な方形と推定される。柱穴はＰ１のみを確認している。規模は長軸で約70㎝、深さは12㎝であった。主柱の１本と考えられるが、主柱が何本で構成されていたかは不明である。出土遺物は、柱穴Ｐ１の埋土から須恵器の杯蓋**2578**と杯身**2579**がいずれも破片で出土している。**2579**の復元口径は11.8㎝になる。須恵器の時期は古・後・Ⅱで、本竪穴住居も同様の時期に廃絶したと考えられる。　（石田）



第484図　竪穴住居58（1/60）・出土遺物（1/4）

竪穴住居59（第471・485図、図版20－３・21－２）

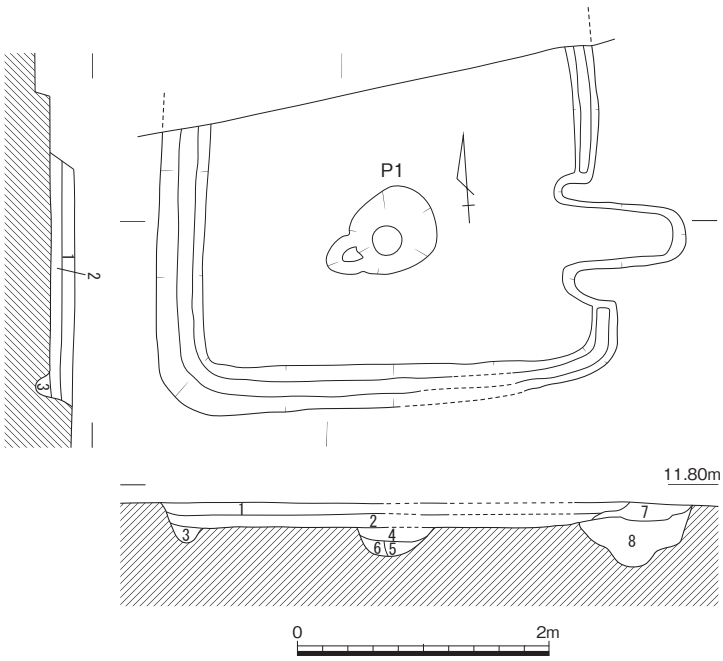
Ｈ11・Ｈ12の中央に跨がって位置し、西約14ｍには竪穴住居58が存在する。竪穴住居の南半部のみを確認しており、北半部については、調査用地境にあたるため掘り下げて調査することができなかった。平面形は方形を呈し、規模は検出できた範囲で長軸347㎝、短軸254㎝を測る。検出面から床面までの深さは約20㎝である。

柱穴はＰ１のみを確認しており、規模は径約70㎝、深さ約25㎝であった。北側にもう１本の柱穴の存在が推定され、主柱は２本で構成されていたと考えられる。床面周囲には壁体溝が巡り、竪穴住居の東辺南寄りにはカマドが設けられていた。

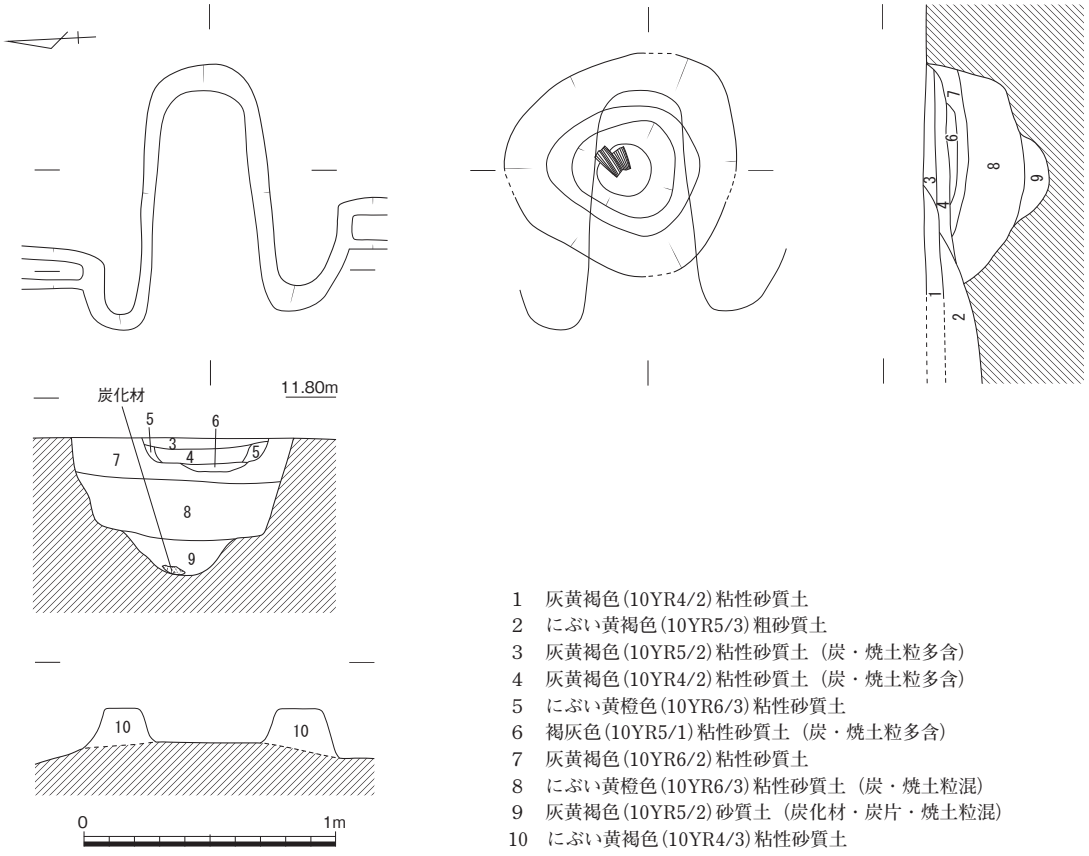
カマドは燃焼部を示す被熱面は明瞭に残存していなかったが、カマド内の埋土は炭や焼土粒を多く含んでいた。南北の袖部と竪穴住居外に長く延びる煙道部分も確認している。

カマド本体の構築以前に下部構造として土坑を掘削している。平面は不整な円形を呈し、径約90㎝、深さは約50㎝を測り、二段掘りになっていた。下層埋土は炭片や焼土粒を含んでおり、底部で炭化材を検出した。

遺物は、竪穴住居の埋土中から出土した須恵器の杯蓋**2580**のみで、小片である。出土した須恵器からみて、時期は古・後・Ⅱの範疇と考えられる。　（石田）



1　灰黄褐色(10YR4/2)粘性砂質土
2　にぶい黄褐色(10YR5/3)粗砂質土
3　褐灰色(10YR4/1)微砂質土
4　灰黄褐色(10YR5/2)微砂質土
5　にぶい黄褐色(10YR5/3)粗砂質土
6　灰黄褐色(10YR4/2)粗砂質土
7　〈カマド埋土〉
8　〈カマド下部構造〉



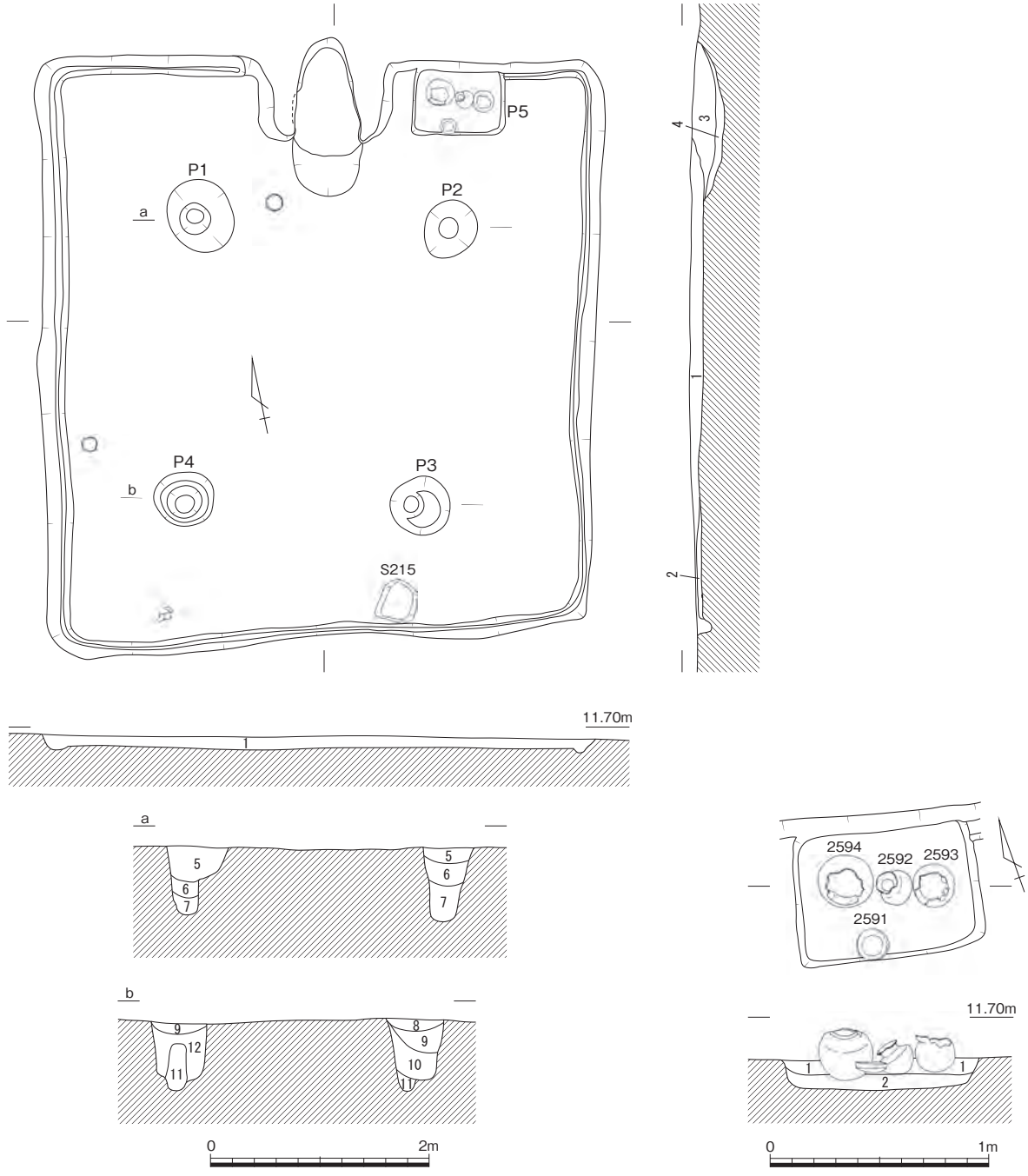
1　灰黄褐色(10YR4/2)粘性砂質土
2　にぶい黄褐色(10YR5/3)粗砂質土
3　灰黄褐色(10YR5/2)粘性砂質土（炭・焼土粒多含）
4　灰黄褐色(10YR4/2)粘性砂質土（炭・焼土粒多含）
5　にぶい黄橙色(10YR6/3)粘性砂質土
6　褐灰色(10YR5/1)粘性砂質土（炭・焼土粒多含）
7　灰黄褐色(10YR6/2)粘性砂質土
8　にぶい黄橙色(10YR6/3)粘性砂質土（炭・焼土粒混）
9　灰黄褐色(10YR5/2)砂質土（炭化材・炭片・焼土粒混）
10　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性砂質土

第485図　竪穴住居59（1/60）・カマド（1/30）・出土遺物（1/4）

竪穴住居60（第471・486～489図、図版21－２・３・22－１・100・118）

Ｉ12の西側に位置する竪穴住居である。平面形は方形を呈するもので、壁体溝が巡る。北辺にカマ

ドを有しており、主柱穴は４本である。規模は、東西幅506㎝、南北幅545㎝、検出面から床面までの深さは14㎝で、床面の標高は11.50ｍである。また、カマドの東側には壁面に接して規模84×59㎝、深さ12㎝の方形の土坑（Ｐ５）を検出している。この土坑内からは第489図にある土師器の甕３点（**2592**～**2594**）と須恵器の杯蓋（**2591**）１点が出土している。いわゆる竪穴住居内の貯蔵穴である。カマド



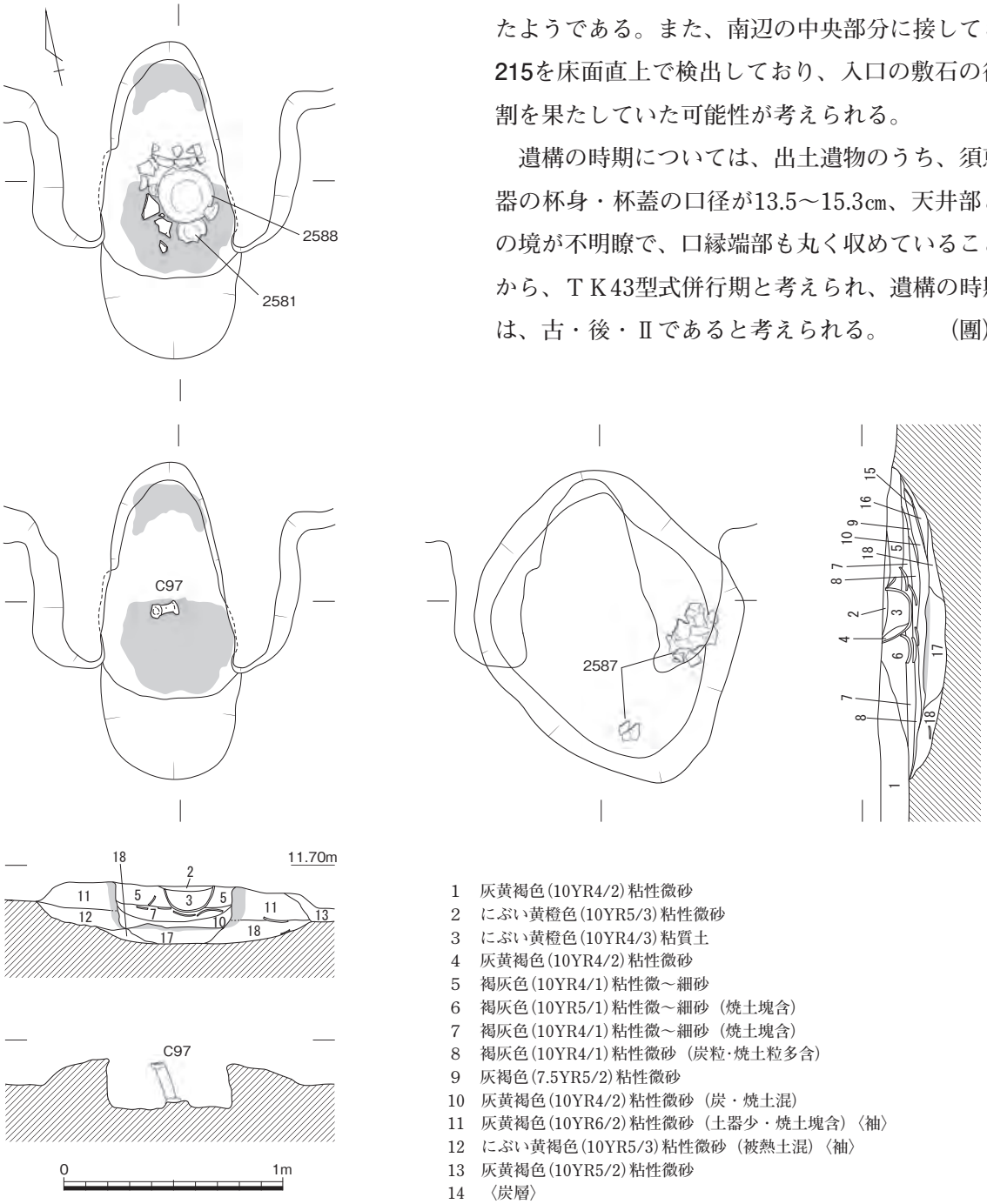
1　灰黄褐色(10YR4/2)粘性微砂
2　にぶい黄橙色(10YR6/4)微～細砂
3　〈カマド埋土〉
4　〈カマド下部構造〉
5　灰黄褐色(10YR5/2)粘性微砂
6　灰黄褐色(10YR4/2)粘性微砂
7　黒褐色(10YR3/1)粘質土
8　灰黄褐色(10YR6/2)粘性微砂
9　にぶい黄褐色(10YR5/3)粘性微砂
10　灰黄褐色(10YR4/2)粘性微砂
11　黒褐色(10YR3/2)粘質土
12　灰黄褐色(10YR4/2)粘性微砂

1　灰黄褐色(10YR4/2)粘性微砂
2　灰黄褐色(10YR4/2)粘性微砂
（焼土塊多含）

第486図　竪穴住居60（1/60）・Ｐ５（1/30）

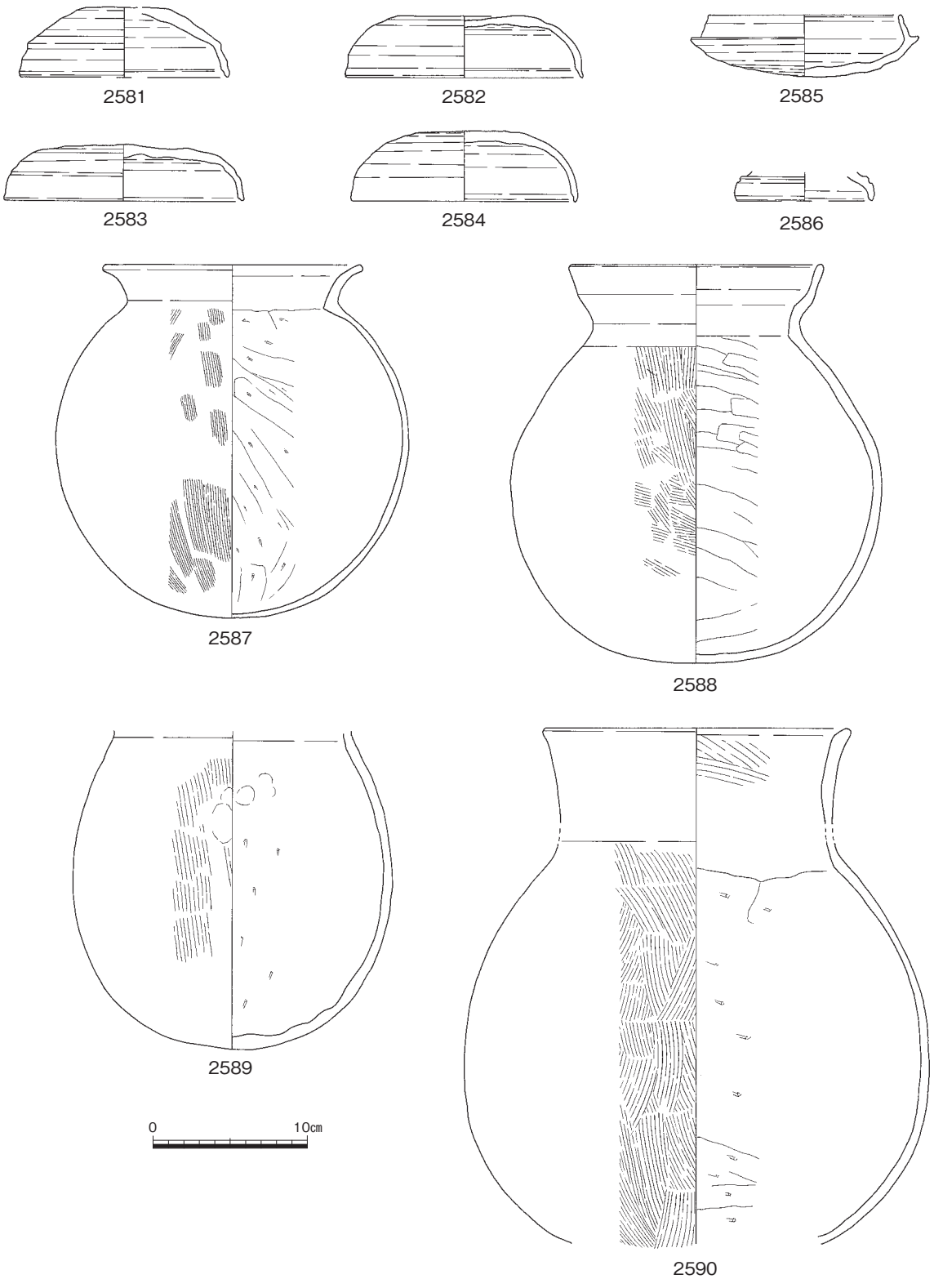
は、袖部の残存高16㎝で、燃焼部の幅は約55㎝を測る。燃焼部の被熱は強く、また壁面も被熱影響の強い部分では約４㎝もの厚さで変色している。天井部は落ちているが、焚口に掛けられていたと思われる甕2588と土製支脚C97が出土している。須恵器杯2581もカマド内から出土しているが、被熱は見られない。下部構造は規模146×122㎝、深さ８㎝の土坑状を呈している。下部構造の調査時、東側の袖部を取り払うと破砕された状態の甕2587を検出している。下部構造の埋土である第18層の上面に破砕した甕2587を置き、その直上に袖部を構築したようである。また、南辺の中央部分に接してS215を床面直上で検出しており、入口の敷石の役割を果たしていた可能性が考えられる。

遺構の時期については、出土遺物のうち、須恵器の杯身・杯蓋の口径が13.5～15.3㎝、天井部との境が不明瞭で、口縁端部も丸く収めていることから、ＴＫ43型式併行期と考えられ、遺構の時期は、古・後・Ⅱであると考えられる。　　（圃）



1　灰黄褐色(10YR4/2)粘性微砂
2　にぶい黄橙色(10YR5/3)粘性微砂
3　にぶい黄橙色(10YR4/3)粘質土
4　灰黄褐色(10YR4/2)粘性微砂
5　褐灰色(10YR4/1)粘性微～細砂
6　褐灰色(10YR5/1)粘性微～細砂（焼土塊含）
7　褐灰色(10YR4/1)粘性微～細砂（焼土塊含）
8　褐灰色(10YR4/1)粘性微砂（炭粒･焼土粒多含）
9　灰褐色(7.5YR5/2)粘性微砂
10　灰黄褐色(10YR4/2)粘性微砂（炭・焼土混）
11　灰黄褐色(10YR6/2)粘性微砂（土器少・焼土塊含）〈袖〉
12　にぶい黄褐色(10YR5/3)粘性微砂（被熱土混）〈袖〉
13　灰黄褐色(10YR5/2)粘性微砂
14　〈炭層〉
15　赤灰色(2.5YR4/1)粘性微砂（被熱弱）
16　灰黄褐色(10YR4/2)粘性微砂（炭・焼土混）
17　橙色(2.5YR6/8)粘性微砂（被熱変色）〈下部構造〉
18　灰黄褐色(10YR5/2)粘性微砂（焼土粒･炭粒含）〈下部構造〉

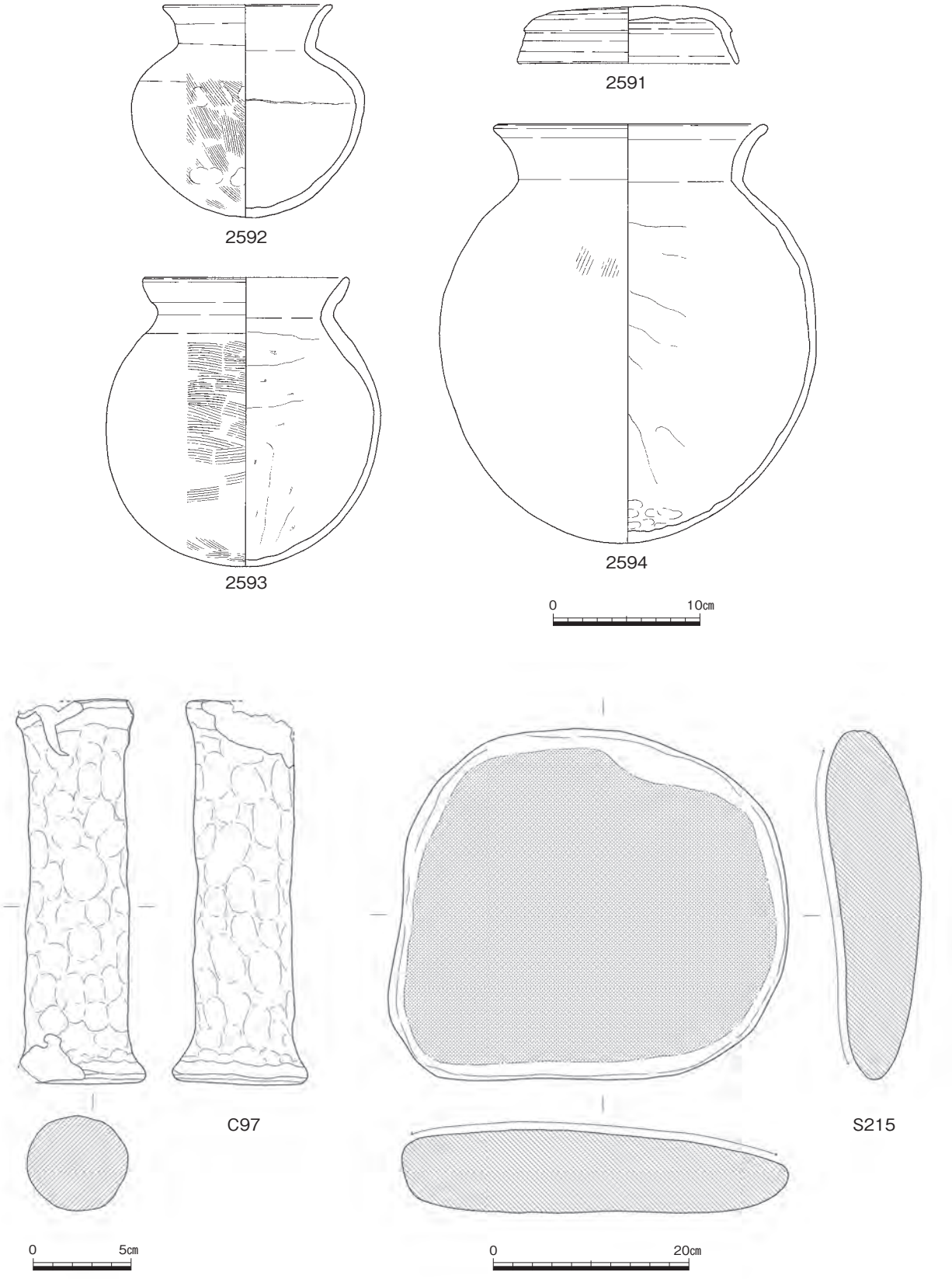
第487図　竪穴住居60カマド（1/30）



第488図　竪穴住居60出土遺物①（1/4）

竪穴住居61（第471・490・491図、図版22－２・３・101・119）

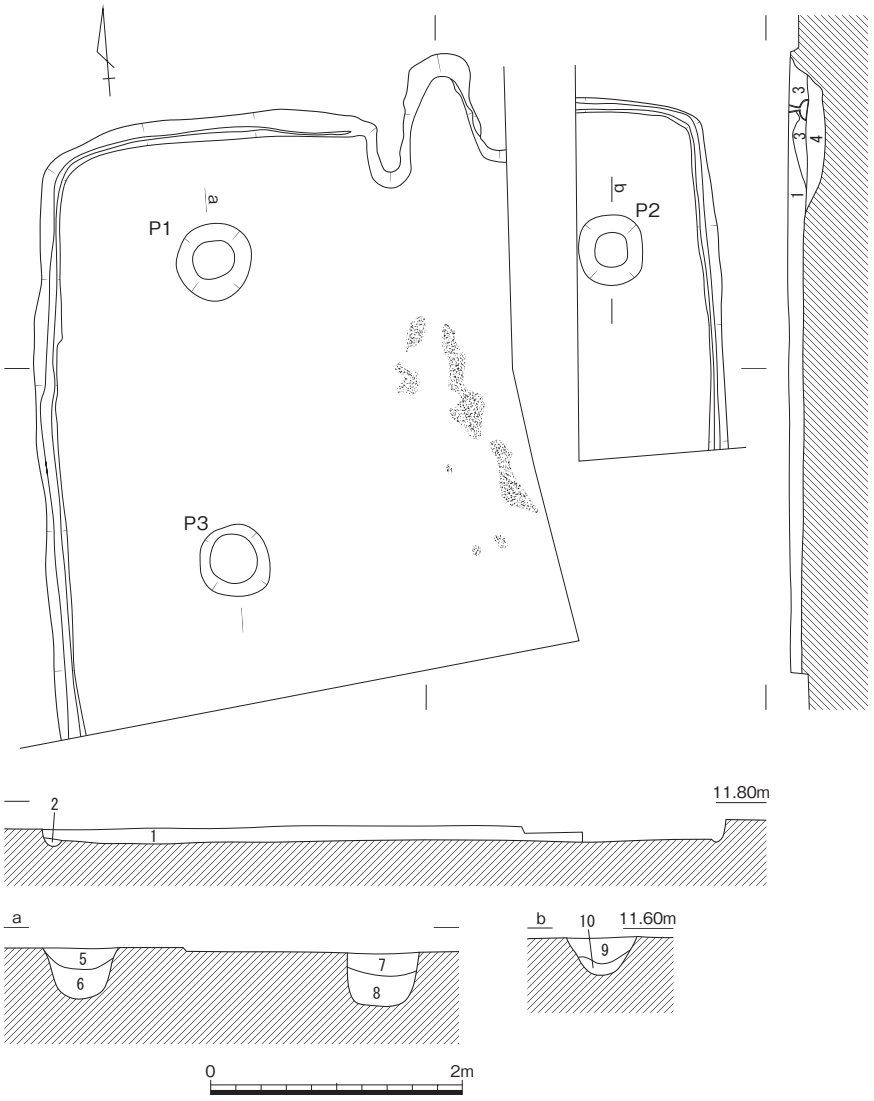
Ｉ13に位置する竪穴住居である。平面形は方形を呈し、壁体溝が巡る。北辺にカマドを有しているもので、主柱穴は３本を検出しているが、本来４本であろう。規模は、東西幅544㎝、検出面から床面までの深さは10㎝で、床面の標高は11.48ｍである。床面の中央付近には炭の広がりが一部でみられ



第489図　竪穴住居60出土遺物②（1/4・1/3・1/6）

る。カマドは袖部が高さ11㎝程度残っており、カマドの燃焼部は強い被熱によって、厚さ２㎝程度変色しているが、袖部内側の壁面は一部に被熱痕跡が見られる程度であった。カマド内の燃焼部には、

支脚として利用された高杯2602が口縁部を下にした、使用時の状態を保った状態で出土している。カマドの下部構造は、燃焼部の直下に掘削された平面が楕円形を呈した土坑状の遺構で、規模は120×65㎝で深さ15㎝を測るものである。また、カマドの南側で床面を精査中に臼玉Ｊ37を１点検出しているが１点のみであり、竪穴住居57のようにカマド祭祀に関連するかは不明瞭である。出土遺物には、須恵器の杯2595～2597、高杯2598、甕2599、土師器の甕2600・2601、高杯2602、甑2603・2604、滑石製臼玉Ｊ37がある。須恵器杯身､杯蓋の口縁端部は明瞭な段を持つものである。細片ではあるが、ＴＫ47型式併行期と考えられ、遺構の時期は、古・中・Ⅱであると考えられる。　（團）

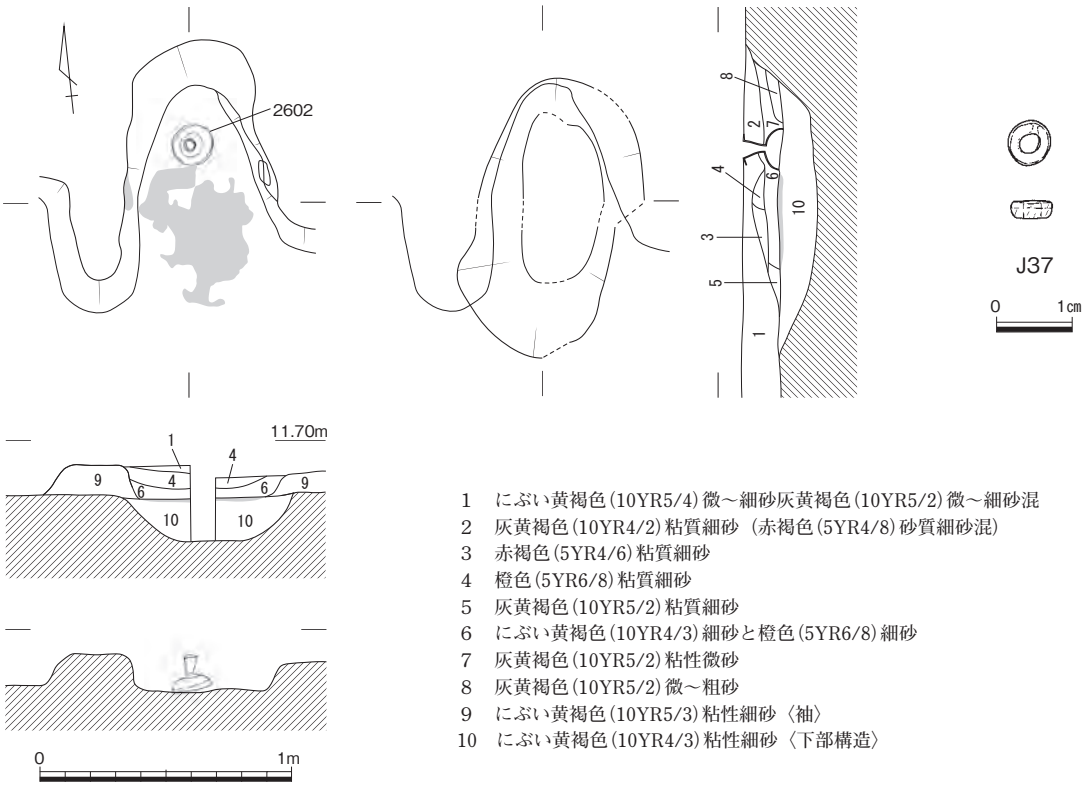


1　にぶい黄褐色(10YR5/4)
　微～細砂（灰黄褐色(10YR5/2)
　微～細砂混)
2　暗褐色(10YR3/3)粘性細砂
　(粘性弱)
3　〈カマド埋土〉
4　〈カマド下部構造〉
5　褐色(7.5YR4/3)粘性微砂
6　褐色(7.5YR4/3)粘性微砂
　(黄灰色(2.5Y6/1)粗砂塊含)
7　褐色(7.5YR4/3)粘性微砂
　(炭・焼土含)
8　褐色(7.5YR4/3)粘性微砂
　(黄灰色(2.5Y6/1)粗砂・炭少含)
9　暗褐色(10YR3/3)粘性砂質土
10　にぶい黄褐色(10YR4/3)
　粘性砂質土

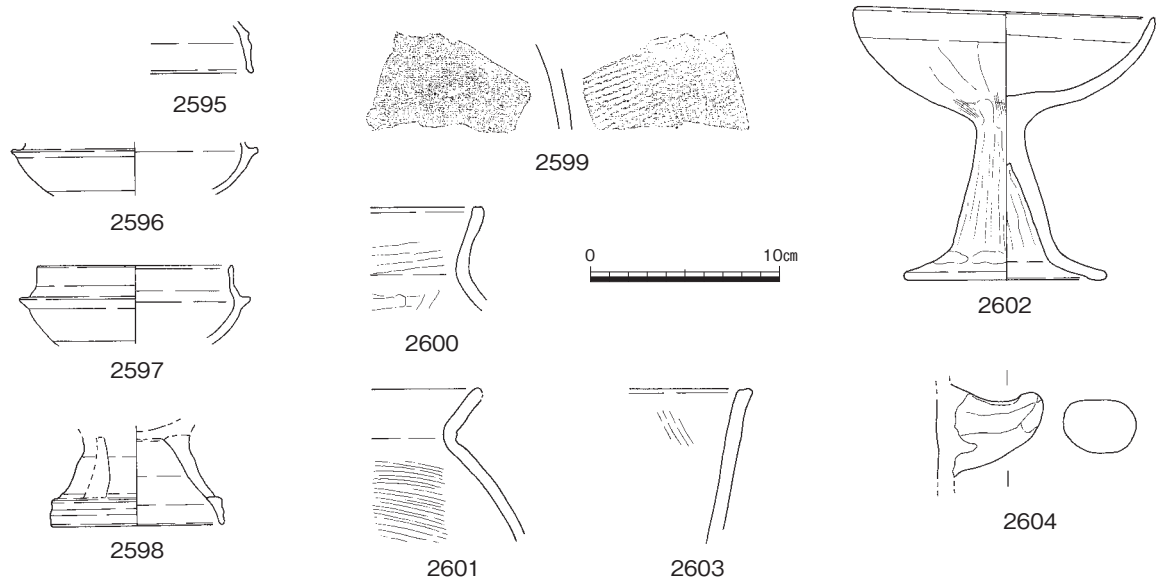
第490図　竪穴住居61（1/60）

竪穴住居62（第471・492図、図版23－１）

Ｉ14の、竪穴住居61の東に位置する。南端の状況が不明であるが、673×593㎝の方形を呈する竪穴住居で、床面とほぼ同じレベルで検出した。床面積は約38.9㎡を測る。本遺構に伴うものとして、壁体溝、柱穴、カマドを検出している。壁体溝は幅約20㎝、深さは約10㎝を測り、床を全周していると考えられる。柱穴は２本検出しており、Ｐ１は径約50㎝、深さ約20㎝、Ｐ２は径約70㎝、深さ約20㎝



1　にぶい黄褐色(10YR5/4)微～細砂灰黄褐色(10YR5/2)微～細砂混
2　灰黄褐色(10YR4/2)粘質細砂（赤褐色(5YR4/8)砂質細砂混）
3　赤褐色(5YR4/6)粘質細砂
4　橙色(5YR6/8)粘質細砂
5　灰黄褐色(10YR5/2)粘質細砂
6　にぶい黄褐色(10YR4/3)細砂と橙色(5YR6/8)細砂
7　灰黄褐色(10YR5/2)粘性微砂
8　灰黄褐色(10YR5/2)微～粗砂
9　にぶい黄褐色(10YR5/3)粘性細砂〈袖〉
10　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性細砂〈下部構造〉



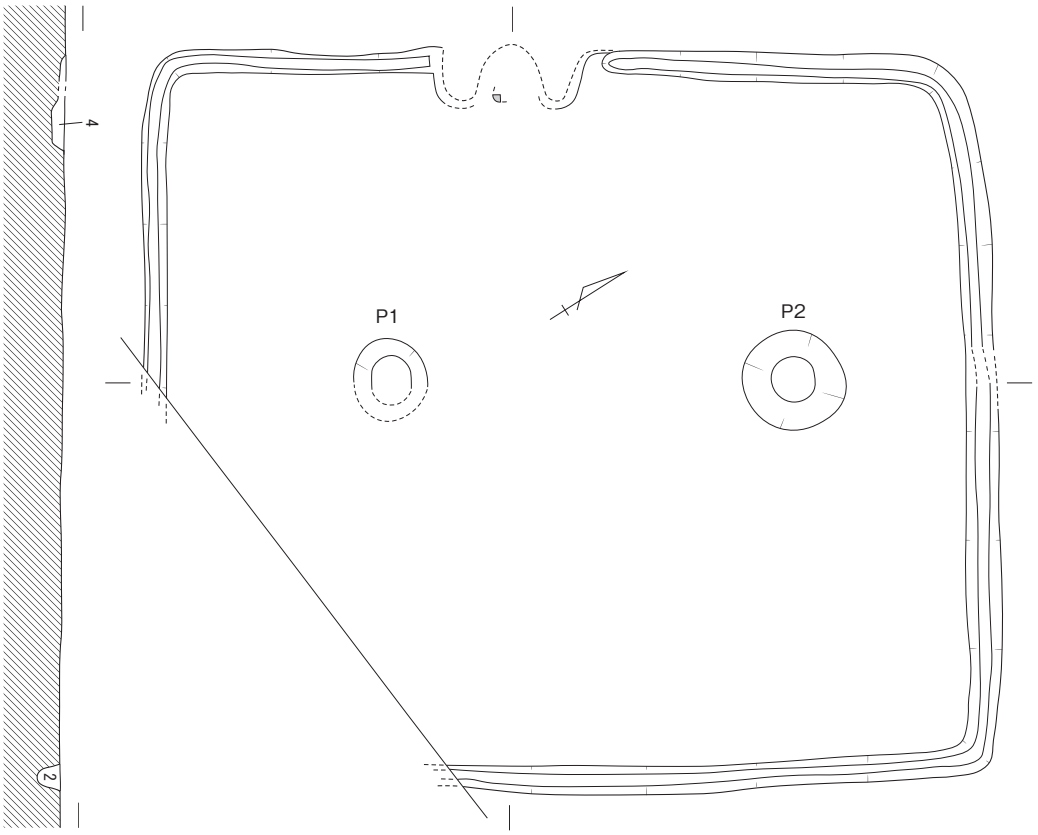
第491図　竪穴住居61カマド（1/30）・出土遺物（1/4・1/1）

である。柱痕などは見られなかった。カマドは竪穴住居北西側の辺の中央に設けられており、内部にわずかに被熱の痕跡が認められた。

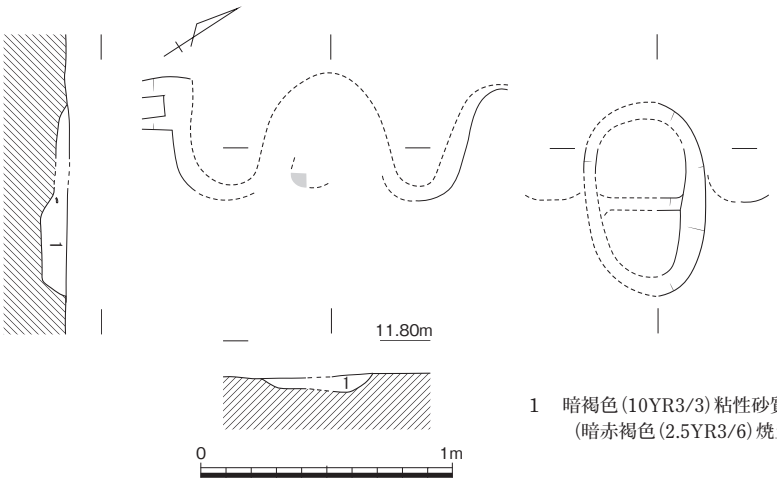
竪穴住居に伴う遺物として、須恵器の杯蓋2605・2607、杯身2606、高杯2608、土師器の甕2609がある。遺構の時期は、出土遺物から古・中・Ⅱと考えられる。（藤井）

竪穴住居63（第471・493・494図、図版10－１）

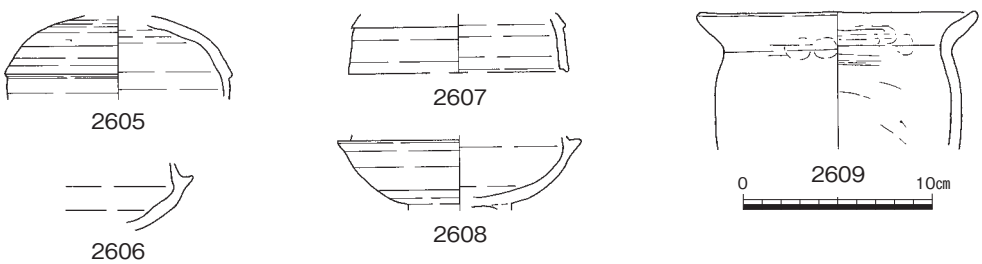
H14とＩ14に跨がるが、大半はH14の南西側に立地している。南西側に竪穴住居62、北東側に竪穴



1　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性砂質土
　(土器・炭含)
2　黒褐色(10YR3/2)粘性砂質土〈壁体溝〉
3　暗褐色(10YR3/3)粘性砂質土
　(土器・炭含)〈Ｐ２〉
4　〈カマド下部構造〉



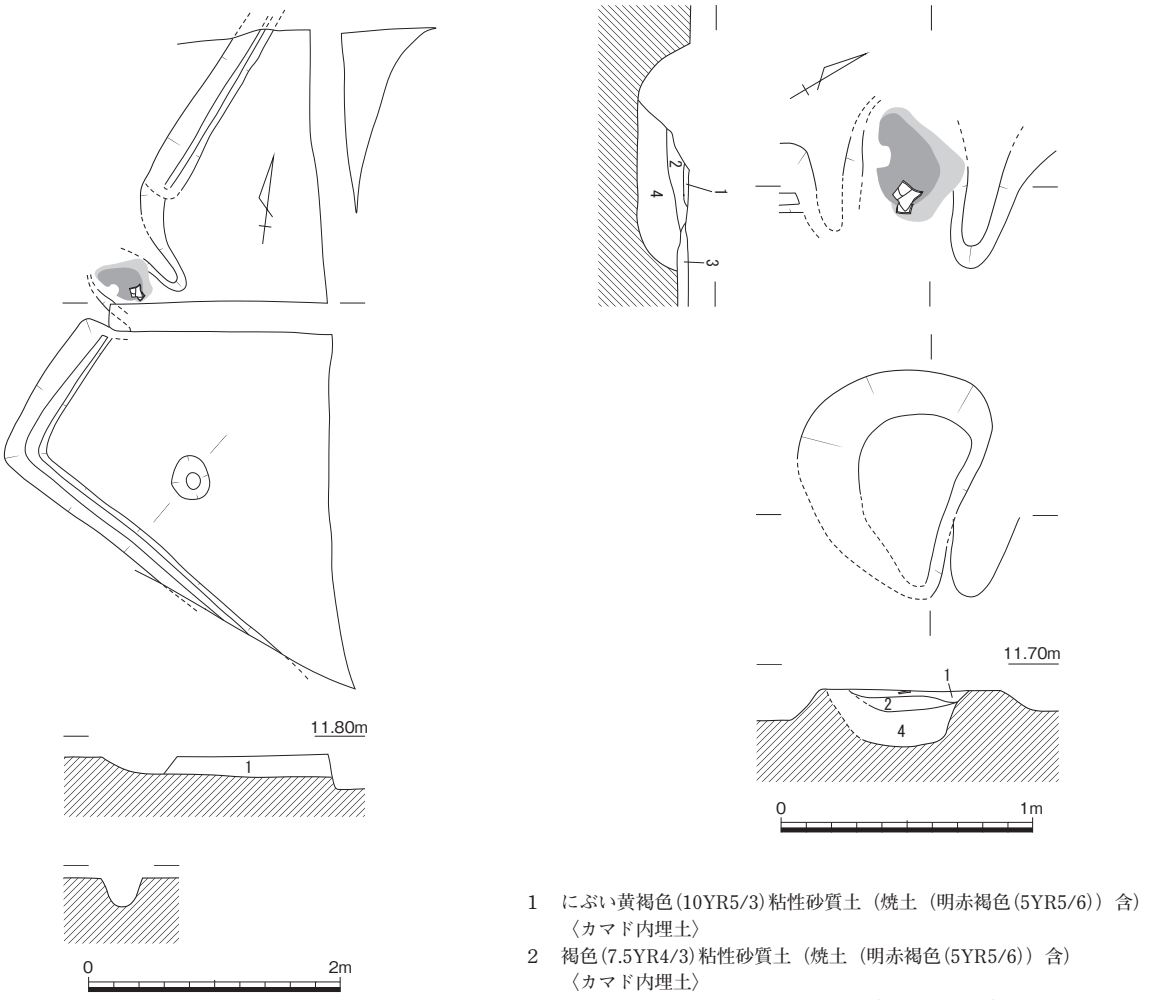
1　暗褐色(10YR3/3)粘性砂質土
　(暗赤褐色(2.5YR3/6)焼土含)〈下部構造〉



第492図　竪穴住居62（1/60）・カマド（1/30）・出土遺物（1/4）

住居64が近接するなど、周辺は同時期の遺構が密集している。

本竪穴住居は、床面近くで調査最終段階になってようやく確認できた経緯から、長軸長などの規模は不明である。確認面からの深さは10㎝前後で、残存している床面の標高は11.50ｍである。柱穴は１本のみ確認しており、本来２本柱の竪穴住居であった可能性が高い。壁体溝は西辺と南辺の一部で確認され、カマドは西辺中央に位置している。カマドは、かなり硬質な焼土面を有している。出土遺物は主にカマド内から出土し、**2610・2611**は須恵器杯、**2612**は須恵器高杯、**2613**は土師器甕、**2614**は土師器壺、**2615**は土師器高杯である。古・中・Ⅱである。　（小林）



第493図　竪穴住居63（1/60）・カマド（1/30）

竪穴住居64（第471・495・496図、図版23－２・３）

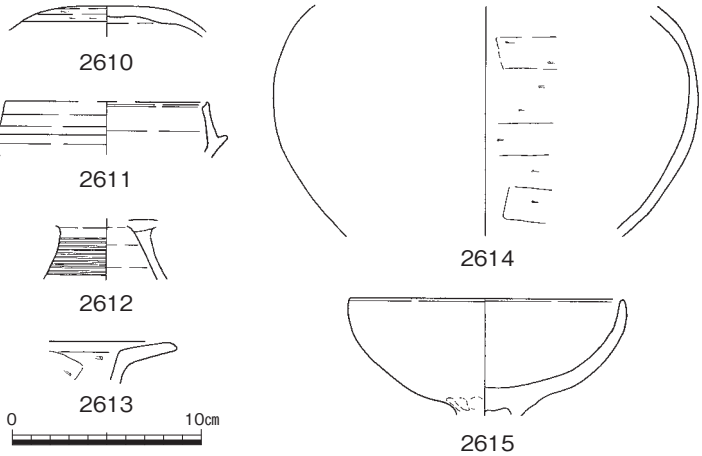
Ｈ14の中央南に位置する。南西部分は竪穴住居63と隣接し、南東約1.5ｍには竪穴住居65が存在するなど、周辺の遺構密度は高く、古墳時代後半期の竪穴住居が集中して営まれている。

住居の平面形は方形で、規模は長軸555㎝、短軸530㎝で床面積は27.80㎡を測る。検出面から床面までの深さは約15㎝と浅く、上部は後世に削平を受けていた。

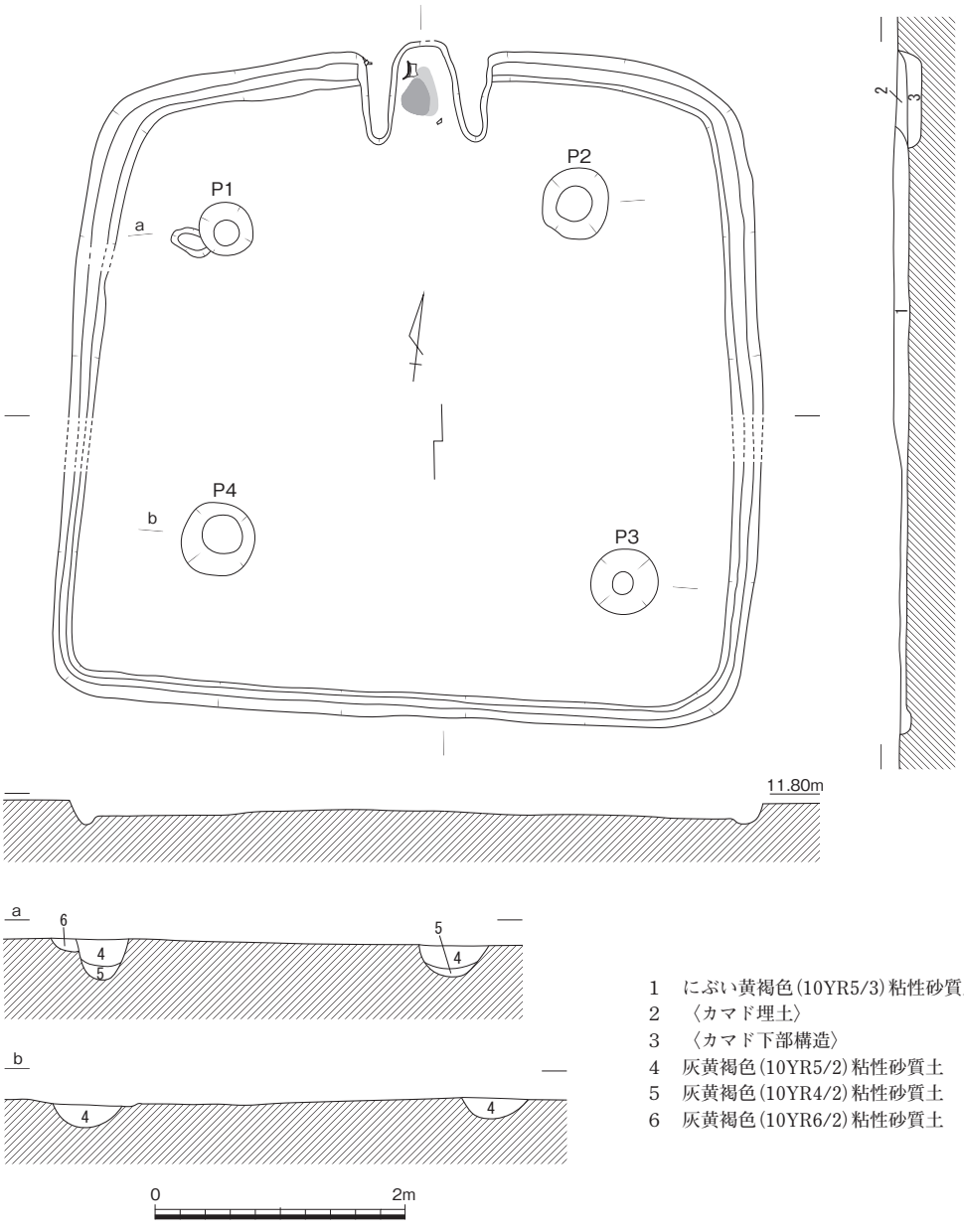
柱穴は、主柱穴と考えられるＰ１～Ｐ４の４本を確認しており、４本柱の竪穴住居であったと考えられる。床面の周りは壁体溝が巡り、北辺中央にカマドを設けている。カマドは燃焼部が残存しており、

強く被熱していた。燃焼部付近では土師器甕2622が出土した。また、カマドの下部構造として長軸85㎝、深さ12㎝の土坑を確認している。

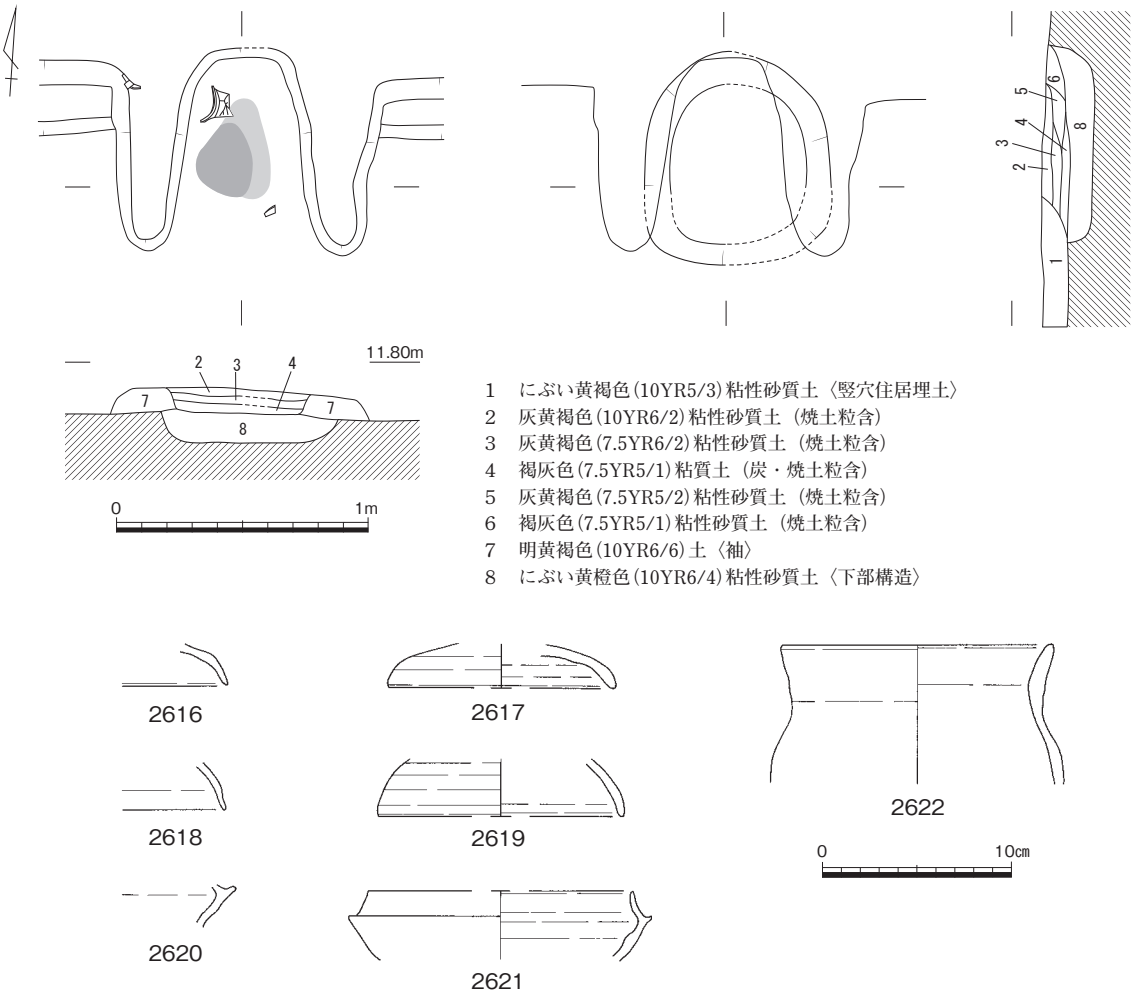
出土遺物はほかに、カマド内から須恵器杯蓋2618が、壁体溝埋土から杯蓋2619が出土している。須恵器杯蓋2616・2617、須恵器杯身2620・2621は竪穴住居埋土から出土した。時期は、出土した須恵器からみて、古・後・Ⅱと考えられる。（石田）



第494図　竪穴住居63出土遺物（1/4）



第495図　竪穴住居64（1/60）

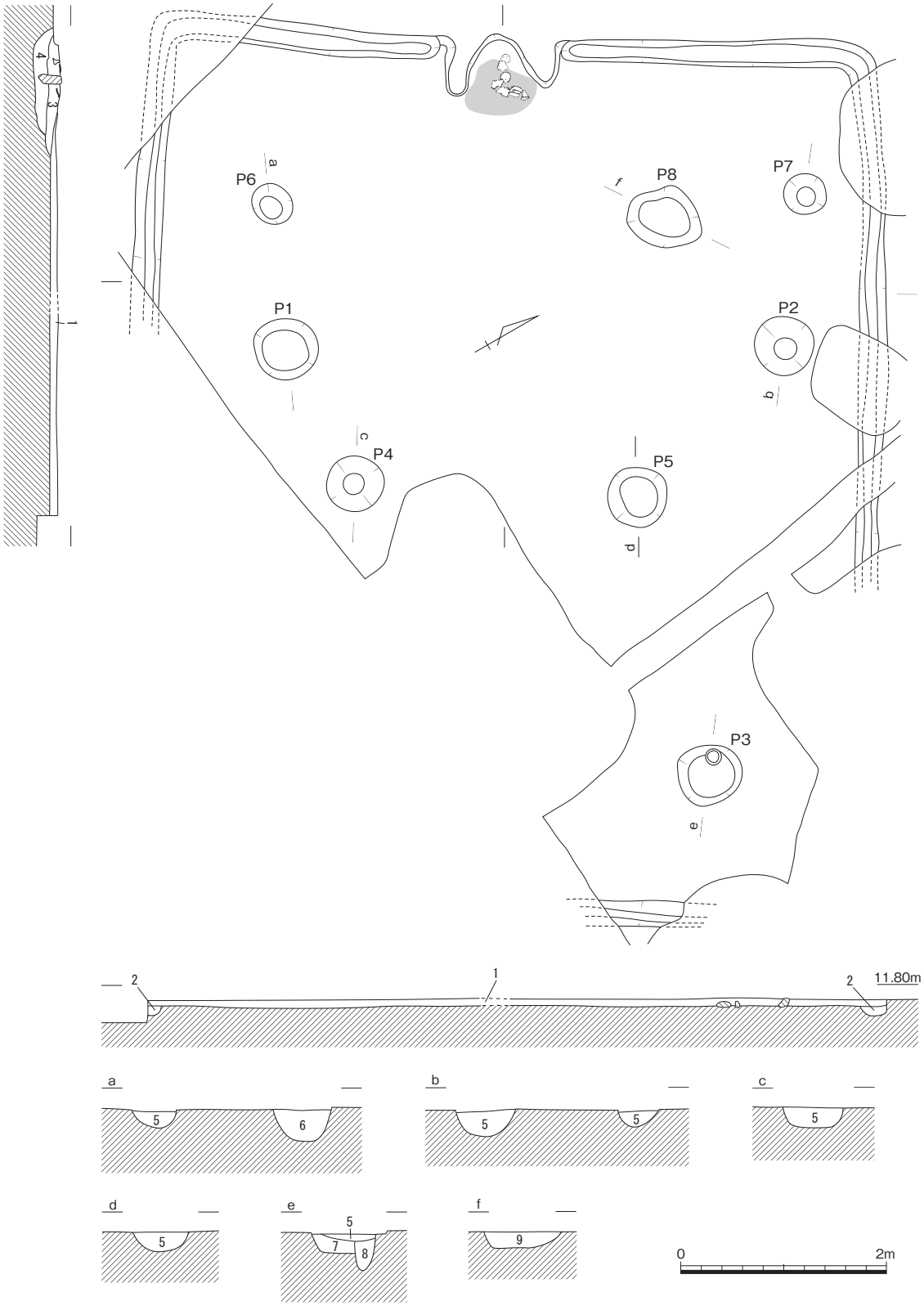


第496図　竪穴住居64カマド（1/30）・出土遺物（1/4）

竪穴住居65（第471・497～501図、図版24－１～３・101・118）

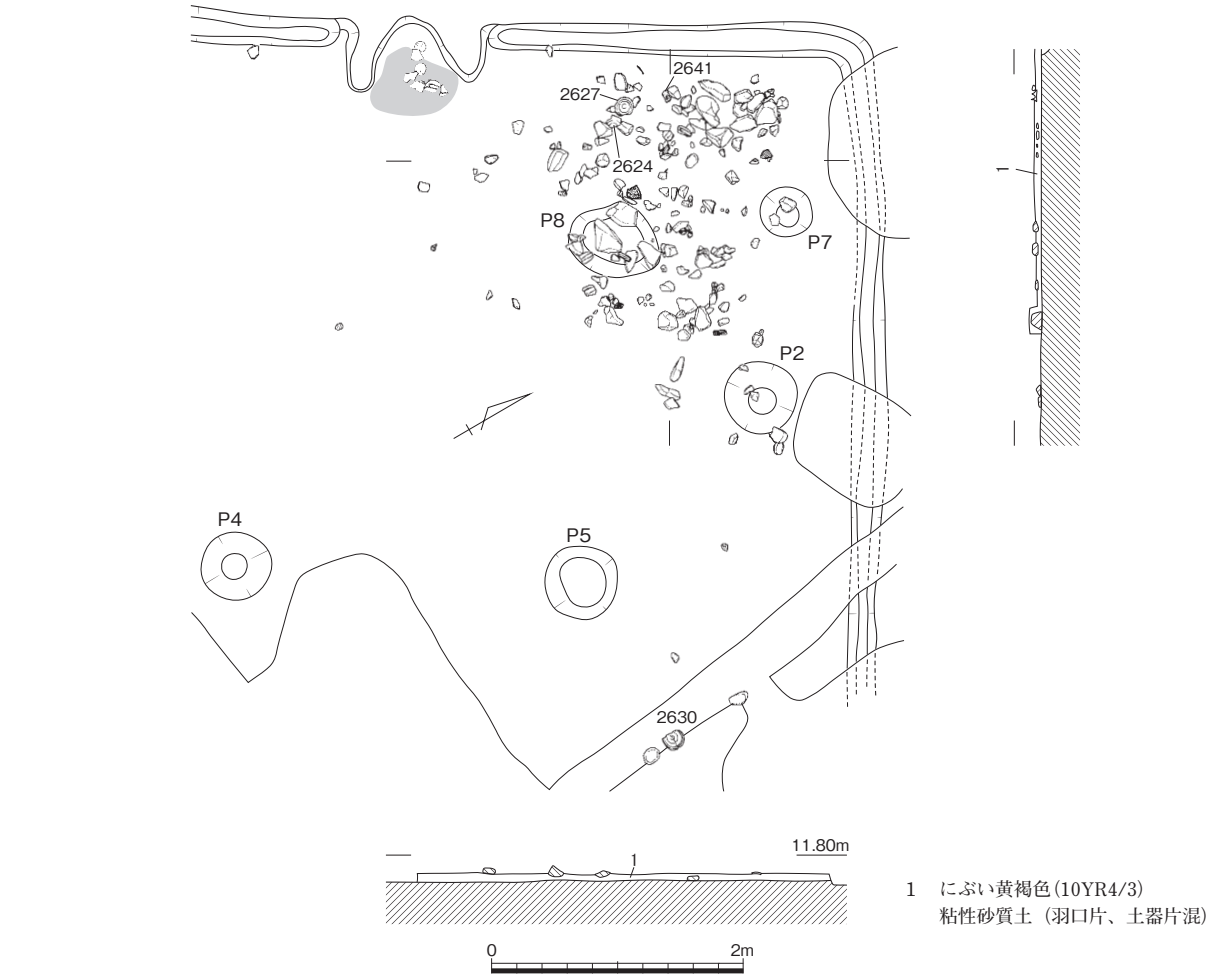
Ｉ14の北東隅に位置する。住居の南半部は、調査区境のため確認できなかった。平面は方形を呈し、規模は長軸860㎝、短軸729㎝を測る大形の竪穴住居である。柱穴はＰ１～Ｐ８を確認した。Ｐ１～Ｐ３の３本と南東部で未検出の１本を加えた計４本が主柱と考えられる。床面周囲を壁体溝が巡り、西辺中央にカマドを設けている。カマドの被熱面中央に支柱石が置かれ、その手前で土師器甕**2639**、奥で**2642**が出土している。竪穴住居北隅の床面上、約３ｍ四方の範囲で鉄滓や羽口片などの鍛冶関連遺物、土器片、被熱した花崗岩片などがまとまって出土した。鉄滓は椀形鍛冶滓**M52**・**M53**のほか、鍛造剥片様遺物、粒状滓、錆化鉄粒など微細遺物も検出した。出土鉄滓の総重量は1,820ｇで、微細遺物は約40点を確認した。鉄滓は分析を実施し、**M52**・**M53**は精錬鍛冶滓との結果を得ているが、詳細は第５章第10節のとおりである。羽口は**C98**～**C107**があり、孔径は2.2～3.2㎝になる。細片も多く出土し、羽口の総重量は4,371ｇである。その他、木炭片**W１**、鉄錆が付着した金床石**S221**、敲石**S216**～**S218**、磨石**S219**、砥石**S220**も出土している。弥生土器の高杯**2641**も利用した可能性がある。

鍛冶炉本体は竪穴住居内で検出していない。竪穴住居北西部の埋土を50㎝メッシュで取り上げ、微細遺物を抽出して出土位置を確認したが、操業を示す分布は認められなかった。そのため竪穴住居外の近接した位置に鍛冶炉が存在し、調査時には削平されていた可能性が高いと考えられる。鍛冶関連遺物は、竪穴住居の床面上で間層もなく出土しており、竪穴住居廃絶時若しくは廃絶後すぐに投棄さ

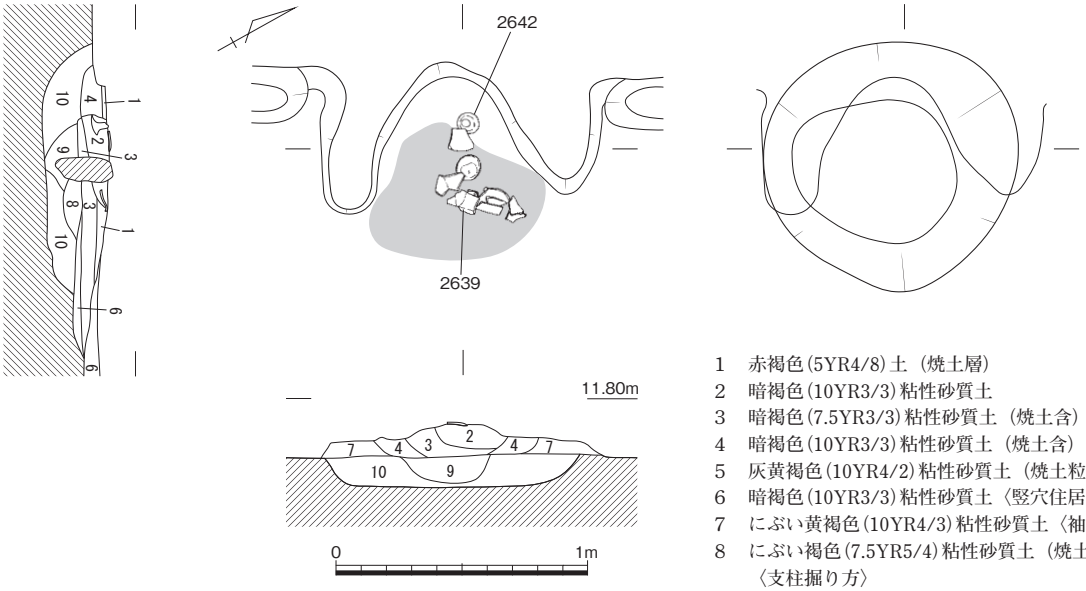


1　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性砂質土
2　暗褐色(10YR3/3)粘性砂質土
3　〈カマド埋土〉
4　〈カマド下部構造〉
5　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性砂質土（土器含）
6　暗褐色(10YR3/3)粘性砂質土（土器含）
7　暗褐色(10YR3/3)粘性砂質土（炭・焼土含）
　(赤褐(2.5YR4/6)含)
8　暗褐色(10YR3/3)粘性砂質土（炭含）
9　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性砂質土

第497図　竪穴住居65（1/60）

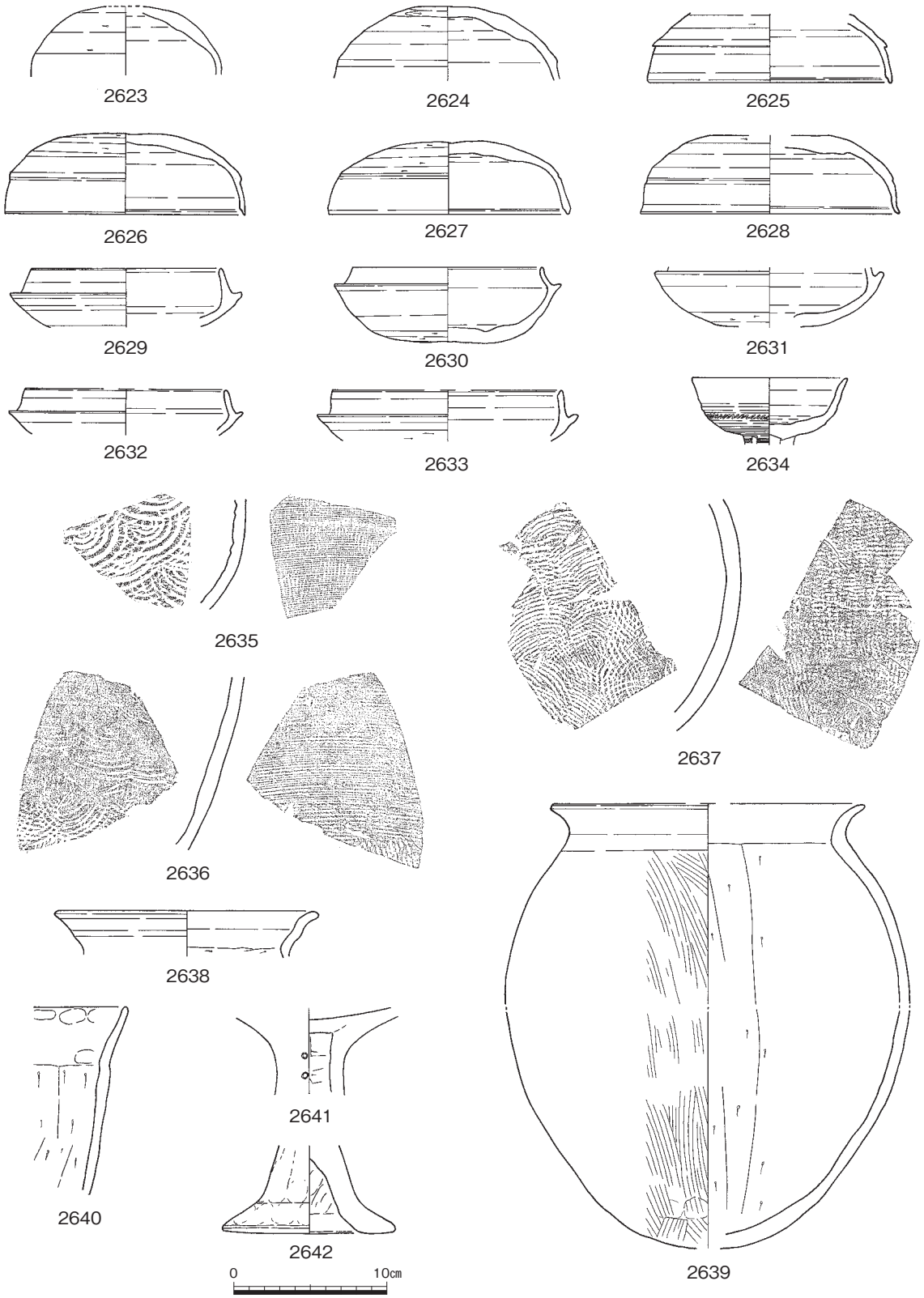


1　にぶい黄褐色(10YR4/3)
　粘性砂質土（羽口片、土器片混）



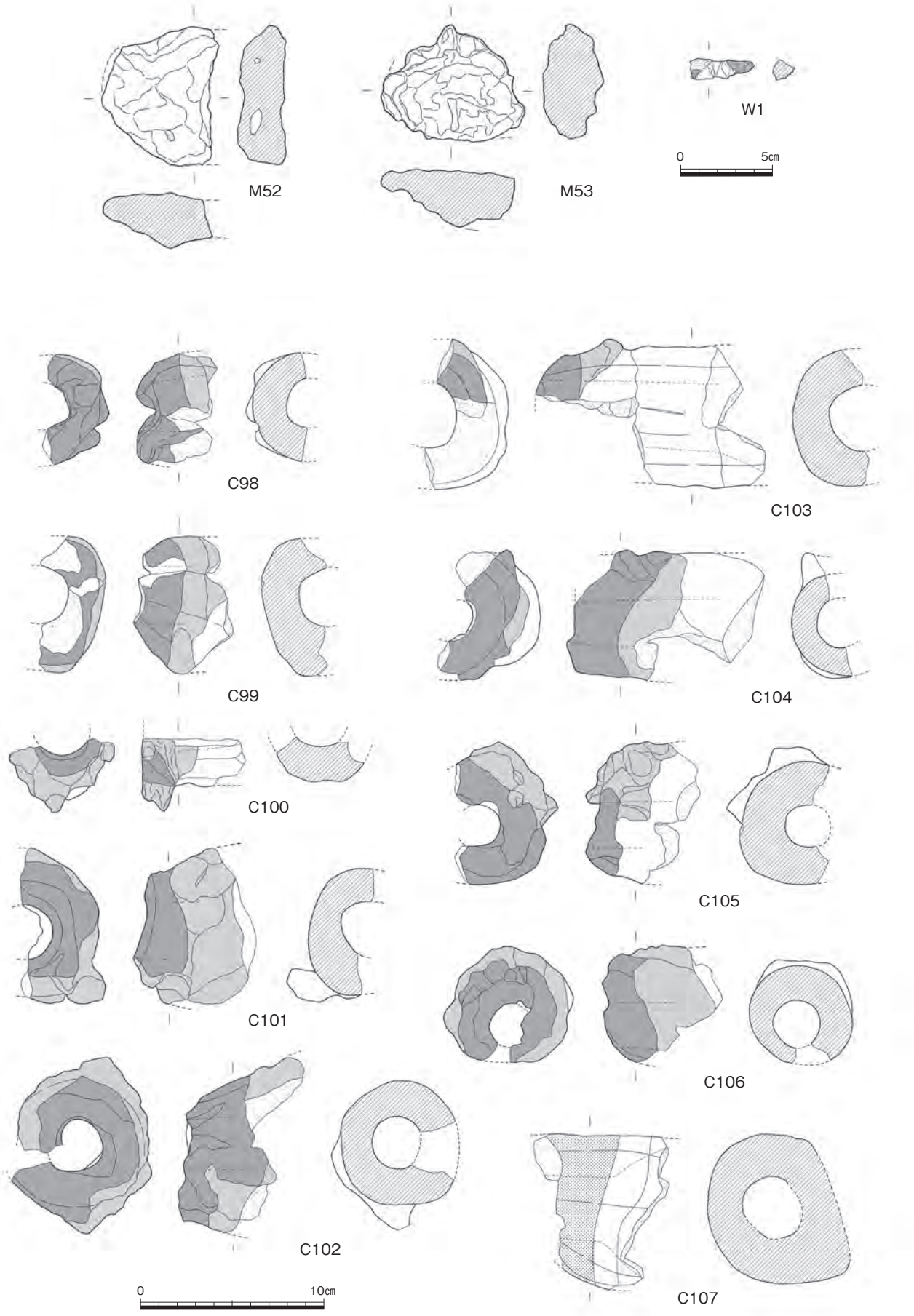
1　赤褐色(5YR4/8)土（焼土層）
2　暗褐色(10YR3/3)粘性砂質土
3　暗褐色(7.5YR3/3)粘性砂質土（焼土含）
4　暗褐色(10YR3/3)粘性砂質土（焼土含）
5　灰黄褐色(10YR4/2)粘性砂質土（焼土粒混）
6　暗褐色(10YR3/3)粘性砂質土〈竪穴住居埋土〉
7　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性砂質土〈袖〉
8　にぶい褐色(7.5YR5/4)粘性砂質土（焼土粒混）
　〈支柱掘り方〉
9　褐色(7.5YR4/3)粘性砂質土（焼土粒混）〈支柱掘り方〉
10　にぶい黄褐色(10YR6/3)粘性砂質土（焼土粒混）
　〈下部構造〉

第498図　竪穴住居65遺物出土状況（1/60）・カマド（1/30）

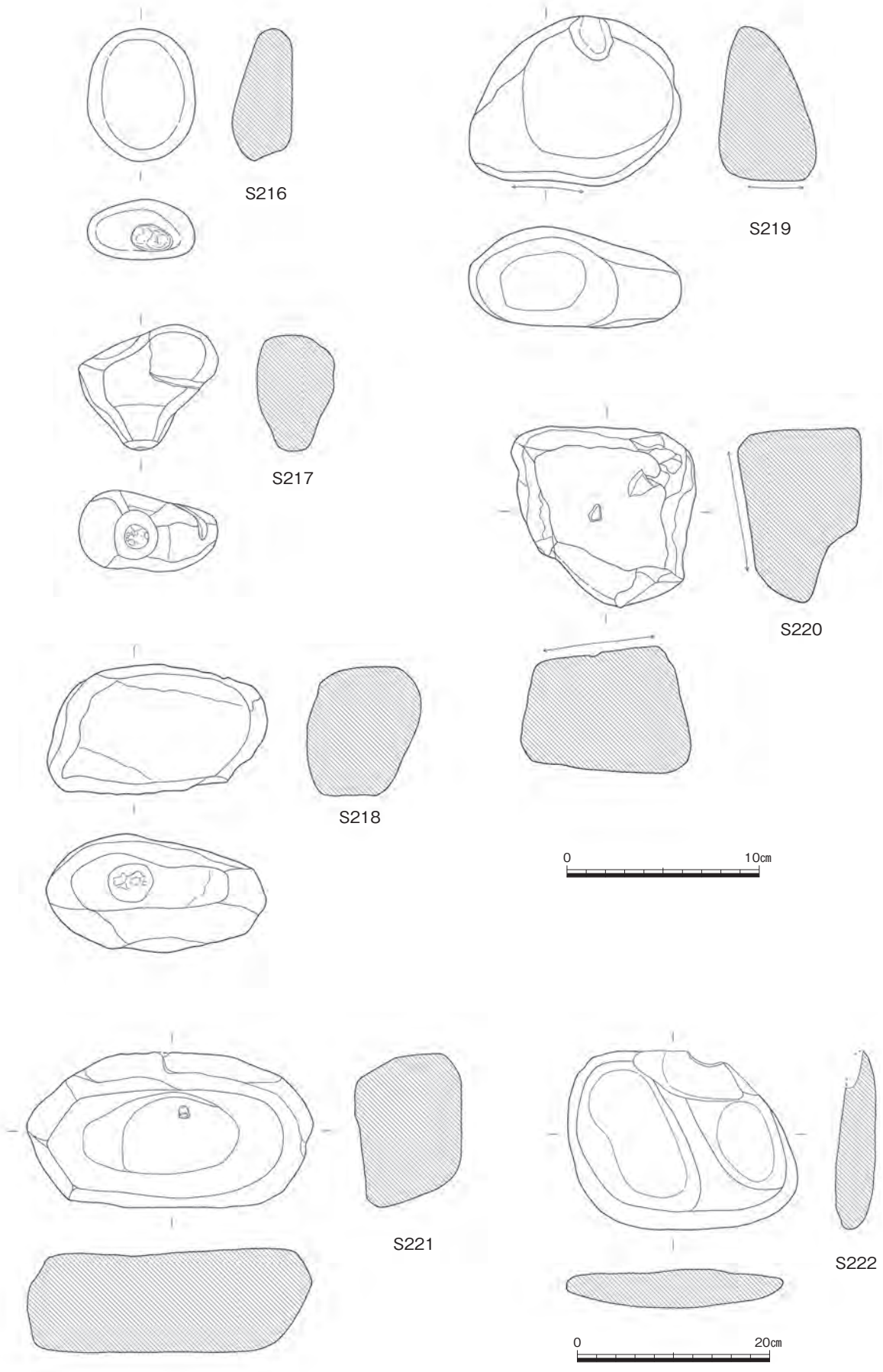


第499図　竪穴住居65出土遺物①（1/4）

れたと推測される。出土遺物はほかに、須恵器の杯蓋**2623**～**2628**、杯身**2629**～**2633**、高杯**2634**、甕**2635**～**2637**、土師器の甕**2638**・**2639**、甑**2640**、Ｐ６上で出土した台石**Ｓ222**がある。竪穴住居の時期は古・後・Ⅰの範疇と考えられる。（石田）



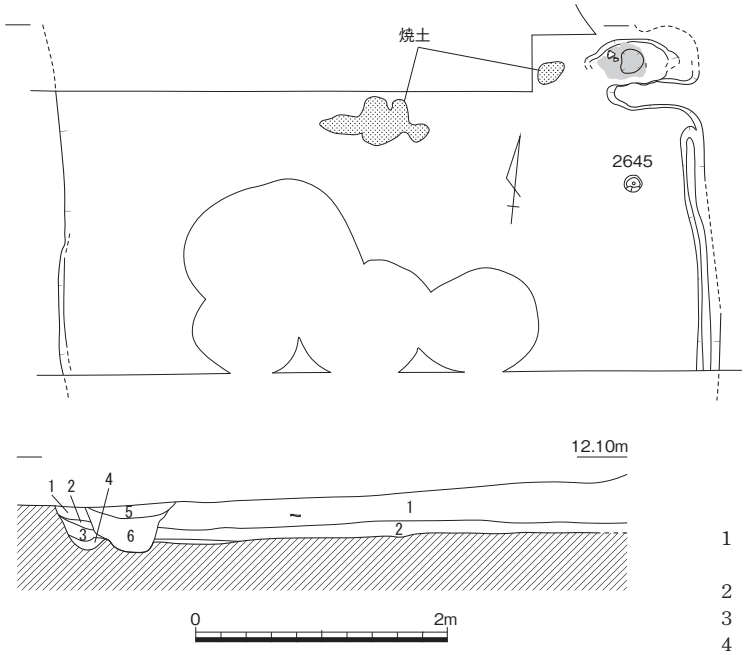
第500図　竪穴住居65出土遺物②（1/3）

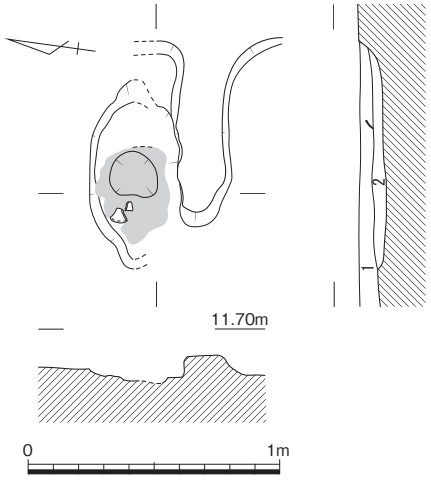


第501図　竪穴住居65出土遺物③（1/3・1/6）

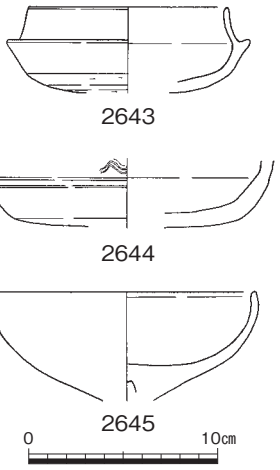
竪穴住居66（第471・502図、図版25－１）

Ｉ14中央部、竪穴住居65の南に位置する。現代用水路の関係で北側が、調査範囲のため南側が調査できなかった。床面近くまで掘り下げて検出したため、竪穴住居埋土の残存は平面掘削時10㎝であったが、調査区土層断面では深さ30㎝まで確認できる。竪穴住居内施設としてカマド、壁体溝、焼土面を確認した。柱穴は未確認であるが、南部撹乱内か調査区外に想定できる。カマドは東辺に存在し、掘り方と被熱面が残存していた。掘り方は深さ10㎝で、被熱面中央は直径35㎝、深さ３㎝の範囲でくぼむ。床面上カマド西側にも直径20㎝程度の焼土面が存在する。カマド内被熱面直上に土師器甕**2646**の口縁部破片が出土したが、これは埋土中出土の胴部と接合している。壁体溝は竪穴住居東端部で平面的に検出し、深さ４㎝、幅17㎝を測る。北壁調査区土層断面の観察で壁体溝を西端でも確認した。竪穴住居の中央部に位置する焼土面は、東西90㎝、南北40㎝の範囲で不整形、厚さは約５㎝で橙色の

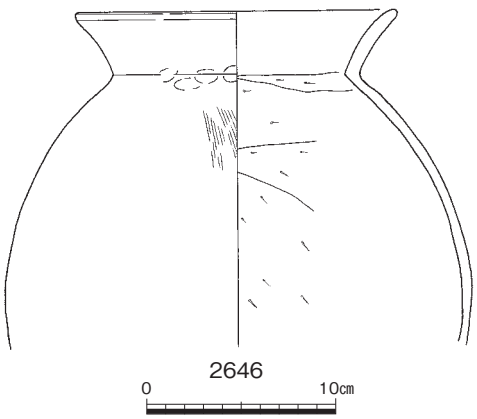




1　灰褐色(7.5YR4/2)粘性砂質土
2　暗赤褐色(5YR3/2)粘性砂質土（炭・焼土含）



1　にぶい黄橙色(10YR6/3)シルト
（粗砂混、土器含）〈竪穴住居埋土〉
2　灰黄褐色(10YR6/2)シルト（粗砂混）〈竪穴住居埋土〉
3　灰黄褐色(10YR6/2)シルト～粗砂〈竪穴住居埋土〉
4　灰黄褐色(10YR6/2)粗砂〈壁体溝〉
5　灰黄褐色(10YR5/2)シルト（粗砂混、土器・炭多含）
〈柱穴埋土〉
6　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト～粗砂（下部粗砂）
〈柱穴埋土〉



第502図　竪穴住居66（1/60）・カマド（1/30）・出土遺物（1/4）

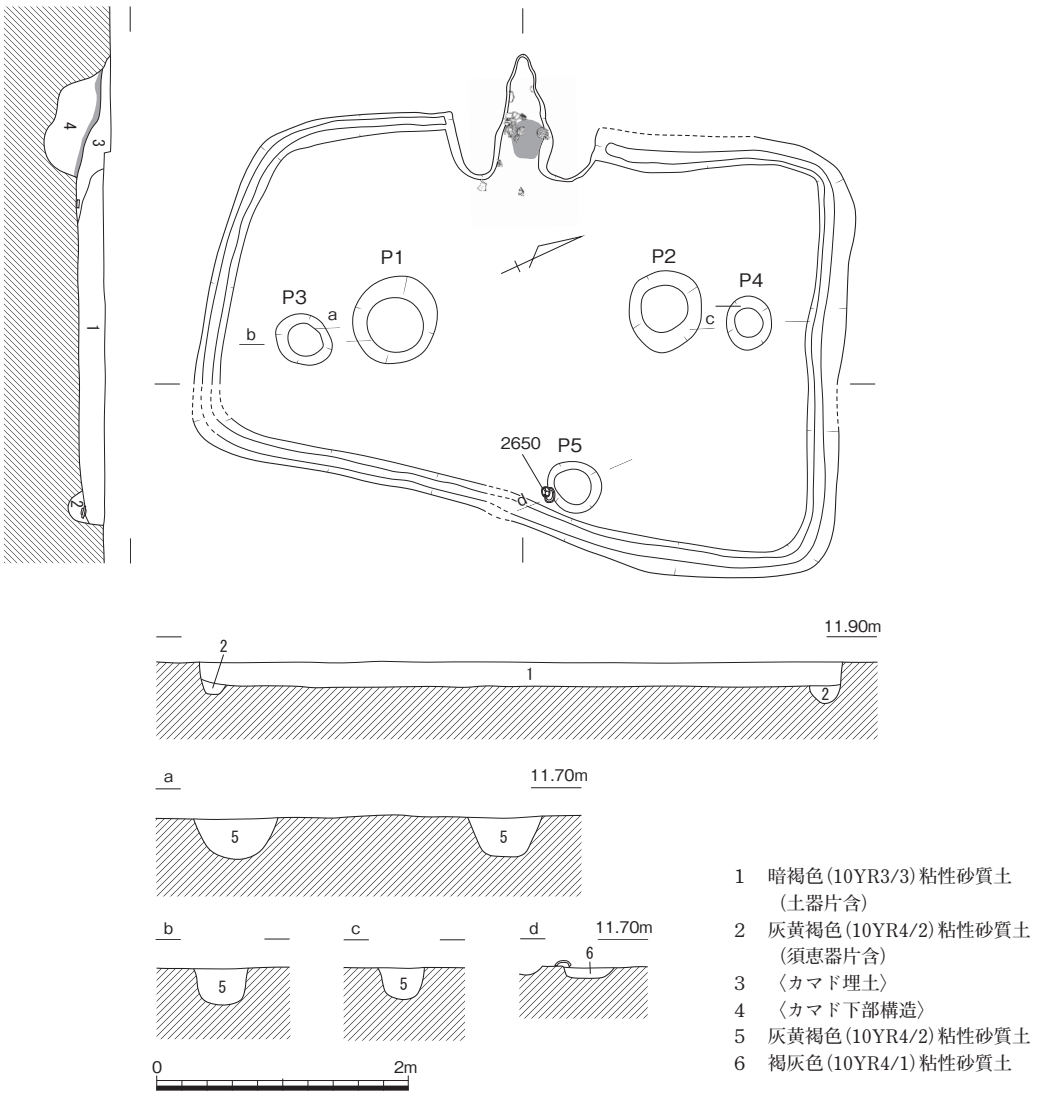
色調である。遺物は2646以外に床面から杯部完形の土師器高杯2645、埋土中から須恵器杯身2643・鉢2644などが出土した。遺物より、埋没の時期は古・後・Ⅰ、６世紀前半代が想定できる。　（氏平）

竪穴住居67（第471・503・504図、図版25－２・３・101）

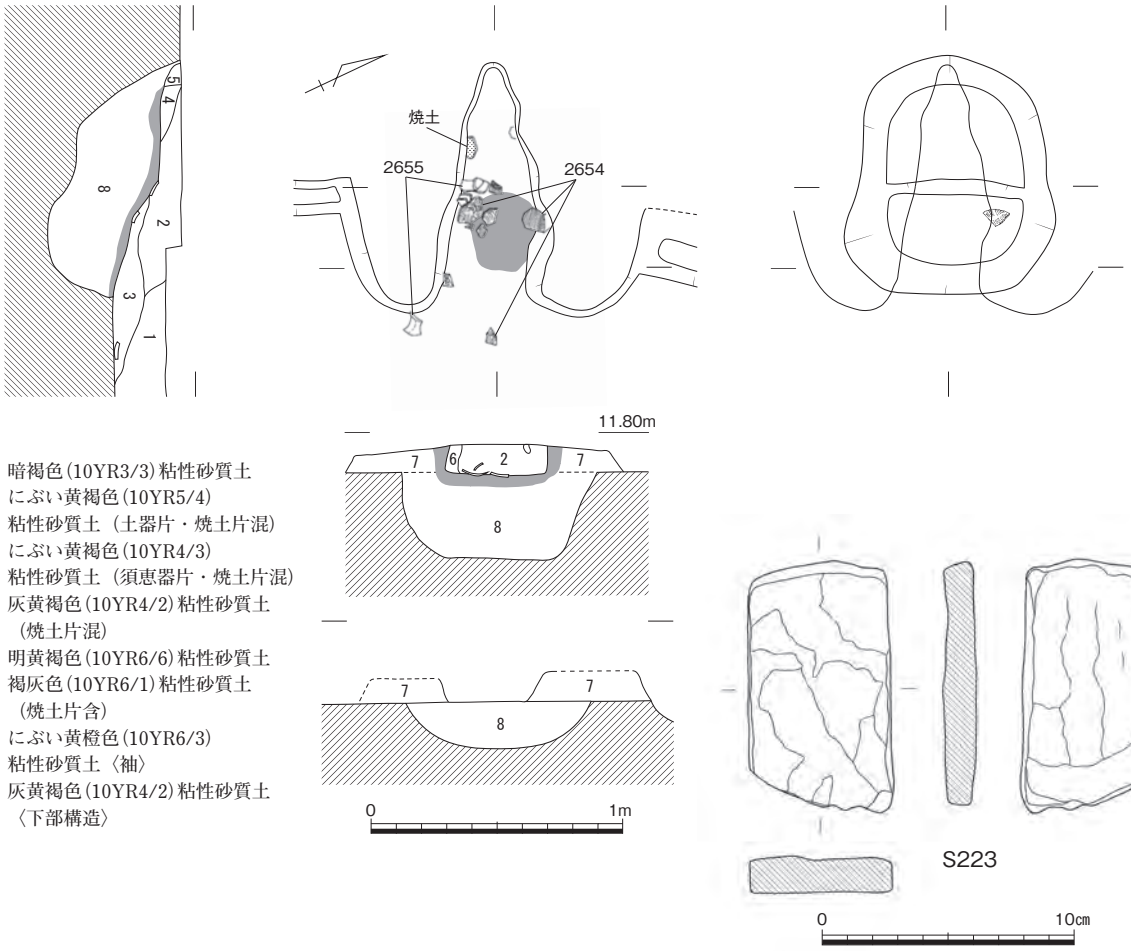
Ｈ15の北西隅に位置する。南東約2.5ｍには竪穴住居68が存在している。平面形は、歪な長方形を呈し、規模は長軸503㎝、短軸320㎝、床面積は15.42㎡を測る。検出面から床面までの深さは約20㎝であった。柱穴はＰ１～Ｐ５を確認している。Ｐ１とＰ２は主柱穴で、２本柱の竪穴住居と考えられる。

床面の周りには壁体溝が巡り、西辺中央にカマドを設けている。カマドは燃焼部と、竪穴住居外へ延びる煙道の一部が残存していた。燃焼部は強く被熱しており、焚口から燃焼部にかけて土師器甕2655や須恵器甕2654の破片が散らばって出土した。

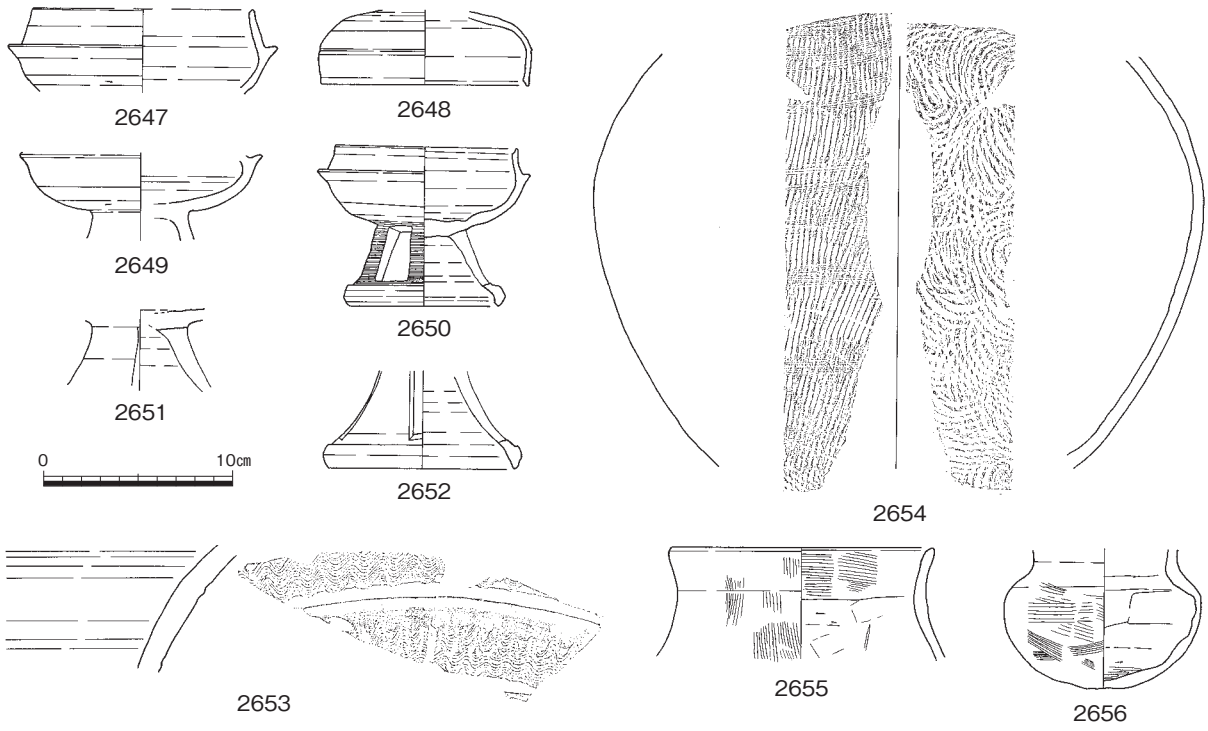
出土遺物は、須恵器の杯身2647、高杯2648～2652、甕2653・2654及び土師器の甕2655・2656がある。大半は竪穴住居埋土からの出土であるが、2650はＰ５に落ち込んだ状態で検出した。Ｐ１埋土からは2653と砥石Ｓ223が出土している。出土した須恵器からみて、時期は古・中・Ⅱと考えられる。（石田）



第503図　竪穴住居67（1/60）



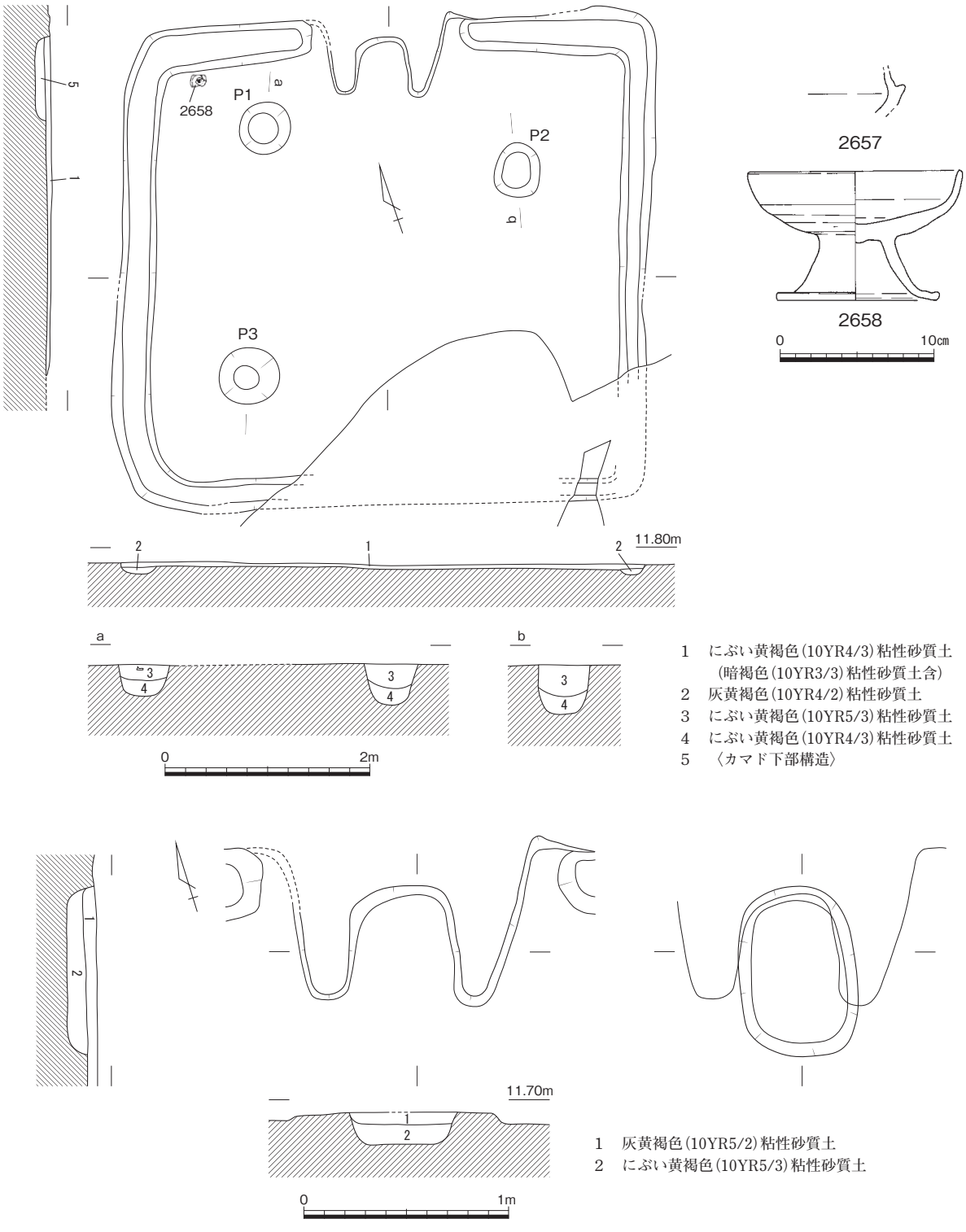
1　暗褐色(10YR3/3)粘性砂質土
2　にぶい黄褐色(10YR5/4)
　粘性砂質土（土器片・焼土片混）
3　にぶい黄褐色(10YR4/3)
　粘性砂質土（須恵器片・焼土片混）
4　灰黄褐色(10YR4/2)粘性砂質土
　（焼土片混）
5　明黄褐色(10YR6/6)粘性砂質土
6　褐灰色(10YR6/1)粘性砂質土
　（焼土片含）
7　にぶい黄橙色(10YR6/3)
　粘性砂質土〈袖〉
8　灰黄褐色(10YR4/2)粘性砂質土
　〈下部構造〉



第504図　竪穴住居67カマド（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）

竪穴住居68（第471・505図、図版26－１・２・101）

H15中央に位置する竪穴住居である。北西約２ｍには竪穴住居67が、北東約３ｍには竪穴住居69が、南東約2.5ｍには竪穴住居70が存在するなど、周辺では古墳時代の竪穴住居が密集して確認されている。竪穴住居の南東部分は後世の削平によって欠いているが、平面は方形を呈し、規模は長軸512㎝、短軸480㎝と推定され、床面積は約24㎡を測る。検出が困難であったことに加え、上部は中世以



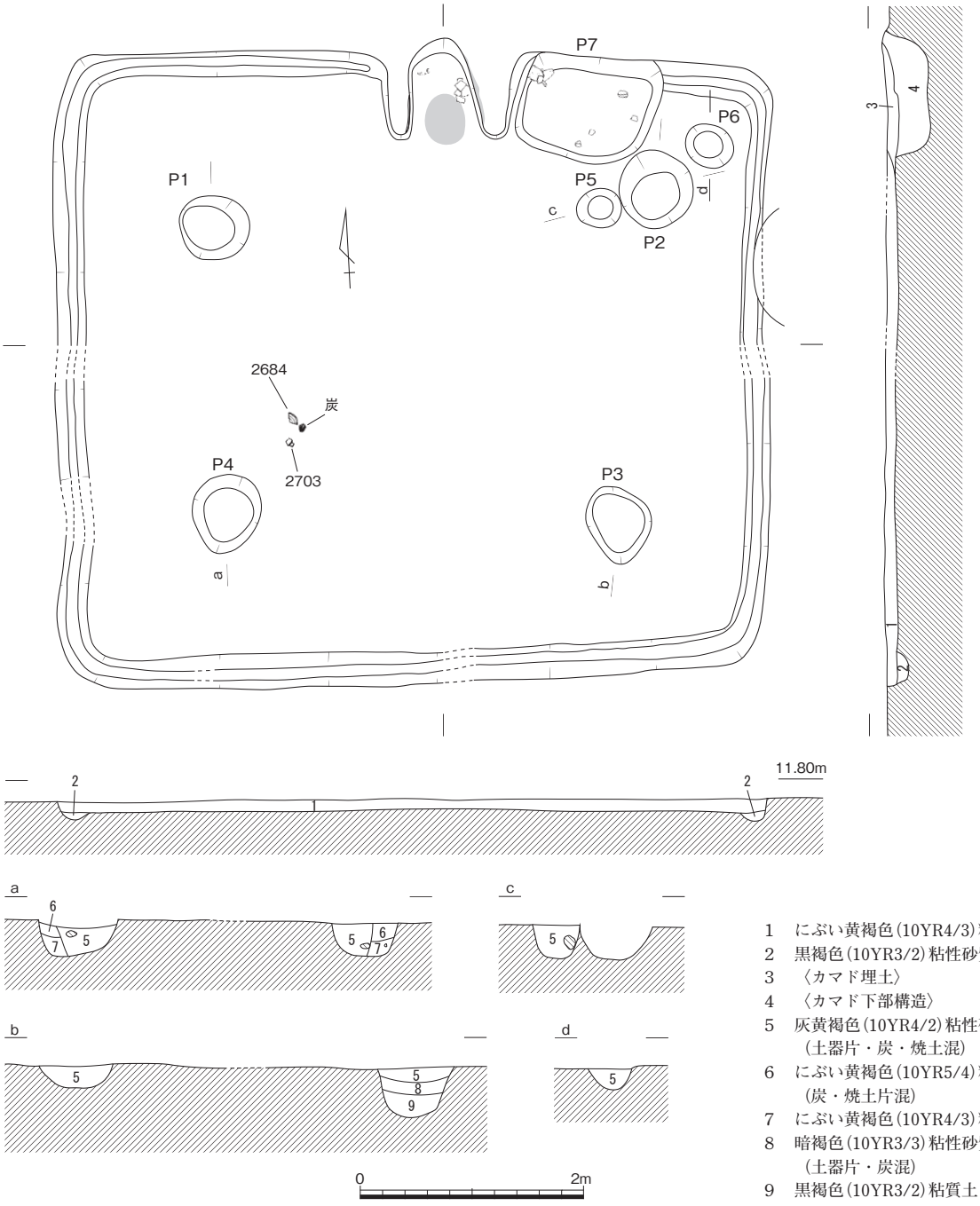
第505図　竪穴住居68（1/60）・カマド（1/30）・出土遺物（1/4）

降の削平も大きく、検出面から床面までの深さは５㎝とかなり浅かった。

柱穴はＰ１～Ｐ３の３本を確認している。いずれも主柱穴と考えられ、本来は４本で構成されていたと考えられる。床面の周りには壁体溝が巡り、北辺中央にカマドを設けている。カマドの残存状況は悪く、燃焼部の被熱面等は確認できなかった。遺物は、竪穴住居埋土から須恵器杯身**2657**の破片が、床面の北西隅では須恵器高杯**2658**が出土している。時期は、古・後・Ⅱと考えられる。　（石田）

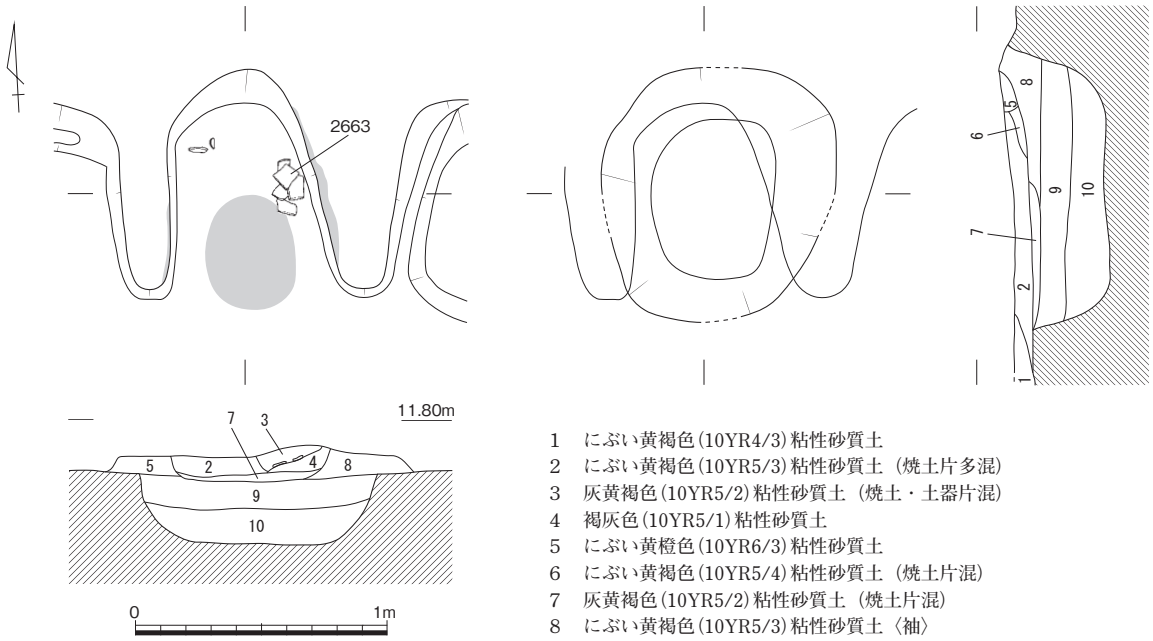
竪穴住居69（第471・506～510図、図版26－３・27－１・２・101、写真36・37）

Ｈ15・Ｈ16の北側に跨がって位置する。南西約３ｍには竪穴住居68が、南約５ｍには竪穴住居70及び竪穴住居71が存在しているが、本竪穴住居の北側から東側にかけては、遺構は確認されていない。

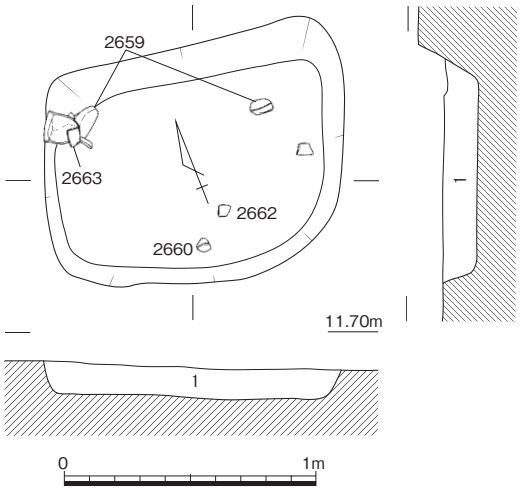


1　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性砂質土
2　黒褐色(10YR3/2)粘性砂質土
3　〈カマド埋土〉
4　〈カマド下部構造〉
5　灰黄褐色(10YR4/2)粘性砂質土
　（土器片・炭・焼土混）
6　にぶい黄褐色(10YR5/4)粘性砂質土
　（炭・焼土片混）
7　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性砂質土
8　暗褐色(10YR3/3)粘性砂質土
　（土器片・炭混）
9　黒褐色(10YR3/2)粘質土

第506図　竪穴住居69（1/60）



1　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性砂質土
2　にぶい黄褐色(10YR5/3)粘性砂質土（焼土片多混）
3　灰黄褐色(10YR5/2)粘性砂質土（焼土・土器片混）
4　褐灰色(10YR5/1)粘性砂質土
5　にぶい黄橙色(10YR6/3)粘性砂質土
6　にぶい黄褐色(10YR5/4)粘性砂質土（焼土片混）
7　灰黄褐色(10YR5/2)粘性砂質土（焼土片混）
8　にぶい黄褐色(10YR5/3)粘性砂質土〈袖〉
9　灰黄褐色(10YR4/2)粘性砂質土（焼土片混）〈下部構造〉
10　灰黄褐色(10YR5/2)砂質土（炭・土器片混）〈下部構造〉

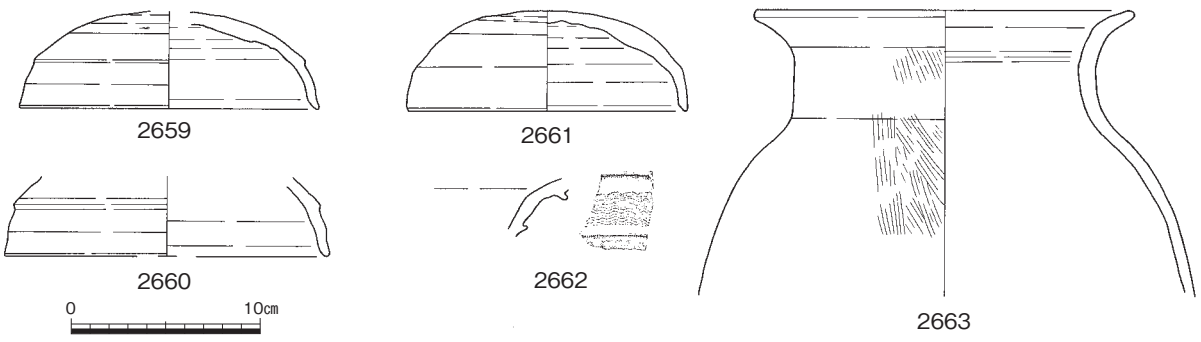


1　灰黄褐色(10YR4/2)粘性砂質土（土器片・炭片混）

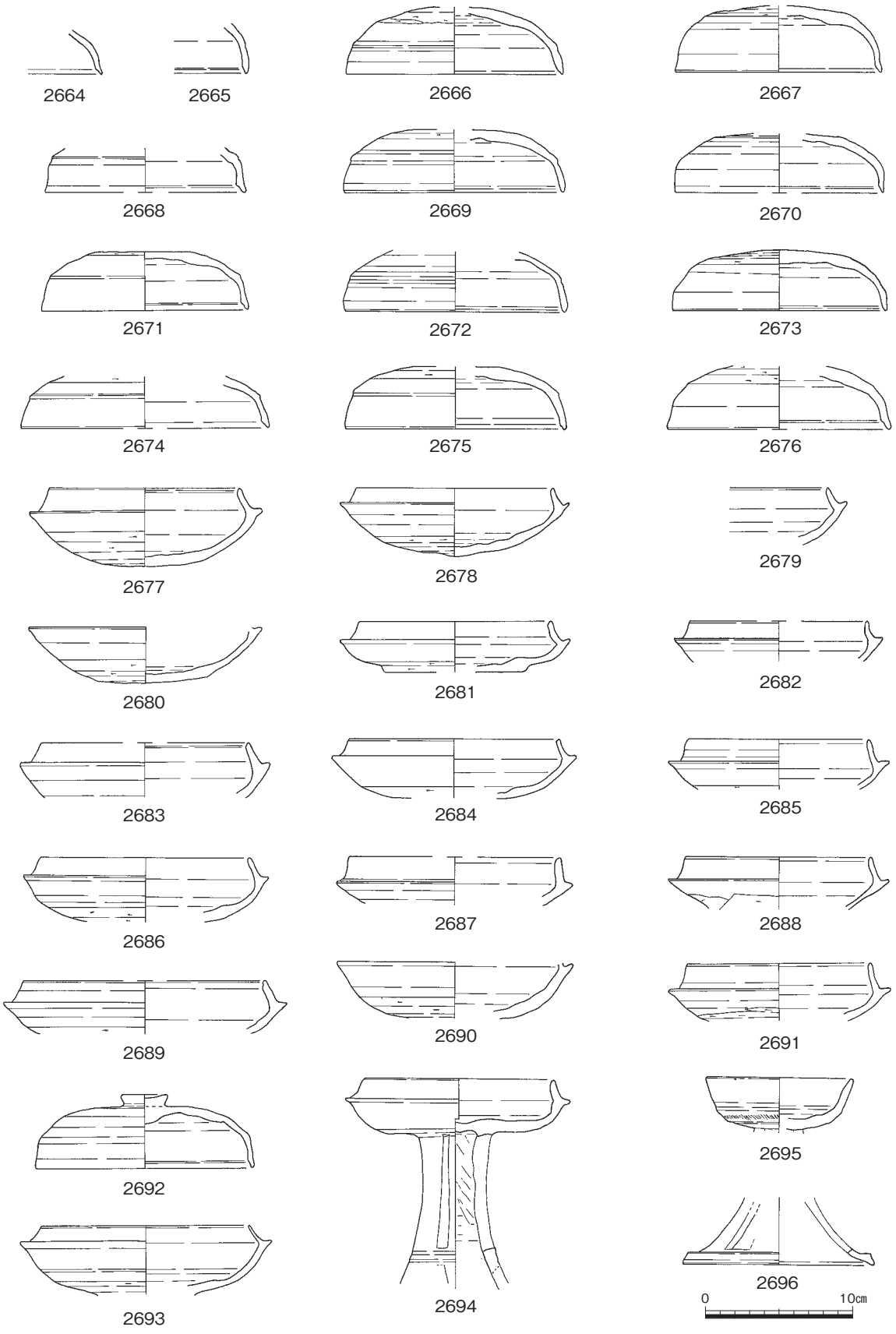
平面は方形を呈する竪穴住居で、規模は長軸638㎝、短軸576㎝、床面積は35㎡を測る。検出面から床面までの深さは約10㎝と浅く、上部については削平を大きく受けている。

柱穴はＰ１～Ｐ６の６本を確認しており、主柱はＰ１～Ｐ４の４本で構成されている。床面の周りには壁体溝が巡り、北辺中央にカマドを造り付けている。また、カマド東側に隣接して竪穴住居内に土坑が設けられていた。

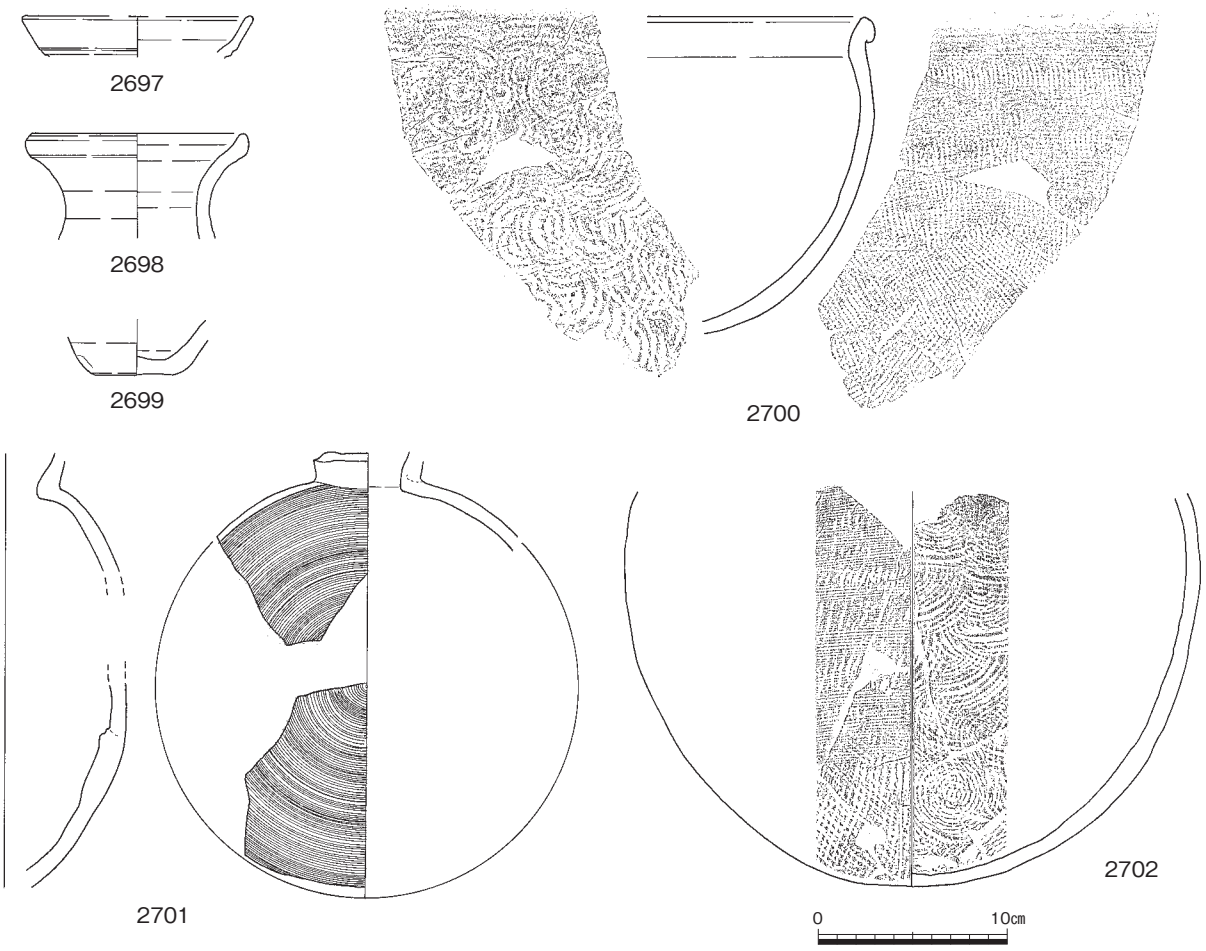
土坑は、平面が不整な方形を呈しており、断面は逆台形になっている。土坑の北辺は竪穴住居の壁に沿って掘り込まれていた。規模は長軸117㎝、短軸94㎝を測り、竪穴住居床面から底面までの深さは13㎝である。土坑の埋土上層から、須恵器杯蓋2659～



第507図　竪穴住居69カマド（1/30）・Ｐ７（1/30）・出土遺物①（1/4）



第508図　竪穴住居69出土遺物②（1/4）

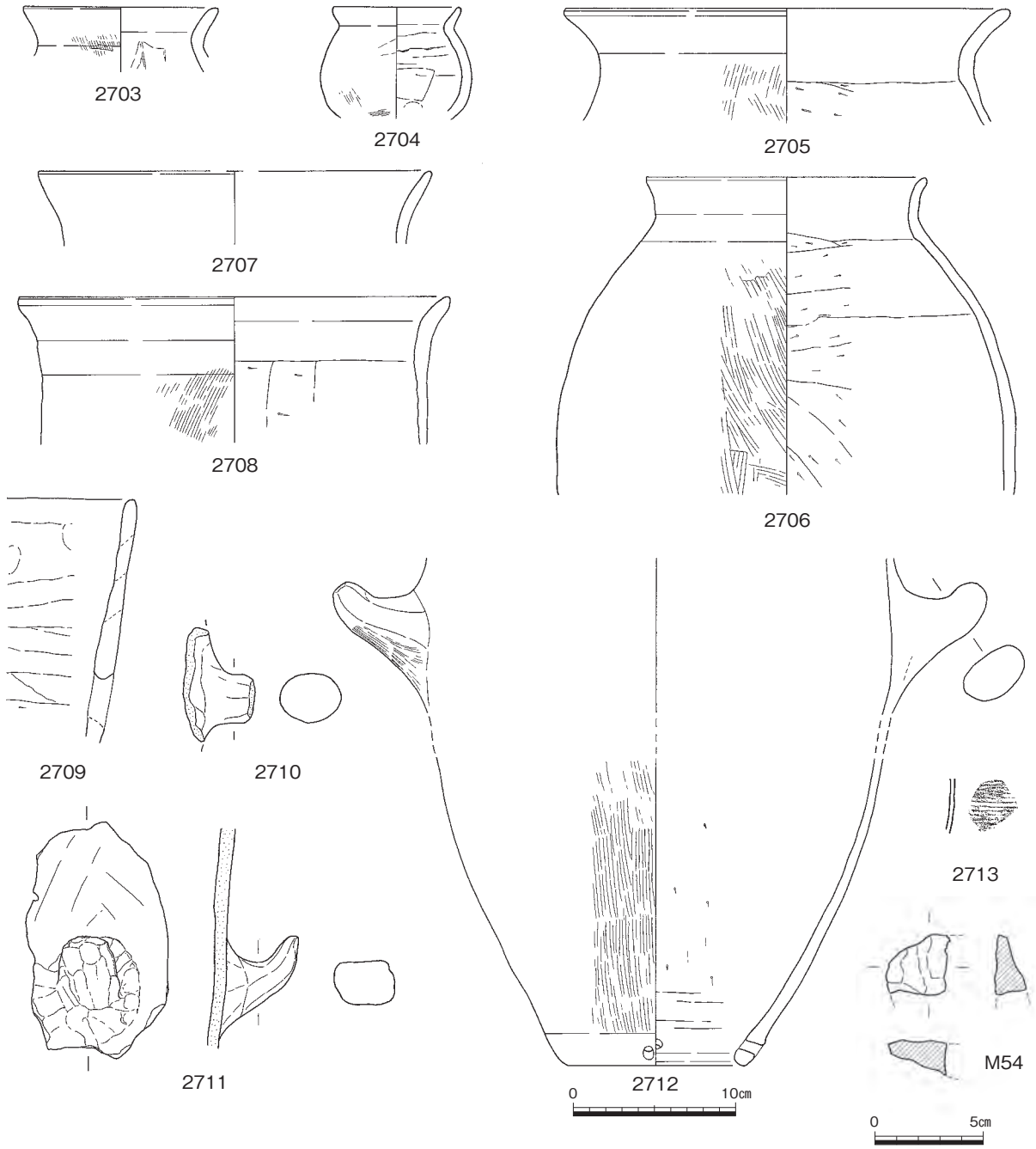


第509図　竪穴住居69出土遺物③（1/4）

2661、須恵器甕2662、土師器甕2663が出土している。2663はカマド内出土の破片と接合した。

カマドの残存状態はあまり良くなく、両袖を検出したが、高さは約10㎝程であった。燃焼部では、46×36㎝の範囲が被熱しており、周辺で土師器甕2663が出土した。カマド構築前の下部構造として、100×90㎝の規模の土坑が掘削されており、埋土中に炭片や焼土片が認められた。

竪穴住居内土坑以外からの出土遺物は、須恵器は杯蓋2664～2676、杯身2677～2691、高杯2692～2696、瑞2697、提瓶2698・2701、甕2700・2702がある。2700は鉢状を呈し見慣れない器形である。2699小型の壺の底部と考えられるが、新しい時期の混入の可能性がある。土師器は甕2703～2706、甑2707～2712があり、ほかには製塩土器2713や椀形鍛冶滓M54も出土している。多くの遺物は竪穴住居埋土からの出土であるが、須恵器杯身2684と土師器甕2703は炭片と共に、Ｐ４北東の床面上で検出した。出土した須恵器からみて、時期は古・後・Ⅰ～Ⅱと考えられる。なお、椀形鍛冶滓M54については、分析を実施しており、鉄鉱石を始発原料とした精錬鍛冶滓との結果を得ている。また、同じく竪穴住居から出土した鉄塊系遺物１点についても分析を行ったが、金属鉄は残存しておらず、鍛打加工前の小鉄塊と推定された。竪穴住居からはほかにも鉄滓と羽口片が出土しており、鉄滓は全部で９点で、総重量は240ｇになる。羽口は細片ばかりで図示できなかったが、総重量は491ｇになる。南西約20ｍに位置する竪穴住居65では、竪穴住居内に多くの鉄滓や羽口など鍛冶関連遺物が投棄されており、付近で操業していた可能性が高い。本竪穴住居も同時期に営まれており、関連が窺われる。　（石田）



第510図　竪穴住居69出土遺物④（1/4・1/3）

写真36　竪穴住居69（南東から）

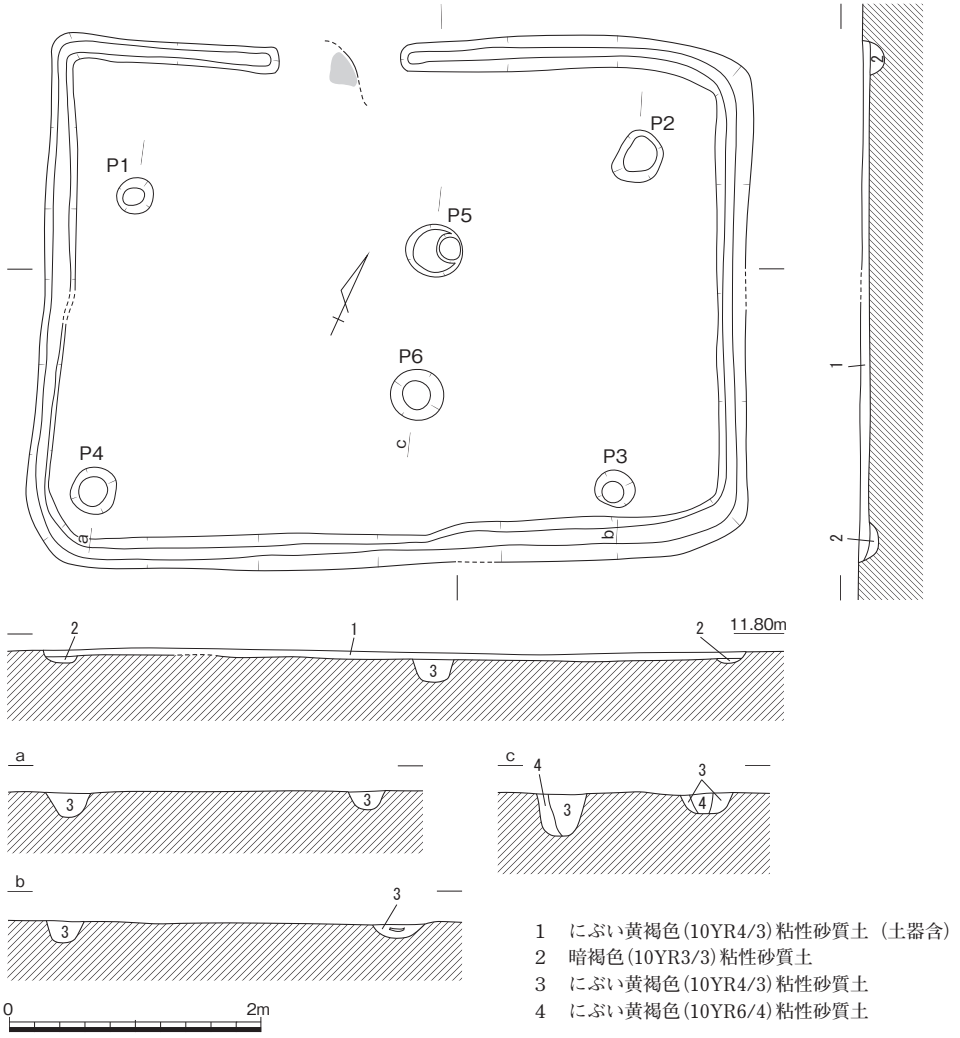
写真37　竪穴住居69調査風景（南から）

竪穴住居70（第471・511・512図、図版27－３・101）

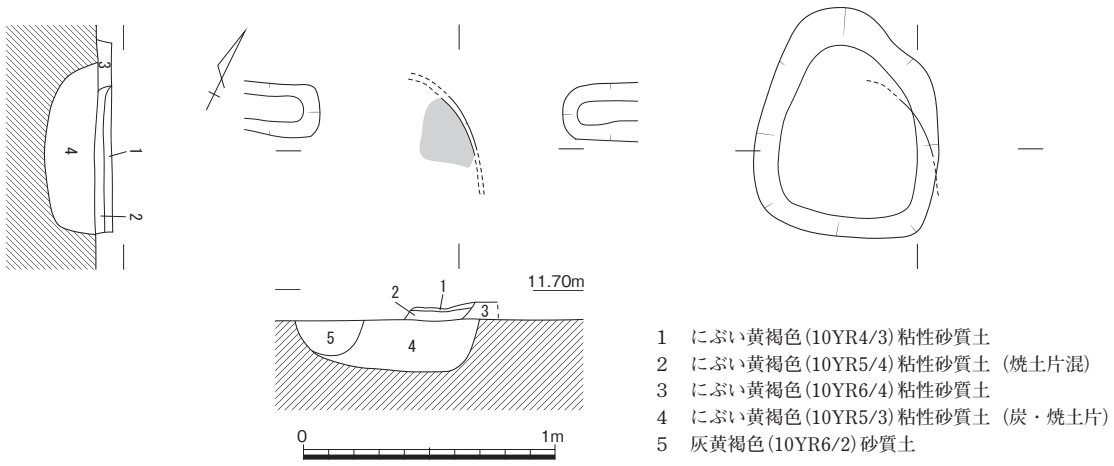
Ｈ15南東で、竪穴住居69の南に位置する。555×413㎝の長方形を呈する竪穴住居で、検出面からの深さは約６㎝、床面積は22.92㎡を計る。

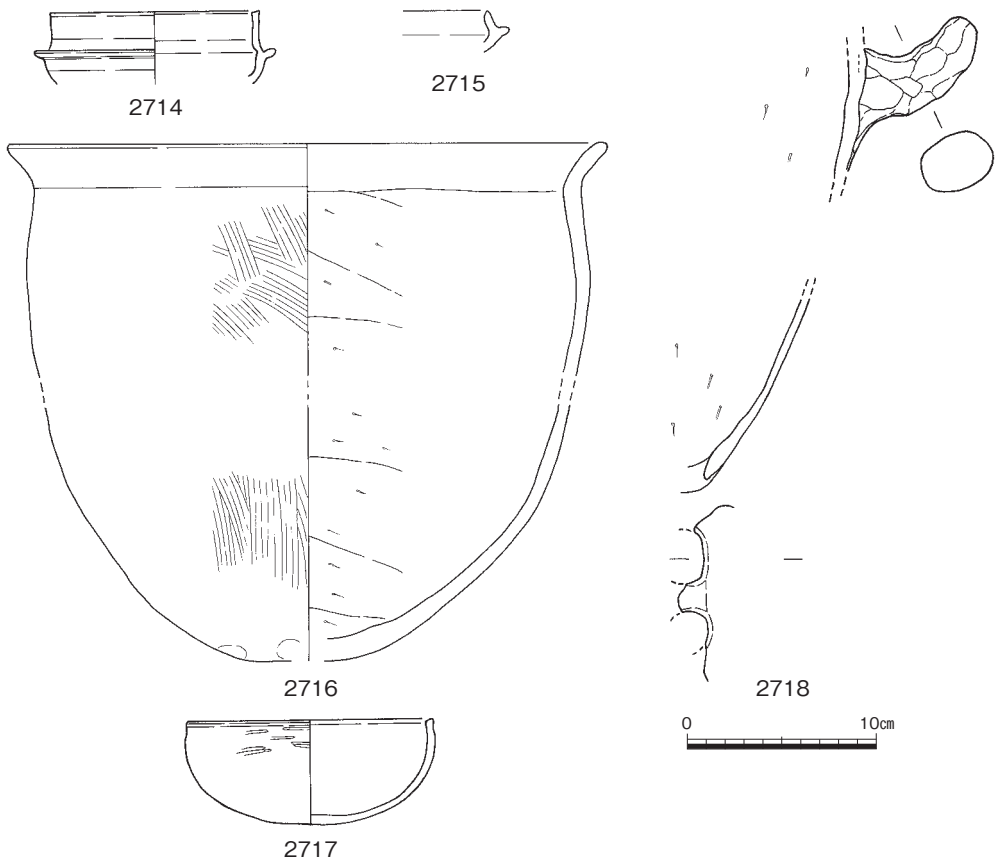
床面では竪穴住居に伴う壁体溝、柱穴、カマドを検出している。壁体溝は幅20～30㎝、深さ約10㎝で、埋土は暗褐色を呈していた。柱穴は６本検出している。Ｐ１は北西端の柱穴で、径約24㎝、深さ約12㎝を測る。Ｐ２は北東端の柱穴で、不整円形を呈し、径約36㎝、深さ約10㎝を計る。Ｐ３は南東隅の柱穴で、径約28㎝、深さは約14㎝を計る。Ｐ４は南西隅の柱穴で、径約30㎝、深さ約16㎝を測る。これらの柱穴の埋土はすべてにぶい黄褐色を呈し、柱痕などの痕跡は見られなかった。一方、竪穴住居中央付近にあるＰ５は、径約40㎝、深さ約12㎝で、底や断面で径16～18㎝の柱痕を確認できる。Ｐ６は径約38㎝、深さ約28㎝で、埋土の堆積状況から柱穴と判断できる。カマドは竪穴住居北辺の中央やや西よりの場所に設けられているが、上面は被熱痕を僅かに確認できただけであった。下部構造として、平面規模90×72㎝、深さ約20㎝の不整円形を呈する掘り方を検出している。

出土遺物について、**2714**は口径11.0㎝を測る須恵器の杯身である。**2715**も須恵器の杯身で、破片のため口径は不明。**2716**は口径31.0㎝、器高27.3㎝を測る土師器の甕で、外面はハケ、内面は頸部まで



第511図　竪穴住居70（1/60）





第512図　竪穴住居70カマド（1/30）・出土遺物（1/4）

ヘラケズリによる調整が見られる。**2717**は口径13.0㎝、器高5.5㎝を測る鉢で、不明瞭ではあるが外面にはヘラミガキ、内面にはナデによる調整が確認できる。**2718**は甑である。器底部と把手部が出土しており、内面はヘラケズリによって調整され、底部には２つの孔が確認できる。本竪穴住居の時期は、出土遺物から古・中・Ⅱと考えられる。（藤井）

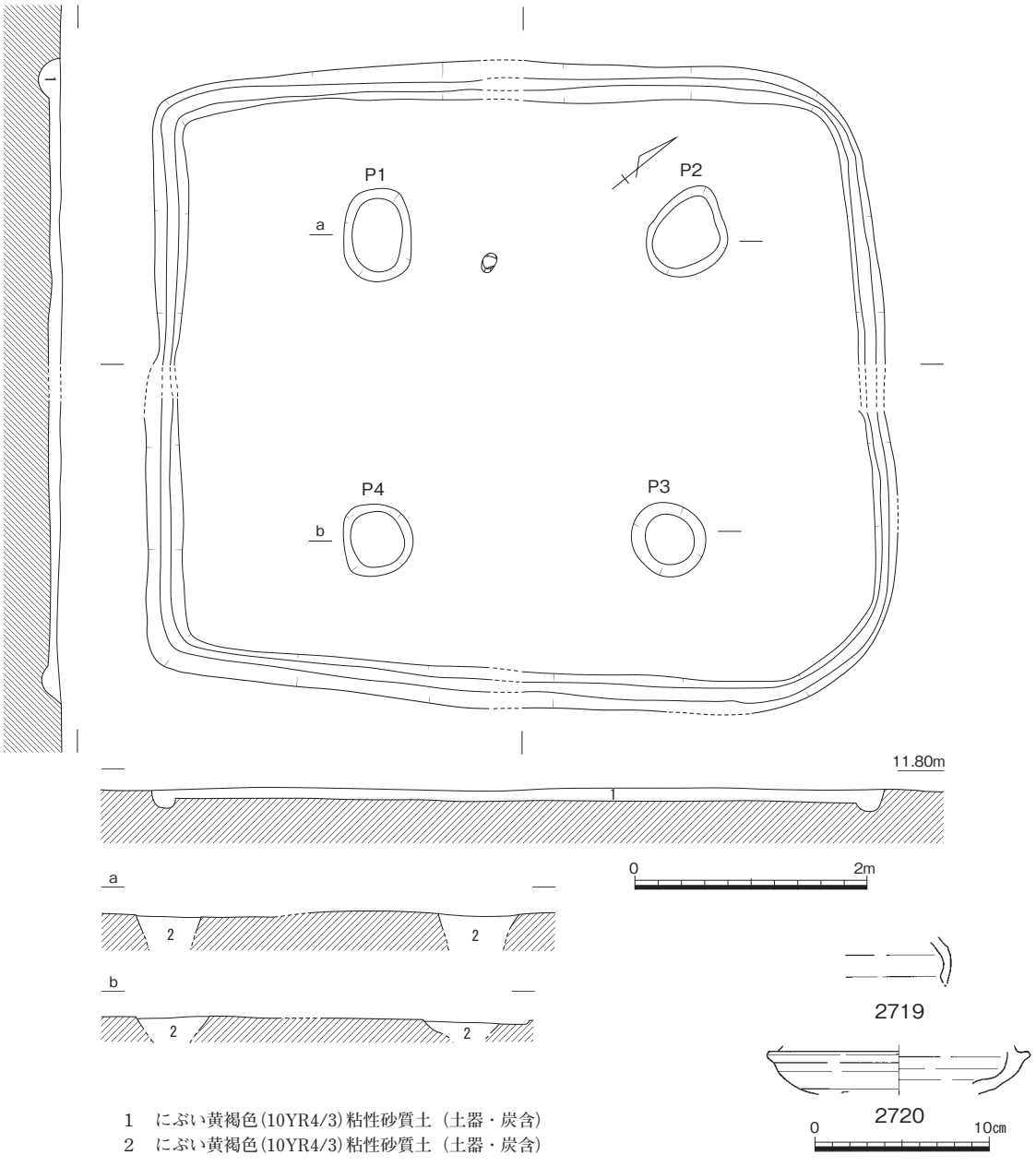
竪穴住居71（第471・513図、図版28－１）

竪穴住居70の東、H16・H17・Ⅰ17に跨がって位置する。646×555㎝の方形を呈する竪穴住居で、検出面からの深さは約８㎝、床面積は33.70㎡を測る。床面では壁体溝と柱穴を検出しているが、カマ

ド等の火処と考えられる遺構は見つからなかった。

竪穴住居に伴う壁体溝は幅が25～30㎝、深さが16～20㎝で、埋土はにぶい黄褐色を呈している。西側の柱穴Ｐ１は楕円形を呈し、大きさは68×48㎝、深さは22㎝を測る。Ｐ２は北側の柱穴で、不整円形を呈し、大きさは70×55㎝、深さは20㎝を測る。Ｐ３は西側の柱穴で、不整円形を呈し、大きさは50×50㎝、深さは18㎝を測る。Ｐ４は南側の柱穴で、直径57㎝の円形を呈し、深さは12㎝である。柱穴の断面はいずれも逆台形を呈しており、埋土は炭混じりのにぶい黄褐色土で、柱痕等は見られなかった。

出土遺物には、須恵器の杯蓋2719と杯身2720があるが、いずれも破片である。本竪穴住居の時期は、古・後・Ⅰと考えられる。（藤井）



第513図　竪穴住居71（1/60）・出土遺物（1/4）

竪穴住居72（第471・514・515図、図版28－２）

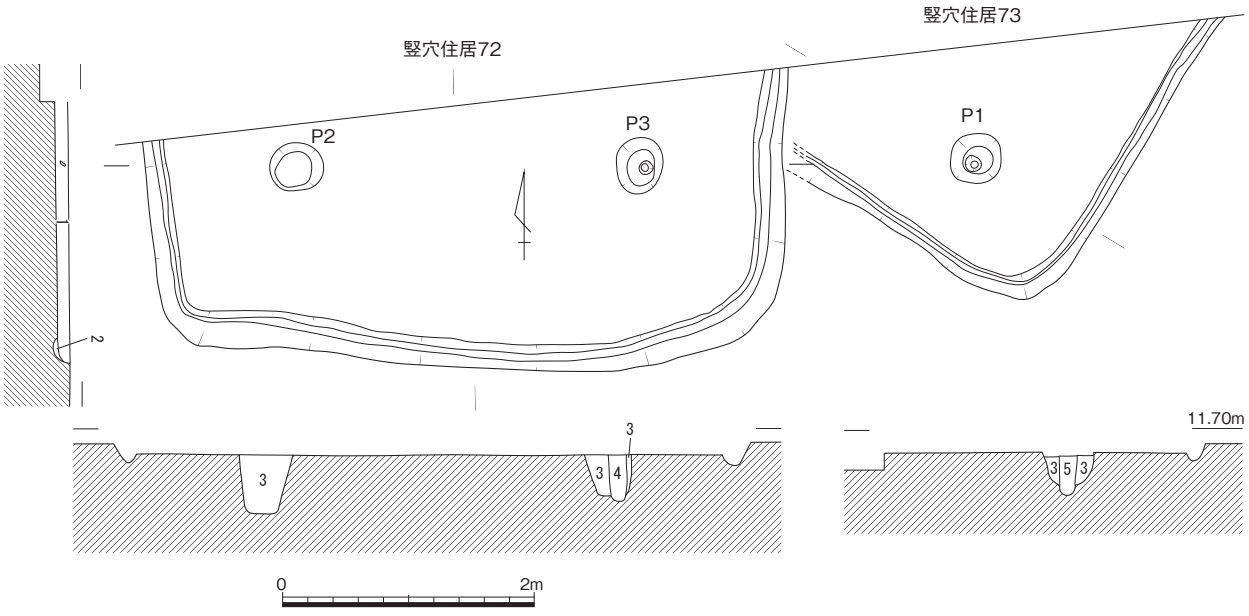
Ｇ17東に位置する。北側の大部分が調査区外に延びているものの、平面形は方形を呈するものと思われる。長軸は511㎝を測る。掘り方の内面に沿って幅20㎝程度、深さ３～６㎝の壁体溝が巡っている。検出面から床面までの深さは約10㎝程しかなく、中世以降の地下げによる削平を全体的に受けている可能性が高い。埋土は褐灰色細砂。竪穴住居内では主柱穴と考えられるＰ２・３を確認した。本来は４本柱であったと思われ、調査区外に対になる柱穴が２本存在しているのであろう。Ｐ２・３共に掘り方の平面形は直径約40㎝の円形、断面形は逆台形で深さは30～46㎝を測る。Ｐ３のみ直径13㎝程度の柱痕を確認した。

出土遺物は比較的多く、土器**2721**～**2724**、不明鉄製品**M55**、羽口**C108**を掲載している。**2723**は床面直上から、**2722**はＰ２から、**2724**・**C108**はＰ３からそれぞれ出土した。**2721**は須恵器杯蓋で推定口縁部直径16.7㎝、須恵器杯身**2722**は口縁部直径12.7㎝・器高4.3㎝、同じく須恵器杯身**2723**は口縁部直径14.0㎝・器高3.8㎝。**2724**は土師器甕。須恵器杯の特徴から、古・後・Ⅰ～Ⅱの時期に該当すると思われる。（松尾）

竪穴住居73（第471・514・516図、図版28－２）

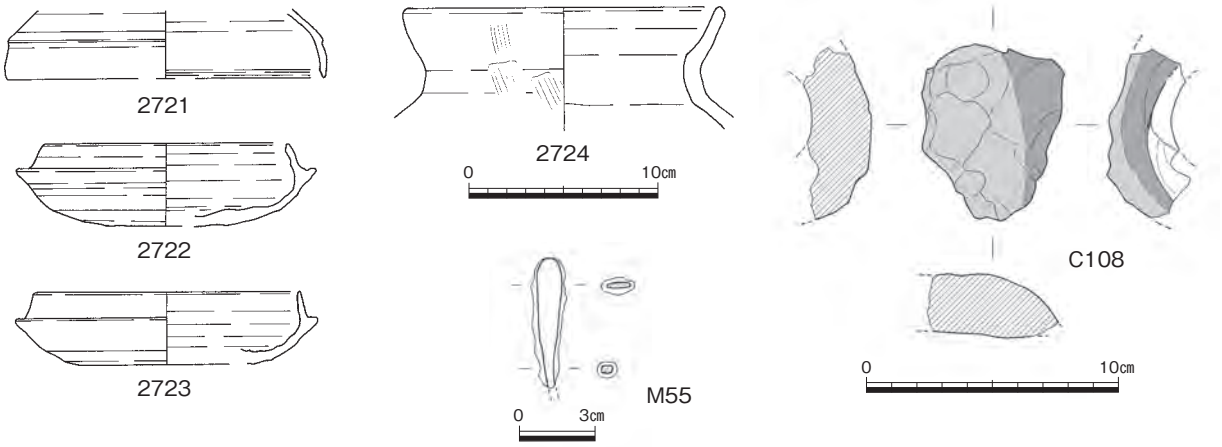
竪穴住居72の東に隣接し、大部分は調査区外に延びている。竪穴住居72の中心軸がほぼ北を指向しているのに対し、本竪穴住居の中心軸は東へ約40°傾いている。調査区外ではあるが、位置関係から本住居西隅が竪穴住居72北東隅と重複していると思われる。平面形は、竪穴住居72と同様に方形を呈し、規模もほぼ同程度であろう。掘り方の内面に沿って幅20㎝程度、深さ３～６㎝の壁体溝が巡っていた。竪穴住居内には主柱穴と考えられるＰ１を確認している。４本柱のうちの１本であろう。Ｐ１掘り方の平面形は直径約40㎝の円形、断面形は逆台形で深さは30㎝を測る。

出土遺物は土器**2725**・**2726**、鉄鏃**M56**がある。須恵器杯蓋**2725**は口縁部直径12.0㎝を測る。**2726**



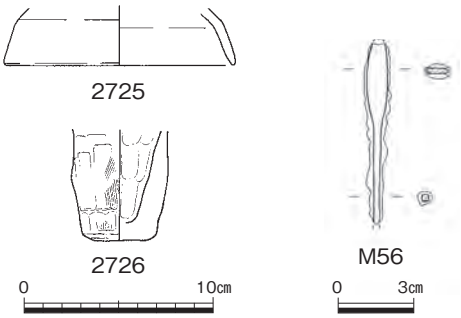
1　褐灰色(7.5YR4/1)細砂
2　褐灰色(7.5YR4/1)細砂（黄褐色(10YR5/6)細砂混）
3　褐灰色(7.5YR4/1)細砂混シルト
4　褐灰色(7.5YR4/3)細砂混シルト
5　黒褐色(7.5YR3/1)シルト（炭含）

第514図　竪穴住居72・73（1/60）



第515図　竪穴住居72出土遺物（1/4・1/3）

は土師器のミニチュア土器。須恵器杯蓋2725の特徴から、古・後・Ⅱの時期であると思われ、竪穴住居72よりも新しい時期に比定される。このような竪穴住居72と本竪穴住居の切り合い関係については、床面標高等の差からも指摘できる。すなわち、竪穴住居72の床面標高が11.48～11.50ｍに対し、本竪穴住居は11.50～11.53ｍと若干高く、かつ壁体溝底面標高が11.47ｍで竪穴住居72の床面標高とほぼ変わらない。そのため本竪穴住居の南西辺西半部の壁体溝は残存していない可能性が高い。これらのことから、竪穴住居72埋没後に、本竪穴住居が建てられたと考えたい。(松尾)



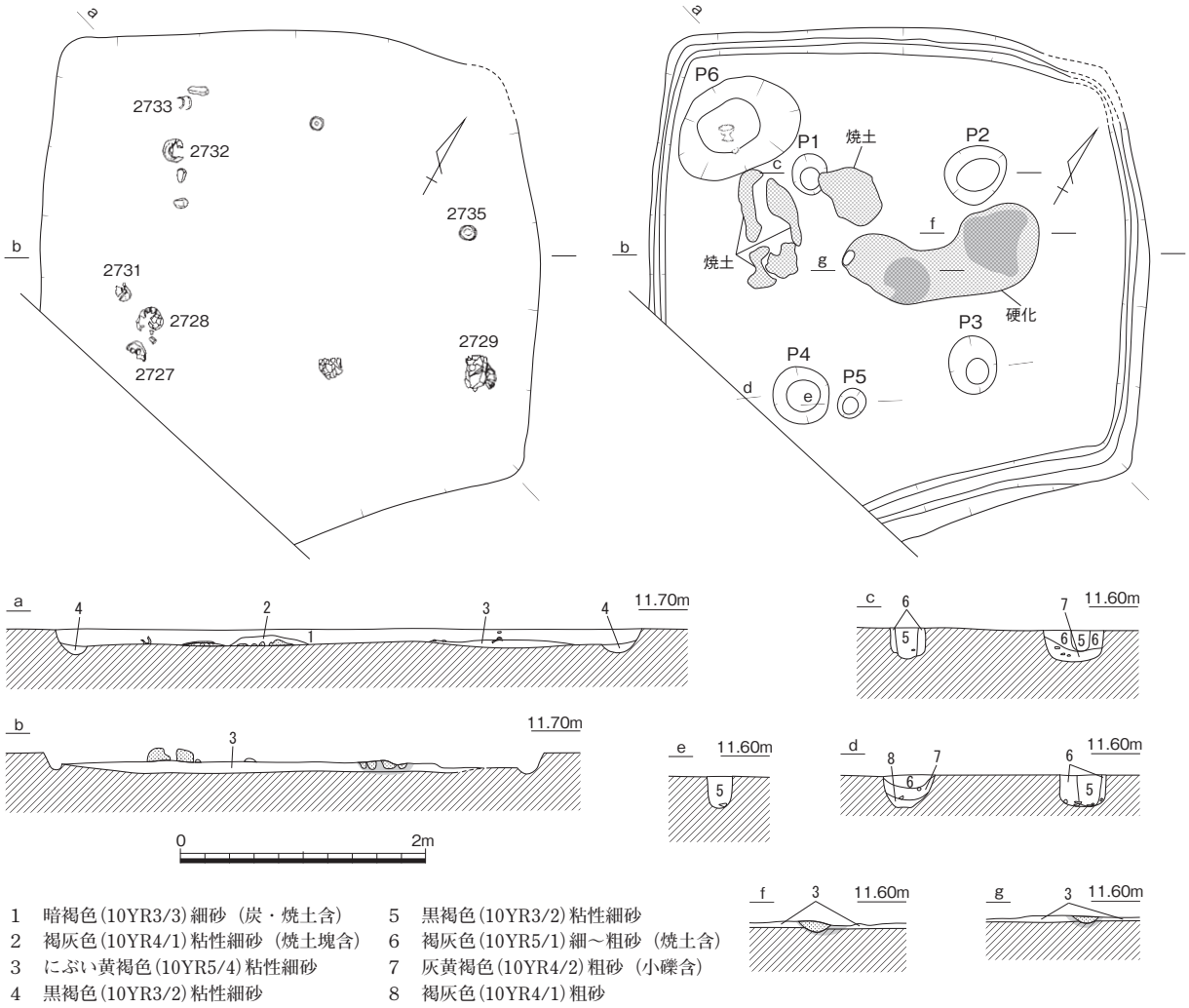
第516図　竪穴住居73出土遺物（1/4・1/3）

竪穴住居74（第471・517・518図、図版28－３・102）

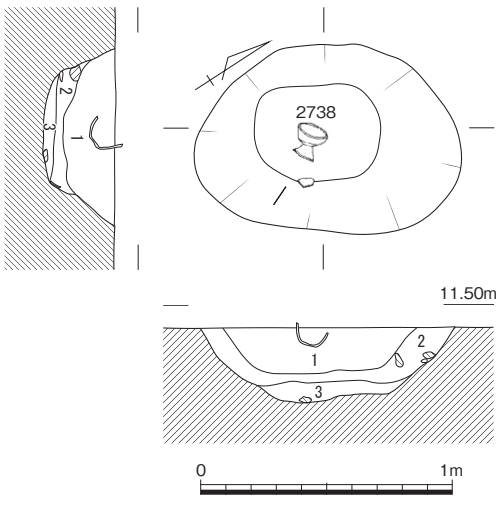
竪穴住居73の南約30ｍに位置する。神明遺跡の調査範囲内にある古墳時代の遺構では、最も東端にあたる。古墳時代以前、竪穴住居74より東側は地形が低く、竪穴住居などの遺構は形成されていない。本竪穴住居南側の一角が調査区外に延びているが、平面形は長軸413㎝、短軸406㎝で、南辺がやや外に広がる不整方形を呈する。壁際には幅20㎝前後、深さ５～10㎝前後の壁体溝が巡っている。第１層は竪穴住居の埋土である。暗褐色細砂で炭や焼土を多く含んでいた。第２層は竪穴住居中央に残る焼土を含む層である。褐灰色粘性細砂で、下面は熱影響により硬化していた。第３層はにぶい黄褐色の粘性細砂で、貼り床と考えられる。他と比べてやや低くなっている竪穴住居北西部や凸凹のある所へ土を盛って、床面を平らにしている。検出面から床面までの深さは約10㎝である。

主柱穴は４本検出した。平面形は直径約30～50㎝の円形や楕円形で、深さは床面から約20㎝を測る。断面観察により、Ｐ１～Ｐ３には柱痕が残っており、直径約15～20㎝の柱が据え付けられていたことが分かる。また、Ｐ４の東に隣接して検出したＰ５は、直径約20㎝で他の柱穴と比べて規模が小さく、Ｐ４に付随する束柱と考えられる。

床面中央では、長軸約30～50㎝の不整円形を呈した被熱面を２基検出した。どちらも椀状に約５㎝落ち込んでおり、埋土には焼土が含まれる。周囲は東西150㎝にわたって硬化面が広がり、高温の伴う作業が継続的に行われたことを示唆する。また、西側のＰ１付近では焼土塊が集中して見つかった。調査では鍛冶炉の可能性を踏まえ、埋土の水洗作業も行ったが、鉄器製作に関わる遺物は皆無で



1　暗褐色(10YR3/3)細砂（炭・焼土含）
2　褐灰色(10YR4/1)粘性細砂（焼土塊含）
3　にぶい黄褐色(10YR5/4)粘性細砂
4　黒褐色(10YR3/2)粘性細砂
5　黒褐色(10YR3/2)粘性細砂
6　褐灰色(10YR5/1)細～粗砂（焼土含）
7　灰黄褐色(10YR4/2)粗砂（小礫含）
8　褐灰色(10YR4/1)粗砂



1　褐灰色(10YR5/1)細～粗砂（炭・焼土含）
2　灰黄褐色(10YR4/2)粗砂（礫含）
3　褐灰色(10YR4/1)砂混粗砂（礫含）

第517図　竪穴住居74（1/60）・Ｐ６（1/30）

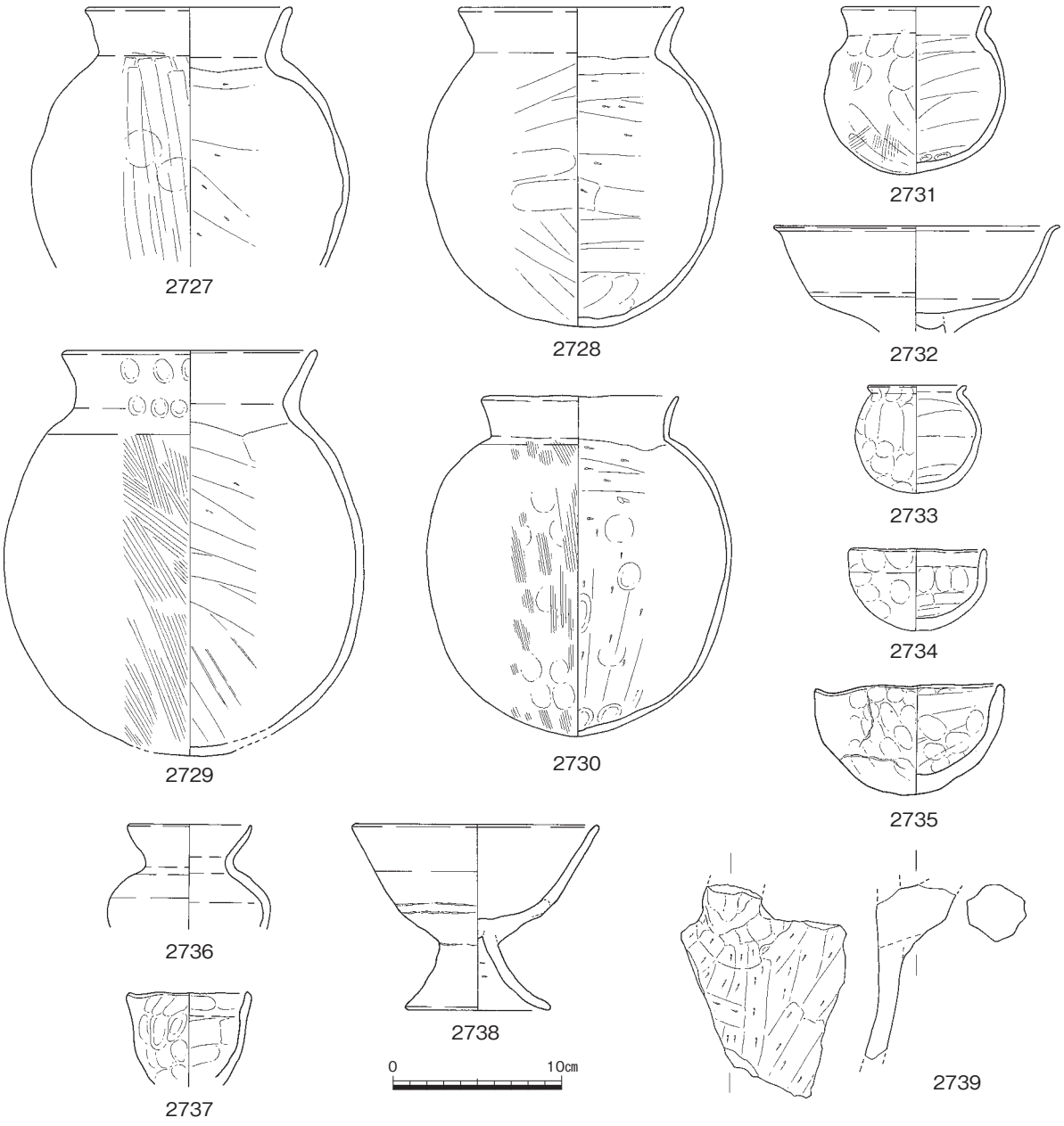
あった。被熱面は炉跡と考えられる。

西側の隅では、屋内土坑を検出した。規模は長軸約100㎝、短軸約70㎝、深さ約30㎝を測り、平面形は楕円形を呈する。埋土は第１層の褐灰色細～粗砂と第２層の灰黄褐色粗砂、第３層の褐灰色粗砂の３層に分かれ、レンズ状に堆積する。東壁の断面では第１層の両肩の上がりが確認されることから、継続的な使用に伴い土坑規模を縮小させていった様子が窺える。第２・３層は５㎝大の礫が入っており、第１層は炭・焼土を含んでいた。

遺物は、甕2727～2731、高杯2732・2738、鉢2733～2735・2737、壺2736、甑2739などが出土している。うち、壺2736、鉢2737、高杯2738は屋内土坑から出土した。甕は器高10㎝以上の2727～

2730と10㎝以下の2731に分かれる。口縁部は外反し、短く立ち上がる。端部の形状は丸く収めているもののほか、内側に面を持つものが認められる。2727～2730の器形は、最大径が胴部中位にあり、肩を張らない卵形である。2731は丸みを帯びる。内面はヘラケズリ、外面はタテハケと指オサエが認められる。高杯は杯部が屈曲して立ち上がる形で、高杯2732は口縁端部が外反している。高杯2738は杯部の屈曲部に２条の沈線が入り、口縁端部は丸く収めている。脚部は短く、絞り込みも弱い。緩やかに外に広がり、脚端部は丸く収めている。鉢2733～2735は口径10㎝以下と小形で、口縁部は真っすぐ立ち上がるものと、外反するものが認められる。内外面とも指オサエが目立つ。壺2736は胴部下半が欠損しているが、小型丸底壺と思われる。頸部が「く」字状に屈曲し、口縁部が外傾して立ち上がる。端部は尖り気味で少し内傾する。

これら出土土器の特徴などから、古・前・Ⅲ～古・中・Ⅰの時期であると推察される。　（森本）



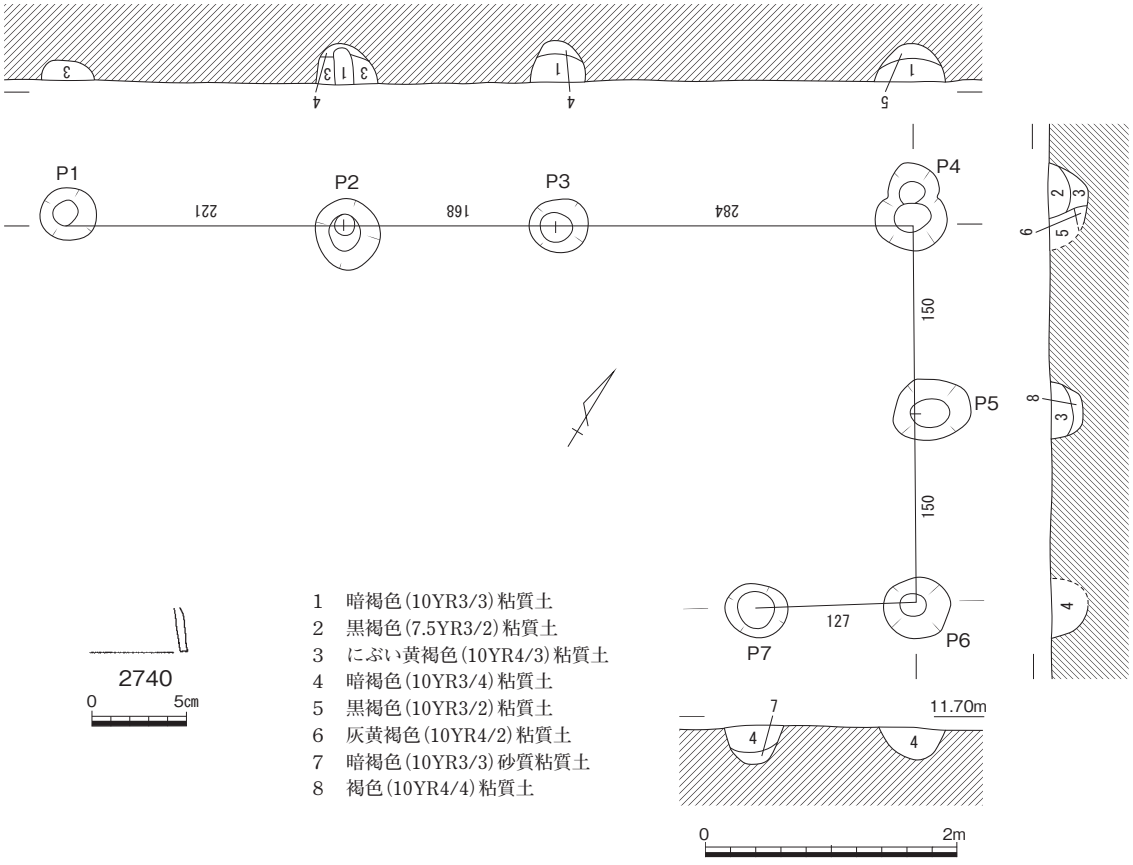
第518図　竪穴住居74出土遺物（1/4）

３　掘立柱建物

掘立柱建物３（第471・519図、図版29－３）

Ｈ13、14に跨がって位置する。南側と西側の柱穴は検出できなかったが、３間以上×２間の側柱建物と推測される。大きさは桁行673㎝以上、梁行が300㎝を測る。柱間距離は梁行が150㎝であるが、桁行は284～127㎝と一定ではない。棟方向はＮ-60°-Ｅである。柱穴は７本検出した。平面形は円形若しくは楕円形で、断面の形状は椀形である。大きさは直径40～50㎝、深さはおおむね20～30㎝を測るが、Ｐ１は深さが13㎝程度と、ほかの柱穴と比べて浅くなっている。Ｐ２では柱痕を確認しており、使用されていた柱材の直径は12㎝程度であったと考えられる。遺物は、Ｐ５の埋土から須恵器の杯蓋の破片が出土している。

遺構の時期は、出土遺物や検出レベル、埋土の状況等から、古墳時代後期と考えられる。　（藤井）



第519図　掘立柱建物３（1/60）・出土遺物（1/4）

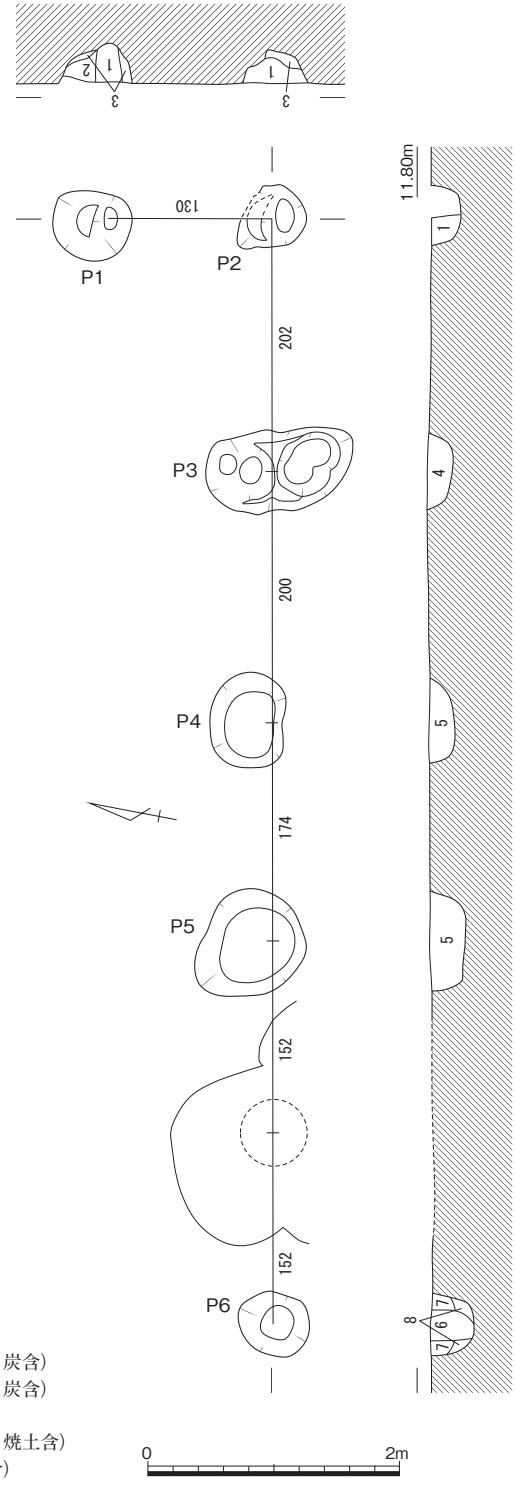
掘立柱建物４（第471・520図、図版30－１、写真38）

Ｉ14中央部、住居66と重複して位置する。東西方向に長軸を持つ５間×２間以上の掘立柱建物である。Ｐ５・Ｐ６を住居66より先に検出してはいるが、平面では新旧は判断し難い。仮に竪穴住居66の北壁調査区土層断面で検出した柱穴（第502図第５・６層）が当建物に属するとすれば、竪穴住居６

より新しい建物であると言える。柱穴の掘り方は平面でやや不整な円～楕円形を呈し、Ｐ１・Ｐ６では土層断面で直径20㎝程度の柱痕が見られた。Ｐ１の埋土（第１層）は周囲と比較して灰色味の強い粗砂で、Ｐ６の柱痕（第６層）は周囲より白っぽい土である。

遺物は各柱穴から出土しているが、いずれも小片で少量となっている。図示できたのはＰ５出土の**2741**のみである。３㎝大の破片で、須恵器杯蓋の口縁端部である。これだけでは時期の判断材料として乏しいが、６世紀末の可能性を挙げておきたい。　　（氏平）

写真38　掘立柱建物４調査風景（西から）



1　灰黄褐色(10YR4/2)シルト～粗砂（土器・炭含）
2　灰黄褐色(10YR5/2)シルト～粗砂（土器・炭含）
3　灰黄褐色(10YR6/2)粗砂シルト混
4　灰黄褐色(10YR5/2)シルト～粗砂（土器・焼土含）
5　灰黄褐色(10YR6/2)粗砂シルト混（土器含）
6　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト～粗砂
7　にぶい黄褐色(10YR6/3)粗砂シルト混
8　にぶい黄褐色(10YR6/3)粗砂

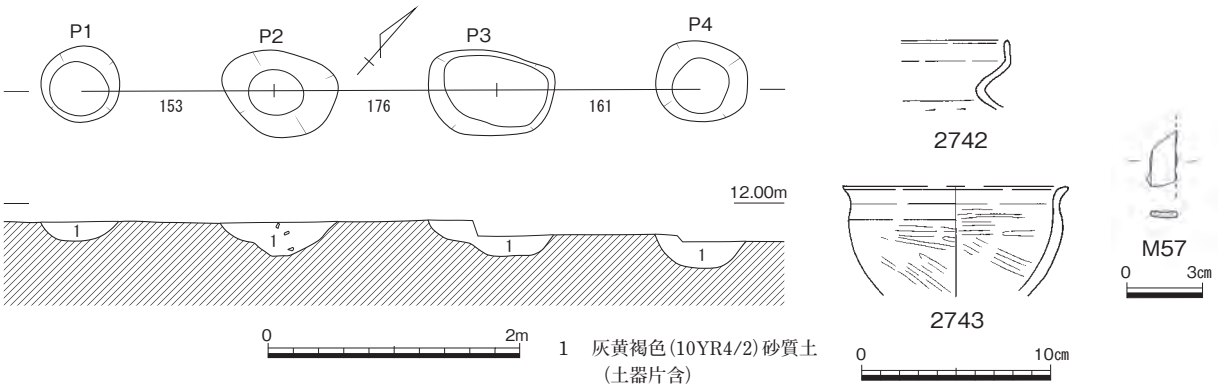
第520図　掘立柱建物４（1/60）・出土遺物（1/4）

４　柱穴列

柱穴列２（第470・521図、図版35－１）

Ｈ10の東部で検出した柱穴列で、竪穴住居58の西約４ｍに位置する。規模は３間で、全長は490㎝を測り、方向はＮ-48°-Ｅを示す。柱間寸法はＰ１～Ｐ２間が153㎝、Ｐ２～Ｐ３間は176㎝、Ｐ３～

Ｐ４間が161㎝となる。柱穴の平面形は円形若しくは不整な楕円形を呈しており、規模は長軸60～100㎝程度と大きい。柱穴の深さはＰ１がやや浅く、Ｐ４が最も深くなる。いずれの柱穴においても柱痕は確認できなかった。柱穴埋土には土器片が混じっていた。図示できた遺物としては、Ｐ１から出土した甕**2742**、Ｐ３から出土した鉢**2743**、鉄片**M57**がある。出土した土器から、時期は古・前・Ⅰと考えられる。（石田）



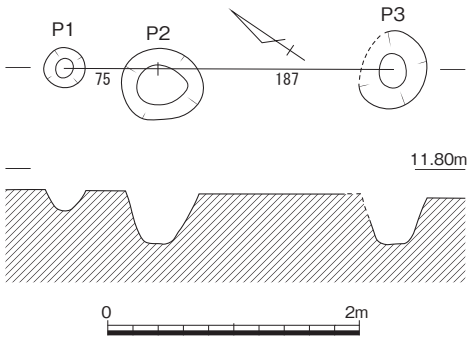
第521図　柱穴列２（1/60）・出土遺物（1/4・1/3）

柱穴列３（第471・522図）

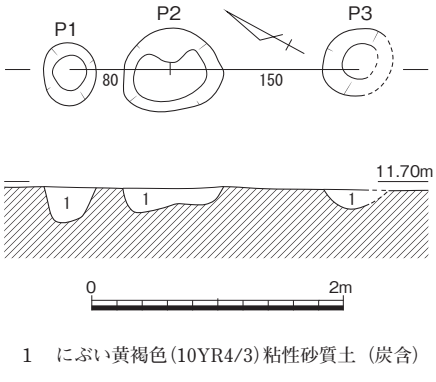
Ｈ12の北東側に位置し、すぐ東隣に柱穴列４が存在する。本遺構に規模は２間であり、Ｐ２～Ｐ３間が187㎝で、Ｐ１～Ｐ２間は75㎝となる。この規模は隣にある柱穴列４とほぼ同じ間隔になり、両者の関連が窺える。時期は古墳時代である。（小林）

柱穴列４（第471・523図）

Ｈ12の北東側に位置し、すぐ西隣に柱穴列３が存在する。本遺構に規模は２間であり、Ｐ２～Ｐ３間が150㎝で、Ｐ１～Ｐ２間は80㎝となる。この規模は隣にある柱穴列３とほぼ同じ間隔になり、両者の関連が窺える。時期は古墳時代である。（小林）



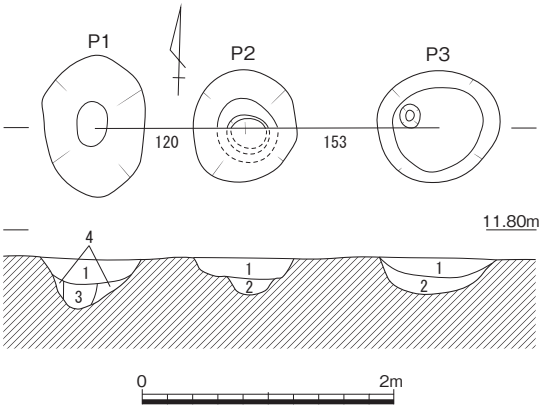
第522図　柱穴列３（1/60）



第523図　柱穴列４（1/60）

柱穴列５（第471・524図、図版35－２）

Ｈ12の東側に位置し、北側に柱穴列３と柱穴列４が並んで存在する。本遺構に規模は２間であり、全長は273㎝を測る。柱間寸法は、Ｐ１～Ｐ２間が120㎝で、Ｐ２～Ｐ３間は153㎝となる。柱穴の規模は、80～100㎝と大きい。深さは真ん中にあるＰ２がやや浅くなり、両側にあたるＰ１とＰ３が深



くなる。またＰ１の南側に、同様規模の柱穴が存在している。このような在り方から、本遺構は本来掘立柱建物などの一部であった可能性も残る。時期は周辺遺構の関連から古墳時代であった思われる。　（小林）

1　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性微砂
2　灰黄褐色(10YR4/2)粘性微砂
3　灰黄褐色(10YR4/2)粘性微砂（灰黄褐色(10YR6/2)粗砂混）
4　にぶい黄褐色(10YR6/3)粗砂（にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性微砂少混）

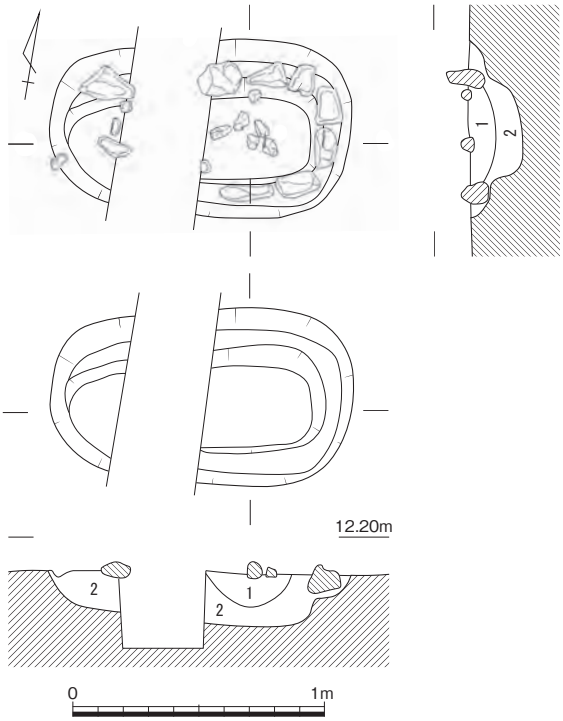
第524図　柱穴列５（1/60）

５　土坑

土坑217（第469・525図、図版62－１・２・102）

Ｉ01に位置する土坑である。平面形は隅丸方形、規模は長軸120㎝、短軸70㎝、深さ23㎝を測る。上段に幅約10㎝のテラス部分を持ち、そのテラス部分に一辺が10～20㎝程度の石を方形に並べている状況であった。また、石で囲った内部にも拳大の石が不規則に置かれており、上面から図示している土師器の鉢**2744**が完形で口縁部を下にした状態で出土している。この石の囲いの内法は、およそ長軸90㎝、短軸30㎝を測るものである。下部には土坑があり、墓などを想定したが、遺物は出土していない。埋土は２層に分層されるが、おおむね灰黄褐色粘性微砂であり偽礫を含まない。

出土遺物は、**2744**のほかにはない。**2744**は外面に指頭圧痕跡を多く残しており、口縁部及び全体的にも歪である。底部も10.5㎜と厚く粗雑な印象を受けるものの、一方で胎土は精良である。この遺物から詳細な時期を判断することは難しいが、鉢として考え、古墳時代の遺構とした。このような石を方形に配置する形状と類似する遺構として、本遺跡の北2.5㎞に位置する、総社市金黒池東遺跡で検出された石囲い１～３がある。巡方や古代の土器が出土しており、時期は古代であるとされている（『金黒池遺跡』岡山県教育委員会1997年）。いずれも石囲いの下部に土坑を伴わない点が本土坑と異なる点であると言える。（圃）



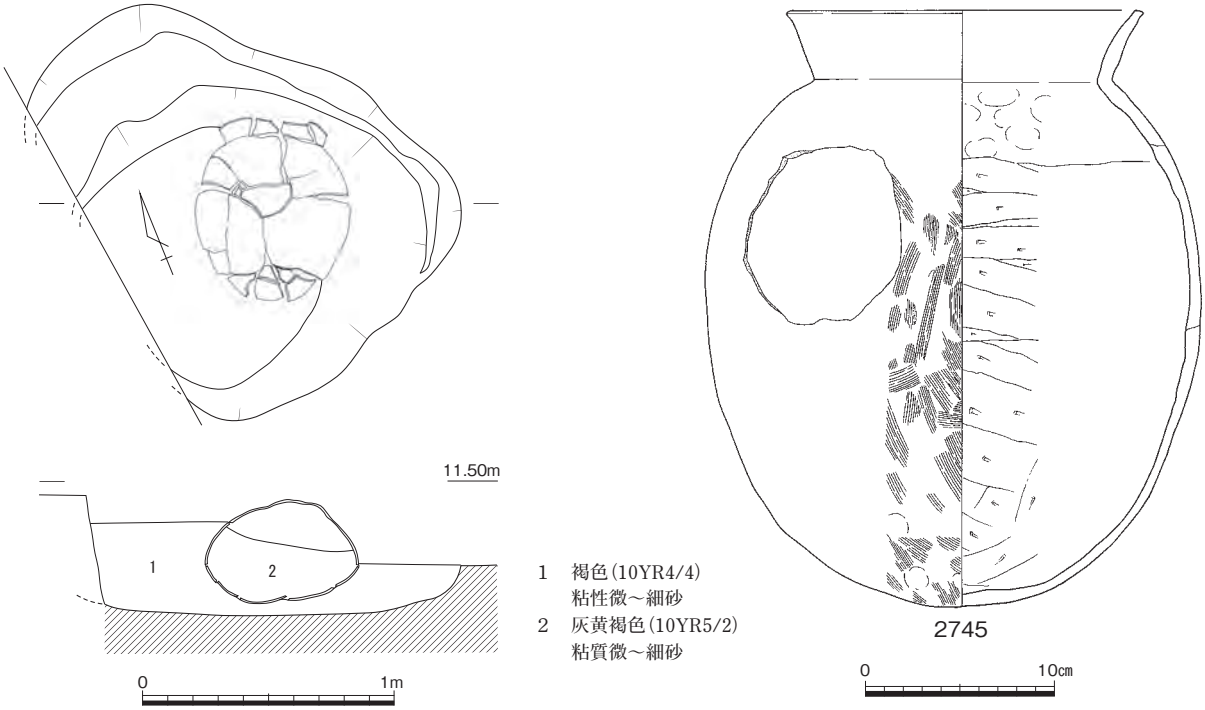
1　灰黄褐色(10YR5/2)（にぶい黄橙色(10YR7/3)微～細砂含）
2　灰黄褐色(10YR4/2)粘性微砂

第525図　土坑217（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑218（第469・526図、図版102、写真39）

Ｉ01に位置する土坑で、竪穴住居52の北側で検出している。平面形は不整形、断面形は椀状を呈している。規模は長軸85㎝、短軸65㎝以上、深さ18㎝を測る。西側は調査区境であるために全容は不明である。土坑の北側には、床面から10㎝上面の部分に幅28㎝のテラス部分が見られる。埋土は褐色の粘性微～細砂の単一層である。この土坑の東側では、土師器の甕**2745**がほぼ完形で１点出土しており、胴部に直径約10㎝大の穿孔がなされている。このような穿孔は、竪穴住居53出土の甕と同様である。この甕はやや長胴気味で、口縁端部には面取りが施されている。時期は古墳時代後期後半と考えられる。　（團）

写真39　甕2745出土状況（北西から）



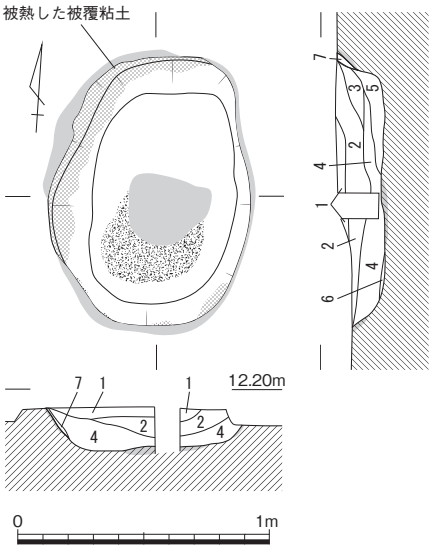
第526図　土坑218（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑219（第469・527図、図版62－３）

Ｊ01に位置する土坑で、竪穴住居52の東側で検出している。平面形は楕円形、断面形は逆台形を呈している。規模は長軸105㎝、短軸78㎝、深さ17㎝を測る。この土坑は検出時から被熱痕跡が明瞭であった。この被熱痕跡は、土坑の壁面上面をほぼ全周しているものの、底面では中央部分に一部見られるのみで、壁面の下面と床面の大部分には、被熱は見られなかった。また、土坑壁面は粘土で被覆されており、これもまた壁面上面でのみ残存していた。また、出土遺物は皆無である。このような粘土で壁面を被覆した被熱土坑の類例として、総社市窪木薬師遺跡のものがよく知られている（『窪木薬師遺跡』岡山県教育委員会　1993年）。窪木薬師遺跡例は、炭を焼成した土坑であると考えられており、土坑219の用途も同じとするなら、古墳時代後期の遺構である可能性が考えられる。　（團）

土坑220（第469・528図）

Ｊ01に位置する土坑で、土坑219の南東側で検出している。平面形は長方形、規模は長軸217㎝、短軸47㎝、深さ８㎝を測る。長軸の大きさに比して、浅い土坑である。この土坑の中央部分、土層断面の第１層にあたる場所において、多くの焼土粒と炭を検出した。またこの下層からは、厚さ２㎝程度の炭層の広がりを検出しているが、用途は不明である。出土遺物は、土師器と考えられる細片が数点出土するのみであった。このため、時期については古墳時代のものと考えられ、炭や焼土が出土していることから、他の被熱土坑に関連するものとするならば、古墳時代でも後期の遺構である可能性が考えられる。（團）



1　にぶい黄褐色(10YR6/3)粘性微砂
2　灰黄褐色(10YR5/2)粘性微砂
3　にぶい黄褐色(10YR5/3)粘性微砂
4　褐灰色(10YR5/1)粘性微砂（炭・焼土多含）
5　褐灰色(10YR5/1)粘性微砂（炭少含）
6　灰褐色(5YR5/2)粘性微砂（炭・焼土粒多含）
7　橙色(2.5YR6/8)粘土（被熱強）

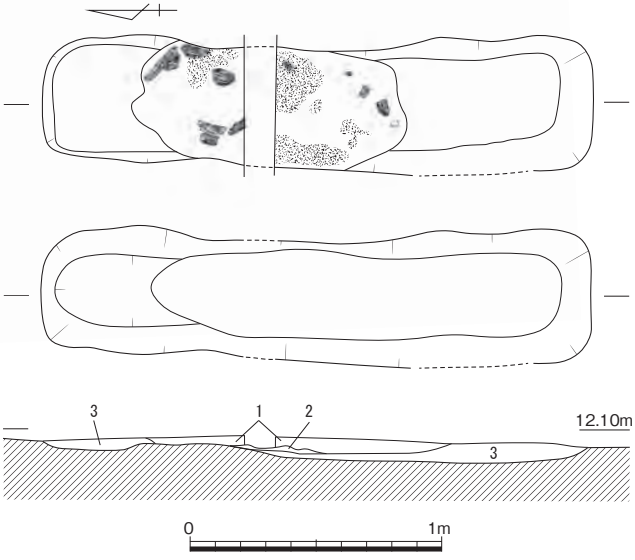
第527図　土坑219（1/30）

土坑221（第469・529図）

Ｊ01に位置する土坑で、土坑220の南側、竪穴住居53の西側で検出している。平面形は楕円形、断面形は皿状である。規模は長軸122㎝、短軸92㎝、深さ13㎝を測る。出土遺物は土師器の細片が少量あるのみである。これらから、古墳時代の遺構であると考えられる。（團）

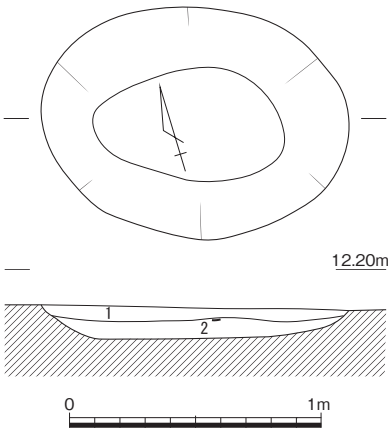
土坑222（第470・530図、図版102）

Ｉ09の中央よりやや南西側に位置する。東側にやや離れて溝18・19などが存在する以外に、同時期の遺構はほとんどない。



1　灰黄褐色(10YR4/2)粘性微砂（焼土粒・炭多含）
2　炭層
3　灰黄褐色(10YR5/2)粘性微砂

第528図　土坑220（1/30）

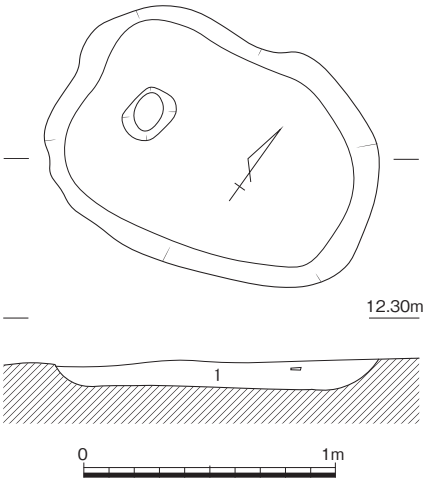


1　暗褐色(10YR3/4)微～細砂
2　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性微砂

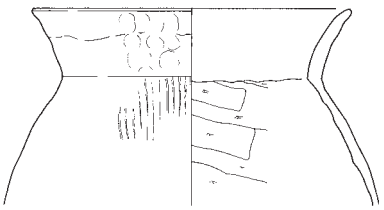
第529図　土坑221（1/30）

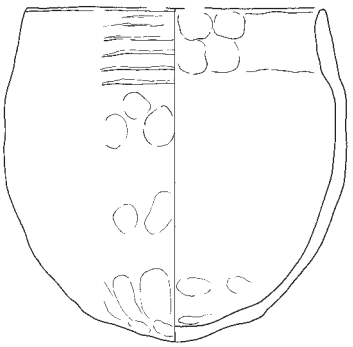
規模は、長軸長132㎝、短軸長95㎝で、平面形状は楕円形を呈する。確認面からの深さは12㎝で、底面の標高は12.02ｍになる。断面形状は皿形である。

出土遺物には、**2746・2747**がある。**2746**は甕で、長胴化している。**2747**は製塩土器で口縁部外面にタタキ目が残る。時期は古・後・Ⅱになる。　（小林）



1　にぶい黄橙色(10YR5/4)微～細砂





第530図　土坑222（1/30）・出土遺物（1/4）

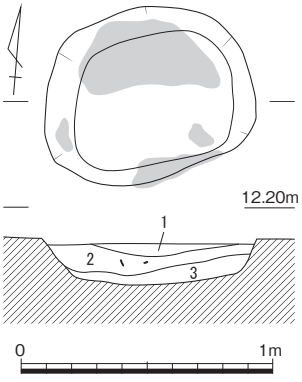
土坑223（第470・531図、図版63－１）

Ⅰ09の中央よりやや南西側に位置する。東側にやや離れて溝18・19などが存在する以外に、同時期の遺構はほとんどない。

規模は、長軸長84㎝、短軸長78㎝で、平面形状は楕円形を呈する。確認面からの深さは16㎝で、底面の標高は11.89ｍになる。断面形状は椀形である。本土坑の覆土中には、多量の焼土塊が存在する。このことが特徴的である。時期は古墳時代である。　（小林）

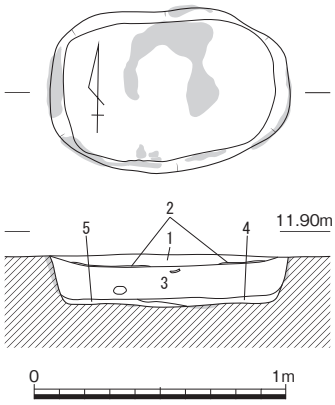
土坑224（第471・532図、図版63－２・３）

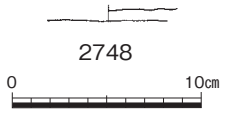
Ⅰ11に位置している土坑である。平面形は楕円形、断面形は逆台形を呈しており、規模は長軸95㎝、短軸64㎝、深さ21㎝を測る。検出段階で被熱痕跡が明瞭であり、断面の観察から壁面に被熱している被覆粘土が土坑の南半部分で残存していた。また、底面近くの第４層には形にはならないものの、炭



1　暗褐色(10YR3/4)シルト質微砂
2　暗褐色(10YR3/3)シルト質微砂（焼土含）
3　暗褐色(10YR3/3)シルト質微砂（炭化物多含）

第531図　土坑223（1/30）





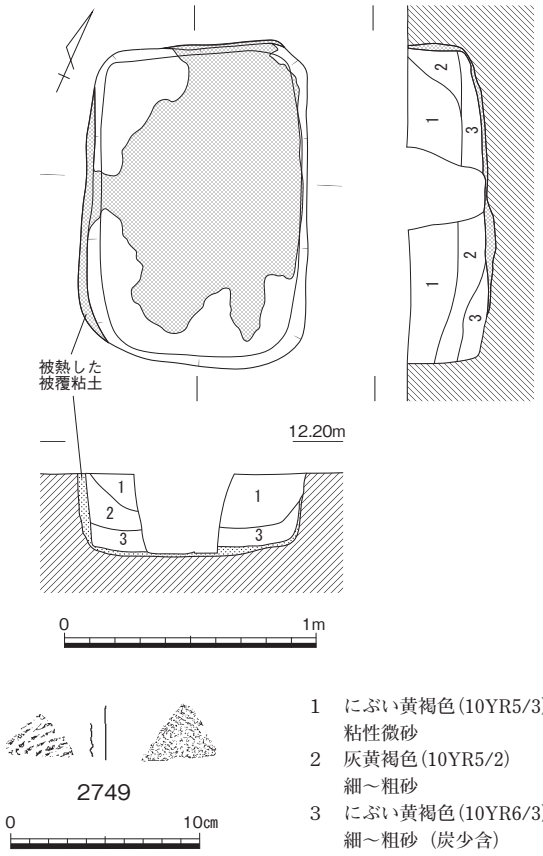
1　灰黄褐色(10YR4/2)粘性微砂
2　黒色(10YR2/1)〈炭層〉
3　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性微砂（炭・焼土混）
4　褐灰色(10YR6/1)粘性微砂（炭多含）
5　褐灰色(10YR6/1)粘性微砂（炭少含）

第532図　土坑224（1/30）・出土遺物（1/4）

を多く検出している。出土遺物には、須恵器の杯身と考えられる**2748**を１点図示している。粘土で壁面を覆い、被熱していることから、土坑219と同様に、炭を焼成した土坑の可能性が考えられる。遺物などから、時期は古墳時代後期であると考えられる。　（圃）

土坑225（第471・533図、図版64－１）

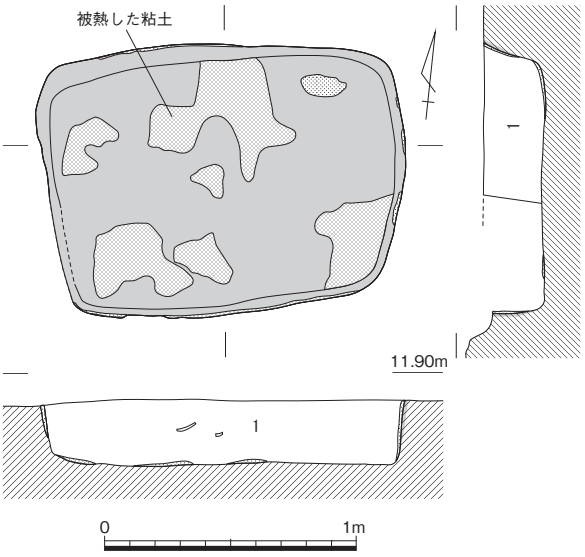
Ｉ11に位置し、土坑225の東側で検出している。平面形は長方形、断面形は箱状を呈しており、規模は長軸127㎝、短軸88㎝、深さ28㎝を測る。検出時から、北辺と西辺の被熱痕跡が明瞭に観察でき、断面の観察から壁面に被覆粘土が残存している部分の粘土部分が被熱影響を大きく受けている状況が見られた。被熱の影響は底面部分が一番強く、灰色で一部が硬質になっており、還元焔状態に熱変したものと考えられる。遺物は細片が少量のみの出土ではあるが、その中で１点出土した須恵器が**2749**である。土坑224のように炭は出土していないものの、粘土で壁面を覆い、被熱していることから、同じく炭を焼成した土坑の可能性が考えられる。時期は古墳時代後期か。　（圃）



第533図　土坑225（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑226（第471・534図、図版64－２）

Ｈ11の中央付近に位置する。平面形は隅丸方形、断面形は逆台形を呈している。規模は長軸145㎝、短軸106㎝、検出面からの深さは25㎝を測る。壁面及び底面においては厚さ約1.5㎝の粘土が被熱した状態で部分的に遺存していた。土坑内は全体的に赤褐色に被熱していたが、底面の一部が還元焔状態にまで強く焼けていた。出土遺物はなく、炭等も確認していない。本土坑から南東へ約60ｍに位置する竪穴住居65では鍛冶関連遺物が出土しており、周辺に鍛冶炉の存在も想定される。そのため、本土坑は鍛冶炉に炭材を提供する炭窯の可能性が考えられる。詳細な時期は不明だが、周辺遺構の状況から古墳時代後期に属すると考えられる。　（石田）

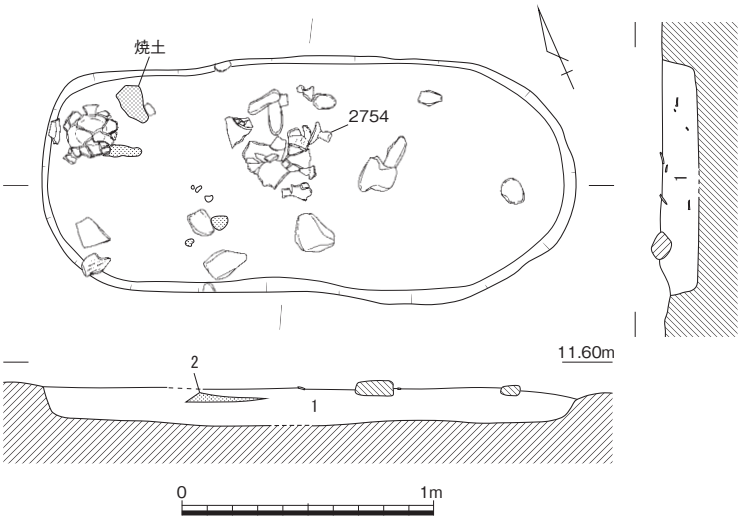


第534図　土坑226（1/30）

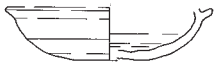
土坑227（第471・535図、図版118・119）

Ｈ18の北東に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸211㎝、短軸93㎝を測る。断面形は逆台形で、検出面から底面までの深さは14

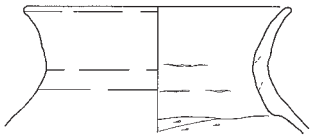
cm。底面はほぼ水平。埋土は黒褐色細砂で、多くの炭や焼土塊を含んでいた。出土遺物の多くは検出面上面で確認することができ、土坑底面から約10cm程度浮いた状態で検出することが多くあった。出土状況を第535図に図示している。土器2750～2755、土製丸玉Ｊ38、土製支脚Ｃ109などの遺物のほか、10～20cm大の自然礫や焼土塊が出土している。出土状況からは、土坑がある程度埋まった段階で廃棄された様子を想定することができる。2750は須恵器杯身、2751は須恵器甕、2752・2753は土師器甕、2754は土師器高杯、2755は土師器甑。土師器高杯2754は古い様相を示しており、混入の可能性が高い。時期は、古・後・Ⅱ～Ⅲ。　（松尾）

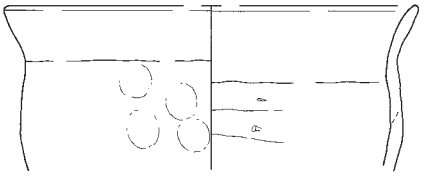


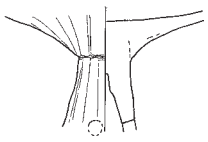
1　黒褐色(10YR3/1)細砂（炭・焼土塊含）　2　明赤褐色(5YR5/8)土（焼土塊）


2750

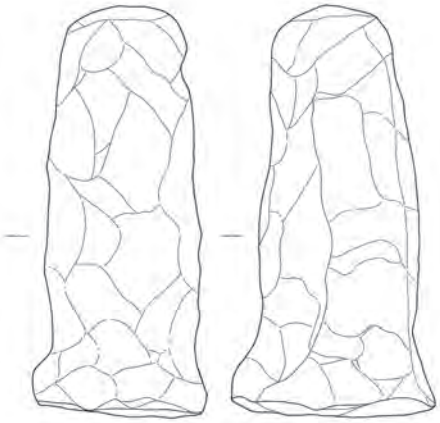
2751

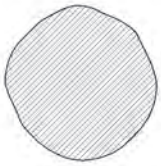

2752

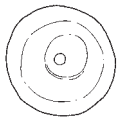

2753

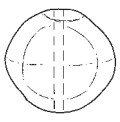

2754

2755


C109






J38

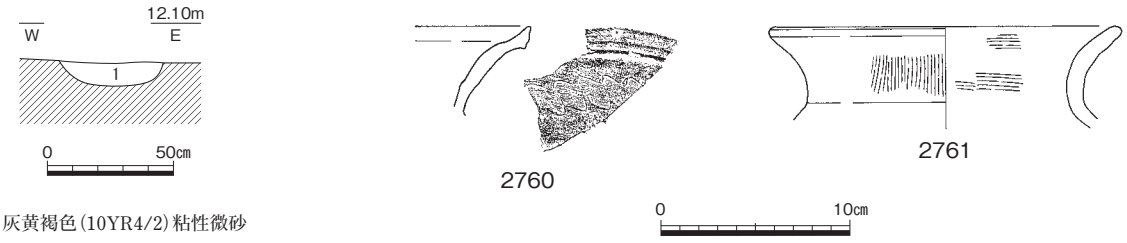
第535図　土坑227（1/30）・出土遺物（1/4・1/3・1/2）

６　溝

溝14（第469・536図、図版102）

Ｉ01・Ｊ01に位置し、竪穴住居52の東側を南北方向に掘削された溝である。規模は幅41㎝、深さは９㎝と浅いものとなる。検出している全長は約26ｍとなる。出土遺物には、須恵器の杯蓋**2756**・**2757**、杯身**2758**、短脚高杯**2759**、甕**2760**、土師器甕**2761**がある。これらのうち、須恵器の**2757**～**2759**がまとまって出土している。杯蓋の口縁端部は明瞭な段を持ち、口径が12.3～12.4㎝、杯身の口径は11.2㎝であることなどから、時期はＴＫ47形式併行期の古・中・Ⅱであると考えられ、竪穴住居52と同時期の溝であると考えられる。

しかし溝14と竪穴住居52の関係については、竪穴住居52の東辺と近接しているために同時期に機能していたかどうかは定かではないと言える。　（圃）



1　灰黄褐色(10YR4/2)粘性微砂

第536図　溝14（1/30）・出土遺物（1/4）

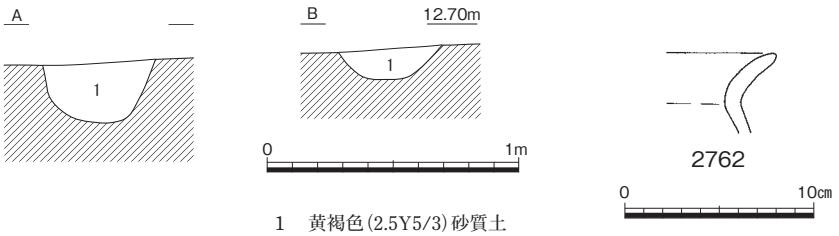
溝15（第470・537図、図版67－３）

Ｊ04南西角に位置する南北方向の溝で、北側は地形改変により消失している。検出状況から、これ以上南に延びるとは考え難い。弥生時代の河道２が古墳時代の河道５となり、河道５が埋没した後に掘削されている。第126図第２層が溝15、第６・７層が河道５に対応する。検出面の標高は12.55ｍで、最も残りの良い部分で幅45㎝、深さ25㎝、底面の標高12.32ｍを測り、断面Ｕ字形を呈す。

図示した土師器甕**2762**のほか、６世紀代の須恵器細片が出土している。　（渡邉）

溝16（第470・538図）

Ｊ06ほぼ中央、溝15より約35ｍ東に位置する。やや西に弧を描くが、ほぼ南北方向の溝で、北側は地形の改変により消失し、溝15同様、これより南には

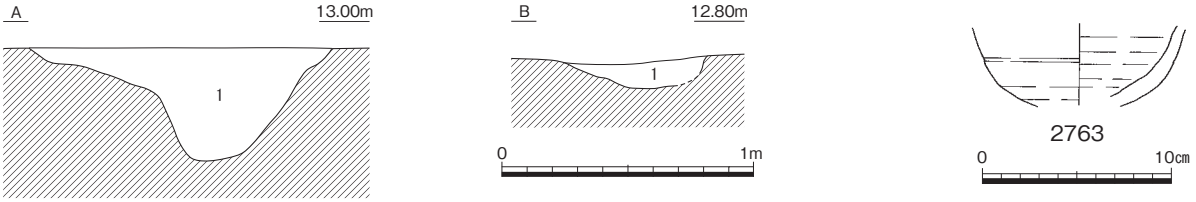


1　黄褐色(2.5Y5/3)砂質土

第537図　溝15（1/30）・出土遺物（1/4）

延びないと考えられる。微高地の最も高い部分に位置し、検出面の標高は12.90ｍである。底面の標高は北側で12.45ｍで、溝15より高い。最も遺存状態の良いＡ断面では、上面幅が約1.2ｍあるが、底面より25㎝上では幅約50㎝となり、ほぼ同規模となる。

2763は須恵器の無蓋高杯で、６世紀後半のものと考えられる。（渡邉）



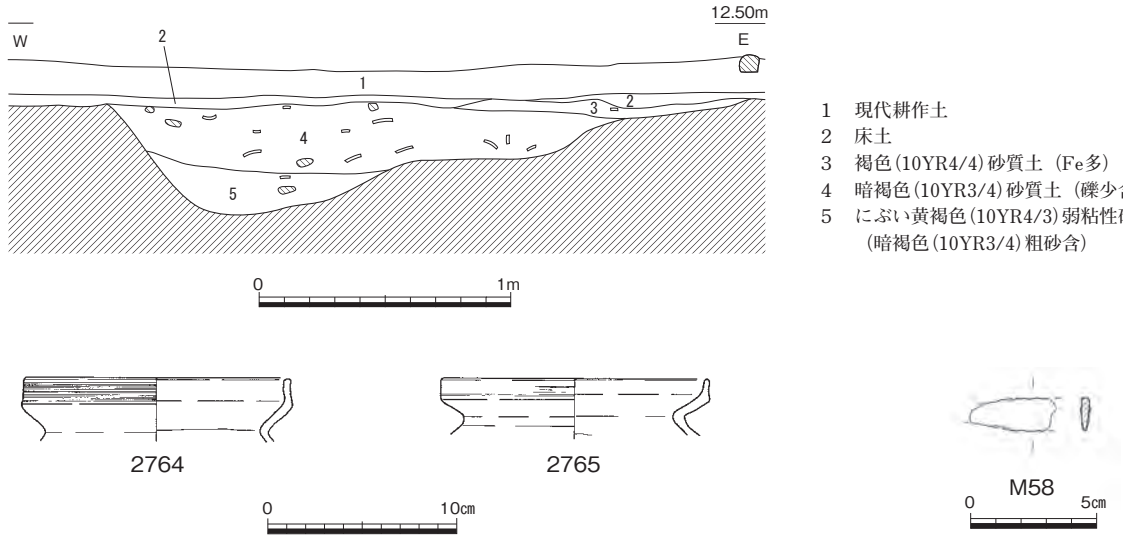
1　暗褐色(10YR3/4)砂質土

第538図　溝16（1/30）・出土遺物（1/4）

溝17（第470・539図、図版68－１）

Ｈ07南東端からＪ08にかけて見つかった南北方向の溝で、南北両端共に調査区外となる。溝16より約35ｍ東に位置する。弥生時代の低位部にあたり、上面標高は12.20ｍ前後である。底面の標高は北が低い。第539図は調査区北壁で観察した状況で、上面幅約２ｍ、深さ40㎝を測る。

出土土器の大部分は弥生時代後期の土器で、刀子**M58**も混入の可能性がある。古墳時代前期の甕**2764・2765**を図示したが、須恵器細片が出土しており、溝15・16と併存していた可能性が高い。(渡邉)



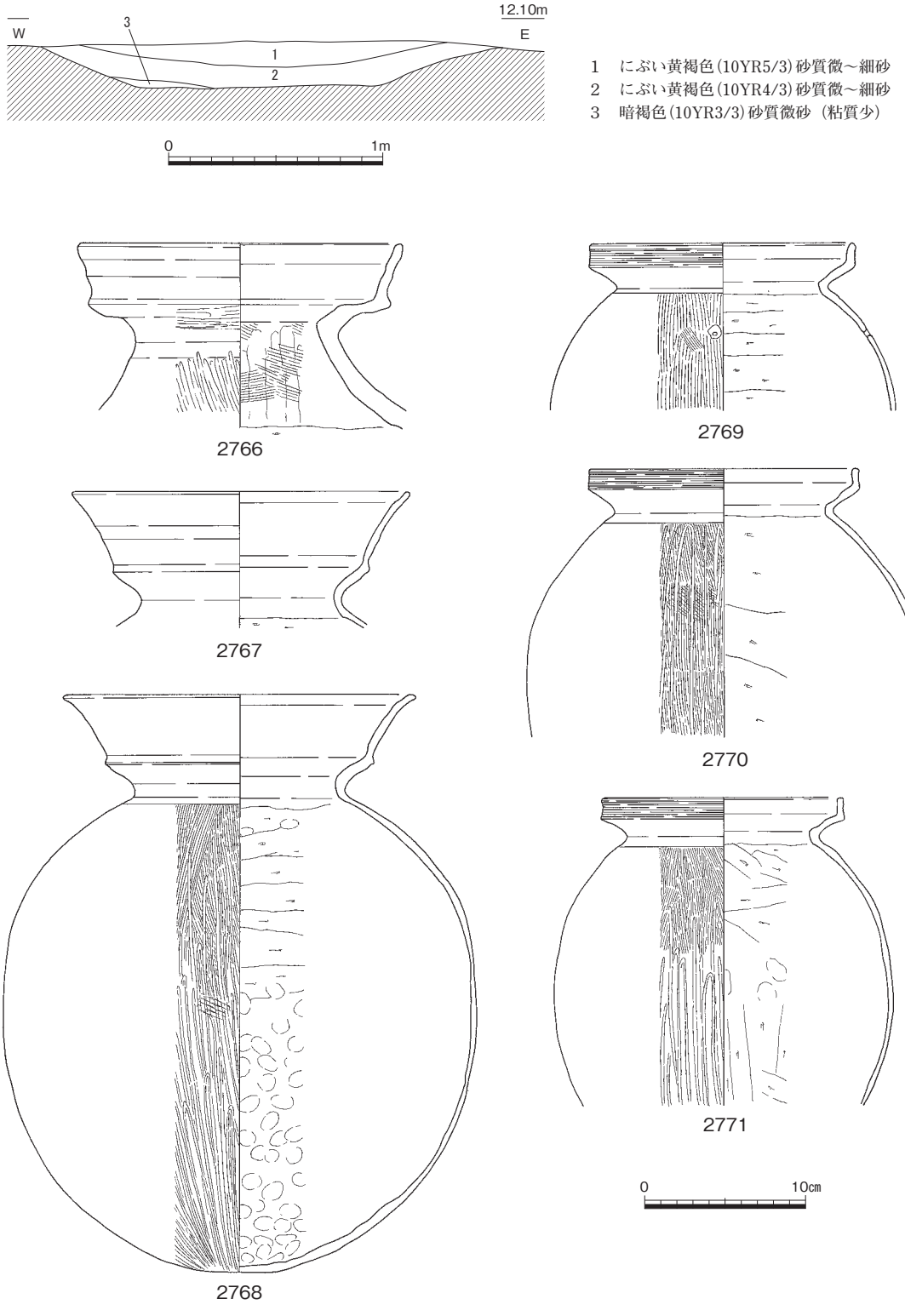
1　現代耕作土
2　床土
3　褐色(10YR4/4)砂質土（Fe多）
4　暗褐色(10YR3/4)砂質土（礫少含）
5　にぶい黄褐色(10YR4/3)弱粘性砂質土
（暗褐色(10YR3/4)粗砂含）

第539図　溝17（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）

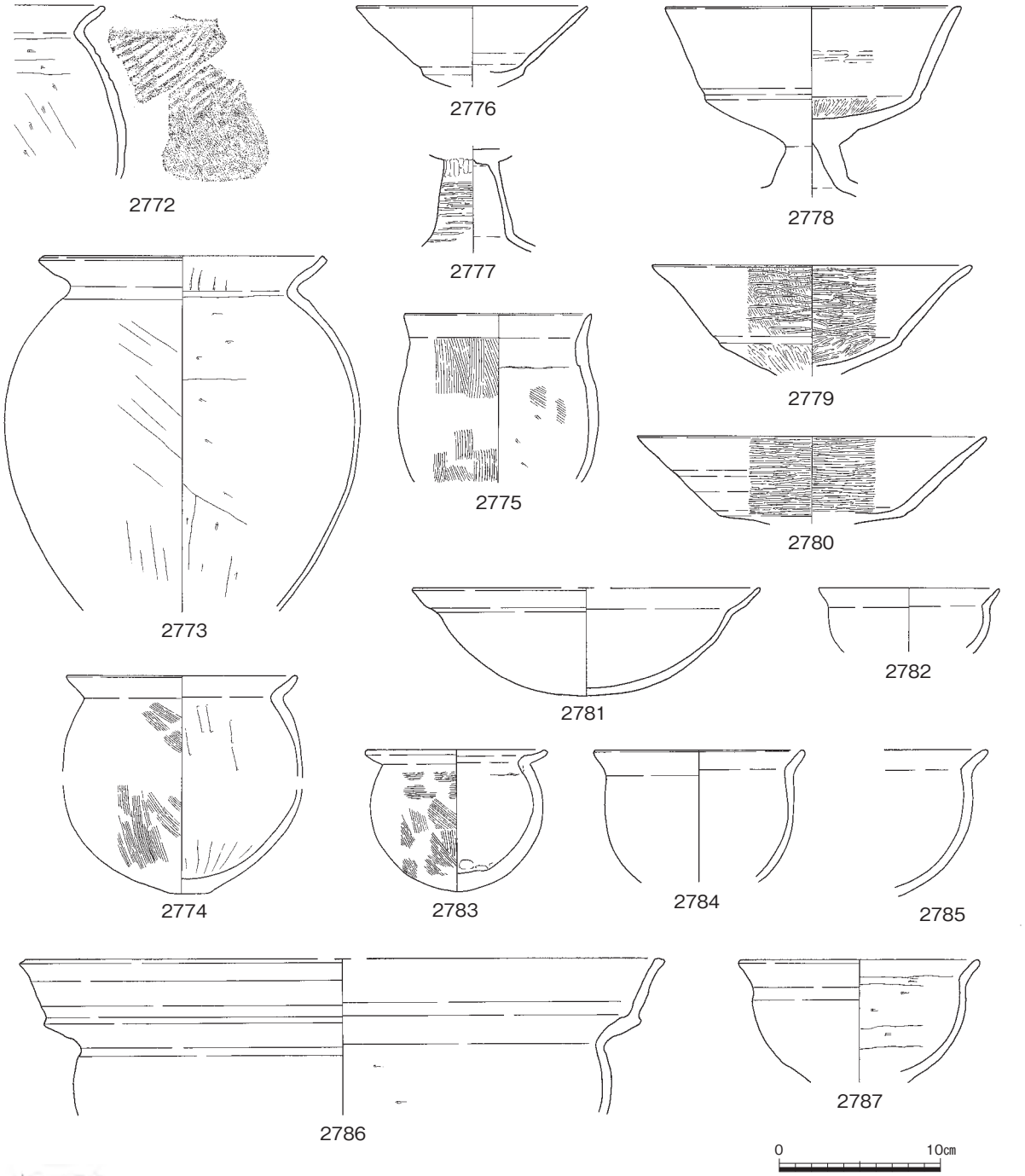
溝18（第470・540・541図、図版68－２・119）

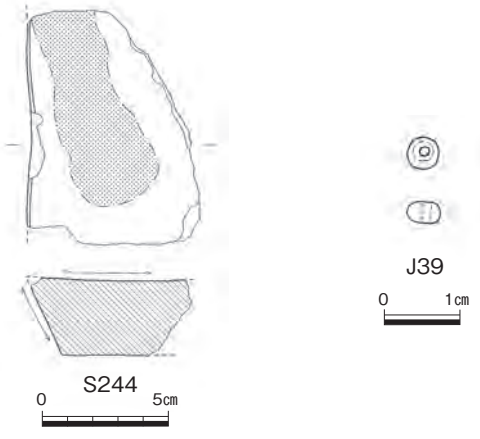
Ｉ09の北東側から溝19へ向けて南東側に延び、溝19及び溝20と重複する溝である。Ｈ09の西側から延びる可能性が考えられ、Ｉ10の南西側まで続く。全長は33ｍ程度になるだろう。検出時の先後関係からは、溝19・溝20よりも古い溝であったと言える。溝の規模は、上端幅214㎝、底面幅110㎝である。確認面からの深さは22㎝で、底面の標高は11.78ｍになる。断面形状は、図化した部分では皿形になる

が、北西側では東側に一番広い場所で、幅約１ｍのテラス部分を持つ。覆土はレンズ状に堆積し、粘質に砂が混じる。遺物は、ほぼどの層からも出土する。2766～2768は壺である。口縁部は外側に立ち上がり、底部は底をやや残す。2769～2775は甕である。2769～2771の口縁部には櫛描き沈線が施され、2772の胴部外面はタタキ目である。2773の口縁端部はやや内側に向く。2769の肩部には、穿孔が



第540図　溝18（1/30）・出土遺物①（1/4）





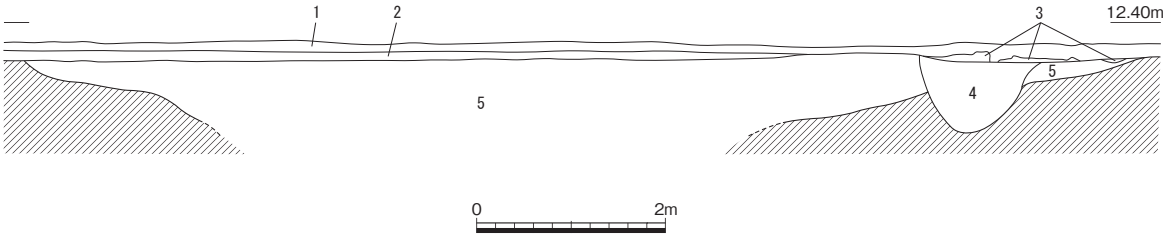
第541図　溝18出土遺物②（1/4・1/3・1/1）

１カ所見られる。2776～2780は高杯である。2781～2787は鉢である。S224は、流紋岩製の砥石である。J39は、ガラス製の小玉である。

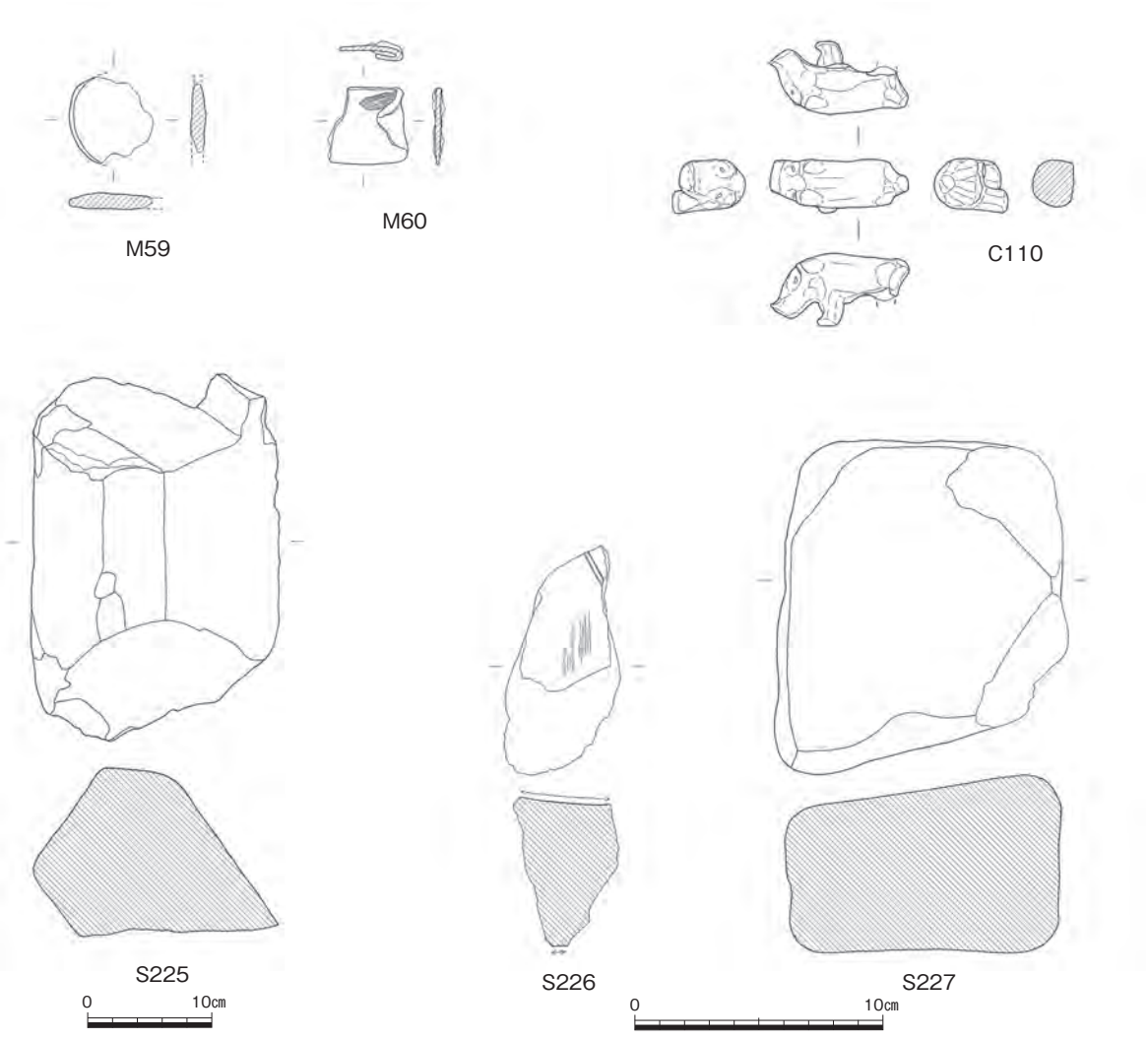
これら遺物の時期は、古・前・Ⅰ～Ⅱであり、本溝の時期も同様になる。遺物からは、重複する溝19と同時期のものであるが、検出状況からは、本溝が完全に埋没した後に、溝19が掘削されたものと考えられる。　（小林）

溝19（第470・471・542～546、図版68－３・103・117）

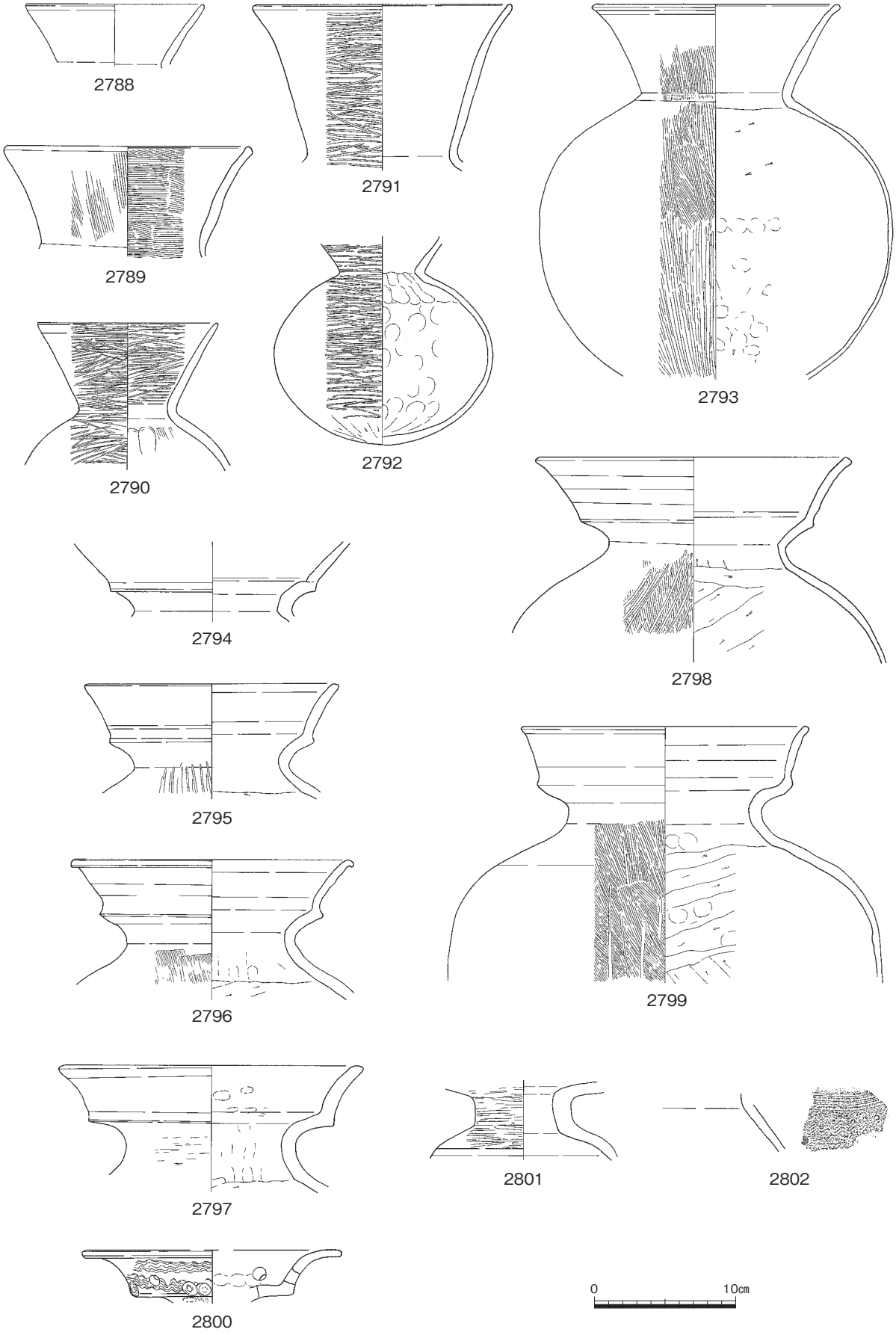
Ｊ09の北東側から北東方向に流れ、Ｈ11の西側付近に向かっている。西側肩口部は直に立ち上がるため明瞭に深さが把握できるが、東側の肩口はなだらかに立ち上がるため不明瞭となる。また最深部は西側肩口直下付近になる。不明瞭な東側の肩口は、調査区内の北側では溝21付近となり、南側は竪穴住居57より手前にくる。これらを結んだ本溝の規模は、上端幅がおおむね10ｍ前後になると予想される。確認面からの深さはおおむね80㎝で、底面の標高は10.20ｍ付近になる。先述のとおり西側が



1　暗灰黄色(2.5Y4/2)粘性砂質土〈水田床土〉
2　褐色(10YR4/4)砂質土（Fe沈着）
3　黄褐色(10YR4/2)砂質土（Mn沈着）
4　暗褐色(10YR3/3)粘性砂質土（土器含）〈溝21〉
5　暗褐色(10YR3/4)粘性砂質土（土器含）〈溝19〉

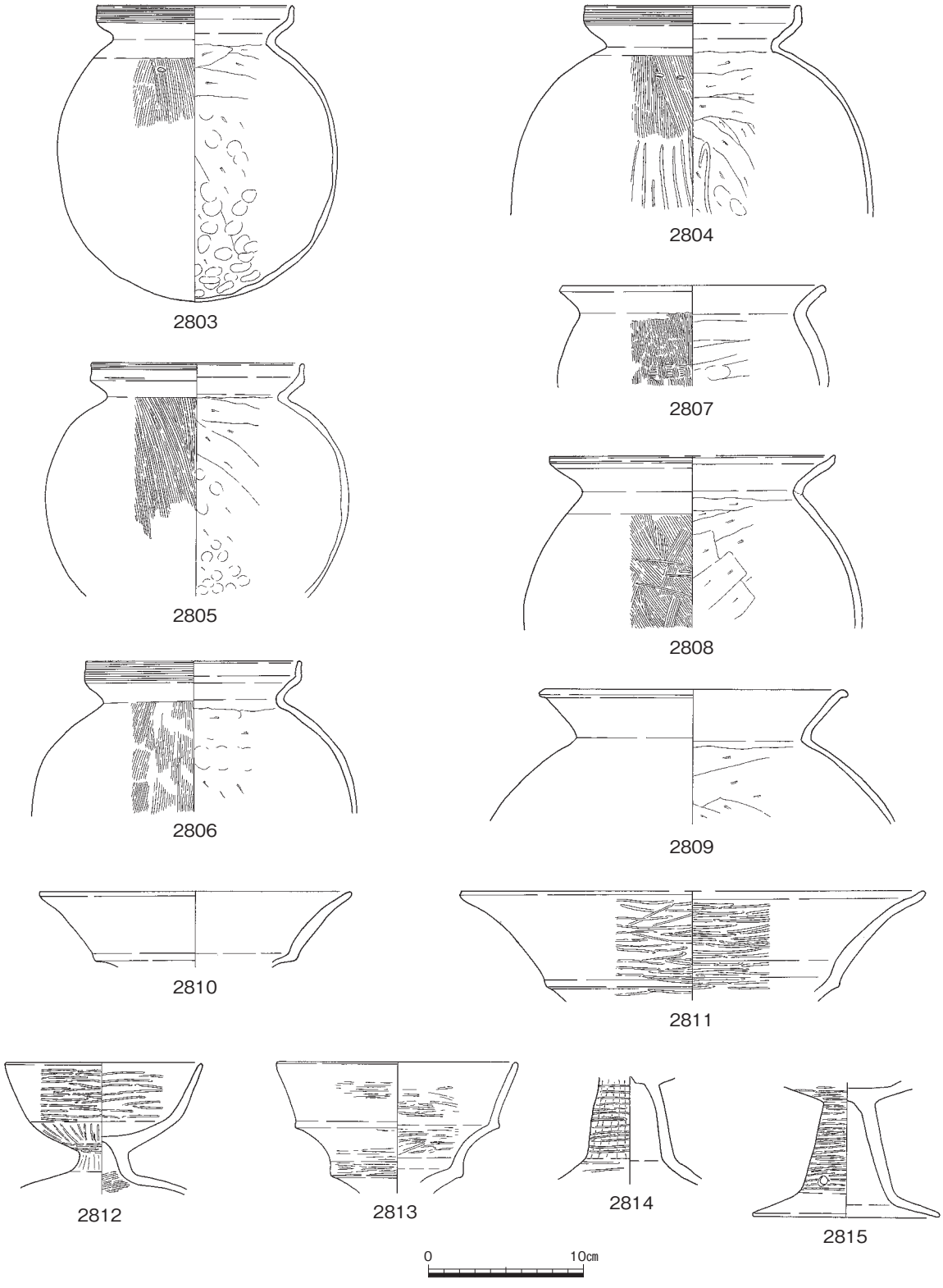


第542図　溝19（1/80）・出土遺物①（1/3・1/6）

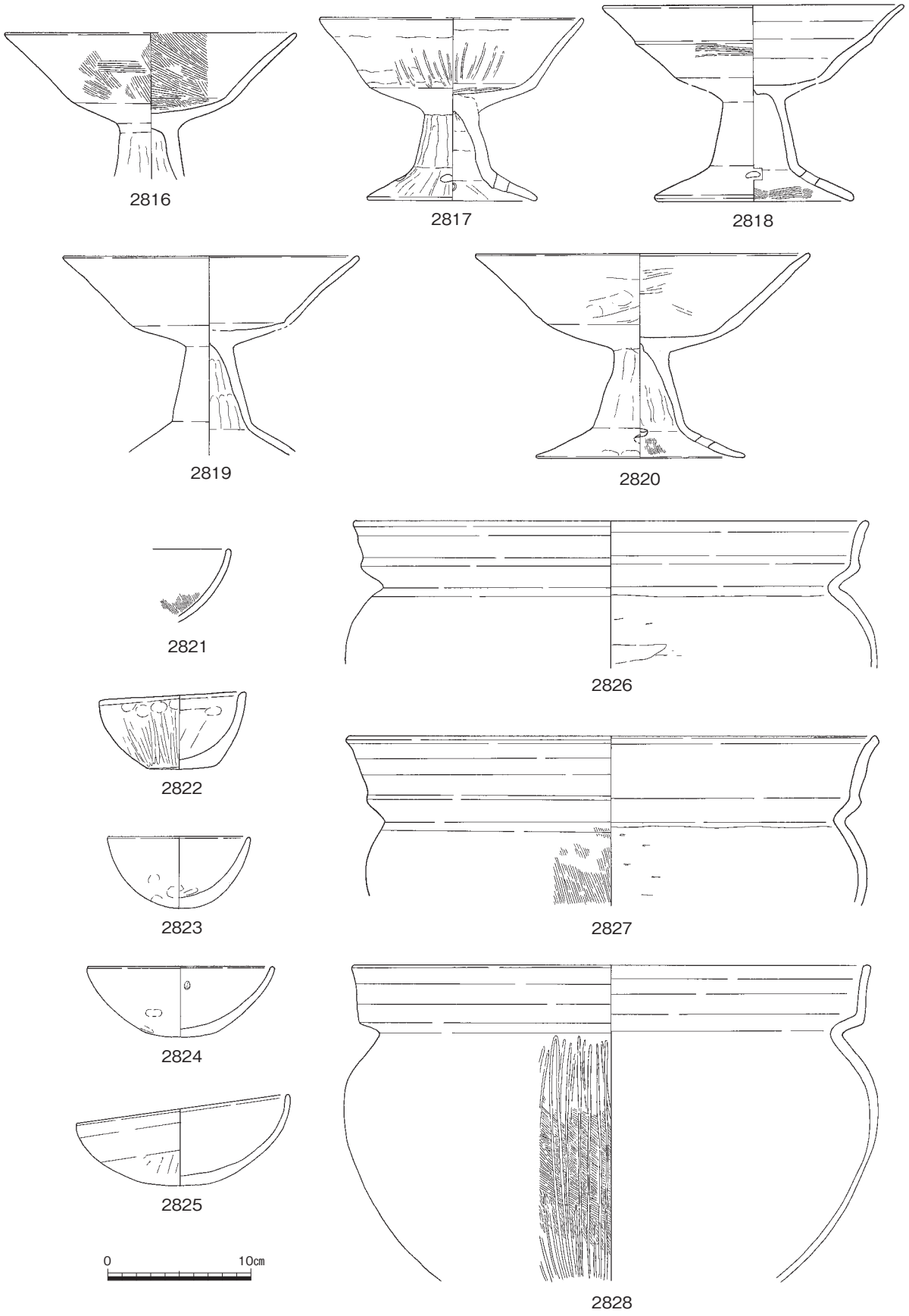


第543図　溝19出土遺物②（1/4）

最も深く、東に向かうにつれて徐々に上がっていく。断面形状は皿状を呈し、覆土は砂質土になる。この形状と土質から、本遺構はたわみ状の性格を帯びていたと推測される。溝21との重複部分があるが、本遺構は先行している。また弥生時代の竪穴住居27は、覆土下から確認されるため、元々低い位



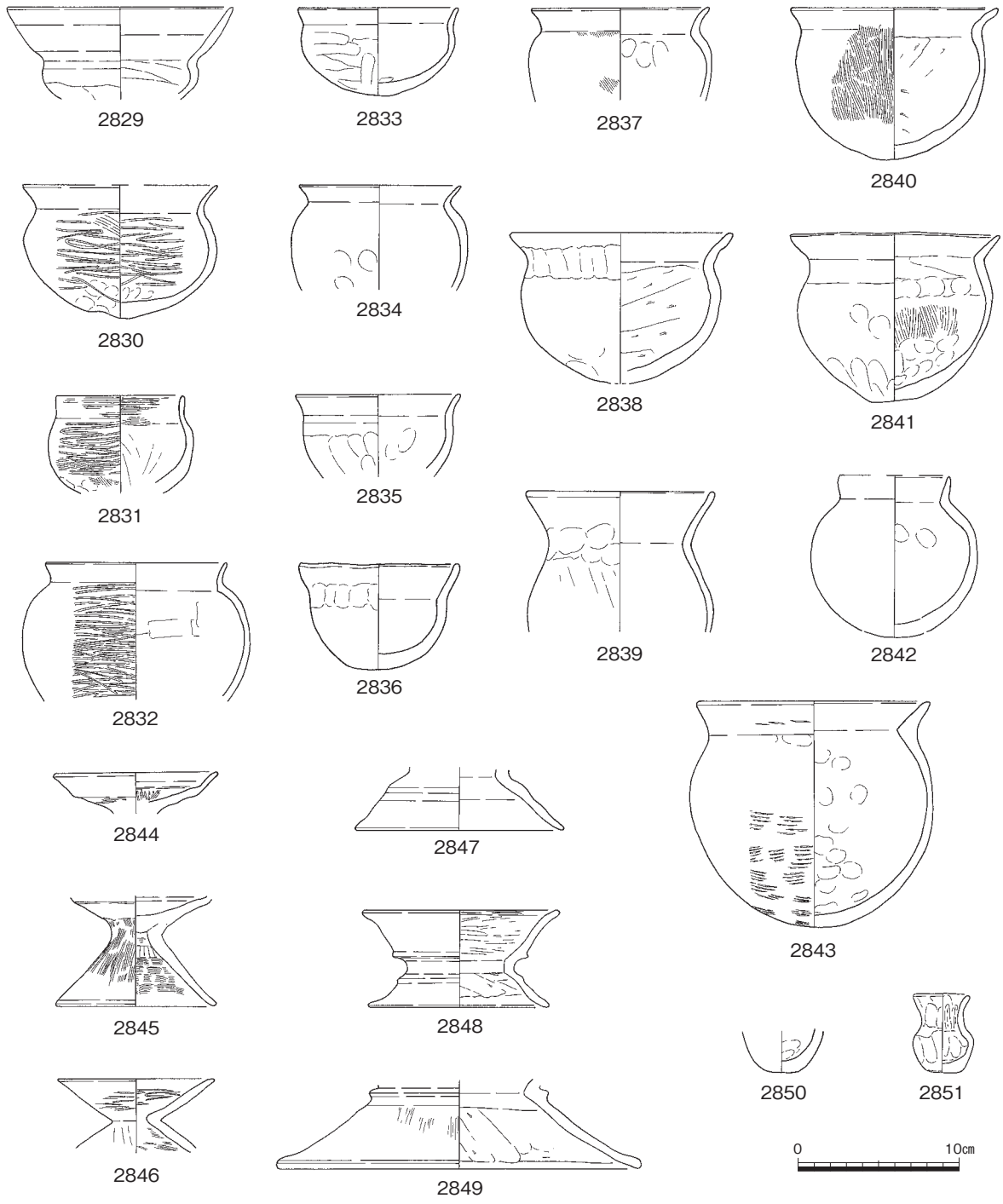
第544図　溝19出土遺物③（1/4）



第545図　溝19出土遺物④（1/4）

置に建てられていたと判断できる。

遺物は５層からかなり多く出土するが、特に西側肩口付近に密集する傾向がある。2788～2802は壺である。2788～2793は逆「ハ」字に直行する口縁部を持つ。2788・2790・2792は小型になり、2792は底が丸い。2794～2799は口縁部が段を持って外側に立ち上がる。2800の口縁部外面は、櫛描き羽状文のちに竹管文が施られる。また円孔が穿けられている。畿内系である。2803～2809は甕である。口縁部は櫛描き沈線のある2803・2804、「く」字に立ち上がる2807～2809があるが、端部は上方を向



第546図　溝19出土遺物⑤（1/4）

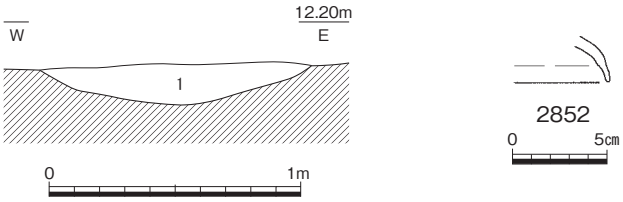
く2808と外側へつまみ出される2809などがある。2810～2820は高杯である。受部は外側に広がるものが多いが、丸く収まる2812、段を持つ2813なども含まれ、2812の脚部は短い。他の脚部は長脚であり、薄手となり屈曲部から先端部までが短い。2821～2843は鉢である。2821～2825は小型で、2825は底があるが、他は丸く収まる。2826～2828は大型で、口縁部は段を持ち直気味に立ち上がる。2829は口縁部径が胴部よりもかなり大きく、いわゆる坩である。小型の鉢の中には、底が僅かながら形作られるもの（2830・2840・2838・2841）、丸底になるもの（2836・2842・2843）がある。また2831・2832・2842は口縁部が直に立ち上がる。2844～2846は器台である。いずれも小型である。2847～2849は鼓形器台である。2850・2851はミニチュア土器であるが、竪穴住居57付近にあった土器の紛れ込みかもしれない。M59は不明鉄製品で、M60は鉄斧の破片である。C110は猪形土製品である。頭部から胴部の大半が残っている。前足１本と後ろ足２本が欠けた状態である。S225は流紋岩製の台石である。S227は流紋岩質凝灰岩の台石である。S226は流紋岩質の砥石である。

これらの遺物は、古・前・Ⅰ～Ⅱが中心であり、本遺構の時期も同様になることが予測される。この遺構は長時期の間存続していたことが窺われ、広い範囲がくぼんだ地形であったと考えられる。本遺構が埋まった跡も、当地点付近から西側に関しては古・中～古・後の遺構が少ないのに対して、東側は増え始め、その時期の中核をなす区域となっていく。このことから考えても、本遺構が存続していた時から、地形の変換点になる箇所であったことが推測される。また本遺構が完全に埋まった後になっても、そのことは変わらず、遺構が密集する地形である、やや高い東側の地点より少しだけ下った場所にあたるのだろう。（小林）

溝20（第470・547図）

Ⅰ10の西側から発して南側に流れ、溝19の西側片部付近まで流れている。規模は、上端幅107㎝、底面幅35㎝である。確認面からの深さは16㎝で、底面の標高は11.86ｍになる。断面形状は皿形になり、覆土は粘質に砂が混じる。また溝19とは重なる部分があり、本溝が後出するが、溝19のくぼんだ部分が残っていたと考えられる。

出土土器には2852があり、古・後・Ⅰで、本溝の時期も同様となる。（小林）



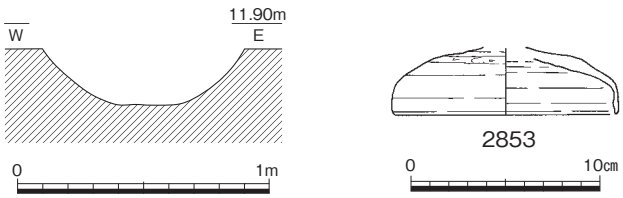
1　にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質微～細砂

第547図　溝20（1/30）・出土遺物（1/4）

溝21（第471・548図、図版69－１）

Ⅰ11の中央よりやや南西側で竪穴住居57の東側付近から真北に向い、H11の南西側付近からやや北東方向に振れて流れる。規模は、上端幅127㎝、底面幅15㎝である。確認面からの深さは75㎝で、底面の標高は11.58ｍになる。断面形状は椀形になり、覆土は粘質に砂が混じる。また溝19とは重なる部分があり、本溝が後出する。

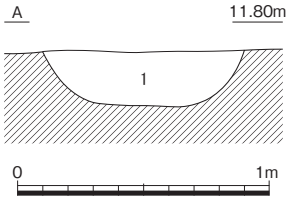
出土土器には2853があり、須恵器杯蓋である。古・後・Ⅰで、本溝の時期も同様となる。（小林）



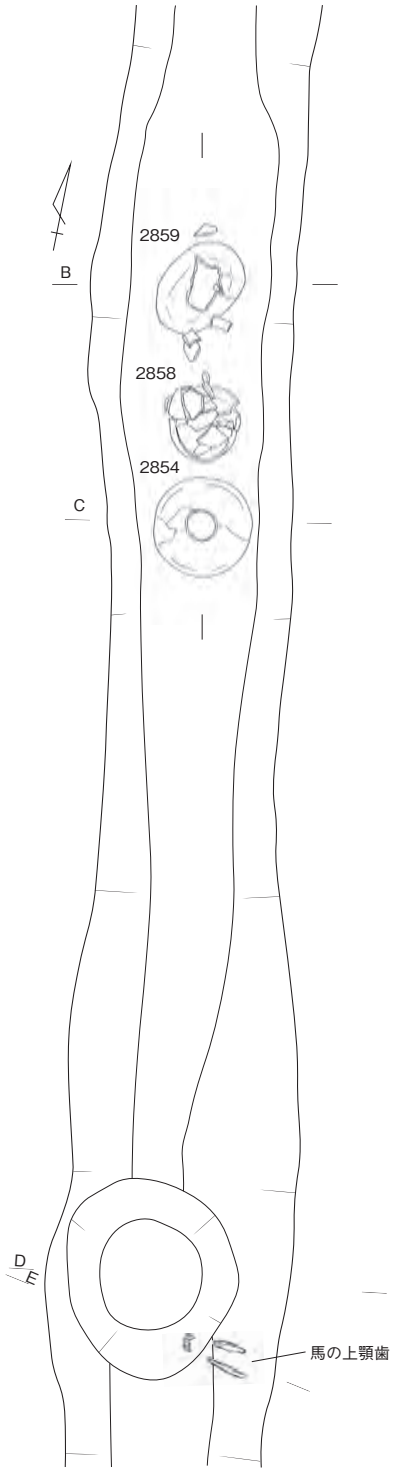
第548図　溝21（1/30）・出土遺物（1/4）

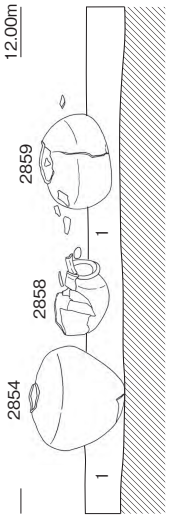
溝22（第471・549・550図、図版69－２・３・104、写真40）

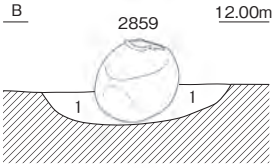
H12・I12で検出している南北方向の溝で、南側は緩やかに東方向へカーブしている。規模は幅75㎝、検出面からの深さ12㎝である。断面形は椀状を呈している。この溝は標高およそ11.70ｍ付近で検出した溝である。しかし溝から出土している土器の出土状況や北側壁面での

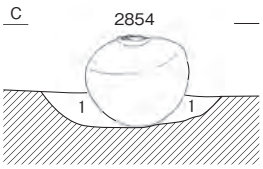


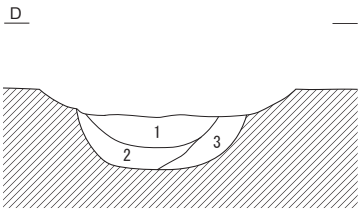
1　にぶい黄橙色(10YR7/2)粘性微砂

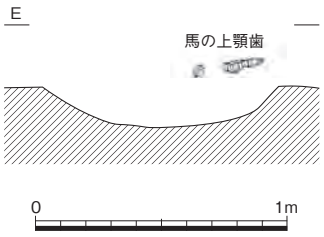










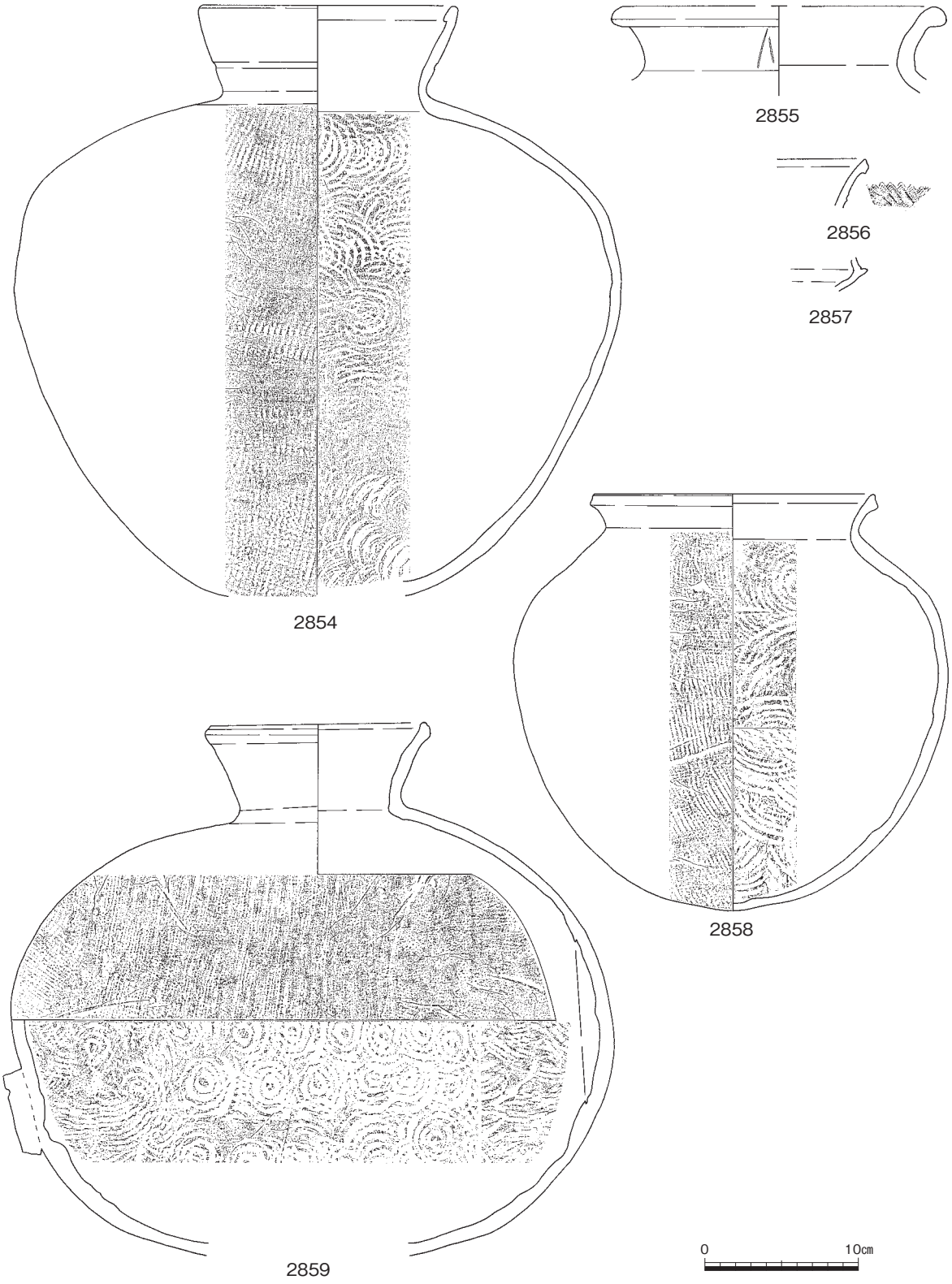


1　灰黄褐色(10YR4/2)粘性微砂
（炭・焼土多含）
2　灰黄褐色(10YR4/2)粘性微砂
（炭・焼土少含）
3　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性微砂

第549図　溝22断面・遺物出土状況（1/30）

写真40　馬上顎歯出土状況（南から）

断面観察からは、元々は標高11.90ｍ付近から掘削されているものである。出土遺物は多くないが、この溝22のＢ・Ｃ断面付近からは、３個体の須恵器が並んで出土しており、特筆される。これらは甕**2854・2858**、横瓶**2859**の３点である。10～20㎝の間を開けて、並んだ状態で出土している。**2854**と



第550図　溝22出土遺物（1/4）

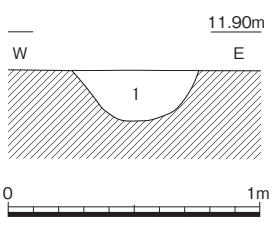
2859は溝の底面にほぼ接地するようにして口縁部を上に向けて置かれていた。また2858のみ底面から５㎝程度浮いた状態で、口縁部を北側に向けて、横向きで出土しているが、底面に接地していないことから、後に倒れた状態で埋没した可能性が考えられ、他の２点と同様に元々は口縁部を上に向けて置かれていたものと考えられる。この須恵器３点に共通することとして、底部をわざと打ち欠いていることが挙げられる。仮器にして使用していることからも、何らかの祭祀に用いられたものであることが窺える。溝の埋土は、にぶい黄橙色の単一層であり、人為的に埋められた痕跡は見られない。よって、この土器を使用した祭祀の後も自然に埋没するまで放置されていたと考えられる。この溝からは、ほかに出土したものとして須恵器の甕2855・2856、須恵器杯身2857がある。出土遺物のうち、2859の横瓶は古墳時代後期以降に出現する器種であり、2857から後期後半の時期の遺構であると考えられる。また、これらの土器から約３ｍ南側で、動物の歯を検出している。第549図の土層断面では溝の検出面から浮いた状態であるが、前述したように溝は元々11.90ｍから掘削されており、歯を検出した標高は11.85ｍであるため、溝の上層埋土中で出土したものと考えている。現地で岡山理科大学の富岡直人氏に鑑定していただき、これは馬の上顎部分の歯で、頭蓋が分解してしまい歯のみが残った状態であり、頭蓋を上下を逆にして置いている状況が復元できるとの教示を受けた。このような馬の頭蓋が、溝内に自然に混入したとは考え難く、人為的に入れられたと考えるのが妥当であろう。溝の底面からは20㎝程度上層での出土であることから、溝が一定程度埋まった状態で入れられており、仮器にした土器を用いた祭祀の後、一定程度溝が埋まった段階で改めて馬の頭蓋を使用した祭祀が行われたものと考えられる。また、馬の歯が出土した部分では、溝の底面で炭と焼土を多く含む土坑を検出している。規模は長軸82㎝、短軸66㎝で、深さ22㎝を測るものだが、馬の歯との関連性は不明である。このような馬の頭蓋を用いた祭祀が何のために行われているものかは定かではないが、近隣の遺跡では加茂政所遺跡などでも古墳時代後期の竪穴住居から馬の頭蓋骨の出土例がある（『加茂政所遺跡』岡山県教育委員会　1999年）。また、本遺跡でも時期は異なるが、中世後期の井戸３の上層から牛の下顎骨と四肢骨が出土している。溝22出土の馬の頭蓋の埋没した時期は、古墳時代後期の範疇には収まるであろう。（圃）

溝23（第471・551図、図版70－１）

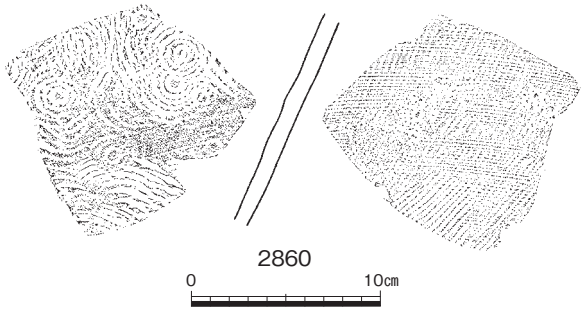
Ｈ13の南東側から発して北東方向へ向い、Ｈ14の北西側端付近まで流れている。南東側隣に掘立柱建物３が存在する。本溝より東側に向かうと、竪穴住居の数が急激に多くなる傾向が見られる。

規模は、上端幅50㎝、底面幅10㎝である。確認面からの深さは20㎝で、底面の標高は11.55ｍになる。断面形状は皿形になり、覆土は粘質である。

遺物はほとんど含まれていないが、甕胴部片2860がある。古墳時代後期である。（小林）



1　暗褐色(10YR3/4)粘性砂質土



第551図　溝23（1/30）・出土遺物（1/4）

７　河道

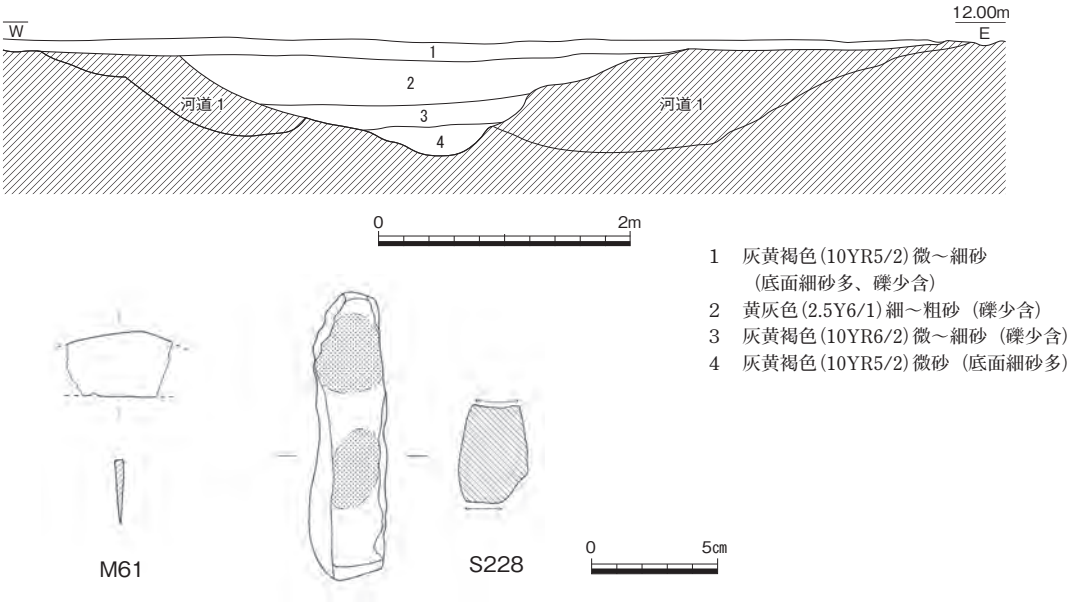
河道５（第470・552・553図、図版73－１）

Ｊ05の南西側から北西方向へ流れ、Ｊ04北西端でほぼ90度に屈曲しＩ04の北東端へ走り調査区外になる。ほぼ弥生時代の河道１と同一地点を流れ、特に屈曲部分から北側方向はまったく同じ場所を走っている。本河道より北西から西側にかけては地形が低く、南東から東側にかけては高くなっている。弥生時代と同様に、古墳時代においても神明遺跡の北から西側にかけての最端部に位置付けられる遺構となる。ただ弥生時代と違って高い地形である東側においても、それほど遺構密度が上がらない。古墳時代の中心はこの溝から約100ｍ東へ向かった調査区である。

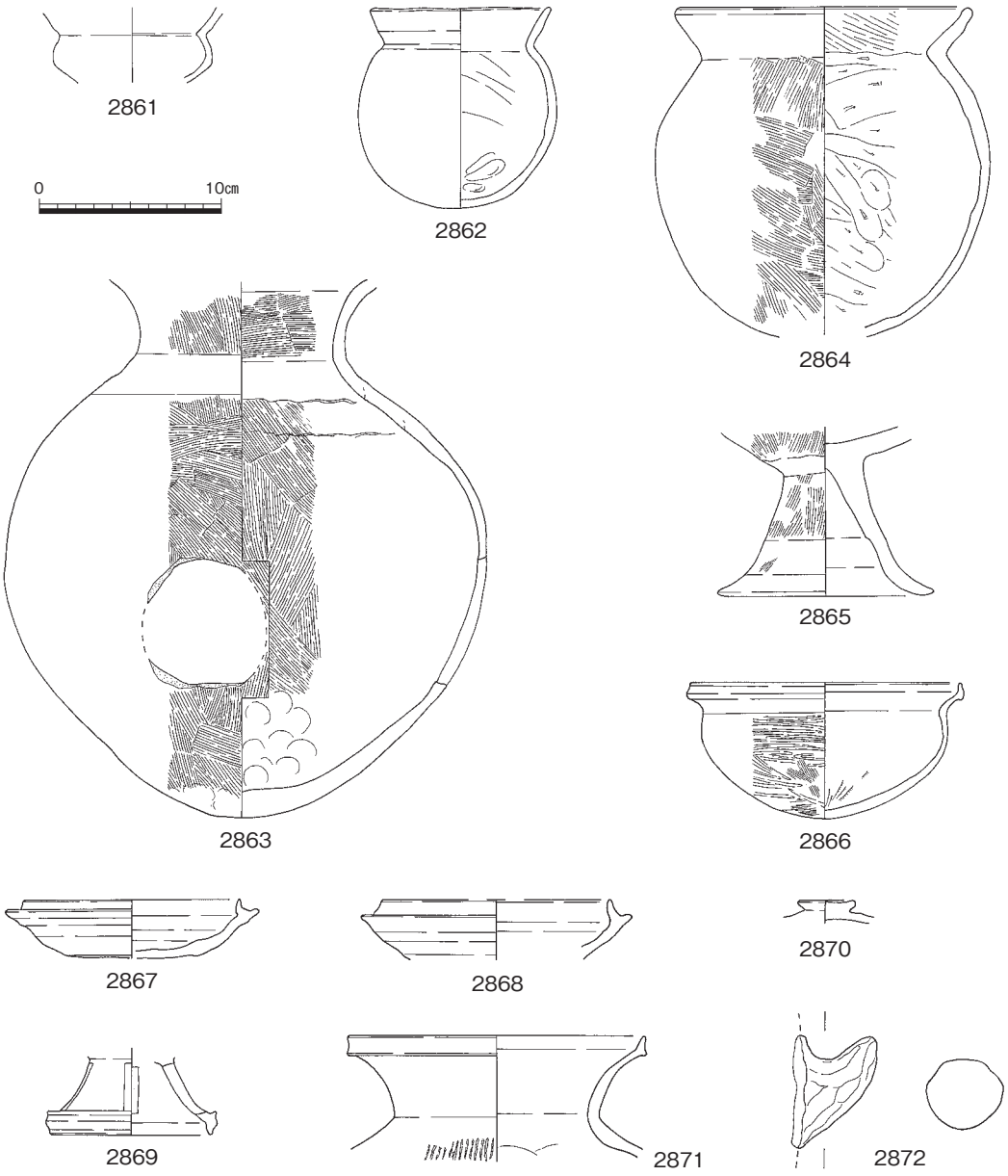
河道の規模は、上端幅400㎝、底面幅45㎝である。確認面からの深さは92㎝で、底面の標高は10.93ｍになる。覆土は上層が粘質を帯びているのに対し、下層は砂質が強くなる。

遺物はどの層からも満遍なく出土するが、大きく２つの時期が存在する。**2861**～**2863**は土師器壺である。**2861**・**2862**は小型で、**2861**の口縁部は胴部より大きく開かれており、坩と言うべき機種である。**2863**は胴部下半に大きな円孔が穿たれている。底部は丸底である。**2864**は土師器甕である。口縁部は「く」字に立ち上がるが、端部がやや内側を向く。**2865**は土師器高杯である。**2866**は土師器鉢である。口縁部は直に立ち上がり、底は丸底であるがやや尖っている。これらの特徴は、時期として古墳時代前期の様相を示している。**2867**～**2870**は須恵器で、**2867**・**2868**は杯身で、**2870**は杯蓋である。**2869**は須恵器高杯の脚部である。方形の透かし孔が穿たれている。**2871**は須恵器甕である。口縁部は直に立ち上がり、胴部外面はタタキ目の跡が残る。**2872**は土師器甑の把手部分である。これらの遺物は、古墳時代後期の様相を示している。

このような出土遺物から、前期と後期の２時期の存在が明らかとなった。本河道は、古墳時代を通して存続していたと考えて差し支えがない。この場所は弥生時代後期を通しても河道であった場所であり、引き続きこの場所が低位部との境であったのだろう。本河道が埋まり、東西間の比高差が狭まった後に、さらに西側において奈良時代の遺構が築かれることとなる。　（小林）



第552図　河道５（1/60）・出土遺物①（1/3）

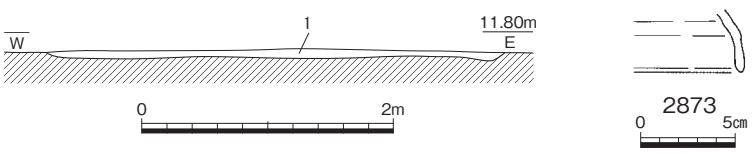


第553図　河道５出土遺物②（1/4）

８　たわみ

たわみ５（第471・554図、図版75－３）

Ｉ15区中央部に位置するが、現代用水路の関係で北側は調査できなかった。埋土は基盤層よりもやや灰色味が強い。竪穴住居の可能性を想定したが、壁体溝が存在しないこと、用水路北側の調査範囲内まで広がらないと判断して、単独の遺構とした。遺物は少量で、図示できたのは須恵器杯蓋**2873**のみである。６世紀前半代の時期を示し、遺構の時期を表すと考える。　　（氏平）



1　褐灰色(10YR6/1)シルト～粗砂（土器・炭少含）

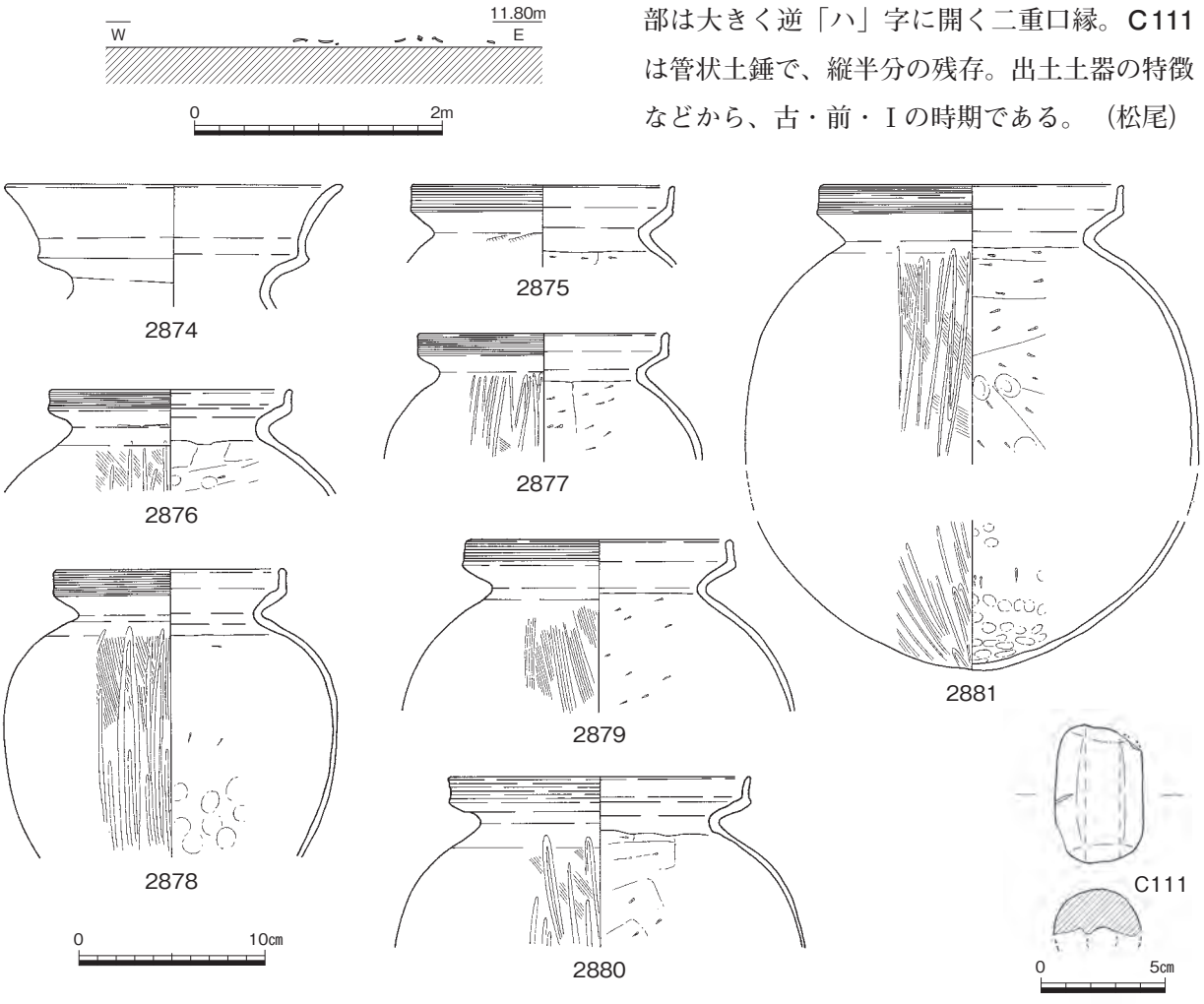
第554図　たわみ５（1/60）・出土遺物（1/4）

９　その他の遺構・遺物

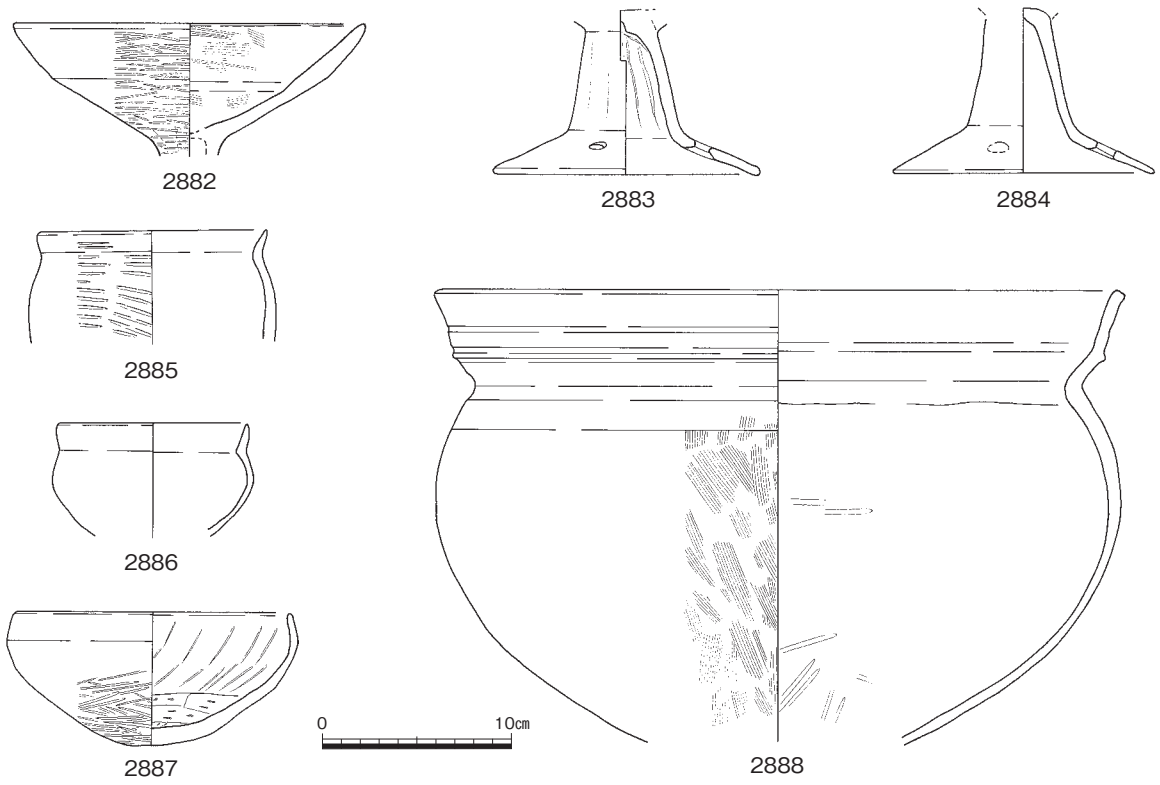
土器溜まり２（第471・555・556図、図版41－３）

Ｈ16中央東寄りに位置する。当初は竪穴住居の可能性を考慮して調査を行ったが、明瞭な掘り方がないことから土器溜まりとして報告する。土器の集中する箇所は南北２カ所ある。北側の範囲は東西320㎝、南北75㎝を測り、西隅が北側へ飛び出している。南側の範囲はＬ字状で、東西50㎝、南北90㎝を測る。ただし南北共に出土する土器の明瞭な時期差はなく、検出時の標高もほぼ同じことから、一まとまりの遺構と考えた。第555図の断面図は、土器溜まり北側一群の東西断面である。

土器は2874～2888が出土している。壺2874は口縁部が大きく逆「ハ」字に開く二重口縁を持つ。甕2875～2881は、二重口縁部の外面に櫛描きが巡る。いずれの個体も体部最大径は上半に位置する。体部外面はタテハケの後に縦方向のヘラミガキを施す。体部内面は、頸部直下から横あるいは斜め方向のヘラケズリ。指頭圧痕を至る所で観察でき、特に底部は明瞭に残る。2882～2884は高杯。2882は杯部が浅く、外面は細かい横方向のヘラミガキ、内面はヨコハケ。2883・2884は脚柱部のみで、中空の柱部に大きく開く裾部が取り付き、４方向に円孔が配置される。2885～2888は鉢。2885は「く」字状口縁で、体部外面には粗いタタキが見える。2886は「く」字状口縁を有し、体部は外へ丸く張り出す。2887は口縁部が内湾。2888は大形の鉢で、口縁部は大きく逆「ハ」字に開く二重口縁。C111は管状土錘で、縦半分の残存。出土土器の特徴などから、古・前・Ⅰの時期である。（松尾）



第555図　土器溜まり２（1/60）・出土遺物①（1/4・1/3）

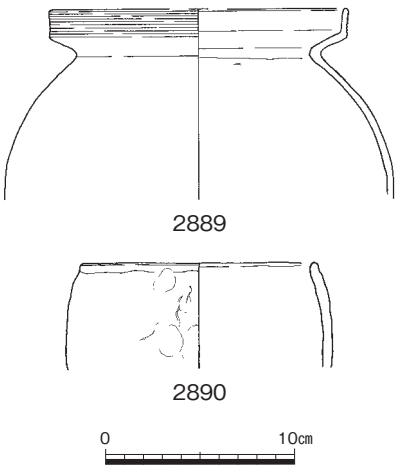


第556図　土器溜まり２出土遺物②（1/4）

柱穴33・34（第470・471・557図）

出土土器から古墳時代と断定できた柱穴は少なく、竪穴住居53～55周辺と竪穴住居57～60周辺に偏在している。弥生時代には低位部で遺構の希薄な場所であったが、逆に削平を免れた結果とも捉えられる。図示し得る土器が出土した柱穴は柱穴列２の西側にあるＰ33と南東側にあるＰ34の２基のみである。土器を伴わない柱穴は、中世以降の耕作土で埋没した柱穴を除き、弥生時代として扱っている。

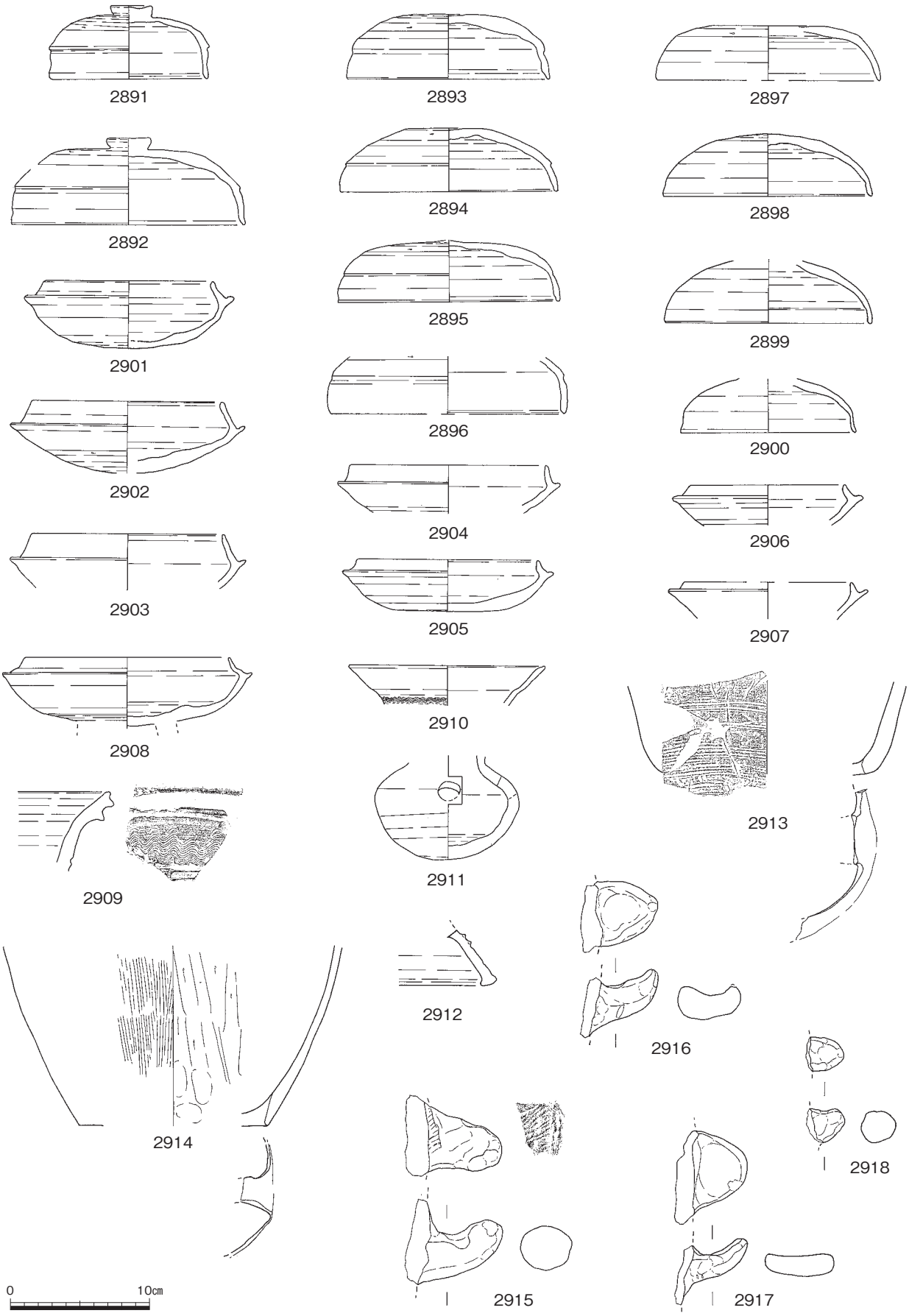
2889は櫛描き沈線の甕で古墳時代前期に、**2890**は土師器の鉢で古墳時代後期に比定される。　（渡邉）



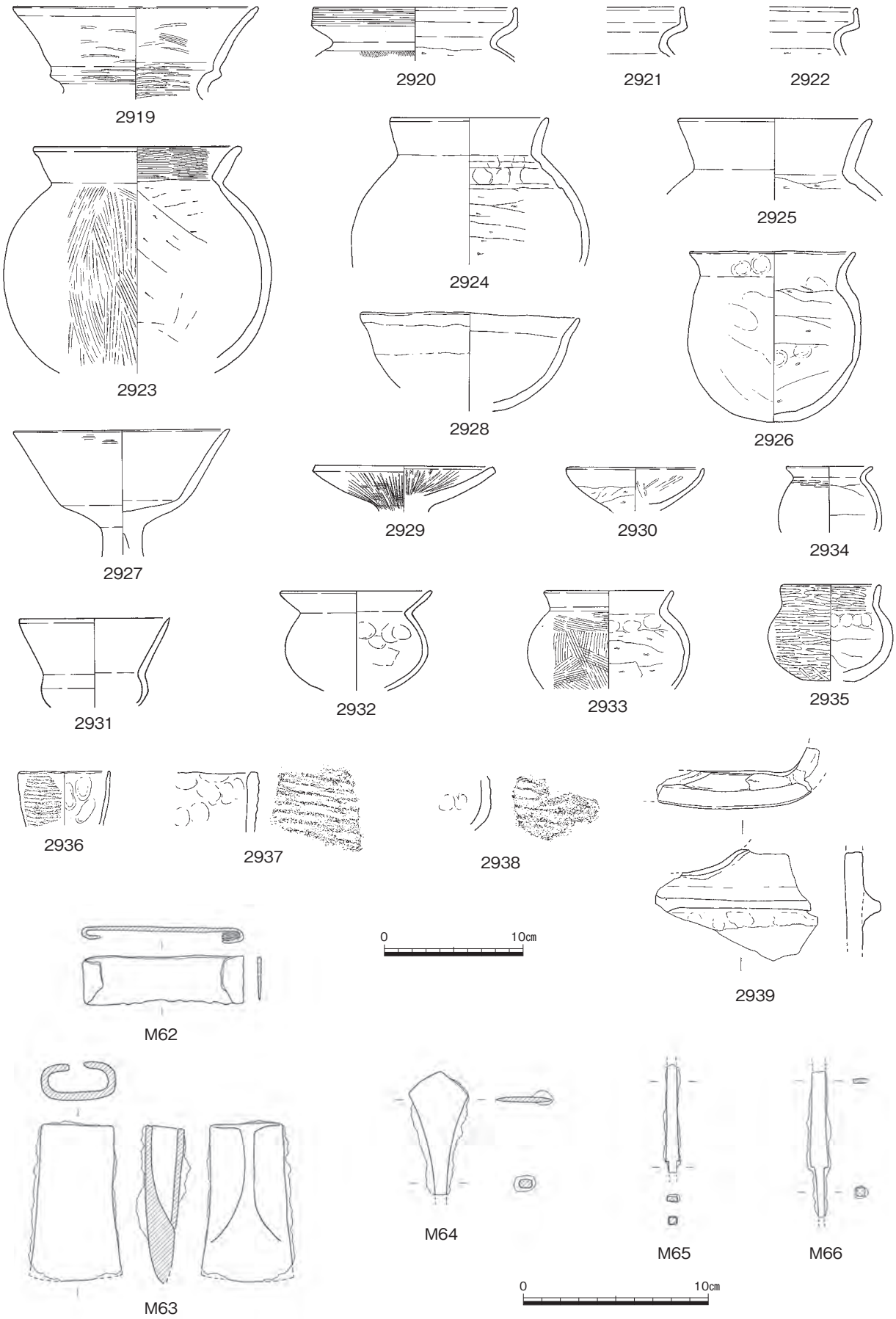
第557図　柱穴33・34出土遺物（1/4）

遺構に伴わない遺物（第558～560図、図版114・119）

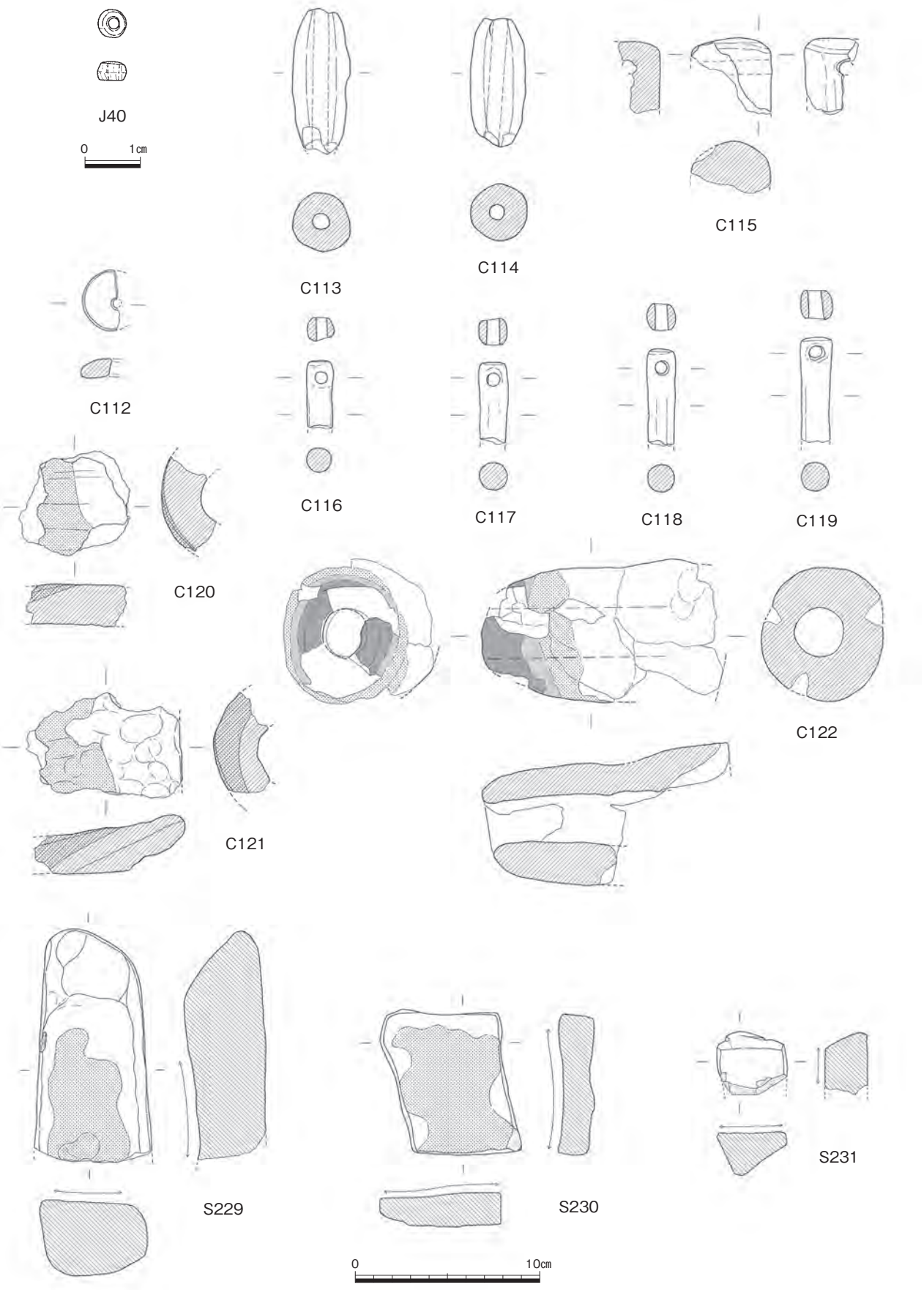
弥生時代と古墳時代の遺構分布は大きく変化しており、ここに掲載した遺物の地点毎の比率も大きく異なっている。図示した土器の過半数が旧４区出土で、須恵器杯と土師器甑が大半を占めている。製塩土器や埴輪も出土した。古墳時代以前の遺構がない旧６区からの出土土器もある。土師器甕**2923**は古代以降の遺構の基盤となる砂層よりさらに下位にある礫層からの出土で、古墳時代においてなお土砂の流入を受ける環境にあったことを示唆している。鉄器はすべて旧１区から、古墳時代に特徴的な土錘**C116**～**C119**はすべて旧３区から出土するなど遺物内容に偏りが認められ、居住者の性格を反映している可能性がある。旧１区からは羽口も出土した。旧４区から出土した埴輪**2939**は非常に摩滅しており、遺跡外から流入したと考えられる。　（渡邉）



第558図　その他の出土遺物＜古墳時代①＞（1/4）



第559図　その他の出土遺物＜古墳時代②＞（1/4・1/3）



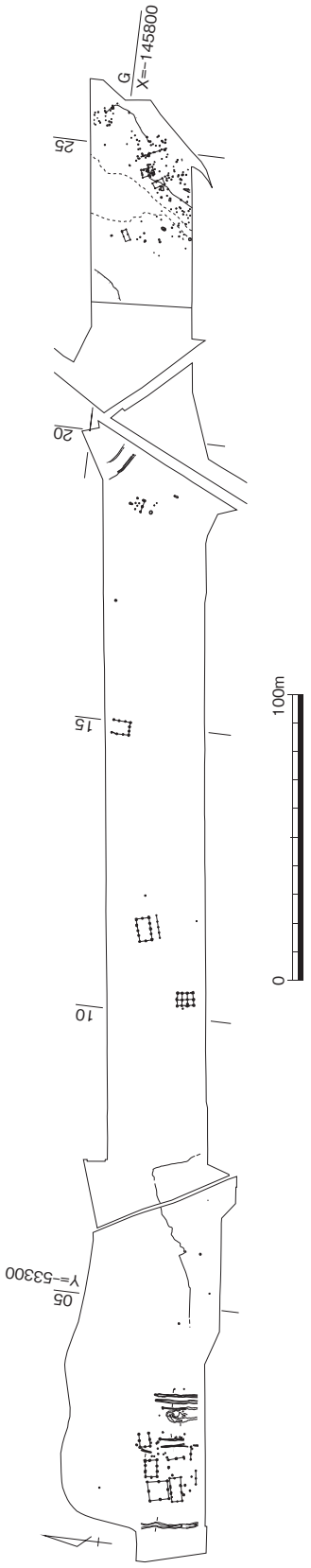
第560図　その他の出土遺物＜古墳時代③＞（1/1・1/3）

第４節　古代の遺構・遺物

１　概要

古代になると、古墳時代以前に存在した河道１と河道４が埋没し、遺跡の東側（旧６区）の低位部にも土砂の堆積が進むことで、遺跡全体に遺構が存在するようになる。しかし遺構数は古墳時代以前と比べて少なく、全体的には希薄であるといえる。遺跡の西側（旧１区）には、８～９世紀代を中心とした掘立柱建物が４棟と柱穴列、溝などの遺構が集中する。これらの遺構のなかには築地塀となる可能性がある２条一対となる溝があるほか、遺物には丹塗り土師器や須恵器の稜椀、硯に転用している須恵器杯などが出土している。また遺跡中央付近（旧３区）では、９世紀代の目隠し塀を伴う、もしくは流造の可能性があると考えられる掘立柱建物10と総柱の掘立柱建物９が他の遺構からは離れて単独で立地しており、注目される。これらは掘立柱建物の棟方向及び柱穴列や溝の方位がほぼ磁北を向いていることなどから、官的性格を窺わせるものである。

この遺跡西側に対して、10～11世紀の遺構を中心とするのが、古墳時代以降に新しく形成された微高地にあたる遺跡東側（旧６区）となる。ここには10世紀以降に掘立柱建物３棟や柱穴列、また土坑墓などが作られるようになるが、検出された掘立柱建物や柱穴列は総社条里に沿う方位で作られており、遺跡西側・中央部とは異なる様相を呈している。（圃）



第561図　古代遺構全体図①（1/2,500）

写真41　古代の遺構検出状況＜旧１区＞（北東から）

第562図　古代遺構全体図②（1/400）

第563図　古代遺構全体図③（1/500）

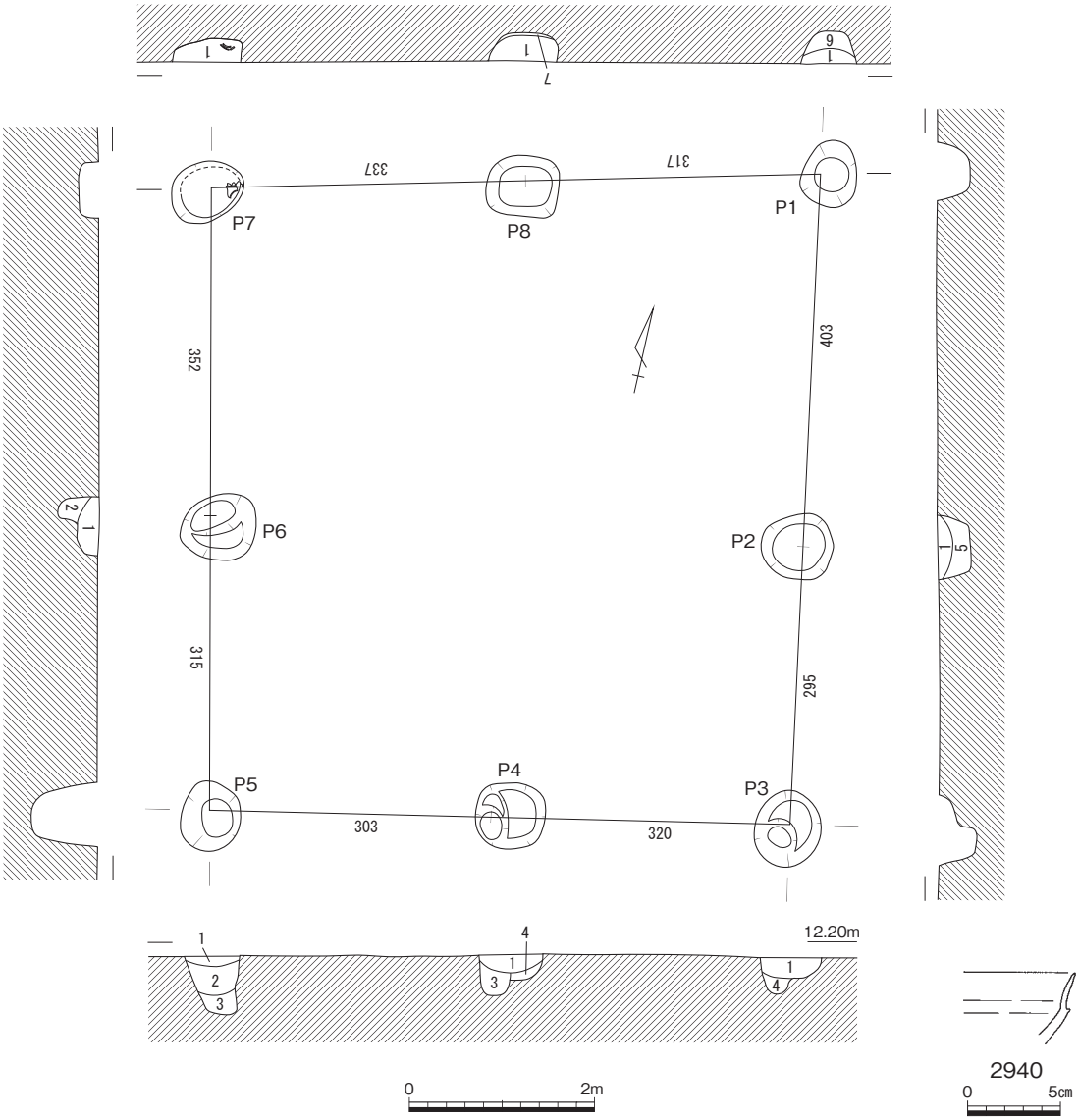
第564図　古代遺構全体図④（1/500）

２　掘立柱建物

掘立柱建物５（第562・565図、図版30－２・31－３）

Ｊ01の中央よりやや北東側に位置する。南側には掘立柱建物６が近接しており、関連性が考えられる。また東側には掘立柱建物７が存在する。２×２間の側柱建物で、桁行総長698～667㎝、梁行総長654～623㎝を測る。柱間寸法は、どれも300㎝ぐらいになり大きい。棟方向はＮ-14°-Ｗで、床面積は43.76㎡になる。柱穴掘り方は円形が多く、規模は50～60㎝前後である。これらの規模は、同時期の掘立柱建物と比べると標準の数値から外れている。

出土遺物には須恵器片**2940**がある。遺物の時期は７世紀代の可能性が高いが、本遺構は掘立柱建物



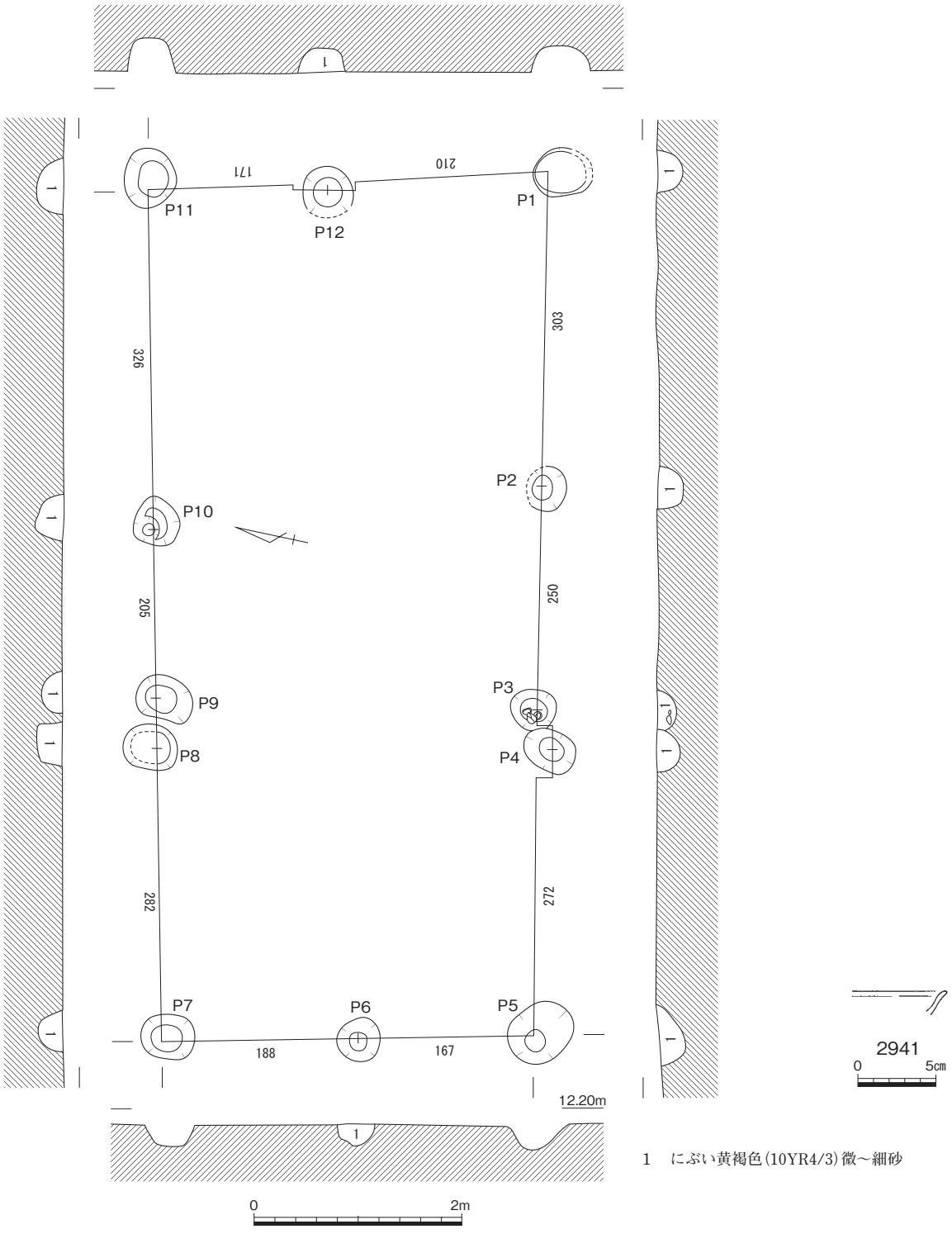
1　灰黄褐色(10YR5/2)粘性微砂
2　灰黄褐色(10YR4/2)細～粗砂（黒褐色(10YR3/2)シルト混）
3　黒褐色(10YR3/2)シルト
4　にぶい黄橙色(10YR6/3)細～粗砂（黒褐色(10YR3/2)シルト混）
5　灰黄褐色(10YR4/2)粘性微砂
　（にぶい黄橙色(10YR6/3)粗砂混）
6　灰黄褐色(10YR4/2)粘性微砂
7　にぶい黄橙色(10YR6/4)シルト

第565図　掘立柱建物５（1/80）・出土遺物（1/4）

６と強い関連性が考えられ、また掘立柱建物８と棟方向が近いことから、８世紀代になるのではないかと推察される。（小林）

掘立柱建物６（第562・566図、図版30－３・31－３）

Ｊ02の中央よりやや南東側に位置する。北側には近接して掘立柱建物５が近接しており、関連性が考えられる。また南側には柱穴列６が存在する。３×２間の側柱建物で、桁行総長825～813㎝、梁行



1　にぶい黄褐色(10YR4/3)微～細砂

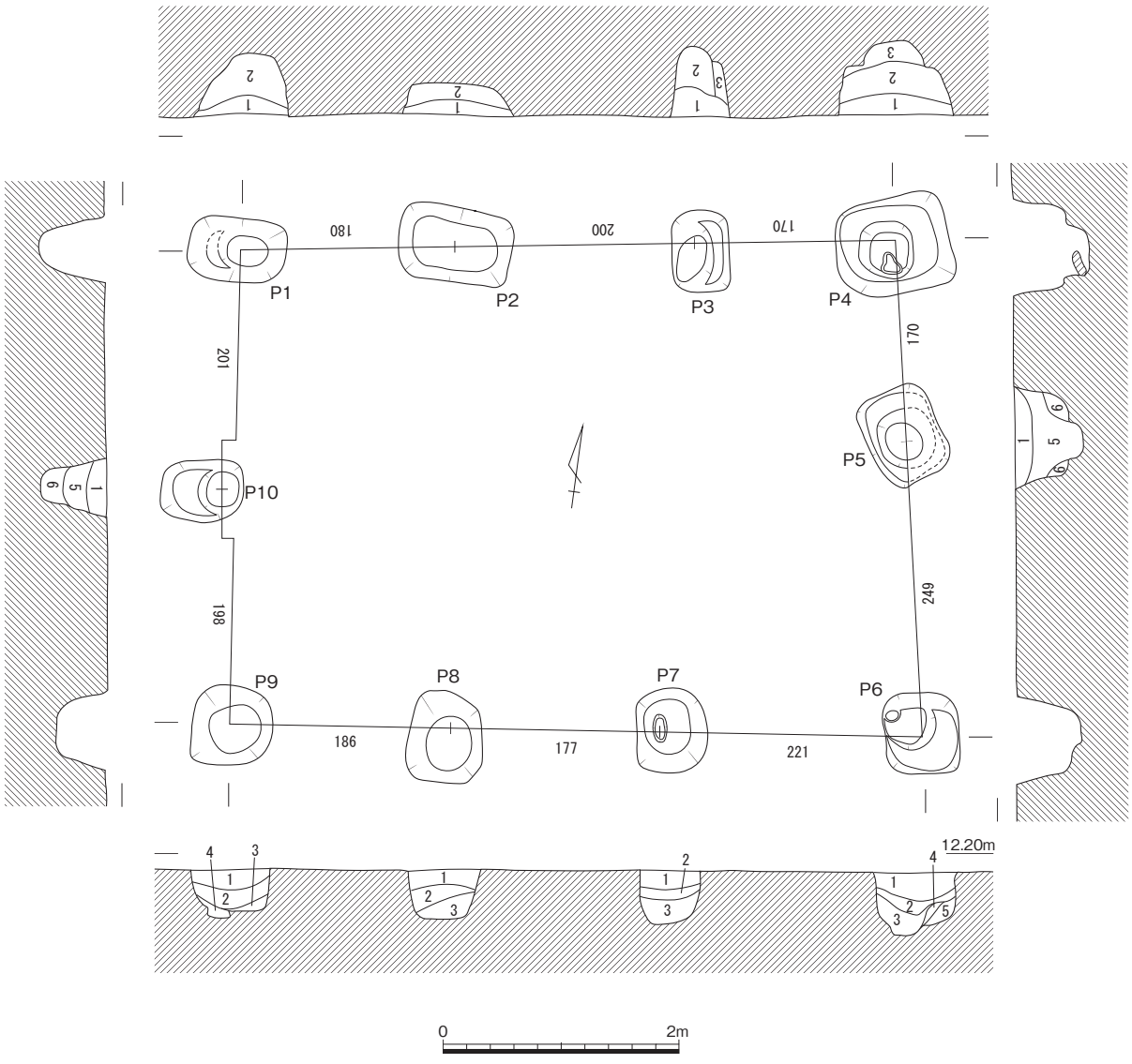
第566図　掘立柱建物６（1/60）・出土遺物（1/4）

総長381～355㎝を測る。柱間寸法は、桁行方向が300～200㎝ぐらいになり、真ん中が狭くなる。梁行方向は210～167㎝である。これらの規模は、同時期に存在する３×２間の側柱建物には類例が少ない数値であり、本遺構の特異性が窺える。棟方向はＮ-77°-Ｅで、床面積は30.59㎡になる。柱穴掘り方は円形になり、規模は50～60㎝前後である。

出土遺物には土師器皿**2941**がある。時期は８世紀代になり、本遺構の時期も同様になることが推定できる。この建物は、棟方向や立地関係から、北側に近接する掘立柱建物５と強い関連性が考えられる。そのため同時併行して存在した可能性が高く、掘立柱建物５の時期も８世紀代になる可能性が考えられる。（小林）

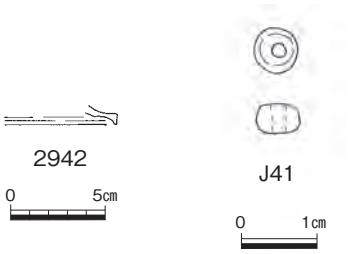
掘立柱建物７（第562・567・568図、図版31－１・３・119）

Ｊ01とＪ02に跨がるが、その大半はＪ02の北西側に位置している。西側には掘立柱建物５があり、東側には溝25が存在する。また本遺構より北側は、同時の遺構が存在しなくなる。３×２間の側柱建



1　にぶい黄褐色(10YR4/3)微～細砂
2　暗褐色(10YR3/3)粘性微～細砂
3　暗褐色(10YR3/4)微
4　褐色(10YR4/6)微
5　灰黄褐色(10YR4/2)細砂
6　黒褐色(10YR3/2)粘性微砂

第567図　掘立柱建物７（1/60）



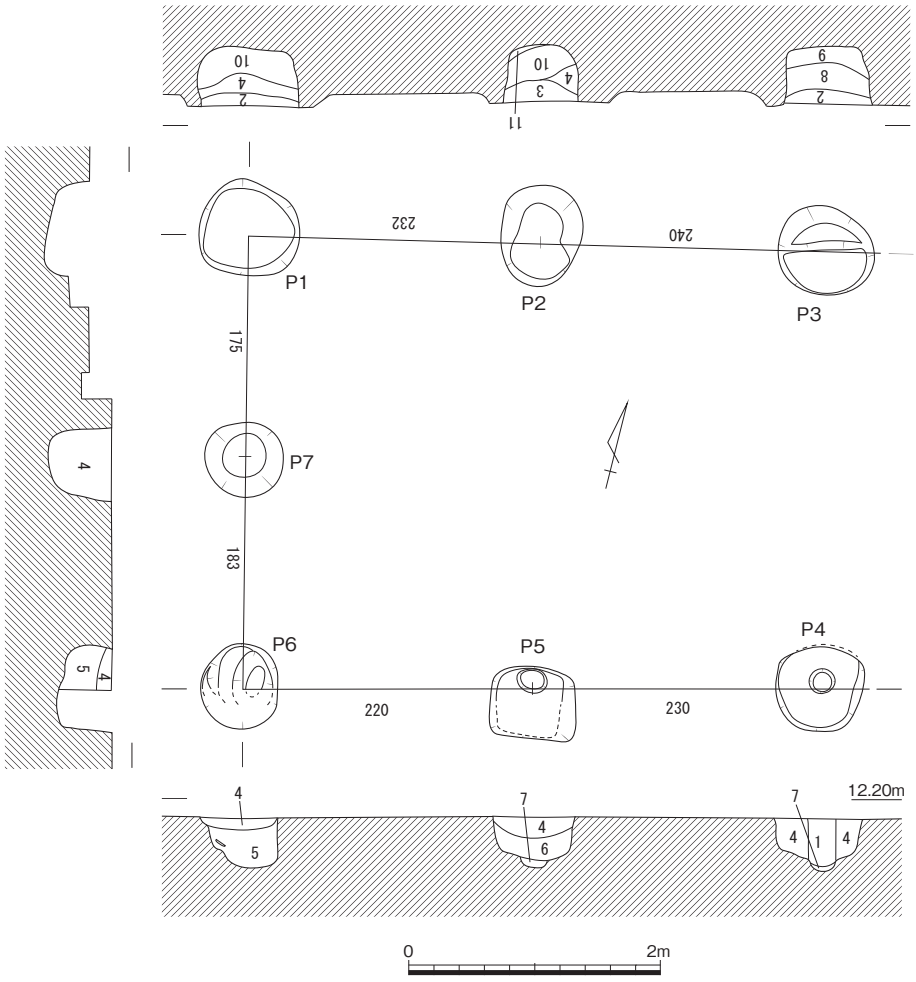
第568図　掘立柱建物７
出土遺物（1/4・1/1）

物で、桁行総長584～550㎝、梁行総長419～399㎝を測る。柱間寸法は、桁行方向が248～170㎝になり、両端が180㎝前後になるのに対し、真ん中は240㎝前後と広くなる。梁行方向は249～170㎝である。棟方向はＮ-83°-Ｅで、掘立柱建物６とはややずれた方向になる。床面積は23.44㎡を測る。柱穴掘り方は方形になり、規模は70～90㎝前後である。またＰ９やＰ10のように柱自体の掘り込みと思われるくぼみが存在する柱穴もあり、規模は約50㎝である。柱穴覆土には黄褐色の砂が混じるなど、掘立柱建物６とは違いがある。

出土遺物には須恵器高杯脚部**2942**があり、時期は７世紀後葉である。**Ｊ41**はガラス製の小玉である。本遺構の時期は、**2942**の時期と同様になることが推定でき、掘立柱建物５・６より先行して立地していたと考えるのが妥当であろう。（小林）

掘立柱建物８（第562・569・570図、図版31－２・104）

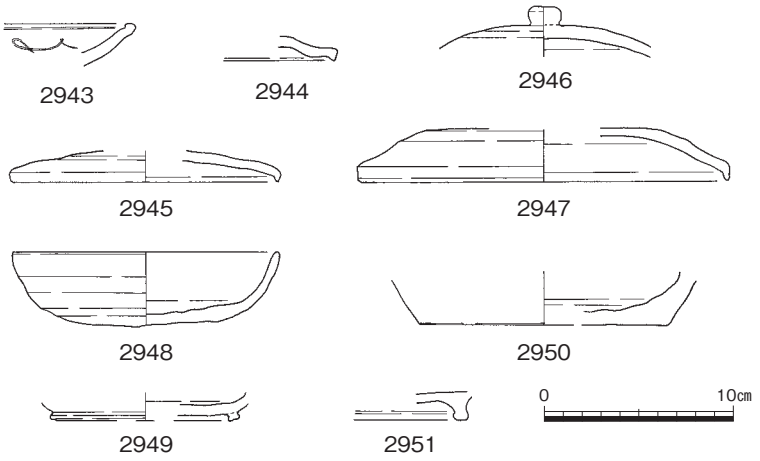
Ｉ02とＪ02に跨がるが、その大半はＪ02の北側に位置している。西側には溝25とその先に掘立柱建物７があり、南側には溝26・27が存在する。また本遺構より北側は、同時の遺構が存在しなくなる。



1　にぶい黄褐色(10YR4/3)
粘性微砂
(浅黄色(2.5Y7/3)細砂含)
〈柱痕〉
2　灰黄褐色(10YR5/2)
粘性微砂
3　灰黄褐色(10YR6/2)
粘性微砂（基盤層多含）
4　灰黄褐色(10YR4/2)
粘性微砂
5　黒褐色(10YR3/1)
粘性微砂（炭・焼土少含）
6　黒褐色(10YR3/1)
粘性微砂
(浅黄色(2.5Y7/3)含)
7　灰黄色(2.5Y5/1)シルト
(暗灰黄色(2.5Y5/2)
シルト含)〈柱痕アタリ〉
8　灰黄褐色(10YR4/2)
粘性微砂（焼土粒含）
9　灰黄褐色(10YR4/2)
粘性微砂
(基盤層・焼土粒混)
10　褐灰色(10YR5/1)シルト
11　褐灰色(10YR4/1)シルト

第569図　掘立柱建物８（1/60）

桁行２間と梁行２間が残存しているが、本来桁行がもう１間伸びて３×２間の側柱建物になる可能性が考えられる。そうなると桁行総長は７ｍ弱になろう。また梁行総長365㎝前後になる。柱間距離は、桁行方向が240～220㎝になり、梁行方向は183～175㎝である。棟方向はＮ-77° -Ｗで、掘立柱建物６とほぼ同じ方向になる。柱穴掘り方は円形・方形があり、規模は60～80㎝前後で、梁行の真ん中がやや小さい。またＰ４～Ｐ６のように柱痕が存在する柱穴もあり、規模は約20～30㎝である。



第570図　掘立柱建物８出土遺物（1/4）

出土遺物には以下のものがある。**2943・2951**は土師器杯である。**2943**の内側には暗文があり、また口縁部の内側に条線が１本存在する。**2944～2949**は須恵器杯で、**2944～2947**は蓋、**2948・2949**は身である。**2950**は須恵器壺である。これらの土器は８世紀前葉～中葉の様相であり、本遺構の時期も同様になろう。（小林）

掘立柱建物９（第563・571図、図版32－１・119）

Ｉ10の南西側に位置している。やや離れた北東側に掘立柱建物10と柱穴列９が立地している以外には、近隣に同時期の遺構は存在しない。逆にこの３つの遺構の特異性が窺え、これらは関連性が高い遺構と考えられる。

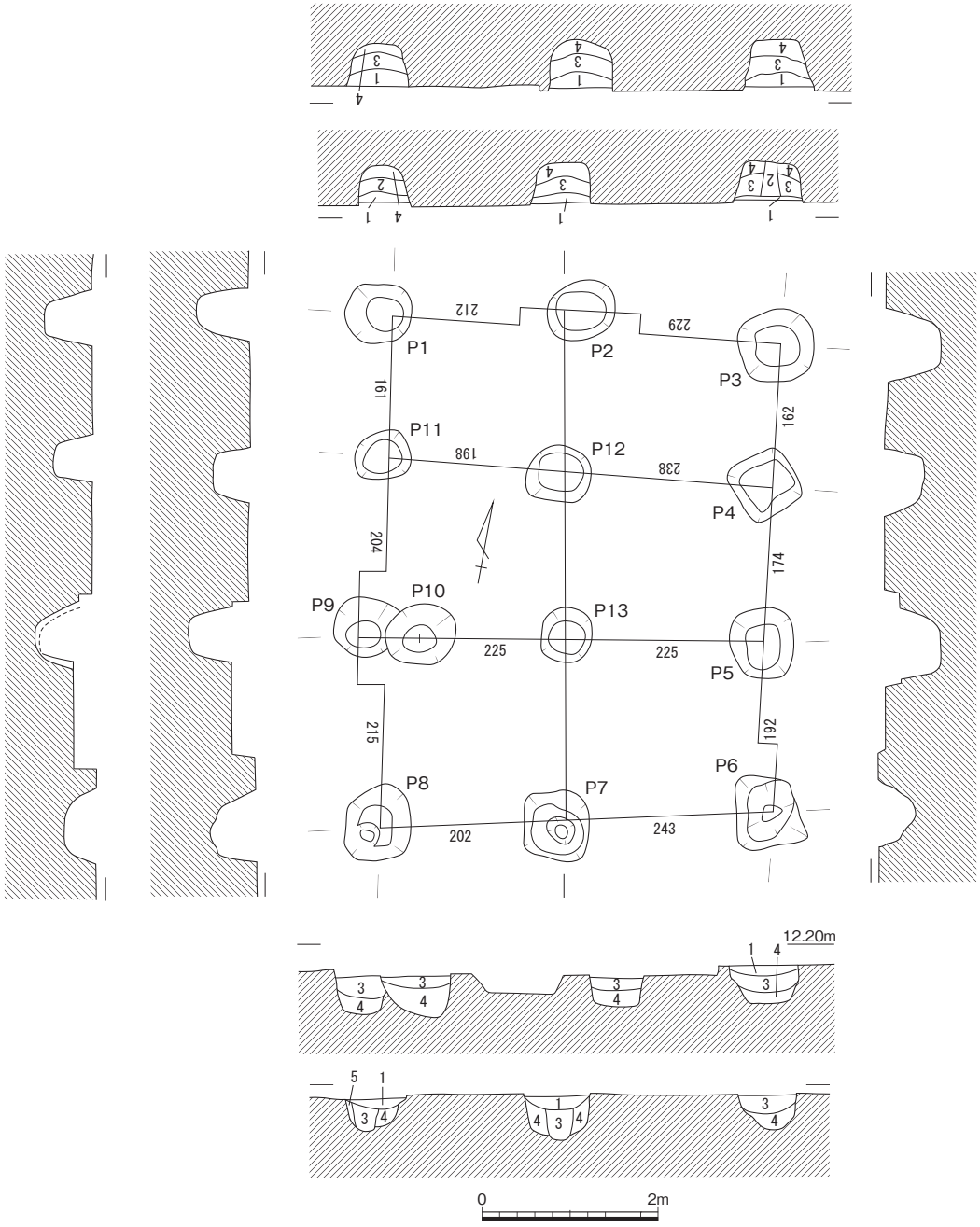
本遺構の規模は、３×２間の総柱建物である。桁行総長は580～528㎝で、梁行総長445～441㎝前後になる。柱間寸法は、桁行方向が215～161㎝になり、梁行方向は243～202㎝である。棟方向はＮ-11° -Ｅで、床面積は24.65㎡になる。これらの規模は、３×２間の総柱建物の標準的な数値を示している。柱穴掘り方は円形・隅丸方形があり、規模は40～60㎝前後である。またＰ１～Ｐ２のように柱痕が存在する柱穴もあり、規模は20～30㎝前後である。

出土遺物には以下のものがある。**2952・2953**は須恵器甕の破片である。内面の当て具痕は、１本１本が細く深くなる。**Ｊ42**は滑石製の臼玉である。本建物は、最も近い掘立柱建物10を約90度振った棟方向になり、両者が関連すると考えた場合、同時期になることが予想される。そのため、本建物の時期は９世紀代になるであろう。（小林）

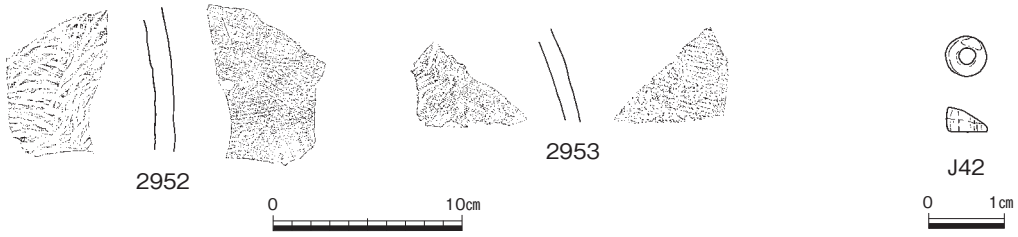
掘立柱建物10（第563・572・573図、図版32－２）

Ｈ11とＩ11のちょうど中間に位置している。南側に平行して柱穴列９があり、やや離れた南西側に掘立柱建物９が立地している。これら以外には、近隣に同時期の遺構は存在しない。逆にこの３つの遺構の特異性が窺え、これらは関連性の高い遺構の可能性が考えられる。

本遺構の規模は、４×２間の側柱建物である。桁行総長は795～787㎝で、梁行総長448～435㎝前後になる。柱間寸法は、桁行方向が221～169㎝になり、梁行方向は225～213㎝である。棟方向はＮ-74° -Ｅで、床面積は35.01㎡になる。柱穴掘り方はほぼ方形であり、規模は60～80㎝前後である。またＰ

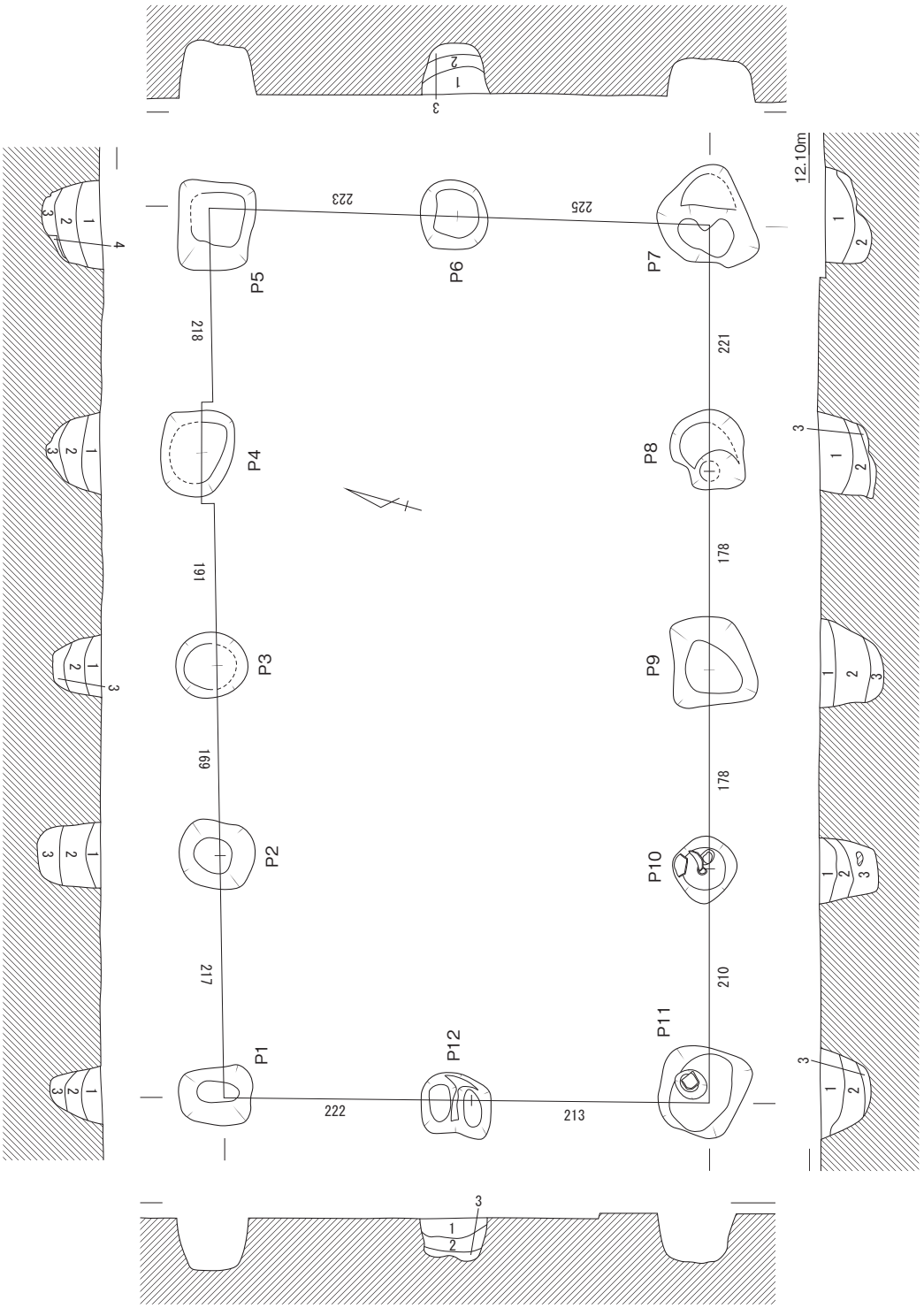


1　褐色(10YR4/4)シルト質微砂
2　黒褐色(10YR3/2)シルト質微砂
3　暗褐色(10YR3/4)シルト質微砂
4　暗褐色(10YR3/4)シルト質細砂
5　にぶい黄橙色(10YR7/2)細砂

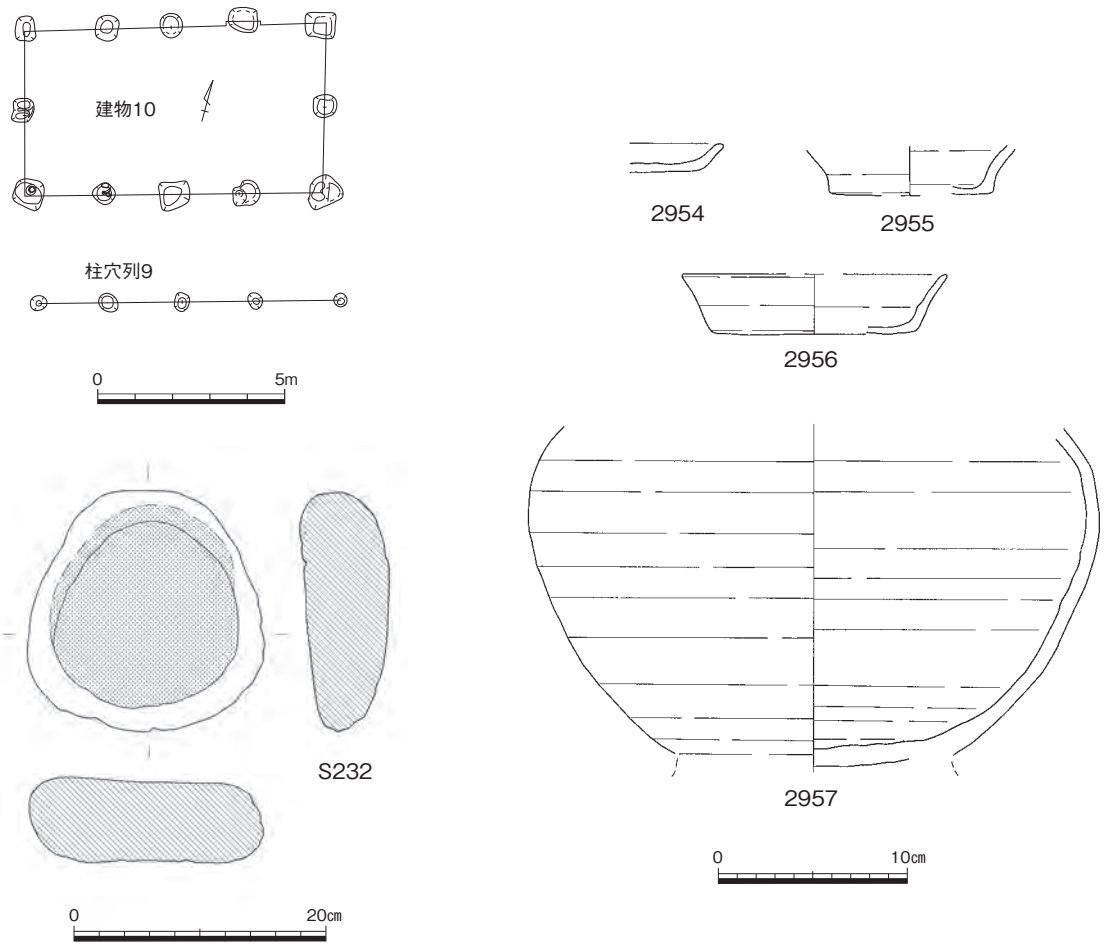


第571図　掘立柱建物９（1/80）・出土遺物（1/4・1/1）

８・Ｐ11のように柱痕の跡と思われるくぼみが存在する柱穴もあり、規模は20～30㎝前後である。南側の桁行辺の柱間寸法は、南側に立地している柱穴列９の柱間寸法にかなり近似していることがわか



第572図　掘立柱建物10（1/60）



第573図　掘立柱建物10と柱穴列９の位置関係（1/200）・掘立柱建物10出土遺物（1/4・1/6）

る。このことから柱穴列９は目隠し塀などの用途ではなく、本遺構の廂部分で、特異な屋根構造になる可能性も残されている。

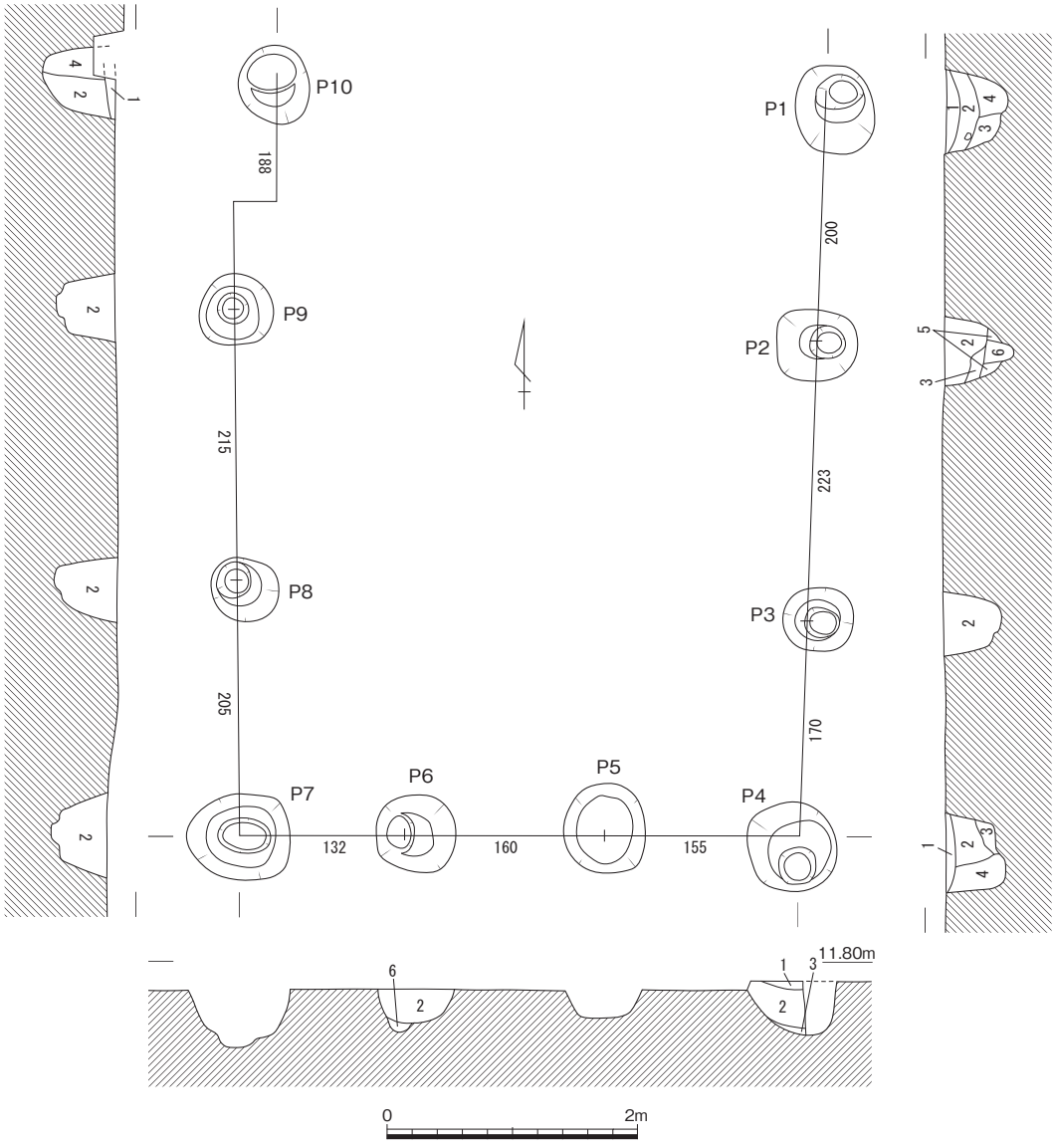
出土遺物には以下のものがある。**2954**～**2956**は土師器杯、**2957**は壺である。**S232**は流紋岩製の敲石である。これらの遺物は９世紀代になり、本遺構の時期も同様になる。（小林）

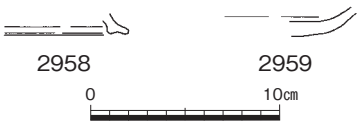
掘立柱建物11（第563・574図、図版32－３）

Ｈ14とＨ15の間に位置しているが、その大半はＨ14の北東側にある。近隣には同時期の遺構は存在せず、かなり離れた西側に掘立柱建物10と柱穴列９が立地している。

北側は調査区境にあたるため確実な規模は不明であるが、Ｐ１とＰ10は他の柱穴よりやや深く法量も大きいため、本遺構の規模は３×３間の側柱建物であった可能性が強く、北側の梁行を除いては、ほぼ全容が判明したと考えている。桁行総長は608㎝で、梁行総長447㎝になる。柱間寸法は、桁行方向が223～170㎝になり、両脇が180㎝前後になるのに対し、真ん中が220㎝前後と広くなる。梁行方向は160～132㎝である。棟方向はＮ-０°で、ほぼ真北になる。床面積は28㎡前後になることが予想される。柱穴掘り方は円形であり、規模は50～70㎝前後である。また大半の柱穴に柱痕の跡と思われるくぼみが存在し、規模は20～30㎝前後である。

出土遺物には以下のものがある。**2958**・**2959**は須恵器で、**2958**は杯蓋、**2959**は杯身である。時期は７世紀後葉であり、本遺構の時期も同様になる。（小林）





1　灰黄褐色(10YR4/2)粘性砂質土（土器片・炭片混）
2　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性砂質土（土器片・炭片混）
3　にぶい黄褐色(10YR5/4)微砂質土
4　暗褐色(10YR3/3)粘性砂質土（土器片・炭片混）
5　灰黄褐色(10YR4/2)砂質土
6　褐灰色(10YR4/1)砂質土（土器片・炭片混）（にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性砂質土小塊混）

第574図　掘立柱建物11（1/60）・出土遺物（1/4）

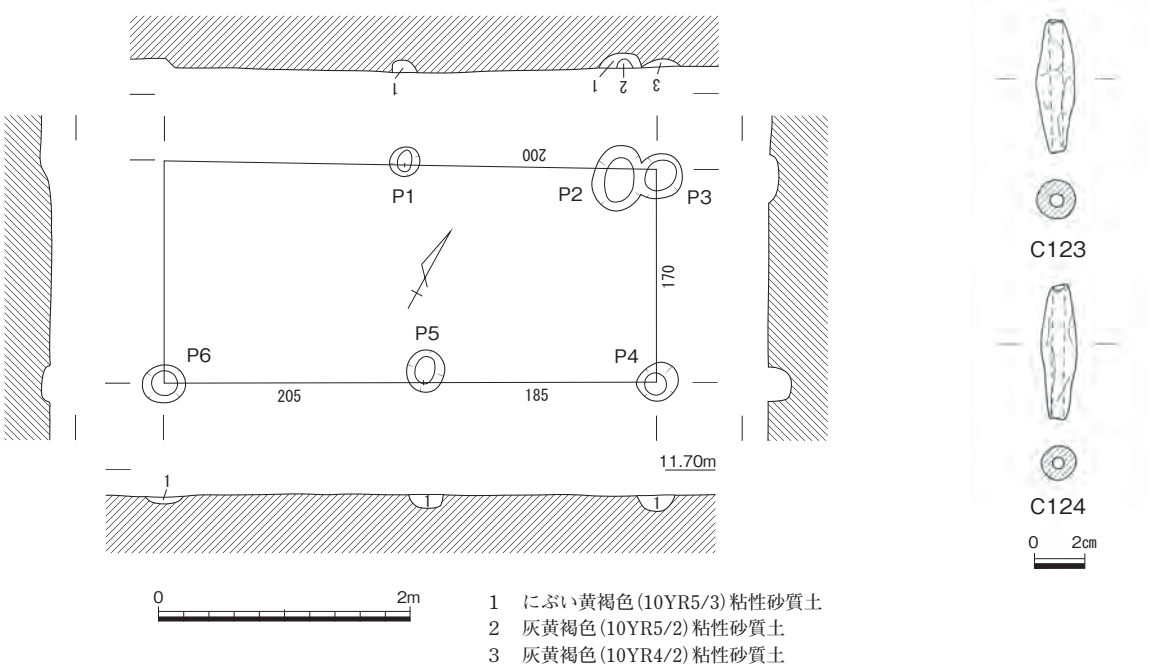
掘立柱建物12（第564・575図、図版33－１・117）

Ｇ23北半に位置する。古墳時代以前の遺構はなく、平安時代になって安定した新造の微高地に立地する。検出面の標高は11.50ｍである。北東角は柱穴が２本あるが、周辺に他の柱穴や遺構がない状況から、本建物に付随する可能性が高いと判断した。しかし、Ｐ２と他の柱穴では規模や形状に差があり、Ｐ２は別の機能を持った小土坑の可能性もある。管状土錘**Ｃ123**・**Ｃ124**はＰ２から出土している。

厳密な時期を特定できないが、平安時代後半の土師器や内面黒色土器細片が出土している。他遺構の状況と併せて考えると10世紀代の可能性が高い。（渡邉）

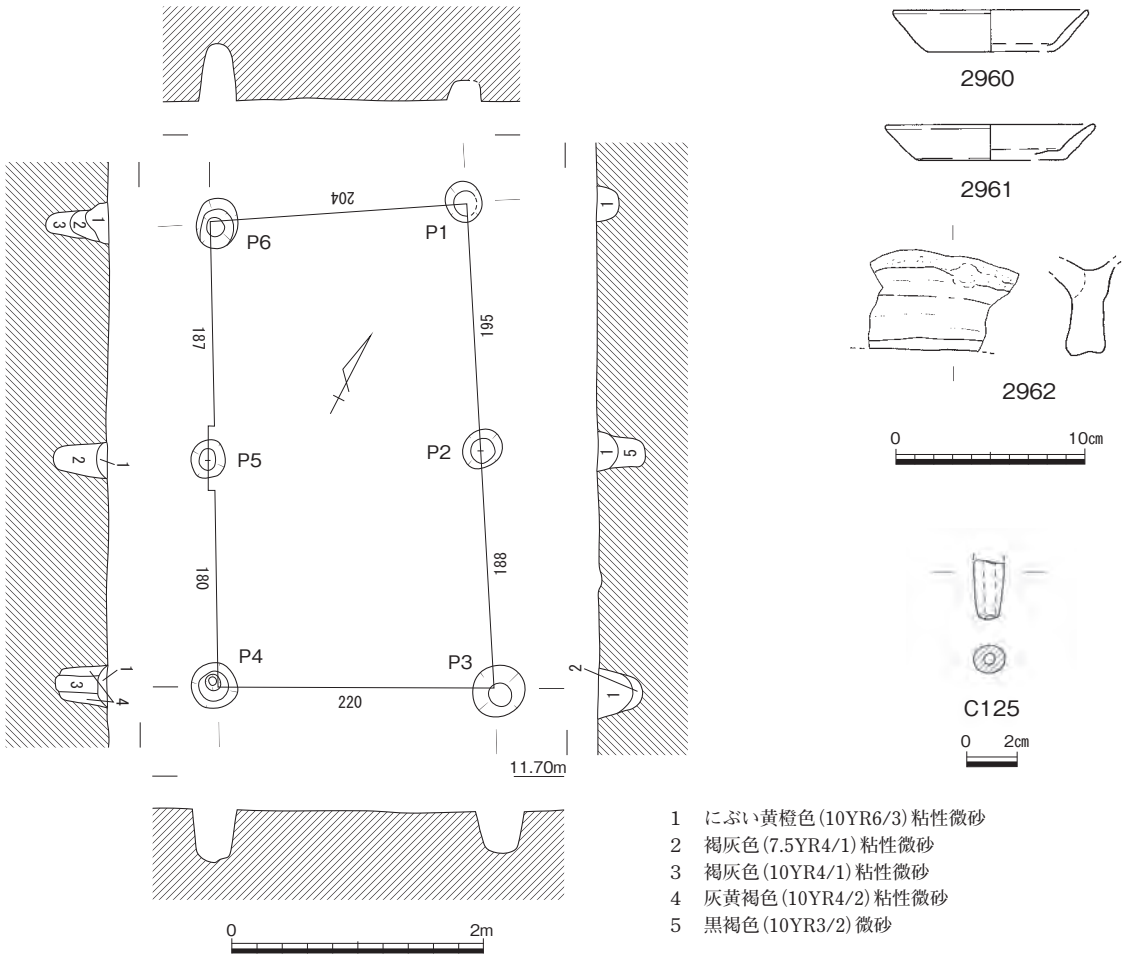
掘立柱建物13（第564・576図、図版33－２）

Ｇ24に位置する２×１間の掘立柱建物で、桁行が390～360㎝、梁行が220～204㎝を測る。面積は



1　にぶい黄褐色(10YR5/3)粘性砂質土
2　灰黄褐色(10YR5/2)粘性砂質土
3　灰黄褐色(10YR4/2)粘性砂質土

第575図　掘立柱建物12（1/60）・出土遺物（1/3）



1　にぶい黄橙色(10YR6/3)粘性微砂
2　褐灰色(7.5YR4/1)粘性微砂
3　褐灰色(10YR4/1)粘性微砂
4　灰黄褐色(10YR4/2)粘性微砂
5　黒褐色(10YR3/2)微砂

第576図　掘立柱建物13（1/60）・出土遺物（1/4・1/3）

8.03㎡となる。柱穴の掘り方は円形を呈している。掘り方の直径は、約30～45㎝であるが、断面の柱痕跡から、柱の直径は15㎝程度であったことがわかる。

出土遺物には、土師器杯**2960**・**2961**、土師質の竈の庇部分と考えられる**2962**のほか、土錘**C125**がある。いずれも、Ｐ６から出土したものである。土師器杯は直径が10.2～10.9㎝、器高6.6～8.0㎝で、色調が橙色である。これらの土器は10世紀のものであると考えられる。このことから、遺構の時期も同様であろう。

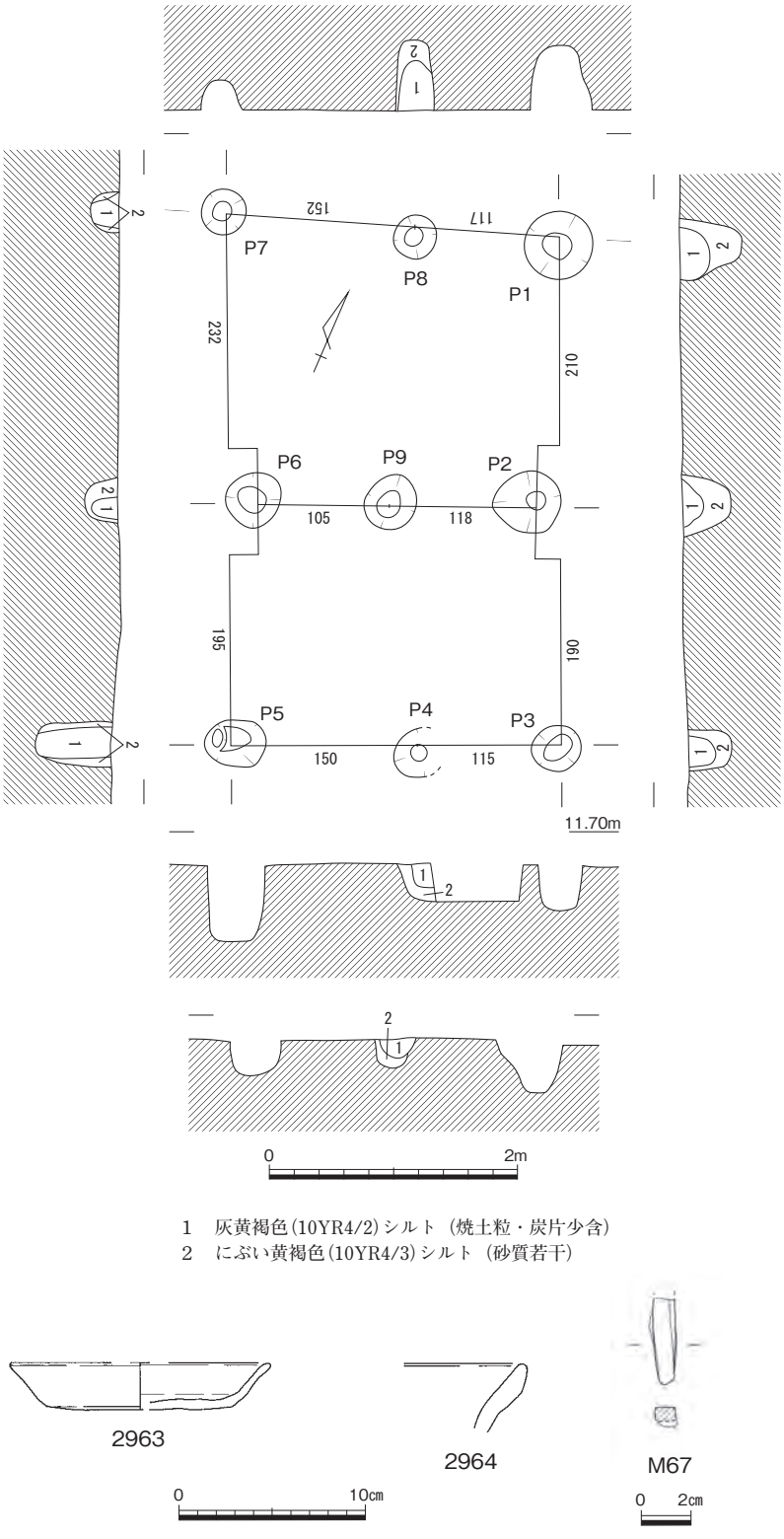
（團）

掘立柱建物14（第564・577図、図版33－３）

Ｈ24で、掘立柱建物13の東に所在する。周辺には柱穴が多く検出されているが、南北方向に長い２×２間の総柱建物として把握している。その規模は桁行420㎝、梁行269㎝で、床面積は約11.3㎡を測る。四隅に対して中間の柱穴は浅い傾向があり、建物の構造と関係しているものと考えられる。このうちＰ５では、直径20㎝程度の柱抜き取り跡と考えられる灰黄褐色シルトが確認された（第１層）。棟方向は、N-24° -Wであり、約５ｍ東に所在する柱穴列11と方向が揃っており、有機的な関係を持つと考えられる。

埋土中からは土師器杯**2963**と鍋の口縁部片**2964**のほか、鉄釘**M67**が出土した。土師器杯**2963**は口径が14㎝程度に復元できるもので、底部中央に指押さえが認められる。これらの出土遺物から、建物の時期は10世紀後半代と考えられる。

（河合）

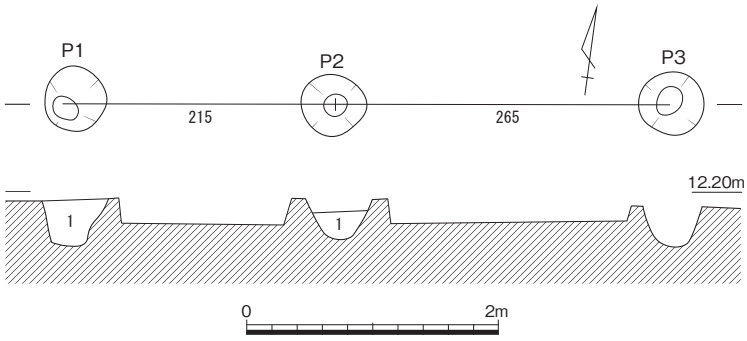


第577図　掘立柱建物14（1/60）・出土遺物（1/4・1/3）

３　柱穴列

柱穴列６（第562・578図）

Ｋ01とＫ02に跨がるが、大半はＫ02の北西側に位置している。北側には掘立柱建物５・６があり、東側には柱穴列７が存在する。規模は２間で、全長は480㎝を測る。柱間寸法は、Ｐ１～Ｐ２間が215㎝で、Ｐ２～Ｐ３間は265㎝となり、後者の方が約50㎝広くなる。柱穴の規模は、約50㎝となる。時期は周辺遺構の関連から８世紀代になると思われる。（小林）

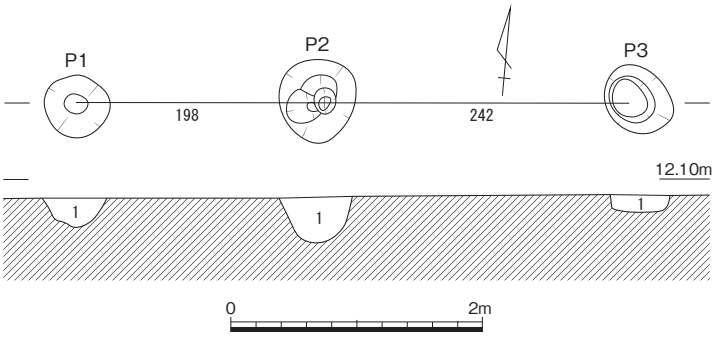


1　暗褐色(10YR3/4)細砂

第578図　柱穴列６（1/60）

柱穴列７（第562・579図）

Ｊ02の南側に位置する。西側には柱穴列６、北側には柱穴列８、東側には近接して溝26が存在する。規模は２間で、全長は440㎝を測る。柱間寸法は、Ｐ１～Ｐ２間が198㎝で、Ｐ２～Ｐ３間は242㎝となり、後者の方が約50㎝広くなる。柱穴の規模は、約50～60㎝となる。時期は周辺遺構の関連から８世紀代になると思われる。（小林）

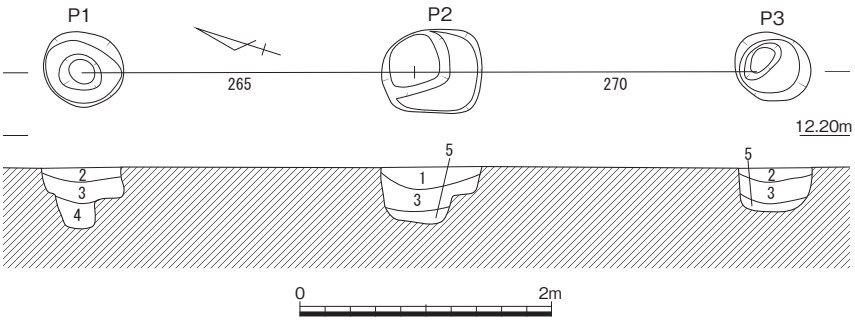


1　暗褐色(10YR3/3)細砂

第579図　柱穴列７（1/60）

柱穴列８（第562・580図）

Ｊ02の中央よりやや南西側に位置している。南側には柱穴列７、北側には掘立柱建物７、東側には溝26が存在する。規模は２間で、全長は538㎝を測る。柱間寸法は、Ｐ１～Ｐ２間が265㎝で、Ｐ２～Ｐ３間は270㎝となる。柱穴の規模は、約60～80㎝と大きく、３本とも約30～50㎝の柱痕が残存している。時期は周辺遺構の関連から８世紀代になると思われる。（小林）

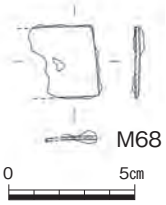


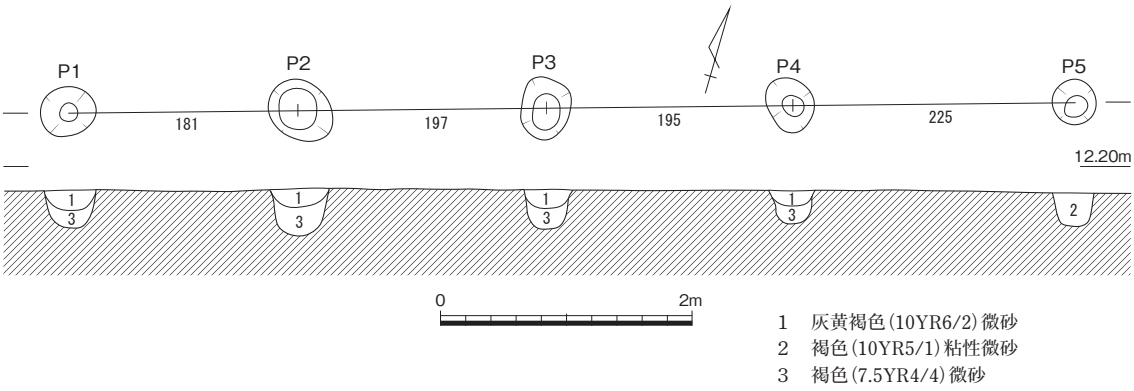
1　黒褐色(10YR3/2)粘性微砂
2　暗褐色(10YR3/4)細砂
3　にぶい黄褐色(10YR4/3)
　粘性微～細砂
4　暗褐色(10YR3/3)
　粘性微～細砂
5　にぶい黄褐色(10YR4/3)微砂
　(礫含)

第580図　柱穴列８（1/60）

柱穴列９（第563・581図）

Ｉ11の北側に位置している。北側に近接して掘立柱建物10が立地しているほかは、近隣に同時期の遺構は存在しない。本遺構に規模は４間であり、全長は798㎝を測る。柱間寸法は、225～181㎝の間になる。柱穴の規模は、約30㎝である。**M68**が出土する。本遺構は掘立柱建物10の塀のような役割になると考えられるが、同遺構の桁行辺と柱間寸法がほぼ一致しており、庇の可能性も残される。時期は掘立柱建物10と同じ９世紀代になるであろう。　（小林）

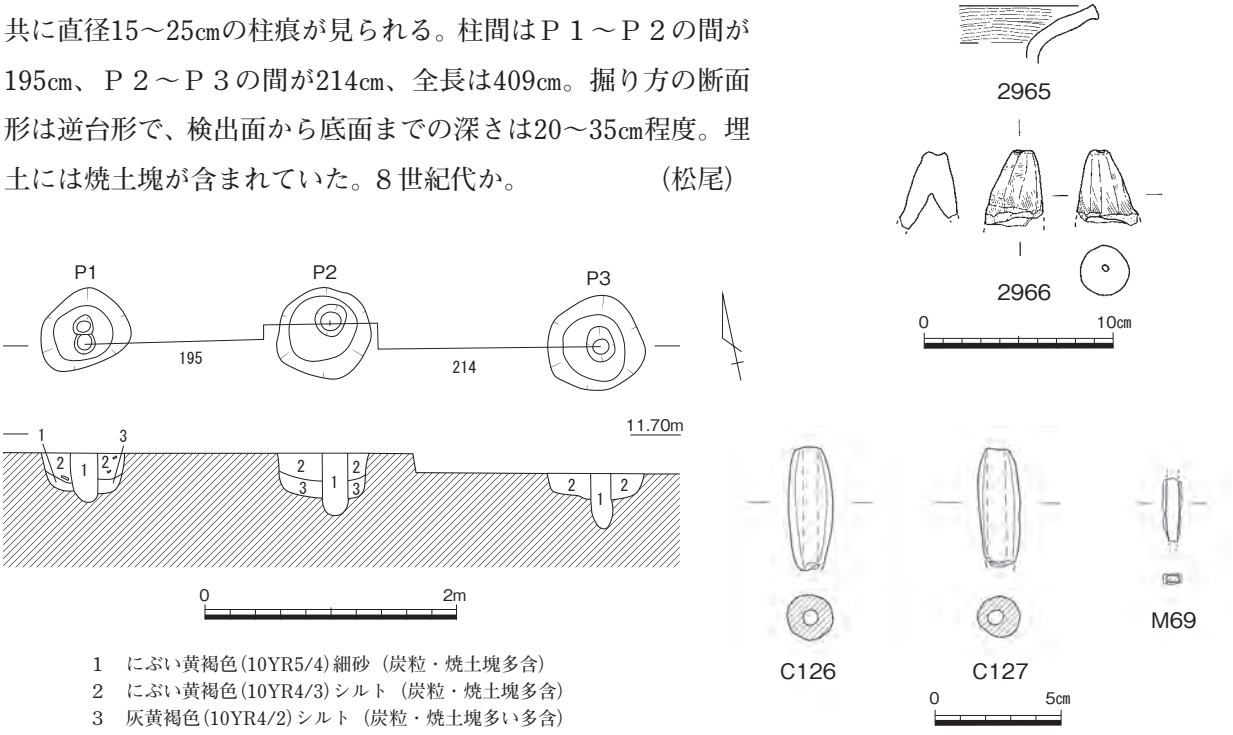




第581図　柱穴列９（1/60）・出土遺物（1/3）

柱穴列10（第564・582図）

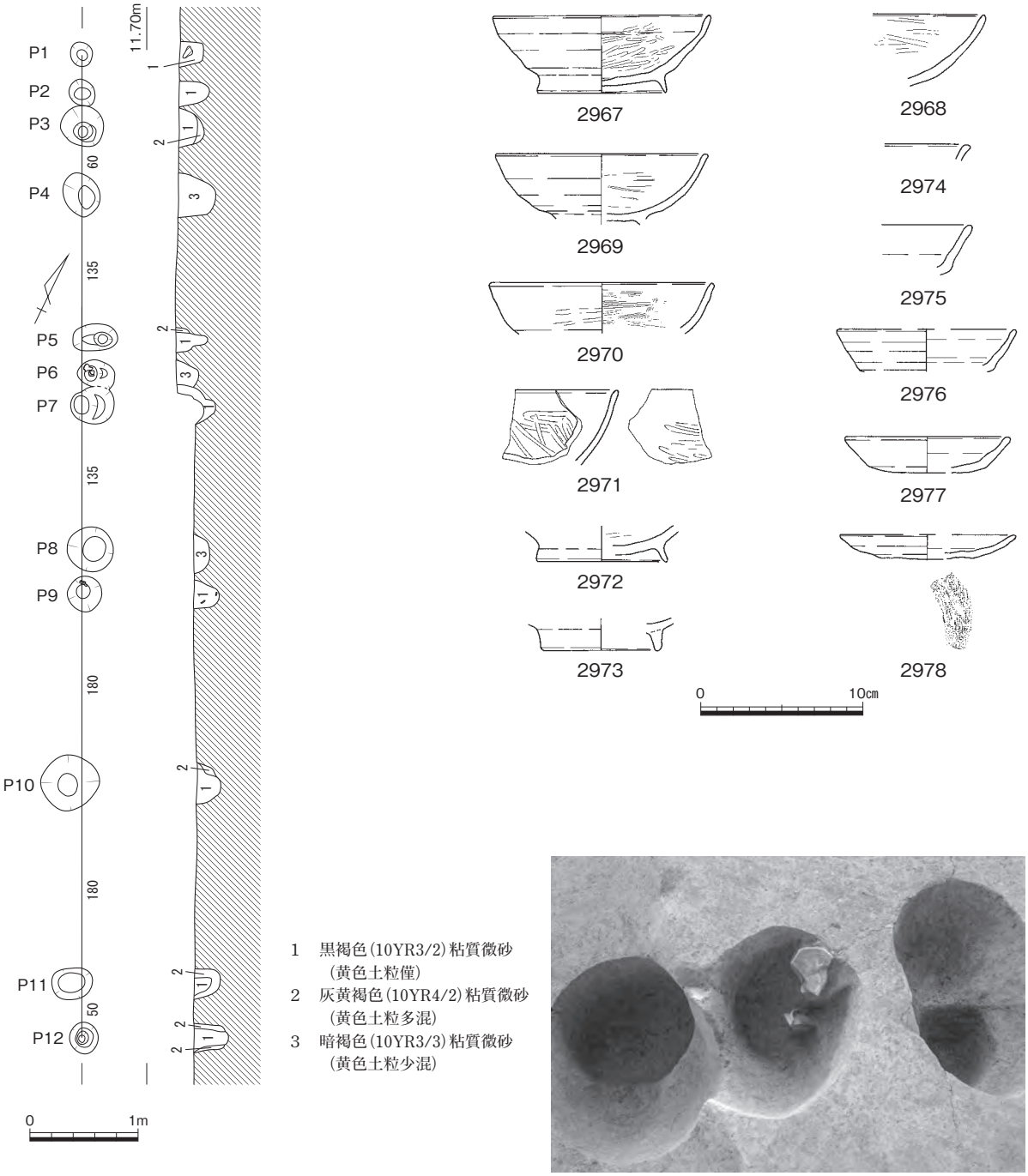
Ｈ18の北端に位置する。周囲を丹念に調査したが、対になるような柱穴が確認できなかったことから、Ｐ１～３で構成される柱穴列として報告する。柱穴の平面形はいずれも不整円形を呈し、長軸70～75㎝を測る。Ｐ１～３共に直径15～25㎝の柱痕が見られる。柱間はＰ１～Ｐ２の間が195㎝、Ｐ２～Ｐ３の間が214㎝、全長は409㎝。掘り方の断面形は逆台形で、検出面から底面までの深さは20～35㎝程度。埋土には焼土塊が含まれていた。８世紀代か。　（松尾）



第582図　柱穴列10（1/60）・出土遺物（1/4・1/3）

柱穴列11（第564・583図、図版35－３・104、写真42）

掘立柱建物14の東に位置する。個々の柱穴規模や柱間寸法は一定でないが、９ｍにわたって直線上に並ぶ一群を柱穴列として抽出した。主軸は南北で、掘立柱建物13とほぼ平行している。先述した様に柱間寸法がばらばらだが、Ｐ３－Ｐ５－Ｐ８－Ｐ10－Ｐ12間では２ｍ前後、Ｐ４－Ｐ７－Ｐ９－Ｐ10－Ｐ11間では1.8ｍ前後に間隔が揃う。建て替えられた結果かもしれない。すべての柱穴から土器が出土したが、図示し得たうち前者に伴うものはなく、時期差は不明である。Ｐ６からは**2969・2972・2973～2975・2977**など多く出土した。写真42からは、意図的に埋置した可能性が考えられる。外面が白色化した内面黒色土器椀も認められ、10世紀後半～11世紀初頭に位置付けられる。　（渡邉）



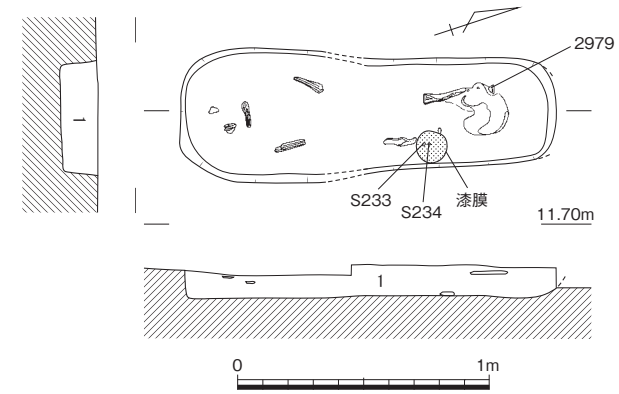
第583図　柱穴列11（1/60）・出土遺物（1/4）　　**写真42　柱穴列11－Ｐ６（東から）**

４　墓

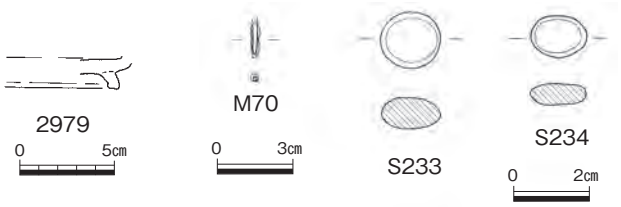
墓１（第564・584図、図版38－２・110）

Ｈ19の西端に位置する。掘り方の平面形は隅丸長方形を呈し、長軸150㎝、短軸45㎝を測る。断面形は逆台形で、検出面から底面までの深さは12㎝。土坑内に棺痕跡は認められないことから土坑墓と判断した。土坑内を２㎝ほど掘り下げた段階で、北頭位の人骨を１体確認している。骨の遺存状態は悪く、部分的に残存している状況からは、顔を西に向け、胡座のように脚を組んだ状態で埋葬されていることが分かる。また、岡山大学大塚愛二氏による鑑定では、腕の位置に残っている骨は上腕骨にあたるとの教示を受けた。土坑の西端で人骨の肩付近から有機質の皮膜と共にＳ233・Ｓ234の碁石状石製品が出土した。材質はＳ233が水晶、Ｓ234は石英。有機質の皮膜は直径11㎝の範囲に広がり、２点の碁石状石製品は何らかに収められていたと推察される。漆の可能性を考え分析を行ったが、材質は特定できなかった。その他、鉄釘片Ｍ70や須恵器杯の破片2979が出土している。須恵器杯2979は高台の特徴から８世紀中葉頃を示すが、左眼孔に突き刺さるように出土した状況から、混入の可能性が高いと考える。

有機質皮膜に関して放射性炭素年代測定を実施した。暦年較正結果はcalAD892～995である。墓２と同じ10世紀と考えて矛盾はない。（松尾）



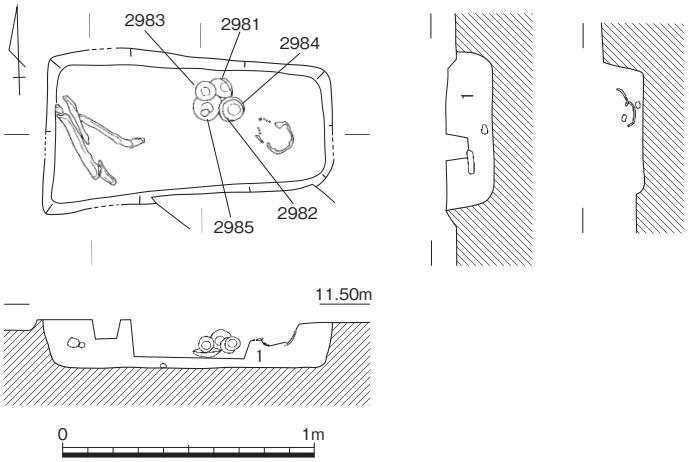
1　黒褐色(10YR3/1)粘質細砂



第584図　墓１（1/30）・出土遺物（1/4・1/3・1/2）

墓２（第564・585・586図、図版38－３・104、写真43）

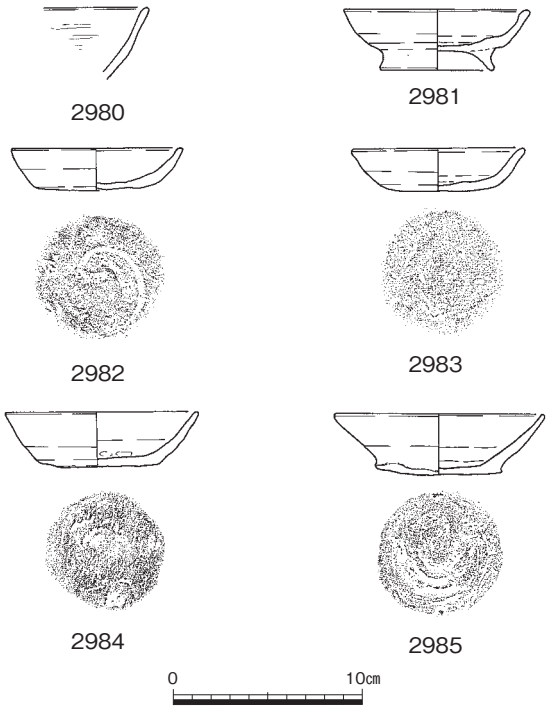
Ｇ24に位置する、土坑墓である。平面形はやや西辺の方が東辺に比べて長いものの、おおむね長方形を呈しており、断面形は箱状である。床面は平坦である。規模は長軸114㎝、短軸64㎝、深さ19㎝を測る。底面の標高は11.25ｍである。墓１と同様に人骨が出土しており、土坑墓であることは確実である。土師器の椀・皿がまとまって５点（2980～2985）出土しており、土坑墓



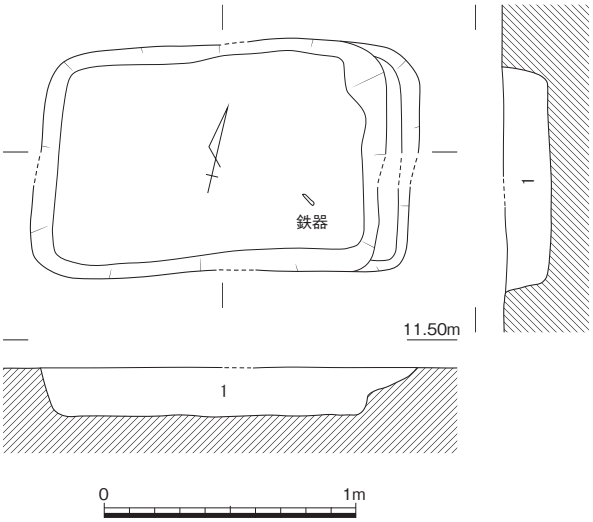
1　黄褐色(2.5Y5/3)粘性微砂（黄灰色(2.5Y4/1)粘性微砂斑状少混）

第585図　墓２（1/30）

の北辺側、被葬者の胸元の右側にあたる。椀・皿の一部は内面を被葬者側へ向けて、立てかけられた状態で出土しており、木棺上面に置かれたものが腐朽して内側へ滑り落ちた状態であるとも考えられるが、埋土自体は単一層であり、棺の痕跡は見られなかった。人骨は、東側に頭蓋骨、西側に脚部の骨を検出した。岡山大学の大塚先生に鑑定していただいた。頭蓋骨（写真43）は頭頂部を東側、西側には歯が並んでいて、この歯列は下顎のものであり、また頭蓋骨も後頭部の部分のみ残存している。脚部の骨については、大腿骨及び脛骨であり、膝の部分を北側にして脚を折り曲げており、足首は南端の部分となる。被葬者の身長は、およそ150㎝程度であり、性別は不明であるとの御教示を受けた。この出土状況から、屈葬での埋葬と考えられる。出土遺物には、黒色土器椀2980、土師器高台付杯2981、土師器皿2982～2984、土師器杯2985がある。2982・2981は雲母や石英を多く含み、粗い胎土であるが、底面のヘラ切りの痕跡は丁寧になで消し、2982は内面の一部を平滑に仕上げている。これらの出土遺物から、この土坑墓の時期は10世紀末頃のものであると考えられる。　（圃）



第586図　墓２出土遺物（1/4）



1　暗灰黄色(2.5Y5/2)粘性微砂

第587図　墓３（1/30）

写真43　墓２調査風景（南から）

墓３（第564・587図、図版39－１）

Ｇ24に位置する土坑墓で、土坑墓２の北側に位置している。規模は、長軸150㎝、短軸93㎝、深さ19㎝を測る。床面は平坦で、床の標高は11.09ｍとなる。東辺には幅８㎝のテラスを設けている。出土遺物には、図示のできるものはないが、不明鉄製品が上層から１点出土していることを確認している。この遺構の性格についてであるが、形状からのみ墓と判断している。周辺の土坑にこのような平面長方形を呈し、床面が平坦であるものはなく、該当するものは墓２であるため、土坑墓とし、時期も墓２と同じ古代のものと考えた。　（圃）

５　土坑

土坑228（第564・588図）

Ｉ23の南に位置している。平面形は楕円形、断面形は皿状を呈している。規模は長軸174㎝、短軸103㎝、深さ16㎝を測る。埋土は黄灰色の細～粗砂の単一層である。この土坑の底面には凹凸があり、その凸面上面には鉄分の沈着が見られた。遺物は古代のものと思われる土師器片が少量出土しているが、人為的な土坑であるのかどうかは、判然としない。遺物から遺構の時期は古代としている。（圃）

土坑229（第564・589図）

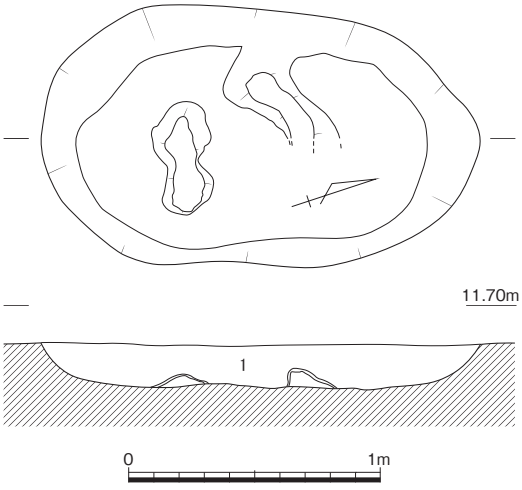
土坑228から約12ｍ南のＨ23に位置する。検出面の標高は11.55ｍである。南東側が不整形であるが北西には角があり、西辺、北辺が直線的であることから、本来は方形であった可能性が高い。また、深さも９㎝と浅いが、底面はほぼ平らで、立ち上がりも比較的急である。

土坑ほぼ中央部から土師器杯**2986**が出土した。細片のうえ摩滅しており底部中央の調整は不明だが、周縁にヘラ切りが認められる。10世紀中頃に位置付けられようか。（渡邉）

土坑230（第564・590図）

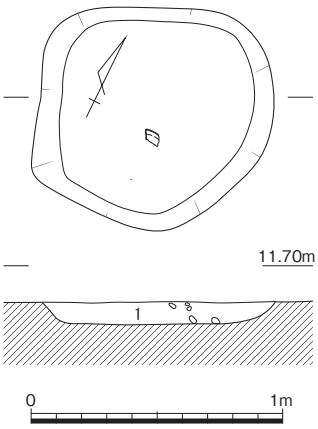
土坑229から北東に60ｍ以上離れたＦ25に位置する。神明遺跡の東端にあたる。検出面の標高は11.35ｍである。上面で南北97㎝、東西68㎝の長方形を呈している。中央が径50㎝弱の円形にくぼみ、最も深い所で深さ22㎝を測る。

図示したほか、土師器や内面黒色土器椀細片が出土している。丹塗りや白色化した個体は認められない。10世紀後半に位置付けられる。（渡邉）

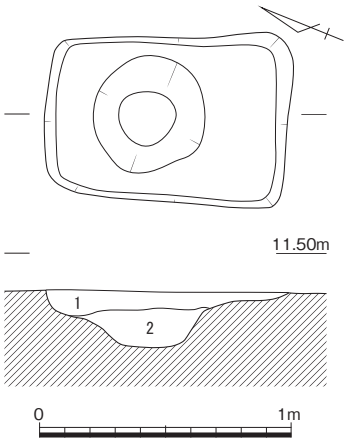


1　黄灰色(2.5YR6/1)細～粗砂

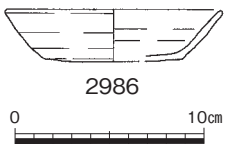
第588図　土坑228（1/30）



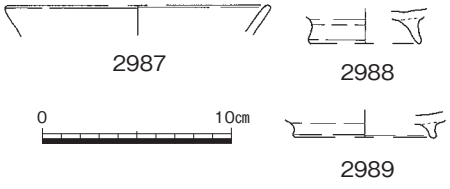
1　灰黄褐色(10YR4/2)粘性砂質土



1　灰黄褐色(10YR4/2)粘質微砂
2　暗褐色(10YR3/3)粘質微砂



第589図　土坑229（1/30）・出土遺物（1/4）



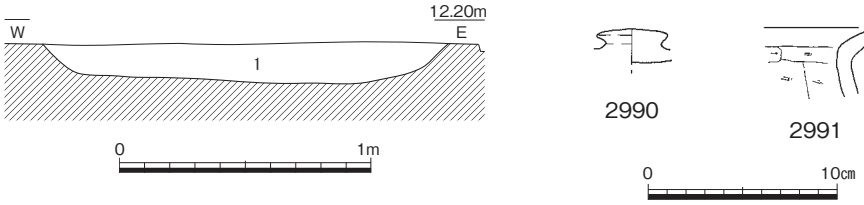
第590図　土坑230（1/30）・出土遺物（1/4）

６　溝

溝24（第562・591図、図版70－２）

Ｋ01の北西側から発してほぼ北方向へ向い、Ｊ01の北西側端付近で調査外に至る。東側に掘立柱建物５・６・７が存在する。本溝より東側に向かうと、掘立柱建物の集中地区が存在することとなる。規模は、上端幅160㎝、底面幅115㎝である。確認面からの深さは16㎝で、底面の標高は11.94ｍになる。断面形状は皿形になり、覆土は粘質である。

遺物は少量含まれており、須恵器杯**2990**、土師器甕**2991**があり、８世紀代である。　（小林）



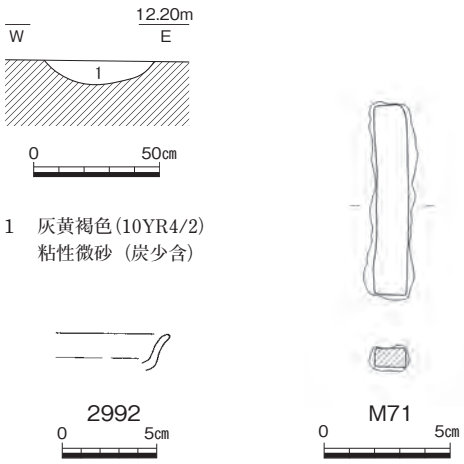
1　暗褐色(10YR3/3)粘性微砂

第591図　溝24（1/30）・出土遺物（1/4）

溝25（第562・592図）

Ｊ02の北側中央付近を北東側へ向って流れている。掘立柱建物７と掘立柱建物８の間に存在する小さな溝であり、どちらかの建物に付随した溝の可能性がある。規模は、上端幅43㎝、底面幅20㎝である。確認面からの深さは９㎝で、底面の標高は11.96ｍになる。断面形状は椀形になり、覆土は粘質で炭化物少量含まれる。

遺物は少量のみが出土している。図化したものは、土師器の皿**2992**、不明鉄器**M71**がある。**2992**は８世紀代になり、本溝の時期も同様となる。　（小林）

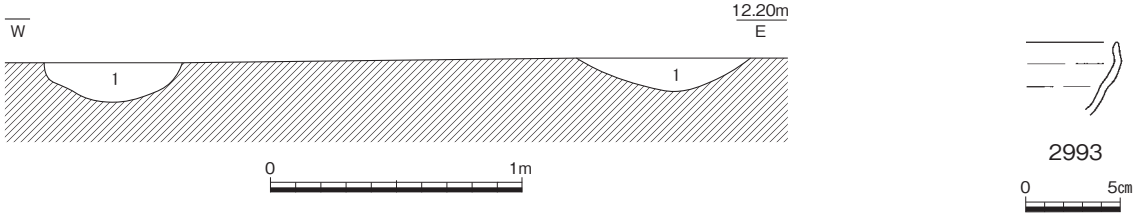


1　灰黄褐色(10YR4/2)
粘性微砂（炭少含）

第592図　溝25（1/30）・
出土遺物（1/4・1/3）

溝26・27（第562・593図）

Ｋ02の中央付近からほぼ南方向へ向い、調査外まで流れている。２条は約２ｍの間隔を置いてほぼ平行して流れている。規模は、溝26が上端幅54㎝、底面幅30㎝で、確認面からの深さは15㎝、底面の標高は11.88ｍになる。溝27は上端幅68㎝、底面幅22㎝で、確認面からの深さは13㎝、底面の標高は11.92ｍになる。断面形状はどちら



1　にぶい黄褐色(10YR4/3)微砂

第593図　溝26・27（1/30）・溝26出土遺物（1/4）

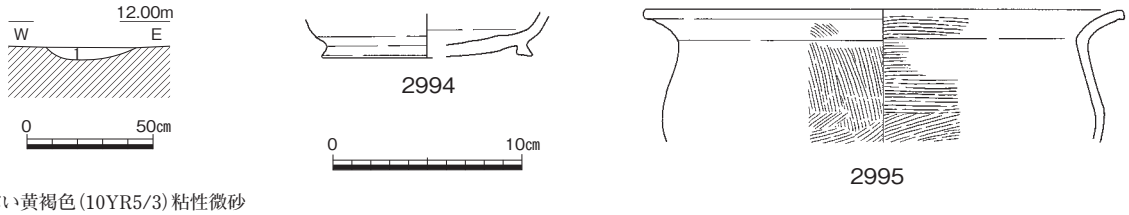
も椀形になり、覆土も２条とも粘質である。

遺物は、溝26から須恵器片2993が出土している。時期は７世紀後葉になると考えられ、両溝も同様になると思われる。（小林）

溝28（第562・594図）

Ｊ03の北西側からほぼ南方向へ向い、調査外に至る。西側にたわみ６が近接し、東側には溝29・溝30がほぼ平行して走っている。本溝より西側には同時期の遺構が多いが、東側は希薄になっていく。規模は、上端幅35㎝、底面幅16㎝である。確認面からの深さは５㎝で、底面の標高は11.85ｍになる。断面形状は皿形になり、覆土は粘質である。

遺物は少量出土しており、須恵器杯2994、土師器甕2995があり、８世紀前半である。（小林）

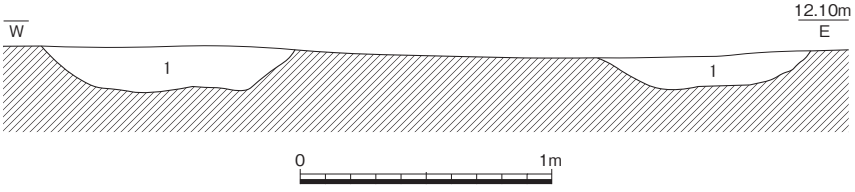


1　にぶい黄褐色(10YR5/3)粘性微砂

第594図　溝28（1/30）・出土遺物（1/4）

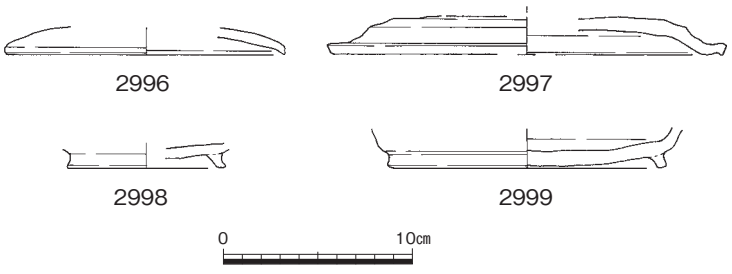
溝29・30（第562・595・596図、図版70－３・105・114・117）

Ｊ03の北側中央付近からほぼ南方向へ向い、調査外まで流れている。２条は約２ｍの間隔を置いてほぼ平行して流れている。また溝28が西側に近接して、やはりほぼ平行して走っている。両溝と溝24の間約20ｍは、同時期の遺構が濃密に分布するのに対し、東側は地形が一端低くなるため希薄になっていく。これらほぼ南北方向に走る溝群は、本遺跡の古代における区画溝の役割があったことが想定される。規模は、溝29が上端幅100㎝、底面幅57㎝で、確認面からの深さは18㎝、底面の標高は11.82ｍになる。溝27は上端幅83㎝、底面幅32㎝で、確認面からの深さは13㎝、底面の標高は11.83ｍになる。断面形状はどちらも皿形になり、覆土も２条とも粘質である。

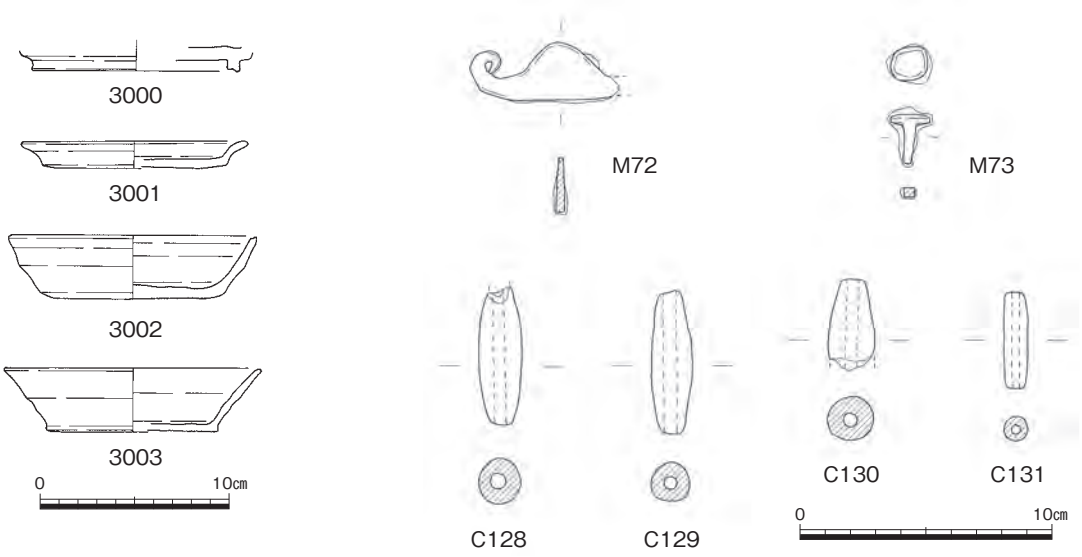


1　灰黄褐色(10YR4/2)粘性微砂

遺物は、溝29から須恵器杯2996～2999が出土している。溝30から須恵器杯3000、土師器皿3001、土師器杯3002・3003が出土する。時期は８世紀前半～９世紀代のものが含まれ幅が広い。（小林）



第595図　溝29・30（1/30）・溝29出土遺物（1/4）



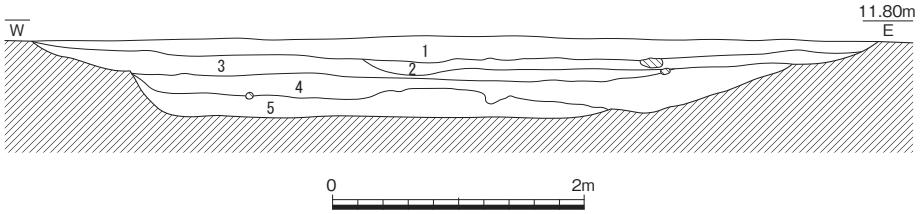
第596図　溝30出土遺物（1/4・1/3）

溝31（第564・597～599図・図版105・117）

調査地の東部分で検出した溝である。溝30から東へ約320ｍ離れた地点（Ｇ19）に位置する。弥生時代の河道４が埋没した後に残された低位部を流れた流路とみられ、長さ約13ｍを確認した。この地点では、おおむね北西から南東方向へ延びる。Ｆ・Ｇ22で検出した北西に向かって下がる地形との関係は不明である。

検出面での上幅は670㎝を測り、深さは54㎝である。底面は比較的平らで、断面形は皿形を呈する。埋土は細砂や粗砂が中心で、須恵器3004～3021・3031、土師器3022～3025・3027・3029・3030・3032、瓦Ｒ１、土製品Ｃ132～Ｃ135などが出土した。

3004～3008は須恵器の杯蓋である。3004の焼成は堅緻であるが、その他の焼成は不良である。3010～3013は須恵器の高台付杯である。3013の焼成は堅緻であるが、その他の焼成は不良である。これら焼成不良の蓋・杯については、胎土と併せて備中産と見られる。3009・3014～3015は須恵器の杯である。3009の内面には光沢のある黒色の物質が付着している。3016は須恵器の稜椀で、口縁部は外反する。3017は須恵器の平瓶で、底部外面にはヘラケズリが認められる。3018は須恵器の鉢で外面にカキメを施す。3019・3021・3031は須恵器の甑、3020は須恵器の把手部分である。3022～3025は土師器の杯で、3022・3023・3025は丹塗り土師器である。3026は黒色土器、3027は土師器の高台付椀である。3028は緑釉陶器の椀である。3029・3030は土師器の甕、3032は土師器の竈である。

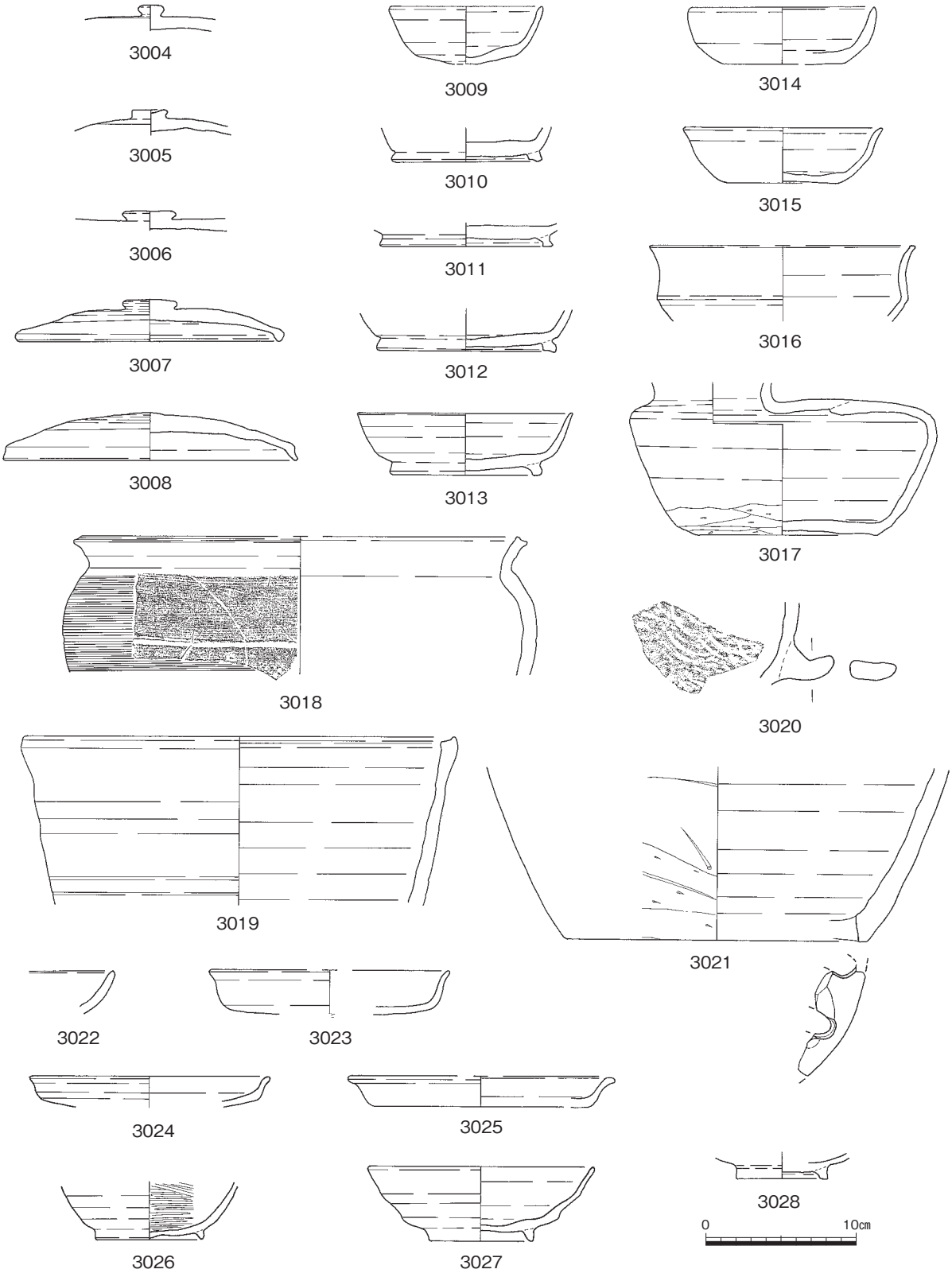


1　にぶい黄褐色(10YR4/3)細砂
2　にぶい黄褐色(10YR4/3)細砂
　(灰白色(10YR7/1)シルト混)
3　灰黄褐色(10YR5/2)細砂～粗砂
4　灰黄褐色(10YR5/2)細砂粗砂ラミナ状重
5　褐灰色(10YR5/1)シルト　(赤褐色(5YR4/8)細砂混)

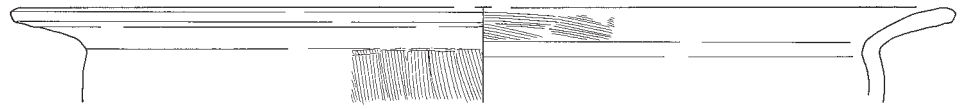
第597図　溝31（1/60）

Ｒ１は丸瓦で、凹面には布目が残る。Ｃ132～Ｃ135は、紡錘形をした管状土錘である。

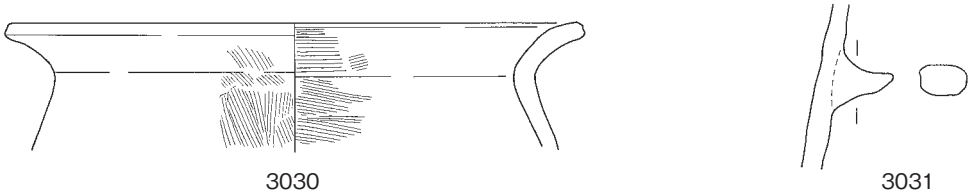
溝31の時期は、出土遺物などから平安時代と考える。　（柴田）



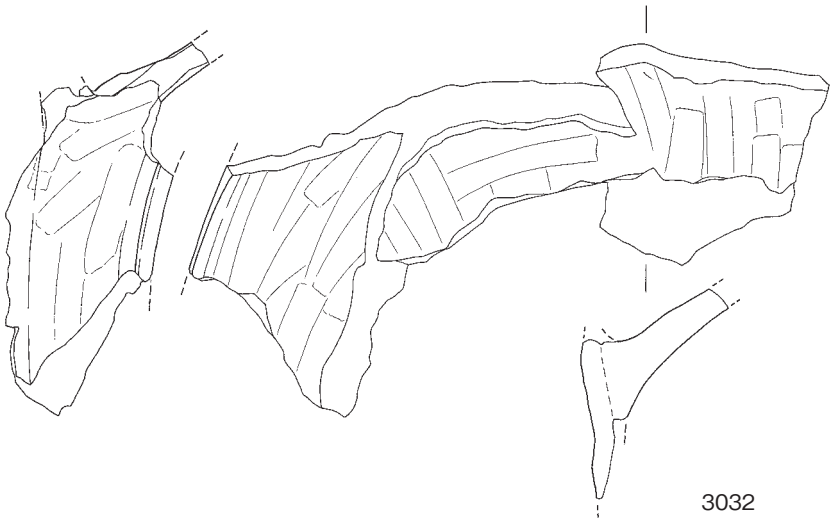
第598図　溝31出土遺物①（1/4）



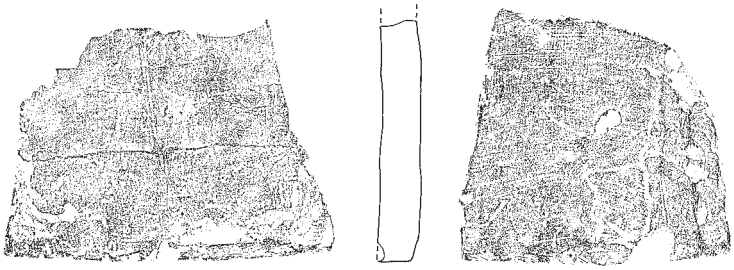
3029



3030　3031

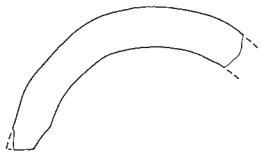


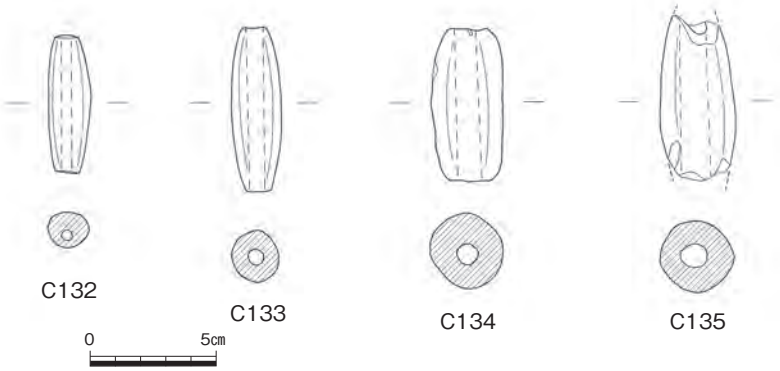
3032



R1

0　10cm





C132　C133　C134　C135

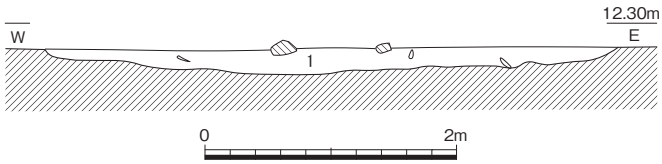
0　5cm

第599図　溝31出土遺物②（1/4・1/3）

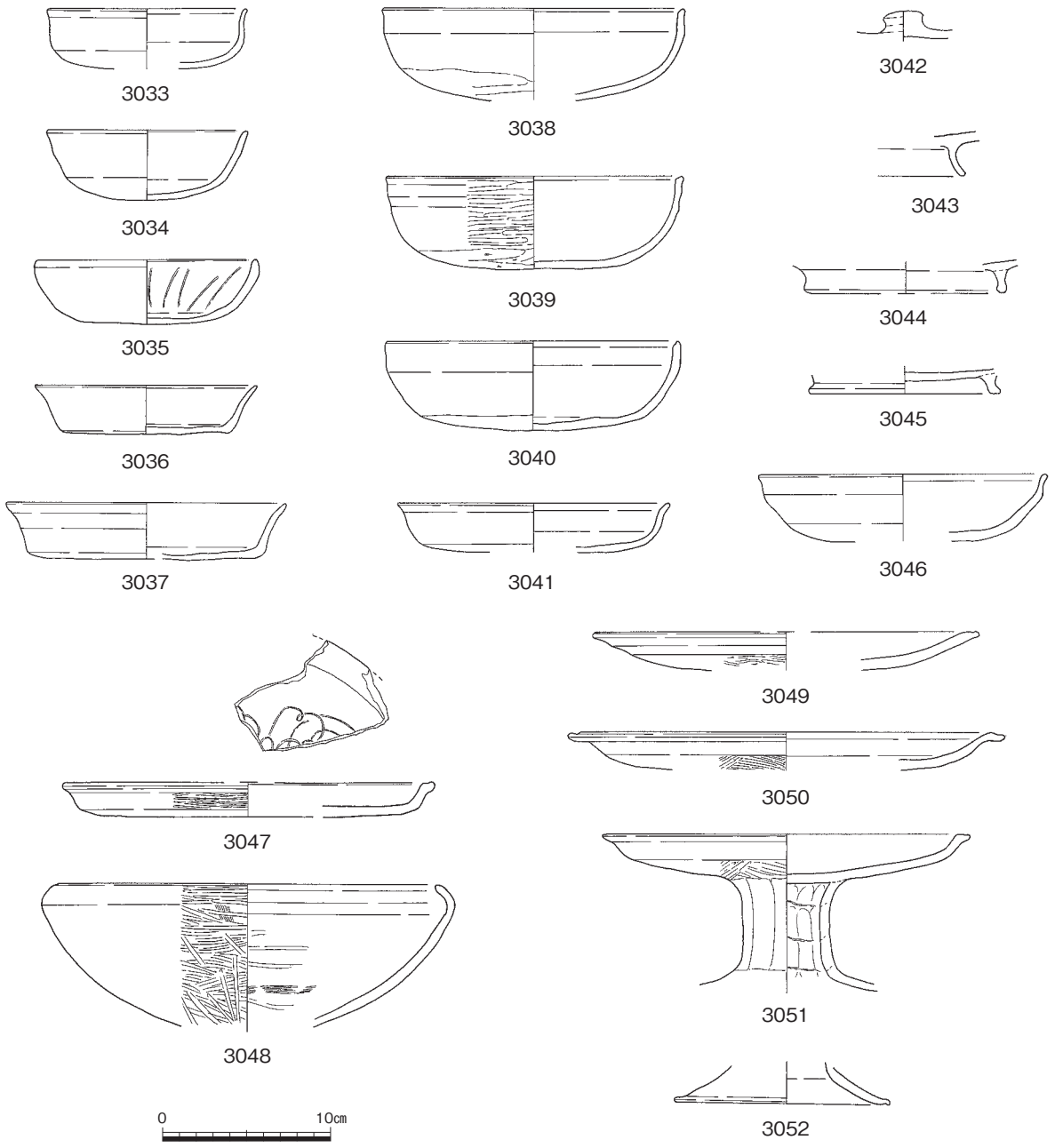
７　たわみ

たわみ６（第562・600～604図、巻頭図版８－２、図版76－１・105・111・114・117）

Ｋ03の南西側を中心に広がる遺構で、本来はさらに南側へ延びていただろう。東隣に溝28が近接し、その先に溝29・溝30が存在している。西側は溝26・溝27があり、その流れはほぼ一定している。掘立柱建物などの遺構は、本遺構のある箇所を東限として、西側は溝24までの約40ｍの範囲に集中している。



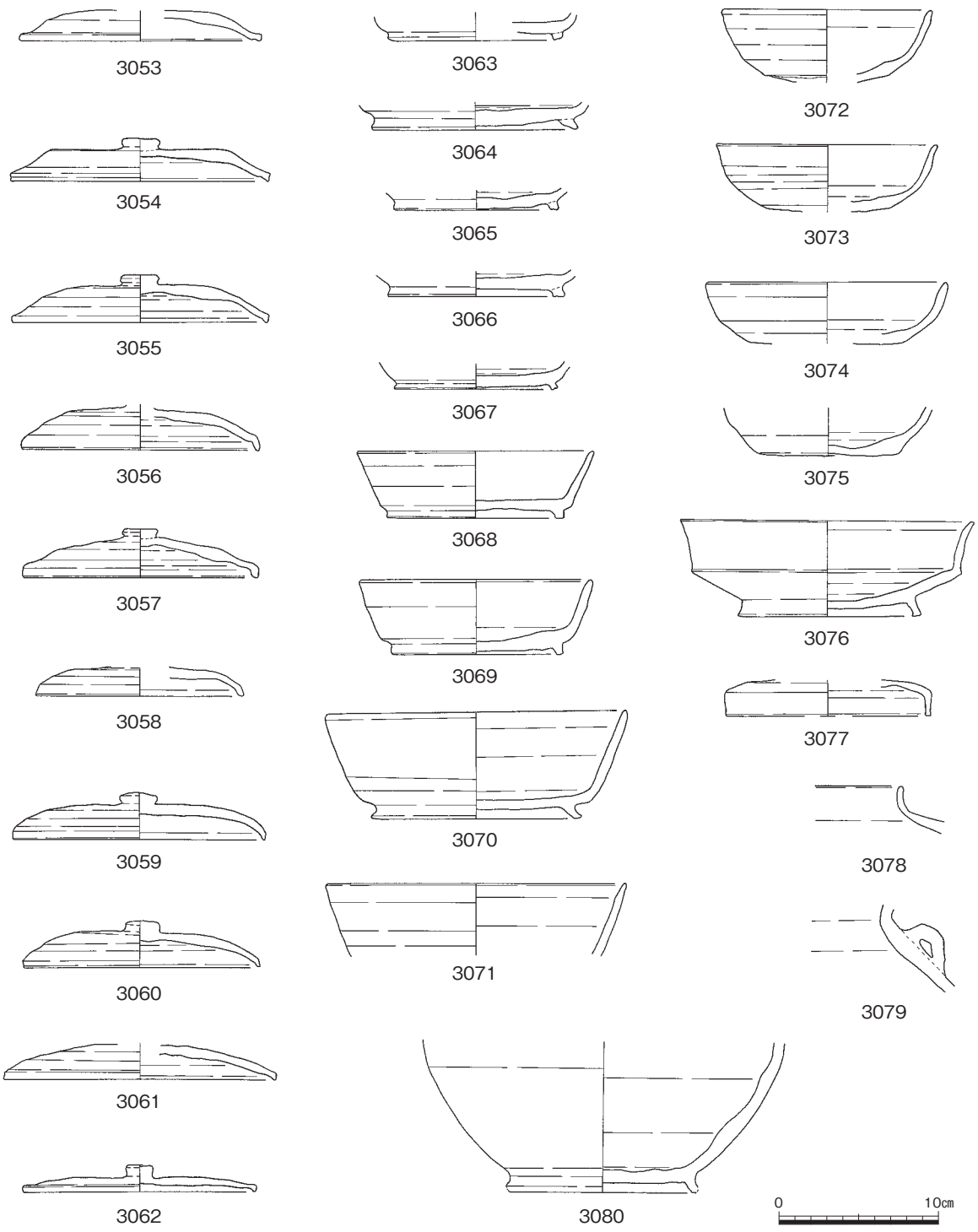
1　黄灰色(2.5Y5/1)微～細砂



第600図　たわみ６（1/60）・出土遺物①（1/4）

本遺構の規模は、上端幅1043㎝以上、短軸長455㎝で、平面形状は不整形を呈する。確認面からの深さは20㎝で、底面の標高は11.90ｍである。断面形状は皿形で、覆土は砂質である。本遺構は規模の割に深さが浅いのが特徴で、径10㎝前後の石も含まれている。

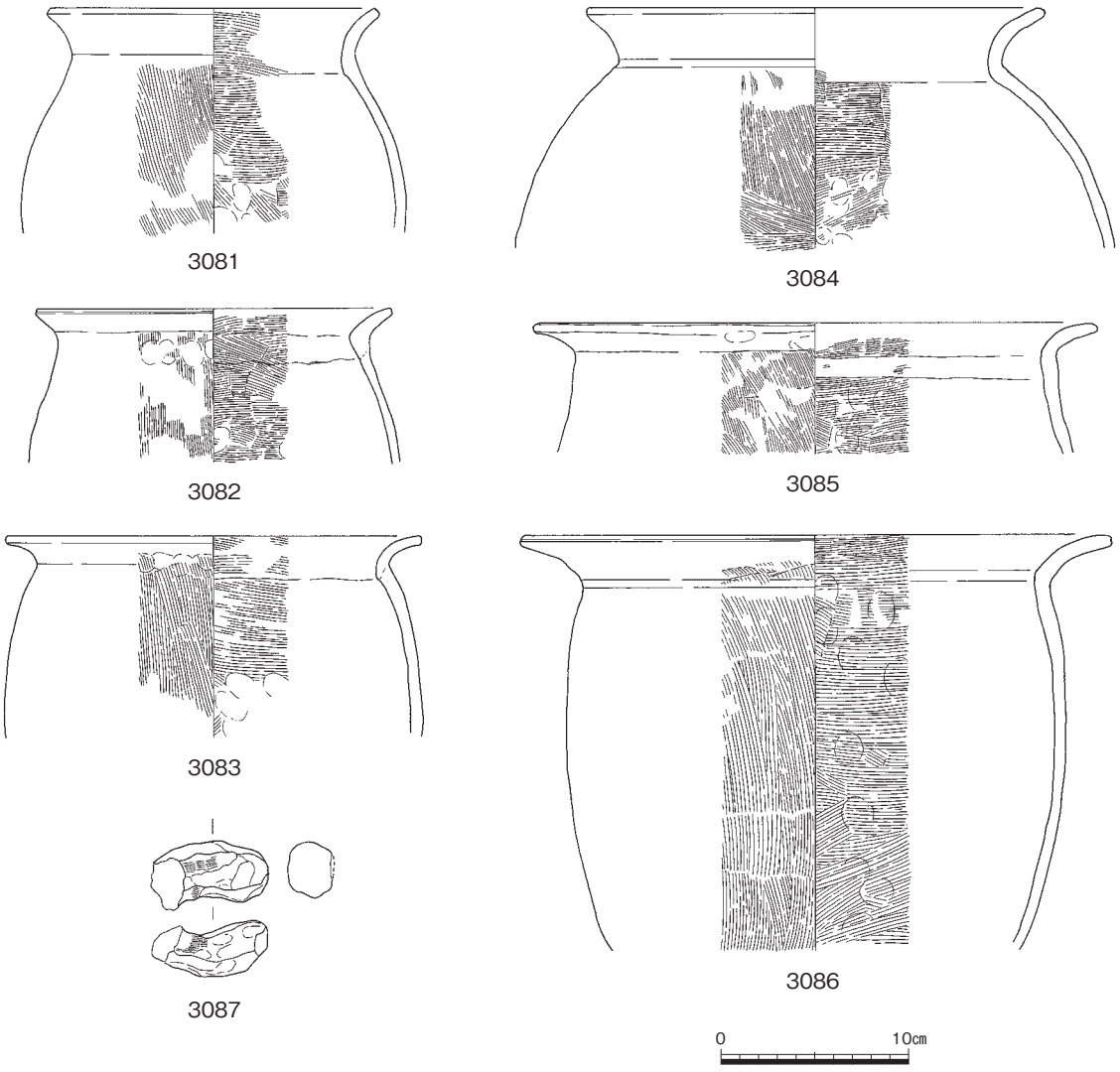
覆土中から比較的まとまった量の遺物が出土し、その総量は本遺構周辺の遺構群出土遺物の半数近くにのぼる。掘立柱建物から出土する土器が少量であるため、その時期特定には本遺構の状況が参考になると言えるのではないか。



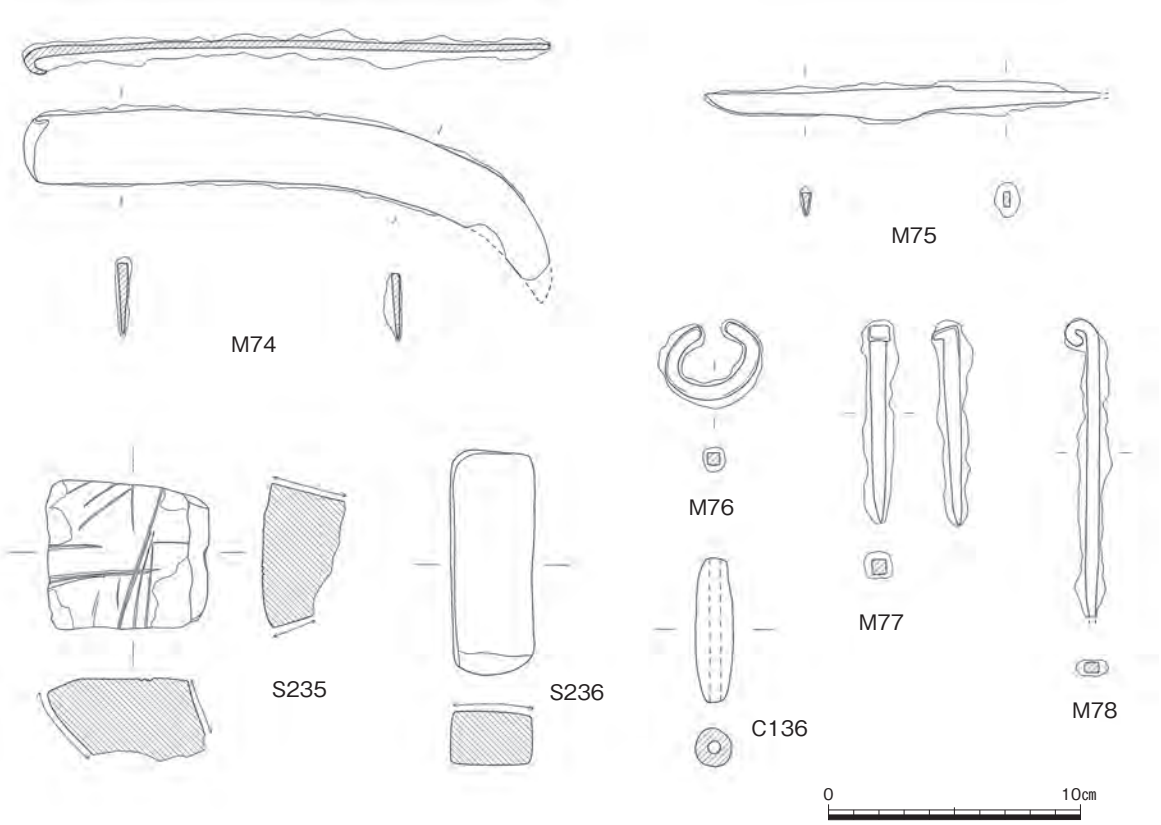
第601図　たわみ６出土遺物②（1/4）

3033～3046は土師器杯である。口縁部径が12～13㎝の3033～3036と17㎝前後の3038～3041がある。両者とも口縁部径に対し器高が高いものが多い。口縁部は直に立ち上がるものが多いが、端部がやや外反する3033・3038がある。3036・3037は底部がほぼ水平である。3035は内側に暗文が存在する。3047は土師器皿である。口縁部はやや外側に張り出し、身の内部には暗文がある。3048は土師器鉢である。3049～3052は土師器高杯である。身は高さが低く、3051の脚部は面取りされている。3053～3075は須恵器杯で、3053～3062は蓋である。口縁部径は、14～16㎝のものがほとんどである。口縁部の形態は、丸く収まる3059・3060、下方に張り出す3056・3057、頂部が平坦で段を持って口縁部に至る3053・3054などがある。3063～3075は身である。台の付くものでは、「ハ」字になるものが多い。底部から口縁部への立ち上がりは、直線気味になる。3076は須恵器稜椀である。3077は須恵器蓋である。3078は須恵器短頸壺である。3079・3080は須恵器壺である。3081～3086は土師器の甕である。3087は甑の把手である。M74は鉄鎌である。M75は刀子である。M76は不明鉄製品である。M77・M78は鉄釘である。S235・S236は砥石である。C136は土錘である。

また遺構検出中に出土した遺物に以下のものがあるが、ほぼ本遺構出土と考えて差し支えない。3088は須恵器杯蓋である。頂部はほぼ水平で、段を持って口縁部に至っている。3089～3092は須恵



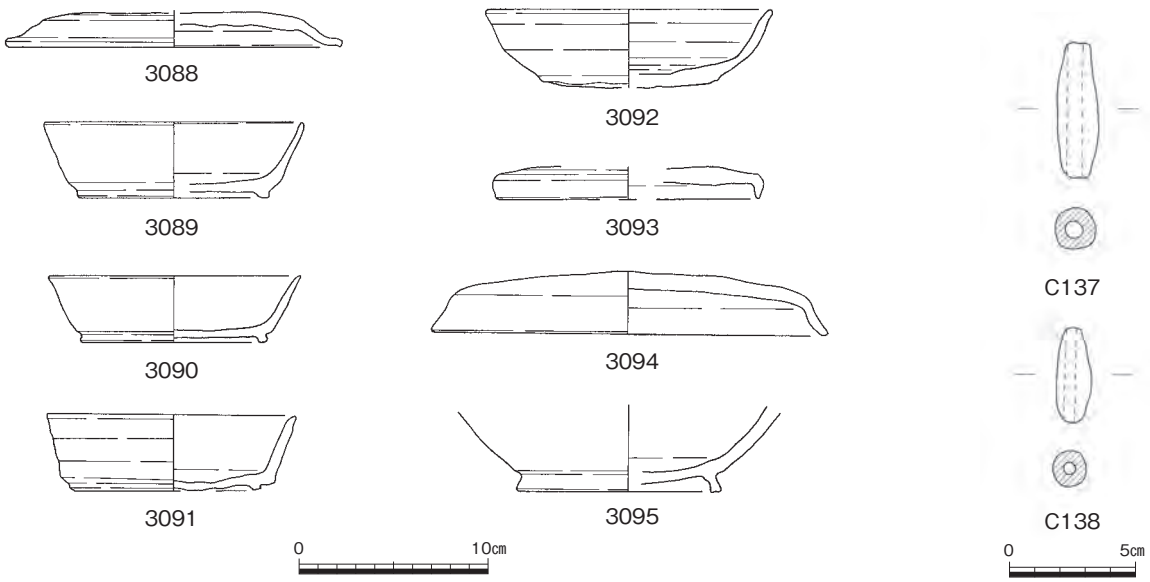
第602図　たわみ６出土遺物③（1/4）



第603図　たわみ６出土遺物④（1/3）

器杯身で、台は低くあまりしっかりしていない。底部から口縁部への立ち上がりは、直線的に伸びる。**3093・3094**は須恵器蓋で、**3095**須恵器壺の底部である。**C137・C138**は土錘である。

これらの遺物は、８世紀前葉～後葉までの様相が含まれるが、主流をなすのは中葉である。このことから、周辺の遺構群は８世紀代を中心としたものであることが想像できる。また本遺構の性格は、遺構密集地の縁辺部に存在していたことも含めて、奈良時代を通じて土器を使用した儀式が行われていた場所であったと考えられる。（小林）

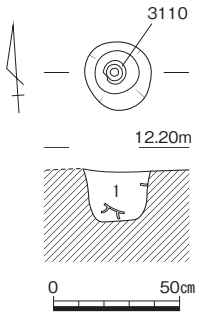


第604図　たわみ６検出中出土遺物（1/4・1/3）

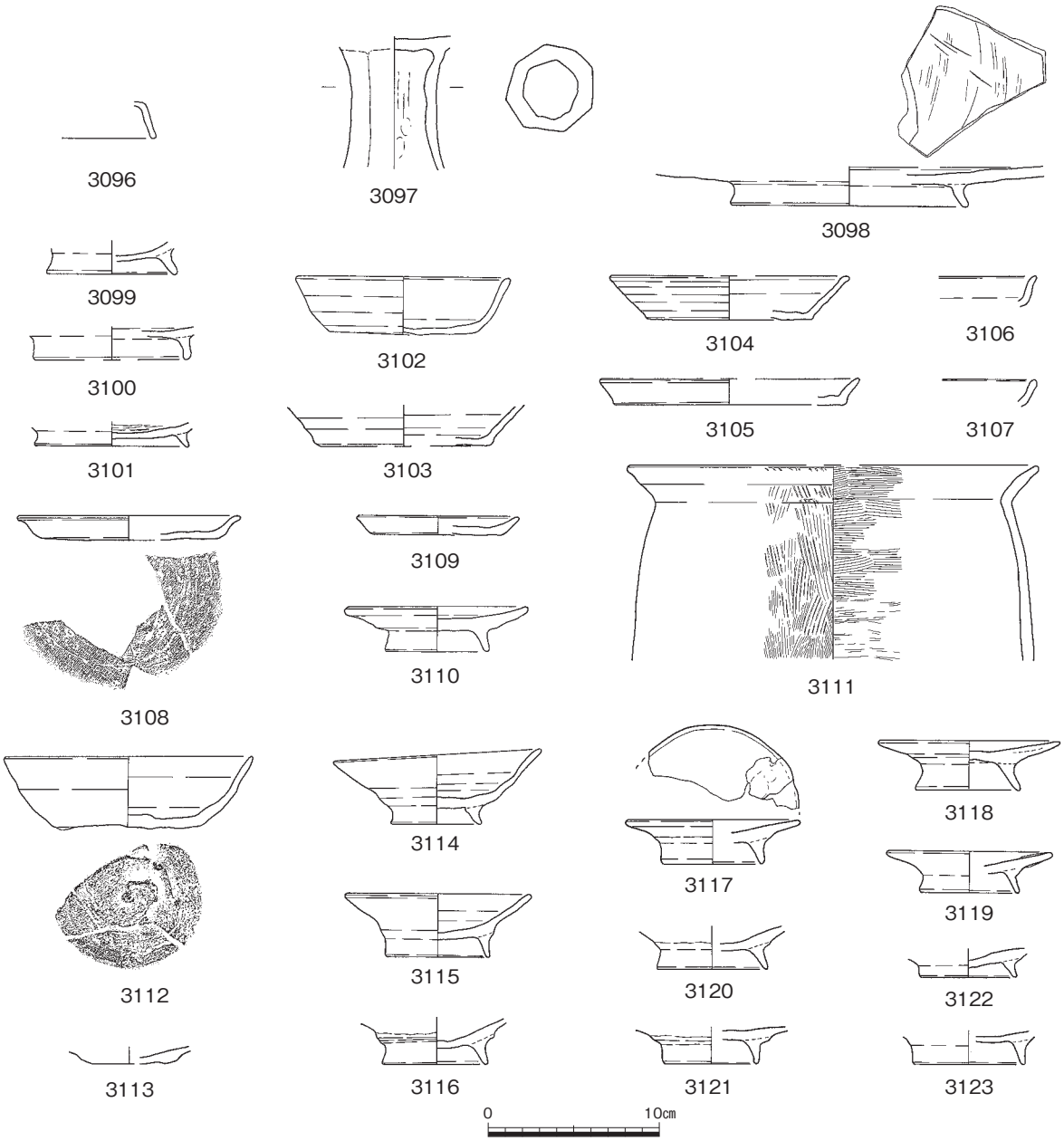
８　その他の遺構・遺物

柱穴35～51（第562～564・605・606図、図版105）

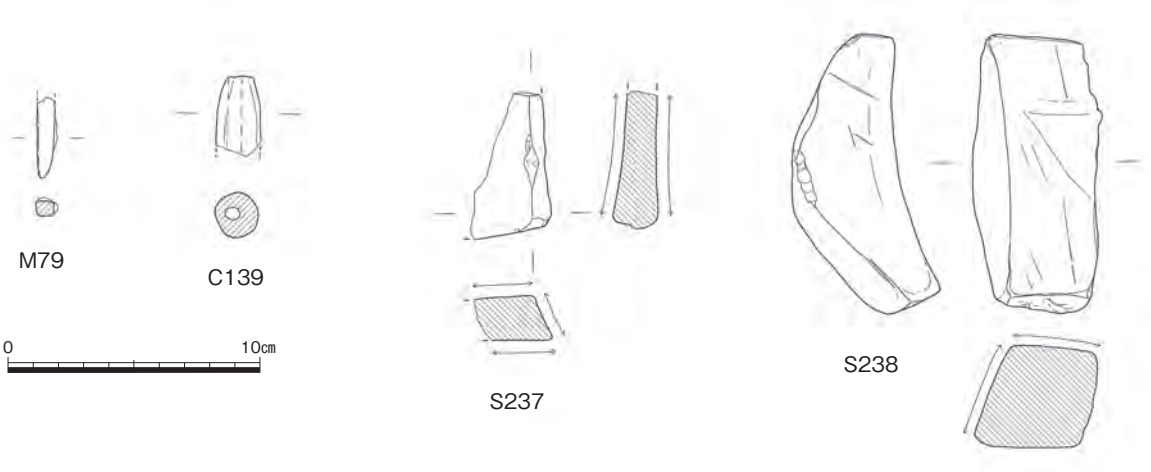
古代の土器が出土した柱穴は17基あり、Ｐ35～51とした。分布は旧１区の掘立柱建物周辺と旧５区の柱穴列周辺、旧６区の掘立柱建物周辺に偏り、旧２区は稀薄である。旧６区から奈良時代の土師器が出土しているが､旧６区では奈良時代に遡る遺構はなく、基盤上部に堆積した包含層からの混入の可能性がある。旧２区のＰ37からは**3112**～**3123**が一括で出土した。**3114**～**3123**は高台付の杯あるいは皿で、旧１区のＰ36からも同様の高台付皿**3110**が出土している。Ｐ36は径25㎝、深さ20㎝程度の小柱穴で、**3110**は柱穴の底中央から完形で出土している。地鎮などの祭祀行為に伴うと考えられる。　（渡邉）



1　にぶい黄褐色(10YR4/3)
粘性微砂



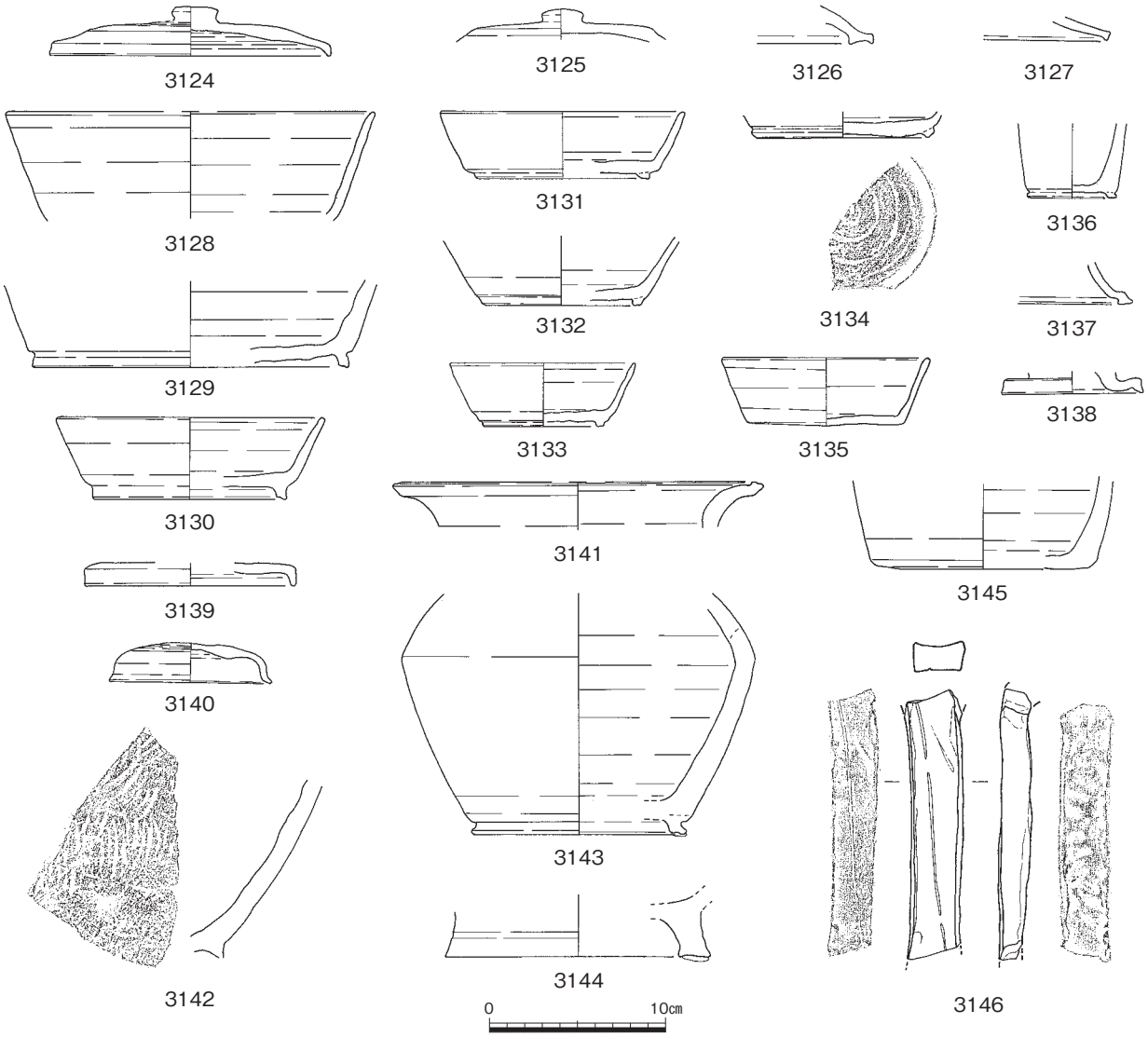
第605図　柱穴36（1/30）・柱穴出土遺物①（1/4）



第606図　柱穴出土遺物②（1/3）

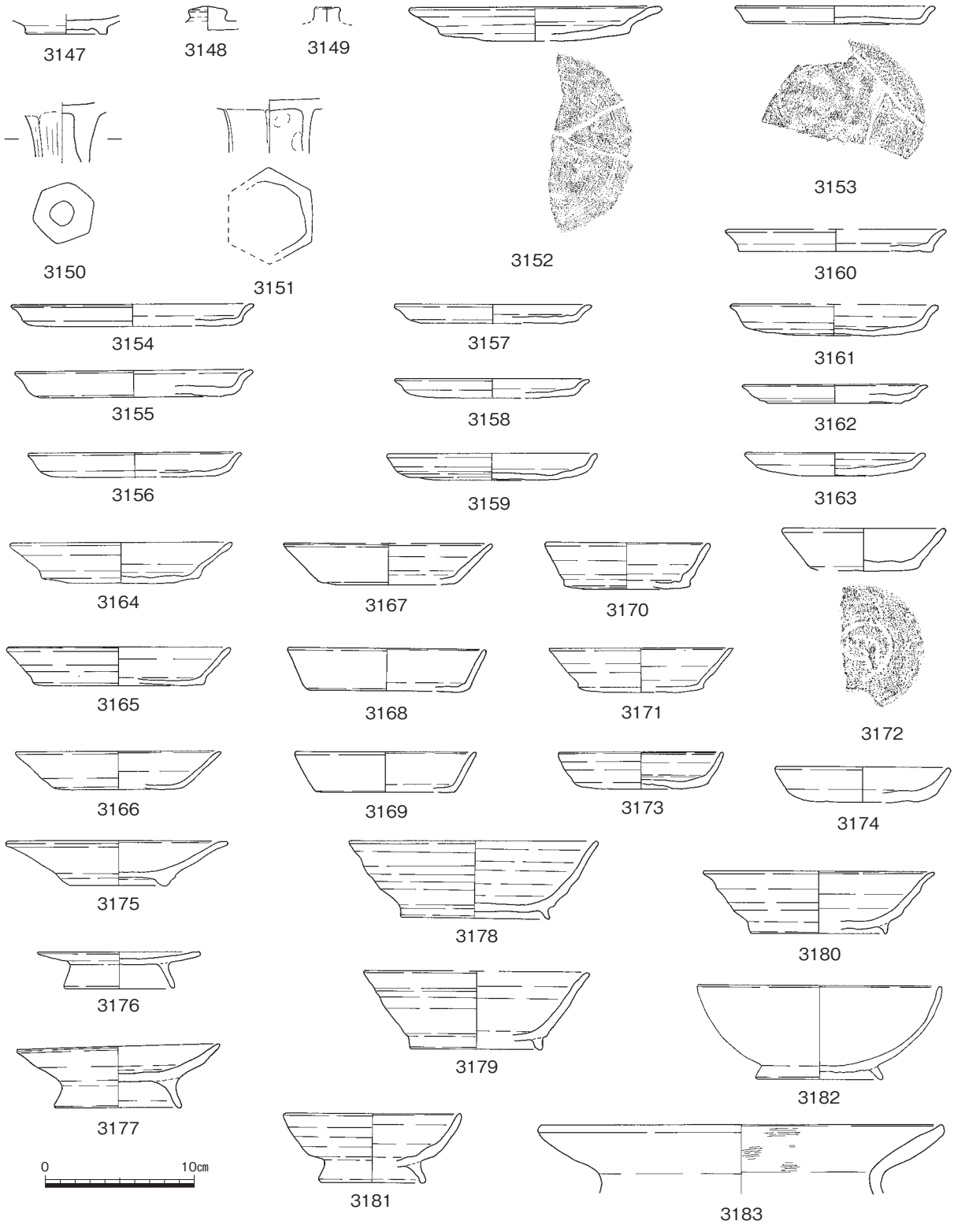
遺構に伴わない遺物（第607～611図、図版120）

主に掘り下げ作業に伴い出土した土器で、須恵器、緑釉陶器、土師器、黒色土器、瓦がある。形状

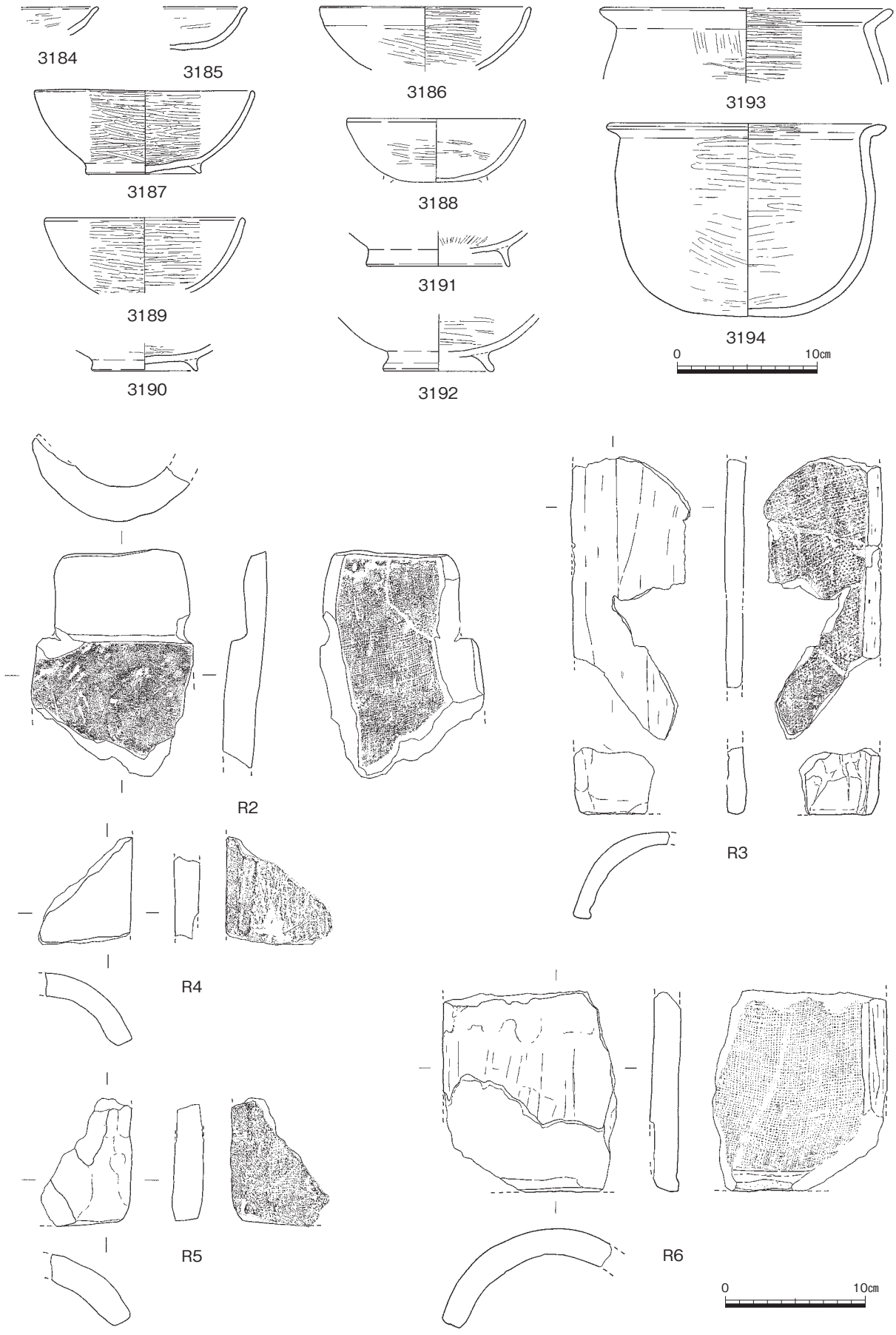


第607図　その他の出土遺物＜古代①＞（1/4）

から古代と特定し難い鉄器や石器、土製品などは除外している。掘立柱建物や土坑などの周辺からの出土が多い。また、旧６区には奈良～平安時代前半期の包含層が存在しており、その包含層から出土した土器が多い。第657図第10層がこの包含層にあたり、平安時代後半以降の遺構の基盤となっている。先述した柱穴から出土した奈良時代の土器も、この包含層の土器が混入したと思われる。土師器

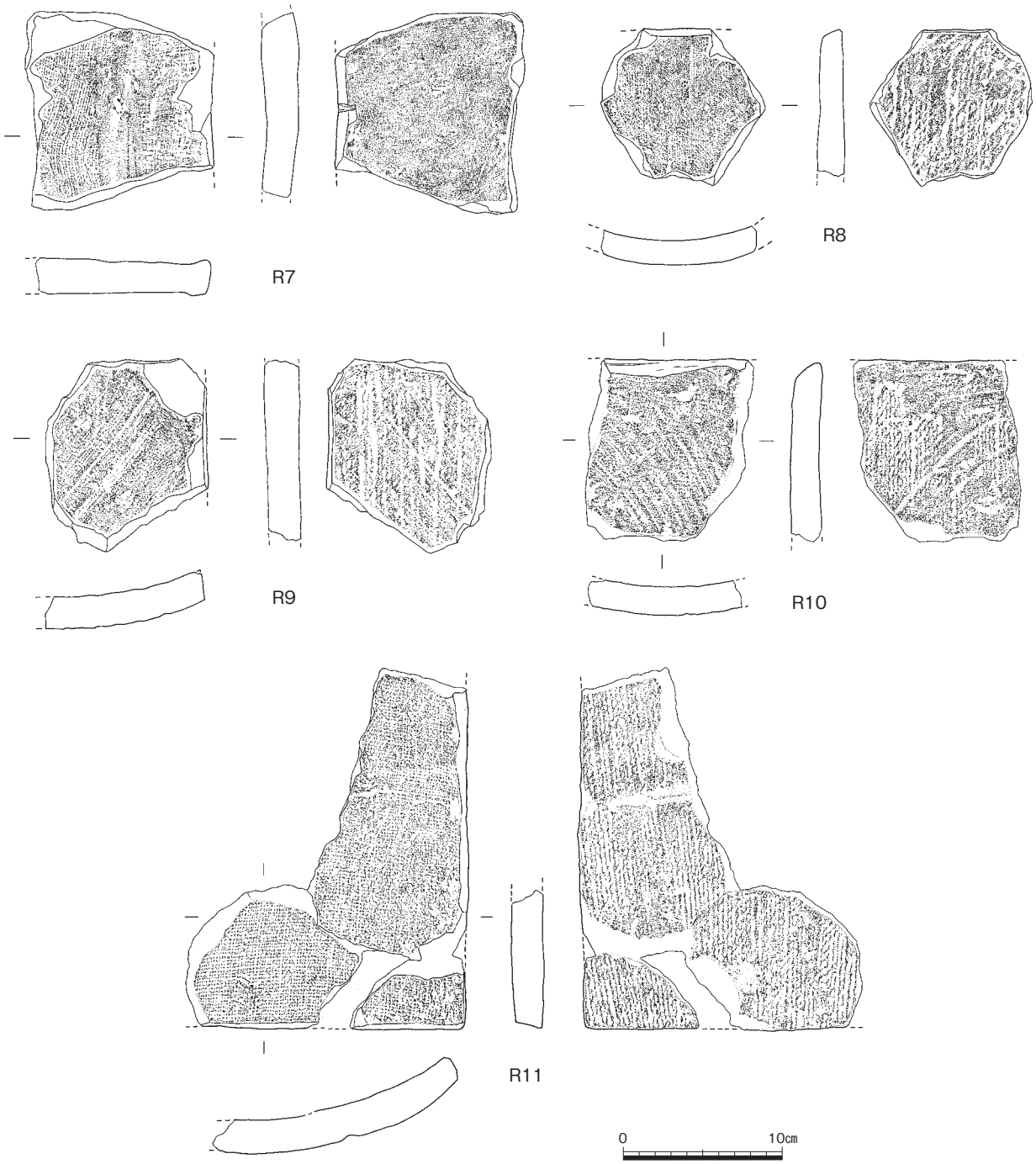


第608図　その他の出土遺物＜古代②＞（1/4）

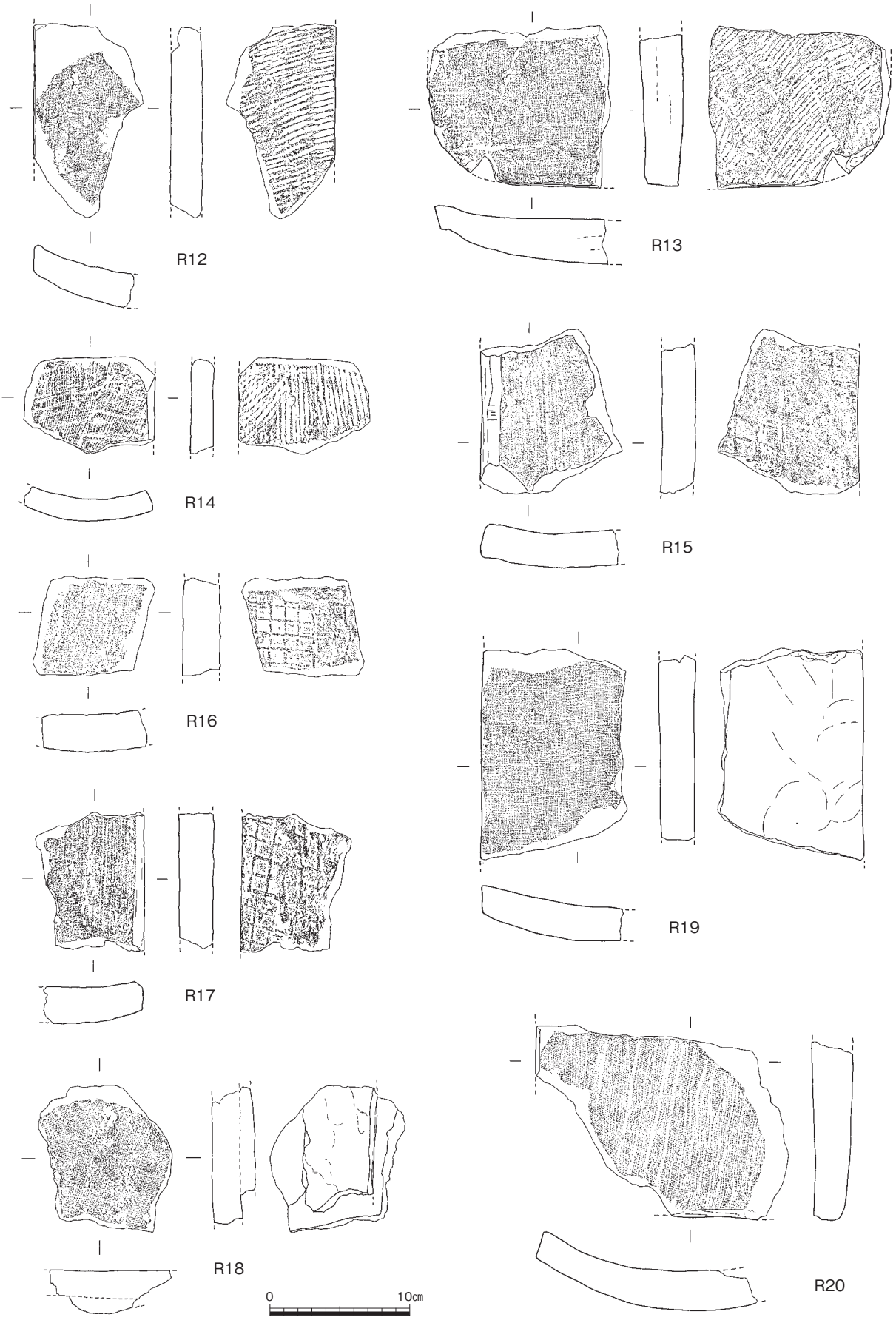


第609図　その他の出土遺物＜古代③＞（1/4）

のうち3148～3163・3165～3174・3177・3179～3181・3183～3185・3189・3191・3192が旧６区出土である。柱穴しかない旧２区からも比較的遺存状態の良い黒色土器が３点出土しており、生活の痕跡を見いだすことができる。緑釉陶器3147は旧１区から出土した。10世紀代の防長産と鑑定結果を得ている。3182は土師器深椀で、底径が大きく、比較的足高の高台が付く。白色化はしていない。古代末に位置付けられよう。瓦は旧１区や旧６区からの出土が多い。すべて細片で、摩滅したものが多く、中世以降の遺構からも出土している。R14～R16は井戸３から出土した。微高地上からの転落も考え得るが、転用するために遺跡外から持ち込まれた可能性もある。R18は２枚溶着している。なお旧１区から出土したR２・R７～R９については胎土分析を行い、結果を第５章第11節に掲載している。（渡邉）



第610図　その他の出土遺物＜古代④＞（1/4）



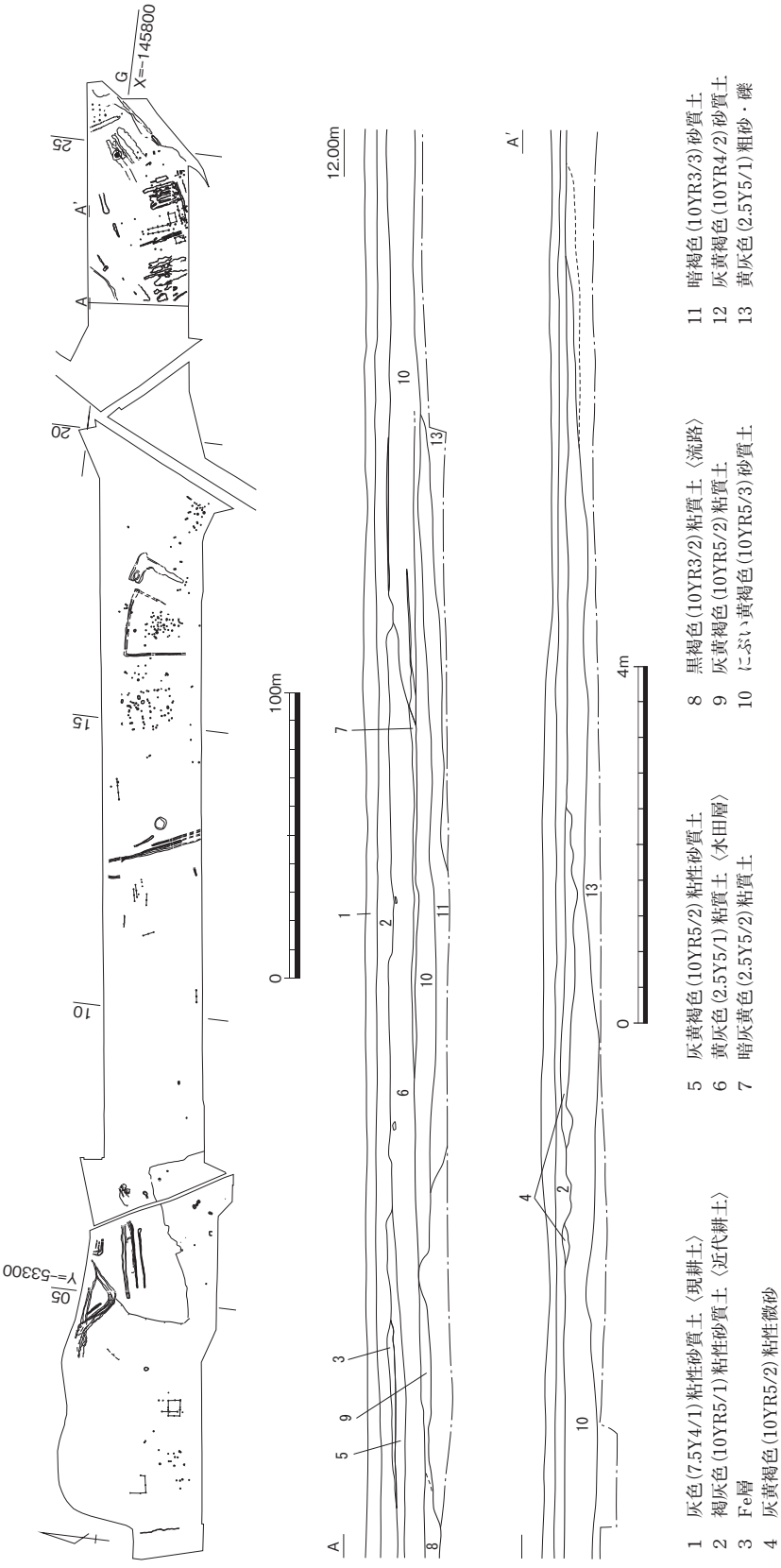
第611図　その他の出土遺物＜古代⑤＞（1/4）

第５節　中世の遺構・遺物

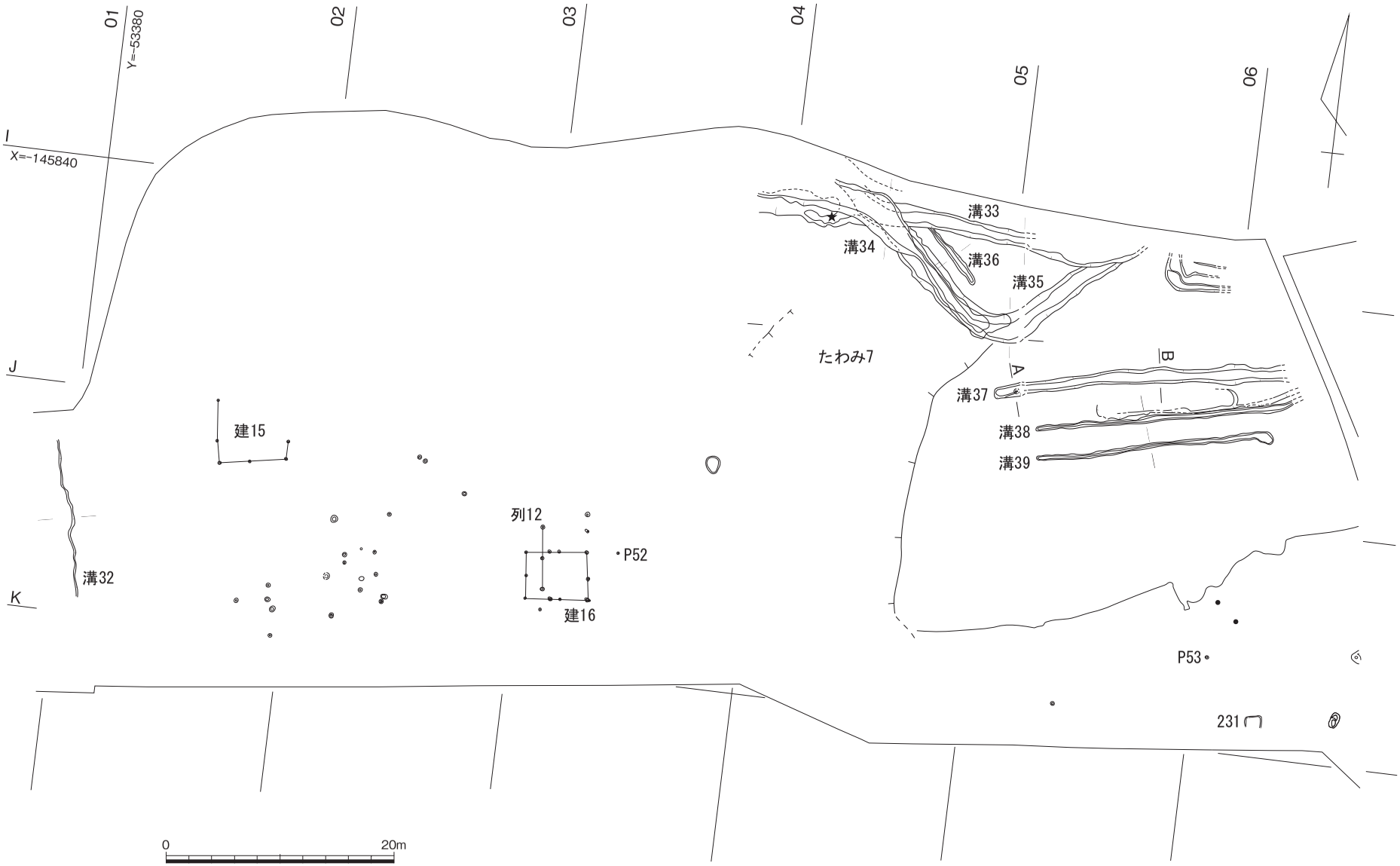
１　概要

中世も古代に引き続き、弥生時代～古墳時代に低位部であった遺跡の両端と中央部を中心に遺構が展開する。加えて、微高地上の旧５区に屋敷地が出現する。いずれも近現代耕作土直下で検出される。第612図に旧６区北壁Ａ断面を示しているが、第２層直下で古代以降の遺構を検出した。一方、銅鐸が出土した最も高所にあたる旧２区は希薄だが、遺構検出面が１ｍ近く高く、高いがゆえ削平された可能性がある。

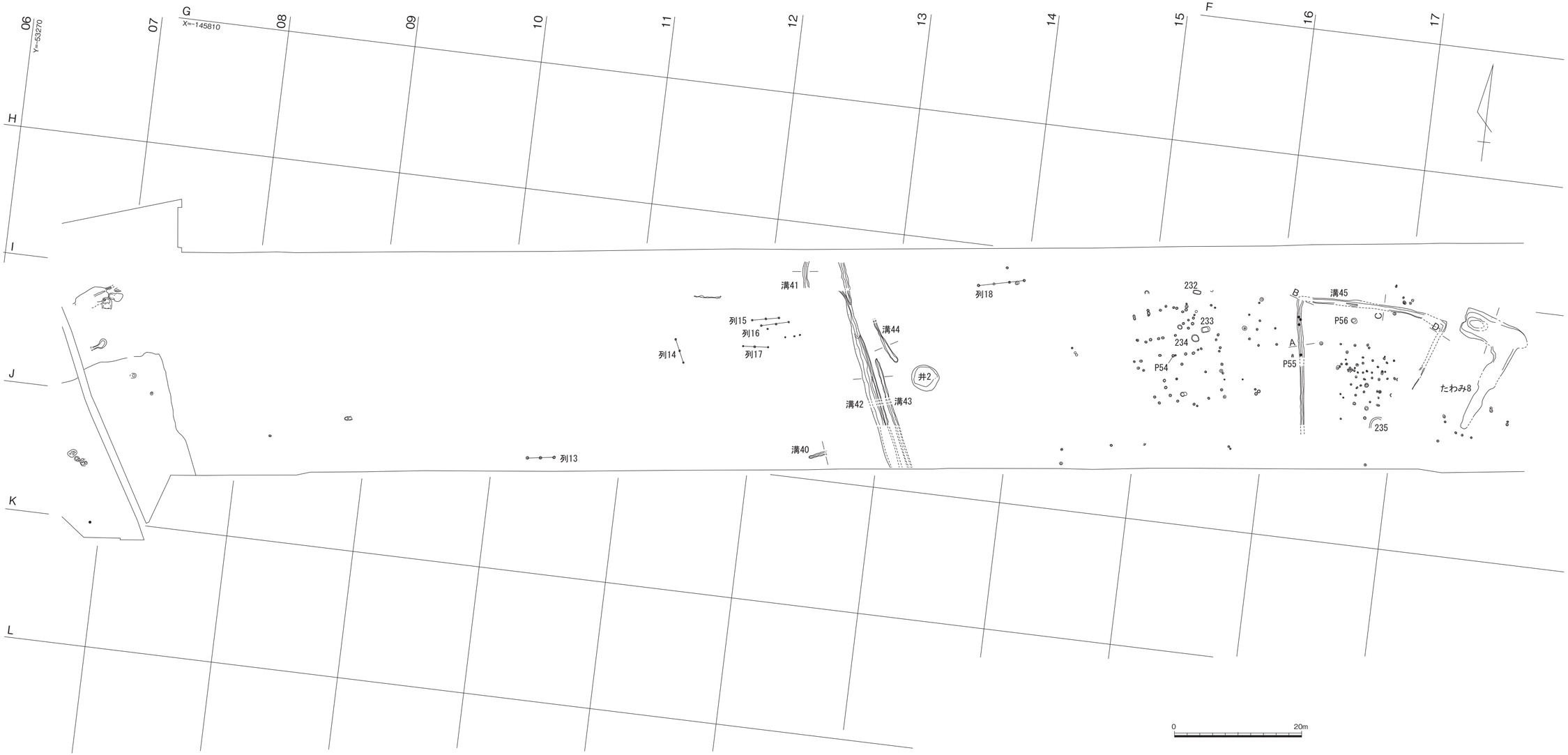
調査した主な遺構は、掘立柱建物４棟、柱穴列11基、墓１基、井戸２基、土坑５基などである。中心となる時期は13世紀代であるが、旧６区にある墓４から出土した土師器椀には古代から中世の過渡的な様相が認められ、前代から引き続き墓域として利用された後、集落が営まれと考えられる。また、耕作痕と思われる溝や素掘溝の存在から、近世には耕地化されたと想定される。　（渡邉）



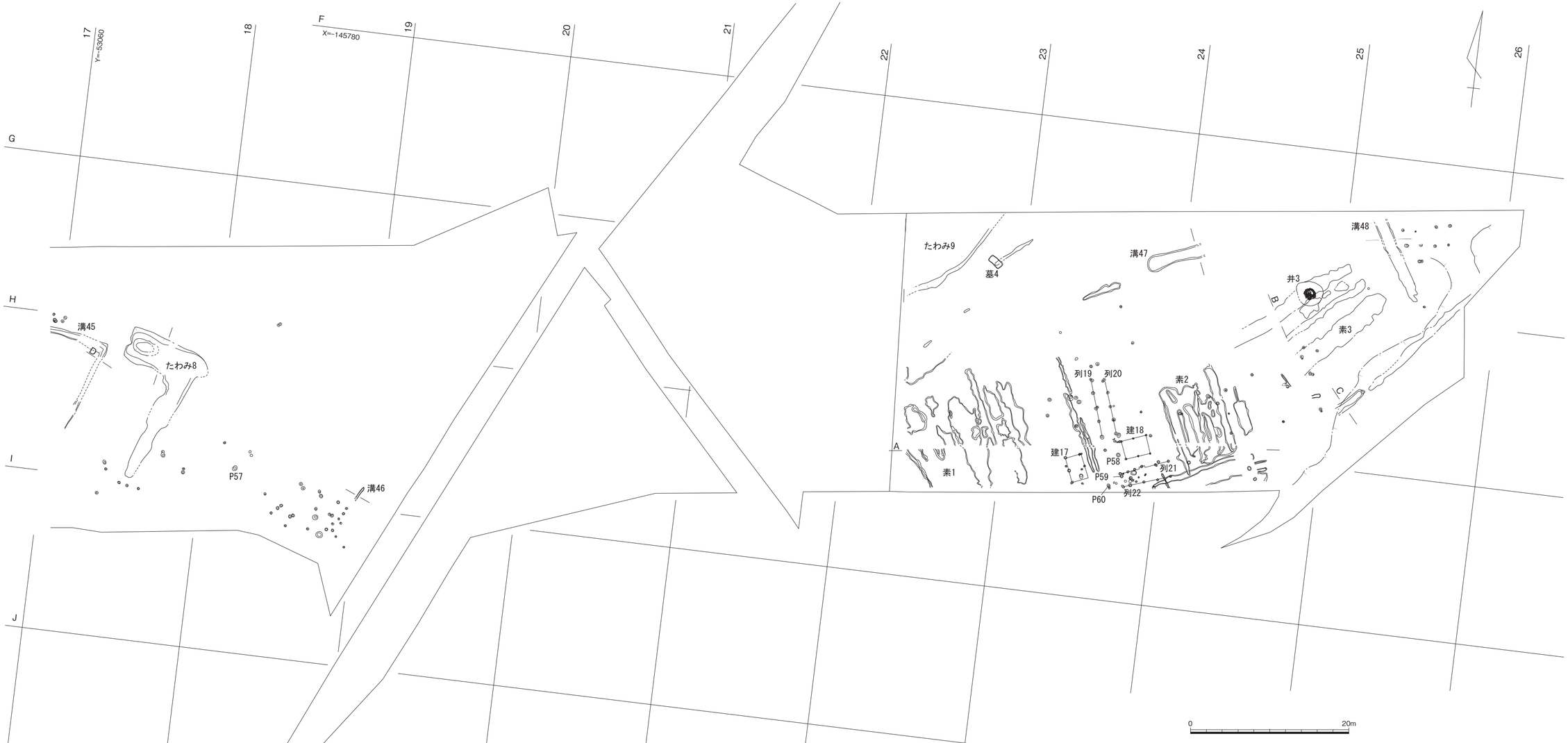
第612図　中世遺構全体図①（1/2,500）・東端土層断面図（1/80）



第613図　中世遺構全体図②（1/500）



第614図　中世遺構全体図③（1/500）

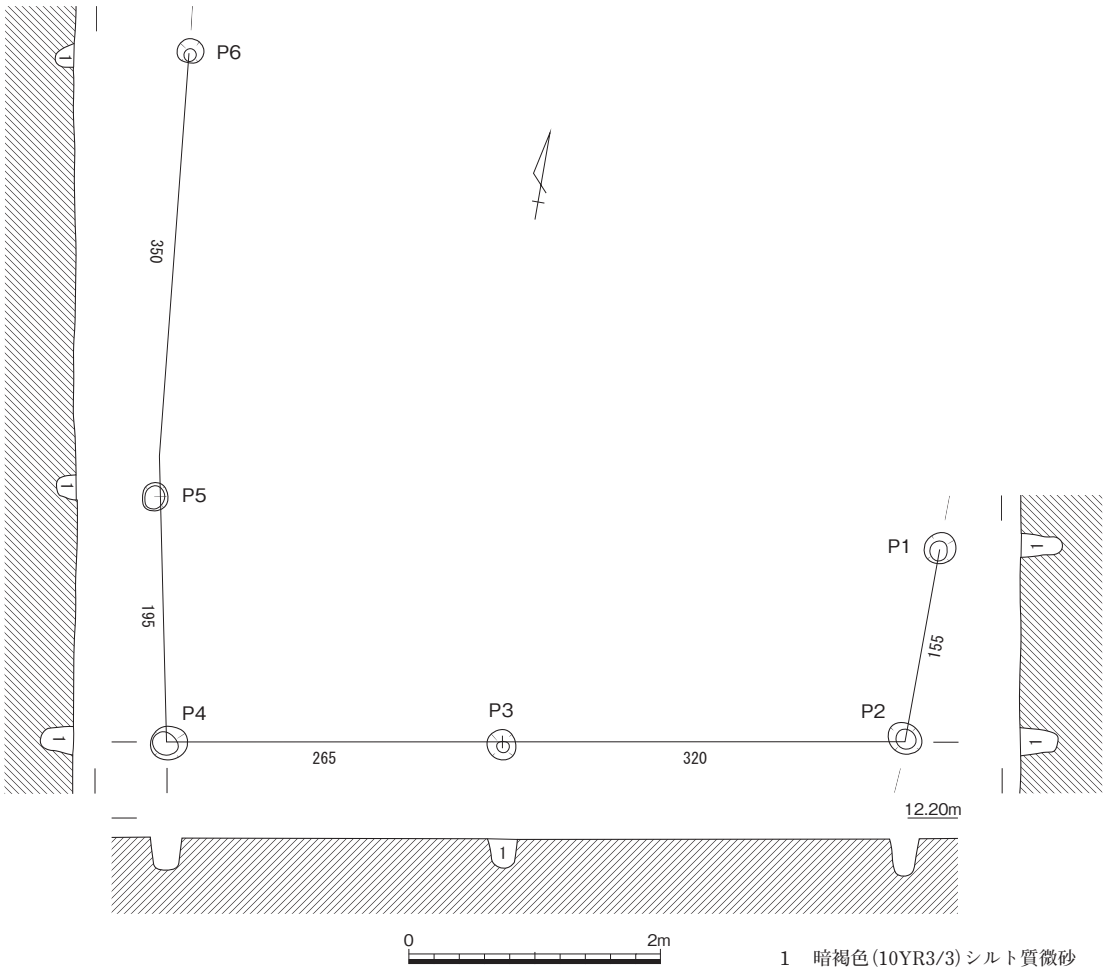


第615図　中世遺構全体図④（1/400）

２　掘立柱建物

掘立柱建物15（第613・616図）

Ｊ01に位置する、２間以上×２間の掘立柱建物と想定しているものである。桁行が585㎝以上、梁行が545㎝を測る。柱穴の並びはやや歪で、南側の梁行の柱穴の並びに対して、桁行の東辺と西辺が東側に寄った状態で検出している。また、柱間寸法にも差があり、梁の柱間寸法では最短のものが155㎝、最長のものが350㎝と、大きく差がある。また、北辺の梁行を構成すべき柱穴を検出するために精査したが、結果として検出することはできなかった。これは調査時に、この掘立柱建物の北半と南半で打って返しをして表土掘削を行い、分割して調査したことにも起因すると考えられる。掘立柱建物とするならば、柱穴を検出することができていないものの、柱間寸法などから、本来は４×２間であると考えられるであろう。柱穴の掘り方は円形を呈しており、直径は20～30㎝程度と小さい。埋土は単一層で、柱痕などは見られなかった。時期については、出土遺物がないことから不明であると言わざるを得ないが、周辺で検出されている古代の掘立柱建物の柱穴の埋土よりもやや明るい埋土であることで、検出時から明瞭に差があったことや、柱穴の直径が古代の掘立柱建物と比べて小さいことが、同じく中世の掘立柱建物と考えられる掘立柱建物16と共通している点などから、この掘立柱建物の時期は、中世以降のものであると考えている。　（圃）



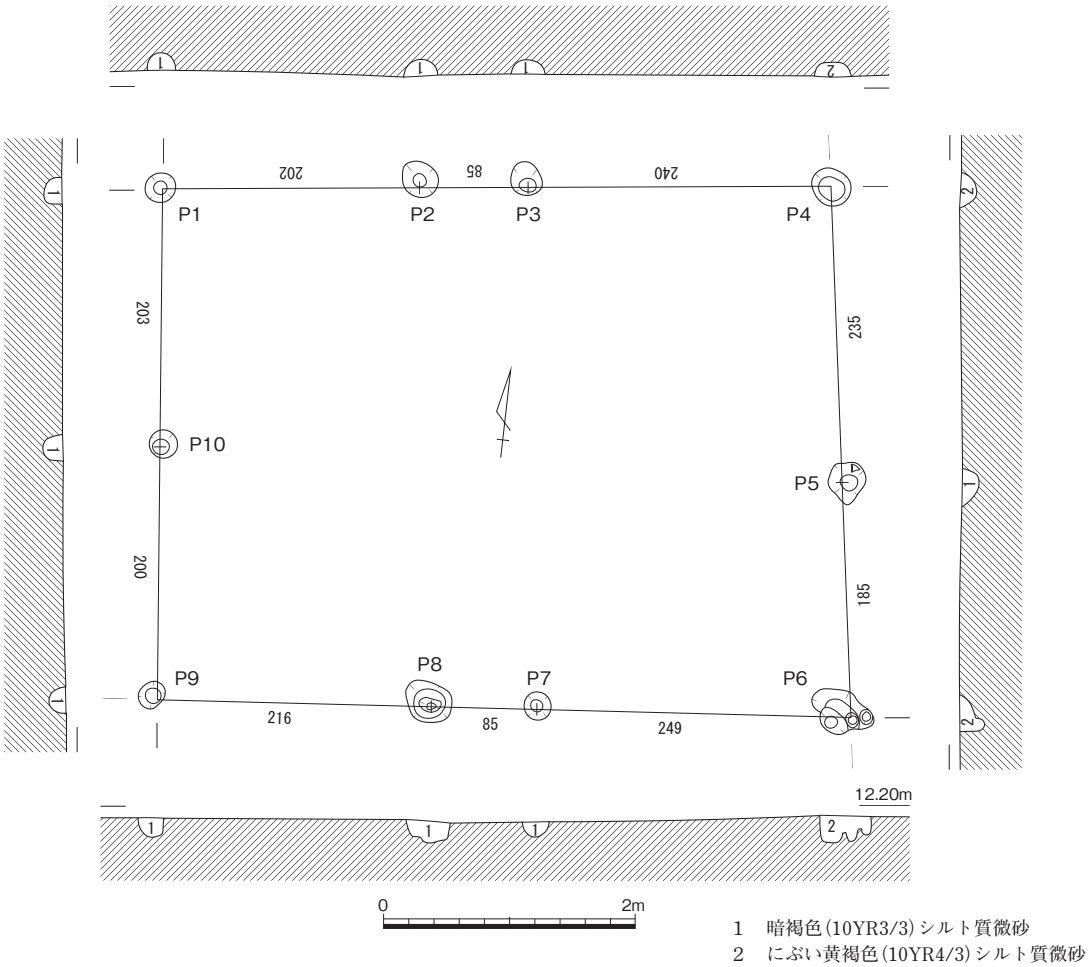
第616図　掘立柱建物15（1/60）

掘立柱建物16（第613・617図、図版34－１）

Ｊ03に位置する３×２間の掘立柱建物で、柱穴列12と重複して検出している。また、８世紀代の土器を多く出土している古代のたわみ６とも重複しており、このたわみ６の上層で検出している掘立柱建物となる。

規模は、桁行が550～527㎝、梁行が420～403㎝を、面積は22.32㎡を測るものである。３×２間であるが、桁行の間の柱間寸法は、中央部分の柱穴２本（北辺Ｐ２－Ｐ３間、南辺Ｐ７－Ｐ８間）の距離が82～85㎝と短いものとなる。梁行のほぼ中央部分にあたる場所が、これら柱穴の中央部分にあたることから、この柱穴が建て替えによって掘削されたものではなく、元々の柱の位置であることが考えられる。掘り方は円形を呈しており、規模は20～30㎝程度と小さいものが多い。

出土遺物はないものの、検出状況として、古代のたわみ６の上層で検出していることと、柱穴の直径が他の中世の柱穴列などと同様に小さいことなどから、この遺構の時期は、中世以降の掘立柱建物であると考えている。（團）



第617図　掘立柱建物16（1/60）

掘立柱建物17（第615・618図、図版34－２）

平安時代以降に微高地となったＨ23に位置する南北２間×東西１間の側柱建物である。検出面の標

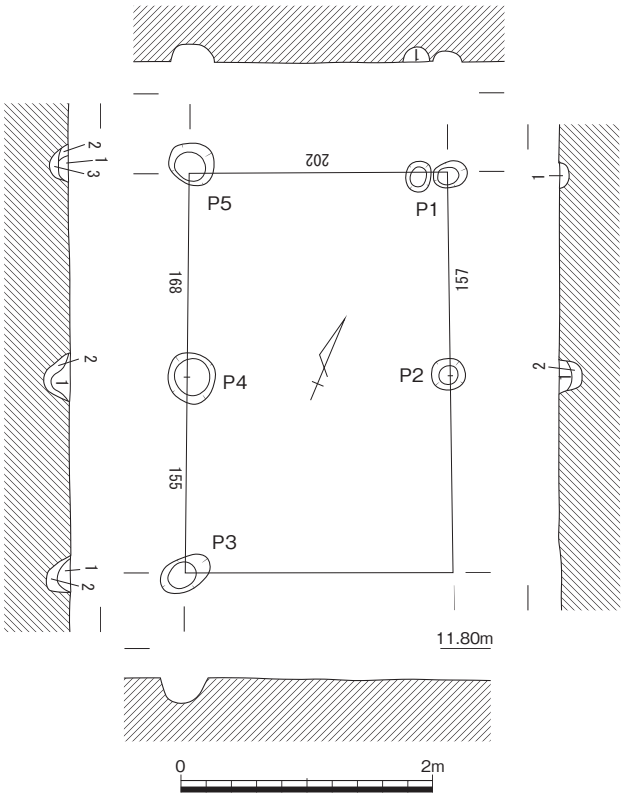
高は11.76ｍである。南東角の柱穴は見つからず、Ｐ６は当建物に伴うと断定できない。柱穴は径25～40㎝の円形で、最も深いＰ４で深さ20㎝を測る。埋土は２層に分かれるが、柱痕は確認できていない。

土師器椀**3195**はＰ４から出土した。口縁端部が少し膨らみ、表面を平滑に仕上げている。13世紀前半に比定される。（渡邉）

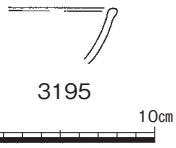
掘立柱建物18（第615・619図、図版34－３）

Ｇ23に位置する２×１間の掘立柱建物で、規模は桁行が323～314㎝、梁行が236～234㎝、面積は7.46㎡を測るものである。柱穴の掘り方は円形を呈している。

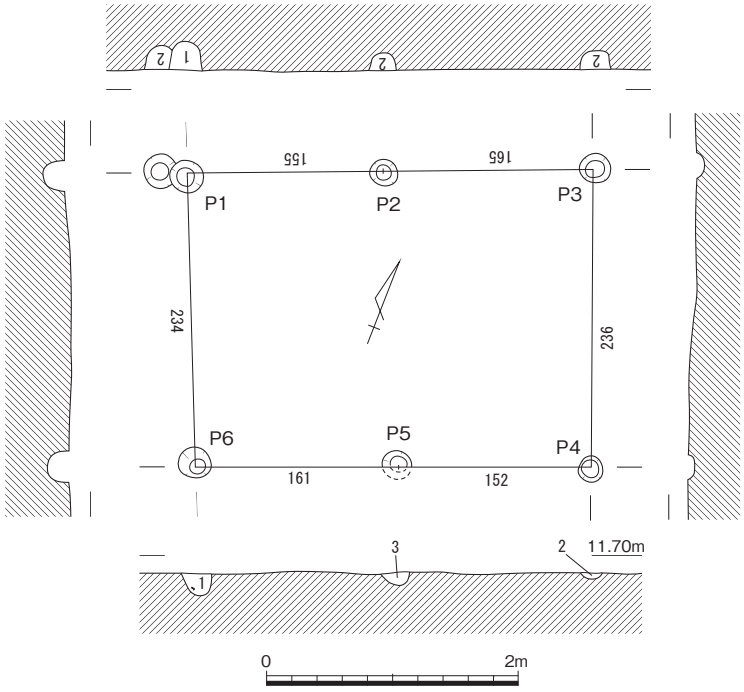
出土遺物は、図示できたものには、Ｐ１から出土している吉備系土師器椀の口縁部**3196**が１点がある。復元される直径は14.2㎝で、外面はナデ調整、内面にはミガキが認められる。この掘立柱建物の時期は、出土遺物や、掘り方の直径が小さいことからなど、中世と考えられ、そのなかでも13世紀代の遺構であると思われる。（圍）



1　黒褐色(10YR3/2)粘性砂質土
2　灰黄褐色(10YR4/2)粘性砂質土
　（黄色土粒やや多混）
3　にぶい黄褐色(10YR4/3)
　粘性砂質土



第618図　掘立柱建物17（1/60）・出土遺物（1/4）



1　黄灰色(2.5Y4/1)細砂
2　黄灰色(2.5Y5/1)細砂（礫混）
3　暗灰黄色(2.5Y4/2)粘性砂質土

第619図　掘立柱建物18（1/60）・出土遺物（1/4）

３　柱穴列

柱穴列12（第613・620図）

Ｊ03に位置する２間の柱穴列で、南北方向に延び、重複している掘立柱建物16の梁間とほぼ平行している。掘立柱建物６と同様に、たわみ６上層で検出しているものである。柱穴の掘り方は円形を呈しており、埋土は暗褐色シルト質微砂の単一層である。出土遺物には、土師器皿**3197**が１点出土している。底部にはヘラで切り離した痕跡が見られる。この出土遺物と、たわみ６上層で検出している状況などから、中世の遺構であろう。　（圃）

柱穴列13（第614・621図、図版36－１）

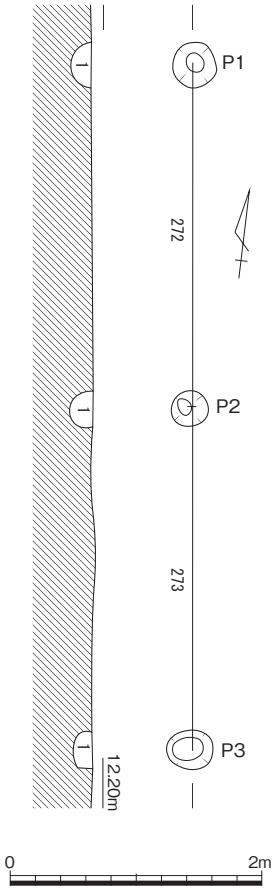
Ｊ10に位置する柱穴列で、古代の掘立柱建物９の南側で検出している。柱穴列13の各柱穴が掘立柱建物９の南側の梁行の柱穴と対をなしているようにいるため、調査時には掘立柱建物９に関連するものであるとの認識であったが、出土遺物の特徴から、掘立柱建物９とは関連性がない、中世の柱穴列であると判断した。南側は調査区外になるため、実際には掘立柱建物となる可能性もある。出土遺物には、土師器小皿**3198～3200**がある。いずれも細片である。復元される口径は、6.3～6.9㎝である。これらの土器から、13世紀後半の遺構であると判断している。　（圃）

柱穴列14（第614・622図）

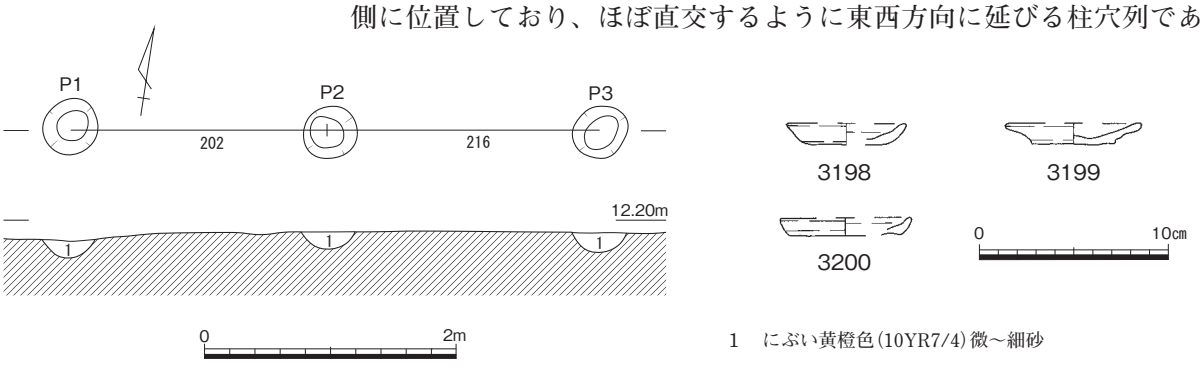
Ｉ11に位置する２間の柱穴列で、規模は397㎝ある。柱穴列14～17の周辺には、弥生時代や古墳時代の柱穴も検出しており、調査時には柱穴列と認識することができなかったが、柱穴内から出土した土器から、時期がまとまり、柱穴列として認識できた遺構である。東側に位置している溝42・溝43と平行している。出土遺物には図示できない細片ではあるが、吉備系土師器椀が出土している。このことから、中世前半期の遺構であると考えられる。　（圃）

柱穴列15（第614・623図）

Ｈ11に位置する２間の柱穴列で、規模は425㎝である。柱穴列14の東側に位置しており、ほぼ直交するように東西方向に延びる柱穴列であ



第620図　柱穴列12（1/60）・出土遺物（1/4）



第621図　柱穴列13（1/60）・出土遺物（1/4）

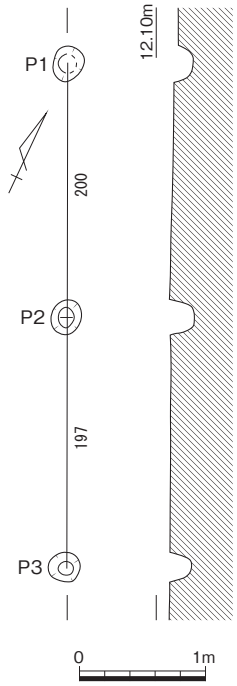
る。柱穴掘り方の直径は約30㎝と小さいが、深さが27～35㎝ある。出土遺物には、吉備系土師器椀の口縁部細片である**3201**を１点図示している。この遺物から、遺構の時期は、中世前半期であると考えられる。（團）

柱穴列16（第614・624図）

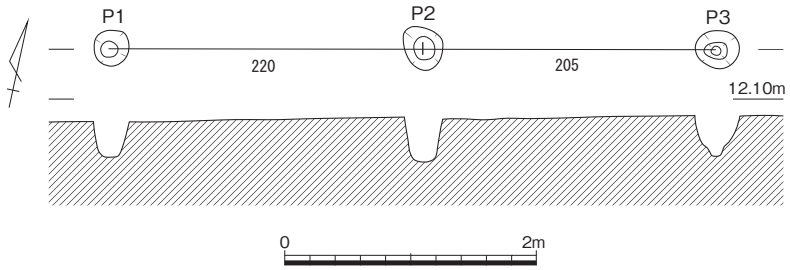
Ｈ11に位置する２間の柱穴列で、規模は437㎝である。柱穴列15の南側にほぼ平行し、東西方向に延びる柱穴列である。出土遺物には、細片で出土遺物は細片であるが、吉備系土師器椀と土師器皿が出土している。中世前半期の遺構であると考えられる。（團）

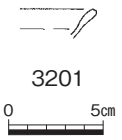
柱穴列17（第614・625図）

Ｉ11に位置する２間の柱穴列で、柱穴列16の南側、柱穴列14の東側に位置している。柱穴列15・柱穴列16同様に東西方向に延びるが、軸線にずれが生じている。規模は375㎝を測るものである。出土遺物は細片であるが、吉備系土師器椀と土師器皿が出土している。このことから、中世前半期の遺構であると考えられる。（團）



第622図　柱穴列14（1/60）





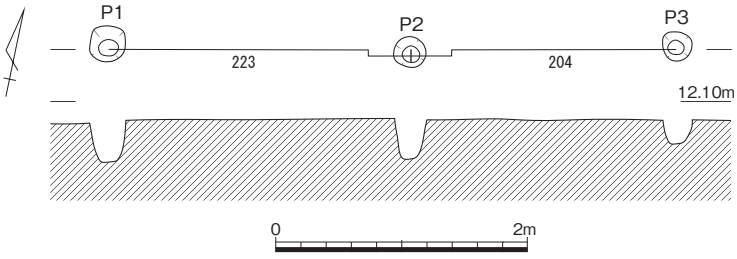
第623図　柱穴列15（1/60）・出土遺物（1/4）

柱穴列18（第614・626図、図版36－３）

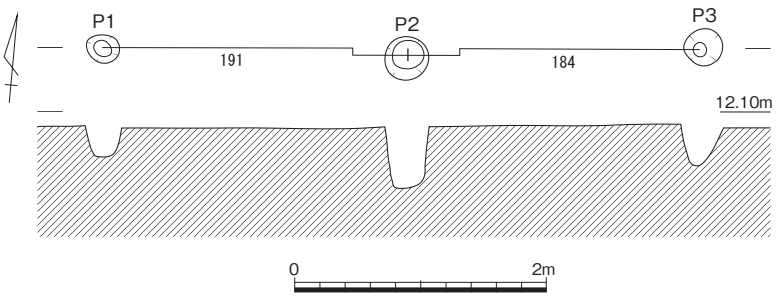
Ｈ13区、柱穴列17の約40ｍ北東に位置する。３間の柱穴列で、全長は725㎝、柱間距離は245～235㎝を測る。

柱穴の掘り方は円形で、断面形は椀形を呈し、深さは20～28㎝を測る。Ｐ１～Ｐ３には柱痕が残っており、径10～14㎝程度の柱材を使用していたと考えられる。

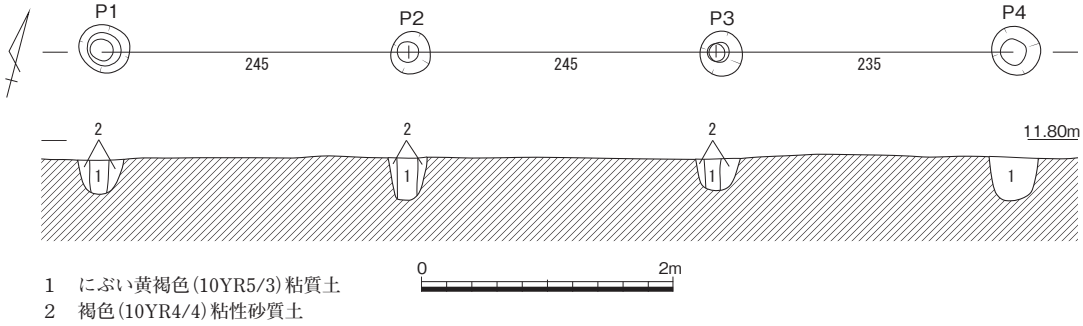
遺物は、Ｐ１とＰ４の埋土から土師器の椀が出土しているが、いずれも破片である。時期は中世と考えられる。（藤井）

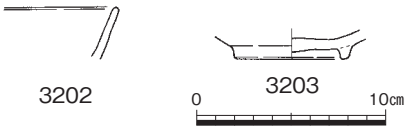


第624図　柱穴列16（1/60）

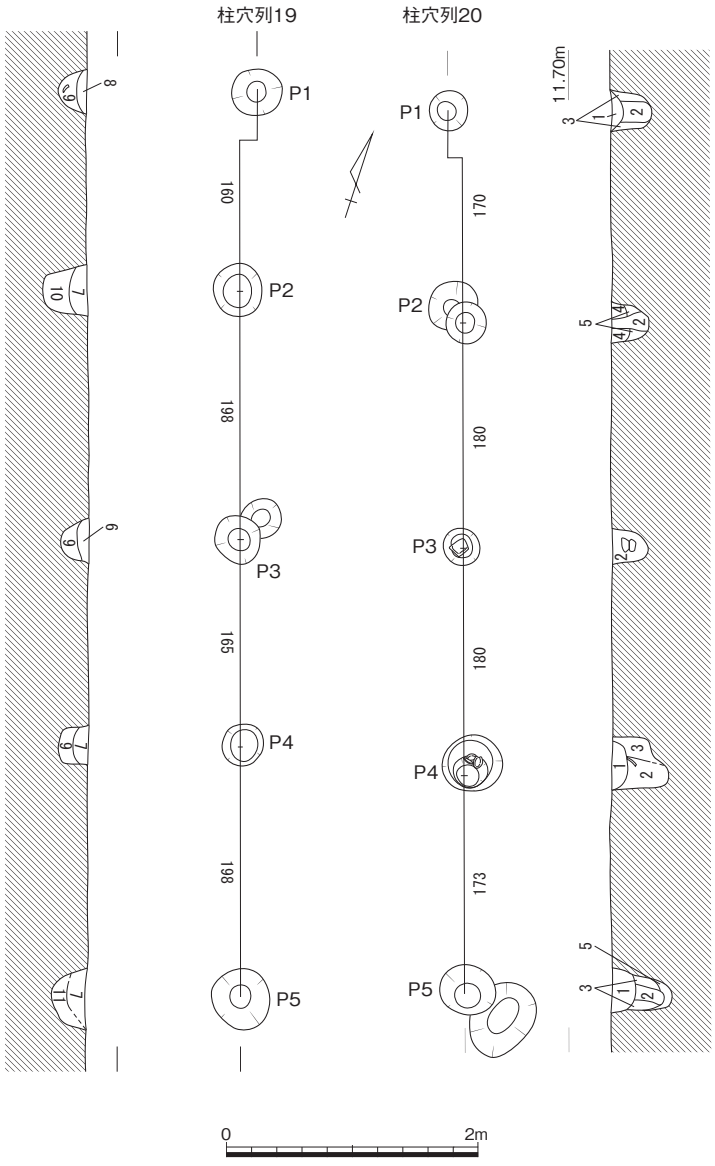


第625図　柱穴列17（1/60）





第626図　柱穴列18（1/60）・出土遺物（1/4）



柱穴列19（第615・627・628図、図版36－２）

Ｇ23の南側に位置する４間の柱穴列で、南側に位置する掘立柱建物17の桁行、掘立柱建物18の梁行と平行しており、これらの掘立柱建物との関連性が考えられる。規模は719㎝を測る。後述する柱穴列19とは、柱穴間距離や位置など、相似形を呈している。しかし、柱穴列間の距離が２ｍであることから、掘立柱建物でなく、個別に柱穴列として報告しているが、組み合って使用されていた可能性も考えられる。出土遺物には、吉備系土師器椀**3204**、土師器小皿**3205**～**3208**がある。いずれも細片であり、口縁部は１/６以下のものである。土師器小皿は復元径が8.6～9.2㎝、器高が1.0～1.5㎝で、柱穴列20と類似する。このことから、遺構の時期は13世紀初頭と考えられる。　（圃）

1　にぶい黄橙色(10YR6/3)細砂
2　黄灰色(2.5Y5/1)細砂
3　黒褐色(2.5Y3/1)細砂
4　暗灰黄色(2.5Y4/2)細砂
5　灰黄褐色(10YR4/2)粘性微砂
6　黄灰色(2.5Y4/1)粘性微砂
7　黒褐色(2.5Y3/1)細砂
8　黒褐色(10YR3/1)粘性微砂
9　黄灰色(2.5Y4/1)細砂
　（黒褐色(2.5Y3/1)細砂土塊混）
10　黄灰色(2.5Y5/1)細砂
11　褐灰色(10YR6/1)粗砂混細砂

第627図　柱穴列19・20（1/60）

柱穴列20（第615・627・629図、図版36－２、写真44・45）

Ｇ23の南側、柱穴列19の東側に平行に位置している４間の柱穴列で、規模は700㎝を測る。Ｐ２とＰ５が他の柱穴と重複しているため、補修が行われた可能性が考えられる。また、Ｐ４からは、ほぼ完形の土師器小皿**3218**が出土している。これらの遺物は、柱痕の北側に接して出土していることから、柱を据えた後に掘り方へ土を入れる際に埋納したものであると考えられるであろう。Ｐ３からは、中層で拳大程度の石を検出している。

出土遺物は吉備系土師器椀**3210**～**3213**、土師器小皿**3214**～**3221**、丸瓦の**Ｒ21**がある。**3211**の内外面はナデ調整で、高台が1.2㎝と高く、直径は約15㎝である。ミガキが見られない。土師器小皿は直径が8.6～9.6㎝で、器高が1.3～1.5㎝である。底面にはすべてヘラ切りの痕跡が認められる。これらの遺物の特徴から、遺構の時期は13世紀初頭であると考えられる。（團）

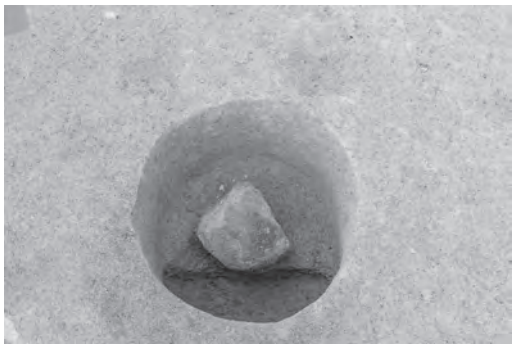


写真44　柱穴列20－Ｐ３（東から）

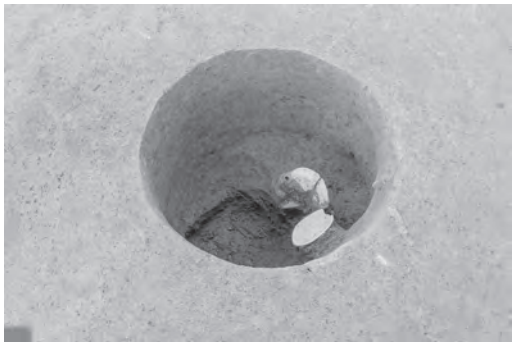
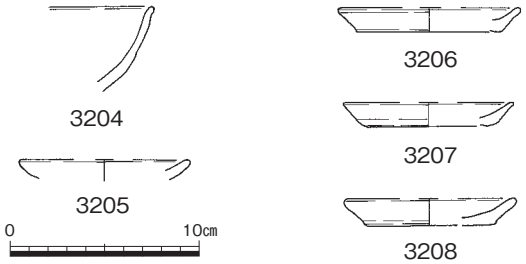
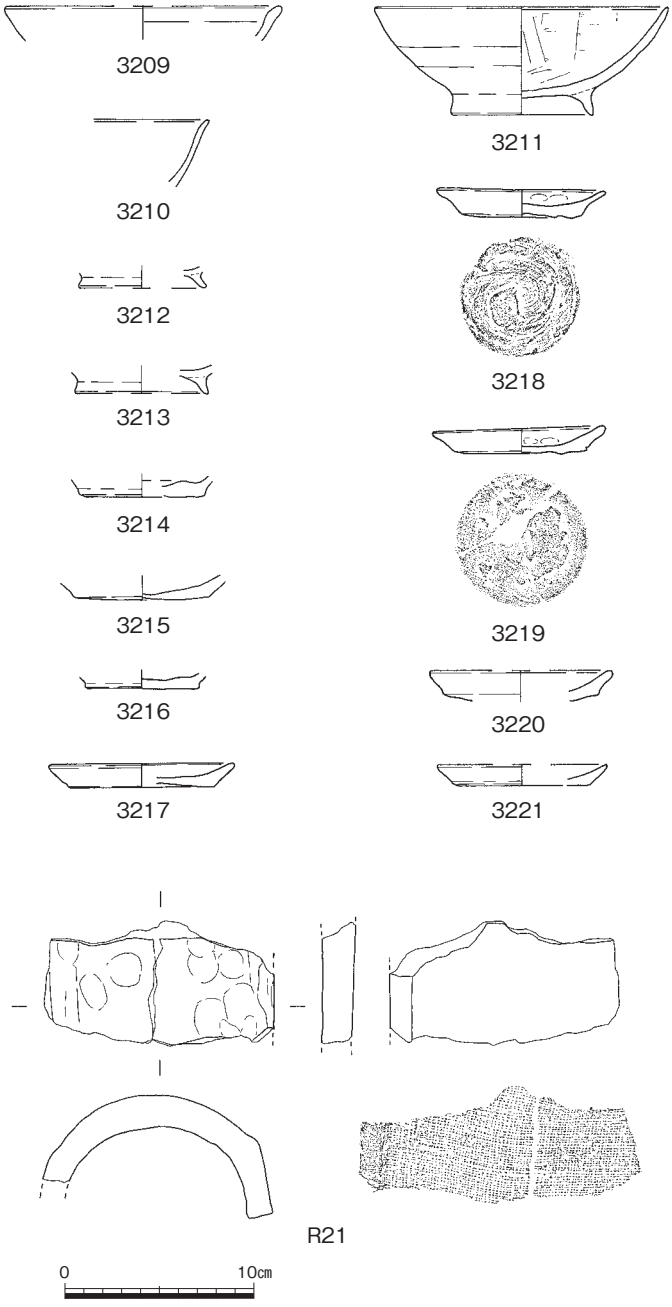


写真45　柱穴列20－Ｐ４（東から）



第628図　柱穴列19出土遺物（1/4）

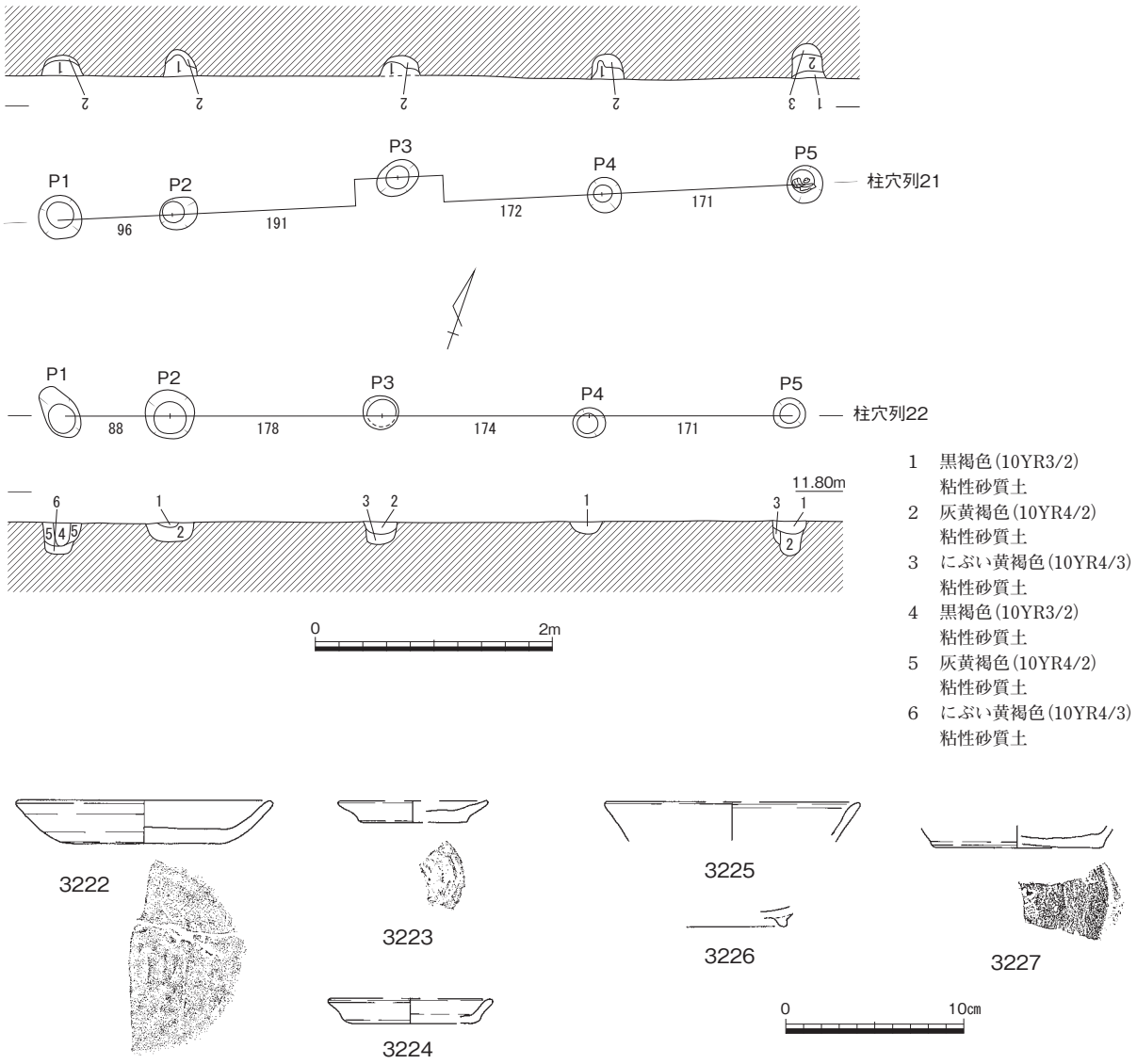


第629図　柱穴列20出土遺物（1/4）

柱穴列21・22（第615・630図、図版36－４）

掘立柱建物18の南に位置する。東西方向の柱穴列で、主軸は掘立柱建物18に平行する。また、柱穴列19・20とは直交関係にある。柱穴列21と柱穴列22の柱穴配置がそれぞれ対応するため、当初は掘立柱建物を構成すると考えたが、柱穴列間が狭く、梁側にあたる西側と東側で柱間寸法に差があることから両者が一体となった上屋を想定し難く、別個の柱穴列として扱った。それぞれのＰ３から東で２×１間の掘立柱建物となる可能性もある。柱穴は径30～40㎝の円形で、深さは10～30㎝あり、端に位置するＰ５・６・10がこのなかでは深い方である。

すべての柱穴から土器が出土した。多くが細片で、古代に遡る土器も含まれている。柱穴列21のＰ５からは**3222・3223**がまとまって出土した。柱穴埋没過程で意図的に置かれたと思われる。柱穴列21のＰ３から**3224**、柱穴列22のＰ１から**3225**、同Ｐ２から**3226**、同Ｐ５から**3227**が出土した。杯**3222・3227**は中心までのヘラ切りが認められる。**3222**もヘラ切りで、板の圧痕が残る。**3223**はヘラ切り未調整である。椀の法量が小さく、高台も矮小である点から、13世紀前半に位置付けられよう。（渡邉）

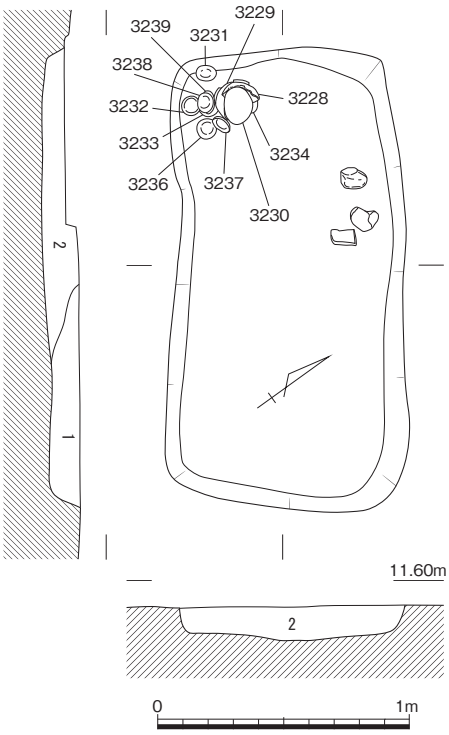


第630図　柱穴列21・22（1/60）・出土遺物（1/4）

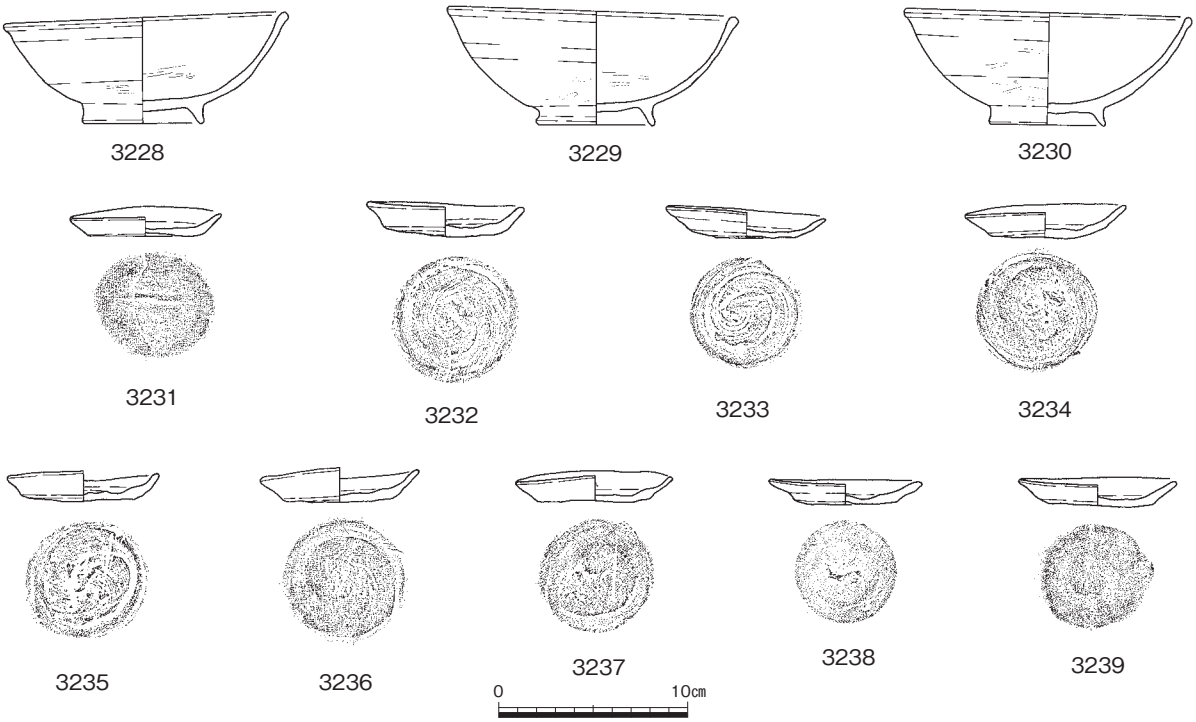
４　墓

墓４（第615・631図、図版39－２・３・106）

Ｆ22南東部に位置する。掘り方はやや不整形だが方形を呈する。土層は２層に分かれ、第１層とした土器を集積していない側が新しく、第２層とした土器を集積した側が古い。いずれにも骨片と思われる５㎜未満の白い破片を含み、その量は第１層の方が多い。第１層には粒子が細かい炭化物を多く含んでいるほか、焼土も見られる。ただし、基盤層が斜面堆積土でここにも炭化物が見られるので、土坑埋土の炭化物がこの土坑由来かどうかは判別が難しい。埋土中の西端隅で土師器の椀３点と皿９点からなる集積を検出した。椀が内側から**3230**、**3228**、**3229**の順に重なり、皿は北から**3231**が単独、**3238**・**3239**は**3238**が上で重なり、**3232**は**3238**・**3239**の下、**3233**・**3234**は椀**3228**～**3230**の下、**3235**・**3237**は**3235**が上で重なり**3236**は**3235**・**3237**の下であった。また10㎝程度の大きさの礫３点を北側縁西側の底面から５㎝上で検出した。椀は直径15㎝、皿は直径８㎝強を測る規格で、椀は内外面ヘラミガキを施し器高も６㎝と高いもので、土師器椀としては古式にあたり11世紀末を中心とした時期が想定できる。　（氏平）



1　灰黄褐色(10YR4/2)微～細砂
　（炭多･骨片･焼土含）
2　褐灰色(10YR4/1)微～細砂（骨片含）



第631図　墓４（1/30）・出土遺物（1/4）

５　井戸

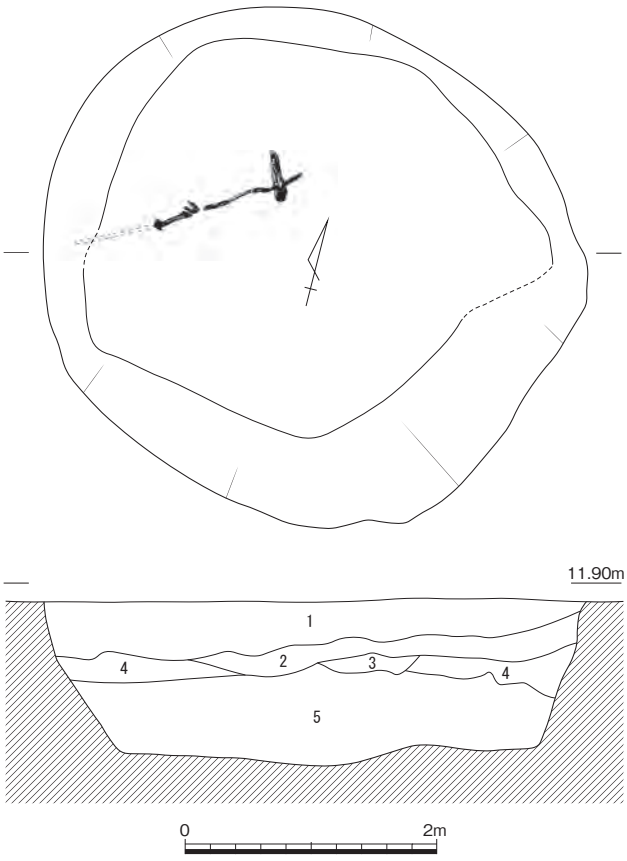
井戸２（第614・632図、図版40－２）

Ｉ13の北西側に位置する。西側には溝42・溝43が並行して走っているが、東側は同時期の遺構が希薄になる。本遺構の規模は、長軸長430㎝、短軸長391㎝であり、平面形状は楕円形である。確認面からの深さは129㎝を測り、底面の標高は10.48ｍになる。断面形状は逆台形である。覆土はシルト質土で埋まった後、黄褐色土層が堆積する第２・３層がある。これらの上層から木質片や遺物が出土する。

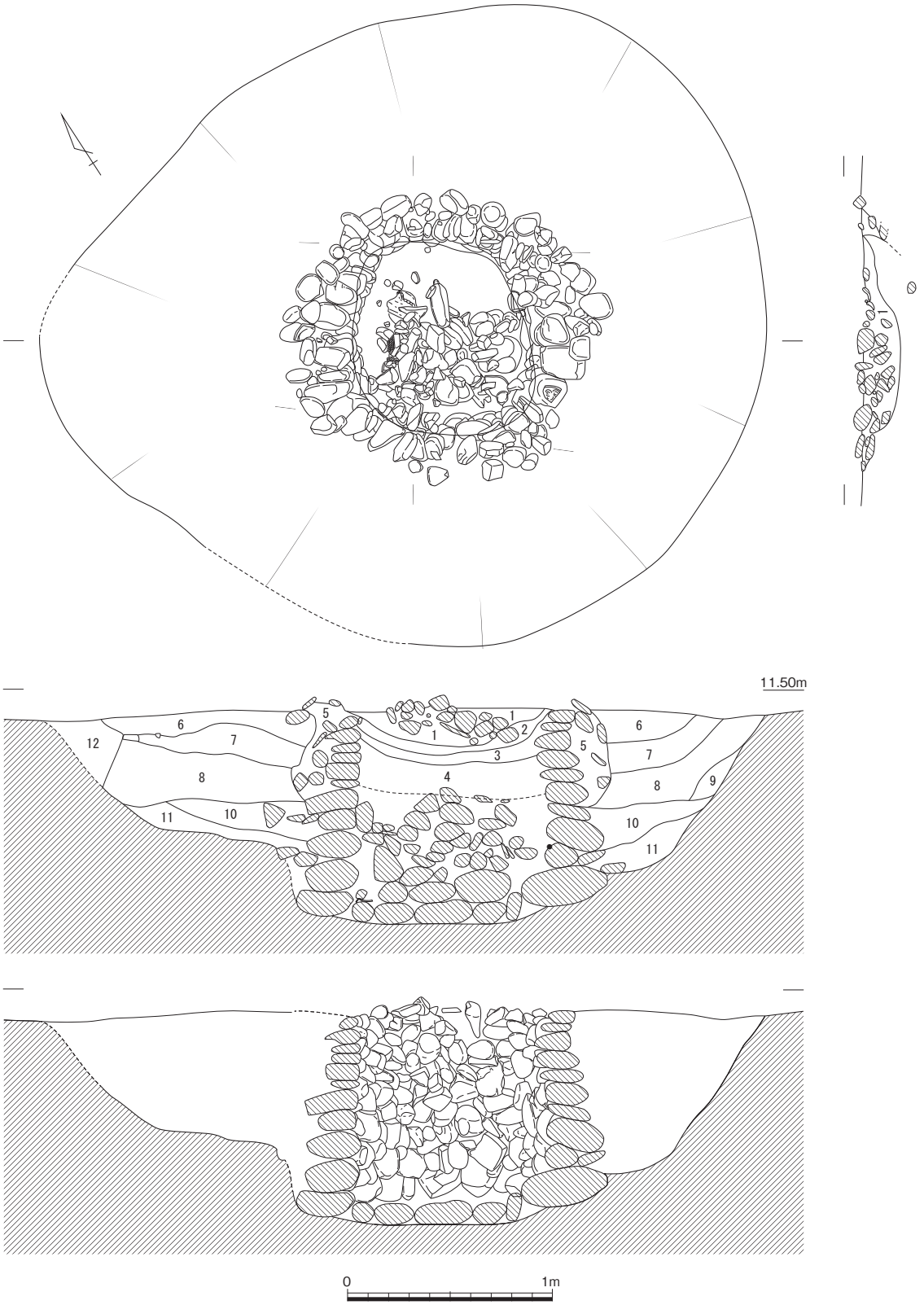
出土遺物には**3240**があり、白磁の碗の底部になる。時期は、12世紀代の様相である。遺構の時期も同様になると考える。（小林）

井戸３（第615・633・634図、図版40－３・106）

Ｆ24に所在する石組みの井戸である。周囲に同時期の遺構は少ない。井側内径は97×94㎝を測ることに対し、掘り方は長軸352㎝、短軸310㎝と大きい。検出面からの深さは106㎝で、断面形は不定形な箱形を呈する。底面付近は礫堆層に至っている。石組みは底面から積まれ、ほぼ垂直近くに立ち上がる。石は自然礫を使用し、小口を面にする。底面から約60㎝を境に石の大きさが大きいものから小さいものへ変化している。この上下の差異については、掘り直し痕とみられる第５層が、細かく積まれた石組みの範囲と対応することから、上半のものが改修時のものである可能性が高い。井側内部の最下部付近に大きな礫の堆積が認められるが、これらが井戸上半に積まれていた井側の構成材であった可能性が高い。第６～11層が裏込め埋土であるが、井側を２・３段ずつ組み上げていった様子が窺える。井側上面には、４カ所にくぼみとその下に平坦な石があることから、上屋があった可能性もある。遺物は第４層下半の最下部付近から礫とともに多く認められ、土師器内耳鍋**3241**・**3242**、瓦質土器甕**3243**・鉢**3244**・擂鉢**3246**・捏ね鉢**3247**のほか、曲物片も出土した。このことから、元々は集水用の水溜があった可能性が高い。また、内耳鍋は煤痕が明瞭で、礫中に混ざって出土したことから、井戸廃棄時に祭祀行為を行った可能性がある。しかし、その後井戸は改修を受け使用された。第１・２層及び井側の上面からは、瓦質土器の擂鉢**3245**・捏ね鉢



第632図　井戸２（1/60）・出土遺物（1/4）



1　灰黄褐色(10YR5/2)シルト
　〈集石･獣骨集中層〉
2　灰黄褐色(10YR4/2)シルト
3　にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト
　(砂質若干有)
4　暗褐色(10YR3/3)シルト（粘性有）
5　灰黄褐色(10YR4/2)シルト（粗砂混）
　〈改修裏込？〉
6　にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト
7　にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト
8　にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト
9　にぶい黄褐色(10YR4/3)細砂（基盤混）
10　灰黄褐色(10YR4/2)粗砂（礫混）
11　オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト（粘性強）
　(灰黄褐色(10YR4/2)粗砂半混)
12　撹乱層

第633図　井戸３（1/30）

3248などが認められたが、最下部出土遺物と年代的な違いが認められない。第１層で礫と共伴した牛の下顎骨などが注目される。井戸に牛馬の骨を埋める類例は岡山市鹿田遺跡（『鹿田遺跡３』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター　1993年）などにあり、井戸廃絶儀礼として指摘されている。本事例は、骨のすべてが揃っていないとのことであり、あらかじめ準備された骨をシンボルとして捧げる、より形骸化した姿を示している可能性が考えられるとの教示を富岡直人氏から受けた。

井戸の時期は、出土遺物から15世紀と考えられる。（河合）

第634図　井戸３上面獣骨出土状況（1/30）・出土遺物（1/4）

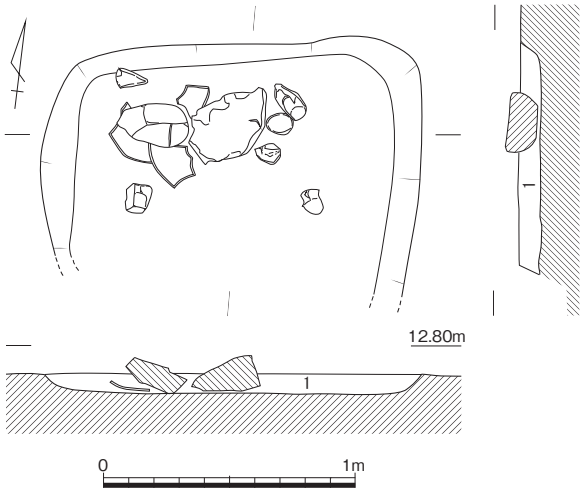
６　土坑

土坑231（第613・635図）

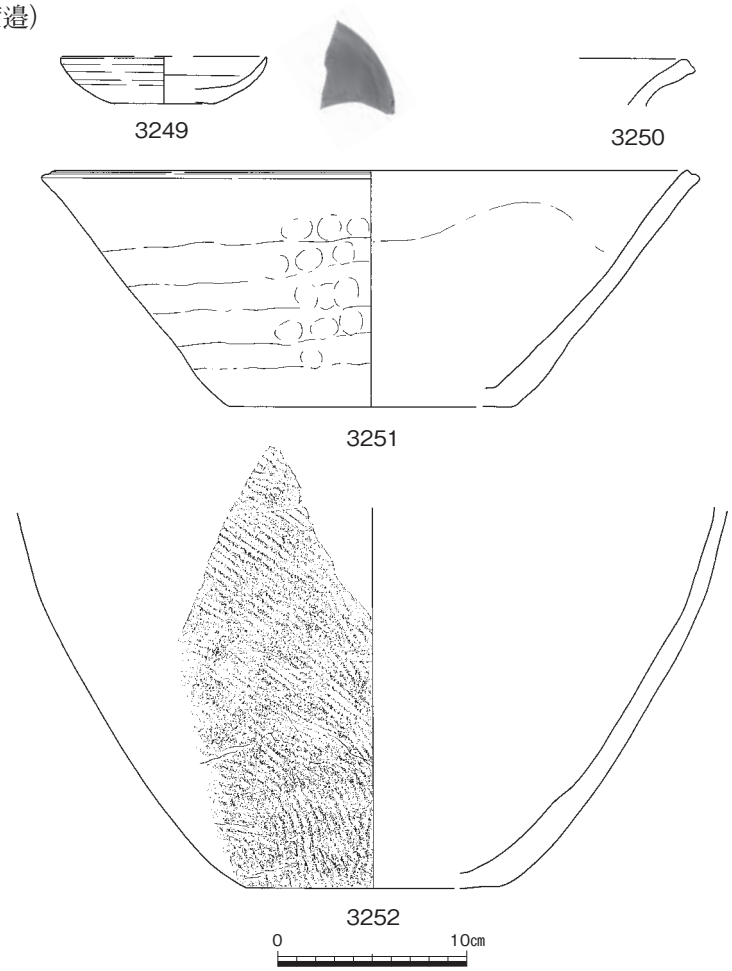
Ｊ06南端に位置する。南半は調査区側溝で削平されているが、方形あるいは長方形を呈していたと考えられる。旧２区の微高地上にあり、検出面の標高は約12.70ｍである。上部を著しく削平されているが、底面はほぼ平らで、壁体も比較的急に立ち上がる、断面は箱形となる。

土器は人頭大の２つの礫の下から出土している。礫はやや扁平な角礫で、平坦面がほぼ水平な状態であった。基盤を構成する礫層から採取できるものではなく、遺跡外から持ち込まれ、土器、あるいは土坑の上に意図的に据え置かれたと推察される。

3251は瓦質の捏ね鉢で、内面に使用による摩耗が認められる。**3250**は瓦質、**3252**は須恵質の甕で、**3252**は平行タタキを有する。12世紀に比定できよう。　（渡邉）



1　黒褐色(10YR3/2)砂質土



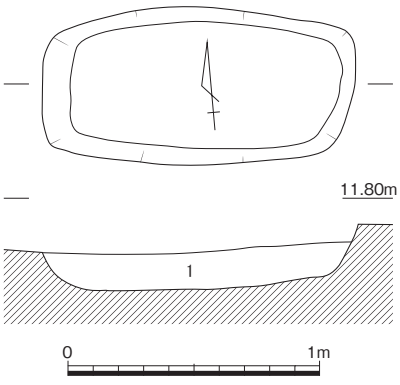
第635図　土坑231（1/30）・出土遺物（1/4）

土坑232（第614・636図）

Ｈ15に位置する。長軸124㎝、短軸62㎝の長方形を呈し、検出面からの深さは14㎝である。遺構の断面形は椀形を呈し、床面の標高は11.35ｍ、埋土は１層であった。土坑内からの出土遺物はないが、検出レベルや周囲の状況、埋土の特徴などから考えて、土坑の時期は中世と考えられる。　（藤井）

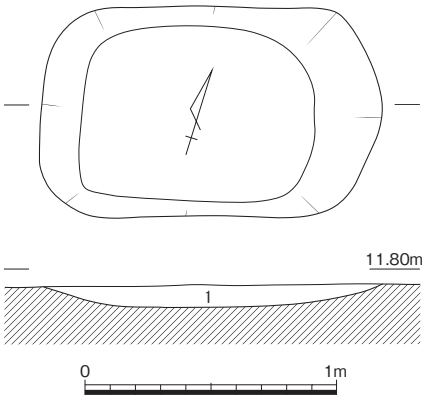
土坑233（第614・637図）

Ｈ15の中央付近に位置する。平面形は不整な方形で、断面形は皿状を呈する。規模は長軸が135㎝、短軸が83㎝を測る。上部は削平を受けており検出面からの深さは９㎝と浅い。埋土は単層で出土遺物はなかった。埋土の特徴と周辺遺構の状況から、土坑の時期は中世と考えられる。　（石田）



1　にぶい黄橙色(10YR7/2)粘性砂質土

第636図　土坑232（1/30）



1　にぶい黄橙色
(10YR7/3)粘性砂質土

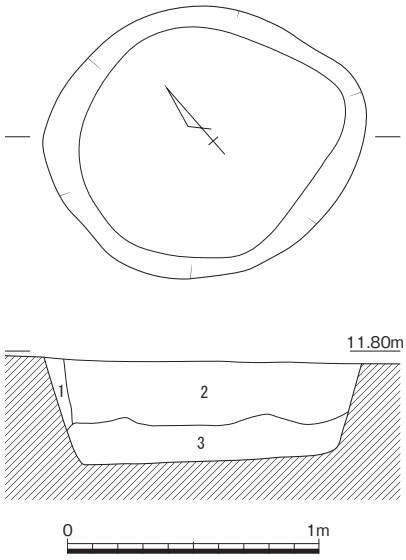
第637図　土坑233（1/30）

土坑234（第614・638図、図版64－３）

土坑233の南西１ｍに位置する。平面形は不整な円形、断面形は逆台形を呈している。規模は127×108㎝、検出面からの深さは40㎝を測る。埋土から亀山焼の甕細片がわずかに出土しているが、図示できる遺物はなかった。時期は、出土遺物や埋土の特徴から室町時代と考えられる。　（石田）

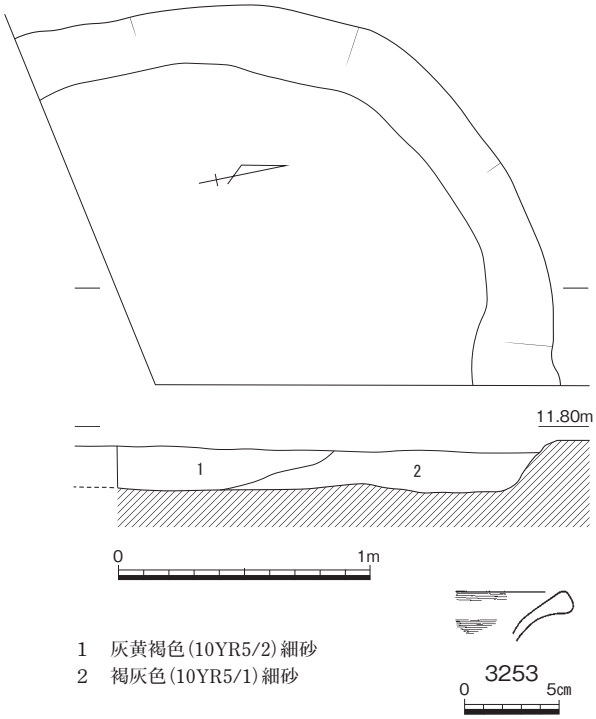
土坑235（第614・639図）

H16とＩ16の境に位置する。工程上、分割して調査を行う必要があったが、南東部に関しては確認できなかった。検出できた部分についても判然としない所があり、ベースである粗砂層が若干たわんだ所に埋土である細砂が堆積した、いわゆるたわみ状の遺構である可能性が高い。確認できた平面の範囲は、長軸157㎝、短軸154㎝を測る。断面形は逆台形で、検出面から底面までの深さは16㎝を測る。出土土器は細片が多く、土師器の鍋**3253**を掲載した。13世紀前半であろう。　（松尾）



1　にぶい黄橙色(10YR7/3)粘質土（褐色土塊混）
2　灰黄褐色(10YR5/2)粘質土（褐色土塊混）
3　にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質土

第638図　土坑234（1/30）



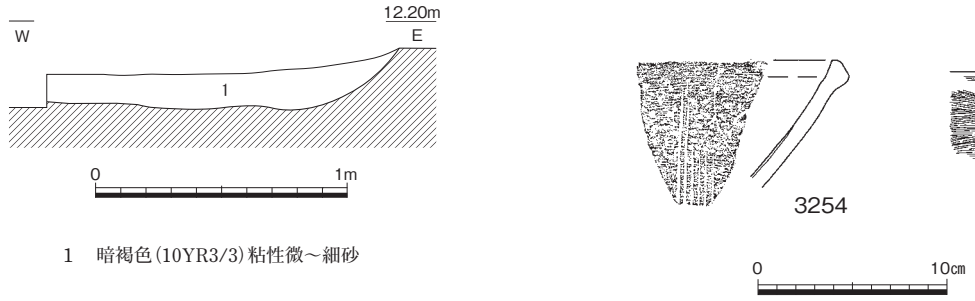
1　灰黄褐色(10YR5/2)細砂
2　褐灰色(10YR5/1)細砂

第639図　土坑235（1/30）・出土遺物（1/4）

７　溝

溝32（第613・640図、図版70－２）

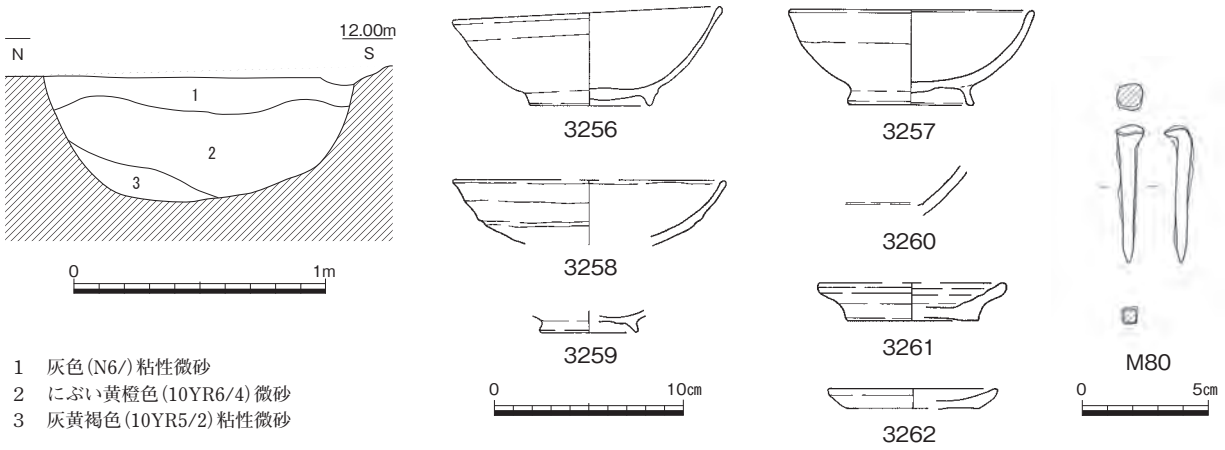
Ｊ00の東端で検出した南北からやや西に傾いた方向に掘削された溝で、掘立柱建物15や掘立柱建物16などの棟方向と一致している。調査区の西端に位置しているため、東側の上端・下端のみを検出している。規模は幅約1.5ｍ以上、深さ34㎝を測る。出土遺物には、瓦質土器の擂鉢**3254**と、土師器の鍋**3255**がある。これらの遺物から、溝の時期は14世紀代であると考えられる。　（圃）



第640図　溝32（1/30）・出土遺物（1/4）

溝33（第613・641・642図、図版71－１・106）

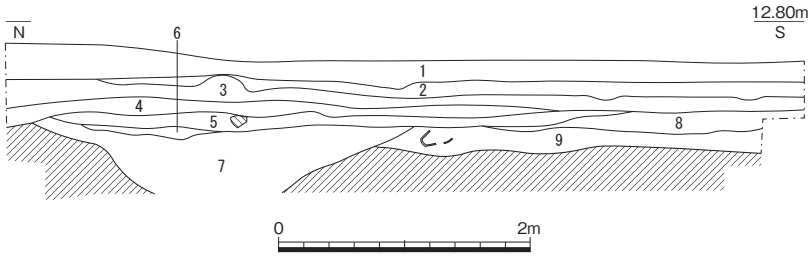
Ｈ03～Ｈ06にかけて東西方向に掘削されている溝で、溝34～36と一部重複している。これらの溝との切り合い関係や土層断面図（第642図）、出土遺物から、溝34～36よりは古い溝であることが理解される。出土遺物には、吉備系土師器椀**3256**～**3259**、白磁碗**3260**、小皿**3261**・**3262**のほか、鉄釘**M80**がある。溝の時期は吉備系土師器椀の調整や口径などから、13世紀前半であると思われる。　（圃）



第641図　溝33（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）

溝34（第613・642図）

Ｈ04～Ｈ05に位置し、溝33の南側に掘削された溝で、西側は溝35とも重複している。断面観察から溝33・溝35より新しい溝である。規模は幅90～160㎝、深さ８㎝を測る。出土遺物は細片だが、吉備系土師器椀が出土している。遺構の切り合いからも中世前期に収まると考えられる溝である。（圃）

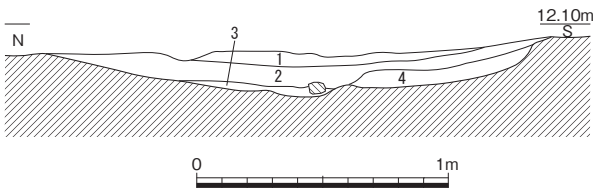


1　褐灰色(10YR4/1)シルト質微砂〈表土〉
2　黄褐色(10YR5/6)シルト質微砂〈水田層〉
3　黄褐色(10YR5/8)シルト質微砂〈水田層〉
4　にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質微砂〈溝35〉
5　灰黄褐色(10YR5/2)シルト質細砂〈溝35〉
6　褐灰色(10YR5/1)砂質土〈溝35〉
7　黒褐色(10YR3/2)シルト質細砂〈溝33〉
8　にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質微砂〈溝34〉
9　にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質細砂（土器含）〈弥生時代河道埋土〉
10　にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質微砂（土器含）〈基盤層〉

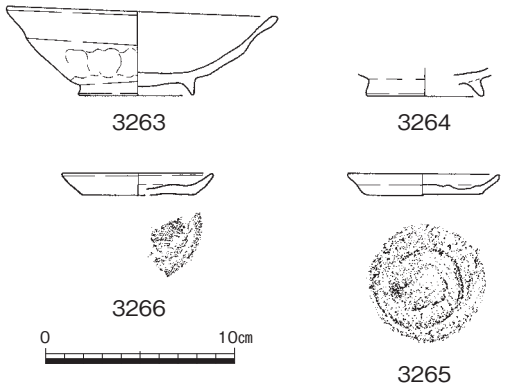
第642図　溝33～35（1/60）

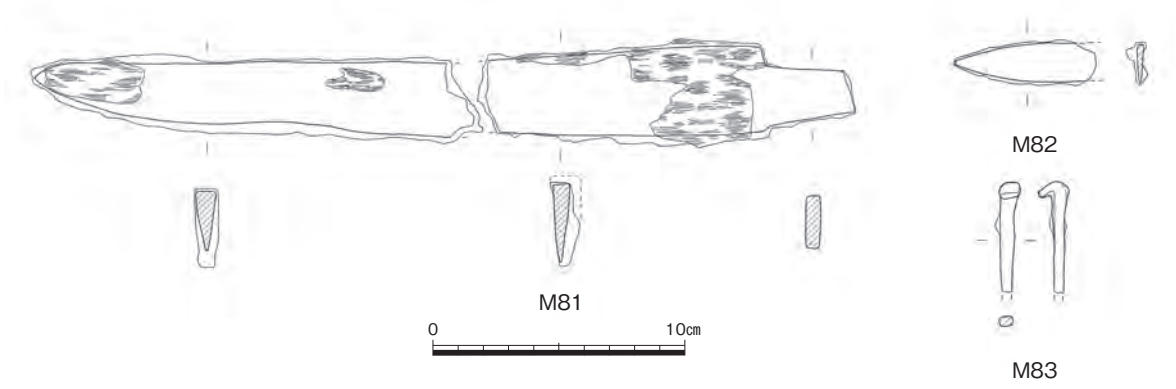
溝35（第613・642・643図、図版71－２・３・106・114）

ＨＩ04・05に位置する溝で、溝33の南側に掘削された溝である。また、西側は溝34と重複しているが、断面観察から溝34より古い溝である。出土遺物には吉備系土師器椀**3263**・**3264**、土師器皿**3265**・**3266**のほか、金属製品として**M82**の刀子、**M83**の釘、そして**M81**の短刀がある。このうち、**M81**については第613図の★地点で出土している。この部分は上端が南側にせり出し、下端が湾状に入り込んでいる。**M81**は木質の残存状況から鞘に入った状態であったと推定されることや、鋒を南に向けて水平を保った状態で出土していたことなどから、この部分に土坑墓があった可能性が考えられるが、十分な調査ができなかった。溝の時期については、遺物から13世紀半ばのものであると思われる。(圃)



1　灰白色(10YR8/1)粗砂
2　にぶい黄橙色(10YR7/2)微～細砂
3　にぶい黄橙色(10YR7/2)粗砂（礫混）
4　灰白色(10YR7/1)細～粗砂

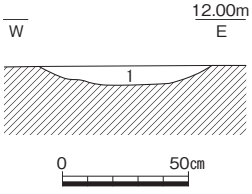




第643図　溝35（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）

溝36（第613・644図）

Ｉ04の、溝33の南側に位置する溝である。北側を13世紀前半の溝33によって切られており、溝33より古い溝であることがわかる。規模は幅66㎝、深さ７㎝を測る。出土遺物は、細片が少量のみであり、図示できるものはなかったが、吉備系土師器椀の細片が出土している。このことから、溝の時期は中世前期に収まるものであると考えられる。　（圃）

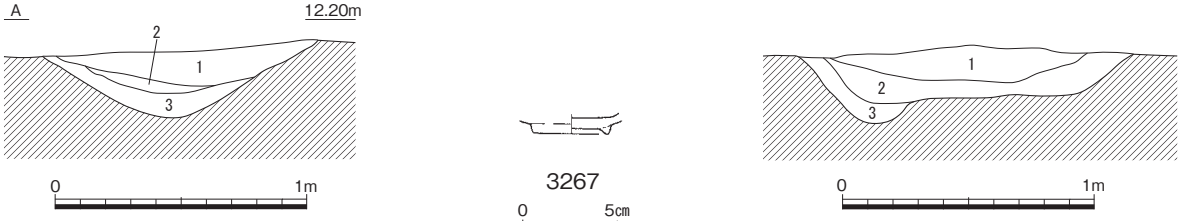


1　灰黄褐色(10YR5/2)微～細砂

第644図　溝36（1/30）

溝37（第613・645図、図版71－３）

Ｉ05に位置し、溝33～36の南側に掘削された溝である。後述する溝38・溝39と平行に延び、掘立柱建物16の棟方向に合致する溝である。西端の断面の形状は椀状を呈していたが、東側の大部分においてはＢ断面のように底面が平らで逆台形を呈するものであった。遺物は、細片が少量出土しているのみである。**3267**は吉備系土師器椀の底部で高台が逆三角形で小さいものであるため、13世紀末頃のものであろう。この遺物から、13世紀末頃の溝であると考えられる。（圃）



1　にぶい黄橙色(10YR6/3)細砂
2　灰黄褐色(10YR5/2)粗砂（礫混）
3　灰黄褐色(10YR6/2)粘性微～細砂

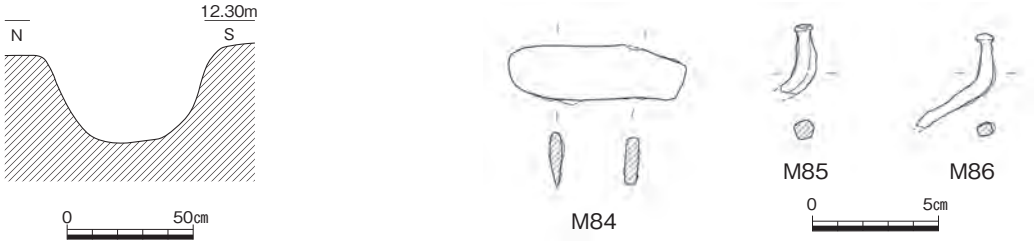
1　灰白色(5Y7/1)細砂
2　灰黄色(2.5Y6/2)細砂
3　にぶい黄色(2.5Y6/3)細砂

第645図　溝37（1/30）・出土遺物（1/4）

溝38・39（第613・646・647図、図版72－１）

溝37の南に平行する東西方向の直線的な溝である。溝38と溝39の間は約２ｍある。溝38は長さ26ｍ、溝39は長さ22ｍ検出している。幅30～50㎝、深さ30㎝前後で、断面はＵ字形を呈する。規模や埋土の類似から、同様の性格を有していたと考えられる。第127図第６層が溝38埋土に対応する。第２・５層が水田耕土で、微高地から北への下がりをさらにカットして造田した状況が看取できるが、その耕土下にあり、さらに古い水田層である第７層の起点に位置している。溝37は第７層下の第９・10層に対応する。現水田区画に合致しており、水田に伴う区画、あるいは水路の可能性が考えられる。

出土遺物は弥生土器がほとんどで、須恵器も数点出土している。溝38では鉄器**M84**～**M86**、溝39では土錘**C140**を図示したが、他時期の混入の可能性がある。埋土から近世以降と考えられる。（渡邉）



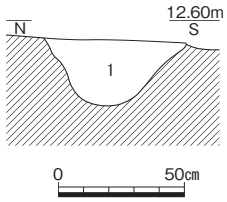
第646図　溝38（1/30）・出土遺物（1/3）

溝40（第614・648図）

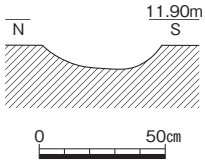
Ｉ12の南側にあり、北東へ向って流れる。溝42・溝43と直角の角度になり、本来は合流していたことが予想される。規模は、上端幅47㎝、底面幅23㎝である。確認面からの深さは10㎝で、底面の標高は11.70ｍになる。断面形状は皿形を呈する。（小林）

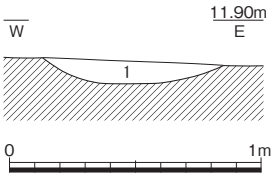
溝41（第614・649図）

Ｈ12の北西側に存在し、ほぼ南北方向に向かって流れている。西側に柱穴列15～17があり、東側に溝42～44が存在する。規模は、上端幅72㎝、底面幅25㎝である。確認面からの深さは９㎝で、底面の標高は11.65ｍになる。断面形状は皿形になり、覆土は砂質である。（小林）



1　浅黄色(2.5Y7/4)砂質土





1　にぶい黄褐色(10YR5/3)
粘性砂質土

第647図　溝39（1/30）・出土遺物（1/3）　**第648図　溝40（1/30）**　**第649図　溝41（1/30）**

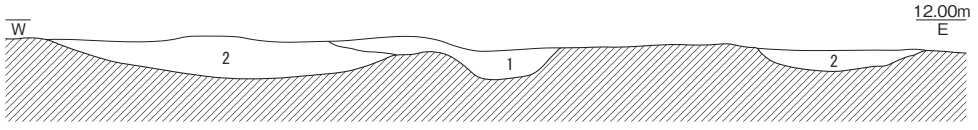
溝42（第614・650図）

Ｉ13の南西側からＨ12の北側に向けて、北西方向にほぼ直線的に流れている。東側には溝43がほぼ平行して流れている。規模は、上端幅203㎝、底面幅60㎝である。確認面からの深さは16㎝で、底面の標高は11.97ｍになる。断面形状は皿形になり、覆土は砂質である。

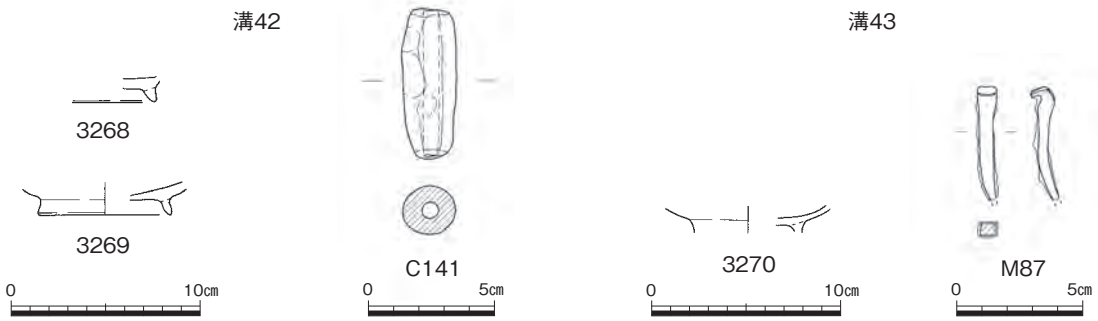
3268・3369は土師器の椀で、鎌倉時代になる。**Ｃ141**は土錘である。（小林）

溝43（第614・650図）

Ｉ13の南西側からＩ12の北東側に向けて、北西方向にほぼ直線的に流れている。西側には溝42がほ



1　にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質細砂
2　灰黄褐色(10YR5/2)砂質細砂

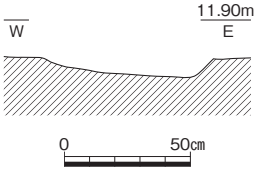


第650図　溝42・43（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）

ぼ平行して流れている。両溝は、この時期の区画溝としての役割を担っていたものと思われる。規模は、上端幅67㎝、底面幅40㎝である。確認面からの深さは８㎝で、底面の標高は11.80ｍになる。断面形状は皿形になり、覆土は砂質である。**3270**は土師器の椀である。**M87**は鉄釘である。　（小林）

溝44（第614・651図）

H13の南西側からH12の東側に向けて、北西方向にやや屈曲して流れている。西側には溝42・溝43が存在し、南東側に井戸２がある。溝の規模は、上端幅68㎝、底面幅45㎝である。確認面からの深さは７㎝で、底面の標高は11.68ｍになる。断面形状は皿形になる。覆土中からほとんど遺物が出土しないが、溝42などと同時期になると予想される。（小林）

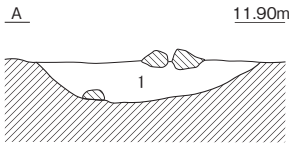


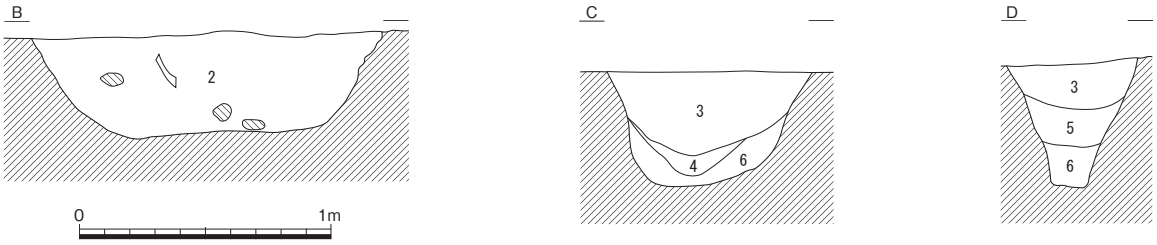
第651図　溝44（1/30）

溝45（第614・652・653図、図版72－２、写真46・47）

H16・Ｉ16・H17に存在し、一辺約20ｍの「コ」字状に折れ曲がる区画溝である。西辺と北辺はほぼ直角に曲がるが、東辺は、本溝の東に位置するたわみ８に平行した形で内側に折れる。本溝によって区画された内側は、外側に比べて柱穴の数が多い。これら柱穴が本来は建物に伴うものであったことが十分想定できる。規模は、上端幅138㎝、底面幅78㎝である。確認面からの深さは49㎝で、底面の標高は11.24ｍになる。断面形状は椀形になり、覆土は粘質の箇所と砂質の箇所とがある。

覆土中には、10㎝前後の石がかなりの頻度で混じっているが、意図的に並べた訳ではないようだ。出土遺物には以下のものがある。**3271**は備前焼の壺である。**3272**は亀山焼の擂鉢である。**3273**は備前焼の甕である。**M88**は鉄釘、**M89**は鉄鎌、**M90**は棒状製品である。**C142**は土錘である。これらの時期は、鎌倉時代になる。　（小林）





1　にぶい黄橙色(10YR7/4)細砂
2　灰黄色(2.5Y7/2)細砂
3　灰黄褐色(10YR6/2)細砂～粗砂
4　黒褐色(10YR3/1)粘質細砂
5　褐灰色(10YR5/1)粘質細砂
6　褐灰色(10YR4/1)細砂～粗砂

第652図　溝45（1/30）

写真46　溝45Ｃ断面（西から）

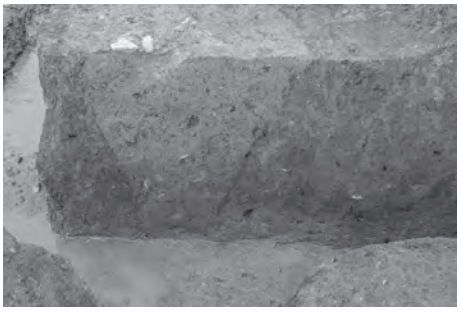
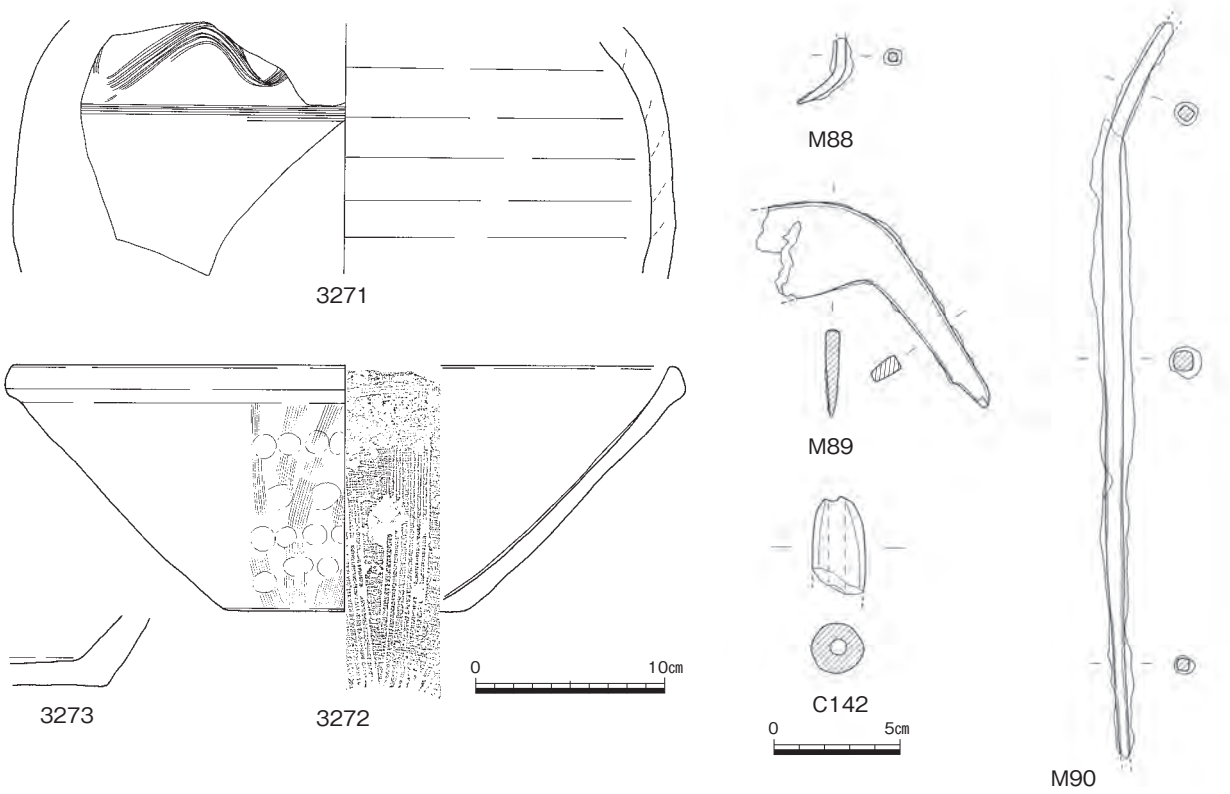


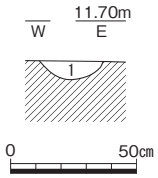
写真47　溝45Ｄ断面（西から）



第653図　溝45出土遺物（1/4・1/3）

溝46（第615・654図）

H18・19境に位置する溝。全長２ｍ程しか確認できていない。幅は約20㎝、断面形は椀状を呈し、検出面から底面までの深さは７㎝。埋土は灰黄褐色シルト混細砂。遺物の出土はほとんどなく、詳細な時期は不明であるが、溝45東辺やたわみ８と主軸がほぼ一致することから中世と判断した。(松尾)



1　灰黄褐色(10YR4/2)
シルト混細砂

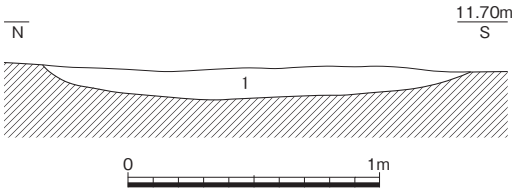
第654図　溝46（1/30）

溝47（第615・655図、図版72－３）

Ｆ24南東角に位置する東西方向の溝で、幅約3.3ｍ、深さ25㎝程の、広く浅い。壁面は緩やかに立ち上がる。底面に凹凸はあまりない。中世以降の耕作土と似た粘質微砂で埋没していた。古代～中世の遺物が出土している。磁器は含まれない。中世以降に位置付けられる。　（渡邉）

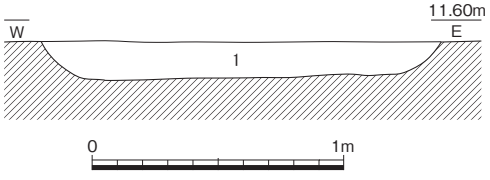
溝48（第615・656図）

溝47の約20ｍ東に位置する南北方向の溝で、主軸は溝48とほぼ直交関係にある。溝47同様に、中世以降の耕作土と似た粘質微砂で埋没していた。規模もよく似ており、同時期併存していたと考えられる。（渡邉）



1　にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト

第655図　溝47（1/30）



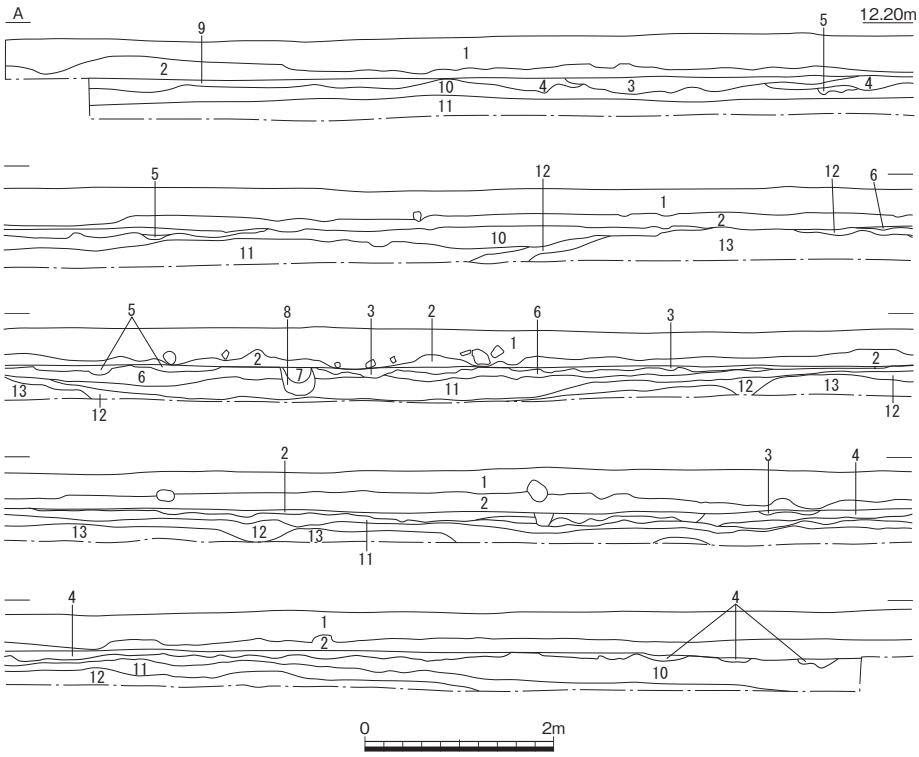
1　黄灰色(2.5Y6/1)粘質微砂

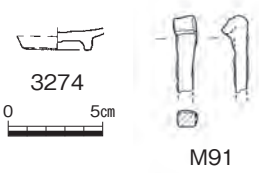
第656図　溝48（1/30）

８　素掘溝群

素掘溝群１・２（第615・657図、図版76－３）

遺跡東端の低位部にあたる旧６区西半に展開する南北方向の溝群で、幅30㎝程度の細い溝が幾条か重複し、浅く凹凸のある幅広の溝状になった痕跡も認められる。耕作痕と考えられる。第657図は旧６区の東西断面で、第３～６層が素掘溝に対応する。素掘溝群１・２は時期的に前後するものではなく、平面的なまとまりをもって東西２群に分けた。埋土から中世以降と考えられる。　（渡邉）



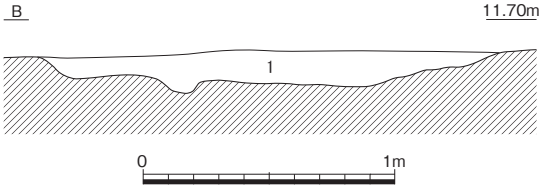


1　造成土
2　耕作土
3　灰黄褐色(10YR6/2)
　粘性微砂（砂質若干強）
4　灰黄褐色(10YR5/2)
　粘性微砂
5　灰黄褐色(10YR4/2)
　粘性微砂（砂質若干強）
6　灰黄褐色(10YR6/2)
　粘性微砂（砂質若干強）
7　灰黄褐色(10YR4/2)
　粘性微砂
8　にぶい黄褐色(10YR4/3)
　粘性微砂（砂質若干強）
9　にぶい黄褐色(10YR4/3)
　粘性微砂
10　灰黄褐色(10YR5/2)
　粘性微砂
11　灰黄褐色(10YR4/2)
　粘性微砂（砂質若干強）
12　灰黄褐色(10YR5/2)
　粘性粗砂（礫非常多含）
13　砂礫層

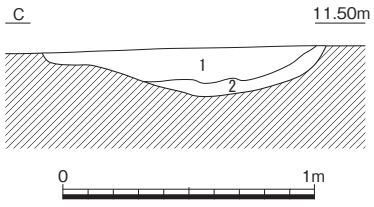
第657図　素掘溝群1～３（1/80）・素掘溝群１出土遺物（1/4・1/3）

素掘溝群３（第615・657・658図）

旧６区東半に展開する、東西方向に併走する溝である。南東への下がりと平行し、素掘溝群１・２と直交する関係にはない。１条の幅も１ｍ以上と広く、深い。時期や耕作方法の違いを反映してると考えられる。切り合いから、井戸３より新しく位置付けられる。　（渡邉）



1　黄灰色(2.5Y6/1)粘質微砂（褐色土塊混）



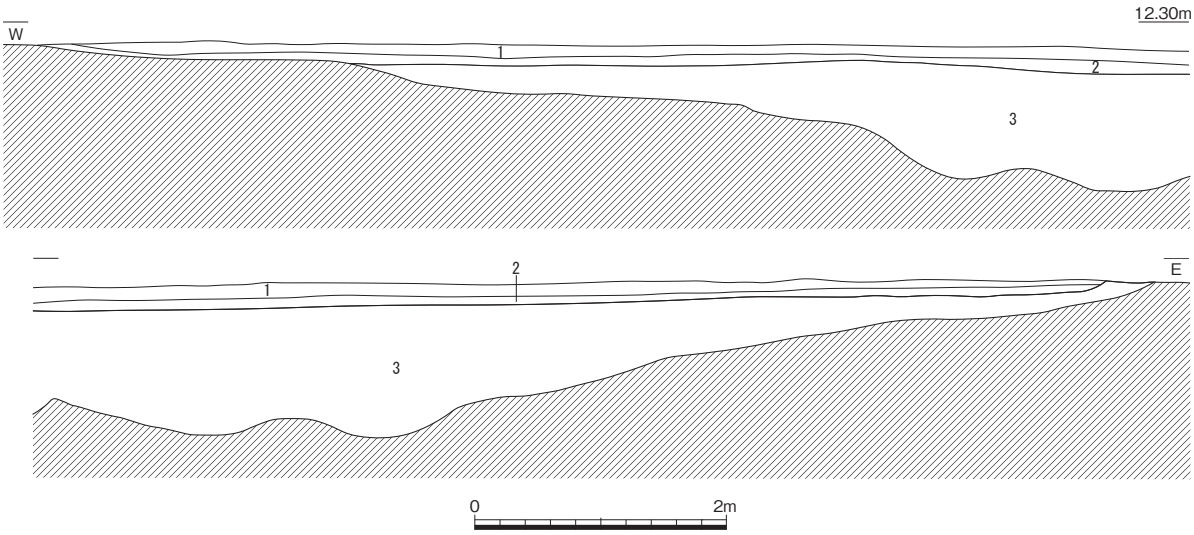
1　灰黄褐色(10YR5/2)シルト
　(灰黄褐色(10YR4/2)シルト混)
2　灰黄褐色(10YR4/2)シルト（砂質少々）

第658図　素掘溝群３（1/30）

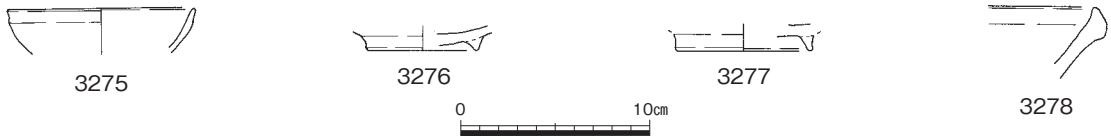
９　たわみ

たわみ７（第613・659図）

Ｉ04～Ｊ04で検出した、たわみである。このたわみは調査時には水田層としていたものである。調査の結果、河道１の上層に薄くレンズ状に堆積した２層からなるものであるとわかった。このたわみの上層に中世の水田の床土と考えられる層と水田層が見られる。出土遺物には吉備系土師器椀3275～3277、東播系須恵器の捏鉢3278がある。時期幅があるが、おおむね中世前半の範疇に収まるものである。この層も水田として利用されていた可能性も考えられるが、今回はたわみとして報告した。(圃)



1　灰黄褐色(10YR5/2)砂質土（マンガン含）　　2　褐色(10YR4/6)砂質土　　3　〈河道１・５埋土〉

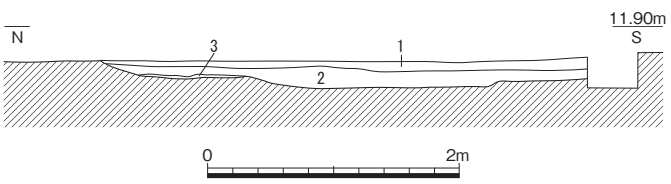


第659図　たわみ７（1/60）・出土遺物（1/4）

たわみ８（第615・660・661図、写真48）

Ｈ17東半に位置する。平面形は逆Ｌ字状を呈する。最大長18ｍで、最大幅4.2ｍを測る。西に屈曲しており、その先端付近におよそ3.2×1.9ｍの長楕円形を呈するくぼみがある。検出面から底面までの深さは20㎝程度。底面は凹凸があり一定でない。

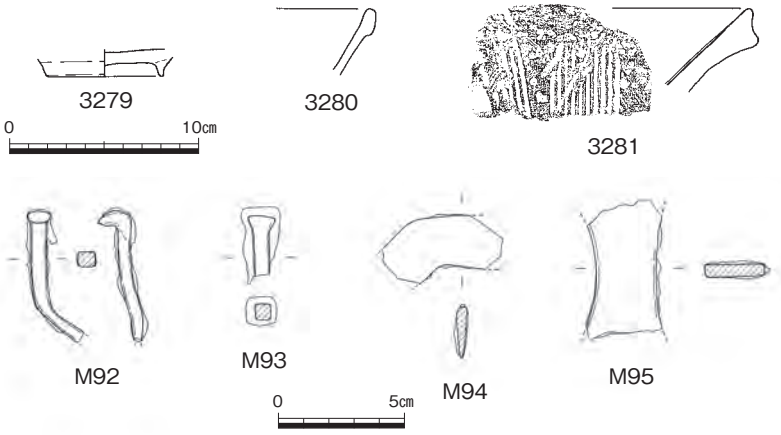
出土遺物は土師器土器椀3279、白磁碗3280、備前焼擂鉢3281、鉄製釘Ｍ92・Ｍ93、鉄製鎌Ｍ94、



1　褐灰色(10YR5/1)細砂（にぶい黄橙色(10YR7/4)混）
2　黒褐色(10YR3/1)細砂
3　褐灰色(10YR6/1)シルト

第660図　たわみ８（1/60）

不明鉄製品M95がある。溝45東辺及び北辺の主軸方向とほぼ一致することから鎌倉時代を中心とした時期であると思われ、出土遺物の特徴からは13世紀代を想定することができる。　（松尾）

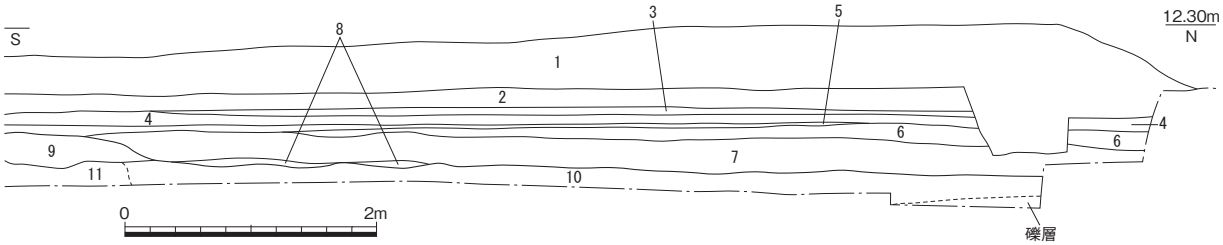


第661図　たわみ８出土遺物（1/4・1/3）

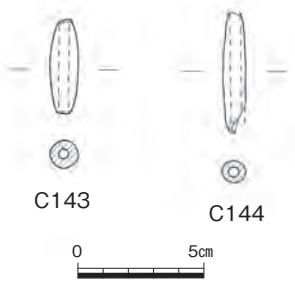
写真48　たわみ８（西から）

たわみ９（第615・662図、写真49）

Ｇ22南西部で、旧６区北西角に位置する。第662図第６～８層が対応し、北端上面の標高は11.50ｍ、下面の標高は11.10ｍである。底面に鉄分の沈着が認められ、水田層の可能性が高い。第１層は造成土、第２～５層が近代以降の水田層にあたる。第10層は黒色土層で、河道が埋没して土砂の流入が停止し、草木が繁茂する環境にあったことを示唆する。この黒色土は遺跡全体に広がらず、たわみ９の下部でのみ確認されている。第10層に伴う土器はないが、基盤下部の礫層から弥生時代～古墳時代の土器が出土しており、古墳時代～平安時代の間に形成された堆積層と考えられる。第６・７層からは白色の土師器椀や土錘、瓦、鉄滓など、古代～中世の遺物が出土している。　（渡邉）



1　造成土
2　褐灰色(10YR4/1)粘性砂質土
3　にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
4　褐灰色(10YR5/1)粘質土
5　黄褐色(10YR5/6)粘性砂質土
6　灰黄褐色(10YR5/2)粘性砂質土
7　黄灰色(2.5Y5/1)粘質土
8　暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土
9　灰黄褐色(10YR5/2)砂質土
10　黒褐色(10YR3/2)粘質土
11　灰黄褐色(10YR4/2)砂質土



第662図　たわみ９（1/60）・出土遺物（1/3）

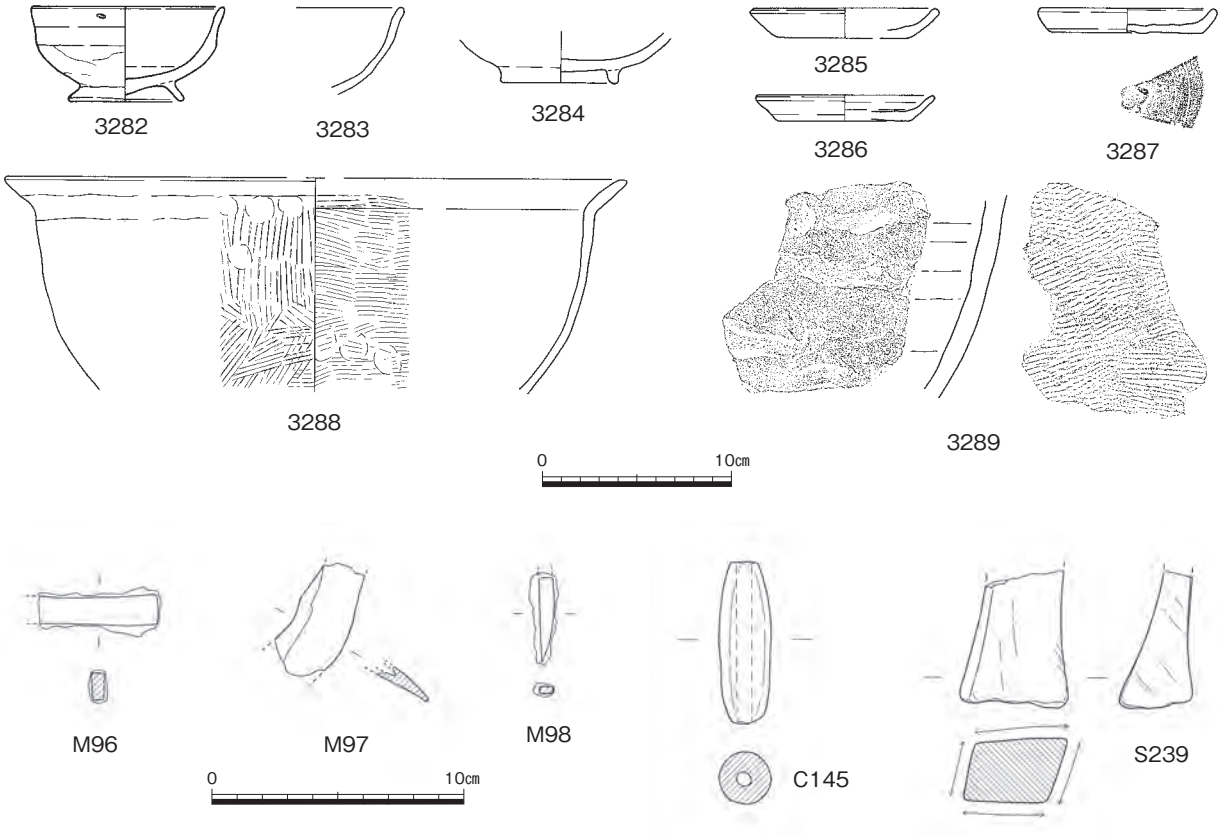
写真49　たわみ９堆積状況（南東から）

10　その他の遺構・遺物

柱穴52～60（第613～615・663図）

中世以降の柱穴はそれ以前の埋土と土質が大きく異なっており、土器が出土しなくても容易に認定できる場合が多い。そのため、図示した遺物量に見合わないほど多くの柱穴を全体図に入れている。中世の溝や掘立柱建物が見つかった旧１区や旧５区、旧６区に偏在し、特に旧５区では溝45の西側と溝45の区画内で多くの柱穴が見つかっているが、掘立柱建物としてまとめ切れていない点も考慮される。柱穴から出土した土器は細片が多く、図示し得たのは旧２区と旧６区の５基だけで、Ｐ55～60としている。12世紀から13世紀が主体を占める。**3288・3289**は土坑231近くのＰ53から出土した。**3284・3285**はＰ58、**3286・3287**はＰ59から出土している。

M96は旧１区のＰ52、**M97**は旧４区のＰ54、**M98**は旧５区のＰ56から出土し、遺構に伴う鉄器の出土傾向は古墳時代と変化がないように見受けられる。（渡邉）

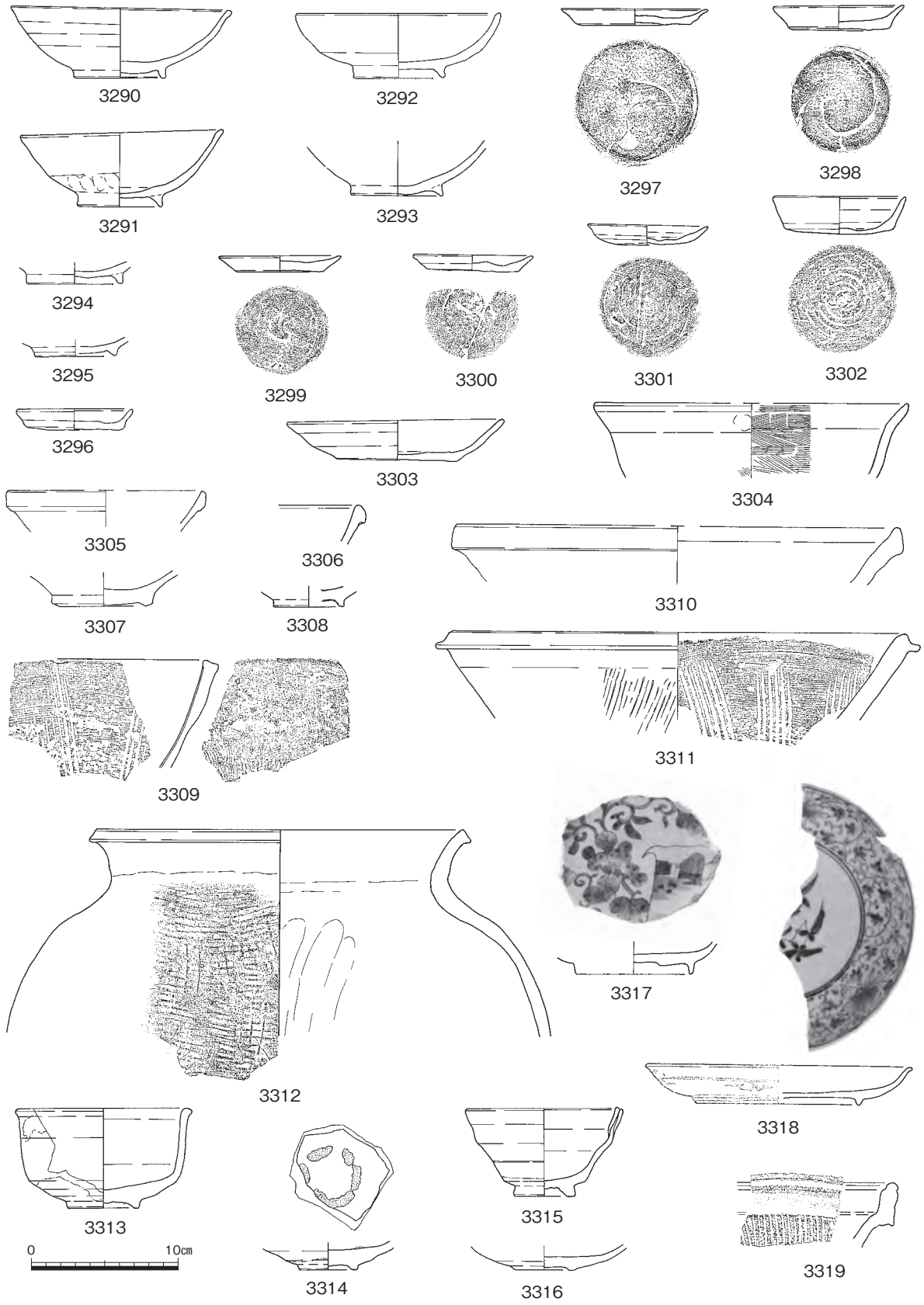


第663図　柱穴52～60出土遺物（1/4・1/3）

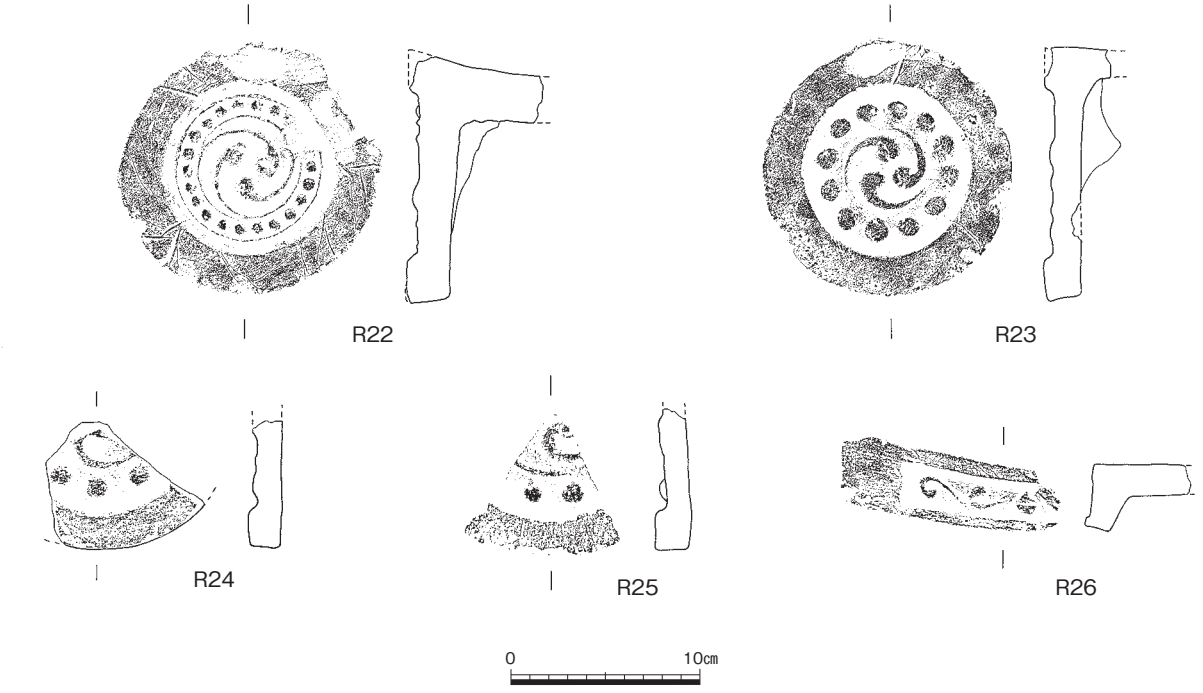
遺構に伴わない遺物（第664・665図）

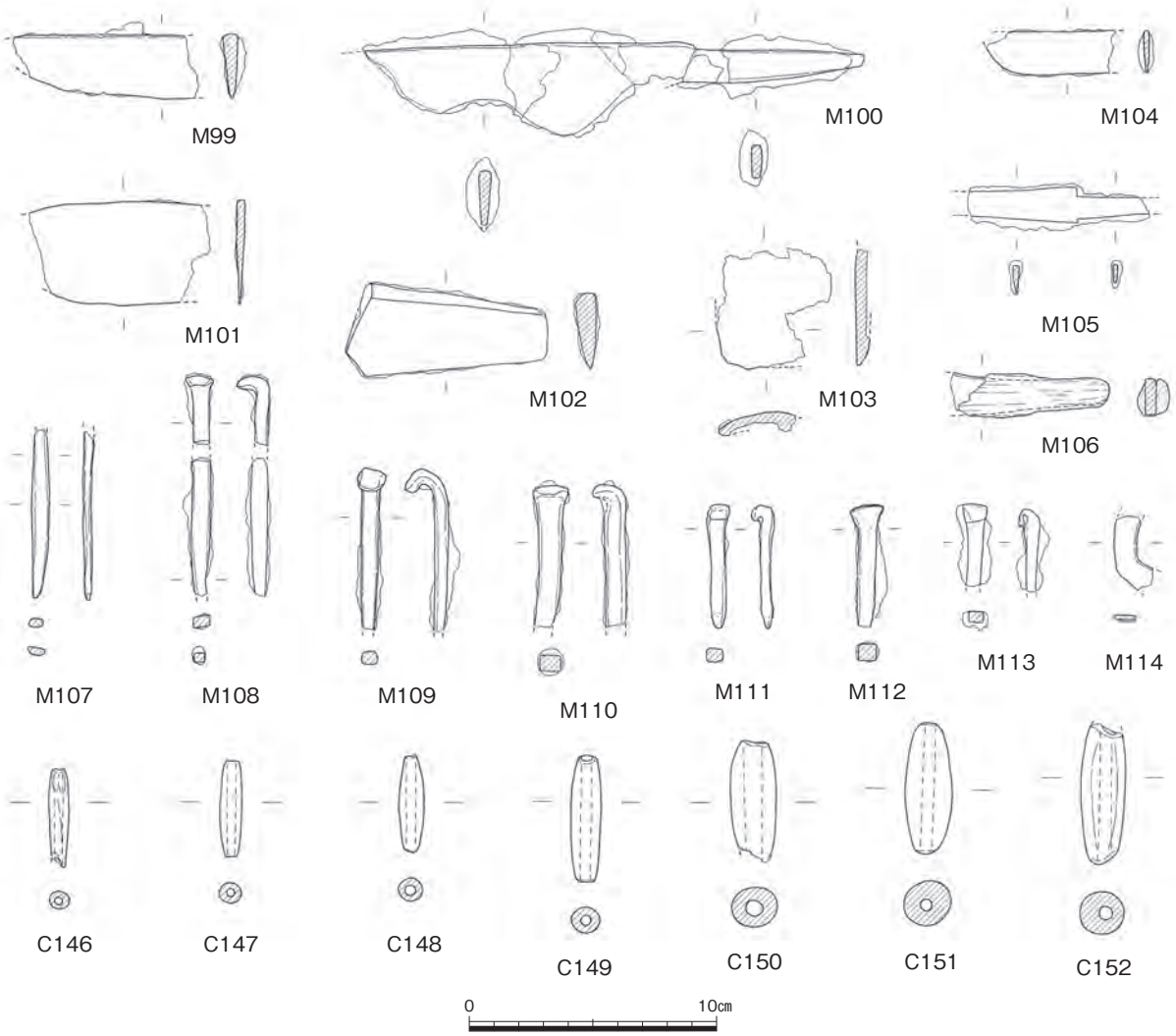
ここに掲載した遺物の多くは遺跡上面に堆積した耕作土や撹乱土から出土しており、遺跡の存続期間や性格を必ずしも反映するものではないが、遺跡廃絶後を含めた土地利用の変遷を示唆するものと考えている。軒丸瓦当はすべて三巴文だが、**Ｒ22**は瓦当径が小さく、外縁の幅も広い。一方、巴文の尾部は細長く、20個以上の珠文を配し、珠文帯外側に圏線を有すなど古い要素を備えている。鉄器・土製品は、先述したように、他時期のものを含む可能性がある。特に旧６区は鉄釘が突出して多く出

土しているが、近世以降の陶磁器や瓦も多く、比較的新しい時期の混入と考えている。　（渡邉）



第664図　その他の出土遺物＜中世以降①＞（1/4）





第665図　その他の出土遺物＜中世以降②＞（1/4・1/3）

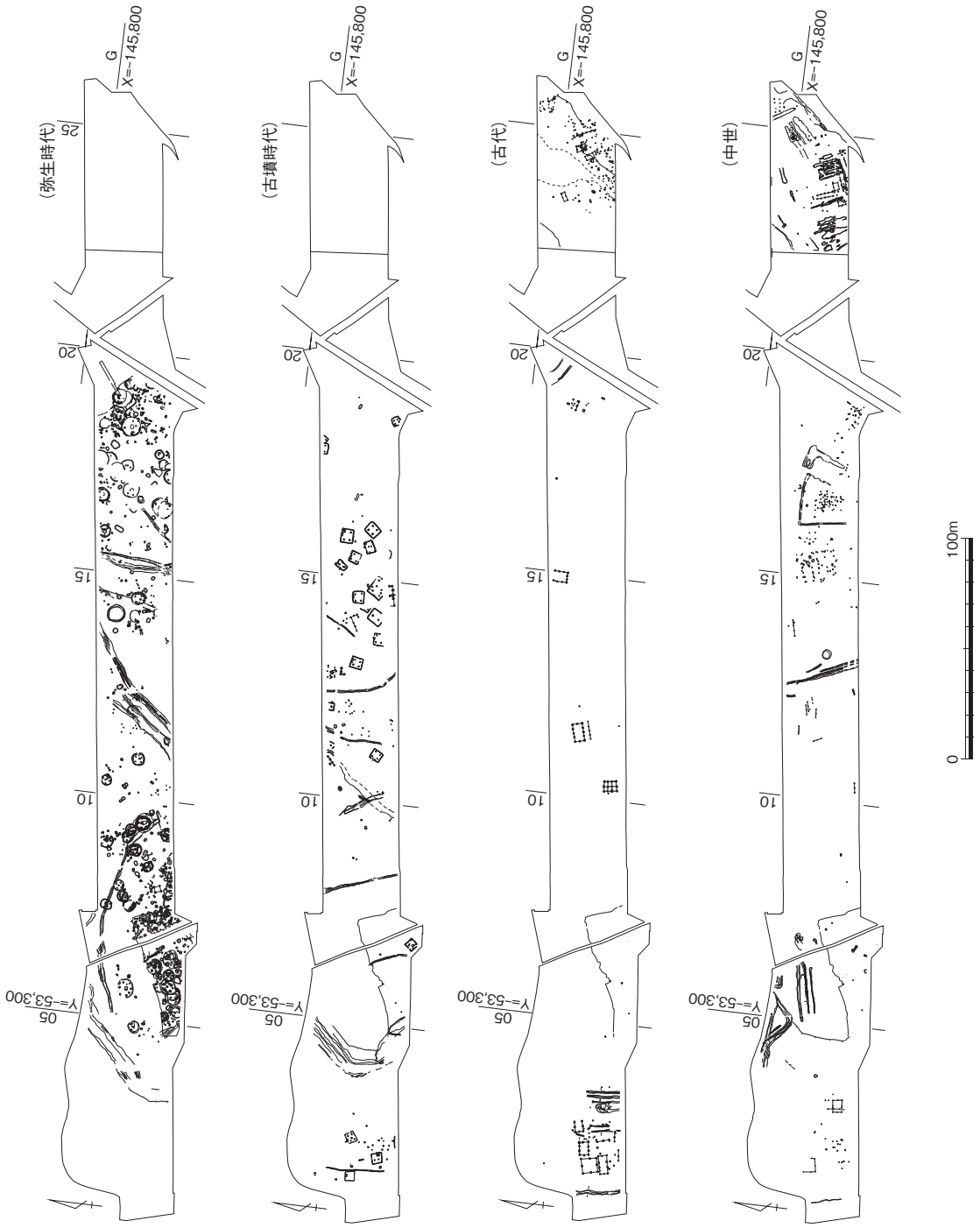
第６節　小結

神明遺跡は、旧高梁川の東分流によって形成された微高地上に位置している。縄文時代に遡る遺構は確認していないが、微高地の基盤となる砂礫層中からは縄文時代晩期頃の土器片が出土していることから、縄文時代から弥生時代前半期にかけて微高地が形成され、安定化した後、集落が営まれた可能性が考えられる。

弥生時代の遺構は、微高地内の東西２カ所の高まりを中心に存在する。西側高まり（旧２・３区）では、弥生時代中期後葉（弥・中・Ⅲ）から後期後葉（弥・後・Ⅲ）にかけての竪穴住居、掘立柱建物、土坑等を高い密度で検出している。高まりの西から北側にかけては河道１・３が巡り、これらの河道を境にして低位部となる。中期後葉にまず、高まりの北側縁辺に溝１が掘削され、その南側に竪穴住居、掘立柱建物、土坑等が展開する。溝１は後期前葉（弥・後・Ⅰ）には埋没するが、以降後期後葉に至るまで、東側（旧３区）にも集落域が広がるようになる。西側微高地では、銅鐸**M36**が埋納された状態で出土した。銅鐸**M36**は扁平鈕式古段階の四区袈裟襷文銅鐸で、鈕の外縁に流水文を飾る。銅鐸埋納坑は、弥生時代後期初頭に埋没した竪穴住居６の埋土を掘削しており、銅鐸の埋納は弥生時代後期初頭以降に行われたと考えられる。近隣の岡山市高塚遺跡から出土した銅鐸は突線鈕２式と神明銅鐸より新式だが、後期前葉には埋納されている（『高塚遺跡　三手遺跡２』岡山県教育委員会2000年）。岡山県南部においては、銅鐸の埋納が後期前半までに完了していた可能性が高く、神明銅鐸の埋納は遅くとも後期中葉（弥・後・Ⅱ）までに行われたものと想定される。また、西側高まりで検出した土坑27では、大量の土器とともに銅鏃や鉄鏃、打製石包丁、有溝石錘などの多様な遺物が廃棄されていた。土器は大型品の長頸壺、精製の脚付直口壺や高杯を含んでいる。西側高まりで検出された遺構は後期後葉までのもので、土坑27の土器は後期後葉でも新相の土器を伴うことから、集落の廃絶に伴う祭祀に関連する可能性がある。西側高まりの東端に位置し、南西から北東にかけて流走する溝９も後期後葉に埋没している。溝９では、長頸壺、装飾高杯、高杯、装飾器台などの多くの土

表７　神明遺跡弥生時代・古墳時代遺構消長表

立地	主な遺構	時期												
		弥生時代						古墳時代						
		中期		後期				前期			中期		後期	
		Ⅱ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ
微高地	竪穴住居		■	■	■	■	■				■	■	■	■
	掘立柱建物		■											■
	柱穴列							■						
	井戸			■										
	土坑		■	■	■	■	■							■



第666図　神明遺跡変遷図（1/3,000）

器と共に、分銅形土製品などを意図的に廃棄した様相が看取され、溝の廃絶に伴う祭祀に関連していると考えられる。これらの土坑27や溝９の状況は、弥生時代後期後葉段階での意図的な集落の廃絶を示しており、以後、西側高まりで集落は継続しない。なお、集落の廃絶に際し、銅鐸が埋納された可能性もあるが、吉備においては後期後葉までに銅鐸祭祀を淵源として特殊器台祭祀が成立し、墳墓のみならず集落内でも同様の祭祀が行われていたとの見解がある（宇垣匡雅「特殊器台祭祀の性格とその波及」『古代吉備』第27集　2016年）。神明遺跡においては、特殊器台が欠落しているものの、特殊壺に類似した大型の長頸壺や祭祀用の精製土器が出土しており、後期後葉段階の集落内における祭祀は、銅鐸祭祀から特殊器台祭祀に変容していたと考えられる。なお、西側高まり（旧２・３区）の包含層中から出土した壺2389・2470は、弥生時代中期前半に遡るものである。当該期の遺構は確認されていないが、集落は南側の調査地外にさらに続くと想定され、神明遺跡における集落の形成は、弥生時代中期前半に遡る可能性がある。

一方、東側高まり（旧４・５区）においては、弥生時代後期前葉から後期末葉（弥・後・Ⅳ）にかけての竪穴住居や土坑を中心に検出している。西側高まり（旧２・３区）とは集落の存続期間がずれており、遺構密度も低くなる。東側高まりの東端には河道４が流れるが、西側高まりの北側を流れる河道１・３に繋がり、北の調査地外を東方に流れる河道の一部と想定され、この河道は東側高まり付近で北西から南東方向へ流れを変える。河道４は後期後葉以降には埋没するが、東側の旧６区にかけては、弥生時代から古墳時代にかけての遺構は確認されておらず、古代に至るまで低位部であったと考えられる。東側高まりの中央には後期中葉から末葉にかけて溝11が流れ、高まり内を東西に分けている。平行して流れる溝12の底面では、器台など後期前葉の土器が意図的に廃棄された状態で出土している。溝11からは小型特殊壺2086が出土しており、溝11及び溝12については、集落内での水辺の祭祀に関連する遺構の可能性がある。これらの溝を境にして高まり西半（旧４区）では、後期前葉の竪穴住居28及び竪穴住居29や井戸１、土坑等が一時期に集中して営まれている。高まり東半（旧５区）で検出した竪穴住居32・34・37・38・43・44は焼失住居と考えられ、他の地点に比べて集中する傾向が認められる。また、竪穴住居32・34・43・45など後期末葉まで存続するなど、後期後葉で集落が廃絶する西側高まりとは異なる様相を呈している。東側高まりにおいては、次の古墳時代前期前葉に竪穴住居等の主要な遺構は継続せず、土器溜まりが１基確認されている程度で、竪穴住居32・34・43については、集落廃絶時に意図的に焼失させた可能性も考えられる。

出土遺物を概観すると、各遺構や包含層中から大量の土器が出土しており、中期末葉から後期初頭にかけての過渡期、後期前葉から末葉にかけての資料をまとまって得ることができた。土器の中には、高梁川以西の小田川流域の胎土を持つものも散見されるほか、在地で変容した粘土帯系土器と考えられるもの、東四国系や畿内系の土器も認められる。その他、サヌカイトの大型剥片も出土しており、石器素材としての搬入形態を示していると考えられる。今回の調査で多く出土している打製石包丁の石材には、サヌカイト以外に粘板岩が一定の量認められる。近辺では、高梁川上流部の総社市美袋周辺で粘板岩が分布していることから、遺跡付近で採集した粘板岩の河原石を石器素材として補完的に利用していたと考えられる。

古墳時代前半期においては、遺跡内の地形は弥生時代から大きな変化は認められない。弥生時代の河道１と重複する河道５は古墳時代全般にわたって存続していたようである。古墳時代前期の遺構は土器溜まり２や柱穴列２、溝18、溝19を確認しているのみで、前期末から中期初頭になると遺跡東端

部で竪穴住居74が認められる。古墳時代中期後半（古・中・Ⅱ）になると弥生時代以来の低位部であった遺跡西端部（旧１区）や中央部（旧３区）が堆積により安定し、集落域として利用されることになる。遺構としては、古墳時代中期後半～後期（古・後・Ⅰ～Ⅱ）にかけての竪穴住居、掘立柱建物、土坑等を検出している。竪穴住居や掘立柱建物は、遺跡中央部でも東側の旧４区付近に集中しており、古墳時代後半期において集落の中心部となる。当該期の竪穴住居22軒のうち、18軒で造り付けのカマドを確認している。遺跡中央部（旧３区）で検出した竪穴住居57は焼失住居で、竪穴住居及びカマドの廃棄に伴う祭祀に使用された手捏ね土器や滑石製臼玉がまとまって出土している。また、遺跡中央を南北に流れる溝22においても、須恵器や馬の頭蓋を使用した祭祀が行われたと考えられる。

旧４区に所在する大形の竪穴住居65では、鉄滓や羽口片などの鍛冶関連遺物がまとまって出土した。竪穴住居内も含め調査地内で鍛冶炉は検出していないが、出土状況からこれらの遺物は竪穴住居外から一括して投棄されたと考えられ、付近で操業していた可能性が高い。伴出した須恵器から、時期は６世紀中葉頃と考えられる。鉄滓は椀形鍛冶滓のほか、鍛打の際に生じた微細遺物も検出している。分析の結果、椀形鍛冶滓は鉄鉱石起源の精錬鍛冶滓であることが判明しており、遺跡内で鍛錬及び精錬鍛冶が行われていたと考えられる。また、６世紀中葉から後半にかけての竪穴住居69からは椀形鍛冶滓と羽口片が、遺跡西端部（旧１区）に位置する６世紀末の竪穴住居53からも少量であるが椀形鍛冶滓を含む鉄滓が出土している。遺跡西端部の土坑219や土坑220、旧４区で検出した土坑224～226は、総社市窪木薬師遺跡（『窪木薬師遺跡』岡山県教育委員会　1993年）で確認されている被熱土坑と同様の特徴を備え、鍛冶炉に提供する炭を焼成した土坑と考えられる。これらの状況から、６世紀中葉から末にかけて遺跡西端部（旧１区）や東半部（旧４区）に分かれて鍛冶工房の存在が想定され、近隣に所在する６世紀後半の製鉄遺跡である総社市千引カナクロ谷遺跡（『奥坂遺跡群』総社市教育委員会　1999年）や同時期の専業的な鍛冶工房が見つかっている窪木薬師遺跡との関連が窺われる。

古代になると、古墳時代以前の低位部においても堆積が進行し、遺跡全体に遺構が存在するようになる。遺跡西端部（旧１区）においては７世紀後葉から８世紀代を中心とした掘立柱建物５～８や柱穴列６～８、溝24～30などがまとまって検出されている。これらの遺構の南東縁辺に位置するたわみ６からは、暗文をもつ土師器や須恵器稜椀を含む多くの土器が出土しており、奈良時代を通じて土器を使用した儀式の場であったと考えられる。遺跡中央部（旧３区）では、９世紀代の流造の可能性がある掘立柱建物10と総柱の掘立柱建物９が単独で存在している。近辺に同時期の遺構は無く、特異な様相を示しており、遺跡南側の地域に存在が推定される備中国府との関連も窺われる。遺跡東端部（旧５・６区）においては、10世紀代～11世紀前半を中心とした、掘立柱建物12～14や柱穴列11、墓１～３を検出しているほか、溝31からは須恵器の稜椀や緑釉陶器なども出土している。古代でも10世紀以降は、遺跡東端部のみが集落域や墓域として利用されるにとどまっている。

中世には、遺跡東西の端部や中央部で掘立柱建物や柱穴列、井戸、土坑、溝などを検出している。遺跡東端部（旧６区）では、11世紀末の墓４が存在し、古代に引き続き墓域として利用されている。13世紀になると掘立柱建物17・18や柱穴列19～22が営まれ、15世紀に機能していた石組み井戸（井戸３）も検出されていることから集落域への変化が認められる。西側に隣接する旧５区で検出した溝45は、13世紀代の「コ」字状の区画溝で、溝の西側と区画内で多くの柱穴が見つかっている。これらの柱穴は建物にまとまる可能性が高く、屋敷地であったと考えられる。近世以降には遺跡全体において耕地化が進み、旧２・６区を中心に、耕作痕と考えられる溝や素掘溝を検出している。　（石田）

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告249

神明遺跡
刑部遺跡

一般国道180号（総社・一宮バイパス）
改築工事に伴う発掘調査３
（第１分冊）

平成31年３月15日　印刷
平成31年３月15日　発行

編　集　岡山県古代吉備文化財センター
岡山県岡山市北区西花尻1325-3

発　行　岡山県教育委員会
岡山県岡山市北区内山下2-4-6

印　刷　サンコー印刷株式会社
岡山県総社市駅南一丁目1番地5